二ツ梨一貫山窯跡

―日本自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００２年３月

石川県小松市教育委員会

二ツ梨一貫山窯跡

―日本自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００２年

石川県小松市教育委員会

例　　言

1．本書は石黒産業株式会社が施工する『日本自動車博物館』建設に伴って、平成６年～平成７年度に小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財（二ッ梨一貫山窯跡）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び出土品整理は、石黒産業株式会社の委託を受け、小松市が実施したものである。

3．発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

《調 査 地》石川県小松市二ッ梨町一貫山40番地　外

《調査面積》全体調査面積3,847㎡　（１次調査区）　1,890㎡

（２次調査区）　1,957㎡

《調査期間》全体調査期間　平成６年４月11日～平成７年８月11日

（１次調査区）　平成６年４月11日～平成６年７月14日

（２次調査区）　平成６年10月13日～平成７年８月11日

《調査担当》（１次調査区）石田和彦

（２次調査区）石田和彦（平成７年度より石川県埋蔵文化財保存協会）・望月精司

4．出土品整理は、平成７年度から平成13年度にかけて、出土品整理臨時作業員を雇用し、望月担当のもと実施した。

5．遺構の測量については、宮下幸夫、樫田誠、坂下義視、川畑謙二、室梅義彦の協力のもと、石田、望月が実施した。また、１次調査区の全体測量に関しては、有川測量事務所が、２次調査区の全体測量に関しては太陽測地社が実施した。

6．遺物実測、製図については、鶴田泰子、山口美子、国本久美子、山崎直子、江波　圭、柿田康子、向出泰央、松本敦子の協力のもと、望月が実施した。

7．本書の執筆及び編集は、すべて望月が担当した。

8．写真撮影は、遺構を石田、望月が、空中写真を太陽測地社が、遺物を望月が行った。

9．本書で示す方位は、全て真北であり、水平基準は海抜高（m）で示してある。

10．本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

11．発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）

赤澤徳明、秋山浩三、穴澤義功、池野正男、上村安生、宇垣匡雅、宇野隆夫、尾野善裕、利部　修、柿田祐司、春日真実、亀田修一、川畑　誠、川村　尚、木立雅朗、北野勝次、北野博司、金　鎬詳、久保田正寿、後藤建一、小林正史、酒井清二、坂井秀弥、佐藤浩司、佐藤敏幸、佐藤竜馬、城ヶ谷和広、菅原祥夫、武田恭彰、竹田憲治、田嶋明人、鶴間正昭、出越茂和、徳澤啓一、富田和夫、丹羽野裕、橋本澄夫、畑中英二、浜岡賢太郎（故人）、半澤幹雄、菱田哲郎、平口哲夫、浜中有紀、藤原　学、舟山良一、宮田浩之、森　　隆、森内秀造、山田真一、吉岡康暢、余語琢磨、李　相俊、渡辺　朋和、渡辺　一、渡辺博人、石川県埋蔵文化財センター、北陸古代土器研究会

目　　次

例　　言
目　　次
遺構・遺物図版・文章及び遺物観察表の凡例
報告書抄録

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　１次調査に至るまでの経緯と調査経過 …… 1
第２節　２次調査の経緯と調査経過 …… 2

第２章　南加賀窯跡群の概要と戸津オオダニ地区 …… 3
第１節　南加賀窯跡群の概要 …… 3
第２節　戸津オオダニ地区と二ッ梨一貫山支群 …… 8

第３章　１次調査区（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区） …… 13
第１節　Ａ・Ｂ・Ｃ区の調査 …… 13
第２節　Ｄ地区の調査 …… 15
第３節　Ｅ地区の調査 …… 96
遺物観察表 …… 98
写真図版 …… 115

第４章　２次調査区（Ｆ地区） …… 127
第１節　Ｆ区の地形と遺構分布 …… 127
第２節　８世紀～９世紀前葉の製陶関連遺構と遺物 …… 143
Ｆ地区８世紀～９世紀前葉の製陶関連遺物観察表 …… 317
第３節　９世紀後葉～10世紀中頃の製陶関連遺構と遺物 …… 341
Ｆ地区９世紀後葉～10世紀中頃の製陶関連遺物観察表 …… 420
第４節　砂鉄製錬・精錬鍛冶に伴う製鉄関連遺構・遺物 …… 436
写真図版 …… 447

第５章　考　　察 …… 477
第１節　二ッ梨一貫山窯跡の土師器黒斑観察と焼成道具 …… 477
第２節　二ッ梨一貫山窯跡出土須恵器貯蔵具の成形痕跡 …… 490
第３節　二ッ梨一貫山古窯跡Ｆ地区で使用された窯の燃料材について …… 509

遺構・遺物図版、文章及び遺物観察表の凡例

《遺構について》

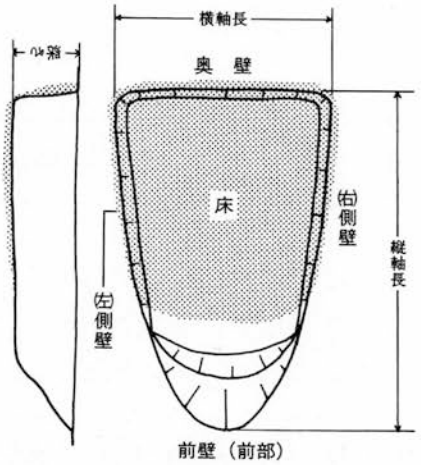
1．須恵器窯灰原及び製鉄関連遺構に関することについては以下の凡例による。

①須恵器窯灰原のナンバーは１～６号窯は近間強報告の「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ」（石川考古学研究会会誌第31号）に基づくが、７号窯から13号窯については、本書において付した遺構ナンバーである。

②製鉄関連遺構に関しては、製鉄炉関係と炭窯関係に分け、遺構ナンバーを付した。

③製鉄関連遺構図版は平面図・断面図ともに1/40、製鉄炉排滓及び須恵器窯跡灰原、土師器焼成坑灰原の土層断面図に関しては1/80に統一している。

④遺構土層断面図の土層註に示した土色は「新版標準土色帖」に基づいている。なお、その他、本書に掲載する全ての遺構土層断面図に関しても同様である。



床のスクリントーン貼付範囲は焼成床面積

土師器焼成坑の部位名称と計測箇所

2．土師器焼成坑に関することについては以下の凡例による。

①土師器焼成坑の部位名称については、右図のとおり、奥と手前の位置関係を有するものについては、奥にあたる壁面を奥壁、手前側の壁を前壁、両側の壁を側壁とし、土坑内平坦面を床と呼称する。床は被熱面のみを示すのではなく、平坦面全体を示す。また、前壁が斜面構築のために形成されず、開口するタイプについては、開口部分を前部と呼称し、前部からさらに土坑プランが継続して手前側に伸びるものについては、この部分を前庭部として位置付ける。手前に張り出しを形成するものについては、その部位を張り出しと呼称するが、この部分が前部（前壁）に相当する。奥と手前の位置関係を有しない土師器焼成坑に関しては、壁は全て側壁と呼称するが、当遺跡では該当するものはない。

②土師器焼成坑の平面図は、奥壁を上、前壁（前部）を下に位置付ける。奥壁と前壁の位置関係がない形態については、床の焼け具合によって、よく焼ける側を奥、焼けの弱い側を前として位置付けるが、その区別もできないものについては、等高線の山側を上、谷側を下とする。基本的に、土師器焼成坑の計測は、土坑寸法であり、必ずしも被熱した土師器焼成に使用された範囲のみを示すものではない。計測寸法は以下の計測を基本とする。

（横軸長）基本的には奥壁の水平距離での長さを示すが、円形基調は土師器焼成坑の最大幅。計測は上端で実施。

（縦軸長）奥壁から前壁までの最大長で、計測は焼成坑上端で水平距離で示す。前壁のないものは、床として形成される平坦部の境を目安とし、計測する。張り出しを有すものは張り出しを含めた長さを計測する。

（奥壁深）奥壁の上端から床面屈曲箇所までの垂直距離の深さ。

（床　長）床面と認定される範囲の縦軸水平距離と横軸水平距離を示す。

（床面積）焼成坑床面と認定可能範囲の面積。

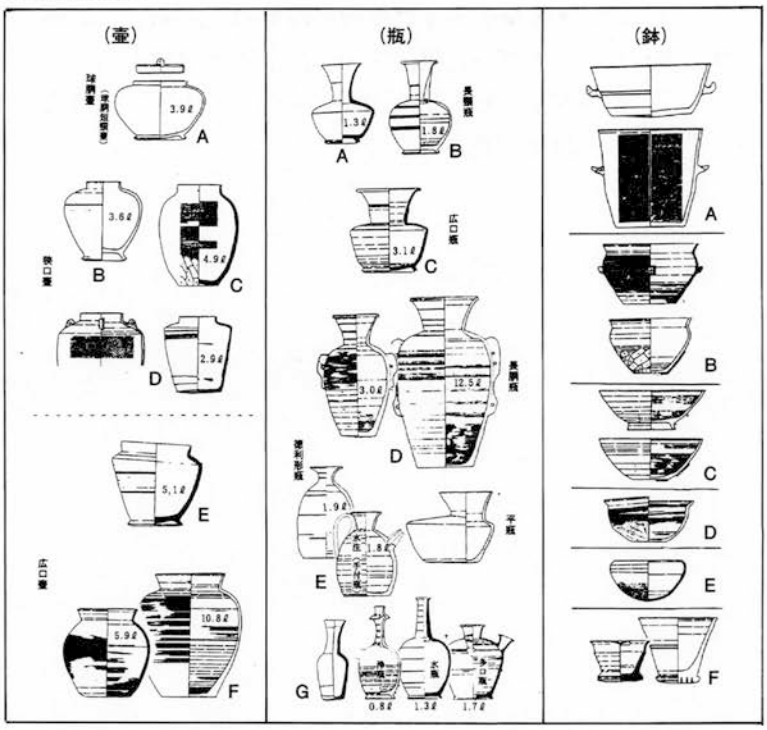
（焼成床面積）床面の被熱範囲を基本とするが、被熱床面をそのまま計測するのではなく、基本的に床面の平坦部分のうち、前部を除いた範囲であり、あくまでも復元値で示す。

（壁角度）床面に対する壁の立ち上がり角度。壁の崩れを除外した壁上端と床との転換点をつないだその傾斜角度。

③土師器焼成坑の遺構図は全て１／40に統一してある。

④土師器焼成坑平面図で示すスクリントーンは、濃い網掛けが地山強被熱、薄い網掛けが地山弱被熱、密な網点が貼土強被熱、疎な網点が貼土弱被熱を示す。

⑤土師器焼成坑断面図で示すスクリントーンは、網点が地山被熱、斜線が貼土被熱、砂目が黒色灰層を示す。



壺・瓶・鉢類の器種分類図（北野2000を一部改変）

《遺物について》

1．遺物説明に関することは以下の凡例のとおりとする。

①土器の器種名は、須恵器・土師器ともに、北陸古代土器研究会で使用するものに準じたが、一部筆者の設定したものもある。食膳具は坏、盤、塊、Ⅲを使用し、無台はA、有台はBとした。なお、無台坏の中で特に有蓋のものは坏Eとして区別し、脚付きの盤は高盤とした。鉢などの調理具や壷・瓶類貯蔵具は器種分類図に示したとおりで、小型鉢類や小型壷・瓶類は小型貯蔵具として扱った。また、貯蔵具で底部を丸底に叩き出す器種は甕とし、特に平底のものは平底甕とした。また、甕は法量により、小甕、中甕、大甕の3器種を基本に、中小甕も加えた。煮炊具は従来使用されてきた「甕」は使用せず、煮炊き機能のイメージから「釜」と呼称する。小型短胴は小釜、大型長胴は釜、胴部上位に鍔の付くものは羽釜とし、浅身広口は鍋、底部筒抜けは甑とした。

②本稿で示した土器編年は、1988年北陸古代土器研究会シンポジウムの際の田嶋明人氏の古代土器編年軸を基本として、1997年北陸古代土器研究会10・11世紀シンポジウムの際の田嶋明人氏の南加賀編年修正を加えたものである（右表参照）。これに、南加賀窯跡群標識資料と二ッ梨一貫山窯跡資料を当てはめ、暦年代観を付記した。提示した暦年代観は、最近の研究による宮都での年代観修正や石川県内での暦年代資料を加味した筆者の考えである。

田嶋編年			南加賀窯跡群の細分と標識窯	二ッ梨一貫山窯資料	筆者暦年代観
古代前半期	Ⅰ期	Ⅰ1	(古段階) 分校3号窯・林タカヤマ1号窯Ⅰ次窯		7世紀初頭～前葉
			(新段階) 那谷金比羅山6号窯・戸津六字ヶ丘1号窯		
		Ⅰ2	那谷金比羅山10号窯　戸津六字ヶ丘2号窯		7世紀中葉
	Ⅱ期	Ⅱ1	那谷金比羅山7－2号窯		7世紀3/4期
		Ⅱ2	(古段階) 戸津六字ヶ丘4号窯		7世紀後葉～末葉
			(新段階)　(＋)		
		Ⅱ3	(古段階) 那谷桃の木山1号窯		8世紀初頭
			(中段階) 戸津46号窯		8世紀前葉
			(新段階) 戸津28号窯		
	Ⅲ期		(古段階) 矢田野向山1号窯Ⅰ次窯	二ッ梨一貫山1・2号窯	8世紀2/4期～中葉
			(新段階) 矢田野向山1号窯Ⅲ次窯	D地区10号窯灰原	
	Ⅳ期	Ⅳ1	(古段階) 二ッ梨一貫山4号窯	D地区4号窯灰原	8世紀中葉～3/4期
			(新段階) 二ッ梨横川1号窯		
		Ⅳ2古	(古段階) 箱宮5号窯・戸津60号窯		8世紀後葉～末葉
		Ⅳ2新	(新段階) 戸津59号窯Ⅱ次窯	F地区12号窯灰原	
			二ッ梨10B号窯	F地区9号窯灰原・下方灰原	9世紀初頭
古代後半期	Ⅴ期	Ⅴ1	戸津5号窯・戸津58号窯	F地区斜面下方堆積灰原新様相	9世紀前葉
		Ⅴ2	戸津29号窯	D地区3号窯灰原古様相	9世紀中葉
	Ⅵ期	Ⅵ1	戸津30号窯	D地区3号窯灰原新様相	9世紀3/4期
		Ⅵ2	(古段階) 戸津11号窯	(　〃　)	9世紀後葉～末葉
			(中段階) 戸津9号窯	F地区7号窯灰原・粘土採掘坑	
			(新段階) 戸津35号窯・戸津8号窯		
		Ⅵ3	(古段階) 戸津44号窯・二ッ梨豆岡向山1号窯	F地区8号窯灰原	10世紀初頭～中葉
			(中段階) 戸津56号窯・二ッ梨豆岡向山3号窯		
			(新段階) 戸津48号窯		
	Ⅶ期	Ⅶ1	(＋)		10世紀後半
		Ⅶ2古			
		Ⅶ2新			

北陸古代土器編年表と南加賀窯跡群細分案

2．遺物図版に関することは以下の凡例のとおりとする。

①土器図版は出土遺構ごとにまとめて提示し、須恵器、須恵質土製品、瓦、土師器、土師質土製品、施釉陶器の順で掲載する。図はいずれも断面白抜きのため、各素材の確認については観察表を参照されたい。また、土師器においては赤彩及び内黒処理されているものを、赤彩が細かな網点、内黒が粗い網点でその範囲を示してある。施釉陶器の施釉範囲についても網点で示した。

②土器図版は須恵器・土師器食膳具と須恵器小型貯蔵具、須恵器・土師器特殊土製品、須恵器・土師器窯道具、製鉄関連遺物を1/3、須恵器調理具・煮炊具・中型貯蔵具、土師器煮炊具を1/4、須恵器大型貯蔵具を1/5にそれぞれ分けて統一している。

③土器図版中で示す右側断面に書き込んだ「⟷」はヘラ削りの範囲を、左表面の削り中の「→」は削りに伴う砂粒移動の方向を示す。

④土器図版の底部に示す「●」は回転糸切り痕の存在を示し、2つの「▲」は回転糸切り痕の範囲を示す。

⑤須恵器横瓶は両側面を左右に配した図で示し、成型段階での底部側（下側面）を右に、円盤閉塞側（上側面）を左に配して、断面は千鳥に入れた。

⑥土器図版中の右断面の中で示す破線は粘土紐接着痕を示し、粘土紐単位で粘土色調の異なるものはその濃淡をスクリントーンで示した。

⑦製鉄関連遺物で示した鉄滓の図で、炉壁の場合の矢印は炉上端の方向、炉外流出滓の場合は滓の流れ出る方向を示す。

《遺物観察表について》

1．D区須恵器窯灰原出土土器及びF地区須恵器窯灰原出土土器観察表については以下の凡例のとおりとする。

a．須恵器と土師器を分けて提示し、観察表の内容を変えた。

b．器種名は本文中分類及び上記器種分類図に基づくものである。なお、土師器器種名にある外赤内黒は外面赤彩、内面黒色焼成のもの、焼台については器種名ではなく、本文中の分類名を記した。

c．出土地点はグリッド名が記してある。

d．法量で示した口は口径、底は底径、台は台径、つまみ径は蓋つまみ径、基は脚基部径、脚は脚部径、体大は体部最大径、高は器高、台高は高台高、つまみ高は蓋つまみ高、坏高は高盤坏部高、脚高は脚部高、頸は頸部径、肩は肩部径、胴大は胴部最大径、胴幅は非対称形器種の正面から見た胴部幅、胴厚は非対称形器種の側面から見た胴部幅、頸高は口頸部高、胴高は胴部高、耳厚は双耳瓶把手の厚さをそれぞれ示す。また、土錘や土製分銅について、長は長軸長、幅は最大径、孔は孔径、上は上端の径や大きさ、下は下端での径や大きさを示す。

e．胎土で示す用語は、「普通」が南加賀窯跡群の戸津オオダニ支群窯で通常見られる、素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土、「良」が砂の混入の少ない比較的良質な粘土質胎土のもの、「砂多」が通常の胎土よりもやや砂の混入が多いもの、「粗砂多」は混和材と呼べる大粒砂粒を多量に混在させる土師器煮炊具同様の胎土を、それぞれ示す。

f．焼成と焼き色で示す用語は、「堅緻」が良好以上の強い堅緻な焼きのもの、「良好」が堅緻よりやや焼き締まり弱いもの、「良」が還元状態を保つが焼き締まり弱いもの、「やや不良」が「良」と「不良」のどちらの状態ももつもの、「不良」が白い還元状態のものや酸化状態の焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。焼き色は降灰部分や釉付着部分を除いたおおまかな色調。

g．完存は無記であれば全体での完存割合、口、胴、底、坏、脚の指示があれば、その部位のみでの完存割合を示す。

h．備考中の食膳具重焼きはⅠ類が蓋身正位に合わせ口にしたものを1単位として平積みないしは2段程度に重ねたもの、Ⅱa類が蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として柱状に重ねたもの、Ⅱb類は蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として交互に蓋口どうしが合わさるように柱状に重ねたもの、Ⅲ類は蓋と身を別にそのまま柱状に重ねたもの。以上は有蓋器種だが、無蓋器種は柱状重ね焼きの場合、いずれもⅢ類であり、それに関しては付記しないが、一部口縁部どうしを合わせ口にして焼くものがあり、これについてはⅣ類とした。

i．備考で示した底爪痕は有台器種の底部に付けられた爪形圧痕であり、以下に分類した。

a類‥‥高台内側の高台際に爪が横向きに並ぶもの。全周して環状なす①類と1カ所途切れる②類、途中で途切れる③類に細分。

b類‥‥高台内側の底部中心に爪が縦につくもの。中心より離れて環状をなす①類と中心に集まり放射状なす②類に細分。

c類‥‥高台内側の底部中心付近から爪が横向きに並び、それが環状ではなく螺旋状につくもの。ひとまわり程度の①類とそれが途切れる②類、螺旋状が2巻き程度する③類に細分。

d類‥‥高台内側の底部中心付近と高台際に横向き爪が2重に環状につくもの。

e類‥‥高台の外側に爪が横向きに全周するもの。

j．備考で示したヘラ記号は特に部位を記していないものは全て外底面である。

k．備考に記した○○ℓは容器内側の容積（容量）で、ここで示したものは口縁端部以下の容積のみ示している。また、土錘や分銅型土製品で示す○○gは重量を示すが、特に略完形のもののみとし、半欠け品は計測していない。

l．貯蔵具の胴部整形・調整で示す叩き及び当ての記号はHaが木目直交の平行線文、Hb類が木目左下がりの平行線文、Hc類が木目右下がりの平行線文、Heは木目見えない平行線文、Daが木目の見えない同心円文、Dbが木目が年輪状に入る同心円文、Dcが柾目状木目入る同心円文、SDが年輪木目のみが見える細かな同心円文（木製無文）であり、この分類名は花塚信雄氏の研究に基づいたものである（「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会、1984年）。

2．F地区土師器焼成坑出土土器及び9世紀後葉～10世紀前半遺構出土土器の観察表については以下の凡例のとおりとする。

a．遺構ごとに提示し、出土地点にはその遺構での出土地区と土層部位、層位を示した。

b．器種名には須恵器と土師器を付記し、本文中分類に従った。

c．須恵器は前述観察表凡例に準じた。

d．土師器は法量、完存率、備考内容等、前述観察表凡例に準ずるが、胎土・色調・焼成については以下のとおりとする。

e．胎土で示す用語は、「普通」が南加賀窯跡群の土師器生産地で通常見られる、素地が粘土質で細砂粒混在する土、「良」が砂の混入の少ない比較的良質な粘土質胎土のもの、「砂多」が通常よりもやや砂の混入が多いもの、「粗砂多」は混和材と呼べるやや大粒砂粒を多量に混在させる煮炊具胎土、「大粒砂多」は粗砂よりも大粒の砂粒を多量混在させる煮炊具胎土である。

f．色調で示した記号は「新版標準土色帖」に基づくもので、焼成は、「通」が普通、「良」が比較的良好のものである。

g．備考中には、土師器の黒斑の形状と部位、内黒土師器の内面黒色の状況と外面へのはみ出し状況を示した。

h．使用痕跡のある須恵器・土師器については、備考中で擦れや摩耗状態と部位、スス・コゲ痕跡の状態と部位を示した。

3．製鉄関連遺物の観察表については以下の凡例のとおりとする。

a．種類名は穴澤義功氏の分類に基づいた。

b．磁着度はタジマ製マグネット式吸着機で吸着したものの中で、吸い付くものを「強」、若干吸着感のあるものを「弱」、全く吸着しないものを「無」とした。

c．メタルは穴澤義功氏目盛り設定の標準金属探知機の金属反応により、大反応をL、中反応をM、小反応をSとした。

d．色調は炉壁は内表面溶解部、炉内滓・炉外流出滓は上にあたる表面部分、羽口は先端溶解部分の色調で、「新版標準土色帖」に基づく記号で記した。

e．特記事項には、鉄滓の形状や特徴、製鉄炉構築の炉壁粘土の土質（胎土）、鉄滓への燃料木炭の混在、出土地点を記した。なお、出土地点が記されていないものについては、遺構帰属はわかるが、出土地詳細が不明なものである。

報告書抄録

ふりがな	ふたつなしいっかんやまかまあと
書名	二ツ梨一貫山窯跡
副書名	日本自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	望月精司
編集機関	小松市教育委員会
所在地	〒923－8650　石川県小松市小馬出町91番地　（電話）0761-22-4111
発行年月日	西暦 2002年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふたつなし 二ッ梨 いっかんやま 一貫山 古窯跡	いしかわけん こまつし 石川県小松市 ふたつなし 二ツ梨町 一貫山40番地 外29筆		03010	36度 19分 50秒	136度 26分 0秒	1次調査 1994.04.11 ～1994.07.14 2次調査 1994.10.13 ～1995.08.11	1次調査 1,890 2次調査 1,957	石黒産業株式会社施工の『日本自動車博物館』建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
二ッ梨 一貫山 古窯跡	窯跡 製鉄跡	奈良時代 平安時代 （8世紀前半～10世紀前半）	須恵器窯灰原9基、土師器焼成坑28基、粘土採掘坑などの製陶工房関連遺構製鉄関連遺構	須恵器、土師器、瓦、灰釉陶器、墨書土器、製鉄関連遺物	8世紀前半～10世紀中頃の須恵器窯灰原9基調査し、また、8世紀中頃～9世紀中頃の土師器焼成坑群を調査した。特殊遺物が多く、また、良好な編年資料が得られた。

第１章　調査の経緯と経過

第１節　１次調査に至るまでの経緯と調査経過

本遺跡発掘調査の発端は、小矢部市に建設してあった石黒産業経営の自動車博物館が、能越自動車道小矢部インター建設に伴い移転を余儀なくされたことにある。自動車博物館の移転先は、建設省の仲介で小松市特定プロジェクト推進課の立ち会いの下、二ッ梨一貫山地内（二ッ梨町一貫山40番地）が候補用地として上げられた。

平成６年２月18日、小松市建築指導課のもと、二ッ梨一貫山地内における自動車博物館建設に伴う開発許可申請事前審査会が開催される。申請地は、丘陵部中央が昭和40年代に行われた土砂採取によって、既に消滅しており、丘陵縁辺のみ遺存しているが、そこに周知の埋蔵文化財が存在し、埋蔵文化財発掘調査が必要である旨を回答した。

平成６年２月25日、石黒産業から小松市教育委員会へ埋蔵文化財の取り扱いに関する協議書が提出される。開発行為全面積18,295㎡のうち、丘陵部が遺存するのは縁辺部のみであり、しかも、窯跡集中が確認される南側区域は緑地帯として保存する計画であった。このため、埋蔵文化財に係る開発面積は1,890㎡であり、この段階では比較的小規模な調査と判断した。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、試掘調査は行わず、1,890㎡を対象とした発掘調査を行うことで、協議回答した。

平成６年２月28日、石黒産業より文化庁へ文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、これを受けて、小松市教育委員会は進達書とともに文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年３月１日に文化庁へ提出した。

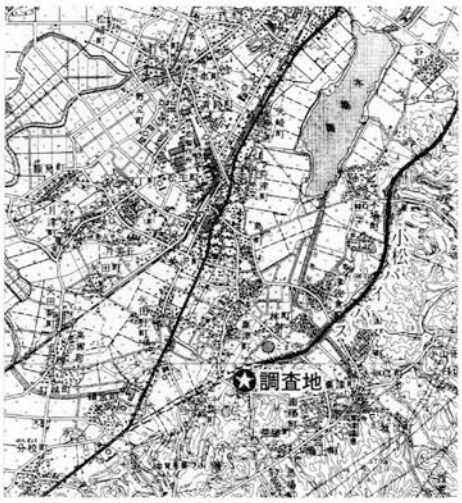
平成６年３月17日、石黒産業が小松市教育委員会へ発掘調査実施を依頼。これを受けて、小松市教委は、同年３月25日、平成６年４月４日～７月１日の予定で、1,890㎡を対象とした調査実施回答を石黒産業へ提出した。

平成６年４月11日、1,890㎡を対象とした自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業委託契約を小松市と石黒産業との間で締結。経費の全額を石黒産業が負担することを明記した。

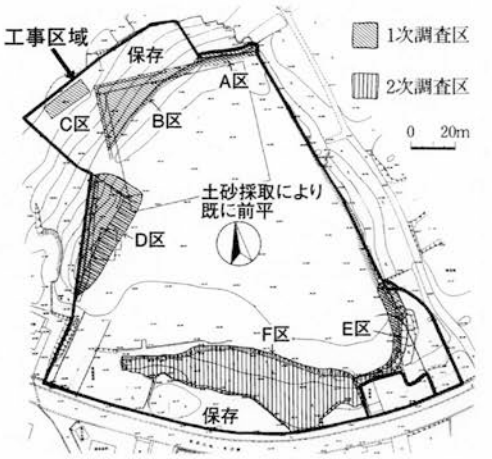
平成６年４月11日、発掘調査に着手する。調査区は掘削工事が及ぶ５箇所であり、それぞれＡ～Ｅ区に分けて、Ａ区から順に調査を開始した。Ｄ区以外は須恵器の散布のみであり、明確な遺構は確認されなかった。

平成６年７月20日、発掘調査がほぼ完了に近づき、埋蔵文化財調査の全容も予測できる段階に達したため、日本自動車博物館建設用地内埋蔵文化財発掘調査に伴う出土品整理及び発掘調査報告書刊行作業の経費負担を明記した覚書を小松市と石黒産業との間で交換した。この段階では平成８年度完了を目処にしている。

平成６年８月26日、発掘調査完了通知を小松市教育委員会より石黒産業へ提出した。1,890㎡を対象とした発掘調査作業を、平成６年４月11日に着手し、７月14日に完了した旨を通知した。



第１図　発掘調査地の位置（1/100,000）



第２図　工事区域と発掘調査区域

第２節　２次調査の経緯と調査経過

当初計画では、１次調査の1,890㎡のみであったが、１次調査実施中の平成６年４月中旬、石黒産業より、開発計画変更の旨を提示された。内容は、窯跡集中区のために発掘調査実施を回避していた南側区域を石黒産業が駐車場及び周辺緑地として掘削工事したいとの計画変更で、調査期間と自動車博物館オープンの期日が折り合いあわず、試掘調査の内容を見て、ということとなった。

平成６年７月４日～７月12日、駐車場及び周辺緑地等用地の南側区域3,464㎡を対象とした試掘調査を実施した。調査方法は、削平断面での精査確認と全長86ｍの試掘トレンチで、８カ所の須恵器窯灰原と土師器焼成坑１カ所を確認、調査区域のほぼ全域に窯跡関連遺構が存在することを確認した。対象区域のうち南西進入路部分481㎡が既に削平されていたことと、盛土施工区域1,507㎡の遺構存在深度が予想以上に深かったことにより、両区域は発掘調査対象区域から除外し、調査区域は1,957㎡となった。

平成６年９月１日、石黒産業より、計画変更による駐車場等の新規1,957㎡の調査依頼が提出される。これを受けて９月９日小松市教育委員会が実施回答を提出する。

平成６年９月13日、文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁へ提出する。

平成６年10月13日、駐車場造成等の新規工事区域を新たに調査区域に含めるため、平成６年４月11日付けで石黒産業と小松市との間で締結した委託契約の一部（調査面積の増加と調査経費の増額）を変更した。

平成６年10月13日、駐車場等造成区域の1,957㎡（Ｆ地区）の調査に着手する。

平成６年12月20日から平成７年２月28日までの期間、冬季の天候不良のため、発掘調査作業を中断する。

平成７年３月31日、平成６年度発掘調査事業を完了し、委託事業結果報告書を小松市から石黒産業へ提出する。Ｆ地区の遺構密度が予想以上に高く、調査は平成７年度に継続する。

平成７年４月３日、平成７年度の自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業委託契約を小松市と石黒産業の間で締結する。事業経費の全額を石黒産業が負担すること明記し、出土品整理作業として平成８・９年度も継続して発掘調査報告書刊行事業を行うことを石黒産業へ申し渡す。

平成７年４月３日、Ｆ地区の調査再開する。自動車博物館開館期日が迫ってきているため、雨天時以外は休日返上で調査にあたる。それでも開館期日までＦ地区全域の調査が完了できそうもないため、小松市教育委員会と石黒産業の協議のうえ、駐車場用地として最低限確保したい西側の約1,600㎡（ａ区）を先に完了させることで了解する。

平成７年４月８日に北陸古代土器研究会有志である北野博司氏、川畑誠氏、柿田祐司氏の調査協力を受ける。

平成７年５月８日、Ｆ地区の西側約1,500㎡（ａ区）の遺構平面全体図を航空写真測量で実施し、同年５月９日、補足調査を実施、ａ区の調査を完了し、工事施工業者に引き渡す。

平成７年５月10日、ａ区工事開始する。Ｆ地区の残り約500㎡（ｂ区）の調査に入る。

平成７年８月９日、ｂ区遺構平面全体図を航空写真測量で実施する。同年８月10・11日、補足調査を実施し、自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の全ての調査作業を完了する。

平成７年８月26日、二ッ梨一貫山窯跡の調査で得られた土師器焼成坑が北陸最多数であることと県内初の窯跡に伴う粘土採掘坑群の検出等から、一般公開の必要性を感じ、報道機関への記者発表を行う。

平成７年８月31日、小松市教育委員会より石黒産業へ、自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査作業が完了したことを通知する。

第２次調査風景（粘土採掘坑の掘り下げ）

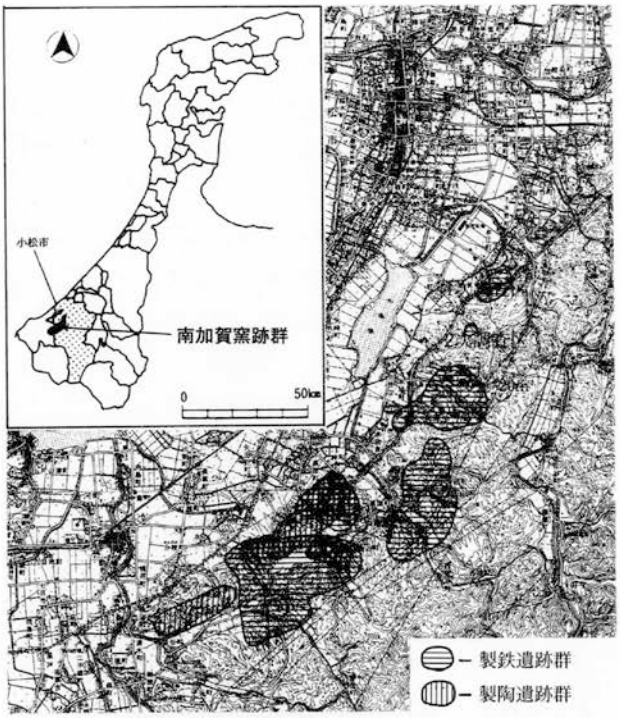
第２章　南加賀窯跡群の概要と戸津オオダニ地区

第１節　南加賀窯跡群の概要

第１項　南加賀窯跡群の位置と立地地形

南加賀窯跡群は、石川県小松市と加賀市にまたがって存在する大規模製鉄・製陶遺跡群である。小松市南東部に位置する蓮台寺・木場地区及び粟津地区から加賀市北東部に位置する分校地区にかけての、長軸10㎞に及ぶ遺跡群であり、古代では製鉄と製陶が併存する。ただ、同時期に同一斜面で併存することはなく、明瞭に棲み分けがなされており、製陶遺跡群よりも製鉄遺跡群の方が分布域広く、比較的丘陵の奥まった区域まで広がっている。

南加賀窯跡群の立地地形は、白山前山丘陵の末端部分と言え、平野部や潟に面する標高20～30ｍの低丘陵地帯となっている。丘陵を開析する谷は比較的浅く広いのが特徴で、製鉄は丘陵の奥まった谷に入って作られることが多いが、製陶については比較的平野に面した谷の入り口付近に立地していることが多い。



第３図　南加賀窯跡群の位置と分布（1/150,000）

第２項　南加賀窯跡群の古代製陶遺跡

製陶遺跡群は６世紀初頭から10世紀前半代までの古代土器生産遺跡群と12世紀末から14世紀までの中世陶器生産遺跡群とに分けられる。古代から中世へは200年間、製陶活動が断絶しており、全く別の製陶遺跡として存在しているため、ここでは古代製陶遺跡群のみを取り扱う。

古代土器生産遺跡群は分布域、操業期間、生産規模から見て加賀地域最大規模をもつ中核窯と言える。須恵器生産開始期以降、連綿とした操業を続ける遺跡群で、６世紀代は埴輪併焼、７世紀後葉と10世紀前半は瓦併焼、８世紀～10世紀前半は土師器併焼を行っている。製陶遺跡の分布は、南加賀窯跡群のほぼ中央、戸津・二ッ梨の地域を中心に、そこから南へ那谷・分校へ伸びている。製鉄に比べると、平野部に近い区域での分布が目立ち、大半が戸津・二ッ梨の地域に集中している。

分布域は河川流域や主谷を単位に、動橋川流域の区域（動橋川流域地区）と馬場川流域の区域（馬場川流域地区）、二ッ梨オオダニ・戸津オオダニの入り口を中心とする区域（オオダニ地区）の主に３つに分けられる。動橋川流域地区と馬場川流域地区は操業期間に偏りがあり、全体の３割程度を占めるのみである。これに対し、オオダニ地区は開窯から終焉まで操業が確認される区域であり、全体の７割がここに支群形成する。南加賀窯跡群の製陶遺跡群はオオダニ地区を主流グループとし、他の２地区を亜流グループとすることも可能であるが、現段階では製品等の比較検討が不十分であり、可能性として提示しておく。オオダニ地区には、入り口から南北に走る二

分布地区	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
戸津・林地区	―	―――			
戸津オオダニ地区			―――	―――	―――
二ッ梨オオダニ地区	―――	―――	―――	―――	
矢田野・箱宮地区			―――		
馬場川流域地区			―	―――	―――
動橋川流域地区		―――			

第１表　南加賀窯跡群（製陶遺跡群）の動向

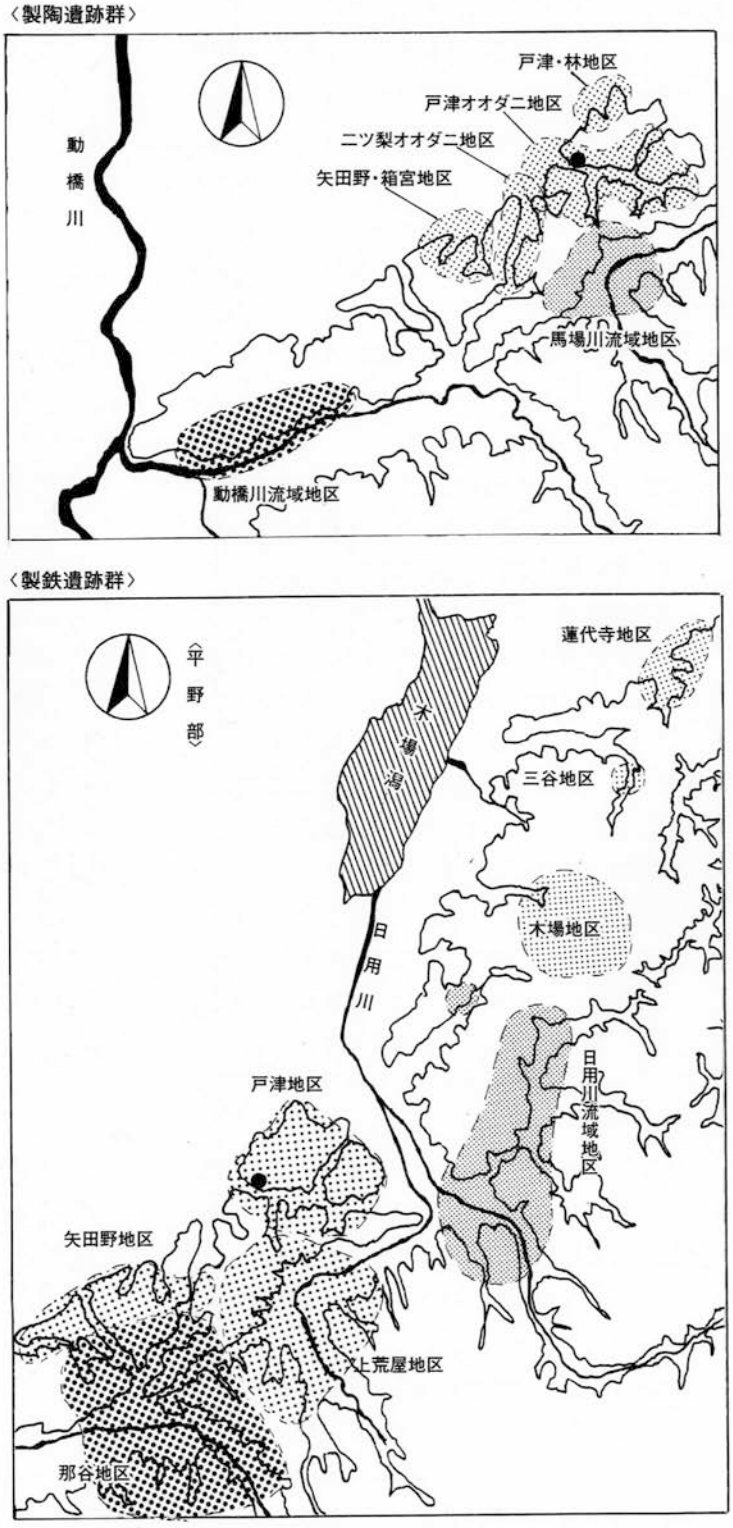
ッ梨オオダニと東西に走る戸津オオダニがあり、それを基点に二ッ梨オオダニ地区と戸津オオダニ地区とに分ける。そしてさらに戸津オオダニよりも北側の平野部に面して分布するグループを戸津・林地区とし、二ッ梨オオダニ地区の西側にある支谷に分布する区域を矢田野・箱宮地区として、オオダニ地区を4細分する。この中でも中心となるのは、二ッ梨オオダニ地区と戸津オオダニ地区であり、戸津・林地区や矢田野・箱宮地区は、ある時期に両オオダニ地区より派生又は移動する形で、経営される。以上、現在までで確認できる地区・支群数は、6地区、29支群であり、須恵器窯が195基、土師器焼成坑が70基確認されている。以下に、時期毎の窯場の動向を概観する。

6世紀代の須恵器生産開始期は、主に二ッ梨オオダニ地区に分布しており、一部戸津・林地区でも確認される。両地区とも、オオダニ入り口を基点に接しており、平野部に面する谷の入り口を起点として展開していると言える。生産規模は大きくはないが、継続的な生産が確認でき、他地域へも須恵器供給するようなこの時期としてはかなり安定した生産を行っているのが特徴と言える。前半代を中心として埴輪併焼が行われており、当期の須恵器生産が古墳祭祀・儀礼用具拡充に主目的があったことを伺わせる。

7世紀初頭になると、南加賀窯跡群の南端に位置する動橋川地区で新たに生産が開始し、それに刺激されてか、ほぼ同時期かやや遅れて、二ッ梨オオダニ地区から戸津・林地区へ窯場を北に移動する。窯数や生産規模の拡大など、新たな生産単位の導入が行われており、それまでの須恵器生産組織を再編・拡大する。中頃以降も同じ窯場での生産が継続されるが、停滞・収束の方向性をもち、7世紀末～8世紀初頭には両窯場での須恵器生産は停止する。

8世紀初頭、戸津・林地区、動橋川流域地区に加え、二ッ梨オオダニ地区での生産が再開、新たに戸津オオダニ地区での生産も開始する。そして、前葉以降には、戸津・林地区、動橋川流域地区が停止し、両オオダニ地区を中心とし、新たに矢田野・箱宮地区でも生産が開始される。窯場支群数は過去最多であり、南加賀窯跡群の全盛期と言える時期にあたる。なお、当期は土師器生産を窯場へ導入する時期にあたり、新たな窯場移動も考え合わせれば、当期も7世紀初頭に続く、生産組織再編期と位置付けできる。

8世紀中頃以降、各地区の中で支群数減少、



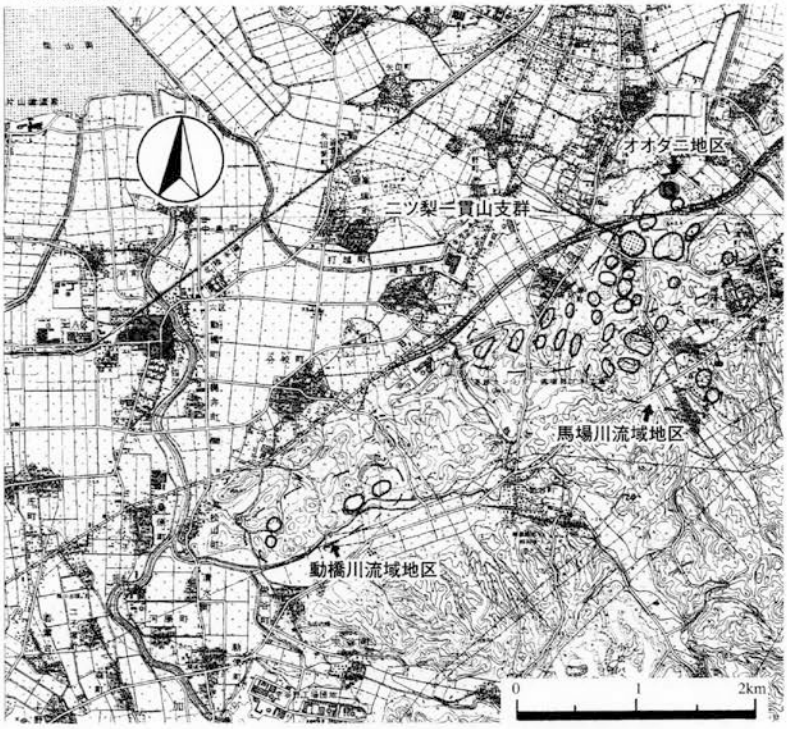
第4図　南加賀窯跡群の地形模式図と分布地区

窯場衰退の様相をもちながら、後葉には戸津オオダニ地区へ集約する傾向が見られる。一つの斜面での単独基・少数基築窯からこの時期には複数基並列築窯に変化しており、生産組織は量産・集中経営型に変化している。これに呼応するように、土師器焼成坑の集約化が顕在化し、前半代の生産体制から大きく変化する。ただ、窯場数はこの時期確実に半減し、消費地の須恵器から見ても、これ以降9世紀前半まで、南加賀窯産須恵器は衰退期にあるため、南加賀窯跡群としては停滞期と位置付けできる。

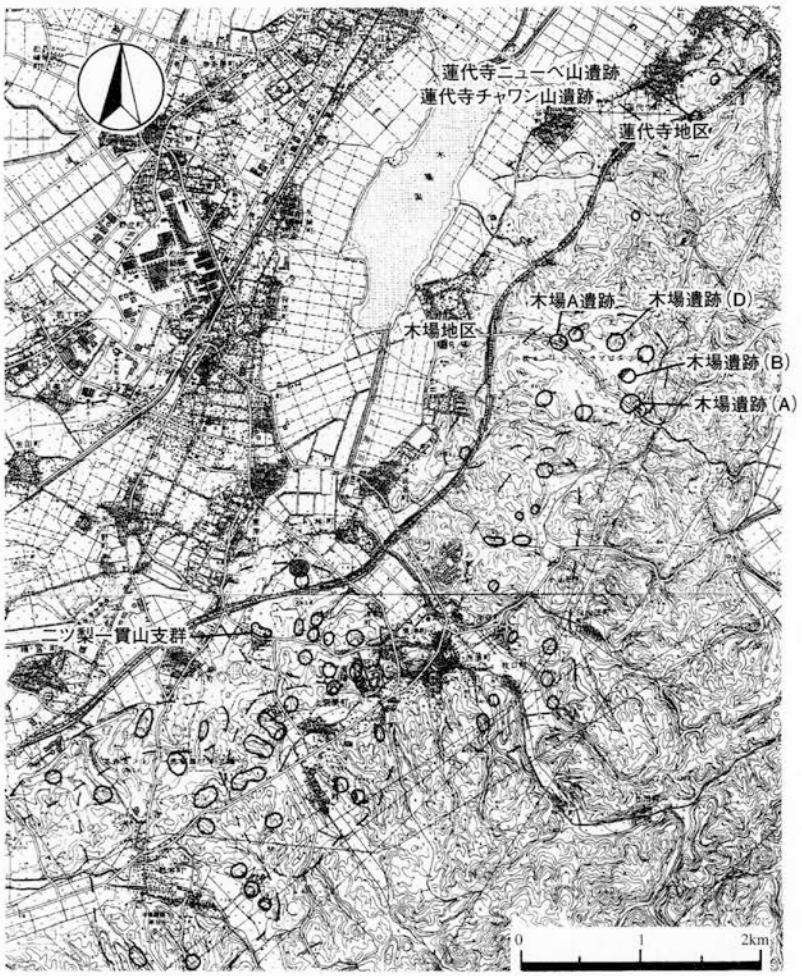
9世紀中葉まで、南加賀窯跡群は停滞期にあるが、一定の生産は持続しており、他の窯跡群のような拡散傾向は見られず、逆に戸津オオダニ地区に集約してくる。9世紀後葉になると、この戸津オオダニ地区を中心として生産が活発化し、9世紀末から10世紀前半にかけて、拠点的生産が行われる。戸津支群では須恵器窯と土師器焼成坑の集中築窯が見られ、また、馬場川流域には数基単位で須恵器窯が点在して築かれる。馬場川流域地区は8世紀中頃より生産が確認されるが、9世紀末までは1支群での生産であり、確実に当期が生産の画期となっている。これまでの停滞期から一転して窯場での生産活動は活発化し、陶硯類の量産や平安京山城系の瓦当文様をもつ軒先瓦生産など、国府お抱え窯としての性格を帯びる。南加賀窯跡群の再興と呼べるものであり、国衙施設・国分寺の移築に伴う国衙権力のテコ入れの結果と考えている。また、当期は郡衙権力の衰退してくる時期にあたり、中核窯が国衙経営に集約された結果とも考えられる。

10世紀前半代まで活発な生産が確認できるが、中頃を境に急速に生産停止へ向かう。須恵器生産のみならず、土師器生産もほぼ収束の状況にあり、遅くとも後半代には土師器生産も丘陵部から姿を消す。10世紀後半代は、国衙経営の終焉時

〈製陶遺跡群〉



〈製鉄遺跡群〉



第5図 南加賀窯跡群の支群分布状況

期とされており、製陶遺跡群の急激な終焉はそれと連動したものと言えよう。

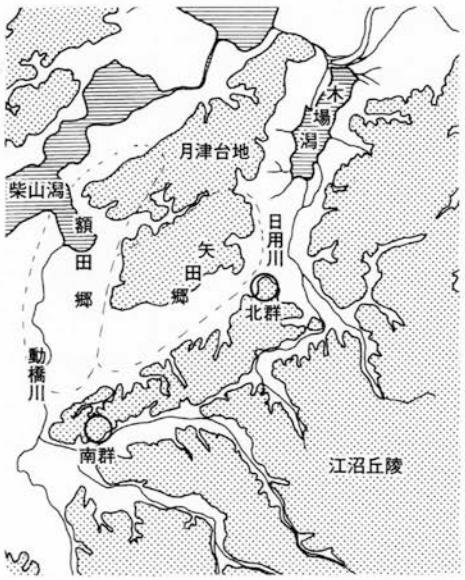
第３項　南加賀窯跡群の古代製鉄遺跡

製鉄遺跡は、一部12世紀に下るものもあるようだが、基本的には古代に位置付けられる。古代製陶遺跡群との分布域の重複はあるが、製陶遺跡群の中心域であったオオダニ地区での分布が少なく、その周辺地域及びそれよりも北へ分布域を広げる。製陶遺跡群が東西５㎞の範囲で分布していたのに対し、製鉄遺跡群は南西方へ９㎞の範囲で分布しており、製陶遺跡群の北東の分布域の境界にあたる日用川が、製鉄遺跡群ではちょうど中央にあたる。以下に北からの分布状況を概観する。

製鉄遺跡群の最北端は蓮代寺地区で、４支群確認され、三谷地区の１支群とともに、一つの区域を形成している。未踏査地域が多く、ここで示したものは氷山の一角と言えるが、隣接地区の木場遺跡（８支群が点在）に近い状況であったと予想する。木場地区とともに、比較的小単位が点在する傾向にあり、入り組んだ小支谷や丘陵頂部斜面に営まれることを特徴とする。木場潟に面する丘陵部縁辺から丘陵奥へと順に入り込む傾向があるが、広い範囲の中での動きであり、また、隣接するものは時期の全く異なるものが目立つ。日用川流域地区は、河川流域から北側へ入り込む主谷に分布する製鉄群で、白山田・小山田・井口・西原・牧口の区域が該当する。この中で細分の可能性もあるが、大きく一群と捉える。河川流域や主谷に沿って12支群が点在しており、あまり谷の奥へとは入って行かない傾向をもつが、丘陵奥が踏査不十分なためで、これより増える可能性は十分にある。

日用川南側の区域では、製陶遺跡群の中心地区であったオオダニ地区よりも馬場川流域や動橋川流域への分布が目立つ。オオダニ地区では主に戸津が主体的で、製陶密集区を比較的避ける形で、それよりもやや主谷の奥へ入って分布する。二ッ梨オオダニでは製鉄は目立たず、矢田野・箱宮でも少ない傾向をもつ。このオオダニ地区は、二ッ梨オオダニより南を矢田野地区とし、戸津オオダニ周辺を戸津地区とする。矢田野地区で３支群、戸津地区で10支群確認できる。なお、製鉄遺跡における地区名称であるが、製陶遺跡群でのそれと混同を避けるため、意識的に別名称を使用している。

オオダニ地区での製鉄遺跡の分布が製陶遺跡よりも少ない傾向にあったのと対照的に、馬場川流域（上荒屋地区）と動橋川流域（那谷地区）では製鉄遺跡の分布の割合が高い。両流域とも未踏査箇所が多いため、戸津地区よりも確認支群数は各々９支群と少ないが、実態は５割増から10割増と考えて妥当である。分布状況は日用川流域地区同様、河川や主谷に沿って分布する傾向があり、ここでも製陶遺跡との重複を意識的に避けている。両流域とも、製陶遺跡が比較的流域入り口付近であるのに対し、製鉄遺跡ではそれより奥へ入っており、さらに支谷の奥へと入り込む傾向をもっている。特に動橋川流域ではその傾向が強く、それより南へは分布域を延ばさずに、製鉄遺跡の分布域の南境となっている。７世紀代、動橋川流域入り口付近は４支群の製陶遺跡が確認されるが、そのいずれもが複数基の須恵器窯を群在させるもので、短期集中型の生産を行っている。10ｍを越す大型窯全盛の時期で、かなりの薪燃料を必要としたものと考えている。それが製鉄遺跡の展開の境界を生んだ要因とも考えられるが、燃料材を根こそぎ伐採したとしても、２～３世紀後であれば、森林も再生していたであろうから、那谷地区の製鉄がその頃のものであれば、分布域がここで止まることは不自然と言える訳である。このような分布域の明瞭な棲み分けが確認できるのは、同時期併存の可能性を考えさせる。製陶遺跡では動橋川流域地区を額田部（里・郷）との関連で考えており、製鉄もそうだとすれば、この流域は７世紀代を中心として額田部の生産域であったことも十分想定可能であろう。入り口を製陶、奥を製鉄に領域分けし、大規模な工業生産が行われたことを想定する。製鉄の時期判断が困難であるため、空想の域では出ないが、そのような視点で、当区域を再整理する必要性を感じる。



第６図　７世紀代須恵器窯北群・南群の位置と古代額田郷と矢田郷の位置

以上、製鉄遺跡群の分布とグルーピングを述べたが、次に、生産の動向について概観する。ただ、先述したように、製鉄遺跡では時期判断が極めて難しく、正確な群形成や移動は提示できないため、これまで調査を行ったものをベースとしたおおよその傾向として提示する。

南加賀窯跡群における製鉄（砂鉄製錬）の操業開始は、製陶遺跡が変革期を迎える7世紀初頭頃と考えている。当期の製鉄遺跡は確認していないが、小松市念仏林南遺跡の7世紀前葉に位置付けられる竪穴住居内に鍛冶炉が付設されており、そこから出土する砂鉄製錬滓から在地での砂鉄製錬が当期まで溯ることを確認している（大澤1995）。製鉄遺跡の確認は、蓮代寺ニューバ山遺跡が7世紀後葉と最も古い。製炭窯のみの調査ではあるが、製鉄に伴うものであることは確実であり、その基数や操業回数からするに比較的大規模なものであったと予想される。蓮代寺ニューバ山遺跡に隣接する蓮代寺チャワン山遺跡は12世紀の年代が与えられている製錬炉と製炭窯を検出し、蓮代寺地区で複数時期の操業が確認される。これまで調査が行われた林遺跡、木場遺跡を見ると、林遺跡で8世紀中頃、8世紀末～9世紀初頭（製炭窯のみ）、10・11世紀の3時期、木場遺跡で8世紀中頃（A遺跡）、9世紀後半代（A地区）、9世紀中頃から後葉（B地区）の3時期が確認され、1支群単位とは言わないが、谷や丘陵を単位とする一つのまとまりをもった区域では、複数時期の操業が通常であったと言える。ただ、これらの操業は、明らかに断絶時期をもち、複数基が連続した操業を行うものは極めて例外的と言える。燃料材の大量伐採のために、比較的短期間で場所を移動せねばならなかったのであろう。そのため、比較的早くに、分布域は広範囲に及び、製陶遺跡群よりも奥まった谷（木場地区・日用川流域地区・上荒屋地区）へと進出していったものと言える。製陶遺跡群は築窯に適した土質を選んだためか、平野部に近い区域での操業が目立ち、奥まった谷に進出するのは、9世紀に入ってからである。製鉄遺跡は燃料材を求め、谷奥へと入って行かざるおえなかったのであろう。

上記のように、時期の判明される遺跡が少ないため、遺跡群として盛衰や場所の移動はよくわからないが、9世紀中頃から後半代に箱型炉から竪型炉に転換していることを前提とし、製鉄遺跡群の終焉が11・12世紀であると考えれば、箱型炉の率は高く、木場遺跡や林遺跡の状況から見ても、8世紀中頃にかなり活発に生産が行われていたものと予想する。那谷地区が7世紀代を中心とする生産域であったとすれば、7世紀代に既に活発な生産を行っていた可能性はあるが、製陶遺跡の盛衰時期と重ね合わせれば、8世紀代に全盛を迎えると考えるのが妥当であろう。生産を統括する側は、製鉄と製陶を一体的に組織編成していたであろうから、その可能性は高い訳で、9世紀後半の国府移動に伴う南加賀窯跡群再興のもと、製鉄も新たな展開を見せる可能性は十分予想できる(戸津地区や木場地区でこの時期のものが目立つ)。ただ、製陶遺跡が10世紀前半をもって終焉するのに対し、製鉄は11世紀か12世紀前半まで確実に存続しており、それ以降も継続生産される可能性すらある。11世紀以降、古代の手工業生産は解体され、新たな生産形態が形成されると考えられるため、生産組織や統括主体は変わっている可能性は高く、何故、このような継続的な生産が行われたか興味深い。古代後半期以降の生活様式の変革に伴う鋳物生産の活発化なども要因と考えるが、10世紀代に既にそのような生産形態を内包させていた可能性はあろう。南加賀窯跡群製鉄の終焉時期をどこに置くかも含め、今後注目して行きたい課題である。

参考引用文献

石川考古学研究会　1993　『石川県内生産遺跡分布調査報告書』

石川県立埋蔵文化財センター　1989　『蓮代寺地区遺跡（1）』

大澤正己　1995　「念仏林南遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『念仏林南遺跡Ⅱ』　小松市教育委員会

小松市教育委員会　1991　「木場遺跡の調査・林遺跡の調査」『小松市埋蔵文化財調査だより』第1号

小松市教育委員会　1992　「林遺跡の調査」『小松市埋蔵文化財調査だより』第2号

小松市教育委員会　1993　「林遺跡の調査」『小松市埋蔵文化財調査だより』第3号

近間　強・小松高等学校地歴部　1988　「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」『石川考古学研究会々誌』第31号
石川考古学研究会

第２節　戸津オオダニ地区と二ッ梨一貫山支群

第１項　二ッ梨一貫山支群の遺構分布状況

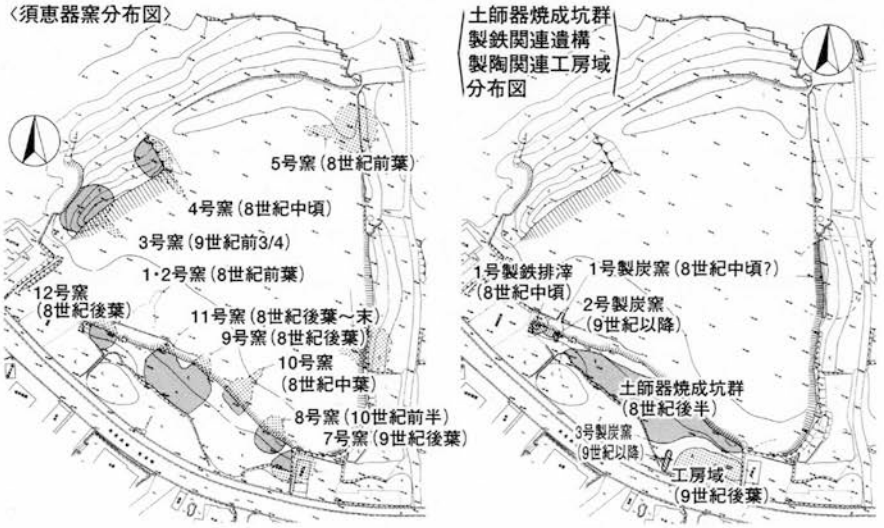
第７図　二ッ梨一貫山支群の旧地形（1/7,500）

二ッ梨一貫山支群は、戸津オオダニ入口にあたる北側丘陵で、北側から入り込む支谷によって寸断され、独立丘陵の様相を呈す。谷部との比高差20ｍを測る頂上32.0ｍの小高い小丘で、頂上部狭く、裾広がりの地形を呈す。昭和45年から断続的に行われた無許可に近い土砂採取工事によって、この丘陵の頂上部が失われている。その際、進入路の丘陵部縁辺で須恵器窯１基の発掘調査が行われているが（二ッ梨一貫山１・２号窯と報告されているもので、２号窯は１号窯の床面かさ上げ改造窯にあたる）、頂上部付近で全く須恵器窯が確認されなかったかと言うとやや確証をもてない。ただ、地形的に傾斜転換箇所に須恵器窯が並列して築かれた様子があるため、頂上部へは展開して行かなかった可能性は高いと考えている。丘陵縁辺部に製陶関連遺構の分布があることは周知されていたことであったためか、縁辺を残した形で工事が進められている。しかし、それでも須恵器窯及び製鉄遺構の本体がこの工事によって既に削平されており、今回の調査では、その灰原部分を調査するに止まった。よって、ここで示す製陶・製鉄関連遺構の分布は、その残丘部から推測したものであり、不確定要素を含んでいることを予め断っておきたい。

１．製陶関連遺構の分布

二ッ梨一貫山支群には既に消失した１・２号窯を除けば、10カ所の須恵器窯灰原が確認されている（近間強氏の行った分布調査結果を今回の調査で修正した基数。近間1988）。８世紀前半から中頃で２カ所、後半で４カ所、９世紀で４カ所があり、時期によって分布域が異なっている。まず、８世紀前半は、南西に位置する１・２号窯と北西に位置する４号窯、北東に位置する５号窯が該当する。いずれも、北側から入る支谷の斜面からオオダニ入口付近までの平野部に面する斜面に位置している。ただ、オオダニに面する南側斜面にも８世紀中頃に位置付けられる９号窯が存在するため、時期的には連続すると予想するが、８世紀後葉段階の窯は、南側斜面に並列築窯される。10・11・12号窯の３基で、８世紀後葉～９世紀初頭まで連続して営まれると予想する。この須恵器窯の分布する南側斜面のさらに谷部へ下った緩斜面には土師器焼成坑群が存在する。須恵器窯の灰原が途切れる区域から等高線に沿って広く分布しており、南側斜面一体に広がる。須恵器窯の築かれる時期にほぼ併行するが、９世紀前葉に下るものもある。

９世紀代の須恵器窯は前葉が空白期となる可能性をもつが、中頃になると、北西斜面に３号窯が築かれる。須恵器から２型式にわたる長期の生産が行われたことを確認できており、４/４期まで一部下る。９世紀４/４期は、南東部に集中する（６・７・８号窯）。ここでの灰原に土師器の混在が定量見られ、純粋な須恵器窯灰原の様相を呈さない可能性はあるが、同時期の工房域がこの縁辺部で確認されており、須恵器窯のみならず、土師器生産と工房域をセットとした領域を形成していた可能性もある。また、同時期の土師器焼成坑群は東側斜面に一部展開しており、丘陵の南東隅から支谷を北上する区域まで当期の生産領域は広がっていたものと



第８図　二ッ梨一貫山支群の製陶・製鉄関連遺構分布（1/3,000）

予想する。また、今回、南加賀窯跡群で初めて工房域が確認できた訳だが、予想通り、陶土として使用可能な粘土層を形成する谷部に営まれており、粘土採掘坑群と粘土溜め状の土坑群が多数掘られている。戸津オオダニ入口の谷は浅く広い谷部を形成するため、丘陵縁辺の広い緩斜面を有し、工房域としては適している。谷部の工房域を中心に据えた丘陵部での窯場経営であり、裾部緩斜面の土師器焼成坑経営と丘陵斜面の須恵器窯経営とある程度の棲み分けが行われながら、一体的な経営がなされていたものと予想する。

2．製鉄関連遺構の分布

二ッ梨一貫山支群での製鉄関連遺構は、製陶関連遺構と切り合い関係をもっており、それから判断するに、製陶遺構に先行する可能性をもっている。ただし、いずれも重複する製陶遺構が8世紀後葉段階のものであり、8世紀前葉の須恵器窯に先行するかどうかは、確証がない。製鉄遺構に混在する遺物を見ると、8世紀中頃か前葉頃のものが目立ち、須恵器窯に先行して営まれたとは言い難い。8世紀前葉の須恵器窯から中頃にかけて、若干の空白期間を有す可能性をもっているため、この時期に製鉄遺構が営まれた可能性はある。製陶と製鉄の隣接した併存経営は、可能性としてなくはないが、別組織での経営が前提であり、燃料材確保の視点からは肯定し難い。意識的に時期をずらして経営されたと見るのが妥当であろう。

第2項　戸津オオダニ地区の製陶遺構分布

前節でも述べたように、オオダニ地区は製陶遺跡群の中核をなし、特に戸津オオダニ地区と二ッ梨オオダニ地区に密集する。両オオダニ地区は、二ッ梨豆岡山支群付近のオオダニ入口を基点とした、東西と南北に分岐する主谷を軸とする地区であり、オオダニ入口では、両地区の様相が錯綜している。また、平野側に面する戸津・林地区は、部分的に戸津オオダニ地区に入り込むように位置し、戸津支群と連続する分布を示すなど、谷が入り組んでいるために、支群をグルーピングして行くと、重複する部分が出てくる。

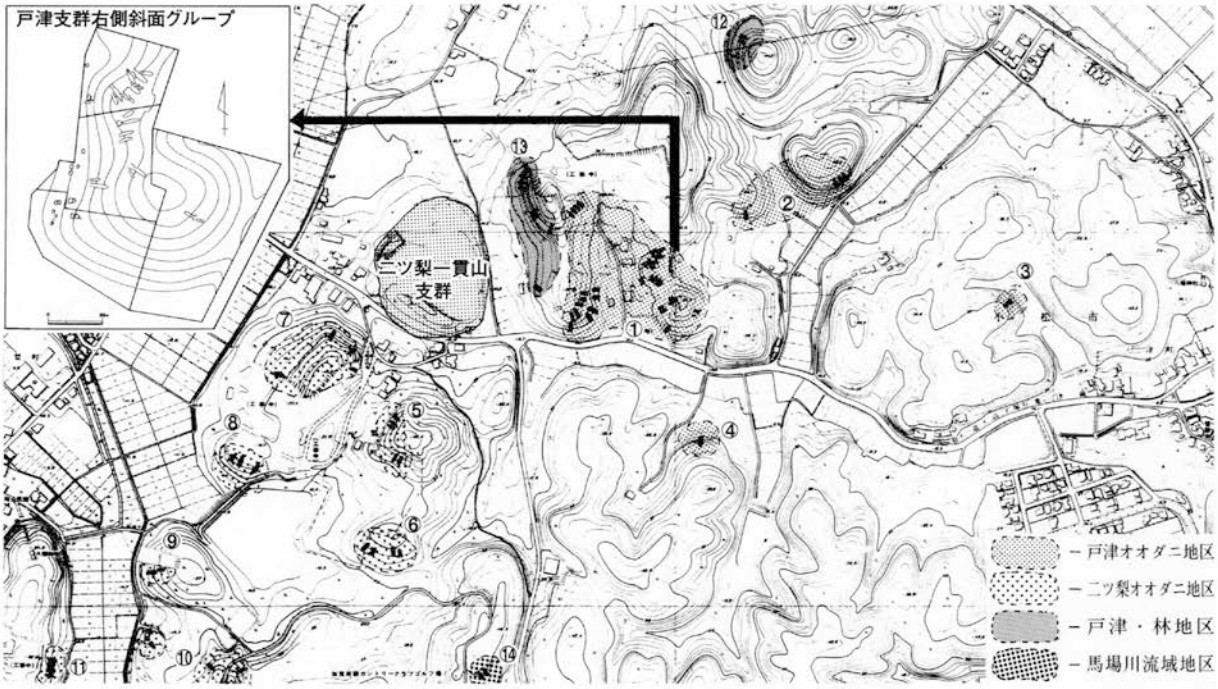
1．須恵器窯分布

戸津オオダニ地区の須恵器窯は、二ッ梨オオダニ地区や戸津・林地区と接する部分を除くと、8世紀初頭が最も古く、それを溯る須恵器窯は存在しない窯場と理解している。そのため、戸津オオダニに面しても、二ッ梨豆岡山支群は6世紀代に溯る窯があるため、二ッ梨オオダニ地区の範疇で考えたい。二ッ梨オオダニは南加賀窯跡群開窯の主谷で、開窯期は谷の入り口付近を中心に分布する。二ッ梨豆岡山支群を初めとして、二ッ梨東山支群や二ッ梨殿様池支群、二ッ梨峠山支群などが確認されており、6世紀中頃に戸津六字ヶ丘支群で短時期営まれる以外は、6世紀代須恵器窯は二ッ梨オオダニ入り口区域に集中する。戸津六字ヶ丘支群は戸津・林地区に位置付けられるが、経営状況から察するに、ここからさらに展開する窯場ではなく、二ッ梨オオダニ地区から平野部側斜面に短期限定で派生した支群であると理解する。

二ッ梨オオダニ地区の須恵器生産は6世紀末～7世紀初頭をもって途絶え、戸津・林地区に集約的に窯場移動する。戸津六字ヶ丘支群と林タカヤマ支群、林オオカミダニ支群の3支群で同時操業しており、7世紀後半になると、林支群が途絶え、戸津六字ヶ丘支群のみとなる。二ッ梨オオダニ地区で7世紀後葉の生産が確認されるところから見て、7世紀後半には、林支群は二ッ梨オオダニ地区にUターンしたものと理解する。二ッ梨オオダニ地区で見られる8世紀前葉の二ッ梨東山支群や二ッ梨ワキガマ支群はその流れで存在する窯場と理解されよう。これに対し、7世紀後半も引き続いて生産を行う戸津六字ヶ丘支群は、谷沿いに南下し、7世紀末～8世紀初頭には戸津オオダニからの支谷に位置する（六字ヶ丘7号窯）。そして、8世紀前葉には、戸津オオダニに面する二ッ梨豆岡山支群や二ッ梨豆岡向山支群、二ッ梨一貫山支群、戸津支群、戸津オオタニ支群と広範囲に分布する。8世紀初頭から前葉にかけての戸津オオダニ地区の須恵器窯分布は、基本的には単独基築窯であり、同一支群内であっても、ある程度の間隔を置いて須恵器窯が点在する。この分布特徴は、南加賀窯跡群全体で言えることであり、当期の須恵器窯経営の特徴として提示可能である。

二ッ梨一貫山支群で8世紀中頃（Ⅳ1期）と思われる須恵器窯灰原が1カ所確認される以外は、戸津オオダニ

地区では分布がなく、後葉を含めても、二ッ梨一貫山支群と戸津支群の２支群を数えるだけである。ただし、二ッ梨一貫山支群と戸津支群で各支群５基以上の須恵器窯分布があり、いずれも並列築窯され、支群内で連続的な生産が行われる。前半代に広範囲に分布していた須恵器窯が戸津・二ッ梨一貫山支群に集約されたものと言えよう。この状況は９世紀前葉～中葉も同様で、新たに戸津シンブザワ支群と戸津ショウガタニ支群が加わる。８世紀後葉から９世紀中頃までの須恵器生産は窯跡群全体では停滞ないし衰退の様相を呈するが、戸津オオダニ地区への集約化が見られる時期であり、当地区においては衰退の様相を呈さない。特に、９世紀代においては、矢田野・箱宮地区が生産停止し、二ッ梨オオダニ地区もオオダニ入り口付近に移動しており、戸津オオダニ地区を軸とした生産が行われる。９世紀後葉から10世紀前半代、戸津オオダニを中心とする生産に変動はなく、戸津支群を中心に二ッ梨一貫山支群、二ッ梨豆岡向山支群、二ッ梨グミノキバラ支群などオオダニ入り口に集中し、さらに、馬場川流域に新たに支群経営されるなど、南加賀窯跡群再興に伴う活発な動きも見られる。戸津支群では当期の須恵器窯だけで28基確認されており、並列築窯をはじめとして、斜面下方、斜面上方というように、窯の隙間をぬって上下に重なるように、築窯される。このうち２基は瓦陶兼業窯であり、オオダニ入り口を中心として軒先瓦生産が確認される。



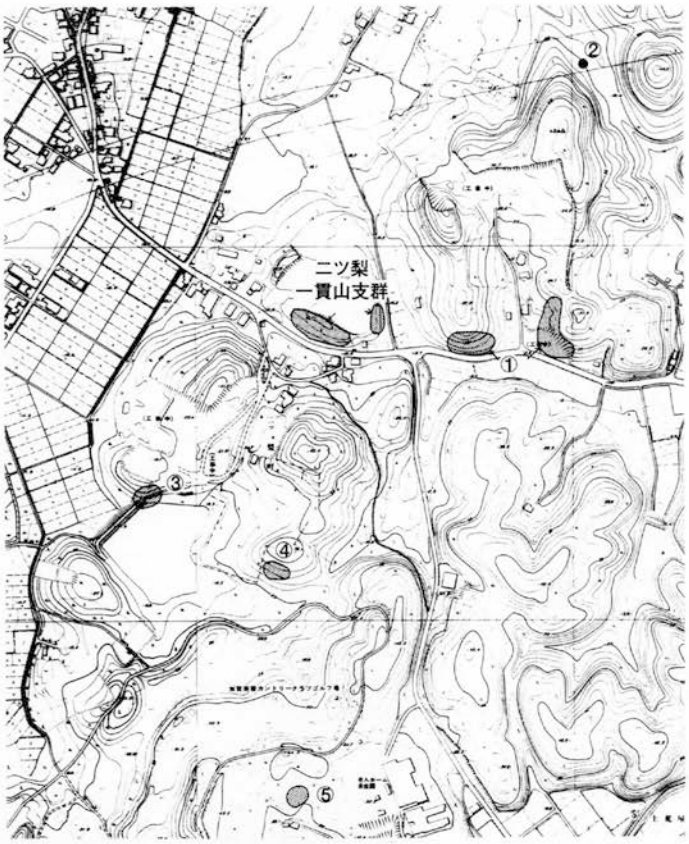
①戸津支群－（谷左側斜面）８世紀前葉１基、８世紀後半５～７基、９世紀代前葉～中頃５～７基、10世紀前半１基。（谷右側斜面）８世紀前葉３基、９世紀前半～中頃３基、９世紀後葉４基、10世紀前半15基。（東隣谷）10世紀前半１基。（谷奥斜面）９世紀後葉４基。　②戸津シンブザワ支群－谷の北東側に９世紀前半２～３基、南西側に時期不詳１基。
③戸津ショウガタニ支群－９世紀前半代の灰原１箇所存在。　④戸津オオタニ支群－８世紀前葉の灰原１カ所存在。
⑤二ッ梨豆岡向山支群－戸津オオダニ側枝谷に８世紀前葉１基と10世紀前半２基、二ッ梨オオダニ側に９世紀後半２基。
⑥二ッ梨グミノキバラ支群－８世紀後半２カ所、９世紀前葉１カ所、９世紀後葉１カ所の計４カ所の灰原が存在。
⑦二ッ梨豆岡山支群－戸津オオダニ側で６世紀前半、同後半、８世紀前葉が各１基、平野部側で時期不詳が１基存在。
⑧二ッ梨殿様池支群－６世紀前葉～６世紀後葉の３基。　⑨二ッ梨マルヤマ支群－７世紀後葉と時期不詳灰原各１カ所。
⑩二ッ梨峠山支群－６世紀後葉２基、６世紀？１基、８世紀１基、８世紀末～９世紀初頭２基、時期不詳１基。
⑪二ッ梨東山支群－６世紀前半１基、６世紀後半３基、８世紀前葉１基。　⑫林オオカミダニ支群－７世紀前半２基。
⑬戸津六字ヶ丘支群－６世紀前半１～２基、７世紀前半３基（北端に集中）、７世紀後半２基、８世紀初頭１基（南端）。
⑭上荒屋トリダニ支群－トリダニの谷奥斜面に８世紀中頃２基存在。隣接地に９世紀代１カ所あり。

第９図　戸津オオダニ地区周辺の須恵器窯支群分布（1/10,000）

2．土師器焼成坑群分布

南加賀窯跡群で土師器焼成坑が出現するのは8世紀初頭と考えているが、8世紀前葉までは須恵器窯に隣接して単独で築かれる場合が多い。これまで確認されている当期の土師器焼成坑は動橋川流域地区の那谷桃の木山支群と矢田野・箱宮地区の矢田野向山支群で、南加賀窯跡群の南側区域に集中する。

オオダニ地区では、二ッ梨東山支群、戸津支群などで、8世紀初頭～前葉に位置付けられる須恵器窯が調査されているにかかわらず、このような事例は未確認であり、オオダニ地区での土師器焼成坑導入は、8世紀後半に下る可能性をもつ。二ッ梨一貫山支群の遺構分布で述べたように、当支群には8世紀後半～9世紀前葉と9世紀後葉～10世紀前半の土師器焼成坑群が分布しており、集約経営される。現段階ではオオダニ地区の土師器焼成坑で、二ッ梨一貫山支群を溯るものはなく、オオダニ地区では土師器焼成坑出現当初から群をなして集約経営された可能性が高いだろう。オオダニ地区の中でも須恵器窯の並列築窯が確認される戸津支群と二ッ梨一貫山支群でのみ土師器焼成坑の密集経営が確認されているだけで、二ッ梨オオダニ入口付近に経営される二ッ梨グミノキバラ支群と二ッ梨殿様池支群、及び馬場川流域地区の上荒屋サンマイダニ支群では分布域も狭く、規模の小さなものであった可能性が高い。斜面下方に緩斜面を伴う場合の須恵器窯経営には土師器焼成坑経営が小規模でも伴う場合が多かったものと予想する。戸津支群と二ッ梨一貫山支群の土師器焼成坑の密集の高さは、須恵器窯の密集度合いと対応関係にあり、南加賀窯跡群の生産拠点であったと理解されよう。



①戸津支群－(左斜面区域) 9世紀中葉～10世紀前半数基、(右斜面区域) 9世紀後葉～10世紀中頃18基。
②林遺跡－10世紀後半1基。
③二ッ梨殿様池支群－9世紀後葉～10世紀前半数基。
④二ッ梨グミノキバラ支群－9世紀前葉4基。
⑤上荒屋サンマイダニ支群－9世紀後葉～10世紀前半数基。

第10図　戸津オオダニ地区周辺の土師器焼成坑群分布（1/10,000）

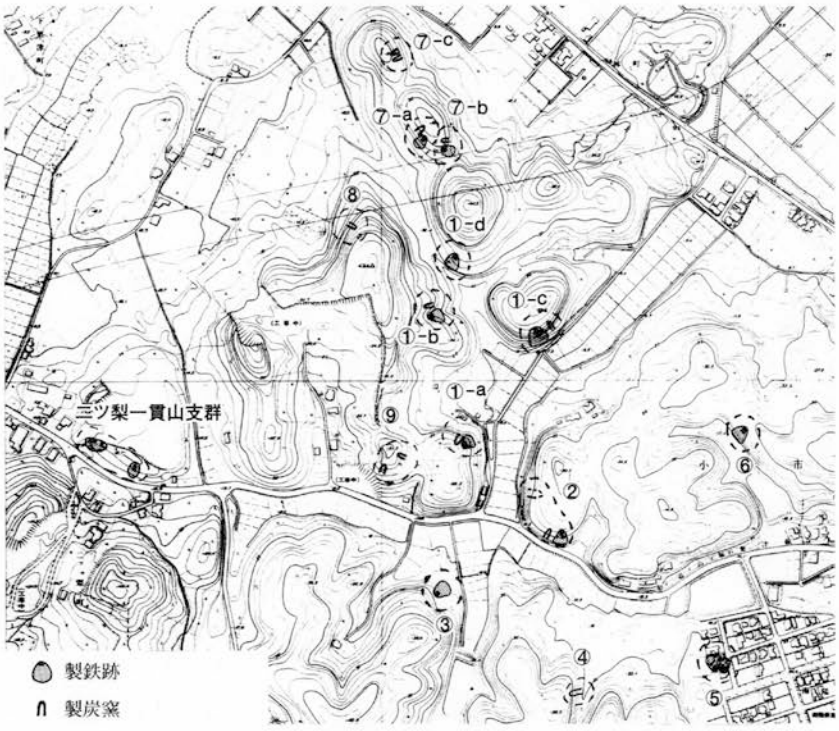
第3項　戸津地区の製鉄関連遺構分布

製鉄遺跡と製陶遺跡とは分布域が重ならず、大半の区域で棲み分けがなされているのに対し、戸津地区だけはかなりの区域で製鉄と製陶が重複している。当区域に存在するほとんどの製陶遺跡で製鉄関連遺構の重複が見られ、製陶遺構の密集する二ッ梨一貫山支群や戸津支群、戸津六字ヶ丘支群でも一部確認される。

製鉄遺跡分布で区分する戸津地区は、製陶遺跡分布で言えば、戸津オオダニ地区と戸津・林地区に分けられる訳であるが、戸津地区として一括したのは、製鉄遺構分布が戸津・林地区から戸津オオダニ地区へと連続する分布を示すためである。分布の中心は林オオカミダニと戸津シンブザワとを結ぶ南北に走る支谷とそれから東へと展開する戸津オオダニとにあり、その主谷とそれから派生する支谷に沿って、製鉄遺構が密に分布する。唯一今回報告の二ッ梨一貫山支群のみ、その主谷を軸とする分布から外れており、戸津オオダニ入口に位置する。二ッ梨一貫山支群の製鉄遺構は8世紀中頃以前に溯る古い時期のものであり、それが離れて分布する理由かもしれない。8世紀中頃ないしは前葉に溯る製鉄遺構は、林支群（a）で1基確認されるが、その分布位置も平野部に面するオオカミダニ入口に立地しており、平野部に面する主谷入口付近から奥へと展開していた可能性をもつ。た

だし、製陶遺跡のような同一箇所での継続的ないしは連続した操業を行うとは考えられず、分布エリア内で短期間のうちに移動していたものと予想する。同型炉形態どうしが隣接して分布しないのに対し、箱型炉と竪型炉とが比較的隣接して存在することから考えて、樹木再生サイクルにあわせ、百年単位で回帰する生産システムが採られていたものと予想する。

製陶と製鉄の優先順序は、製鉄でも先行するものとの対比という限定ではあるが、林タカヤマ支群の製陶7世紀前半に対する製鉄8世紀前半、二ッ梨一貫山支群の製陶8世紀前葉に対する製鉄8世紀中葉、戸津オオダニ支群の製陶8世紀前葉に対する製鉄8世紀後半？など、製陶遺構が先行するケースが多い。しかし、製鉄が大規模に行われる谷では製陶は小規模なものに止まるといった特徴をもつ。製陶と製鉄の薪材使用量は、製鉄が回帰サイクルを採ることからもわかるように、製陶の数倍の量を一気に消費するものであり、製鉄の拠点的に入った谷では森林が一時丸裸となったのであろう。その意味では戸津地区においても、どちらに力点を置くかによって、製陶を主とする戸津オオダニ入口付近から戸津支群付近までと製鉄を主とする林オオカミダニからシンブザワ、オオダニ奥へと進む区域とで棲み分けがなされていたこととなろう。製鉄と製陶は、同じ森林資源を利用する産業であればこそ、共存は無理があり、棲み分けが基本であったと理解されよう。



①戸津シンブザワ支群ａ－製鉄(竪炉)１、製炭１。ｂ－製鉄(竪炉)１、製炭１。
ｃ－製鉄１、製炭１。ｄ－製鉄(箱炉)１。
②戸津ワクダニ支群－製鉄(箱炉)１、製炭２。
③戸津オオダニ支群－製鉄(箱炉？)１。④戸津アナヤマ支群－製炭１～２。
⑤南陽支群－製鉄２。⑥戸津ショウブダニ支群－製鉄１。
⑦林タカヤマ支群ａ－製鉄(箱炉)１、製炭１、ｂ－製鉄(竪炉･鋳造)１、鋳型２、製炭１。
ｃ－製炭２。
⑧戸津六字ヶ丘支群－製炭１。⑨戸津支群－製炭２。

第11図　戸津地区の製鉄跡・製炭窯分布（1/10,000）

参考引用文献

石川県埋蔵文化財保存協会　1993　『小松市林遺跡』

石川考古学研究会　1993　『石川県内生産遺跡分布調査報告書』

小松市教育委員会　1971　『二ッ梨一貫山須恵器窯址発掘調査概報』

小松市教育委員会　1979　『南加賀古窯跡群詳細分布調査事業報告書』

小松市教育委員会　1985　『戸津－第４・５次発掘調査概要報告書－』

小松市教育委員会　1989　『市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』

小松市教育委員会　1991　『戸津古窯跡群Ⅰ』

小松市教育委員会　1993　『二ッ梨豆岡向山古窯跡』

近間　強・小松高等学校地歴部　1988　「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」『石川考古学研究会々誌』第31号
石川考古学研究会

花塚信雄・木立雅朗　1986　「小松市・二ッ梨窯跡採集の須恵器について」『石川考古学研究会々誌』第29号
石川考古学研究会

第３章　１次調査区（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区）

第１節　Ａ・Ｂ・Ｃ区の調査

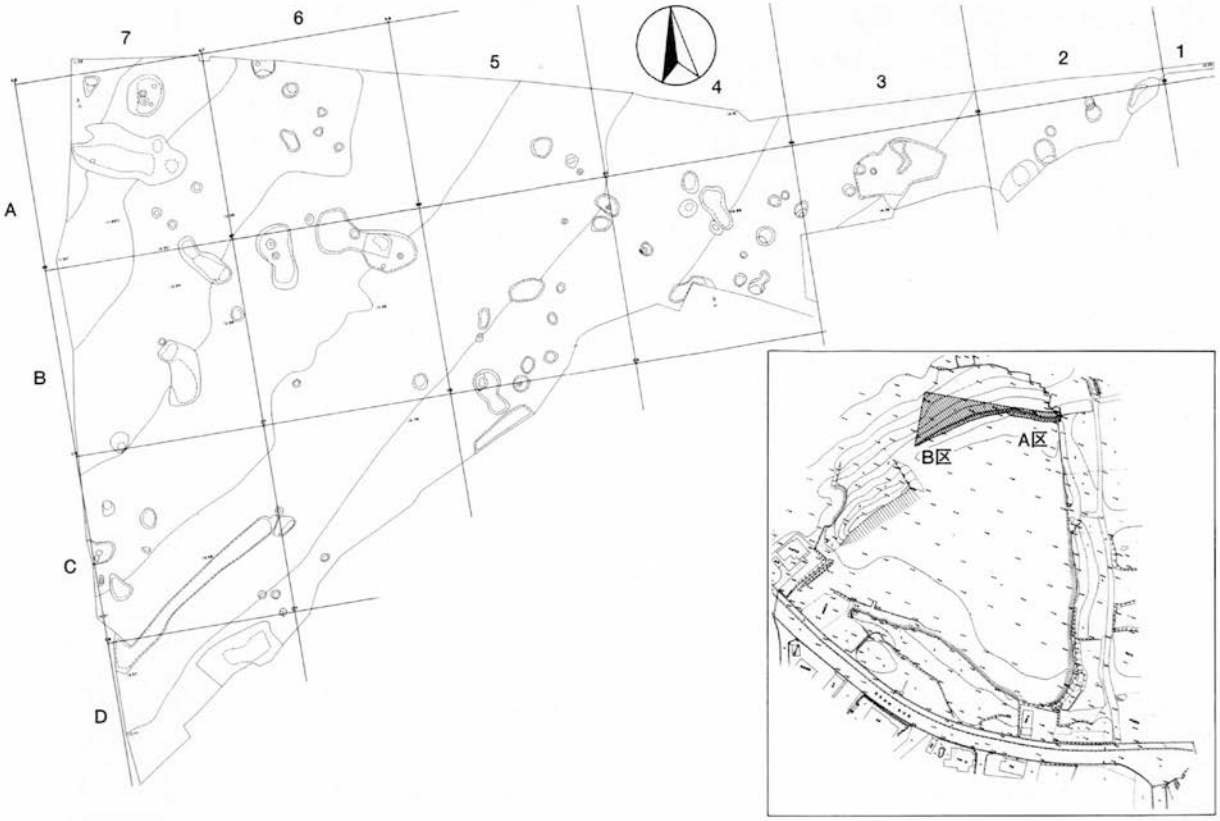
Ａ・Ｂ・Ｃ区は、通称一貫山の北側斜面に当たる区域で、丘陵斜面縁辺一部のみの調査である。博物館本館建設に伴う区域と看板設置区域とがあり、本館建設区域のうち、東側の削平断面区域をＡ区、西側の緩斜面区域をＢ区、看板設置区域をＣ区とした。

Ａ・Ｂ区は調査面積約650㎡を数える。

Ａ区は南側からの土砂採取に伴う掘削によって、丘陵断面が露出している箇所で、削平断面精査による確認調査を行った。その結果、須恵器窯灰原などの製陶関連遺構は確認されず、暗褐色土内に少量の須恵器が混入していただけであった。遺物量は極少量であり、位置から考えて、Ｂ区東側出土須恵器と同様のものと判断する。

Ｂ区は南東側が土砂採取に伴う掘削によって平らに削り取られており、北西側へと緩く傾斜してゆく三角形状の区域である。当調査区域を５ｍ×５ｍのグリッド設定し、トレンチを入れながら、地山まで掘り下げて調査したが、この区域でも須恵器窯に伴う灰原等は確認できなかった。撹乱が著しく、図示したピットや溝は大半が撹乱に伴うものであるが、一部須恵器を伴う古代のピットも検出された。しかし、工房等の建物やロクロ関連のピットは確認されず、当区域に製陶関連遺構が存在する可能性は極めて低いと判断される。出土遺物は須恵器と土師器で、須恵器が９割以上を占める。遺物量はＢ区全体で、遺物箱で３箱分あり、旧表層と思われる黒褐色土中に主に含まれている。ピット内にも須恵器が混在するが、主に丘陵斜面に存在する製陶関連遺構からの流出土と考えられる。調査区東側に位置するＡ・Ｂ－２～５Grと調査区西側に位置するＡ～Ｄ－６・７Grでの出土が目立ち、図示したように両箇所で須恵器の時期が異なる。

東側の須恵器は、坏Ｂの蓋と身が目立ち、他の器種は目立たない。坏Ｂ蓋は、偏平つまみをもつ比較的山傘状



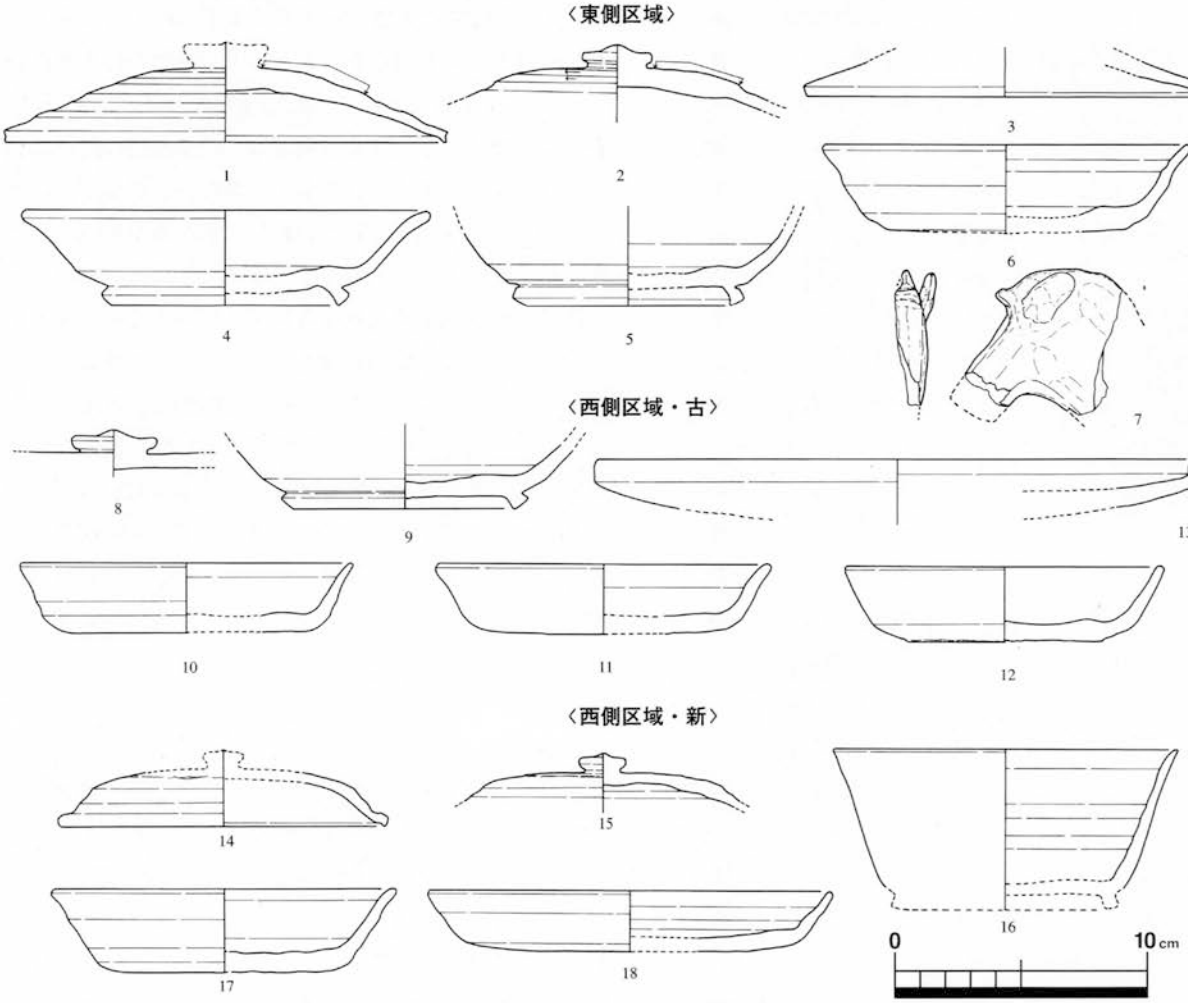
第12図　二ッ梨一貫山窯跡Ｂ地区全体図（1/200）

の器形を呈するもので、口縁端部の折り返しは短いがシャープに作り出す。身高台は踏ん張って高い形態のものが目立ち、坏Aはやや椀形を呈す。田嶋編年Ⅱ3期に位置付け可能なものであり、その中でも古手の様相をもつ。位置的に東側隣接の二ッ梨一貫山5号窯に伴う須恵器である可能性が高い。なお、これらの須恵器に混じって陶馬の頭部破片が1点出土している。鹿島町芹川土馬遺跡や野々市町御経塚遺跡のものに類似した大型裸馬形態のもので、時期的にも符合する。

西側の須恵器は、2時期存在する。出土地が同じであり、須恵器は混在するが、連続する時期でないため、識別可能である。古手の一群は、坏B蓋・身、坏A、高坏、長頸瓶、横瓶が確認される。坏B蓋は、偏平つまみで、坏B身は踏ん張る形態。坏Aは偏平で、12㎝～13㎝台前半の小ぶりのものが主体を占める。高盤型の高坏の存在など、田嶋編年Ⅲ～Ⅳ1の過渡期的様相をもち、位置的にも二ッ梨一貫山4号窯に伴う可能性は高いと判断する。新しい一群では、坏B蓋・身、坏A、盤A、ⅢB、双耳瓶が確認される。坏B蓋は天井部丸味をもち、口縁部外屈、端部丸味もつ薄手のもので、小型つまみが付く。坏B身は体部外傾器形の薄手のもの。坏Aは厚手だが、体部外傾器形を呈す。盤Aは体部外傾器形で、内面にロクロヒダ状凸凹をもつ。また、ⅢBの存在など、この一群は、田嶋編年のⅤ2期～Ⅵ1期と判断する。D地区で確認された二ッ梨一貫山4号窯灰原の上層に別の新しい時期の灰原が存在しており、それが同様の時期に位置付けられることを考えれば、当灰原に伴うものと判断する。

以上、B地区出土須恵器は、当地区斜面上方に新規須恵器窯が存在した可能性はないとは言えないが、いずれも東側と南西側に隣接する須恵器窯灰原に伴う可能性が高く、隣接地からの混在品と判断するのが妥当だろう。

なお、C区については、B地区のさらに北方、丘陵斜面縁辺にあたる箇所で、調査面積約120㎡の狭い区域である。当地は以前に整地されており、区域全体を重機によって表層除去したところ、深い撹乱が入っていることが判明。現代の瓦粘土採取のための竪坑が掘られた箇所のようであり、重機掘削の確認調査で調査を完了した。



第13図　二ッ梨一貫山窯跡B区出土須恵器（1/3）

第２節　D区の調査

第１項　検出した遺構

D区は一貫山の北西側斜面に位置し、月津台地及び平野部側に面している。そのうち建物建設によって削平される部分、770㎡を対象としている。当区域は、以前に丘陵中心部を削平された時の崖面に黒色灰層が露出しており、既に須恵器窯灰原の存在が確認されていた箇所である（1984年に木立雅朗氏らが確認した灰原。木立・花塚1986）。 調査区の南北両端に１カ所づつ灰層が存在しており、木立氏の調査では北側をａ窯、南側をｂ窯としたが、近間強氏の小松丘陵窯跡群分布調査報告で、ｂ窯を二ッ梨一貫山３号窯、ａ窯を二ッ梨一貫山４号窯と改称している（近間1988）。

第２節第１項でも述べたように、一貫山丘陵の頂上部が既に削平され、須恵器窯の本体は消滅していることが分かっていたため、D地区の調査は、灰原中心の調査となった。灰原は存在する箇所がわかっていたため、灰原の層位と広がり、そしてその他の関連遺構の検出に重点を置いた。調査方法は、A・B地区からの通しで任意に５ｍグリッドを設置し、グリッドに沿って灰層及び遺物包含層を掘り下げる形をとった。最終的に地山まで掘り下げ、その面で遺構の確認を行ったが、３号窯の前庭部と思われる箇所が確認された以外は、小ピットが存在するだけで、遺構と思しきものは検出されなかった。以下に周知されている二ッ梨一貫山３号窯灰原と二ッ梨一貫山４号窯灰原について述べる。

１．二ッ梨一貫山３号窯灰原

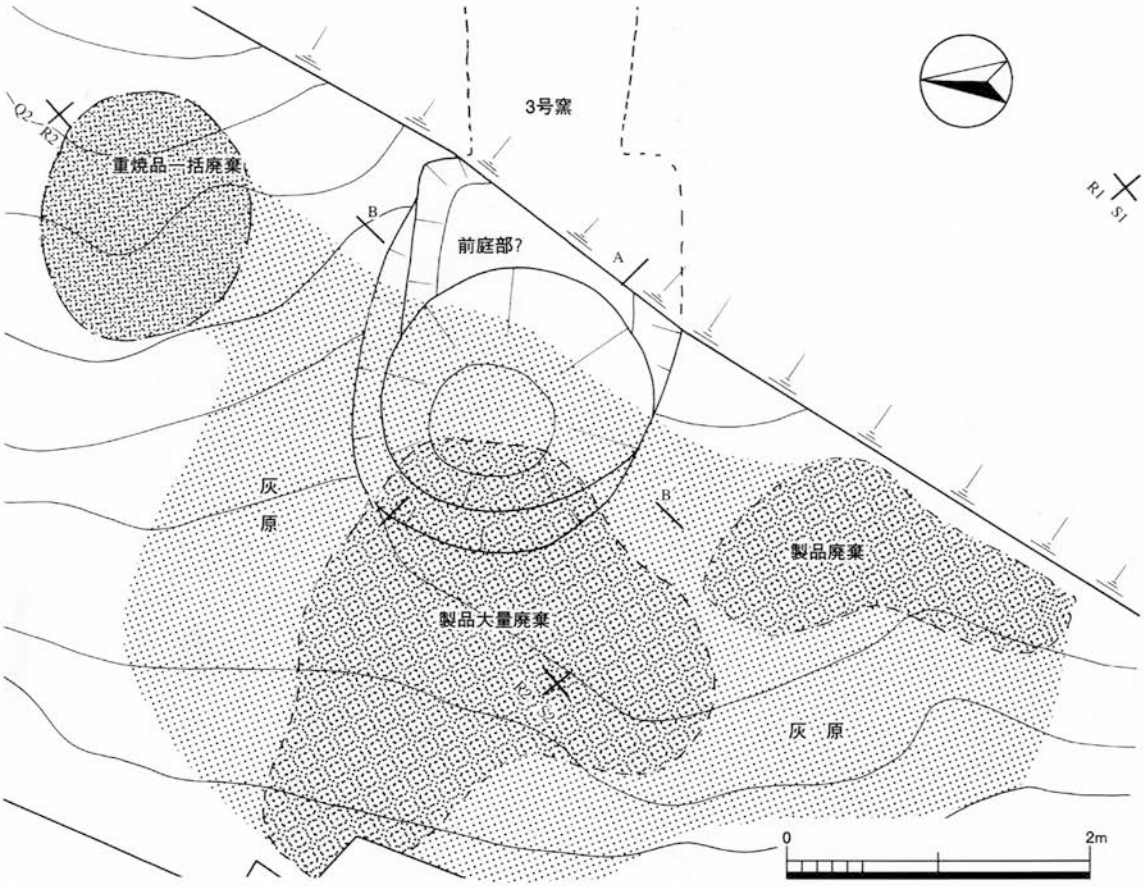
灰原は調査区の南西側、P・Q・R・S・TGrに広がって確認されており、特にR・SGrで黒色灰層や窯壁塊が分布する。３号窯跡の前庭部はR1Grで確認されており、その周辺に灰層・廃棄品が捨てられたと言えよう。第16図には須恵器窯の予想される位置と前庭部土坑、製品廃棄場を示した図があるが、これは遺物の出土地点から復元した予想図であり、現地で十分に検討したものではないことを断っておく。前庭部の土坑は径180㎝程度の円形で浅いすり鉢状を呈す。黒色灰層と黄褐色土が混在する土層で、焼土塊も混在する。須恵器窯の前庭部土坑内に充填される土層は、通常、炭化材や窯壁塊を混在する黒色灰層であることが多く、黄褐色土が多く混在する土層は珍しいが、位置的には前庭部と考えて妥当と考えている。灰原(須恵器包含層)は、前庭部を基点として下方へ広がるが、前庭部下方が最も厚く、100㎝以上を測る。ここでは７～８層に分層しており、層の重複と見ることもできるが、廃棄単位をそのまま示すものとは言い難く、窯壁塊・焼土塊を混在する黄褐色土を基準として、大まかに上層と下層に分けるのが妥当と言える。今回調査を行った区域以外にも、３号窯灰原は伸びており、灰原分布域の半分にも満たないと思われるため、当灰原出土の須恵器からさらに上乗せして廃棄量を考える必要はある。今回出土した須恵器は既に遺物箱で400箱以上にまで上っており、１基の須恵器窯としては膨大な量と言える。さらに、出土する須恵器の時期を見ると、少なくとも２時期にわたっており、かなりの操業回数・期間を擁した窯であると予想される。それは須恵器の発色や胎土の種類の多さからも伺われることで、長期間にわたって連続的に操業を続けた須恵器窯であると理解する。複数基による操業も可能性としてはあるが、灰原分布の状況や灰原層位の中に窯体構築に伴う掘削土砂の廃棄土層が確認されないことから考えて、単独基の可能性が高いと言えよう。

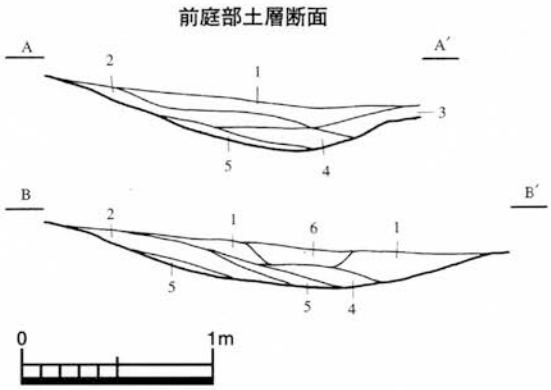
２．二ッ梨一貫山４号窯灰原

灰原は調査区の東側、J・K・LGrで確認されている。J1Grを基点に斜面下方に向かって広く分布しており、須恵器窯がJ1Grの東側延長線上に存在することが予想される。灰原の厚さはJ1Grで90㎝を測り、斜面下方へと徐々に薄くなって末端に至る。３号窯のような前庭部等の施設は確認できないが、斜面上方では焼土塊を混在する赤褐色土層が下層で確認されており、窯本体との距離はさほどなかったものと予想される。灰原は焼土廃棄層である30層を境に上層と下層に分けているが、下層は斜面上方の窯体に近い部分に限られ、広い範囲で分布する灰層は上層のものが伸びている。製品から下層と上層の区別は難しいが、焼土廃棄層が還元不良の焼成失敗時の

段階を示すものであるとすれば（生焼製品を伴う）、下層についてのみは操業初期の廃棄層を示すと考えられよう。出土須恵器は遺物箱で50箱程度、須恵器の時期も比較的まとまりをもち、3号窯に比べる操業期間・回数が少なかったと思われる。逆に、3号窯の操業が異常であったことを示すものであり、本来は4号窯灰原の様相が通常1基の須恵器窯が排出する灰原の状況であったと言える。

4号窯灰原には、上層と下層の灰層があることは前述したとおりだが、上層の上に地山流出層と思われる褐色土がのり、さらにそのうえに別の灰層が存在している。この灰層を上層灰と呼称している。上層灰は、黄褐色土地山塊を混在させる黒褐色土で、4号窯に伴うと思われる須恵器とそれより新しい時期（田嶋編年Ⅴ2～Ⅵ2期）の須恵器が混在する。新しい時期の須恵器は3号窯と重なる時期もあるため、この土層は3・4号窯灰層の削平・撹乱に伴う2次堆積土層と考えることも可能であるが、確実に3号窯よりも新しい時期の須恵器が混在するなど、別の窯の存在も可能性として考えておく必要がある。



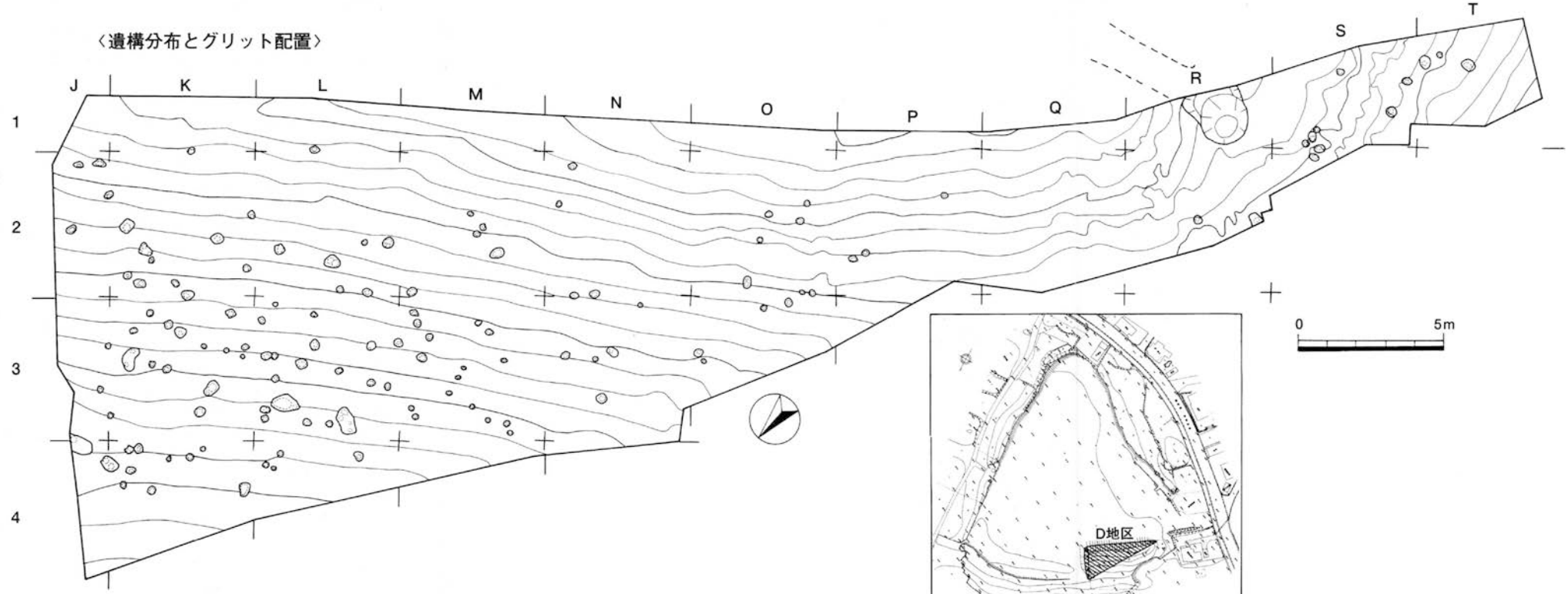


前庭部土層註

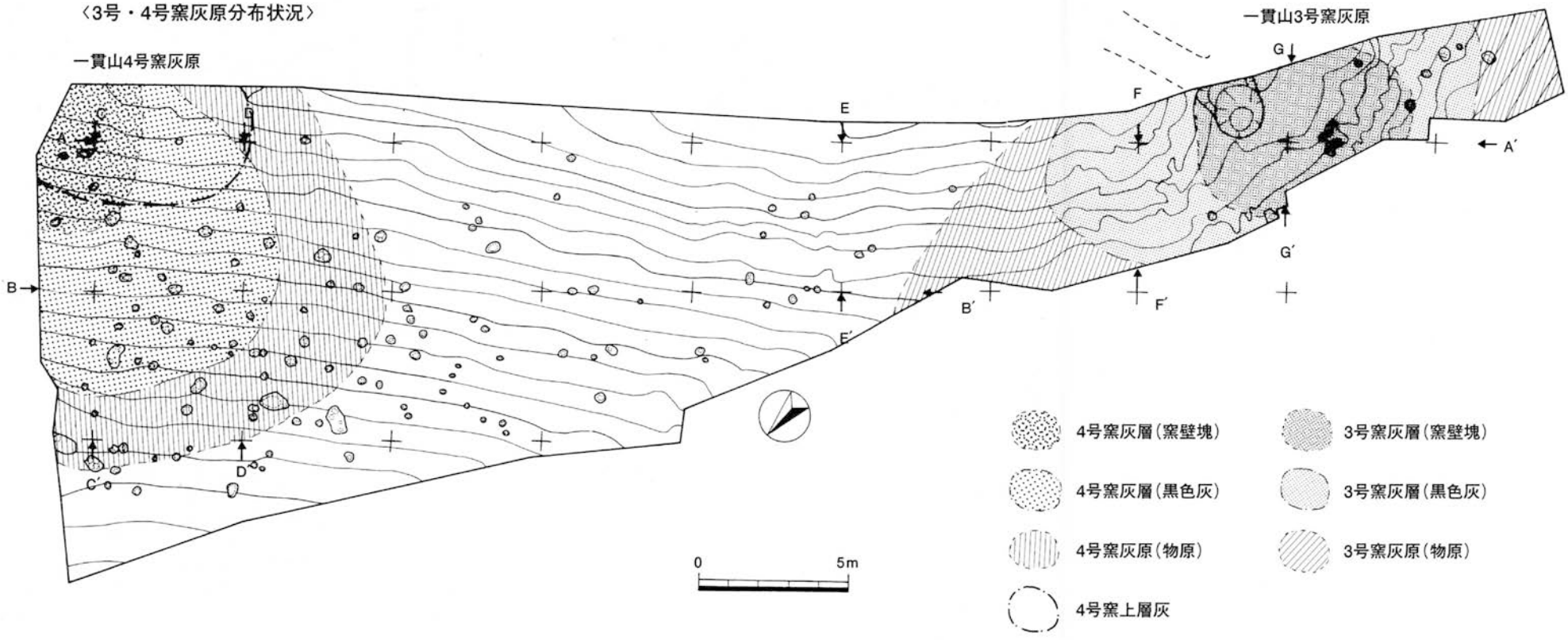
1層：褐色砂質土(10YR4/4)
2層：黄褐色土　(10YR5/6)
3層：黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
4層：黒褐色土(10YR2/3)
5層：明赤褐色砂質土(2.5Y5/8)　焼土小塊含有
6層：黒褐色土(2.5Y3/1)　焼土小塊含有

第14図　D地区3号窯前庭部と製品廃棄場（上:1/50,下:1/40）

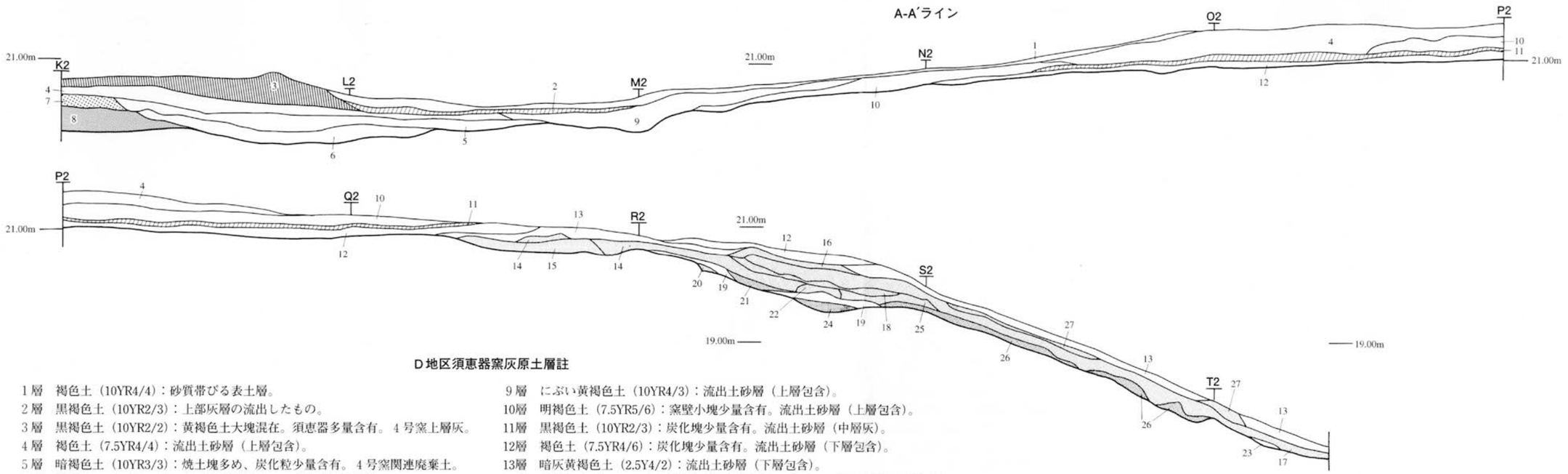
〈遺構分布とグリット配置〉



〈3号・4号窯灰原分布状況〉

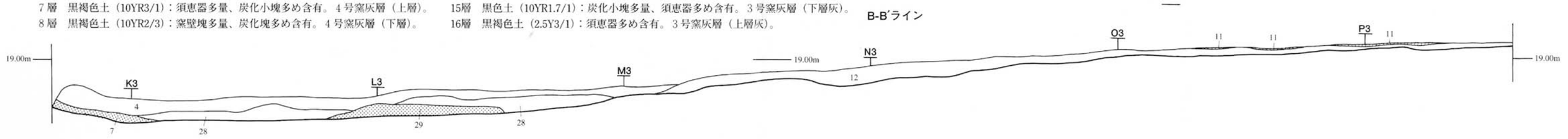


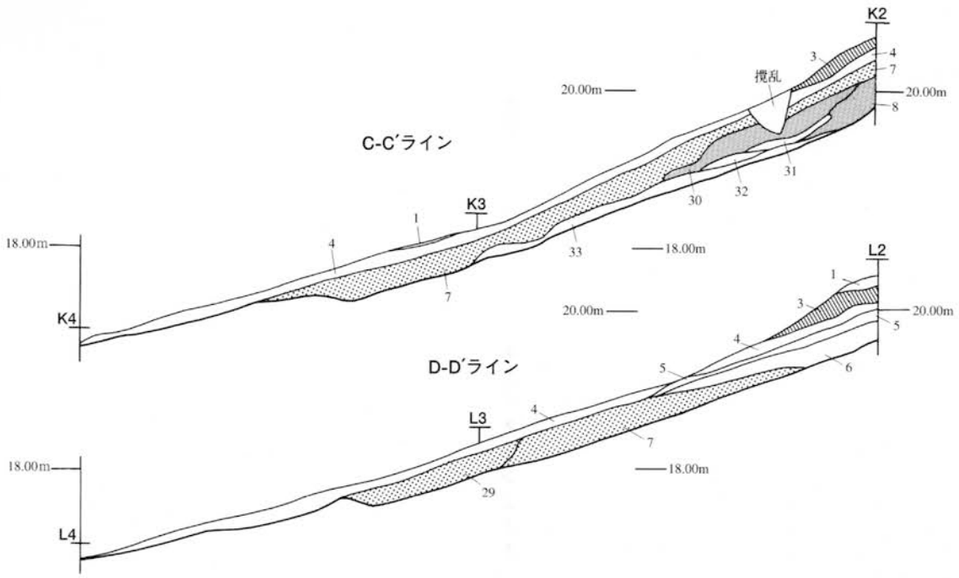
第15図　二ッ梨一貫山窯跡D地区全体図（1/200）

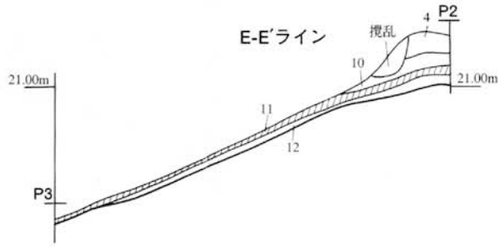


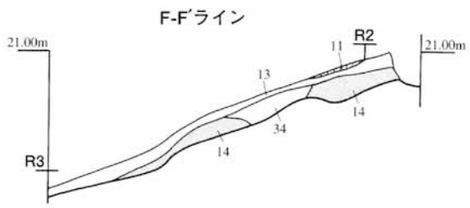
D地区須恵器窯灰原土層註

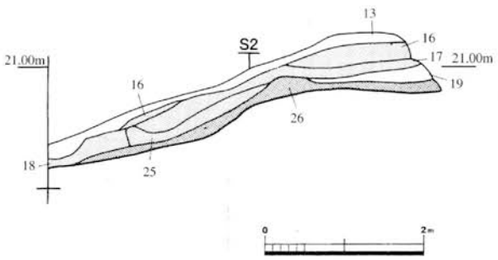
1層　褐色土（10YR4/4）：砂質帯びる表土層。
2層　黒褐色土（10YR2/3）：上部灰層の流出したもの。
3層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土大塊混在。須恵器多量含有。4号窯上層灰。
4層　褐色土（7.5YR4/4）：流出土砂層（上層包含）。
5層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土塊多め、炭化粒少量含有。4号窯関連廃棄土。
6層　明褐色土（7.5YR5/6）：焼土塊多量含有。4号窯関連廃棄土。
7層　黒褐色土（10YR3/1）：須恵器多量、炭化小塊多め含有。4号窯灰層（上層）。
8層　黒褐色土（10YR2/3）：窯壁塊多量、炭化塊多め含有。4号窯灰層（下層）。
9層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：流出土砂層（上層包含）。
10層　明褐色土（7.5YR5/6）：窯壁小塊少量含有。流出土砂層（上層包含）。
11層　黒褐色土（10YR2/3）：炭化塊少量含有。流出土砂層（中層灰）。
12層　褐色土（7.5YR4/6）：炭化塊少量含有。流出土砂層（下層包含）。
13層　暗灰黄褐色土（2.5Y4/2）：流出土砂層（下層包含）。
14層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化小塊・須恵器多め含有。3号窯灰層（下層灰）。
15層　黒色土（10YR1.7/1）：炭化小塊多量、須恵器多め含有。3号窯灰層（下層灰）。
16層　黒褐色土（2.5Y3/1）：須恵器多め含有。3号窯灰層（上層灰）。











17層　黒色土（2.5Y2/1）：窯壁塊極多量混在。3号窯灰層（上層灰～末端灰）。
18層　黒褐色土（2.5YR3/2）：須恵器含有。3号窯灰層（上層灰）。
19層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：窯壁塊多量混在。3号窯排出下層土砂。
20層　黒色土（10YR2/1）：炭化塊多め含有。
21層　にぶい黒色土（5Y2/1）：窯壁塊極多量含有。3号窯灰層（下層）。
22層　黒褐色土（2.5Y3/2）：窯壁塊多量含有。3号窯灰層（下層）。
23層　黄褐色土（10YR4/2）：炭化塊多め含有。地山漸移層。
24層　黄褐色土（10YR5/6）：焼土塊多量含有。3号窯前庭部土坑下層土。
25層　黒色土（2.5Y2/1）：窯壁塊多め、須恵器多め含有。3号窯灰層（下層）。
26層　黒褐色土（10YR2/2）：窯壁塊多め、炭化塊少量含有。3号窯灰層（下層）。
27層　黒褐色土（10YR2/2）：窯壁塊少量、須恵器含有。3号窯灰層（上層）。
28層　暗褐色土（7.5YR3/3）：流出土砂層（上層包含）。
29層　黒褐色土（7.5YR3/2）：須恵器含有。4号窯灰層（末端灰）。
30層　暗赤褐色土（5YR3/6）：焼土小塊及び窯壁土塊多量含有。4号窯灰層（下層）。
31層　にぶい黄色土（2.5Y6/4）：焼土塊少量含有。8·30層（灰層）の間層。
32層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）：炭化塊、窯壁塊多め含有。8·30層（灰層）の間層。
33層　褐色土（7.5YR4/3）：炭化粒少量含有。地山漸移層。
34層　暗褐色土（10YR3/3）：砂質帯びる。流出土砂層（下層包含）。

第16図　二ッ梨一貫山窯跡D地区土層断面図（1/80）

以上のように、２基の須恵器窯灰原が調査区の両端に存在しているため、灰原の帰属は比較的容易であるが、黒褐色灰層の分布しないM・N・OGrからも須恵器は少量出土している。斜面上方からの地山流出土に混在する形で出土しており、灰原と言えるものではない。大半は４号窯と３号窯に帰属されるものであるが、一部異なる時期のものも含まれている。出土量は遺物箱で５箱程度と少なく、灰原と認定した土層とは明確に須恵器包含量が異なる。

第２項　出土遺物

D区から出土した遺物は、少量の土師器（遺物箱で４箱）を除くと、全て須恵器（窯道具や窯部材を含む）で占められる。須恵器窯の焼成に伴う廃棄品であり、前項で述べたとおり、二ッ梨一貫山３号窯灰原と二ッ梨一貫山４号窯灰原に伴うものである。これ以外にも、前述した４号窯灰原上層灰に含まれる新しい時期の須恵器と両端の窯に挟まれた中間区で出土した須恵器も存在するが、出土量が少なく、この報告からは除外する。

１．二ッ梨一貫山３号窯灰原出土遺物

出土遺物は、３号窯焼成に伴う廃棄須恵器がそのほとんどを占めるが、貯蔵具専用の焼台として使われた窯道具や窯の部材として使われた須恵器片・粘土塊も少なからず出土している。窯の部材や道具は、焼成に伴うものではあるが、生産品を前提とする廃棄須恵器とは性質を異にするものであるため、ここでは分けて提示する。また、土師器の中で還元焔焼成されたものがあるが、これについては、須恵器窯内焼成品であるため、須恵器の中で一括して報告する。以下に、須恵器、窯道具、土師器の順で述べる。

（１）須恵器

ａ．器種構成

須恵器器種名は、凡例に示した器種分類基準に基づく。器種は第２表に示したとおりで、食膳具では底部ヘラ切りの坏・盤等坏型器種と底部糸切りの埦・Ⅲ等瓷器系器種が併存する。貯蔵具では古い形態を止める瓶Ａと新型瓶Ｂが併存、鉢Ｂや瓶Ｄの台頭も当窯資料の特徴と言える。また、南加賀窯跡群では主要器種として生産が行われていない壷Ｅが定量生産されたり、壷Ａの胴部に上下２段にわたって四耳が付けられる（四耳壷）など特殊な様相をもつ。そしてさらに、小型製品に小型平瓶の把手と思われる破片や双耳坏の把手と思われる破片、漏斗状器形を呈する特殊器種などがあり、唐草状の彫刻文様をもつ土製版も１点出土している。

須恵器器種の構成は、以下に示したように、食膳具が97%の高率を占め、他の器種を圧倒している。食膳具では坏Ａが５割以上を占め、盤Ａの３割と合わせると８割以上。無蓋坏型食膳具の全盛期と言える。坏Ｂ・坏Ｅの有蓋食膳具は15%と少なく、盤Ｂはかろうじて残存する程度である。また、埦・Ⅲの瓷器系器種が出現しているが、埦類は率低く、ⅢＢがその大多数を占める。ⅢＢはその出現当初から定量生産された様子が伺われる。小型貯蔵具では壷系と瓶系が拮抗。煮炊具では釜が６割近くを占め、鍋の率は１割程度となっている。８世紀代の煮炊具構成率では鍋が主体であった様相とは大きく異なっている。貯蔵具では、瓶類45%と高い率を占め、次いで

器種名	坏蓋	坏Ｂ身	坏Ｅ身	坏Ａ	小型坏	盤Ａ	盤Ｂ	Ⅲ Ａ	Ⅲ Ｂ	埦Ａ	埦Ｂ	食膳具計	小鉢	小壺	小瓶	小貯蔵計
口縁部計測値	15,199	(4,918)	(106)	50,758	23	30,136	902	60	1,623	166	113	98,980	32	93	61	186
占有率	15.4%			51.3%	0.1%未満	30.4%	0.9%	0.1%	1.6%	0.2%	0.1%	97.28%	17.2%	50.0%	32.8%	0.18%

器種名	釜	小釜	鍋	煮炊具計	鉢Ｂ	鉢Ｃ	鉢Ｆ	壺蓋	壺Ａ	壺Ｅ	壺Ｆ	瓶Ａ	瓶Ｂ	瓶Ｆ	大甕	中甕	小甕	貯蔵具計	器種総計
口縁部計測値	94	47	16	157	270	43	34	(50)	76	163	459	35	179	877	92	215	33	2,426	101,749
占有率	59.9%	29.9%	10.2%	0.15%	11.1%	1.8%	1.4%	3.1%		6.7%	18.9%	1.4%	7.4%	36.1%	3.8%	8.9%	1.4%	2.38%	

第２表　D地区３号窯出土須恵器器種構成表（口縁部計測値は口縁端36分割での残存率をそのまま総計した数値、蓋付器種は数値の多い方を採用）

壷類が29%、鉢類、甕類ともに14%となっている。瓶類の主体を占めるものは瓶Dで、壷では壷F、鉢では鉢Bが主体を占める。南加賀窯跡群では壷Eの顕在化する窯は確認されておらず、当窯の定量生産は注目される。また、瓶Dの占有率の高さも南加賀窯跡群では早い事例であり、当窯の特徴を示しているものと考える。

b．各器種の特徴

①有蓋坏型食膳具（坏蓋・坏B身・坏E身）

《法量組成》　有蓋器種は坏Bと坏Eがあるが、坏EはⅥ期の小型坏Bの衰退とともに、それにとって代わるようにして、無高台化した器種であるため、坏Bに包括される器種であり、1器種と考えて差し支えないものである。坏Bは田嶋Ⅲ期に5法量分化して以来、Ⅳ1期に3法量に整理され、Ⅵ期には2法量に淘汰される。また、漸次、口径は小型化の傾向をもっており、時期幅をもつ当該資料では法量ごとの数量提示することは難しい。ただ、基本的な法量はⅣ1期に整理された3法量であり、各法量で特徴をもっているため（大ー大型で深身坏B身、中ー中型で浅身傾向坏B身、小ー口縁部折り返しをもたない素口縁の小型坏B蓋）、これを判断材料として提示する。なお、Ⅵ期の小法量消滅後は、中法量が小型化して、小法量となるため、これについては中小法量として中法量と区別する。また、大法量の中で特に大型法量をもつ一群があるが、体部沈線を施すなど金属器的な特殊品として位置付けられるため、これらは特大法量として区別する。特大法量の中には天井部突帯をもつ坏蓋も含むこととする。以上5つに分けた法量別の口径数値は、「特大」が蓋18cm以上、身17cm以上、「大」が蓋18～15cm、身17～13cm、「中」が蓋15～13cm、身13.5～11cm、「中小」が蓋13～11cm、身13～10cm、「小」が蓋12～10cm、身10.5～9cmとなる。部分的に重複する法量もあるが、器形等でその部分は補う。以上の基準に基づいて分類し、計測数値を出したのが、第3表である。これを見ると、大法量が7割以上の高率を占めることが分かる。中法量は1割程度で、Ⅳ期の構成率と大法量と中法量が逆転する現象となっている。小法量は数%と終焉の様相を呈し、中法量と小法量が統合される様相を帯びる。中小の口径範囲の重複にも関連するが、2法量へ淘汰される過渡的様相と評価されるだろう。

《重ね焼き痕跡》　坏Bは蓋と身をセットで重ねて焼く方法がとられる器種だが、坏蓋に残されたその痕跡を観察し、凡例に示した重ね焼き類型に基づいて示したのが、第4表である。法量別に提示しているが、特大法量でⅠ類が定量見られた以外は、基本的にⅡ類に集中し、特にⅡa類にまとまる傾向をもつ。特大法量のⅠ類焼きは、天井部突帯をもつ特殊蓋にほぼ限られ、突帯をもたない一群はⅡa類で占められる。なお、大法量と中小法量の無鈕蓋の中に一部、蓋同士で重ね焼きを行うものが確認でき、また、坏B身でも同様に身同士での重ね焼き痕跡をもつものがある。蓋の無鈕化に伴う現象と評価できる。

《特大坏B蓋》　天井部突帯を巡らす特殊蓋（Ⅰ類・1～7）と大法量をそのまま大型化したⅡ類（8～11）とがある。Ⅱ類は後述する坏B蓋のB1a類が特大法量となったもので、調整や細部器形もよく似ている。対応する坏B身が確認されており、体部沈線を施すなど金属器的様相をもつ。Ⅰ類は、環状突帯付蓋（小池1995）と呼ばれる特殊品で、7世紀末～8世紀初頭に出現し、陶邑窯跡群を初めとして、京都・兵庫・三重などの須恵器窯で生産が確認される。北陸でも8世紀前葉に高松押水窯跡群の八野ガメヤマ窯で生産されており（高松町1985）、8世紀前半代に顕在化する蓋である。当窯資料とは形態が異なり、直接繋がるものか疑問もあるが、京都府観音寺遺跡で同類のものが出土している。小池寛氏の分類ではD類とされたもので、8世紀代のタイプよりも後出する可能性を示唆している。南加賀窯跡群では同形態のものがⅤ～Ⅵ期に各窯で出土しており、これまでに15点以

有蓋器種	坏蓋					坏B身					坏E身
法量	特大	大	中	中小	小	特大	大	中	中小	小	中小
口縁部計測値	384	11,386	2,034	1,194	281	195	3,967	279	272	205	106
占有率	2.5%	74.4%	13.4%	7.8%	1.8%	3.9%	79.0%	5.4%	5.4%	4.1%	2.1%
大別率	大－76.9%		小－23.1%			大－82.8%		小－17.2%			

第3表　有蓋坏型食膳具法量別構成表（計測値は2表同様、大別率は大・小で分けた占有率）

蓋法量	特大	大	中	中小	小	総計率
Ⅰ類	4	5	3	0	0	11.0%
Ⅱa類	4	55	12	10	7	74.3%
Ⅱb類	2	5	1	0	0	7.4%
Ⅲ類	0	5	0	3	0	7.4%

第4表　坏蓋重焼類型構成表（数値は確認個体数）

上確認している。つまみが大型かつ頂部高く作られるのが特徴で、1のような2段につまみを積み上げたような器形を呈すものもある（同類のつまみ形態は福井県持明寺遺跡で確認される。福井県1995）。概して、天井部は削りが施され、口縁部の作りはシャープであるが、6のような端部丸くなるものもあり、これは後出の様相と言えよう。小池氏は金属器模倣器種を想定しているが、対応する身については言及しておらず、これだけの出土例を持つ南加賀窯跡群でも、対応する身の確認はない。稜埦に近い金属器的器種に付く可能性が高いが、南加賀窯跡群では明確な金属器器種が生産されておらず、現段階では不明である。

《坏B蓋大法量》　大法量は図の12～83で、12以外は天井部に削りを伴うものは確認されない。蓋の切り離しと天井部器形、つまみ形態などから、A類（12～33）－切り離し面が平坦で広く、天井部厚手で、大きめのつまみが付くタイプ。B類（34～77）－切り離し面丸味をもち、天井部薄手で、小型のつまみが付くタイプ。C類（78～83）－無鈕蓋タイプの3種に分けられる。

A類は天井部厚手で平坦面の広いAa類（Ad類以外の13～24）が大半を占めるが、切り離し面の狭いAb類（25～29）と器高低く偏平器形のAc類（30～33）がその亜種として存在する。体部から口縁部の器形は、口縁部手前で「く」字屈曲して端部を断面三角形ないしはシャープに摘まみ出す器形が通常であるが、A類は概して、屈曲の度合いが弱いものが目立ち、特に、12・16・22は屈曲が微弱である（Ad類）。A類は全体的に焼きの強いものが目立ち、灰白色や白色に発色する傾向をもつ。

B類は天井部薄く、切り離し面の丸い器形を基本とするが、体部の厚さとつまみ形状から、つまみが大きく体部厚手のB1類と体部が薄くなるB2類、体部薄くつまみの小型化したB3類に分けられる。3類で発色具合が異なり、B1類では焼き締まり強く灰白色に発色、B2類では暗灰色系の発色となり、B3類では焼き締まりが弱く淡い青灰色系の発色となっている。そしてさらに、B1類では天井部高く丸い器形を呈す主体的な一群をB1a類（34～51）とし、天井部やや偏平で緩く丸味をもつ一群をB1b類(52～57)として区別する。B1a類は口縁部手前の屈曲が明瞭で、口縁部シャープに摘まみ出す器形が主体的であるが、B1b類は口縁部薄く丸く折れるものが主体的となる。B2類は天井の高く丸い器形もあるが、概してB1b類の天井部器形と類似し、口縁部器形も同様の特徴をもつ（B2a類､59～64)。その中では65～67は口縁部の端部折り曲げが内側に巻き込む器形で、これについてはB2b類として区別する。B3類もB2類同様の天井部器形で、天井部丸味をもつB3a類（71～77）が主体的であるが、69・70のような天井部に平坦面をもつ一群（B3b類）も存在する。口縁部の端部巻き込みはB3類でも確認され、概して、B2類よりも口縁部のシャープさを欠く。

C類はB3類のつまみが欠落したもので、天井部なだらかなB3a類的器形（Ca類、78～80・83）と平坦天井部をもつB3b類的器形（Cb類81・82）が併存する。口縁部の形状はいずれも外端の丸い器形のもののみとなり、端部巻き込みないしは線刻状を呈す。ヘラ記号は天井部内面が大半で、5％前後の割合で確認される。特定の類型に偏ることはなく、「｜」が大半を占める。

《坏B・E蓋中法量及び中小法量》　中・中小法量は84～115で、大法量と同様の器形特徴を基準として、A～C類の3分類が可能である。A類は広い厚手の天井部をもつAa類（84～87）が大半を占め、口縁部器形も大法量と類似する。口縁部手前の屈曲の微弱なAb類（88）も確認でき、焼き色も類似する。ただ、つまみ形状は大ぶり偏平形（84・85）と頂部高い形態（86・87）がある。B類も大法量同様、B1類、B2類、B3類に対応する形態が確認でき、B1類の中で天井部高いB1a類（89～91・95）と低いB1b類（92～94）とに細分。B2類も、口縁部器形から主体的なB2a類（96・97）と端部巻き込みタイプのB2b類（103・104）とに分けられる。また、B2類に該当するもので、天井平坦で極めて偏平、山笠状のつまみをもちロクロヒダ顕著な一群（98～100）があるが、これについてはB2c類としておく。B3類は天井部丸いB3a類（107）が少なく、天井部平坦なB3b類（101・105・106・108）が主体的で、口縁部端部巻込みが目立つ。C類も、天井部丸味もつCa類（111・113・114）と天井部平坦なCb類（112・115）に細分可能で、まさに大法量と同様の分類が可能である。ヘラ記号についても、大法量と同様の様相をもち、焼き色も類似する。

《坏B蓋小法量》　小法量は116～123で、つまみと天井部器形から、偏平つまみをもつA類（123）、大型のつまみで天井部丸味をもってそのまま口縁部となるB類（116・117）、つまみやや小型で天井部平坦気味、口縁部

反り気味のC類に分けられる。さらに、C類のみはつまみやや大きめで口縁部反りが明瞭なC1類（118～120）と小型つまみで口縁部反りの弱いやや大振りのC2類（121・122）に細分できる。C類は全てヘラ記号をもち、C1類には天井部内面中央に「｜」が、C2類には体部内面に「×」が記される。類型とヘラ記号の対応が明確な事例と言える。焼き色はA類が生焼けだが、B・C類は灰白色に強く焼き締まる。

《坏B身特大法量》　坏B蓋特大法量Ⅱ類に対応する坏B身で、後述するB1a類に形態が酷似している（124～126）。高台や口縁部など作りの丁寧な製品で、体部に2条の沈線が施される。

《坏B身大法量》　127～191が該当する。坏B蓋同様に、全体的器形から、A類（127～134）－高台径大きく、体部腰が張り立ち気味となるタイプ。B類（135～178）－腰に丸みを帯び、体部外傾気味となるタイプ。C類（178～191）－こしが丸く体部外傾する　型器形を呈すタイプの3種に分けられる。

A類はいずれもしっかりした断面方形高台が外展して付き、作りの丁寧なものである。焼き色は暗灰色ないしは青灰色系を呈し、しっかりと焼き締まっている。

B類は体部外傾気味器形を呈すA類とC類の中間的様相をもつ一群であるが、高台器形や貼付位置及び体部器形などから、やや大ぶりで体部厚手のわりに、小型高台の付くB1類と体部・底部ともに薄手のB2類に細分される。そしてさらに、B1類は断面方形のしっかりした高台が体部立ち上がり付近に付く比較的丁寧な作りをするB1a類（135～137・147）と体部立ち上がりの丸いB1b類（138～143・144～146・152）、比較的体部薄い作りで、体部立ち上がりの腰が張るB1c類（150・151）に分けられる。B1a類は器高高い器形を基本とするが、他の特徴は酷似するも、やや浅身器形を呈すものをB1a'類（148・149）とした。B2類は最も中間的器形を呈する断面方形の小型高台が付く一群をB2a類（159～166・177・178）として、それよりも口径大きめ器形を呈し、幅広高台の付くものをB2b類（153～158）、B2b類と体部は類似器形だが、高台が小型で立ち上がり箇所よりもかなり内側に付く底部薄いものをB2c類（171～176）、体部外傾が強く高台が体部立ち上がり付近に付くものをB2d類（167～170）とした。また、B2a類については、特に薄手でロクロヒダ目立つ一群があり、これはB2a'類とした。B類の焼き色は、B1類が全体的に灰白色系に強く焼き締まる傾向にあるが、B1b類とB1c類の半数は、やや灰色系が強く、黒色吹き出し粒が目立つ。B2類は暗灰色系ないしは青灰色系に焼き上がる傾向があり、特にB2c類・B2d類は白味強く焼きが甘くなる。

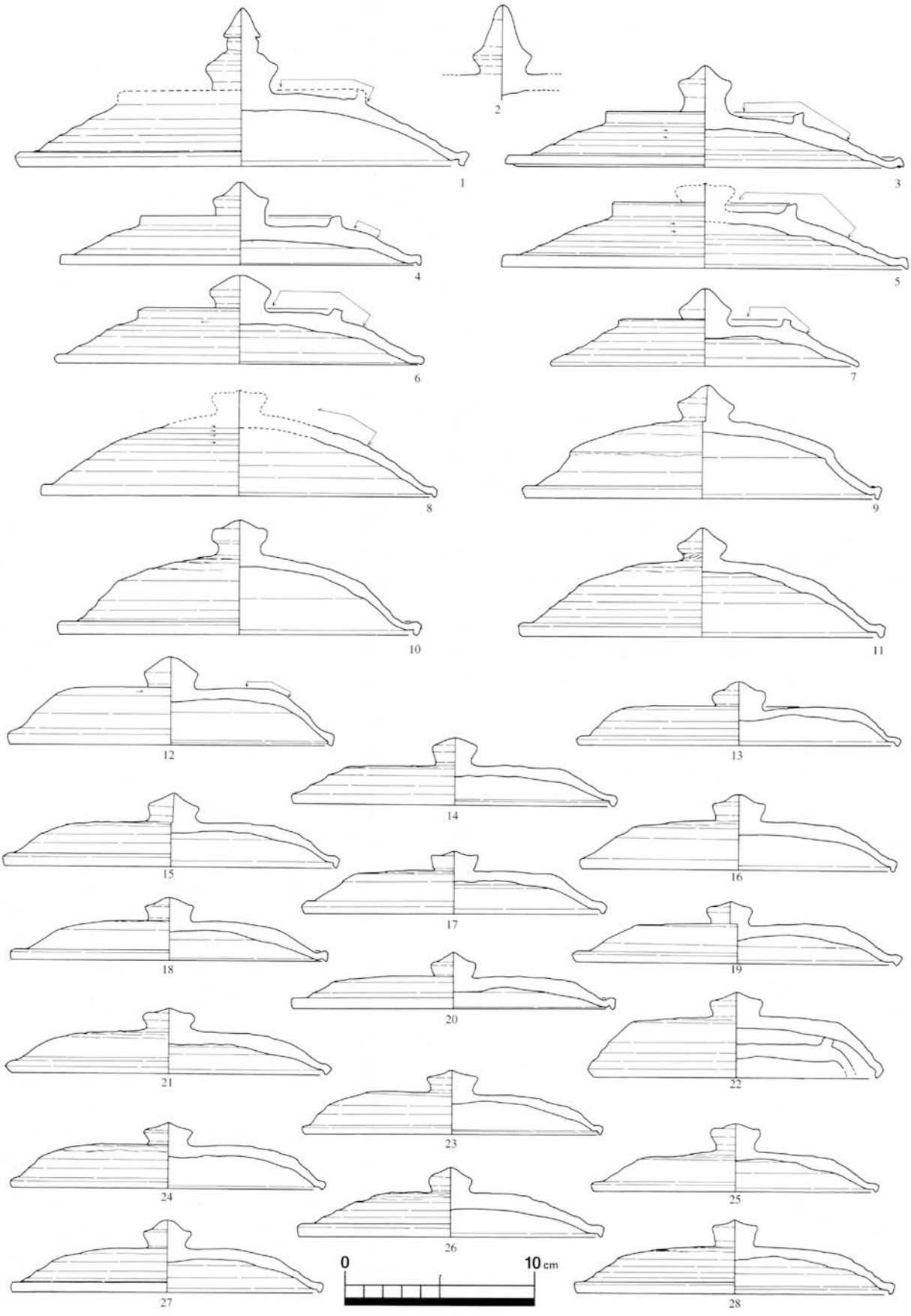
C類は体部外傾の碗型器形を基本とするが、底部厚手で幅広高台の付くC1類とこぶりで薄手作りのC2類とに分けられる。そしてさらに、C1類は全体的に厚手で高台が内向するC1a類（180・182）と体部薄手で外反気味となるC1b類（179）に、C2類は腰が張る体部で高台の立つC2a類（184・185）と腰が丸く台径小さい碗形を呈すC2b類（186・187）、碗形体部で足高高台をもつC2c類（188）、口径のわりに深身器形で体部極薄のC2d類（189～191）に細分される。C類の焼き色は全体的に青灰色系が主体だが、C2d類のみは暗灰色に焼き締まるものに統一されている。また、A・B類が蓋身セットで重ね焼きされた焼色を呈すのに対し、C類は身のみで重ね焼きした痕跡が目立ち、蓋C類と対応関係にあることが予想される。

ヘラ記号は、C類で1点確認されるが、坏B蓋大同様に、極めて低い確率である。

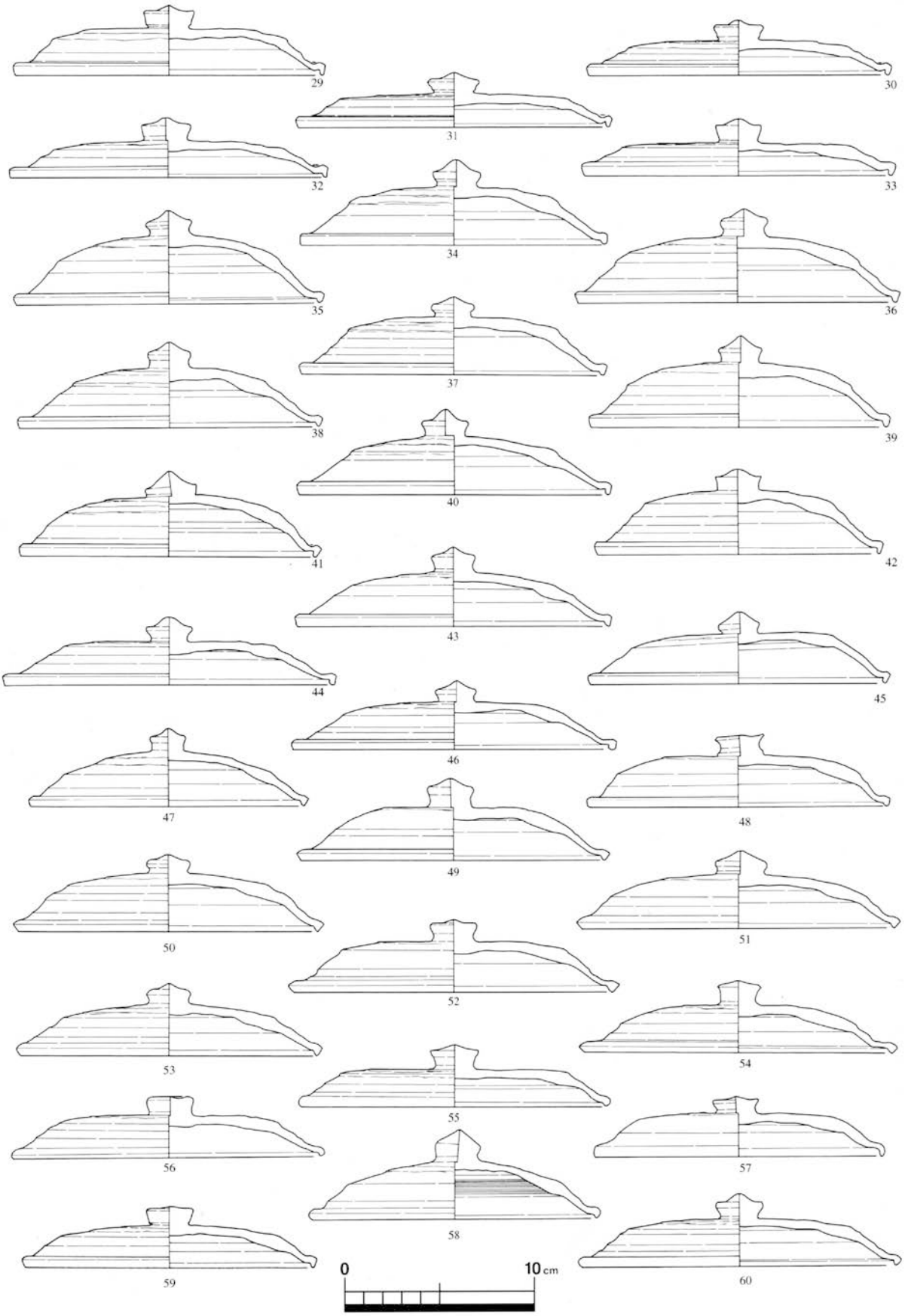
《坏B身中法量及び中小法量》　192～196・201～203が該当する。大法量よりも器高が低く、全体的に浅身を呈するが、同様の器形特徴をもつ。C類に該当するものはなく、青灰色系の焼きで、腰が張り体部直立気味となるA類（192・193）と腰が丸く体部外傾器形となるB類に分けられる。さらに、B類は、大法量と同様の細分基準で、厚手で体部外傾強い、高台の外端接地するB1a類（194・195）と体部薄く小さな高台の付くB1c類（196）、体部内湾する偏平器形で、ひしゃげた低い高台の付くB2b類（201～203）に細分され、大法量と同様の焼き色の特徴をもっている。

《坏B身小法量》　口径11㎝未満の比較的深身を呈する形態で、197～200・204・205が該当する。体部直立気味で腰の丸い器形を呈するA類（197～200）とやや体部外傾の薄手B類（204・205）とに分けられるが、坏B蓋がそうであったように、身に関しても、大法量との互換性は乏しく、統一的な類型提示となっていない。蓋同様、灰白色系の強い焼き締まりをもつものが大半を占めるため、B1類系統以外のものは存在しないとも言える。

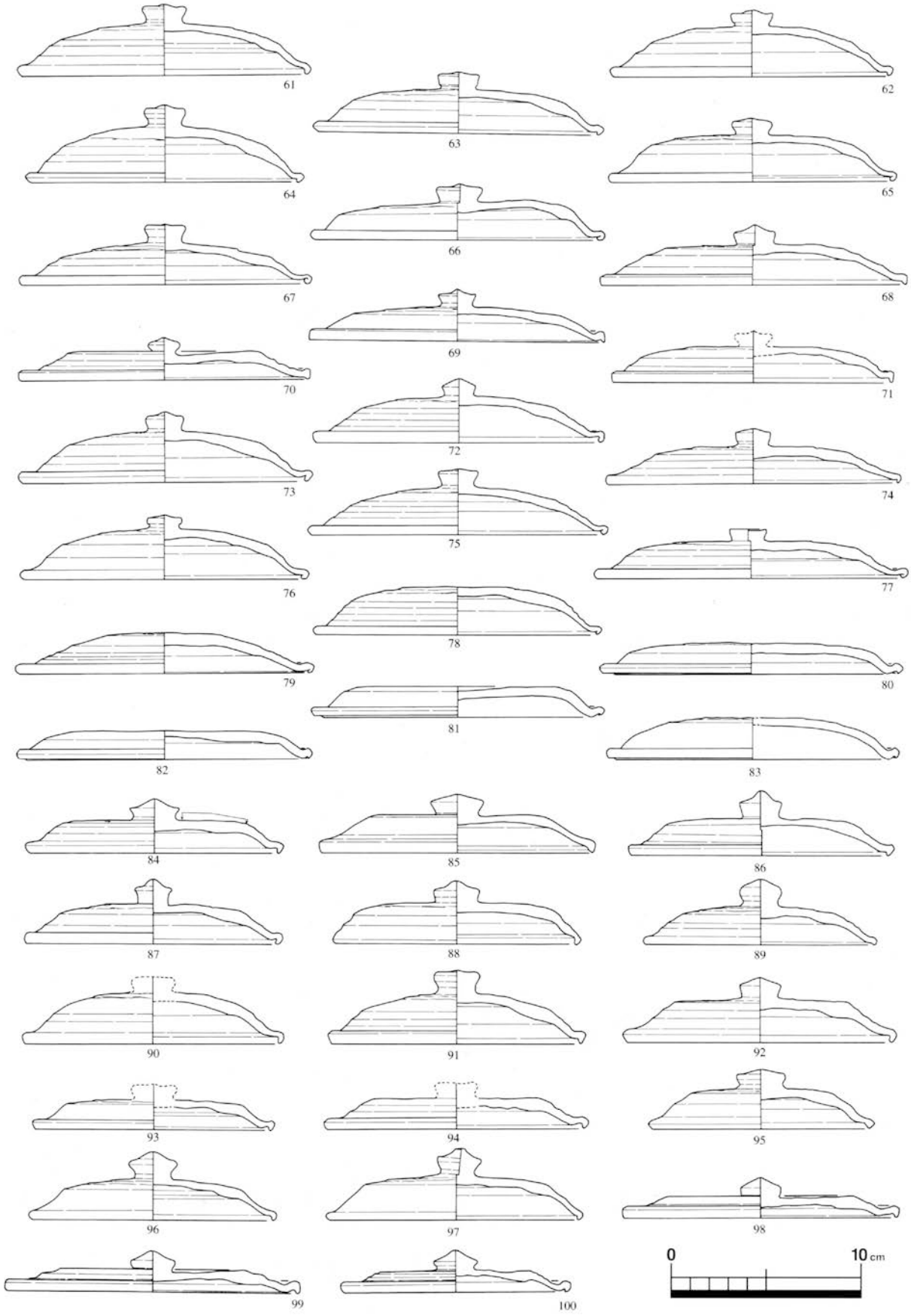
《坏E身》　体部立ち上がり転換点が明瞭で体部直立気味となる無台坏を坏Eとしているが、これは坏蓋中小法



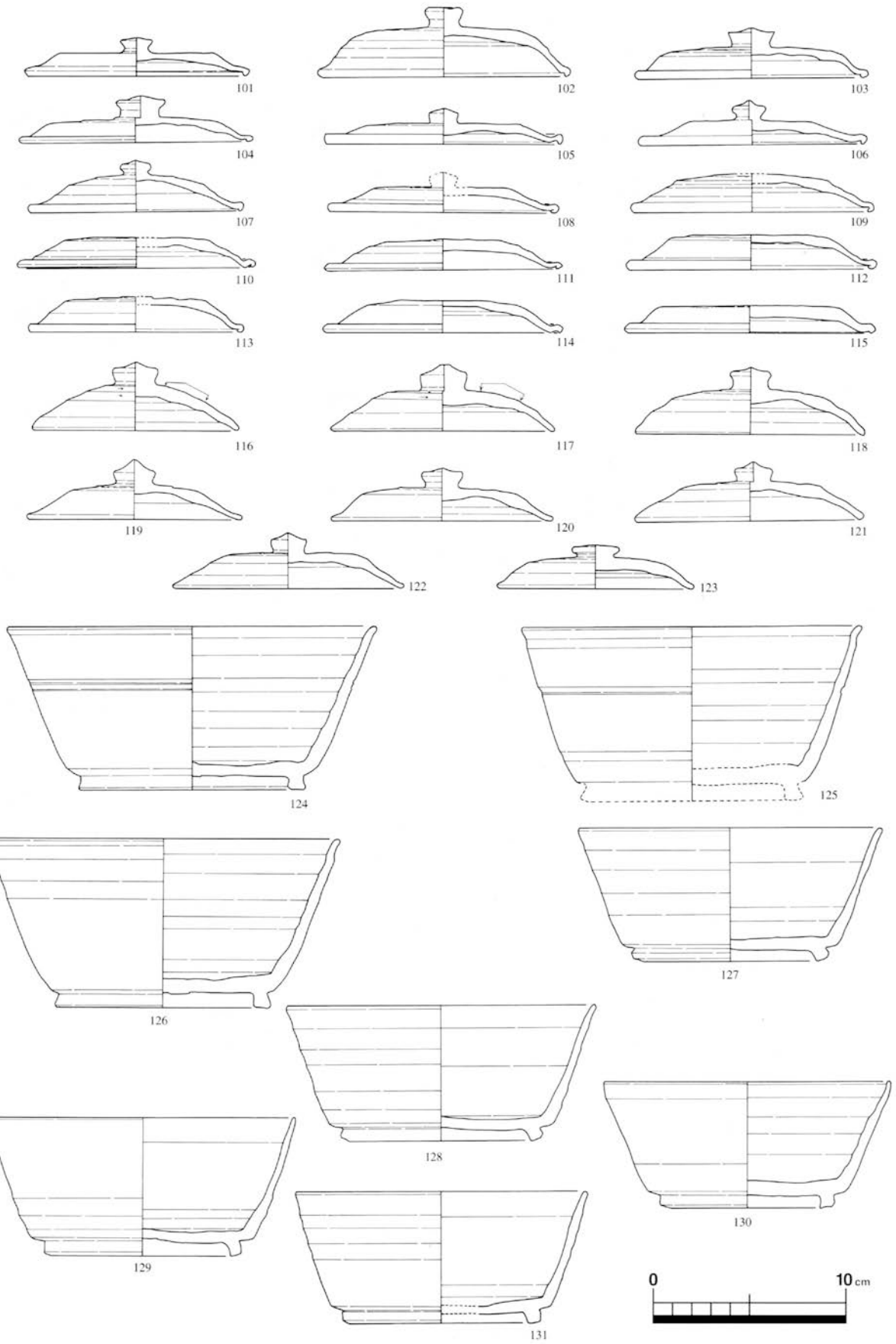
第17図　D区３号窯灰原出土須恵器（１）（S=1/3）



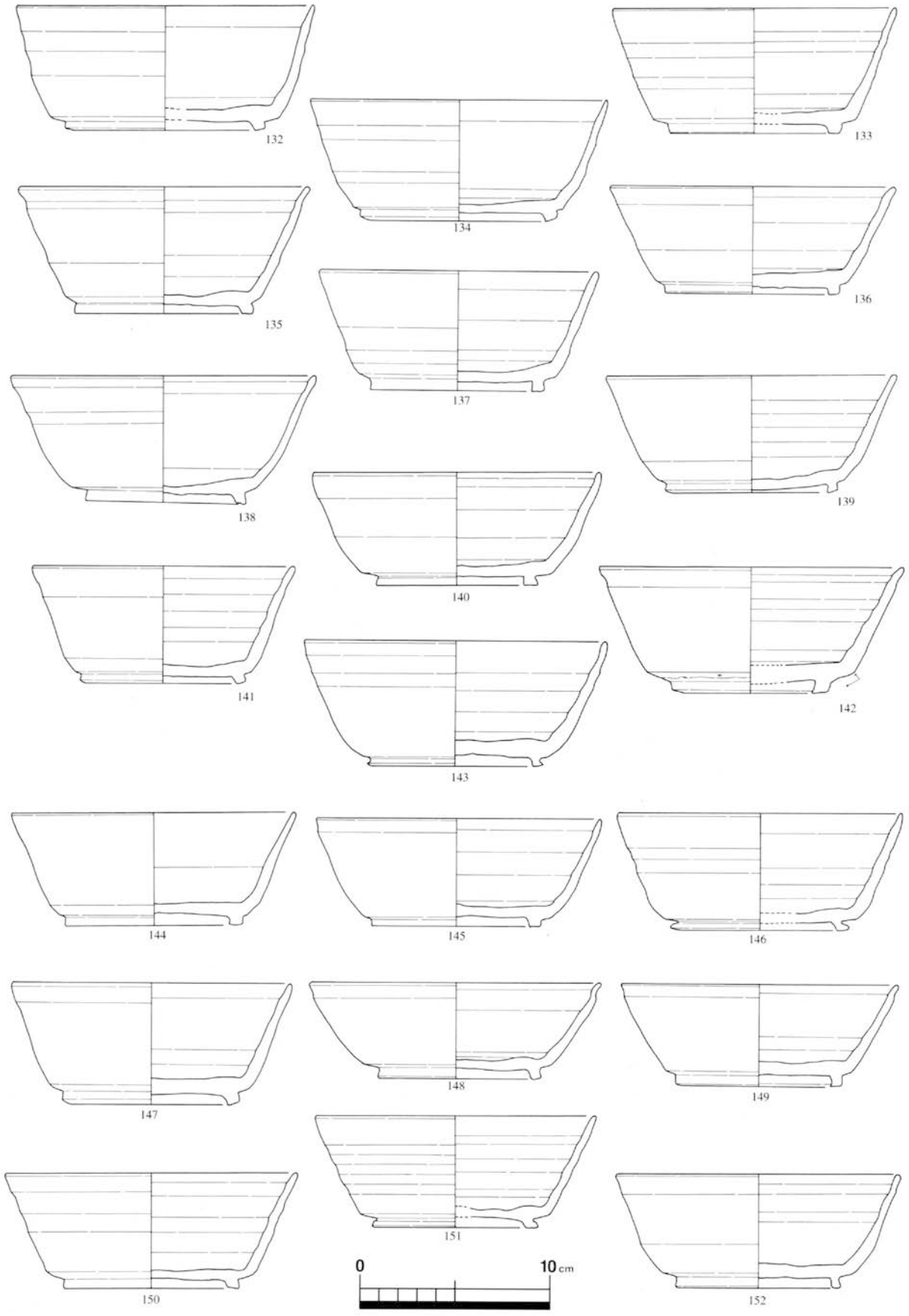
第18図　D区３号窯灰原出土須恵器（２）（S=1/3）



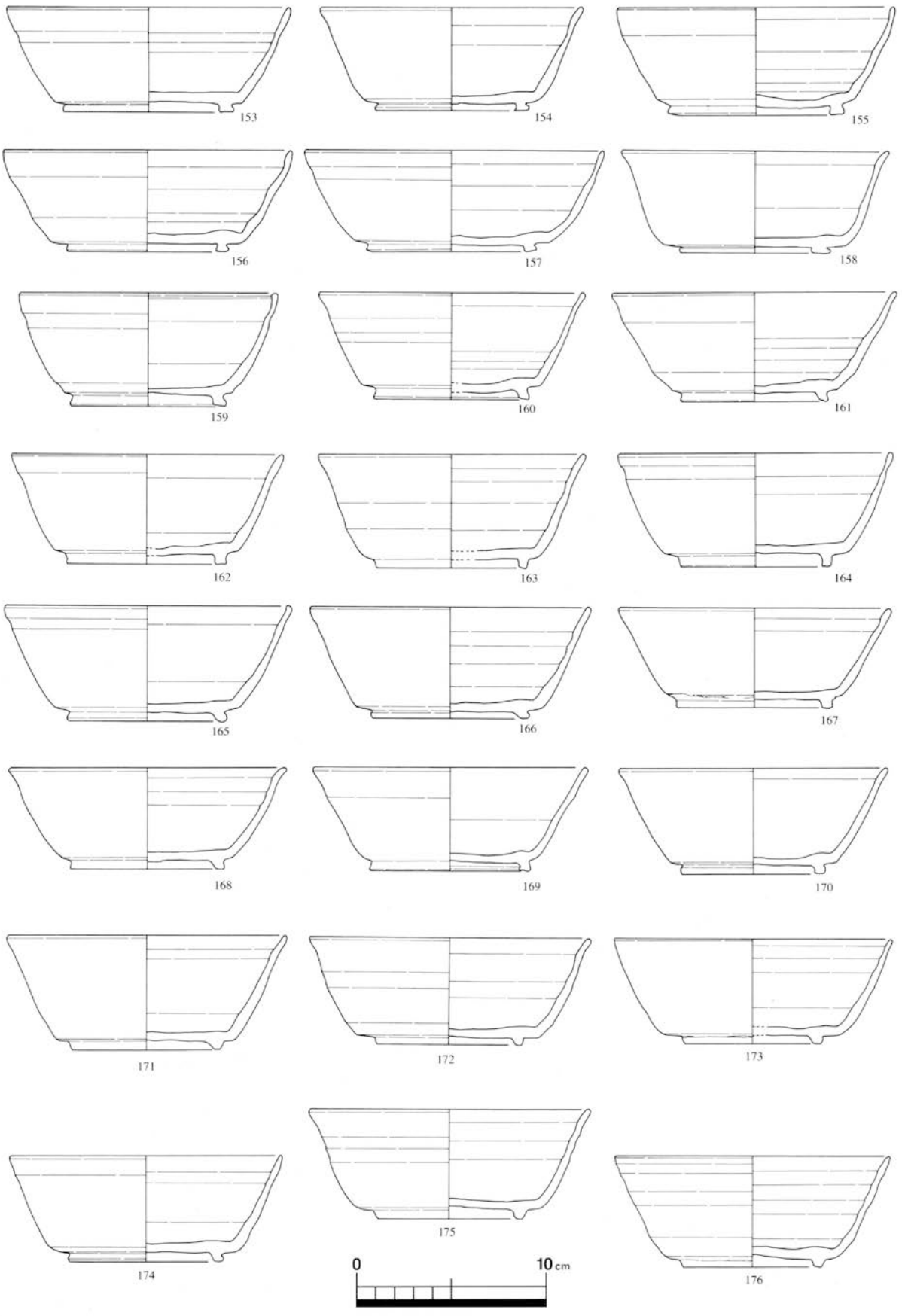
第19図　D区３号窯灰原出土須恵器（３）（S＝1/3）



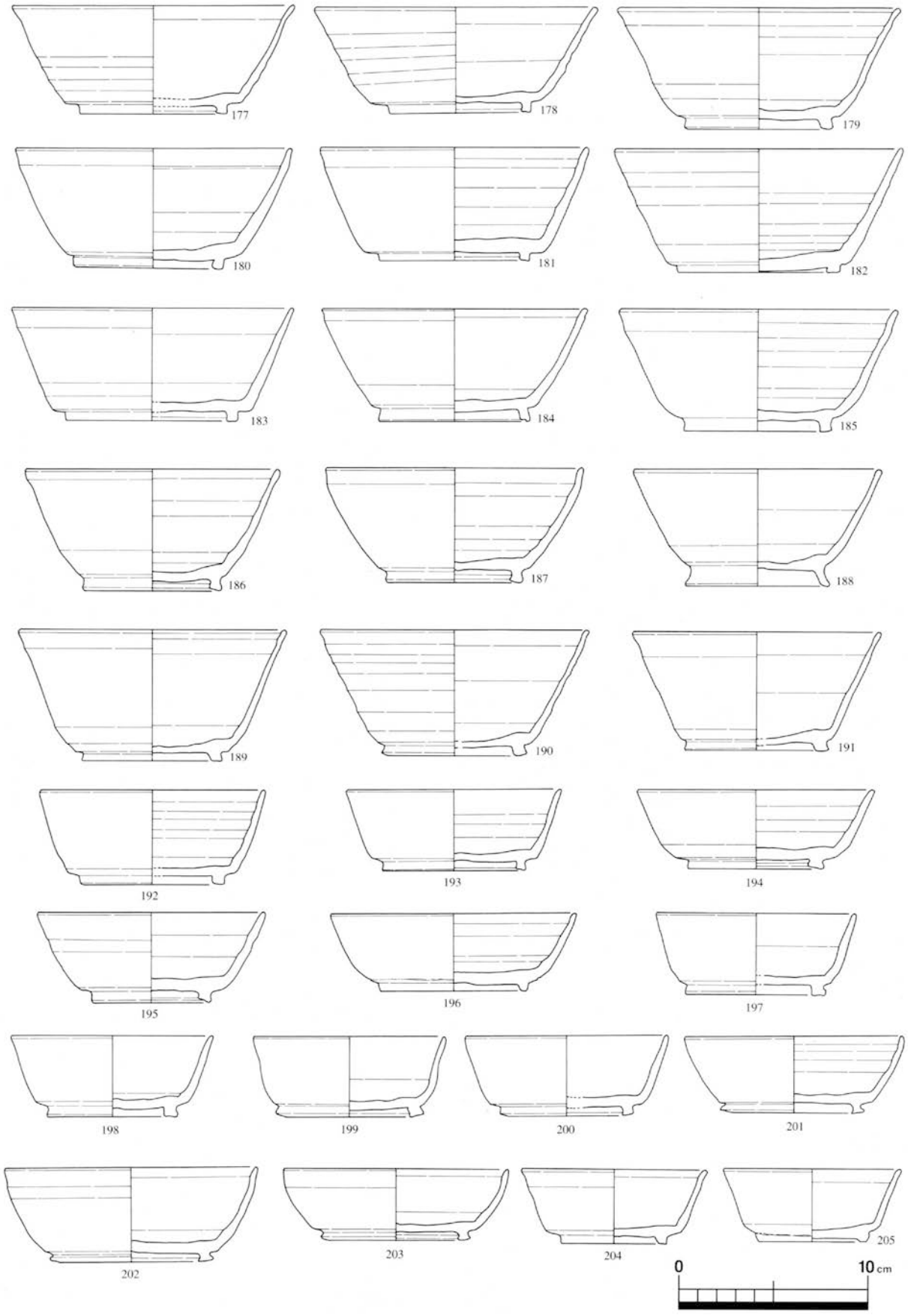
第20図　D区３号窯灰原出土須恵器（４）（S＝1/3）



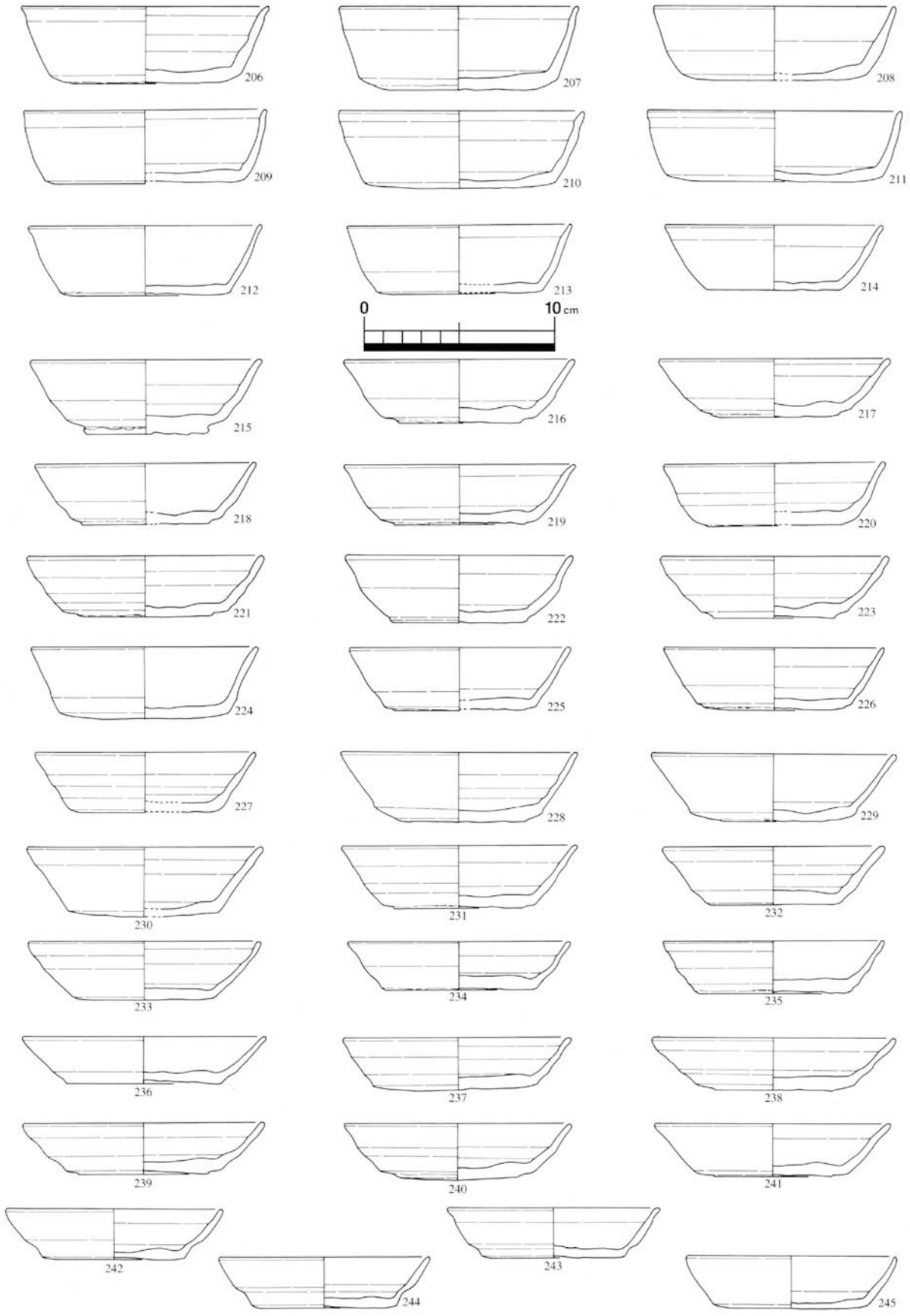
第21図　D区３号窯灰原出土須恵器（５）（S=1/3）



第22図　D区３号窯灰原出土須恵器（６）（S=1/3）



第23図　D区３号窯灰原出土須恵器（７）（S=1/3）



第24図　D区３号窯灰原出土須恵器（８）（S=1/3）

量に対応する有蓋器種で、外面の底部から口縁部までが降灰する特徴をもつ。器厚や体部器形から、底径大きく体部直立気味となるA類と薄手で体部外傾するB類に分けられる。A類は、全体的に口径大きく偏平で、体部直立器形をもつA1類（209～211）と底部厚手でやや丸みをもち体部外傾気味となるA2類（206～208）に細分、B類は底径大きめのB1類（213）と底径小さく体部外傾するB2類（214）とに細分される。A類は灰白色系の焼きの強いものであるのに対し、B類は青灰色系の焼きの甘いものが目立ち、坏B身の類型と焼き具合の一致に対応する。

《器形類型と焼き色について》　以下でも述べるが、灰白色系に強く焼き上がる食膳具は有蓋器種に特に顕在化する焼き色で、他の無蓋食膳具に比べると火前で焼かれることが多かったことを示していると言える。また、この焼き色については、Ⅳ2新期以降見られるようになるもので、特にⅤ期に顕在化する。Ⅵ期に入ると衰退し、青灰色系になることが確認されており、当窯資料がそのような過渡期にあることを如実に物語っている。一方、前述したように、各器形に分類した類型と焼き色は対応関係にあり、法量を越えた類型においてもそれは確認できた。つまり、ある焼成段階での類型のまとまりが確認できた訳であり、類型が工人の単位を示すものだとすれば、この窯の当器種製作に携わった工人はまとまりをもっていたことを示すだろう。それはヘラ記号の少なさにも反映されている可能性が高いと考える。

②無蓋坏型食膳具（坏A・小型坏・盤A・盤B）

《坏A》　坏Aは個体数が最も多い主要器種であるため、その分、器形類型も多い。大まかには坏Aの大半を占める偏平で体部外傾器形をもつⅠ類とやや小型深身の器形をもつ少数派のⅡ類、小型浅身器形をもつⅢ類とに大別される。以上のⅠ・Ⅱ類は、Ⅴ期に出現する新型の体部外傾器形の浅身坏とⅣ2新期に出現した小型深身坏とに対応するものであり、両者の共存はⅤ期の特徴と言える。また、Ⅲ類としたものは他ではあまり見られない器形であり、当窯の特徴的器形であるかもしれない。いずれの類型とも、さらに分類・細分される。

少数派のⅡ類から述べると、全体的に小ぶりで底部の突出する体部椀形を呈すA類（215～223）と体部まっすぐ外傾する深身器形のB類（224～233）とに分けられる。A類は底径大きめのA1類と底径小さく塊器形を呈すA2類（222・223）とに分けられ、さらにA1類は底部厚手で深いA1a類（215～218）とやや器高低く、体部薄手となるA1b類（219～221）に細分される。B類は、体部の立ち上がり具合から、立ち気味となるB1類と外傾するB2類とに分類される。B1類はさらに、体部直立気味の深いB1a類（224）と体部薄くやや低平なB1b類（225～227）に細分される。B2類も、厚手深身のB2a類（228～230）とやや低平なB2b類（231～233）とに細分される。Ⅱ類での焼き色のまとまりはあまり感じられないが、ヘラ記号については、A1類とB2類で集中する傾向があり、特にA1類では6割の高い確率で「｜」のヘラ記号が確認される。

同じ少数派であるⅢ類は、いずれも小型法量で底部厚手の特徴をもつ1つの類型（C類）に統一される。そしてさらに、底部平坦で体部立ち気味のC1類（234～237）と底径小型化して体部外傾気味となるC2類（238～241）、小型化して体部下位に段をもつC3類（242～244）に細分される。

Ⅰ類は9割以上を占める一般的な器形と言え、これ以降も主体的に存続して行く形態である。底部器形や体部立ち上がりなどから底径大きく偏平形を呈すD類（246～298）とⅠ類の中では深身で体部外傾するE類（299～320）、底部切り離し面小さく体部下半丸い薄手のF類（328～336）に分けられる。E・F類はいずれもD類の派生形態的特徴をもつが、特に、321～327はD類に近いため、亜種形態とし、D'類とする。主体を占めるD類は底径大きく体部直立気味のD1類（246）とやや厚手底部で体部外傾気味となるD2類、体部外傾して偏平器形となる薄手のD3類に分けられる。そしてさらに、D2類は、この中では深身のD2a類（247～253）と浅身のD2b類（254～263）に細分され、D3類は、この中では大ぶりのD3a類（264～270）、底径小型化して体部外傾するD3b類（271～282）、底径大きく偏平器形顕著なD3c類（283～286）、小型化して極薄くなるD3d類（287～298）に細分される。E類は、厚手で深身のE1類と体部外傾して低くなるE2類とに分けられる。そしてさらに、E1類は底径大きく体部直立気味のE1a類（299）と体部外傾するが深身のE1b類（300～304）、体部外傾して器高低下するE1c類（305～307）に細分。E2類は体部外傾がさほど顕著ではないE2a類（310～317）と外傾度増して偏平となるE2b類（318～320）に細分される。F類は、体部から口縁部にかけて内湾気味となるF1類と体部外傾か口縁部で外反気味となるF2類に分けられる。さらに、F1類は深身となるF1a類（328）と偏平器形のF1b類（334・335）

に細分、F2類もやや深身となるＦ2a類（329～331）と偏平器形のＦ2b類（332・333・336）に細分される。Ⅰ類に記されるヘラ記号の率は６％程度と低く、少ない割りには「｜」「‖」「×」の３種類が確認される。

有蓋坏型食膳具は、灰白色に強く焼き締まるものや暗灰色系に焼き締まる、焼きのよいものが目立ったのに対し、坏Ａは全体的に焼きが甘く、青灰白色から灰白色に焼き上がるものが半数近くを占める。そのため、坏Ｂ蓋・身で確認された類型と焼き色の一致は、ここでははっきりとは見えない。ただ、Ｃ類で青灰色の焼き締まりのよいものが大半を占める点やD3類とF1類に灰白色系の焼きの甘いものが主体を占める点などの傾向はある。

《小型坏》　口径10㎝未満の小型法量をもつ無台坏で、体部直立気味に立ち上がるＢ類に近い器形をもつ。339のような厚手の作りのものもあるが、薄手で丁寧な作りをする精製品（337・338）が主体的である。数は少ないが、当窯段階以降、Ⅵ2期まで一般的な窯でも生産が確認されるもので、Ⅵ3期の糸切り埦類への器種淘汰が行われる段階では埦Ａを小型化したもので引き継がれる。坏Ａのミニチュア製品と考えて差し支えなく、祭祀用具的意味合いをもったものと予想される。

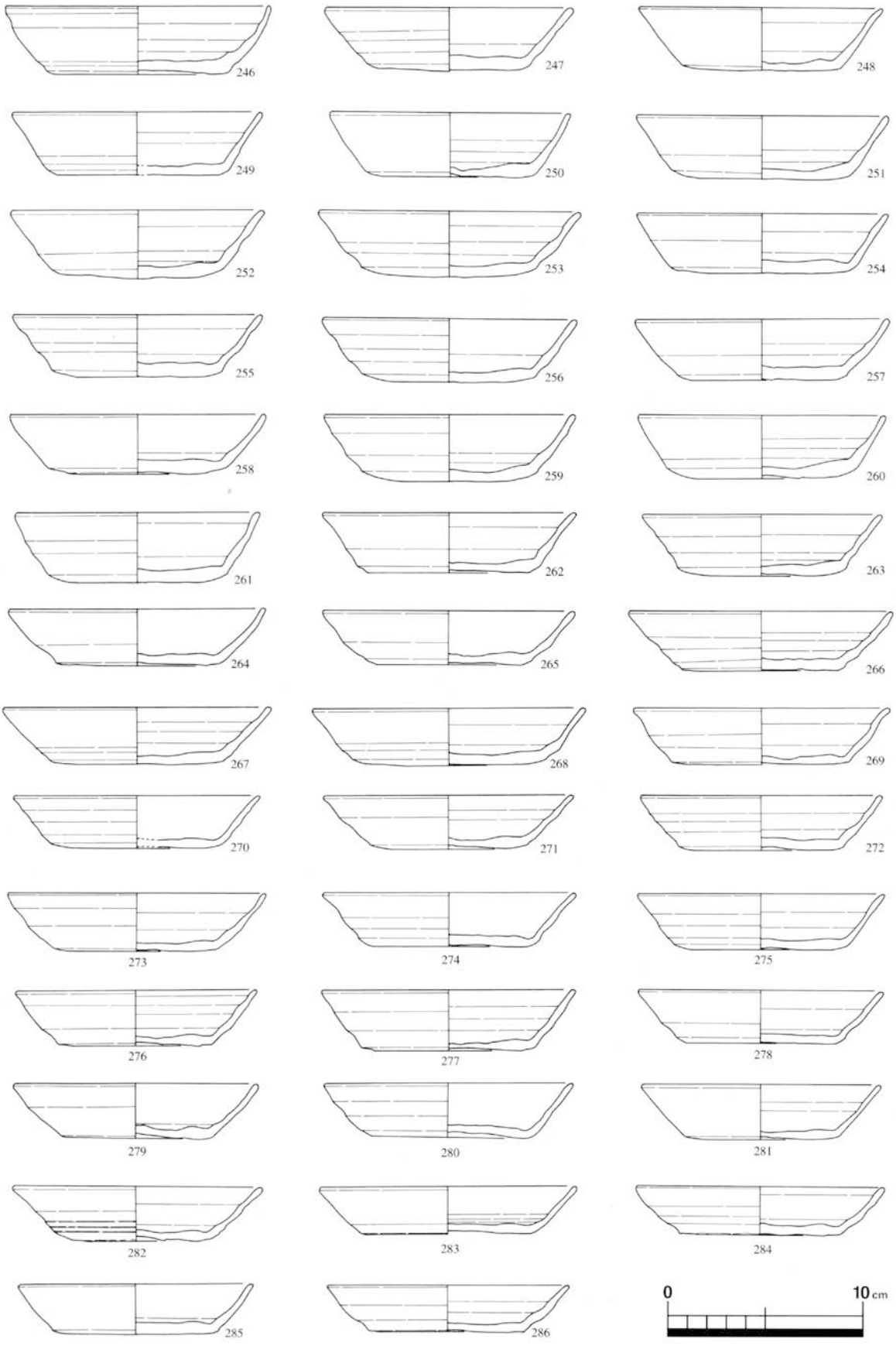
《特殊無台坏》　340は、体部薄手、体部沈線を４条入れる深身の坏で、金属器模倣的な特殊品の感をもつものであるが、底部はヘラ切りのまま無調整の無台坏である。降灰の感じから蓋付きの可能性をもつ器種である。

《盤Ａ》　盤Ａは口径と体部の長さ、厚さによって、３つに大別される。口径大きく、体部長いＡ類とＡ類の系統だが、体部短く、口径が小さくなったＢ類、薄手で小型化した偏平形のＣ類で、各類型ともさらに細分される。

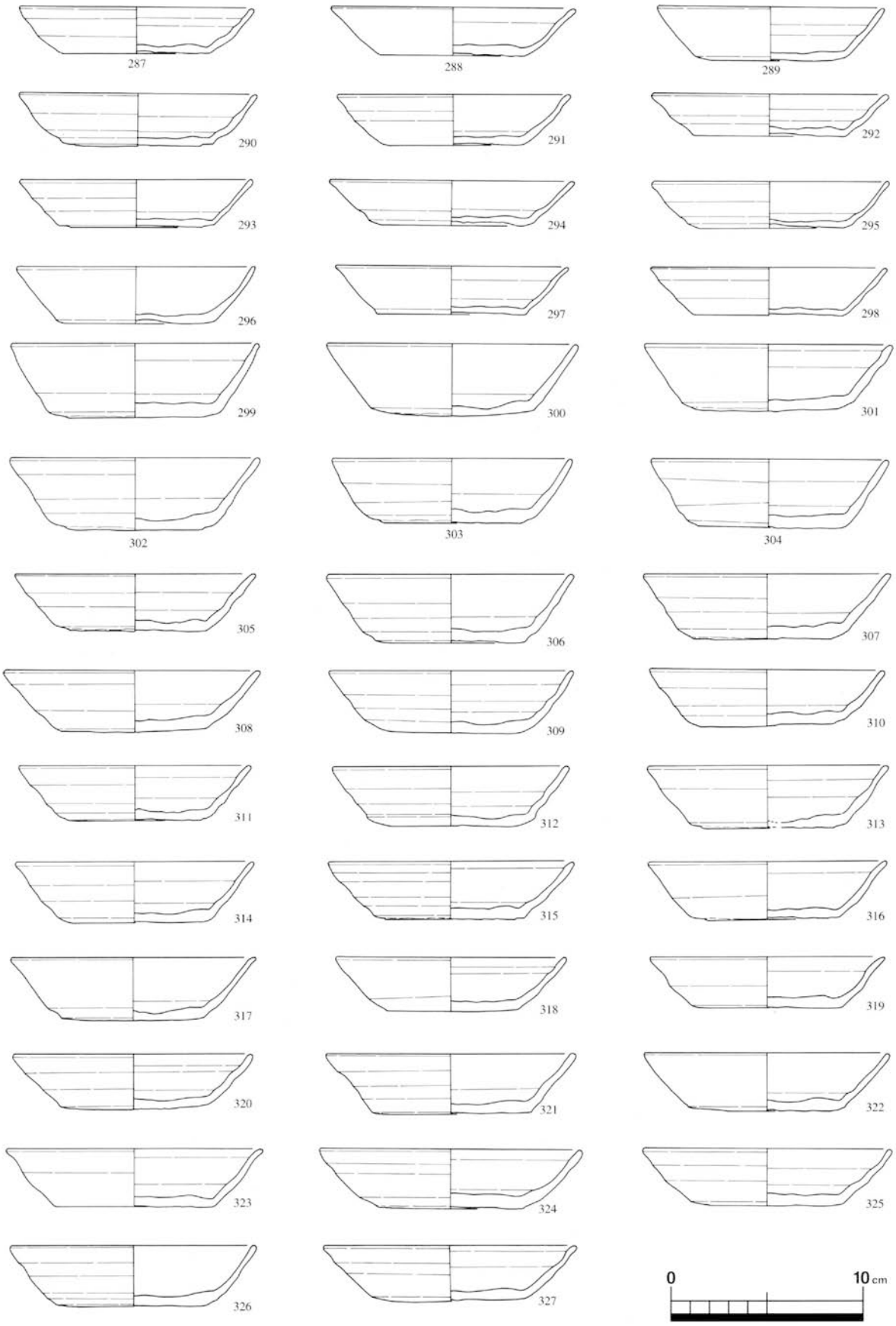
Ａ類は、底径大きな平坦底部をもつことを基本とするが、底部切り離し面のやや狭い丸底風の一群があり、これについてはA'類とした。Ａ類は体部と底部の境が明瞭なA1類と体部境丸いA2類、体部境丸く体部外反器形を呈すA3類に分けられる。そしてさらに、A1類は体部直立気味のＡ1a類（341～346）と体部外傾気味となって口縁部弱く外反するＡ1b類（347～354）、体部長めに外傾するＡ1c類（360・361）、体部内湾気味となって短くなるＡ1d類（355～359）、体部短めに外傾するＡ1e類（362～364）に細分される。A2類は体部立ち気味の長い体部をもつＡ2a類（365～368）と体部外傾気味となるＡ2b類（369～376）、体部やや短めに外傾し体部内面にロクロヒダをもつ大ぶりのＡ2c類（396・397）、Ａ2c類のやや小型化したＡ2d類（398～405）に細分。A3類も体部長く外反する深身のＡ3a類（377）と外反がやや弱いＡ3b類（378～382）、体部短く反りが弱いＡ3c類（383・384）に細分される。また、A'類については、内面見込み部に強いなでが施されるA'1類と強いなでがなく小型で体部長く外傾する坏型を呈すA'2類（395）に分けられる。A'1類はさらに、厚底で小ぶり深身のA'1a類（385・390）と口径大きく体部やや内湾気味となるA'1b類（386～389）、体部の開きが大きく器高低下するA'1c類（391～394）に細分される。各類型の焼き色は、A1類が青灰色系、Ａ2c・Ａ2d類が焼き締まり強い灰白色系、A3類がやや焼きの甘い青灰白色系が主体を占め、A'類では青灰色と灰色系とが混在する様相をもつなど、焼き色と類型との対応関係が看取できる。

Ｂ類は、全体的に厚手で灰色系ないしは灰白色系の焼き締まりの強い一群で、黒色の吹き出しが顕著に見られることを特徴としている。体部境や体部器形により、底部厚手で丸味をもち体部境に明瞭な稜線が見えるB1類と基本的にはB1類同様だが、体部内面にロクロヒダをもつB2類、体部境不明瞭で底部丸く体部内面ロクロヒダをもつB3類、体部境不明瞭で底部やや丸く、体部短く外傾するB4類に分類できる。そしてさらに、B1類は、底部厚手で、体部長く外傾するＢ1a類（406～423）と底部薄く平たくなり、体部短めとなるＢ1b類（424～434）に細分、B2類も、B1類同様の基準で、厚底で長体部のＢ2a類（435～446）と底薄で短体部となるＢ2b類（447～459）に細分される。B3類も、B1・B2類同様、厚底で長体部のＢ3a類（460～462）と底薄で短体部となるＢ3b類（464・465）に細分。Ｂ類の１・２・３類は各タイプの形態的変化の様相を示している感がある。B4類は、底体部境をもつ厚手のＢ4a類（466～469）と、器形はa類に似るが、体部外面ロクロヒダをもつＢ4b類（470・471）、底部薄くなって体部短くなるＢ4c類（472・473）に細分される。Ｂ4a類は灰褐色系、Ｂ4b類は強い焼き締まりをもつ灰白色系、Ｂ4c類は暗赤褐色というように、それぞれ焼き色が異なる。

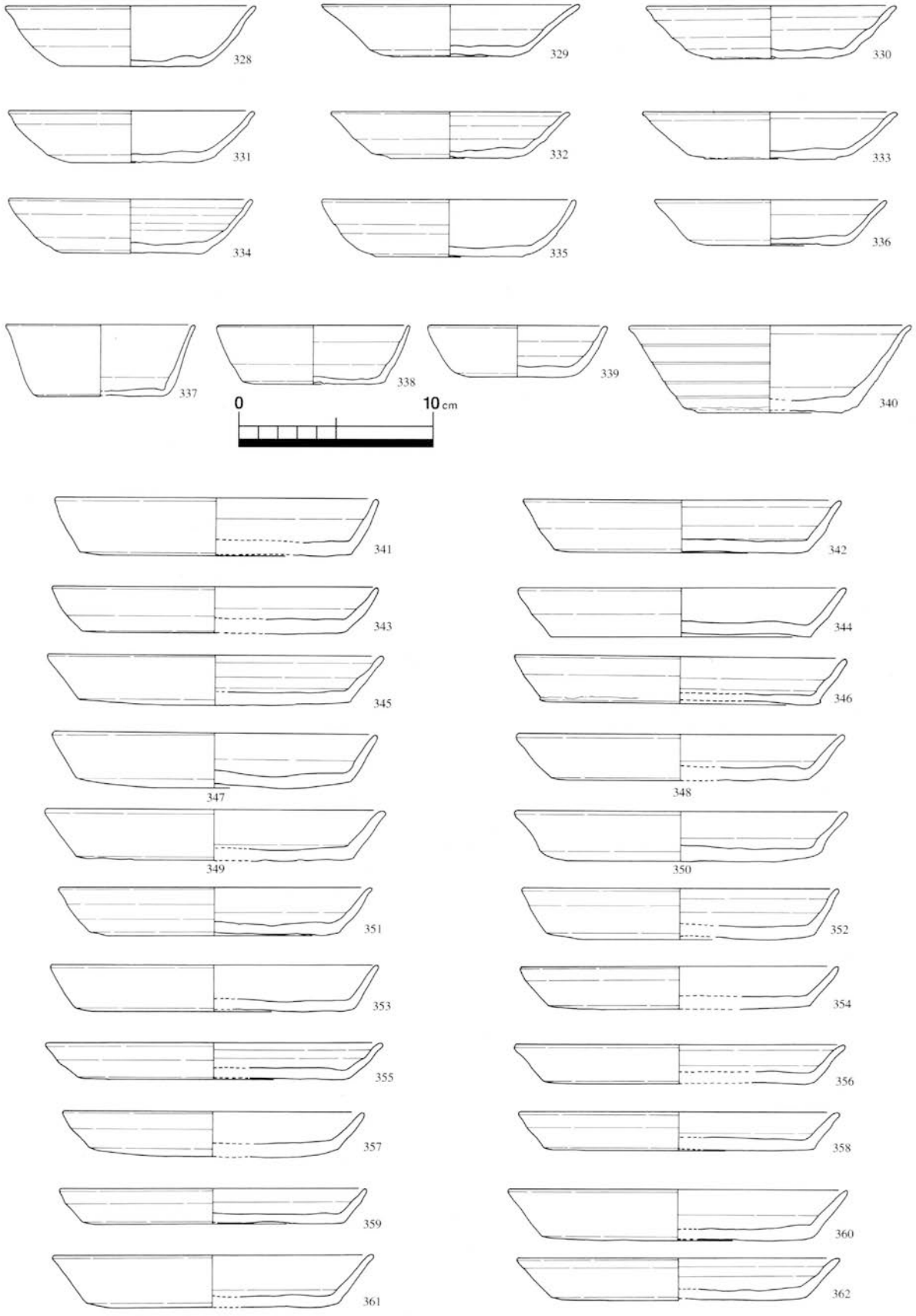
Ｃ類は、底部薄手で体部にロクロヒダをもつものを基本とし、全体的に小型化・低平化した一群である。体部器形から、体部外傾器形のC1類と体部若干立ち気味の器形をもつC2類、体部ロクロヒダ顕著でうねりをもつC3類、底部平らで体部強く外傾する低平器形のC4類（538・539）に分けられる。そしてさらに、C1類は体部長めで大ぶ



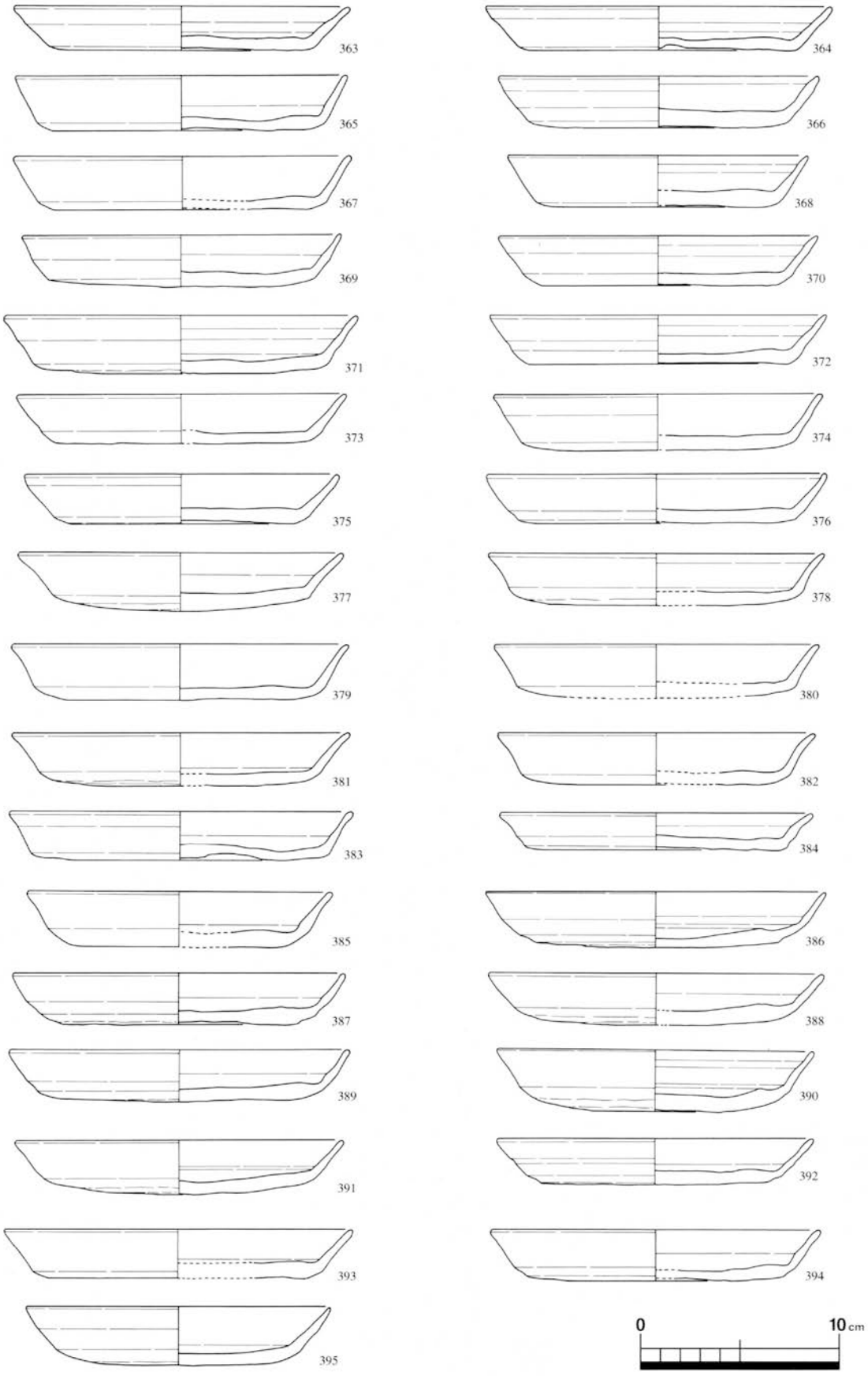
第25図　D区３号窯灰原出土須恵器（９）（S=1/3）



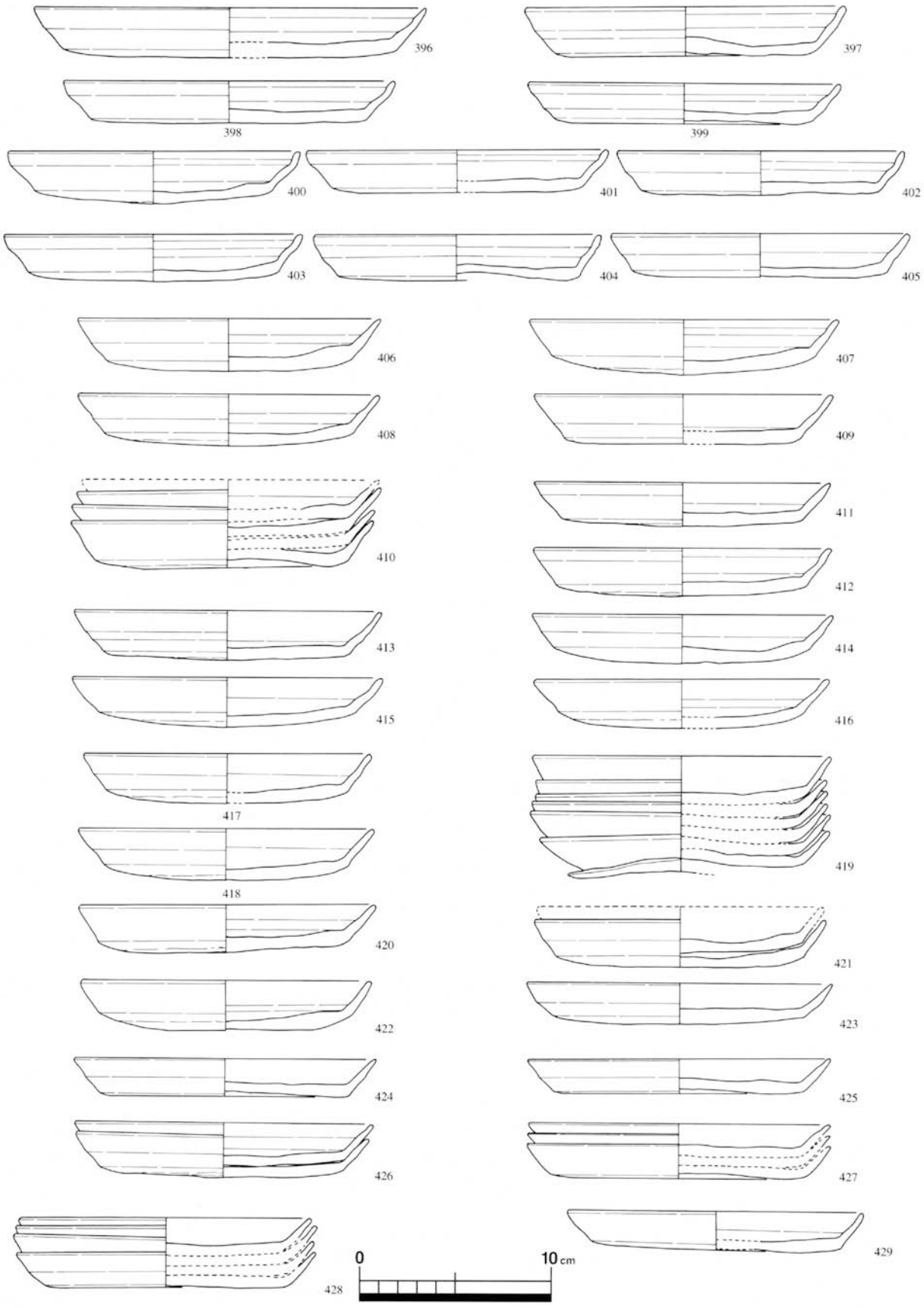
第26図　D区３号窯灰原出土須恵器（10）（S=1/3）



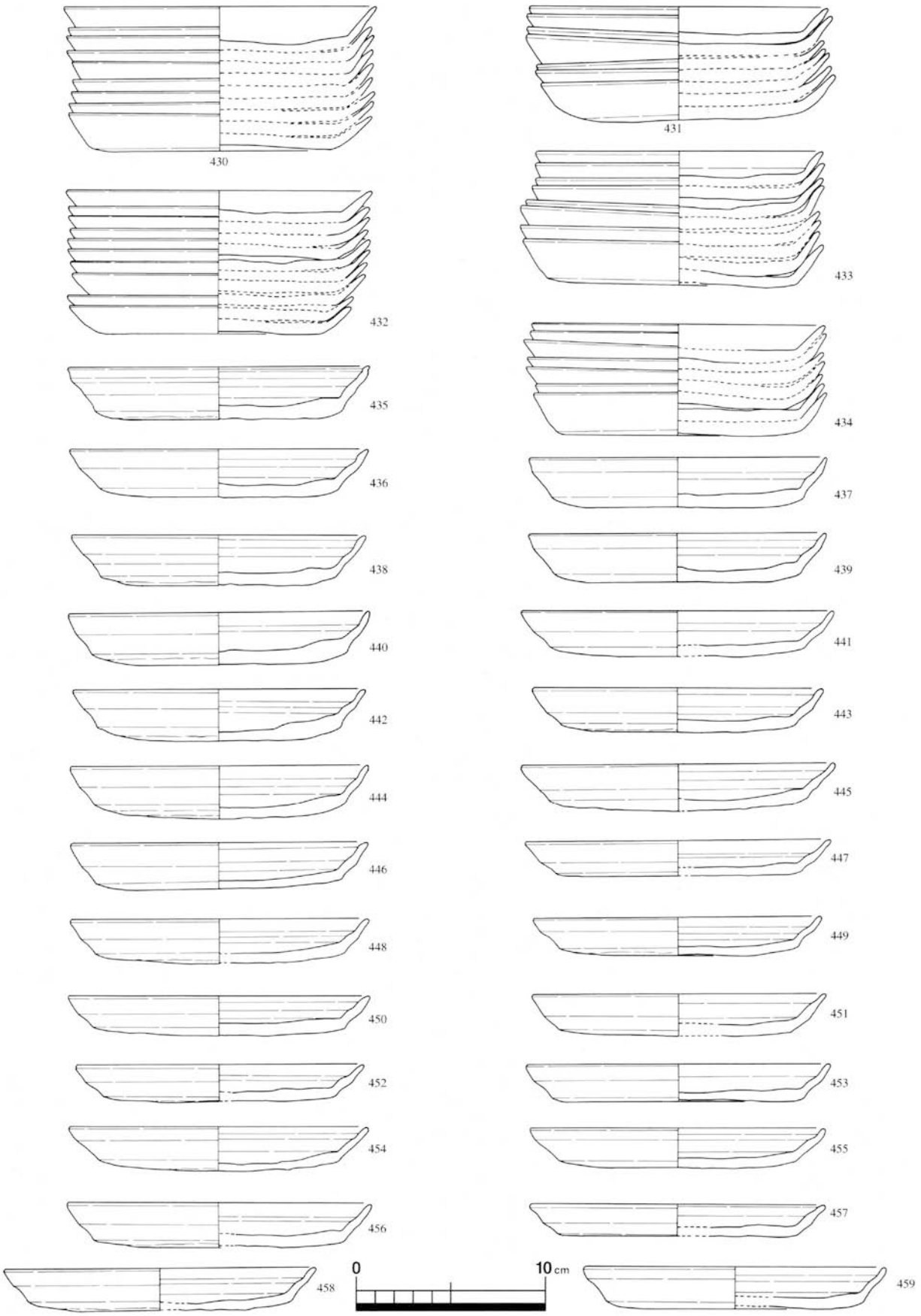
第27図　D区３号窯灰原出土須恵器（11）（S=1/3）



第28図　D区３号窯灰原出土須恵器（12）（S＝1/3）



第29図　D区３号窯灰原出土須恵器（13）（S＝1/3）



第30図　D区３号窯灰原出土須恵器（14）（S=1/3）

りのＣ1a類（474・475）と体部短くなり若干小型化するＣ1b類（476～488）、Ｃ1b類より一層体部外傾して低平化するＣ1c類（489～498）に細分される。C2類は、体部立ち上がりの立つＣ2a類（499・500）と体部短くなるＣ2b類（501～506）に細分。C3類は体部立ち気味のＣ3a類（507～512）と体部外傾して開くＣ3b類（513～523）、底部切り離し面小さく体部外傾するＣ3c類（524～529）、底部平坦で体部境に稜をもつ、特に体部ロクロヒダの顕著なＣ3d類（530～536）に細分される。Ｃ類は、青灰色の焼きのやや甘いものもあるが、暗灰色系の焼きのよいものが大半を占め、特にＣ1c類とＣ3d類では黒く降灰し、暗灰色を呈す焼きの強いものにほぼ限られる。Ｃ1c類とＣ3d類とで２枚重ね焼き溶着した資料も確認されており、この資料ではヘラ記号「｜」が両者に記されている。ヘラ記号は上記の２類型で確率高く確認される以外は、１割に満たない数値であり、種類もほぼ「｜」に限られるという特徴をもつ。

《盤Ｂ》　当窯の盤Ｂ出土は少なく、衰退時期にあることを示している。体部の器形から、体部直立気味に立つ深身器形のＡ類（541・542）と体部外傾する浅身器形のＢ類、小型で体部が段を形成して反る器形のＣ類（562）に分けられる。Ａ類とＢ類は、Ａ類が少数派、Ｂ類が一般的器形で、両類型の共存は、Ⅳ1期の盤Ｂ盛行期から継続して見られる。Ｃ類については、体部の作りや小型足高高台を呈すなど、８世紀から続く盤Ｂ系統の器種ではなく、Ⅴ期に出現・顕在化する特殊器種である。施釉陶器の段皿を模倣した可能性もある。

Ｂ類は体部立ち上がりに境をもつB1類と境が丸く不明瞭となるB2類に分けられる。B1類は、底部厚く体部立ち気味に立ち上がる重厚な高台をもつＢ1a類（550）と底部厚手で体部外傾、小型高台が付くＢ1b類（544・545）、体部長く強く外傾する器形で高台が体部境のかなり内側に付くＢ1c類（551・552）、高台の付く位置はＢ1c類同様だが、体部短く小型のＢ1d類（546～549）、体部外傾強い小型法量で、体部境に高台の付くＢ1e類（543）の５細分される。B2類は、比較的小型の高台が踏ん張って付けられるが、体部器形から、体部内湾気味に立つＢ2a類（553～555）と体部やや外傾するＢ2b類（556・557）、体部外傾強く口縁部外反するＢ2c類（558～560）に細分される。盤Ｂに目立つ底面ヘラ削り調整は、Ａ類とＢ1a類、Ｂ1b類など古手の様相をもつ類型で目立った以外は、削り省略の傾向が強く、全体での割合は１割程度まで減少している。また、焼き色については特定の類型（Ｂ1d類、Ｂ1e類、Ｃ類など小型を呈す類型）に灰白色系の焼き締まり強いものが目立つなど、類型との対応が確認でき、通常の大型の類型には、青灰色ないしは青灰白色の焼き色が目立つ。

《重ね焼き》　いずれの器種も同じ法量・器形類型のものを正位で重ねる焼き方であるが、坏Ａと盤Ａで重ね焼き状態で廃棄された資料が確認される。坏ＡはＥ1b類とＥ1c類の各類型どうしの重ね焼きが２単位で、いずれも灰白色の生焼け品である。溶着資料ではなく、窯出し時に搬出されず、重ね焼き状態で現地に残されたものと判断される。これに対し、盤Ａはいずれも溶着資料で、Ｂ類とＣ類にのみ確認される。Ｃ類について既に述べているので、Ｂ類についてのみ述べると、Ｂ1a類で３件、Ｂ1b類で８件確認される。７枚程度溶着したものが目立つが、最多で10枚確認でき、さらにこの資料では上下に重ね焼き痕跡が確認される見られた。盤Ａは比較的焼きの強いものが目立ち、焼成部の前半に窯詰めされたものと予想されるが、天井の高さなどからすれば、さらに高く重ねられたものと予想される。越前丹生窯跡群のⅥ2期に位置付けられる鉢伏２号窯では30枚前後重ねられたものが多数確認されており、最大40枚を越えるものも確認されている（福井県埋文1990）。Ｂ1b類の重ね焼き資料では溶着を防ぐため、製品間に藁状の植物が入れられており、それが火襷状となったものも確認される。Ｃ類では異なる器形類型が重ね焼きされる事例を確認したが、Ｂ1a類とＢ1b類では全て同類型のもののみを重ねており、類型の混在は認められない。重ね焼き資料では坏Ａでもそうであったように、同類型のみを重ねる事例が多く、Ｃ類は異例と言える。

③瓷器系食膳具（ⅢＡ・ⅢＢ・埦Ａ・埦Ｂ）

《皿Ａ・Ｂ》　ⅢＡはⅢＢの高台部の欠落した器形を呈すもので、口径や体部器形に違いは見出し難い。数量も極めて少なく、一つの器種として捉えるよりも、ⅢＢの亜種として捉えるべきものである。

ⅢＢは高台器形から断面方形高台をもつＡ類と先細形状で端部丸い三角形高台のＢ類に分けられる。Ａ類はさらに高台器形から、やや足高の踏ん張る高台をもつA1類と高目の高台が付くA2類、低めで幅広高台がしっかり付くA3類に細分。Ｂ類は細長い高台のB1類（580）と低くて雑なB2類（581）に細分される。Ａ類は概して低平なⅢ

形で台径の大型なものが目立ち、B類は高台径小さい埦形を基本とするが、A類については、体部器形からさらに細分される。A1類は体部開き皿形を呈するA1a類（563・564）と体部やや埦形を呈し口縁部外反するA1b類（565）に、A2類も同様に皿形のA2a類（566～568・570・571）と埦形のA2b類（569）に、A3類は台径大きく体部皿形を呈するA3a類（572～577）と厚底で体部埦形を呈するA3b類（578・579）に細分される。

底面に糸切り痕を残すものは少なく、削り調整を行うものは1割程度だが、ナデ調整で消しているものを加えると、底面再調整は6割近くに上る。ヘラ記号率は5％未満と極低く、焼き色は青灰色系の焼きか灰白色の生焼け品にほぼ限られる。

《埦A・B》　埦類の占有率は、皿Bの1割程度と少なく、定着前の様相をもつ。埦Aは図示できたもの1点で、体部下位から底面に削りを伴い、体部内湾気味の薄手のもの。底部破片からではあるが、削りを伴うものが半数近くを占める。埦Bは高台から断面方形高台のA類と先細端部丸いB類に分類。A類は体部内湾気味の通常の埦器形を呈するA1類と器高低く体部浅身となるA2類に分けられる。A1類（584・586・587）は、いずれも体部薄く、細かなロクロヒダが入る丁寧な作り。高台形はしっかりした形態のものが踏ん張って付き、体部下位から底面にかけて削りを施す。A2類（585）は高台や体部器形などA1類に似るが、削り調整しないものである。焼き色は皿類同様、青灰色系が主体を占めるが、584のみは灰白色に強く焼き締まる特徴をもち、体部器形も異なるなど特殊品的色彩を帯びる。B類は高台径小さく体部まっすぐ外傾する器形で、やや作りが雑なものである。皿BのB類と対応関係にあるものと予想する。

《重ね焼き》　無蓋坏型器種同様に、身のみを正位で重ねる焼き方でほぼ占められると予想できるが、実際には、合わせ口にしたものを1単位として、重ねて行く方法が採られている。この重ね焼き方法は、無蓋須恵器食膳具では見られないものであり、体部内面に発炭材を入れる必要がある内面黒色土師器食膳具の焼き方に見られるものである（南加賀窯跡群と能美窯跡群で普及する焼き方。北野1996）。合わせ口法は、特に皿Bに顕著で、6割近くで確認され、埦BではB類でのみ見られる。当窯跡群で顕在化するこれらの瓷器系食膳具は、施釉陶器模倣として出現・定着する可能性をもっていた訳であるが、このような内面黒色土師器に見られる重ね焼き法が採られていることを考えれば、その導入には土師器食膳具における当器種の先行導入が強くかかわっていたことを予想させる。合わせ口法は、これ以降、土師器では存続するが、須恵器では顕在化しない焼き方であり、その導入期に見られる現象であろうと評価する。

④その他の特殊食膳具

器種名の特定が難しいものをここでまとめておく。

699は体部に稜をもつ小型鉢で、体部薄く丁寧な作り。仏器的なものか？

700は無台埦のミニチュア品で、小型埦と呼べるもの。小型坏衰退後、その系統で生産された器種か？

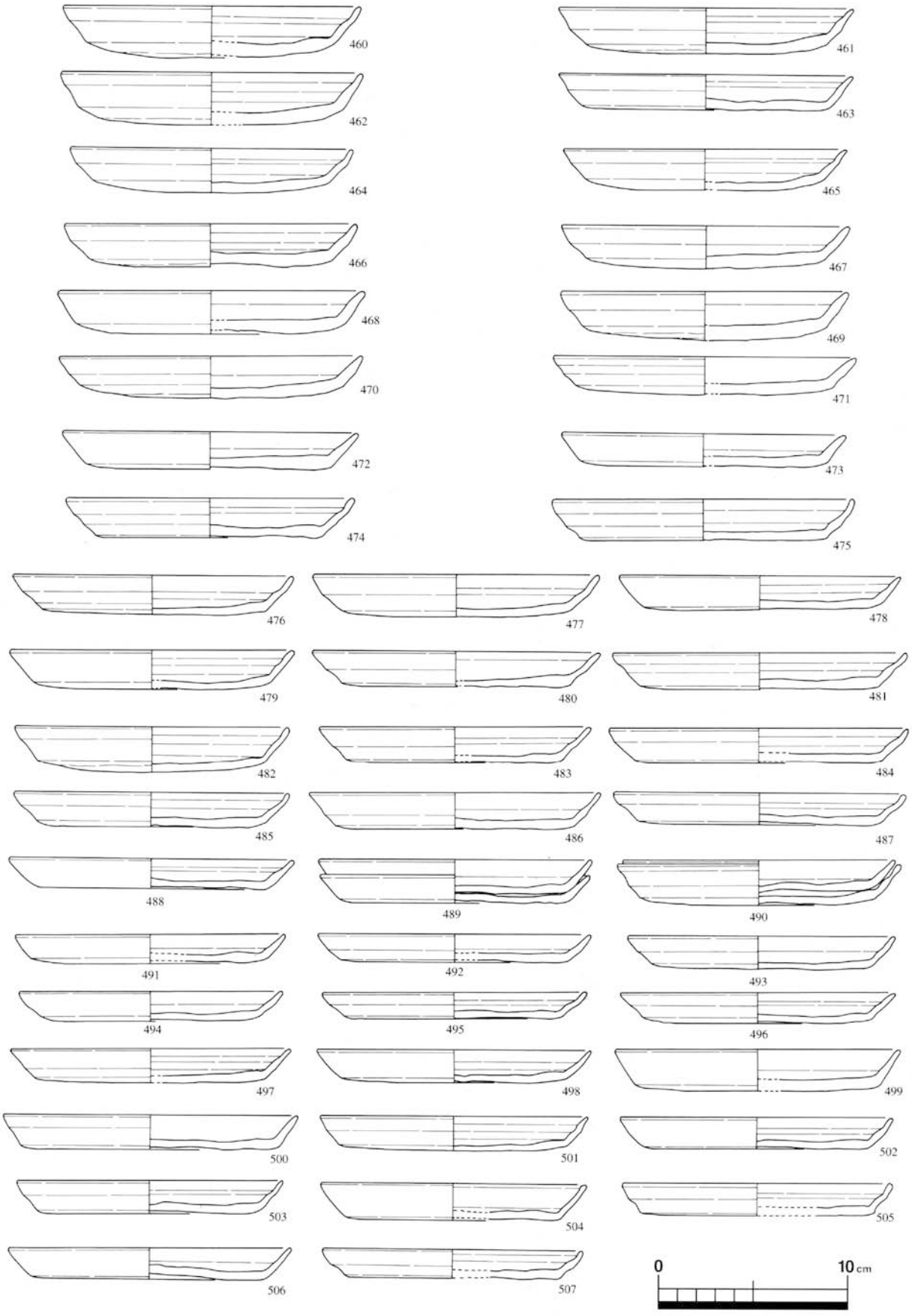
701は丸底埦（鉢）器形の底部中央に径2.4cmの円孔が開くもので、ロート状器形を呈すものである。底部の穿孔部は粘土を巻き付けて突出させており、注ぎ口となる。ロート状の鉢は、7世紀前半の戸津六字ヶ丘2号窯（小松市1993）で確認される以外は、類例を知らず、特殊品と考えられる。

702は面取り整形した小型の板状把手破片である。把手剥離面から坏などの食膳具に付くものと予想され、双耳坏と呼ばれる体部両側に板状把手が付く坏B身を想定したい。双耳坏は、8世紀中葉に美濃洲衛窯跡群で出現し、東海諸窯を中心として、東北に分布圏を拡大しながら、9世紀代へと継続生産される特殊器種である（利部1998）。北陸でも越前丹生窯跡群、越中梅檀野窯跡群及び射水窯跡群で、8世紀後葉から9世紀代の生産が確認されている。

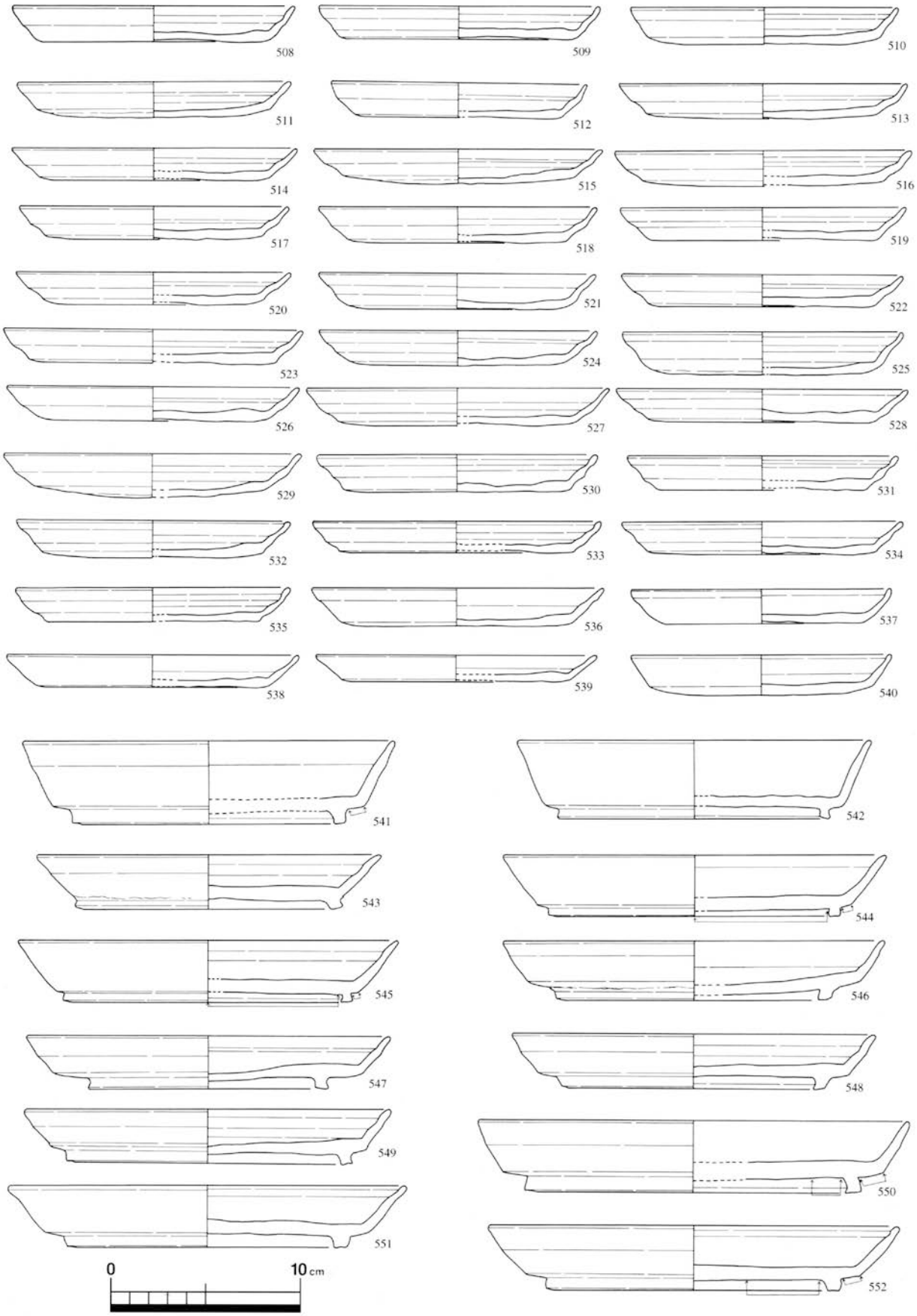
703は径6.5cmの偏平形小型蓋で、口縁部は折り返しをもたない。落とし蓋状ではあるが、径などから考えて、コップ形の蓋である可能性をもつ。

⑤小型貯蔵具（小型壷・小型瓶・小型平瓶）

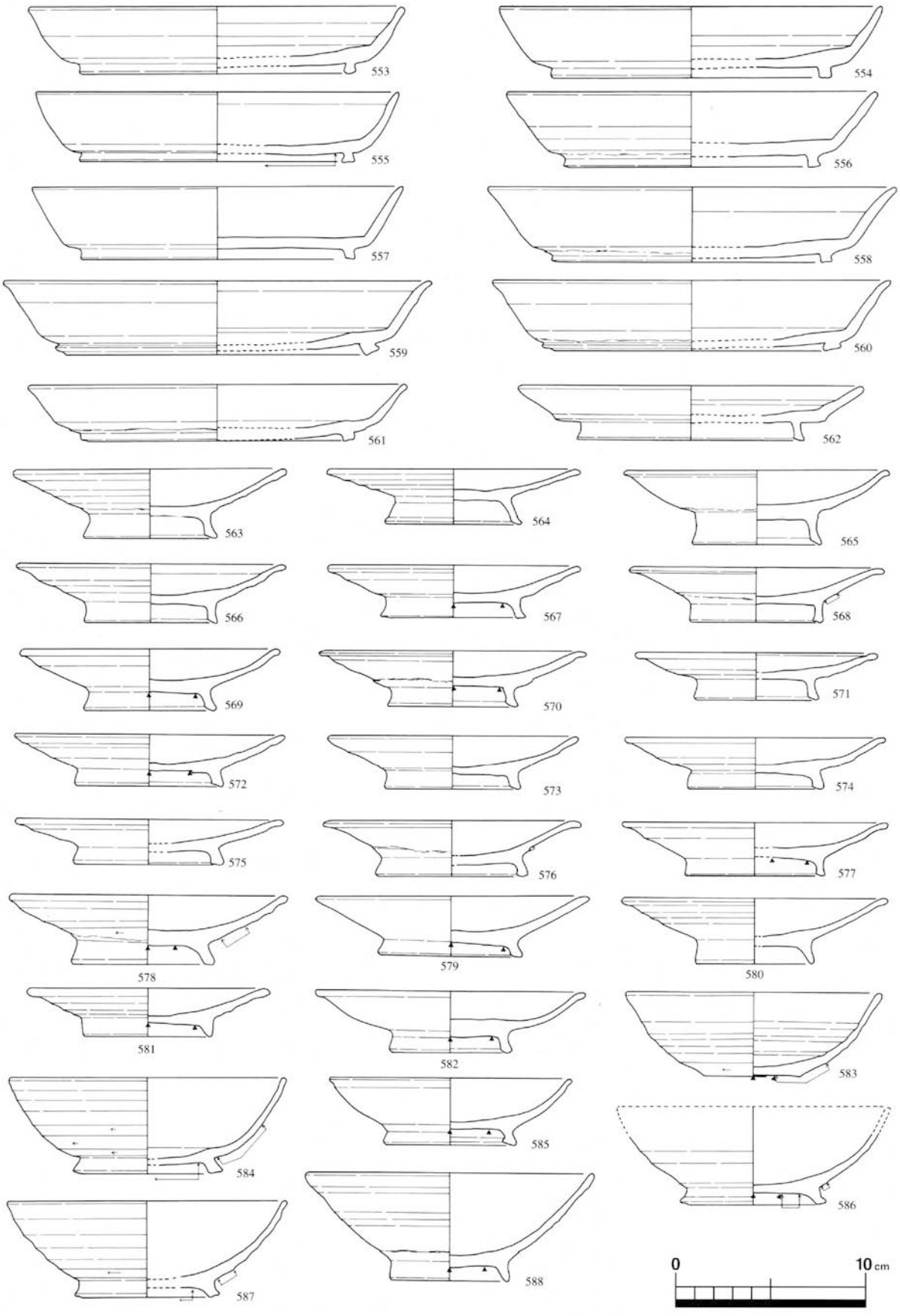
《小型壷》　小型壷は肩張短胴形の小型壷B類と肩丸広口形の小型壷E類が出土している。小型壷B類（705）は厚手で極小型の製品で、ミニチュア品として位置付けられる。また、小型壷A類の蓋の可能性をもつ無鈕蓋（704）が出土しており、これは薄手で作りの丁寧なものである。小型壷E類は、容量から0.5ℓ以上の小型品



第31図　D区３号窯灰原出土須恵器（15）（S＝1/3）



第32図　D区３号窯灰原出土須恵器（16）（S＝1/3）



第33図　D区３号窯灰原出土須恵器（17）（S＝1/3）

(708・709) と0.5ℓ未満のミニチュア品 (706・707) に分けられ、ミニチュア品は小型品よりも一回り小型の祭祀的用具、小型品は実用品として使われたものと予想する。

《小型瓶》　長頸瓶形と徳利形 (小型瓶E類) が出土している。長頸瓶形 (710・711) は胴部欠損するため、定かではないが、口頸部器形から考えるに、球胴形の小型瓶C類と予想する。徳利形 (712・713) は口頸部の比較的長めに立つ古手の形態。当資料がⅥ1期に位置付けられたとすれば、徳利形小瓶の中では初期の事例に属す。また、714は1ℓ未満の容量のため、小型瓶としたものだが、原型をもつようなミニチュア品ではなく、実用器種としての性格をもった特殊小型瓶として位置付けできる。

《小型平瓶》　小型平瓶の可能性をもつ把手破片が1点 (715) 出土している。折れ曲がった板状把手で、把手の断面形や折れ曲がり方から、小型平瓶が妥当と考える。

⑥煮炊具 (釜・小釜・鍋)

釜・小釜・鍋ともに、土師器煮炊具器種であるが、当窯から出土するものは還元焔焼成されたものである。やや焼きの弱いものは白色ないしは灰白色、焼きの強いものは灰色ないしは青灰色を呈し、須恵器と同様の焼きではあるが、若干発色具合に独特のものがある。これらは、所謂須恵器窯内焼成品と言われるものだが、本来の酸化焔焼成品が還元化したための焼成失敗品と位置付けられるものである。須恵器窯の焼成段階では通常、口を上向きで窯詰めするものと予想されるが、681では口縁部に窯土が付着し、内面降灰しないなど、伏せて焼いた痕跡を残すものがある。窯内焼成の可能性も残されているが、強く還元焼成された製品は窯内の部材として使われた可能性も考慮する必要があろう。

全体的な器形は、各器種で異なるが、口縁部器形は頸部で「く」の字屈曲し、端部で上につまみ上げる点で共通し、変化の様相も同じように見られる。当窯の時期であるⅤ期からⅥ期へは、胴部カキ目調整の省略と器肉薄手化、口縁端部の摘まみ上げが伸びて「S」字に発展するなど、大きく変化する時期にあたる。具体的には680と682が古手、681と684が新手と位置付けでき、それぞれⅤ2期とⅥ1期に対応するものと予想する。このような変化は胎土においても見られ、白色大砂粒 (混和材) を多量に混在させる土師器系胎土から通常の須恵器と同様の意識的混和材を含まない須恵器系胎土へ変化する。胎土変化は、器形と同様、Ⅴ期からⅥ期へかけて転換するものだが、厳密に、器形変化と一体性をもつかは不明である。ただ、当窯資料では古手と新手で胎土が異なり、対応関係をもつ。なお、釜の胴部下半に残される叩き・当て具文様については、外面はHaを基本。内面は右表のように、He類とSD類が主体を占める。当て具をそのまま残すものは少なく、ナデを伴う場合が大半で、完全にナデ消すものを含めると、9割近くを占める。

当て具文様	破片数
Ha類＋ナデ	5(4%)
He＋ナデ	34(30%)
SDのみ	2(2%)
SD＋ナデ	26(23%)
Daのみ	8(7%)
ナデ消し	38(34%)

第5表　釜内面当具文構成

⑦貯蔵具 (鉢・壷・瓶・甕)

北野分類に従えば、鉢で4器種、壷で3器種、瓶で3器種、甕で3器種出土している。

《鉢》　鉢では槽形深鉢と呼ばれる鉢AⅢと括れ鉢と呼ばれる鉢B、椀形鉢と呼ばれる鉢C、厚底鉢と呼ばれる鉢Fがある。主体は鉢Bで、鉢全体の78%を占め、他は1割前後である。

鉢AⅢ (594)　田嶋Ⅲ期出現以降、把手の欠落はあるが、細々と存続する器種で、当期ころまで生産が継続される器種である。体部下位から底面に削りを施し、沈線を2条巡らすなど、丁寧な作りのもので、特殊容器と位置付けられる。

鉢B　形態的に8世紀代からの流れを汲む器種ではあるが、定型化して南加賀窯跡群の量産器種となるのはⅥ期で、当資料は定型化される段階の資料ということになる。口径から17㎝以上を大型品、それ未満を小型品とするが、特に大型品の中で口径25㎝以上のものは特大とする。

大型品は、体部上位と頸部で屈曲する特徴をもち、体部屈曲部ないしは頸部に沈線を1条巡らすものを基本とするが、体部の屈曲度合いから、屈曲の明瞭なA類 (特大－595・596、大－599～602) と屈曲が丸味帯びるB類 (598・603・604)、屈曲弱く体部上位張る程度のC類 (597) に分けられる。主体を占めるA類は、口頸部直立気味に長く立ち上がる器形を呈し、深身となる特徴をもつのに対し、B類は口頸部短く、やや浅身器形、C類も

浅身で、口頸部外傾して最大径を口縁部にもつ。小型品も大型品同様の基準により、屈曲明瞭なA類（606～608）と屈曲丸いB類（609）、口縁部最大径をもつC類（605）に分けられるが、さらに、体部中位付近に最大径をもつ壺形のD類（610・611）が加わる。D類については、小型品にのみ見られるものであり、小型広口壺との折衷的形態と考える。焼き色は大小ともに、C類が焼き締まり強い灰白色系、D類も焼きの強い灰色系なのに対し、A類・B類は青灰色系が主体となり、やや焼き締まりの弱いものが目立つ。

鉢C　越前では平鉢と呼ばれ、Ⅵ期に顕在化する器種である。南加賀窯跡群ではⅥ1期に出現が確認されているが、越前丹生窯跡群ではⅤ2期に出現が確認されており、溯る可能性もある。口径30㎝弱を測る浅鉢器形が基本で、高台を付すものが一般的である。体部器形から内湾気味となるA類（591・592）と体部直線的に外傾するB類（593）に分けられる。

鉢F（589・590）　ぶ厚く突出する底部をもつ深鉢で、6世紀以降、継続して生産される器種である。基本的形態は出現期から変わらないが、体部上位から口縁部にかけて若干形態変化している。当窯資料の器形は、体部上位付近で膨らみ、そこから口縁部にかけて内湾気味となる器形で、体部上位から口縁部に稜を2段もつ。

《壷》　壷では球胴有蓋短頸器形の壷A、肩張り広口壷器形の壷E、肩丸広口壷器形の壷Fが確認される。

壷A　所謂薬壷型と言われる短頸壷で、有蓋を基本とする。北野分類では短頸壷を狭口短胴型と狭口長胴型に分け、前者を壷A、後者を壷Bとしているが、当窯出土のものはその中間的数値に分布するものがあり、帰属が難しいため、全て壷Aとして扱った。

626～629は壷Aの蓋で、口径12㎝前後、いずれも天井に削りを伴う。つまみは坏B蓋に類似する器形。身に正位で重ねるものと逆位で重ねるものとがある。壷Aは球胴を呈す630・632とやや長胴となる631に分けられる。台は大型で足高の脚台状のものが付き、端部折り曲げ装飾されるものが半数を占める。台内面には入れ子状に専用焼台の溶着痕跡がつき、比較的大型の焼台が使われていたことを示している。

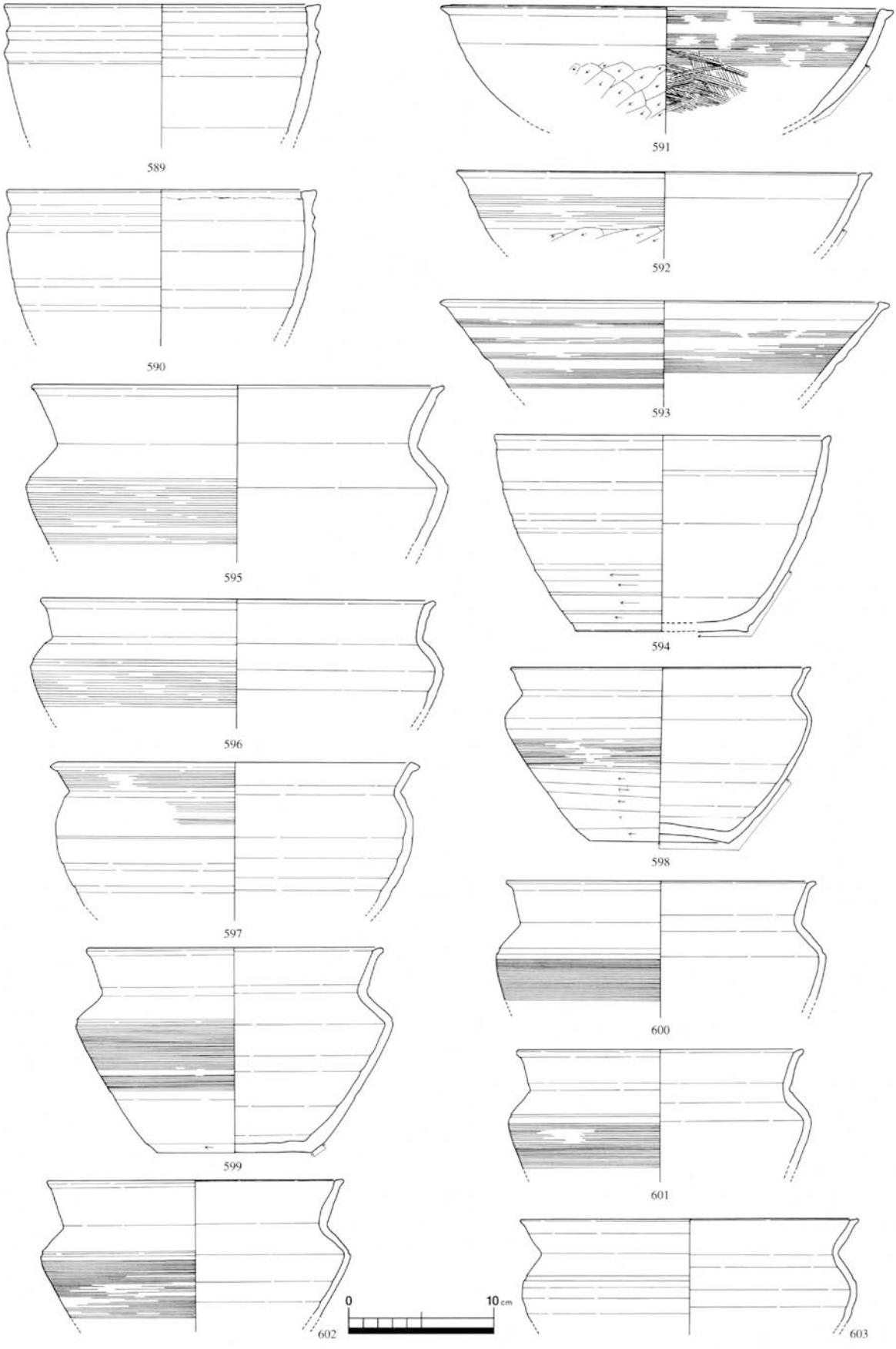
また、壷Aに属すものだが、胴部最大径付近と胴部下位の上下2段に小型の把手をそれぞれ4カ所交互に付す633が出土している。所謂四耳壷であり、耳の形態は端部面取り整形の台形状を呈し、上方から未貫通の穿孔が施される。胎土良質、焼成堅緻の精製品で、胴部下半を削り、胴部中位以上に2条1単位の沈線を3段に巡らす。短頸壷に縦穿孔の耳を四箇所付す四耳壷は、通常、突帯の巡る突帯付四耳壷であり、突帯をもたない同形態の四耳壷は南加賀窯跡群以外では類例を知らない。逆に南加賀窯跡群では突帯を付すものがなく、短頸壷であることが特徴である。南加賀窯跡群ではこれまでに戸津窯a灰層（Ⅴ1期）で1例確認されている（小松市1991）。

壷E（612～616）　鉢BのA類器形に類似しており、尚且つ、壷Eが有台を基本形とするため、当窯資料を壷Eに該当させることは無理があるかもしれない。が、鉢Bよりも厚手で胴長であること、口縁部から胴部下位にかけて4条以上の沈線が巡らされることなどから、鉢Bとは意識的に区別されていることを重視し、壷Eとした。鉢Bと壷Eは、その祖形から異なるものであり、当窯の現象は異例と言えるが、鉢BのA類器形が口頸部長くなり、やや深身を呈す現象は、壷Eの影響と予想され、両器種間で相関する関係をもっていたものと考える。壷Eの定型化と盛行は、Ⅳ2期からⅤ期のことであり、高松押水窯跡群と能登諸窯で顕在化する。南加賀窯跡群では顕在化しない器種であるが、当窯の壷Eは、その流れの中で出現したものと評価される。この時期に鉢Bが定型化され、量産段階に入ることを考え合わせると、南加賀窯跡群における鉢Bの顕在化は、Ⅴ期の壷E出現と強い関連性をもつものと評価されよう。

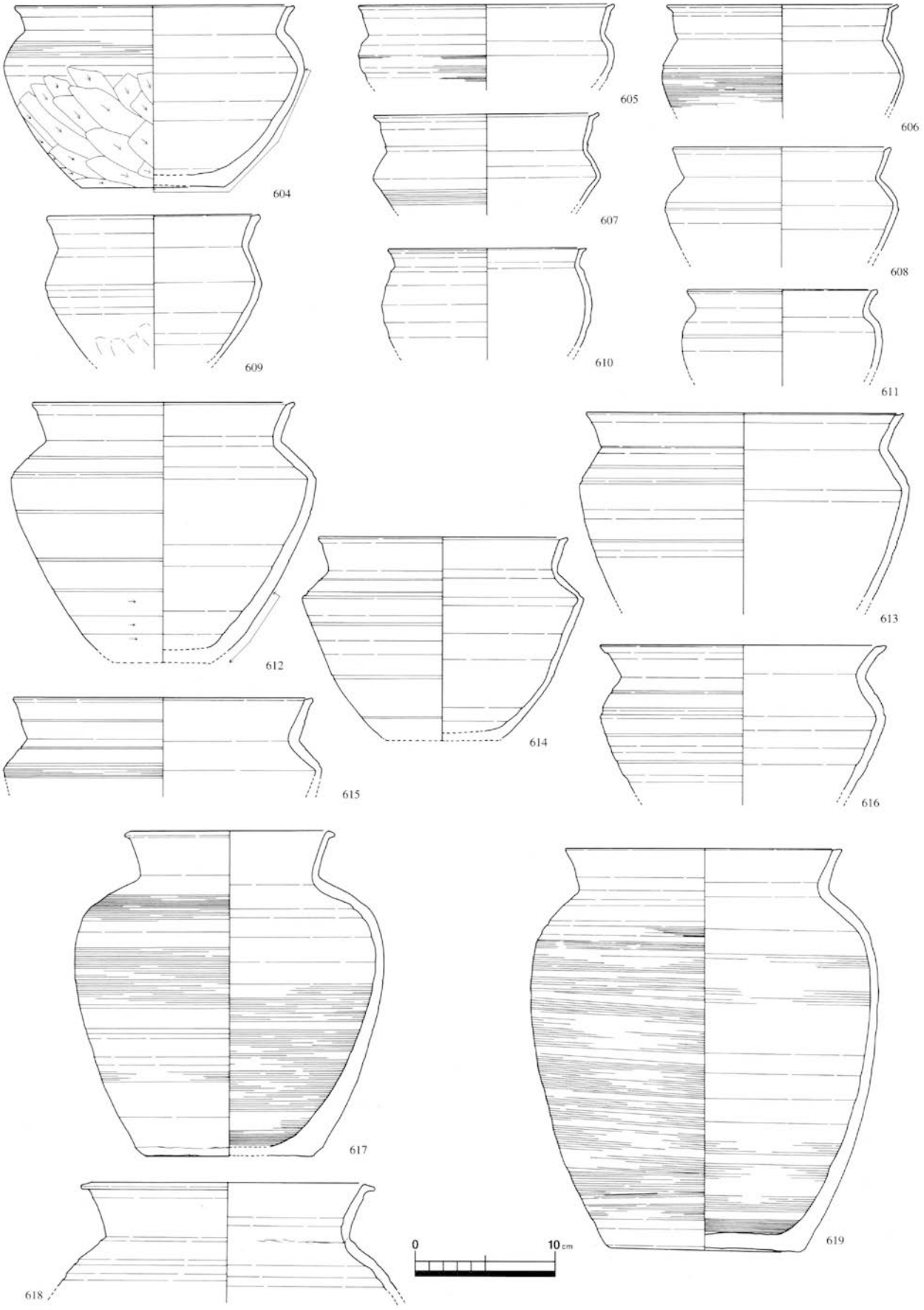
壷F（617～625）　なで肩の広口長胴壷で、無蓋・無高台の器種である。南加賀窯跡群でⅤ期からⅥ2期にかけて顕在化する器種で、ピーク時は貯蔵具の3割近くを占める。当器種は器高によって、27㎝以上の大型法量Ⅰ類と20～24㎝の中型法量Ⅱ類、20㎝以下の小型法量Ⅲ類に分けられるが（小松市1992）、当窯ではⅢ類の確認はなく、Ⅰ類が過半数を占める。底部に専用焼台の溶着痕跡が残る。

《瓶》　瓶は肩張り長頸器形の瓶Aと、丸肩長頸器形の瓶B、長胴器形の瓶Dが出土している。

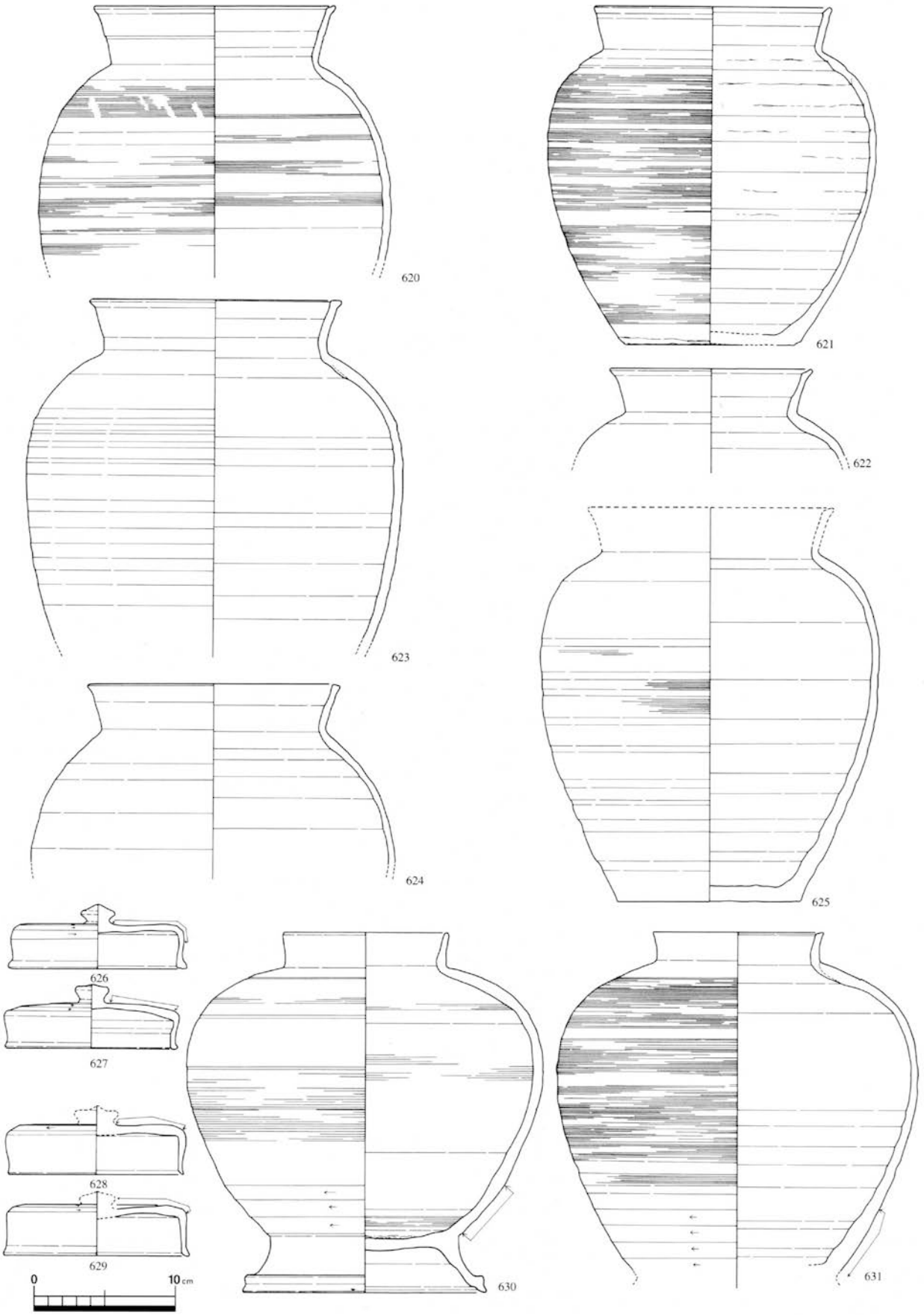
瓶A（639）　Ⅱ2期に出現し、Ⅴ1期の瓶B出現とともに衰退消滅する器種で、当窯でも2点確認されるだけである。全体的に器肉は薄く、胴部上位内面に絞り込みのヨジレ痕跡が残る。頸部は比較的太く、口頸部短めに立つ。口縁部は端部を外屈させるだけで、瓶Bの口頸部器形とは明らかに異なる。胴部の小型化と口頸部の短縮、



第34図　D区３号窯灰原出土須恵器（18）（S＝1/4）



第35図　D区３号窯灰原出土須恵器（19）（S＝1/4）



第36図　D区３号窯灰原出土須恵器（20）（S＝1/4）

頸部の太さなど、最末段階の様相をもつと言えよう。

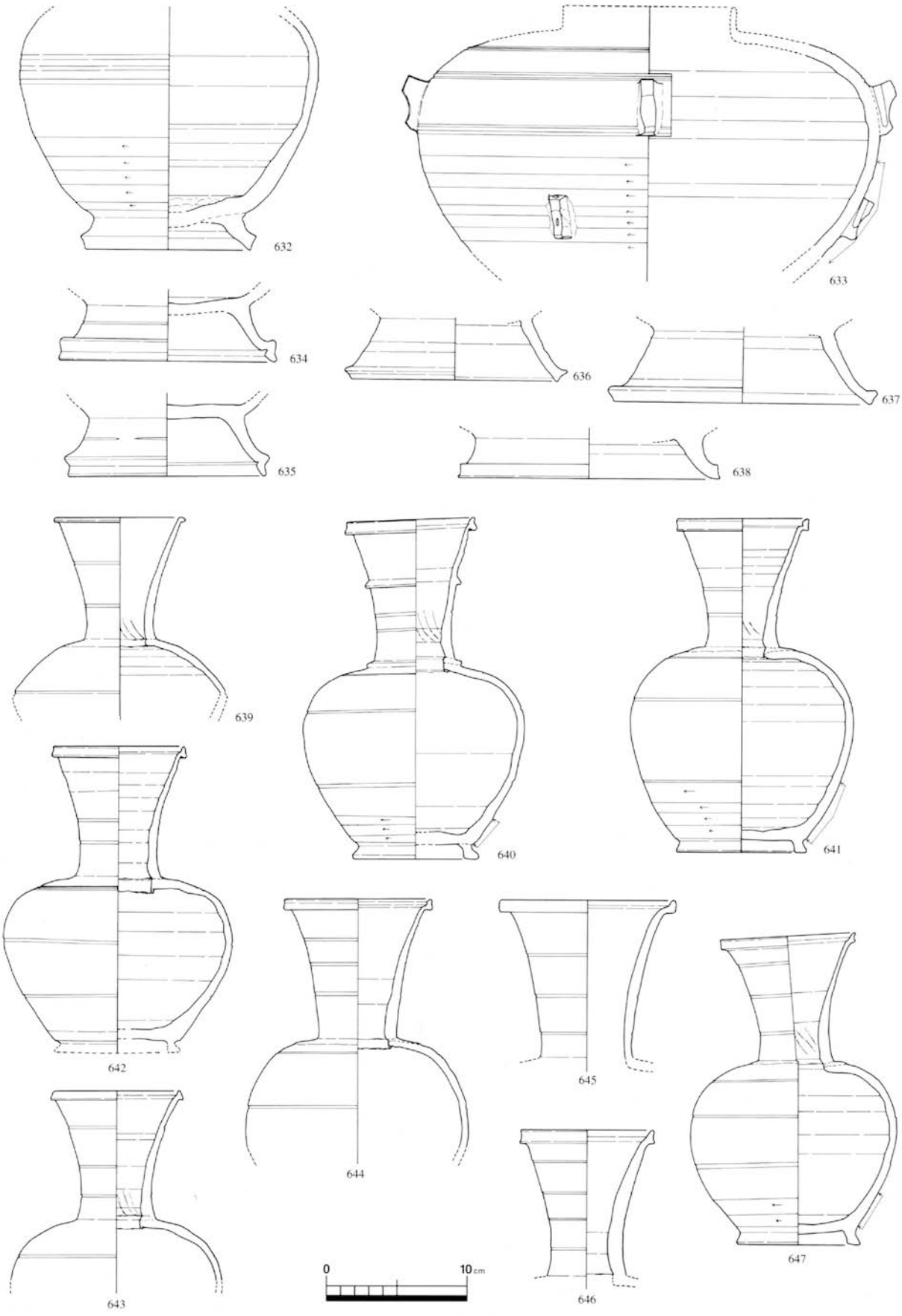
瓶B（640～652）　Ⅴ1期に出現普及する器種で、瓶Aとは丸肩胴部器形と口縁端部折り返し器形が異なる。当窯は瓶Bへほぼ転換する段階で、胴部が丸く張る器形をもつ。この胴張り器形は、胴部成形方法及び口頸部接合方法に起因するもので、具体的方法については考察で述べるが、一般的には3段接合と呼ばれるものに相当する。頸部は細く、口縁部へ若干外反するが、全体的には細長い形状をもつ。口縁部器形から、口縁部外屈した後に上に折り返すa類（640～645）と口縁端部の上・下端を摘まみ出すだけのb類（646・647）に分けられる。当窯ではa類が主体を占めるが、Ⅵ2期の戸津窯資料（戸津11・10・9・8号窯を示す）ではb類にほぼ統一されており（小松市1992）、a類からb類へ器形変化することが予想される。また、底部切り離しについては、651で糸切り痕跡を確認しているが、他は底面削りや底面ナデ調整によって、切り離し痕跡を消している。底面ナデ調整するものも胴部削りの入るものはほとんど底面も削りが入っており、高台貼り付けの際に底面ナデしている。高台内面に専用焼台の溶着痕跡をもつものは少なく、直接窯土が付着するものが多い。

瓶Bには頸部突帯の巡る特殊な640が出土している。頸部接点と口頸部中位に2段の突帯が巡るもので、頸部接点のものは胴部円盤閉塞の際の円盤貼り付けをそのまま突帯化したもの、口頸部中位のものは摘まみ出して突帯化したものである。このような摘まみ出し突帯は当窯F地区下灰出土の鉢F体部上位付近の突帯でも見られるもので、対応する内面窪みが確認される。胎土良質、焼成堅緻の精製品で、頸部に1段突帯が巡る環状突帯付長頸瓶と呼ばれる特殊長頸瓶に包括されるものである。環状突帯付長頸瓶は、東海諸窯を起点として東北へ拡大分布する器種で、北陸では信濃経由で上越地方を起点に導入される（利部1998・笹澤1997）。越後で確認例が多く、その分布圏は越中へと広がるが、加賀・能登では確認例を知らず、まして、当窯の2段突帯をもつ長頸瓶は環状突帯付長頸瓶の分布圏では確認されないものである。東海諸窯を起点に上越地方を経由して導入される在り方ではない、別の導入経路もしくは東海とは異なる地域を起点とする特殊器種導入を考える必要があろう。

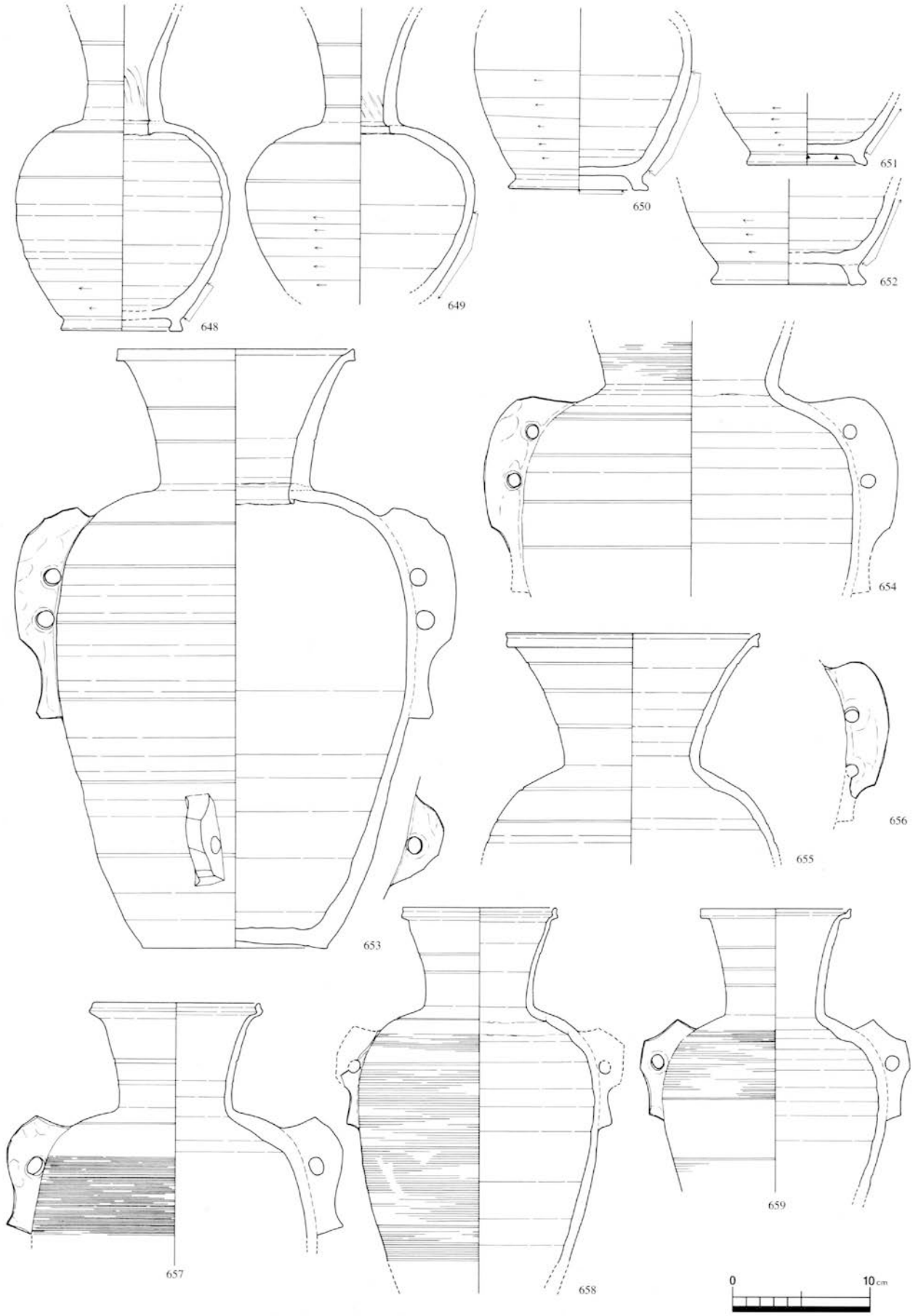
瓶D（653～679）　平底で長胴を呈す瓶で、南加賀窯跡群では胴部上位に把手の付く双耳瓶のみ生産している。Ⅳ1期に出現する器種だが、定量生産されるのはⅤ期以降で、当窯段階は定量生産から量産化の段階へ入る過渡期にあたっている。器高により40㎝以上の大型、35㎝前後の中型、30㎝以下の小型に分けられるが、それに対応して、耳の大きさと形態が、大型－大型耳で穿孔2穴（胴部下位に三耳）、中型－耳が小型化して2穴、小型－小型耳で1穴というようにそれぞれ異なっている。以上の3法量分化と耳形態の対応関係は、Ⅵ2期の戸津窯資料でも確認されたものであり（小松市1992）、定型段階である当期にそのような法則が整ったことを物語る。

以上の法量分化とは別に、口縁部器形を基準として3つに分類ができる。a類（663）は口縁端部のみ外屈する器形で、口頸部は全体的に円筒状、比較的小型の形態をもつ。b類（657～661・679）は口縁部外屈した後に上に折り返す器形で、頸部太く口縁部外反の弱い比較的短めの形態。この口縁部器形には、ぶ厚く面取りのしっかりした重厚且つ稜角的な耳が付く（657・658・670・649）。c類（653・655・664～668）は口縁端部の上下端を摘まみ出すだけの器形で、頸部やや細目で、口縁部に向かって外反ないしは外傾気味となる比較的口頸部長の長い形態。この口縁部形態には、比較的薄手の耳が付く（664・665・669・671・672）。以上の口縁部形態は、瓶A・Bでも見られたものであり、重複もあろうが、基本的にはa類→b類→c類で変化していると思われる。Ⅵ2期の戸津窯資料でc類器形にほぼ統一されていることから、b類からc類の変化時に、量産化の動きが活発化したものと予想する。底部に残る専用焼台の痕跡は、半数近く確認されるが、無高台食膳具の底部の溶着したものも定量確認される。

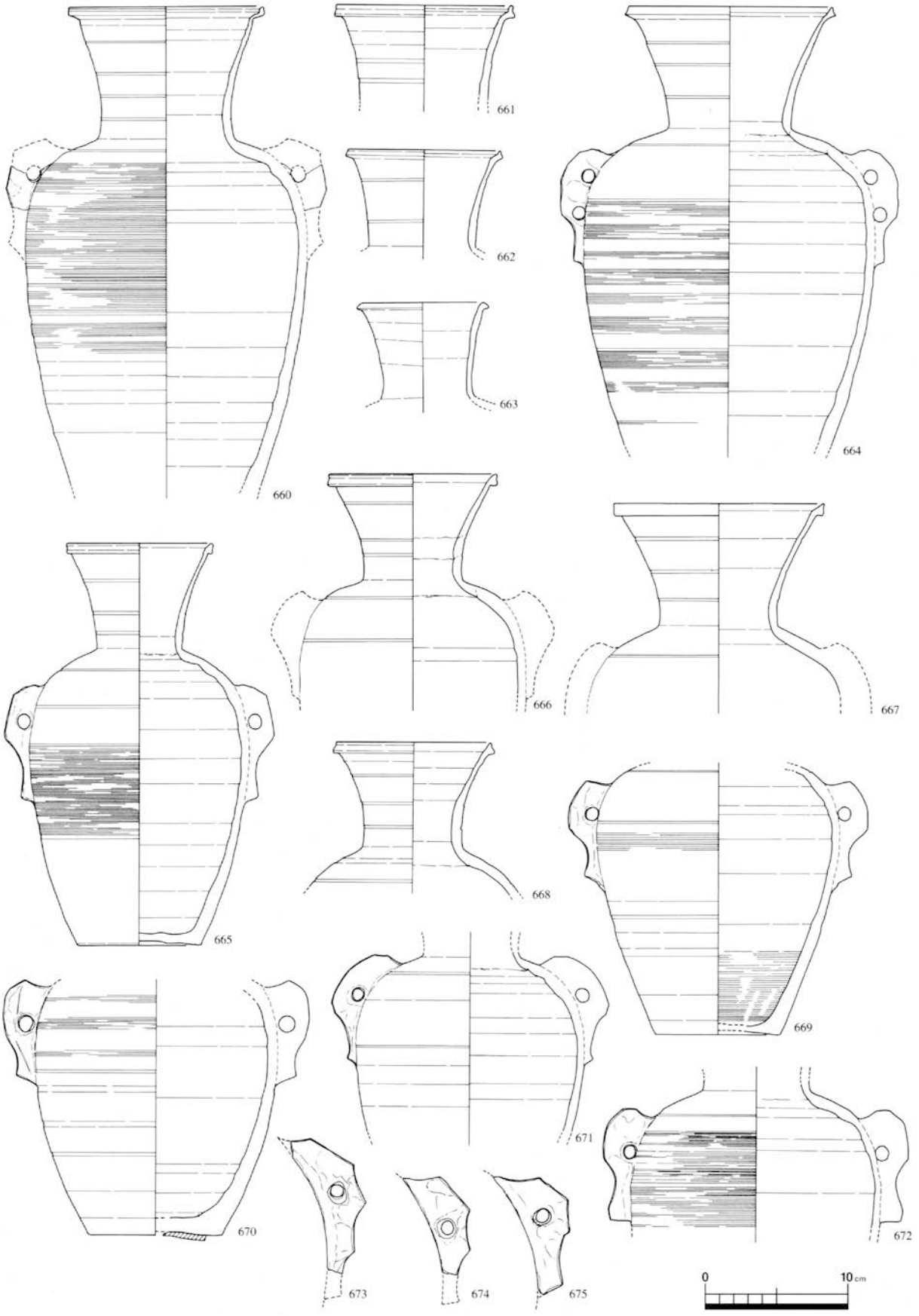
双耳瓶は器種名のとおり、両肩に把手が付く瓶であるが、出現期であるⅣ1期には両耳の中央下位にもう一つ把手が付けられる。つまり、三耳形態を呈していたものであり、釣瓶のように使われる耳の配置が、本来の把手の機能であったと思われる。三耳形態は出現期のみで、Ⅴ期には双耳形態へほぼ移行してゆくが、大型にのみ三耳形態が残存する。Ⅴ1期の戸津5号窯（石川県1979）で大型品に確認できるし、Ⅵ2期まで残存を確認している（戸津窯、未報告）。653は大型の三耳形態に該当するもので、両肩の耳は大型で重厚な作りの2穴穿孔、下位の耳も重厚な作りだが、1穴穿孔である。この653は口頸部の作りで、他の双耳瓶とは異なる特徴をもつ。つまり、通常の双耳瓶は頸部接合が別作り接合の痕跡をもたない継ぎ足しないしは積み上げ成形（内面に口頸部接合



第37図　D区３号窯灰原出土須恵器（21）（S=1/4）



第38図　D区３号窯灰原出土須恵器（22）（S＝1/4）



第39図　D区３号窯灰原出土須恵器（23）（S＝1/4）

の境をもたず、屈曲部丸く薄くなるもの）であるのに対し、653は瓶B同様の所謂3段接合と呼ばれる痕跡をもち、頸部厚手の作りをしている。加賀・能登の双耳瓶は一般的に653と同様の頸部成形痕跡をもつが、南加賀窯跡群では異例のものであり、上記の積み上げ・継ぎ足し成形が一般的である。南加賀窯跡群の場合、出現期から同様の口頸部成形であり、他の窯跡群とは異なるオリジナリティーをもつ。

《甕》　北野分類によれば、甕は、口頸部器形と胴部全体の器形を形式の目安とし、長頸で開く甕Aと短頸の甕B、短胴広口の浅甕を甕E、長胴狭口甕を甕Fに4分類される。また、同時に容量から80ℓ以上を特大甕、50～80ℓを大甕、20～50ℓを中甕、20ℓ未満を小甕に分類している。当窯の甕は全て短頸の甕Bに属すもので、分類の目安を容量に設定している。ただ、北野分類の容量設定は、従来筆者の捉えてきた甕容量のイメージと異なるため、ここで示す分類基準は、筆者がかつて行った分類をもとに提示する（小松市1999）。 なお、分類基準は、100ℓ以上を大甕、30～100ℓを中甕、30ℓ未満を小甕としているが、Ⅴ期以降、甕の小型化が進行するため、ここでは、大甕は80ℓ程度までを含め、中甕は70～20ℓ前後、小甕は15ℓ以下に設定し直す。

大甕（685）　破片のため、口径40㎝以上、胴部最大径60㎝以上のものを目安にしている。口頸部は短頸で、短く強く開く。口縁端部上下端を摘まみ出して狭い口縁部帯を形成し、無文のままである。頸部に別作り接合した痕跡はなく、継ぎ足したか順次積み上げた痕跡をもつ。

中甕（686～697）　中甕はⅤ2期頃に出現する新型長胴甕の存在により、2つに分類されるため、基本的寸法も異なる。従来の短頸で胴張器形をもつものをa類とし、新型の長胴器形のものをb類として区別する。

a類（686～688）は、口径25～35㎝、胴部最大径45～55㎝程度、容量50㎝以上を目安にしている。口頸部は大甕と基本的に違いはなく、やや薄くなるものがある。胴部は張りをもち、底部は平底風となる。平底風とは底部が全く叩き成形されない、成形台痕跡をそのまま残すような平底甕とは異なり、底部を叩き成形するもので、完全なる丸底に叩き出さず、一部を平底のまま残すものである（697）。 従来の丸底器形も存在するが、当窯では平底風が主体的である。平底風底部には、底径とほぼ同径の専用焼台溶着痕跡が付き、偏平で大きな径の焼台が使われている。

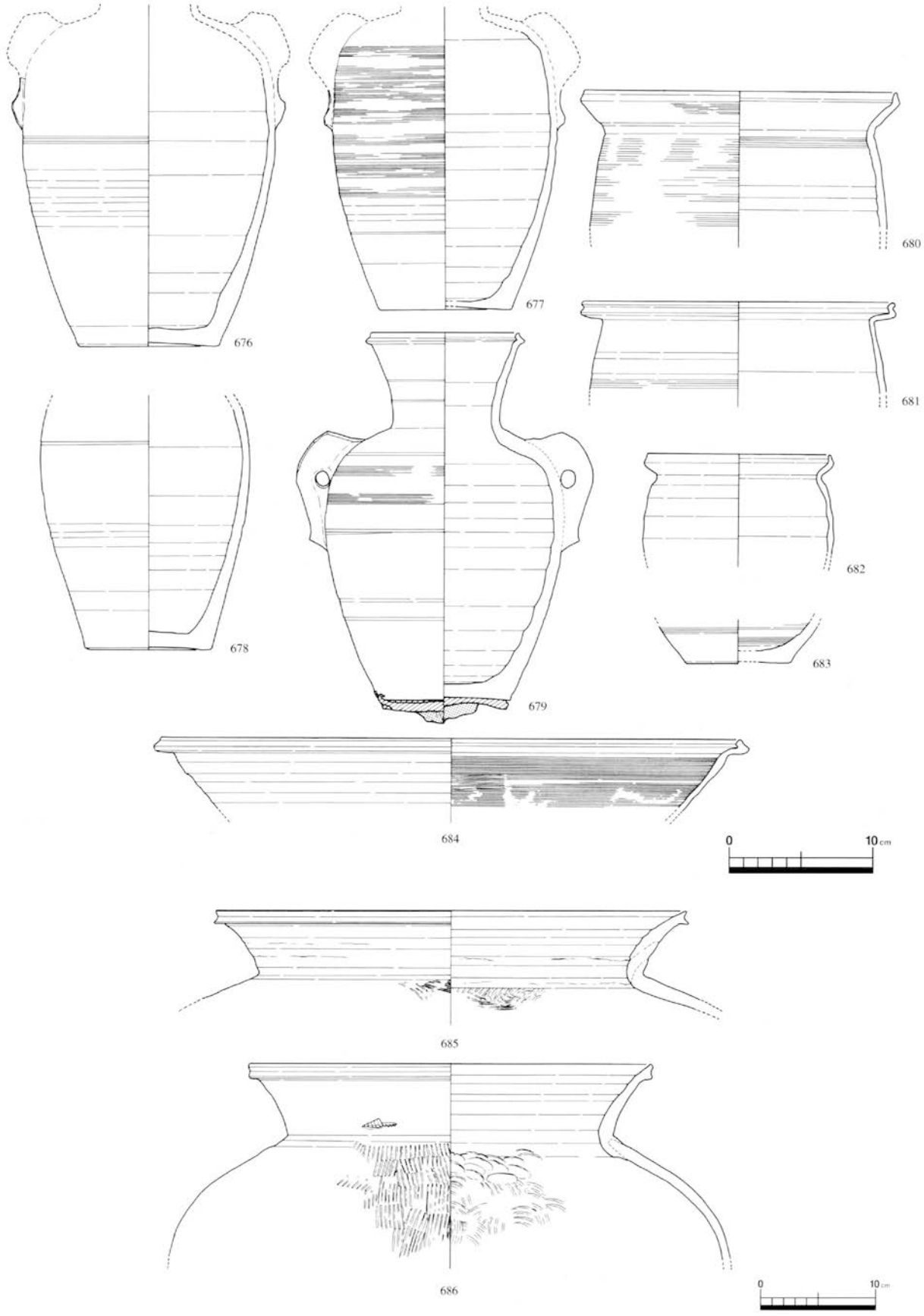
b類（689～696）は、口径20～25㎝、胴部最大径35㎝前後と、a類より一回り小型であるが、口頸部高、胴部高ともにa類と大差なく、その分、細長い形状となる。容量は20㎝程度に中心をもち、なで肩で底部は尖底気味となり、同じ長胴を呈す釜の底部器形とは若干異なる。胴部径が小さいため、底部叩き出しは縦方向を中心とした痕跡が目立ち、小甕の底部叩き出し痕跡とよく似ている。底部先尖状となるため、専用焼台は円筒形の深いものが使われるが、底部にそのような痕跡をもつものは少ない。

小甕（698）　破片のため、口径15㎝程度、胴部最大径25㎝程度のものを目安にしている。口頸部は短く外反する器形で、中甕b類に近いが、肩はなで肩と予想する。Ⅴ期以降、中甕の小型化と壺Fの増加によって、小甕の存在価値は低下し、両器種に吸収される様相をもつため、当段階はほぼ終焉期と位置付けて妥当である。

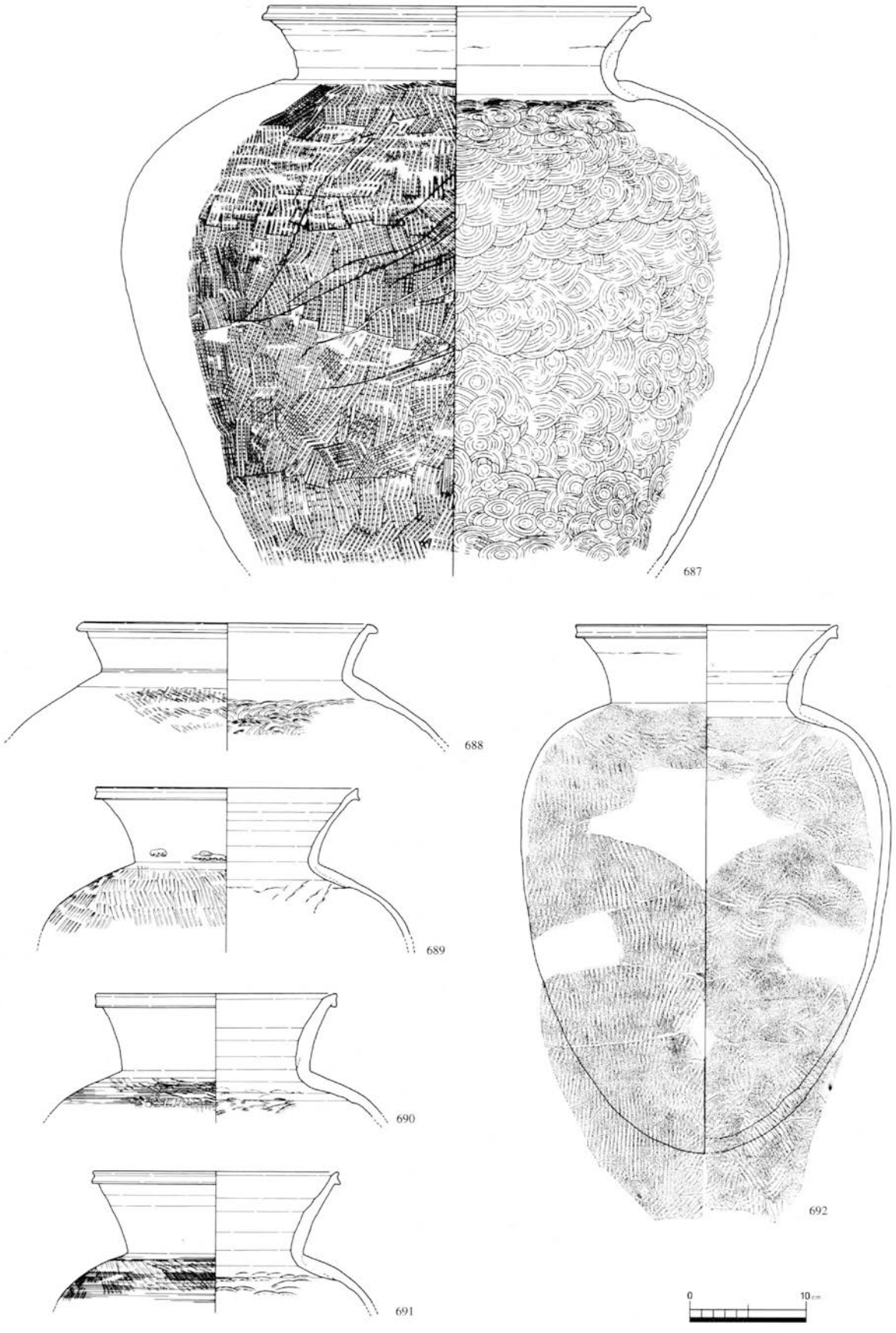
甕叩き・当て具　甕は大甕、中甕、小甕ともに外面叩き具痕と内面当て具痕を残す。叩き具痕は平行線文で占められ、中でもHe類が目立つ。木目間隔の粗いHa類とともに平行線文の大半を占める。内面当て具痕は、識別できるもののみ全点カウントし、示したのが下表である。当て具文様ではDa類が7割近くの圧倒的多数を占め、次いでDc類、Db類・SD類・Ha類・He類は数%である。ナデ調整やハケ調整による内面再調整が4割近くあり、そのうち2割は完全に当て具痕が消されている。内面再調整は、Ⅴ1期から積極的に行われており、Ⅵ1期まで顕著であるが、Ⅵ2期になると減少してくる。内面再調整の意図ははっきりしないが、Ⅵ1期頃に定量見られてくる内面無文当て具と何らかの関連性をもつ可能性をもつ。

当て具文様	Da類			Db類			Dc類			SD類			Ha類	He類		ナデ	ナデ
再調整	なし	ナデ	ハケ	なし	ナデ	ハケ	なし	ナデ	ハケ	なし	ナデ	ハケ	なし	なし	ナデ	消し	ハケ
破片点数	751	249	28	10	24	1	246	5	6	26	10	1	20	11	73	245	112
占有率	41.3%	13.6%	1.5%	0.5%	1.3%	0.1%	13.5%	0.3%	0.3%	1.4%	0.5%	0.1%	1.1%	0.6%	4.0%	13.5%	6.2%
当て具別	1,028(56.5%)			35(1.9%)			257(14.1%)			37(2.0%)			〃	84(4.6%)		357(19.6%)	

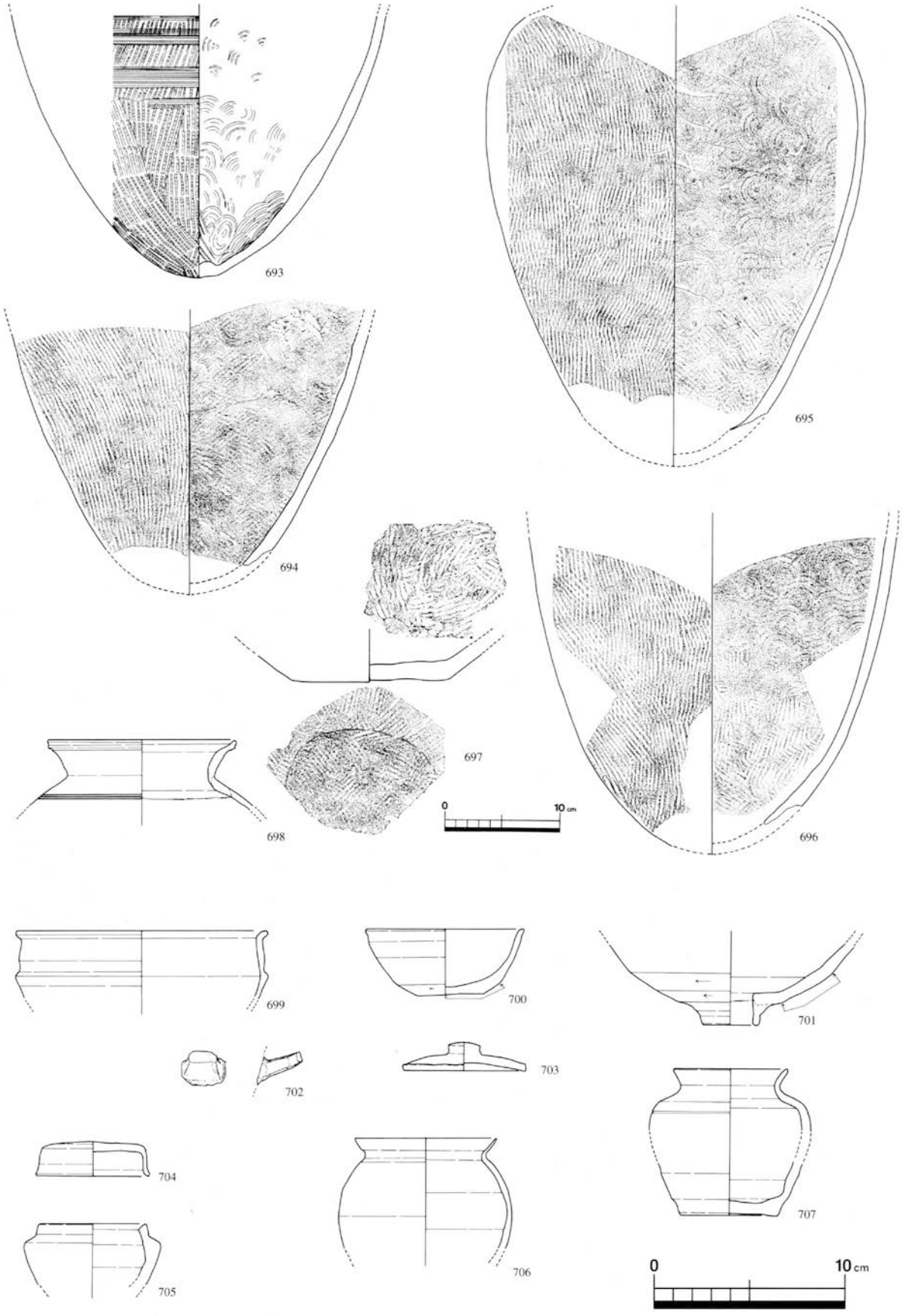
第6表　須恵器甕内面当具文構成表



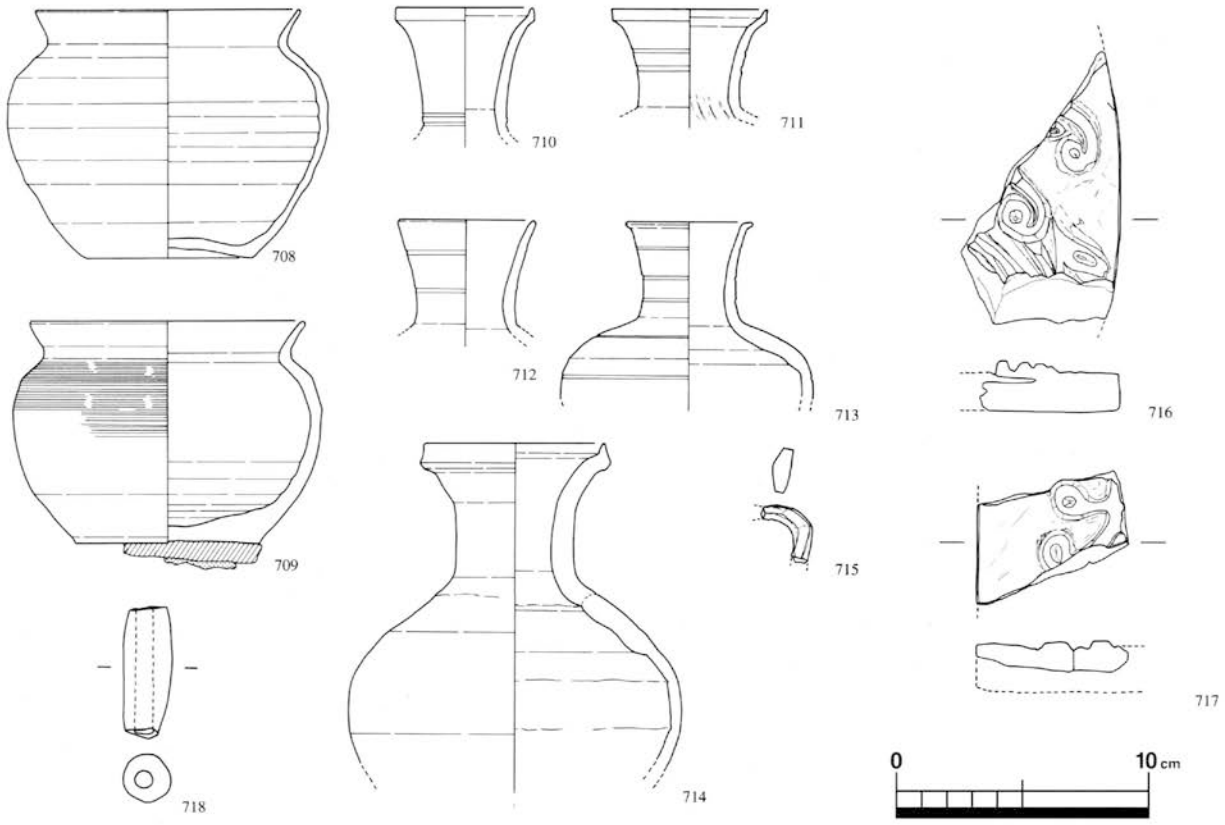
第40図　D区３号窯灰原出土須恵器（24）（上段1/4，下段1/5）



第41図　D区３号窯灰原出土須恵器（25）（S＝1/5）



第42図　D区３号窯灰原出土須恵器（26）（上段：1/5,下段：1/3）



第43図　D区３号窯灰原出土須恵器（27）（1/3）

⑧その他土製品

表面に陽刻の彫刻文様、裏面削り整形、端面を面取り整形した粘土板（同一個体２点）と須恵質に焼き上がった管状陶錘（718）が各１点出土している。

粘土板（716・717）は厚さ２㎝弱の比較的薄いのもので、表面の彫刻文様は周りを削って浮き彫りにする方法をとっている。全体的な文様構成は破片が小さく定かでないが、蕨手文様が施されており、仏教関連の陶板と思われる。陶板の薄さから鬼瓦の可能性は薄く、用途不明だが、仏像の後背を可能性として考えておきたい。文様は決して丁寧なものではなく、やや稚拙さを感じさせるが、胎土は良質のもので、白く焼けている。このような仏教関連用具と思われるものは、Ⅵ3期になって平安京式軒瓦が生産されると同時に顕在化するが、当窯段階も仏器的器種の生産が活発化する点で、重要な時期である。隣接する戸津窯ではⅤ2～Ⅵ1期に、陶製の水煙と宝輪、受花など塔の相輪セットを焼いており（小松市1983）、この陶板もそのようなものの一部である可能性も残されている。

戸津31号窯燃焼部より出土した陶製水煙・宝輪

c．当窯須恵器の編年と時期区分

以上、３号窯出土須恵器について、各器種ごとに説明及び分類してきたが、これまで再三述べているように、当窯資料は２時期ないしは３時期にまたがる資料であり、ここでどの類型がどこに位置し、どのような変遷が追えるのかをまとめておきたい。なお、当窯の中心となる時期はⅤ2期からⅥ1期であるが、一部Ⅵ2期の範疇で捉えられる須恵器群もあり、Ⅵ2期の古段階まで一部含めることとする。また、一部Ⅴ1期的なものも見られるが、まとまりをもって確認できるものではなく、Ⅴ2期の中で古い様相を残存させる一群が存在する程度に考えてお

きたい。

①有蓋坏型食膳具

坏Bは、蓋と身でA～C類の3分類したが、蓋と身で対応関係をもつものではない。ただ、両器種とも類型間で併存はあるものの、大まかにはA類→B類→C類の流れをもつ。まず、蓋であるが、A類はⅣ期から継続する類型、B類はⅤ1期から出現する類型で、C類はⅥ2期に出現する類型である。C類はB類のつまみが欠落して出現するため、B類→C類の変遷は明瞭であるが、A類とB類はⅤ2期に併存する。A類はⅤ2期の中で衰退し、B類はⅤ2期の主体類型となる。A類とC類は類型内細分での変遷は明瞭に追えないが、B類はB1a類→B1b類→B2類→B3類の変遷で考えられ、B2類程度がⅤ2期とⅥ1期の境頃と考える。以上は大法量での変遷であるが、中及び中小法量においても共通する変遷様相と言える。ただ、小法量についてのみは、Ⅴ2期でほぼ終焉を迎える。小法量はⅤ2期内でB類からC類への変遷があるものと予想する。

次に坏B身であるが、蓋同様、A類→B類→C類の様相はもつ。A類はⅤ2期の範疇で、B類はⅤ2期からⅥ1期、C類はⅥ1期からⅥ2期と考えている。A類とB類が、B類とC類が系統の異なる類型として一部併存する時期をもつ。B類はB1類→B2類への変遷が追え、B2類の中でさらにB2a·b類→B2c·d類の変遷が追えると考える。B2類からをⅥ1期、B2c·d類がⅥ1期とⅥ2期の境頃と予想する。C類はB2類と併存するもので、C1類はⅥ1期、C2類はやや特殊な器形をもつが、作りから考えて、Ⅵ2期に置くのが妥当であろう。また、中及び中小法量においても上記の大法量と共通する変遷様相と言えるが、小法量についてのみは、蓋同様、Ⅴ2期でほぼ終焉を迎え、Ⅵ1期へ続かないものである。坏蓋中小法量に対応する身には坏B以外に坏Eが存在する訳だが、基本的には坏B身の高台欠落器種と考えており、坏B身に代わって出現する器種である。ただ、一部Ⅵ1期では併存する様相をもっており、Ⅵ2期には坏Eに統一される。A類→B類の変遷が予想でき、その境はⅥ1期とⅥ2期の境に該当するものと考える。

②無蓋坏型食膳具

盤B以外は、Ⅴ2期からⅥ2期まで生産量変わらず、主体的に生産される器種である。

坏Aは、小型深身器形のⅡ類がⅥ1期へ継続せずにⅤ2期の中で衰退する器種と考えているため、後出のA2類やA1b類、B1b類についてもⅤ2期の中で収めておきたい。また、C類についても、小型低平器形をもつものが定量あるが、厚手の底部をもつ点はⅥ1期で考えることは難しく、Ⅴ2期の範疇で考えたい。Ⅰ類については、Ⅴ2期からⅥ2期までの器形が存在しており、D類ではD1類→D2類→D3類、細分類型も基本的には前後関係を表す。重複する部分もあろうが、おおまかにはD3a類以降をⅥ1期、D3d類以降をⅥ2期と考えておく。E類も同様に、E1類→E2類の変遷で考えており、その境以降をⅥ1期と位置付けておく。なお、F類については、Ⅵ1期以降のものと考えているが、特にF2類はⅥ2期に入るものと考える。

盤Aは、器形的にA類→B類→C類の流れをもつが、器形変化を示すものではなく、A類はⅤ2期主体、B類はⅤ2期からⅥ1期、C類はⅥ1期以降であることを示す。A類はA2d類がⅥ1期に入る可能性をもつものの、他のものはⅤ2期で収まるものと考えられる。B類は焼き色が比較的同じであり、単一時期に収まる可能性もあるが、B1a類とB2a類は器高高いものが多く、古く位置付け可能である。他の類型はほぼⅥ1期でよいと判断されるが、前2類型はⅤ2期の可能性が高い。C類はⅥ期以降と位置付けでき、中でも、低平で小型のC1c類、C2b類、C3類がⅥ2期に位置付け可能である。

盤BはⅤ2期をもって激減する器種で、Ⅵ1期まで残存するも、ほぼ消滅段階にあると判断する。瓷器系器種の影響を受けたようなC類に関しても、Ⅴ1期からⅤ2期で確認されており、Ⅴ2期の範疇で考えて妥当である。また、当資料の中で古手と言えるA類とB1a類、B1b類については、Ⅴ2期の中でⅤ1期の様相を残存させるものと評価できよう。Ⅴ2期の典型的形態としてはB1c類とB2類を上げておくが、B1e類とB2c類についてはⅥ2期に下る可能性をもつ。

③瓷器系食膳具

これ以降継続生産される須恵器塊・皿の中で、Ⅴ期に溯るものは確認しておらず、全てⅥ1期以降のものと位置付けられる。皿BではA類が古手、B類が後出すると言えるが、A類の中でも高台がやや低く、台径の小型化

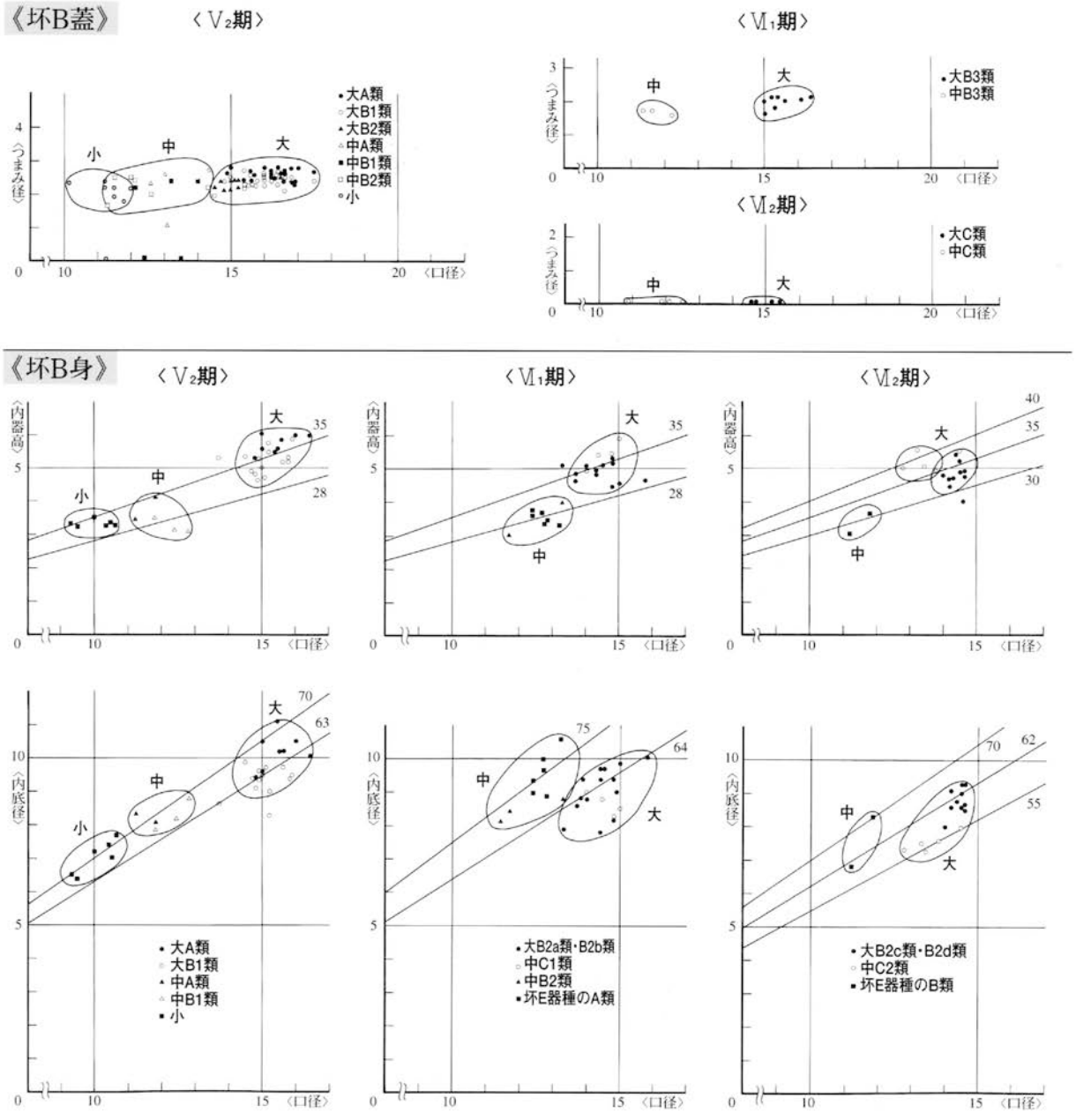
する569・571・577がⅥ2期に下る可能性をもつ。なお、埦類については、定型化と定量生産がⅥ2期であり、Ⅵ1期に入るものは定型前の様相をもつものである。埦AはⅥ2期に、埦Bの584・585・587は作りが丁寧で、Ⅵ2期の埦とはやや異なる特徴をもっているため、定型前の形態と考え、Ⅵ1に位置付け可能である。

④煮炊具

煮炊具は前述したように、口縁部形態と胎土特徴によって古手と新手とに分けられる。仮に古手をA類、新手をB類とすると、A類は口縁端部摘まみ上げ器形のやや厚手作りで、胴部上半カキ目調整を施し、混和材入れる胎土をもつ。これに対し、B類は摘まみ上げが発展して「S」字を呈す器形で、薄手作り、胴部ナデ調整が主体。胎土は混和材を含まない。A類からB類への変化は、Ⅴ2期からⅥ1期にかけて見られると思われるが、B類として確立するのはⅥ2期と思われる。

⑤貯蔵具

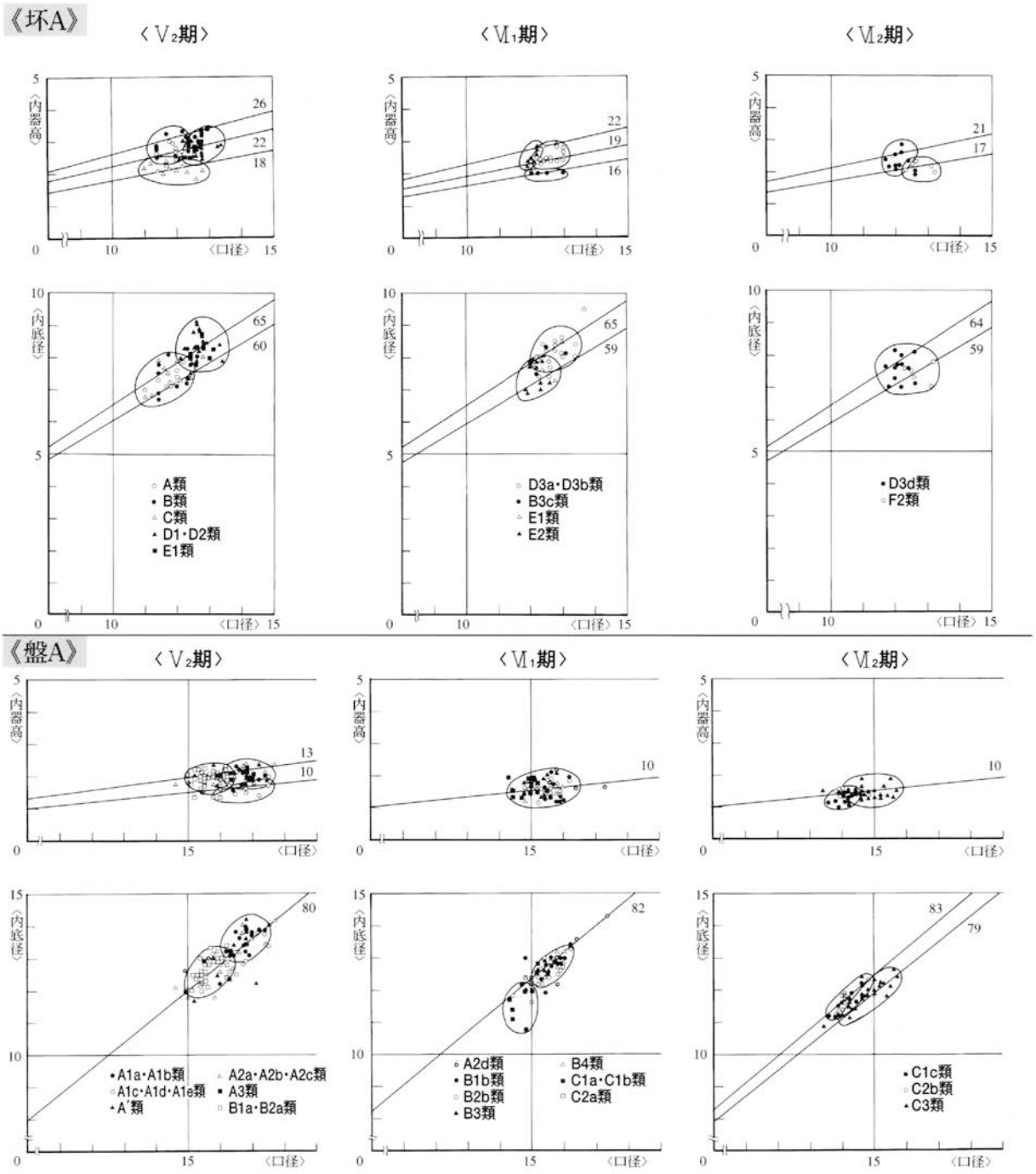
貯蔵具については、遺物説明のところで、随時時期変遷があるものは述べているため、ここではこれらを簡単にまとめるだけとする。



第44図　D区3号窯出土坏B蓋・坏B身法量分布図（単位は全てcm。内器高は身内器高を、内底径は身の見込み部径を示す。）

まず、鉢類であるが、鉢Ｂで、Ｃ類器形が古手、Ａ類器形が新手と位置付けできる。Ｃ類からＡ類へ変化したとは言い難く、Ｃ類は従来存在した器形の流れを汲むもの、Ａ類はⅤ2期かⅥ1期頃に壷Ｅの影響等で出現してきたものと予想する。Ａ類の大半はⅥ1期以降のものと予想しているが、鉢ＢはＡ類器形の出現と共に急増する器種であると理解している。鉢ＡⅢは焼き色などからⅤ2期に、鉢ＣはⅥ1期以降、鉢ＦについてはⅤ2期からⅥ2期にかけて器形変化は認められない。

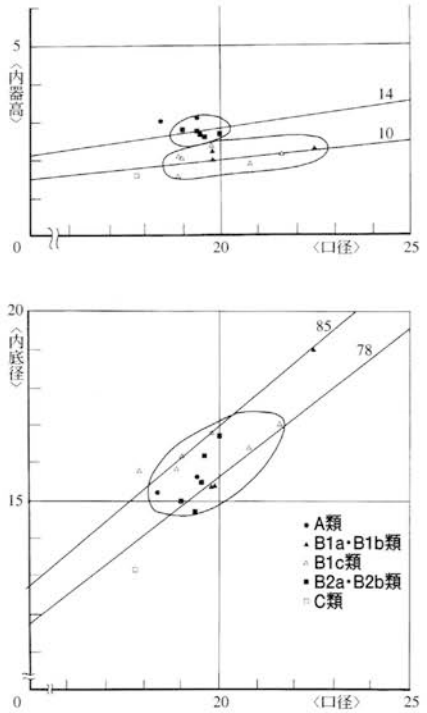
瓶類は、長頸瓶の瓶Ａが一部残存しているが、これは本来はⅤ1期で衰退する器種であり、Ⅴ2期でも古く位置付けられる。瓶Ｂは口縁部器形ａ類からｂ類への変遷が想定できるが、漸次的変化ではなく、Ⅵ1期からⅥ2期の中でｂ類器形が新しい口縁部形態として出現し、ａ類と入れ替わるものと予想する。この口縁部器形の変化は、瓶Ｄにおいても同様に見られ、瓶Ｄでは瓶Ａ的な口頸部をもつものをａ類、瓶Ｂでａ類口縁部としたものはｂ類、



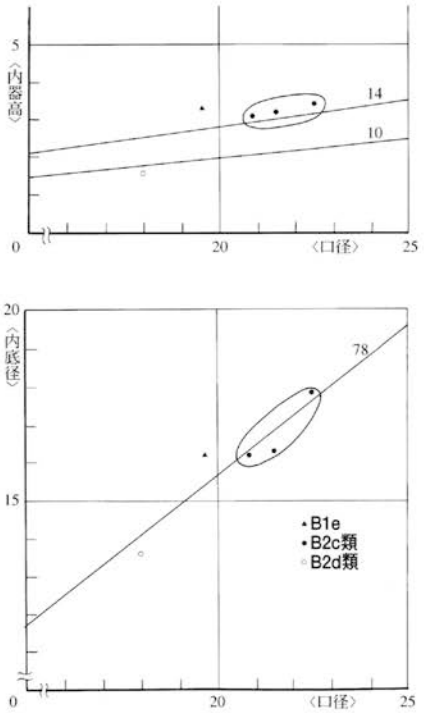
第45図　Ｄ区３号窯出土坏Ａ・盤Ａ法量分布図（単位は全てcm。内器高は身内器高を、内底径は身の見込み部径を示す。）

《盤B》

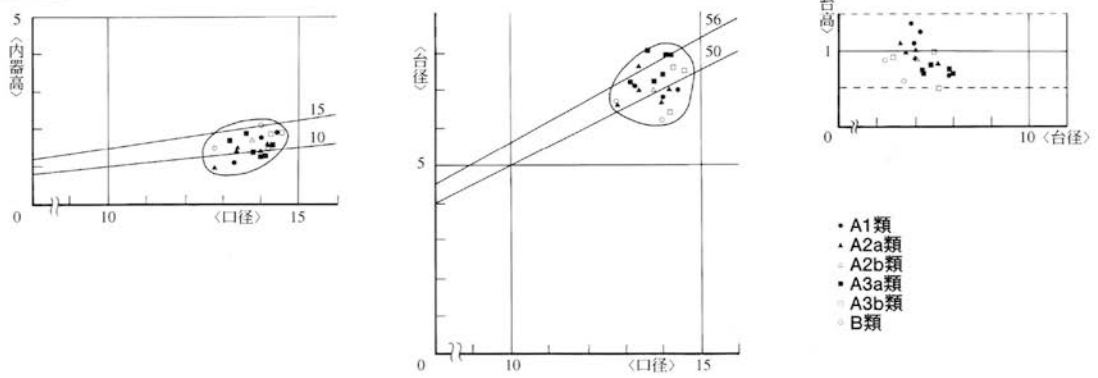
〈Ⅴ2期〉



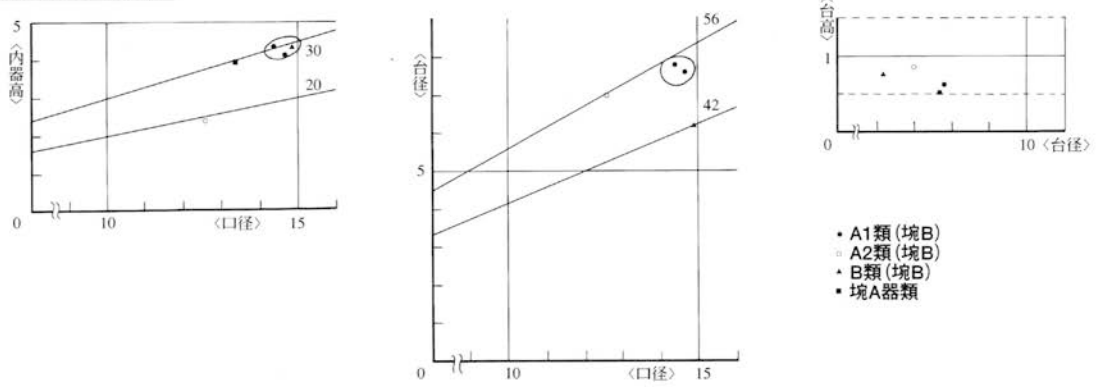
〈Ⅵ1期〉



《ⅢB》



《埦B及び埦A》



第46図　D区３号窯出土盤Ｂ・ⅢＢ・埦類法量分布図（単位は全てcm。内器高は身内器高を、内底径は身の見込み部径を示す。）

b類口縁部としたものはc類に該当する。瓶Dのa類→b類→c類の流れは、瓶A→瓶Ba類→瓶Bb類の流れと一致し、変化の時期は同時であると理解する。瓶Bではa類が主体であったのが、瓶Dではc類が主体を占めることについては、瓶Bと瓶Dとの、Ⅴ2期からⅥ2期にかけての増減にその要因がある。つまり、Ⅴ2期からⅥ1期へ、瓶Bが減少するに対し、瓶Dは増加するというように瓶の主要器種が入れ替わるために、主体となる器形が異なったものと判断される。

甕は、Ⅴ1期以降、衰退する器種であり、特に大甕は短頸B類に変化し、小型化してくる。容量の中心が時期を追うごとに小型化する以外は、目だった器形変化はない。中甕も大甕を小型化したようなa類器形がⅤ期は主体であるが、長胴器形のb類出現によって、Ⅵ1期はa類とb類が併存、Ⅵ2期にはb類主体へと変化する。中甕a類の生産量がさほど目立たなかったため、中甕b類出現後、中甕の生産量は増加しており、Ⅴ2期からⅥ1期にかけて中甕が増加する傾向をもつ。中甕b類はⅥ2期にかけて、一層口径・胴径の短縮、容量の小型化が進行し、Ⅵ3期へ同じ流れで変化して行く。

（2）窯道具

3号窯より出土した窯道具は全て貯蔵具専用焼台である。出土総量で遺物箱に換算すると30箱程度で、全体で1割弱の割合を占める。基本的に焼台は2次使用せず、1回きりで廃棄されるか、再度使用される場合は他の須恵器片や粘土塊と同様に焼台を支える窯内部材としてであり、焼台総量を把握することは窯の操業回数を想定する重要な材料となり得る。かつて、筆者は以上のことを前提に、窯の操業回数を積算したことがあるが（小松市1992）、今回の資料は灰原の一部のみの調査であるため、総量計算はせず、割合として専用焼台がどのように使われていたのかを考えてみたい。なお、胎土特徴について先に述べておけば、全体的に須恵器食膳具や小・中型貯蔵具よりも砂粒の含有量が多い。ただ、砂の入り方にはばらつきがあり、混和材を混ぜた感じはない。砂けの多い粘土を使用したものと予想する。

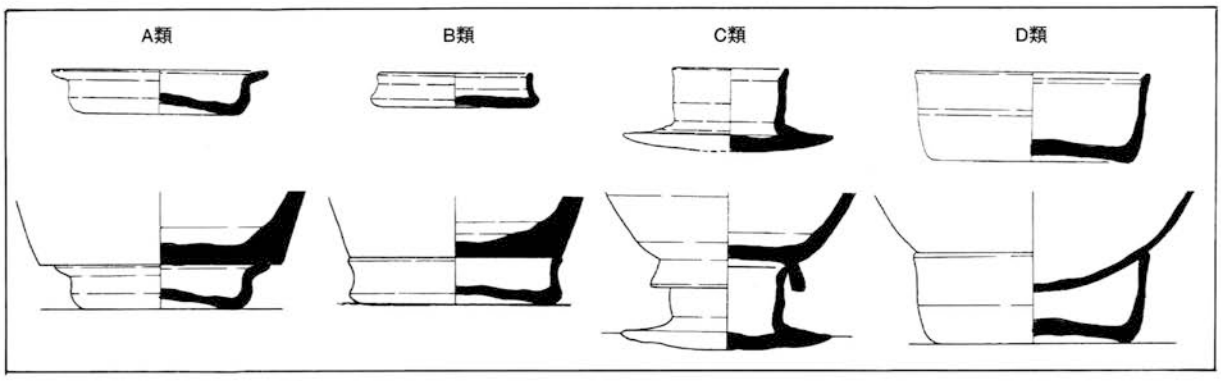
a．貯蔵具専用焼台の類型区分と構成

《9世紀以降の貯蔵具専用焼台》　焼台は主に窯と製品とが溶着することを防ぐために、その間に入れられる窯道具であり、製品を高く配置することも目的の一つである。製品が正位で窯詰めされる場合の底部に設置されるもので、製品との接着面は狭く設定しているものが多い。接点が広ければ、製品の安定した窯詰めが可能であるが、接点を狭くしたのは溶着する部位を極力少なくするためであろう。製品には焼台を剥がした痕跡をもつものが多く見られ、消費地の製品でも焼台の口縁端部が溶着したままのものがかなり確認されている。

南加賀窯跡群では8世紀中頃より、貯蔵具専用焼台が出現してくるが、出現期のものは極めて特殊であり、8世紀後半の須恵器窯では確認されなくなる。本格的な使用は9世紀以降で、この時期に加賀のみならず、越前や能登、越中、越後でも広く普及する。9世紀以降の貯蔵具専用焼台の多用を見ると、8世紀代のものとは異なる印象があり、直接的に繋がるものではないと考えるのが妥当だろう。9世紀以降のものはⅤ1期ないしはⅣ2新期に導入された新たな窯道具と言え、それは、出現期からほぼ全ての類型が出揃い、須恵器生産終焉のⅥ3期まで同類型が継続することからもうなずけるであろう。

《貯蔵具専用焼台の類型区分》　以前、専用焼台の分類案を提示したことがあるが（小松市1992）、当窯の焼台も口縁部長く外屈する灰皿型のA類と口縁部短く直立する偏平型のB類、口縁部へ窄まる深身台形型のC類、口縁部へ直立か外傾する深身大型のD類に分類でき、この4類型が南加賀窯跡群の貯蔵具専用焼台の基本形であることが伺われる。各類型は貯蔵具の底部形態や底部の大きさにより、使い分けられており、各器形がそれぞれ意味をもつ。つまり、A類とB類は平底器種の安定した設置のために、C類は有台器種の台の内側にはめ込み、台を保護するために、D類は丸底器種の安定した設置のために、それぞれ工夫しており、A類はより安定感を求めて、B類は接点を極力狭くしたものである。

《類型の構成と貯蔵具》　焼台の類型別個体数（個体識別による）とそれを使用する貯蔵具の底部形別構成表（口縁部計測による）を以下に示しているが、過半数を占める平底器種に対応して、A類・B類焼台が5割以上



第47図　貯蔵具専用焼台基本類型と使用器種（1/5）

の高い数値をもつ。有台器種が1割半に対し、C類の2割半は多いが、V期の焼台がC類を主体にしていることを換算すると、おおむね底部形と焼台類型は対応関係にあると言えよう。Ⅵ期の段階に焼台使用が頻繁となり、焼台使用例が増えるが、V期では焼台を使わない事例が目立ち、双耳瓶（瓶D）増産とともにB類が急増したものと言える。焼台器形を底部形にあわせて製作しているため、貯蔵具製作と焼台製作、窯詰めとは計画的に管理されたものであるように受け止めがちであるが、実際には、本来使われる類型と異なる焼台が使われたり、食膳具を代用したりなど、窯詰めの場で間に合わせた感もあり、厳しい管理のもと、計画的な窯詰めや焼台製作が行われていた印象は薄い。焼台製作も須恵器製作の場で行われていたものであり、切り離すべきものではないが、貯蔵具製作者がその焼台を製作したとは考えにくい。

焼台類型	個体数(%)	貯蔵具底形	割　合
A　類	95個(9.6)	平　底	70.4%
B　類	484個(48.4)	有　台	13.6%
C　類	95個(9.6)	丸　底	11.6%
D　類	95個(9.6)	丸底風	4.3%

第7表　焼台類型構成と貯蔵具底部形構成

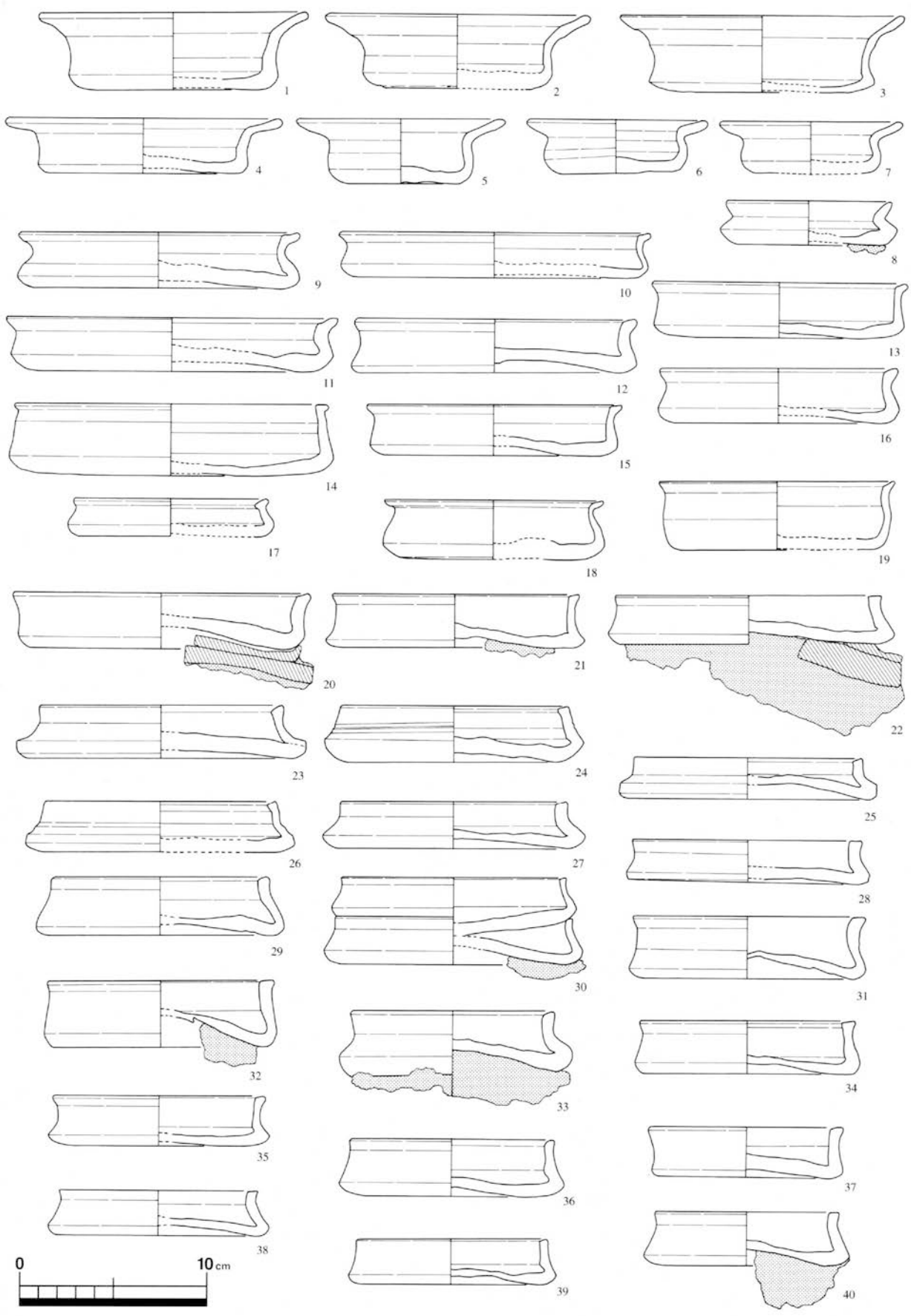
b．貯蔵具専用焼台類型の特徴と細分

《A類》　灰Ⅲ型のA類は、出現期から存在する類型で、10世紀代まで継続する。当窯段階では最も少ない類型であるが、10世紀になると増加し、窯によってはこの類型を主体的に用いる窯が出現してくる。口径から14cm台前後を測る大ぶりのⅠ類（1～4）と10cm前後の小ぶりのⅢ類（5～8）に細分される。

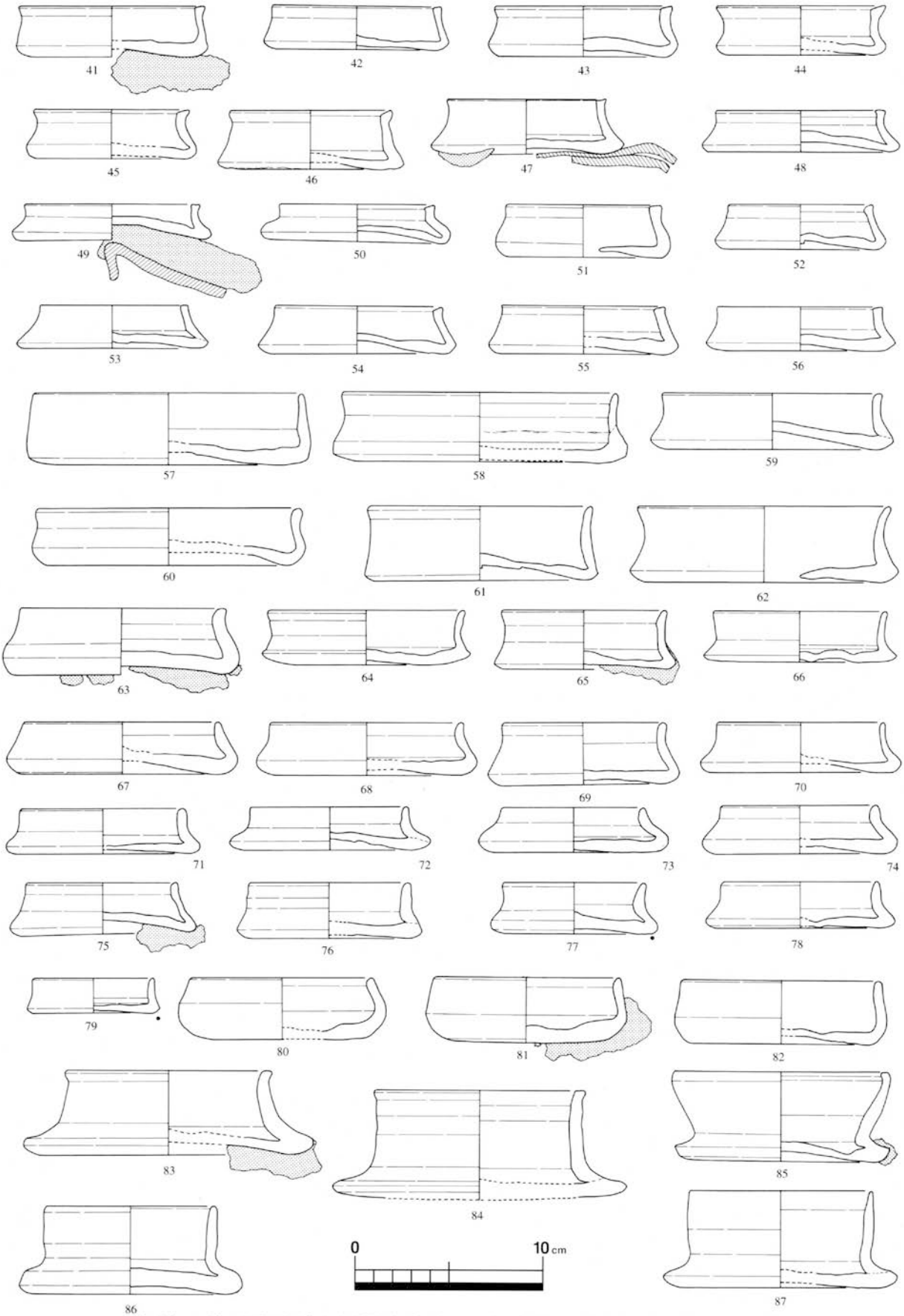
《B類》　偏平器形を基本とし、口縁部へ体部直立する器形のものであるが、体部内傾気味となるものが多く、口縁端部の器形によっては、体部が強く内傾する。ただ、C類と異なるのは、器高の高さであり、ここでは偏平器形を基準に類型化している。口縁端部器形より、端部短く外屈して平坦面形成するBa類（9～19）と上端に平坦面をもつだけのBb類（20～56）、端部丸くおさめるBc類（57～79）、端部丸くおさめるもののうち特に体部丸みを帯びて厚手のものをBd類（80～82）に細分できる。口縁端部形によって、口径が異なってくるため、底部径で大きさの分布を見ると、9～15cmにまんべんなく分布する。ただ、大きく分けると13～15cm、11～12cm、9～10cmにまとまる傾向があり、それぞれⅠ～Ⅲ類とする。

《C類》　高台の内側に差し込む焼台のため、底部よりも口縁部が狭い器形を基本とする。B類でも述べたように、当類型は器高が高いことを最大の特徴とするため、内傾が顕著なものでも偏平器形のものはC類に含めない。口縁端部は丸くおさめるか、薄く延ばすものが主体で、面形成するものは少ない。底部から体部の器形によって、底部付近で強く内屈して口縁部へやや直立気味となるCa類、底部から内屈せずに内傾して口縁部へ至るCb類、短頸壺状器形を呈する特殊なCc類（143～147）に分類、さらにCa類は口径と直立高の比率から口径大きく低いCa1類（83～97）と口径小さく高く直立するCa3類（109～123）、その中間のCa2類（98～108）に、Cb類はやや口径大きく立ち気味のCb1類（124～126）と体部内傾するCb2類（127～140）、口径小さく体部寝てくるCb3類（141・142）に細分される。口径は5～11cmに広く分布するが、口径8cmを境に分けられる傾向があり、以上は概して低い器形、以下は概して高い器形をもつ。

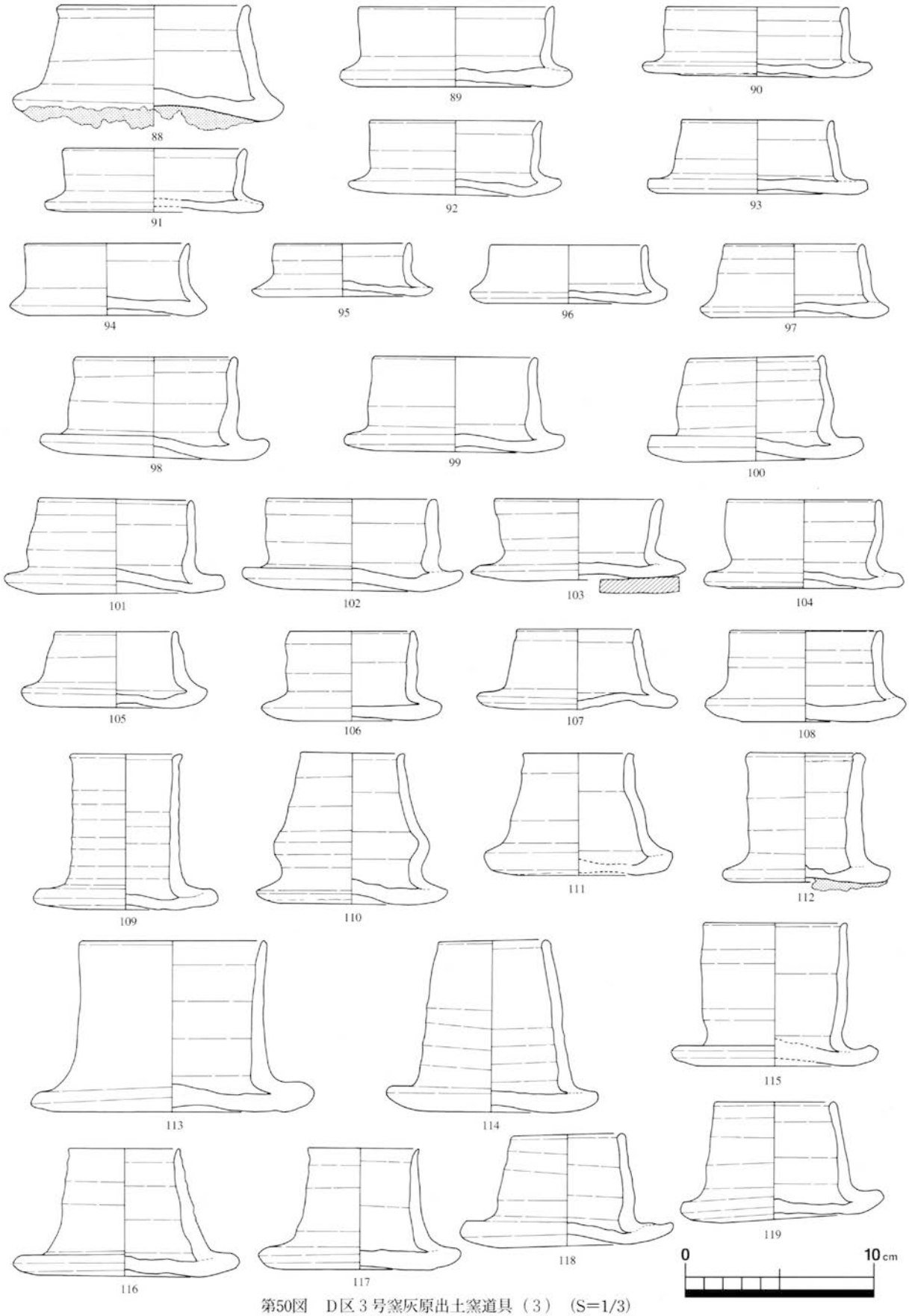
《D類》　体部直立気味である器形はB類器形と基本的に同じであるが、深く大振りのものをD類としている。丸底甕ないしは平底甕の焼台として使われるため、厚手で大型を呈しており、紐積み痕跡を残す雑な作りのもの



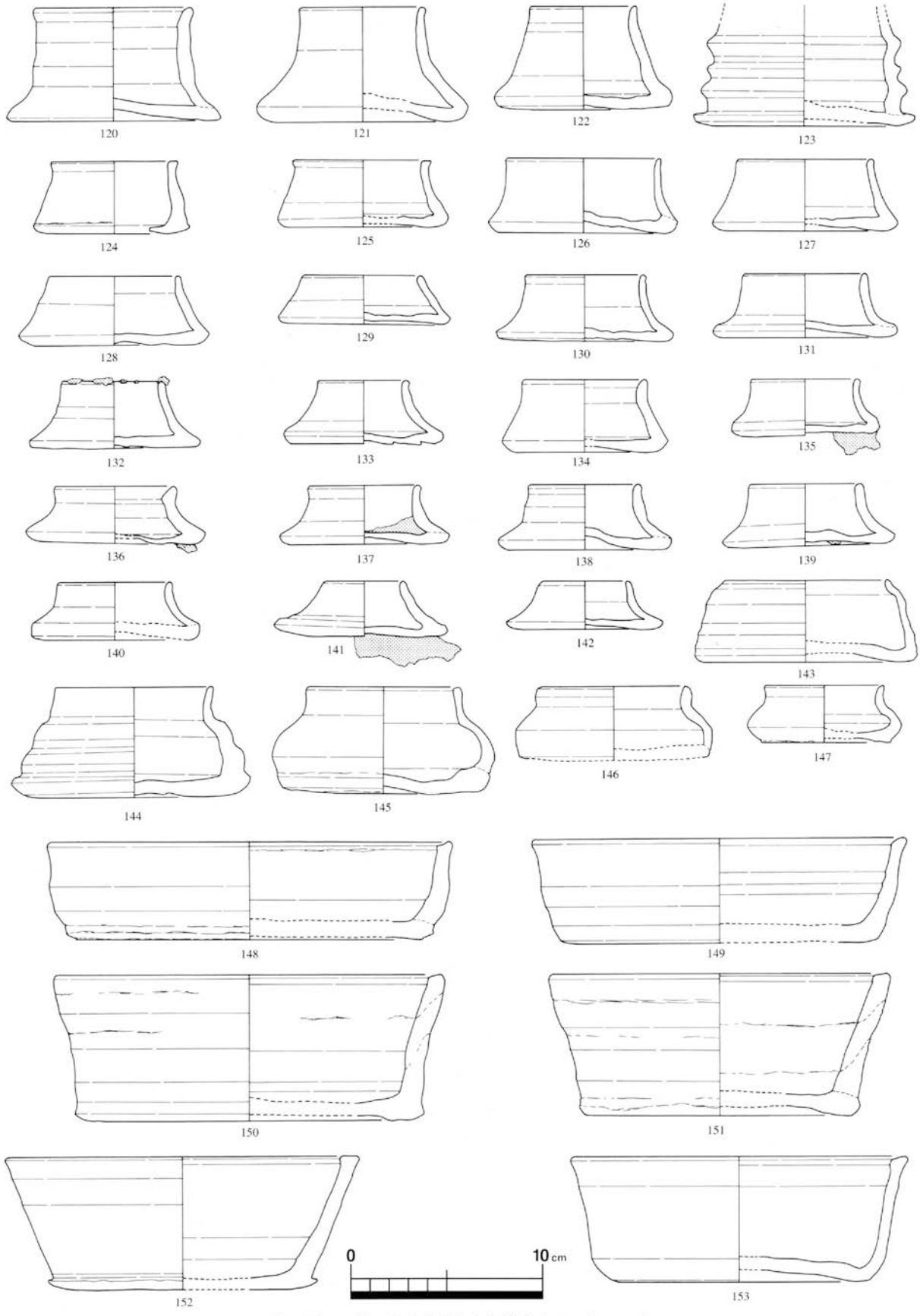
第48図　D区３号窯灰原出土窯道具（１）（S=1/3）（網点は窯土や粘土塊、斜線は須恵器片）



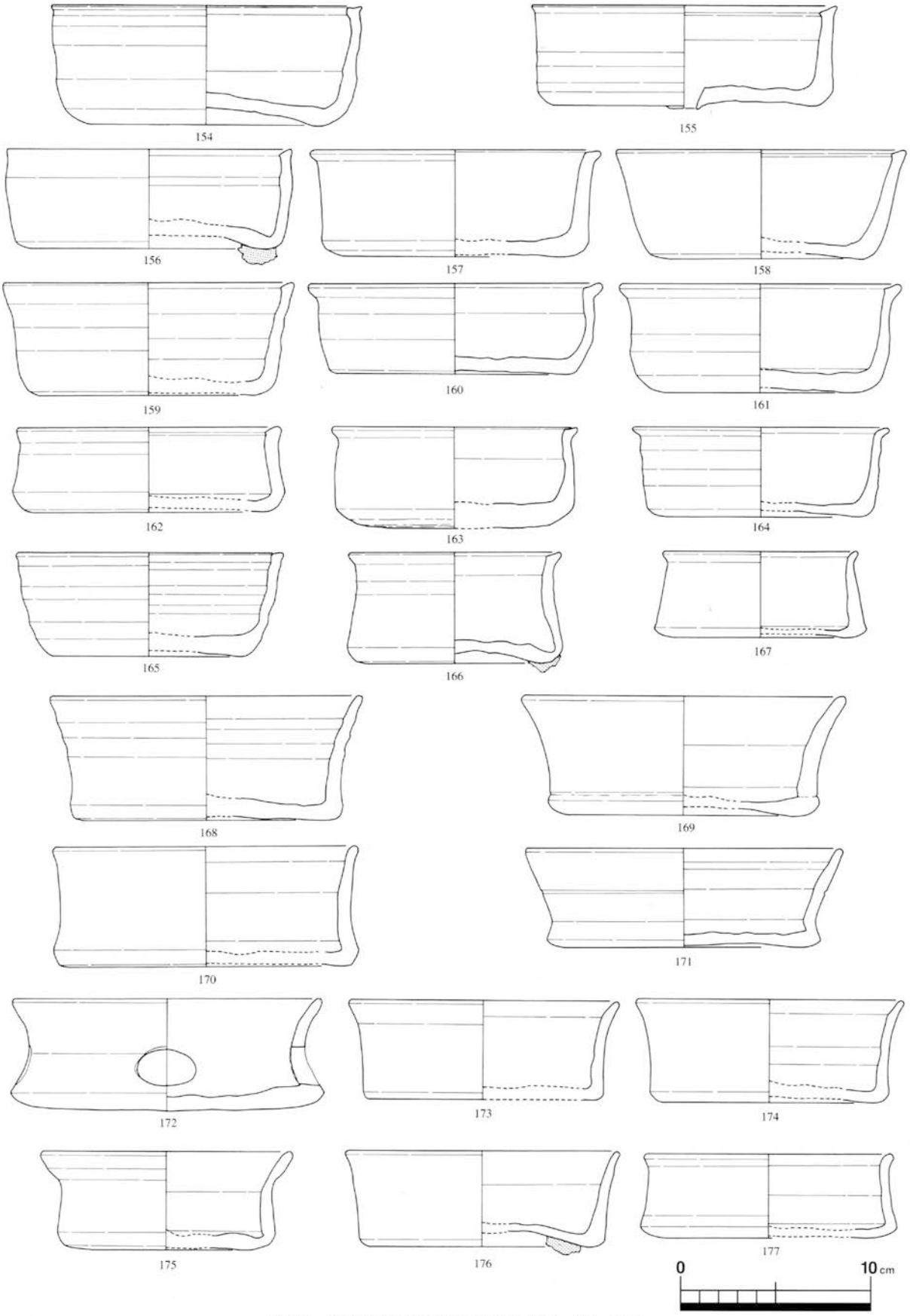
第49図　D区３号窯灰原出土窯道具（２）（S＝1/3）（黒丸は回転糸切りを示す。以下同様）



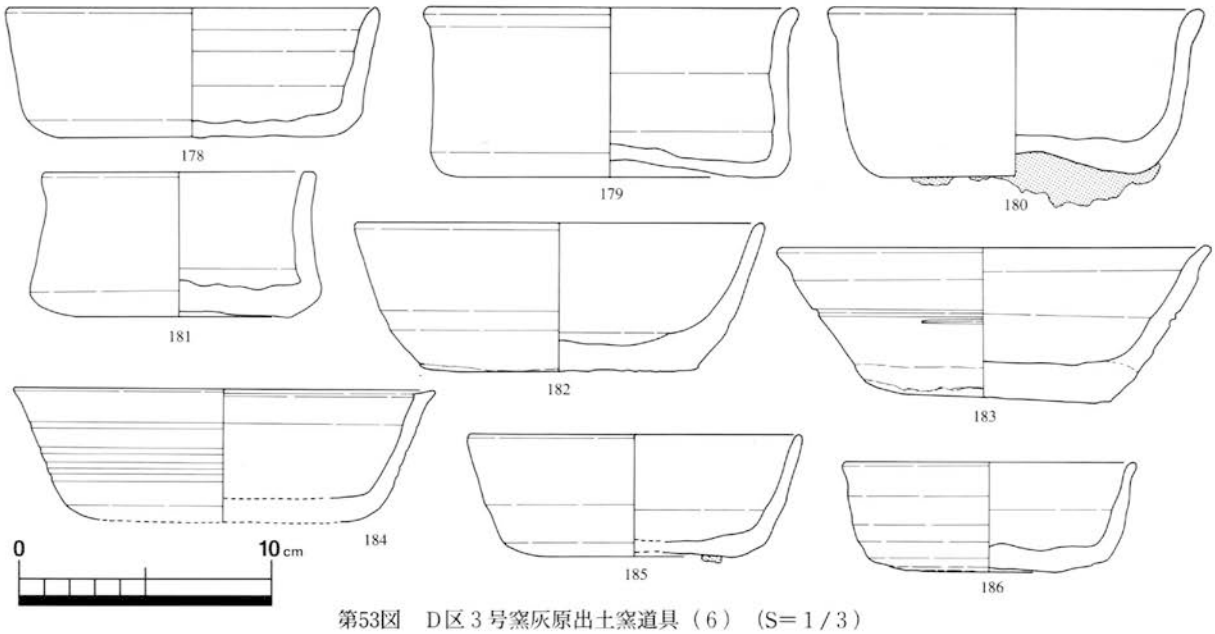
第50図　D区３号窯灰原出土窯道具（３）（S=1/3）



第51図　D区３号窯灰原出土窯道具（４）（S＝1/3）



第52図　D区３号窯灰原出土窯道具（５）（S=1/3）



第53図　D区３号窯灰原出土窯道具（６）（S＝１／３）

が目立つ。全体的な器形から大振りで浅い器高をもつDa類（148～150）と、最も一般的な器形をもつDb類、体部外傾する椀器形をもつDc類（182～184）に分けられ、さらに口縁端部器形から端部外屈して面形成する１類（148～167・184）と口縁部が若干外反して端部丸くおさめる２類（168～183）に細分される。口径はDa類が20㎝前後の大型を呈すが、13～16㎝が主体的で、特に14㎝台に集中する傾向がある。当類型では唯一体部に円孔を開けるものが確認されているが、例外的なものである。

c．貯蔵具専用焼台の使用と窯詰め

《焼台の焼き色と焼成》　生焼け状態の焼台はほとんどなく、焼き締まりの強いものが大半を占める。釉を被ったり、堅緻に焼き締まるものはB類とC類で目立ち、D類は焼き色が若干異なる。B・C類が壷・瓶類に使われるのに対し、D類が甕に使われるためで、瓶類や壷類は意識的に降灰や釉のかかる場所に窯詰めされた可能性を示唆する。この時期の貯蔵具類は焼成部の下位付近に集中してくる傾向が強いが、火前であっても、釉のかかりやすい場所とそうでない場所があったのか検討する必要があろう。また、もう一つの可能性として、釉がかかるようにワラ灰を掛けたりした可能性も十分に考えて置く必要性はあるだろう。

《焼台の付着物と窯詰め状態》　焼台には製品との溶着片をはじめとして、須恵器甕片や坏片などの転用置台、粘土塊置台、窯床土、天井溶解土などが付着している。以前、Ⅵ2期とⅥ3期の貯蔵具専用焼台資料を整理した際は、Ⅵ2期では須恵器片の転用置台との溶着が、Ⅵ3期では粘土塊置台との溶着が目立ったが（小松市1992・1993）、当資料では窯床土が直接焼台の底部に溶着するものが目立った。Ⅵ3期の粘土塊置台は粘土塊置台設置床をもつ須恵器窯構造の出現にその要因があるが、Ⅵ2期とは須恵器窯に大きな構造の差はない。転用置台使用が頻繁であった理由は貯蔵具の窯詰め場所が急であったことを物語るものであり、Ⅴ2～Ⅵ1期からⅥ2期へ焼成部床面傾斜が急になったか、貯蔵具窯詰め場所が焼成部中位に及んだことを示すだろう。これはⅥ2期の双耳瓶増産やこの時期の釉調の変化とも関連するものと考えている。

《焼台の使用方法》　焼台の口縁部に見られる製品溶着に伴う剥離痕や降灰具合によって、貯蔵具とどのように接していたのか、焼台を使っていたのかが予測できる。まず、最も多くの口縁端部剥離痕が確認されるB類についてだが、口縁端部面形成するものに特に多く見られ、内傾する面をもつものや口縁部短く外屈するものについても同様に剥離痕が確認される。口縁端部丸くおさめる形態については、溶着痕は乏しく、接する面の広さによるものだろう。降灰は底部境から口縁部外端までの外面で均質に見られ、釉の垂れるものは口縁端部に釉溜まりのあるものが確認される。D類は体部と口縁部外面に降灰する点ではB類と同様であるが、D類は口縁端部の内側まで微妙に降灰しており、溶着による口縁端部剥離痕も少ない。これはB類の上端接地とD類の内端接地によ

る差であり、上に乗せる方法と内側に入るように乗せる方法との違いによるものである。また、接する面を最も広くもつA類についてだが、全く溶着の痕跡はなく、降灰釉も体部で薄く確認されるだけで、全体的に焼きは弱い。製品底径よりもかなり焼台体部が小さいため、製品の陰となって強くは降灰しなかったのだろう。次に、C類の降灰状況だが、他と同様外面降灰するものの、口縁端部まで降灰するものは稀で、端部から若干下で降灰の切れるものが主体を占める。焼台の口縁部が製品高台の内側に入るために降灰しなかったものであり、口縁端部での溶着痕も少ない。

d．貯蔵具専用焼台の製作方法

一部の大型の焼台を除いては、須恵器食膳具同様、「底部円盤紐水挽き技法」（北野他1994）によるものである。この成形技法は、轆轤成形台上に底部円盤を固定し、粘土紐を１～２巻きしてから、轆轤水挽き成形するもので、C類の底部から著しく内屈する器形のものであっても、同様の作り方と言える。体部を円筒状に挽き出してから、下位を内屈させてその上を絞り延ばしたものと考える。底部は回転ヘラ切りでほぼ占められる。糸切りによるものは77・79の僅か２点のみであり、例外的なものと言えよう。貯蔵具専用焼台の底部切り離しは、食膳具底部切り離しが糸切りにほぼ統一されるⅥ3期になっても、依然としてヘラ切り主体であり、糸切りは１割にも満たない。底部糸切りとヘラ切りとの焼台の器形を比較すれば、底部が上げ底状となる以外は同じであり、糸切りであっても、上記の成形技法で作られた可能性は十分にある。ただ、食膳具が糸切りに統一されているのに、焼台ではヘラ切りに固執するには、何らかの理由があったものと言えよう。また、貯蔵具専用焼台の内底面には、螺旋状のナデ痕跡が明瞭に残る。挽き出し成形に伴う水挽き痕跡と考えられるもので、壷・瓶類の内底面にはよく見られるが、食膳具では、通常、この痕跡をナデ調整して消すため、残らない。水挽き成形では必然的に現れるものであり、食膳具は内底面調整という工程を必ずと言ってよいほど行っていることがわかる。

以上の底部円盤紐水挽き技法とは異なる成形痕跡をもつものが大型偏平器形をもつDa類焼台で確認される。厚手で作りの雑なもので、粘土紐の継ぎ目痕跡を明瞭に残す。大型壷の底部と同様、底部には明瞭な切り離し痕をもたないもので、かめ板を使用したか、成形台に直接固定したものと考えられる。粘土円盤に紐積み成形しただけで、水挽きしない成形方法と言えよう。

e．須恵器編年との対応関係

須恵器では当窯資料をⅤ2期～Ⅵ2期の３時期に分けたが、それと対応するように焼台資料も３時期のものが混在しているはずである。これまで、Ⅴ2期とⅥ1期の良好な焼台資料を得ていないため、Ⅴ1期とⅥ2期の資料から推測したものとなるが、焼台変遷の大体の傾向を各類型ごとに示しておく。

《A類焼台》　当類型はⅤ1期でも確認されるが、Ⅵ3期に目立つ焼台で、Ⅵ2期から定量存在する。双耳瓶（瓶D）などの平底器種盛行とともに顕在化するものと言え、当窯のものもⅥ2期に該当しよう。

《B類焼台》　当類型も、A類同様、平底器種の盛行に伴って顕在化する焼台と言え、Ⅴ1期では目立つ焼台とは言えない。特に、端部外屈して面形成するBa類と端面形成するBb類はⅤ期ではほとんど確認されない焼台であるのに対し、逆にⅥ2期では焼台の５割以上を占める。Ⅵ3期では特にBa類が顕在化し、口縁部外屈するA類との境が不明瞭となるが、A類と併せて、７割近くを占める焼台となる。Ⅴ期で確認されるB類焼台は端部丸いBc類、Bd類が主体であることから、端部丸いものはⅤ2期へ、端部面形成するものはⅥ2期へ中心をもち、Ⅵ1期はその両方が混在する様相であったと考える。

《C類焼台》　高台器種に使われるため、Ⅴ・Ⅵ期とも定量を占める焼台だが、長頸瓶や有蓋短頸壷などが壷・瓶類の大半を占めるⅤ期に顕在化し、Ⅵ期は減少傾向にある。Ⅴ期のC類焼台は短頸壷・長頸瓶のしっかりした大型の高台に対応して、大型で高さのあるCa類が主体的に使われるが、Ⅵ2期・Ⅵ3期と長頸瓶の高台が小型化するに伴って、C類の形態も小型化が進行し、Cb類に統一されている。当窯のCa類からCb類への移行は、Ⅵ1期の中で行われると予測するが、Ⅵ1期では既にCb類主体であったと考えている。

《D類焼台》　当類型もⅤ1期以降、Ⅵ3期まで存続する焼台だが、Ⅵ3期では激減し、小型化する。これは甕の

生産量低下に対応するものであり、小型化する点も胴部の長胴化と尖底化に対応してであろう。Ⅴ1期においてもD類出土量は少ないが、甕の生産量に基づくものではなく、焼台使用頻度の低さにその要因があろう。D類はⅥ期の尖底状底部をもつ長胴器形の出現により、増加したものと考えられ、丸底を受け易い器形のDb2類やDc類が主体化するものと予想する。口縁端部面形成するDa類やDb2類は大型でやや器高の低い傾向があることから、Ⅴ2～Ⅵ1期に対応するものだろう。

以上をまとめると、Ⅴ1期の出現期から平底壷・瓶、有台壷・瓶、丸底甕に対応する4つの類型が出揃うが、使用される器種の盛衰に対応して、使われる焼台も変化しており、有台対応のC類から平底対応のB類、A類へ主体を移している。特に、C類はⅤ期の有台貯蔵具のしっかりした高台に対応する大型で高い器形のものからⅥ期には高台低下・小型化に伴って、低下小型化する変化が看取できる。平底対応のB類も、Ⅴ期では体部直立の丸くする器形からⅥ期の口縁部面形成そして外屈するA類へと変化し、製品との溶着防止よりも安定感を重視した形へ変化する傾向がある。B類の増加は焼台出土量の倍増と対応し、双耳瓶増産に伴ったものと言えるが、絶対量の増加は、貯蔵具への使用頻度の向上によるものであり、貯蔵具増加を示すものとは言えない。それはⅤ期の貯蔵具底部の焼台痕跡率の低さからも言えることであり、Ⅴ期の焼台は意識的に使う製品を選んでいた可能性をもつ。Ⅴ期の貯蔵具を見ると、長頸瓶や有蓋短頸壷、双耳瓶の中に白っぽい焼き色で、薄緑色の釉が厚めに掛かる製品があり、優品と言える焼成を行っている。これに焼台が全て使われているとは限らないが、焼台の選択使用は、このような優品焼成に伴うものと理解しており、Ⅵ期に優品焼成が見られなくなることと対応して、焼台の選択使用も行われなくなったものと考える。つまり、Ⅵ期の焼台増加は、焼台の選択使用から恒常使用へ変化したことに因るものと言え、灰色系の焼き色で黒っぽい釉へ焼成が変化することと強い関連性をもつものと理解している。北陸一円に焼台が普及するのは、南加賀窯とほぼ同時期のⅤ期であり、優品焼成に伴ったものであった可能性が高く、それが衰退するⅥ期に他の窯群で焼台消滅することは、その感を強くさせる。南加賀窯の焼台恒常使用化の対局にある変化であると言える。

（3）土師器

3号窯灰原より出土した土師器は、異なる時期の混入品を除けば、遺物箱1箱程度である。その大半が煮炊具破片で、特に釜と小釜の破片が多い。口縁部計測値では釜が31%、小釜が48%、内黒土師器埦Aが10%、同ⅢBが11%と、食膳具も少ないが確認される。

a．煮炊具の器形と胎土

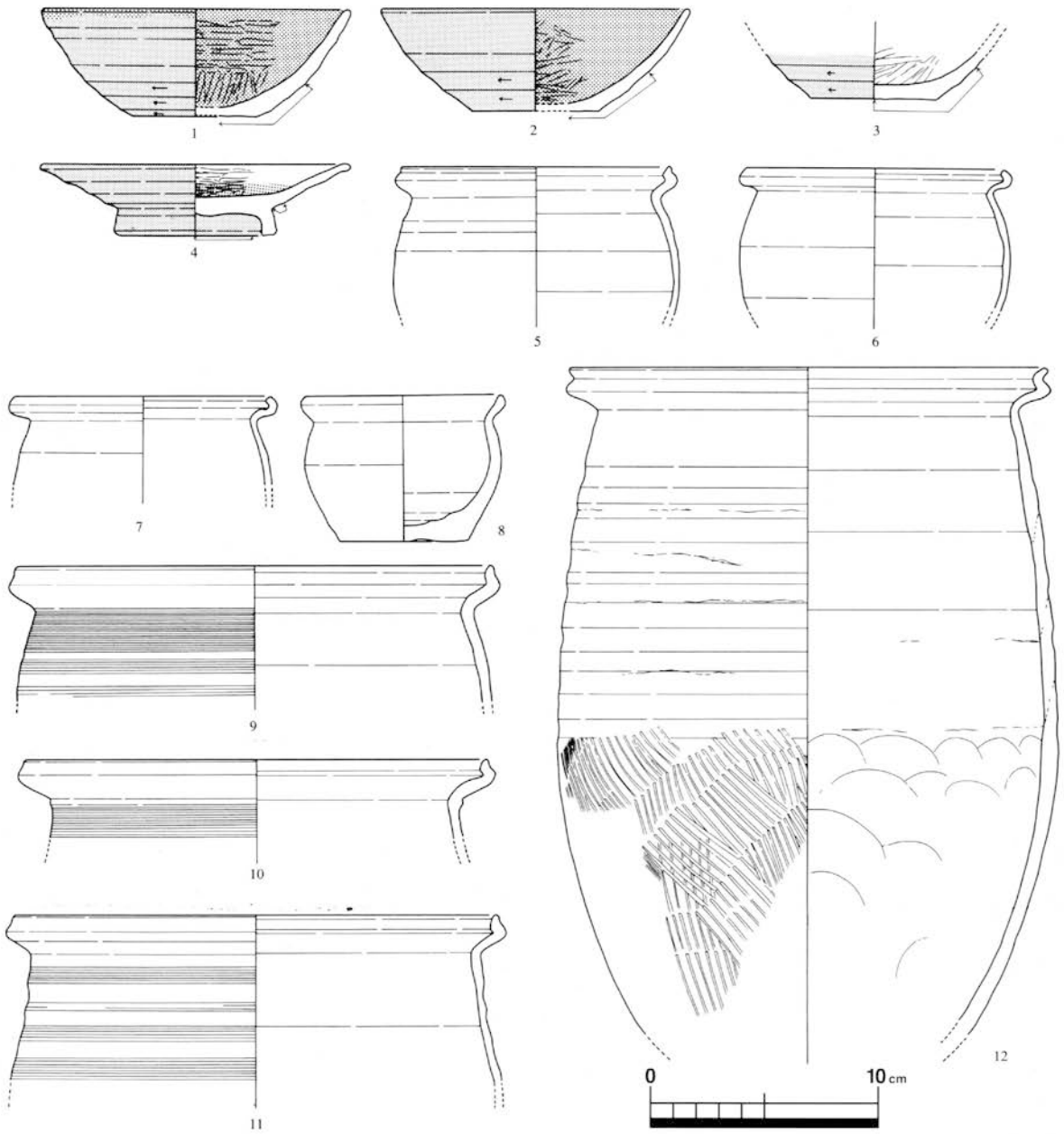
須恵器質に焼成された釜では、古く位置付けられるもの（Ⅴ2期）と新しく位置付けられるもの（Ⅵ1～Ⅵ2期）とがあり、両者で胎土の違いが確認された。が、酸化焔焼成の釜ではⅤ2期に位置付けた混和材を意識的に混入した胎土は確認されず、器形からもⅤ2期に溯るものは確認されない。つまり、土師器はⅥ1期以降と判断されるが、さらにその中でも、口縁部のS字状摘まみ上げの展開と胴部上半カキ目の省略から、9・10より11・12が後出する要素をもっており、それぞれⅥ1期とⅥ2期に対応するものと考える。なお、小釜については、カキ目省略と口縁部のS字展開が釜に先行して現れる傾向があり、図化したものは、Ⅵ期とは思われるが、その中でどちらに位置付けられるのか判断し難い。

以上の煮炊具は、隣接する土師器焼成坑で焼成されたものが当灰原に混在した可能性もあるのだが、須恵器窯内で酸化焔焼成された可能性もある。その場合、黒斑等の野焼き焼成に伴う焼き斑痕跡は出にくく、均質な焼き色をもつと予想されるが、破片資料であるため、判断しにくい。ただ、12の釜では、外面全体がくすんだ還元色に近い色調を呈すのに対し、内面は肌色系に酸化しており、須恵器窯内焼成によって還元しかかった可能性もある。

b．食膳具の焼成と器種

赤彩土師器も出土しているが、Ⅴ2期に下る器形をしておらず、それ以前のものが混入したものと判断される。

つまり、食膳具は内黒土師器で占められる訳だが、外面赤彩したものばかりであり、底面削り調整を行うなどていねいな作りをしている。器種はⅢBが半数を占め、瓷器的な器形等から見てV2期に溯るものではなくⅥ1期以降と判断されるが、高台の作りや埦体部の傾斜などから考えて、Ⅵ2期に下る感じはない。南加賀窯ではV2期に一部内黒土師器生産が始まるが、主体は依然として赤彩土師器であり、本格的な内黒土師器生産はⅥ1期以降である。当資料は、南加賀窯での本格的な内黒土師器生産開始期の資料と評価でき、V2期の赤彩埦器形の違いという点でも重要な資料と言える。また、内黒土師器の中には内面黒色焼成の失敗した製品が半数近く占めている。十分に酸化してしまって、内面黒色が飛んだものなのだが、この場合、外面のみの赤彩土師器となる。3の埦Aでは全体が、4のⅢBでは口縁部が酸化してしまっており、土師器焼成坑出土品では多いもので3割近くの量を占めている。消費地でも数%確認されるものだが、生産地とは比較できない量であり、焼成失敗品は廃棄したか、再焼成ないしは吸炭処理したものと予想する。



第54図　D区3号窯灰原出土土師器（1/3）

2．二ッ梨一貫山４号窯灰原出土遺物

当灰原から出土する遺物は、土師器片や窯道具とおぼしきものが極少量含まれる以外、４号窯焼成に伴う廃棄須恵器で占められる。

土師器は、小釜、釜、鍋の３器種で、口縁部破片は計５点のみ。いずれも図化不可能な小片である。

窯道具は、貯蔵具専用焼台で、図示した３点（245～247）が当灰原から出土している。３号窯報告での焼台分類に従えば、偏平器形で口縁端部面形成するBbⅠ類と、端部つまみ上げるBcⅠ類に分類される。ただ、大きさなどから見て、有蓋短頸壷の蓋である可能性もあり、焼台とは決めかねる。

（１）須恵器の器種構成

須恵器器種名は凡例に示した器種分類基準に基づく。食膳具は坏型器種で占められ、貯蔵具は瓶Ａと壷Ａ、横瓶、甕が主要器種である。以下に示した構成表では入っていないが、食膳具では稜埦と思われる底部破片、煮炊具では甑、貯蔵具では三耳形態をもつ瓶Ｄ（三耳瓶）、四耳を付す壷Ａ（四耳壷）、そして火舎状の無頸壷も出土している。全体の構成率を見ると、食膳具率83%、貯蔵具率15%、煮炊具率１%、小型貯蔵具率１%で、この時期としては貯蔵具率が比較的高い。食膳具内では、坏Ａが45%と半数近くを占め、坏Ｂが25%程度と比較的低い。盤Ａは坏Ｂとほぼ同量程度存在し、盤Ｂは５%程度の占有率である。なお、土師器埦としたものは赤彩土師器埦の還元焔焼成品で、製品と考えるよりも、窯の置台などに再利用されたと見ている。煮炊具では釜と鍋の量が拮抗して、定量確認されるが、小釜の確認がないことが特徴と言える。８世紀代の須恵器窯では一般的な現象であり、食膳具も含め、小型器種は須恵器窯内焼成の対象外であった可能性をもつ。貯蔵具では甕類が65%を占め、そのまま貯蔵具率12.5%という比率に反映している。甕類では中甕が32.6%と最も高いが、小甕も27.5%占有しており、この時期の特徴と言える。壷瓶類では壷Ａがやや少ないが、瓶Ａと横瓶は10%以上を占め、壷Ｆも９%を占める。先述した９世紀の壷Ｆへそのまま継続する器種とは言えないが、この時期に定量生産されるようになる器種と言える。

器種名	坏Ｂ蓋	坏Ｂ身	坏　Ａ	盤　Ａ	盤　Ｂ	高　盤	土師埦	食膳具計	小　鉢	小　壷	小貯蔵計	釜	鍋	煮炊具計
口縁部計測値	2,453	(1,154)	4,385	2,241	508	62	20	8,569	4	70	74	64	69	133
占有率	25.4%		45.4%	23.2%	5.3%	0.6%	0.2%	83.1%	5.4%	94.6%	0.7%	48.1%	51.9%	1.3%

器種名	鉢　Ｆ	壷　蓋	壷　Ａ	壷　Ｆ	瓶　Ａ	瓶　Ｄ	横　瓶	大　甕	中　甕	小　甕	貯蔵具計	器種総計
口縁部計測値	13	(21)	69	137	164	－	164	67	501	423	1,537	10,313
占有率	0.8%	4.4%		8.9%	10.7%	0%	10.7%	4.4%	32.6%	27.5%	14.9%	

第８表　Ｄ地区４号窯出土須恵器器種構成表（口縁部計測値は口縁端36分割での残存率をそのまま総計した数値、蓋付器種は数値の多い方を採用）

（２）各器種の特徴

ａ．有蓋坏型食膳具（坏Ｂ蓋・坏Ｂ身）

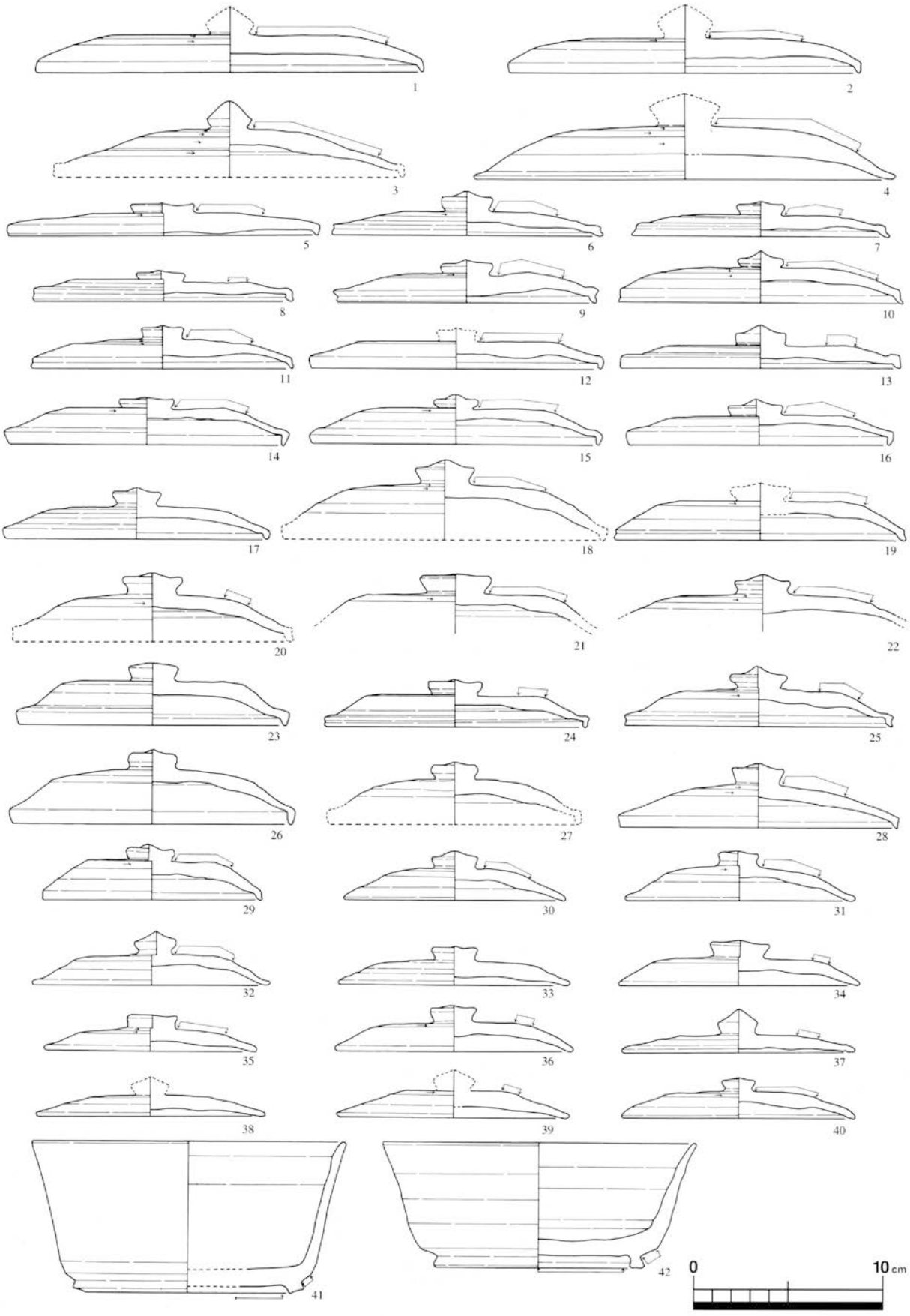
《法量組成》　当窯資料の坏Ｂ法量は、大きく３法量に分けられ、それぞれ大法量が蓋22～18㎝、身18～15㎝、中法量が蓋17～13㎝、身14～12㎝、小法量が蓋13～11㎝、身12～10㎝となる。基本的に法量の重複部分はなく、口径だけで分化できるが、器形においても明瞭に識別できる。蓋では小法量が折り返しをもたない口縁部、中

有蓋器種	坏　Ｂ　蓋			坏　Ｂ　身		
法　量	大	中	小	大	中	小
口縁部計測値	335	1,763	352	120	836	198
占有率	13.7%	71.9%	14.4%	10.4%	72.4%	17.2%

第９表　坏Ｂ法量別構成表

蓋法量	大	中	小	総　計
Ⅰ　類	3	19	12	34(89.5%)
Ⅱａ類	0	3	0	3(7.9%)
Ⅱｂ類	0	1	0	1(2.6%)

第10表　坏蓋重焼類型構成表（数値は個体確認数）



第55図　D区４号窯灰原出土須恵器（１）（S=1/3）

量が偏平器形と偏平つまみ、大法量が宝珠形つまみ。身では小法量と大法量が深身器形、中法量が偏平器形、というように特徴があり、これはそれぞれの法量の坏Bがもともとは異なる器種であったことに起因する。つまり、中法量は田嶋Ⅱ期以来の偏平器形坏Bの系統をもつのに対し、大・小法量は田嶋Ⅲ期に新たに導入された新型坏Bであり、新型器種と旧来器種とは削り調整の入念さなど作りが異なっている。これは新型坏Bが良品、旧来坏Bが普及品という性格の違いによるものであり、それは第9表に示した組成比率においても確認できる。

《重ね焼き痕跡》　坏Bは蓋と身をセットで重ねて焼く方法がとられる器種だが、坏蓋に残されたその痕跡を観察し、凡例に示した重ね焼き類型に基づいて示したのが、第10表である。法量別に提示しているが、ほとんど旧来の重ね焼き方法であるⅠ類で占められており、新たに導入された柱状重ね焼きのⅡ類は1割程度である。重ね焼き方法と法量との対応関係は見られず、出土量の多い中法量にⅡ類が出ているだけである。

《坏B蓋大法量》　大法量は第55図の1～4で、全体的に天井部厚く、偏平器形を呈すもので、つまみは宝珠形に近い頂部の盛り上がった形態をもつ。天井部削りは広く、丁寧で、精製品の感をもつ。口縁部器形等から、A類（1・2）ー偏平器形で、口縁部折り返しただけのタイプ。B類（3）ー天井部が若干丸く、口縁部へ反ってから折り返すタイプ。C類（4）ー天井部厚く、口縁部折り返しをもたないタイプの3種に分類できる。

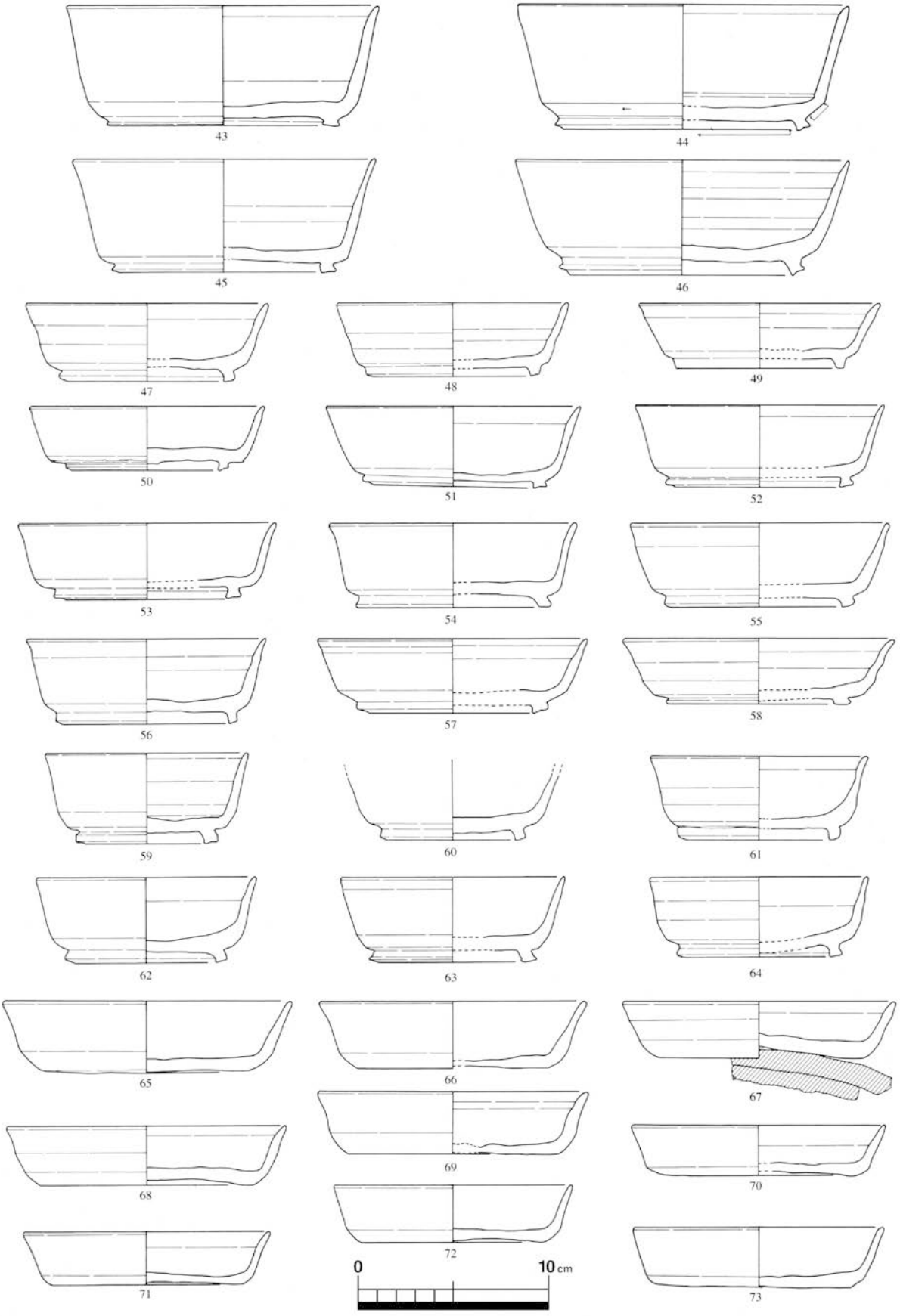
《坏B蓋中法量》　中法量は5～28で、偏平つまみをもつことを基本とし、大法量よりも天井部面が狭くて薄手であることを特徴とする。天井部削りは基本的に施されるが、ヘラ切り後ナデて済ませるものも定量見られる。削り調整の省略はⅡ3期から既に定量確認されるものであり、調整の簡略化に繋がるものではない。つまみや口縁部器形等から、A類ー偏平つまみで偏平器形、天井部削りもつタイプ。B類ー頂部盛り上がる小型つまみで、厚手タイプ。C類ー大型つまみで、大振り、天井部削りもつタイプの3種に大別され、さらに、A類は天井部厚い作りのA1類（5～13・22・25）と薄手で口縁部をしっかり折り曲げるA2類（14～16・24）に、B類は口縁部手前で屈曲し、天井部削り施さないB1類（23・26・27）と体部真っすぐ伸びるB2類（28）に細分される。A類とC類は伝統的な偏平器形を基調とし、B類は新型坏B器形を採用したものと言えるが、両形態は時間差で捉えられるものではなく、併存が当期の様相であると考えている。

《坏B蓋小法量》　小法量は29～40で、口縁部折り返ししない蓋が基本であるが、例外的に端部折り曲げる一群がある。つまみや天井部器形から、A類（33～36）ー偏平つまみで偏平器形、天井部厚手タイプ。B類（30～32）ー頂部盛り上がるつまみで、天井薄く丸味もち、口縁部外反するタイプ。C類（37・40）ー宝珠つまみないしは小型つまみで、偏平器形、口縁端部若干折れるタイプの3種に分類できる。なお、上述した口縁部折り曲げタイプは中法量A2類と同器形の小法量で、これはD類（29）としておく。

《坏B身大法量》　41～46が該当する。底部厚手で、深身であることを基本とするが、その中でも深身を呈すA類とやや偏平気味となるB類に大別される。A類（41）は底部から腰が張って体部真っすぐ立ち上がる器形で、底面削り調整を施すなど丁寧な作りをする良品である。B類は高台、体部器形から、腰が丸く体部厚手で外傾気味、高台しっかり踏ん張るB1類（42・44・46）と立ち上がり立ち気味で高台低いB2類（43）、腰が張り体部立ち気味、薄手でシャープな作りのB3類（45）に細分できる。B1類には底面削りを施すものが定量見られ、B3類のシャープな作りのものなど、全体的に丁寧な作りをしているものが多い。

《坏B身中法量》　47～58が該当する。底面ヘラ切りのみで、偏平器形を基本とするが、全体的な器形から、A類（57・58）ー大振りの偏平器形で、腰が丸いタイプ。B類ー体部立ち気味の偏平器形で、A類よりもひとまわり小型タイプ。C類ー深身で体部立ち気味タイプの3種に分類され、さらに、B類は小型でやや体部外傾気味のB1類（48～50）と体部立ち気味でやや大振りのB2類（53）に、C類は底部薄く腰丸体部外傾気味のC1類（47・51）と底部厚く体部立ち気味のしっかりした作りをもつC2類（52・56）に細分できる。蓋中法量と同様、伝統的な偏平器形と新型深身器形とが併存することが特徴である。

《坏B身小法量》　基本的に偏平器形はなく、いずれも体部立ち気味で深身器形を呈し、高台はしっかり踏ん張るものが付けられる。底面はいずれもヘラ切りのままで、Ⅲ期に見られた削り調整はなくなっている。基本的には1類型と言えるものだが、内面見込み部の器形から、しっかりと屈曲する1類（59・60・63）とこの部分が厚くなり境をもたない2類（61・62・64）とに細分される。



第56図　D区４号窯灰原出土須恵器（２）（S=1/3）

《器形類型とヘラ記号》　ヘラ記号は蓋の内面天井部と身の外底面に見られる。蓋では「｜」が主体で、「‖」と「|||」、「×」が各1点。ヘラ記号の施される類型に統一性はないが、中法量にのみ見られることが特徴と言える。これに対し、身では、「｜」が5点、「‖」が2点、「×」が6点確認される。「｜」は蓋同様、中法量にのみ確認され、類型に統一性はないが、「×」は大と小法量に見られ、大ではB1類のみに記される。小の2類が大B1類と類似する器形をもつことから、一つの類型にのみ記された可能性が高く、工人識別のための記号として使われた可能性をもつ。なお、ヘラ記号の記入率は、記入部位の破片数中記入あるものの破片数で算定する方法をとった。蓋では180点中9点（5％）、身では138点中13点であるが、「×」を除外すれば、131点中6点（5％）となり、ほぼ一致する。

b．無蓋坏型食膳具（坏A・盤A・盤B）

《坏A》　坏Aは65～94で、口径12～15㎝にまとまる1法量のものである。全体的な器形から、A類－底部から体部丸く立ち上がって外傾する偏平器形タイプ。B類－底径小さく体部丸く立ち上がり、口縁部で外反するタイプ。C類－平坦な底部から体部へ屈曲して立ち上がり、口縁部へと薄くなるタイプ。D類－底部から体部まで丸味をもっ立ち上がる　形タイプの3種に大別される。そしてさらに、A類は大振りのA1類（65～69）とやや小型化して薄手となるA2類（70～76）、底部厚手のA3類（77・78）に、B類はやや深身となるB1類（79～82）と偏平気味のB2類（83～88）に、C類・D類も同様に身の深さによってC1類（89）とC2類（90・91）、D1類（93・94）とD2類（92）に細分される。以上の4類型は既に田嶋Ⅲ期で存在している器形である。ただ、偏平器形で大振りを呈すことが基本で、小型化するとともに深身となることが新しい要素である。当類型は偏平器形が依然として主体をなし、深身器形が少数派であることが特徴と言える。なお、坏Aの底部切り離しは全てヘラ切りのままで、削り調整を施すものはない。

《盤A》　盤Aは95～130で、法量から大型を呈す大、通常法量の中、小型で深身を呈す小に分けられる。

大法量（129・130）は口径23㎝前後を測る特殊盤で、口縁端部を内側に摘まみ出して面形成させる。底部厚手で重厚な作りをもち、底面はヘラ切りのままとしている。

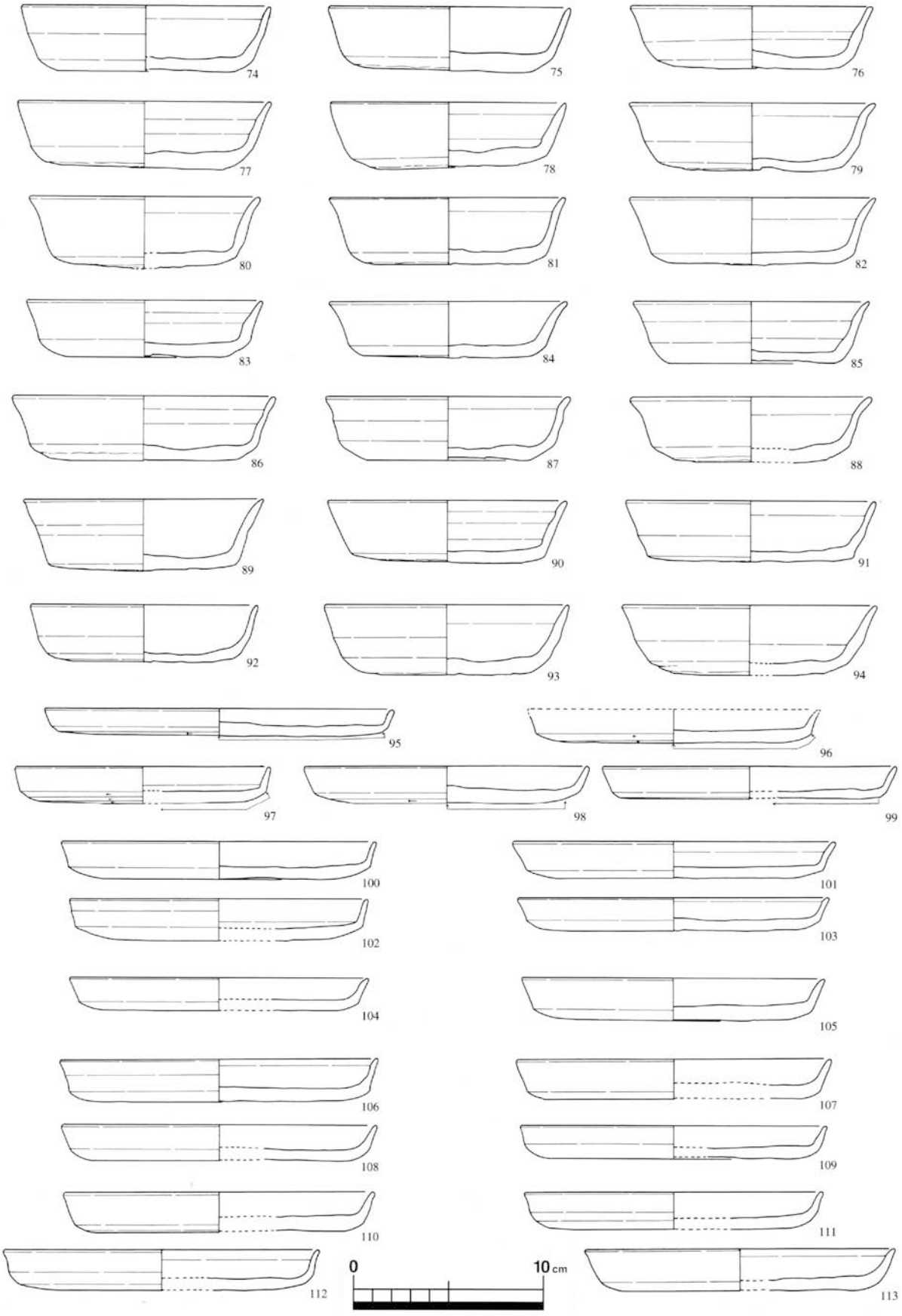
中法量は口径15.5～17㎝にほぼまとまるもので、身の浅い器形を基本とする。全体的な器形から、体部直立タイプのA類と腰丸体部外傾タイプのB類に大別され、さらにA類は腰の張り具合から腰張りA1類（100～107）と腰丸A2類（108～112）に、B類は口縁部器形から外傾のままのB1類（113～125）と外反するB2類（124～126）に細分される。以上は底面ヘラ切り未調整のものだが、底面削りを施す一群がある。器形はA類であり、底面調整するものだけをA'類（95～99）として区別する。

小法量（127・128）は口径15㎝と中法量との境がないが、口縁部長く外傾する深身のものを区別した。図示した以外にもさらに深身のものもあり、坏Aに近い器形をしている。厚手の底部を特徴とし、底面はヘラ切り未調整である。

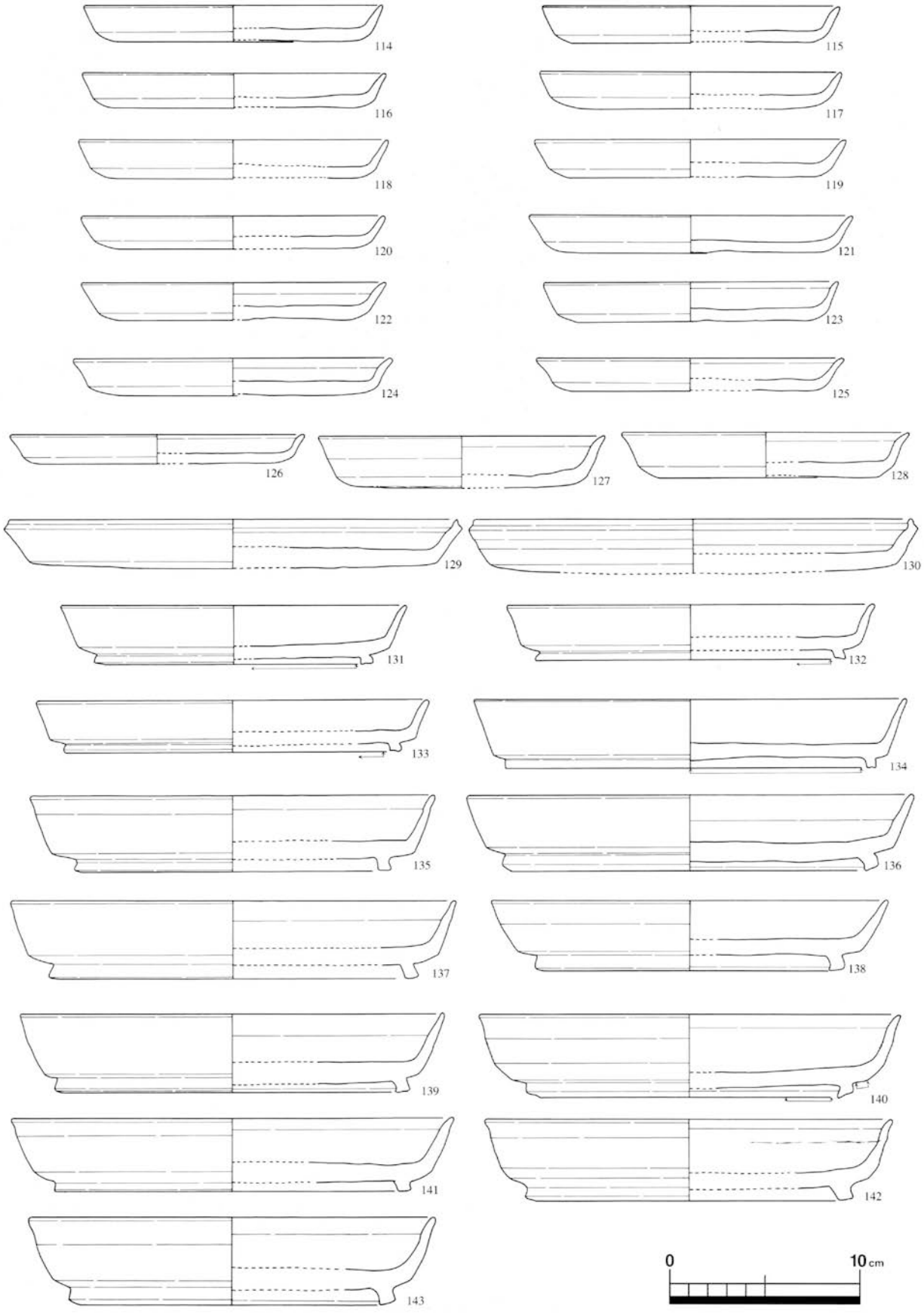
当資料の特徴は、特殊大型の大法量と小法量が存在することであるが、中法量についても、器形が定型化してくることと法量が安定してくること、そして削り調整が見られることである。削り調整の割合は、削り識別可能な底部破片数中での割合から算出すると、25／422（6％）であり、意外に少ない。

《盤B》　盤Bは131～149で、口径18～25㎝にばらつくが、1法量と言えるもので、21～23㎝に中心をもつ。体部器形から、腰張り体部外傾器形のA類と腰丸体部外傾器形のB類に大別でき、さらに、A類は小ぶりで体部立ち上がり短いA1類（131～133）と大振りで底部厚く体部立ち上がり長いA2類（134～139）、B類は大ぶりで底部厚く体部立ち上がり長いB2類（140～143）とB2より立ち上がり短いB1類（144～146・149）、体部外傾強く底部薄いB3類（147・148）に細分される。底部調整はヘラ切り無調整かナデ調整するものが主体で、底面削りするものは2割程度と少ないが、A1類では全て削り調整を伴っている。

《器形類型とヘラ記号》　無蓋坏型器種ではヘラ記号は外底面の中央付近に記される。坏Aでは「｜」46点、「‖」3点、「|||」1点、「×」11点で、966点中61点（6％）の確率。盤Aでは「｜」30点、「‖」3点、「|||」3点、「×」11点で、422点中47点（11％）の確率。盤Bでは「×」3点で、70点中3点（4％）の確率となり、



第57図　D区４号窯灰原出土須恵器（３）（S＝1/3）



第58図　D区4号窯灰原出土須恵器（4）（S=1/3）

無蓋坏型器種全体を通すと８％程度に記されている。ただ、先述したように、「×」を意味合いの異なる記号と理解し、これを除外すれば、1433点中86点（６％）となり、有蓋器種での割合とほぼ同じになる。さらに、「｜」と「‖」・「|||」との確率は10：１：１で存在し、記す行為に法則性が読み取れる。以前、筆者は９世紀後半の須恵器窯資料を整理した際、ヘラ記号割合を提示し、数量検定説を主張した（望月1992）。それは１本から２本以上へ記号本数が増えるに従って減少することに着目したものであるが、ここで提示したような「×」を除外すると、「Ⅰ」と「Ⅱ」は10：１になる。今回の資料は記号率が低いが同様の性格をもつものと考えている。これに対し、「×」の記号は有蓋坏型器種で示したような類型に対応する可能性をもつ。しかし、無蓋坏型器種では図示したものにヘラ記号を記すものが少なく、類型に対応するか判断できない。ただ、盤Ｂでは「×」記号のみ記されていることから、その可能性は十分にある。「｜」と「×」がともに出土する窯資料は多く、この説には十分な検討が必要であるが、Ⅱ3期の須恵器窯資料で坏Ｂに「×」のみを記すものがある。二ッ梨東山２号窯では、蓋で28%、身で11%の確率で、那谷桃の木山窯では身のみの外底面に20%の確率で記されている。特に、桃の木山窯では内底面に「｜」が２点あり、外底面記号「×」と明確に区別している。さらに、「×」を記す坏Ｂは一つの類型にまとまる傾向が見られ（小松市1990・1991）、先述した説の補足となろう。また、食膳具以外のヘラ記号を見ても、「｜」系統の記号をもつものは稀で、貯蔵具では量的に極めて少ないが、「×」や特殊な記号が専ら確認される。貯蔵具類に「｜」系統のヘラ記号が記されないのは、数量検定記号を記すまでもないためであり、「×」記号の性格をより一層浮き彫りにしていると言えよう。

ｃ．その他の食膳具（高盤・土師器埦）

上記に上げた食膳具以外には、高盤と稜埦状のものがあるが、稜埦状のものは長い高台を付す底部付近の破片で、薄手を呈す。小破片のため図示していない。また、赤彩土師器埦の還元焼成されたものが３点出土している。

《高盤》　高盤は153～158。口径19.5～23.5㎝に分布し、20㎝台に中心をもつ。坏部器形と脚部器形を分けて分類すると、坏部では坏底部広く偏平器形を呈すＡ類（154・155）と坏底部狭く体部外傾してのびるＢ類（153・156・157）に分類できる。Ａ類は底部中央がやや薄くなるのに対し、Ｂ類は底部厚手で、口縁部折り返しが短い。脚部は基部細目で脚高の高い１類（158・159）と基部太めで脚短い２類（160）に分類、１類は絞り痕跡明瞭なのに対し、２類は確認できず、坏部との接合部に刻みを施す。

《土師器埦》　製品ではないが、ほぼ同時期に土師器焼成坑で焼かれたものと考えられる。法量は特大、大、中とあり、特大（150）は口径17㎝前後で、深身を呈す。底面は不明だが、体部下位から削りを施し、口縁部は若干外反する。大（151）は口径14㎝台の深身で、口縁部内湾器形。体部下位は削りを施すが、底面は糸切り痕が残る。中（152）は口径12㎝台の通常法量のもので、浅身器形。体部下半から底面まで削り調整する。

ｄ．小型貯蔵具（小型鉢・小型壷）

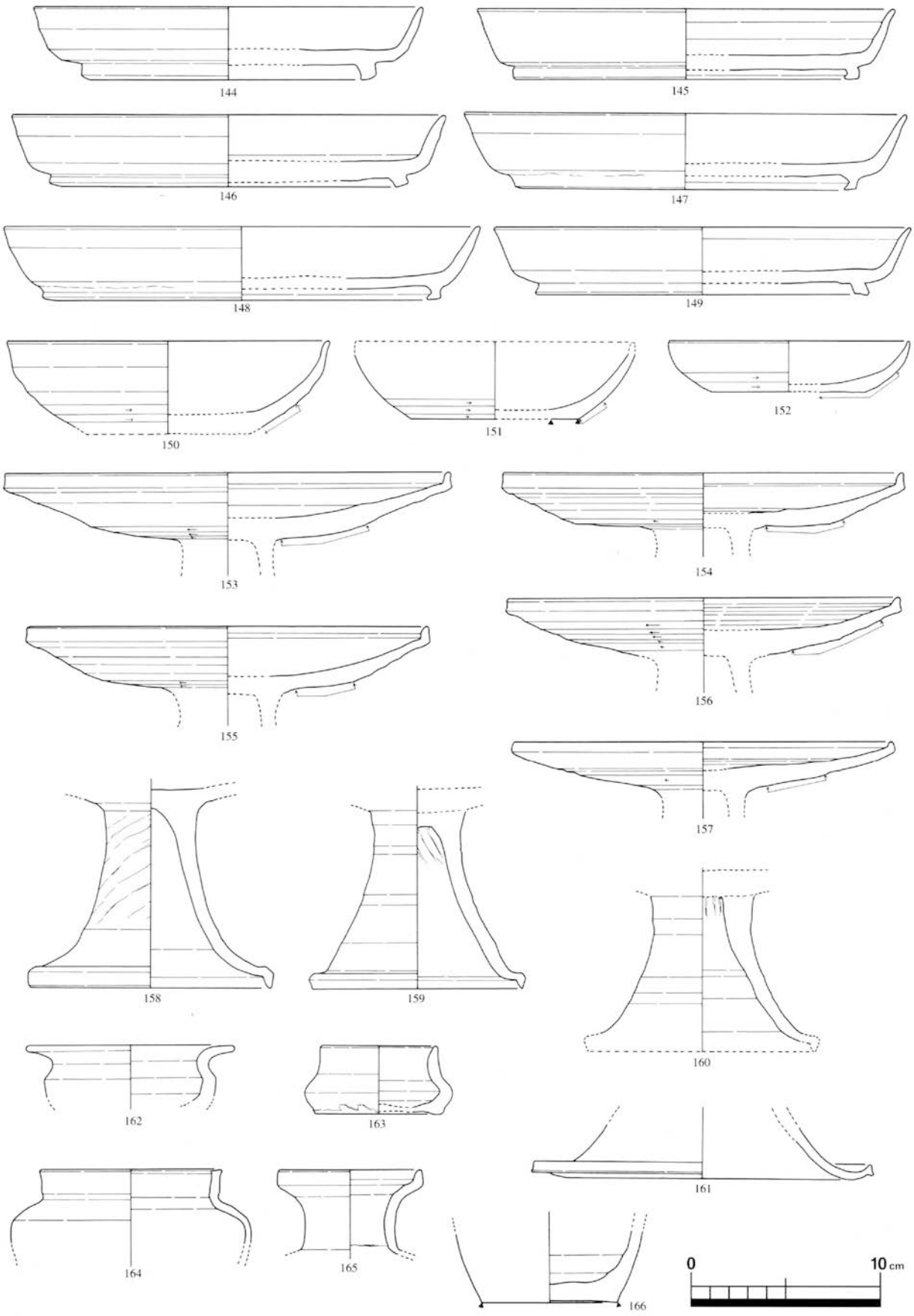
《小型鉢》　口縁部長く外屈する灰皿器形を呈す162と口縁部そのまま直立する163がある。両者とも粗い砂粒の混在する胎土で、灰皿器形の小型鉢に特徴的な胎土である。灯明皿と考えているものであるが、163については不明である。

《小型壷》　164は有蓋短頸壷。166は糸切り痕を残す平底底部で、広口壷と思われる。

ｅ．煮炊具（釜・小釜・鍋・甑）

煮炊具は通常の須恵器と異なり、大粒の砂粒を意識的に混入する胎土を使用している。土師器焼成坑で焼かれた煮炊具と同様の胎土であり、土師器胎土と言えるものである。同様の胎土はⅤ期まで確認されるが、Ⅵ期には須恵器と同様の胎土となっており、古代の土器全般において混和材を入れない胎土へ変化している。

《釜》　頸部で「く」字に折れて口縁端部を上へ若干摘まみ上げるＡ類（215・216）と口縁部外反気味のＢ類（214）に分けられる。Ａ類は当期の釜の一般的な器形と言え、厚手で内外面カキ目を顕著に残す。これに対し、Ｂ類は口縁部ナデ調整で、刷毛釜に類似した器形を呈す。



第59図　D区４号窯灰原出土須恵器（５）（S=1/3）

《小釜》　糸切り痕を残す底部破片217が出土している。胴部下半は手持ち削り、内面カキ目調整を施す。

《鍋》　口頸部外屈器形だが、端部へ肥厚して面形成するA類（218・219）と上端摘まみ上げるB類（220・221）とに分けられる。体部は内外面ともカキ目調整が顕著で、下半は外面が手持ち削り、内面が刷毛調整で丸底に仕上げている。

《甑》　222は釜の口縁部器形のように短く外屈して端部摘まみ上げる甑の外屈底部である。厚手で粘土紐積み痕を内面に残す。

f．貯蔵具（鉢・瓶・壷・横瓶・甕）

《鉢》　鉢は鉢F（167～170）のみ確認できる。体部外傾して立ち上がり、そのまま口縁部へ至る器形で、口縁端部を面形成する。体部沈線を数条施し、底部は円盤底部。底面にヘラ先状工具による刺突を3重に入れる170や中心にのみ棒状工具による刺突を入れる169、刺突文のない167もある。なお、鉢に分類できるか定かではないが、無頸壷状の器形をもつ171が出土している。体部沈線を数条巡らし、内面カキ目を入念に施す薄手で精緻な作りのもので、良質の胎土をもつ。焼成も堅緻に焼かれており、特殊品と思われる。小破片のため断定はできないが、奈良三彩や緑釉単彩陶器の火舎に類似しており、その須恵器模倣品の可能性を考える。

《瓶》　瓶は瓶Aと瓶Dが出土している。

瓶Aは172～185で、肩張り屈曲がしっかりた胴部器形をもつ。口頸部は細長い形を維持するが、頸部短く太めの174も存在し、口縁部外反が目立つ（175～177）。高台はしっかり踏ん張る器形で、底面削りやナデ調整するものが定量あるが、調整しないものでは糸切り痕が残存している（178・183）。口頸部の接合に伴う円盤閉塞痕跡は179・180がかろうじて胴部上端の痕跡を残すが、他は円盤と胴部端をともに切り落とす痕跡である。

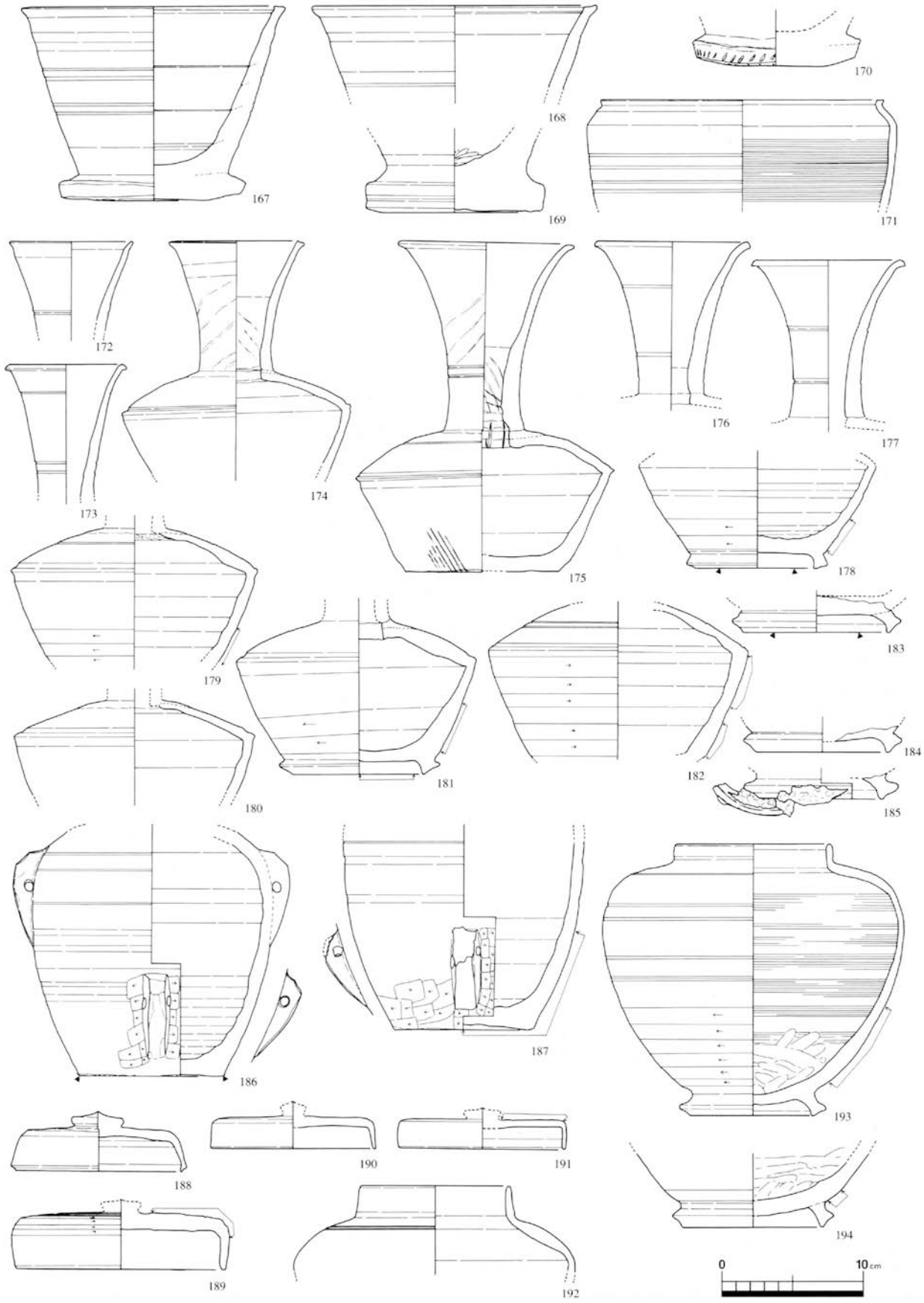
瓶Dは2個体出土しているが、いずれも両肩と胴部下位に耳を付す三耳タイプで、短胴器形を呈す。双耳瓶出現期のもので、把手は厚手で、貼り付けてから整形している。胴部下半から底面まで手持ち削りを施すものがあるが（187）、未調整のものは底面に右回転糸切り痕を残す（186）。両者とも口頸部を欠いており、出現期の双耳瓶では未だ口頸部の出土を見ていないが、宮都などで出土する奈良三彩三耳瓶の口頸部器形を見ると、165が類似する。短い頸部をもち、口縁部外反してから端部を摘まみ上げる器形で、小型であるのでやや不釣り合いだが、このような口頸部が付くものと考えている。

《壷》　壷は壷Aと小型短頸壷、壷Fが出土している。

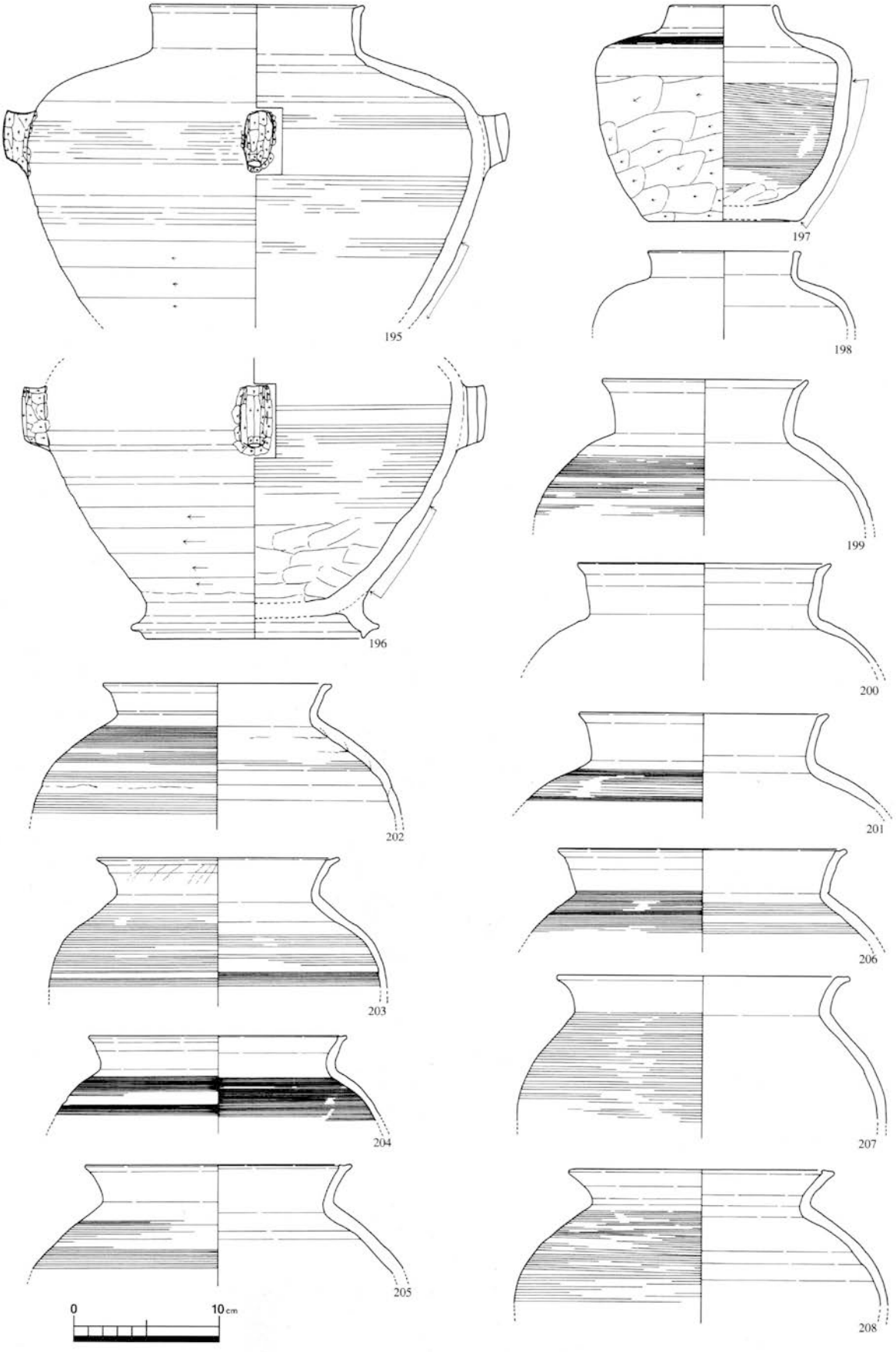
壷は所謂短頸壷に分類されるものが多いが、北野分類の壷Aと壷Bを明瞭に識別することは困難で、作り分けが曖昧である。よって、有台の有蓋短頸壷は一括して壷Aとして提示する。これに該当するものは193～196で、188～191はそれに伴う蓋である。蓋は口縁端部を摘まみ出す188以外は、端部丸くおさめるタイプである。前者は丁寧な作りで、つまみも大きく偏平なのに対し、後者は雑な作りをしている。壷Aは192～194がやや小型、195・196は大型で、後者は胴部上位に上から穿孔する把手を4つ配す。把手の形態は管状土錘に似た形で、二ッ梨一貫山3号窯のものよりも大型を呈す。把手形態は、所謂突帯付四耳壷のものだが、当資料は突帯を伴わないタイプである。突帯付四耳壷は、瓶タイプが9世紀代に信濃・越後で顕在化するが、短頸壷タイプも確認されており、越中や佐渡小泊窯などで確認されている。突帯付四耳壷の現在確認される最も古い事例は、美濃洲衛窯の老洞窯跡で確認される8世紀前葉のものであるが、北陸では当窯資料が最も古い事例と言える。突帯の付かないタイプは現在のところ当窯跡群でのみ確認されるもので、前項で述べた二ッ梨一貫山3号窯、戸津窯（V1）と3例確認がある。双耳瓶の出現と同時期であることは注目されるであろう。

この他、短頸壷にはひとまわり小型の一群がある。平底で有蓋の197と無蓋の198で、前者の胴部には手持ち削りが施される。

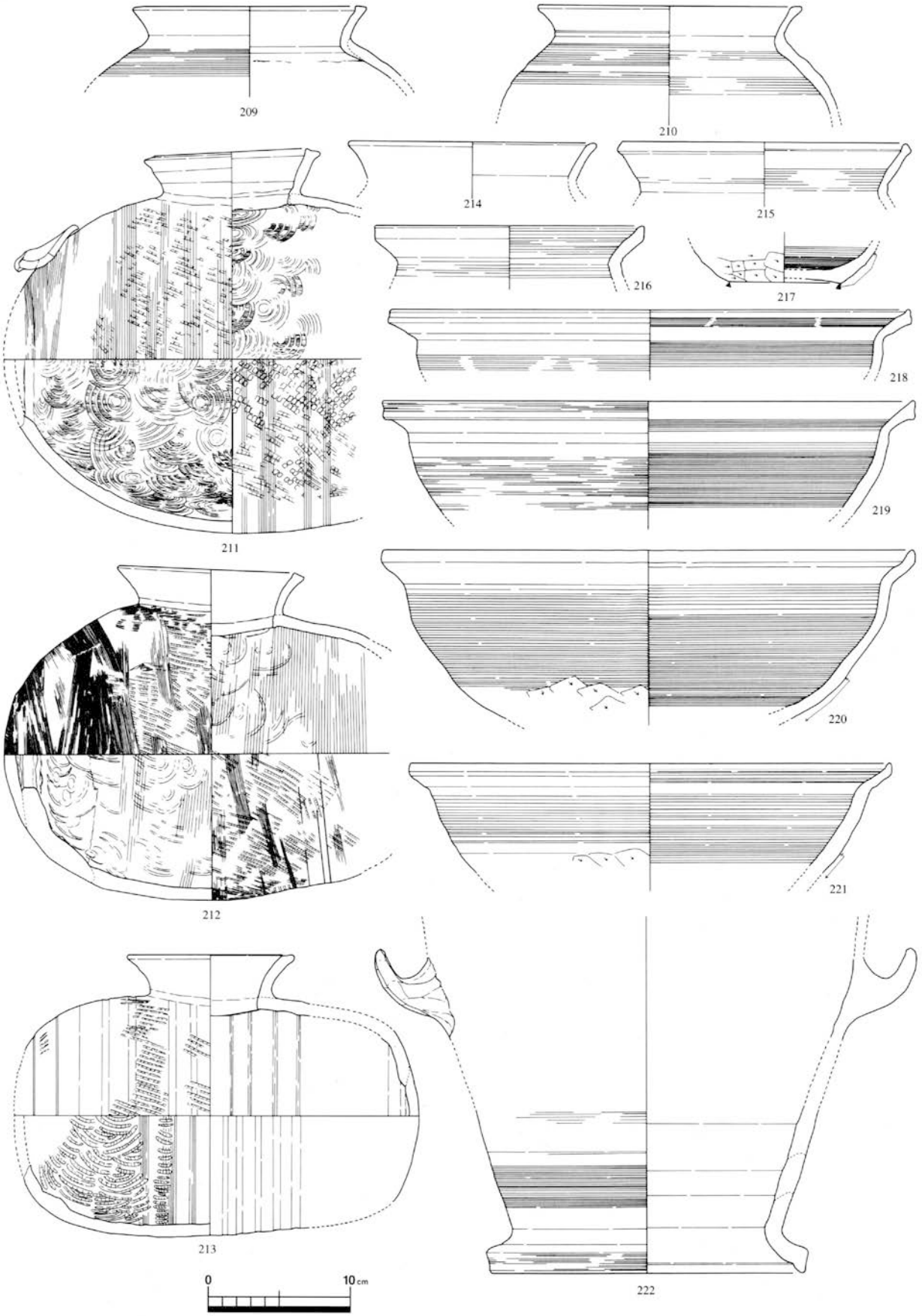
壷Fの胴部上半とほぼ同器形で底部丸底叩き出しをした小甕が存在しており、小甕との識別が困難である。ただ、口縁端部器形と器厚により、199～204・206を壷Fとした。口径14～20㎝、胴部最大径23～28㎝のものである。なお、205・207～210は小甕との識別ができなかったもので、観察表では小甕？としたが、壷Fの可能性も十分にある。ただし、器種組成表では小甕に入れたものである。



第60図　D区４号窯灰原出土須恵器（６）（S＝1/4）



第61図　D区４号窯灰原出土須恵器（７）（S＝1/4）



第62図　D区４号窯灰原出土須恵器（８）（S=1/4）

第63図　D区４号窯灰原出土須恵器（９）（S=1/4）

《横瓶》　横瓶は通常の大きさをもつ叩き成形主体で作られるA類（211・212）と小型で紐積み成形主体のB類（213）とに分けられる。A類はいずれも両側面残存しないため確実ではないが、叩きで絞って円盤閉塞する側が残存しており、両面閉塞技法によって成形された横瓶の可能性が高い。反対の欠損する側はロクロ整形されており、こちらはロクロで口を絞って円盤閉塞する側であると予想する。叩きで絞る側には円盤閉塞後に刷毛ないしはカキ目調整が施されている。B類も両面閉塞横瓶の痕跡を持つもので、ロクロで絞る側に円盤閉塞痕跡が残る。叩きで絞る側には閉塞円盤は残存していないが、剥離痕から見るに、こちら側も円盤閉塞しているものと理解される。叩きは、ロクロ閉塞側を閉じてから、逆転させ、丸く口を絞って行く工程で施されたもので、胴部1次成形では叩きを伴わなかったものと理解する。

《甕》　3号窯でも述べたように、甕は容量により、100ℓ以上の大甕、30～100ℓの中甕、30ℓ未満の小甕に分類し、さらに器形から長頸口頸部の甕A、短頸口頸部を持つ甕B、広口短胴器形の甕E、狭口長胴器形の甕Fに分類する。

大甕　口径45～55ℓ、胴部最大径80～100㎝程度のもので、容量200ℓ前後のものである。いずれも長頸口頸部をもつ甕Aだが、口縁部器形から、さらに2種に細分される。a類（239）は口頸部長く外傾して、口縁端部内外面突出するもので、その直下外面に突帯をもつ。沈線文1条を境にして上下に2段1条かきの波状文が施される。b類（240～242）は強く外反して口縁端部内外突出させる器形で、外面叩き痕を残し、櫛描波状文が施される。両類型とも薄い作りのもので、244がその胴部下半になると予想する。底部叩き出しは胴部成形叩きを切って施されており、胴部成形の最終工程で施された痕跡を持つ。

中甕　通常器形の短頸甕B（234～236）と狭口長胴器形の甕F（238）があり、甕Bは口径22～27㎝、胴部最大径45～60㎝程度、甕Fは口径15㎝前後、胴部最大径35～40㎝程度を測る。甕Bの口頸部は外反気味に短く立ち上がり、端部面形成するもので、234は口頸部に外面叩き痕を残存させる。甕Fは長胴短頸壺状器形で、口縁部に降灰ないことから有蓋であった可能性を持つ。胴部叩きは甕Bと同様だが、底部叩き出しがかなり上から施されている。

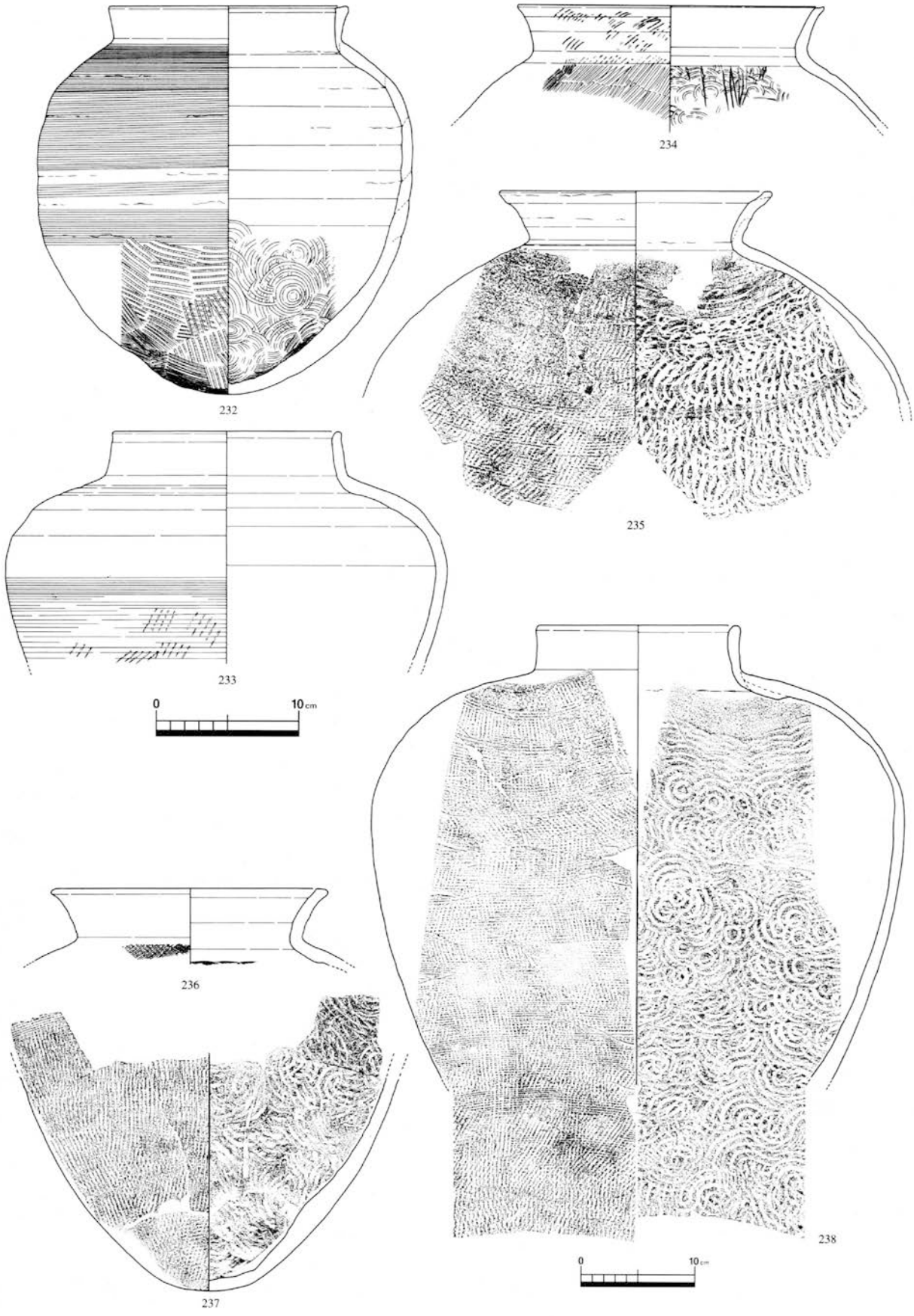
小甕　胴部最大径26～28㎝、器高27～29㎝程度の8～10ℓの容量をもつものである。胴部上半で叩き痕が残存するものもあるが、大半はカキ目やナデ調整によって完全に消されているため、叩き痕が明瞭に遺存するものは底部丸底叩き出しに伴うものばかりである。胴部下半の叩き出し以外では壺Fとの器形差は乏しく、胴部上半のみの破片で壺Fと識別することが困難なものが多い。壺Fでも述べたように、205・207～210は小甕？としたが、壺Fの可能性も持つものである。小甕はいずれも短頸の口頸部をもつ甕Bに分類されるものだが、胴部器形により、胴部上位が張ってやや長胴気味となるa類（221～231）と球胴気味となるc類（232・233）に細分される。a類が主体で、口縁部外反気味の器形を特徴とし、b類は直立する口頸部を特徴とする。底部叩き出しは中甕、大甕同様に、縦軸叩きを胴部下位から底部へ向かって施されるものが多く、成形の最終工程で行われるが、胴部1次成形に伴う叩き痕はほとんどが消されている。225・229・233のように外面叩き痕を残すものは一部存在するが、内面当て具痕を残すものは皆無で、逆に粘土紐積み痕跡を残すものが定量見られる。つまり、小甕の1次成形には成形叩きを伴わなかったものが定量存在した可能性がある訳で、中甕とは異なる成形方法であったと言える。どちらかと言えば、土師器釜に類似する成形方法と言え、土師器釜によく見られる底部叩き出しの境を縦方向に削るもの（266）も確認される（戸津60号窯燃焼部中層埋土でも田嶋Ⅳ2新期に同様の縦削りが見られ、そこでは口縁部も類似する器形を持つ）。窯場における土師器生産本格化に伴うものと評価でき、さらに、当期における小甕顕在化を生んだものと理解する。

甕の叩き具・当て具文様　横瓶も含め、叩き成形を行う器種の叩き具・当て具文様について、集計したのが第11表である。外面叩きではHa類が半数近くを占め、次いでHe類、Hc類が2割前後、7世紀代に主体的であったHb類

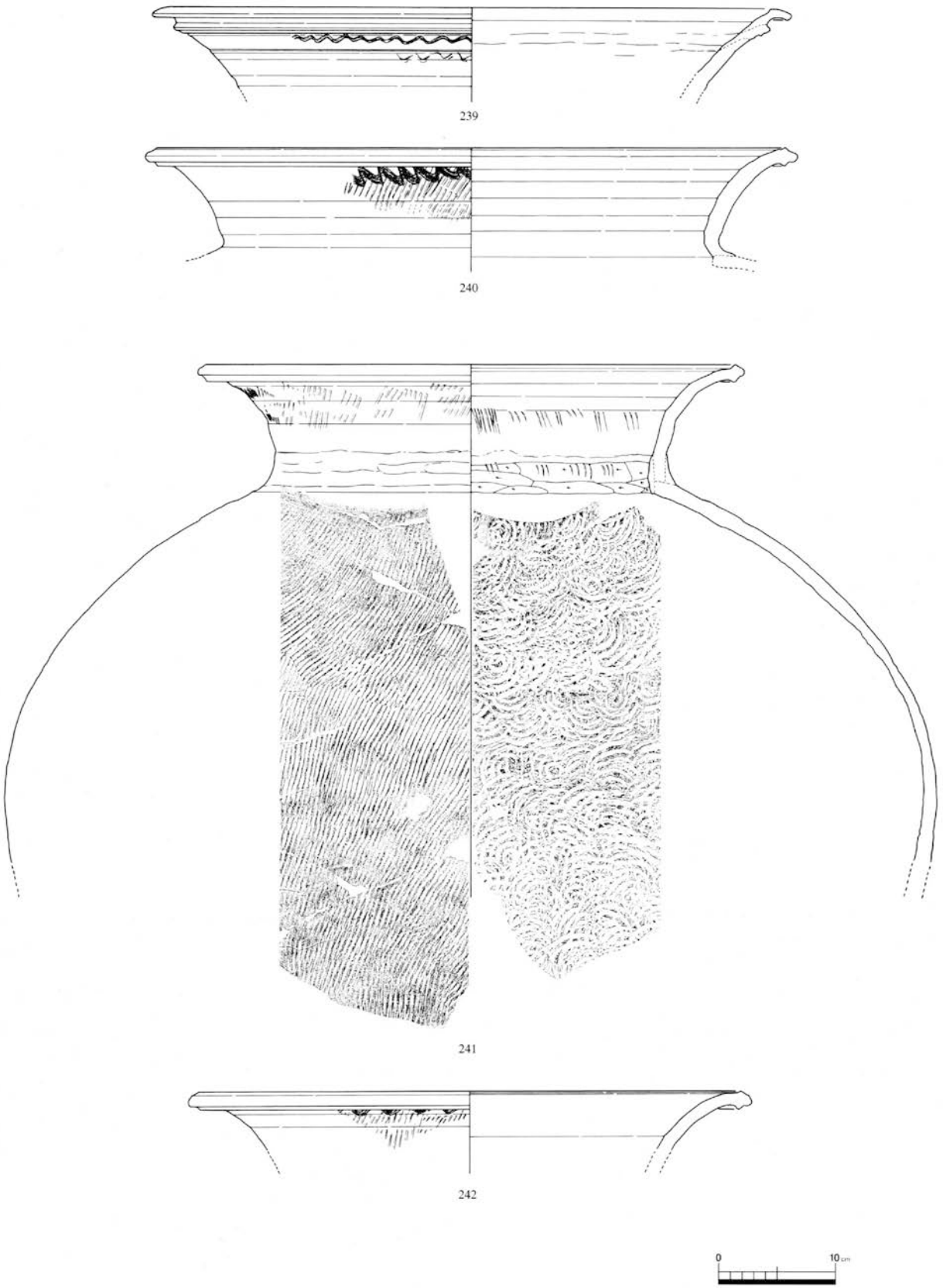
叩き具文様	Ha類	Hb類	Hc類	He類	K類
破片点数	552	78	207	283	67
占有率	46.5%	6.6%	17.4%	23.8%	5.6%

叩き具文様	Da類	Db類	Dc類	Ha類	Hb類	He類
破片点数	702	126	338	5	1	25
占有率	58.6%	10.5%	28.2%	0.4%	0.1%	2.1%

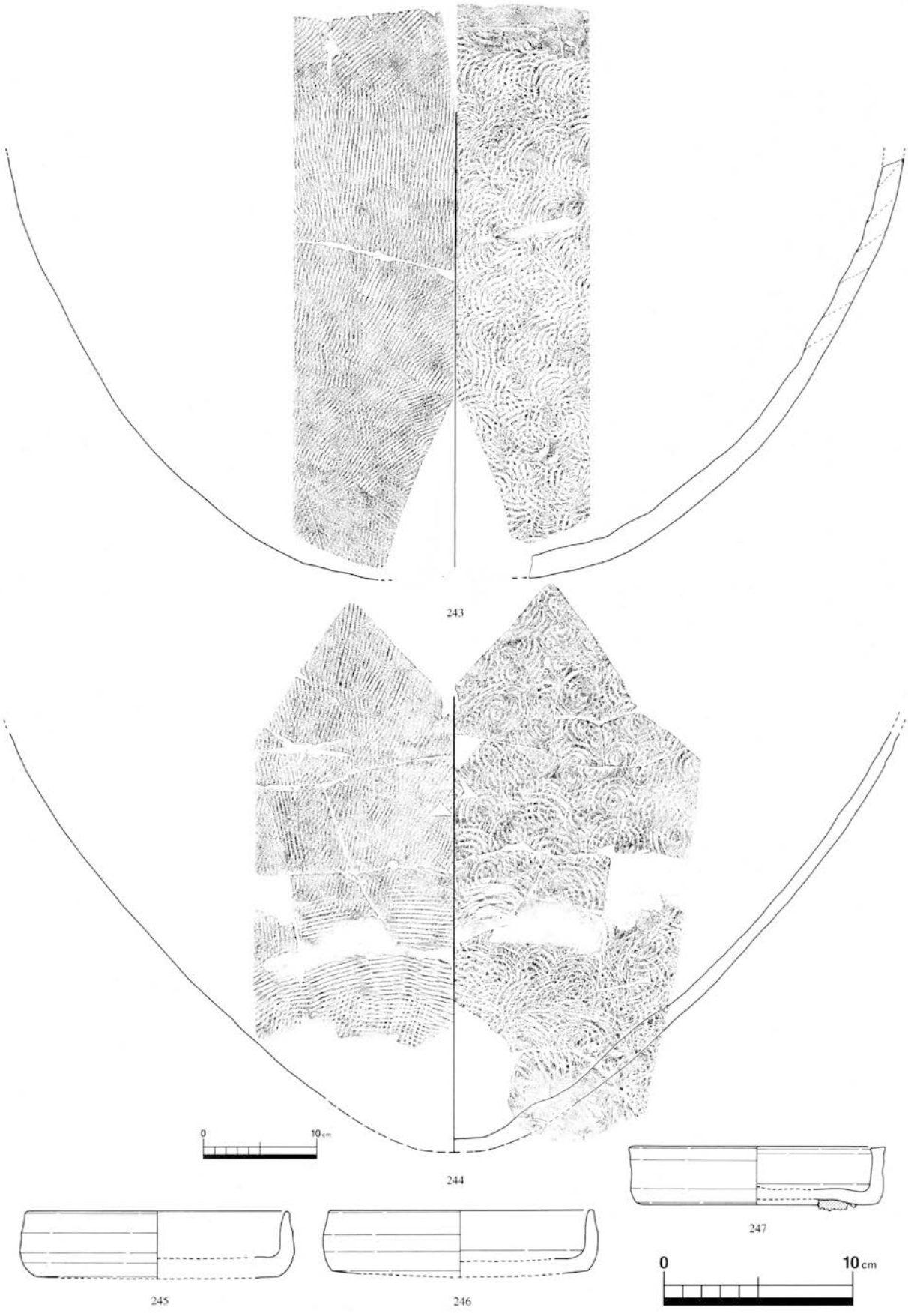
第11表　須恵器甕等外面叩き具・内面当て具文様構成



第64図　D区4号窯灰原出土須恵器（10）（232・233＝1/4，234～238＝1/5）



第65図　D区４号窯灰原出土須恵器（11）（S＝1/5）



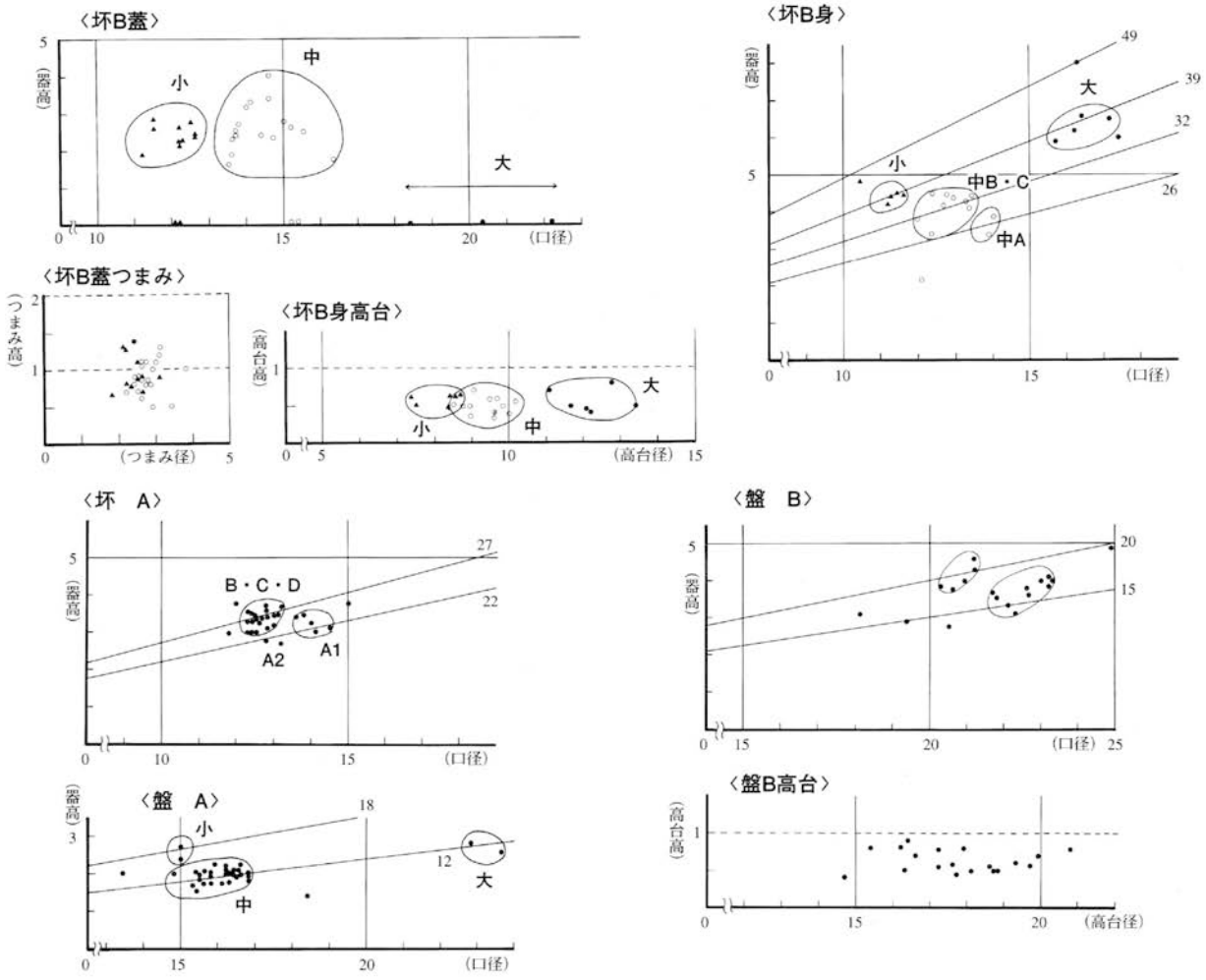
第66図　D区４号窯灰原出土須恵器（12）（243・244＝1/5，245～247＝1/3）

は少量確認されるだけである。K類は底部叩き出し専用として使われており、He類についても、底部叩き出し専用の場合が多い。ただ、大甕では胴部叩きにもHe類が使われるケースが多いようである。内面当て具は、Da類が過半数を占め、次いでDc類が３割近く、Db類は１割程度である。田嶋Ⅲ期以降、Dc類は増加し、８世紀後半代ではDc類で占められる窯（二ッ梨横川窯では９割をDc類が占める）も存在するが、当窯を見る限り、Ⅲ期を境にDa類からDc類への転換とは行かないようである。また、当窯では底部叩き出し専用当て具として、平行線文当て具が一部使われている。確認点数は１％未満と少ないが、この時期以降、底部叩き出し当て具文様として主体的となるものである。

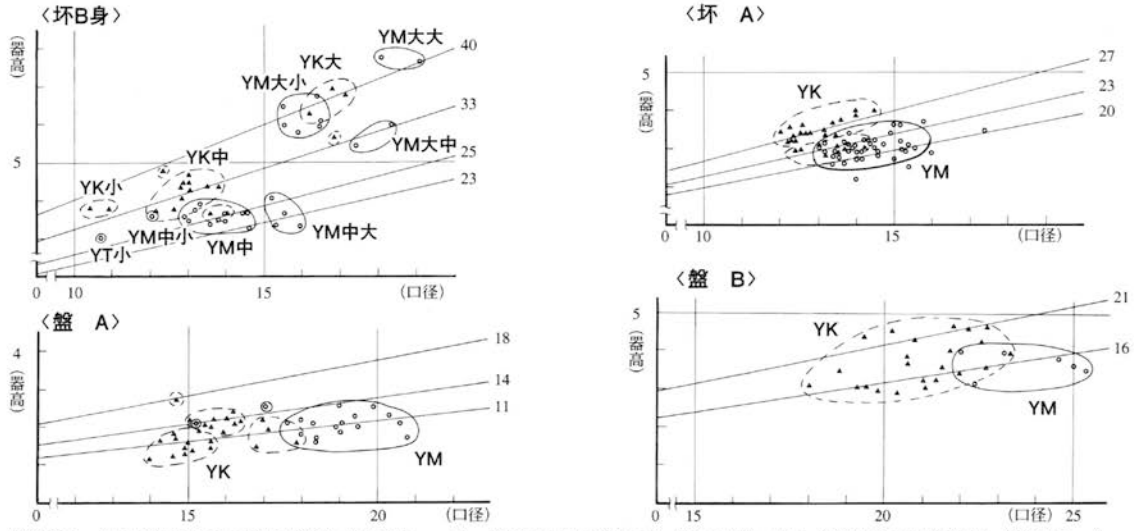
（３）当窯須恵器の特徴と編年的位置付け

当窯資料は灰原の一部分のみであり、灰原全体を網羅した資料ではない。このため、提示した須恵器様相に偏りをもつ可能性もあるが、複数窯の灰原が混在したものとは考え難く、ほぼ単一時期の資料と考えている。南加賀窯跡群の既存資料と対比すると、食膳具における盤類の定着や坏Ｂの３法量構成、そして坏Ｂ・坏Ａの法量などから、二ッ梨横川窯が類似する。二ッ梨横川窯は田嶋Ⅳ1期に位置付けられるものであり、当窯資料も当期の窯と判断するが、二ッ梨横川窯と異なる様相もあるため、田嶋Ⅲ期の矢田野向山窯とも比較しながら、当窯須恵器の特徴を以下に提示してみたい。

まず、器種組成では二ッ梨横川窯の食膳具率91％に対し、Ｄ地区４号窯は86％と低い。ただ、矢田野向山窯も92％と高い率を占めており、Ｄ地区４号窯の率は、この窯の性格と言えるものだろう。貯蔵具特に小甕の生産量の高さがそのまま、食膳具率を相対的に下げているものと理解する。次に、食膳具内での構成比率だが、Ⅲ期の矢田野向山窯では坏Ｂ 37.6％、坏Ａ 60.5％、盤Ａ 1.1％、盤Ｂ 0.2％、高盤0.2％に対し、二ッ梨横川窯では坏



第67図　Ｄ区４号窯出土坏Ｂ蓋・坏Ｂ身・坏Ａ・盤Ａ・盤Ｂ法量分布図（単位はcm）



第68図　矢田野向山１号窯Ⅲ次窯（白丸）・二ッ梨横川１号窯灰原（白三角）出土食膳具法量分布図（単位はcm）

Ｂ 33.3%、坏Ａ 28.7%、盤Ａ 24.1%、盤Ｂ 11.5%、高盤 2.3%となり、盤類の増加と坏Ａの減少がⅢ期からⅣ1期への移行の際に見られる現象であることが理解される。Ｄ地区４号窯の比率と対比すると、坏Ｂ 25.4%、坏Ａ 45.5%、盤Ａ 23.2%、盤Ｂ 5.3%、高盤 0.6%の比率は、盤類定着傾向から確かにⅣ1期の概念ではあるものの、矢田野向山窯に近い様相を持つ。Ⅳ1期の範疇に入るであろうことは、第67図に示した各食膳具の法量分布の比較でも確認されることだが、矢田野向山窯で主体的であった偏平器形を持った坏Ｂ・坏Ａの残存傾向は、二ッ梨横川窯よりもＤ地区４号窯の方が強く出ている。さらに、盤Ａ・盤Ｂの相対的な大ぶり傾向、田嶋Ⅲ期に位置付けられる篠原遺跡で散見される特殊大型盤Ａの存在（石川埋文1987）、鉢Ｆに二ッ梨横川窯に存在する新型器形が見られずⅡ期からの古手形態で占められる状況、瓶Ａの口頸部短縮化以前の様相などは、二ッ梨横川窯より確実に古相を示すと評価でき、仮にⅣ1期を細分できるとすれば、Ｄ地区４号窯を古段階へ、二ッ梨横川窯を新段階へ位置付けることができよう。

また、当窯製品の特徴だが、篠原遺跡で出土するような大型特殊盤Ａの生産や、破片で稜埦の可能性を持つ金属器的な坏類の生産など（南加賀窯では稜埦生産がほとんど確認されていない）、上質な製品を生産・供給する窯と位置付けられていたものと予想する。それは、貯蔵具生産において顕著で、四耳壺や三耳瓶の生産、火舎状器形を呈す特殊品の生産など、供給先が限定されるような生産を行っている。さらに、瓶類の底部糸切り技法の導入、横瓶両面閉塞技法導入など、新たな製作技術導入をも感じさせるものであり、新種壺・瓶類の導入とも連動するものであろう。

引用・参考文献

石川県教育委員会　1979　『戸津５号窯』

石川県立埋蔵文化財センター　1987　『篠原遺跡』

大西　顕　1997　「凸帯付双耳瓶の紹介」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

利部　修　1998　「東北以北の双耳坏と環状凸帯付長頸瓶」『研究紀要』第13号　秋田県埋蔵文化財センター

木立雅朗・花塚信雄　1986　「小松市・二ッ梨窯跡採集の須恵器について」『石川考古学研究会会誌』第29号　石川考古学研究会

北野博司他 1994　「須恵器坏類の製作技法」『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』

北野博司他 1996　「内面黒色土器の焼成技法」『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨』』

小池 寛 1995　「須恵器・環状突帯付蓋について」『文化財論叢Ⅱ』　奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会

小松市教育委員会　1983　『戸津』

小松市教育委員会　1989　『二ッ梨横川１号窯跡』

小松市教育委員会　1990　『二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』

小松市教育委員会　1991　『戸津古窯跡群Ⅰ』
小松市教育委員会　1992　『戸津古窯跡群Ⅱ』
小松市教育委員会　1993 a　『戸津古窯跡群Ⅲ』
小松市教育委員会　1993 b　『二ッ梨豆岡向山古窯跡』
小松市教育委員会　1999　『林タカヤマ窯跡』
笹澤正史　1997　「越後頸城郡内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会
高松町教育委員会　1985　『八野古窯跡群発掘調査概要報告書』
近間　強　1988　「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」『石川考古学研究会会誌』第31号　石川考古学研究会
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1990　『鉢伏２・３号窯址灰原発掘調査概報』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1995　『持明寺遺跡』
望月精司　1992　「ヘラ記号について」『戸津古窯跡群Ⅱ』小松市教育委員会
望月精司　1999　「越前・南加賀地域の須恵器貯蔵具」「シンポジウム討論のまとめ」『北陸古代土器研究』第８号　北陸古代土器研究会

第３節　　Ｅ区の調査

第１項　検出した遺構

Ｅ区は「一貫山」の南東部にあたる区域で、Ｆ区から連続する斜面縁辺にあたる。県道側からの田地造成時の掘削と以前おこなわれた土砂採取によって両側から削り取られており、馬の背状に残丘が存在するのみである。須恵器灰原というような黒色灰層が確認された訳でないため、明確な遺構認定はしなかったが、比較的まとまった時期の須恵器と土師器を包含する土層が検出された。包含層下に遺構の検出はなく、遺物包含層のみの調査である。遺物出土量は遺物箱２箱程度で、少量の土師器以外は、須恵器である。窯の天井崩壊土や焼台溶着片が混在していることから、須恵器窯に伴う廃棄物と判断する。

第２項　出土した遺物

出土遺物は大半が須恵器で、土師器は図示した土錘以外では小釜・釜等の胴部破片が数十点出土しただけである。須恵器は食膳具が大半を占め、貯蔵具は少量出土するのみ。陶錘が２点ほど出土する。

１．須恵器食膳具について

須恵器食膳具は、坏Ａ、Ⅲ Ｂ、埦Ａ、埦Ｂが確認され、坏Ａは少量、埦Ⅲ類が主体を占める。特に、埦類の出土が目立ち、半数以上を埦類が占める。

坏Ａは体部外傾する器肉の薄いもので、坏型食膳具の終焉期としている戸津35号窯（Ⅵ2期新）に近い形態をもつ（望月1992）。Ⅲ Ｂ類は、台径大きく、しっかりした形態をもつ３もあるが、高台が小型化したり、作りの雑なものが目立ち、底面に糸切りを残すものが主体を占める。Ⅲ ＢはⅥ1期に出現する器種で、Ⅵ2期に最盛期を迎えるが、Ⅵ3期には減少し、高台が小型化して体部が埦形を呈するようになる。当資料は、形態的にⅥ3期古期としている戸津44号窯（望月1992）に近い形態で、埦Ⅲの主体が埦にあることからも一致する。埦類は埦Ｂが多く、埦Ａは図示できたものが少ない。埦Ａは底部小型化し、体部外傾、器肉薄くなるタイプで、底面調整せず、糸切り痕を残すものばかりである。埦Ｂも高台が小型化して低くなり、体部開き気味の薄手のタイプである。体部下端のみ削るものが目立つが、これは高台接合に伴う削りであり、Ⅵ3期新まで存続する技法である。埦ＡはⅥ2期古に出現、埦Ｂはやや遅れてⅥ2期中に出現するが、Ⅵ3期の生産量増加に伴って底面削りの省略や高台の小型化と低下、底径の縮小と体部外傾化などが見られる。Ⅵ3期の中でどこにあたるかは　類だけでは難しい判断だが、Ⅲ Ｂや坏Ａも併せて考えれば、当資料をⅥ3期古か中頃と見るのが妥当だろう。

なお、南加賀窯のⅥ期以降の編年観については、1992年段階のものから、現在では1997年の田嶋明人氏の示された改訂案を採用している（田嶋1997）。この編年案は須恵器生産の終焉をⅥ3期に考えるもので、従来考えていたⅦ1期の戸津56号窯・48号窯期をⅥ3期に繰り上げるものである。つまり、1992年の筆者案（望月1992）で示した１期と２期がそのままⅥ2期、Ⅵ3期に対応する。また、南加賀窯の終焉を戸津48号窯と以前は考えていたが、加賀市耳聞山遺跡のＰＯ－１資料（加賀市1994、土師器はⅦ1に比定）の須恵器は底径小型化し体部外傾顕著となった埦類で、器肉が戸津48号窯より薄くなり、確実に後出の様相をもつ。埦類のみの構成で、焼成は半還元状態、信濃で「軟質須恵器」と呼称する低火度還元焼成のものに焼色が似る（山田1997）。山田氏が想定する土師器焼成坑と同様の焼成施設による生産が該当するか判断できないが、南加賀窯での生産終焉後の在地での疑似須恵器生産の可能性を示唆する資料と言えよう。

２．土錘・陶錘について

土錘、陶錘ともに管状土錘で、いずれも中央が若干膨らむ紡錘形を呈す。須恵質の陶錘は30ｇ前後、土師質の土錘は100ｇと大きさに偏りがある。陶錘生産の事例はⅥ2期の戸津11号窯であり、そこでは大100ｇ前後、中40ｇ前後、小25ｇ前後となる（小松市1992）。中と小の境は明瞭でないため、一括すれば、中小が９割以上を占めており、大は特異な大きさのものとなる。これに対し、後述するＦ地区出土の土錘では大が過半数を占めており、

陶錘とは逆の様相をもつ。理由は分からないが、土師質は大型、須恵質は中小型という作り分けが存在した可能性がある。

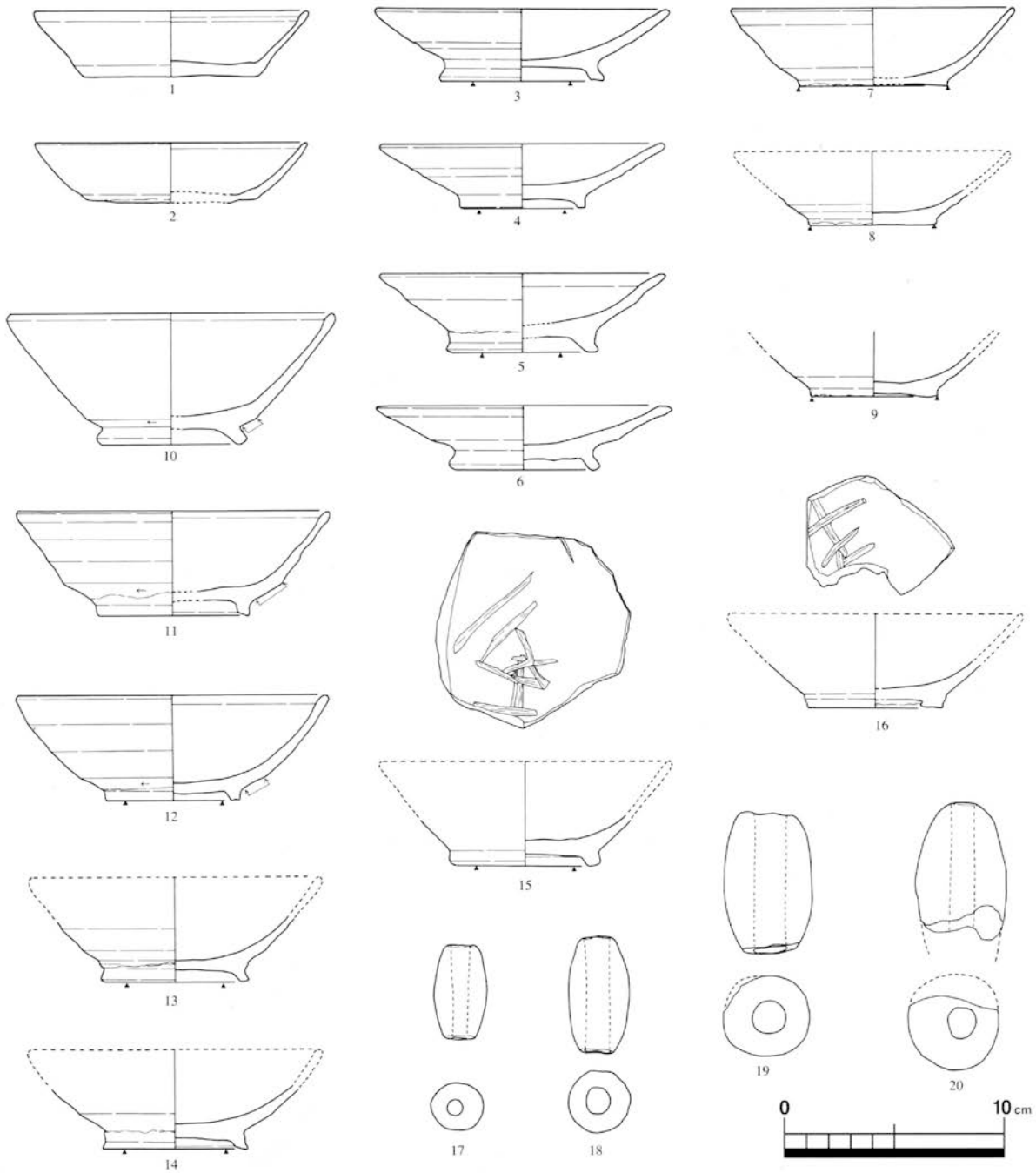
引用参考文献

小松市教育委員会　1992　『戸津古窯跡群Ⅱ』

田嶋明人　1997　「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

望月精司　1992　「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』第２号　北陸古代土器研究会

山田真一　1997　「信濃の９世紀代の土器生産」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会



第69図　E区包含層出土須恵器・土錘・陶錘（1/3）

D区　3号窯灰原出土須恵器観察表(第17～43図)

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋特大	R-1d R-2b·2d	□23.4, 高8.4 つまみ径3.8,つまみ高4.6	普通	青灰白焼堅緻	1/2	天爪痕有、重焼Ⅰ類
2	〃	R-2a	つまみ径3.1,つまみ高3.6	〃	灰白焼堅緻	鍔片	
3	〃	R-2b,S-2a	□21.2, 高5.4 つまみ径2.8,つまみ高2.7	〃	〃	5/6	重焼Ⅱa類
4	〃	S-1c	□18.8, 高4.4 つまみ径2.9,つまみ高2.2	〃	灰色焼堅緻	1/2	重焼Ⅰ類
5	〃	〃	□21.5	良	〃	1/3	重焼Ⅱa類
6	〃	R-1d	□19.2, 高4.7 つまみ径3.2,つまみ高2.0	普通	灰白焼堅緻	略完	重焼Ⅰ類
7	〃	前庭部	□16.2, 高4.1 つまみ径2.7,つまみ高1.9	良	白焼堅緻	1/3	〃
8	〃	R-1c	□20.8	砂多目	灰色焼堅緻	2/5	重焼Ⅱa類
9	〃	S-1c	□18.8, 高7.0 つまみ径3.0,つまみ高1.9	良	白焼堅緻	完形	〃
10	〃	S-2,S-1c	□19.0, 高6.1 つまみ径2.9,つまみ高1.8	〃	〃	1/4	〃
11	〃	R-2b	□19.0, 高5.8 つまみ径2.6,つまみ高1.7	〃	〃	1/2	〃
12	坏B蓋大	R-1c·d	□17.0, 高4.7 つまみ径2.8,つまみ高1.7	砂多	灰白焼良	4/5	重焼Ⅰ類
13	〃	R-1c	□16.8, 高3.4 つまみ径2.8,つまみ高1.5	普通	生焼	5/6	重焼Ⅱb類
14	〃	〃	□16.9, 高3.6 つまみ径2.3,つまみ高1.5	〃	灰色焼堅緻	1/2	重焼Ⅰ類
15	〃	R-2a	□17.5, 高3.9 つまみ径2.7,つまみ高1.6	良	青灰焼堅緻	5/6	〃
16	〃	Q-2b,Q1d	□16.4, 高4.0 つまみ径2.8,つまみ高1.45	〃	白焼堅緻	2/3	重焼Ⅱa類
17	〃	S-1c	□15.6, 高3.3 つまみ径2.4,つまみ高1.0	普通	灰白焼堅緻	完形	〃
18	〃	R-1c	□16.6, 高3.35 つまみ径2.6,つまみ高1.3	良	白焼堅緻	1/4	〃
19	〃	R-2b,S-1c	□16.8, 高3.25 つまみ径2.4,つまみ高1.4	普通	青灰焼堅緻	3/4	重焼Ⅰ類
20	〃	S-1c	□16.9, 高3.0 つまみ径2.4,つまみ高1.4	良	白焼堅緻	完形	重焼Ⅱa類
21	〃	前庭部	□16.6, 高3.5 つまみ径2.7,つまみ高1.1	〃	〃	略完	〃
22	〃	S-2	□15.0, 高4.52 つまみ径2.8,つまみ高1.25	〃	〃	4/5	〃
23	〃	R-1d,R-2b	□15.6, 高3.4 つまみ径2.64,つまみ高1.0	普通	〃	1/2	〃
24	〃	Q-2b	□16.3, 高3.5 つまみ径2.5,つまみ高1.2	〃	灰色焼堅緻	2/3	〃
25	坏B蓋中大	S-1c	□14.9, 高3.6 つまみ径2.6,つまみ高1.4	良	白焼堅緻	1/2	〃
26	坏B蓋大	〃	□16.0, 高3.7 つまみ径2.8,つまみ高1.2	普通	灰色焼堅緻	5/6	〃
27	〃	Q-2b	□16.2, 高3.8 つまみ径2.5,つまみ高1.4	〃	〃	略完	〃
28	〃	S-1c	□16.7, 高3.95 つまみ径2.4,つまみ高1.5	〃	〃	3/4	〃
29	〃	R-1c	□16.2, 高3.7 つまみ径2.6,つまみ高1.25	〃	青灰焼堅緻	〃	〃
30	〃	〃	□15.7, 高2.9 つまみ径2.6,つまみ高1.1	〃	灰白焼堅緻	完形	〃
31	〃	〃	□16.2, 高2.9 つまみ径2.7,つまみ高1.05	〃	〃	5/6	〃
32	坏B蓋大	R-1c	□16.6, 高3.2 つまみ径2.6,つまみ高1.2	普通	灰白焼堅緻	4/5	重焼Ⅱa類
33	〃	S-1c,R-2b	□15.4, 高3.0 つまみ径2.4,つまみ高1.4	〃	〃	1/2	重焼Ⅱb類
34	〃	S-2a,S-1c	□16.0, 高4.5 つまみ径2.5,つまみ高1.45	良	白焼堅緻	2/3	重焼Ⅱa類
35	〃	S-2	□15.8, 高4.9 つまみ径2.4,つまみ高1.35	〃	〃	1/2	〃
36	〃	S-1c,S-2	□16.6, 高4.95 つまみ径2.5,つまみ高1.45	〃	〃	3/4	〃
37	〃	S-1c	□15.8, 高3.8 つまみ径2.4,つまみ高1.05	〃	〃	9/10	〃
38	〃	R-2b	□16.0, 高4.0 つまみ径2.4,つまみ高1.3	普通	〃	完形	〃
39	〃	S-2	□15.6, 高4.8 つまみ径2.3,つまみ高1.4	良	〃	〃	〃
40	〃	R-2b	□16.2, 高4.5 つまみ径2.5,つまみ高1.4	〃	〃	5/6	〃
41	〃	〃	□15.4, 高4.5 つまみ径2.7,つまみ高1.4	〃	〃	〃	〃
42	坏B蓋中小	R-2a·b	□14.8, 高4.5 つまみ径2.4,つまみ高1.1	普通	青灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類 ヘラ記号「Ⅰ」
43	坏B蓋大	R-1c	□16.4, 高4.2 つまみ径2.3,つまみ高1.4	良	白焼堅緻	2/3	重焼Ⅱa類
44	〃	S-1c	□17.5, 高3.6 つまみ径2.4,つまみ高1.3	〃	〃	1/3	〃
45	〃	〃	□15.4, 高3.82 つまみ径2.2,つまみ高1.2	普通	青灰焼堅緻	3/5	小型身とⅠ類重焼
46	〃	〃	□16.6, 高2.7 つまみ径2.1,つまみ高1.15	良	白焼堅緻	1/2	〃
47	坏B蓋中大	〃	□14.5, 高4.2 つまみ径1.95,つまみ高1.3	普通	灰白焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa類 ヘラ記号「Ⅰ」
48	坏B蓋大	R-2b	□15.6, 高3.8 つまみ径2.6,つまみ高1.1	良	白焼堅緻	5/6	重焼Ⅱa類
49	〃	〃	□16.0, 高4.35 つまみ径2.45,つまみ高1.6	〃	灰白焼堅緻	1/2	〃
50	〃	〃	□15.7, 高4.1 つまみ径2.25,つまみ高1.0	〃	白焼堅緻	4/5	〃
51	〃	R-1c	□16.4, 高4.1 つまみ径2.7,つまみ高1.3	〃	〃	6/7	〃
52	〃	Q-1d	□16.8, 高3.85 つまみ径2.5,つまみ高1.2	普通	灰色焼堅緻	2/3	〃
53	〃	S-1c	□15.5, 高3.9 つまみ径2.3,つまみ高1.15	良	暗灰焼堅緻	5/6	〃
54	〃	R-1c	□16.2, 高3.8 つまみ径2.3,つまみ高1.3	普通	青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
55	〃	Q-2a	□16.0, 高3.3 つまみ径2.6,つまみ高1.1	〃	灰白焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa類
56	〃	前庭部	□16.2, 高3.2 つまみ径2.45,つまみ高1.1	〃	白焼堅緻	完形	重焼Ⅱa類 ヘラ記号「卌」
57	坏B蓋中大	R-2b	□15.0, 高3.2 つまみ径2.5,つまみ高0.9	〃	灰白焼堅緻	1/2	重焼Ⅱa類
58	坏B蓋大	R-2a·b	□14.9, 高4.7 つまみ径2.4,つまみ高1.6	良	白焼堅緻	〃	〃
59	〃	Q-1d	□15.2, 高3.3 つまみ径2.4,つまみ高1.0	〃	青灰焼堅緻	1/5	
60	〃	S-1d	□16.5, 高3.95 つまみ径2.5,つまみ高1.35	砂多	〃	1/2	重焼Ⅱa類
61	〃	〃	□15.0, 高3.75 つまみ径2.4,つまみ高1.0	普通	〃	1/5	〃
62	〃	S-1c	□14.5, 高3.5 つまみ径2.2,つまみ高0.9	良	〃	1/3	〃

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
63	坏B蓋大	R-2b,S-1c	□14.8, 高3.2 つまみ径2.1,つまみ高0.9	普通	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa類
64	〃	Q-1d	□14.1, 高4.1 つまみ径2.2,つまみ高1.05	〃	暗灰焼堅緻	1/6	〃
65	〃	R-2b	□15.0, 高3.4 つまみ径2.1,つまみ高0.9	〃	〃	1/4	〃
66	〃	S-1c	□15.1, 高3.0 つまみ径2.4,つまみ高1.1	〃	灰色焼堅緻	2/3	〃
67	〃	R-2b	□15.2, 高3.2 つまみ径2.2,つまみ高1.0	〃	暗灰色堅緻	1/5	〃
68	〃	Q-2a R-2a・b	□16.1, 高3.5 つまみ径2.18,つまみ高1.1	〃	青灰焼良好	3/4	〃
69	〃	S-1d,T-1	□15.6, 高2.7 つまみ径2.0,つまみ高1.15	〃	暗灰焼堅緻	1/2	〃
70	〃	S-1c・d S-2a	□15.0, 高2.25 つまみ径1.62,つまみ高0.9	良	〃	完形	重焼Ⅱb類
71	〃	S-1c・d,S-1d	□14.6	普通	青灰白焼良好	2/3	重焼Ⅱa類
72	〃	Q-2a	□15.0, 高3.4 つまみ径2.0,つまみ高1.05	〃	青灰焼良好	2/3	重焼Ⅱb類
73	坏B蓋中大	R-2b	□15.0, 高3.7 つまみ径2.0,つまみ高1.05	〃	灰白焼堅緻	1/7	重焼Ⅰ類
74	坏B蓋大	Q-2a	□15.3, 高2.9 つまみ径1.8,つまみ高0.9	〃	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa類
75	〃	Q-2a・b S-1c	□15.4, 高3.5 つまみ径2.1,つまみ高1.0	〃	青灰白焼良好	2/3	〃
76	〃	Q-2b	□14.9, 高3.4 つまみ径1.7,つまみ高0.7	砂多	灰色焼堅緻	1/3	〃
77	〃	S-2	□16.2, 高2.6 つまみ径2.05,つまみ高0.65	普通	青灰色焼良好	5/6	〃
78	〃	R-1d	□14.7, 高2.5	良	白焼堅緻	1/5	重焼Ⅲ類
79	〃	S-1d	□15.4, 高2.1	砂多	青灰白焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類 ヘラ記号「×」
80	〃	Q-2b	□15.6, 高1.6	普通	青灰白焼良好	1/3	重焼Ⅲ類
81	〃	R-2a	□15.2, 高1.6	砂多	暗青灰焼堅緻	1/2	〃
82	〃	Q-2b	□15.2, 高1.6	普通	青灰焼良好	1/2	〃
83	〃	〃	□15.1, 高2.2	砂多	青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅱb類？
84	坏蓋B中小	Q-1d	□13.0, 高2.9 つまみ径2.6,つまみ高1.12	〃	青灰白焼堅緻	5/6	重焼Ⅱa類
85	〃	R-1d	□14.3, 高3.0 つまみ径2.8,つまみ高1.15	〃	青灰白焼良	1/3	
86	〃	R-2a・b R-1d	□13.5, 高3.3 つまみ径2.2,つまみ高1.3	良	青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
87	〃	R-2b	□13.1, 高3.4 つまみ径1.05,つまみ高1.4	〃	白焼堅緻	1/4	〃
88	〃	Q-1d	□12.8, 高3.3 つまみ径2.4,つまみ高1.1	〃	〃	1/3	重焼Ⅱa類
89	〃	R-2a	□12.1, 高3.5 つまみ径2.2,つまみ高1.4	〃	〃	1/6	〃
90	〃	R-2b	□13.5	〃	〃	1/5	〃
91	〃	〃	□13.2, 高3.9 つまみ径2.4つまみ高1.25	砂多	灰色焼堅緻	1/3	〃
92	〃	S-1c	□14.0, 高3.5 つまみ径2.4,つまみ高1.1	普通	白焼堅緻	完形	天布目痕 重焼Ⅱa類
93	〃	Q-1d	□12.4	〃	〃	1/3	ヘラ記号「×」
94	〃	Q-2d	□13.5	良	〃	1/5	重焼Ⅱa類
95	〃	R-1d	□11.5, 高3.1 つまみ径2.6,つまみ高1.0	〃	〃	完形	〃
96	〃	T-1	□12.8, 高3.6 つまみ径2.6,つまみ高1.45	普通	青灰焼堅緻	3/4	
97	坏B蓋中小	S-1d	□13.2,高3.8 つまみ径2.3,つまみ高1.5	普通	青灰焼堅緻	5/6	重焼Ⅱa類
98	坏B蓋中	Q-1d	□14.3,高2.15 つまみ径2.2,つまみ高1.1	〃	灰白焼堅緻	1/7	〃
99	〃	Q-2b Q-1d	□15.4,高2.05 つまみ径2.3,つまみ高1.25	良	白焼堅緻	1/3	重焼Ⅱb類
100	坏B蓋中小	R-2b	□11.6,高2.2 つまみ径2.7,つまみ高1.0	〃	灰色焼堅緻	1/5	重焼Ⅱa類
101	〃	Q-1	□11.3,高2.0 つまみ径1.7,つまみ高0.8	普通	〃	2/3	〃
102	〃	S-2	□12.6,高3.6 つまみ径2.0,つまみ高1.08	〃	青灰焼堅緻	1/4	〃
103	〃	〃	□12.1,高2.6 つまみ径2.4,つまみ高1.0	〃	暗灰焼堅緻	完形	〃
104	〃	R-2b	□11.8,高2.4 つまみ径2.5,つまみ高1.1	〃	〃	〃	〃
105	〃	〃	□12.2,高1.8 つまみ径1.6,つまみ高0.8	砂多	灰色焼堅緻	2/3	
106	〃	S-1d	□11.4,高2.35 つまみ径1.7,つまみ高1.15	普通	青灰白焼良好	3/5	重焼Ⅱa類
107	〃	S-2a	□10.9,高2.7 つまみ径1.6,つまみ高0.7	〃	灰色焼堅緻	1/4	〃
108	〃	R-2b	□11.6	〃	青灰白焼良好	1/3	〃
109	〃	R-1b,S-1c	□12.3, 高2.1	〃	淡灰褐焼良	3/4	
110	〃	S-2	□11.2, 高1.6	〃	〃	1/3	重焼Ⅲ類
111	〃	R-2c	□11.9, 高1.6	砂多	灰白焼良	1/6	〃
112	〃	Q-2d	□12.5, 高1.8	普通	青灰白焼堅緻	4/5	〃
113	〃	S-2	□10.9, 高1.9	〃	暗灰焼堅緻	1/3	〃
114	〃	S-1d	□12.1, 高1.7	〃	〃	1/2	重焼Ⅱa類
115	〃	T-1	□12.5, 高1.4	砂多	灰色焼堅緻	2/5	
116	坏B蓋小	R-1c	□10.6, 高3.55 つまみ径2.4,つまみ高1.07	普通	白焼堅緻	1/2	重焼Ⅱa類
117	〃	R-2a	□11.4, 高3.45 つまみ径2.4,つまみ高1.4	良	〃	4/5	〃
118	〃	R-1c	□11.8, 高3.5 つまみ径2.2,つまみ高1.2	普通	灰白焼堅緻	1/5	重焼Ⅱa類 ヘラ記号「Ⅰ」
119	〃	〃	□11.1, 高3.1 つまみ径2.2,つまみ高2.35	良	青灰白焼良好	2/3	〃
120	〃	S-1c	□11.5, 高2.7 つまみ径2.2,つまみ高1.1	砂多	灰色焼堅緻	7/8	重焼Ⅱa類
121	〃	R-1d,S-1d	□11.5, 高3.05 つまみ径1.95,つまみ高1.0	良	灰白焼堅緻	7/8	〃
122	〃	R-1d	□11.8, 高2.9 つまみ径1.8,つまみ高1.05	〃	〃	4/5	重焼Ⅱa類 ヘラ記号「×」
123	〃	R-2d	□10.0, 高1.25 つまみ径2.4,つまみ高0.5	普通	生焼	1/3	
124	坏B身特大	S-1c,S-2	□19.1, 高8.5 台11.6, 台高0.7	良	白焼堅緻	3/5	底爪痕a, 体部沈線
125	〃	R-1d	□17.7	〃	〃	1/8	
126	〃	S-1c,S-2	□18.2, 高8.8 台11.2, 台高0.8	〃	〃	3/5	底爪痕a
127	坏B身大	前庭部	□15.6, 高7.0 台10.2, 台高0.6	普通	暗灰焼堅緻	1/3	〃
128	〃	R-2b	□16.0, 高7.1 台10.5, 台高0.65	〃	青灰色良好	2/3	〃
129	〃	O-2a・b	□15.8, 高7.22 台10.3, 台高0.8	〃	暗灰褐色焼良好	2/5	
130	〃	R-1c	□14.8, 高6.6 台9.0, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	3/4	底爪痕a

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
131	坏B身大	S	口15.0, 高6.9 台13.0, 台高0.6	普通	青灰焼堅緻	1/12	
132	〃	S-1d	口15.6, 高6.6 台10.5, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/5	底爪痕a
133	〃	S-1c	口14.9, 高7.52 台9.0, 台高0.55	〃	暗青灰焼堅緻	2/5	
134	〃	R-1c,S-2	口15.5, 高6.45 台10.25, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	略完	
135	〃	R-1c,S-1c	口15.2, 高6.75 台9.3, 台高0.5	良	白焼堅緻	1/2	
136	〃	S-2	口14.9, 高5.7 台9.2, 台高0.4	〃	〃	3/5	底爪痕c
137	〃	S-1c・d S-2	口14.5, 高6.35 台9.2, 台高0.5	〃	〃	4/5	〃
138	〃	S-2,R-2b	口16.0, 高6.85 台8.5, 台高0.5	〃	〃	2/3	
139	〃	R-1c・d R-2a	口15.2, 高6.2 台9.1, 台高0.4	普通	灰白焼堅緻	5/6	
140	〃	S-2	口15.0, 高6.0 台8.4, 台高0.5	良	白焼堅緻	3/4	
141	〃	R-1c	口13.7, 高6.2 台8.8, 台高0.4	〃	〃	3/4	
142	〃	S-1c	口15.8, 高6.7 台8.2, 台高0.7	〃	〃	1/3	
143	〃	〃	口15.8, 高6.7 台9.2, 台高0.45	普通	灰色焼堅緻	2/3	底爪痕c
144	〃	R-2a,R-1c	口14.9, 高6.0 台9.4, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	2/5	
145	〃	S-1c	口15.1, 高5.7 台9.0, 台高0.38	〃	灰色焼堅緻	2/3	底爪痕c
146	〃	R-1d	口14.9, 高6.2 台9.4, 台高0.4	〃	〃	1/3	
147	〃	R-1c	口14.7, 高6.55 台9.3, 台高0.6	〃	〃	1/2	底爪痕c
148	〃	Q-2b	口15.2, 高5.1 台8.6, 台高0.5	〃	〃	3/4	〃
149	〃	S-1c	口14.4, 高5.4 台8.8, 台高0.6	〃	〃	2/3	〃
150	〃	S-2	口15.2, 高6.1 台8.75, 台高0.5	〃	〃	2/3	〃
151	坏B身中大	S-1d	口14.7, 高5.9 台8.8, 台高0.5	〃	〃	1/3	
152	坏B身大	S-2	口14.7, 高6.0 台8.6, 台高0.6	〃	〃	3/5	
153	〃	S-1c R-2b・1d	口14.8, 高5.5 台9.0, 台高0.5	〃	暗灰色焼堅緻	3/4	底爪痕a
154	〃	S-1c	口13.7, 高5.4 台8.2, 台高0.4	砂多	灰色焼堅緻	1/2	
155	〃	Q-1d,R-1c	口14.4, 高5.7 台9.3, 台高0.4	良	青灰焼堅緻	1/2	
156	〃	R-1c	口15.0, 高5.4 台8.5, 台高0.4	〃	〃	2/3	
157	〃	〃	口15.8, 高5.4 台9.0, 台高0.3	〃	〃	2/3	
158	〃	S-1d	口13.9, 高5.4 台8.0, 台高0.3	〃	〃	2/3	底爪痕c
159	坏B身中小	〃	口13.3, 高6.0 台8.2, 台高0.6	普通	〃	1/3	
160	坏B身大	T-1	口13.8, 高5.6 台8.2, 台高0.5	〃	暗青灰焼堅緻	1/4	
161	〃	S-2	口14.9, 高5.8 台7.8, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/3	
162	坏B身	Q-1d	口14.4, 高5.75 台8.4, 台高0.5	普通	灰色焼堅緻	2/5	
163	〃	R-2a	口14.0, 高6.0 台8.0, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/5	
164	〃	S-1c	口14.4, 高6.0 台8.0, 台高0.7	〃	暗灰焼堅緻	2/3	
165	〃	Q-2b・d	口14.8, 高6.2 台8.4, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	3/5	
166	〃	S-1d	口14.5, 高5.9 台8.2, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	1/2	底爪痕a
167	〃	S-1c,R-2b	口14.1, 高5.3 台8.2, 台高0.4	良	暗灰焼堅緻	2/3	〃
168	〃	S-1c	口14.6, 高5.4 台8.1, 台高0.4	普通	灰色焼堅緻	1/5	
169	〃	S-2a,S-1c	口14.3, 高5.5 台8.4, 台高0.4	〃	暗灰白焼良	2/5	
170	〃	S-2a,S-1d	口14.0, 高5.65 台7.4, 台高0.5	〃	青灰白焼良	3/5	
171	〃	Q-1,Q-2a	口14.5, 高6.1 台7.8, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	1/2	底爪痕a
172	〃	Q-2a	口14.6, 高5.7 台7.6, 台高0.4	〃	〃	3/5	〃
173	〃	Q-1,Q-2a	口14.6, 高5.6 台7.2, 台高0.4	〃	〃	1/2	
174	〃	S-1d	口14.2, 高5.6 台8.1, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	〃	底爪痕b
175	〃	Q-2a	口14.5, 高5.85 台7.5, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	3/5	
176	〃	Q-1 Q-2a・b	口14.5, 高5.85 台7.3, 台高0.4	〃	灰色焼堅緻	〃	
177	〃	R-1c,R-2a	口14.8, 高5.7 台7.8, 台高0.5	〃	青灰白焼良好	1/3	
178	〃	S-1c	口14.8, 高5.6 台7.4, 台高0.5	〃	〃	7/8	
179	〃	S-2	口14.8, 高6.45 台7.8, 台高0.5	〃	暗灰焼堅緻	2/3	底爪痕b
180	〃	R-1d	口14.4, 高6.4 台7.75, 台高0.5	良	淡灰色焼良	5/6	
181	〃	前庭部	口14.0, 高6.0 台7.9, 台高0.4	普通	淡灰焼良好	2/3	ヘラ記号「I」
182	〃	Q-2a,R-2c	口15.0, 高6.6 台8.5, 台高0.2	〃	灰色焼堅緻	1/4	底爪痕a
183	〃	R-1c	口14.8, 高6.0 台9.0, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/2	
184	〃	T-1	口13.8, 高6.0 台8.0, 台高0.7	〃	灰白焼半生	3/5	
185	〃	S-1d	口14.5, 高6.5 台7.8, 台高0.6	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	底爪痕a
186	〃	Q-2b・d	口13.3, 高6.5 台7.4, 台高0.6	〃	青灰白焼堅緻	〃	底爪痕b ヘラ記号「×」
187	〃	Q-2c	口13.4, 高6.1 台7.0, 台高0.65	〃	青灰焼堅緻	〃	
188	〃	S-1d	口12.8, 高6.2 台7.7, 台高0.8	砂多	灰色焼堅緻	3/5	
189	〃	〃	口13.9, 高7.0 台7.5, 台高0.5	良	暗灰焼堅緻	1/4	
190	〃	〃	口14.0, 高6.7 台7.7, 台高0.5	〃	〃	3/4	底爪痕b
191	〃	S-1c,S-1d	口13.0, 高6.3 台7.6, 台高0.4	〃	〃	1/3	〃
192	坏B身小	R-2b	口11.8, 高5.0 台7.6, 台高0.4	普通	青灰白焼良	〃	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
193	坏B身小	Q-2a	口112., 高4.3 台7.8, 台高0.5	良	白焼堅緻	2/3	
194	〃	R-2b	口12.4, 高4.2 台7.2, 台高0.5	〃	〃	〃	底爪痕b
195	〃	S-1c	口11.8, 高4.8 台6.3, 台高0.6	〃	〃	〃	
196	〃	〃	口12.8, 高4.1 台7.7, 台高0.3	〃	灰色焼堅緻	1/3	
197	〃	R-2a	口10.4, 高4.3 台7.4, 台高0.55	〃	灰白色焼堅緻	2/3	底爪痕a
198	〃	S-1c・d	口10.5, 高4.3 台6.8, 台高0.5	〃	白焼堅緻	2/5	
199	〃	S-1c	口10.0, 高4.3 台7.8, 台高0.5	〃	灰白焼堅緻	〃	底爪痕a
200	〃	〃	口10.6, 高4.25 台7.1, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/3	
201	〃	S-2	口11.4, 高4.1 台7.6, 台高0.5	普通	〃	略完	
202	〃	R-1c	口13.3, 高5.0 台8.6, 台高0.4	〃	〃	3/5	
203	〃	〃	口11.7, 高3.8 台7.8, 台高0.5	〃	〃	1/3	
204	坏B身特小	S-1c,R-1c	口9.5, 高3.95 台5.6, 台高0.4	〃	〃	2/3	
205	〃	R-2a	口9.3, 高3.85 台5.7, 台高0.2	良	白焼堅緻	1/3	
206	坏E身	R-2b,R-1d S-2	口12.8, 高4.0	普通	〃	4/5	外面口～底厚釉付着
207	〃	S-1c	口12.4, 高4.4	〃	〃	3/5	〃
208	〃	R-1d,R-2b S-1c	口12.4, 高3.9	良	灰白焼堅緻	2/3	〃
209	〃	R-2a	口12.7, 高3.85	普通	〃	1/3	
210	〃	R-1c・d R-2a・d	口12.7, 高4.1	〃	灰色焼堅緻	7/8	
211	〃	R-1d,R-2b S-1c,S-2	口13.2, 高3.7	〃	〃	1/3	外面口～底厚釉付着
212	〃	S-2	口12.0, 高3.65	〃	〃	1/4	〃
213	〃	T-1	口11.8, 高3.6	〃	青灰焼堅緻	1/5	
214	〃	K-4c	口11.2, 高3.45	砂多	灰白焼半生	〃	
215	坏A	R-2d	口11.9, 高3.9	良	灰白焼生	1/4	
216	〃	R-2b	口12.0, 高3.35	〃	青灰白焼良	2/3	ヘラ記号「I」
217	〃	S-1c,R-2b	口12.0, 高3.05	〃	〃	〃	〃
218	〃	S-1c	口11.4, 高3.2	〃	青灰白焼良好	1/4	
219	〃	R-1c,R-2a	口12.0, 高3.15	普通	暗灰焼堅緻	1/3	
220	〃	R-1c	口11.4, 高3.3	〃	青灰白焼良好	1/3	ヘラ記号「I」
221	〃	S-1c	口12.2, 高3.2	〃	白焼堅緻	4/5	〃
222	〃	Q-2b・d	口11.8, 高3.55	〃	灰白焼良	1/3	
223	〃	R-1c	口11.7, 高3.25	〃	青灰焼堅緻	2/3	
224	〃	R-1c・d,R-1c	口11.7, 高3.8	〃	暗青灰焼堅緻	1/2	
225	〃	R-2b	口11.4, 高3.35	良	青灰焼堅緻	1/5	
226	〃	R-2c	口11.4, 高3.3	〃	白焼堅緻	2/3	
227	〃	R-2b,S-1c	口11.4, 高3.2	普通	灰色焼堅緻	1/3	
228	〃	R-2a	口12.3, 高3.65	良	白焼堅緻	4/5	
229	〃	R-1c	口12.6, 高3.6	〃	青灰焼良好	1/3	ヘラ記号「I」
230	〃	〃	口12.2, 高3.7	普通	青灰焼堅緻	1/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
231	坏A	S-1d	口12.4, 高3.3	普通	青灰焼堅緻	1/3	
232	〃	R-1c	口11.4, 高3.1	〃	〃	1/4	
233	〃	S-1d	口12.0, 高3.1	〃	〃	3/5	ヘラ記号「I」
234	〃	Q-2b	口11.6, 高2.55	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
235	〃	S-1c	口11.4, 高2.8	〃	〃	〃	
236	〃	S-2	口12.6, 高2.5	〃	青灰焼堅緻	3/5	
237	〃	R-2b・d	口12.0, 高2.3	〃	暗青灰焼堅緻	4/5	
238	〃	Q-1	口12.8, 高2.8	〃	〃	2/3	
239	〃	R-2b	口12.6, 高2.7	〃	〃	〃	
240	〃	R-2b・d	口11.7, 高3.0	〃	青灰焼堅緻	1/3	
241	〃	S-1c	口12.2, 高2.8	〃	〃	1/2	
242	〃	R-1c	口11.2, 高2.65	〃	〃	1/3	
243	〃	R-1d	口11.0, 高2.6	〃	青灰白焼良	2/3	ヘラ記号「I」
244	〃	Q-2b・d	口11.0, 高2.7	〃	青灰焼堅緻	1/3	
245	〃	Q-1d	口10.8, 高2.75	良	青灰焼良	〃	
246	〃	R-2b	口13.4, 高3.5	砂多	暗青灰焼堅緻	4/5	
247	〃	R-2a,R-1c	口12.6, 高3.05	普通	灰白焼半生	5/6	
248	〃	R-2b	口12.4, 高3.3	良	青灰焼堅緻	4/5	
249	〃	R-2a	口12.6, 高3.25	普通	青灰焼良好	1/2	
250	〃	S-1c	口12.2, 高3.3	〃	〃	5/6	
251	〃	R-1c	口12.7, 高3.3	良	灰白焼良	4/5	
252	〃	〃	口12.8, 高3.5	〃	〃	完形	
253	〃	R-2a	口13.3, 高3.4	〃	〃	3/5	
254	〃	S-1c	口12.6, 高3.1	普通	灰色焼堅緻	2/3	
255	〃	R-2a	口12.6, 高3.2	良	灰褐焼良	3/4	
256	〃	S-1d	口12.8, 高3.3	〃	灰色焼堅緻	1/3	
257	〃	R-1c	口12.8, 高3.15	普通	灰白焼良	2/3	
258	〃	R-2a,R-1c	口12.8, 高3.1	〃	灰白焼生	〃	
259	〃	〃	口12.7, 高3.45	〃	〃	〃	
260	〃	R-2a	口12.6, 高3.3	〃	〃	完形	
261	〃	〃	口12.5, 高3.55	〃	〃	略完	
262	〃	〃	口12.8, 高3.1	〃	青灰焼堅緻	1/4	
263	〃	〃	口12.1, 高3.8	良	青灰白焼良好	〃	ヘラ記号「I」
264	〃	S-1c	口13.0, 高2.9	普通	青灰焼堅緻	3/4	
265	〃	R-2a	口12.8, 高2.8	〃	〃	4/5	
266	〃	Q-2b	口13.4, 高3.1	〃	灰褐焼良	完形	
267	〃	R-2c	口13.4, 高2.95	〃	灰色焼良	1/3	
268	〃	S-1d	口13.7, 高2.95	〃	灰白焼生	3/5	
269	〃	R-1c	口13.0, 高2.9	良	青灰焼堅緻	2/3	
270	〃	S-1c	口12.4, 高2.7	普通	〃	〃	
271	〃	S-1d	口12.6, 高2.8	〃	灰色焼堅緻	3/5	ヘラ記号「×」
272	〃	S-1c	口12.2, 高2.8	〃	灰白焼堅緻	5/6	
273	〃	T-1	口13.0, 高3.0	〃	淡灰褐焼半生	1/2	
274	〃	S-1d	口12.8, 高2.75	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
275	〃	R-2b	口12.5, 高2.85	〃	淡灰焼良	3/5	
276	〃	Q-2d	口12.2, 高2.85	〃	淡灰焼半生	〃	
277	〃	Q-2b	口12.8, 高3.15	〃	灰色焼堅緻	略完	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
278	坏 A	R-2b	□12.3, 高2.75	良	暗灰焼堅緻	2/3	
279	〃	Q-2b	□12.3, 高2.8	普通	青灰焼堅緻	〃	
280	〃	S-1d	□12.6, 高2.8	〃	〃	〃	
281	〃	S-1c	□12.0, 高2.8	〃	灰色焼良	4/5	
282	〃	S-1d	□12.6, 高2.8	〃	淡灰焼良好	2/3	
283	〃	R-2b	□13.0, 高2.4	〃	灰白焼良好	3/4	
284	〃	〃	□12.5, 高2.5	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
285	〃	R-2a	□12.0, 高2.6	〃	灰白焼生	4/5	
286	〃	S-1d	□12.2, 高2.4	良	暗灰焼良好	1/3	
287	〃	〃	□12.0, 高2.4	普通	灰白焼良	完形	
288	〃	R-2b	□12.6, 高2.5	〃	〃	2/3	
289	〃	S-1d	□11.7, 高2.8	〃	青灰白焼良好	3/5	ヘラ記号「Ⅱ」
290	〃	〃	□12.4, 高2.7	〃	青灰白焼良	1/3	
291	〃	S-1c	□11.8, 高2.65	砂多	青灰焼堅緻	3/5	
292	〃	R-2a	□12.1, 高2.2	普通	暗青灰焼堅緻	1/2	
293	〃	R-2b	□12.0, 高2.5	〃	灰白焼良	1/6	
294	〃	R-2a·d	□12.6, 高2.35	〃	青灰焼良好	1/3	
295	〃	R-2b	□12.2, 高2.4	〃	灰色焼良好	1/3	
296	〃	S-1c	□12.2, 高3.0	〃	青灰焼堅緻	4/5	
297	〃	Q-2a	□12.0, 高2.5	〃	灰白焼良	3/4	
298	〃	R-2b	□12.1, 高2.5	〃	〃	1/3	
299	〃	Q-2b	□12.8, 高3.9	〃	灰白焼半生	4/5	ヘラ記号「Ⅰ」
300	〃	R-1c,R-2a 前庭部	□13.0, 高3.7	良	青灰焼良好	7/8	
301	〃	R-2a	□12.7, 高3.5	普通	灰白焼生	5/6	301～304重焼
302	〃	〃	□12.8, 高3.8	〃	〃	3/4	〃
303	〃	〃	□12.4, 高3.4	〃	〃	2/3	〃
304	〃	〃	□12.4, 高3.6	〃	灰白焼半生	完形	〃
305	〃	〃	□12.3, 高3.05	〃	灰白焼生	略完	305～311重焼
306	〃	R-2a·b	□12.8, 高3.6	〃	灰白焼半生	2/3	〃
307	〃	R-2a	□12.6, 高3.4	〃	灰白焼良	5/6	〃
308	〃	〃	□13.1, 高3.2	〃	〃	4/5	〃
309	〃	〃	□12.6, 高3.75	〃	青灰白焼良	略完	〃
310	〃	R-1c	□12.1, 高2.9	〃	灰白焼良	完形	〃
311	〃	R-2a	□12.0, 高2.9	〃	青灰白焼良	3/4	〃
312	〃	R-1c	□12.2, 高3.15	〃	青灰白焼良好	5/6	
313	〃	S-2	□12.4, 高3.3	〃	青灰焼堅緻	4/5	
314	〃	Q-2a	□12.2, 高3.2	砂多	〃	〃	
315	〃	Q-2b	□12.7, 高3.0	普通	青灰焼良好	〃	
316	〃	S-1c	□12.2, 高3.1	〃	〃	5/6	
317	〃	前庭部	□12.6, 高3.3	良	青灰焼堅緻	3/5	
318	〃	S-2	□11.9, 高2.85	普通	灰白焼良好	2/3	
319	〃	R-2a	□12.0, 高2.7	〃	青灰白焼堅緻	〃	ヘラ記号「Ⅰ」
320	〃	Q-2b	□12.4, 高2.9	〃	〃	〃	
321	〃	S-1c	□12.8, 高3.25	〃	青灰焼堅緻	完形	
322	〃	S-1d	□12.6, 高3.1	〃	〃	略完	
323	〃	S-2b	□13.2, 高3.05	良	灰白焼堅緻	3/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
324	坏 A	S-2	□13.5, 高3.1	砂多	淡灰焼良	3/4	
325	〃	Q-2a	□12.8, 高3.0	〃	青灰白焼堅緻	2/3	
326	〃	S-1d	□12.6, 高3.2	〃	灰白焼良	3/5	
327	〃	Q-2a	□12.9, 高2.9	〃	青灰白焼堅緻	7/8	
328	〃	S-1d	□12.8, 高3.1	普通	青灰白焼良好	1/4	
329	〃	R-2b	□13.2, 高2.7	〃	淡灰焼良	4/5	
330	〃	〃	□12.6, 高2.75	〃	灰白焼良	2/3	
331	〃	〃	□12.5, 高2.7	〃	淡灰焼良好	4/5	
332	〃	S-2	□12.3, 高2.4	〃	灰白焼良	1/2	
333	〃	S-2a	□13.2, 高2.4	〃	淡灰焼良好	2/3	
334	〃	Q-2a	□12.4, 高2.8	〃	青灰白焼良	1/3	
335	〃	S-2a	□13.0, 高3.0	〃	灰白焼良	2/3	
336	〃	Q-2d	□11.8, 高2.35	〃	灰色焼良好	1/3	ヘラ記号「Ⅰ」
337	小型坏	〃	□9.6, 高3.65	良	灰色焼堅緻	1/8	
338	〃	R-2b	□9.8, 高3.05	〃	白焼堅緻	1/3	
339	〃	S-1d	□9.0, 高2.65	砂多	青灰焼良好	〃	
340	特殊無台坏	S-1c	□14.4, 高4.5	良	灰色焼堅緻	1/4	体部に4条沈線
341	盤 A	〃	□16.5, 高3.0	〃	青灰焼堅緻	1/6	
342	〃	〃	□16.3, 高2.7	〃	青灰白焼良好	1/2	
343	〃	〃	□16.7, 高2.4	〃	〃	1/3	
344	〃	S-1d	□16.9, 高2.5	〃	青灰焼堅緻	4/5	
345	〃	S-2	□17.2, 高2.6	普通	灰白焼生	1/4	
346	〃	S-1d	□17.0, 高2.4	〃	青灰焼良好	1/3	
347	〃	R-1d	□16.6, 高2.9	〃	青灰白焼良好	1/5	ヘラ記号「Ⅰ」
348	〃	〃	□16.8, 高2.4	良	〃	1/4	
349	〃	S-1d	□17.4, 高2.6	普通	〃	〃	
350	〃	前庭部	□17.0, 高2.6	〃	灰白焼生	1/2	
351	〃	S-1c	□16.0, 高2.5	良	灰白焼堅緻	〃	
352	〃	S-2	□16.2, 高2.65	普通	灰色焼堅緻	1/4	
353	〃	R-1d	□16.8, 高2.4	〃	青灰白焼堅緻	1/2	
354	〃	S1c·d	□16.4, 高2.2	〃	青灰白焼良好	〃	
355	〃	R-1d	□17.2, 高1.9	〃	〃	1/3	
356	〃	R-1c	□16.8, 高2.05	〃	青灰焼堅緻	〃	
357	〃	S-1c	□15.4, 高2.45	〃	青灰白焼良	〃	
358	〃	Q-2b	□16.5, 高2.0	砂多	白焼堅緻	〃	
359	〃	S-1d	□15.8, 高1.85	普通	青灰焼堅緻	1/5	
360	〃	R-1c	□17.4, 高2.6	〃	灰白焼生	1/4	
361	〃	S-2	□16.5, 高2.7	〃	灰白焼半生	1/6	
362	〃	S-1c·d	□16.3, 高2.2	〃	青灰白焼良	1/4	
363	〃	R-1d	□16.8, 高2.2	砂多	青灰焼堅緻	〃	
364	〃	R-1c	□17.4, 高2.2	普通	〃	〃	
365	〃	R-1d	□16.7, 高2.75	〃	〃	1/3	
366	〃	R-2a	□16.0, 高2.6	〃	〃	1/2	ヘラ記号「Ⅰ」?
367	〃	R-2b	□16.7, 高2.7	〃	青灰白焼良好	1/4	
368	〃	前庭部	□15.0, 高2.6	〃	〃	1/2	ヘラ記号「Ⅰ」
369	〃	R-1c	□15.9, 高2.6	〃	灰色焼堅緻	2/3	
370	〃	S-1c	□16.0, 高2.5	〃	灰白焼堅緻	2/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
371	盤 A	R-1c	□17.7, 高2.9	普通	暗青灰堅緻	1/5	
372	〃	R-1d	□16.6, 高2.45	〃	灰色焼堅緻	1/2	
373	〃	Q-1d	□16.4, 高2.5	〃	青灰白焼良好	1/3	
374	〃	R-1c	□16.4, 高2.85	〃	淡灰焼良	1/4	
375	〃	S-1c	□15.8, 高2.5	〃	灰色焼堅緻	3/4	
376	〃	R-1d	□17.0, 高2.5	〃	青灰焼堅緻	1/2	ヘラ記号「I」
377	〃	R-2a	□16.3, 高3.1	〃	灰白焼生	6/7	
378	〃	R-1c	□16.8, 高2.6	〃	灰白焼良	1/3	
379	〃	前庭部	□16.8, 高2.8	〃	灰白焼生	〃	
380	〃	〃	□16.3, 高2.7	〃	〃	1/5	
381	〃	R-1c	□16.8, 高2.7	〃	〃	1/4	
382	〃	前庭部	□15.8, 高2.65	〃	〃	1/3	
383	〃	R-1d	□17.0, 高2.5	良	青灰焼堅緻	2/3	ヘラ記号「I」
384	〃	R-1c	□15.7, 高1.9	〃	青灰焼良好	1/4	〃
385	〃	R-1d	□15.2, 高2.8	普通	青灰白焼良	1/3	
386	〃	〃	□17.1, 高2.8	〃	〃	2/3	
387	〃	Q-2c	□16.8, 高2.55	〃	淡灰焼良好	4/5	
388	〃	R-1d	□16.8, 高2.65	〃	青灰白焼良	1/3	
389	〃	S-1d,T-1	□16.8, 高2.65	〃	淡灰焼良好	2/3	
390	〃	S-1c	□15.8, 高3.1	〃	暗灰焼堅緻	〃	
391	〃	R-1c	□16.4, 高2.75	〃	灰白焼生	3/4	
392	〃	S-1c	□15.9, 高2.4	〃	灰色焼堅緻	4/5	
393	〃	R-1d	□17.5, 高2.45	〃	淡灰焼良	1/5	
394	〃	R-2a	□16.4, 高2.6	〃	青灰白焼良好	1/3	
395	〃	R-1c	□15.2, 高2.95	砂多	灰色焼堅緻	4/5	
396	〃	R-2b	□20.5, 高2.48	良	白焼堅緻	1/3	
397	〃	R-1c	□16.8, 高2.6	〃	青灰白焼良好	6/7	
398	〃	〃	□17.3, 高2.3	〃	青灰白焼堅緻	3/5	
399	〃	S-1c	□16.4, 高2.15	〃	青灰白焼良好	1/3	
400	〃	S-1d	□15.3, 高2.8	普通	白焼堅緻	1/2	
401	〃	〃	□15.8, 高2.3	良	〃	1/3	
402	〃	S-1c	□15.0, 高2.3	普通	(青)灰焼堅緻	6/7	
403	〃	S-2	□15.6, 高2.6	良	白焼堅緻	2/3	
404	〃	S-1c,S-2	□14.9, 高2.4	普通	青灰白焼良好	完形	
405	〃	R-2b	□15.6, 高2.3	〃	白焼堅緻	1/4	
406	〃	S-1c	□15.9, 高2.8	〃	暗灰焼堅緻	完形	407·412·413と重焼
407	〃	〃	□16.2, 高2.9	〃	〃	4/5	406·412·413と重焼
408	〃	S-1c·d	□15.8, 高2.75	〃	淡灰焼良	1/2	
409	〃	R-1d	□15.6, 高2.65	〃	灰色焼堅緻	1/3	
410	〃	S-1c	□16.0/□15.9/□16.0	〃	暗灰焼堅緻	略完	4枚溶着
411	〃	〃	□15.4, 高2.35	〃	淡灰焼良好	1/3	
412	〃	〃	□15.5, 高2.5	〃	暗灰焼堅緻	略完	406·407·413と重焼
413	〃	〃	□16.2, 高2.6	〃	〃	完形	406·407·412と重焼
414	〃	〃	□15.8, 高2.6	〃	灰色焼堅緻	6/7	
415	〃	〃	□16.2, 高2.7	〃	青灰白焼良好	1/3	
416	〃	〃	□15.4, 高2.6	良	灰色焼堅緻	1/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
451	盤 A	R-1c	□15.2, 高2.25	普通	灰色焼堅緻	2/3	
452	〃	R-2b	□15.0, 高1.95	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	
453	〃	S-1c	□15.9, 高1.95	〃	白焼堅緻	1/4	
454	〃	R-1c	□15.5, 高2.3	良	〃	〃	
455	〃	R-2b	□15.3, 高2.1	砂多	灰色焼堅緻	2/5	
456	〃	R-1c	□15.8, 高2.3	普通	青灰焼堅緻	1/3	
457	〃	R-2a	□15.2, 高1.7	良	灰色焼堅緻	1/4	
458	〃	S-2	□16.2, 高2.2	普通	〃	1/2	
459	〃	R-2b	□15.6, 高2.2	〃	暗灰焼堅緻	〃	
460	〃	S-1c	□15.5, 高2.7	良	白焼堅緻	〃	
461	〃	前庭部	□15.4, 高2.4	普通	灰色焼堅緻	〃	
462	〃	S-1c	□15.8, 高2.75	〃	灰白焼堅緻	1/4	
463	〃	〃	□15.4, 高1.9	〃	灰色焼堅緻	2/3	
464	〃	S-1d	□14.8, 高2.35	砂多	〃	〃	ヘラ記号「×」
465	〃	〃	□14.8, 高2.2	普通	青灰焼堅緻	1/4	
466	〃	R-2a·c	□15.2, 高2.3	〃	灰褐色焼良	2/3	
467	〃	R-2a	□15.0, 高2.3	良	〃	4/5	
468	〃	〃	□16.0, 高2.3	普通	〃	1/4	
469	〃	T-1	□15.0, 高2.6	〃	〃	1/3	
470	〃	Q-2a	□15.8, 高2.2	良	白焼堅緻	略完	
471	〃	Q-2b	□15.8, 高2.0	〃	〃	2/3	
472	〃	R-1d	□15.4, 高2.0	〃	セピア焼堅緻	1/2	
473	〃	R-2b	□14.8, 高1.75	〃	〃	1/4	
474	〃	S-2	□15.0, 高2.1	普通	青灰焼堅緻	1/3	
475	〃	S-1c	□15.7, 高2.25	〃	〃	4/5	
476	〃	R-2d	□14.6, 高2.1	〃	青灰焼良好	2/3	
477	〃	R-2a	□15.0, 高2.2	〃	〃	〃	
478	〃	R-2b	□14.8, 高1.8	〃	青灰焼堅緻	1/2	ヘラ記号「I」
479	〃	S-1c·d	□14.7, 高2.1	〃	青灰白焼良好	2/3	
480	〃	S-1d	□15.0, 高1.85	〃	淡灰焼良好	1/4	
481	〃	S-1c	□15.5, 高1.95	〃	青灰白焼良好	2/3	
482	〃	R-2b	□14.3, 高2.35	〃	暗灰焼堅緻	5/6	ヘラ記号「I」
483	〃	S-2	□14.4, 高1.9	〃	〃	1/4	〃
484	〃	R-2b	□15.6, 高1.85	〃	灰色焼堅緻	1/3	
485	〃	〃	□14.4, 高1.85	〃	淡灰焼良	1/2	
486	〃	Q-2b,R-2a	□15.2, 高1.9	〃	青灰焼堅緻	1/2	
487	〃	R-1d R-2a·b	□15.2, 高1.7	〃	〃	3/4	
488	〃	S-1d	□14.8, 高1.6	〃	〃	1/2	
489	〃	R-2a·b	□14.1, 高1.8/□14.0, 高1.5	〃	暗灰焼堅緻	略完	2枚溶着 ヘラ記号「I」
490	〃	R-2b	□14.3, 高1.7/□14.8, 高2.2	〃	〃	1/3	2枚溶着 ヘラ記号「I」
491	〃	Q-2b	□14.2, 高1.55	〃	暗青灰焼堅緻	1/4	
492	〃	Q-2a	□14.2, 高1.5	〃	青灰焼堅緻	1/3	ヘラ記号「I」
493	〃	S-1c·d Q-2a·b	□13.9, 高1.7	〃	灰色焼堅緻	略完	
494	〃	Q-2b	□13.8, 高1.6	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
495	〃	〃	□13.9, 高1.4	〃	灰色焼堅緻	1/4	
496	〃	Q-2a	□14.2, 高1.6	〃	灰白焼堅緻	2/3	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
417	盤 A	S-1c	□15.0, 高2.7	良	灰白焼堅緻	1/2	
418	〃	S-2	□15.4, 高2.8	〃	灰色焼堅緻	1/4	
419	〃	S-1c	□15.7, 高2.6/□15.3/□15.3/□15.6/□15.7/□15.2	普通	〃	略完	7枚溶着
420	〃	〃	□15.5, 高2.6	〃	〃	7/8	
421	〃	〃	□15.4, 高2.5	〃	〃	2/3	2枚溶着
422	〃	R-1d	□15.3, 高2.75	良	白焼堅緻	〃	
423	〃	S-1c	□16.0, 高2.2	〃	青灰白焼堅緻	完形	
424	〃	S-1c,R-1d	□15.9, 高2.0	〃	白焼堅緻	5/6	
425	〃	前庭部	□15.9, 高1.85	〃	灰白焼堅緻	3/4	
426	〃	〃	□15.8, 高2.3/□15.5, 高2.2	普通	灰色焼堅緻	4/5	2枚溶着
427	〃	S-1c	□16.0, 高1.8/□16.0/□16.0	〃	〃	〃	3枚溶着
428	〃	R-1d	□15.2, 高2.0/□15.8/□15.7/□15.7	〃	〃	略完	4枚溶着
429	〃	S-1c	□15.4, 高2.2	良	白焼堅緻	2/3	ヘラ記号「I」
430	〃	R-2b	□16.2, 高2.0/□15.8/□16.0/□15.8/□15.7/□15.6/□15.8/□15.8/□15.8	普通	灰色焼堅緻	略完	9枚溶着
431	〃	R-1c	□15.4, 高1.9/□15.8/□15.4/□15.5/□15.4/□15.3/□15.3	〃	〃	〃	7枚溶着
432	〃	S-1c	□15.8, 高1.7/□15.7/□15.7/□15.4/□15.7/□15.7/□15.4/□15.2/□14.8/□14.8	〃	〃	〃	435と重焼 10枚溶着
433	〃	R-2b	□14.8, 高1.8/□14.9/□14.9/□15.0/□15.2/□15.5/□15.5/□15.6	〃	〃	〃	8枚溶着
434	〃	S-1c	□15.6, 高2.75	〃	灰白焼堅緻	2/3	
435	〃	R-1d	□15.2, 高2.0/□15.4/□15.6/□15.4/□15.0/□15.2	〃	灰色焼堅緻	略完	432と重焼 7枚溶着
436	〃	S-1c	□15.5, 高2.5	良	白焼堅緻	4/5	
437	〃	〃	□15.5, 高2.6	普通	〃	1/2	
438	〃	R-1c·d	□15.2, 高2.6	砂多	灰色焼堅緻	5/6	
439	〃	S-1c	□15.4, 高2.55	良	灰白焼堅緻	〃	
440	〃	R-2b	□15.6, 高2.75	普通	灰色焼堅緻	1/2	
441	〃	S-1c	□16.2, 高2.4	〃	青灰焼堅緻	1/4	
442	〃	Q-2b	□15.2, 高2.7	〃	灰色焼堅緻	5/6	
443	〃	Q-2d	□15.1, 高2.3	〃	灰白焼半生	2/3	
444	〃	S-1c	□15.5, 高2.8	〃	灰色焼堅緻	6/7	
445	〃	R-1d	□16.2, 高2.5	〃	青灰焼堅緻	1/4	
446	〃	R-2a	□15.4, 高2.4	良	灰白焼堅緻	3/4	ヘラ記号「I」
447	〃	R-1d	□15.9, 高2.85	普通	暗青灰焼堅緻	2/3	
448	〃	S-1c	□15.5, 高2.3	良	青灰焼堅緻	1/3	
449	〃	Q-2a	□15.0, 高2.0	普通	暗青灰色焼堅緻	5/6	
450	〃	S-1c	□15.6, 高2.01	〃	白焼堅緻	完形	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
497	盤 A	S-1c	□14.6, 高1.8	普通	暗灰焼堅緻	1/3	
498	〃	R-2b	□14.4, 高1.75	〃	〃	2/3	
499	〃	R-1c	□14.8, 高2.2	〃	青灰焼堅緻	1/3	
500	〃	S-1c,R-2b	□15.4, 高1.8	良	青灰白焼堅緻	1/2	
501	〃	R-2b,S-1d	□14.0, 高1.8	普通	暗灰焼堅緻	3/4	
502	〃	S-1c·d	□14.2, 高1.65	〃	青灰焼堅緻	1/2	
503	〃	S-1c	□14.1, 高1.75	〃	〃	〃	
504	〃	Q-2d	□13.8, 高1.95	〃	〃	1/3	
505	〃	R-2b	□14.1, 高1.7	〃	青灰白焼良好	1/4	
506	〃	S-1d,T-1	□14.8, 高1.75	〃	青灰焼堅緻	3/5	
507	〃	S-2a	□13.6, 高1.5	〃	灰色焼堅緻	1/3	
508	〃	R-2b	□14.6, 高1.9	〃	青灰焼堅緻	4/5	
509	〃	〃	□14.6, 高1.75	〃	青灰白焼良好	1/4	
510	〃	〃	□13.9, 高1.95	〃	青灰焼堅緻	1/3	
511	〃	Q-2b	□14.2, 高1.9	〃	灰白焼良	2/3	
512	〃	S-1d	□13.4, 高1.8	〃	青灰焼堅緻	1/4	
513	〃	〃	□15.0, 高1.85	〃	暗青灰焼堅緻	4/5	
514	〃	S-1c	□14.8, 高1.7	〃	〃	1/2	
515	〃	S-2a	□15.0, 高1.8	〃	暗灰焼堅緻	2/3	
516	〃	R-2b	□15.4, 高1.75	〃	〃	1/3	
517	〃	R-2a	□14.0, 高1.75	〃	〃	1/4	
518	〃	R-2b	□14.4, 高1.9	〃	〃	1/2	ヘラ記号「I」
519	〃	S-1c	□14.8, 高1.7	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	
520	〃	S-2a	□14.2, 高1.7	〃	淡灰焼良好	〃	
521	〃	R-2b	□14.4, 高1.9	〃	青灰焼堅緻	2/3	
522	〃	R-2a	□14.6, 高1.7	〃	暗青灰焼堅緻	3/5	
523	〃	S-1c	□15.6, 高1.8	〃	青灰焼堅緻	1/2	
524	〃	R-2d	□14.4, 高1.85	〃	暗青灰焼堅緻	1/4	
525	〃	R-2b	□14.6, 高2.25	〃	〃	〃	
526	〃	R-1c,R-2b	□15.2, 高1.8	〃	〃	2/3	
527	〃	R-1d	□15.7, 高2.0	〃	青灰焼堅緻	4/5	
528	〃	R-2b	□15.2, 高1.75	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
529	〃	〃	□15.5, 高2.3	〃	〃	1/4	
530	〃	〃	□14.6, 高1.95	〃	暗灰焼堅緻	1/3	ヘラ記号「I」
531	〃	S-1d	□14.0, 高1.8	〃	〃	〃	〃
532	〃	S-2	□14.2, 高1.95	〃	〃	1/2	〃
533	〃	〃	□15.0, 高1.7	〃	〃	1/3	
534	〃	S-2a	□14.7, 高1.7	〃	〃	1/4	ヘラ記号「I」
535	〃	R-2b	□14.2, 高1.8	〃	〃	2/5	〃
536	〃	〃	□15.3, 高2.0	〃	暗青灰焼堅緻	1/4	
537	〃	S-1c	□13.5, 高1.8	〃	〃	3/4	
538	〃	〃	□15.2, 高1.7	〃	青灰焼良好	1/3	
539	〃	Q-2a	□14.6, 高1.4	〃	〃	1/6	
540	〃	R-2a	□13.4, 高2.1	〃	灰色焼堅緻	1/3	
541	盤 B	S-1c	□19.4, 高4.4 台14.5, 台高0.8	〃	灰白焼半生	1/8	
542	〃	R-1d	□18.4, 高4.25 台14.3, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	2/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
543	盤 B	R-2b,Q-2a	口18.0, 高2.9 台12.0, 台高0.45	良	白焼堅緻	4/5	底爪痕a
544	〃	S-1d	口19.8, 高3.25 台15.2, 台高0.4	普通	青灰白焼良好	1/3	
545	〃	S-1c・d	口19.8, 高3.25 台15.2, 台高0.4	〃	〃	〃	
546	〃	S-1c	口19.8, 高3.1 台14.4, 台高0.55	良	暗灰焼堅緻	1/4	底爪痕a
547	〃	R-2a	口18.9, 高2.8 台12.5, 台高0.6	〃	白焼堅緻	1/3	底爪痕b
548	〃	〃	口18.9, 高2.9 台14.3, 台高0.65	〃	〃	1/2	底爪痕a
549	〃	R-1 R-2a・b	口19.0, 高2.85 台15.0, 台高0.55	〃	〃	6/7	〃
550	〃	N-2a	口22.5, 高3.8 台17.6, 台高0.8	砂多	青灰焼堅緻	1/10	
551	〃	Q-1,Q-2a	口20.8, 高3.25 台14.7, 台高0.65	普通	灰白焼生	1/3	
552	〃	Q-1d	口21.6, 高3.3 台15.3, 台高0.6	〃	灰白焼良	3/5	底爪痕a
553	〃	R-1c	口19.6, 高3.55 台14.7, 台高0.55	〃	青灰白焼半生	1/3	
554	〃	R-1c・d	口20.0, 高3.8 台14.7, 台高0.6	〃	〃	〃	底爪痕d
555	〃	R-1c	口19.0, 高3.7 台14.6, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/12	
556	〃	〃	口19.4, 高4.0 台13.6, 台高0.65	砂多	青灰焼良好	2/3	
557	〃	S-1c	口19.5, 高3.9 台14.6, 台高0.55	普通	青灰焼堅緻	1/7	
558	〃	〃	口21.5, 高4.0 台14.8, 台高0.45	砂多	〃	1/6	
559	〃	R-1c・d S-1c	口22.5, 高3.95 台17.0, 台高0.6	〃	灰褐焼良	1/5	
560	〃	R-1c	口20.9, 高3.75 台15.8, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	2/9	
561	〃	S-1c	口19.6, 高3.0 台14.5, 台高0.4	良	白焼堅緻	1/7	
562	〃	L-3a	口17.8, 高2.9 台11.8, 台高1.0	〃	〃	1/8	
563	Ⅲ B	Q-2c	口14.4, 高3.7 台7.0, 台高1.1	普通	青灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅳ
564	〃	S-1d	口13.3, 高2.9 台7.1, 台高1.25	〃	灰色焼堅緻	〃	
565	〃	R-2a	口14.0, 高3.8 台6.8, 台高1.35	砂多	青灰焼堅緻	1/3	ヘラ記号「Ⅰ」
566	〃	R-2d	口14.2, 高3.1 台7.0, 台高0.9	普通	〃	2/3	重焼Ⅲ
567	〃	S-1d	口13.4, 高2.75 台7.6, 台高0.8	〃	〃	〃	重焼Ⅳ
568	〃	〃	口13.4, 高2.9 台7.0, 台高1.0	〃	灰色焼堅緻	1/3	〃
569	〃	Q-1	口13.8, 高3.25 台7.0, 台高0.9	〃	青灰焼堅緻	〃	底爪痕a、重焼Ⅲ
570	〃	T-1	口14.0, 高3.0 台6.75, 台高1.0	〃	灰白焼良	〃	底爪痕a、重焼Ⅳ
571	〃	R-2b・c	口12.8, 高2.5 台6.6, 台高1.1	砂多	青灰焼堅緻	〃	底爪痕a、重焼Ⅲ
572	〃	R-2c	口14.3, 高2.8 台7.9, 台高0.75	普通	灰色焼良好	1/5	
573	〃	S-2,T-1	口13.2, 高2.85 台7.2, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅳ

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
574	Ⅲ B	R-2c	口13.8, 高2.75 台7.2, 台高0.7	普通	灰色焼堅緻	1/3	
575	〃	R-1d,R-2b S-1c,S-2	口14.1, 高2.4 台7.9, 台高0.7	〃	〃	2/3	重焼Ⅲ
576	〃	S-1d	口13.6, 高3.0 台8.0, 台高0.7	〃	〃	1/3	重焼Ⅳ
577	〃	R-2a	口14.0, 高2.8 台7.4, 台高0.8	〃	青灰焼堅緻	1/5	〃
578	〃	S-1d	口14.6, 高3.7 台7.5, 台高1.0	〃	青灰白焼良	5/6	重焼Ⅲ
579	〃	R-2a・c S-2	口14.3, 高3.2 台7.6, 台高0.5	〃	灰褐焼生	2/3	重焼Ⅳ
580	〃	S-1d	口14.0, 高3.5 台6.2, 台高0.9	〃	灰白焼良	1/3	底爪痕d、重焼Ⅲ
581	〃	S-2	口12.8, 高2.5 台6.7, 台高0.6	〃	青灰焼良好	〃	底爪痕a、重焼Ⅳ
582	〃	R-2a	口14.2, 高3.3 台6.4, 台高0.9	〃	青灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅲ
583	埦 A	S-1d	口13.3, 高4.4 底5.1	砂多	灰白焼生	〃	
584	埦 B	S-1a,T-1	口14.4, 高5.1 台7.8, 台高0.6	良	白焼堅緻	1/3	重焼Ⅲ
585	〃	R-2c	口12.6, 高3.55 台7.0, 台高0.85	普通	青灰焼堅緻	〃	重焼Ⅳ
586	〃	T-1	台7.8, 台高0.6	砂多	〃	2/3	重焼Ⅲ
587	〃	〃	口14.7, 高5.1 台7.6, 台高0.5	〃	〃	1/3	〃
588	〃	Q-2a	口14.9, 高5.7 台6.2, 台高0.75	〃	灰褐焼半生	2/3	底爪痕b
589	鉢 F	S-1c	口21.5, 体大21.7	普通	灰色焼堅緻	1/20	
590	〃	R-1d	口21.3, 体大21.3	良	暗灰焼堅緻	1/15	
591	鉢 C	R-2b	口29.6	普通	灰色焼堅緻	1/25	
592	〃	R-2c	口28.4	〃	〃	1/16	
593	〃	Q-2d,R-2a	口29.7	〃	〃	1/8	
594	鉢 A	Q-2c・d R-2a・b・c・d	口23.1, 高13.5 底11.9	〃	暗灰焼堅緻	4/7	内面厚く釉
595	鉢 B 特大	R-2a・c	口28.1, 頸24.8 体大29.0	良	青灰焼堅緻	1/12	
596	〃	R-2b	口26.8, 頸24.4 体大28.4	普通	白焼堅緻	1/20	
597	鉢 B 大	Q-2b	口25.6, 頸23.0 体大24.8	〃	〃	1/30	
598	〃	Q-1,Q-2a R-2a・b・c・d T-1	口20.6, 高12.3 頸19.1, 体大21.2 底9.8	良	灰焼堅緻	1/3	
599	〃	Q-2b,R-2a	口20.5, 頸18.3 体大21.8, 底10.6	普通	青灰焼良好	2/3	
600	〃	S-1d	口21.2, 頸19.3 体大22.3	〃	青灰焼堅緻	1/12	
601	〃	R-2a・b・c	口19.5, 頸17.8 体大20.8	〃	青灰焼良好	1/8	
602	〃	S-1d	口20.2, 頸18.2 体大21.3	〃	灰白焼良好	1/5	
603	〃	R-2a	口23.1, 頸20.4 体大23.0	〃	青灰焼良好	1/10	
604	〃	S-1c・d	口20.0, 高12.8 頸18.2, 体大21.1 底10.0	〃	灰色焼堅緻	4/9	
605	鉢 B 小	R-2c	口17.8, 頸16.6 体大18.1	〃	〃	1/10	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
606	鉢 B 小	Q-2d	口16.1, 頸13.6 体大16.9	普通	灰色焼堅緻	1/8	
607	〃	〃	口15.7, 頸14.0 肩15.9	〃	青灰焼堅緻	1/10	
608	〃	R-2a	口15.4, 頸13.8 体大16.5	〃	〃	1/6	
609	〃	R-2c	口14.8, 頸13.4 体大15.2	〃	灰白焼半生	1/5	
610	〃	S-1c	口13.8, 頸12.8 体大14.8	〃	灰色焼堅緻	1/15	
611	〃	R-2a	口13.4, 頸12.2 胴大14.1	〃	暗灰焼堅緻	1/8	
612	壺 E	K-3d R-1c,R-2a	口18.4, 高18.3 頸16.5, 肩21.4	〃	灰色焼堅緻	1/3	3.493ℓ
613	〃	S-1c·d	口22.2, 頸20.1 肩23.2	〃	〃	1/8	
614	〃	R-1c·d	口17.2, 高 14.4 頸16.0, 肩19.7	良	青灰焼堅緻	3/4	2.586ℓ
615	〃	T-1	口21.0, 頸19.2 肩22.4	普通	灰色焼堅緻	1/4	
616	〃	R-2b S-1c,S-2a	口20.2, 頸17.2 肩20.0	〃	〃	1/5	
617	壺 F 中	S-1c·d	口13.9, 高22.9 頸12.5, 頸高3.1 胴大21.6, 胴高19.8 底12.0	〃	〃	1/3	4.605ℓ
618	壺 F 大	S-1d	口19.1, 頸17.1 頸高3.8	〃	〃	口縁片	
619	〃	R-2b,S-2	口19.5, 高28.3 頸17.6, 頸高3.0 胴大24.5, 胴高25.3 底13.3	〃	〃	4/7	底焼台痕 底ヘラ記号「×」 8.628ℓ
620	〃	S-1d,T-1	口16.8, 頸14.4 頸高4.1, 胴大24.6	〃	〃	1/8	
621	壺 F 中	R-1c S-1c·d T-1	口16.6, 高23.7 頸15.2, 頸高3.0 胴大21.9, 胴高20.7 底11.8	〃	青灰焼堅緻	1/3	6.129ℓ
622	〃	Q-2a,T-1	口13.9, 頸12.0 頸高3.1	〃	暗灰焼堅緻	口縁片	
623	壺 F 大	S-1c·d T-1	口17.2, 頸15.6 頸高3.6, 胴大26.3	〃	灰色焼堅緻	1/5	
624	〃	Q-2a·b·c	口16.8, 頸15.7 頸高3.2, 胴大25.5	〃	暗灰焼堅緻	1/10	
625	〃	Q-2a·c·d S-1d,T-1	頸15.2, 胴大23.8 胴高24.5, 底13.0	〃	灰色焼堅緻	1/2	6.971ℓ
626	壺 A 蓋	R-2b	口12.4, 高4.5 つまみ径2.4,つまみ高1.35	良	青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅱaで、上に 瓶重焼
627	〃	Q-2d,R-2b	口11.5, 高5.4 つまみ径2.4, つまみ高1.3	普通	灰色焼堅緻	〃	重焼Ⅰ
628	〃	S-1b	口12.1	良	〃	1/2	
629	〃	R-2a	口12.8	〃	〃	1/6	重焼Ⅰ
630	壺 A	Q-2d S-1c·d	口11.6, 高25.3 頸11.2, 頸高2.3 胴大24.8, 胴高18.7 台17.0, 台高3.1	普通	〃	9/10	台に焼台痕
631	壺 B	S-1c·d T-1	口12.0, 頸11.4 頸高2.0, 胴大25.3	〃	〃	2/7	有蓋重焼 推7.6ℓ
632	壺 A	R-1c·d S-1c	胴大20.8 台11.5, 台高1.8	良	白焼堅緻	1/2	
633	壺 A (四耳壺)	Q-1c,Q-2a	胴大32.2 耳厚0.8～1.5	〃	暗青灰焼堅緻	1/10	
634	壺 A	前庭部	台14.8, 台高3.5	普通	青灰焼堅緻	台片	焼台痕
635	〃	S-1c	台13.6, 台高4.1	〃	〃	〃	〃
636	壺 A	S-1c	台14.3, 台高4.2	良	灰白焼堅緻	台片	焼台痕
637	〃	R-1d	台17.8, 台高4.7	〃	灰白焼良好	〃	〃
638	壺A？	Q-2a·c	台18.2, 台高2.8	普通	灰色焼堅緻	〃	〃
639	瓶 A	R-1c S-1c,S-2	口8.9, 頸5.0 頸高8.55, 胴大14.8	〃	暗青灰焼堅緻	1/10	内胴上シボリ痕
640	瓶 B	Q-1d R-2a S-1c	口8.75, 高23.8 頸5.6, 頸高9.8 胴大15.4, 胴高13.9 台8.5, 台高1.0	良	〃	略完	内胴上シボリ痕 頸部2本突帯
641	〃	R-1c·d R-2a·b S-1d	口9.0, 高23.3 頸5.3, 頸高8.9 胴大15.6, 胴高14.4 台9.0, 台高0.8	普通	灰色焼堅緻	2/3	底爪痕a+b 1.664ℓ
642	〃	R-2b 前庭部	口9.1 頸6.0, 頸高9.2 胴大15.9, 胴高11.6	〃	暗青灰焼堅緻	2/7	推1.507ℓ
643	〃	R-2b,S-2	口8.6, 頸5.4 頸高8.9, 胴大14.8	〃	暗灰焼堅緻	1/3	
644	〃	R-2b	口10.1, 頸5.4 頸高4.7, 胴大15.6	〃	灰白焼堅緻	〃	
645	〃	S-1c	口11.9, 頸6.4 頸高11.0	〃	青灰焼堅緻	口頸片	
646	〃	前庭部	口9.2, 頸5.5 頸高10.2	砂多	灰色焼堅緻	〃	
647	〃	R-1c·d R-2a S-1d S-2a	口9.2, 高21.6 頸5.3, 頸高8.7 胴大14.3, 胴高12.9 台8.2, 台高0.9	普通	青灰焼堅緻	5/6	底爪痕b、焼台痕 底ヘラ記号 1.200ℓ
648	〃	S-1c	頸5.6, 胴大15.0 台8.4, 台高0.9	〃	灰色焼堅緻	1/2	推1.514ℓ
649	〃	〃	頸5.5, 胴大16.2	〃	灰色焼良好	3/4	
650	〃	R-2b,S-1c	胴大15.3 台9.9, 台高1.0	〃	灰色焼堅緻	1/3	
651	瓶A・B	R-2b	台8.2, 台高0.9	〃	〃	1/6	
652	〃	S-1c	台10.5, 台高1.5	〃	〃	〃	
653	瓶D大(三耳)	R-2b S-1c,S-2	口16.5, 高42.3 頸9.9, 頸高10.0 胴大25.4, 胴高32.3 底13.0, 耳厚1.2～1.7	〃	暗灰色焼堅緻	3/4	焼台痕 10.560ℓ
654	瓶D大(双耳)	R-2c	頸12.2, 胴大23.8 耳厚1～1.7	〃	灰色焼堅緻	1/20	
655	瓶D中(双耳)	S-1c·d T-1	口17.8 頸9.5, 頸高9.3	〃	〃	1/10	
656	瓶D(双耳)	S-2	耳厚1.1～1.7	〃	暗灰焼堅緻	耳片	
657	瓶D中(双耳)	R-1c,R-2b	口11.5, 頸7.9 頸高7.4, 耳厚1.0～1.8	〃	灰色焼堅緻	1/4	
658	瓶D小(双耳)	Q-2b,R-1c R-2b,S-1c S-2a	口10.7, 頸7.6 頸高6.7, 胴大17.05	〃	暗灰焼堅緻	2/5	推3.166ℓ
659	〃	R-2a·b·c	口10.6, 頸7.2 頸高7.5, 胴大15.8 耳厚1.0～1.8	良	暗青灰焼堅緻	1/4	
660	瓶D中(双耳)	Q-1d Q-2a·b·d	口13.6, 頸9.7 頸高9.2, 胴大19.8 耳厚0.8～1.3	普通	暗灰焼堅緻	1/3	推5.456ℓ
661	瓶D(双耳)	S-1c	口12.3	〃	〃	口片	
662	〃	S-1c·d	口10.6 頸7.5, 頸高6.7	〃	灰色焼堅緻	〃	
663	〃	S-2	口8.5 頸7.0, 頸高6.5	良	白焼堅緻	〃	
664	瓶D中(双耳)	R-1c·d R-2a·b·c S-1c,S-2a	口14.2, 頸8.7 頸高8.5, 胴大20.4 耳厚0.8～1.4	普通	灰色焼堅緻	2/5	推5.515ℓ

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
665	瓶D小(双耳)	S-1d,T-1	口10.1, 高28.1 頸6.0, 頸高7.3 胴大15.5, 胴高20.8 底8.8, 耳厚0.65～1.2	普通	灰色焼堅緻	4/7	焼台痕 2.508ℓ
666	〃	R-2a Q-2b·d	口11.7, 頸7.0 頸高7.4, 胴大15.9	〃	青灰焼堅緻	1/4	
667	瓶D中(双耳)	S-1c·d T-1	口14.8, 頸8.2 頸高8.5	〃	灰色焼堅緻	1/6	
668	〃	S-1d,T-1	口10.8, 頸7.0 頸高7.4	〃	〃	口片	
669	瓶D小(双耳)	S-1c·d	胴大17.0, 底8.7 耳厚0.55～1.0	〃	〃	1/5	
670	〃	R-2a	胴大17.0, 底9.4 耳厚1.0～1.5	〃	〃	1/4	焼台溶着
671	〃	S-1c·d S-2	頸7.2, 胴大16.1 耳厚0.8～1.3	〃	暗灰焼堅緻	1/15	
672	瓶D中(双耳)	Q-2a·b·d	頸7.6, 胴大17.5 耳厚0.8～1.1	〃	〃	〃	
673	瓶D(双耳)	R-2b	耳厚1.0～2.0	〃	青灰焼堅緻	耳片	
674	〃	Q-2a	耳厚1.2～1.5	良	灰色焼堅緻	〃	
675	〃	R-1d	耳厚1.0～1.7	普通	〃	〃	
676	瓶D中(双耳)	R-2b,T-0	胴大17.7, 底9.6	〃	暗灰焼堅緻	1/6	焼台痕
677	瓶D小(双耳)	R-2a·b·d	胴大15.8, 底9.1	良	灰色焼堅緻	1/5	
678	〃	S-2a	胴大14.6, 底8.9	普通	暗灰焼堅緻	1/3	
679	〃	S-1c	口10.4, 高25.8, 頸7.7 底9.4, 胴大16.8 耳厚1.1～1.2	〃	灰色焼堅緻	4/5	底焼台痕 2.643ℓ
680	釜	前庭部	口21.8, 頸18.8	混和材含	〃	1/9	土師器胎土
681	〃	Q-2d	口21.7, 頸19.0	砂多	青灰色焼堅緻	1/12	〃
682	小釜	前庭部 Q-2b,R-1c	口12.7, 頸11.5 胴大13.4	混和材含	灰色焼堅緻	1/2	〃
683	〃	R-1c	底7.2	〃	〃	底片	〃
684	塝	R-2a	口40.6, 頸39.0	砂多	青灰焼堅緻	1/20	〃
685	大甕	R-2b,S-2a S-1c·d	口41.3, 頸33.8 頸高5.5	普通	灰色焼堅緻	口縁片	胴上叩き後口頸継ぎ。 外He叩き、内Db当て。
686	中甕a	Q-2c,R-2b	口35.3, 頸28.6 頸高6.3	〃	〃	1/20 以下	胴上叩き後口頸継ぎ、頸ナデ後胴最上位叩き、外He叩き、内Da当て。最上位のみ無文当て。
687	〃	R-2b S-1c·d	口31.9, 頸27.3 頸高6.2, 胴大56.8	〃	〃	1/4	胴外面にヘラ描の曲線数条。 胴叩き(上向き3段)後口頸継ぎ及び頸ナデ後最上位叩き。胴叩き後、底叩き出し(下向)。外全てHa叩き、内全てDa当て。 38.176ℓ
688	〃	S-1d,T-1	口24.0, 頸21.4 頸高4.2	〃	〃	1/20 以下	胴上叩き後口頸継ぎナデ。後胴最上位叩き。外He叩き、内Db当て。
689	中甕b	Q-2a·c	口22.2, 頸15.6 頸高6.4	〃	〃	1/18	胴上叩き後口頸継ぎナデ。外He叩き、内無文当て。
690	〃	J-0	口20.4, 頸16.0 頸高6.6	〃	〃	1/15	胴上叩き後カキ目、口頸継ぎ、後ナデ。 外He叩き、内SD当て。
691	〃	S-2	口20.7, 頸14.9 頸高7.0	〃	暗灰焼堅緻	1/20 以下	口頸継ぎナデ後、胴最上位叩き後カキ目。 外He叩き、内SD当て。

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
692	中甕b	Q-2c·d S-2	口22.3, 高45.3 頸16.2, 頸高6.7 胴大31.6, 胴高38.6	普通	灰色焼堅緻	1/6	胴叩き(下向)後口頸継ぎ。頸ナデ後胴最上位叩き。胴叩き後底叩き出し(下向)。 外全てHe叩き、内胴Da当て、胴最上位無文当て、底He当て。 9.648ℓ
693	〃	R-2b	—	〃	〃	1/4	胴叩き後外カキ目、内ナデ消し、後底叩き出し(下向)。 外Ha叩き、内Da当て。 盤Aを焼台使用
694	〃	S-1d,T-1	—	〃	〃	1/20	胴下叩き(上向)後、底叩き出し(下向)。 外Ha叩き、内胴Db当て、底He当て。
695	〃	S-1d	胴大33.3	〃	〃	〃	胴叩き(胴下ー下向、胴上ー上向と下向)後、外面カキ目後、底叩き出し(下向)。 外Ha叩き、内胴Db当て、底He当て。 696と同じDb当て具
696	〃	〃	—	〃	〃	1/25 以下	胴叩き(胴上ー上向、胴下ー下向)後底叩き出し(下向)。 外Ha叩き、内胴Db当て、底He当て。 695と同じDb当て具
697	中甕a？ (平底風)	T-0	—	砂多	〃	底片	外Ha叩き、内He当て。 底焼台痕
698	小甕	Q-2d	口16.4, 頸12.8 頸高3.2	普通	青灰焼堅緻	1/6	内外ともロクロナデ
699	小型鉢	S-1d	口13.2, 体大13.3	〃	〃	1/12	
700	小型埦	P-3	口8.2, 高3.5 底4.1	砂多	青灰白焼良好	2/3	
701	ロート状鉢	T-1	注口3.0	普通	暗灰焼堅緻	？	
702	双耳坏？	R-1d	—	〃	青灰白焼良好	耳片	
703	コップ形蓋	R-3b	口6.3, 高1.5 つまみ径1.6, つまみ高0.6	〃	暗灰焼堅緻	完形	
704	小型壺A蓋?	R-1c	口5.9, 高1.8	良	青灰焼堅緻	2/3	
705	小型壺B	S-1c	口5.5, 胴大7.2	普通	灰色焼堅緻	1/7	
706	小型壺E	〃	口7.4, 頸6.4 胴大9.1	良	〃	1/5	推0.159ℓ
707	〃	R-2b,S-1c	口5.9, 頸5.2 胴大8.5	〃	〃	〃	推0.105ℓ
708	〃	S-1c	口10.7, 高10.0 頸9.6, 胴大12.9 底6.6	普通	灰色焼堅緻	1/3	0.406ℓ
709	〃	R-2d	口11.0, 高9.0 頸10.0, 胴大12.4 底7.4	〃	〃	完形	底面焼台溶着
710	小型瓶C	R-1c	口5.4, 頸3.4 頸高5.0	良	〃	口縁片	
711	〃	R-1d	口6.2, 頸4.1 頸高4.0	〃	暗灰焼堅緻	〃	
712	小型瓶E	O-2d	口5.4, 頸4.15 頸高4.3	普通	灰色焼堅緻	〃	
713	〃	R-2a	口5.1, 頸4.1 頸高4.0, 胴大10.1	〃	〃	2/5	
714	小型瓶	R-2d,S-2	口7.2, 頸4.9 頸高5.4, 胴大13.4	〃	〃	1/2	
715	小型平瓶	T-1	—	〃	〃	把手片	
716	陽刻板	S-1c	厚2.0	良	灰白焼良好	？	717と同一個体 不明陶板
717	〃	R-1d	厚1.2	〃	〃	？	716と同一個体 不明陶板

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
718	陶錘	R-2b	径1.95, 長5.4 孔径0.7	普通	灰色焼堅緻	完形	

D区　3号窯灰原出土窯道具観察表(第48～53図)

番号	類型	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	焼台 A	R-2d	□14.2, 高4.1	普通	灰色焼堅緻	1/3	
2	〃	Q-1	□14.0, 高3.9	砂多	〃	1/9	
3	〃	R-2c	□14.9, 高4.1	普通	暗青灰焼堅緻	1/7	
4	〃	M-2d	□14.6, 高2.9	〃	灰色焼堅緻	1/3	
5	〃	L-2a	□11.0, 高3.4	砂多	青灰焼良好	2/3	
6	〃	ピット4	□19.6, 高2.8	〃	青灰焼堅緻	完形	
7	〃	L-2a	□19.3, 高2.7	〃	灰色焼堅緻	1/3	
8	〃	Q-2b	□18.7, 高2.3	普通	白焼堅緻	1/18	底窯土付
9	焼台 Ba	P-2a	□14.8, 高2.95	砂多	暗灰色焼堅緻	1/3	
10	〃	Q-2d	□16.4, 高2.4	普通	灰白焼堅緻	1/7	
11	〃	R-2a	□17.3, 高2.85	〃	灰色焼堅緻	1/5	□窯土付
12	〃	S-1d	□14.8, 高2.9	砂多	青灰色焼堅緻	2/3	
13	〃	S-2a	□13.6, 高2.95	普通	暗灰焼堅緻	1/3	底窯土付、口欠け
14	〃	Q-2b	□16.3, 高3.8	〃	灰色焼堅緻	1/4	底窯土付
15	〃	S-2a	□13.4, 高2.7	〃	暗青灰焼堅緻	1/5	〃
16	〃	R-2a	□12.3, 高2.9	〃	灰色焼堅緻	1/4	底窯土付、口欠け
17	〃	R-2d	□10.0, 高2.0	良	青灰焼堅緻	1/8	
18	〃	Q-2d	□11.5, 高3.15	砂多目	灰色焼堅緻	1/5	
19	〃	R-2a	□12.4, 高3.6	砂多	青灰焼堅緻	1/4	
20	焼台 Bb	Q-2b	□15.4, 高3.0	普通	灰色焼堅緻	1/3	底裾片・窯土付
21	〃	S-1c	□13.0, 高2.8	砂多目	〃	1/2	底窯土付
22	〃	R-2b	□13.9, 高2.6	普通	〃	略完	底裾片・坏片・窯土付
23	〃	Q-2a	□12.8, 高2.8	砂多目	暗灰焼堅緻	1/3	底窯土付
24	〃	Q-2d R-1a・c・2c	□12.0, 高3.0	良	白焼堅緻	5/6	〃
25	〃	R-2b	□12.0, 高2.2	普通	暗灰焼堅緻	1/3	〃
26	〃	Q-2a・2c	□12.1, 高2.7	〃	灰色焼堅緻	1/6	
27	〃	S-1b	□12.0, 高2.5	〃	青灰焼堅緻	1/3	
28	〃	R-2b,S-2 T-1	□12.0, 高2.3	良	白焼堅緻	2/3	
29	〃	S-2	□11.4, 高3.1	普通	暗灰焼堅緻	1/3	□欠け
30上	〃	S-1d	□11.9, 高2.5	砂多目	青灰焼堅緻	1/3	底半欠焼台・窯土付
30下	〃	〃	□12.5, 高2.5	〃	〃	1/2	〃
31	〃	S-2	□12.2, 高3.3	普通	〃	完形	
32	〃	R-1c	□11.8, 高3.5	〃	灰色焼堅緻	1/3	底窯土付
33	〃	Q-2b	□10.8, 高3.5	〃	〃	完形	〃
34	〃	S-1d,T-1	□11.2, 高2.8	〃	〃	1/3	〃
35	〃	S-2a	□11.2, 高2.7	〃	青灰焼堅緻	1/4	
36	〃	Q-2a	□10.8, 高3.0	砂多目	灰色焼堅緻	2/3	底窯土付
37	〃	R-2a	□10.2, 高2.7	〃	〃	〃	
38	〃	S-1d	□10.4, 高2.4	良	〃	1/4	底窯土付
39	〃	S-2a	□10.0, 高2.4	普通	〃	完形	
40	焼台 Bb	Q-2d	□19.7, 高2.85	砂多目	灰色焼堅緻	1/3	底窯土付
41	〃	S-2	□19.8, 高2.7	普通	〃	〃	〃
42	〃	R-2c	□19.0, 高2.3	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
43	〃	S-2	□19.4, 高2.7	砂多	灰色焼堅緻	1/3	
44	〃	Q-2d	□19.0, 高2.6	普通	〃	〃	□欠け
45	〃	S-1d	□18.3, 高2.6	〃	〃	1/5	
46	〃	T-1	□18.6, 高3.15	〃	〃	1/4	
47	〃	Q-2a	□18.4, 高2.9	〃	〃	略完	底坏2片・窯土付
48	〃	S-1d・2	□19.0, 高2.2	良	〃	3/4	底窯土付
49	〃	R-2b	□19.2, 高1.95	〃	灰白焼堅緻	完形	底粘土・焼台片付
50	〃	S-1d	□18.3, 高2.0	〃	灰色焼堅緻	2/3	□欠け
51	〃	R-2	□18.2, 高2.8	普通	〃	〃	焼成前底穴
52	〃	T-1	□17.7, 高2.4	〃	〃	1/2	
53	〃	S-1d	□17.8, 高2.3	〃	〃	4/5	
54	〃	R-2c	□18.65, 高2.6	砂多	〃	略完	
55	〃	Q-2a,R-2a	□18.7, 高2.55	良	青灰焼堅緻	1/3	底窯土付
56	〃	R-2a	□18.5, 高2.38	砂多	灰色焼堅緻	4/5	
57	焼台 Bc	S-1d	□14.0, 高3.85	砂多目	暗灰焼堅緻	1/3	
58	〃	R-2a・1c	□14.4, 高3.7	良	青灰焼堅緻	2/5	底窯土付
59	〃	S-1d	□11.4, 高3.0	砂多	〃	3/4	
60	〃	T-1	□14.0, 高3.05	普通	青灰白焼良	1/5	
61	〃	S-1c	□11.8, 高4.0	砂多	灰色焼堅緻	11/12	底窯土付
62	〃	R-2b	□13.2, 高4.05	普通	〃	1/3	
63	〃	R-2a	□10.5, 高3.6	〃	〃	略完	底窯土付
64	〃	Q-2b	□10.4, 高2.9	〃	〃	2/3	〃
65	〃	R-2a	□8.7, 高3.2	〃	暗灰焼堅緻	4/5	〃
66	〃	S-1c	□9.2, 高2.7	良	〃	2/3	
67	〃	S-2a・1d	□10.4, 高2.8	普通	暗青灰焼堅緻	1/3	
68	〃	R-2b・2d	□10.2, 高2.85	〃	暗灰焼堅緻	〃	
69	〃	R-1c	□8.7, 高3.4	〃	灰色焼堅緻	完形	
70	〃	R-2a	□8.8, 高2.7	〃	青灰焼良好	1/3	
71	〃	Q-2a	□8.7, 高2.4	〃	白焼堅緻	〃	
72	〃	S-1c	□8.3, 高2.3	〃	灰色焼堅緻	2/3	
73	〃	T-?	□7.4, 高2.4	良	白焼堅緻	1/9	□欠け
74	〃	R-2b	□8.3, 高2.6	普通	暗青灰焼堅緻	2/3	
75	〃	S-1d	□8.0, 高2.75	〃	青灰焼堅緻	略完	底窯土付
76	〃	L-4	□8.4, 高2.95	〃	灰白焼堅緻	1/3	
77	〃	Q-2b	□7.35, 高2.7	砂多目	暗青灰焼堅緻	完形	
78	〃	Q-2d	□8.1, 高2.48	普通	灰色焼良好	1/3	
79	〃	R-2a	□6.4, 高1.85	〃	青灰焼堅緻	2/3	

番号	類型	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
80	焼台 Bd	Q-1d	口19.7, 高3.3	普通	暗灰焼堅緻	1/3	
81	〃	S-1c	口19.65, 高3.5	〃	灰色焼堅緻	略完	底窯土付
82	〃	S-2	口10.6, 高3.4	〃	暗灰焼堅緻	1/3	
83	焼台 Ca1	前庭部	口11.0, 高4.5	〃	灰色焼堅緻	2/3	底窯土付
84	〃	S-1c	口10.8, 高5.6	砂多目	灰白焼堅緻	1/3	
85	〃	S-2	口11.2, 高4.8	普通	灰色焼堅緻	略完	底窯土付
86	〃	S-1c	口19.0, 高4.6	砂多目	青灰焼堅緻	4/5	
87	〃	R-2b	口19.6, 高5.1	普通	〃	1/5	
88	〃	前庭部	口10.2, 高6.7	〃	灰色焼堅緻	略完	底窯土付
89	〃	R-1c	口10.4, 高4.2	良	白焼堅緻	3/4	
90	〃	〃	口19.6, 高3.7	〃	〃	4/5	
91	〃	R-1c,S-1c	口19.9, 高3.4	〃	〃	1/2	
92	〃	T-1	口19.2, 高4.0	普通	暗灰焼堅緻	略完	底窯土付・口欠け
93	〃	R-1c・1d	口18.0, 高3.9	良	白焼堅緻	2/3	
94	〃	Q-1d・2b	口18.7, 高3.8	普通	暗灰焼堅緻	略完	
95	〃	Q-1	口17.2, 高2.8	〃	〃	2/3	
96	〃	S-1c	口18.1, 高3.1	〃	青灰焼良好	3/4	
97	〃	R-2b	口17.2, 高3.9	良	白焼堅緻	2/3	
98	焼台 Ca2	R-1c	口18.6, 高5.5	普通	灰色焼堅緻	5/6	
99	〃	〃	口18.6, 高5.1	〃	灰白焼堅緻	略完	
100	〃	R-2a	口17.0, 高5.5	〃	白焼堅緻	4/5	
101	〃	R-1c	口18.0, 高5.1	〃	灰色焼堅緻	略完	
102	〃	S-1c	口19.0, 高4.9	砂多目	〃	完形	口欠け
103	〃	〃	口18.7, 高4.3	良	白焼堅緻	略完	底瓢片付
104	〃	R-1c	口18.0, 高4.7	〃	灰白焼堅緻	4/5	
105	〃	S-1c	口16.5, 高3.1	普通	灰色焼堅緻	略完	
106	〃	〃	口16.5, 高4.75	〃	〃	5/6	
107	〃	R-1・1c	口16.4, 高4.3	良	白焼堅緻	略完	口欠け
108	〃	R-1d	口18.1, 高4.85	普通	〃	1/2	〃
109	焼台 Ca3	〃	口12.8, 高8.3	〃	灰色焼堅緻	2/3	口縁全周黒色付着物
110	〃	Q-2a	口15.2, 高8.1	〃	白焼堅緻	完形	
111	〃	R-1c・1d	口15.3, 高6.5	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
112	〃	Q-2b	口15.8, 高6.9	〃	灰色焼堅緻	完形	底窯土付
113	〃	R-1c	口19.6, 高9.1	砂多	〃	4/5	
114	〃	Q-2b	口15.55, 高9.2	普通	白焼堅緻	完形	
115	〃	R-2b	口17.4, 高7.6	砂多	青灰白焼良好	1/3	
116	〃	R-1c	口15.8, 高6.8	普通	灰色焼堅緻	略完	
117	〃	S-1d	口16.0, 高6.45	〃	〃	完形	口欠け
118	〃	R-2a	口15.6, 高5.9	砂多目	白焼堅緻	〃	
119	〃	R-1c	口16.25, 高6.4	〃	〃	〃	
120	〃	R-1c・1d	口18.2, 高5.9	良	〃	2/3	
121	〃	R-2a	口16.6, 高6.0	普通	灰色焼堅緻	1/6	
122	〃	S-1d	口15.6, 高5.4	〃	白焼堅緻	1/3	
123	〃	R-2a		〃	暗灰焼堅緻	1/5	底窯土付
124	焼台 Cb1	〃	口16.6, 高3.8	砂多目	灰色焼堅緻	2/3	焼成前底穴
125	〃	S-1d,T-1	口17.0, 高3.55	〃	〃	〃	
126	〃	R-1d,S-1c	口18.1, 高3.9	普通	〃	3/4	口欠け

番号	類型	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
127	焼台 Cb2	S-1c	口17.0, 高3.75	普通	灰色焼堅緻	2/3	口欠け
128	〃	R-2b	口16.6, 高3.62	良	白焼堅緻	完形	
129	〃	〃	口16.08, 高2.6	普通	青灰焼堅緻	〃	
130	〃	R-2b・1d	口16.2, 高3.5	良	白焼堅緻	9/10	
131	〃	Q-1	口16.2, 高3.35	〃	〃	2/3	
132	〃	Q-2b	口15.3, 高3.55	普通	灰色焼堅緻	完形	口窯土付
133	〃	R-1d	口14.8, 高3.4	良	灰白焼堅緻	〃	
134	〃	O-3d	口16.2, 高3.8	砂多	灰色焼堅緻	1/3	
135	〃	T-1	口15.65, 高3.05	普通	暗青灰焼堅緻	9/10	底窯土付
136	〃	Q-2d	口16.05, 高3.0	砂多	灰色焼堅緻	5/6	〃
137	〃	R-2b	口15.8, 高3.05	普通	〃	2/3	内底窯土付
138	〃	R-1c・1d	口15.8, 高3.4	良	白焼堅緻	〃	
139	〃	T-1	口15.9, 高3.3	普通	灰色焼堅緻	略完	底窯土付
140	〃	R-2d	口16.0, 高3.0	〃	灰白色焼堅緻	1/3	口欠け
141	焼台 Cb3	Q-2b	口14.2, 高2.9	〃	灰色焼堅緻	完形	底窯土付
142	〃	S-1d	口14.4, 高2.55	砂多	〃	〃	
143	焼台 Cb2	P-2d	口18.4, 高4.28	良	青灰焼良好	1/6	
144	焼台 Cc	R-1c	口18.0, 高5.8	普通	灰色焼堅緻	略完	
145	〃	R-2a	口18.0, 高5.6	〃	〃	4/5	底窯土付・口欠け
146	〃	S-1c	口17.9, 高推3.9	〃	〃	1/6	
147	〃	K-3d	口16.2, 高3.0	砂多	〃	1/4	口欠け
148	焼台 Da1	Q-2b,R-2c	口21.1, 高5.1	〃	青灰焼良好	1/3	
149	〃	T-1	口19.2, 高5.45	砂多目	〃	1/5	
150	〃	S-1d	口20.0, 高7.6	砂多	灰色焼良好	1/6	
151	焼台 Db1	Q-2a	口17.9, 高7.4	〃	青灰焼堅緻	〃	底窯土付
152	〃	R-2b	口16.5, 高6.9	普通	〃	〃	2次被熱
153	〃	Q-2b	口16.2, 高6.5	砂多目	〃	1/3	
154	〃	R-2b,S-2a	口16.2, 高6.2	良	白焼堅緻	〃	底窯土付
155	〃	Q-2d	口18.0, 高5.4	〃	灰色焼堅緻	1/4	焼成前底穿孔 底窯土付
156	〃	Q-2b	口14.8, 高5.2	砂多	〃	1/7	底窯土付
157	〃	T-1	口15.2, 高5.55	普通	〃	1/6	
158	〃	S-2	口14.4, 高5.7	砂多	〃	1/4	底窯土付
159	〃	Q-2b,R-2b S-2	口15.2, 高5.9	〃	〃	2/3	
160	〃	S-1d	口15.4, 高4.75	普通	〃	3/4	
161	〃	〃	口14.3, 高5.7	砂多	青灰焼良	1/3	
162	〃	R-2c	口13.8, 高4.4	良	灰色焼堅緻	1/5	
163	〃	S-1c・1d	口12.8, 高5.3	普通	〃	1/3	
164	〃	Q-2b	口13.3, 高4.7	〃	青灰焼堅緻	1/5	口欠け
165	〃	R-2a	口13.6, 高5.4	〃	灰色焼堅緻	1/3	
166	〃	S-1d	口11.2, 高5.8	〃	〃	2/3	底窯土付
167	〃	S-2・2a	口10.2, 高4.5	〃	暗灰焼堅緻	1/5	口欠け
168	焼台 Db2	S-1c	口16.1, 高6.52	砂多目	青灰焼堅緻	1/2	
169	〃	Q-2b	口16.7, 高6.3	砂多	灰白焼良好	1/5	
170	〃	Q-2d	口15.6, 高6.3	砂多目	灰白焼生	1/4	
171	〃	S-1c	口16.4, 高5.2	〃	灰色焼堅緻	1/2	
172	〃	〃	口16.1, 高5.9	砂多	〃	2/3	体四方円孔

番号	類型	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
173	焼台 Db2	Q-2d	口13.8, 高5.2	普通	灰白焼堅緻	1/7	
174	〃	〃	口13.7, 高5.4	〃	〃	1/5	
175	〃	R-2a	口12.9, 高5.15	〃	暗灰焼堅緻	1/4	
176	〃	T-1	口14.0, 高5.0	〃	灰色焼堅緻	1/3	底窯土付
177	〃	R-2a	口12.6, 高4.4	〃	青灰焼良好	1/7	
178	〃	〃	口14.5, 高5.1	砂多	灰色焼堅緻	1/3	底窯土付
179	〃	S-1d	口14.3, 高6.7	〃	〃	2/3	

番号	類型	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
180	焼台 Db2	R-2a	口14.35, 高6.6	砂多	青灰焼堅緻	9/10	底窯土付
181	〃	S-2	口10.6, 高5.8	普通	灰色焼堅緻	完形	2次被熱
182	焼台 Dc2	T-1	口16.0, 高5.9	砂多目	〃	2/3	
183	〃	R-1d,S-1c	口16.5, 高5.9	普通	白焼堅緻	〃	
184	焼台 Dc1	S-1d	口16.6, 高5.3	砂多目	青灰白焼良好	1/5	
185	〃	R-2a・2b	口13.0, 高4.85	砂多	灰色焼堅緻	1/3	口欠け
186	〃	M-3d	口11.3, 高4.35	普通	青灰焼堅緻	1/4	

D区　3号窯灰原出土土師器観察表(第54図)

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成	色調	完存	備考
1	外赤内黒 塊A	S-1d	口13.3, 高4.7 底5.4	普通	良	暗灰(褐)色	1/6	外面口縁に内黒もれる
2	〃	R-2b	口13.4, 高4.5 底5.6	〃	良好	淡肌色	1/5	
3	外赤・塊A	R-2a	底5.5	〃	〃	肌色	1/3	
4	外赤内黒 ⅢB	R-2a・2c	口13.6, 高3.2 台7.2, 台高1.0	〃	〃	淡肌色	1/4	内黒は上半が、とんでいる
5	小甕	S-1c・1d	口11.7, 胴12.6	〃	〃	肌色	1/6	
6	〃	Q-2d	口11.3, 胴11.9	〃	良	〃	1/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成	色調	完存	備考
7	小甕	Q-2d	口11.3	普通	良	肌色	1/7	
8	〃	Q-3	口8.6, 高5.4 底5.7, 胴8.6	〃	〃	〃	2/3	底糸切り
9	甕	S-1d	口20.8	〃	不良	淡白肌色	1/20以下	
10	〃	R-1c	口20.2	〃	良	淡肌色	口縁片	
11	〃	Q-1d・2d	口21.1	〃	〃	〃	1/20以下	
12	〃	R-2b・2c Q-2d	口20.8, 胴22.0	〃	〃	外・灰(褐)色 内・灰褐色	1/4	胴下外He叩き、内無文当て

D区　4号窯灰原出土須恵器観察表(第55図～66図)

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋大	K-2a	口20.4	普通	暗青灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅰ類
2	〃	K-3a・2c	口18.4	〃	〃	〃	〃
3	〃	K-2a	つまみ径2.4,つまみ高1.4	〃	灰色焼堅緻	2/5	
4	〃	K-1d	口22.2	砂多目	青灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅰ類
5	坏B蓋中	K-2a	口16.3, 高1.7 つまみ径3.4,つまみ高0.5	〃	〃	2/3	〃
6	〃	K-2b・2c	口14.4, 高2.4 つまみ径2.7,つまみ高1.1	〃	暗青灰焼堅緻	3/5	重焼不明 内天「Ⅰ」記号
7	〃	K-2a	口13.6, 高1.9 つまみ径2.5,つまみ高0.7	良	青灰白焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
8	〃	K-1c	口13.5, 高1.6 つまみ径2.6,つまみ高0.6	普通	青灰焼堅緻	3/4	〃
9	〃	L-2b・2c・3a	口13.6, 高2.3 つまみ径2.8,つまみ高0.8	〃	青灰焼良好	4/5	〃
10	〃	J-2b・2d	口15.0, 高2.75 つまみ径2.4,つまみ高0.9	〃	青灰白焼良	1/2	〃

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
11	坏B蓋中	K-1c	口13.6, 高2.3 つまみ径2.2,つまみ高0.7	普通	暗灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅰ類
12	〃	J-3b	口15.2	〃	灰色焼堅緻	1/5	〃
13	〃	K-2a	口14.7, 高2.3 つまみ径2.6,つまみ高1.1	〃	青灰焼堅緻	1/6	〃
14	〃	K-2c	口15.5, 高2.5 つまみ径2.9,つまみ高0.5	〃	〃	1/4	〃
15	〃	4カマ灰	口15.2, 高2.6 つまみ径2.4,つまみ高0.8	〃	〃	〃	重焼Ⅰ類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
16	〃	J-2b,K-2a	口13.7, 高2.4 つまみ径2.85,つまみ高0.8	〃	〃	2/3	重焼Ⅰ類
17	〃	K-1b・2b	口13.8, 高2.7 つまみ径2.6,つまみ高0.85	〃	青灰焼良好	1/2	重焼Ⅱb類
18	〃	K-2c	つまみ径3.1,つまみ高1.3	砂多目	青灰白焼良好	1/4	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「Ⅰ」

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
19	坏B蓋中	K-3c	□15.4	普通	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
20	〃	J-4	つまみ径3.1,つまみ高1.2	砂多目	青灰焼堅緻	1/5	〃
21	〃	Q-2d	つまみ径3.8,つまみ高1.0	普通	青灰白焼良好	1/6	〃
22	〃	K-3c	つまみ径2.9,つまみ高1.0	〃	灰色焼堅緻	3/5	〃
23	〃	J-2b	□14.1, 高3.3 つまみ径2.5,つまみ高0.9	〃	暗青灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅰ類 内天「Ⅲ」ヘラ記号
24	〃	K-2a	□13.7, 高2.5 つまみ径2.8,つまみ高0.8	〃	〃	〃	重焼Ⅰ類
25	〃	〃	□14.0, 高3.15 つまみ径3.0,つまみ高1.1	〃	青灰焼堅緻	〃	〃
26	〃	K-1c	□14.6, 高4.0 つまみ径2.6,つまみ高1.05	〃	灰色焼堅緻	〃	重焼Ⅱa類
27	〃	K-4a･c	つまみ径2.5,つまみ高0.9	〃	赤灰焼良好	5/6	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
28	〃	K-2d	□14.6, 高3.4 つまみ径2.7,つまみ高1.1	〃	青灰焼堅緻	完形	重焼Ⅰ類
29	坏B蓋小	K-3a	□11.5, 高2.9 つまみ径2.6,つまみ高0.9	〃	〃	5/6	〃
30	〃	J-2b	□11.5, 高2.6 つまみ径2.5,つまみ高1.1	〃	暗灰色焼堅緻	2/3	〃
31	〃	〃	□12.2, 高2.6 つまみ径2.2,つまみ高0.8	〃	灰色焼堅緻	〃	〃
32	〃	K-1d	□12.55, 高2.85 つまみ径2.2,つまみ高1.25	〃	暗灰焼堅緻	3/5	〃
33	〃	K-3a･c	□12.2, 高2.1 つまみ径2.4,つまみ高0.8	〃	灰色焼堅緻	2/3	〃
34	〃	K-1c	□12.6, 高2.4 つまみ径3.1,つまみ高0.9	〃	〃	略完	〃
35	〃	K-2a	□11.2, 高1.9 つまみ径2.6,つまみ高0.7	〃	青灰焼堅緻	4/5	〃
36	〃	K-1	□12.6, 高2.45 つまみ径2.5,つまみ高0.85	砂多目	灰色焼堅緻	略完	〃
37	〃	K-3c	□12.3, 高2.3 つまみ径2.1,つまみ高1.3	普通	暗灰焼堅緻	1/4	〃
38	〃	J-2d,K-2a	□12.1	〃	灰色焼堅緻	1/3	〃
39	〃	K-3a	□12.2	砂多目	青灰焼堅緻	〃	〃
40	〃	K-2c	□12.2, 高2.2 つまみ径1.8,つまみ高0.65	普通	暗灰焼堅緻	2/5	〃
41	杯B身大	K-2a	□16.3, 高8.0 台径12.2, 台高0.4	〃	赤灰焼良	1/5	爪痕a？
42	〃	L-2a	□16.4, 高6.6 台径11.1, 台高0.7	〃	灰白焼半生	4/5	外底ヘラ記号「×」
43	〃	J-2b K-2a･1c	□16.2, 高6.2 台径12.1, 台高0.45	〃	青灰焼堅緻	1/3	
44	〃	K-2･2a	□17.1, 高6.5 台径13.4, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/4	
45	〃	K-2c	□15.7, 高5.9 台径11.7, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/3	爪痕a1
46	〃	E-1c,J-2b	□17.4, 高6.0 台径12.8, 台高0.8	砂多目	灰色焼堅緻	1/2	外底ヘラ記号「×」
47	杯B身中	K-2b	□12.6, 高4.1 台径9.1, 台高0.7	普通	青灰焼良好	1/4	爪痕e
48	〃	K-2a	□12.0, 高3.8 台径9.0, 台高0.5	〃	〃	1/6	爪痕b？
49	〃	〃	□12.4, 高3.4 台径8.8, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/5	
50	〃	〃	□12.2, 高3.35 台径8.5, 台高0.5	〃	暗青灰焼堅緻	1/2	外底ヘラ記号「Ⅰ」
51	〃	K-2･2a K-1c･2c	□13.2, 高4.2 台径9.6, 台高0.35	〃	灰色焼堅緻	3/4	
52	杯B身中	L-3a	□12.9, 高4.3 台径9.8, 台高0.5	普通	青灰焼堅緻	1/7	
53	〃	K-2a	□13.3, 高4.0 台径9.7, 台高0.6	良	暗灰焼堅緻	1/5	
54	〃	J-2b	□12.7, 高4.4 台径10.2, 台高0.55	普通	灰色焼堅緻	〃	
55	〃	K-3a	□13.4, 高4.4 台径9.0, 台高0.4	〃	青灰白焼良	1/6	
56	〃	J-2d	□12.3, 高4.45 台径9.45, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	1/3	外底ヘラ記号「Ⅰ」
57	〃	K-1c	□14.0, 高3.9 台径10.0, 台高0.4	〃	〃	1/5	
58	〃	K-4c,N-2a	□13.9, 高3.4 台径9.6, 台高0.4	良	暗灰焼堅緻	1/7	
59	杯B身小	K-2d	□10.4, 高4.75 台径7.4, 台高0.6	普通	灰色焼堅緻	3/5	重焼Ⅲ類
60	〃	K-2d･3c	台径7.6, 台高0.5	〃	灰白焼半生	1/2	
61	〃	K-2b	□11.2, 高4.4 台径8.4, 台高0.6	〃	青灰白焼良	1/3	
62	〃	K-2a	□11.4, 高4.5 台径8.4, 台高0.5	〃	暗灰焼良好	2/3	外底ヘラ記号「×」
63	〃	K-2c	□11.6, 高4.45 台径8.7, 台高0.65	〃	青灰焼堅緻	1/5	
64	〃	J-2b,K-2a	□11.2, 高4.2 台径8.6, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	1/3	
65	坏A	K-1c	□15.0, 高3.8	砂多目	青灰白焼良	2/3	
66	〃	〃	□13.8, 高3.5	普通	濃肌酸化焼	1/4	
67	〃	〃	□14.1, 高3.0	〃	暗青灰焼堅緻	略完	外底褒転用置台付着
68	〃	J-2b	□14.5, 高3.1	〃	〃	1/2	
69	〃	K-1c	□14.0, 高3.25	砂多目	青灰焼堅緻	1/3	
70	〃	K-2a	□13.2, 高2.7	普通	青灰白焼良	4/5	
71	〃	K-1	□12.8, 高2.75	〃	青灰白焼良好	1/3	
72	〃	K-2b･2c	□12.4, 高3.0	〃	青灰焼良好	1/2	
73	〃	J-3b･3c K-2a	□12.8, 高3.1	〃	〃	2/3	
74	〃	J-2b	□13.0, 高3.45	〃	青灰白焼堅緻	1/4	
75	〃	K-2a	□12.7, 高3.35	砂多目	暗灰焼堅緻	4/5	
76	〃	K-1c	□12.6, 高3.3	良	青灰白焼良	略完	
77	〃	〃	□13.1, 高3.5	砂多目	〃	完形	
78	〃	〃	□12.4, 高3.5	砂多	青灰焼堅緻	略完	
79	〃	K-2a	□12.8, 高3.6	普通	青灰焼良好	3/4	
80	〃	K-1c	□12.0, 高3.8	〃	〃	1/3	
81	〃	K-3a･2c	□12.3, 高3.55	砂多目	〃	1/2	
82	〃	K-2b･2c	□12.8, 高3.6	普通	青灰焼堅緻	2/5	
83	〃	K-1c	□12.3, 高3.0	〃	青灰焼良	3/4	
84	〃	J-1 K-2a･1c	□12.5, 高3.0	砂多目	青灰白焼良好	4/5	
85	〃	R-1c	□12.3, 高3.3	普通	灰白焼生	1/3	
86	〃	K-2a	□13.6, 高3.4	〃	暗青灰焼堅緻	2/5	外底ヘラ記号「×」
87	〃	K-1c	□12.8, 高3.4	良	灰白焼堅緻	1/4	
88	〃	J-4	□12.5, 高3.45	砂多目	青灰白焼良好	2/5	
89	〃	K-2b	□12.5, 高3.8	普通	青灰焼良好	1/2	
90	〃	J-2b	□12.4, 高3.3	〃	青灰焼堅緻	完形	
91	〃	K-2c	□13.0, 高3.2	〃	青灰焼良好	3/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
92	杯 A	K-4a·4b·4c L-3a	□11.8, 高3.0	普通	灰色焼良好	1/3	
93	〃	K-1c	□12.8, 高3.7	〃	〃	〃	
94	〃	K-2b·1d	□13.2, 高3.7	〃	赤褐酸化焼	1/5	
95	盤 A 中	J-2b	□18.4, 高1.4	〃	灰色焼堅緻	1/4	
96	〃	J-2d	—	〃	青灰焼堅緻	1/5	
97	〃	Q-2b	□13.4, 高2.0	〃	暗青灰焼堅緻	3/4	
98	〃	J-2d	□14.8, 高2.0	〃	青灰白焼良好	1/2	
99	〃	J-4,K-2a	□15.3, 高1.7	砂多	青灰焼堅緻	1/3	
100	〃	K-1	□16.4, 高2.0	普通	青灰白焼良	1/4	
101	〃	K-2b	□16.8, 高1.95	〃	青灰白焼良好	1/2	
102	〃	J-3b	□15.6, 高2.1	〃	〃	1/9	
103	〃	J-2b	□16.3, 高1.75	〃	青灰焼堅緻	1/3	
104	〃	K-1c	□15.6, 高1.75	〃	〃	1/4	
105	〃	K-3a	□15.9, 高2.25	〃	青灰白焼良好	〃	
106	〃	J-2d K-2c·1d	□16.6, 高2.25	〃	〃	2/3	外底ヘラ記号「×」
107	〃	K-3a	□16.4, 高2.1	〃	青灰焼良好	1/7	
108	〃	J-2b	□16.5, 高1.9	〃	青灰白焼良好	1/5	
109	〃	L-2b	□16.1, 高1.75	〃	青灰焼堅緻	1/6	
110	〃	K-3a	□16.2, 高2.1	〃	灰褐焼良好	〃	
111	〃	J-2b	□15.5, 高1.95	〃	青灰焼良好	1/3	
112	〃	K-1c	□16.5, 高2.1	砂多目	青灰焼堅緻	1/5	
113	〃	J-2b	□16.2, 高2.2	普通	青灰焼良	1/3	外底ヘラ記号「I」
114	〃	〃	□15.5, 高1.9	砂多目	青灰白焼良好	1/4	
115	〃	K-2a	□15.5, 高1.95	普通	〃	1/2	底ヘラ記号「I」?
116	〃	K-2b	□16.8, 高1.85	〃	青灰焼良好	1/4	
117	〃	L-3a	□15.8, 高1.95	〃	暗青灰焼良好	1/6	
118	〃	K-2b	□16.2, 高2.05	〃	青灰焼良好	1/8	
119	〃	J-4	□16.3, 高2.0	〃	〃	2/9	
120	〃	J-2b	□15.8, 高1.75	〃	青灰白焼良好	1/4	
121	〃	〃	□16.8, 高2.0	〃	〃	2/5	
122	〃	L-2a	□15.8, 高2.0	砂多目	青灰焼良好	1/6	
123	〃	J-2b,K-2a	□15.4, 高2.05	普通	青灰焼堅緻	2/3	
124	〃	K-3a·c	□16.6, 高2.0	〃	青灰白焼良好	1/4	外底ヘラ記号「I」
125	〃	M-2b	□16.1, 高1.75	〃	暗灰焼良好	2/9	
126	〃	J-2b	□15.4, 高1.55	〃	青灰白焼良	1/3	
127	盤 A 小	J-3b	□15.0, 高2.75	砂多目	青灰白焼半生	1/5	
128	〃	K-3a·3c·c	□15.0, 高2.4	普通	青灰白焼良	1/3	
129	盤 A 大	M-2b	□23.6, 高2.6	〃	暗青灰焼堅緻	〃	
130	〃	K-2a	□22.8, 高2.85	〃	青灰焼堅緻	1/6	
131	盤 B	K-2b	□18.1, 高3.1 台14.7, 台高0.4	砂多目	暗青灰焼堅緻	1/4	爪痕a
132	〃	K-2c	□19.4, 高2.9 台16.3, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/5	
133	〃	L-3a	□20.5, 高2.75 台17.7, 台高0.45	普通	暗灰焼堅緻	1/8	
134	〃	J-2b	□22.7, 高3.65 台19.7, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	2/5	
135	盤 B	K-2c·3a	□20.9, 高4.0 台16.6, 台高0.7	普通	暗青灰焼堅緻	2/9	
136	〃	K-2b	□23.3, 高4.0 台19.9, 台高0.7	砂多目	青灰白焼良好	1/3	
137	〃	K-2a	□23.2, 高4.1 台19.3, 台高0.6	普通	暗灰褐焼良好	1/8	
138	〃	K-4b	□20.6, 高3.75 台16.2, 台高0.8	〃	青灰焼堅緻	2/9	
139	〃	K-2c	□22.3, 高3.15 台18.6, 台高0.55	砂多	〃	1/8	
140	〃	J-2b	□22.1, 高3.35 台17.2, 台高0.55	砂多目	橙褐酸化焼	2/5	外底ヘラ記号「×」
141	〃	J-3b·2d K-2c	□23.2, 高3.85 台18.7, 台高0.5	〃	濃肌酸化焼	1/5	
142	〃	K-3b	□21.2, 高4.3 台17.2, 台高0.8	〃	灰白焼生	1/7	
143	〃	K-2b	□21.2, 高4.6 台16.4, 台高0.9	〃	青灰焼良好	1/6	
144	〃	L-2a	□20.3, 高3.85 台15.4, 台高0.8	普通	青灰焼堅緻	1/5	
145	〃	K-3a·c	□21.7, 高3.7 台18.1, 台高0.5	良	〃	1/6	
146	〃	L-2a	□22.6, 高3.8 台18.8, 台高0.5	砂多目	〃	4/9	
147	〃	K-2a·c	□23.0, 高4.0 台17.9, 台高0.8	普通	青灰焼良好	1/5	
148	〃	K-2c	□24.9, 高3.9 台20.8, 台高0.8	〃	〃	〃	
149	〃	K-2b	□21.8, 高3.55 台17.6, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	〃	
150	赤彩土師埦	〃	□16.8	砂多目	灰色焼堅緻	1/8	還元焼成品
151	〃	K-2	底8.8	〃	〃	1/6	〃
152	〃	K-2a	□12.5, 高2.2 底8.0	〃	青灰焼堅緻	1/5	〃
153	高盤	K-2b·3b	□23.2, 坏高3.5	〃	青灰焼良好	坏 1/10	
154	〃	K-2c	□20.9, 坏高2.8	〃	〃	坏 1/8	正位重焼
155	〃	K-3b	□20.8, 坏高3.5	普通	青灰白焼良好	坏 1/15	合わせ口重焼
156	〃	K-1c	□20.4, 坏高3.0	砂多	青灰焼堅緻	坏 1/10	
157	〃	K-2c	□19.5, 坏高2.5	普通	暗灰焼堅緻	坏 1/15	
158	〃	〃	脚12.5, 脚基5.7 脚高9.8	〃	青灰焼堅緻	脚略完	外シボリ痕
159	〃	K-2d,L-2c	脚11.0, 脚基5.2 脚高9.5	砂多目	青灰白焼良好	脚 4/5	内シボリ痕
160	〃	J-2b	脚基5.4	〃	灰白焼良	脚 4/5	脚基内に刻み痕
161	〃	J-4b	脚17.8	良	灰白焼堅緻	脚 1/10	
162	小型鉢	J-3	□10.9	粗砂多	青灰焼堅緻	1/8	土師器胎土
163	小型鉢?	J-2b	□6.0, 高3.6 底6.5	〃	青灰白焼良	1/4	〃
164	小型壺	K-2c	□9.6, 頸9.2 胴大12.6	普通	灰色焼堅緻	1/8	有蓋
165	甕 D ?	K-2c·3a	□7.4, 頸5.1 頸高4.1	〃	暗青灰焼堅緻	口頸片	
166	小型壺?	K-3b	底7.1	〃	青灰焼堅緻	底片	
167	鉢 F	L-1c	□17.2, 高13.7 底13.1	砂多目	灰色焼堅緻	3/5	
168	〃	S-1c	□19.9	普通	暗灰焼堅緻	□縁片	
169	〃	L-3b	底12.5	〃	青灰焼良好	底片	外底面円孔刺突
170	〃	J-2d	底11.2	〃	灰色焼堅緻	〃	外底面刻み刺突3周

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
171	無頸壺(大舎?)	K-2a·1c J-2b	口20.0, 最大径21.8	良	青灰焼堅緻	1/15	
172	瓶A	P-2b	底8.6	普通	灰色焼堅緻	口頸片	
173	〃	K-3a	底7.9	〃	〃	1/8	
174	〃	R-1d,S-1c	底8.7, 頸5.3 頸高9.3, 胴大16.2	〃	〃	1/2	口頸内外シボリ痕 容量推1.249ℓ
175	〃	K-2a	口12.0, 高23.5 頸5.6, 頸高13.4 胴大18.2, 胴高10.1 底11.0	〃	青灰焼堅緻	略完	頸内外面シボリ痕 頸基部内面刻み痕 容量1.558ℓ
176	〃	J-2d K-2b·2c	口10.6 頸4.7, 頸高10.8	〃	灰色焼堅緻	1/5	
177	〃	J-2b	口10.4 頸5.4, 頸高11.2	〃	暗灰焼堅緻	1/3	
178	〃	L-2a·3a L-1d	胴大16.8 台8.6, 台高1.0	砂多	灰色焼堅緻	1/5	
179	〃	K-2b·3b L-1c	頸4.4, 胴大17.5	普通	〃	1/7	胴上内面シボリ痕
180	〃	K-3a·2c	頸3.8, 胴大17.1	〃	青灰焼堅緻	1/10	
181	〃	J-2d	頸5.1 胴大16.9, 胴高10.1 台9.3, 台高1.0	〃	暗灰焼堅緻	2/3	
182	〃	K-2a·3a·3c L-2a	胴大18.4	〃	灰色焼堅緻	1/8	
183	〃	K-2	台10.2, 台高1.3	〃	灰色焼良	台片	
184	〃	L-2c	台9.5, 台高1.1	〃	灰色焼堅緻	〃	
185	〃	K-2a	台8.9, 台高1.4	〃	〃	〃	台に粘土塊置台3ヶ所溶着
186	瓶D(三耳瓶)	J-2b K-2a·2b·3b K-1d·2d·4d L-3a	胴大17.1 底9.8 耳厚1.4～1.9	〃	青灰焼良好	1/2	
187	〃	K-2d·3a	底10.1, 耳厚15.～2.0	〃	青灰焼堅緻	1/6	
188	短頸壺蓋	J-2d	口11.7, 高4.2 つまみ3.7, つまみ高1.2	〃	青灰焼良好	1/3	
189	〃	L-2b	口14.5	〃	灰色焼堅緻	2/3	
190	〃	K-2a	口11.5	〃	〃	1/4	
191	〃	J-2d	口11.6	〃	青灰焼堅緻	1/5	
192	壺A·B	K-2d	口10.2, 胴大19.9 頸11.3, 頸高2.45	〃	灰色焼堅緻	1/10	
193	〃	K-3·3a·3d K-c·3c·2d	口10.8, 高19.2 頸11.3, 頸高1.1 胴大21.4, 胴高16.9 台8.8, 台高1.2	〃	赤褐焼酸化	2/3	容量3.717ℓ
194	〃	J-3b	台9.9, 台高1.4	〃	暗青灰焼堅緻	底1/3	
195	壺A·B(四耳壺)	K-3b·3d L-4a·3q	口14.4, 胴大31.3 頸14.2, 頸高3.1	〃	青灰焼堅緻	1/7	
196	〃	J-4,K-3b K-2d·3d L-3a	胴大28.6 台14.6, 台高1.7	〃	青灰焼良好	1/10	
197	短頸壺	L-2a·2b L-2d	口7.2, 高14.7 頸8.5, 頸高1.6 胴大17.4, 胴高13.1 底10.2	良	淡灰褐焼酸化	1/3	有蓋 容量1.724ℓ
198	〃	K-1d	口10.3 頸10.1, 頸高1.8	普通	暗灰焼堅緻	1/12	
199	壺F	K-2b	口13.9 頸12.2, 頸高3.6	〃	灰色焼堅緻	1/10	
200	〃	K-2a	口17.1 頸15.5, 口頸長3.6	〃	青灰焼堅緻	1/20	
201	〃	J-2d	口16.9 頸15.2, 頸高3.3	〃	〃	1/15	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
202	壺F	K-2a	口15.5 頸13.6, 頸高2.2	砂多	青灰焼堅緻	1/12	
203	〃	K-1d	口16.3 頸13.6, 頸高2.6	普通	灰色焼堅緻	1/10	
204	〃	J-2d	口17.5 頸16.0, 頸高2.3	〃	青灰焼堅緻	1/15	
205	小甕?	J-2b	口18.1 頸15.7, 頸高2.5	〃	〃	1/10	
206	壺F	K-1d	口19.5 頸17.2, 頸高3.0	〃	〃	1/15	
207	小甕?	K-2a	口19.7 頸17.4, 頸高2.6	〃	暗青灰焼堅緻	1/8	
208	小甕	K-3a	口16.4, 胴大25.6 頸14.9, 頸高2.4	〃	青灰焼堅緻	1/12	
209	小甕?	J-3b	口16.4 頸14.2, 頸高2.2	砂多目	〃	1/20以下	
210	〃	K-2a	口18.3 頸16.0, 頸高1.9	〃	〃	〃	
211	横瓶A	K-1d·2b	口10.8, 高26.6 頸高3.3, 胴厚23.5	普通	〃	1/5	両面閉塞? 叩き閉塞側に坏A置台付着 外Ha叩き、内Dc当て
212	〃	K-2a K-1c·1d	口12.9, 高23.3 頸10.2, 頸高3.0 胴厚20.8	〃	〃	2/7	両面閉塞 外Ha叩き、内Da当て
213	横瓶B	J-2b K-2a·3a K-2c·3c L-2a·3a	口11.7, 高19.8 頸8.6, 頸高3.0 胴厚16.8 胴幅推28.3	〃	灰色焼堅緻	1/8	両面閉塞 外Ha叩き、内Dc当て 容量4.136ℓ
214	釜	J-2b	口17.0	粗砂多	青灰焼堅緻	口頸片	土師器還元焼成品
215	〃	J-1	口19.6, 頸17.1	〃	〃	〃	〃
216	〃	K-3a	口18.6, 頸15.6	〃	〃	〃	〃
217	小釜	J-2b,K-3a	底7.9	〃	〃	底片	〃
218	鍋	K-3d,L-4	口36.2	〃	〃	口頸片	〃
219	〃	J-2b	口37.0	〃	灰色焼良	1/20	〃
220	〃	K-1c·2a	口36.8	〃	灰色焼堅緻	1/8	〃
221	〃	L-2a	口33.6	〃	〃	1/10	〃
222	甑	J-2,K-2c L-2c	底21.7	〃	〃	1/20以下	〃
223	小甕	J-2b	口16.7 頸15.0, 頸高2.6	普通	〃	1/15	
224	〃	J-2b·2d	口16.5, 高28.6 頸14.4, 頸高3.0 胴大26.4, 胴高25.6	〃	青灰焼堅緻	9/10	外Ha叩き、内Da当て 底面3ヶ所に置台痕 容量8.51ℓ
225	〃	K-2a·3b·4b K-2d·3c·3d	口15.4, 胴大28.0 頸14.0, 頸高2.8	〃	〃	1/8	外Hc叩き、内Da当て 頸部叩き、胴上叩き
226	〃	J-2d L-1c·2a L-2c·2b K-3b	口17.4, 胴大26.6 頸15.8, 頸高3.6	〃	〃	1/10	外Ha叩き、内Dc当て 胴中位縦削り
227	〃	K-2a·3a K-2c·2d	口16.3, 高26.8 頸15.4, 頸高3.4 胴大27.8, 胴高23.4	〃	〃	1/2	外Ha叩き、内Dc当て 底面3ヶ所に転用置台痕 容量8.603ℓ
228	〃	K-2c	口22.1, 高27.0 頸20.4, 頸高2.7 胴大29.0, 胴高24.3	〃	灰色焼堅緻	1/3	外Hb叩き、内Dc当て 容量9.67ℓ
229	〃	K-2a	口18.2 頸17.0, 頸高3.2	〃	青灰焼堅緻	1/10	
230	〃	K-3a·4a K-3c·3d	口16.3, 胴大27.2 頸15.2, 頸高2.6	〃	暗青灰焼堅緻	1/9	
231	〃	K-3a K-3c·4c	口15.8, 胴大25.3 頸14.8, 頸高2.5	〃	青灰焼堅緻	1/8	外Ha叩き、内Da当て

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
232	小甕	K-2a·2c K-2d	口16.5, 高27.1 頸15.9, 頸高2.3 胴大26.3, 胴高24.8	普通	青灰焼堅緻	4/5	底面3ヶ所の置台痕 外Ha叩き、内Da当て 容量7.815ℓ
233	〃	L-2a·3a L-1c·2c	口15.8, 胴大31.0 頸17.0, 頸高3.0	〃	青灰焼良好	1/10	
234	中甕 B	K-1	口26.7 頸23.9, 頸高4.1	〃	濃肌焼酸化生	口頸片	外He叩き、内Da当て後ナデ
235	〃	J-1·2b K-2a·c	口23.8 頸18.6, 頸高4.3	良	灰白焼堅緻	1/5	外変形H叩き、内Da当て
236	〃	K-2c·3c ピット10	口22.9 頸19.6, 頸高4.3	普通	青灰焼堅緻	口頸片	
237	中甕	K-3a K-2c·3c	──	砂多目	〃	1/8	外Ha叩き、内底Db当て後胴下位Dc当て
238	中甕 F	J-2d K-2a·3c	口14.0, 胴大37.6 頸14.4, 頸高3.2	普通	暗青灰焼堅緻	1/3	外Ha叩き、内Dc当て有蓋？

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
239	大甕 A	J-2b K-2a	口50.2	普通	青灰焼堅緻	口頸片	外波状文＋沈線文＋波状文
240	〃	K-2c	口52.9 頸41.6, 頸高9.2	〃	濃肌焼酸化生	〃	外叩き後波状文
241	〃	J-1·2b K-2a	口44.3, 胴大78.3 頸34.5, 頸高10.0	〃	肌色焼酸化生	1/10	外口頸叩き後ナデ、胴He叩き、内頸当て、胴Da当て
242	〃	J-2b	口45.4	〃	濃肌焼酸化生	口頸片	外叩き後波状文
243	大甕	K-1c	──	砂多	灰褐焼酸化	底1/6	外胴Ha叩き後胴下位Hc叩き、後底Ha叩き内Dc当て後ナデ
244	〃	K-2a～c K-2b·2c	──	普通	肌色焼酸化生	1/16	外He叩き、内胴下位Da当て後底Dc当て
245	焼台B類？	L-2c	口14.0, 高3.6	砂多目	灰色焼堅緻	1/9	
246	〃	L-2a	口14.0, 高3.6	〃	〃	1/8	
247	〃	K-3b·2d	口13.6, 高3.1	普通	〃	1/5	

E区　包含層出土須恵器・土錘・陶錘観察表(第69図)

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏 A	下層	口12.4, 高3.0	普通	肌色焼酸化	1/3	
2	〃	〃	口12.3, 高2.7	〃	暗灰褐焼良	1/8	
3	Ⅲ B	〃	口13.5, 高3.3 台7.4, 台高0.6	砂多	青灰焼良好	2/3	外底ヘラ記号「×」
4	〃	中層	口13.0, 高2.95 台5.7, 台高0.35	普通	暗灰焼堅緻	1/3	
5	〃	中層·下層	口13.4, 高2.9 台6.9, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	2/5	外底ヘラ記号「×」 底ナデ消し
6	〃	下層	口13.0, 高3.6 台6.9, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	1/8	
7	埦 A	中層	口12.9, 高3.55 底6.8	〃	灰白焼良	1/4	
8	〃	？	底5.9	〃	〃	1/3	
9	〃	中層	底5.8	砂少	青灰焼堅緻	1/2	
10	埦 B	〃	口14.7, 高6.0 台6.8, 台高0.7	普通	暗灰焼堅緻	1/4	底ナデ消し
11	〃	〃	口14.2, 高4.8 台6.7, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	1/5	〃
12	〃	〃	口14.0, 高4.8 台6.1, 台高0.4	〃	灰色焼堅緻	1/3	
13	〃	〃	台6.7, 台高0.5	〃	灰色焼良好	1/2	
14	〃	下層	台6.6, 台高0.4	〃	青灰白焼良	1/3	
15	〃	？	台6.8, 台高0.4	〃	赤褐焼酸化	1/2	爪痕a 内底ヘラ描き文字？
16	〃	？	台6.1, 台高0.35	〃	暗褐焼酸化還元	1/8	高台にスノコ痕 底ナデ消し 内底ヘラ描き文字

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	重量(g)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
17	陶錘	下層	長4.2, 巾2.4, 孔0.8	25.51 復28.4	普通	灰色焼堅緻	9/10	
18	〃	？	長5.3, 巾2.8, 孔1.05	36.20	〃	〃	完形	
19	土錘	上層	長6.5, 巾4.0, 孔1.4	70.21 復93.6	〃	肌色焼不良	3/4	
20	〃	下層	巾4.1, 孔1.1	72.54 復109.1	〃	濃肌焼良	2/3	

写真１　二ツ梨一貫山窯跡周辺の地形遠景（西北より）

写真２　D調査区全景（正面奥がD区、東北より）

D区全景（左が3号窯灰原、右が4号窯灰原）

4号窯灰原断面

4号窯灰原出土須恵器大甕

3号窯灰原断面

3号窯灰原下層須恵器出土全景

3号窯灰原須恵器出土状況

3号窯灰原出土須恵器盤重焼

写真3　D区の調査

3号窯古手食膳具（V2期中心）

3号窯新手食膳具（Ⅵ1・Ⅵ2期）

3号窯貯蔵具専用焼台（手前中央A類、右側B類、左側C類、奥側D類）

写真4　D区3号窯出土須恵器1

環状突帯付特大坏蓋（左はⅡa類重焼痕、中はⅠ類重焼痕跡、右は特殊つまみ）

坏B蓋大Aa類（Ⅱa類重焼）
（灰色焼、坏B身溶着）

坏B蓋大Aa類（青灰焼）

坏B蓋大B1b類（白色ゴマシオ）

坏B蓋大B1a類（Ⅱa類重焼）
（白焼けんち、降灰は濃緑）

坏B蓋大B1a類（Ⅱa類重焼）
（白焼けんち、降灰は濃緑）

坏B蓋大B2類（灰色系ゴマシオ黒釉）

坏B蓋大B2類（灰色系黒釉）

坏B蓋大B3b類（暗灰色系）

坏B蓋大B3a類（青灰白色系）

坏B蓋中・小（Ⅱa重焼、同類型で同じ焼き色をもつ）

写真5　D区3号窯出土須恵器2

坏B身特大B1a類（白焼けんち）

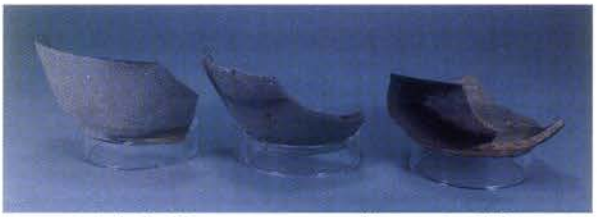
坏B身大A類（青灰焼）

坏B身大B1b類（白焼けんち）

坏B身大B2c類（灰色系）

坏B身大C2b類（青灰白系）

坏B身大C2d類（暗灰色系）



坏B身中（左からB1、C、B2c類、CはⅠ重焼）

坏B身小（A・B類）

坏E身（A1左とA2右.いずれも白焼けんち）

坏A７枚重ねE類（305～310）

坏A古手一群（Ⅴ2期中心）

坏A新手一群（Ⅵ1・Ⅵ2期）

写真６　D区３号窯出土須恵器３

盤A古手一群（Ⅴ2期中心、白焼、青灰けんち）

盤A新手一群（Ⅵ1・Ⅵ2期、暗灰焼）

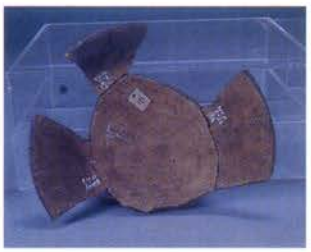
盤A溶着資料（B1a類、B1b類、いずれも灰色焼で同色調、同時窯詰めのもの）

盤A溶着資料のはがれた面
（土器間にワラをはさんでいる）

盤B（青灰焼、白焼けんちが主、灰白生焼は後出？）

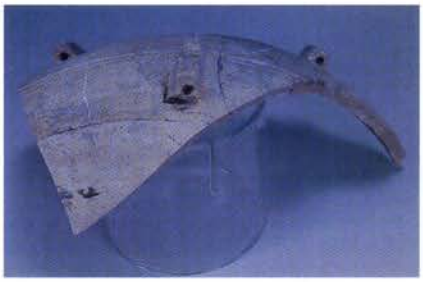
写真7　D区3号窯出土須恵器4

椀・Ⅲ類瓷器系食膳具
（左3列はⅢB、右奥2列は椀B、右前は椀A）



ⅢBの重ね焼き痕跡
（上段は合わせ口法、下段は正位重焼）

左から鉢B（Ⅵ期）、鉢B（Ⅴ期）、壺Eの無台



壺A（四耳壺タイプ、上下2段）

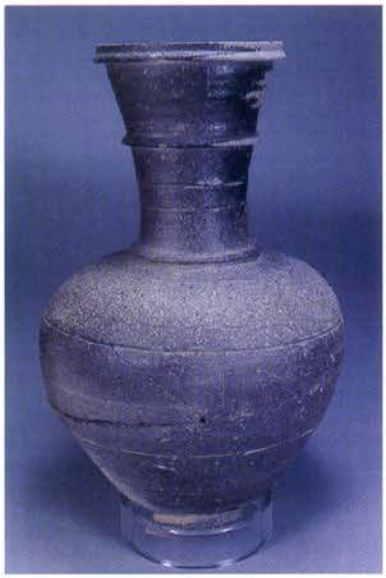
壺A（Ⅴ2期）

壺F（Ⅵ1期）

還元焔焼成された土師器煮炊具
（釜、小釜、鍋、淡青灰色系の焼き色）

須恵器と異なり、土師器と同様の
混和材を含む胎土

写真8　D区3号窯出土須恵器5



瓶B（口頸部２段突帯付、暗灰焼）

瓶B（白焼けんち、濃緑降灰）

瓶B（青灰焼）

瓶D中（白焼けんち、濃緑降灰釉）

瓶D大（３耳タイプV$_2$～Ⅵ1期）

陽刻文様をもつ粘土板（白焼けんち）

写真９　D区３号窯出土須恵器６

貯蔵具専用焼台A類
（口縁端に溶着痕あり、その外側に降灰）

貯蔵具専用焼台Ca類
（外面口縁まで降灰し、端部で溶着剥離する）

貯蔵具専用焼台B類
（口縁端が溶着のためところどころ剥離する）

貯蔵具専用焼台Cb類
（高台内側と接する口縁下1～2cmの範囲が降灰しない）

貯蔵具専用焼台D類
（口縁端に溶着剥離痕と降灰あり）

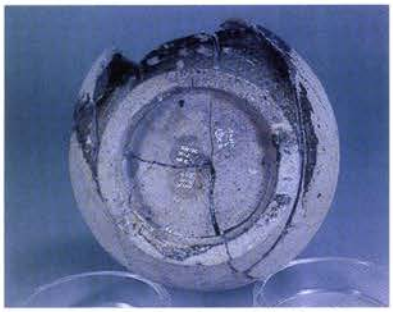
写真10　D区３号窯出土須恵器７

B類焼台の窯床設置状態と固定方法
（焼台角度固定のため、土器転用台を伏せ、固定土貼付）

C類焼台の窯床設置状態と固定土
（焼台固定土は窯壁小塊混在の砂含む土）

須恵器片を6枚重ねて固定台とした

砲弾型底部小甕に付いたD類焼台痕



瓶B高台内側に付いたC類焼台痕

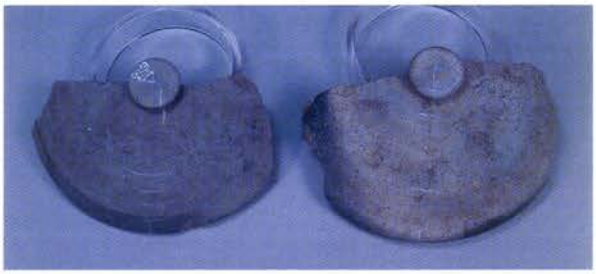
壺A高台内側に付いた焼台痕

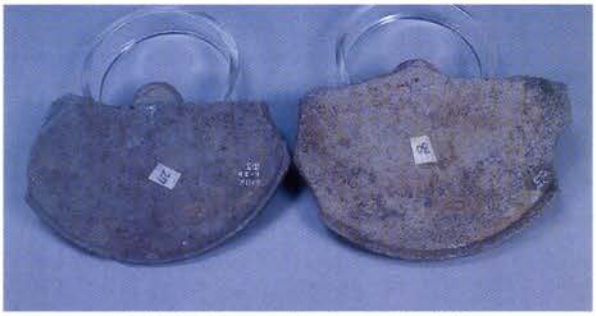
瓶Dの平底に付いた焼台痕
（大半はB類焼台の痕跡）

丸底中甕の窯床設置状態
（土器転用台を伏せ、固定土貼付）

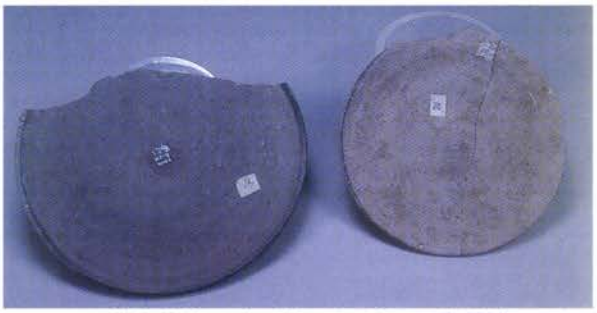
写真11　D区３号窯出土須恵器８

食膳具（左が坏B、右前が坏A、奥左が盤A、奥中が盤B、奥右が高盤）





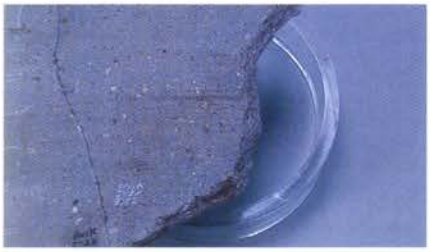
坏B蓋中（左がⅡb類、右がⅡa類重焼）



坏B蓋中（左）、小（右）、いずれもⅠ類重焼

坏B身底面ヘラ記号「×」

還元焼成された赤彩土師器椀（赤色塗料が還元して黒色化）



還元焼成された土師器煮炊具（赤彩土師器と異なり胎土中に多くの混和材含む）

写真12　D区４号窯出土須恵器１

壺A（四耳壺、上からの穿孔）

瓶A（左は平底で頸部内面痕は風船技法で円盤痕跡なし）

瓶D（三耳短胴タイプ、底面糸切り）

大甕胴上部以上（酸化生焼け一括廃棄品）

小甕の底面に転用置台の痕跡

丸底呈す小甕（叩きは底叩き出しのみ）

写真13　D区４号窯出土須恵器２

第４章　２次調査区（Ｆ区）

第１節　Ｆ区の地形と遺構分布

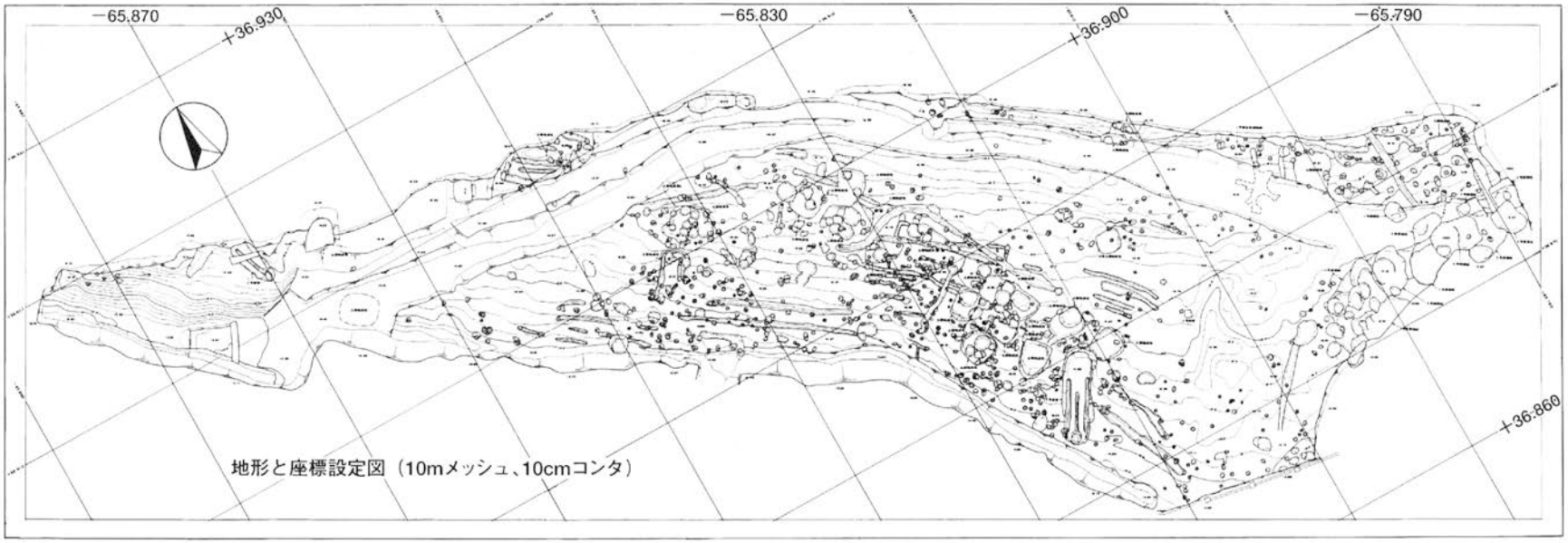
Ｆ区は、通称一貫山の南側斜面にあたる区域で、県道高塚・粟津線に面する。丘陵中央部と当南側斜面の縁辺部分が削平されているため、調査区は東西に細長い調査区となっている。調査面積は1,957㎡で、山側と谷側を削平された残丘部分である。また、さらに調査区の山側の崖ラインに沿って東西に長く幅４ｍの撹乱溝が走っており、山側から伸びる須恵器窯灰原を寸断している。調査区には製陶・製鉄に関連する遺構が重なるように存在しており、当区のみの遺物出土量で、パンケース800箱近くを数える。完形に復元できる資料や特殊遺物が多く、古代土器生産関連遺物としては一級の資料と言える。

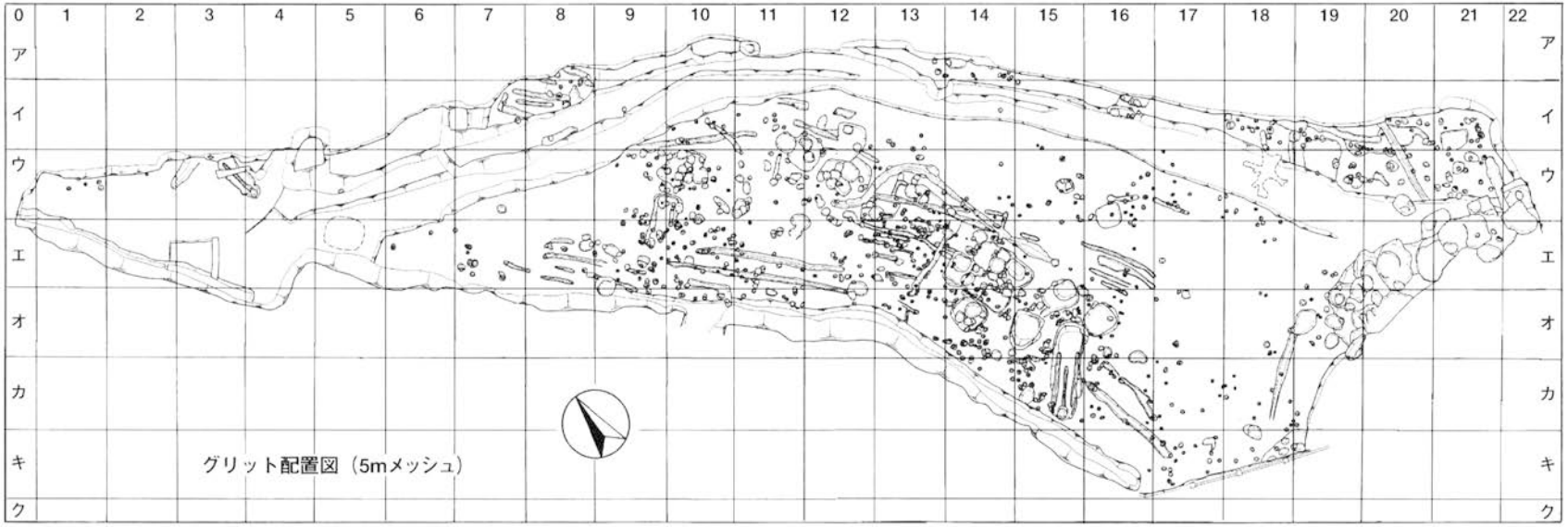
丘陵地形は、頂部標高32ｍから平均傾斜18度で傾斜する単独丘陵で、南西側と南東側に尾根状に伸びてやや台形状を呈す。南西側に伸びた部分がちょうどＦ地区の西端にあたり、地形傾斜20度前後を測る１～４Gr付近が丘陵部の末端にあたる。ここから南西側へは急に傾斜を緩くし、谷部へと繋がるのだが、この地形傾斜転換点は東へ崖面に沿って伸び、前述した幅４ｍ前後の撹乱溝付近がそこにあたる。地形傾斜転換点は扇状に伸び、調査区の中央付近南西側を扇の要にして緩くすり鉢状の地形を呈す。この部分での傾斜角は急な部分で７～８度を測るが、４～５度前後に極めて緩く傾斜している。

遺構はこのような地形にあわせて分布している。まず、丘陵部傾斜地形区域では須恵器窯灰原が分布している。山側崖面で６箇所灰原の露出があり、傾斜転換点が灰原の途切れるところにあたる。ちょうどその部分に撹乱溝が走っているため、灰原は途中で途切れるが、灰原の層の厚さや灰の混在の少なさから考えて、須恵器窯本体とはだいぶ距離を置くものと考えている。また、調査区の西端では須恵器窯灰原の下に砂鉄製錬に伴う鉄滓の廃棄層とそれに付随するであろう製炭窯の灰原が検出されている。須恵器窯灰原よりも純度高い灰層であり、製鉄関連遺構のさらに上方に須恵器窯が築かれたものと予想される。また、時期が下るが古代製鉄に伴うと思われる製炭土坑が３基確認されている。主に緩斜面区域に点在している。

須恵器窯灰原が途切れる地形傾斜転換点付近から斜面下方にかけて、土師器焼成坑が分布する。斜面下方へ分布が広がる様子はなく、標高16.3～15.2ｍ程度の範囲に連なるようにして密集する。標高17ｍの山側で須恵器窯灰原と一部重複するようにして確認される土師器焼成坑もあるが、基本的にはこれ以上山側へ分布を広げる事なく、限られた高さの区域に分布する特徴をもつ。土師器焼成坑の掘削が等高線に沿うように行われていることも要因だが、帯状に分布するのは山側の須恵器窯と谷側の工房域に挟まれて、占地する区域が限られていたことに主な要因があるだろう。扇の要部分に当たる標高15ｍ以下の区域は、土師器焼成坑の存在はなく、等高線に沿って掘られる溝と無数の小規模ピットが存在している。ピットが柱筋状に並ぶことはなく、この区域での明確な建物の存在を確認していないが、柱穴状の掘り方をもつピットは確認できる。さらに、須恵器窯や土師器焼成坑と同時期の須恵器食膳具や赤彩土師器食膳具を重ねて埋納したり、土師器小釜を数個入れ子状に埋めたものも確認でき、何らかの祭祀行為が行われている。須恵器・土師器製作関連の性格をもつ遺構は確認できないが、大きな意味での工房域としてこの部分を捉えておきたい。

以上の８世紀後半前後の須恵器窯と土師器焼成坑は９～16Grを中心として調査区全域にほぼ広がる傾向をもつのに対し、９世紀後葉以降の遺構は18～22Grに偏る。第３章で述べたＥ区が同時期であり、ここから南東側へと分布を広げ、Ｅ区へ繋がるものと考えている。須恵器と土師器を混在する灰原が２カ所確認でき、その灰原が斜面下方で掘られる粘土採掘坑群の上層に堆積している。粘土採掘坑群は極めて密集して掘られ、南側の未調査区へと伸びている。粘土採掘坑内には大量に須恵器・土師器が捨てられており、方形の土坑や井戸状の掘り込みをもつ土坑もこの粘土採掘坑群の周辺に分布する。大量の焼成廃棄品に混じって使用痕をもつ須恵器・土師器が定量確認でき、工房での使用された用具類を製陶行為時の廃棄品とともに廃棄していたものと考えられる。建物の



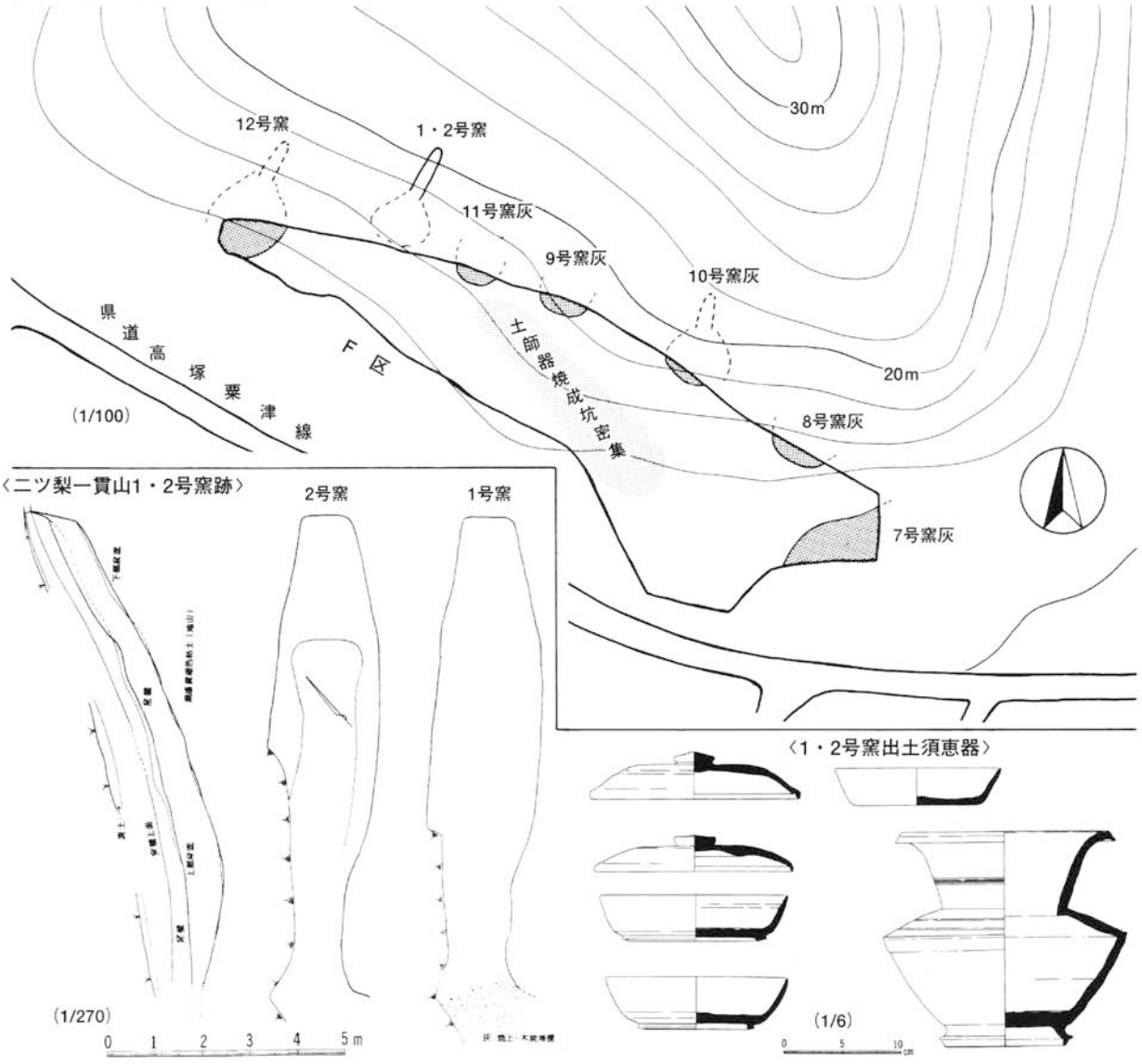


第70図　二ッ梨一貫山窯跡Ｆ区全体図（1/1,000）

存在は山側で掘立柱建物跡が１棟確認でき、その周辺で溝が数条掘られている。粘土採掘坑を谷部に、その周辺に井戸や粘土溜め用などの製陶に関連する土坑、そしてその上に工房関連の建物施設が存在する構成であったと理解する。焼土・窯壁塊や炭化灰が採掘坑・土坑の上層に堆積するが、灰層と呼べるものではなく、直接的な須恵器窯や土師器焼成坑の灰層流れ込みとは考えられない。工房使用土器も定量混在することを考えても、直接的な生産遺構からの廃棄品という考えよりも、製品選別等の２次的廃棄品の可能性が高いと考えている。須恵器と土師器が同量で混在することもそのためであろう。

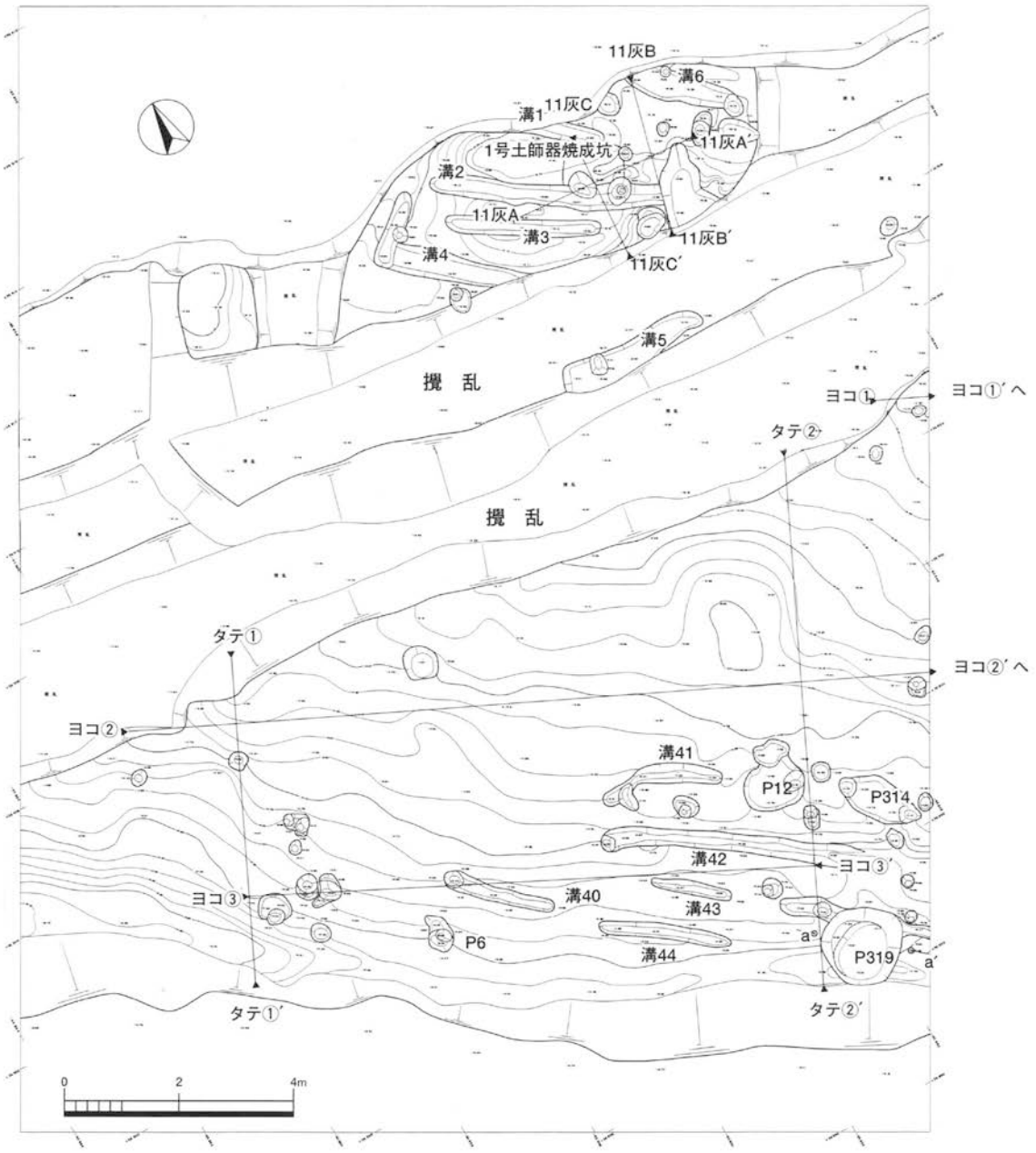
さて、Ｆ区の遺構分布について述べてきたが、当斜面には以前調査が行われた二ッ梨一貫山１・２号窯跡が存在する（２号窯は１号窯の改造窯）。８世紀前葉の須恵器窯で、位置関係を復元すると、12号窯灰原と11号窯灰原の中間ほどにあたる。窯体は等高線に直交して築かれ、標高20ｍ付近に存在するようである。丘陵頂上部は32ｍであるから、斜面中腹ないしはかなり下の方に窯が築かれたことになる。二ッ梨一貫山３・４号窯跡もほぼ同じくらいのレベルに築かれており、Ｆ区の須恵器窯灰原の状況から見ても、丘陵斜面中腹に並列するように須恵器窯が構築されていたものと考えられる。

以上、地形と遺構分布の概要を述べたが、以下では、各遺構の説明と出土遺物について述べる。前述したように、時期と遺構によってまとまりをもつため、便宜上、①８世紀～９世紀初頭の須恵器・土師器生産に関連する遺構と遺物、②９世紀後葉～10世紀前半の須恵器・土師器生産に伴う工房関連の遺構・遺物、③砂鉄製錬・精錬鍛冶に伴う製鉄関連遺構・遺物に分けて述べることとする。

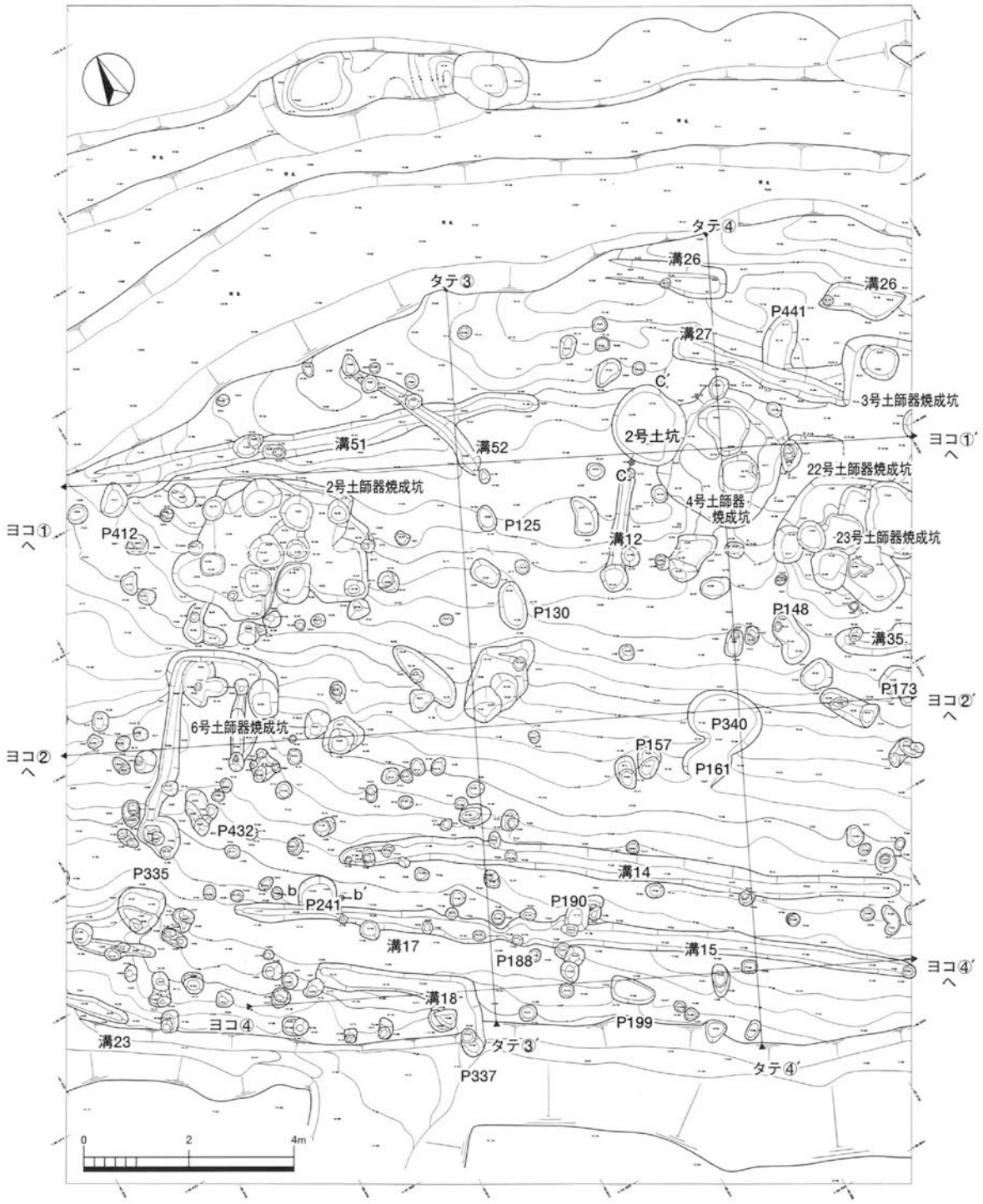


第71図　一貫山の旧地形とＦ区での１・２号窯の位置

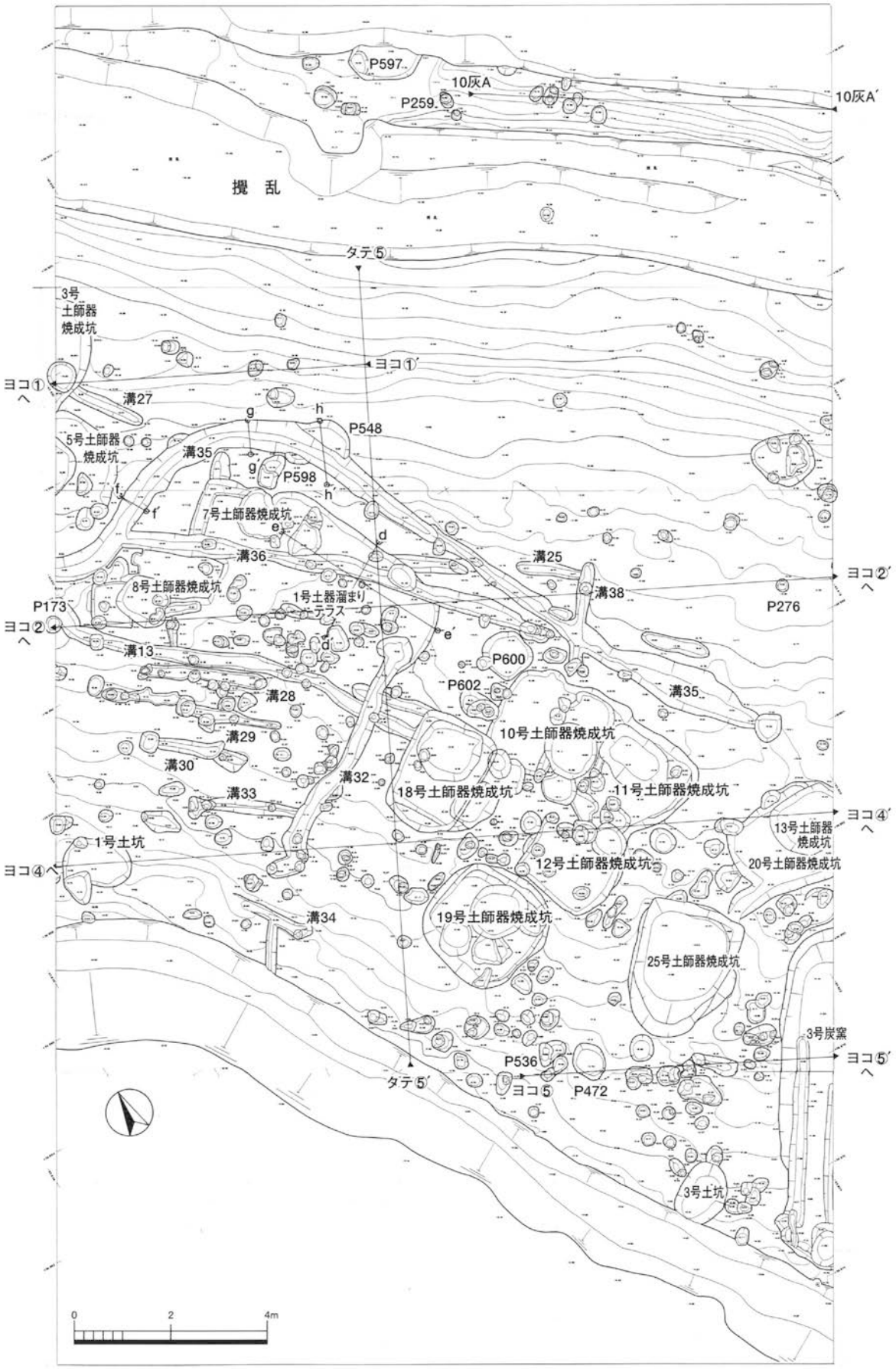
第72図　二ッ梨一貫山窯跡F区平面図1（1/120）



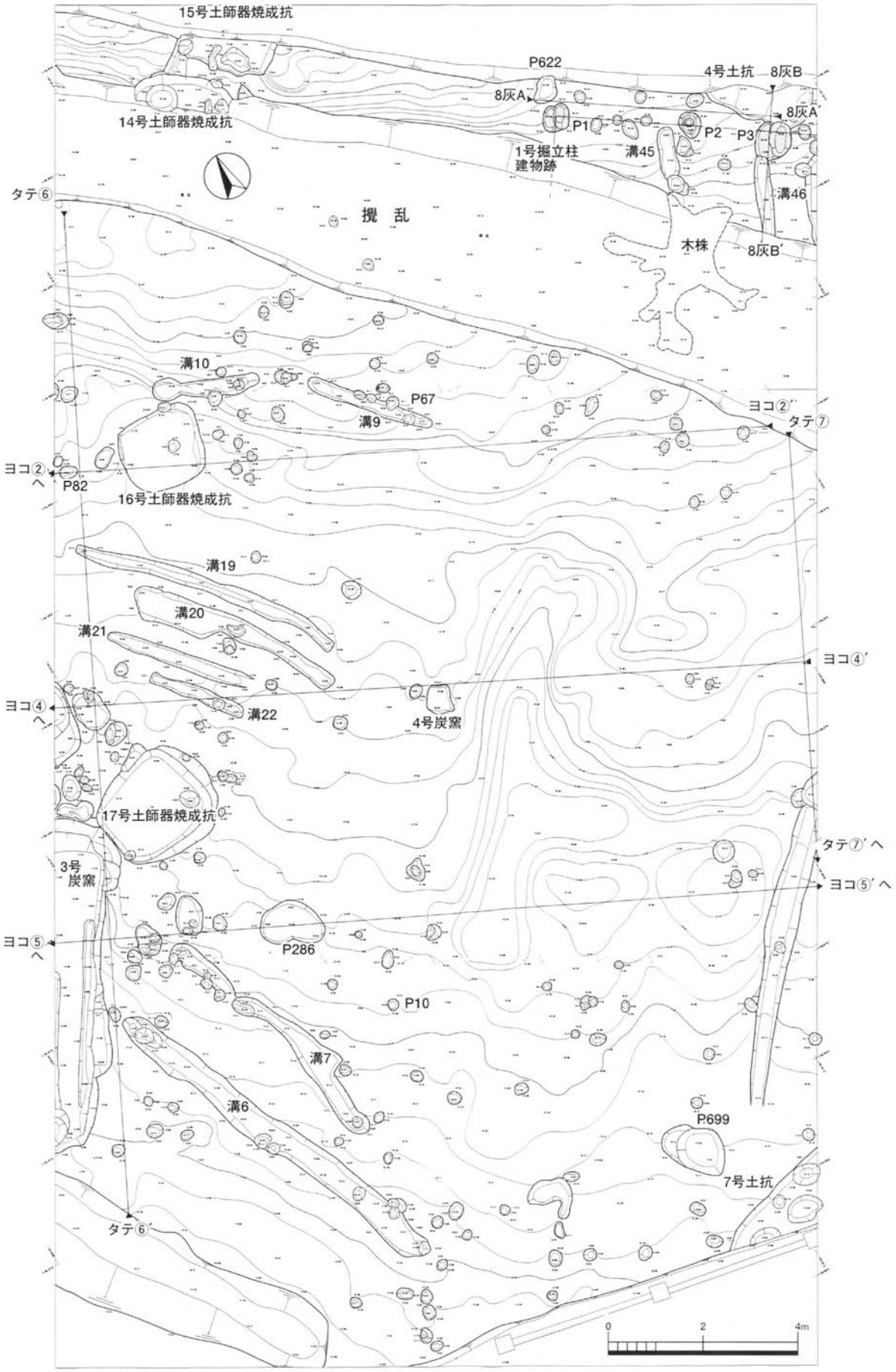
第73図　二ッ梨一貫山窯跡Ｆ区平面図２（1/120）



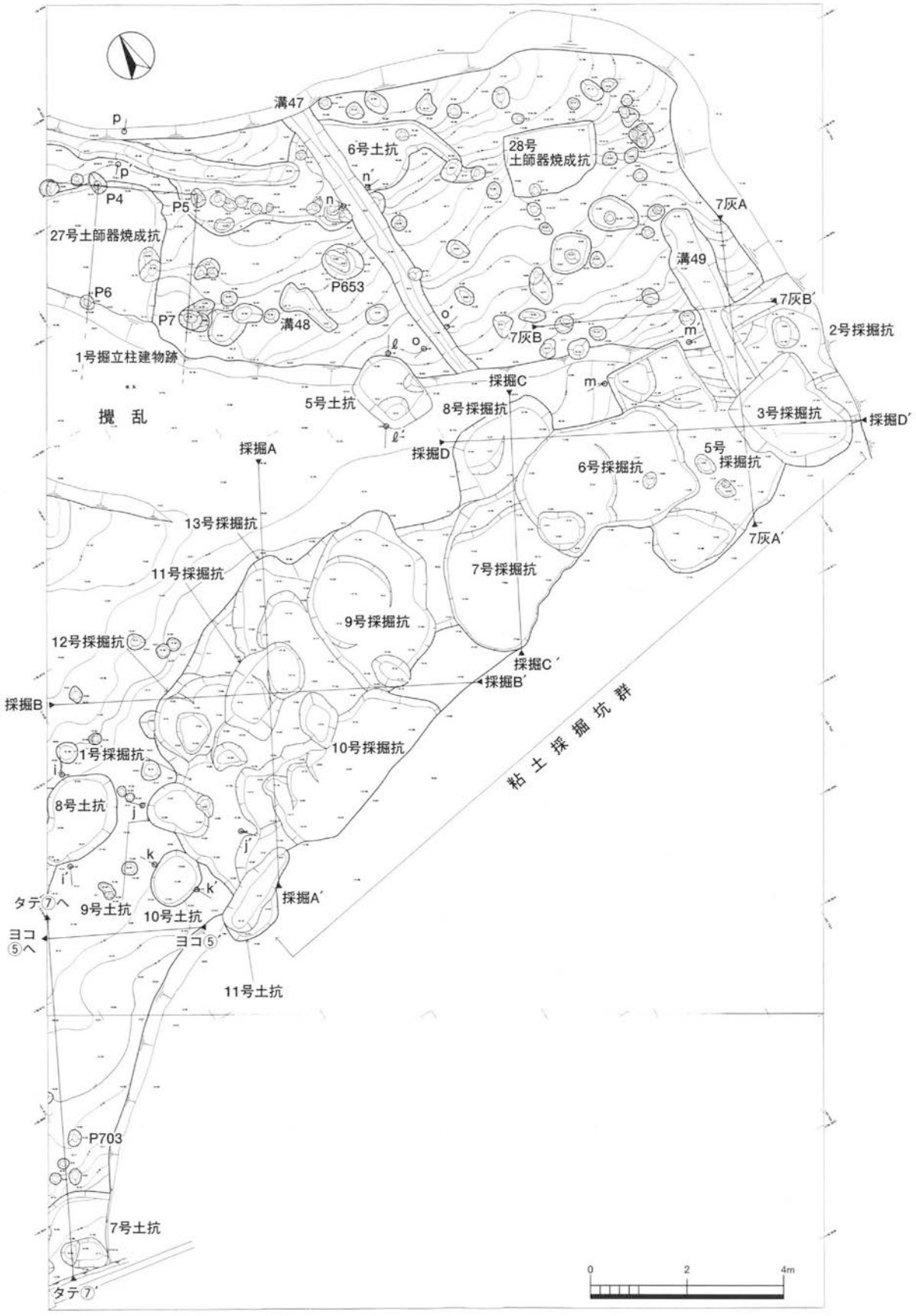
第74図　二ッ梨一貫山窯跡Ｆ区平面図３（1/120）



第75図　二ッ梨一貫山窯跡F区平面図4（1/120）

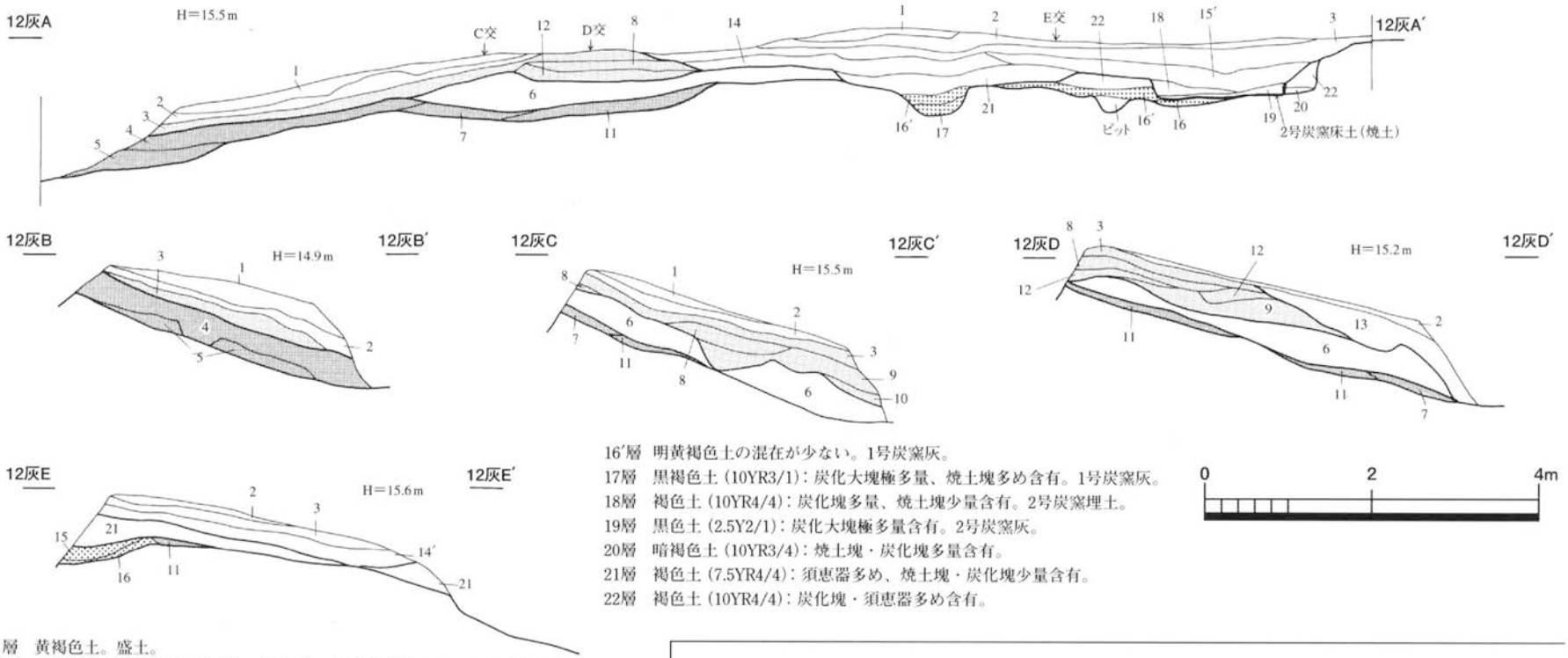


第76図　二ッ梨一貫山窯跡Ｆ区平面図５（1/120）



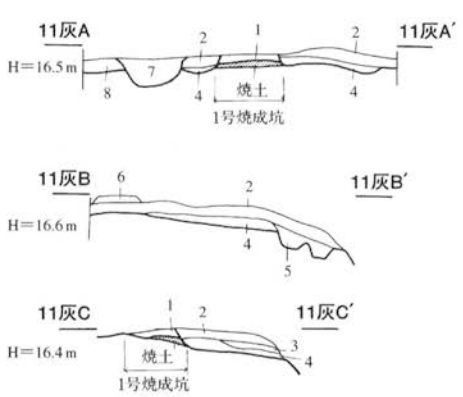
第77図　二ッ梨一貫山窯跡F区平面図6（1/120）

〈12号窯灰原〉



1層　黄褐色土。盛土。
2層　黒褐色土（10YR3/1）：窯壁塊、焼土塊、須恵器多量含有。12号灰上層。
3層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：窯壁塊多量、須恵器極多量、鉄滓多め含有。12号灰下層。
4層　暗褐色土（10YR3/3）：炭化塊・鉄滓多量、須恵器多め、焼土塊少量含有。1号製鉄灰上層。
5層　褐色土（7.5YR4/4）：炭化塊・鉄滓少量含有。1号製鉄灰下層。
6層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）：炭化塊・窯壁塊少量含有。しまりない12号窯掘削土？
7層　黒褐色土（10YR3/2）：炭化塊極多量、鉄滓・焼土塊多め含有。1号製鉄灰。
8層　黒褐色土（10YR3/2）：須恵器多量、炭化塊・焼土塊・窯壁塊多め含有。12号灰下層。
9層　暗褐色土（10YR3/3）：須恵器多量、炭化塊・焼土塊・窯壁塊多め含有。12号灰下層。
10層　黒褐色土（10YR3/2）：須恵器多量、窯壁塊・炭化塊多め含有。12号灰下層。
11層　褐色砂質土（10YR4/4）：炭化塊極多量、鉄滓少量含有。1号炭窯灰。
12層　黒色土（7.5YR2/1）：須恵器・炭化塊多量、焼土塊・窯壁塊多め含有。12号灰下層。
13層　褐色土（7.5Y4/4）：焼土塊・炭化塊・須恵器多量、窯壁塊多め含有。12号灰下層。
14層　暗褐色土（10YR3/4）：焼土塊・窯壁塊・炭化塊・須恵器多量含有。
14′層　14層に炭化大塊が多量に混在した土層。
15層　黒色土（N2/ ）：炭化大塊極多量含有の純度高い灰層。1号炭窯灰。
16層　黒褐色土（2.5YR3/2）と明黄褐色土（10YR6/8）との混在土：炭化大塊極多量、焼土塊少量含有。1号炭窯灰。
16′層　明黄褐色土の混在が少ない。1号炭窯灰。
17層　黒褐色土（10YR3/1）：炭化大塊極多量、焼土塊多め含有。1号炭窯灰。
18層　褐色土（10YR4/4）：炭化塊多量、焼土塊少量含有。2号炭窯埋土。
19層　黒色土（2.5Y2/1）：炭化大塊極多量含有。2号炭窯灰。
20層　暗褐色土（10YR3/4）：焼土塊・炭化塊多量含有。
21層　褐色土（7.5YR4/4）：須恵器多め、焼土塊・炭化塊少量含有。
22層　褐色土（10YR4/4）：炭化塊・須恵器多め含有。

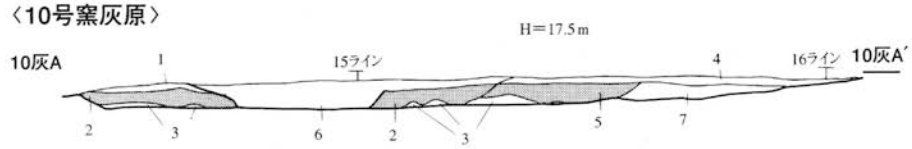
〈11号窯灰原〉



1層　褐色土（7.5YR4/3）：焼土粒多量、炭化粒少量含有。1号焼成坑埋土。
2層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：焼土粒、炭化粒少量含有。土師器多め含有。
3層　暗褐色土（10YR3/3）：炭化塊多め、焼土塊少量含有。11号灰。
4層　暗褐色土（10YR3/4）：焼土粒、炭化粒少量含有。11号灰。
5層　褐色土（7.5YR4/3）：焼土塊、炭化塊多め、土師器多量含有。灰白色粘土少量混在。11号灰。
6層　黒褐色土（10YR2/2）：焼土粒・炭化粒少量含有。
7層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土粒少なめ、炭化粒多め含有。溝2の覆土。
8層　暗褐色土（10YR3/3）：炭化粒少量含有。11号灰。

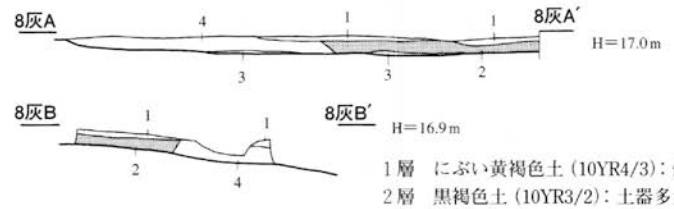
第78図　12号灰原・11号灰原土層断面図（1/80）

〈10号窯灰原〉



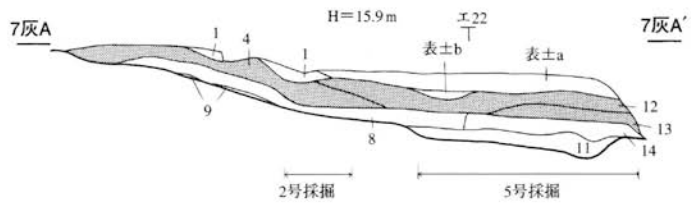
1層　黒褐色土（10YR3/2）：土器多量含有するが、表土層。
2層　黒褐色土（10YR2/2）：焼土粒・塊、炭化塊多め、土器多量含有。10号灰。
3層　褐色土（7.5YR4/4）と暗褐色土（10YR3/3）との混在土：焼土粒少量、炭化粒多め含有。
4層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土塊、土器少量含有。表土層。
5層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土塊、炭化粒少なめ、土器多量含有。10号灰。
6層　暗褐色土（10YR3/4）：焼土粒微量、土器少量含有。表土層。
7層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土粒、炭化粒、土器少量含有。10号灰以前の土層。

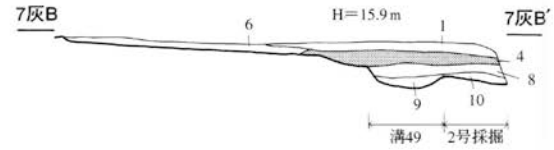
〈8号窯灰原〉

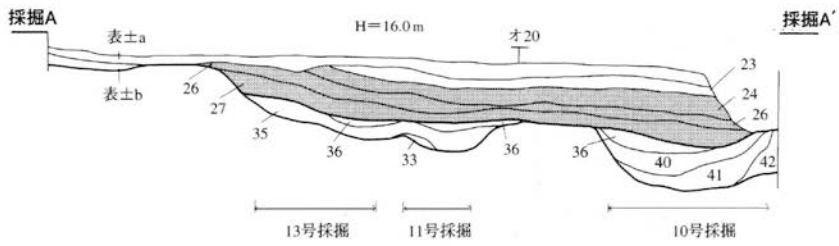


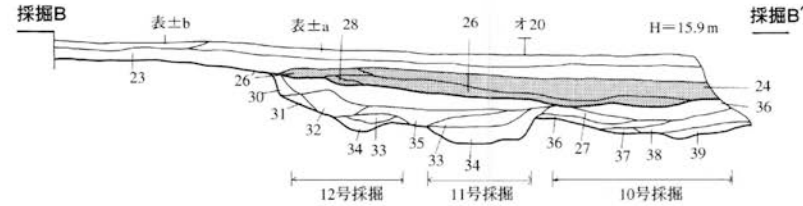
1層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：焼土粒・炭化塊少量含有。
2層　黒褐色土（10YR3/2）：土器多量、焼土粒・炭化粒少量含有。8号灰。
3層　褐色土（10YR4/4）：焼土粒少量含有。
4層　褐色土（7.5YR4/4）：土器多め、焼土粒少量、炭化粒微量含有。

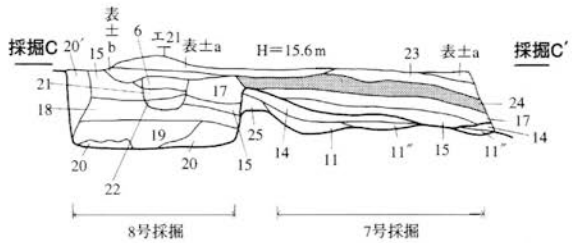
〈7号窯灰原及び粘土採掘坑群〉

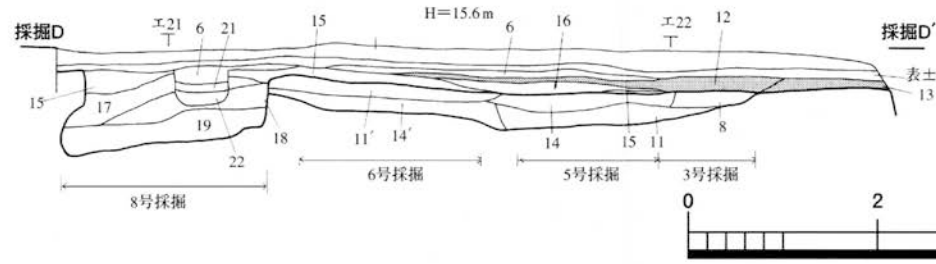








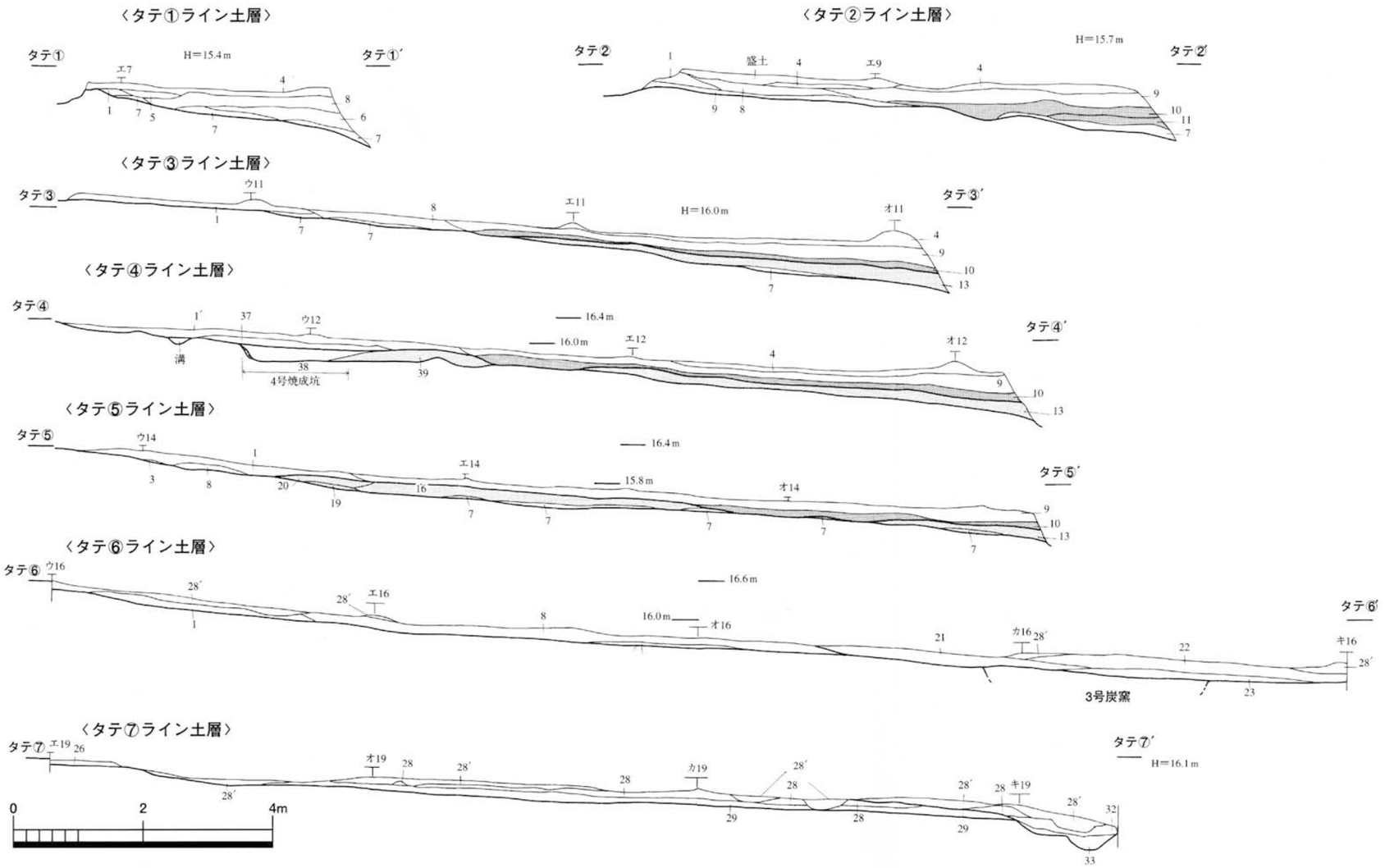




表土a層　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）
表土b層　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）

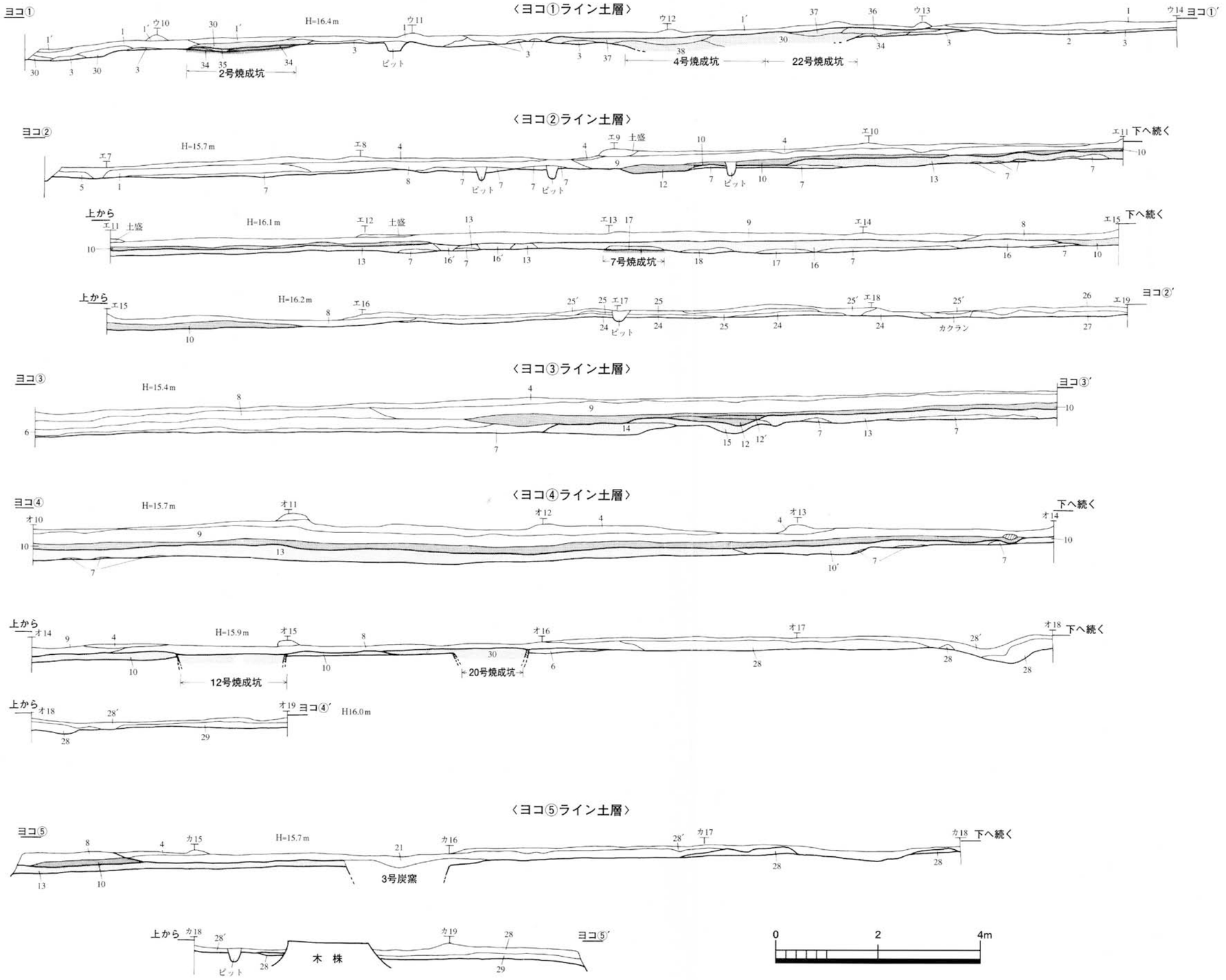
1層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：炭化粒・焼土粒少量含有。
2層　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）：含有物なし。表土。
3層　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）：表土。
4層　黒褐色土（10YR3/2）：土器・炭化粒少量含有。7号灰。
5層　黒色土（2.5Y2/1）：灰混じり層。
6層　黒褐色土（10YR3/2）：土器・窯壁塊多量、焼土塊・炭化塊少量含有。溝47覆土。
7層　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）：炭化粒多め、灰白色粘土塊少量含有。
8層　黒褐色土（10YR2/2）：土器多め、炭化塊少量含有。
9層　暗褐色土（10YR2/3）：灰白色砂質粘土塊多量含有。溝49覆土。
10層　黒褐色土（10YR3/1）：炭化粒少量含有。
11層　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）：炭化塊多め、焼土塊・灰白色砂質粘土少量含有。
11′層　土色やや明るく、炭化塊含有少ない。
11″層　黄白色砂質土多量混在。
12層　暗褐色土（10YR3/3）：須恵器・土師器・窯壁塊多量、焼土塊・炭化塊少量含有。7号灰。
13層　黒褐色土（10YR3/3）：須恵器・土師器・炭化塊多め含有。7号灰。
14層　灰白色砂質粘土（2.5Y7/1）とにぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）との混在土：しまり強く、叩き締め土。
14′層　11層を混在させ、土器少量含有。
15層　にぶい褐色土（7.5YR5/4）：土器炭化塊少量含有。
16層　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）と浅黄色土（2.5Y7/3）との混在土：炭化粒・焼土粒少量含有。
17層　明褐色土（7.5YR5/6）：炭化塊微量含有。
18層　にぶい褐色土（7.5YR5/4）：焼土塊・炭化塊少量含有。しまりある。
19層　灰黄褐色土（10YR5/2）：炭化塊・土器少量、焼土塊微量含有。しまり強い。
20層　にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）に18層土が混在した土：炭化塊少量含有。しまり強い。
20′層　18層土の混在が少ない。
21層　褐色土（10YR4/4）：炭化塊・窯壁塊多め含有。溝47覆土。
22層　灰黄褐色土（10YR4/2）とにぶい褐色土（7.5YR5/4）との混在土：炭化粒少量含有。溝47覆土。
23層　暗褐色土（10YR3/3）：炭化粒・焼土粒・少量含有。しまり欠く。
24層　黒褐色土（10YR2/2）：須恵器多め、焼土塊・炭化粒少量含有。7号灰の流れ込み土。
25層　明黄褐色土（2.5Y7/6）：しまりなく軟質。
26層　黒褐色土（10YR3/2）：須恵器・土師器多量、炭化塊多め、窯壁塊・焼土塊少量含有。7号灰流れ込み下層。
26′層　土色明るい。
27層　褐灰色土（10YR4/1）：にぶい黄色砂質粘土塊・土師器多量、炭化塊・焼土塊多め含有。7号灰流れ込み下層。
28層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土塊・炭化塊多量含有。
29層　暗褐色土（10YR3/3）：黄灰色砂質土塊（2.5Y6/1）極多量混在。須恵器・土師器多量、炭化塊多め、焼土塊少量含有。粘土採掘坑上層埋土。
30層　灰白色砂質土（2.5Y7/1）ベースに暗褐色土（10YR3/3）が混在した土。
31層　灰白色砂質土（2.5Y7/1）ベースに黄灰色土（2.5Y5/1）が混在した土。
32層　灰褐色土（10YR4/2）：須恵器・土師器・焼土塊・炭化塊多量、灰白色塊少量含有。粘土採掘坑上層埋土。
33層　灰白色粘土（2.5Y7/1）ベースに黄灰色土（2.5Y4/1）が混在した土。
34層　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）：灰白色砂質土大塊極多量、須恵器・土師器多量、炭化塊多め含有。しまり強い。粘土採掘坑下層埋土。
35層　褐灰色砂質土（10YR4/1）：炭化塊多め、灰白色粘土少量含有。
36層　灰白色粘土（10YR7/1）ベースに黄灰色土（2.5Y7/1）を少量混在する土：しまり強い貼り土。
37層　黄灰色砂質土（2.5Y7/1）ベースに灰白色粘土（10YR7/1）混在する土：しまり
38層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：窯壁大塊・焼土大塊・須恵器・焼台など須恵器窯破壊土が極極多量混在する。粘土採掘坑埋土。
39層　明褐色粘土（7.5YR5/6）：浅黄色粘土混在。土師器多め含有。粘土採掘坑下層埋土。
40層　黄灰色砂質土（2.5Y5/1）：須恵器・土師器極多量、炭化小塊多め含有。粘土採掘坑埋土。
41層　灰黄色砂質土（2.5Y7/2）と黄灰色土（2.5Y5/1）との混在土：須恵器・土師器極多量、炭化小塊多め含有。粘土採掘坑埋土。
42層　明黄褐色砂質土（10YR6/6）：窯壁大塊・焼土大塊・須恵器・焼台など須恵器窯破壊土が極多量混在。

第79図　10号窯灰原・8号窯灰原・7号窯灰原及び粘土採掘坑群土層断面図（1/80）



1層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：炭化粒・焼土粒少量含有。
1′層　土器・炭化粒・焼土粒多め含有。
2層　灰黄褐色土（10YR4/2）：含有物なく、しまりあり。
3層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）ににぶい黄褐色土（10YR4/3）が30%混在土層。
4層　黒褐色土（10YR3/2）：土器含有少なく、表土的土層。
5層　黒褐色土（10YR2/1）と暗褐色土（10YR3/3）との混在土：炭化塊多め含有。
6層　暗褐色土（7.5YR3/4）：炭化粒・土器少量含有。最下層。
7層　褐色土（7.5YR4/4）：炭化粒少量、土器微量含有。最下層。
8層　暗褐色土（10YR3/3）：土器多め、炭化粒・焼土塊少量含有。須恵器灰原流れ込みの混在土。
9層　暗褐色土（10YR2/3）：土師器・焼土塊多量、炭化粒少量含有。土師器灰原流れ込みの混在土。
10層　黒褐色土（10YR3/2）：須恵器・土師器・焼土塊・炭化塊多量含有。須恵器灰原流出土。
10′層　焼土塊極多量含有。
11層　黒褐色土（10YR2/2）：須恵器・炭化塊多量、焼土塊多め含有。須恵器灰原流出土。
12層　黒色土（7.5YR2/1）：炭化塊極多量、須恵器・土師器・焼土塊多量含有。須恵器灰原流出土。
12′層　褐色強く黒褐色土（10YR2/2）を呈し、炭化塊やや少なめ。
13層　黒褐色土（10YR2/2）：焼土塊・炭化塊・土師器多量含有。土師器灰原。
14層　黒褐色土（7.5YR3/2）：土師器・焼土塊極多量、黄褐色土塊多め含有。土師器灰原。
15層　黒褐色土（7.5YR2/2）：焼土塊極多量、黄褐色土・焼土塊・土師器多量含有。土師器灰原。
16層　黒色土（7.5YR2/1）：土師器極多量、焼土塊多量、炭化塊多め含有。7・8号土師器焼成坑灰原。
16′層　焼土塊少なめ。4・5号土師器焼成坑灰原。
17層　黒褐色土（5YR3/1）：焼土塊極多量含有。土師器焼成坑廃棄焼土層。
18層　黒褐色土（10YR3/1）とにぶい黄橙色土（10YR6/3）との混在土：土師器・炭化塊・焼土塊多量含有。土師器灰原。
19層　黒褐色土（7.5YR3/2）：炭化塊・焼土塊多量含有。土師器灰原。
20層　黒褐色土（7.5YR3/2）と浅黄色粘土（2.5Y7/3）との混在土：土師器極多量、焼土塊多量含有。
21層　黒褐色土（10YR3/2）：須恵器・焼土塊・炭化塊少量含有。
22層　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）：土器少量、焼土粒微量含有。表土層的土層。
23層　黒褐色土（10YR3/2）：浅黄色砂質土多量、炭化粒・焼土粒少量含有。
24層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：須恵器・炭化粒少量含有。
25層　黒褐色土（10YR3/2）：浅黄色砂質土・炭化粒少量含有。表土層下層。
25′層　浅黄色砂質の混在多い表土層。
26層　暗褐色土（10YR3/3）：土器・焼土粒微量含有。
27層　黒褐色土（10YR3/2）：土器多め、焼土粒・炭化粒少量含有。
28層　灰黄褐色土（10YR4/2）：土器・焼土粒・炭化粒少量含有。
28′層　黄褐色土混在する。
29層　灰黄褐色土（10YR4/2）：黒褐色土少量混在。土器多め、焼土粒・炭化粒少量含有。
30層　黒褐色土（10YR3/1）：土師器・焼土塊・炭化塊多量含有。土師器焼成坑埋土。
31層　黒褐色土（10YR2/2）：土師器極多量、焼土塊多量含有。土師器焼成坑埋土。
32層　黒褐色土（10YR3/2）：炭化塊・須恵器・土師器多め、焼土塊少量含有。7号土坑埋土。
33層　褐灰色土（10YR5/1）：灰白色粘土大塊多量、炭化粒少量含有。7号土坑埋土。
34層　黒褐色土（10YR3/2）とにぶい黄褐色土（10YR5/4）との混在土：焼土塊極多量含有。被熱。2号土師器焼成坑床土。
35層　黒褐色灰まじり土（10YR2/2）：炭化塊・焼土塊多量含有。2号土師器焼成坑灰層。
36層　暗褐色土（10YR3/3）：焼土塊・炭化粒多め含有。土師器焼成坑埋土。
37層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化粒多量、焼土塊多め含有。土師器焼成坑埋土。
38層　黒色土（7.5YR2/1）：土師器・焼土塊極多量、炭化塊多量含有。4号土師器焼成坑埋土。

第80図　D区タテライン土層断面図（1/80）



第81図　D区ヨコライン土層断面図（1/80）

第２節　８世紀～９世紀初頭の製陶関連遺構と遺物

第１節で述べたように、Ｆ地区には８世紀～９世紀初頭の製陶関連遺構が分布している。大きくは山側に存在する須恵器窯と緩斜面上方に存在する土師器焼成坑、緩斜面下方に存在するその他の工房関連の可能性をもつ遺構に分けられる。

第１項　須恵器窯に伴う遺構

須恵器窯本体は検出されておらず、灰原のみが存在する。山側の崖面で６カ所の灰原断面を確認しているが、北東側の７・８号窯灰原は、土師器を半数以上混在するもので、使用痕をもつ土器を定量含む。通常の灰原と異なるものであり、時期も９世紀後半に下るため、ここでは扱わない。これ以外の９～12号窯灰原は８世紀中頃から９世紀初頭の須恵器窯灰原である。北西端の12号窯灰原は灰原の残りがよく定量の須恵器を包含するが、９・10・11号窯灰原は撹乱が著しく、断片的に残っているに過ぎない。10号窯灰原は９・11号窯灰原よりも時期的に古いため同一の窯である可能性は低いが、９・11号窯灰原は同時期で、両灰原間が撹乱で寸断されていることもあり、同一窯灰原の可能性が高い。ただし確証がないため、一応２基の灰原として扱っておく。

９～11号窯灰原が傾斜転換点付近で途切れた後、その下方の緩斜面からすり鉢状に窪む南西側崖面に至るまで、灰原が堆積している。この９～11号窯下方灰原は、須恵器窯灰原よりも時期の新しい土師器焼成坑及びそこから排出された土師器焼成灰原の上に堆積する灰混じり層（８～12層。特に10層は黒色灰含む）である。下層の土師器焼成灰原よりも確実に須恵器の混在が多く、須恵器窯灰原から流れ込んだ堆積土層の可能性が高い。須恵器の時期を見ると、山側の須恵器窯とほぼ同時期が大半を占めるが、９世紀後半のものや土師器も混在しており、純粋な灰原層と位置付けられるものではない。灰原層は10～25㎝の厚さで、幅20ｍの範囲に広がっている。

12号窯灰原は前述したとおり、遺存状態がよく、多くの須恵器を包含する。灰原の厚さは50㎝以上を測る箇所もあり、窯壁片の混在も多く、黒色灰を含む。当灰原の下層には砂鉄製錬に伴う鉄滓廃棄層及び製炭窯の灰層が存在するが、部分的にその間に黄褐色土層が入っている。地山掘削に伴うような土層で、12号窯構築の際の排出土である可能性をもつ。12号窯と同時期の須恵器が少なからず混在している。また、12号窯灰の上層には９世紀後半の須恵器を含む暗褐色系の土層がのる。黒色灰の混在などは少なく、須恵器包含量も多くないため、須恵器窯灰原とはしなかったものだが、この時期の製陶関連遺構が存在する可能性はある。この須恵器包含層の下には同時期の製鉄に伴う製炭土坑が存在しており、製鉄関連遺構に伴う土層の可能性もある。

以上、須恵器窯に伴う遺構は、窯から排出される灰原のみで、窯体を始めそれに付随するような生産関連の遺構は確認できていない。また、12号窯灰原と11号灰原の中程に二ッ梨一貫山１・２号窯跡が存在するはずであるが、同時期の遺物混在はあるが、これに伴うような須恵器窯灰原は確認していない。灰原が当区域の手前で止まっているためであろう。

第２項　土師器焼成坑とそれに伴う遺構

Ｆ区で確認できた土師器焼成坑は28基ある。前述したように、標高15.2～16.2ｍの範囲に密集して築かれており、限られた高さで横へ展開している。特にＦ区中央付近に密集する傾向があり、時期もⅣ2期前後のものが大半を占める。土師器焼成坑の床面特に前壁（前部）付近では土師器焼成に伴って排出された灰層が薄くのっている。土師器の細片などを多量に含む層で、土師器焼成坑の密集する箇所ではそれが積み重なって、灰原を形成する。土師器焼成坑の前部から繋がって灰原に至る箇所も確認しており、土師器焼成灰原と呼べるものである。厚いところで30㎝に及び、黒色灰や炭化塊の多く混在する層もある。定量の須恵器を含有しており、山側の須恵器窯灰原と混在する箇所もあるなど、純粋な土師器焼成坑のみの灰原とは言えないが、土師器焼成坑経営がなされている段階での廃棄層と言えるものである。土師器焼成に伴ってこれだけの廃棄層が存在することは注目されることであり、燃え残り燃料材と製品破損が定量存在したことを物語る。そして、さらに集約的な生産・度重なる焼成があったことを示唆する資料と言えよう。以下に、各焼成坑とそれに付随する遺構について記述する。

1．2号土師器焼成坑とその下部土坑（第83図）

遺構検出時に2号土師器焼成坑の下に存在する土坑を土師器焼成坑と思い、土層断面設定して掘り下げたため、土師器焼成坑の床を一部飛ばしてしまった。そのため、部分的に焼成坑プランを確定できていない。

土師器焼成坑は、本文で床下土坑として扱った土坑群の上に築かれている。この土坑群は土師器焼成坑の下部遺構という感じはなく、複数の土坑・ピットが重なって土坑群を形成している。土坑群の須恵器と土師器焼成坑埋土の須恵器に時間差あることを考えれば、土坑群は2号土師器焼成坑とは無関係の廃棄土坑的な遺構と判断される。土師器を主体に大量に焼成破損品が捨てられており、焼成に伴う焼成粘土塊が309点（うち有繊維圧痕183点、有切離痕3点）、総重量3.8kg出土している。土坑群の埋まった状態で土坑の山側の壁部分を奥壁に設定し、2号土師器焼成坑が築かれている。等高線（15.85m）に沿って築かれる焼成坑Bとやや北に主軸を振る焼成坑Aがあり、いずれも土坑群埋土上面を床とする掘り込みの浅いものである。

焼成坑Aは左側奥壁のみ残存のもので、黒褐色埋土上の床部分では被熱が弱く、ほとんど焼土化していない。確実な床の確認は行えておらず、プランは小型方形状と思われるが、規模は不明である。焼成坑Bは奥壁部分がしっかりと被熱しており、床も褐色系の土を貼って、その部分が被熱している。横長方形プランで、奥壁寄りに床面の被熱が確認される。横軸長178cm、奥壁深14cm、床長横168cm×縦70cm、焼成床面積1.1㎡で、縦軸長は前部をどこに設定するかで異なるが、約120cm程度と思われる。この土師器焼成坑の上方埋土は山側からの流れ込み土と思われる土で、土師器が定量含まれている。埋土土器の時期はⅤ1期頃と判断でき、下部土坑群の土器（Ⅳ2古期）とは2時期ずれる。

2号土師器焼成坑の上方50cmの所に、焼成坑奥壁に沿って、溝51が掘られている。幅50cm、深さ15cmの溝で、等高線に沿って850cm伸びる。出土する土器の時期が土師器焼成坑とほぼ同時期であり、土師器焼成坑に伴う溝の可能性が高い。山側からの雨水排水を目的としたものだろう。

2．3号土師器焼成坑（第84図）

標高16.23m付近の等高線に沿って奥壁を設定する土師器焼成坑である。床が2枚あり、1次床で前部に向かってやや下に傾斜していたのに対し、2次床では床を水平にし、最大で5cmかさ上げしている。

1次床は地山床のままで、1次床の左奥壁際に径85cm程度の円形の床下土坑をもつ。多量の焼土塊・炭化塊を土坑内に充填し、この部分のみ床を貼る。横長型隅丸方形プランで、奥壁・側壁ともにやや開き気味に立ち上がる。被熱は強く、奥壁から側壁・床面とも焼結硬化する。

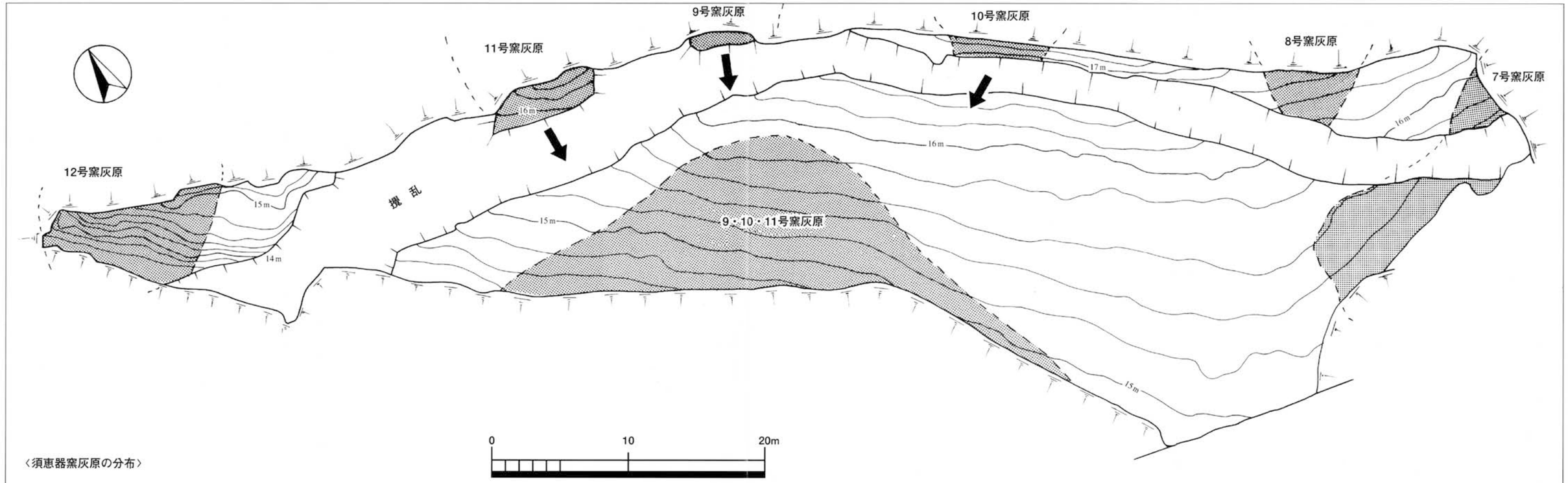
2次床は床全体を貼り土するが、壁は変わらず、基本的プランと規模は同様である。縦軸長272cm、横軸長280cm、奥壁深27cm、床長縦250cm×横237cm、床面積5.7㎡で、奥壁・側壁は開き気味の立ち上がり、前部は壁なく極めて緩く立ち上がる。前部は焼けておらず、床面の7割程度が被熱し、焼成床面積は4.1㎡である。被熱度合いは床の左側半分が強く、壁は奥壁が強い。前部へ向かって灰層のかき出しがあり、壁際で焼壁の崩れた埋土が確認される。床面での土師器の遺存は少なく、左奥壁付近で大きな貼壁土塊が出土している。灰層は当焼成坑に伴うものであるが、他の埋土は他からの廃棄土層である。土師器が多いため、土師器焼成に伴う廃棄品であり、焼成粘土塊が1次床埋土中も含めると51点（うち有繊維圧痕2点）、総重量630g出土している。

出土する須恵器の時期からⅣ2新期と推定され、1・2次床ともに同様であると予想する。

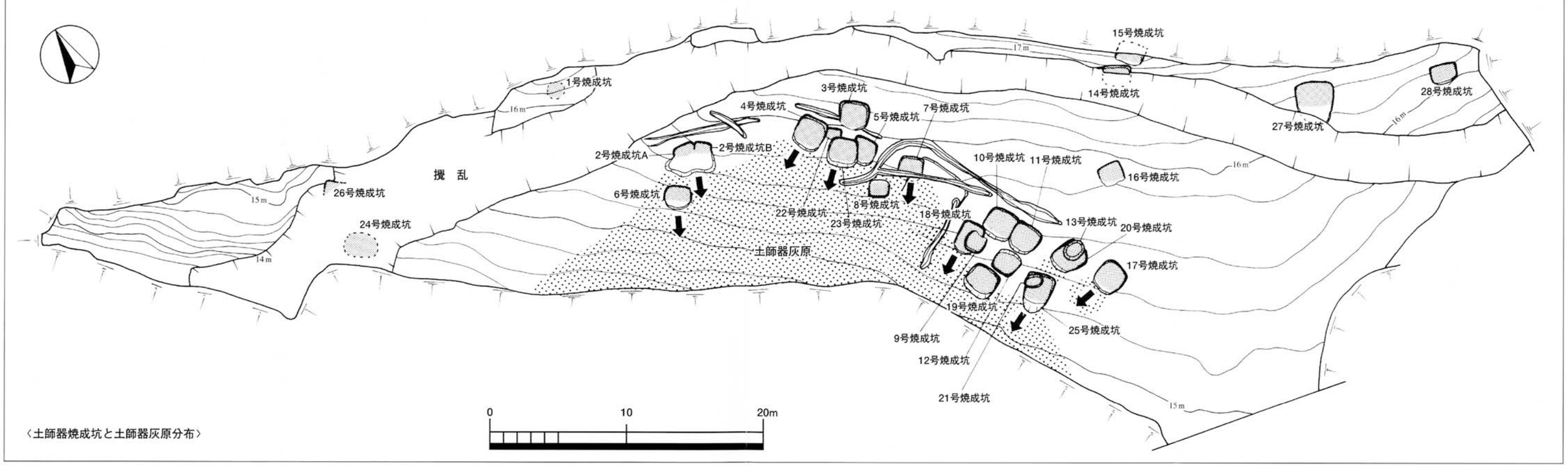
3．4号土師器焼成坑（第85図）

3号土師器焼成坑の左下に隣接する。標高16.0m付近の等高線に奥壁を設定し、等高線からやや東に軸を振って、斜面に対し斜めに築かれる。

平面プランは横長型隅丸方形を呈し、規模は縦軸長340cm、横軸長272cm、奥壁深38cm、床長縦282cm×横230cm、床面積5.9㎡を測る。奥壁・側壁は45度前後に開いて立ち上がり、前部は極めて緩い前壁をもつ。床面及び壁面で被熱を受ける部分は奥壁から220cm程度で、焼成床面積は全床面の75%にあたる4.4㎡をもつ。焼成床部分から手前は被熱せず、炭化塊や灰が床に食い込む程度で、この部分が前部にあたるが、前部との境で床幅を狭め、そこから極めて緩く立ち上がって行く。壁は奥壁から両側壁まで被熱が強く、焼成床面の中央付近も強く被熱する。壁際から20～40cmは被熱が弱く、前部との境も弱くなる。床面・壁面ともに地山のままを基本とするが、2カ所

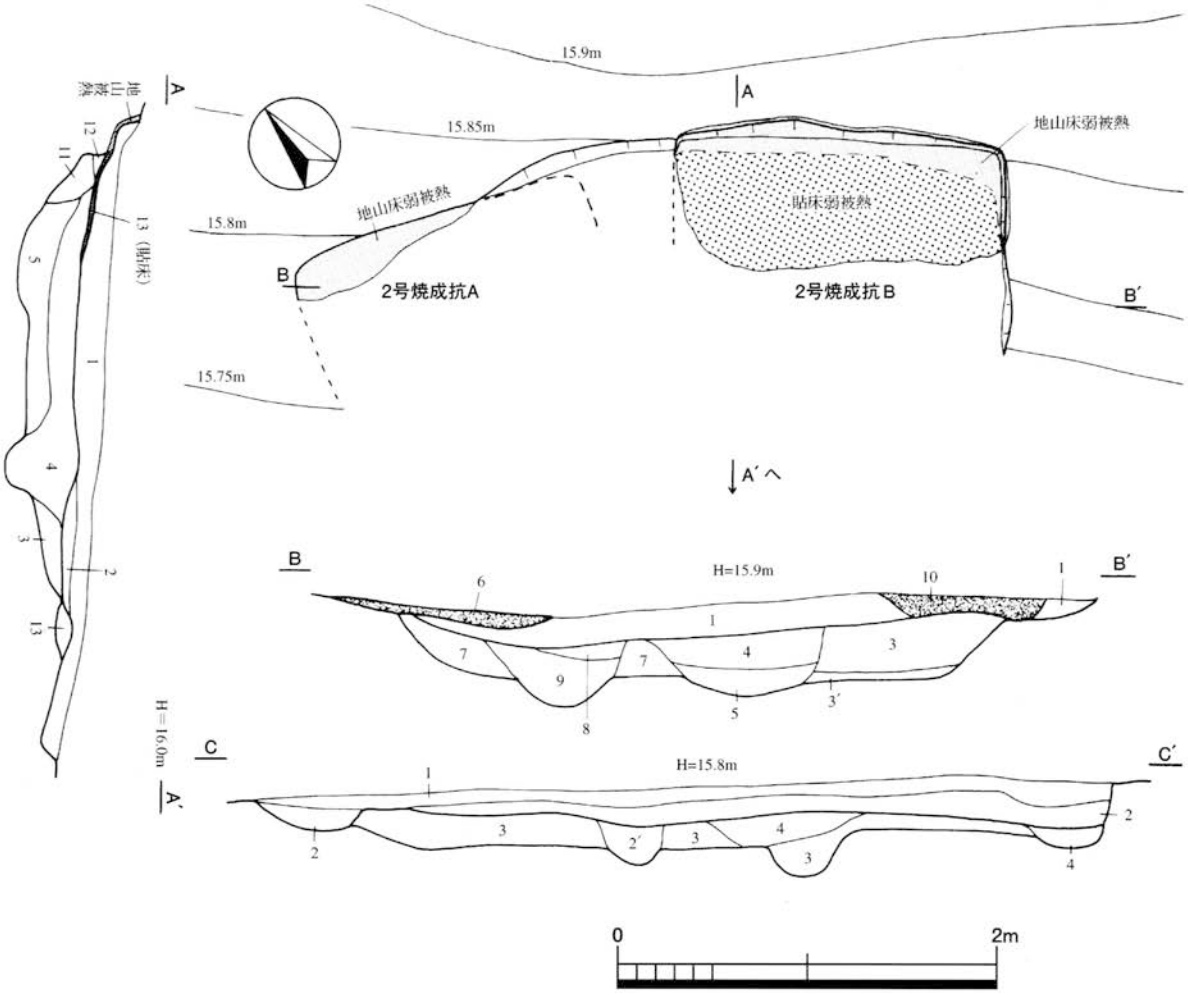


〈須恵器窯灰原の分布〉

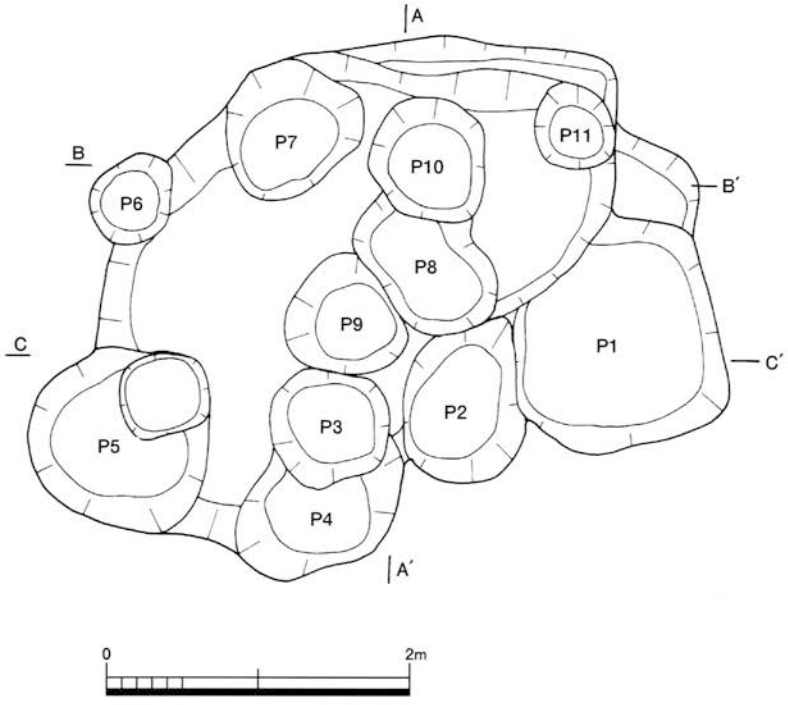


〈土師器焼成坑と土師器灰原分布〉

第82図　F区須恵器窯・土師器焼成坑関連遺構分布（1/300）（矢印は灰原排出の流れ）



〈床下土坑と掘り方〉



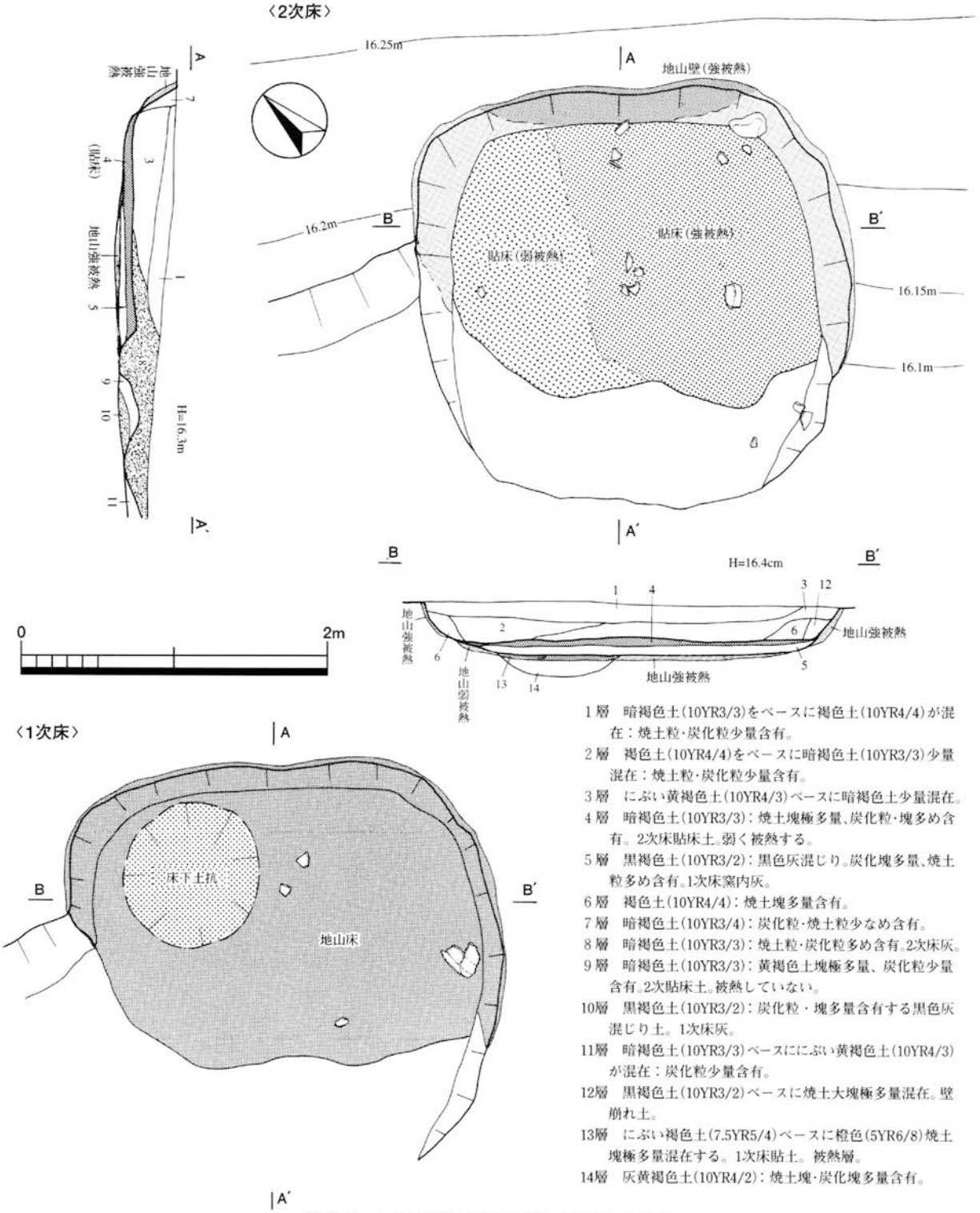
1層　黒褐色土(10YR2/2)：土師器多量、炭化塊多め、焼土粒少量含有。
2層　黒色土(10YR2/1)：土師器・炭化塊多量、焼土粒少量含有。
2′層　焼土塊多め含有。
3層　黒褐色土(10YR3/2)：土師器（完形含む）多量、焼土粒極多量、炭化粒多量含有。
3′層　灰混じり、炭化塊多量含有。
4層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒、炭化粒多量含有。
5層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒多量、炭化粒多め、黄褐色土塊少量含有。
6層　黒色土(10YR2/1)：黒色灰・燃えかす混在。2号焼成坑灰。
7層　黒褐色土(10YR3/2)：明褐色土塊極多量、焼土粒多量、炭化粒多め含有。
8層　褐色土(7.5YR4/4)と黒褐色土(10YR2/2)との混在土：焼土粒・炭化粒少量含有。
9層　黒褐色土(10YR2/2)をベースに明褐色土と焼土が混在する土：焼土塊・炭化塊多め含有。
10層　黒色土(10YR2/1)：炭化大塊多量、焼土塊多め含有。2号焼成坑灰。
11層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒多量、炭化塊多め、黄褐色土塊少量含有。
12層　暗赤褐色被熱焼土(5YR3/4)：2号焼成坑の貼床土。
13層　褐色土(7.5YR4/4)：炭化粒、焼土粒少量含有。

第83図　2号土師器焼成坑平面・断面図（1/40, 左下のみ1/50）

掘られた床下土坑部分では貼床している。

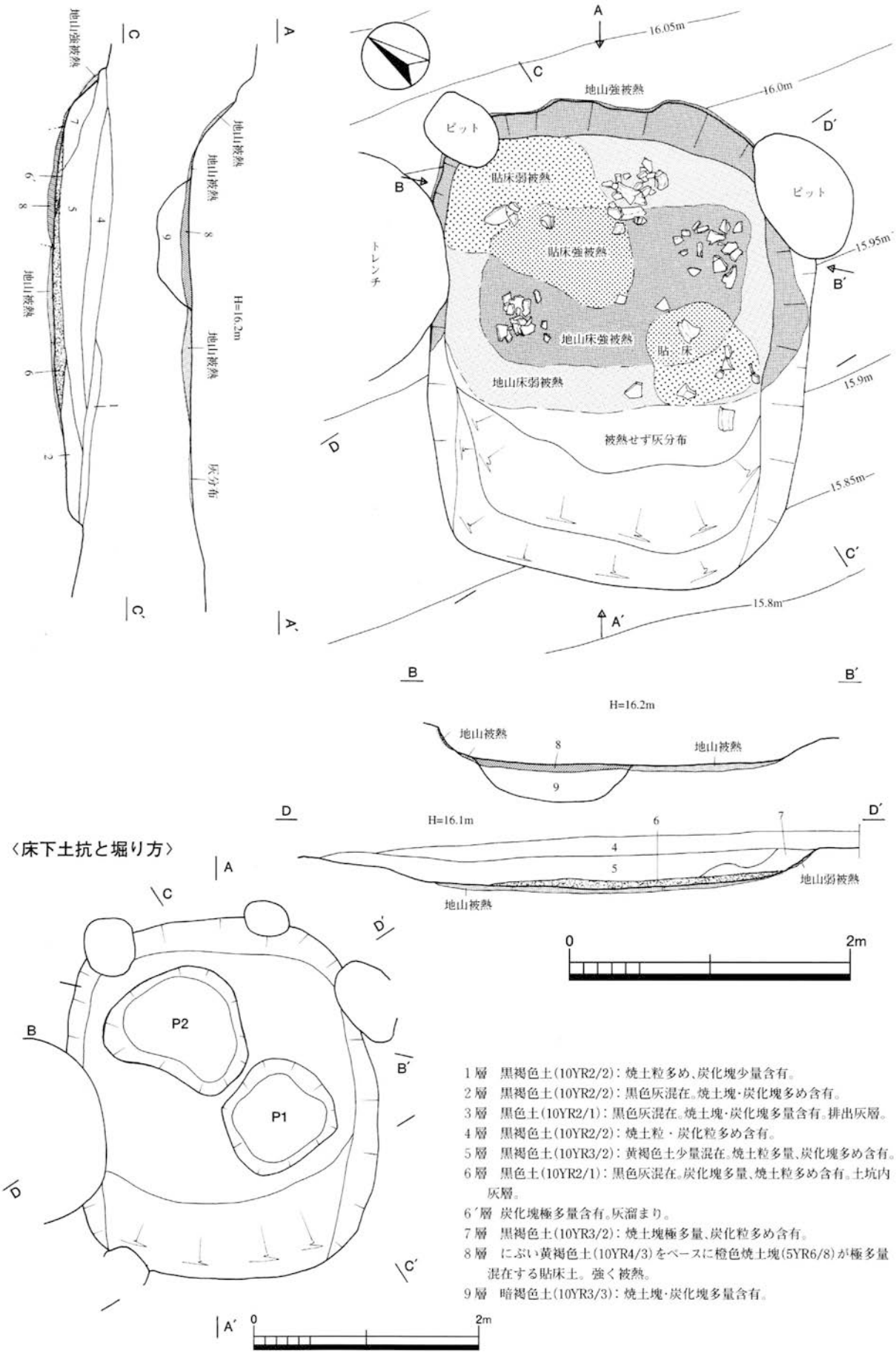
床面には土師器とともに薄く灰層がのっている。焼成坑奥から分布し、前部へ向けてかき出されている。埋土は壁際で壁崩れの焼土塊を多く含み、他は黒褐色土が埋まる。土師器は少ないが、焼土塊を多く含有する土である。埋土又は窯床下から定量の焼成粘土塊が出土している。繊維圧痕をもつ粘土塊13点を含み、総数328点で、総重量2.9kgを測る。出土する須恵器からⅣ2古期と判断する。

当土師器焼成坑の斜面上方、奥壁の軸に沿って溝27が掘られている。幅25～40cm、深さ10cm程の溝で、4号土師器焼成坑の奥壁から30cmの間隔をもつ。溝は3号土師器焼成坑に切られているが、さらに南東に伸び、5号



1層　暗褐色土(10YR3/3)をベースに褐色土(10YR4/4)が混在：焼土粒・炭化粒少量含有。
2層　褐色土(10YR4/4)をベースに暗褐色土(10YR3/3)少量混在：焼土粒・炭化粒少量含有。
3層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)ベースに暗褐色土少量混在。
4層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土塊極多量、炭化粒・塊多め含有。2次床貼床土。弱く被熱する。
5層　黒褐色土(10YR3/2)：黒色灰混じり。炭化塊多量、焼土粒多め含有。1次床窯内灰。
6層　褐色土(10YR4/4)：焼土塊多量含有。
7層　暗褐色土(10YR3/4)：炭化粒・焼土粒少なめ含有。
8層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土粒・炭化粒多め含有。2次床灰。
9層　暗褐色土(10YR3/3)：黄褐色土塊極多量、炭化粒少量含有。2次貼床土。被熱していない。
10層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化粒・塊多量含有する黒色灰混じり土。1次床灰。
11層　暗褐色土(10YR3/3)ベースににぶい黄褐色土(10YR4/3)が混在：炭化粒少量含有。
12層　黒褐色土(10YR3/2)ベースに焼土大塊極多量混在。壁崩れ土。
13層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)ベースに橙色(5YR6/8)焼土塊極多量混在する。1次床貼土。被熱層。
14層　灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土塊・炭化塊多量含有。

第84図　3号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）



1層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒多め、炭化塊少量含有。
2層　黒褐色土(10YR2/2)：黒色灰混在。焼土塊・炭化塊多め含有。
3層　黒色土(10YR2/1)：黒色灰混在。焼土塊・炭化塊多量含有。排出灰層。
4層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒・炭化粒多め含有。
5層　黒褐色土(10YR3/2)：黄褐色土少量混在。焼土粒多量、炭化塊多め含有。
6層　黒色土(10YR2/1)：黒色灰混在。炭化塊多量、焼土粒多め含有。土坑内灰層。
6′層　炭化塊極多量含有。灰溜まり。
7層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊極多量、炭化粒多め含有。
8層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)をベースに橙色焼土塊(5YR6/8)が極多量混在する貼床土。強く被熱。
9層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土塊・炭化塊多量含有。

第85図　4号土師器焼成坑平面・断面図（左下のみ1/50, 他は1/40）

土師器焼成坑の山側にある溝と同一と思われる。4・5号土師器焼成坑の山側を切る排水溝と判断でき、両土師器焼成坑は同時併存、その後、3号土師器焼成坑が掘られたものと予想する。ただ、いずれもⅣ2古期に位置付けられるものであり、期間的には短いスパンでの作り替えであろう。

4．5号土師器焼成坑（第86図）

4号土師器焼成坑の南側、標高15.95m付近に奥壁を設定して掘られる土師器焼成坑である。山側にある溝27を共有して4号土師器焼成坑と並列して築かれており、4号と同じ主軸をもつ。出土土器も同時期と評価でき、同時併存の可能性をもつ。

西側1/4を23号土師器焼成坑に切られており、左手前が不明だが、平面プランはやや手前が広がる台形気味の横長型隅丸方形を呈す。規模は縦軸長215cm、横軸長（奥）200cm・（前）255cm、奥壁深26cm、床長縦197cm×横奥175cm・横前240cm、床面積（焼成床面積）4.1㎡、側壁は45度前後に開くが、奥壁は直立気味に立ち上がる。ただ、最終段階では壁際床に貼土をして壁を緩くしており、奥壁も傾斜する。前壁はなく、前部開口型で、床面は水平。床面は被熱弱いが、床全体に被熱及ぶ。床の奥半分は地山のままで、手前半分が貼床である。床下土坑は基本的にもたないタイプと見るが、左手前の貼床下には土坑があり、床下土坑状を呈す。ただ、意識的に床下土坑を掘削した感じはなく、構築前に土坑が存在しただけだろう。

焼成坑内に灰層の存在はなく、直接埋土が乗る状態で、床面遺存土師器は少ない。埋土中には焼成粘土塊が混在し、繊維圧痕をもつ8点を含め、63点、総重量0.95kgが出土している。

5．23号土師器焼成坑（第86・87図）

3号土師器焼成坑の斜面下方、5号土師器焼成坑を切って掘られる焼成坑で、奥壁が等高線に沿って築かれる。標高15.85m付近に奥壁が設定されており、平面プランは手前側が広い台形風の横長型隅丸方形である。

規模は縦軸長333cm、横軸長（奥）285cm・（前）320cm、奥壁深40cm、床長縦258cm×横奥230・前310cm、床面積6.9㎡を測る。奥壁・側壁は比較的立ち気味だが、最終段階で壁際床に貼土をして壁を緩くしており、奥壁と両側壁が傾斜する。前壁は極めて緩く立ち上がり、この部分の被熱はない。床面は水平。床面の被熱は弱いが、総床面積の8割近い5.4㎡に被熱が及ぶ。床の左奥部分のみ地山のままだが、他は貼床されており、径50～90cm程度の円形土坑が床下に存在する。土坑埋土は炭化塊・焼土塊を混在させるものや黄褐色土塊を多量混在させるものなど様々だが、意識的に掘られた印象はあり、構築に伴う土坑と考える。

床面上に灰層が比較的広くのるが、遺存する土師器は少なく、出土したものの大半は埋土中のものである。床下土坑にも土器が定量入っており、ほぼⅣ2新期～Ⅴ1期に位置付けられる。焼成粘土塊は繊維圧痕をもつ81点を含む384点が出土しており、総重量は5kgを測る。埋土中の土器とともに周辺の土師器焼成坑の中では最多量をもつ。

6．22号土師器焼成坑（第87図）

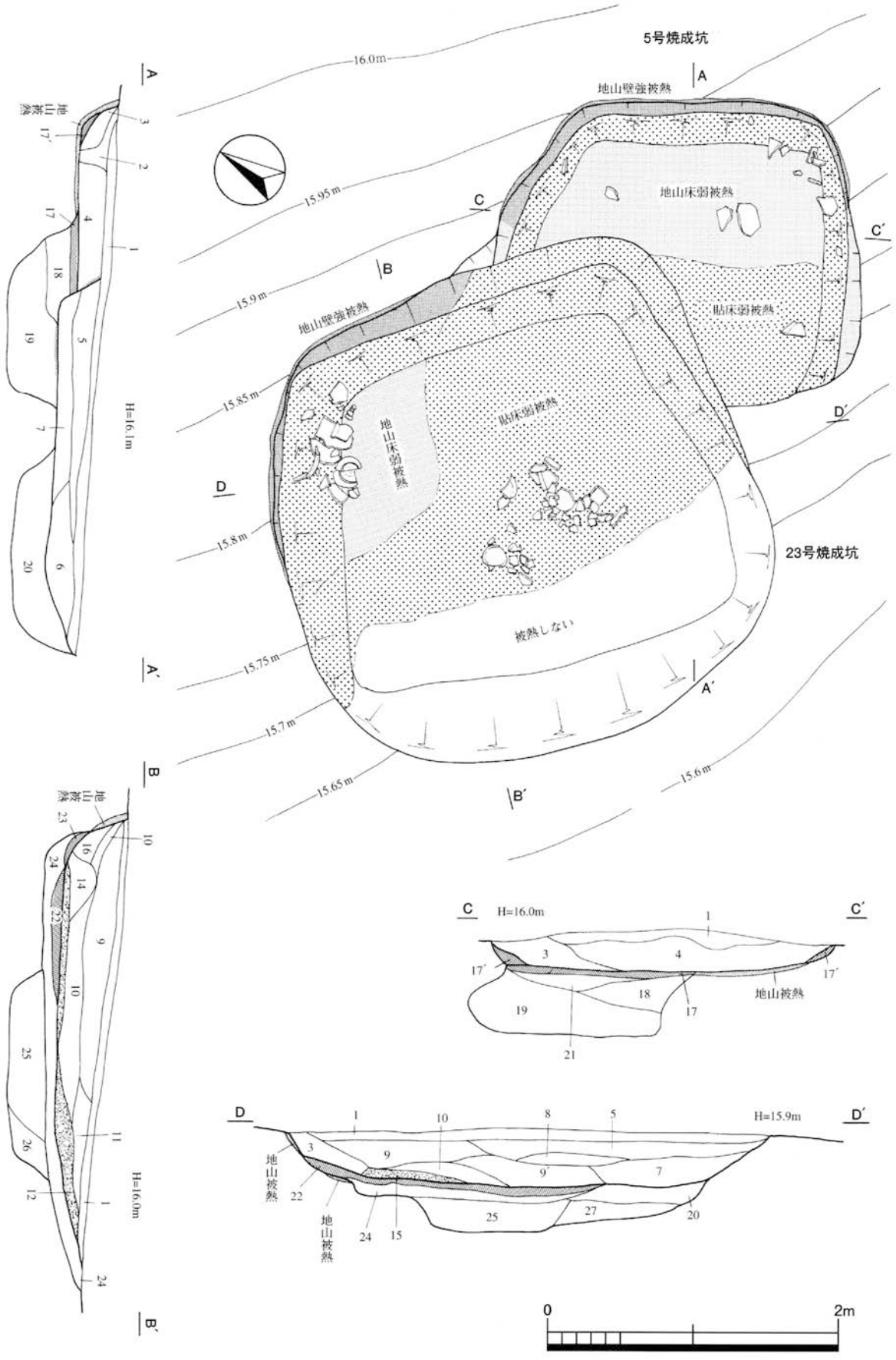
4号土師器焼成坑の右奥壁コーナーに存在する土師器焼成坑で、奥壁部分が立ち上がるが、ほぼ床面のみ残存する浅いものである。手前側に浅いピットが掘られ、半完形に復元できる土師器釜と鍋が数個体捨てられている。焼き歪みがあり、当土師器焼成坑の廃棄品と理解している。床は地山のままで強く被熱し、4号土師器焼成坑と重複する部分は、黒褐色土のために被熱が確認できていない。

土器の時期から4号土師器焼成坑に後出すると考えるが、Ⅴ期には下らないだろう。4号土師器焼成坑そして3号土師器焼成坑の後に築かれたものだろう。規模は横軸長200cm、縦軸長140cmの小型で、方形状を呈す。

7．6号土師器焼成坑（第88図）

標高15.45m付近に奥壁を設定し、等高線に沿って築かれる土師器焼成坑で、2号土師器焼成坑の下方に存在する。横長型隅丸方形状のプランをもつが、壁が立つのは奥壁付近のみで、手前半分の両側壁は両側に開き、手前は被熱床面だけが存在する前部開口型のものである。

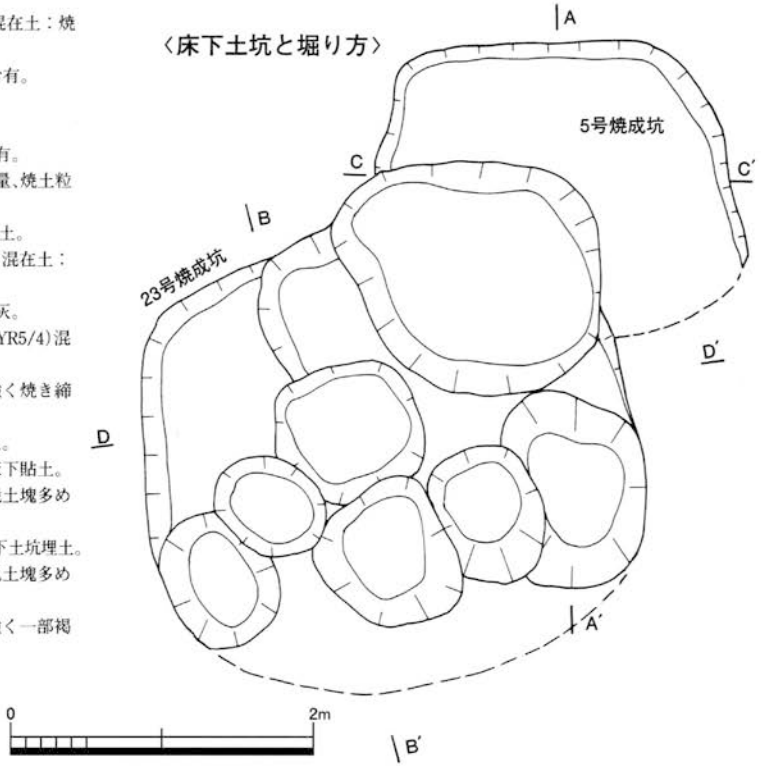
規模は縦軸長252cm、横軸長282cm、奥壁深37cm、床長縦240cm×横253cm、床面積（焼成床面積）5.4㎡である。奥壁・側壁とも直立気味の立ち上がり、床は壁際が極緩く立ち上がるため、ややすり鉢状に窪む。被熱はこの床の窪んだ底面が強く、奥壁も強く焼ける。壁際の緩く傾斜する部分は被熱弱く、ここが主に貼床されている。貼



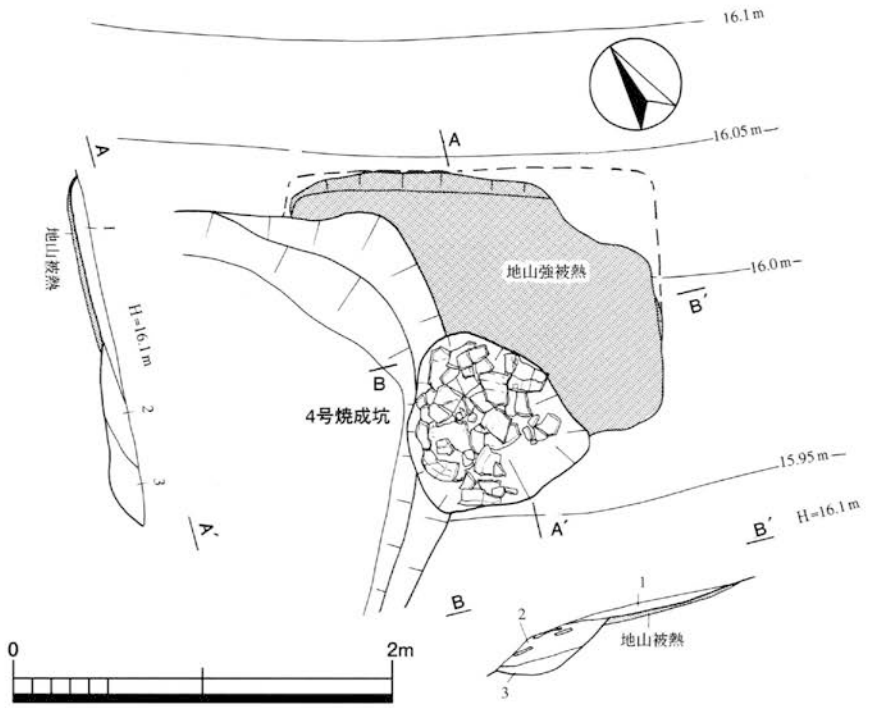
第86図　5号・23号土師器焼成坑平面・断面図（1）（1/40）

1層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土粒・炭化粒少量含有。
2層　黒褐色土(10YR3/2)：土師器・焼土粒・炭化粒多め含有。
3層　黒褐色土(10YR3/2)とにぶい褐色土(7.5YR5/4)との混在土：焼土粒多め含有。
4層　褐色土(10YR4/6)：焼土粒少量含有。
5層　黒色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒多め含有。
6層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒・炭化粒多量、焼土塊少量含有。
7層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：焼土塊極多量含有。
8層　褐色土(7.5YR4/4)ベースに黒褐色土(10YR3/2)混在土：焼土粒少量含有。
9層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒多め、炭化粒少量含有。
9′層　土師器混在多く、炭化塊極多量混在。
10層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土塊多量含有。
11層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒多量、炭化粒多め含有。
12層　黒褐色土(10YR2/3)：黒色灰混在。炭化塊・粒多量、焼土粒多め含有。23号焼成坑灰。
13層　黒褐色土(7.5YR3/2)：焼土塊極多量含有。壁崩れ土。
14層　明褐色土(10YR6/6)ベースに黒褐色土(10YR3/2)混在土：焼土粒・炭化粒少量含有。
15層　黒色土(10YR2/1)：炭化塊多量含有。23号焼成坑灰。
16層　黒褐色土(10YR3/2)ベースににぶい黄褐色土(10YR5/4)混在土：焼土塊多量、炭化粒多め含有。壁崩れ土。
17層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊極多量混在。被熱強く焼き締まる。5号焼成坑床貼土。
17′層　焼土塊は多量程度で、焼き締まり弱い。壁際貼土。
18層　黄褐色土(10YR5/6)：含有物なく、しまりあり。床下貼土。
19層　暗褐色土(10YR3/3)：黄褐色土塊多量、炭化塊・焼土塊多め含有。床下土坑埋土。
20層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊・炭化塊多め含有。床下土坑埋土。
21層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊多量、炭化塊・黄褐色土塊多め含有。床下貼土。
22層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊極多量含有。被熱強く一部褐色化する。23号焼成坑貼床土。
23層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土塊多量、炭化塊多め含有。壁際貼土。
24層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊多量含有。しまりあり。床下貼土。
25層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊・炭化塊多量含有。床下土坑埋土。
26層　黒褐色土(10YR3/2)：黄褐色土塊・焼土塊多量、炭化塊多め含有。床下土坑埋土。
27層　暗褐色土(10YR3/3)：黄褐色土大塊極多量、焼土塊多め、炭化塊少量含有。床下土坑埋土。

〈床下土坑と堀り方〉

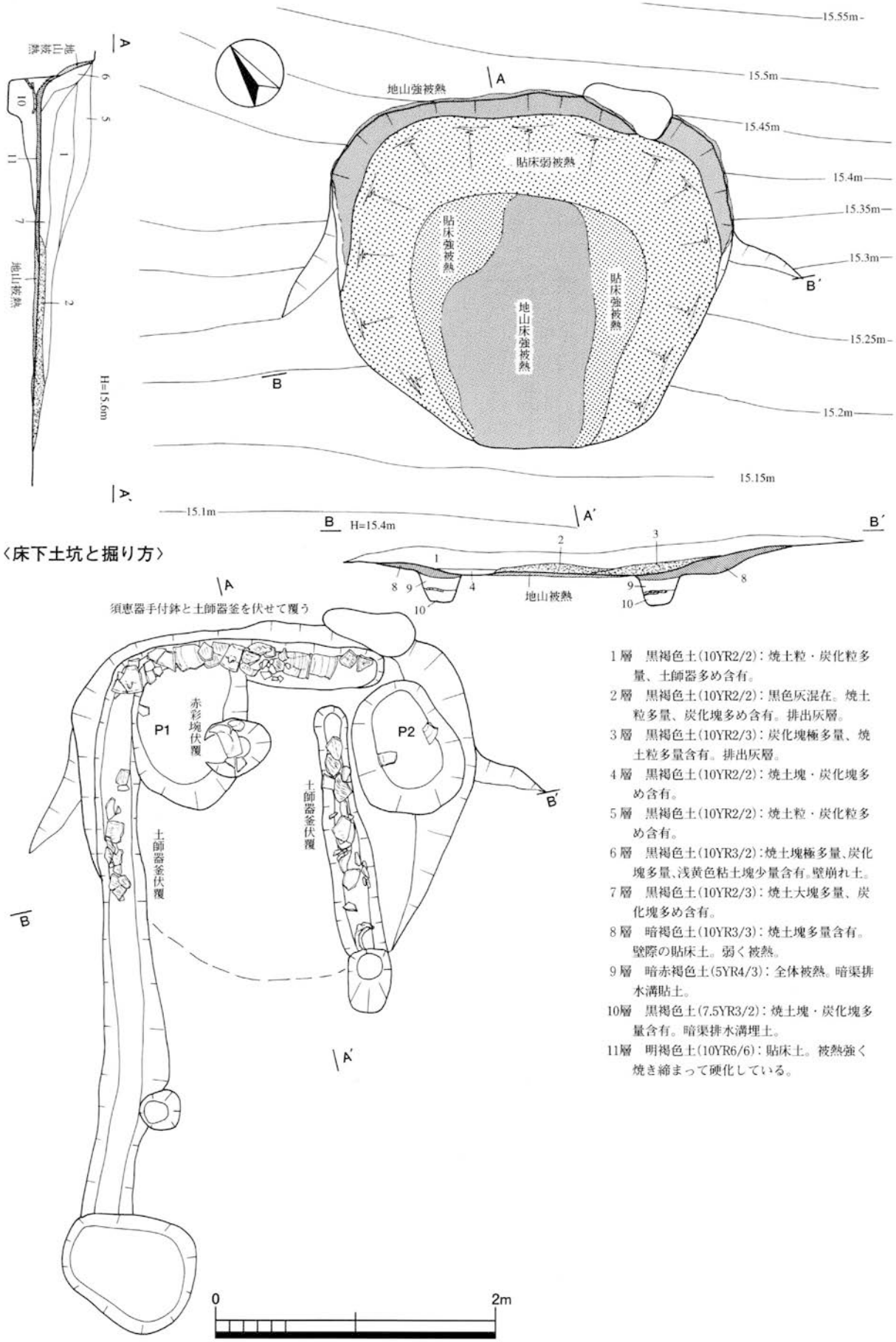


〈22号土師器焼成坑〉



1層　暗褐色土(7.5YR3/2)：焼土粒多量、炭化粒多め含有。
2層　黒褐色土(7.5YR3/2)：焼土粒・炭化粒多め、黄褐色土塊少量含有。
3層　暗褐色土(7.5YR3/3)：焼土粒多量、炭化粒・黄褐色土塊多め含有。

第87図　5号・23号土師器焼成坑平面・断面図（2）（1/50）／22号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）



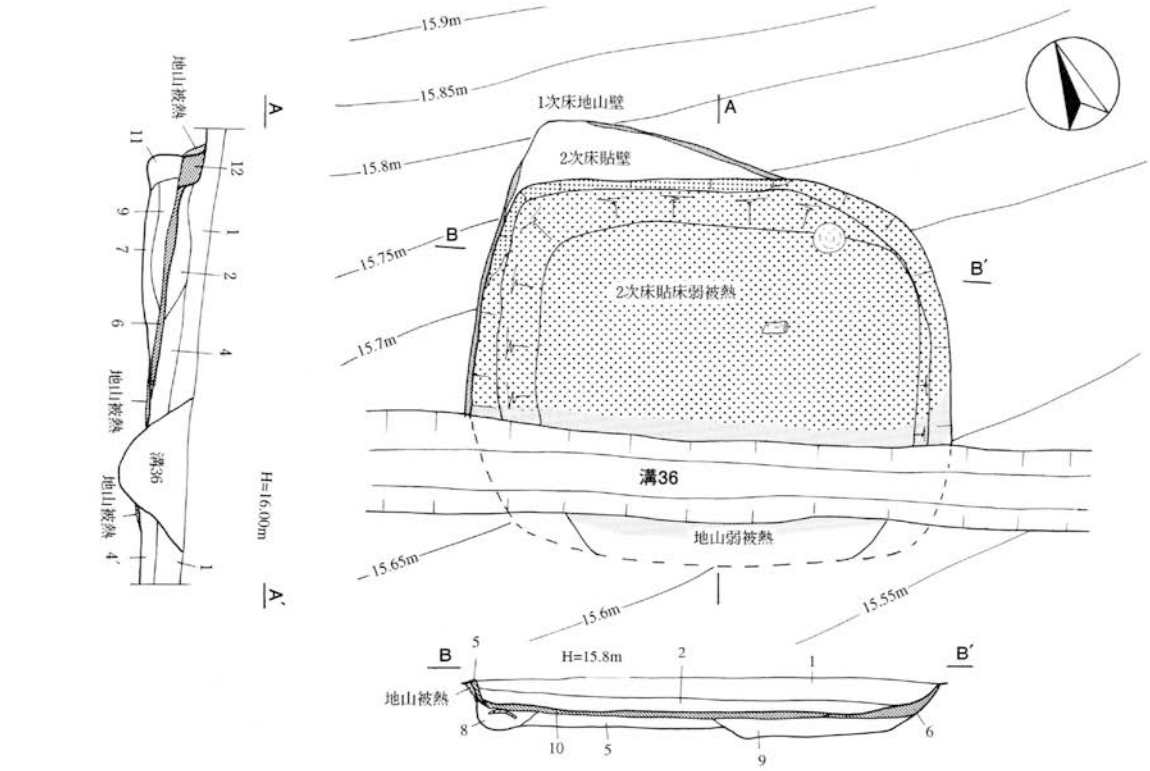
1層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒・炭化粒多量、土師器多め含有。
2層　黒褐色土(10YR2/2)：黒色灰混在。焼土粒多量、炭化塊多め含有。排出灰層。
3層　黒褐色土(10YR2/3)：炭化塊極多量、焼土粒多量含有。排出灰層。
4層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土塊・炭化塊多め含有。
5層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒・炭化粒多め含有。
6層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊極多量、炭化塊多量、浅黄色粘土塊少量含有。壁崩れ土。
7層　黒褐色土(10YR2/3)：焼土大塊多量、炭化塊多め含有。
8層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土塊多量含有。壁際の貼床土。弱く被熱。
9層　暗赤褐色土(5YR4/3)：全体被熱。暗渠排水溝貼土。
10層　黒褐色土(7.5YR3/2)：焼土塊・炭化塊多量含有。暗渠排水溝埋土。
11層　明褐色土(10YR6/6)：貼床土。被熱強く焼き締まって硬化している。

第88図　6号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

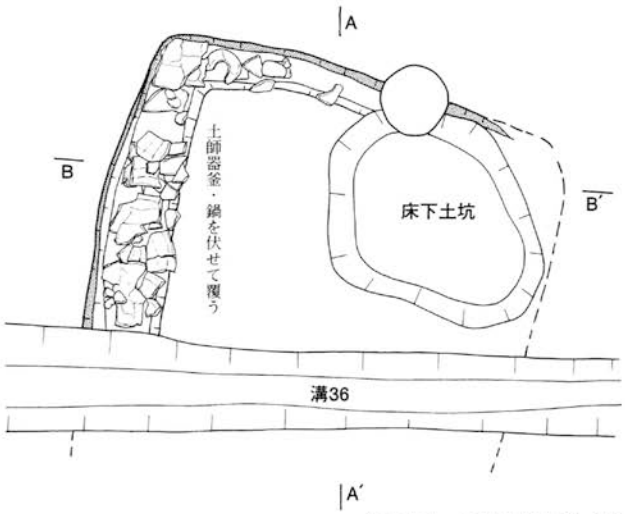
床した部分を中心に、床面下には地下施設がある。奥壁際から左側壁際そして斜面下方の焼成坑外へと伸びる溝が１本と、中央からやや右側壁に寄る形で奥壁際から前部へ伸びる溝が１本、そして奥壁近く床面に土坑が２つ掘られている。２本の溝は幅30㎝、深さ15～20㎝のしっかりした溝で、焼成坑の中では須恵器鉢Ａと土師器釜で溝を覆い、その上から貼土して暗渠にしている。焼成坑内の除湿を目的に掘られたものと考えられる。

床面での土師器の遺存は少ないが、手前半分の床面直上には灰層が薄く存在し、斜面下方の焼成坑外へ徐々に層を厚くする。埋土は土師器焼成灰原的な黒褐色土で、多量の土師器とともに焼土・炭化塊が混在する。斜面上方の２号土師器焼成坑の廃棄土とも考えられるが、時期がⅣ2古期と古い。２号土師器焼成坑の床下に存在する土坑群の時期と同じであり、同じような廃棄土坑として使われたのだろう。６号土師器焼成坑はこれよりやや古く、その型式の中でもやや古手に位置付けられるだろう。また、埋土中には焼成粘土塊が定量存在しており、繊維圧痕をもつもの16点を含む総数113点、総重量1.3kgが出土している。

８．７号土師器焼成坑（第89図）



〈1次床の床下排水溝〉



1層　暗褐色土(10YR3/4)：黄褐色土塊・焼土粒・炭化粒少量含有。
2層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土大塊多量、炭化塊多め、黄褐色土塊少量含有。
3層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：黄褐色土塊・焼土粒・炭化粒少量含有。
4層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土粒多め、炭化粒・黄褐色土塊少量含有。
4′層　黄褐色土塊多量含有。
5層　褐色土(7.5YR4/3)：焼土塊多量含有。貼床土。強被熱。
6層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：焼土塊多量、炭化粒少量含有。貼床土。被熱弱。
7層　黄褐色土(10YR5/6)：焼土塊・炭化塊少量含有。強く締まる。
8層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒多量含有。暗渠排水溝埋土。
9層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土塊・炭化塊多量、黄褐色土塊少量含有。
10層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊多量含有。弱被熱。暗渠溝貼床土。
11層　黄褐色土(10YR5/6)：暗褐色土少量混在。炭化塊多量、焼土塊少量含有。締まり有り。暗渠溝埋土。
12層　暗褐色土(10YR3/4)：焼土大塊極多量混在。締まり強く被熱受ける。貼壁土。

第89図　７号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

標高15.8ｍ付近に奥壁を設定して掘られる土師器焼成坑で、等高線に対して強く東に主軸を振る１次床から、２次床で等高線に沿うように主軸を変えて、改築されている。両床段階とも横長型隅丸方形プランで、前壁付近を溝36が切るため定かではないが、前壁の立ち上がらない斜面下方へ開口するタイプと考えられる。

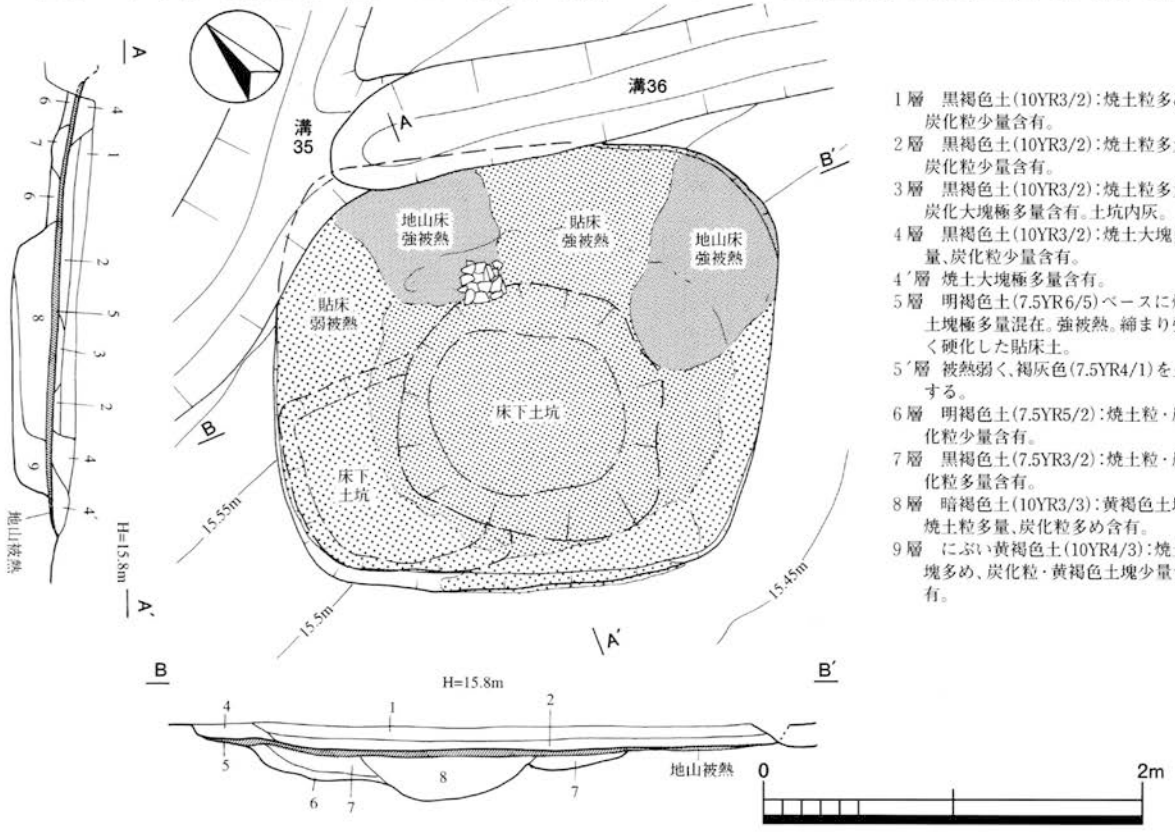
１次床の右側壁が２次床によって壊されているため、正確に規模を掴めないが、ほぼ２次床と同規模と判断する。２次床の規模は、縦軸長210㎝、横軸長255㎝㎝、奥壁深15㎝、床長縦195㎝×横220㎝、床面積(焼成床面積)4.1㎡である。奥壁はやや立ち気味、側壁はやや開き気味で、床は斜面下方へ若干傾斜する。床面及び壁面被熱は全体的に弱く、手前側1/4以外は貼床されている。床面の遺存土師器は少なく、焼成坑に伴う灰層も存在しない。覆土は暗褐色の埋土で、遺物の含有は少ない。その中では焼成粘土塊96点（うち有繊維圧痕１点）、総重量2.14kgは目立つ。２次床の貼床下には溝と土坑が掘られている。溝は１次床の奥壁際から左側壁際にかけて巡るもので、１次床時に掘られたものである。土師器の釜と鍋の破片を溝に伏せ、その上に床を貼る暗渠溝で、奥壁右側に掘られた径１ｍ程の浅い土坑に連結する。窯床下の土器はⅣ2新期に位置付けられるが、埋土中の土器はⅤ1期に下る可能性が高い。

当焼成坑の左側から斜面上方にかけて溝35が掘られている。焼成坑の壁際から80㎝程度の間隔をおいて存在しており、左側壁沿いから曲がって奥壁沿いへ、そしてそのまま東側へ14ｍ伸びる。幅40～50㎝、深さ50㎝前後のしっかりした溝で、１次床に軸があっている。当焼成坑を破壊して掘られる１号土器溜まりテラスとも軸があっているため、当焼成坑に伴うものではない可能性もあるが、溝内廃棄土器の時期が焼成坑の時期と一致しており、溝が掘られた当初は当焼成坑に伴うものであったと予想する。当焼成坑廃絶後、１号土器溜まりテラスに伴って拡張されたものだろう。

９．８号土師器焼成坑（第90図）

７号土師器焼成坑の西側斜面下方に存在する土師器焼成坑で、標高15.5ｍ付近、斜面に対し東に軸を振って築かれる。北側の一部が溝35と溝36に切られており、７号土師器焼成坑に先行する焼成坑である。

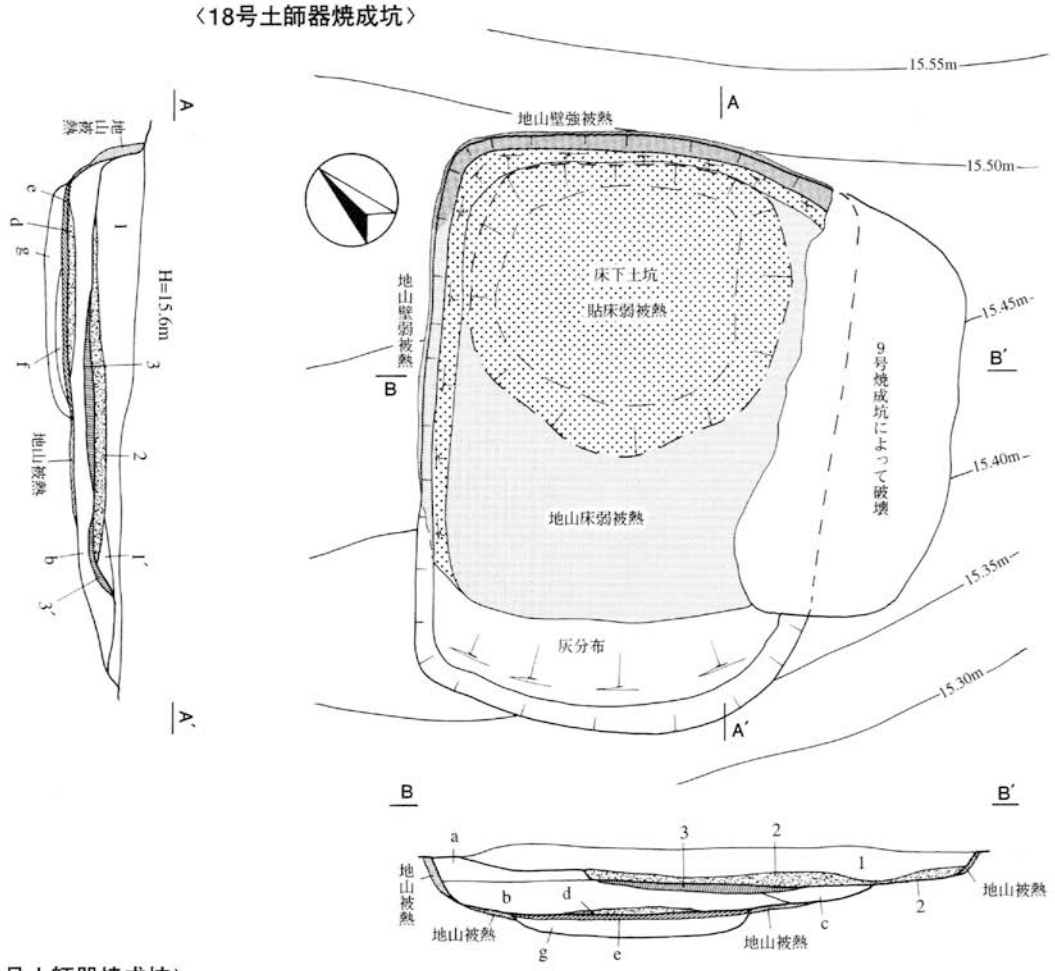
プランは横長型隅丸方形で、北側が広く台形状を呈す。壁の立ち上がりが極度に低いため、奥壁がどちらにあるか不明だが、床面が斜面上方に向けて上がり気味に傾斜していることから斜面上方を奥壁と考える。前部も若



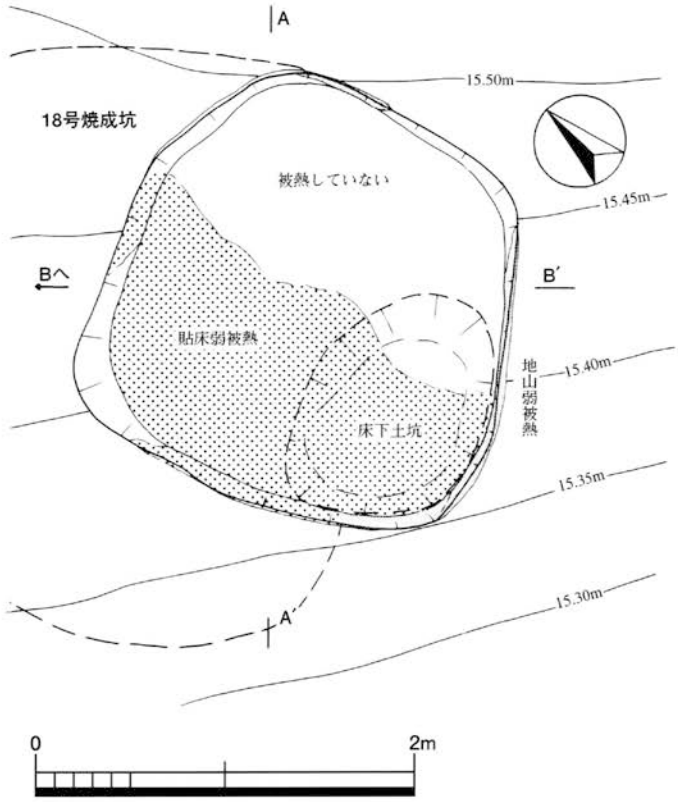
1層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒多め、炭化粒少量含有。
2層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒多量、炭化粒少量含有。
3層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒多量、炭化大塊極多量含有。土坑内灰。
4層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土大塊多量、炭化粒少量含有。
4′層　焼土大塊極多量含有。
5層　明褐色土(7.5YR6/5)ベースに焼土塊極多量混在。強被熱。締まり強く硬化した貼床土。
5′層　被熱弱く、褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。
6層　明褐色土(7.5YR5/2)：焼土粒・炭化粒少量含有。
7層　黒褐色土(7.5YR3/2)：焼土粒・炭化粒多量含有。
8層　暗褐色土(10YR3/3)：黄褐色土塊・焼土粒多量、炭化粒多め含有。
9層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：焼土塊多め、炭化粒・黄褐色土塊少量含有。

第90図　８号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

〈18号土師器焼成坑〉



〈9号土師器焼成坑〉



《9号焼成坑土層註》
1層　灰黄褐色砂質土(10YR4/2)：土師器・炭化粒多量、焼土粒多め含有。
1′層　炭化小塊・焼土小塊多量含有。
2層　黒褐色土(10YR2/2)：黒色灰混在。炭化塊少量含有。土坑内灰。
3層　赤褐色土(5YR4/8)：強く被熱して焼土化。焼土塊混在。a層を床土とし、それが被熱したもの。
3′層　被熱弱く、にぶい赤褐色(5YR4/3)を呈す。

《18号焼成坑土層註》
a層　灰黄褐色土(10YR4/2)：明黄褐色土混在。焼土粒・炭化粒少量含有。
b層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)：黒褐色土(10YR3/2)と明黄褐色土塊を多量混在。焼土塊・炭化粒多め含有。
c層　黒褐色土(7.5YR3/1)と暗赤褐色焼土(5YR3/3)との混在土：焼土塊極多量、炭化粒多め含有。焼成坑壁破壊の際の埋め土。
d層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊多量、炭化塊多め含有。土坑内灰層。
e層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊極多量、炭化粒多め含有。被熱した貼床土。しまりあり。
f層　明黄褐色土(2.5YR7/6)：焼土粒・炭化粒少量含有。貼床土。
g層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土大塊多量、炭化粒多め含有。軟質でしまり欠く。床下土坑埋土。

第91図　9号・18号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

干立ち上がり、その部分でも壁が被熱している。規模は縦軸長232cm、横軸長(奥)260cm、(前)232cm、奥壁深10cm、床長縦230cm×横奥245・前225cm、床面積（焼成床面積）5.3㎡である。被熱は焼成坑全体に及び、前壁際床面が被熱弱いが、それ以外は比較的被熱強く、貼床部分でも硬質に焼き締まっている。ほとんどが貼床されており、地山のままは奥壁側の一部分のみ。前壁寄りの中央付近に径135cmの円形土坑、そして手前左壁際に浅い土坑が掘られる。床面に遺存する土師器は少なく、灰層も残っていない。覆土は埋土のみで、Ⅳ2古期の須恵器が混在する。埋土中の焼成粘土塊の混在は161点、総重量1.8kg、窯床下土坑にも17点混じる。

10. 9号・18号土師器焼成坑（第91図）

エ14Gr周辺に複数の土師器焼成坑が密集するが、当土師器焼成坑はその中で最も北に位置する。2基の焼成坑が重複しており、18号土師器焼成坑の埋土上に9号土師器焼成坑が築かれている。

18号土師器焼成坑は、標高15.50m付近の等高線に奥壁を設定し、等高線にほぼ直交して築かれる。左側壁が9号焼成坑によって破壊されているため、復元値ではあるが、平面プランは縦長型隅丸長方形、縦軸長316cm、横軸長(奥)223cm、(前)206cmのやや台形気味を呈す。奥壁深は40cmと深く、床長縦250cm×横202cm、床面積(焼成床面積)4.9㎡を測る。奥壁・側壁は直立気味に立ち上がり、前部は極めて緩い前壁(12度前後の58cmスロープ)をもつ。床面及び壁面の被熱は奥壁のみ強いが、他は被熱弱く、前壁のスロープ部分は灰の食い込みがあるだけで、被熱していない。床・壁ともに一部貼床が見られる。奥壁から側壁の壁立ち上がり部分と焼成坑の奥半分の床面にかけてで、床面貼床の地下には床下土坑が掘られる。横170cm、縦155cmの楕円形土坑で、10cm程度の浅い土坑である。焼土大塊を多量混在させるしまりのない暗褐色土が充填される。床面に灰層の遺存は少なく、焼成坑奥付近に限られ、土師器の混在も少ない。埋土から須恵器と土師器に混じって焼成粘土塊が出土している。有繊維圧痕3点を含む39点で、総重量0.4kgを測る。出土する須恵器からⅤ期と判断する。

9号土師器焼成坑は18号土師器焼成坑が埋った段階で北東側にずれて築かれる。斜面下方に奥壁を向ける逆向き構築の焼成坑で、斜面に対しやや西へ主軸を振る。平面プランは横長型隅丸方形で、縦軸長220cm、横軸長(奥)220cm、(前)170cm、奥壁深15cm、床長縦207cm×横(奥)193・(前)153cm、床面積3.6㎡を測る。壁は開き気味に浅く立ち上がり、前壁も同様の立ち上がりをもつ。床面及び壁面の被熱は弱く、床面は奥壁寄りの半分の区域のみ被熱する（焼成床面積2.2㎡）。18号焼成坑の上に築かれているため、床・壁ともにほとんどが貼土して作られており、さらに床面の奥左隅には床下土坑が掘られている。床面の広い範囲で灰層が遺存し、埋土・灰層中に焼成粘土塊が多数混在する。有繊維圧痕15点を含む169点で、総重量2.2kgを測る。出土する須恵器からⅤ期と判断するが、18号焼成坑よりも後出のⅤ2期に中心がありそうである。

11. 10号・11号・12号土師器焼成坑（第92・93図）

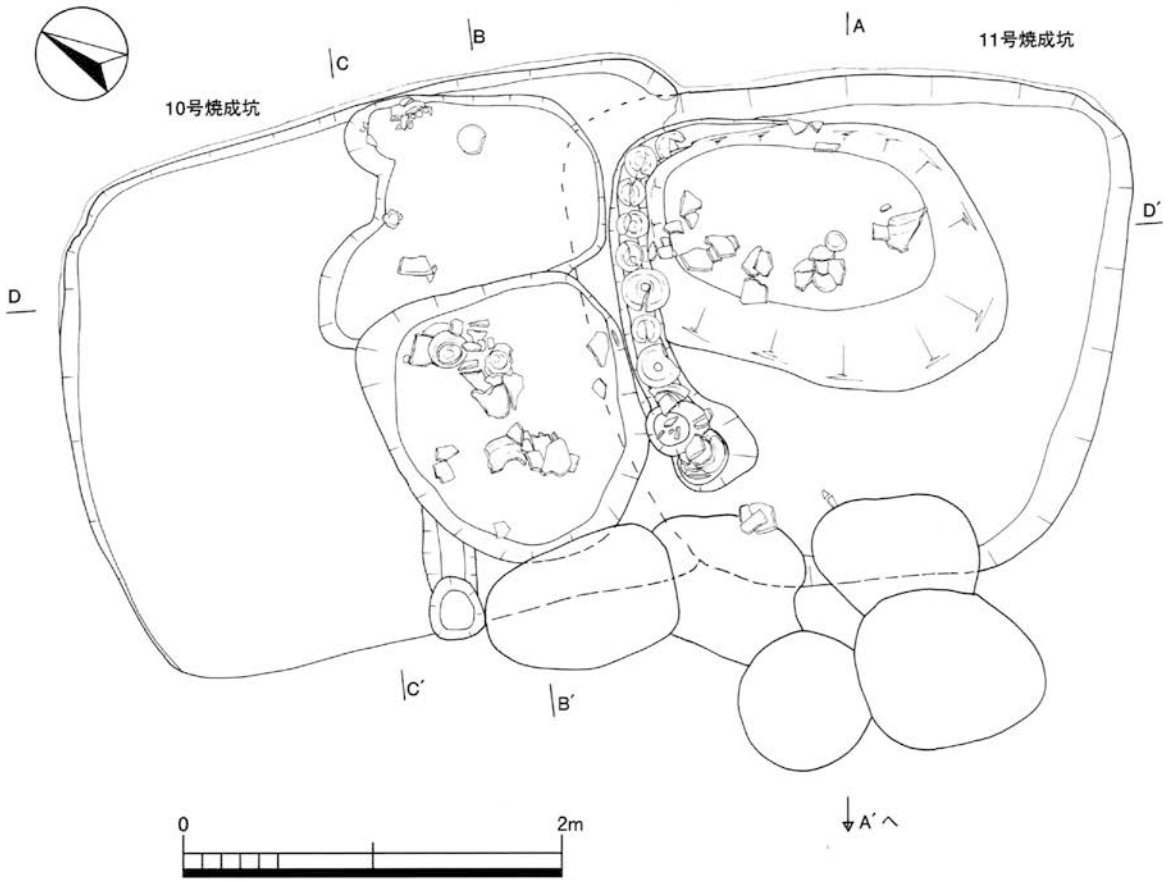
9・18号土師器焼成坑の南東側には10号・11号・12号の土師器焼成坑が築かれる。11号焼成坑を接点として、10号焼成坑が北西側に、12号焼成坑が南西側に重複する。10号焼成坑の右側壁を破壊して11号焼成坑が、さらに12号焼成坑の前庭部の上に11号焼成坑の前部がのる。等高線に対する土師器焼成坑の軸は3基とも類似しており、連続して構築されたものと予想する。

10号土師器焼成坑は、標高15.6m付近の等高線に奥壁を設定し、等高線にほぼ直交して築かれる。右側壁が11号焼成坑によって破壊されているため、復元値ではあるが、平面プランは横長型隅丸方形で、縦軸長278cm、横軸長(奥)305cm、(前)348cmのやや台形気味となる。奥壁深29cm、床長縦265cm×横(奥)300cm・(前)337cm、床面積8.4㎡を測る。奥壁は直立気味、側壁は45度程度に開いて立ち上がる。前部は極めて低い前壁が立つだけで、開口型に近い。床面及び壁面の被熱は奥壁全体と床面の中央付近が強く、側壁と床面の壁際と前壁寄りが弱い。前壁から50cm程度の範囲は被熱せず、焼成床面積は7.5㎡となる。壁面は地山のまま、床面は左半分のみ地山床だが、右半分には床下土坑が掘られ、貼床される。床下土坑は140cm幅の楕円形土坑が縦に2つ繋がったもので、その左側には溝が切られる。また、奥壁と側壁の立ち上がり箇所にスロープを付けるように貼土する。床面での土師器出土は少ないが、焼成坑内に広く灰層が遺存しており、灰層中に土師器と焼成粘土塊が多く混在する。灰層中の須恵器から当焼成坑の時期はⅣ2新期と判断する。

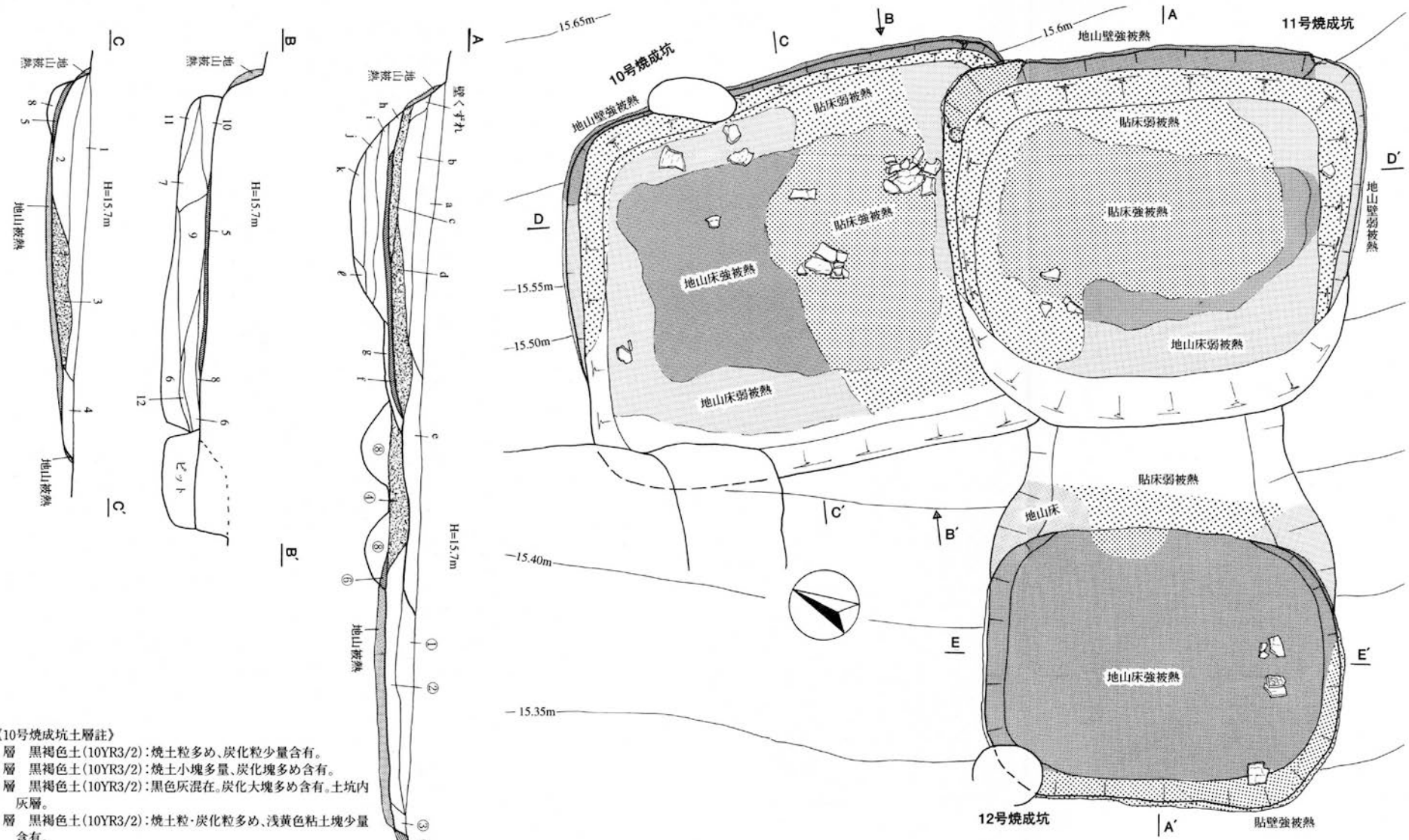
11号土師器焼成坑も10号焼成坑同様に、標高15.6m付近の等高線に奥壁を設定して、斜面にほぼ直交するよう

に築かれる。左側壁が10号焼成坑の右側壁を切って、さらに前壁が12号焼成坑の前庭部の上にのるようにして築かれる。平面プランはやや逆台形気味の横長型隅丸方形で、縦軸長260㎝、横軸長(奥)298㎝、(前)270㎝、奥壁深30㎝、床長縦216㎝×横(奥)273㎝・(前)240㎝、床面積（焼成床面積）5.5㎡を測る。奥壁は直立気味、側壁は45度程度に開いて立ち上がる。前部は極めて緩く立ち上がり、図よりもやや舌状に伸びて前壁が張り出す。前壁を除く壁面及び床面全体に被熱が及び、特に奥壁と床面中央付近が強く被熱する。10号焼成坑埋土に作られる壁面は貼壁で、床面も地下施設をもつ部分は貼床される。左側奥に寄って大型の床下土坑、そこから左側壁に沿って溝が掘られる。床下土坑は深さ20㎝、210㎝×130㎝の楕円形土坑。溝は幅20～25㎝、深さ20㎝で、溝の末端はピットが掘られる。溝には完形の坏Ｂ蓋と坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂが伏せて並べ置かれ、上から貼土して暗渠にしている。また、壁立ち上がり部分にスロープを付けるように貼土する。床面での土師器出土は少ないが、焼成坑内に厚く灰層が遺存しており、灰層中に土師器と焼成粘土塊が多く混在する。焼成粘土塊は10号焼成坑と合わせ、有繊維圧痕10点を含む127点で、総重量1.5㎏を測る。窯床下土坑からも出土しており、10号焼成坑で28点、11号焼成坑で30点出土する。灰層中の須恵器の時期から当焼成坑はⅣ2新期と判断するが、暗渠蓋に使われた須恵器も同様の時期である。

12号土師器焼成坑は斜面下方に奥壁を向ける逆向き構築の焼成坑で、奥壁は標高15.35ｍ付近のラインに沿って築かれる。極めて床面被熱が強く、浅いことが特徴である。焼成坑の平面形は横長型隅丸方形プランだが、開口する前部から側壁が伸びて前庭部を形成するタイプである。焼成坑の規模は縦軸長200㎝、横軸長223㎝、奥壁深10㎝、床長縦180㎝×横222㎝、床面積（焼成床面積）3.9㎡を測る。壁の立ち上がりは緩く、前部は開口する。前部開口部分で側壁は狭まるが、さらに手前に側壁が伸びて、11号焼成坑の前壁の下へと伸びる。焼成坑の末端からさらに前庭部部分30㎝の範囲まで側壁・床面ともに被熱を受け、弱く地山が焼土化している。被熱が焼成坑部分と異なるため、この部分まで焼成面積に入れていないが、場合によってはここまで拡張して使われた可能性をもつ。奥壁付近のみ貼壁して作られるが、その他は地山のままで、床面の被熱層は最大で10㎝に及ぶ。



第92図　10・11号土師器焼成坑床下排水溝・床下土坑平面図（1/40）



《10号焼成坑土層註》
1層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒多め、炭化粒少量含有。
2層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土小塊多量、炭化塊多め含有。
3層　黒褐色土(10YR3/2)：黒色灰混在。炭化大塊多め含有。土坑内灰層。
4層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒多め、浅黄色粘土塊少量含有。
5層　明褐色土(7.5YR5/6)：硬質に焼結した貼床土。
6層　黒褐色土(10YR3/2)ベースに明黄褐色土塊(2.5Y7/6)混在。炭化塊・焼土塊多め含有。
7層　褐色土(7.5YR4/4)：焼土粒極多量、焼土塊多め、炭化粒少量含有。
8層　黒色土(7.5YR1.7/1)：黒色灰層。炭化小塊極多量含有。
9層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒極多量、焼土塊・炭化塊多量含有。
10層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化塊多量、焼土粒少なめ含有。
11層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化粒多量、焼土粒多め含有。
12層　黒色炭化材の層。

《11号焼成坑土層註》
a層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒少量含有。
b層　黒褐色土(10YR3/2-2/2)：焼土小塊多め、炭化粒少量含有。
c層　黒色土(10YR2/1)：黒色灰混在。炭化塊多め含有。土坑内灰層。
d層　黒色土(10YR1.7/1)：炭化塊少量混在の黒色灰層。焼土塊少量含有。かき出し灰層。
e層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒・炭化粒多め含有。
f層　明褐色土(7.5YR5/8)：硬質に焼結した貼床土。ところどころ黒褐色土が混在する。
g層　黒色土(7.5YR2/1)：炭化粒多量、焼土粒少量含有。被熱してやや焼土化している部分有り。
h層　黒褐色土(7.5YR3/1)：炭化粒極多量、焼土粒多量含有。被熱弱く、ほとんど焼土化していない。壁際貼床土。
i層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒多め含有。締まり強い。
j層　明黄褐色土大塊(2.5Y7/6)ベースにして、にぶい黄色土(2.5Y6/3)が混在する土層。焼土粒少量含有。締まり強い。
k層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土粒・炭化粒多め含有。しまりなし。
l層　浅黄色土(2.5Y7/3)：焼土粒・炭化粒少量含有。

《12号焼成坑土層註》
①層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒多量、炭化粒少量含有。
②層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土粒多め、炭化粒少量含有。
③層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土粒多量含有。
④層　黒色土(10YR2/1)：炭化小塊多量、焼土粒多め含有。かき出し灰層。
⑤層　暗褐色土(10YR3/3)：焼土小塊多量含有。壁崩れ土。
⑥層　橙色土(7.5YR6/8)：硬質に焼結した貼床・壁土。
⑦層　灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土粒少量含有。被熱受ける。
⑧層　黒褐色土(10YR3/2)：黄褐色土混在。焼土粒・炭化粒含有。他の土坑覆土。

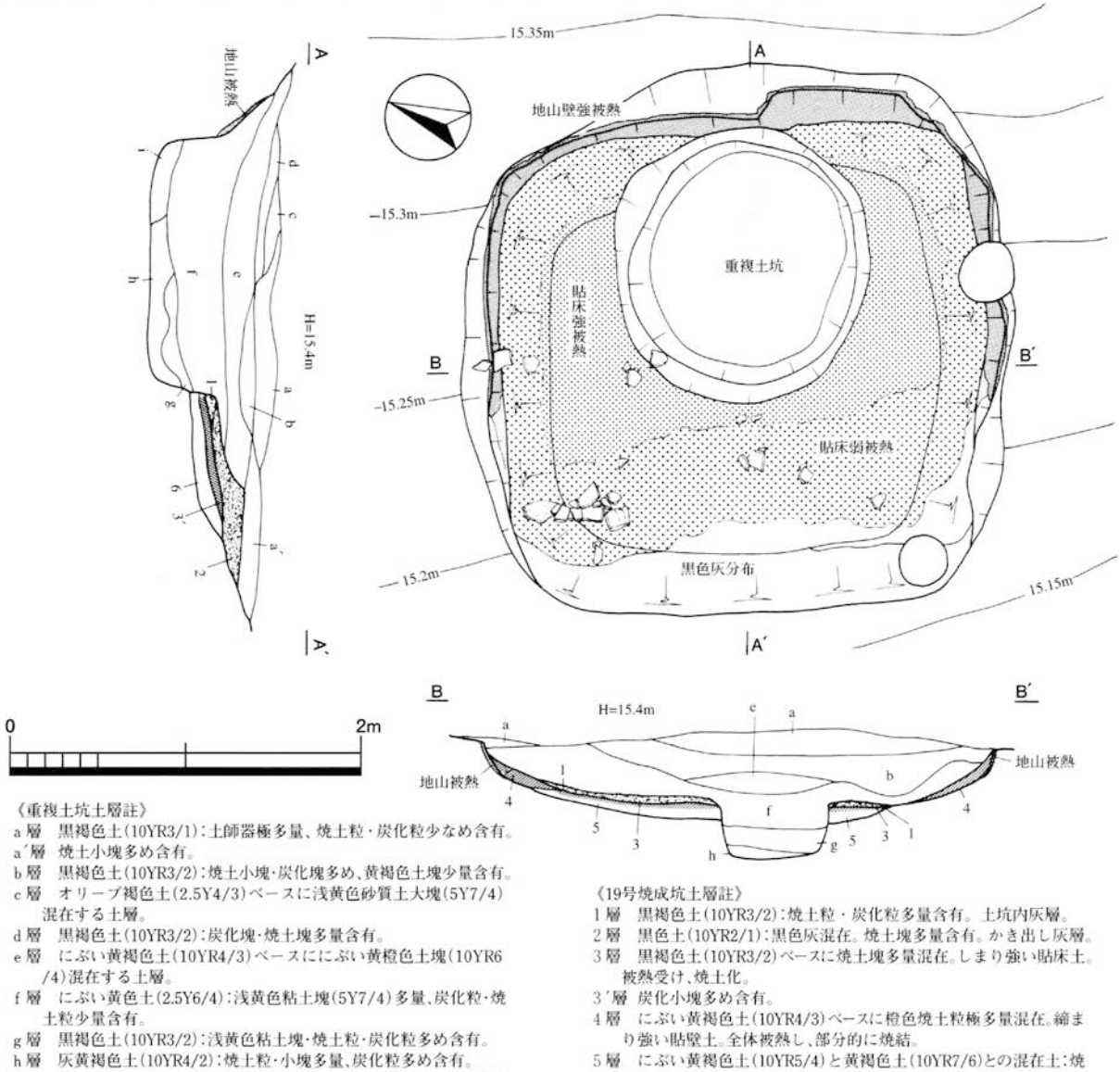
第93図　10号・11号・12号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

床面での土師器や灰層の遺存はなく、床に直接埋土がのる。埋土中には焼成粘土塊が多量に混在しており、有繊維圧痕12点を含む291点で、総重量3.2kgを測る。埋土中の須恵器からⅣ2古期からⅣ2新期に位置付け可能で、3基の焼成坑の中では最も古く位置付けられる。

10号・11号土師器焼成坑の山側、50～60cm上には幅40～90cm、深さ10cm程度の溝が掘られている。7号焼成坑の山側を巡る溝35の南東側末端にあたる箇所で、両焼成坑の奥壁に沿って走る。雨水排水の目的で掘られた溝と考えられる。溝内廃棄土器はⅣ2新期～Ⅴ2期と幅をもつため、最初から7号焼成坑まで伸びていた可能性は低く、10・11号焼成坑が築かれた段階では、この部分のみで掘られた可能性をもつ。

12. 19号土師器焼成坑（第94図）

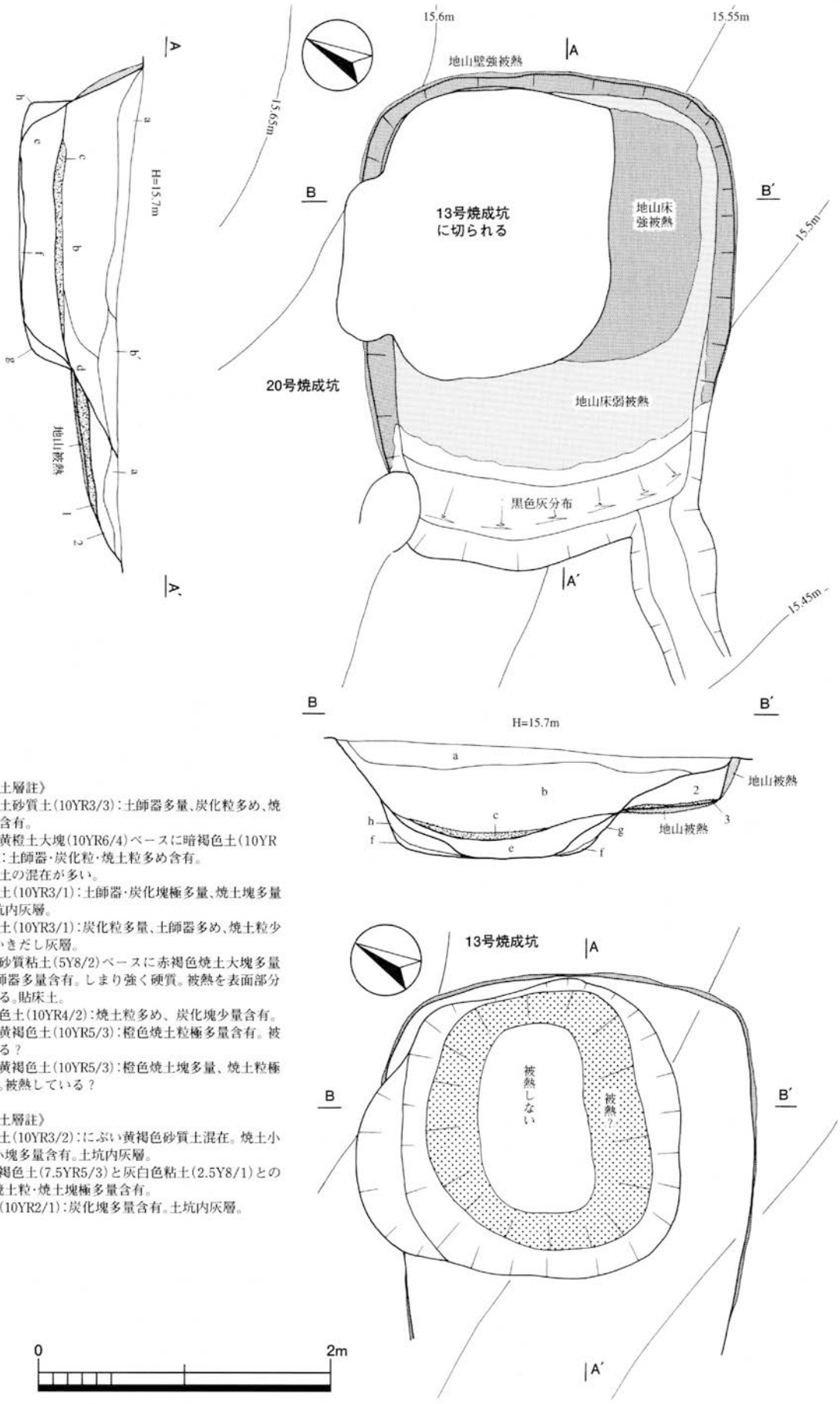
標高15.32m付近の等高線に奥壁を設定して、斜面に直交するように築かれる。奥壁が12号土師器焼成坑の奥壁と接しており、2基連続して構築されたものと考えられる。平面プランは横長型隅丸正方形で、縦軸長293cm、横軸長302cm、奥壁深は40cmと深い。床長縦235cm×横265cm、床面積6.0㎡を測る。奥壁・両側壁とも地山壁は直立気味だが、立ち上がり部分に貼土して緩くしており、20度程度の傾斜となる。前部は緩く立ち上がり、前壁状となって、被熱していない。この部分の床には灰の食い込みが見られ、焼成床面積はこの部分を除く5.3㎡となる。被熱は特に奥壁と床面の奥壁寄りで強く、壁際と側壁前壁際で弱い。床面は全面が貼床で、壁立ち上がり付



《重複土坑土層註》
a層　黒褐色土(10YR3/1)：土師器極多量、焼土粒・炭化粒少なめ含有。
a′層　焼土小塊多め含有。
b層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土小塊・炭化塊多め、黄褐色土塊少量含有。
c層　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)ベースに浅黄色砂質土大塊(5Y7/4)混在する土層。
d層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化塊・焼土塊多量含有。
e層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)ベースににぶい黄橙色土塊(10YR6/4)混在する土層。
f層　にぶい黄色土(2.5Y6/4)：浅黄色粘土塊(5Y7/4)多量、炭化粒・焼土粒少量含有。
g層　黒褐色土(10YR3/2)：浅黄色粘土塊・焼土粒・炭化粒多め含有。
h層　灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土粒・小塊多量、炭化粒多め含有。
i層　明黄褐色土(10YR6/6)：にぶい黄色土混在。炭化粒・焼土粒少量含有。

《19号焼成坑土層註》
1層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒多量含有。土坑内灰層。
2層　黒色土(10YR2/1)：黒色灰混在。焼土塊多量含有。かき出し灰層。
3層　黒褐色土(10YR3/2)ベースに焼土塊多量混在。しまり強い貼床土。被熱受け、焼土化。
3′層　炭化小塊多め含有。
4層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)ベースに橙色焼土粒極多量混在。締まり強い貼壁土。全体被熱し、部分的に焼結。
5層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)と黄褐色土(10YR7/6)との混在土：焼土小塊・炭化小塊多め含有。
6層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土小塊・炭化小塊多量含有。

第94図　19号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）



《13号焼成坑土層註》
a層　暗褐色土砂質土(10YR3/3)：土師器多量、炭化粒多め、焼土粒少量含有。
b層　にぶい黄橙土大塊(10YR6/4)ベースに暗褐色土(10YR 3/3)混在：土師器・炭化粒・焼土粒多め含有。
b′層　暗褐色土の混在が多い。
c層　黒褐色土(10YR3/1)：土師器・炭化塊極多量、焼土塊多量含有。土坑内灰層。
d層　黒褐色土(10YR3/1)：炭化粒多量、土師器多め、焼土粒少量含有。かきだし灰層。
e層　灰白色砂質粘土(5Y8/2)ベースに赤褐色焼土大塊多量混在。土師器多量含有。しまり強く硬質。被熱を表面部分的に受ける。貼床土。
f層　灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土粒多め、炭化塊少量含有。
g層　にぶい黄褐色土(10YR5/3)：橙色焼土粒極多量含有。被熱している？
h層　にぶい黄褐色土(10YR5/3)：橙色焼土塊多量、焼土粒極多量含有。被熱している？

《20号焼成坑土層註》
1層　黒褐色土(10YR3/2)：にぶい黄褐色砂質土混在。焼土小塊・炭化小塊多量含有。土坑内灰層。
2層　にぶい褐色土(7.5YR5/3)と灰白色粘土(2.5Y8/1)との混在土：焼土粒・焼土塊極多量含有。
3層　黒色土(10YR2/1)：炭化塊多量含有。土坑内灰層。

第95図　13号・20号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

近まで及ぶ。床下施設は特に掘られず、貼床土の下には焼土塊混在の黄褐色土が薄く貼られる。床面遺物は少なく、焼成坑中程から前壁にかけて遺存した灰層の中に土師器が混在する。焼成粘土塊は有繊維圧痕２点を含む79点で、総重量1.1kgを測る。埋土及び灰層混在の須恵器から当焼成坑はⅣ2新期に位置付けられ、12号焼成坑に近い。立地から考えて、構築順は19号焼成坑後に奥壁を接して逆向きに12号焼成坑を構築したものと考える。

当焼成坑が廃絶された段階で、床面の奥壁寄り中央に径155cmの円形土坑が掘られている。焼成坑内灰層上面から深さ40cm掘られるもので、土の採取が目的ではなかったかと考えている。土坑下底では白色系粘土が露出しており、陶土に使われたものだろう。土坑埋土には土器の混入は少なく、ここからも廃棄目的の土坑ではないことを物語る。

13. 13号・20号土師器焼成坑（第95図）

11号土師器焼成坑の南東側に存在する。２基の焼成坑が重複しており、20号土師器焼成坑の廃絶後、13号土師器焼成坑が築かれている。

20号土師器焼成坑は、標高15.6ｍ～15.5ｍ付近に、等高線に対し斜めに築かれる。左側壁の一部と床面の半分が13号焼成坑によって破壊されているため、復元値ではあるが、平面プランは縦長型隅丸長方形（逆台形タイプ）で、縦軸長340cm、横軸長（奥）245cm・（前）228cm。奥壁深は48cmと深く、床長縦270cm×横（奥）225cm・（前）200cm、床面積（焼成床面積）5.9㎡を測る。奥壁は約65度で立ち上がり、側壁は直立気味である。前部は緩い前壁（20度前後の60cmスロープ）をもつ。前壁の右端にはそのスロープを切るように幅40～50cm、深さ10～15cmの溝が掘られる。灰のかき出し溝ないしは風の取り入れ口として使われたのだろう。床面及び壁面の被熱は奥壁のみ強いが、他は被熱弱く、前壁のスロープ部分は灰の食い込みがあるだけで、被熱していない。床・壁の被熱は奥から175cmの範囲で強く、それより手前で弱くなる。貼床はなく、全て地山のままで、焼成坑内床面全体に薄く灰層の遺存が見られる。土師器の量は少なく、焼成粘土塊は極少量含有する程度。灰層に混在する須恵器からⅣ2古期と考える。

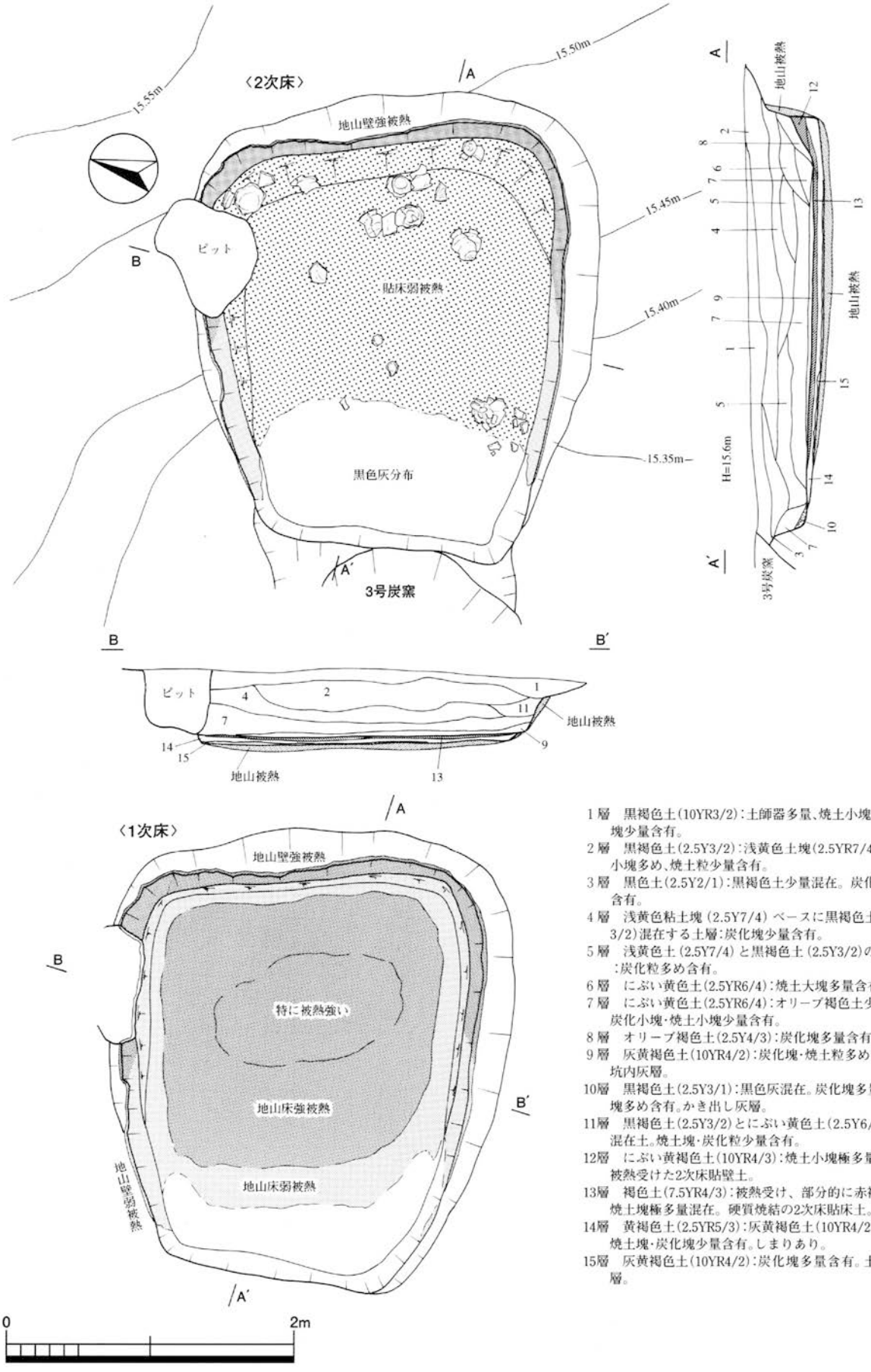
13号土師器焼成坑は20号土師器焼成坑が完全に埋まり切る前に北側隅に築かれる。深い土坑状のもので、底面付近の壁が一部被熱していると判断したことにより、当初は土師器焼成坑と認定したが、このタイプの焼成坑は当窯跡で確認できておらず、他の機能を想定することも可能である。規模は235cm×195cmの楕円形で、20号焼成坑の床レベルから35cm掘り込まれる。壁は底付近で直立気味だが、上半分は開いて立ち上がる。底面は平坦で、比較的しっかりと掘られている。被熱している可能性をもつのは掘削した地山壁ではなく、ｇ層・ｈ層で、焼土粒を極多量混在する層である。底にあたる部分は被熱を確認しておらず、仮にｇ・ｈ層が被熱していたとしても、焼成坑とする判断は難しいだろう。また、ｅ層も焼土塊を多量混在する層で、その上面が被熱しているようにも見られる。その直上に黒色灰層も存在し、土師器が多量廃棄されている。ただし、ｅ層自体に土器を多量混在する点や灰層中廃棄品にかなりの量の須恵器を含む点から、この面での焼成坑使用も難しいだろう。焼成坑の可能性ありという扱いではあるが、土坑内への焼土・土器等を含む土砂の一括廃棄と考える方が有力と言える。混在する須恵器からⅣ2古期と判断でき、焼成粘土塊の混在は土器のわりには少ない。繊維圧痕つき７点を含む62点、総重量１kgである。

14. 17号土師器焼成坑（第96図）

20号土師器焼成坑の南側にやや並列気味に存在する。標高15.5ｍ付近の等高線に奥壁を設定して、斜面に対し東に主軸を振って築かれる。床が２枚あり、１次床からほぼ水平に7～8cmかさ上げしている。

１次床は縦長型隅丸方形の逆台形タイプ。規模は縦軸長285cm、横軸長（奥）240cm・（前）175cm、奥壁深40cm（上端からは52cm）、床長縦255cm×横（奥）215cm・（前）152cm、床面積4.7㎡である。奥壁・側壁ともに直立気味で、前壁も同様の傾斜で立つ。前壁を含めそこから50cm奥までは焼けておらず、床面の９割程度が被熱する（焼成床面積4.3㎡）。被熱度合いは全体的に強く、壁際の床が弱い程度。特に、床の中央付近は顕著に焼結し、被熱層は6～7cmに及ぶ。前壁へ向かって灰層のかき出しが薄く見られ、床に炭化塊が食い込む。

２次床も１次床同様の平面プランで、規模も大きくは変わらない。床全体を貼っており、奥壁付近は貼土を厚くして床が斜めに立ち上がる。床面被熱は全体的に弱く、前壁から100cmは被熱せず、黒色灰が分布する程度。



1層　黒褐色土(10YR3/2)：土師器多量、焼土小塊・炭化小塊少量含有。
2層　黒褐色土(2.5Y3/2)：浅黄色土塊(2.5YR7/4)、炭化小塊多め、焼土粒少量含有。
3層　黒色土(2.5Y2/1)：黒褐色土少量混在。炭化粒少量含有。
4層　浅黄色粘土塊（2.5Y7/4）ベースに黒褐色土（2.5Y3/2）混在する土層：炭化塊少量含有。
5層　浅黄色土(2.5Y7/4)と黒褐色土(2.5Y3/2)の混在土：炭化粒多め含有。
6層　にぶい黄色土(2.5YR6/4)：焼土大塊多量含有。
7層　にぶい黄色土(2.5YR6/4)：オリーブ褐色土少量混在。炭化小塊・焼土小塊少量含有。
8層　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)：炭化塊多量含有。
9層　灰黄褐色土(10YR4/2)：炭化塊・焼土粒多め含有。土坑内灰層。
10層　黒褐色土(2.5Y3/1)：黒色灰混在。炭化塊多量、焼土塊多め含有。かき出し灰層。
11層　黒褐色土(2.5Y3/2)とにぶい黄色土(2.5Y6/4)との混在土。焼土塊・炭化粒少量含有。
12層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：焼土小塊極多量含有。被熱受けた2次床貼壁土。
13層　褐色土(7.5YR4/3)：被熱受け、部分的に赤褐色呈す。焼土塊極多量混在。硬質焼結の2次床貼床土。
14層　黄褐色土(2.5YR5/3)：灰黄褐色土(10YR4/2)混在。焼土塊・炭化塊少量含有。しまりあり。
15層　灰黄褐色土(10YR4/2)：炭化塊多量含有。土坑内灰層。

第96図　17号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

焼成床面積は3.8㎡と、１次床よりも狭い。床面直上には薄く灰層がのり、土師器が床面に多く遺存する。焼成粘土塊も比較的多く、繊維圧痕をもつ粘土塊４点を含み215点、総重量で2.5kg出土している。

出土した須恵器から２次床はⅣ2古期、１次床もほぼ同時期と言えるが、須恵器は古相を残している。

17号土師器焼成坑と20号土師器焼成坑が並列する斜面の上方には、等高線に平行して溝が掘られている。幅30㎝前後、深さ5～10㎝程度の小規模な溝で、斜面下方から溝22、溝21、溝20、溝19となる。４本が等間隔に平行して山側へと並んでおり、斜面下方の土師器焼成坑の雨水排水溝として掘削されたものだろう。

15. 21号・25号土師器焼成坑（第98・99図）

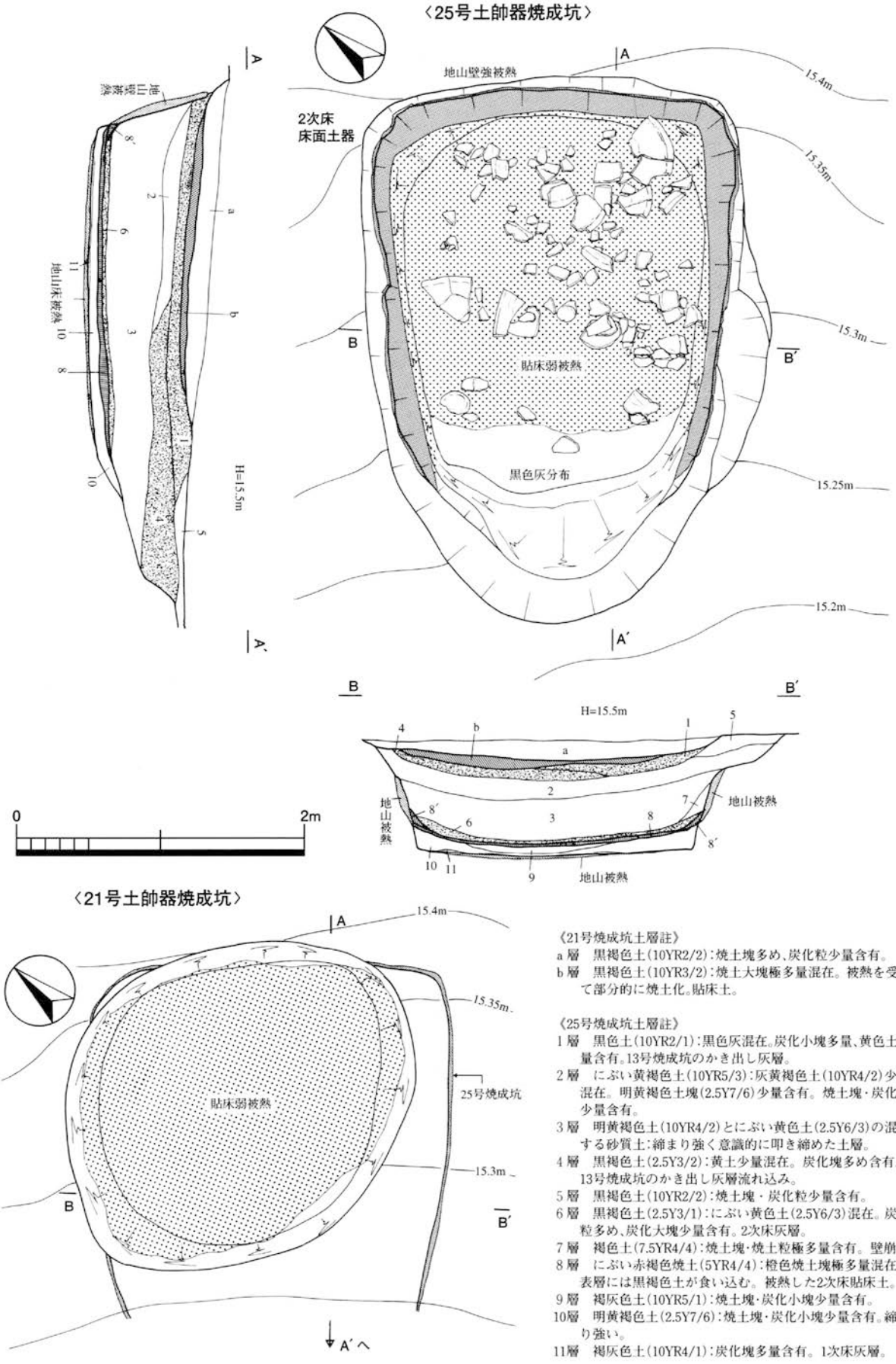
20号土師器焼成坑の斜面下方、前述した逆台形タイプの焼成坑が並ぶ群の中では最も斜面下方に位置する。標高15.4ｍの等高線に奥壁を設定し、斜面に直交して25号土師器焼成坑が築かれ、それが埋まった後、埋土上面に21号土師器焼成坑が築かれる。

25号土師器焼成坑は、縦長型隅丸長方形の逆台形タイプで、特に前部は張り出し状の前壁をもつ。床が２枚あり、１次床からほぼ水平に7～8㎝かさ上げしている。２次床の規模は縦軸長310㎝、前壁張り出しを含めると370㎝、横軸長(奥)250㎝・(前)185㎝、奥壁深70㎝(上端からは85㎝)、床長縦262㎝×横(奥)218㎝・(前)178㎝、床面積5.2㎡である。奥壁・側壁ともに直立気味で、前壁は15度で緩く立ち上がった後、末端で45度程度に立つ。張り出し状前壁には黒色灰や炭化塊が床に食い込み、被熱しない。床の被熱はスロープ状に立ち上がる箇所よりも手前で終わっており（焼成床面積4.4㎡）、側壁のみ被熱が伸びている。側壁被熱の途切れた部分から壁の傾斜は転換しており、張り出し部分との境と理解している。奥壁・両側壁の被熱は強いが、床の被熱は弱く、被熱層は２㎝前後である。被熱した床面には土師器が多数遺存し、その上を薄く灰層が覆っている。土師器は50%以上に復元可能なものが数個体あり、器種は鍋にほぼ限定される。大きな破片が多く、潰れた状態で出ている。床の離れた箇所で破片どうしが何個体か接合しており、割れてから動いていることがわかっている。これらの土師器をどのうように理解するか、２通りある。一つは焼成中の破損品で、取り残された可能性である。鍋に器種が限定されていたことは、１回の焼成では器種を絞り込んでいたことを物語るであろうし、破損品を全て取り除かず、次の焼成で道具として使うため、破片を床面に残しておいたことを示唆するだろう。もう一つは、これらの土師器が焼成坑の部材として敷かれた可能性である。須恵器窯では土器を敷く行為が行われているが、それは製品滑落防止や溶着防止のためで、土師器焼成坑には当てはまりにくい。土師器焼成坑ではかませ材的な焼成粘土塊や小破片程度で十分と思われ、土器敷き行為として有効なのは湿気防止機能だろう。当焼成坑がかなり深く掘られていることもその必要性があったことを物語る。以上、２つの考え方を述べたが、筆者は後者が有力と考えている。なお、この点については、考察で述べることとする。

１次床については、２次床と基本的な規模・平面プラン等同様だが、前壁の部分のみ異なる。２次床の前壁スロープが１次床よりも緩いため、１次床時の前壁は削られて残っていないが、当初は張り出し部分をもたない通常の前壁形態（45度程度で立ち上がる？）であったと思われる。床面は被熱弱く、被熱層は１㎝以下。薄くのった灰層を除去すると、地山が露出する感じである。奥壁・側壁に掘削時の工具痕が残っている。工具幅は15㎝前後が多く、上から縦に削られている。壁面は比較的奇麗に整形されている。

25号土師器焼成坑２次床が埋まってから21号土師器焼成坑が築かれるが、埋土は黄褐色土が一気に埋め戻されたものであり、埋め戻しの際にかなり叩き締めている。25号焼成坑埋土最上層には他の焼成坑からのかき出し灰層がのり（当焼成坑の斜面上方にある20号ないしは11号土師器焼成坑のかき出し灰層と予想する）、そのさらに上に、焼土塊を極多量混在する層がある。この層は黒褐色土を呈すため、被熱を確認することは難しいが、焼土塊の層が面的に確認できることから被熱面と捉え、21号焼成坑の床とした。規模は247㎝×220㎝の楕円形プランで、深さ10㎝程度の浅いすり鉢型不整形タイプである。被熱は弱く、奥前の方向が不明なものである。

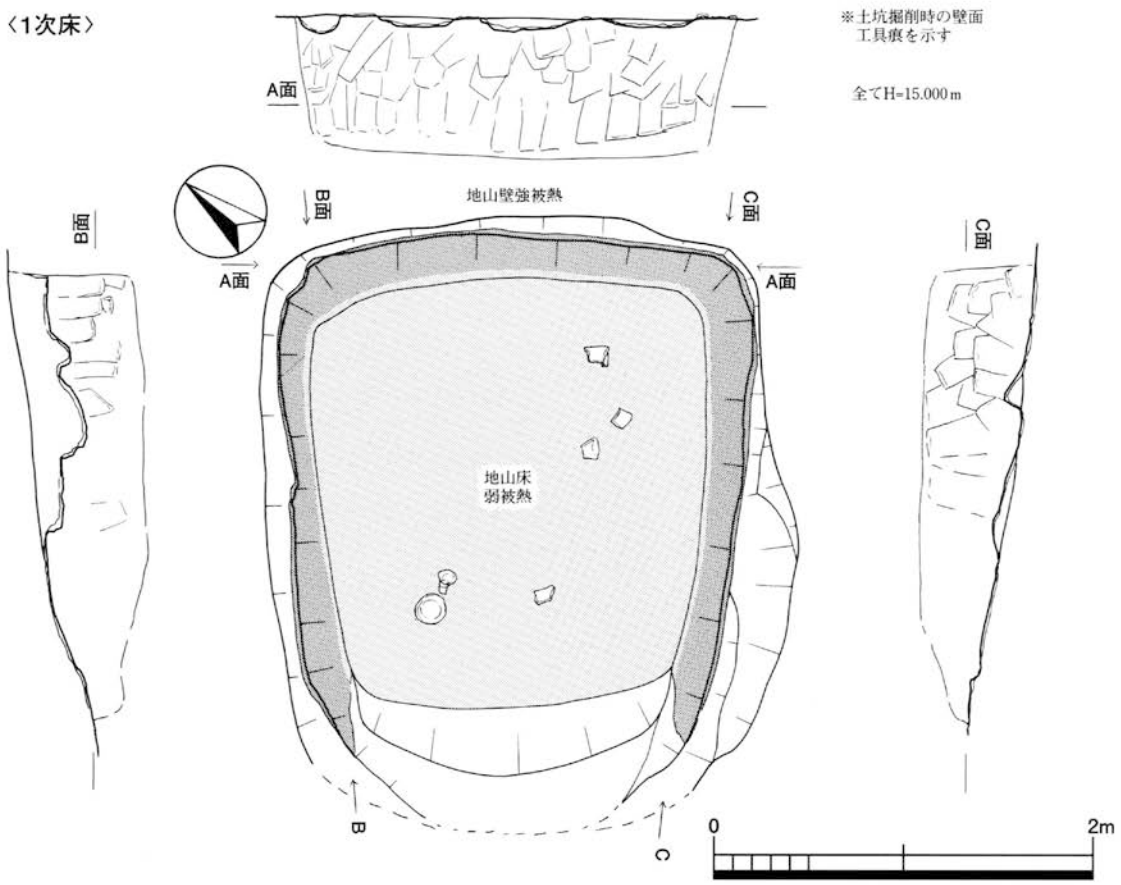
上記土師器焼成坑の時期について、混在する須恵器から求めれば、25号土師器焼成坑１次床、２次床、他の土師器焼成坑かき出し灰、21号土師器焼成坑ともにⅣ2古期の範疇に入り、時期差を見いだしにくい。25号土師器焼成坑１・２次床と埋土上層に堆積する灰層の存在から20号ないしは11号土師器焼成坑については、連続する操業と考えて無理はないが、21号土師器焼成坑の須恵器については、混在須恵器だけでは結論を出しにくい。焼成

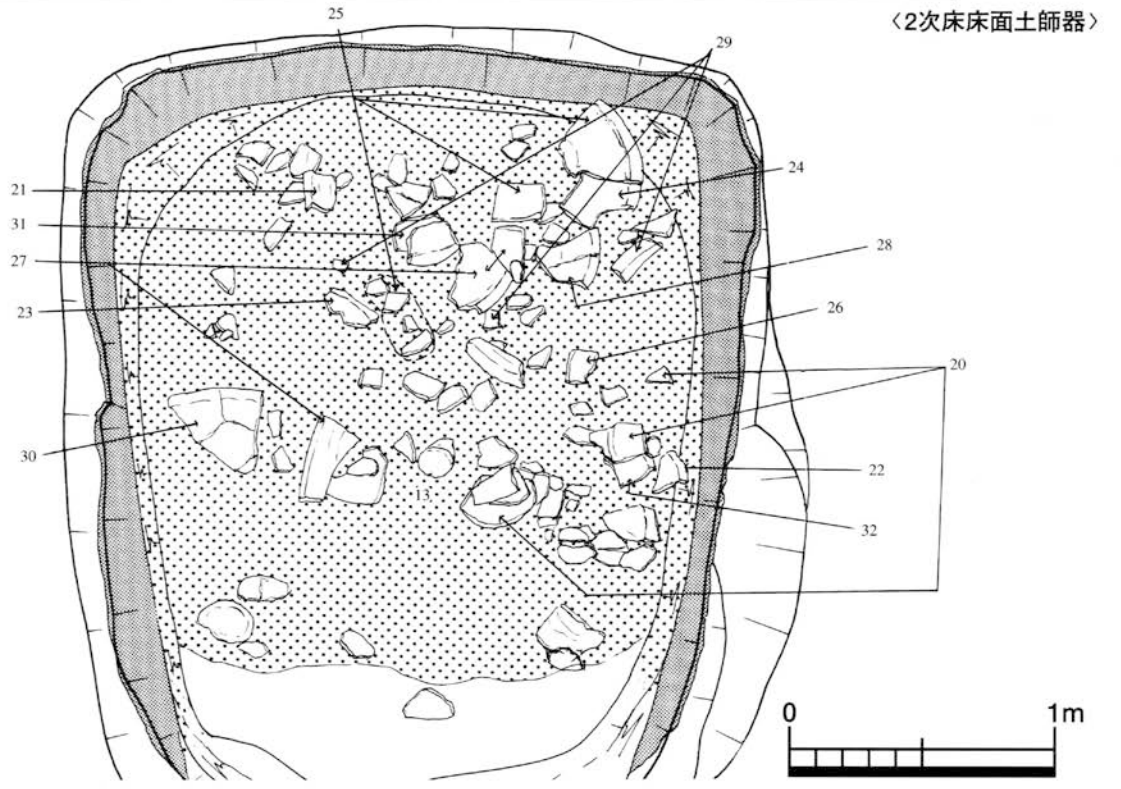


《21号焼成坑土層註》
a層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土塊多め、炭化粒少量含有。
b層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土大塊極多量混在。被熱を受けて部分的に焼土化。貼床土。

《25号焼成坑土層註》
1層　黒色土(10YR2/1)：黒色灰混在。炭化小塊多量、黄色土少量含有。13号焼成坑のかき出し灰層。
2層　にぶい黄褐色土(10YR5/3)：灰黄褐色土(10YR4/2)少量混在。明黄褐色土塊(2.5Y7/6)少量含有。焼土塊・炭化塊少量含有。
3層　明黄褐色土(10YR4/2)とにぶい黄色土(2.5Y6/3)の混在する砂質土：締まり強く意識的に叩き締めた土層。
4層　黒褐色土(2.5Y3/2)：黄土少量混在。炭化塊多め含有。13号焼成坑のかき出し灰層流れ込み。
5層　黒褐色土(10YR2/2)：焼土塊・炭化粒少量含有。
6層　黒褐色土(2.5Y3/1)：にぶい黄色土(2.5Y6/3)混在。炭化粒多め、炭化大塊少量含有。2次床灰層。
7層　褐色土(7.5YR4/4)：焼土塊・焼土粒極多量含有。壁崩れ。
8層　にぶい赤褐色焼土(5YR4/4)：橙色焼土塊極多量混在。表層には黒褐色土が食い込む。被熱した2次床貼床土。
9層　褐灰色土(10YR5/1)：焼土塊・炭化小塊少量含有。
10層　明黄褐色土(2.5Y7/6)：焼土塊・炭化小塊少量含有。締まり強い。
11層　褐灰色土(10YR4/1)：炭化塊多量含有。1次床灰層。

第97図　21号・25号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）





第98図　25号土師器焼成坑１次床平面・壁面図及び２次床床面土師器接合図

坑の形態から考えれば、一連の縦長型焼成坑逆台形タイプとは別であり、連続構築と考えないのが自然だろう。なお、土師器焼成坑内出土の焼成粘土塊であるが、25号焼成坑２次床で、下層灰を中心として繊維圧痕付き３点を含む36点の総重量0.5kg。１次床で灰層中心に、繊維圧痕付き１点を含む５点、総重量49kg。20号土師器焼成坑灰では繊維圧痕付き14点を含む44点、総重量0.9kgである。焼成坑内遺存土師器が多ければ、焼成粘土塊は多い傾向があり、25号焼成坑の土師器が灰層内取り残しとすれば、例外的に焼成粘土塊が少ない事例となろう。この点からも床面に敷き並べられた床面部材を想定したいのである。

16. 16号土師器焼成坑（第99図）

これまで述べた土師器焼成坑密集区から離れて、ウ16Gr付近に単独で築かれる。標高15.95～15.8ｍ付近、斜面の上方に位置し、斜面に対し45度近く主軸を振って掘られる。

平面形は前部開口型の横長型隅丸方形プランで、縦軸長210㎝、横軸長230㎝を測る。焼成坑の存在する区域の上面がやや削平された感があり、奥壁深８㎝は本来の深さではない。手前側の床面も途中で切れており、斜面下方に開口する形態もそのための可能性もある。残存部分からの復元値だが、床長縦200㎝×横215㎝の床面積（焼成床面積）4.2㎡と予想され、確認できる床面は全面が被熱している。部分的に強被熱箇所もあるが、概して弱く、壁は奥壁・側壁ともに強目である。壁は直立気味。床面・壁面ともに地山のままである。床面には少量ながら土師器が遺存し、焼成粘土塊も７点（160ｇ）出土する。混在する須恵器の時期はⅤ1期に該当し、斜面下方の10・11号焼成坑よりも新しく位置付けられる。

17. 14号・15号土師器焼成坑（第99図）

16号土師器焼成坑よりもさらに斜面上方、標高17ｍ以上のところ、比較的傾斜の急な区域に築かれる。２基の焼成坑が斜面上方と下方に連なるように重複しており、下方を14号焼成坑、上方を15号焼成坑としている。15号土師器焼成坑のかき出し灰層が14号土師器焼成坑の埋土上層に堆積しており、14号焼成坑→15号焼成坑の前後関係が明確である。

14号土師器焼成坑は、前部側が撹乱溝によって削られており、奥壁部分のみ残存する。横軸長272㎝の隅丸方形状で、横長型であると予想する。奥壁深32㎝と深いが、これは当箇所が急な斜面であるためで、水平な床面を確保するのに必要な深さである。床面は水平で、壁面は直立気味に立つ。奥壁・床面ともに基本は地山のままであるが、床面の左側に貼床が一部見られる。被熱状態は壁際の床面を除いて、強く、奥壁上端と床面で６～８㎝の被熱層を確認している。床面での遺存土師器は少なく、灰層の存在も確認できない。焼成粘土塊も４点のみである。

15号土師器焼成坑は、奥壁側の断面が崖面に露出しており、近間強氏の分布調査で、二ッ梨一貫山９号窯跡とされていたものである。横軸長250㎝の前部開口型で、方形基調の横長型と予想する。壁面はほぼ直立。地山のままを基本とし、壁面・床面が強く被熱している。床面の被熱が手前で途切れる付近より14号焼成坑にかけて、かき出し灰層が顕著に見られ、14号焼成坑上層に20～30㎝程堆積している。灰層の厚さのわりには混在する土師器は少なく、焼成粘土塊も43点、総重量370ｇである。

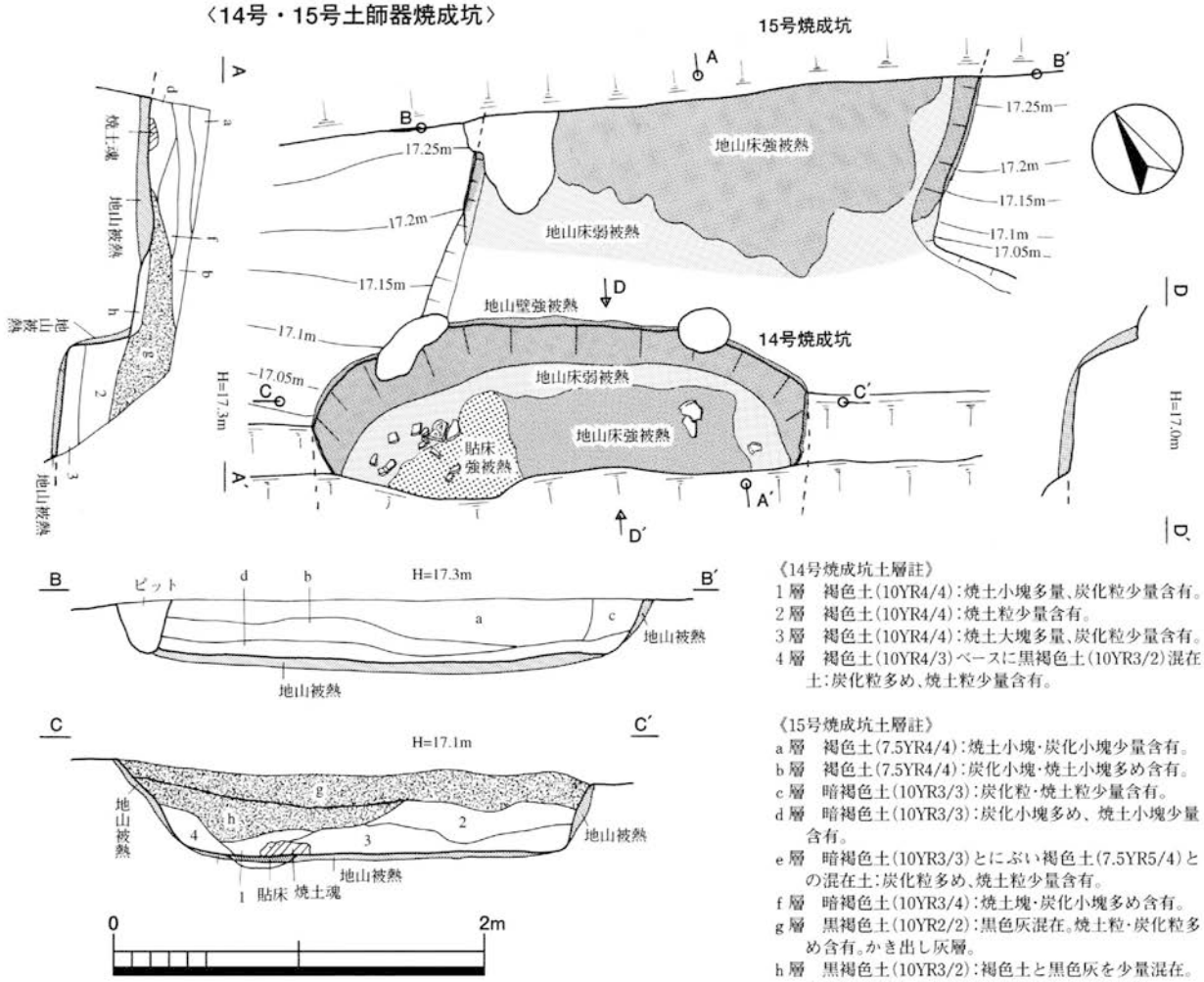
土師器焼成坑内から出土する須恵器・土師器の時期から、14号焼成坑はⅣ2古期、15号焼成坑はⅣ2新期～Ⅴ1期に位置付け可能である。

18. 27号土師器焼成坑（第100図）

15・16号焼成坑のさらに南東方向に単独で位置する。標高16.6ｍに奥壁を設定し、斜面に直交して築かれる焼成坑で、隅丸方形の平面形をもち、土坑自体は縦長に掘られる。手前側は撹乱溝に削られ、途中で途切れるが、このまま斜面下方に対し、開口する形態であったと予想する。

土坑は横340㎝、縦370㎝を測るが、壁・床の被熱は奥壁から220㎝までで、焼成の場として使われていたのはこの部分のみであり、手前側は前庭部と評価する。つまり、焼成坑としては横長型隅丸方形プランをもつもので、縦軸長220㎝、横軸長340㎝、奥壁深40㎝、床長縦208㎝×横320㎝、焼成床面積6.2㎡である。床面は水平で、前庭部との境から斜面下方へと極めて緩く傾斜してゆく。奥壁は直立気味、側壁は緩く立ち上がる。被熱は奥壁部分のみ強いが、床面及び側壁は弱く、前庭部は黒色灰が分布する。地山掘削のままを基本とするが、奥壁際から

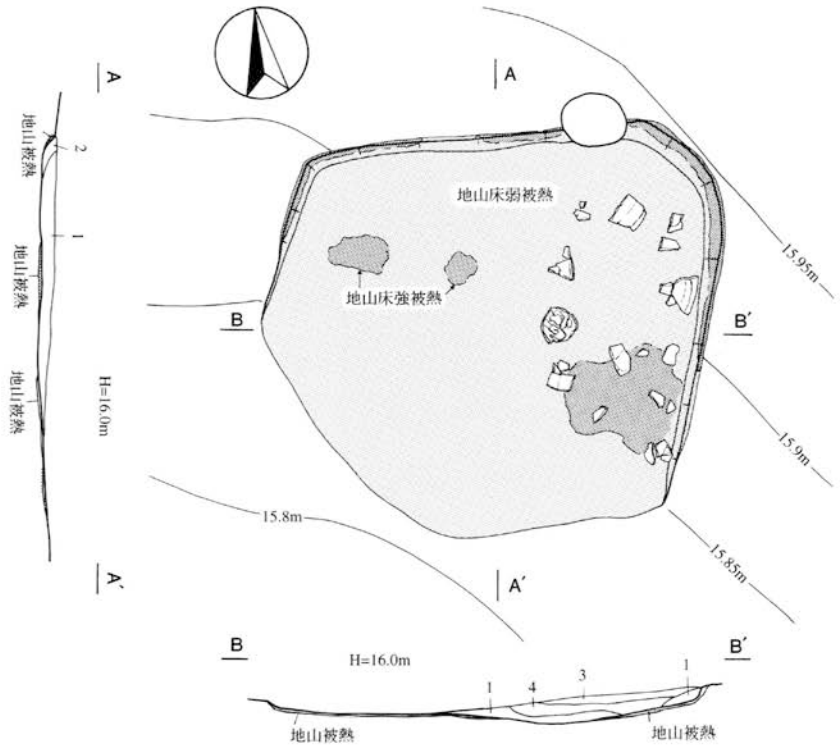
〈14号・15号土師器焼成坑〉



《14号焼成坑土層註》
1層　褐色土(10YR4/4):焼土小塊多量、炭化粒少量含有。
2層　褐色土(10YR4/4):焼土粒少量含有。
3層　褐色土(10YR4/4):焼土大塊多量、炭化粒少量含有。
4層　褐色土(10YR4/3)ベースに黒褐色土(10YR3/2)混在土:炭化粒多め、焼土粒少量含有。

《15号焼成坑土層註》
a層　褐色土(7.5YR4/4):焼土小塊・炭化小塊少量含有。
b層　褐色土(7.5YR4/4):炭化小塊・焼土小塊多め含有。
c層　暗褐色土(10YR3/3):炭化粒・焼土粒少量含有。
d層　暗褐色土(10YR3/3):炭化小塊多め、焼土小塊少量含有。
e層　暗褐色土(10YR3/3)とにぶい褐色土(7.5YR5/4)との混在土:炭化粒多め、焼土粒少量含有。
f層　暗褐色土(10YR3/4):焼土塊・炭化小塊多め含有。
g層　黒褐色土(10YR2/2):黒色灰混在。焼土粒・炭化粒多め含有。かき出し灰層。
h層　黒褐色土(10YR3/2):褐色土と黒色灰を少量混在。炭化小塊多め、焼土粒少量含有。かき出し灰層。

〈16号土師器焼成坑〉



1層　にぶい黄色土(2.5Y6/4):にぶい黄褐色土(10YR4/3)少量混在。焼土粒・炭化粒少量含有。
2層　にぶい黄褐色土(10YR5/4):炭化粒多め含有。
3層　黒褐色土(2.5YR3/2):黄土粒少量含有。
4層　にぶい黄褐色土(10YR4/3):炭化粒・焼土粒少量含有。

第99図　14号・15号・16号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

右側壁際に幅20cm、深さ15cmの溝が掘られており、上面に床を貼って暗渠にする。溝は側壁際付近で2本に分岐して曲がり、前庭部境付近まで伸びて末端に掘られるピットで連結する。床面での土師器遺存は少ないが、かき出し灰層中に土師器が混在している。ほぼⅤ2期に入るもので、焼成粘土塊も繊維圧痕付き1点を含む23点、総重量190gが出土している。焼成坑内埋土は奥壁側下層のみ焼成坑廃棄時の黄褐色土（5・6層）があるが、その上には斜面上方に存在する8号灰としたⅥ3期の黒褐色土層が流れ込んでおり、当焼成坑は意識的な埋め戻しが行われずに、放置されていた可能性をもつ。

27号土師器焼成坑の斜面上方には溝50が掘られる。幅40～50cm、深さ15～20cmの溝で、等高線に沿って、当焼成坑の山側を切る位置に存在している。ただ、溝内には多くのⅥ3期の須恵器・土師器が廃棄されており、土器から見れば、8号灰に伴う遺構と判断できる。しかしながら、上記の焼成坑内埋土状況から考えるに、当焼成坑は放置されていた可能性をもっており、溝も同様に、埋められずに8号灰層が堆積するまで放置されていた可能性が高い。溝の位置関係からは、当焼成坑に伴う溝と理解しており、27号土師器焼成坑の山側排水溝と位置付けるのが妥当だろう。

19. 28号土師器焼成坑（第100図）

27号焼成坑のさらに南東側、F区の最も東側に単独で築かれる土師器焼成坑である。標高16.3mの等高線に沿うように奥壁を設定し、斜面にほぼ直交して掘られており、斜面下方に前部が開口する形態をもつ。

平面形は横長型方形で、縦軸長215cm、横軸長260cm、奥壁深40cm、床長縦217cm×横245cm、床面積5.2㎡である。床面はほぼ水平だが、奥壁に向かって僅かに下がって行き、前部へは上がって行く。側壁はほぼ直立。奥壁は110度に内傾して立ち上がる。前部は僅かに壁状の低い立ち上がりをもつが、ほぼ開口する形態と言ってよい。被熱区域は焼成坑の奥から165cmまでで、手前は被熱を受けず、焼成床面積は3.9㎡となる。全体的に被熱弱く、焼成坑奥は黒色灰が分布する程度でほとんど焼土層を形成せず、強い被熱を確認できるのは奥壁の上端付近と床面の最も手前側である。焼成坑の遺存灰層は焼成坑奥付近で薄く存在し、燃え残った炭化木材（5cm径、45cm長）が残る。床面での土師器遺存は比較的多いが、焼成粘土塊は3点と少ない。床面土師器や混在須恵器からⅣ1期、その中でも古手の様相をもち、F区で確認される土師器焼成坑としては最も古く位置付けられる。

20. その他の土師器焼成坑（第72図・第73図・第78図・第100図）

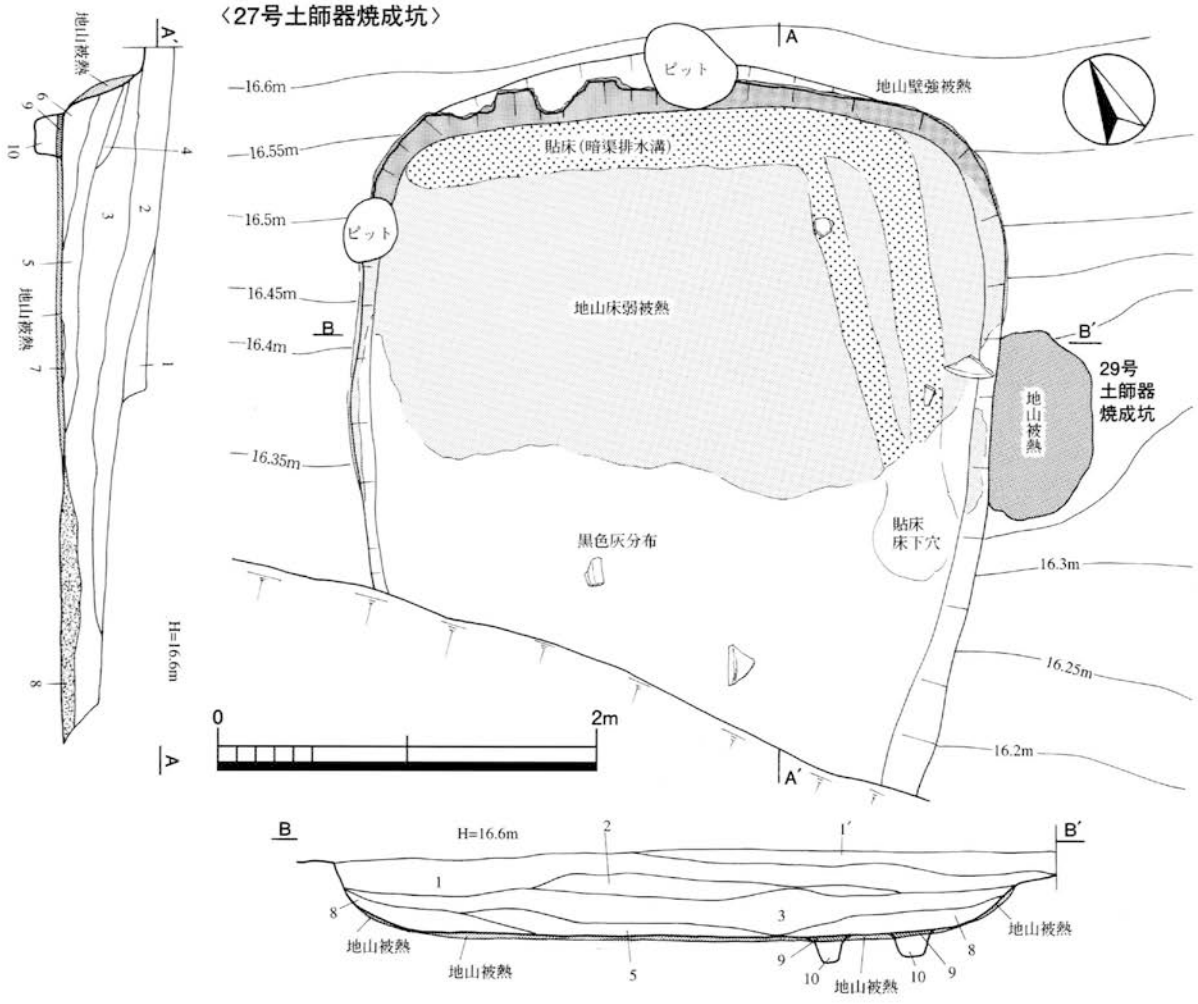
撹乱などで削平を受け、被熱焼土面の一部しか残存しない遺構が4カ所確認されている。ここでは全てを土師器焼成坑と認定しているが、他の被熱遺構である可能性も一部で残されている。

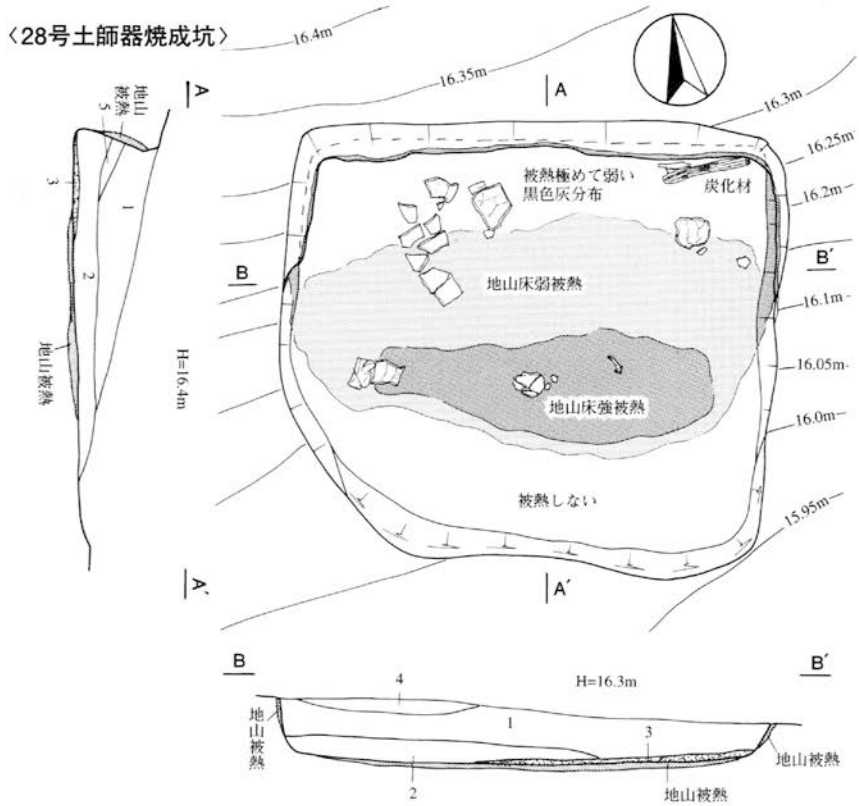
（1号土師器焼成坑） 標高16.3m付近で、溝や11号窯灰原に切られ、被熱床面の一部のみ残存する。被熱面に土師器が多く確認されることから、土師器焼成坑の可能性大と考えている。時期はⅣ2古期で、11号窯よりも古く位置付けられる。

（24号土師器焼成坑） エ5Gr付近の撹乱溝の底で確認されるもので、明確な被熱面を確認した訳ではない。図示した範囲で大量の焼土塊の集中廃棄がなされているもので、土師器の混在も確認される。撹乱土とは異なるものであり、当地ないしはこの近辺に土師器焼成坑が存在したことは確実である。混在する土師器からⅤ期頃と予想される。

（26号土師器焼成坑） ウ5Gr付近、標高16m付近で確認されるもので、撹乱溝によってほとんど削平されている焼成坑である。撹乱溝による削平断面に奥壁コーナーの被熱壁面のみが露出しているもので、遺物の混在もなく、時期や規模など全く不明である。

（29号土師器焼成坑） 27号土師器焼成坑の右側壁上端に被熱床面が確認される。地山検出面に被熱床面が露出しているもので、100cm程度の広がりをもつ。被熱層は比較的厚く、被熱を受けた土師器片も出土していることから浅い掘り込みの土師器焼成坑が存在していたと思われる。土師器の時期はⅥ2期頃のものである。





《27号焼成坑土層註》
1層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：焼土粒・炭化粒少量含有。
1′層　黄褐色土混在する。
2層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：須恵器・土師器多め、焼土塊・窯壁塊少量含有。8号灰。
3層　暗褐色土(10YR3/3)：炭化粒多め、焼土粒少量含有。8号灰下層。
4層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化粒・焼土粒多め含有。8号灰。
5層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：炭化粒・焼土粒・大塊少量含有。締まり強く叩き締め土。
6層　黄褐色土(10YR5/6)と明赤褐色焼土塊(5YR5/8)との混在土：炭化小塊少量含有。壁崩れ土。
7層　灰黄褐色土(10YR4/2)：炭化塊多量、焼土小塊少量含有。土坑内灰層。
8層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化極塊多量、土師器多量、焼土小塊少量含有。かき出し灰層。
9層　にぶい黄褐色土(10YR4/1)：焼土塊・炭化粒多量混在。被熱弱い。貼床土。
10層　にぶい黄褐色土(10YR5/3)：炭化小塊・焼土小塊多め含有。締まり有り。

《28号焼成坑土層註》
1層　褐色土(10YR4/4)：焼土小塊多め、炭化粒少量含有。
2層　灰白色粘土(2.5Y7/1)：にぶい黄褐色土(10YR5/4)混在。炭化粒少量含有。締まり有り。
3層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化小塊多量、焼土粒少量含有。土坑内灰層。
4層　褐色土(10YR4/4)：灰黄色粘土(2.5Y7/2)混在。炭化粒少量含有。
5層　褐色土(10YR4/4)：焼土塊・大塊多量混在させる。壁崩れ土。

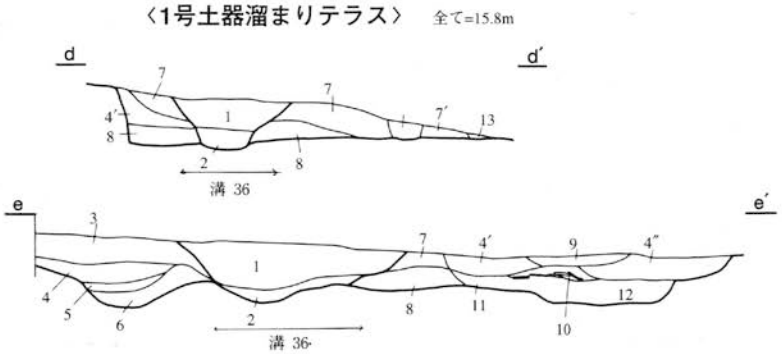
第100図　27号・28号土師器焼成坑平面・断面図（1/40）

第３項　その他の遺構

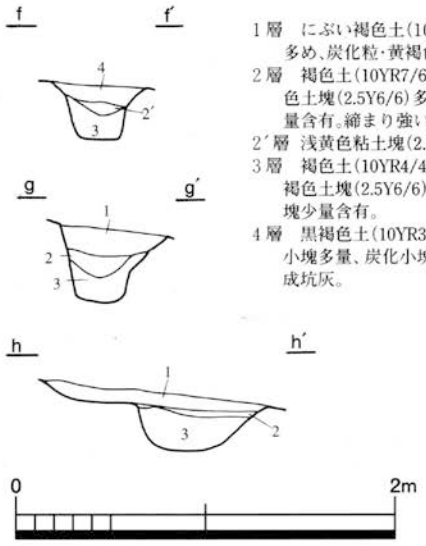
以上、８世紀から９世紀前葉に位置付けられる須恵器・土師器焼成遺構について述べたが、当期の土器を出土する遺構は他にもある。これまで述べた土師器焼成坑に伴う山側排水溝以外の溝や１号土器溜まりテラスとした遺構、土坑、ピットなどで、以下に説明する。

１．１号土器溜まりテラス（第75・101図）

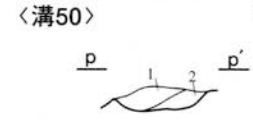
ウ13Gr付近、７号土師器焼成坑の南東側の右側壁を切って掘り込まれる遺構で、斜面上方をカットして平坦面を形成するテラス状遺構である。溝35に沿って山側の掘削線が定められており、山側は隅丸方形を呈す。横軸長430㎝、縦軸長250㎝、奥壁高は56㎝のテラスで、底面は広い平坦面を形成し、壁面は直立気味を呈す。底面には小さなピットが多数掘り込まれ、積極的に柱穴と認定はできなかったが、柱穴状となるものが数本存在する。被熱面などもなく、遺構の性格を特定しにくいが、山側の溝を排水溝とすれば、竪穴系建物の可能性も高いだろう。また、平坦面の右側から斜面下方へ壁面に沿って、幅35㎝、深さ15㎝の溝32が掘り込まれており、当テラス遺構に伴う排水溝の可能性をもつ。埋土は黒褐色系の灰廃棄層が堆積し、多量の遺物が混在する。須恵器よりも土師器が多く、大きな砂鉄製錬滓も混在する。上層に混在する遺物はⅥ期まで下るが、下層に廃棄する土器はⅣ2古期～Ⅴ2期のものであり、特にⅣ2新期からⅤ1期の土師器が主体を占める。山側を巡る溝35の廃棄土器やテラス面から斜面下方へと伸びる溝32の廃棄土器もほぼ同時期のものであり、この点からもテラス状遺構に伴う溝であ



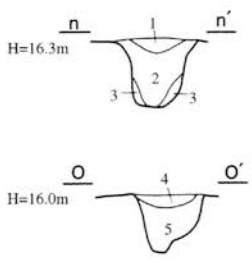
1層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・炭化粒少量含有。溝36覆土。
2層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化小塊・焼土小塊多め含有。溝36覆土。
3層　灰黄褐色土(10YR4/2)ベースににぶい黄橙色土(10YR6/3)混在土：焼土小塊多め、炭化小塊少量含有。
4層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：明黄褐色土塊(2.5Y6/6)多量、焼土大塊・炭化小塊多め含有。
4′層　焼土小塊少なめ含有。
4″層　焼土塊少量、灰白色粘土(5Y8/1)塊多め混在。
5層　黒褐色土(10YR2/2)：黒色灰混在。炭化塊極多量、焼土塊少量含有。灰層。
6層　暗褐色土(10YR3/3)：土師器多量、焼土小塊多め含有。
7層　黒褐色土(10YR3/2~2/2)：焼土小塊多め、炭化粒少量含有。
7′層　明黄褐色土(2.5Y6/6)混在。
8層　黒褐色土(10YR2/2)：炭化小塊多量、黄土塊少量含有。灰層。
9層　灰黄褐色土(10YR4/2)：にぶい赤褐色焼土(5YR5/4)多量混在。炭化小塊少量含有。
10層　黒褐色土(10YR3/2)：にぶい赤褐色焼土(5YR5/4)多め混在。炭化小塊少量含有。
11層　暗褐色土(10YR3/3)：炭化塊多め、焼土小塊・黄褐色土塊少量含有。
12層　灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土塊・土師器多量、黄褐色土塊少量含有。
13層　黒褐色土(10YR3/2)：焼土塊多量、炭化塊少量含有。



1層　にぶい褐色土(10YR4/3)：焼土塊多め、炭化粒・黄褐色土塊少量含有。
2層　褐色土(10YR7/6)ベースに明黄褐色土塊(2.5Y6/6)多量混在。焼土塊少量含有。締まり強い
2′層　浅黄色粘土塊(2.5Y7/4)：多量混在。
3層　褐色土(10YR4/4)：土器多量、明黄褐色土塊(2.5Y6/6)・炭化小塊・焼土塊少量含有。
4層　黒褐色土(10YR3/2)：土師器・焼土小塊多量、炭化小塊多め含有。5号焼成坑灰。



1層　暗褐色土(10YR3/3)：炭化小塊多め、焼土粒少量含有。
2層　にぶい黄褐色土(10YR4/2)：炭化小塊少量含有。



1層　明黄褐色土(2.5Y7/6)ベースににぶい褐色土(7.5YR5/4)混在土。
2層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)：明黄褐色土塊(2.5Y7/6)混在。炭化小塊少量含有。
3層　明黄褐色土(10YR6/6)ベースににぶい褐色土(7.5YR5/4)少量混在する土。
4層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)ベースに明黄褐色土(2.5Y7/6)混在。
5層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)：明黄褐色土(2.5Y7/6)塊少量混在。炭化小塊多め、窯壁塊少量含有。

第101図　１号土器溜まりテラス・溝土層断面図（1/40）

ることが伺われる。焼成坑密集区域の中心部に営まれるため、廃棄を目的とした遺構である可能性は残されているが、しっかりと掘られた竪穴状遺構であることを重視する。排水施設完備を考えれば、建物遺構と判断でき、工房関連遺構とするのが妥当と考える。

2．溝（第73～76図）

土師器焼成坑に伴う山側に掘られる溝や上記の1号土器溜まりテラス遺構に伴う排水溝以外に、当期の土器をまとまって出土する溝は少ない。その中では溝14と溝15、溝36がまとまっており、いずれもⅣ2新期～Ⅴ1期頃の土器が出土している。幅40～50㎝、深さ15～20㎝のしっかりした溝で、溝14と溝15は溝の中心で130㎝ほどの間隔を保ちながら並走する。斜面に対してほぼ平行して走っており、同様の間隔を置いて溝18も掘られる。途中ところどころで途切れるが、エ8Gr付近でも溝の続きが確認でき、南東側の溝6と溝7へつながる可能性もある。

同様の並走する溝は斜面上方でも確認される。溝36と溝13がそうで、その下にも数本の溝が斜面に平行して掘られている。この区域での斜面下方へは土師器焼成坑が展開する可能性は低く、ピットや土坑の分布が増えることから考えて、工房関連遺構に伴う山側を切る排水溝を想定している。並走することから側溝状のものかもしれないが、道路状遺構の可能性は低いと思う。

3．土坑（第73～75図）

4号土師器焼成坑の左側壁を切って掘られる2号土坑を除いては、当期のいずれの土坑も斜面下方に掘られる。斜面中腹に存在する土坑は土器の混在が少なく、撹乱の可能性もあるため、遺構としては捉えていない。

まず、斜面下方の土坑だが、P319としたものも土坑の位置付けが妥当で、1号土坑・3号土坑をあわせて、3基が存在する。北西側からP319、1号土坑、3号土坑が点在し、いずれも須恵器・土師器を定量出土する。規模は径120～150㎝前後、深さ20㎝前後の楕円形ないしは円形土坑で、Ⅳ2～Ⅴ1期に位置付けられる。

2号土坑は4号土師器焼成坑を切るものの、土器はⅣ2古期からⅤ1期まで混在しており、出土量も多く、廃棄土坑的な性格をもつ。規模は140㎝程度、深さ20㎝前後の円形土坑で、斜面下方の3基の土坑と類似する。

4．ピット（第73～75図）

当期の土器を出土するピットは、土師器焼成坑が群在する8～16Grの斜面中腹から下方にかけて多数存在するが、その中でも特に完形又は半完形を出土するピットについてのみ取り上げる。

まず、Ⅳ2期古の土器を出土するピットだが、須恵器食膳具が埋められるピットと赤彩土師器埦が埋められるピットとがある。まず、須恵器ではP156とP214が上げられる。いずれも須恵器坏B身を埋めている。赤彩土師器出土はP125とP148で、いずれのピットでも埦完形品2個体が埋められている。特に赤彩土師器埦の出土は焼成失敗品ではない大小法量製品2枚を重ねて埋めており、地中埋納を強く意識している。

次に、Ⅴ期の土器を出土するピットだが、須恵器食膳具を埋めるピットと土師器小釜を埋めるピットとがある。前者はP337で、坏B蓋の完形を埋める。後者はP6とP703で、いずれも小釜完形品。特にP6では小釜完形品と胴部下半のみの完形品とを入れ子状に重ねて埋納している。

第4項　須恵器窯に伴う遺物

第1項で述べたように、8世紀中頃から9世紀初頭頃にかけての須恵器窯に伴う灰原は、斜面上方で4カ所と斜面下方で堆積した流出灰原1カ所が確認されている。11号と9号は同一の可能性高く、一つにまとめ、斜面下方に堆積した灰原をその灰原からの流出灰原と捉えれば、北西側から順に、12号窯灰原、9・11号窯灰原、10号窯灰原となる。以下に、検出された灰原中の遺物を述べるが、11・9号窯灰原の斜面下方堆積灰原については、土師器焼成坑排出灰原の混在があり、須恵器のみを取り扱うこととする。

1．12号窯灰原出土土器

須恵器窯灰原であるため、須恵器のみで構成される訳だが、少量の土師器が混在している。大半は煮炊具であるが、赤彩埦底部片20点と環状土錘片3点が出土している。これに加えて、胎土と器形は土師器煮炊具そのものだが、還元焔焼成されたものが定量出土している。還元焔焼成品は須恵器窯内で焼かれたものであり、酸化焔に

焼き上がった土師器煮炊具でも、須恵器窯内での焼成を考えている。還元焔に焼成されたものは焼成失敗品であり、土師器の場合は酸化焔焼成品が製品として扱われたものだろう。窯内で同様に焼成されたものとの評価から、土師器煮炊具についても器種構成の中に含めて考えておきたい。食膳具については混入品の可能性も考えておきたい。なお、瓦が3点出土しているが、当窯焼成品であるかは判断できない。9世紀後半の須恵器窯灰原には定量含まれているものであり、この時期のものが混在した可能性もある。一応、図示しているが、この窯の焼成品として扱うことは難しいかもしれない。

（1）須恵器の器種構成

須恵器器種名は凡例に示した分類基準に基づく。食膳具は坏型器種で占められ、貯蔵具は壷Fと甕が過半数を占める。ただ、鉢類では鉢B・鉢F、瓶類では瓶A・瓶C・瓶D、壷類では壷A、そして横瓶も定量存在しており、種類は豊富である。煮炊具は小釜・釜・鍋の他、甑や手付き鍋、盤型鉢も出土している。

全体的な構成比率を見ると、食膳具が9割近くを占める。D地区二ッ梨一貫山4号窯灰原よりも増加しており、貯蔵具率は8％未満と低い。煮炊具率が須恵器窯灰原としては高い4％弱を占めることも、貯蔵具率の低い要因と言える。食膳具内では坏Aが最も高いが、4号窯灰原より低下し、盤Aと盤Bが増加している。特に盤Bはこの時期に最盛期を迎える器種であり、生産量のピークを迎える。また、高盤の量が目立つが、この時期に急増するものではなく、偶発的なものだろう。小型貯蔵具類では小鉢類が目立つ。折れ縁型の灰Ⅲ器形の器種で、8世紀代を通して定量生産される。煮炊具類では、釜が半数近くを占める。同時期の土師器焼成坑では小釜・鍋・釜が近似した占有量をもち、釜はその中で少ない傾向すらある。須恵器窯では小釜の出土率が低いことは、全般的な傾向であり、須恵器窯で焼かれる器種が偏っていた可能性をもつ。貯蔵具では甕が4割以上の高い率をもち、壷Fの出土も目立つ。小甕と壷Fとは法量的に互換性をもつ器種で、底部を叩き出すか否かの違いだけである。両器種をあわせると35%にも上り、この容量の短頸器種が生産のピークを迎えたことが伺われる。これは8世紀前葉以降の傾向であり、9世紀に入ると徐々に減少して行く。他の壷類や瓶類は少なく、その中では横瓶が7％台を占める。甕では中甕生産量が高く、大甕の倍以上を占める。鉢類では鉢Fが高く、この時期を前後して生産量の最盛期を迎える。また、鉢Bが定量生産されるようになり、以降、増加して行く器種である。

器種名	坏B蓋	杯B身	杯　A	盤　A	盤　B	高　盤	食膳具計	小鉢	小壷	小貯蔵計	小釜	釜	鍋	盤型鉢	手付鍋	甑	煮炊具計
口縁部計測値	1,251	(827)	2,011	1,423	750	183	5,618	44	5	49	39	103	67	6	3	23	241
占有率	22.3%	－	35.8%	25.3%	13.3%	3.2%	87.7%	89.8%	10.2%	0.8%	16.2%	42.7%	27.8%	2.5%	1.2%	9.5%	3.8%

器種名	鉢　B	鉢　C	鉢　F	瓶　A	瓶　C	瓶　D	壷　蓋	壷　A	壷　F	横　瓶	大　甕	中　甕	小　甕	貯蔵具計	器種総計
口縁部計測値	17	9	63	10	3	11	42	(4)	95	37	44	94	75	500	6,408
占有率	3.4%	1.8%	12.6%	2.0%	0.6%	2.2%	8.4%	－	19.0%	7.4%	8.8%	18.8%	15.0%	7.8%	

第12表　F区12号窯灰原出土須恵器器種構成表
（口縁部計測値は口縁端36分割での残存率数値、蓋付器種は数値の多い方を採用、高盤は脚と坏の多い方を採用した）

（2）各器種の特徴

a．有蓋坏型食膳具（坏B蓋・坏B身）

《法量組成》　当窯資料の坏Bは、大きく3法量に分けられ、それぞれ大法量が蓋で口径16.5～20㎝、身で口径14.5～16.5㎝以上、中法量が蓋で12～14.5㎝、身で12～13.5㎝、小法量が蓋で10.5～13㎝、身で10～11.5㎝となる。基本的に身法量の重複部分はないが、蓋に関しては中法量と小法量で重なる部分をもつ。それは小法量口径が口縁部折り返しもたない器形であるのに対し、中法量は折り返しもつ器形という形態差に要因があり、身を受ける部分の大きさで測ると、口径法量は確実に分化している。小法量の口縁部形態は、坏B法量分化当初からの当窯跡群須恵器の特徴であり、同法量が存続するまで当形態を維持する。だが、中法量の小型化に伴って、法量の隔絶はなくなり、また、形態差も曖昧になってくる。そもそもの坏B法量分化は、田嶋Ⅲ期に始まるのだが、それは従来の中法量に、大と小が新たな器種として加わる形をとる。中法量は伝統的な偏平器形で偏平つまみを

もつのに対し、小法量は先述したような折り返しなしの口縁部に宝珠形つまみ、そして深身系の坏身をもつ。大法量も同様に、宝珠形つまみで天井部山傘状、高台が重厚な作りの深身器形の坏身をもち、沈線や削りを多用するなど金属器的予想をもつ。つまり、法量分化といっても、精製新器種として加わったのみであり、それはⅣ1期までの大小法量の低い構成率からも伺われる。ところが、当資料では下記のとおり、確実に大小法量が増加しており、それに伴うように、大・中・小で、つまみ形態や蓋の天井部器形、坏身体部の立ち上がりに差がなくなってくる。

《重ね焼き痕跡》 坏Bは蓋と身とを重ねて焼く器種で、その重ね方に主に3つのタイプがある。旧来式のⅠ類とⅢ期に導入される逆位蓋＋正位身の単位で柱状に重ねるⅡ類（1単位をそのまま積み上げるⅡaと正位・逆位と交互に積み上げるⅡbに細分）、蓋と身に分けて重ねる後出類型のⅢ類で、以下の表のとおり、Ⅱ類が過半数を占める。特に、Ⅱ類は中法量で顕在化し、7割近くを占める。Ⅳ1期までのⅠ類主体（89%）から大きく転換するものであり、先述した大・中・小形態の不明瞭化と同じ動きと捉えられる。

有蓋器種	坏 B 蓋			坏 B 身		
法 量	大	中	小	大	中	小
口縁部計測値	255	578	418	97	637	93
占 有 率	20.4%	46.2%	33.4%	11.8%	77.0%	11.2%

第13表 坏B法量別構成表（計測値は第12表同様）

蓋 法 量	大	中	小	総 計
Ⅰ 類	32	37	14	83（42.3%）
Ⅱa類	22	44	11	77（39.3%）
Ⅱb類	5	29	2	36（18.4%）

第14表 坏B蓋重焼類型構成表（数値は確認個体数）

《坏B蓋大法量》 大法量は1～4で、つまみは宝珠形だが、偏平化して頂部は丸くなっている。天井部は削りを施し、口縁端部は折り曲げる。天井部に平坦面を形成する傾向が見えており、器形的に中法量の偏平器形との差は少なくなっている。

《坏B蓋中法量》 中法量は5～15で、器形により分類できる。A類は偏平つまみ系で口縁部折り曲げまでまっすぐ開く器形をもつ。さらに、天井部広く偏平器形のA1類（5･10）と天井部やや丸く盛り上がるA2類（11･12）、天井部山傘器形でやや小ぶりを呈するA3類（13～15）に細分できる。天井部無調整を基本とするが、A3類のみは天井部に削りを伴う。B類（6～9）は頂部の盛り上がるつまみで口縁部折り曲げの前に外屈する器形をもつ。天井部は全て削りが伴う。A類が伝統的な偏平器形であるのに対し、B類は新たな坏B変化の中で出現してきたもので、口縁部の外屈器形やつまみ器形は後に継続する器形である。

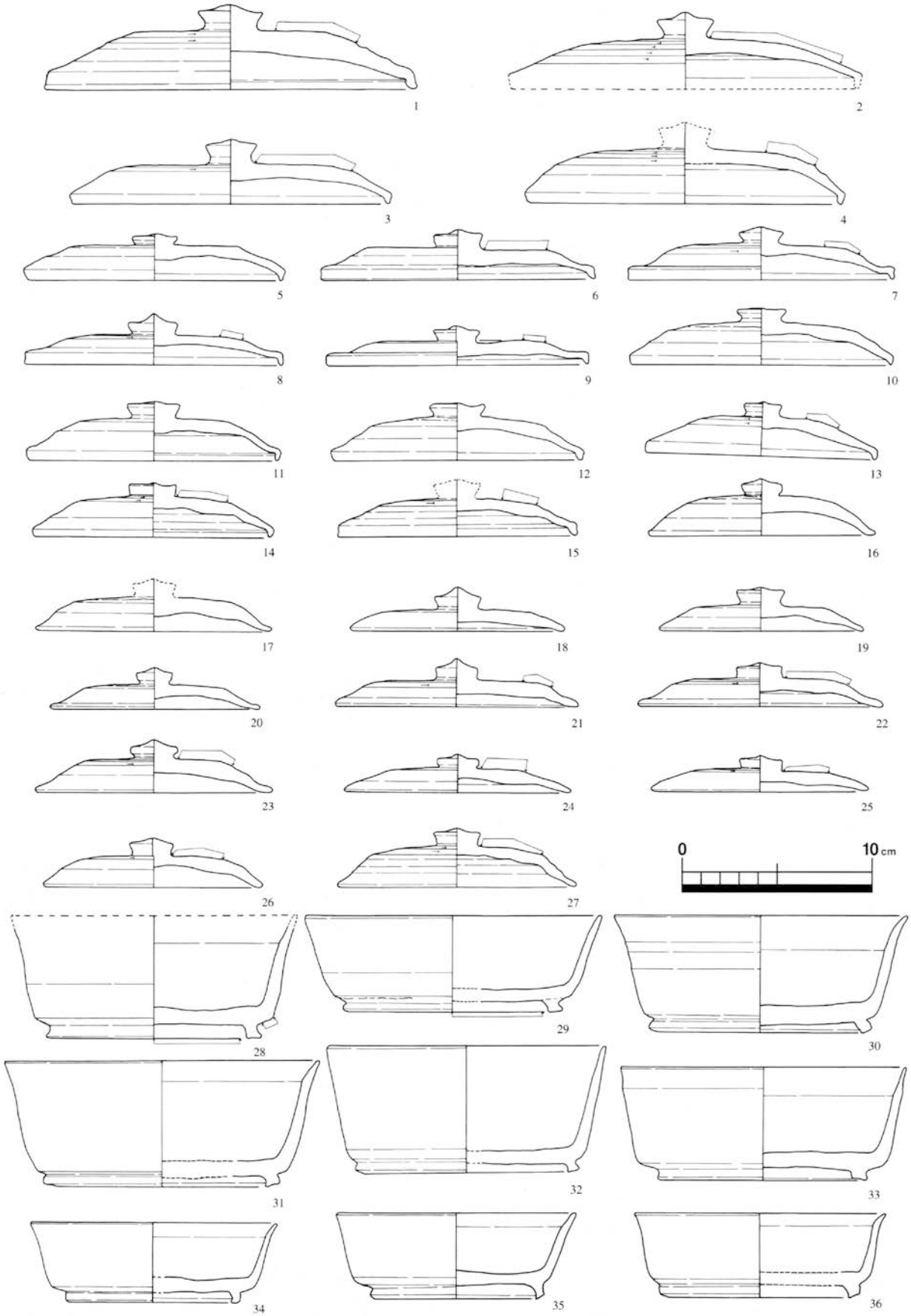
《坏B蓋小法量》 小法量は16～27で、いずれもつまみはやや偏平化した宝珠形を呈すが、口縁部器形から外反するA類と外反しないB類に分類できる。さらに、A類は天井部器形から天井部が丸く厚手のA1類（16）と天井部に平坦面もち器高高目のA2類（17・23・27）、天井部平坦面もって偏平なA3類（20～22）に細分。B類もやや天井丸いB1類（26）と偏平器形呈すB2類（18・19・24・25）に細分できる。天井部削りをもつものが定量存在するが、やや省略化の傾向が見られる。

《坏B身大法量》 器形から、深身のA類と偏平のB類に分類できる。さらに、A類は厚手の底部から腰に角をもって立ち上がり、口縁部外反気味となる器形で、重厚な高台が踏ん張って付くA1類（28・30・31）と底部やや薄く体部直立気味となって、小型の高台が付くA2類（32）に細分される。同様にB類も高台や体部立ち上がり器形からB1類（29）とB2類（33）に細分される。底面削りを伴うものは少ないが、その中では1類器形の特に高台の作りがしっかりして高いものに施される。

《坏B身中法量》 大きなまとまりとして大別できる要素はなく、偏平器形の1系統にほぼまとまるが、高台と身の深さによって分類できる。1類（34・35・37）はやや深身を呈し、薄いシャープな作りの高台が付くタイプ、2類（36・38・39）はやや深身で厚手の高台が付くタイプ、3類（40～43）は身が浅いタイプである。

《坏B身小法量》 身の器高は中法量と大差ないが、口径の小さい分だけ、深身を呈す。厚手で作りの雑なA類（44・45）とやや薄手で作りのよいB類（46）に分類される。

《ヘラ記号》 坏B蓋は内面天井、坏B身は底面に記されるが、当窯資料ではヘラ記号率が低く、傾向を出すまでには行かない。坏B蓋では4点のみの確認で、中法量で「｜」と「×」、小法量で「｜」2点が出ている。坏B身でも4点で、小法量「×」1点、中法量「×」1点、大法量「×」と「＋」各1点である。ヘラ記号率は極



第102図　F区12号窯灰原出土須恵器（1）（S=1/3）

めて低く、どちらも５％未満で、記号に「×」が目立つのが特徴と言える。

ｂ．無蓋坏型食膳具（坏Ａ・盤Ａ・盤Ｂ）

《坏Ａ》　坏Ａは47～66で、偏平器形を基調とするA類と、小ぶり深身系で底部切り離し境がはっきりし、腰丸に立ち上がった後に口縁部外反するB類（64）と丸底気味底部から体部開いて立ち上がる大ぶり塊型器形のC類（65・66）に大別される。A類が大半を占め、B類・C類は極少量。B類は新出器形と位置付けできる。さらに、A類は大ぶりで底面平坦な偏平器形のA1類（47・48）と全体的に厚手でやや立ち上がりが丸いA2類（49～60）、腰がやや張り比較的深身呈すA3類（56）、腰丸く立ち上がった後に口縁部外反するA4類（61～63）に細分される。主体はA2類で、坏Ａの半数以上を占め、当期に最も一般的な器形と言える。A1類は伝統的な偏平器形を遺存する類型、A4類はⅣ1期に定量を占める腰丸外反器形の流れをもつものである。

《盤Ａ》　盤Ａは67～91で、器形から体部立つ器形のA類（67・68・70～72・74～80）と口縁部外反するB類、体部外傾するC類に分けられる。A類が主体で、B・C類は少ない。底面削りを伴うものはA類に目立つが、特に底部厚手のものに限られ、全体では５％の確率で削り調整が行われている。さらに、体部器形から、以下に細分される。Ａ類の基本形は、厚手の底部で体部立ち上がり丸く、短く立つA1類器形で、A類の大半はこの類型に属すが、体部立ち上がりがやや角張る器形をもつA2類（75・78）と体部立ち上がりがやや長いA3類（71・79）が少数派で存在する。B類は浅身で口縁部短く外反するB1類（73・81・82）と深身で底部厚く、口縁部は長く外反するB2類（69・83～82）に細分、C類は浅身で体部短く外傾するC1類（86～89）と深身で体部長く外傾するC2類（90・91）に細分される。底部が厚手で短く直立するA類型が当資料の特徴と言えるものである。

《盤Ｂ》　盤Ｂは92～123で、器形から体部立ち上がりに角をもつA類と体部立ち上がり丸いB類、立ち上がり丸く、体部外傾して開くC類（119～123）に分類できる。A類が主体的類型で、底面削り調整や高台の作りなど最も丁寧に作られる。削りの率はA類で高いが、他の類型では低く、全体では３割を占める程度。体部器形などから、さらに、A類は体部短く立つ器形で、底面丁寧に削り、しっかり踏ん張る高い高台が付くA1類（92～95）と、削り伴う底部から体部外傾気味に立ち上がり、重厚な高台が付くA2類（99～102・104・105）、底面削りを伴い、体部外傾器形で深身を呈すA3類（106～108）、A2類同様に体部外傾して立ち上がる器形だが底面削りを伴わないA4類（109・110）に細分される。B類は、底面削り入念に施され、厚手で体部短く立ち上がるB1類（96～98）と、B1類同様器形だが、底面削りを伴わないB2類（111・112・114・116・117）、底面削りなく、体部長めに立ち上がるB3類（113・115・116・118）に細分される。当期の盤Ｂは底部厚手で重厚な高台の付くことが特徴と言え、体部の立つ器形が主体的である。また、深身から浅身まで器形に種類が多いのも特徴で、体部外傾のC類はこれ以降主体となる類型と言える。

《ヘラ記号》　坏Ｂでも少なかったが、無蓋器種においては皆無に近い。盤Ａでは「｜」１点、盤Ｂでは０点で、数量の多い坏Ａのみ「｜」２点、「×」１点、「＋」１点の４点で、それでも１％にも満たない。当窯須恵器の全体的な傾向であり、それは最も数量的に多いはずの「｜」が少ないことからも伺われる。

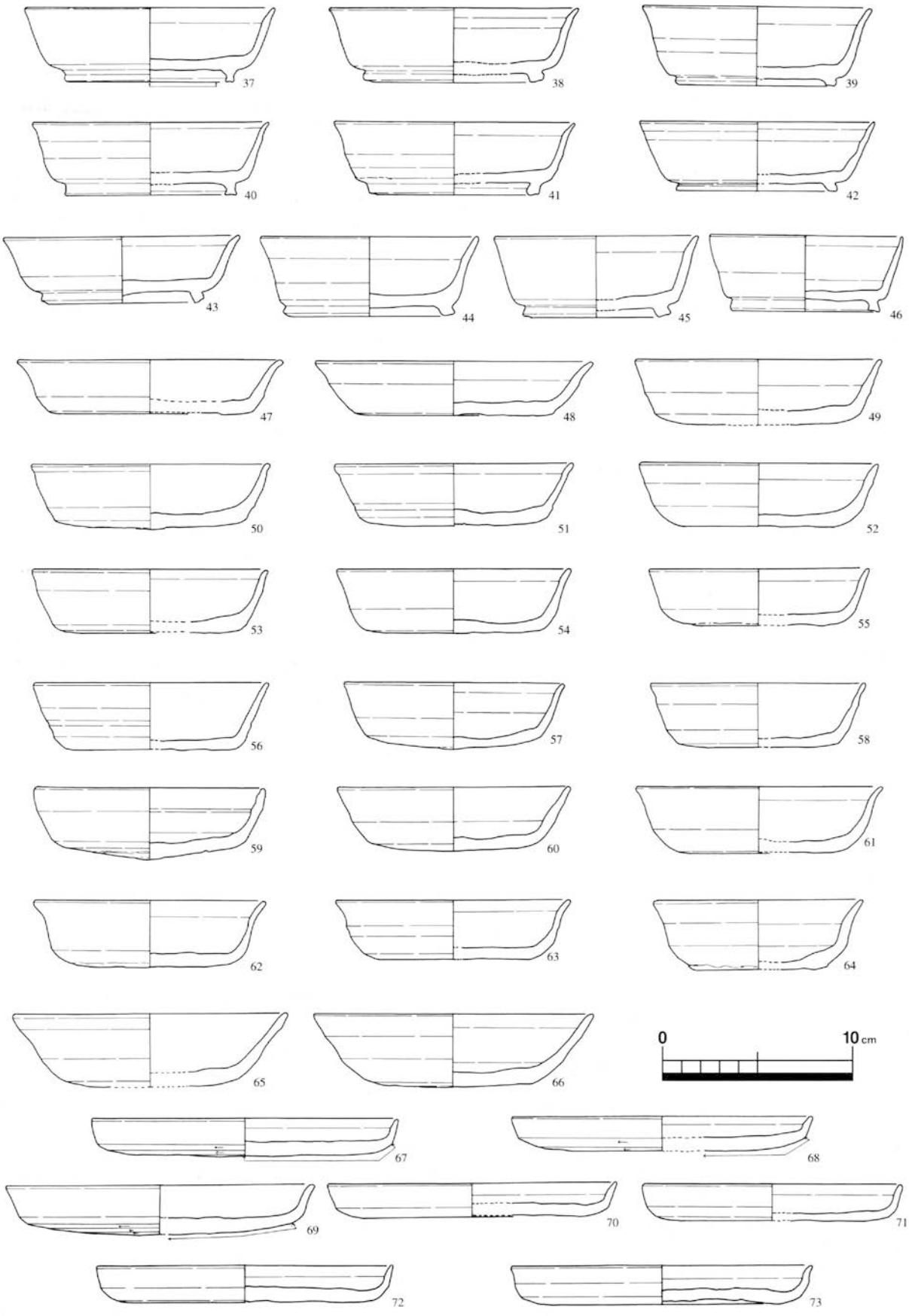
ｃ．その他の食膳具（高盤）

上記坏型器種以外に、高盤が出土している。口径19.5～23㎝のもので、脚高は8.5～10㎝程度を測る。坏部は逆位坏蓋状器形で、坏底部は厚く、口縁端部は折り曲げる。体部下半にいずれも削りが伴う。脚部は基部を絞った器形で、内面や外面に脚を絞って細長くした際の粘土の縮み皺が出ている。基部径の細いA類と太いB類に大別でき、さらに、A類は脚部細長く伸びる脚高9.5㎝以上のA1類（130・131）と脚の伸びが少ない脚高8.5㎝程度のA2類（132・134）に細分される。B類（133・135）は基部太く、脚径も大きいもので、厚手の作りをもつ。器形的にはB類からA類へ変化しており、当期にはA類が主流形態になるものと考えている。

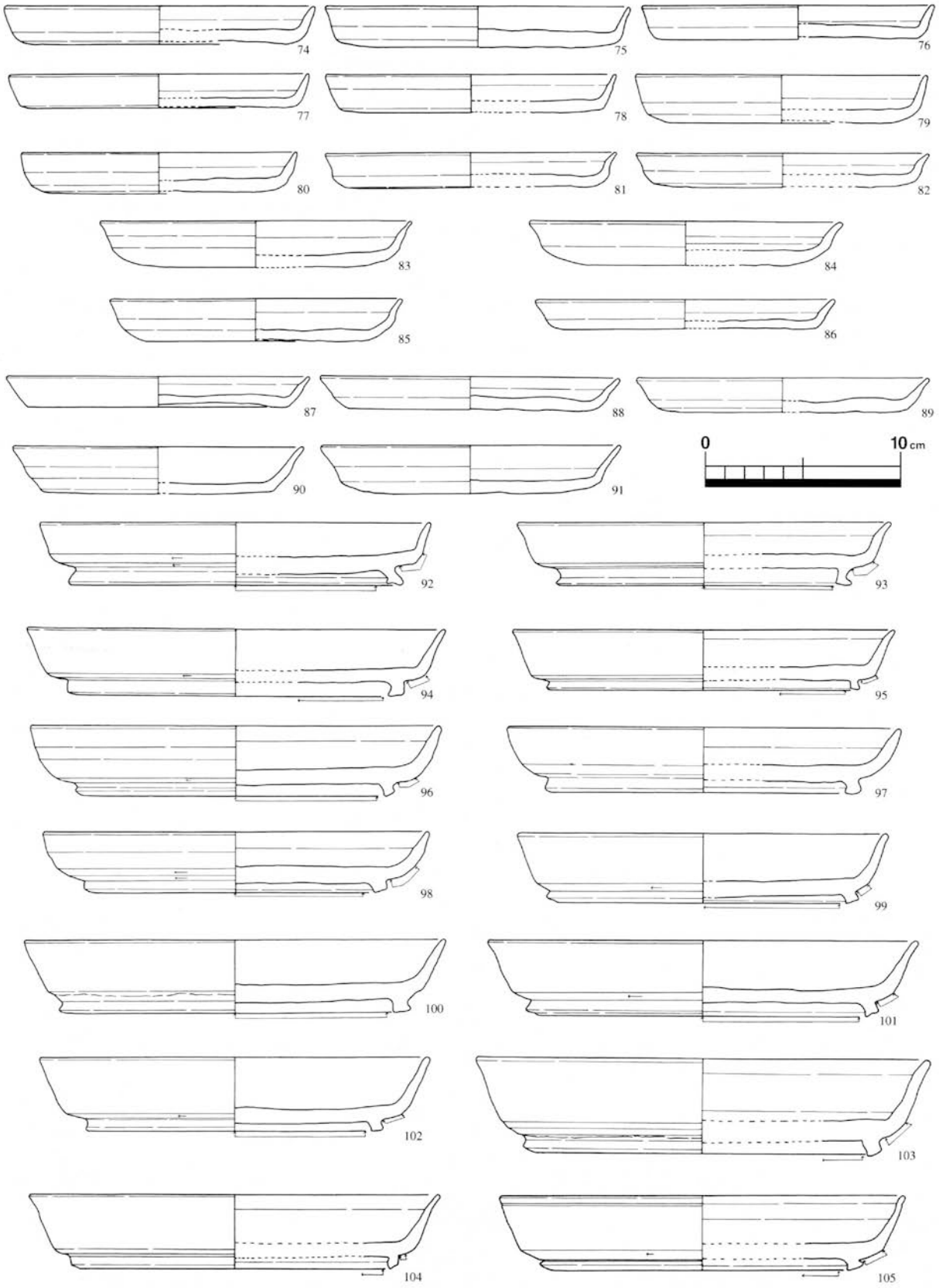
ｄ．小型貯蔵具（小型鉢・小型壷）

《小型壷》　小型壷は長胴短頸形態の破片（136）のみ図示しているが、底部糸切りの破片が２点出土しており、当器種が糸切り底部の無台のものである可能性をもつ。

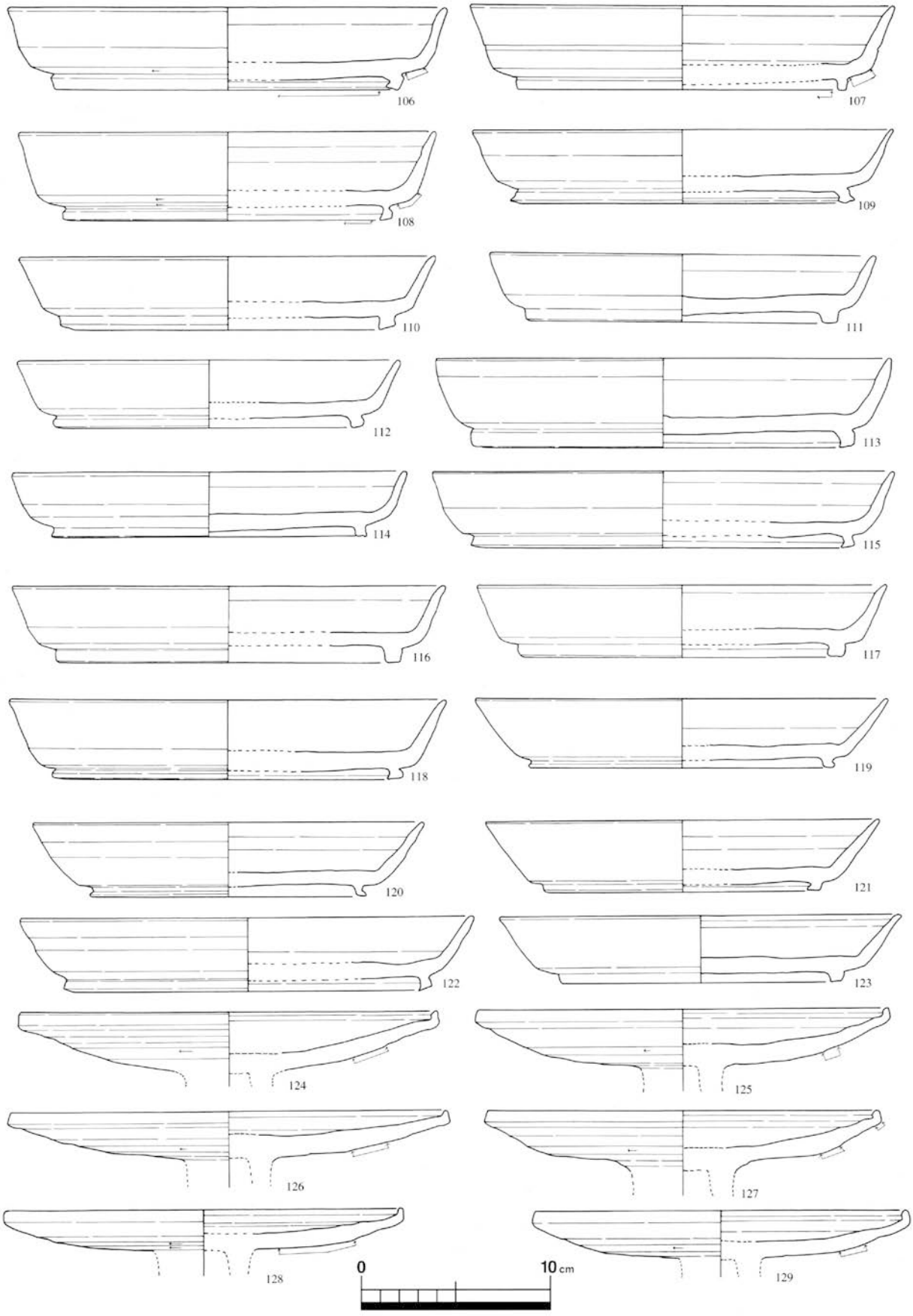
《小型鉢》　口縁部外屈する灰皿型のもので、137は底部糸切り、138は底部ヘラ切りである。ほぼ大きさは同じで、器形も類似するが、口縁端部の摘まみ上げ器形や内外底面の器形が異なる。胎土は他の須恵器と同様。



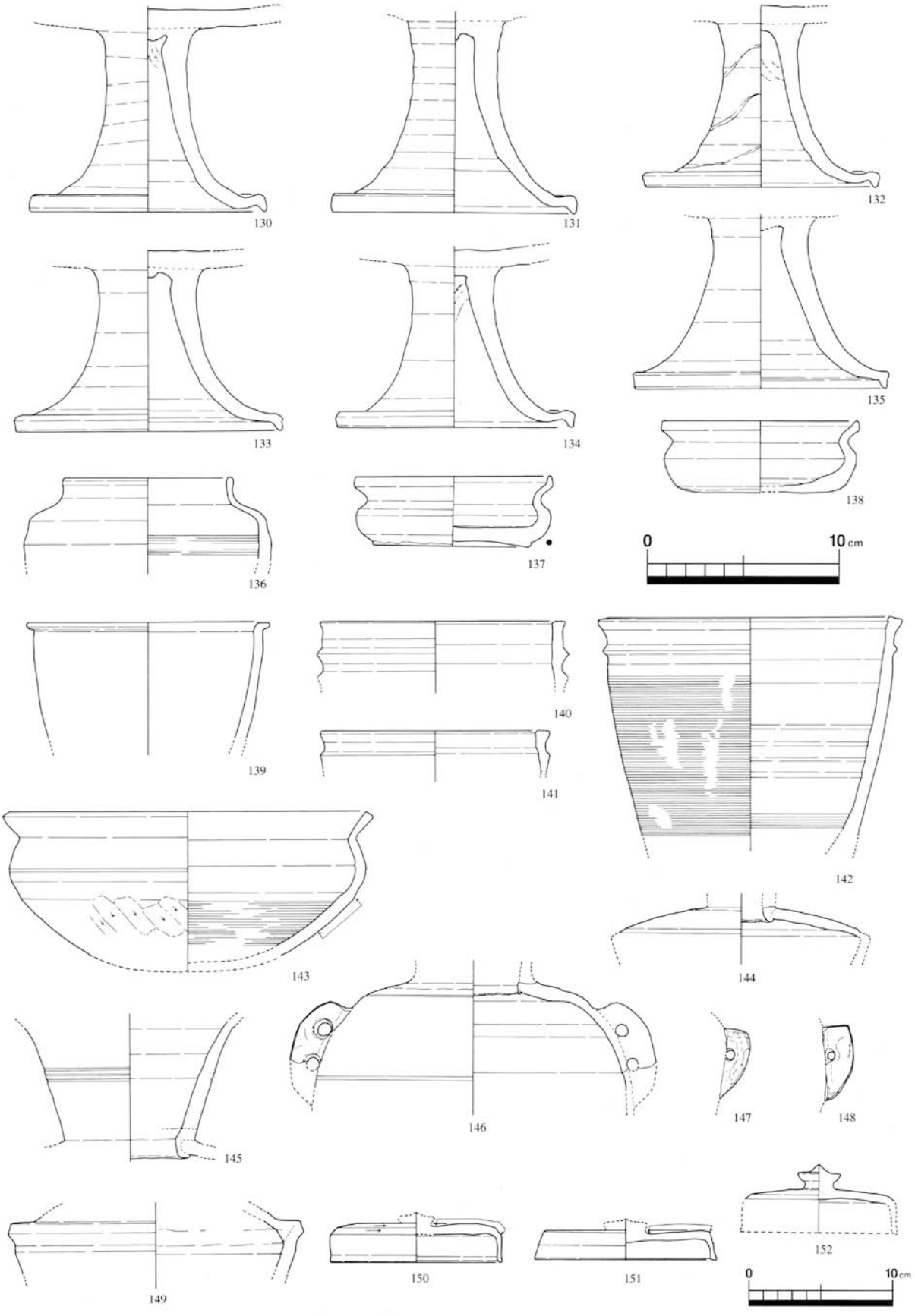
第103図　F区12号窯灰原出土須恵器（2）（S=1/3）



第104図　F区12号窯灰原出土須恵器（3）（S=1/3）



第105図　F区12号窯灰原出土須恵器（4）（S=1/3）



第106図　F区12号窯灰原出土須恵器（5）（130～138＝1/3, 139～152＝1/4）

e．貯蔵具（鉢・瓶・壷・横瓶・甕）

《鉢》　鉢類は鉢B、鉢C、鉢Fが出ているが、鉢Cは破片のため図示していない。鉢類の中で主体を占める鉢Fは、厚い円盤状底部をもち、体部深鉢状器形を呈する器種である。当期の体部器形は上半が円筒状に立ち上がる器形で、口縁端部外側が突出して上端に面をもつ。この器形を基本とし、体部上位に稜を形成するのであるが、体部上位の稜形成の仕方によって、稜をもたないa類（139）と1段稜形成するb類（141・142）、2段稜形成するc類（140）に分類できる。当器形が出現するⅣ1期はa類のみであるが、b類がこの時期に定量加わってくる。c類はb類の亜種形態として出現し、後に増加するものと予想している。

鉢Bは口径25㎝程度を測る頸部「く」字に外屈する器形で、体部下半外面を手持ち削り、内面をカキ目調整する。土師器鍋の器形・調整に類似するため、鉢Dに近いが、体部屈曲箇所に沈線を施すなど、9世紀以降の当器種に繋がる形態をしている。

《瓶》　瓶類は瓶Aが主体で、少量の瓶C、瓶Dで構成される。

瓶A（144）は肩の強く張る胴部器形で、胴部上端から頸部付近に円盤閉塞痕跡を確認できないものである。頸部内面に接合時の粘土が胴部側にはみ出て被さるもので、胴部上端内面には絞った際の粘土縮み皺が残る。胴部を風船状態にする際に、胴部上端を絞りきって成形した痕跡の可能性をもつもので、絞りきり閉塞による風船作りである可能性をもつ。

瓶C（145）は口頸部付近の破片で、胴部上端に頸部側の粘土が被るものである。頸部内面に粘土積み痕跡が確認できる。

瓶Dは、D区4号窯灰原のように、胴部半球形を呈す小型三耳瓶として出現するが、当期までは同様の形態が主流で、把手も147・148のような形態をもつ。その中で146は長胴化した新たな器形であり、耳も大型化して定型化される。口頸部接合痕跡から見るに、胴部上端を小型の円盤で閉塞する技法がとられていた可能性が高く、南加賀窯跡群ではⅤ期以前の技法と位置付けられるものである。ただ、耳の形態や2穴穿孔は、球胴小型器形が主流の当期に併存するものであったかは疑問であり、型式的に当期に属するものでない可能性もある。現段階では混在資料とみなすのが妥当かもしれない。

特殊器種として、肩部が突帯状に張った器形を呈する149が出ている。成形痕跡から見ると、この部分で繋げており、瓶Aの風船技法とは異なるものである。胎土良好で、焼成堅緻なものであり、特殊瓶類と考えている。

《壷》　壷類は壷A（B）の蓋と壷A（B）、壷Fが出土している。

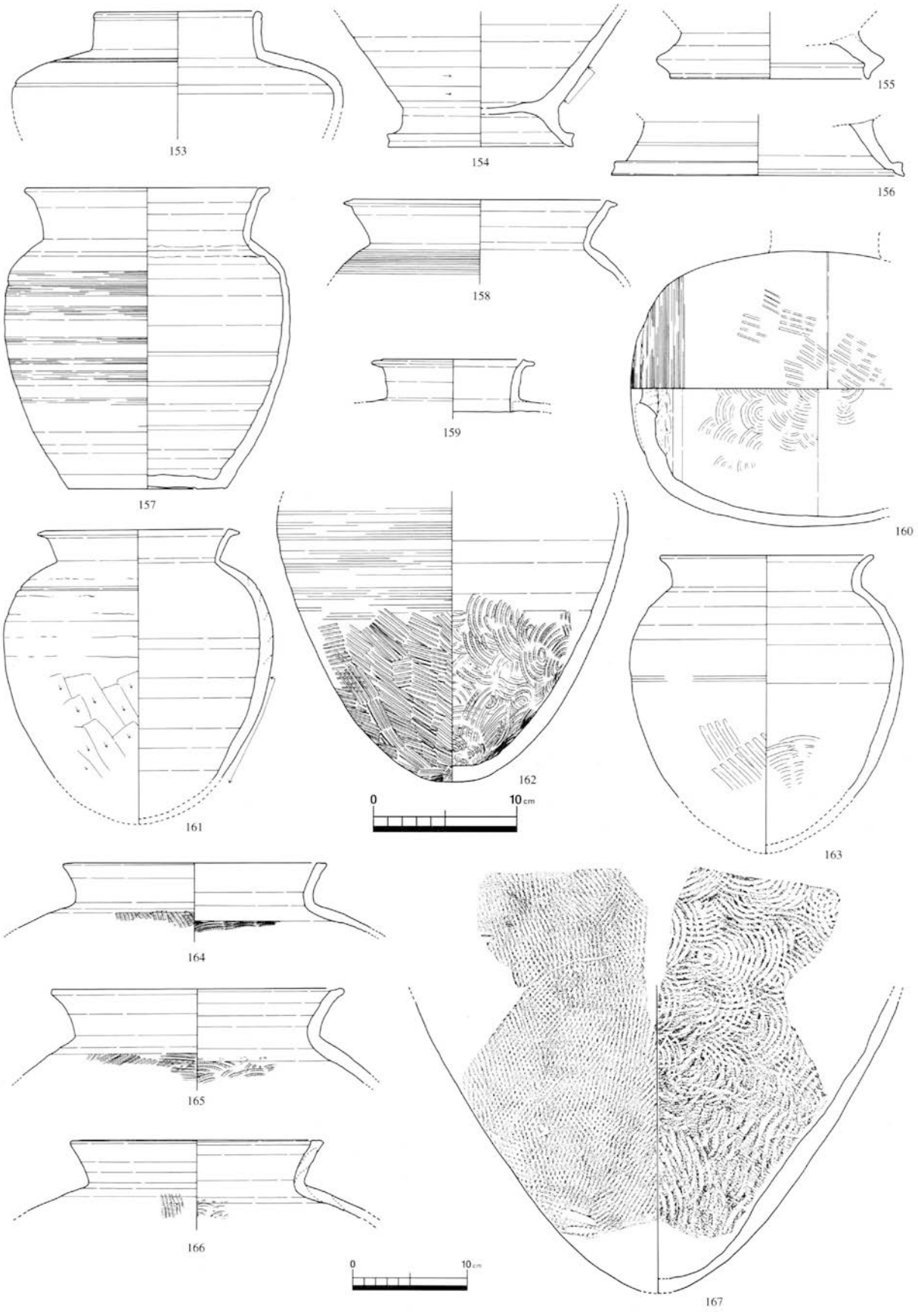
壷A（153）は口頸部の長く直立するタイプで、胴の強く張った器形を呈す。有蓋重ね焼きの痕跡を残す。154と155は壷Aか壷Bの底部付近で、高台はしっかりと踏ん張る。156は大型壷Aの底部と思われるもので、台に沈線が入る。Ⅵ期に出現してくる器種であり、混じりである可能性をもつ。壷蓋は口径12㎝台で、口縁部立ち上がりの深さが比較的浅いa類（150・151）と、口径11㎝前後でやや立ち上がり深いb類（152）とがある。a類は天井部削りを伴い古手の様相をもち、b類は削り伴わない新出系器形を呈する。

壷Fは出土量多いが、図示できたものは157・158の2個体である。底部叩き出しを行うか否かで壷Fか小甕かを分類しており、胴部上半の器形・調整に大きな違いはない。ただ、概して壷Fの方が胴部薄手で、カキ目を多用し、やや器高に比べて胴部最大径や口径が大型を呈すという特徴はあり、作り分けの意識は存在していたものと理解している。基本的に容量は壷Fの方が小甕よりも大きい傾向がある。

《横瓶》　横瓶は胴幅30㎝以下、胴厚20㎝以下の中型サイズのみ出土している。159は口頸部。160は厚手の作りをする胴部で、叩きの方向から考えて、図示した左側が上部側になるものと考えられる。その部分で円盤閉塞しており、閉塞部分は内面をナデて窄めてから閉塞する。その後、カキ目を施して丸くしており、調整は雑である。両面閉塞技法による横瓶と考えられる。

《甕》　甕類は小甕、中甕、大甕で構成されるが、口径を比較すると、小甕16㎝以下、中甕20～27㎝、大甕40㎝以上と、法量間に隔絶がある。

小甕については、壷Fで述べたとおりである。底部叩き出しは胴部のカキ目・ナデ調整を切って、縦軸方向に施される（162・163）。比較的底部叩き出し部分の器厚も厚く、叩き延ばす意識よりも丸底ないしは尖底状にす



第107図　F区12号窯灰原出土須恵器（6）（153～163＝1/4, 164～167＝1/5）

ることを目的としている。また、叩き出し後に内面ナデ調整、外面縦方向削りを施すものもある（161）。当期に散見される小甕の胴部下半調整である。土師器釜の調整方法との関連性が考えられる。

中甕は、いずれも頸部短く外傾して口縁部上端に面を形成する口頸部器形を呈す（164～166）。胴部叩き・当て具痕の上端を頸部内外面のナデ調整で切っており、口頸部ナデ調整が最終工程の調整であることが伺われる。胴部は上位が張り、底部へ尖底状となる器形で、底部の叩き出し痕跡は胴部叩き痕を切って、縦軸方向に施される。底部叩き出しの当て具は胴部と異なる工具が使われる傾向強く（167）、異なる叩き具が使われる場合もある。168は粘土縞の確認できる個体で、断面で粘土紐単位の確認が可能である。特に、底部付近では粘土紐単位で色調の濃淡が異なる粘土（粘土特性が異なる粘土）を使用しており、注目される。底部境の膨らみよりも若干上で確認されるものであり、この部位での確認は例外的である。通常、このような粘土特性の異なる粘土紐を交互に積み上げる行為は、胴部上半の薄く叩き延ばす部分で確認されるものであり（林タカヤマ窯や湯屋ＡⅠ支群窯の大甕で確認される）、粘土の強度を保ちながら叩き延ばす際に使われる技法と考えている。

大甕は、長頸の口頸部をもつもので、無文を基本とするが、沈線を挟んで２段の櫛描波状文を施すもの（169）も少量存在する。口縁端部外面を突出させ、その下に１段稜を形成する口縁部器形で、無文のものでも稜形成するもの（170・171・172）は主体的に存在する。胴部は叩き成形、その叩き成形した胴部に別作りした口頸部を接合する技法が大甕では一般的である。接合する際に接合箇所に接着粘土を入れる技法がとられており、173の頸部面に残った0.5㎝程度の粘土部分はその接着粘土である。接着粘土上面がきれいに剥離しており、ナデ痕跡が反転圧痕として残り、別作りした口頸部の調整痕と予想される。また、172の胴部との接着面には剥がれた痕跡が残るが、断面では接着粘土痕が確認される。その部分では横になでつけた痕跡が残り、内外面から包むように貼り付けていることが確認される。

ｆ．煮炊具（釜・小釜・鍋・手付鍋・甑・盤型鉢）

煮炊具は基本的に土師器器種であり、胎土も通常の須恵器と異なり、意識的に大粒砂粒を混和材として混入している。還元焔で須恵質に焼き上がった174～184と酸化焔で土師質に焼き上がった187・188に分けられるが、説明では一括して扱う。器種は小釜・釜・鍋・手付鍋・甑・盤型鉢と豊富である。

《釜》　釜は口径16～23㎝の幅があるが、20㎝前後に中心をもつ。口縁部「く」字に曲がる長胴器形で、胴部上半はカキ目、胴部下半は叩き出し成形によって丸底にする。叩き出しはいずれも胴部調整後の最終工程で施され、縦軸方向に叩き出される。口縁部器形から口縁端部肥厚するａ類（175）と口縁端部を上に短く折り曲げるｂ類（177・178）、口縁端部摘まみ上げるｃ類（176・187）に分類できる。また、口縁部「く」字外反で、胴部厚手の174があるが、胴部ナデ調整で、胎土も若干異なる。須恵器小甕的なものの可能性もある。

《小釜》　図示できたものは179のみで、釜に比べて出土点数は少ない。小釜は口径15㎝台で、口縁端部を上に長く摘まみ出す形態である。釜よりも口縁部が短く、胴部球形を呈す。

《鍋》　鍋は体部カキ目、底部付近外面を手持ち削りする器種である。釜同様に、口縁部器形により肥厚するだけのａ類（188）と摘まみ上げるｃ類（180）に分けられる。

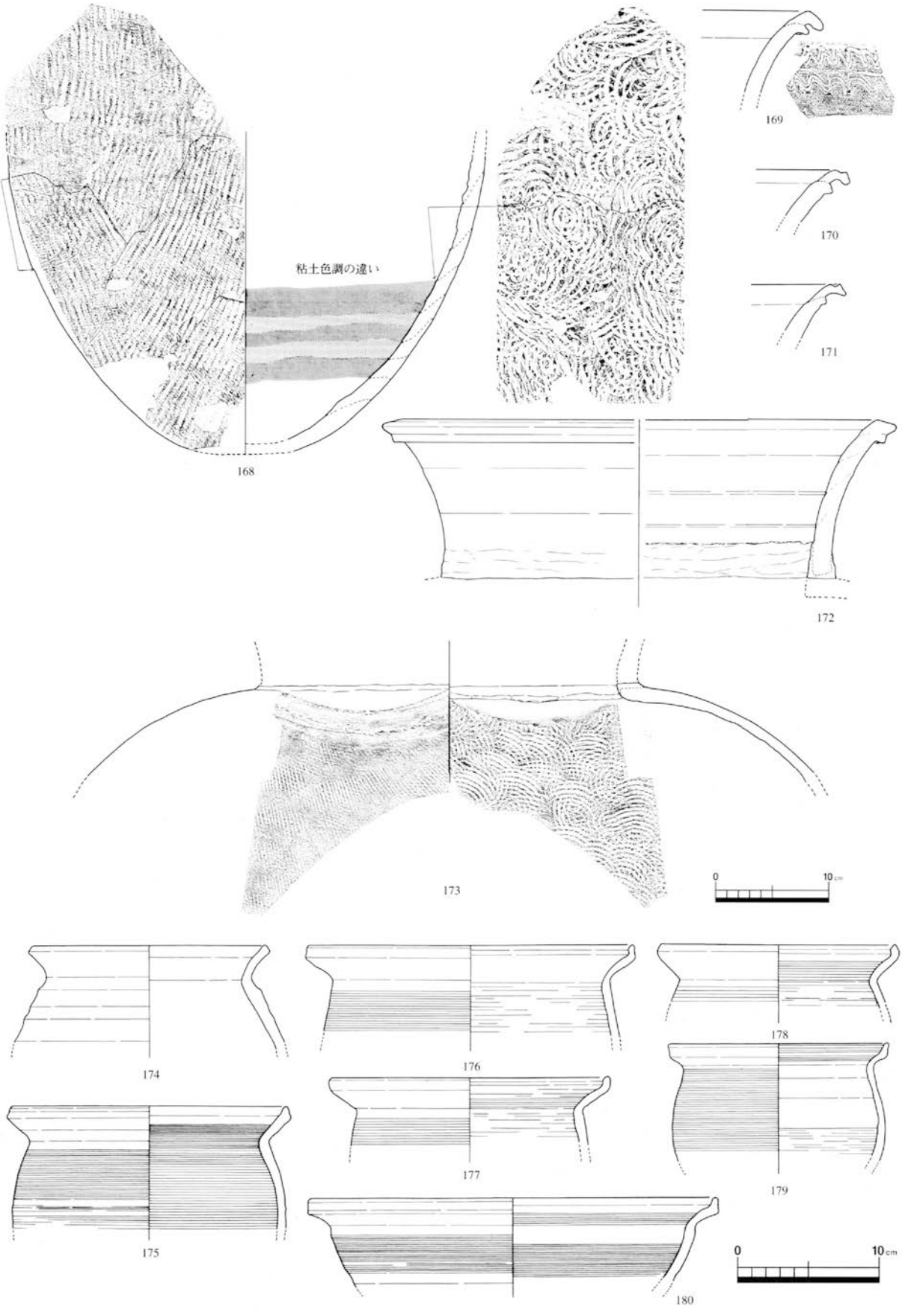
《手付鍋》　181の器形は鉢Ｂの把手付きタイプと同じであるが、胎土は大粒砂粒を含む土師器胎土であるため、煮炊具とした。体部上位が丸く張った後、頸部で「く」字に屈曲する器形のもので、体部最大径付近に把手が付される。田嶋Ⅲ期に出現し、Ⅳ期まで確認される器種である。

《甑》　口縁部破片が少量出土するが、図示できたのは182・183の底部破片である。比較的円筒に近い胴部から底部で単孔、筒抜けとなるタイプで、端部が内側に肥厚突出する。簀の子受けになる部分であろう。

《盤型鉢》　盤型鉢は口径40㎝弱を測る盤状の器形をもつ特殊大型器種で、土師器煮炊具同様の胎土をもつ。厚手の作りで、底面を内側から同心円文当て具で叩いて成形した後、カキ目及びハケ目で全体を調整する。当器種は同時期に出現する大型台付鉢と同一機能をもった器種と考えている。台付鉢は煮炊具同様の胎土をもち、浅い大型鉢状器形に大型の脚が付く器種である。火にかける器種で、火舎的な器種と考えている。

ｇ．その他土製品

平瓦の破片が３点出土しており、いずれも凸面縄目叩き、凹面布目圧痕が認められる。縄目叩きが側端面に沿っ



第108図　F区12号窯灰原出土須恵器（7）（168～173＝1/5, 174～180＝1/4）

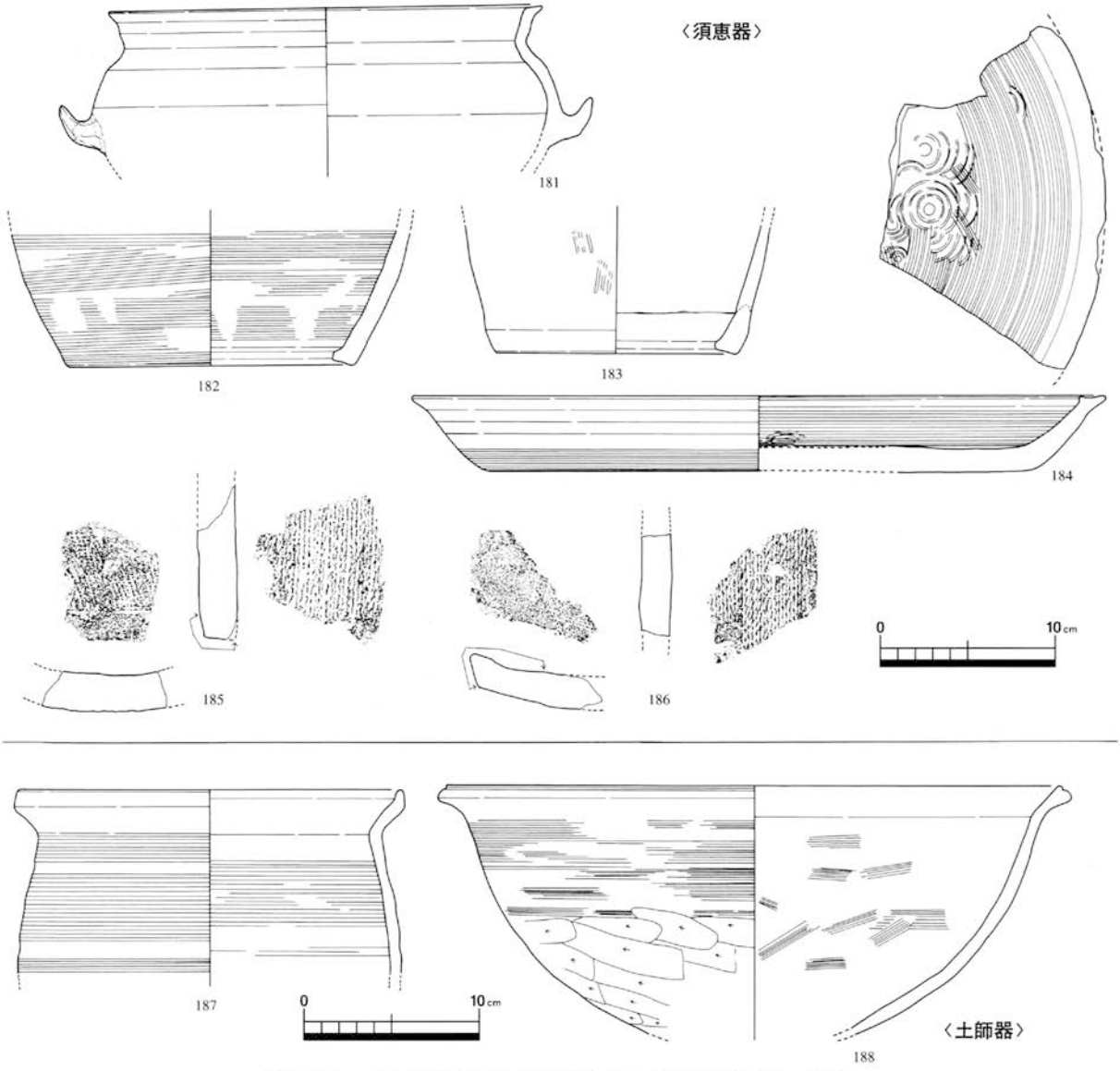
て真っすぐ走ることから１枚作りの可能性が高く、８世紀中頃以降のものと位置付けできる。ただ、９世紀後半代の灰原中に類似する瓦が含まれており、この時期に下る可能性もある。８世紀後半代に位置付けられる瓦を南加賀窯跡群では検出しておらず、もし須恵器窯の時期までさかのぼる資料であれば、注目される。

２．10号窯灰原出土土器

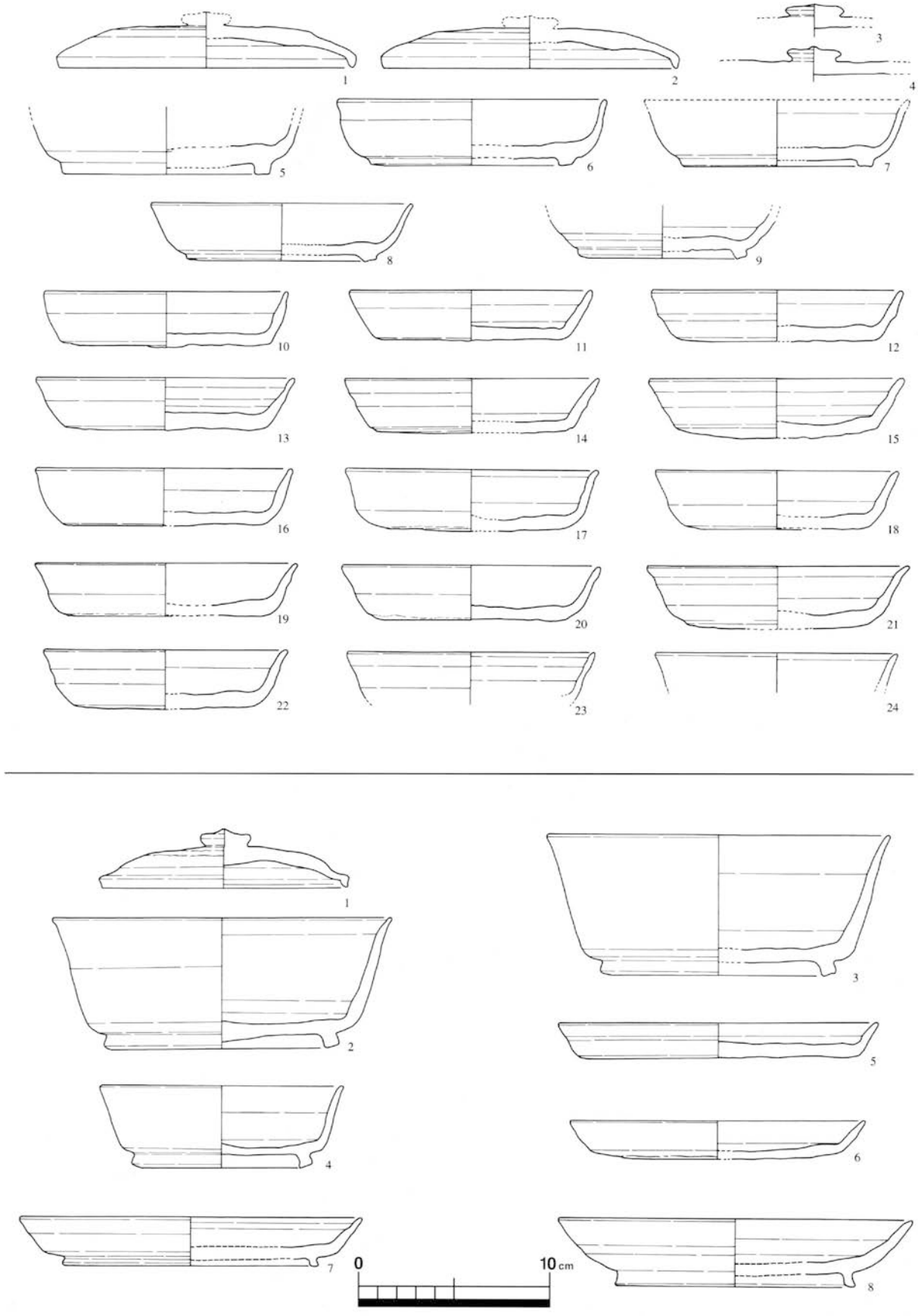
斜面上方の崖面付近でのみ確認できた灰原資料であり、斜面下方堆積には当窯資料を見いだしにくい。出土量が少ないため、須恵器窯灰原と位置付けできない可能性もあるが、焼き色などを見ると、特徴的かつほぼ同一の焼きを呈しており、１回の須恵器焼成に伴う一括廃棄品と位置付けできる。

須恵器のみで構成されており、破片数では坏Ｂ蓋38点、坏Ｂ身28点、坏Ａ163点、鉢Ｂ１点、壷・瓶８点、中甕４点を数える。口縁部計測値では坏Ｂ蓋92／36、坏Ｂ身159／36、坏Ａ597／36、鉢Ｂ２／36、中甕10／36で、食膳具では坏Ａが78％を占める。

坏Ｂは基本的に３法量分化しているが、図示できたものは中法量のみで、大・小法量は破片のみの出土である。坏Ｂ蓋は偏平器形で偏平つまみが付く口径15㎝台のもの。坏Ｂ身は口径13～13.5㎝前後で腰が丸く立ち上がる偏平器形のものである。高台は幅広の低いものが付き、雑な作りをしている。重ね焼きはⅠ類主体だが、２点Ⅱａ類が存在する。坏Ａも偏平器形で、口径13～13.5㎝が主体的だが、12.5～14㎝の幅で分布する。腰の丸い器形を



第109図　Ｆ区12号窯灰原出土須恵器（８）及び土師器（Ｓ＝1/4）



第110図　F区10号窯灰原（上）・9号窯灰原（下）出土須恵器（S＝1/3）

もち、全体的に厚手の作りをする。

器種を網羅しているとは言い難いため、明確に法量分化しているのか、又は盤類が存在しているのかわからないが、坏A主体の構成で、偏平器形の坏類が一般的な器形であると理解すれば、当期は坏B法量分化と盤類が定着する以前の様相と捉えられる。当窯D区4号窯よりも確実に坏類は偏平で大ぶりであり、矢田野向山1号窯Ⅲ次窯窯内最終床資料に類似する。この資料は田嶋Ⅲ期に位置付けられるが、その中では最終末の様相をもつ須恵器であり、Ⅲ期新段階としている。当窯F区で以前調査された二ッ梨一貫山1・2号窯跡はⅢ期古段階に位置付けられているものであり、新器種導入が遅れる窯の系統の中で、当窯を位置付けることが可能と考えている。

3．9号・11号窯灰原及び斜面下方堆積灰原出土須恵器

山側崖面で9号窯灰原と11号窯灰原の2カ所の灰原断面を確認しているが、両灰原間が削平されており、同一灰原として繋がる可能性は高い。また、斜面下方に2次的流れ込みとして確認される堆積した灰原層は、これらの灰原が流出したものと予想している。以上の理由で、当灰原資料は一括して報告するが、全体の中で時期幅が存在し、単一の須恵器窯資料とは言えないものである。先述した12号窯灰原に一部重複しながら、これに後続する時期と考えており、2型式程度の幅をもつと理解している。また、斜面下方堆積灰原資料は、2次的堆積のため、土師器焼成坑で生産された土師器類も含んでいる。土師器については土師器焼成坑焼成品と判断し、同一の土層出土のものであっても、土師器焼成坑灰原という扱いをした。須恵器に関しても使用痕の残る消費廃棄品が混在している。土師器焼成坑からも須恵器は出土しており、当灰原出土須恵器資料は須恵器焼成に伴う純粋な資料とは言い難い部分もあるので、扱いに注意が必要であることを予めことわっておく。

（1）須恵器の器種構成

須恵器器種名は凡例で示した器種分類基準に基づく。以下に示した器種構成表は、9号窯灰原と11号窯灰原、斜面下方堆積灰原の資料を総合したものである。全体的な構成としては、食膳具が9割以上を占め、貯蔵具は8％未満と少ない。食膳具では坏Aが55％の半数以上を占め、盤Aと坏Bが2割弱、盤Bは6％台である。12号窯灰原に比べると、確実に坏Aが増加し、盤Bが減少している。また、底部糸切りの埦が少量ながら存在していることも特徴と言える。貯蔵具では甕類が3割弱と少なく、壷Fと瓶Aの量が目立つ。甕の減少は特に小甕に顕著で、中甕は12号窯灰原よりも微増している。横瓶は8％台の定量を維持し、瓶Dが少ないながらも定量を占める。また、壷Eの存在も当資料の特徴と言えよう。鉢類の中では鉢Fが鉢の5割以上を占める。鉢Bは微増するが、まだ増産段階以前の様相で、鉢Aの存在も特徴的と言える。小型貯蔵具では小型鉢が見られなくなり、糸切り底の小型壷や徳利型小瓶が定量存在する。なお、構成表には示していないが、須恵質の管状土錘や獣足鉢と思われる獣脚片、竿秤の重りを模したと思われる須恵質の分銅型土製品、そして円面硯も出土している。

器種名	坏B蓋	杯B身	杯A	盤A	盤B	埦A	高盤	食膳具計	小型瓶	小型壷	小貯蔵計	釜	甑	煮炊具計
口縁部計測値	3,106	(2,417)	9,166	2,998	1,081	26	172	16,539	15	18	33	14	15	29
占有率	18.8%	—	55.4%	18.1%	6.5%	0.2%	1.0%	91.9%	45.5%	54.5%	48.3%	0.2%	51.7%	0.2%

器種名	鉢A	鉢B	鉢C	鉢F	瓶A	瓶D	壷A	壷蓋	壷E	壷F	横瓶	大甕	中甕	小甕	貯蔵具計	器種総計
口縁部計測値	46	82	11	170	298	48	32	(15)	4	171	121	24	317	76	1,400	18,001
占有率	3.3%	5.9%	0.8%	12.1%	21.3%	3.4%	2.3%	—	0.3%	12.2%	8.6%	1.7%	22.6%	5.4%	7.8%	

第15表　9号・11号窯灰原及び斜面下方堆積灰原出土須恵器器種構成表
(口縁部計測値は口縁端36分割での残存率数値、蓋付器種は蓋と身で数値の多い方を、高盤は口縁部と脚端の数値の多い方を採用)

（2）各器種の特徴

a．有蓋坏型器種（坏B蓋・坏B身）

《法量組成》　法量は大・中・小の3法量に加え、天井部環状突帯をもつ口径20㎝を越える特大蓋が存在する。大法量は蓋口径が14.5～18㎝、身口径が14～18㎝、中法量は蓋口径が11.5～14.5㎝、身口径が11～13.5㎝、小法

量は蓋口径が10.5～12.5㎝、身口径が10～11㎝となる。12号窯灰原に比べると全体的に口径が縮小しており、特に大法量において目立つ。中法量と小法量の差は狭まり、中法量の小型のものよりも小法量の大型のものが逆転する現象が見られる。法量別量比は、中が６割以上を占め、大と小が２割弱程度で存在する。当資料に時間的幅があるため、数値だけでは把握しにくいが、古い段階の資料は12号窯灰原に重なる時期である可能性をもち、全体的には中法量主体の構成であると言えよう。

《重ね焼き痕跡》　坏Ｂは蓋と身とを重ねて焼く器種であるが、焼き方には大きく３つの方法がある。当窯では蓋と身を分けて重ね焼くⅢ類が出現しておらず、従来の方法であるⅠ類とⅢ期に導入される柱状重ね焼きのⅡ類が確認される。Ⅰ類が３割弱、Ⅱ類が７割強で、特にⅡａ類が48%近くを占める。確実に12号窯灰原よりもⅡ類重ね焼きの量は増えており、増加傾向と考えられる。

有蓋器種	坏　B　蓋			坏　B　身		
法　量	大	中	小	大	中	小
口縁部計測値	440	2,035	631	506	1,477	434
占有率	14.2%	65.5%	20.3%	20.9%	61.1%	18.0%

第16表　坏Ｂ法量別構成表（計測値は第15表同様）

蓋法量	大	中	小	総　計
Ⅰ　類	47	153	44	244（28.2%）
Ⅱａ類	33	327	52	412（47.7%）
Ⅱｂ類	42	149	16	207（24.0%）

第17表　坏蓋重焼類型構成表（数値は確認個体数）

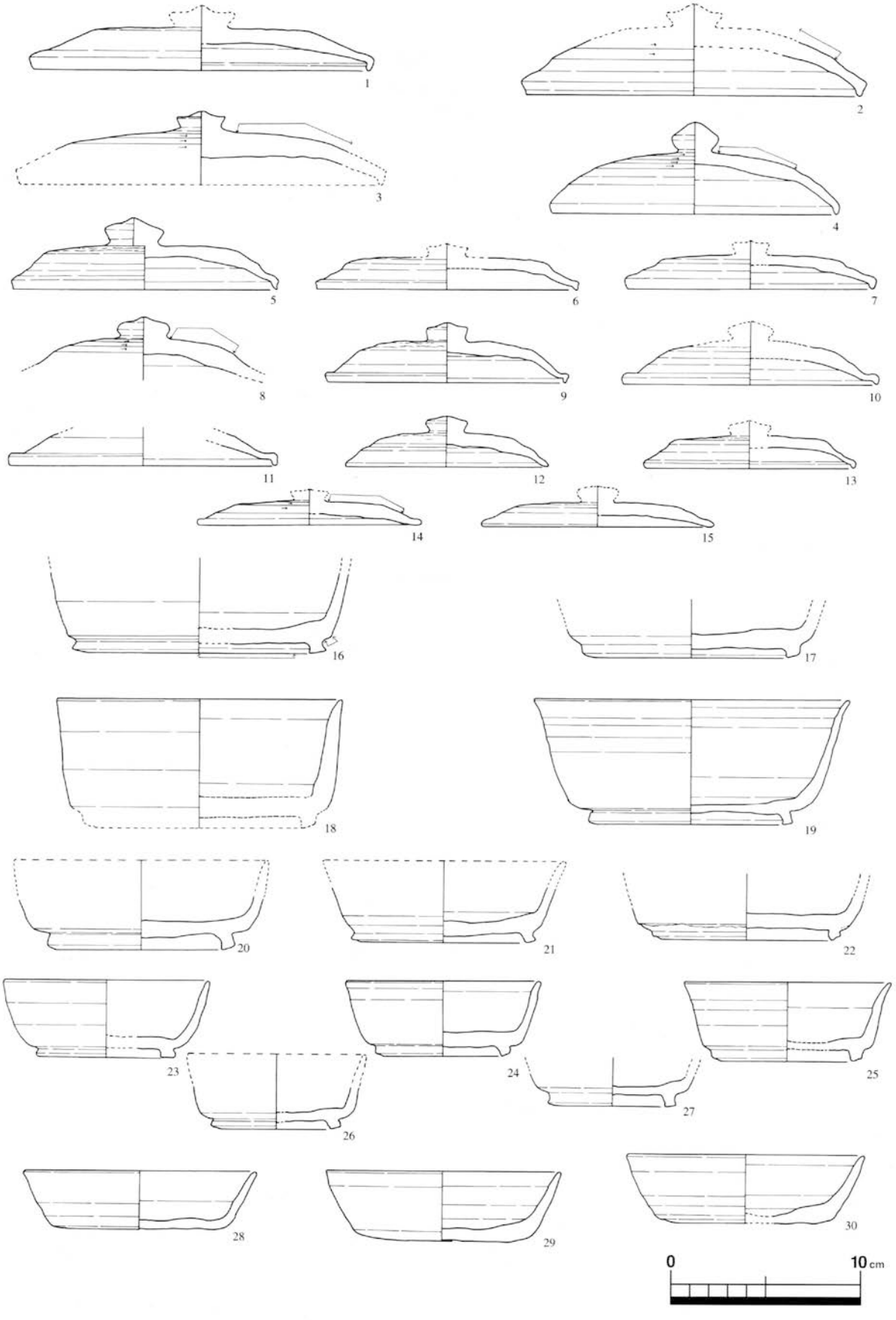
《坏Ｂ蓋大法量・特大法量》　特大法量は113図１・２で、丁寧に削り調整した天井部に断面方形の突帯を巡らす。天井降灰しており、Ⅰ類重ね焼きによる。

大法量は以下の４類に分類できる。A類（111図１、113図７・８）は天井部平坦面形成する厚手偏平器形で、つまみはやや偏平型だが、小型化して頂部が若干盛り上がる。口縁部は折り曲げ器形。天井部削りを伴わない。大法量の中では大ぶりの法量をもつもので、器形からも古手に位置付けられる。B類（113－３・４）も天井部平坦な偏平型であるが、大型で頂部の盛り上がる器形をもつ。天井部は削り調整される。つまみ形態から新しい器形と判断でき、新手に位置付けられる。C類（111図２～４、113図５・６）は山傘状の天井部をもつもので、比較的天井丸く高い。つまみは小型宝珠形を呈し、天井部削りを施す。A類同様に古手のものと位置付けできる。D類（113図９・10）は天井部丸く器高高いもので、口縁部折り曲げの手前で外屈する器形をもつ。つまみは小型宝珠形が崩れて低くなった形態で、天井部削りを伴う。口径は大法量の中で最も小型を呈し、新手に位置付けできる。

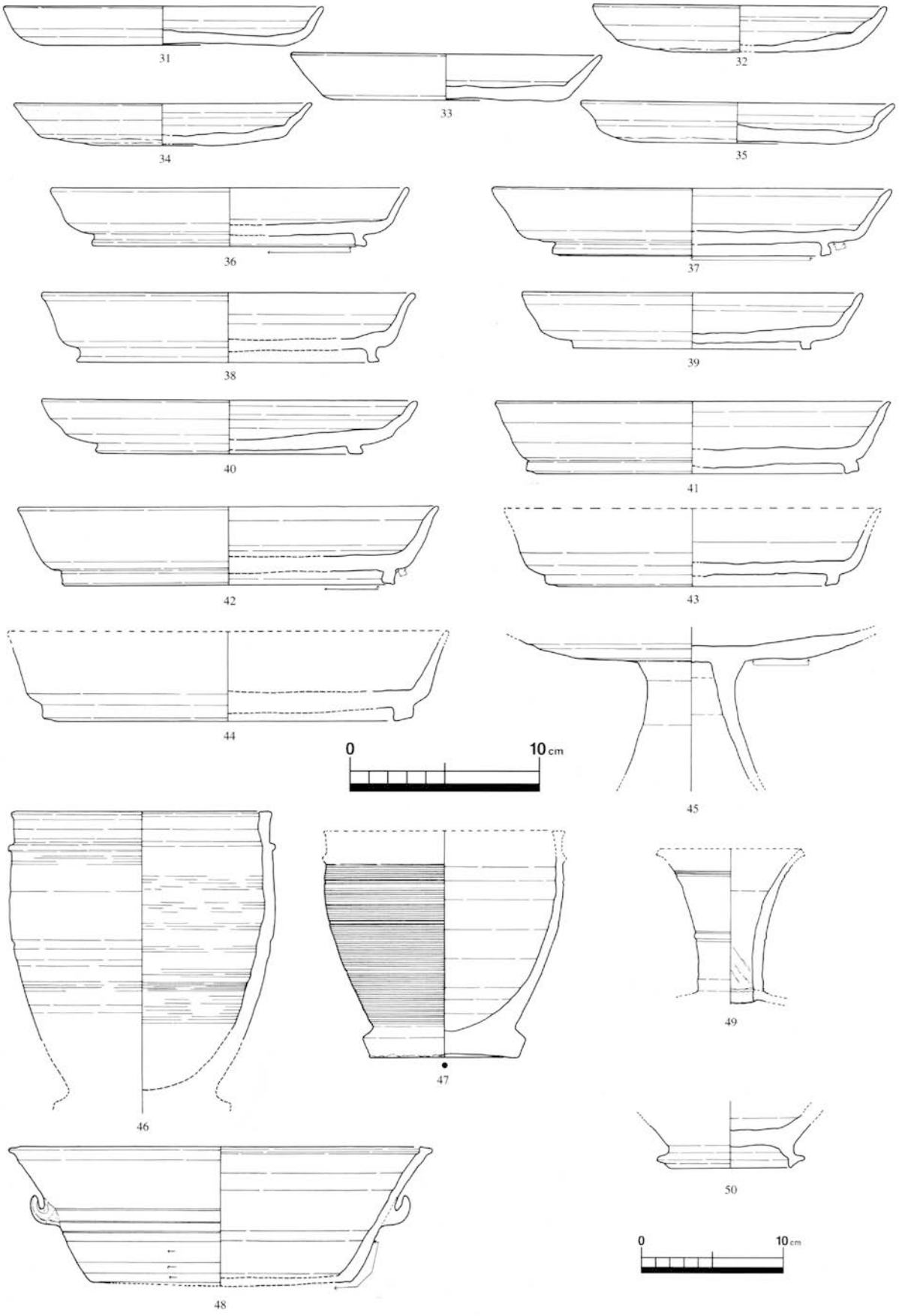
《坏Ｂ蓋中法量》　中法量は大法量に類似する器形をもつため、分類名も大法量に対応して付している。A類（110図１、111図７・６、113図11～15）は天井部平坦面形成の偏平器形で、大法量同様のつまみが付く。ただ、頂部盛り上がりつまみをもつものや口縁部の若干折れる器形が混在しており、B類的な様相も具備する。B類とした113図16・17やＤ類とした111図９・10、111図22との明瞭な差はあまりなくなっている。また、偏平器形で天井削り調整を施し、ボタン状つまみを付すタイプ（111図18～21）も定量存在し、混沌とした様相を呈す。12号窯灰原との比較で考えれば、A類がその系統で考えられるものであり、B類やD類は新出系器形と言えるものである。12号窯灰原からの口径の顕著な縮小はないが、13.5㎝を越える大ぶりのものはかなり減るであろう。

《坏Ｂ蓋小法量》　小法量は大・中法量との対応関係は求めにくく、小法量のみで分類する。A類（111図13、114図23・25・33・35・36）は天井部平坦で厚く、口縁部が緩く反る器形。口縁端部に微弱な折れが確認されるもので、天井部削り伴わないものが主である。B類（185図30～32）は厚手で平坦面形成する天井部をもつ点ではA類系統であるが、口縁部が外反する器形で、天井部ヘラ削り基本。小型宝珠形つまみが付く。C類（114図24・26～29）は天井部丸く盛り上がる伏せ椀器形で、天井部削り調整、薄手を基本とする。D類は全体的に厚手で小型法量をもつもので、天井ヘラ切りのままを基本とする。天井部が伏せ椀形を呈すD1類（111図12・114図３・４）と偏平なD2類（111図14・15）とに細分される。全体的な器形の流れとしては、厚手で偏平器形を呈するものから、器高高く口縁部外反する器形へと変化しており、それに伴って、偏平つまみから頂部盛り上がりのつまみへと変化する。類型で示せば、A類やD2類は古手、B類やC類は新手となる。

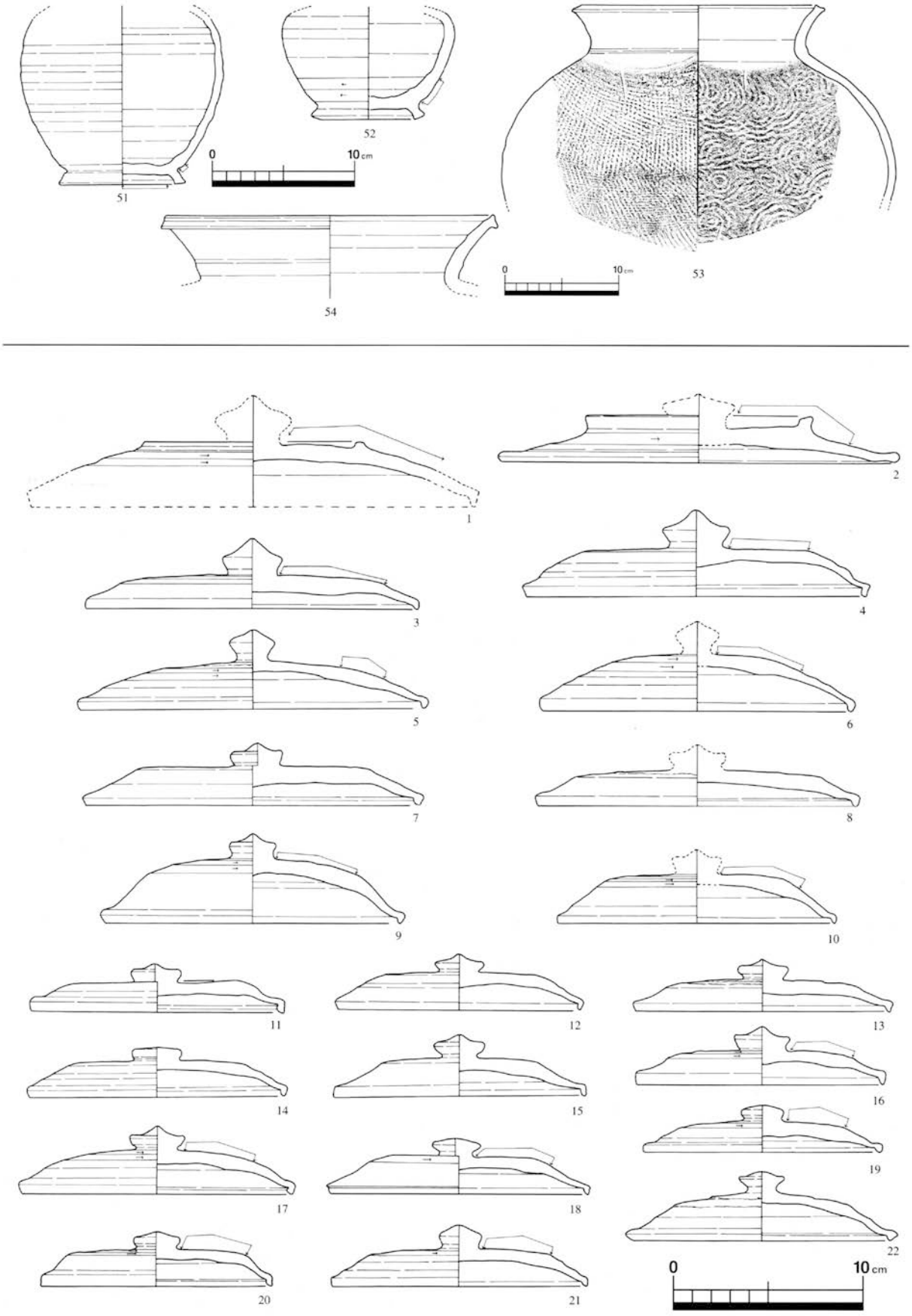
《坏Ｂ身大法量》　大法量は深身器形を基本とするが、体部立ち上がり器形や高台器形、厚さなどにより分類できる。A類は底部厚手で腰が張って立ち上がる器形で、体部はやや外傾気味。高台はしっかりと踏ん張る。口径



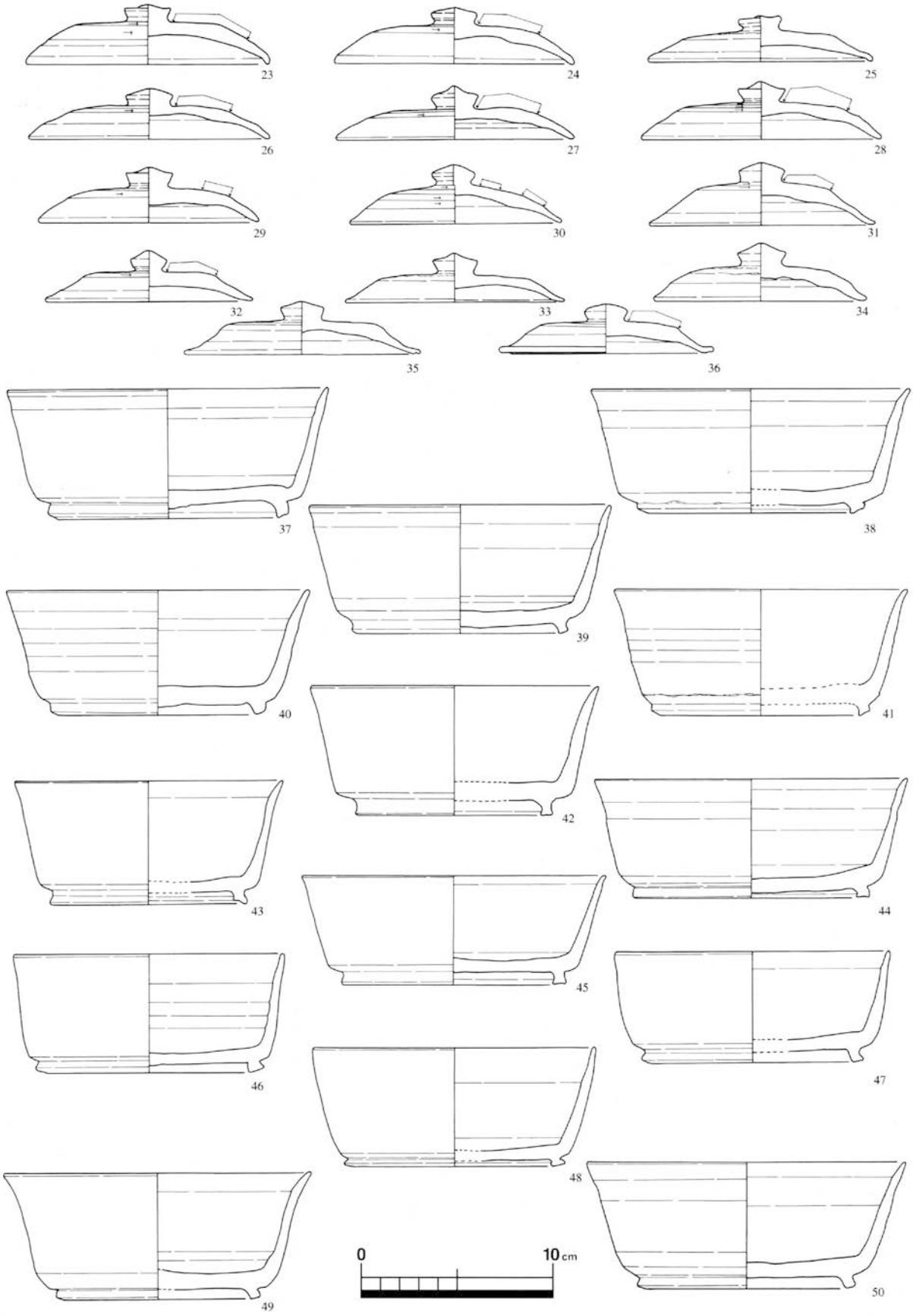
第111図　F区11号窯灰原出土須恵器（1）（S=1/3）



第112図　F区11号窯灰原出土須恵器（2）（31～45＝1/3, 46～50＝1/4）



第113図　F区11号窯灰原出土須恵器(3)（51・52＝1/4, 53・54＝1/5）・F区斜面下方灰原出土須恵器（1）（S＝1/3）



第114図　F区斜面下方灰原出土須恵器（2）（S=1/3）

の大きさと高台器形から、口径16～17㎝台の大ぶりで重厚な高台が付くA1類（110図２・３、111図16・17、114図37～39・44・50）と、口径14㎝台前後の小ぶりで、口縁部若干外反器形を呈し、高台がやや小型化するA2類（114図40～43・49）に分けられる。B類（111図18、114図46～48）は口径14㎝台の偏平気味器形。体部は直立気味に立ちあがる。C類（111図19、115図51～53）は全体的に薄手で、底部から丸みをもって立ち上がり、体部外傾気味となる。高台は小型のものか薄手のものが付く。また、114図45はA1類の偏平器形タイプ。115図54はC類の偏平器形タイプと位置付ける。偏平器形と深身器形が併存したり、タイプの異なる器形が併存するため、形態変化を明確に捉えることは難しいが、大きくはA類とB類が古手、C類が新手であり、細かくはA類の中でA1類からA2類へ変化しているものと理解している。

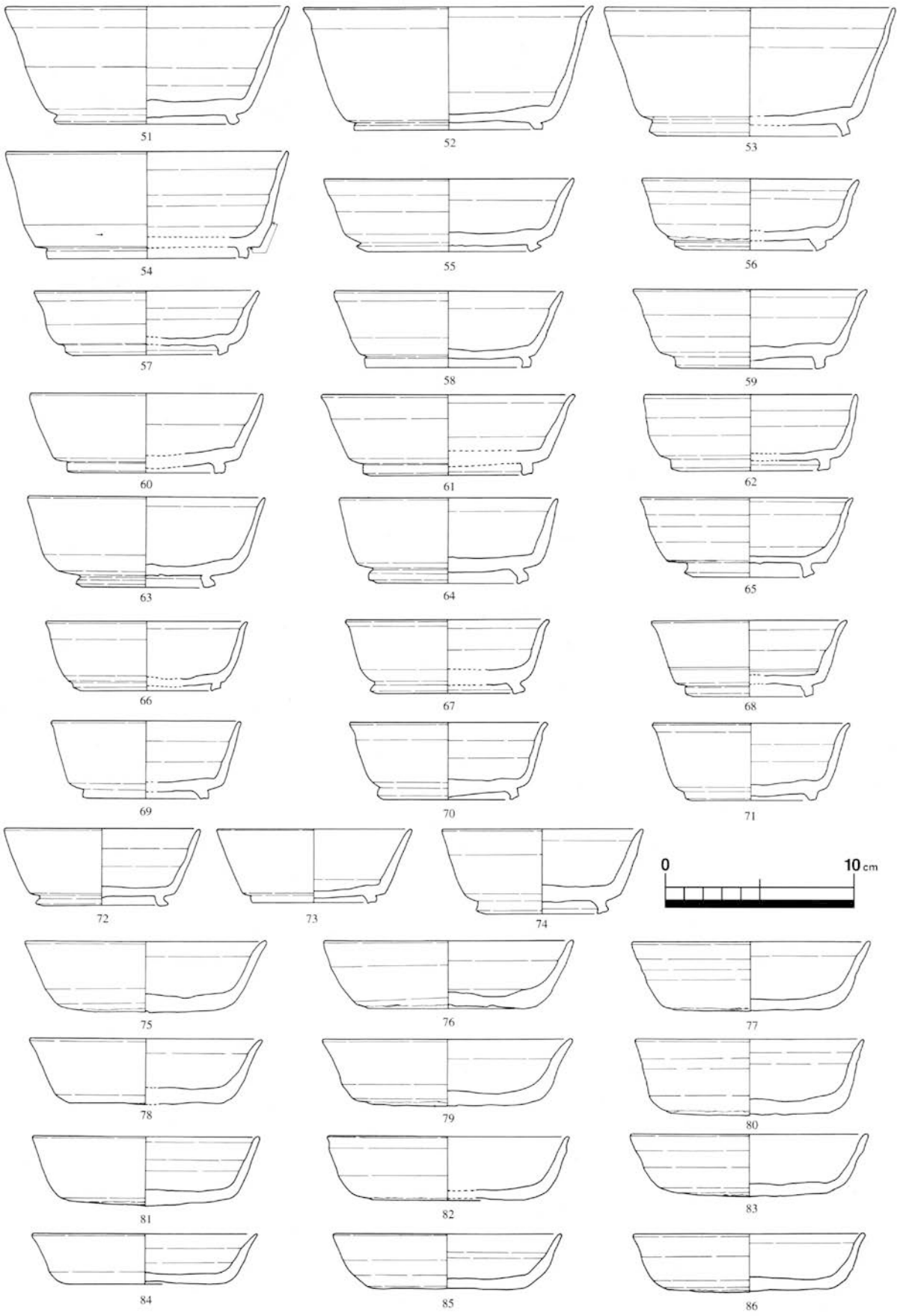
《坏Ｂ身中法量》　中法量は深身のものがなく、基本的に偏平器形系統のものである。器形等から以下の３類に分類する。A類（110図４、115図55～61）は偏平器形を基調とするもので、体部はやや外傾して立ち上がる。底部は概して厚手であり、高台は踏ん張って付けられる。法量や底部厚に違いがあり、細分の可能性はあるが、一括して扱う。B類（115図64）は底部厚手で、体部直立気味に立ち上がり、若干深身を呈す。しっかりと踏ん張る高台が付けられる。C類（115図63・65）は薄手で、高台貼付が立ち上がりのかなり内側に入る器形。やや深身を呈す。A類の偏平器形は古手器形と位置付けられるが、B類も併存しており、C類が後出器形と言える。B類からC類への器形変化と捉えられよう。

《坏Ｂ身小法量》　小法量は口径、器高が比較的まとまりをもっており、法量分布での変化は大きくない。高台の作りや厚さ、体部外傾によって分類される。A類（111図23～25、115図66～71）は底部厚手を基本とし、体部立ち上がりが立ち気味となる器形で、しっかりした幅広の高台が付される。B類（115図74）は全体的に厚手で、しっかりと踏ん張る高台が付されるものだが、体部外傾するもの。C類（115図72・73）は全体的に薄手の作りで、高台は小型、体部は外傾器形を呈す。以上ではA類が大半を占めるが、中にはやや底部薄手のもの含まれており、それが後出する様相のものだろう。体部外傾器形はB類からC類の変化で見られ、B類はA類の薄手のものと併存すると理解している。

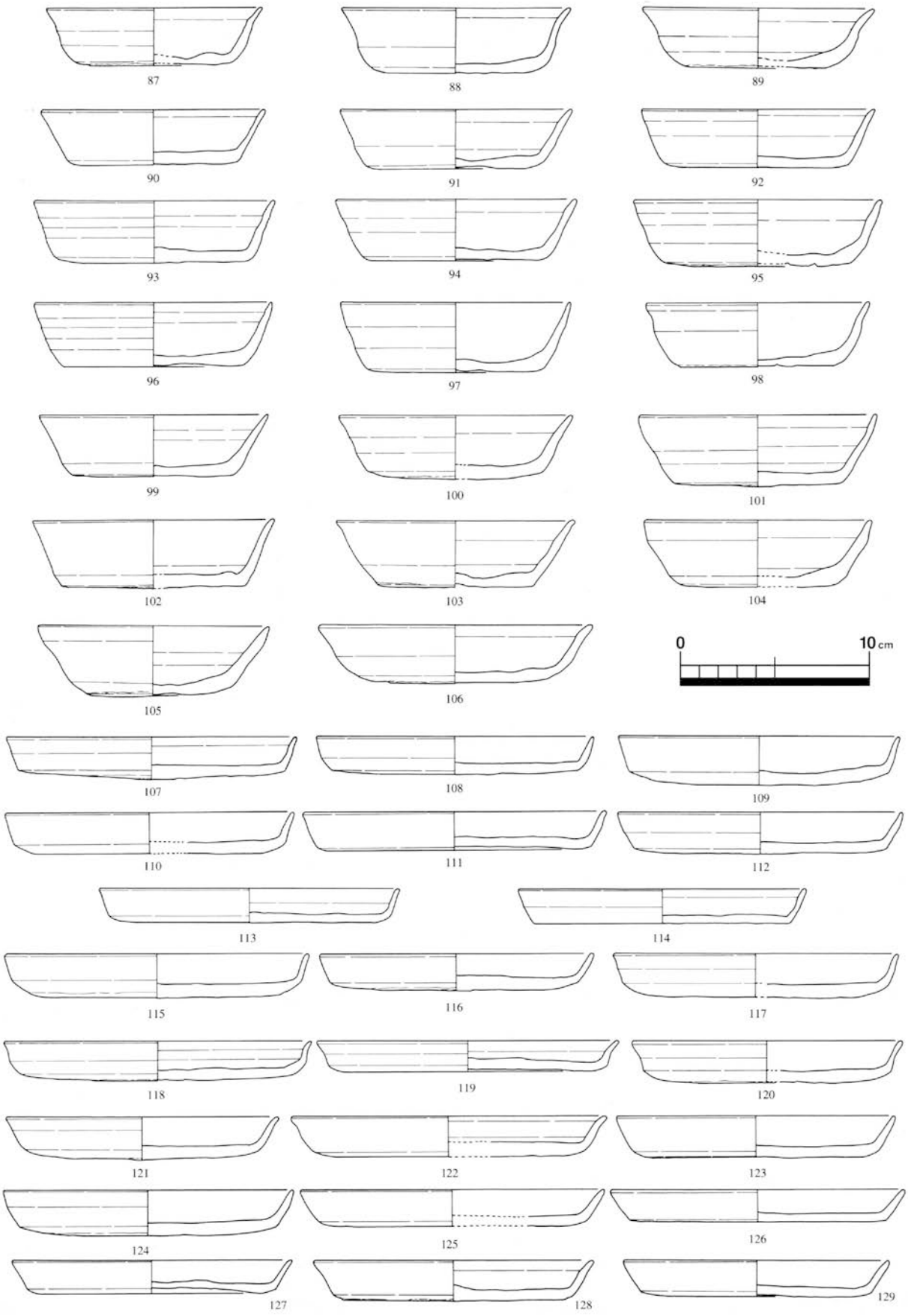
ｂ．無蓋坏型器種（坏Ａ・盤Ａ・盤Ｂ）

《坏Ａ》　坏Ａは口径12㎝台に中心をもつもので、11.5～14.5㎝の幅の中で存在する。器形から、５分類できる。A類は立ち上がりが丸い底部厚手のものである。体部は比較的立ち気味で、偏平形を基調とする。体部器形や身の深さにより、比較的深く大ぶりのA1類（111図29・30、115図75～81）とやや底部薄く偏平器形のA2類（115図82～87）、口縁部外反器形のA3類（116図88・89）に細分される。B類（110図28、116図90～100）も底部厚手や偏平基調である点はA類系統だが、底部平坦で立ち上がりに境がある。体部はやや外傾気味である。C類は底部平坦で、底部境が明瞭な薄手系統のもので、体部立つ器形のC1類（116図101・102）とC2類（116図103）に細分される。A類からC類までは偏平基調の器形で、系統的に繋がるものであり、A類からC類へという時間的変化の中で捉えられる。D類（116図106）は底部小型で体部丸く立ち上がり、体部外反する塊型器形のものである。口径大きく偏平を呈す。E類（116図104・105）も底部小型で、丸く立ち上がり、体部外傾する器形のものだが、厚手で小型法量をもち、より塊型を呈す。D類は８世紀前半からの流れで存在するものだが、E類は当期に出現する新たな器形であり、新出系器形と位置付けられる。

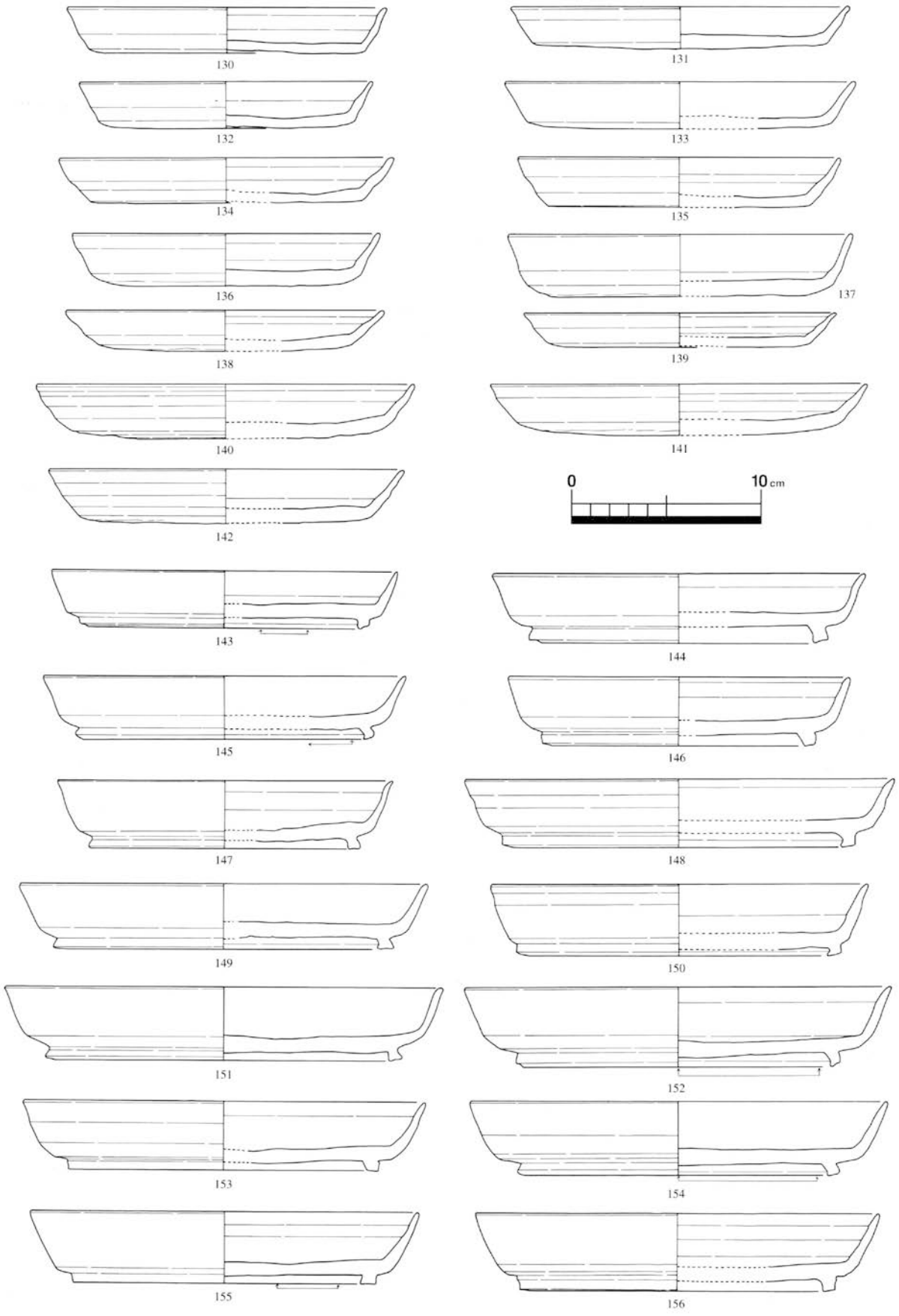
《盤Ａ》　盤Ａは口径14㎝から20㎝まで幅広く分布する。明確に法量が分化することはないが、小型の一群と大型の一群で形態が異なる。全体的な器形により５分類できる。底面削りを施すものはなく、ヘラ切りのままである。A類は底部に境をもって短く直立気味に立ち上がるもので、底部厚いA1類（116図107～110）と底部薄いA2類（116図111～114）に細分できる。B類も体部直立系器形であるが、体部立ち上がり丸みもつもので、底部厚手が目立つ。体部直立するB1類（110図5、116図115～117）と直立後に口縁部外反するB2類（112図31、116図118～122）、体部が外傾気味となるB3類（116図123・124）に細分される。C類（110図６、116図125～129）は底部やや薄手、底部境をもって体部短めに外傾するもの。A2類の外傾器形と言えるものである。D類は全体的に薄手で、腰が張って体部外傾して立ち上がる。体部にはロクロヒダのうねりが伴う。体部立ち気味のD1類（117図130～133）と体部外傾器形のD2類（112図33、117図134・135）、体部が強く外傾するやや底部の丸いD3類（112図32



第115図　F区斜面下方灰原出土須恵器（3）（S=1/3）



第116図　F区斜面下方灰原出土須恵器（4）（S=1/3）



第117図　F区斜面下方灰原出土須恵器（5）（S=1/3）

～35、117図138・139）に細分される。E類は厚手底部から丸く立ち上がる深身大型の一群で、体部直立気味器形をもつE1類（117図136・137）と体部ロクロヒダをもって外傾するE2類（117図140・142）に細分される。A・B類は体部直立系統の古手の器形。C類もそれに併存する形で存在する。E類の大型品もE1類は併存するものだが、E2類はその変化したものであり、新手に位置付けられる。D類は新手の器形。体部ロクロヒダと薄手化として現れる。

《盤B》　盤Bは口径17.5～24cmの範囲で分布するが、盤A同様に明瞭な法量分化を行わない器種である。全体的な器形より、5分類できる。A類は厚手の底部に踏ん張る高台が付されるもので、体部立ち上がりが角張る小ぶりのものである。身の深さによって低身A1類（117図143）と比較的深いA2類（117図152）に細分される。B類もA類同様の厚手の底部にしっかりとした高台が付されるものだが、体部立ち上がりが丸いもので、当窯では主体を占める器形である。低くて小型を呈するB1類（112図36・38、117図144～147）、低身だが、口径が大きいB2類（117図148・149）、やや深身を呈し口径の大きなB3類（112図41・42、117図151～156）、大型深身を呈するB4類（118図157～160）に細分される。C類は底部厚手で、体部外傾する器形。体部立ち上がりに境をもち、低身で口径小型を呈するC1類（118図161～163）と立ち上がり丸く、口径大型を呈するC2類（118図164～166）、立ち上がり丸く深身大型を呈するC3類（118図167・168）に細分される。D類（112図37・39）は全体的に薄手で体部外傾する器形。小型の高台が立ち上がり箇所よりもかなり内側に貼付される。E類（110図8・7、112図40）は体部ロクロヒダを残し、強く外傾する器形で、小型法量のもの。高台はD類に似る。盤B全体での底面削り率は3割程度。各類型での多寡は認められない。数量的にはB類が主体で、A類とともに古手に位置付けられる。C類も同時期併存するものだろう。D・E類は新出器形であり、体部外傾で薄手を基本とする。

c．その他の食膳具（特殊坏・コップ型・埦類・高盤）

《特殊坏》　底面から体部下位にかけて丁寧に削り調整をする深身で大ぶりの坏が出土している。118図169は薄手で体部若干外傾する器形。内面は丁寧にナデつけられている。118図170は破片だが、内底面にヘラミガキを伴う丁寧な作りのものである。直接的な模倣対象は見つからないが、仏器的器種と考えられよう。

《コップ型》　118図173は体部直立器形で、底面削り調整をする小型坏器形である。コップ型器種と位置付け可能である。

《埦類》　平底底部の無台埦。底面から体部下位まで削り調整する118図171と底面の糸切り痕をそのまま残している118図172がある。両者とも器形が若干異なるものの、赤彩土師器埦類の器形に似ている。ただ、底面無調整はこの時期の赤彩土師器では見られず、赤彩土師器模倣では片付けられない。同時期の能美窯跡群で糸切り無調整の須恵器無台埦が少ないながらも定量生産されており、小型鉄鉢型製品で糸切り無調整製品も散見されるなど、仏器的な器種と位置付けるのが妥当だろう。

《高盤》　口径19.5～22cmのもので、脚高は8.5cm前後を測る。坏部（190図187～189）は逆位坏蓋状器形で、坏底部は厚く、口縁端部は折り曲げる。脚部（112図45、119図177）は基部を絞った器形で、基部径は比較的太めである。以上が当期の高盤の一般的器形であるが、脚高6cm弱の小型脚（112図465）が出土している。高盤の小型製品と思われるものである。

d．小型貯蔵具（小型瓶・小型壷）

《小型瓶》　小型瓶は口頸部が長頸となる長頸瓶のミニチュア品と平底の徳利形を呈す徳利形小瓶がある。長頸瓶は頸部沈線巡らす口頸部片（119図179）。有台の胴部破片（119図181・182）も当器種の可能性をもつ。徳利型小瓶は口頸部片（190図180）で、119図185・186の底部糸切りの胴部破片もその可能性をもつ。

《小型壷》　小型壷は有蓋短頸壷のミニチュア品（119図183）と平底で広口短頸器形の壷（119図184）がある。

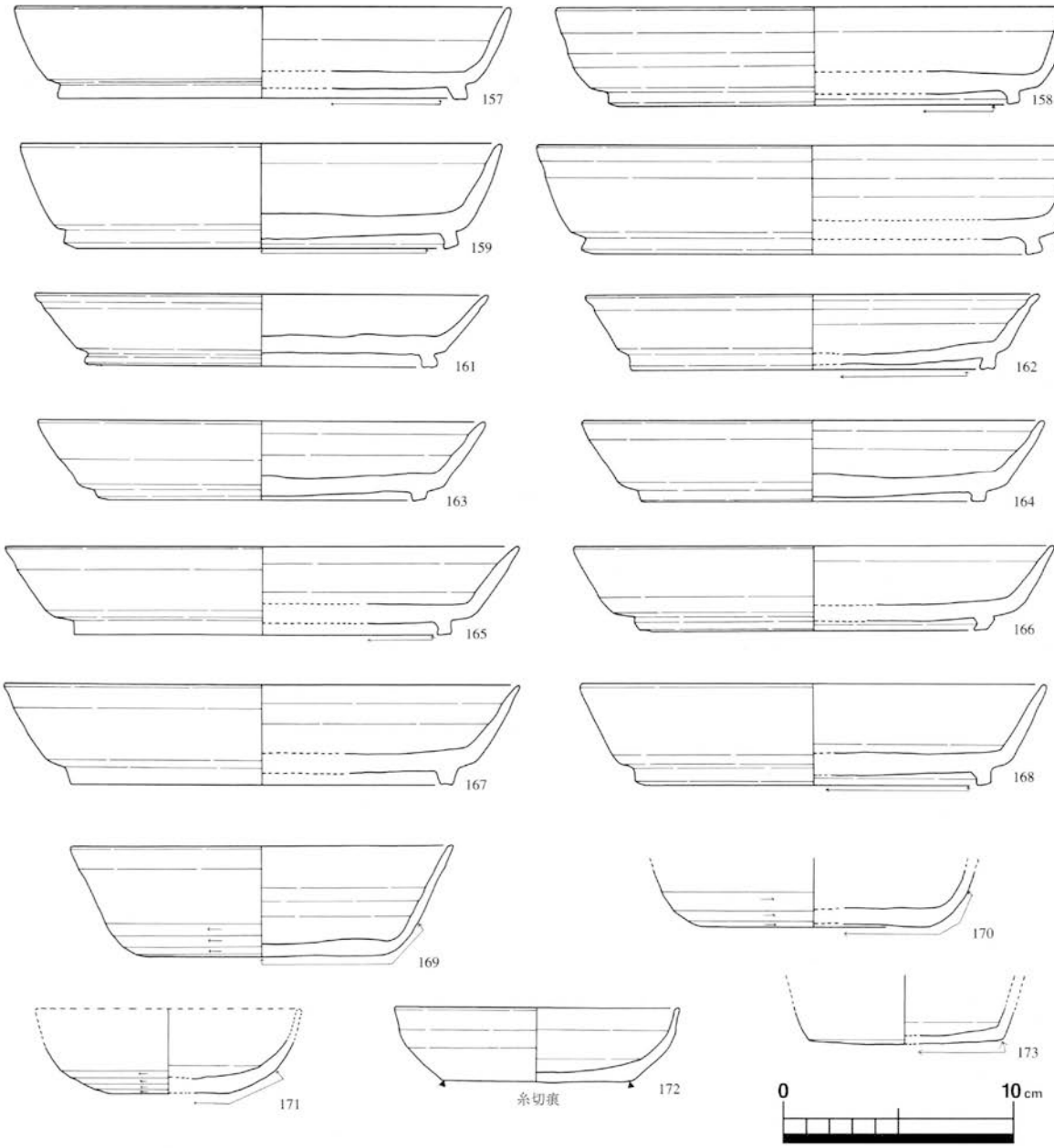
小型貯蔵具は瓶・壷類のミニチュア品が8世紀中頃に顕在化し、後半代まで存続するが、9世紀代に入ると激減し、徳利形小瓶が主体となる。また、8世紀後半は糸切り底の小型壷類が目立つ傾向があり、当資料はそのような須恵器様相を反映している。

e．貯蔵具（鉢・瓶・壷・横瓶・甕）

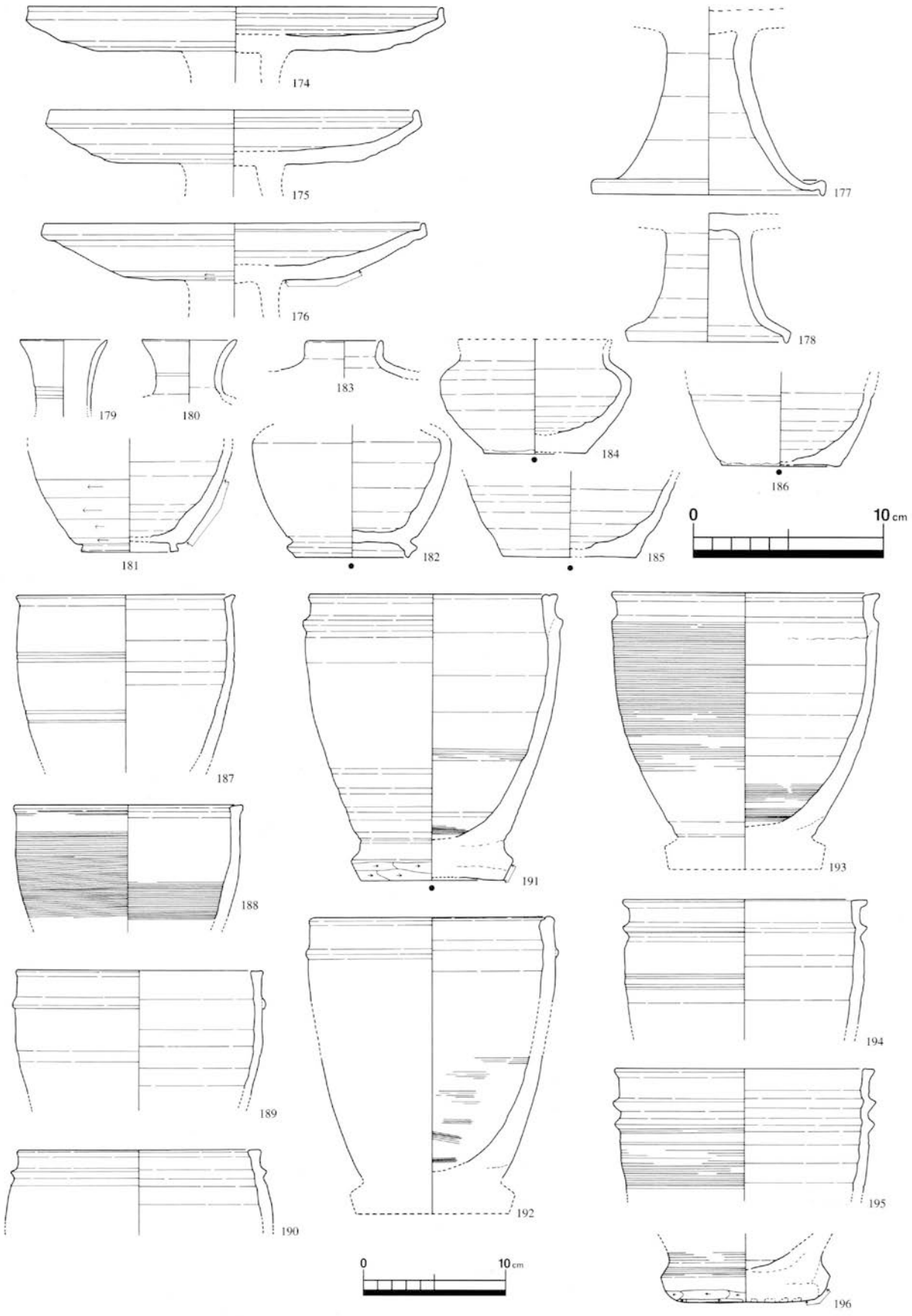
《鉢》　鉢類は鉢A、鉢B、鉢C、鉢Fの他、特殊な小型の鉢が出ている。主体は鉢Fで、鉢Bの出土も目立つ。

主体を占める鉢Fは、厚い円盤状底部をもち、体部深鉢状器形を呈する器種である。当期の体部器形は上半が円筒状に立ち上がる器形で、口縁端部外側が突出して上端に面をもつ。この器形を基本とし、体部上位に稜を形成するのであるが、体部上位の稜形成の仕方によって、稜をもたないａ類（119図187・188）と１段稜形成するｂ類（112図46、119図189～194）、２段稜形成するｃ類（119図195）に分類できる。さらに、稜形成の方法により、粘土紐貼付のa1類（189・192）と粘土紐積み成形時に稜形成の箇所で段ができるように積み上げるa2類（46・191・193）、稜を内面から押し、外面で摘まみ出すa3類（190・194）に細分される。ｃ類の方法もa3類と同様の方法による。また、底部についても、器形と技法により分類できる。Ⅰ類（112図47、120図197・198）は底面が平坦で糸切り痕をもつもの。全体的に薄手だが、特に薄いものには底面刺突が施されない。これに対し、Ⅱ類（119図196、120図199）は極厚底部で底面が丸い器形を呈す。底面刺突が顕著に施され、側面は手持ち削りが多用される。当器種に見られる底面刺突は底部が極厚であるために、焼成が均質にわたるよう、刺突を入れていると考えられているが、当資料はその可能性を示唆するものである。

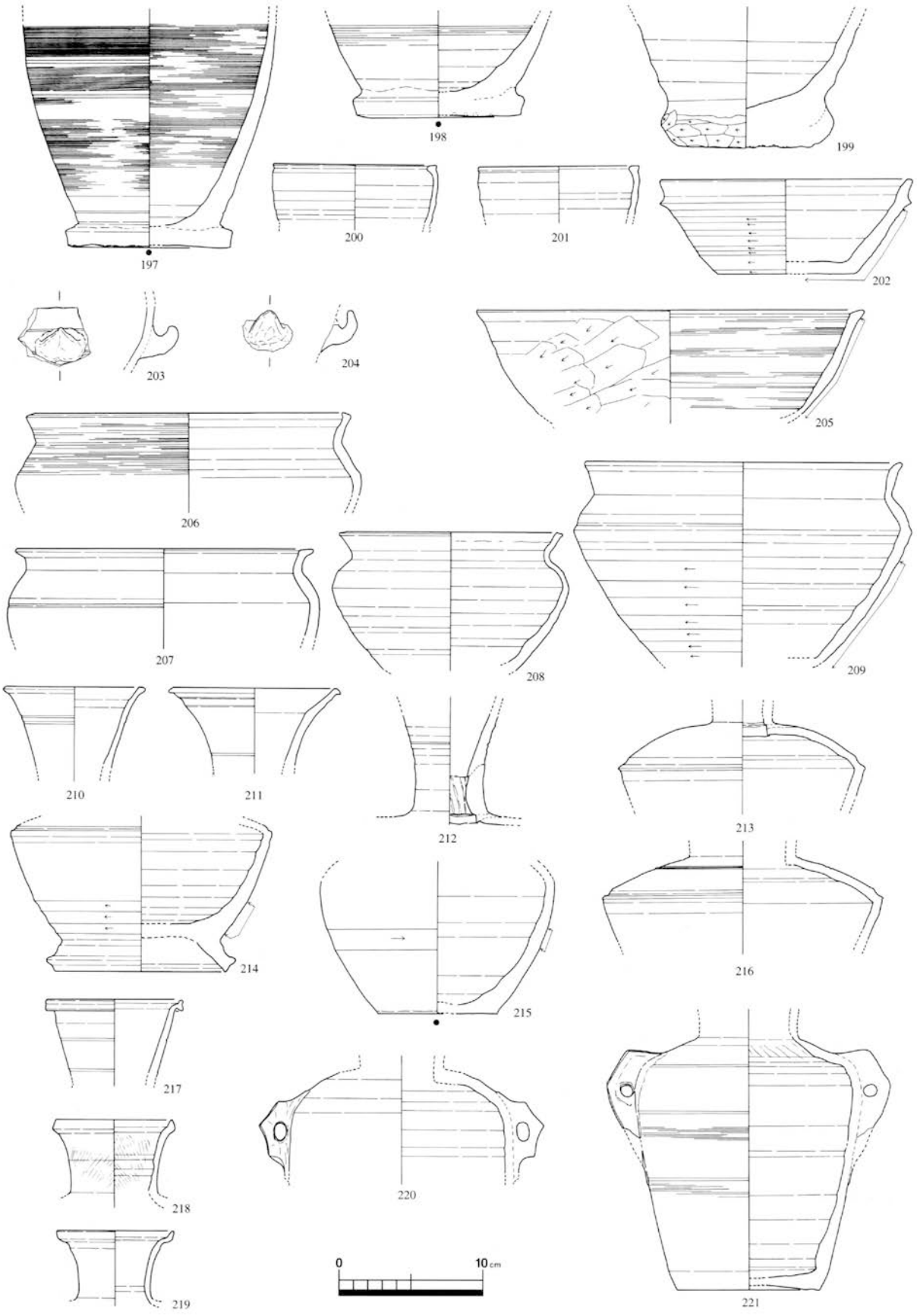
鉢Ａ（112図48、119図203・204）は、底部平たい槽型の鉢で、体部中程に把手が２個付される器種。当器種の中では全体的に薄手の作りをしており、口径も30㎝弱とやや小型である。Ⅲ期に出現し、Ⅳ期に盛行・衰退する



第118図　Ｆ区斜面下方灰原出土須恵器（６）（S=1/3）



第119図　F区斜面下方灰原出土須恵器（6）（174～186＝1/3, 187～196＝1/4）



第120図　F区斜面下方灰原出土須恵器（7）（S=1/4）

器種で、当資料は終末期のものと言えよう。

鉢Bは体部上位で張り出し、頸部で「く」字屈曲する器形。厚手で、体部上位の張りと頸部屈曲の弱いa類（120図206）と体部上位が丸く張り、頸部屈曲の明瞭なb類（120図207・208）に分けられる。a類は古手、b類は新手に位置付けられる。

鉢C（120図205）は体部外面に手持ち削りを施すもので、体部下位にむかって薄くなり、この部分で平底になる可能性をもつ。槽型の鉢に近いものかもしれない。

その他、口縁部上端に面をもつ口径11cm程度の筒形の鉢（120図200・201）や口径17cm台の小型の鉢がある。

筒形鉢は体部ロクロヒダの目立つ薄手作りのもので、田嶋Ⅵ期頃に少量見られる。土師器焼成坑で出土する匣鉢の体部に類似しているが、口径や作りが異なり、当器種の方が丁寧に作られている。内面は降灰せず、蓋が付く可能性をもつ。一応、容器として考えておきたい。小型の鉢（120図202）は、平底底部から体部外傾する器形で、口縁部下に稜を形成する。全体的に厚手であるが、底面から体部外面にかけて削りが丁寧に施され、胎土も精製されたものが使用される。作りや胎土から良品であることが伺われ、仏器的な器種と位置付ける。なお、当器種の内底面には顕著な摩耗痕が確認され、底面も若干摩耗する。

《瓶》　瓶類は瓶Aが主体で、少量の瓶B、瓶C、瓶Dで構成される。また、特殊瓶類として、なで肩で長胴を呈す水瓶の胴部破片や平底長頸瓶の胴部破片が出土している。

瓶Aは肩の強く張る胴部器形。風船技法による胴部成形を行った後、穿孔して別作り口頸部を接合する器種である。112図49・50、120図210～214が該当し、213は小さな円盤で閉塞したために胴部上端と閉塞円盤との接点が見られないものである。212は閉塞円盤部分が見られるもので、円盤部分を穿孔して、頸部接合する。頸部は途中で粘土の継ぎ目があり、継ぎ目以下では内面に絞り痕を残すが、それより上では確認されない。口頸部を別作り成形した際の痕跡とは考え難く、頸部で継ぎ足し成形した可能性をもつ。

瓶Bと思われる口頸部片（120図217）が出土している。口縁部折り曲げをもつタイプで、瓶Aよりも頸部が太く薄い。

瓶C（120図216）は胴部上半付近の破片で、頸部の太さから当器種と判断する。

瓶Dは、初期形態である三耳タイプの球胴器形ではないが、小型を呈す双耳瓶（120図220・221）で、耳は稜角的に作られる。穿孔は1穴で、胴部のわりに大きめの耳が付される。特に221は全体的に薄く作られており、胎土は精製される。胴部上位に上端を絞った際の粘土の縮み皺が確認される。口頸部も頸部短い小型のもので、口縁部は外反して上端を摘まみ上げる（120図218・219）。口頸部の特徴から見るに、頸部で別作り接合した痕跡はなく、頸部が最も薄くなって、胴部から頸部へ絞りによる皺が連続する。つまり、口頸部まで成形した後に、頸部を絞ったものであり、Ⅵ期以降一般化する双耳瓶の頸部成形技法に共通する。形態からⅥ期に下るものではなく、Ⅴ期頃に位置付けられるものだろう。

その他の瓶類としては、糸切り痕を残す平底瓶の胴部破片（120図215）や長胴気味でやや小型を呈す瓶B胴部（113図51）が出土している。215は瓶Aの平底タイプ、51は水瓶の胴部と判断する。

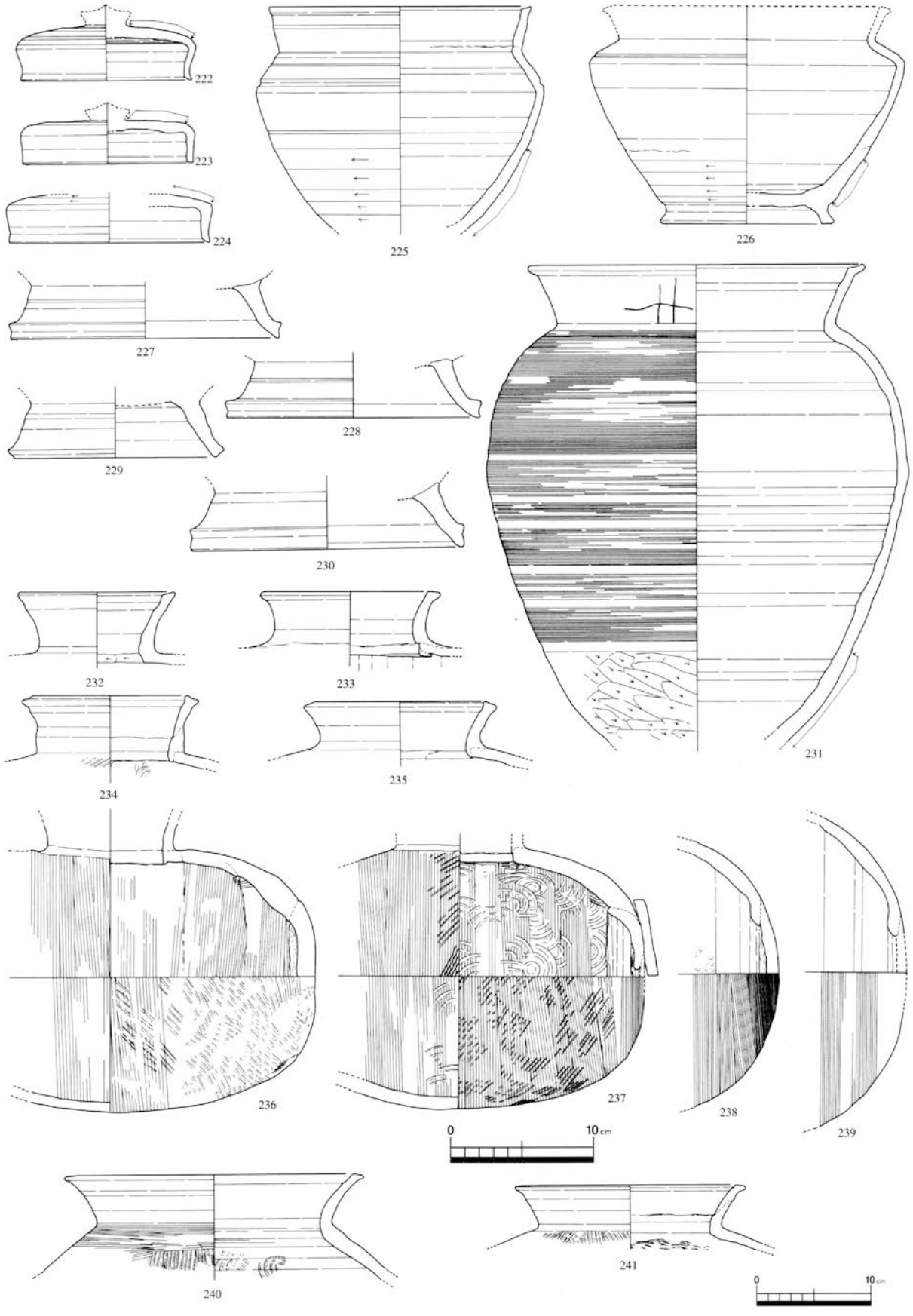
《壷》　壷類は壷A（B）の蓋と壷A（B）、壷E、壷Fが出土している。

壷A（B）は破片のみで、図示できたのは高台破片と壷蓋のみである。蓋は口径12cm前後（121図222・223）と口径14cm程度（121図224）とがある。口縁部立ち上がりの深さが比較的深いものと浅いものとがあり、浅いものは口径大きく、古手のものである。

壷E（120図209、121図225・226）は鉢B器形に類似するが、口径が器高に比べて小さく、全体的に厚手で、沈線が施される本数が多い。胴部屈曲が強く、その部分に沈線が巡る。胴部下半には回転削り、高台は断面方形のものが付く。鉢B同様、正位で積み上げる重ね焼きを行っており、重なる部分に火ダスキが入る。

壷Fは出土量多いが、図示できたものは121図の231のみである。口径23.4cmの大型のもので、胴部上半はカキ目、胴部下位は手持ち削りが入る。削りにより底部はかなり小さくなっており、丸底状になる可能性もある。頸部には「＋＋」のヘラ記号が記される。

《横瓶》　横瓶は胴幅30cm以下、胴厚20cm以下の中型サイズ（121図236～238）が主体を占めるが、121図239の



第121図　F区斜面下方灰原出土須恵器（8）（222～239＝1/4, 240・241＝1/5）

ような大型サイズも存在する。中型は厚手、大型は薄手に作られており、中型は粘土紐積み痕跡が残りがちである。中型は両面閉塞と思われる237と片面閉塞と思われる236がある。237は粘土積み成形叩き痕を残すもので、叩きの方向から図示した右側が底部側であることがわかる。叩き後カキ目を施し、倒立させてからさらに胴部端を絞る叩きを施す。叩き絞りが足らなかったため、内側から粘土紐を一巻足して叩き、薄くて小さな粘土円盤で塞いでいる。236は粘土紐積みの際の紐痕跡を明瞭に残すもので、成形に叩きは施されなかったものと理解する。外面の叩きはカキ目調整の上から施される弱いもので、風船状態での外面からのみの叩きである。図示した右側は底部側で、底部円盤の継ぎ目も確認される。紐積み成形で、胴部を積み上げ、カキ目調整した後に、上端を円盤で閉塞。風船状態で倒立させ、底部側の角を潰すように叩いたものと理解する。口頸部は口径大きく、短頸のａ類（121図233～235）が主体的だが、頸部細く口縁部へ外反するｂ類（121図232）も存在する。234の頸部途中には粘土紐積み上げの痕跡が残る。口頸部を別作りせずに、胴部上で紐積み成形した可能性をもつ。

《甕》　甕類は小甕、中甕、大甕で構成されるが、小甕の数は少なく、図示できたものはない。

中甕は、頸部短く外傾・外反して口縁部上端に面を形成する古手のA類（121図240・241）と頸部短く外傾・外反して口縁端部の上下端をつまみ出して面形成する新手のB類（113図53・54）に分けられる。A類は胴部上位が強く張る器形で、121図242が当類型の胴部器形と言える。底部叩き出し痕跡は胴部叩き痕を切って、縦軸方向に施される。外底面には表面のみ砂が付着しており（網点範囲）、離れ砂の可能性がある。１次成形時に成形台から底部を剥がし易くするために、砂をまいたのかもしれない。B類は54がA類と同様の法量。53が若干小型の法量である。小甕との中間的な法量をもつもので、中甕が小型化する中で出現する。胴部球胴を呈すが、A類同様の横軸を基本とした叩きが施される。中甕の中でのA類からB類の変化は明確で、胴部器形や法量変化も伴う。V_1期を境にV_2にかけて、変化しているものと言える。

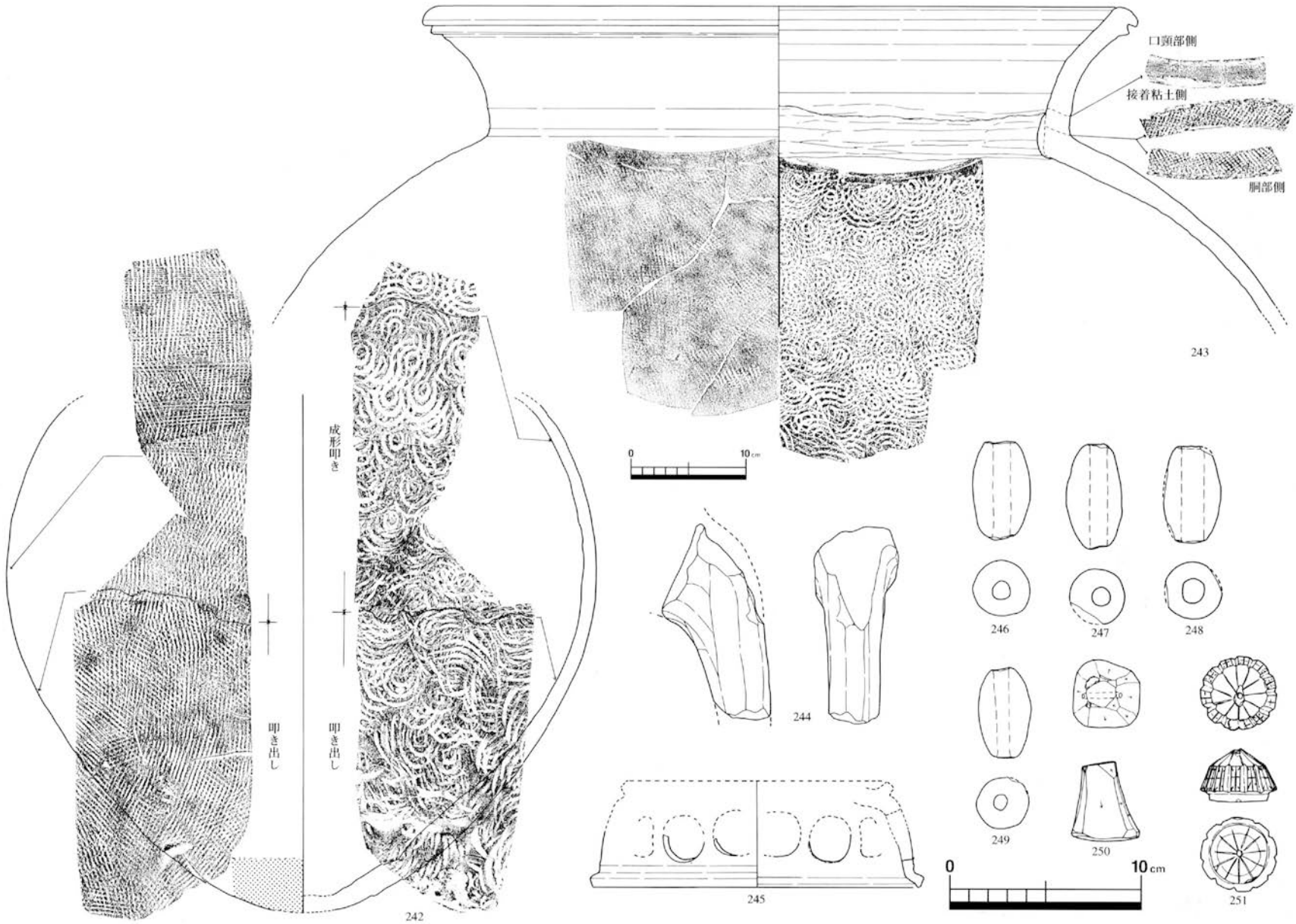
大甕（122図243）は、長頸の口頸部をもつ器種だが、当資料は短頸気味の口頸部となっており、無文を呈す。口縁端部の外側を突出させ、その部分に切れ目を入れて、２段の稜を形成する。頸部付近で奇麗に剥がれ、粘土の継ぎ目が確認できる個体で、口頸部成形の方法が細かく観察できる。まず、胴部側の痕跡であるが、胴部上端が切り落とされ、内傾する面を形成する。面は削り状に砂粒が動く程度に乾燥しており、切った面はシャープである。その胴部端の外面叩き側に頸部をのせる訳だが、頸部の剥がれた側の面に反転圧痕として叩きが浮き出る。圧痕は鮮明で、胴部側がかなり乾燥していたのに対し、頸部側は湿った軟質の粘土状態であったことがわかる。頸部部分1.7㎝の厚さで１段の粘土帯状に剥がれている。粘土紐積みしたような内傾接着する痕跡ではなく、面は水平で、口縁部側の接着面に施されたナデ調整痕が反転圧痕として頸部粘土に残る。また、この頸部粘土は連続して（共土で）、胴部端の切った面に覆い被さり、その部分（頸部内面）に雑な横方向のナデつけが施される。口縁部は内外面ともに回転力を使用したナデが施され、頸部内面のなでつけとは異なる段階の調整痕跡であることが理解される。以上の痕跡から推察するに、当大甕の口頸部成形は、別作りした口頸部を接合する際に以下の手順で接着粘土を使用し行われたものと理解される。①回転台上で口縁部のみを成形する。②底部叩き出しまで完了した胴部の上に口縁部を合わせ、頸部の大きさに合わせ胴部上端を切り取る。③胴部上端に粘土紐を一巻し、胴部端側に延ばして覆うように接着させる。④口縁部を乗せ、頸部粘土が口縁部側と接着するようになでつける。以上、口頸部成形の方法は、別作り口頸部接着粘土技法と呼称しているもので、当資料はそれを示す良好な事例と言える。

以上の甕類では胴部外面平行線文叩き、内面同心円文当て具が施される。外面はHa類とHb類が主体でほぼ均衡した割合。内面はDc類が主体で、Da類が従的に存在する。また、外面に平行線文叩きの上から同心円文当て具でスタンプした事例があり、内面当て具と同一のものがスタンプされている。美濃洲衛窯や北関東の須恵器窯で確認例があるようで、その関連性が注目される。

ｆ．その他土製品

盤ないしは壷に付される獣脚部分、管状土錘、分銅型の土製品、円面硯が出土している。

獣脚（193図244）は容器類と接着するために脚が曲がった部分の破片である。太さ2.7㎝程度の中実粘土棒で、粗く面取り整形している。接着面が出ていないため、盤と壷の両方の可能性があるが、形態から獣足壷の脚部破



第122図　F区斜面下方灰原出土須恵器（9）（242・243＝1/5, 244～251＝1/3）

片と推察する。

管状土錘（122図246～249）は形態的にまとまっており、幅2.5～3.0㎝、長4.5～5.0㎝の大きさをもつ。全点数では15点と少なく、灰原出土中では土師質が圧倒的に多い。図示したものの他に幅1.5㎝、長さ4.0㎝の細い形態のものも存在する。

分銅型土製品は完形品２点が出土している。度量衡の様とされた竿秤の金銅製分銅を模した土製模造品で、最近北陸各地で出土例が増えている。鈕付山傘型の122図251と横穴四角錐型の122図250がある。前者は傘の部分の表現を放射状に施した切れ目と線刻で行い、底面にも放射状の線刻を施す。底面中心に刺突孔、傘の頂部中心にも刺突孔を開けるが、貫通していない。頂部中心の刺突孔周辺に剥離痕があり、鈕部が剥がれてしまった可能性もある。銅製品では別作りのはめ込み式環状鈕をつけているため、鈕を差し込む穴だけが開けられており、当土製品のこの部分が剥離しているのは別の例えば金属製の鈕を差し込んでいたためとも考えられる。未貫通の頂部刺突孔は別作り鈕の差し込み穴と判断するのが妥当だろう。後者は台形状の四角錐形態で、上面は平坦に、底面はやや丸くしてある。各面は削り状に面取り整形してあり、上部に横穴で穿孔する。穿孔はやや斜めに貫通している。

円面硯は小型の透脚円面硯である。脚端が外屈するタイプで、透かしは円形である。胎土焼成ともに通常のもので、特に精製品の感はない。

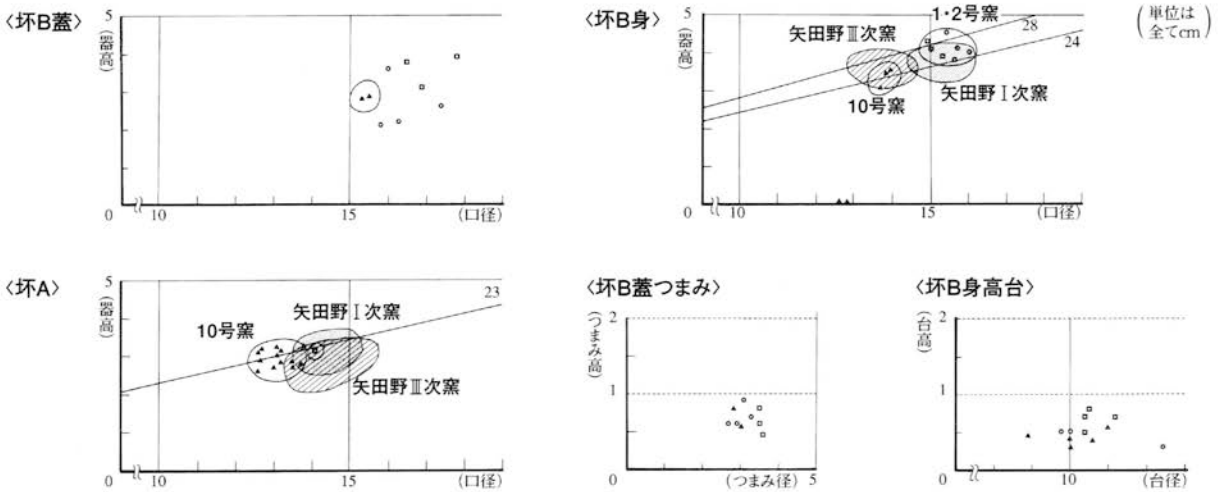
４．９・11号窯、10号窯、12号窯灰原出土須恵器の編年

これまで述べてきたＦ区に存在する８世紀中頃から９世紀初頭までの須恵器窯に伴う灰原資料について、その編年的序列と位置付けを試みてみたい。

《二ッ梨一貫山１・２窯跡と10号窯灰原資料の位置付け》

既に述べたように、坏Ｂや坏Ａの形態から考えて、10号窯灰原が最も古く位置付けられる。これに先行すると考えている二ッ梨一貫山１・２号窯跡は、須恵器坏Ｂが法量分化以前の「１器種＝１法量」段階の様相をもち、坏Ａが定量を占める食膳具組成をもつ。坏Ａ・Ｂの器形は偏平基調で、蓋は広い平坦面をもち、偏平でおおきなつまみが付く。身は高台が外に踏ん張る形状をもち、体部外傾器形が定量を占める。口径は図示したように、坏Ｂ身で15㎝台に集中し、坏Ａも14㎝の口径をもつ。以上から見て、矢田野向山１号窯Ⅰ次窯の須恵器様相に類似し、田嶋Ⅲ期の古段階に位置付けられる。ただし、矢田野向山１号窯Ⅰ次窯の坏Ｂ身よりもやや深身であることと体部外傾器形が定量存在することから見て、その中でもⅡ3期に近い様相と言えるだろう。

10号窯灰原資料は、これに後続すると言えるが、坏Ｂや坏Ａの小型化と偏平化は顕著であり、連続する様相はない。盤類や坏Ｂの法量分化が定着する以前の様相であり、田嶋Ⅲ期の範疇で考えるべきものである。前章でⅣ1期古段階としたＤ区４号窯灰原資料より坏Ｂ身や坏Ａの口径が大ぶりであることからも矛盾しない。ただ、Ⅲ期

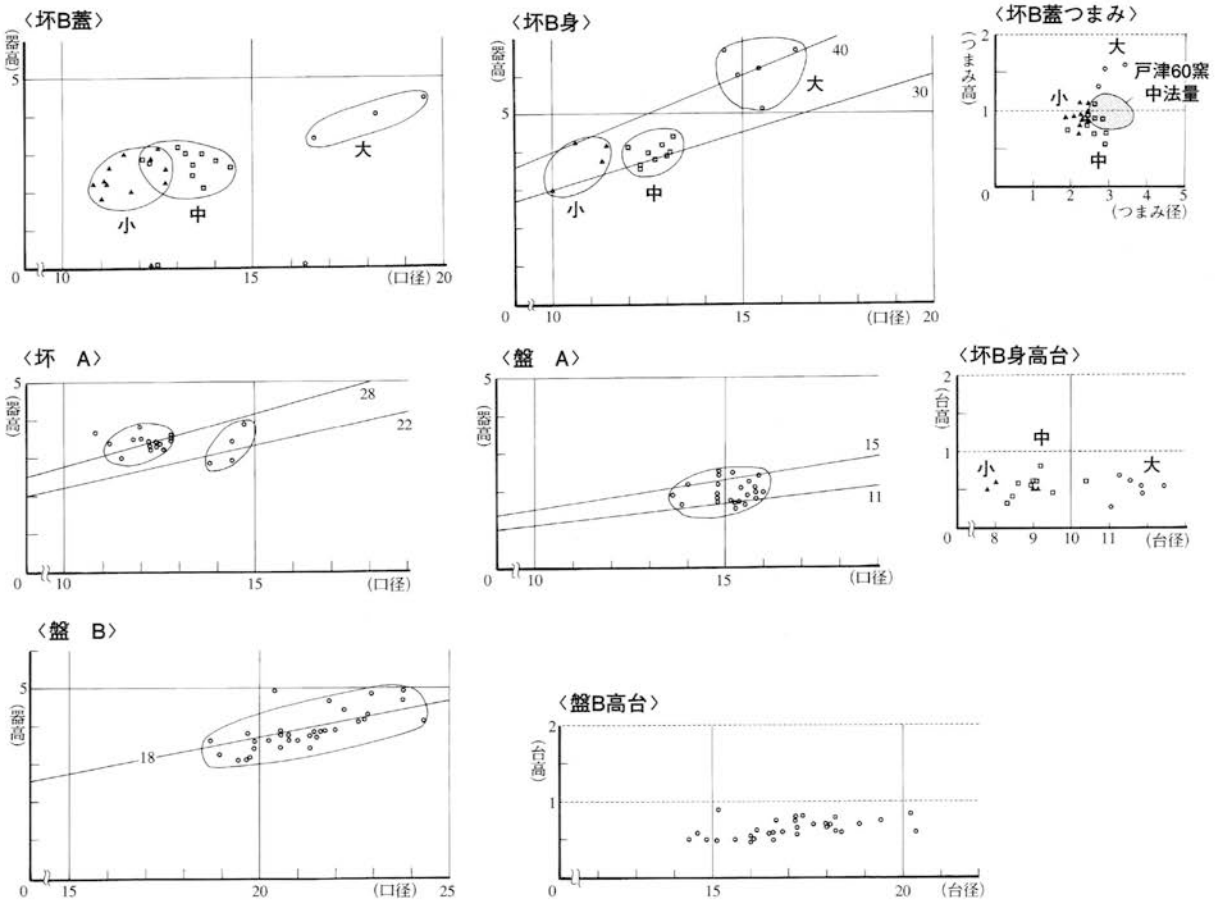


第123図　二ッ梨一貫山１・２号窯，10号窯灰原出土須恵器食膳具法量分布図（丸－１号窯，四角－２号窯，三角－10号窯）
（スクリーントーン範囲の網点は矢田野向山１号窯Ⅰ次窯，斜線はⅢ次窯）

Ⅲ期新段階とした矢田野向山１号窯Ⅲ次窯に比べると、坏Ａがひとまわり小型化しており、新しく位置付けられる可能性がある。期を分けるものではないが、後出の可能性はあろう。

《12号窯灰原資料の編年観》

二ッ梨一貫山窯跡では10号窯に後続して、Ｄ区４号窯が営まれるが、その後続資料にＦ区12号窯灰原資料を当てることができる。既に12号窯灰原資料の特徴は述べているので、それを対比すれば、田嶋Ⅳ2古期の箱宮５号窯や戸津60号窯の様相が該当する。当期の特徴は、Ⅳ1期に確立された食膳具様式が、その範疇の中での到達点を迎えることである。盤Ｂを初めとする盤類生産の最盛期、坏Ｂと坏Ａの小型化など、Ⅳ1期の様相を進化させる。Ⅴ期で展開される新たな食膳具構成や器種・器形は、当段階では出現しておらず、Ⅳ2新期からの様相と言える。盤類については多様な在り方を示すため、口径の縮小では時間差を捉えにくいが、坏Ａ・坏Ｂに関しては漸次小型化の様相をもつ。第125図には箱宮５号窯と戸津60号窯との法量分布比較を示しているが、それを見ると、坏Ａ口径がやや小さめにまとまり、器高も高めに分布する。坏Ｂ蓋つまみも戸津60号窯に比べて0.4～0.5cm小型化し、坏Ｂ蓋・身器形もⅣ2新期へ近いものへと変化している。箱宮５号窯の細かなデータを掴めていないが、戸津60号窯資料を当期の古手の様相と捉えれば、12号窯灰原資料は新手の様相と位置付けできるだろう。ただ、大きな変化は捉えにくく、当期の中で古段階と新段階には分けず、Ⅳ2古期の中で、戸津60号窯に後続する資料と位置付けておくのが穏当だろう。



第124図　Ｆ区12号窯灰原出土須恵器食膳具法量分布図（単位はcm）

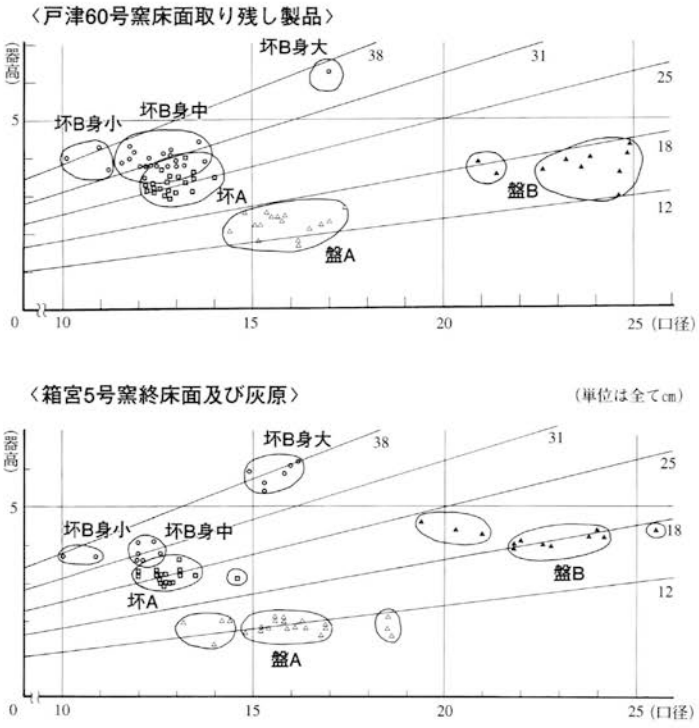
《９・11号窯灰原資料の編年観》

９号窯灰原、11号窯灰原及び斜面下方堆積灰原は、Ｆ区の12号窯灰原の南東側に位置する灰原で、本文ではこれらを同一の灰原資料としてひとまとめに扱ったが、複数時期の須恵器様相をもっている。灰原本体の検出が難しく、何基の窯の灰原かはわからないのだが、複数時期の複数基による須恵器窯灰原が混在したものと評価している。時期幅は、Ⅳ2古期からⅤ1期までと考えているが、Ⅳ2古期は、12号窯灰原からの混在の可能性もある。

主体はⅣ2新期以降で、Ⅴ1期までの須恵器窯灰原と考えておきたい。器種構成は分類不可能なため一括で提示するが、各器種においては類型を整理し、各期の須恵器様相を提示してみたい。

（Ⅳ2新期）

12号窯灰原に伴う資料である可能性をもつものが混在している。当期の古手様相とも捉えることができるため、明確に分けることは難しい。一応、当資料の古手一群という位置付けのうえで取り扱うこととする。9号窯灰原として図示した一群が当期の資料としてまとまっている。器種組成は基本的に、3法量分化した坏B蓋と坏B身、坏A、盤A、盤Bで食膳具を構成し、それに埦類や特殊坏類も当期に位置付けられものと考えている。また、高盤も当期までのもので、次の段階にはほぼ消滅するであろう。鉢Aや瓶A、瓶Cもほぼ当期のものに位置付けられる。



第125図　箱宮5号窯及び戸津60号窯出土須恵器食膳具法量分布図

坏B蓋では天井部平坦面もつA類と山傘器形のC類が存在する。また、偏平で頂部盛り上がるつまみが付くB類も当期から存在しているもので、特に中法量では目立つであろう。小法量では厚手で天井部平坦なA類やD1類が当期に属す。坏B身では底部厚く高台しっかり踏ん張って作られる器形が該当する。全体的に口径大きく、低身である一群が主体的である。大法量ではA1類とB類、中法量ではA類とB類、小法量ではA類が当期に位置付けられる。坏Aでは底部厚手で立ち上がり丸味もつA類を基本とする。さらに、偏平化した埦型器形の大ぶりE類が存在することも特徴と言える。B類も同時期に併存する可能性をもつ。盤Aは底部厚手で、体部が短く立ち気味となるA類、B類器形を基本とする。体部外傾気味のC類も一部これに加わり、口径は小さめにまとまる。底面削りを伴うものが極少量あるが、それは古手の一群と位置付けられるものだろう。盤Bは底部厚手でしっかりとした高台が踏ん張って付くA類とB類が主体を占める。体部外傾のC類も当期に一部存在するが、Ⅴ期にも定量を占める器形である。底面の削りは減少する傾向にあるが、依然として定量を占める。

貯蔵具では、田嶋Ⅲ期からの流れで追える器種・器形が当期を境に消滅する傾向があり、次のⅤ期との大きな画期要素となっている。例えば、小型貯蔵具の長頸瓶・短頸壷のミニチュアタイプや鉢類では鉢A、瓶A・C、そして横瓶の多くも当期のものだろう。また、鉢Bでは厚手のa類や鉢Fのa類とb類、甕では中甕のA類口縁部器形や大甕の口頸部別作り技法が当期のものと言える。

（Ⅴ1期）

食膳具では盤Bの量が減り、高盤はほぼ消滅。坏B中法量は減少する。貯蔵具類では瓶Bと瓶Dが当期のものと位置付けられ、瓶Aは減少する。また、壷Eの出現に伴う鉢Bの増加など、新たな器種への交替が見られる時期である。

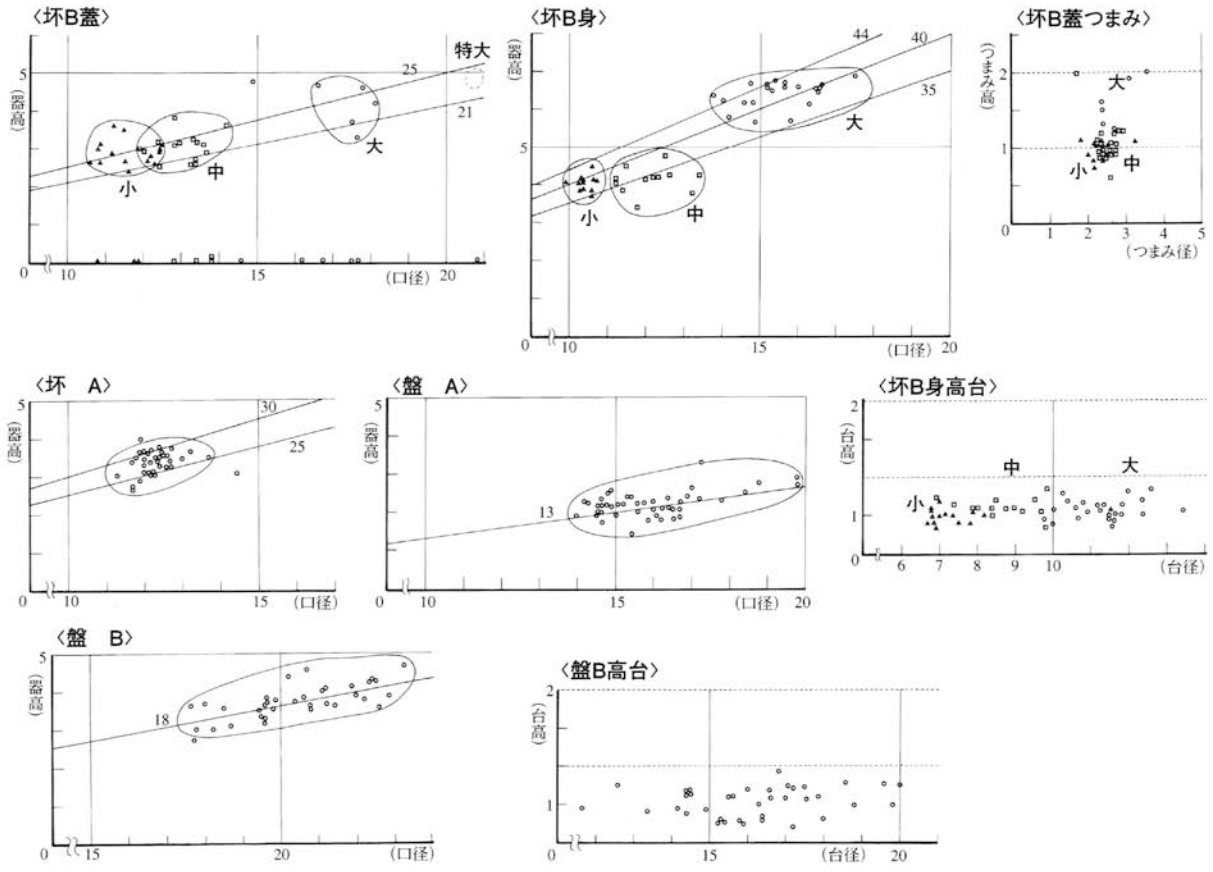
坏B蓋では宝珠形を呈すつまみをもつB類と器高高く天井部丸い器形のD類で構成される。中法量は減少し、小法量はB類・C類が主体的となる。坏B身は底部薄手のものが出現し、定量を占めるようになるが、依然として底部厚手の一群も存在する。ただ体部外傾気味となってくる点で異なる。全体的に深身傾向となり、口径が縮小するが、特に口径では中法量が顕著である。大法量ではA2類とC類、中法量ではC類、小法量ではA類の薄手のものとB類・C類が当期に位置付けられる。坏Aでは薄手のC類と小型埦型のD類が出現する。全体的に器高

は高目に位置し、体部外傾器形が目立つ。A・B類も当期に残存する可能性をもつが、識別は難しい。盤Aは体部外傾器形を基本とし、体部ロクロヒダのうねりや底部の丸味を基本とする。一部C類が存在するが、主体はD類で、E類の特にE2類は当期のものだろう。体部外傾の分だけ、口径は前段階よりも大きくなる。また、一部薄手化も進行する傾向をもつ。盤Bは体部外傾器形を基本とし、高台が小型化して、薄くなる。やや厚手のC類器形と薄手のD類、体部ロクロヒダをもつE類が当期に位置付けられる。底面の削りは省略する傾向にあり、全体的に口径は小型化して行く。

貯蔵具では、Ⅳ期からの流れで存在する瓶Aや横瓶がほぼ消滅段階にあり、新器種として瓶Bが出現。また、Ⅳ期の器形とは異なるⅥ期へとつながる定型化された瓶Dが出現してくる。また、Ⅵ期に増産される徳利型小瓶や鉢Bのｂ類器形。鉢Ｂｂ器形と連動する形で、壷EがⅤ期限定の器種として存在する。甕では新器形のB類が出現。この時期にA類器形から転換するものと予想する。

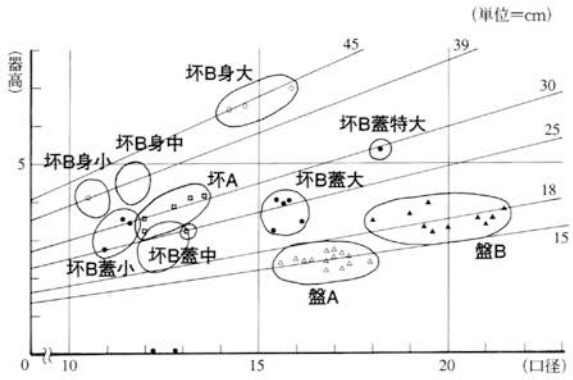
（Ⅳ期とⅤ期の画期について）

当画期は、田嶋編年において古代前半期と古代後半期を画する古代土器最大の画期と評価されている。画期要素としては、仏器的な金属器を頂点とする体制から、世界的な交易品である中国製陶磁器を頂点とする体制への転換を契機とした、坏形食膳具指向から椀形食膳具指向への転換、そしてさらに須恵器主体組成の崩壊が上げられている。椀形食膳具とは主に椀・皿器種であり、Ⅴ1期には萌芽的段階、Ⅴ2期に出現してくる。組成の主体的な存在となるのはⅥ1期以降である。食膳具ではⅤ期は依然として、坏形食膳具主体の組成であり、その意味での具体的な転換様相はまだ見えていない状況にある。しかしながら、坏形食膳具の中での変化を見ると、Ⅳ期に坏Bの基本形であった中法量を基軸とする3器種法量は確実に崩壊し、椀形とでも言える新型の深身器形が出現する。中法量は小法量の中に次第に吸収され、大法量を主体とする組成へと転換する。今回の資料ではその転換があまりはっきりと掴めていないが、Ⅳ2新期にその萌芽があり、Ⅴ1期で転換、Ⅴ2期に大を中心とした2法量組成が確立するものと理解する。また、坏Aについても、Ⅳ期の体部直立型の器形の中で、次第に小型化した



第126図　F区9・11号窯灰原及び斜面下方灰原出土須恵器食膳具法量分布図（単位はcm）

一群は、Ⅴ期を境に衰退消滅し、新たな器形と法量が出現してくる。その器形変化は盤Ａと対応し、Ⅴ期以降の坏形食膳具の主体は同じ器形変化の流れをもつ坏Ａと盤Ａとなる。坏Ｂと盤Ｂの衰退、そしてそれに対応するように、埦Ⅲ器種が組成の中での率を高めて行く。また、小型食膳具以外でも、高盤や鉢Ａなど Ⅲ期成立の特徴的な器種がⅣ2期をもって消滅する。瓶類も瓶Ａから瓶Ｂへ転換。甕の器形や成形方法、法量が大きく変わり、Ⅵ期に増産される鉢Ｂｂ類器形や瓶Ｄの長胴器形が定型化される。このように、Ⅳ2新期はⅤ1期の転換の萌芽が一部で見られるものの、Ⅳ2期の組成や器形の中に包括されるものであり、あくまでもその新段階としての位置付けと言える。転換はⅤ1期にあり、Ⅴ2期でそれが確立する。Ⅴ2期の組成がさらに進展したものがⅥ期であり、Ⅴ期の組成のより具現化したものと言える。



第127図　戸津58号窯灰原出土須恵器食膳具法量分布図

第５項　土師器焼成坑に伴う遺物

本項では、土師器焼成坑内及び焼成坑に伴う灰原より出土した遺物を取り扱う。土師器焼成坑内覆土には下層に遺存した灰層と廃絶後埋め戻された埋土がある。灰層はその土師器焼成坑によって排出された土層であり、混入する土師器は焼成破損による廃棄品や焼成に伴う窯道具としての性格をもつ。須恵器は土師器焼成に無関係の遺物であるが、焼成坑廃絶時期を知る資料となる。埋土中の土器は、廃絶時に周辺の土師器焼成坑等から廃棄された可能性が高く、出土する土師器焼成坑には直接的には伴わないが、焼成坑廃絶時に近い時期の一括性を帯びた資料と言える。ただし、埋土上層の遺物は埋め戻し等の短時間での土層堆積と異なり、窪地への自然堆積的様相をもち、時期もまとまりを欠く。このような資料は今回の報告から極力除外するようにし、混入品として扱った。なお、斜面下方へ堆積した灰原についても、各土師器焼成坑からかき出された灰層が累積したものであり、焼成坑の特定は困難である。これについては、灰原一括として扱うこととする。

出土する遺物は、土師器と須恵器、窯道具類である。土師器は上述のように土師器焼成に伴う破損廃棄品であり、遺構ごとの器種構成及び各器種の特徴等を詳述する。須恵器については、器種構成等は省き、主に須恵器の編年観提示に努める。なお、特殊な遺物についてはその都度詳しく述べておきたい。また、焼成に伴う窯道具類であるが、各遺構の説明では除外し、一括して後述する。

（１）土師器焼成坑出土土器

１．１号土師器焼成坑出土土器（第128図上）

床面直上に僅かに残った灰層中に須恵器と土師器が混在している。

須恵器は坏Ｂ、坏Ａ、盤Ｂ、高盤、壺類で、坏Ｂ蓋つまみや身高台、坏Ａ器形などからⅣ2期、９・11号窯灰原よりもやや古く位置付けられる。

土師器は口縁部計測値で、小釜16／36（うち小型10／36、中型６／36）と釜１／36、台付鉢の脚部15／36。破片では赤彩埦の底部２点などが出土している。赤彩埦は体部下位から底面に削りを施すもので、内面磨き。小釜・釜ともに頸部で「く」字屈曲し、口縁端部を短くつまみ上げるもの。小釜底部には糸切り痕を残す。14・15は台付鉢の脚部で、方形透かしをもつ。胎土は煮炊具同様のもので、当器種の中では小型のものである。

２．２号土師器焼成坑出土土器（第128図下・第129・130図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の灰層等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築以前の床面下に存在する下部土坑出土遺物に分けられる。

《焼成坑内遺物》

当焼成坑は、浅い掘り込みのため、遺物が少ない。また、焼成坑はＡ・Ｂの２基存在するが、焼成坑Ａについては遺物が出土しておらず、ここで示すものは全て焼成坑Ｂに伴う出土遺物である。

須恵器は坏B蓋と坏A、盤類が出土している。坏A、盤Aともに体部外傾器形のもので、9・11号窯灰原よりもやや後出する様相をもつが、Ⅴ1期の範疇で捉えるのが穏当である。

土師器は坏B身と坏B蓋、埦、小釜、釜、鉢、台付鉢、鍋、甑が出土している。口縁部計測値で示すと、以下の表のとおりで、食膳具は6％と少なく、煮炊具が大半を占める。煮炊具の中では小釜と釜が目立つ。小釜では小型が大半で、大型は少量存在するのみ。鍋は釜類の1/7程度と少ない。鉢類は台付鉢とともに、少ないながらも定量出土する。食膳具では埦類のみを図化したが、1点のみ内外黒色が出土している。口縁部の外反する小ぶりのもので、内外とも磨きが施される。器形的に赤彩と大きな差はなく、赤彩土師器が偶然炭化焼成されたものの可能性が高いが、宮都で黒色土器が焼かれ始める時期であり、その影響があった可能性はある。これ以外の食膳具は全て赤彩で、埦は全て底面丁寧に削り調整する。内外面磨きのものと内面のみ磨きのものとがあり、この時期ころに外面ロクロ調整で済ます器高の高い埦が定量出現してくる。鉢は口縁部に段をもつ特殊な器形のもの。小釜は頸部「く」字屈曲後、口縁端部つまみ上げる器形で、やや長めに延ばすものも少量確認される。大半は短く曲げる程度のもので、口径10㎝未満の極小型品が定量存在する。釜は「く」字屈曲のみで、端部つまみ上げをしないもの。鍋も屈曲後端部へ肥厚して端面形成するだけで、端部つまみ上げを行わないものが主体的である。甑は口縁端部外側に突出し、上端面形成するもので、その下に1段稜形成するものである。鉢F類の口縁部器形に類似する。

《下部土坑出土遺物》

2号焼成坑の床下に存在する大型土坑内には、多くの須恵器・土師器が廃棄されている。

須恵器は坏B蓋と坏B身、坏A、盤Aが出土している。6の坏Aのみ体部外傾でやや新しく位置付けられる可能性をもつが、他の須恵器は器形などからⅣ2古期に位置付けて妥当と考えている。焼成坑の時期と異なり、2型式ほど古く位置付けられる。

土師器は、食膳具が全て赤彩されており、坏B蓋身、盤A、高盤、埦がある。口縁部計測値個体数換算では食膳具全体で15%程度の割合を占め、そのなかでは埦が8％と最も高い。土師器の大半は煮炊具で、釜が35%と高く、次いで小釜30%、鍋17%、甑3％程度である。破片では台付鉢の脚部が出土しており、また、特殊土製品に支脚形土製品、円盤形土製品、球形土製品がある。

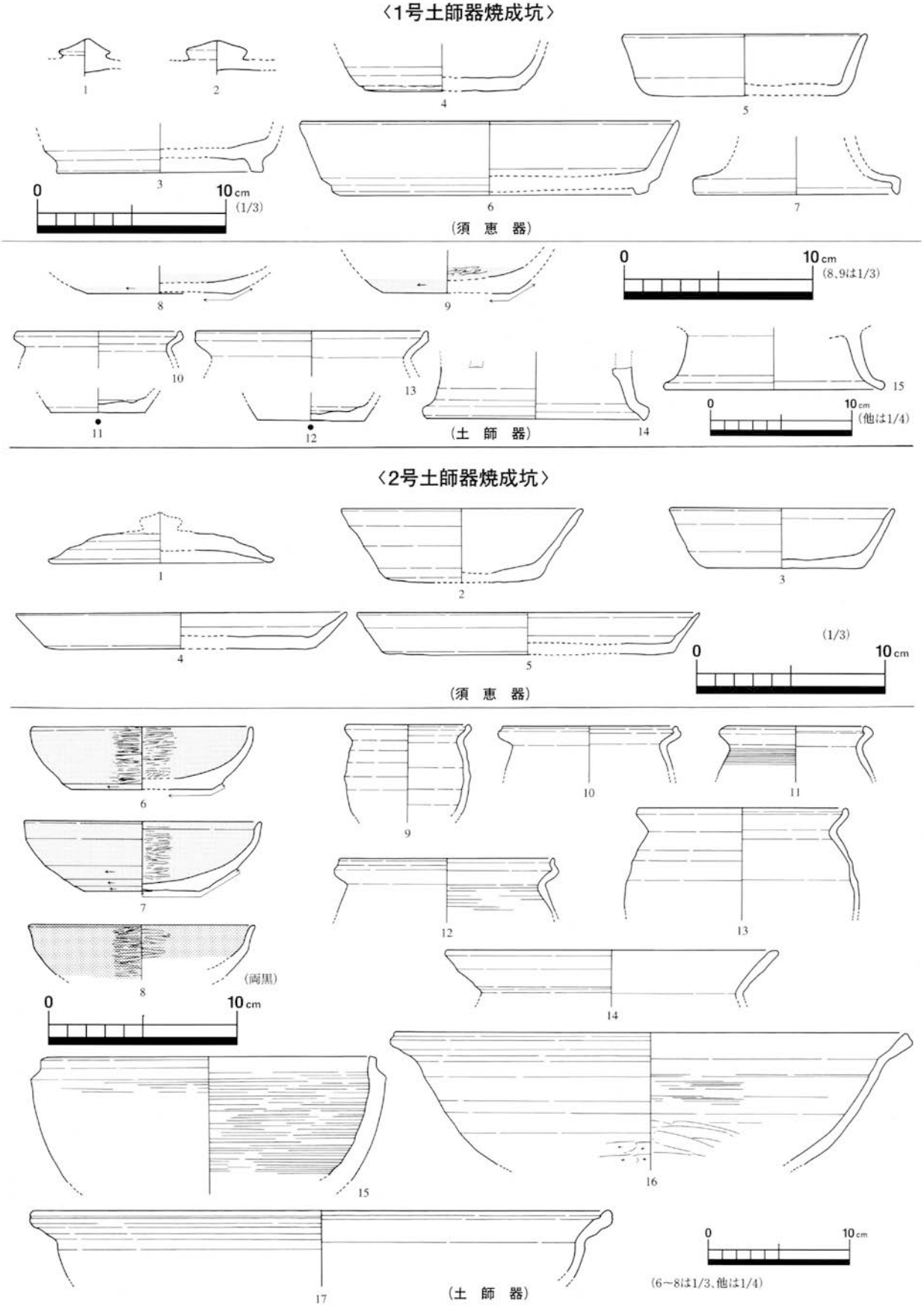
食膳具では赤彩埦と赤彩高盤のみ図示している。埦はいずれも底面削りのもので、比較的偏平な器形を呈す。高盤は須恵器器形と類似するが、坏部口径は小型で、口縁端部微弱に折り曲げる器形を呈す。

煮炊具は図示できたものが多い。小釜・釜・鍋はいずれも口縁部「く」字屈曲する器形で、口縁端部をつまみ上げたり折り曲げたりする器形をもつ。ただ、器種によって口縁端部器形が若干異なり、特徴がある。まず、小釜小型は口縁端部短く折り曲げ状を呈すものを基本とする。これに対し、小釜大型は口縁端部をやや長く屈曲させるもの。釜は口縁端部折り曲げず、端部肥厚して面形成するタイプか肥厚せずに丸くおさめるもの。鍋は頸部屈曲後長く伸びる特徴をもち、口縁端部で僅かにつまみ上げるか肥厚する程度のものが主体的である。このような鍋器形は胴部上半をカキ目、外面下半を削り、内面下半を刷毛調整するものがほとんどであるが、例外的に下半部叩きを残すものがある。内面無文当て具を使用するもので、これについては胴部深身で、口縁部短い特徴をもつ。器形と成形方法が明らかに異なるもので、焼成も他とは異なっている。

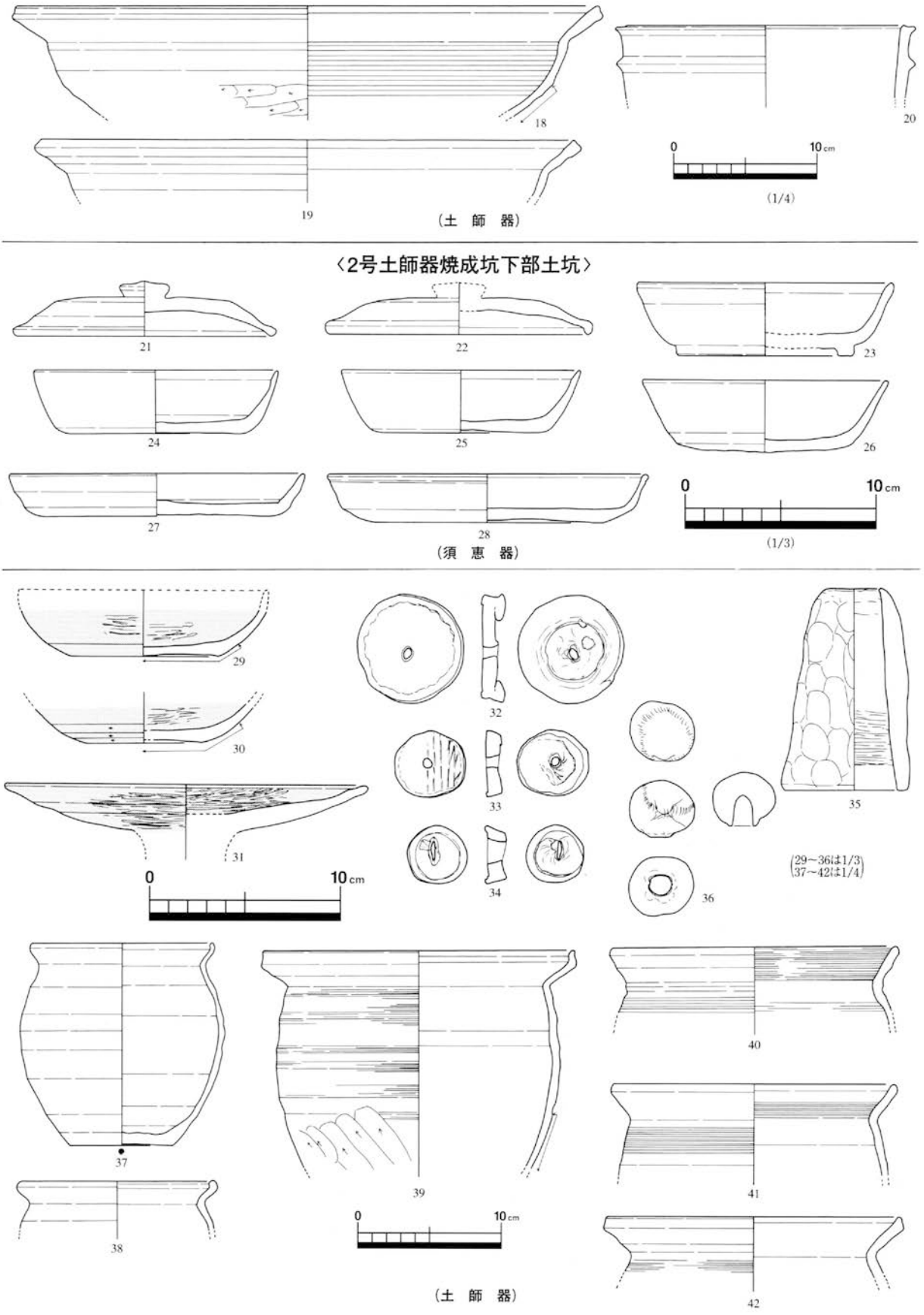
煮炊具では他に甑が出土する。通常の鉢F器形に類似する1段稜形成のタイプで、叩きを残す底部付近の破片も出土している。

器種	坏B蓋	杯B身	小型埦	小釜小	小釜大	釜	鉢	台付鉢	鍋	甑	合計
口縁計測(○／36)	14	2	18	205	45	161	5	7	57	18	532
占有率	2.6	0.4	3.4	38.5	8.5	30.3	0.9	1.3	10.7	3.4	
器種	坏B蓋	杯B身	盤A	高盤	小型埦	小釜小	小釜中	釜	鍋	甑	合計
口縁計測(○／36)	9	4	1	8	29	103	9	121	59	11	354
占有率	2.5	1.1	0.3	2.6	8.2	29.1	2.5	34.2	16.7	3.1	

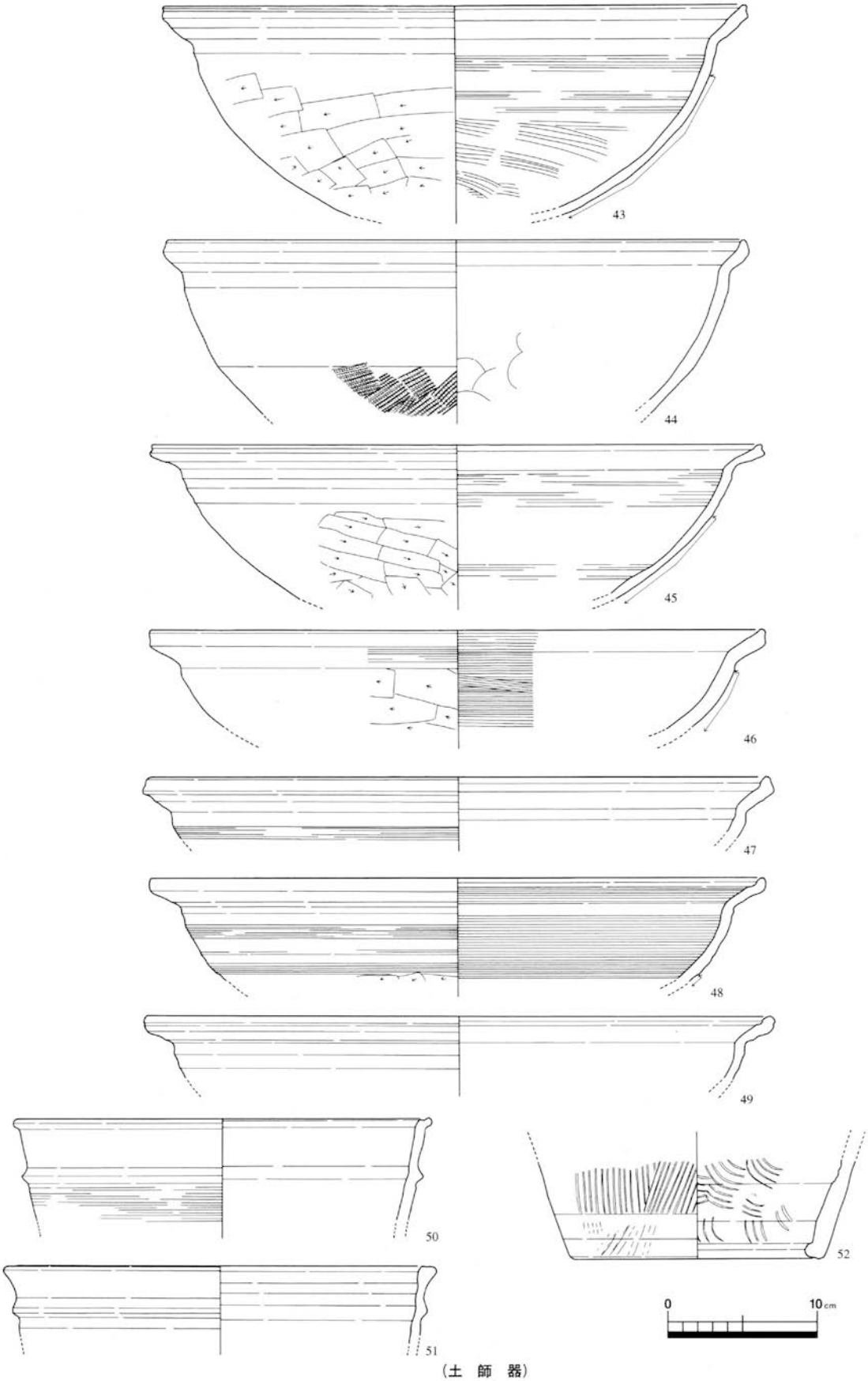
第18表　2号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内灰層等、下段は下部土坑出土）



第128図　1号土師器焼成坑出土土器・2号土師器焼成坑出土土器1



第129図　2号土師器焼成坑出土土器2



（土　師　器）

第130図　2号土師器焼成坑出土土器3（1/4）

特殊土製品は、円盤形土製品３点、途中まで穴の空いた球形土製品２点、支脚形土製品１点が出土しており、比較的出土量が多い。円盤形土製品は大きさにばらつきがあるが、いずれも瓶類風船作りの際に切り取られる頸部円盤である。内面側に絞りによる縮み皺（33・34）や閉塞円盤の重複箇所（32）が出ており、閉塞の際の痕跡が明瞭に出ている。外面に叩きの見られるものもあり（33）、これは風船状態での叩きを示す。円盤中央に棒状刺突ないしはヘラ先刺突による穿孔があり、多くは外面から刺突される。ただ、例外的に内面から突き刺したような痕跡もある（33）。36は球形土製品。棒の先に粘土を丸めて作ったもので、爪形の圧痕が一周巡る。図示していないものに同様の製作方法で円筒形のものもあり、用途は不明である。支脚形土製品（35）は高さ10㎝程度の円筒形で、上へ向かってやや細くなり端部薄くする。下端は厚く面形成するため、上下の意識ははっきりしている。カマド支脚のような形状・大きさであり、その可能性が高いだろう。

３．３号土師器焼成坑出土土器（第131図・第132図上）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び灰層等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下土坑内遺物に分けられる。

《焼成坑床面・灰層遺物》

遺構が完存している割には、遺物の出土量が少ない。特に土師器は少なく、口縁部点数では全体で、60点にも満たない。

須恵器は食膳具中心に出土している。盤Ａの体部立ち気味器形や坏Ｂ蓋の平坦な天井器形からⅣ2古期に位置付けられる可能性もあるが、坏Ｂ身中法量や坏Ａの外傾気味となる器形や底部の薄さから考えて、Ⅳ2新期に位置付けるのが妥当だろう。

土師器は食膳具で赤彩の坏Ｂ蓋と埦、煮炊具で小釜、釜、鍋、甑が出土している。口縁部計測値では、坏Ｂ蓋4/36、小釜小型23/36、小釜中型6/36、釜13/36、鍋50/36、甑8/36で、鍋が破片数ともに最も多く出土している。

赤彩の食膳具は極めて少なく、図示したもののみである。坏Ｂ蓋のつまみはやや偏平気味で、口縁端部は屈曲して端部微弱に折り曲げる。埦は底面大きく、底面まで磨きを施すものと削り調整するものとがある。

煮炊具は小釜が口縁端部つまみ上げのもの。鍋も口縁端部をつまみ上げるが、明瞭につまみ出すものではなく、上端が肥厚する器形のものである。

その他、土製馬形（13）と円盤形土製品（12）が各１点出土している。土製馬形は脚部破片で、小型棒状のもの。円盤形土製品は２号土師器焼成坑で出土するものと同様の性格をもつもので、中央の孔は貫通せず、内面側に出べそ状となる。切り取り面が丸く不明瞭で、かなり柔らかい状態で切り取ったものと考えられる。

《焼成坑床下土坑遺物》

須恵器小破片が数点と土師器は鍋を主として少量の出土がある。

土師器で図示できたものは鍋のみだが、他に赤彩埦と小釜小型、釜、土製馬形があり、構成率は口縁部計測値で、小釜小型6/36、釜1/36、鍋9/36となる。鍋は床面等出土のものと同様の口縁端部を肥厚させる器形と頸部屈曲後内湾気味に立ち上がる器形（22）がある。土製馬形は脚部と胴部破片が出土している。

４．４号土師器焼成坑出土土器（第132～134図）

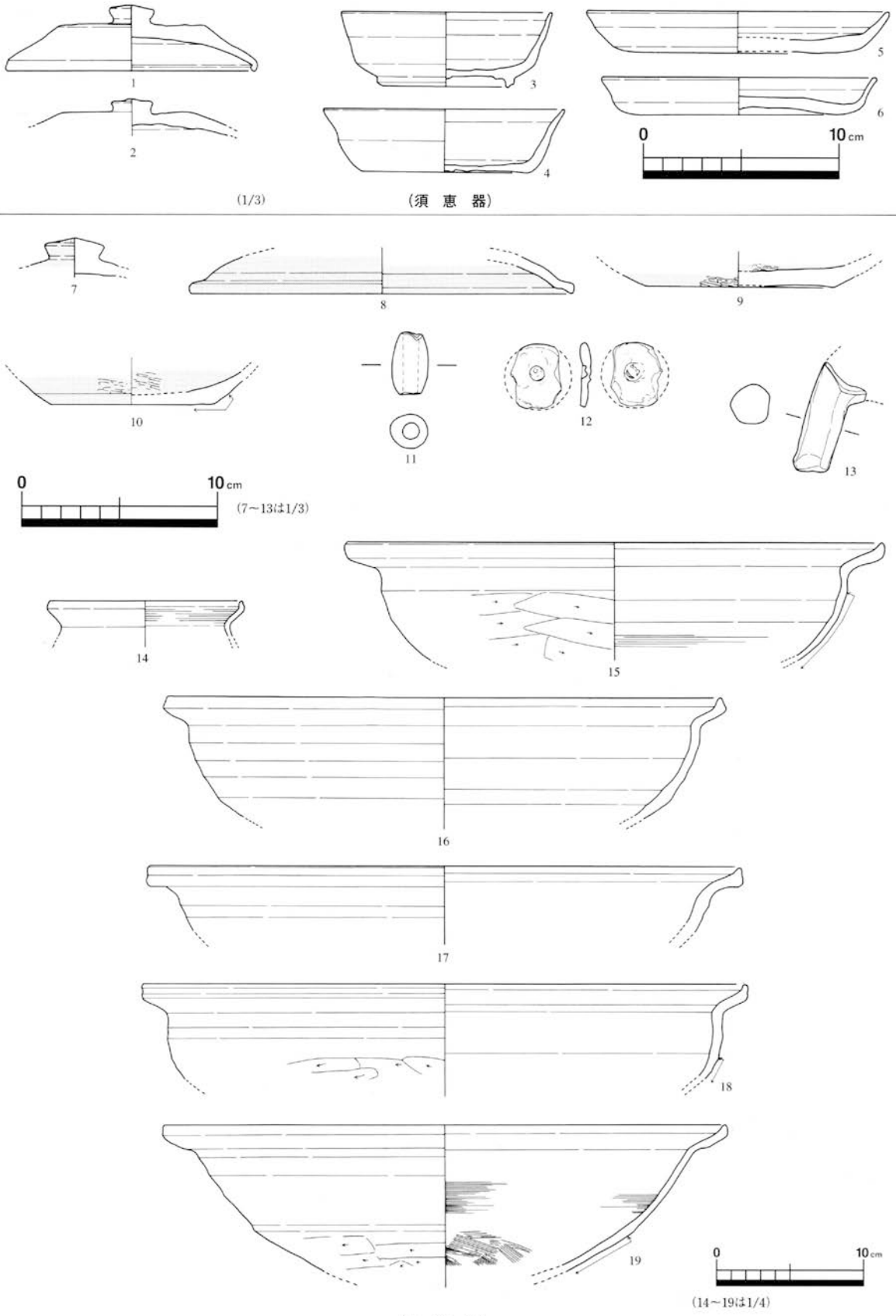
当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び灰層等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下土坑内遺物に分けられる。

《焼成坑床面及び灰層遺物》

須恵器は坏Ｂ蓋と坏Ｂ身、坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂ、長頸瓶が出土している。出土量は多いとは言えないが、坏Ｂ蓋大の口縁部器形や坏Ｂ身中の器形、盤Ａの体部外傾器形から判断するに、Ⅳ2新期に位置付けられるものと考える。

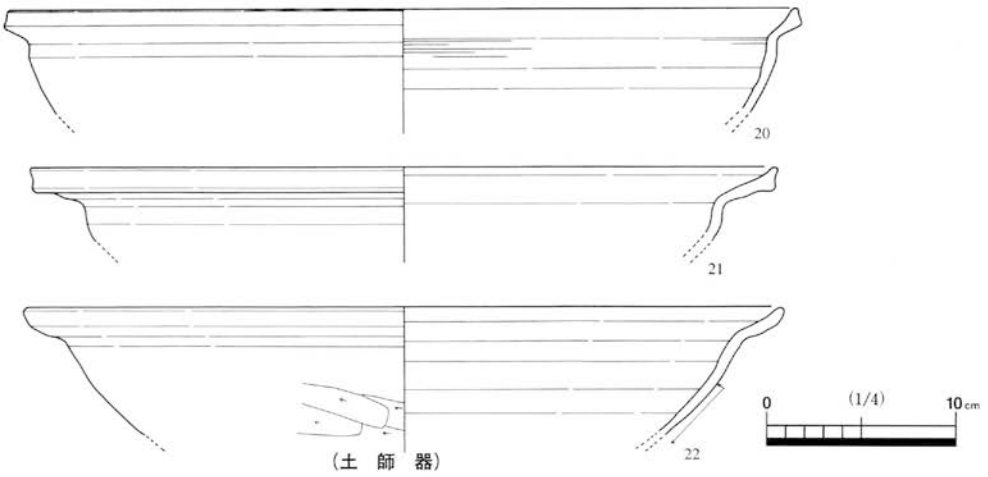
土師器は坏Ｂ蓋と埦、高盤、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器、円盤形土製品が出土している。口縁部計測値で示すと、表のとおりで、食膳具は６％と少ない。大半を占める煮炊具は小釜と鍋が多く、両器種で８割以上を占める。小釜では小型がほとんどで、中型は少ない。釜も比較的少量で、鍋の量が卓越している。食膳具は全て赤彩を施すもので、高盤のみ図示できた。煮炊具では小釜小型品と釜、鍋の３器種を図示している。いずれの器種

〈3号土師器焼成坑灰層及び床〉



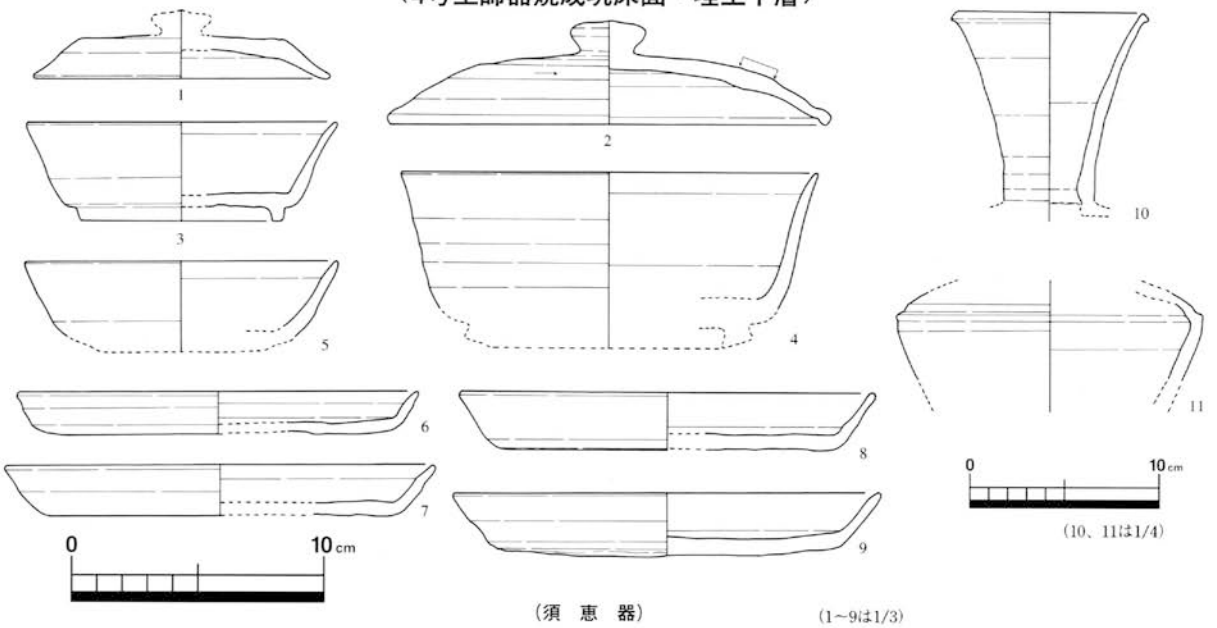
第131図　3号土師器焼成坑出土土器1

〈3号土師器焼成坑床下土坑〉

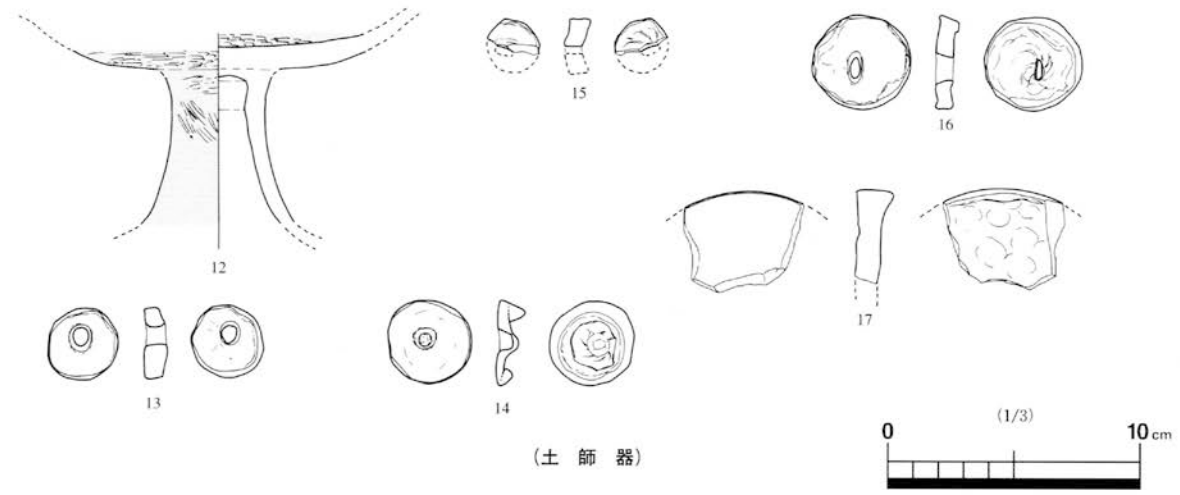


(土　師　器)

〈4号土師器焼成坑床面・埋土下層〉

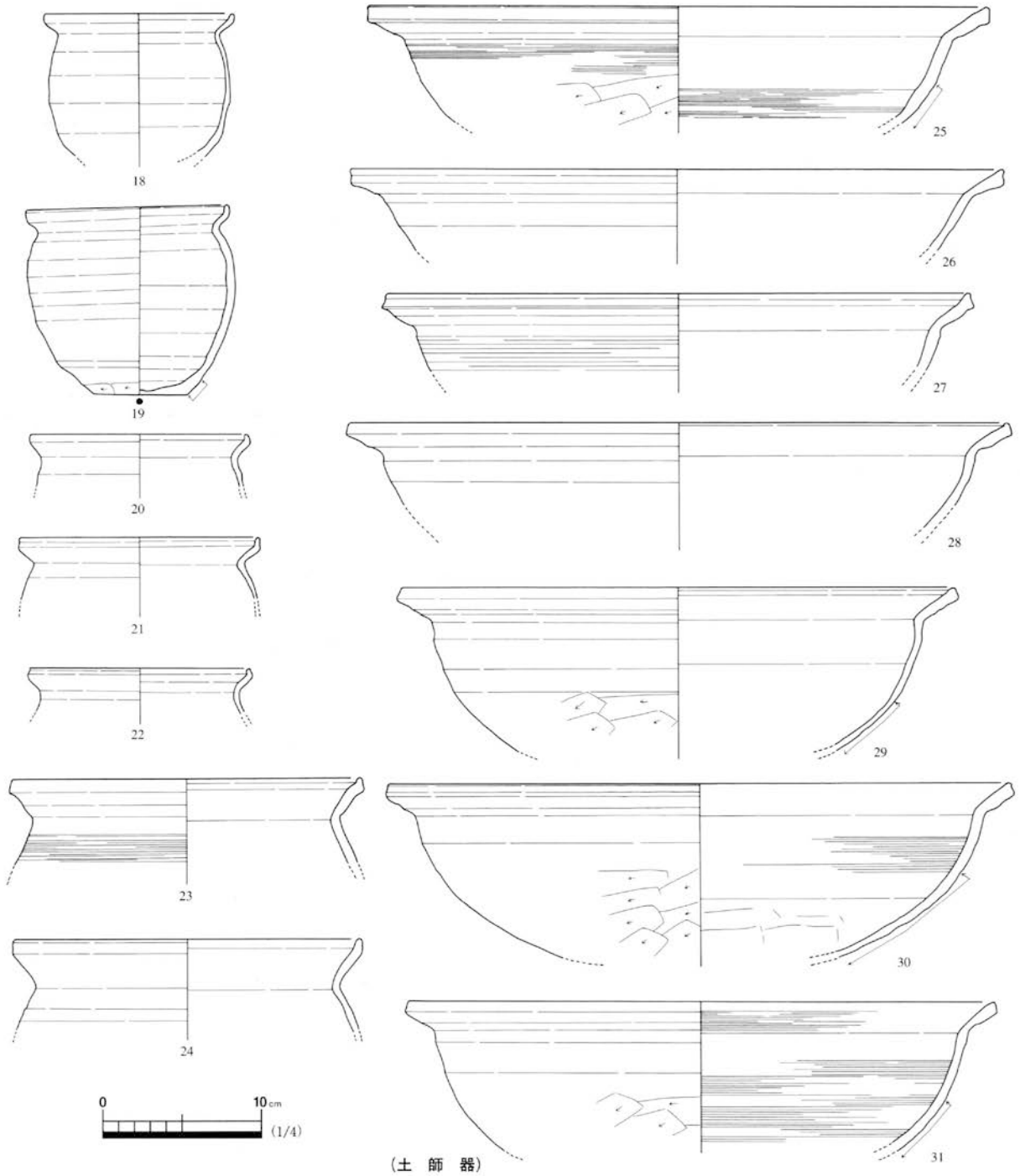


(須　恵　器)　　(1～9は1/3)

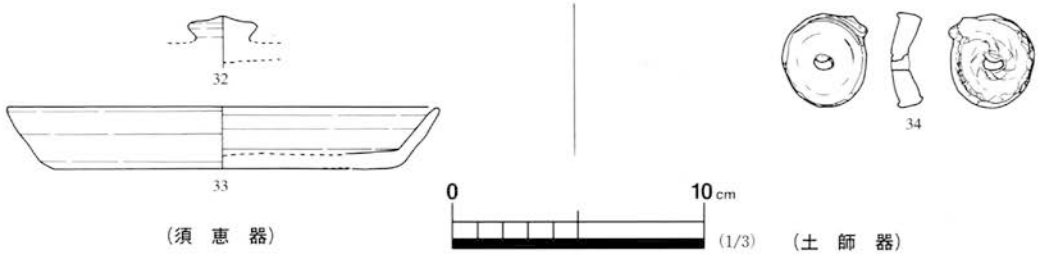


(土　師　器)

第132図　3号土師器焼成坑出土土器2・4号土師器焼成坑出土土器1



〈4号土師器焼成坑床下土坑〉



第133図　4号土師器焼成坑出土土器2

器種	坏B蓋	小型埦	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○／36)	2	15	95	9	28	129	6	3	287
占有率	0.7	5.2	33.1	3.1	9.8	44.9	2.1	1.0	

器種	台付鉢	小釜小	釜	鍋	合計
口縁計測(○／36)	2	10	6	55	73
占有率	2.7	13.7	8.2	75.3	

第19表　4号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下土坑出土）

も頸部「く」字屈曲する器形で、口縁端部を概して肥厚させたり、つまみ上げたりする。小釜は比較的端部つまみ上げが長く、21のように内反するように鋭く折るものと丸く折り曲げる19がある。釜は小釜よりも折り曲げが短く、24のように折り曲げるものもあるが、端部肥厚させて外端面形成する23が主体的である。鍋は後者の系統で占められ、特に端部肥厚するだけでつまみ上げを行わないものが主体的となる。当煮炊具器形は、時期が新しくなるにつれて、口縁端部摘まみ上げが長くなる傾向をもつ。しかし、上記のように、同時期のものであっても、器種によって端部器形が異なる訳で、器種が大型になるにつれて、古い形態を残す傾向があることを示している。特殊器種として円筒形土器と円盤形土製品があるが、円筒形土器は胴部破片のみで図示していない。円盤形土製品は5個出土している。径2㎝程度から10㎝以上のものと大きさにばらつきがあるが、基本的にはいずれも須恵器瓶類の風船作りの際に切り取られる頸部円盤と思われる。それが土師器焼成坑で焼かれたもので、一種の焼成道具と位置付けている。円盤は胴部成形時の内面側に絞りきりによる縮み皺（15・16）や閉塞円盤の貼り重ねた箇所（14）、又は閉塞円盤の成形の際の掌紋をのこすもの（15）もある。胴部閉塞の際の痕跡が明瞭に出ており、瓶類成形を知るうえで貴重な資料と言える。円盤中央には棒状刺突ないしはヘラ先刺突による穿孔がある。外面から刺突されており、切り取る際に円盤が内側に落ちないように突き刺して取り上げたことが分かる。貫通するものが大半であるが、14のように内面側に突出して未貫通となっているものがあり、穿孔することに目的がなかったことを示している。

《焼成坑床下土坑遺物》

床下土坑から出土する遺物は少なく、須恵器で坏B蓋と盤A、土師器で台付き鉢、小釜、釜、鍋、円盤形土製品が出土している。須恵器は床上の遺物の時期とほぼ同時期で、時間的な差は感じられない。土師器も鍋が主体を占める点や、口縁部器形等に差はなく、同様の特徴をもっていると言える。円盤形土製品は、須恵器長頸瓶の風船技法に伴う頸部切り取り円盤で、内面側に胴部絞りきりの際の縮み皺が残る。

5．5号土師器焼成坑出土土器（第134図・第135図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び灰層等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下土坑内遺物に分けられる。

《焼成坑床面・灰層遺物》

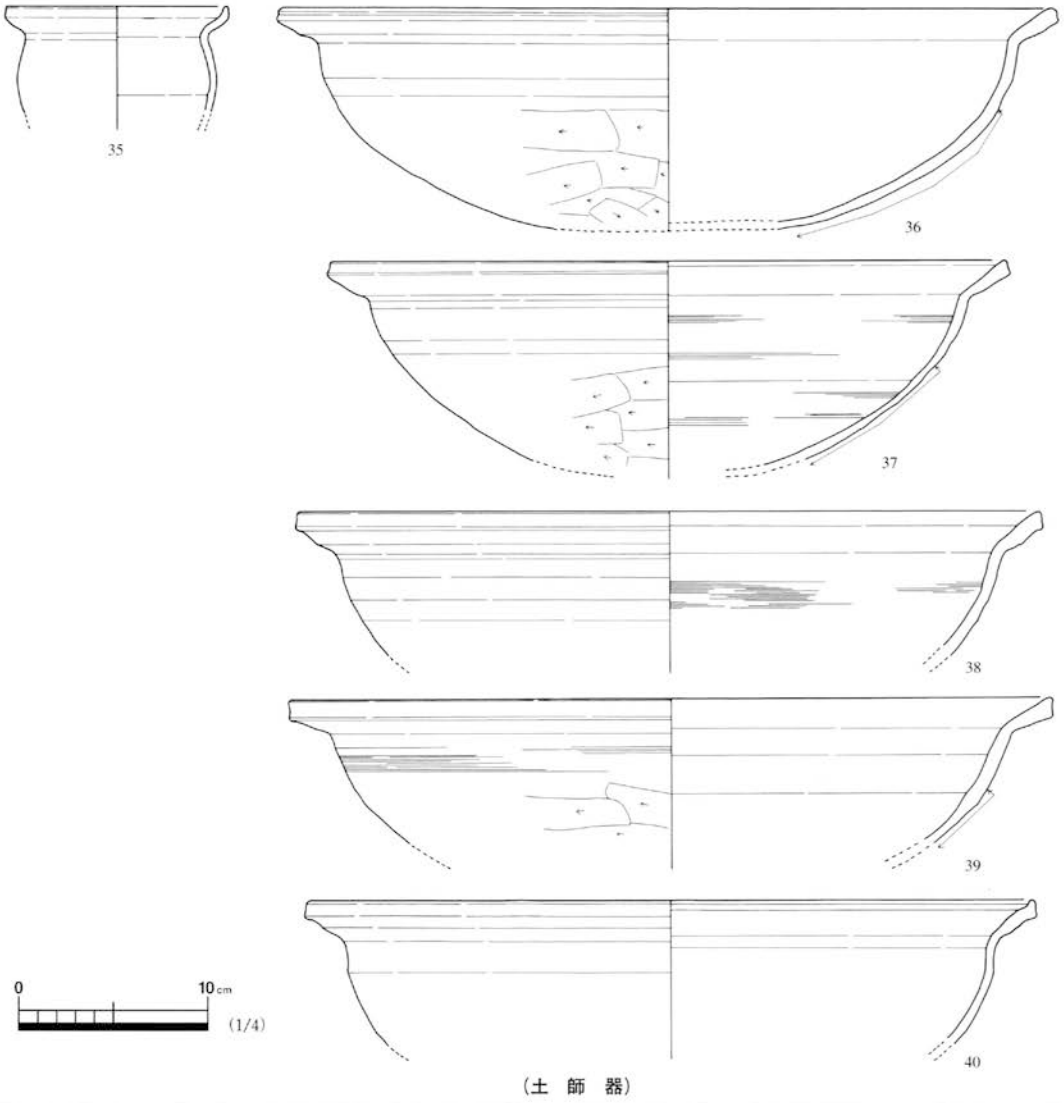
掘り込みが浅く、かつ23号土師器焼成坑に一部切られているため、出土量は少ない。特に土師器は少なく、口縁部点数では全体で、20点ていどである。

須恵器は食膳具中心に出土している。坏B蓋の口縁部器形や盤Aの体部外傾器形、坏A底部の薄さなどから考えて、Ⅳ2新期に位置付けられる。

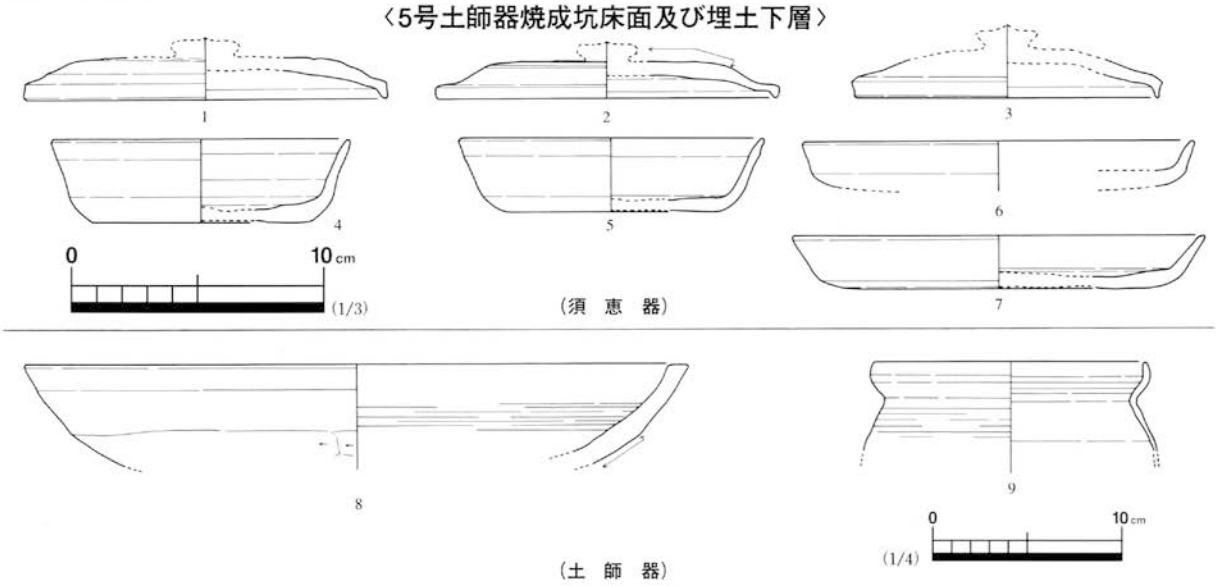
土師器は特殊器種として、土製馬形の脚部破片と円筒形土器の胴部破片、羽釜胴部破片が出土しているが、ほぼ煮炊具で占められる。器種は台付鉢、小釜、釜、鍋、甑で、口縁部計測値では、赤彩坏B蓋1/36、台付鉢3/36、小釜小型14/36、釜8/36、鍋5/36、甑3/36となる。小釜や釜の口縁端部は比較的長くつまみ上げており、鍋もやや薄手の傾向をもつ。11とした鍋の体部に下半の横斜め方向の削りとは別に縦方向の削りが施されており、特徴的である。9世紀初頭前後に釜胴部中程、カキ目と胴部下半叩き出しの境を縦方向に削る技法が顕在化するが、それとの関連性が有るものかもしれない。甑は口縁部に付く稜が微弱で目立たないタイプである。

《床下土坑遺物》

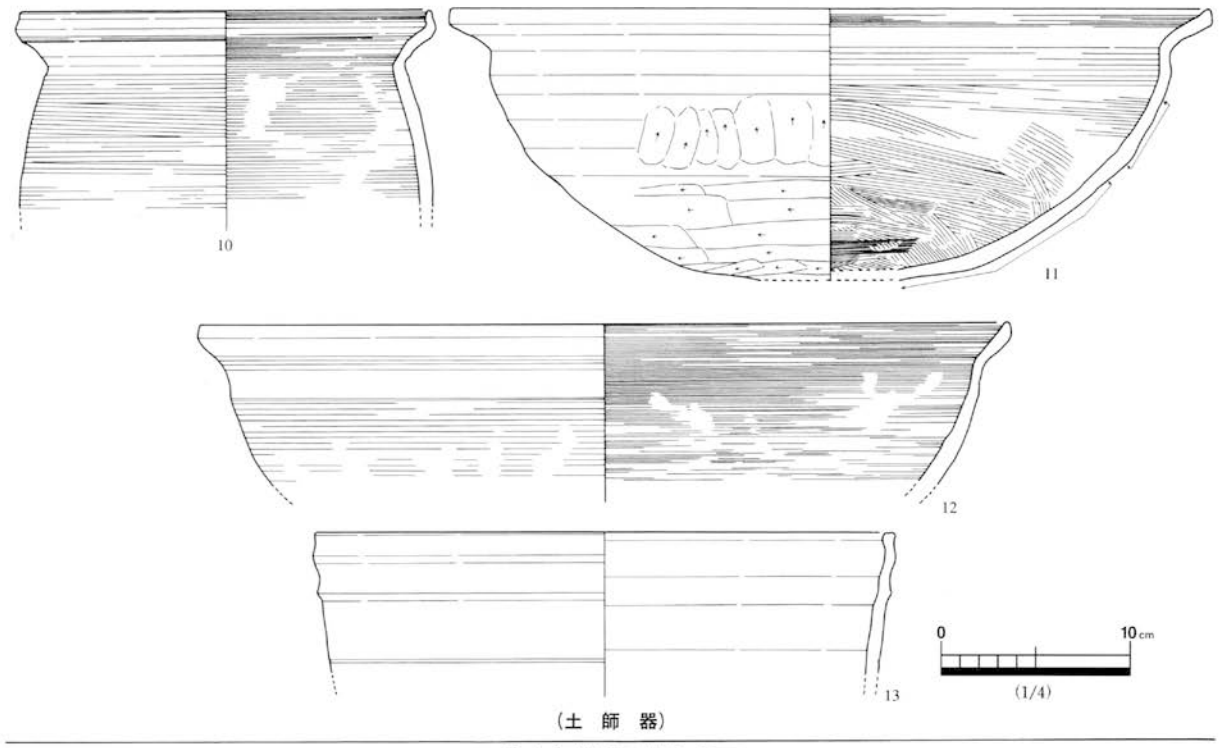
遺物が少なく、図示できたものは須恵器盤Aと土錘、円盤形土製品のみである。口縁部計測値では赤彩埦3/36、



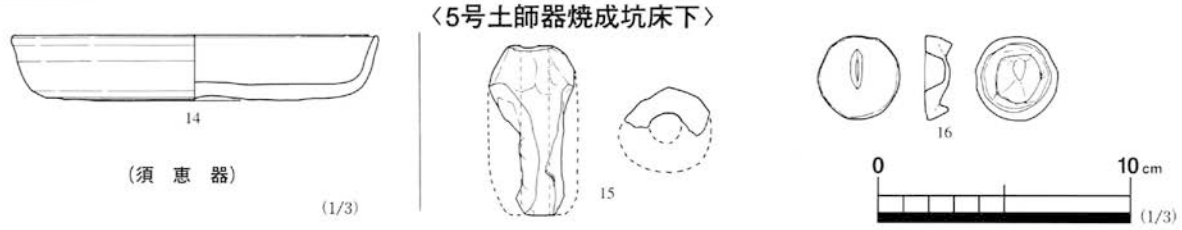
〈5号土師器焼成坑床面及び埋土下層〉



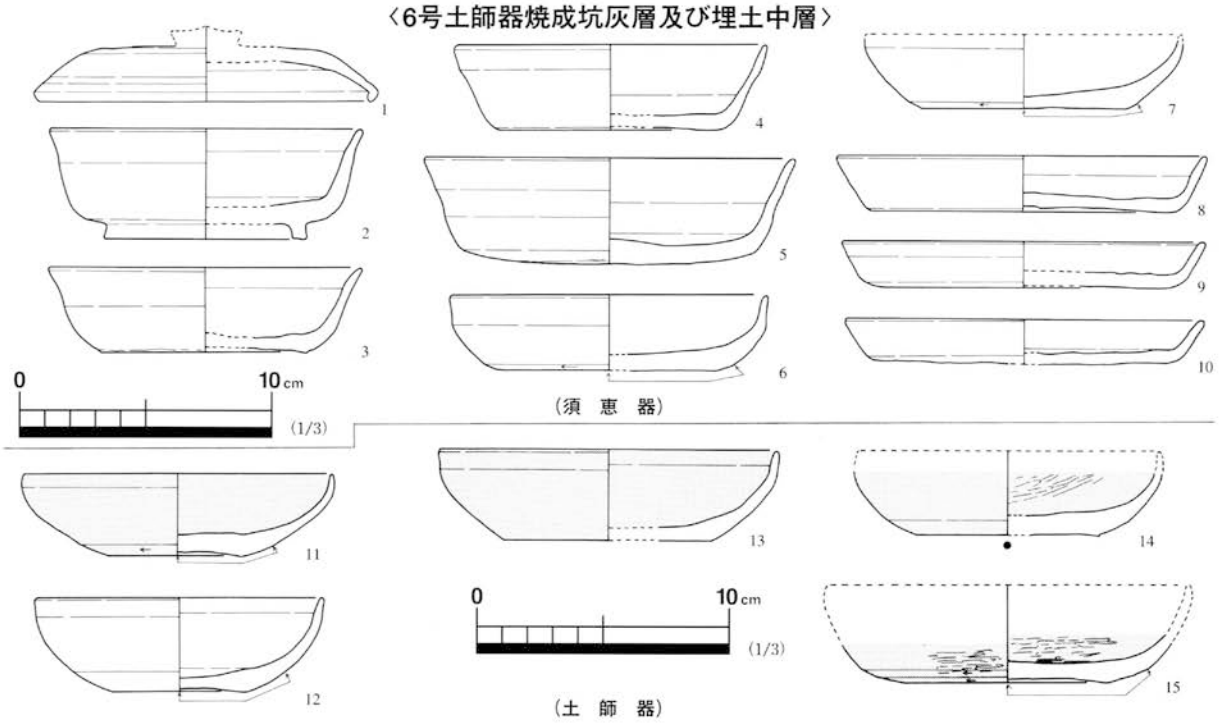
第134図　4号土師器焼成坑出土土器2・5号土師器焼成坑出土土器1



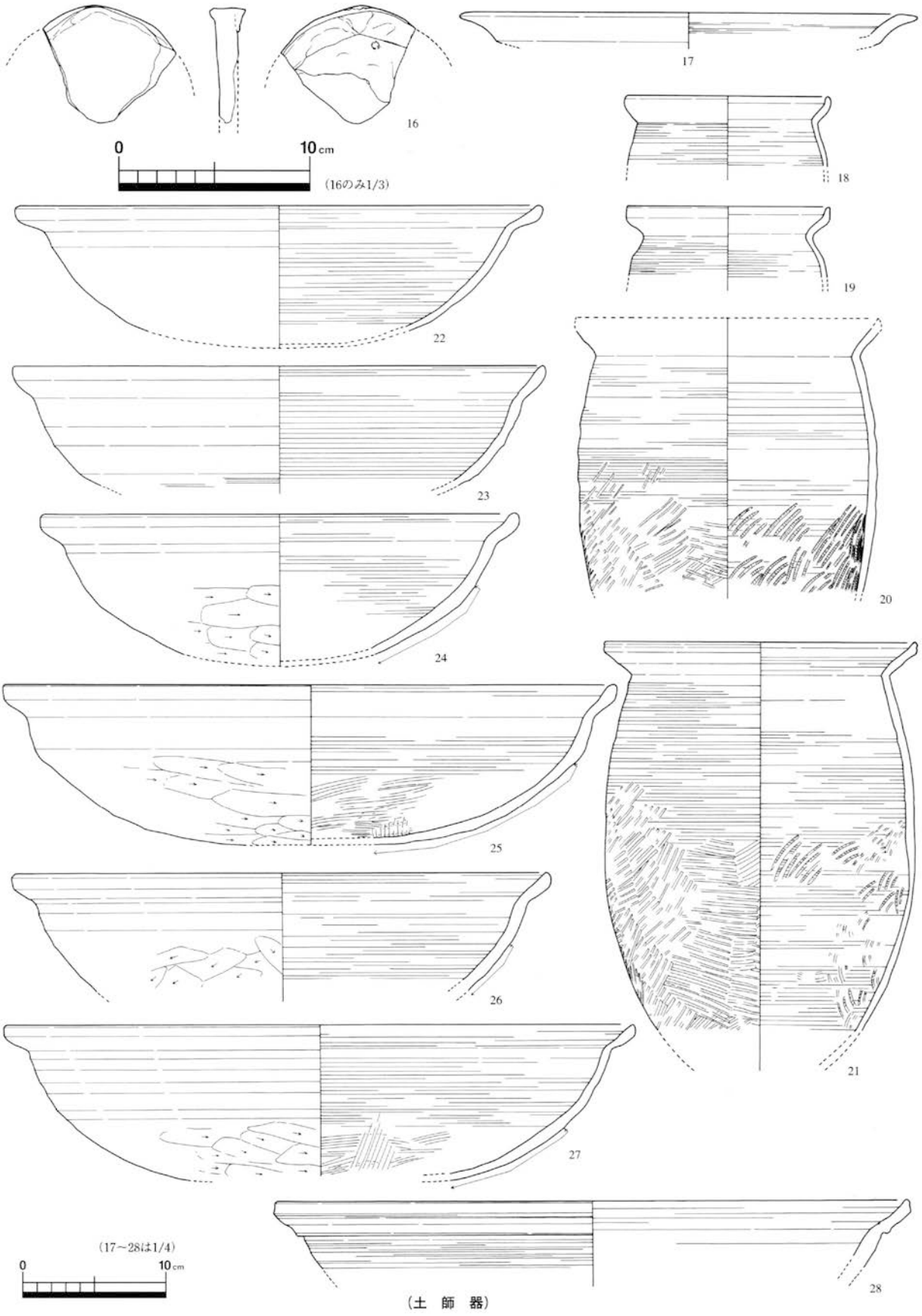
〈5号土師器焼成坑床下〉



〈6号土師器焼成坑灰層及び埋土中層〉



第135図　5号土師器焼成坑出土土器2・6号土師器焼成坑出土土器1



第136図　6号土師器焼成坑出土土器2

小型小釜3/36、釜9/36、鍋10/36をカウントしている。須恵器盤AはⅣ2古期のもの。円盤形土製品は長頸瓶風船技法に伴う頸部切り取り円盤である。閉塞円盤貼り付けタイプのもので、刺突は未貫通なものである。外面側の切り取り線の内側に線が引かれており、切り取る前の見込み線が入れられているのが分かる。

6．6号土師器焼成坑出土土器（第135～138図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び灰層等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下土坑内遺物に分けられる。

《焼成坑中層一括及び下層灰遺物》

須恵器は坏B蓋と坏B身、坏A、盤Aが出土している。出土量は多いとは言えないが、坏Aや盤Aの体部立ち気味器形や坏B蓋の口縁部器形や坏B身中の底部の厚さなどから判断するに、Ⅳ2古期に位置付けられるものと考える。底面削りを施す偏平形の埦（6・7）や意識的に酸化焔焼成したような大型の坏A（5）が出土している。

土師器は坏B蓋と埦、盤A、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器、円盤形土製品、土錘が出土している。口縁部計測値で示すと、表のとおりで、大半を煮炊具が占めるが、食膳具が1割近くを占めており、出土量は比較的多い方である。食膳具は赤彩埦が大半で、一部赤彩を施さないものもある。煮炊具は鍋が卓越している。小釜と釜は近似した量比で、円筒形土器の数が目立つ。鍋に次ぐ量であり、台付鉢の出土も目立つ。

食膳具で図示できたのは埦のみで、大半が小型を呈すが、大型を呈す15もある。体部下位から底面削りを施すものがほとんどであるが、底面糸切り痕を残すものが2点確認されている。偏平気味となる器形のものが主であるが、赤彩しない12は口径がやや小さく深身傾向をもつ。内外面磨き調整を基本とする。

煮炊具は小釜、釜、鍋ともに頸部「く」字屈曲をもつ器形で、端部つまみ上げのほとんどないものが主体となる。小釜のみは端部が内湾するように立ち上がるが、釜では端部肥厚して面形成するだけである。鍋の口縁端部も肥厚するが、端部は丸く、全体的に厚手を呈すのが特徴と言える。また、釜の胴部下半の叩き出しは、胴部中位付近から入っており、内面同心円文当て具（Dc類）もしっかりと伴う。以上の特徴は北陸型煮炊具形態でも比較的古手のものと言えよう。鍋の量の多さもその傾向があるかもしれない。

円筒形土器は口径14㎝前後のもので、縦刷毛の29とカキ目調整の30がある。前者は粘土積み痕を残す雑な作りで、楕円形に歪んでいる。回転台を使わない成形のように見受けられる。31は底部付近に横口が開けられており、横瓶の口頸部接合のような作りをもつ。外面に縦削り、内面に縦方向ナデを施すもので、円筒形土器の「L」字に屈曲させる連結部と考えられる。

円盤形土製品（16）は径10㎝程度の大型のもので、これまで述べてきた長頸瓶風船技法に伴う切り取り円盤とは若干異なる特徴をもつ。端面は切り取ったような形状をもつため、同様の性格をもつ土製品の可能性はあるが、風船技法に伴うものではないと考えられる。

《床下暗渠排水溝及び土坑内遺物》

須恵器は坏Aと盤B、手付の鉢Aが出土している。鉢Aは排水溝Cに伏せて並べおかれた暗渠蓋であり、ほぼ完形に復元されているものである。Ⅳ2古期に位置付けられるものと言える。

土師器は赤彩の埦と坏B身、短頸壷、鉢状器形のもの、煮炊具では小釜、釜、鍋、甑、そして円筒形土器が出土している。小釜や釜及び鍋、円筒形土器など出土土師器の大半は排水溝の暗渠蓋として並べられており、器種構成率にさしたる意味はないが、溝蓋に都合のよい釜と円筒形土器が多用されている傾向は出ている。

器種	小型埦	盤A	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測（○／36）	31	4	20	54	4	45	147	3	77	385
占有率	8.0	1.0	5.2	14.0	1.0	11.7	38.2	0.8	20.0	

器種	小型埦	坏B身	小釜小	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測（○／36）	7	2	16	31	16	4	1	77
占有率	9.1	2.6	20.8	40.2	20.8	5.2	1.3	

第20表　6号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下排水溝・土坑出土）

赤彩土師器では大型の埦の他、鉢の底部と思われるものと短頸壷の胴部を図示している。鉢は体部下位から底面を手持ち削り、内面ナデ調整するもので、煮炊具と同様の胎土をもつ。短頸壷は胴部径24cmほどのもので、胴部沈線を施し、内外に赤彩が施される。小釜と釜、鍋は埋土出土の器形と同様の特徴をもつ。釜（39）の胴部下半叩きはやや尖底状を呈すが、内面Da類当て具を伴う点では同様で、口縁端部には沈線が施される。また、40は釜の胴部中位付近破片であるが、下半に施されるはずの叩きは見られず、縦方向の削りが内外面に施されている。底部は叩き出したと思われるが、削りによってその叩き痕跡も消されているものである。能登や越中では多いが、南加賀では顕在化しない技法と言える。円筒形土器は口縁部と底部を欠損するものだが、残存高35cm以上を測る長胴のものである。胴部下位に縦方向削りが見られる。

7．7号土師器焼成坑出土土器（第138・139図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び灰層等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下排水溝及び土坑内遺物に分けられる。

《焼成坑床面及び灰層遺物》

須恵器は坏Aと盤A、盤Bが出土している。出土量は少ないが、坏Aの底部の薄さや盤Aの体部器形、盤Bの器形等から、Ⅳ2新ないしはⅤ1期に位置付けられるものと考える。

土師器は坏B蓋と埦、高盤、台付鉢、小釜、釜、小鍋、鍋、甑が出土している。口縁部計測値で示すと、表のとおりで、小釜が4割弱、釜が3割強の高い率を占める。鍋は比較的低率で、食膳具は1割未満と少ない。

食膳具で図示できたのは坏B蓋のつまみのみで、赤彩を施す。つまみ形は頂部盛り上がる擬宝珠形と小型円筒形があり、Ⅴ1期の須恵器坏B蓋に類似する。埦は図示していないが、底面削り調整のもので、底部厚くやや深身で小型を呈す器形をもつ。赤彩で台付鉢の脚部と思われる10が出土している。比較的小型のもので、内外を赤彩している。小釜は口縁端部つまみ上げが長目で、ややS字状に反り気味となる。釜にも口縁端部つまみ上げを反り気味にする16があり、やや新しい様相が見られる。ただ、口縁端部を丸く内湾気味とする器形（15）も併存し、鍋においてはそのような器形が目立つ。また、9は小型鍋としたが、鉢状器形のもので、煮炊具胎土に一般的に見られる意識的な砂粒の混在は見られない。口縁端部をつまみ上げるなど器形は鍋に類似する。

《床下暗渠排水溝及び土坑内遺物》

須恵器は坏B蓋と坏A、盤A、手付の鉢Aが出土している。坏B蓋の口縁部器形や坏A、盤Aの器形からⅣ2新期に位置付けられるものである。鉢Aは体部外傾器形でやや椀形を呈する。

土師器は赤彩の埦と小釜、釜、鍋、甑が出土している。半完形に近い釜や鍋の出土があり、器種構成では釜が特に突出するが、これは床下排水溝の暗渠蓋として使われたものであり、伏せて並べ置いている。食膳具は赤彩埦が少量出土するだけである。内外磨きを丁寧に施し、偏平器形を呈するもので、やや古手の様相をもつ。釜は口縁端部を長く立ち上がらせる器形の27・28とほとんどつまみ上げない29とがあるが、いずれも胴部下半叩き出しの境に縦方向の削りが施される。縦方向削りは9世紀初頭頃に出現する特徴的な技法であり、注目される。鍋は口縁端部を若干内湾させるものだが、端部をつまみ上げる意識は低く、全体的に厚手を呈する。甑は叩きの施される底部付近の破片である。

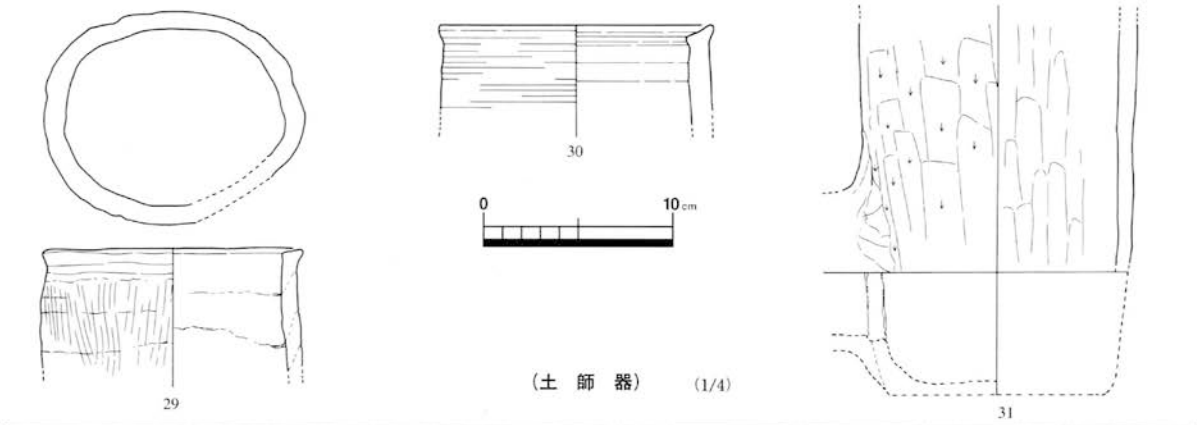
器種	小型埦	高盤	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	小鍋	甑	合計
口縁計測（○／36）	7	2	5	104	3	90	47	3	14	275
占有率	2.9	0.7	1.8	37.8	1.1	32.7	17.1	1.1	5.1	

器種	小型埦	小釜小	小釜大	釜	鍋	合計
口縁計測（○／36）	6	18	4	52	19	99
占有率	6.1	18.2	4.0	52.5	19.2	

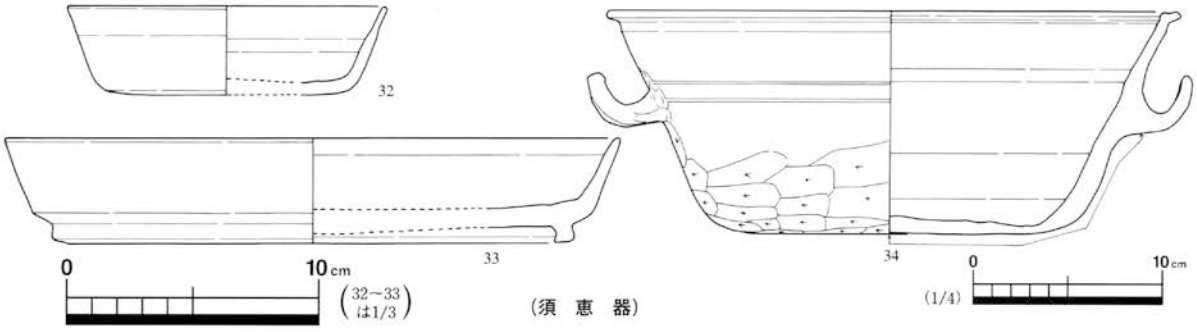
第21表　7号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下排水溝・土坑出土）

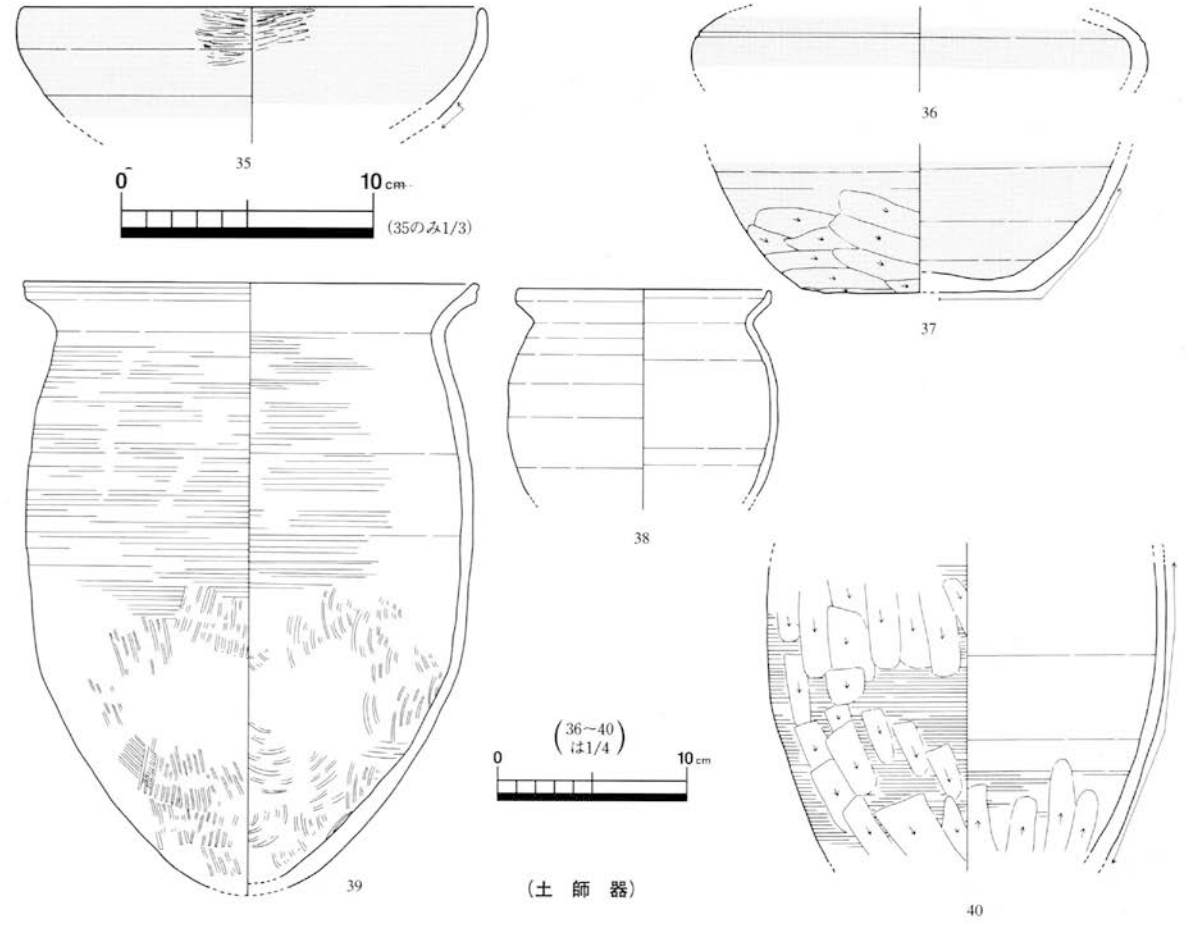
8．8号土師器焼成坑出土土器（第140図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び埋土から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下土坑出土遺物に分けられる。

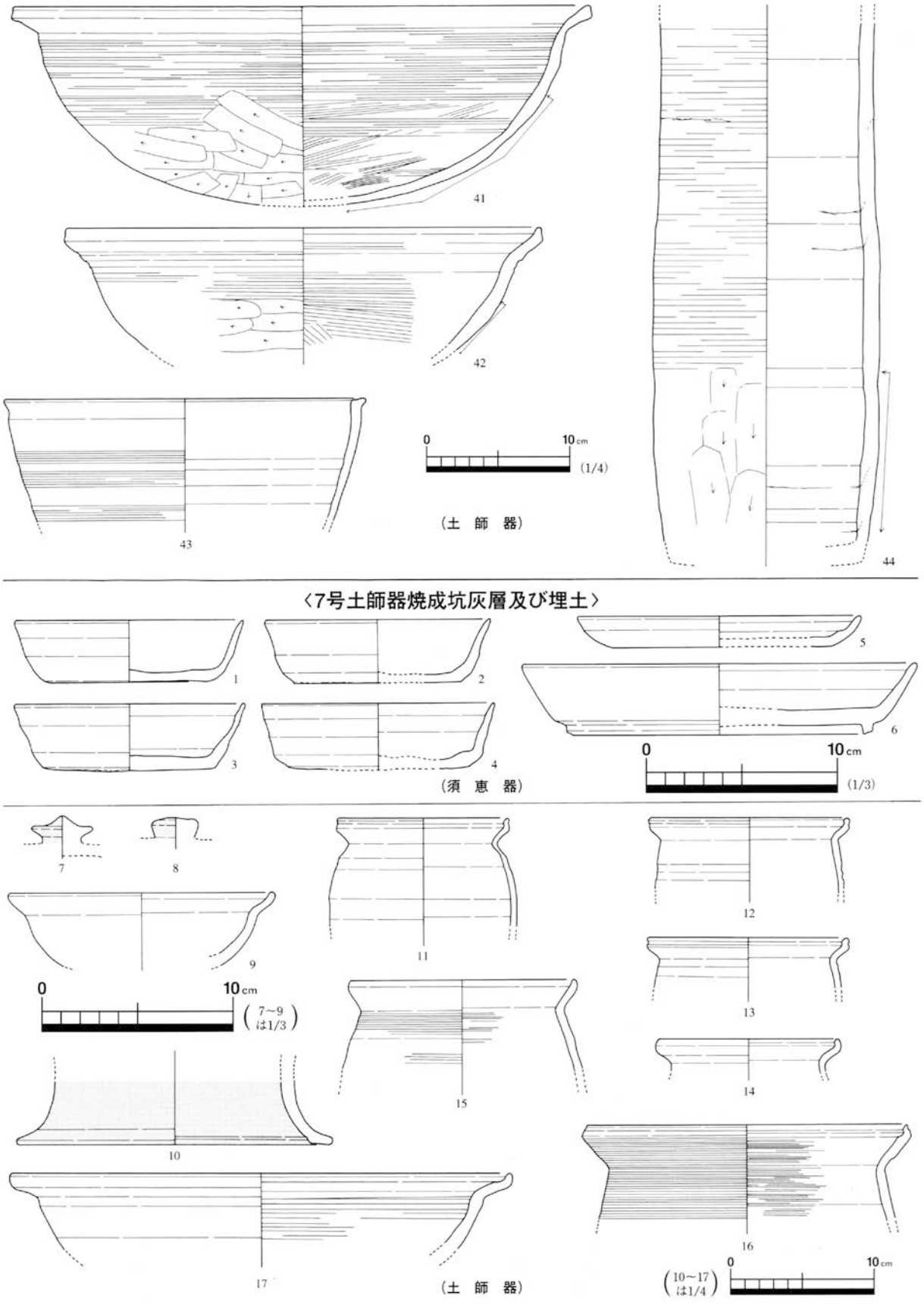


〈6号土師器焼成坑床下排水溝及び土坑〉

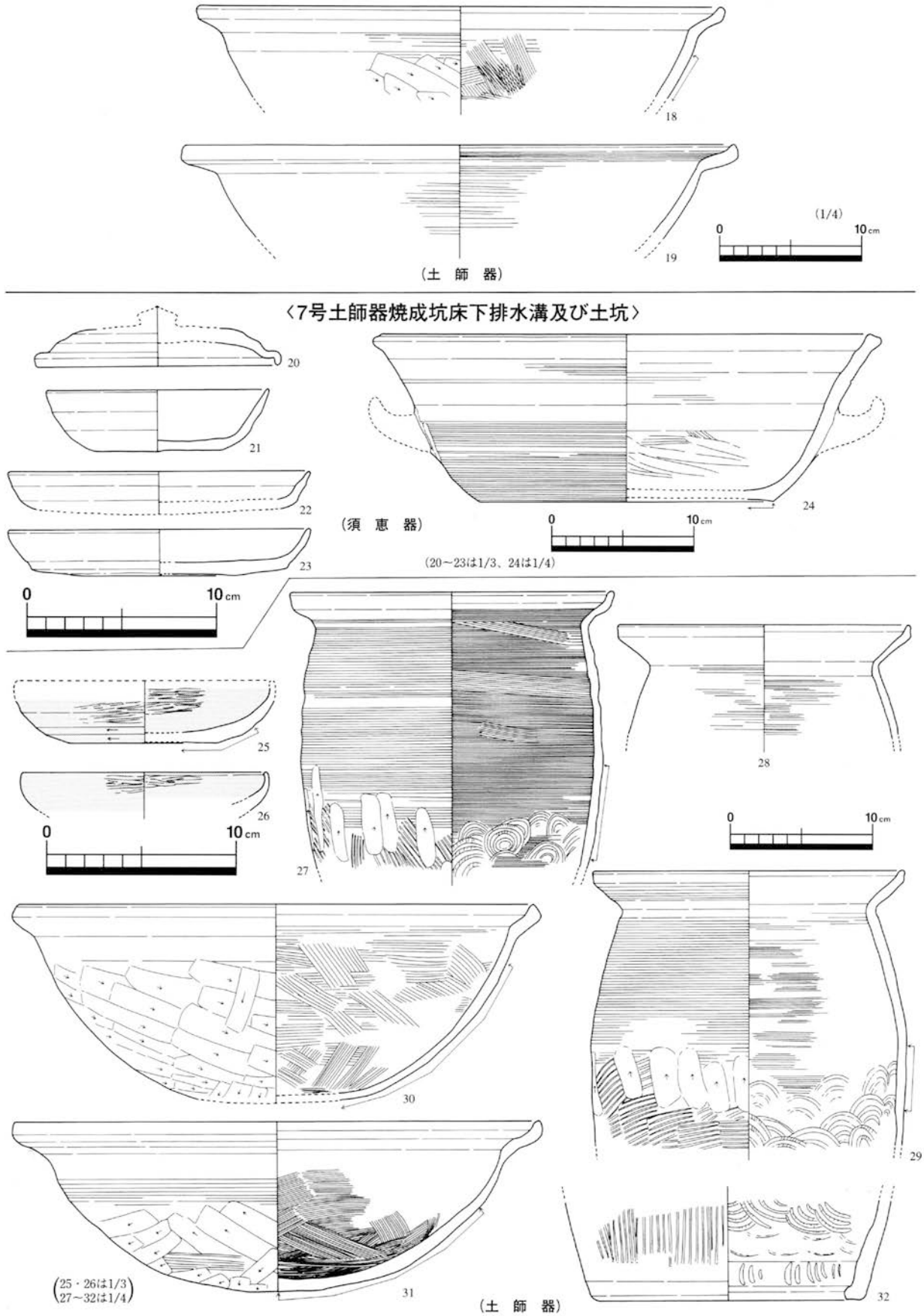




第137図　6号土師器焼成坑出土土器3



第138図　6号土師器焼成坑出土土器4・7号土師器焼成坑出土土器1



第139図　7号土師器焼成坑出土土器2

《焼成坑床面及び埋土遺物》

須恵器は坏Ｂ蓋と坏Ｂ身、盤Ａが出土している。出土量は少ないが、坏Ｂ身器形の底部厚や体部外反、盤Ａの体部立ち上がりから考えて、Ⅳ2新期前後に位置付けられる。

土師器は埦と坏Ｂ蓋、身、盤Ａ、小釜、釜、鍋、甑が出土している。口縁部計測値で示すと以下の表のとおりで、食膳具特に赤彩埦が17%の高い率をもつ。主体は煮炊具で、小釜が４割、釜が２割半で構成され、鍋は12%と少ない。食膳具で図示できたのは坏Ｂ蓋のつまみ、盤Ａ、埦で、すべて赤彩を施す。蓋つまみ形は頂部盛り上がる擬宝珠形で、Ⅳ2新期の須恵器坏Ｂ蓋に類似する。盤Ａは体部短いが外傾する器形。埦は底部厚くなってやや立ち上がる器形になっいてるが、７号焼成坑の埦よりも古手の様相をもつ。鍋は口縁端部肥厚して面をもつタイプ。甑（９）は叩きとカキ目の境に縦方向削りを施す。

《床下土坑遺物》

須恵器は坏Ｂ蓋と盤Ａが出土している。坏Ｂ蓋の口縁部器形や盤Ａ器形から見ると、埋土須恵器よりも古く位置付けられ、共伴する土師器もⅣ2古期にさかのぼる可能性をもつ。

土師器は少ない出土量だが、埦、坏Ｂ蓋、盤Ａ、小釜、釜、小型鍋、鍋、甑、円筒形土器など器種豊富に出土している。口縁部計測値で示すと下表のとおりである。食膳具で図示できたのは埦のみで、15の赤彩小型、16の赤彩大型、そして赤彩しない17がある。15・16は内外磨きが丁寧に入り、底面削りを施すもので、15は偏平器形を呈し、古手の様相をもつ。17は糸切り残す底部厚手のものだが、器形は新しくはなく、底面削りを行っていないだけの未調整品である可能性をもつ。赤彩されないのもそのためで、焼成道具として焼かれた可能性をもつ。釜は口縁端部を短く上に突出させる19・20とつまみ上げしない21がある。全体的に古い形態のものであり、鍋の器形も同様である。鉢状器形をした小型鍋（18）は胎土に大粒砂粒を混在させる煮炊具胎土をもち、11の円筒形土器も砂は少ないが、煮炊具に近い胎土をもつ。円筒形土器は粘土紐積み痕の明瞭に残るもので、カキ目やヨコナデが施される。

器種	小型埦	坏Ｂ蓋	杯Ｂ身	盤　Ａ	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	合　計	
口縁計測（○／36）	36	1	1	8	80	2	49	25	1	203	
占　有　率	17.7	0.5	0.5	3.9	39.4	1.0	24.1	12.3	0.5		
器種	小型埦	坏Ｂ蓋	盤　Ａ	小釜小	小釜大	釜	小型鍋	鍋	甑	円筒形	合　計
口縁計測（○／36）	3	2	1	21	3	20	3	8	4	9	74
占　有　率	4.0	2.7	1.4	28.4	4.0	27.0	4.1	10.8	5.4	12.2	

第22表　８号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下土坑出土）

９．９号土師器焼成坑出土土器（第141図）

当土師器焼成坑は18号土師器焼成坑の埋土に重複して構築された焼成坑で、埋土と床面から遺物が出土している。

《焼成坑床面及び埋土遺物》

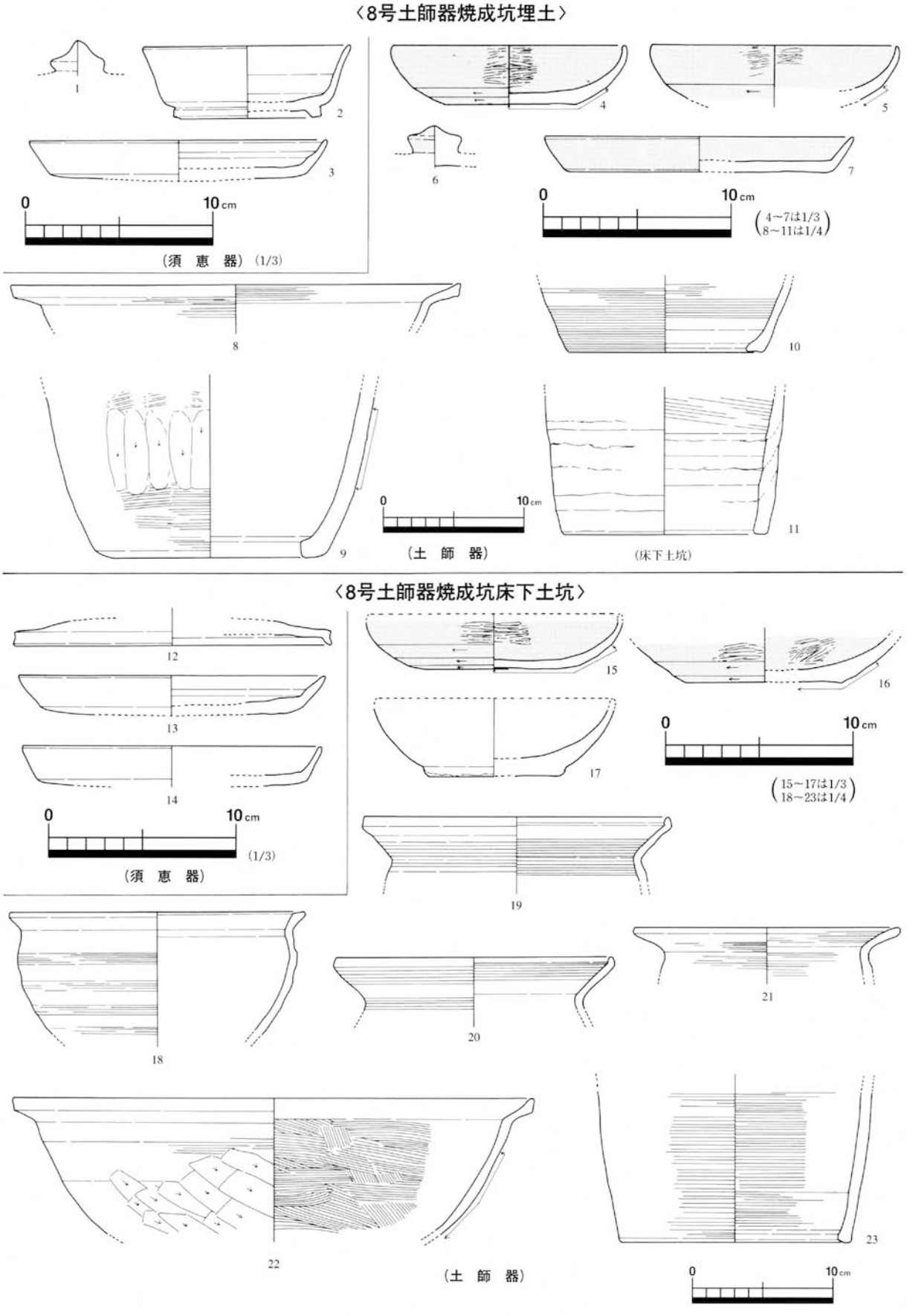
須恵器は出土量少なく、坏Ｂ蓋のみ図示できた。Ⅴ1期ないしはⅤ2期頃のものと考えられる。

土師器も出土量は少ないが、埦、坏Ｂ蓋・身、盤Ａ、台付鉢、小釜、釜、小鍋、鍋、甑、円筒形土器が出土している。口縁部計測値は以下の表のとおりで、小釜と釜が主体を占める。埦が比較的多く、鍋は少ない。

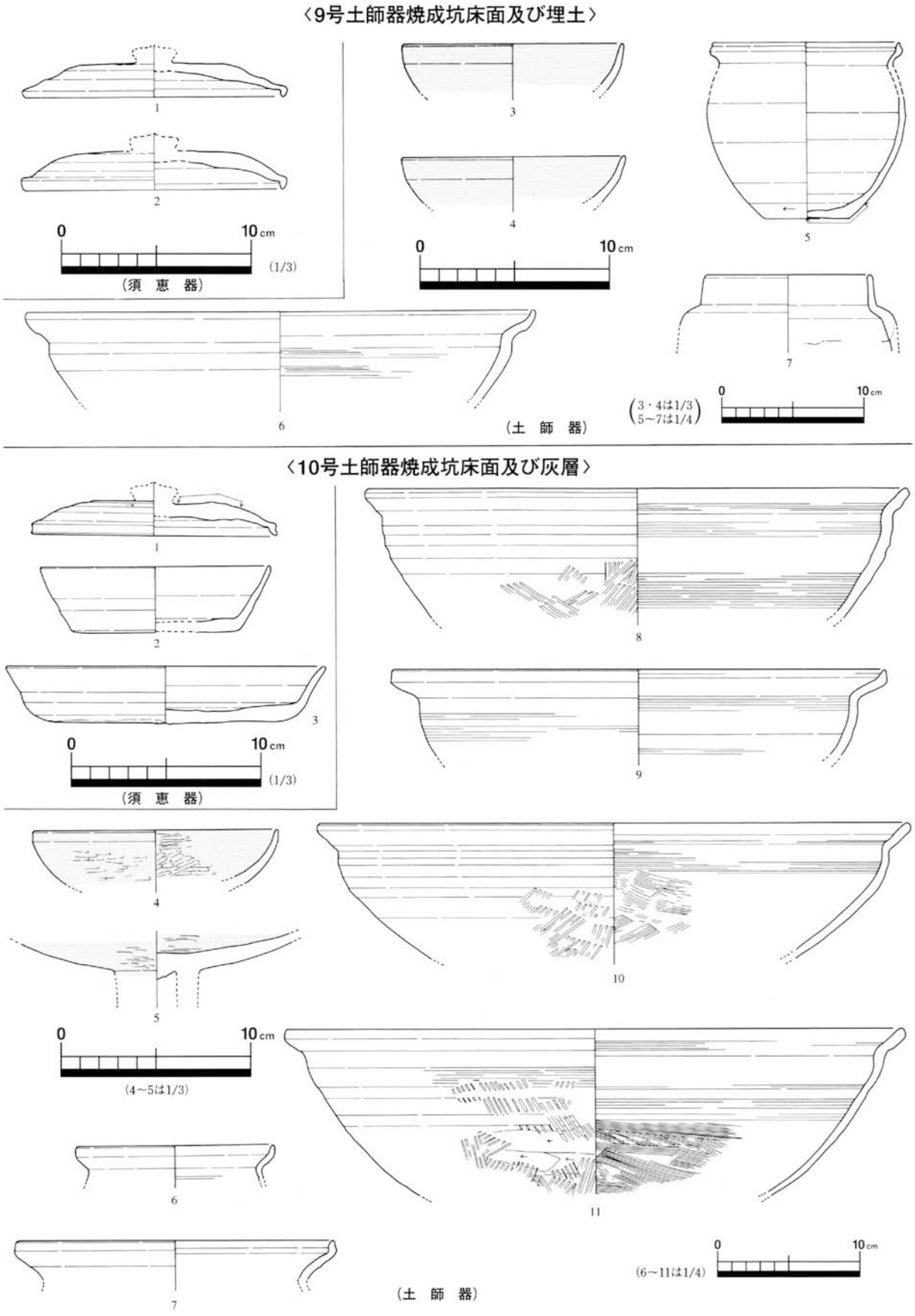
食膳具で図示できたのは埦のみで、両面赤彩を施すが、内外面ナデ調整のみ。底径小さく深身の立ち上がり、口径も小さ目を呈す。底面は削り調整。９世紀初頭以降主流となる器形である。小釜は胴部がやや張り、口縁部で「く」字屈曲し、端部つまみ上げる器形。口縁端部外反させ、胴部はナデ調整のみ。鍋は頸部屈曲後口縁部が長く内湾して立ち上がる器形。円筒形土器は口縁部手前で段を形成して口径を絞り込む有段式のものである。

器種	小型埦	坏Ｂ蓋	坏Ｂ身	盤　Ａ	台付鉢	小釜小	釜	鍋	甑	円筒形	合　計
口縁計測（○／36）	21	3	9	1	3	58	73	14	5	3	190
占　有　率	11.1	1.6	4.7	0.7	1.6	30.5	38.4	7.4	2.6	1.6	

第23表　９号土師器焼成坑床面及び埋土出土土師器器種構成表



第140図　8号土師器焼成坑出土土器



第141図　9号土師器焼成坑出土土器2・10号土師器焼成坑出土土器1

10. 10号土師器焼成坑出土土器（第141～143図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び埋土、灰層から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下土坑出土遺物に分けられる。

《焼成坑床面及び埋土遺物》

須恵器は坏Ｂ蓋と坏Ａ、盤Ａが出土している。出土量は少ないが、坏Ａの器肉の薄さや盤Ａの体部長く外傾気味となる器形から、Ⅳ2新期に位置付けられる。

土師器は椀、坏Ｂ蓋・身、高盤、小釜、釜、鍋、甑、羽釜が出土している。口縁部計測値で示すと下表のとおりで、釜の量が目立つ。食膳具の率は比較的高い方だが、図示できたのは椀口縁部破片と高盤の基部付近の破片のみで、椀は口径12.9㎝の深身小型傾向のもの。高盤は基部が比較的細い。小釜の口縁端部のつまみ上げは長く、釜の口縁端部も同様に長く立ち上がる。鍋は口縁部若干つまみ上げる９と端部をつまみ上げないタイプとがある。前者は比較的通常の器形を呈すのに対し、後者は口縁部が比較的短く全体的に深身を呈すもので、胴部カキ目や削り調整後に叩き成形が行われているものである。内面に当て具は残らず、刷毛調整が施され、比較的薄手を呈す。15の台付鉢も底部の丸底化を叩きで行うもので、内面に当て具痕を残す。台付鉢の底部叩き出しも鍋同様に主体を占めない技法であり、当焼成坑の特徴と言えそうである。甑は底部端のあまり内屈しないタイプで、胴部に叩き成形痕が残る。特に14は叩き後に刷毛調整が施されるもので、内面は雑に指なでされる。口縁部は口縁端部の外屈以外に、下に３段の稜を形成するタイプである。円筒形土器は段をもって口縁部を絞る有段式のもので、胴部内面には粘土紐積み成形痕、外面には縦方向の削りが施される。

《床下土坑遺物》

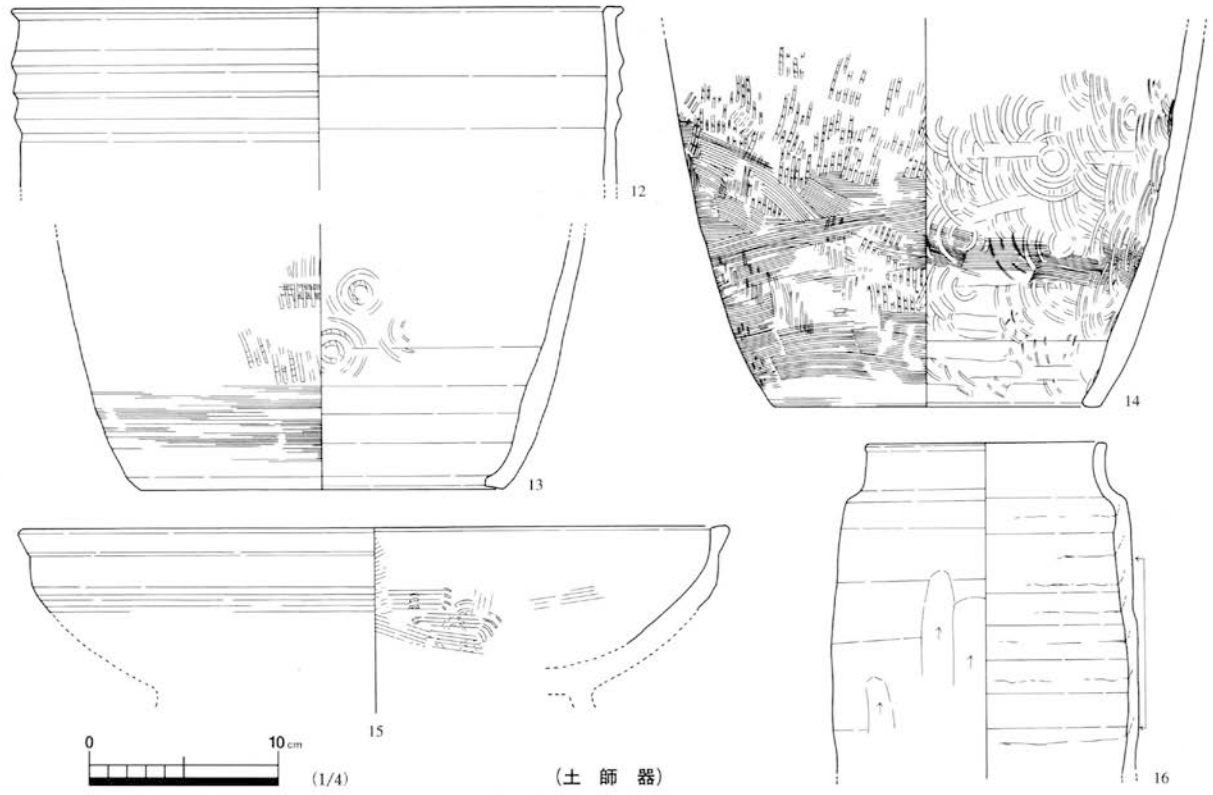
深い床下土坑が掘り込まれており、焼成坑内よりも多く土器が出土している。

須恵器は坏Ｂ蓋、坏Ｂ身、坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂが出土している。18の坏Ｂ蓋の器形や盤Ａの体部外傾器形、盤Ｂの薄手化など新しい傾向をもつが、坏Ａ器形などから考えれば、Ⅳ2新期とするのが妥当だろう。

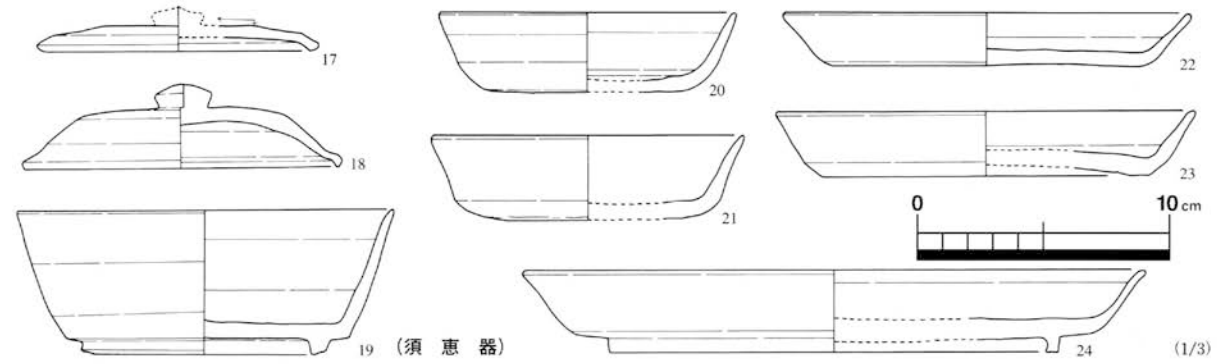
土師器は椀と坏Ｂ蓋、身、盤Ａ、盤Ｂ、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。これ以外に土製馬形の足部破片と小型鉢とした30があるが、小型鉢は体部下半削りを施す薄手のもので、胎土は煮炊具胎土と同様のものである。これ１点のみの出土であり、特殊品だろう。口縁部計測値で示すと以下の表のとおりで、食膳具１：煮炊具９で構成される。煮炊具では釜が異常に多く５割近くを占め、小釜も３割以上を占める。鍋の率が極めて低く、釜や小甕を意識的に埋めた可能性がある。食膳具は赤彩土師器で、26の椀は口径11.9、器高3.8の小型深身器形を呈す。内外面ともに丁寧に磨きが施され、底面は削り調整される。盤Ａや盤Ｂ、坏Ｂ蓋もあり、ひととおりの器種が存在している。小釜は口縁端部をつまみ上げる器形で、長くつまみ上げるが、端部が内面に肥厚する32・34が定量を占める。また、31の頸部屈曲弱く口縁部長く立ち上がる特徴的な器形が出土している。釜も口縁端部をつまみ上げる器形で、しっかりと折り曲げる。厚手を呈すものが主体だが、薄手（40）のタイプも存在し、胴部下半叩き出しの上端部分を縦方向に削る技法のものが存在している（37・39）。円筒形土器は上半の破片と底部付近破片、そして胴部下半の連結部が出ており、胎土はいずれも煮炊具同様の大粒砂粒を混和させるものである。胴部上半の破片は口縁部が有段式のものでカキ目が施される。底部破片は底部が筒抜け状を呈すものである。甑のように底部端に向かって厚くなり、端面形成するものである。連結部破片（44）は底部から3.5㎝程上で横口状に出る連結部が確認される。横瓶と同様に胴部下位を円形に切り抜き、そこに別作りの円筒形を継ぎ足すもので、Ｌ字型に屈曲する形態をもつ。繋ぎ目の内外面に接着の際の粘土がなでつけられている。

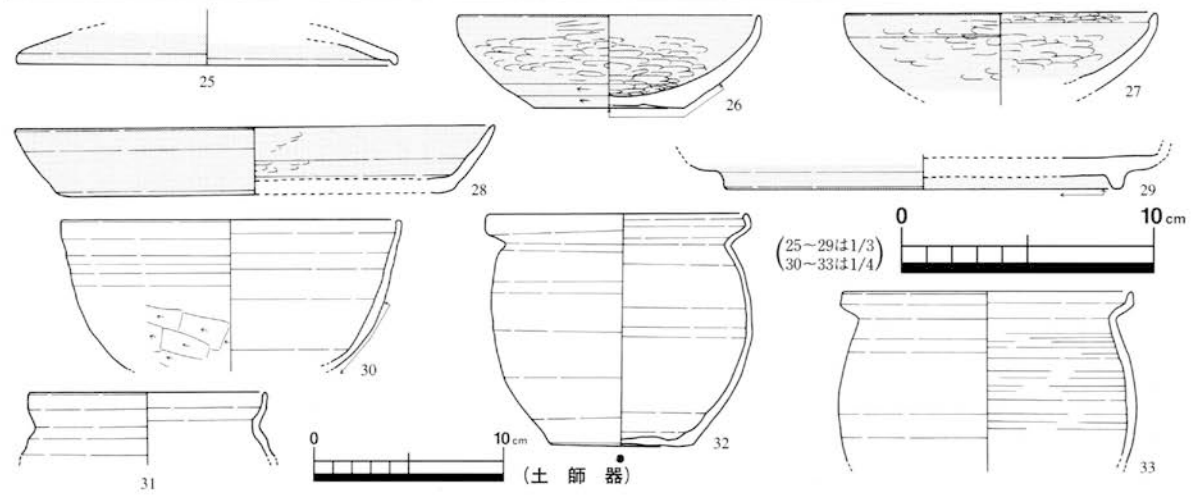
器種	小型椀	坏Ｂ蓋	杯Ｂ身	高盤	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○/36)	17	2	2	2	5	27	4	49	20	16	30	174
占有率	9.7	1.1	1.1	1.1	2.9	15.5	2.3	28.2	11.5	9.2	17.2	
器種	小型椀	坏Ｂ蓋	杯Ｂ身	盤Ａ	小型鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○/36)	20	4	1	1	6	68	24	133	4	14	9	284
占有率	7.0	1.4	0.4	0.4	2.1	23.9	8.5	46.8	1.4	4.9	3.2	

第24表　10号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下土坑出土）

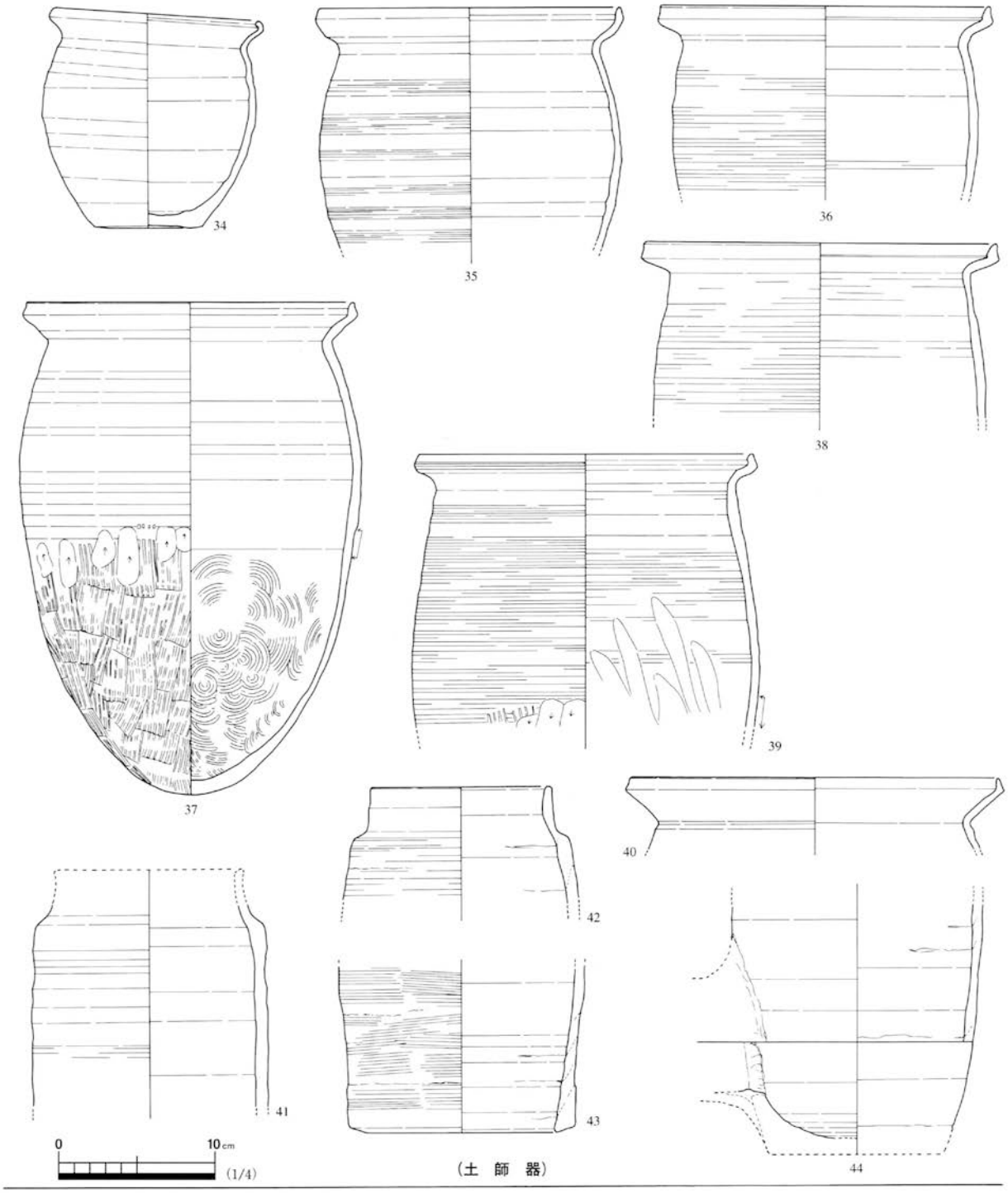


〈10号土師器焼成坑床下土坑〉

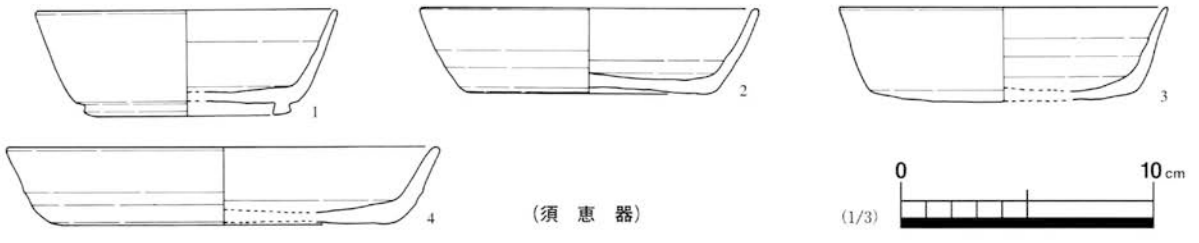




第142図　10号土師器焼成坑出土土器 2



〈11号土師器焼成坑埋土及び灰層〉



第143図　10号土師器焼成坑出土土器３・11号土師器焼成坑出土土器１

11. 11号土師器焼成坑出土土器（第143～145図）

当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び埋土、灰層から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築に伴う床下排水溝及び土坑より出土した遺物に分けられる。

《焼成坑床面及び埋土遺物》

須恵器は坏B身と坏A、盤Aが出土している。出土量は少ないが、坏Aの器形などから10号土師器焼成坑と同時期のⅣ2新期に位置付けられるものと考える。

土師器は椀、坏B蓋・身、盤A、高盤、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器の他、獣足盤と思われるものの脚部、管状土錘、置き竈破片、支脚状の破片なども出土している。口縁部計測値で示すと下表のとおりで、食膳具が1割半以上、煮炊具が8割という構成である。食膳具は全て赤彩で、椀の出土が目立つ。体部下位から底面にかけては通常回転削り調整が施されるが、6・10には糸切り痕が残る。7のようなやや偏平形となる器形もあるが、小型で深身を呈す器形が主流である。内外面の磨きは丁寧に施されている。坏B蓋は口縁部折り曲げが微弱化したもの。高盤脚部は小型のものである。小釜は10号焼成坑同様、口縁端部のつまみ上げが長く、屈曲後にやや反り気味となる。これに対し、釜の口縁端部はつまみ上げするものが少なく、17のように短く曲がる程度。厚手のものは口縁端部へ肥厚して面を作る18・19のタイプが主流である。鍋は口縁部長く立ち上がる器形のもの。台付鉢（22）は口縁部外反タイプで、底部に叩きが施されるものである。また、特殊器種として13のような脚部が出土している。長い棒状のもので、やや捻り、接地面は平坦面をもつ。三足の付く大型器種で、鉢ないしは盤など火舎状の器種と思われる。

《床下土坑遺物》

床下暗渠排水溝の上蓋として完形の須恵器食膳具が使われており、須恵器のまとまった出土がある。須恵器器種は坏B蓋、坏B身、坏A、盤A、盤Bがあり、いずれも完形ないしは半完形品である。いずれも同じ焼き色をしており、須恵器窯1回の操業に伴う廃棄品を転用したことが伺われる。各器種の器形的な特徴から、Ⅳ2新期に位置付けられるものと考える。

土師器は椀、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。口縁部計測値で示すと以下の表のとおりで、釜の量が目立つ。鍋は少なく、9・10号土師器焼成坑の煮炊具構成と同様である。食膳具は赤彩椀のみで、比較的偏平な器形のものが出ている。薄手で磨きは丁寧である。小釜は口縁端部つまみ上げ器形のもの。釜は口縁端部短くつまみ上げる40のような厚手器形もあるが、端部肥厚して面形成する39・42のタイプが主体を占める。円筒形土器は完形に復元できるものが出土している。有段式の口縁部をもつもので、内外面に粘土紐積みの痕跡を残す。積み上げ後、内面は横なで、外面はカキ目が施されるだけで、叩き成形などは行われておらず、積み上げの際に指で引き延ばしただけのものであろう。粘土紐の伸びは胴部下位で少なく、それに対応して器肉が厚くなっている。底部中央が欠損するため、底抜けでないとは言い切れないが、底部をもつものが定量存在していることから考えて、これは底部のあるタイプであると考えている。胎土は煮炊具同様、大粒の砂粒が混在するものである。

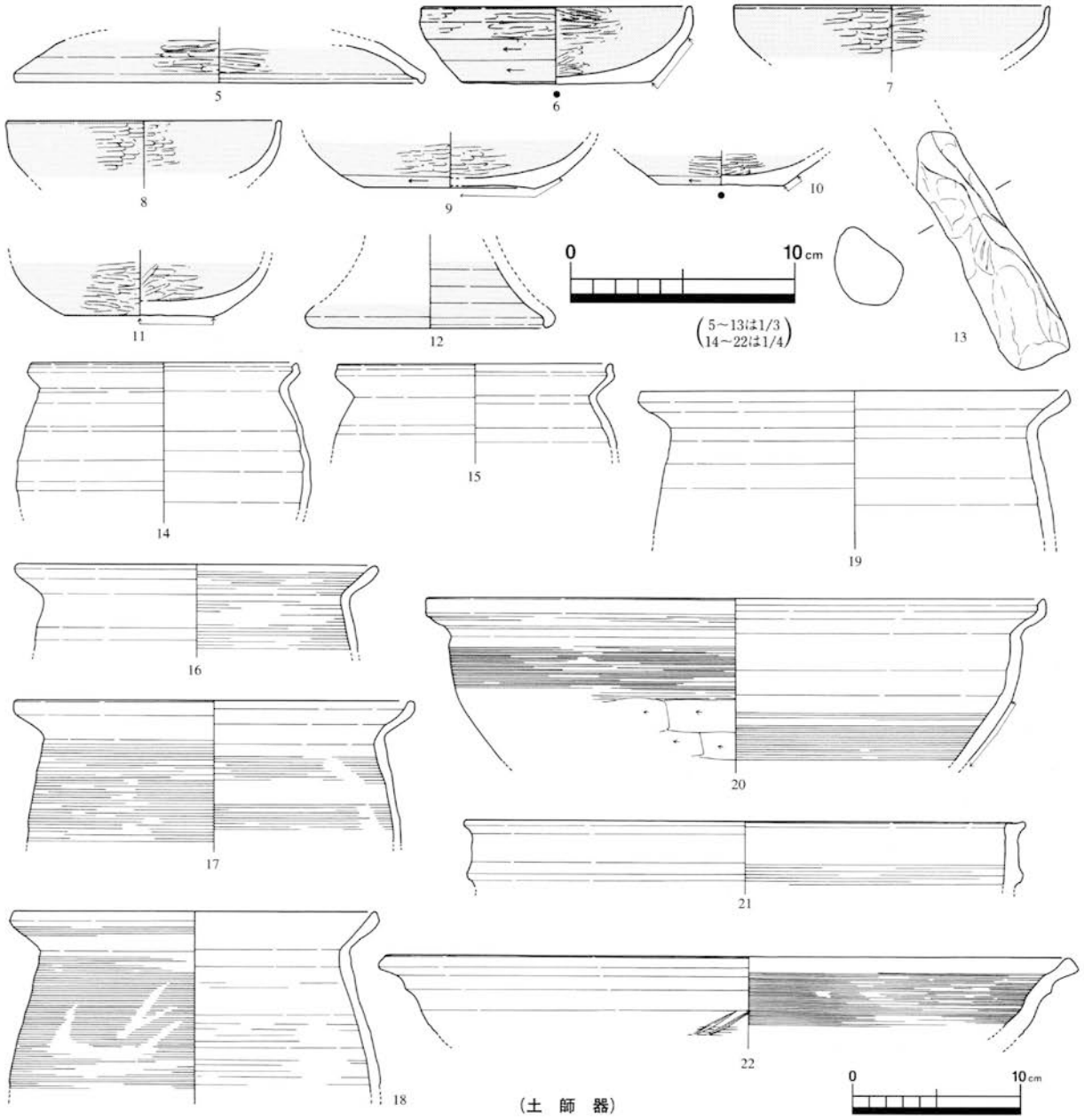
器種	小型椀	坏B蓋	杯B身	盤A	高盤	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○/36)	32	8	10	3	4	7	104	4	101	11	36	6	326
占有率	9.8	2.5	3.1	0.9	1.2	2.1	31.9	1.2	31.0	3.4	11.0	1.8	

器種	小型椀	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○/36)	10	15	12	67	4	7	9	124
占有率	8.1	12.1	9.6	54.0	3.2	5.6	7.3	

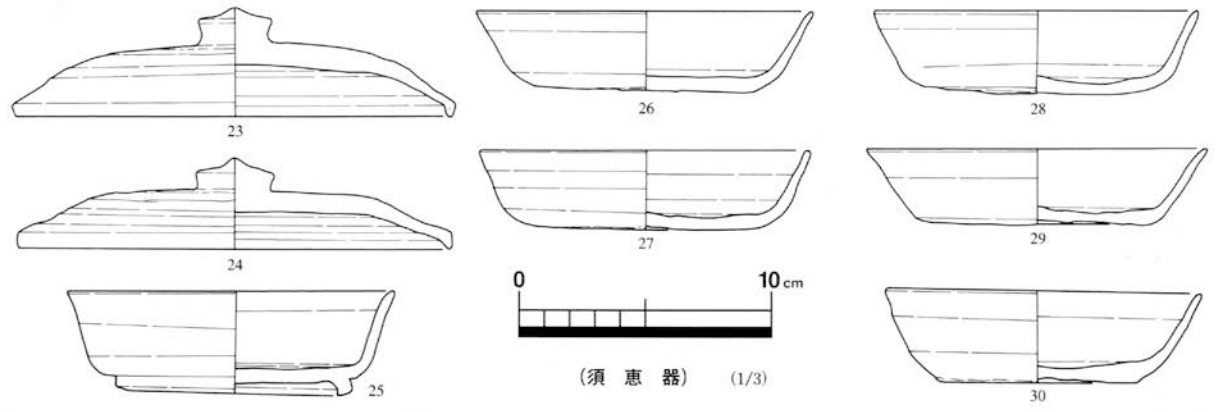
第25表　11号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下出土）

12. 12号土師器焼成坑出土土器（第145～147図）

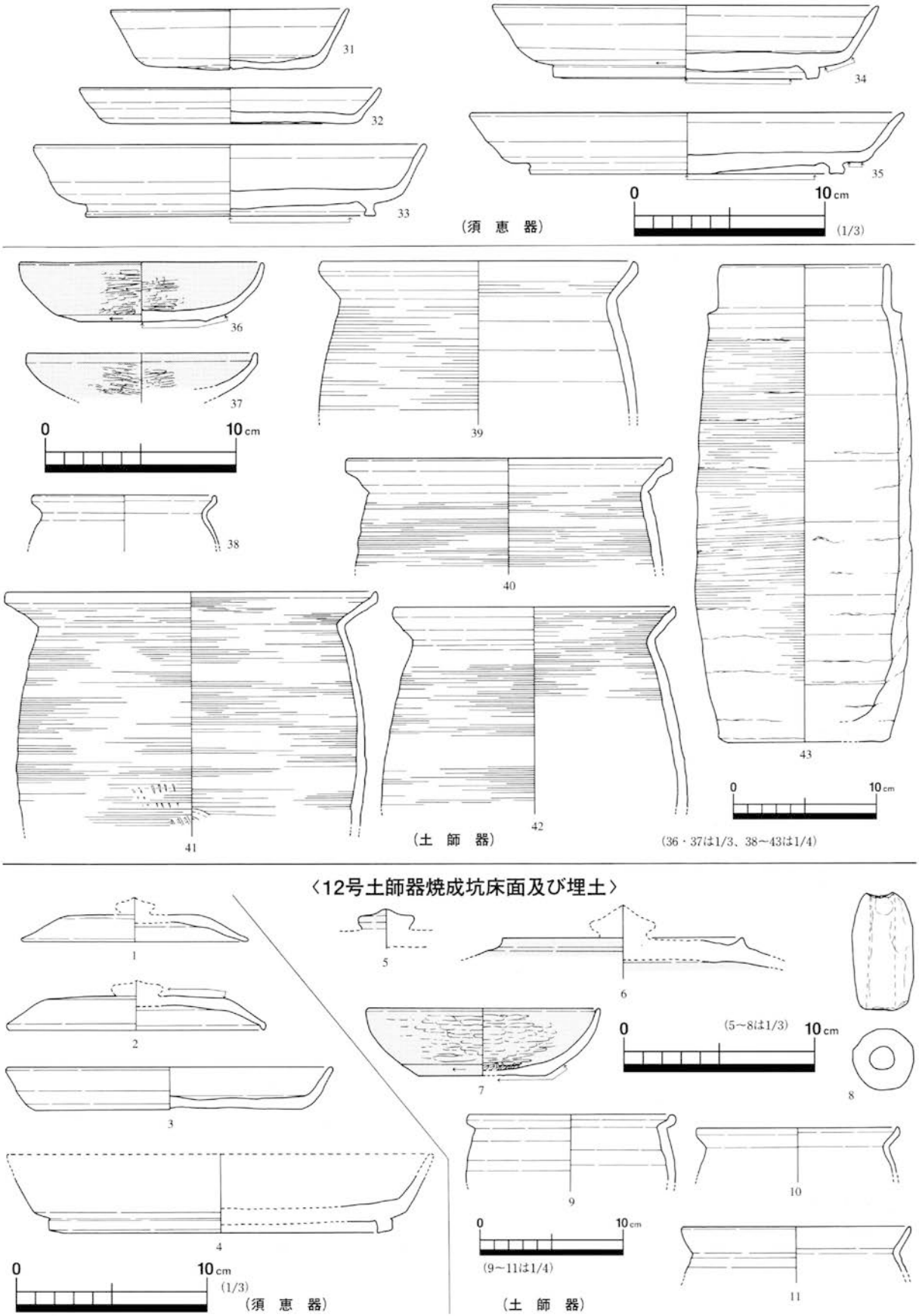
浅い土師器焼成坑であるが、床面近くから土器が比較的出土している。焼成坑内出土土器と焼成坑構築前の床下土坑出土土器とに分けられる。



〈11号土師器焼成坑床下排水溝及び土坑〉



第144図　11号土師器焼成坑出土土器 2



第145図　11号土師器焼成坑出土土器３・12号土師器焼成坑出土土器１

須恵器は坏Ｂ蓋と盤Ａ、盤Ｂが出土している。出土量は少ないが、坏Ｂ蓋中の天井部器形や盤Ａの体部立ち上がり器形などから10号土師器焼成坑よりも前出するだろうが、Ⅳ2新期とするのが穏当だろう。

土師器は埦、坏Ｂ蓋・身、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器の他、土製馬形の足部破片と管状土錘が出土している。口縁部計測値で示すと下表のとおりで、食膳具１：煮炊具９という構成である。食膳具は全て赤彩で、埦の他に坏Ｂの出土が目立つ。埦は口径12.2㎝、器高3.6㎝の８世紀後半に主体的に存在するタイプ。坏Ｂつまみも８世紀後半の器形と言える。ただ、６の大型蓋は天井部に突帯をもつ特殊品で、須恵器ではⅤ1期以降に目立つ。破片のため、盤の底部である可能性もある。小釜は口縁部短く、口縁端部のつまみ上げが微弱なものと頸部屈曲弱く、口縁部立ち上がるものとがある。釜も口縁部短いものが多く、つまみ上げは短い。鍋は口縁端部で肥厚する程度のものが主体を占める。なお、12は釜としたが、脚部状に外屈する甑底部の破片の可能性もある。台付鉢は口縁部が外反する盤型の20と受け部が付く羽釜状の19とがある。前者は台付鉢に通常見られるタイプの一つであるが、後者の器形は例外的である。台付鉢全てに言えることだが、獣脚状のものが３足付く可能性もあり、特に羽釜状器形のものはその可能性が高い。土製馬形（21）は太く短い足部破片である。足の接地面に蹄と思われる２条沈線が施されるのが特徴である。

《床下土坑遺物》

須恵器は坏Ｂ身と盤Ａのみ出土している。出土量は極少ないが、盤Ａの体部立ち上がり器形からⅣ2古期に位置付けられるものである。

土師器は埦、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。出土量少なく、構成比率にさほどの意味はないが、口縁部計測値を以下に示した。釜と円筒形土器が目立つが、円筒形土器は１個体のものである。食膳具は赤彩埦のみ。小釜は口縁端部つまみ上げ器形のもの。釜は口縁端部を僅かにつまみ上げる25・27と端部肥厚するだけの28とがある。なお、26は、釜として扱ったが、脚部状に外屈するタイプの甑底部である可能性もある。甑は口縁部下に２段稜形成するもの。叩き成形の後にカキ目や刷毛目が施される。円筒形土器（30）は有段式口縁部をもつタイプ。段を形成する部分が稜のように突出し、そこから口縁部が内傾する器形を呈す。稜形成を内面から押し出して作り出しているのが特徴である。

器種	小型埦	坏Ｂ蓋	坏Ｂ身	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	合計
口縁計測（○／36）	14	2	7	6	56	9	64	31	16	205
占有率	6.8	1.0	3.4	2.9	27.3	4.4	31.2	15.1	7.8	

器種	小型埦	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測（○／36）	1	17	4	30	3	9	25	89
占有率	1.1	19.1	4.5	33.7	3.4	10.1	28.1	

第26表　12号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下出土）

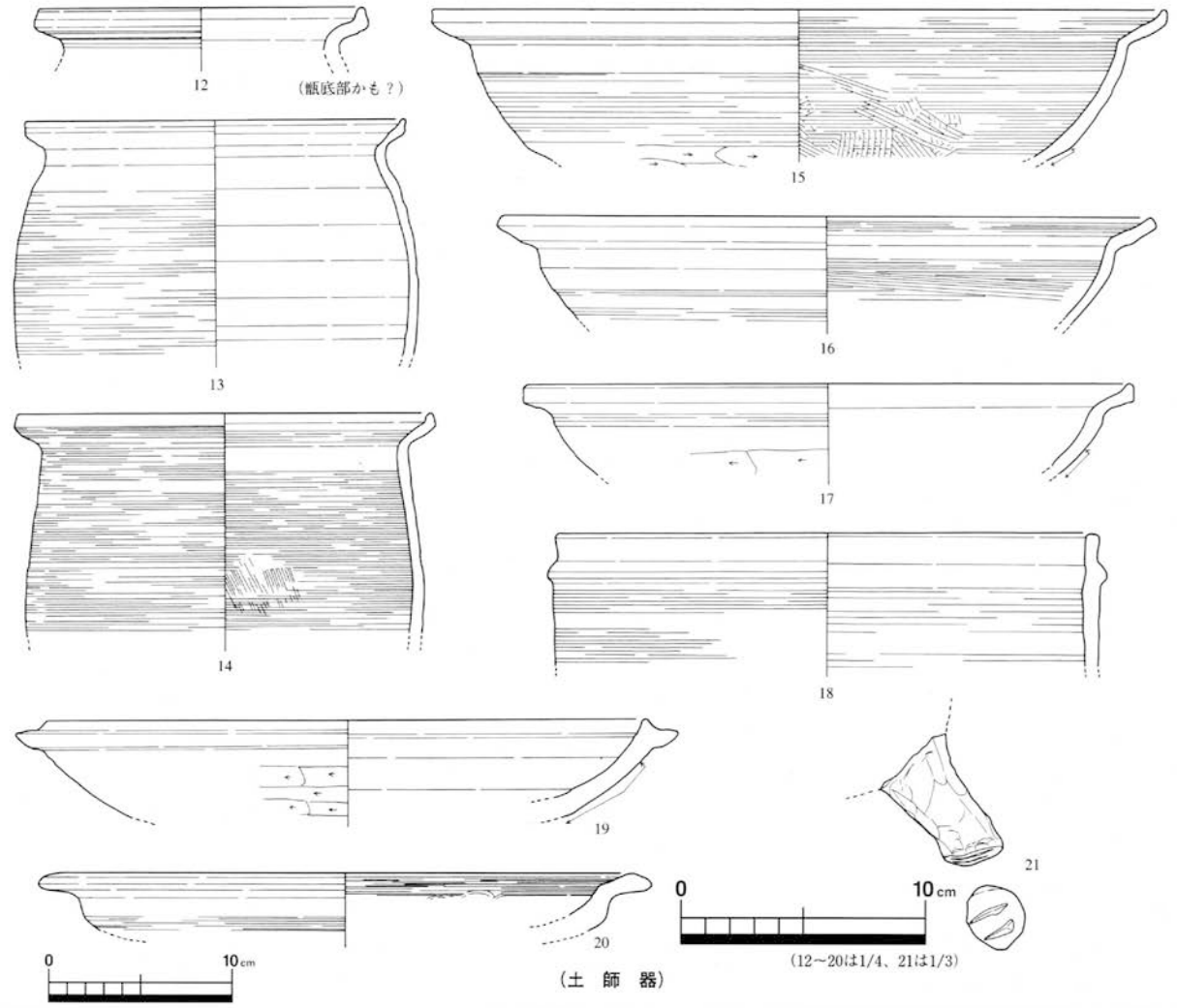
13. 13号土師器焼成坑出土土器（第147～149図）

被熱面や土坑の形態から土師器焼成坑とするのは困難と判断した遺構で、焼土とともに須恵器と土師器が大量廃棄された土坑であると判断される。床面の可能性をもつ面より下層の焼土層を床下焼土層とし、それより上の埋土を埋土一括土器として提示する。

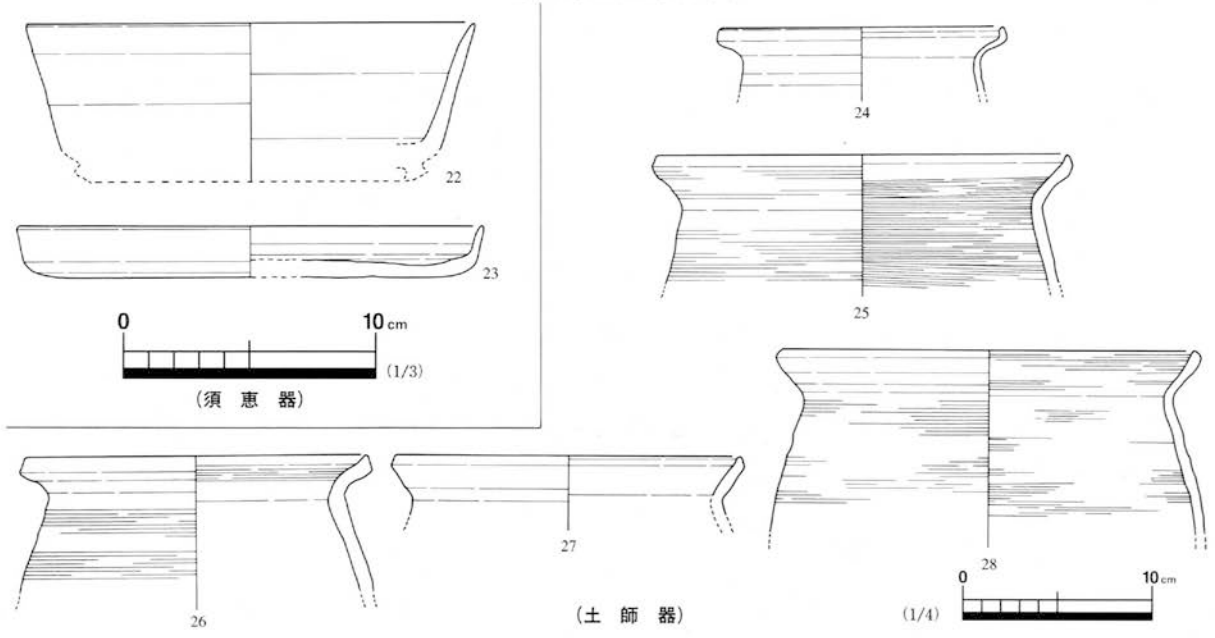
《埋土一括遺物》

須恵器は坏Ｂ身と坏Ａ、小甕、中甕が出土している。出土量は少ないが、坏Ｂ身器形や坏Ａの偏平器形などからⅣ2古期に位置付けられるものと判断する。甕類が比較的まとまって出土しており、短頸壺タイプの11や底部叩き出しに伴う縦軸叩きが肩部付近まで及ぶ12がある。また、９は中甕の胴部であるが、これも底部叩き出しに伴う縦軸叩きを胴部中位付近から施すもので、成形時横軸叩きの当て具はDa類、縦軸叩きはDc類と当て具を変えている事例である。底部叩き出し後、内底面を刷毛調整されており、成形が完了した後の最終工程での調整であると理解できる。当器種は口縁部から内底面までおよそ40～42㎝程度あったものであり、手を差し入れて調整できる深さではある。

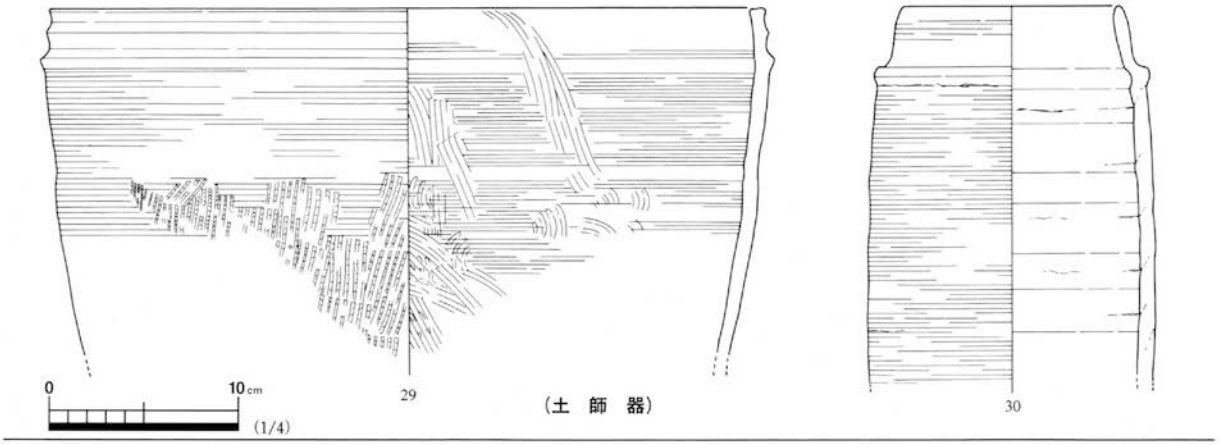
土師器は埦、坏Ｂ身、盤Ａ、台付鉢、小釜、釜、羽釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。また、土師器的



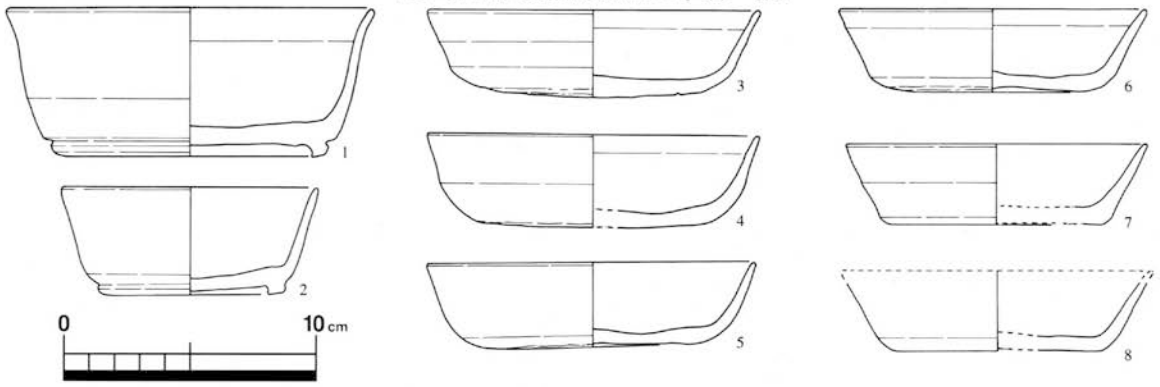
〈12号土師器焼成坑床下〉

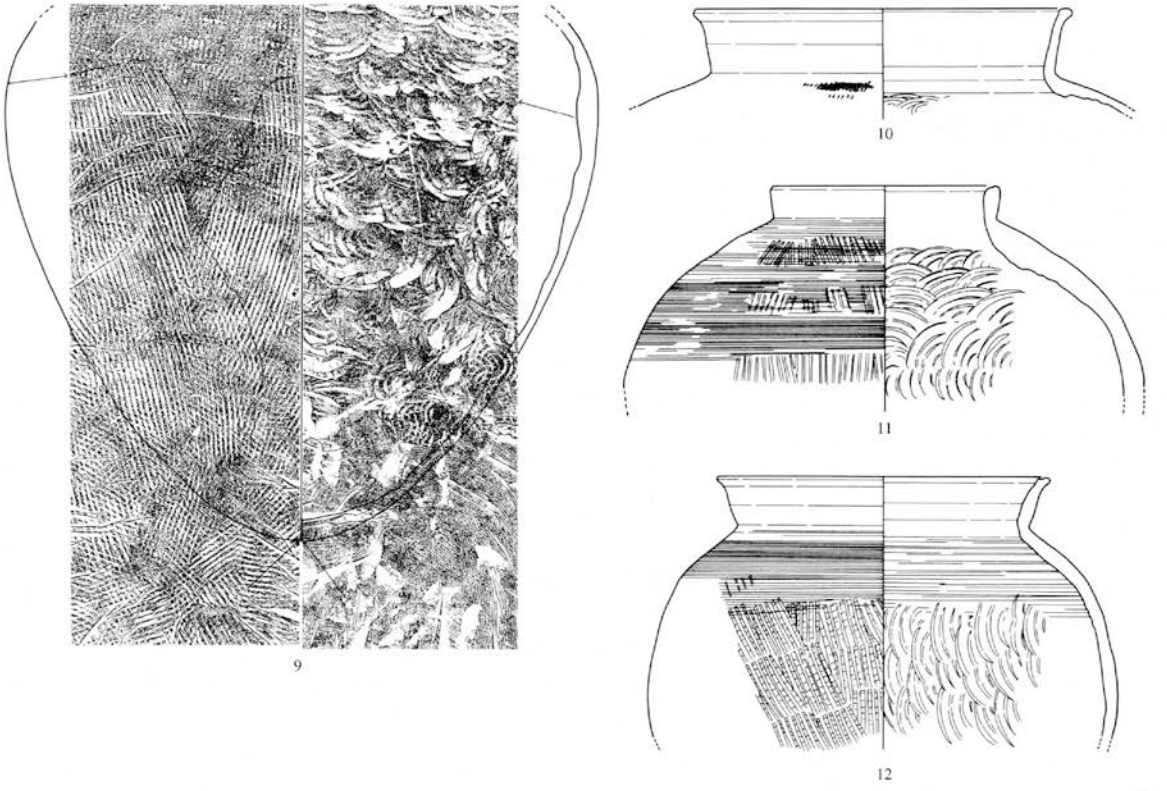


第146図　12号土師器焼成坑出土土器２



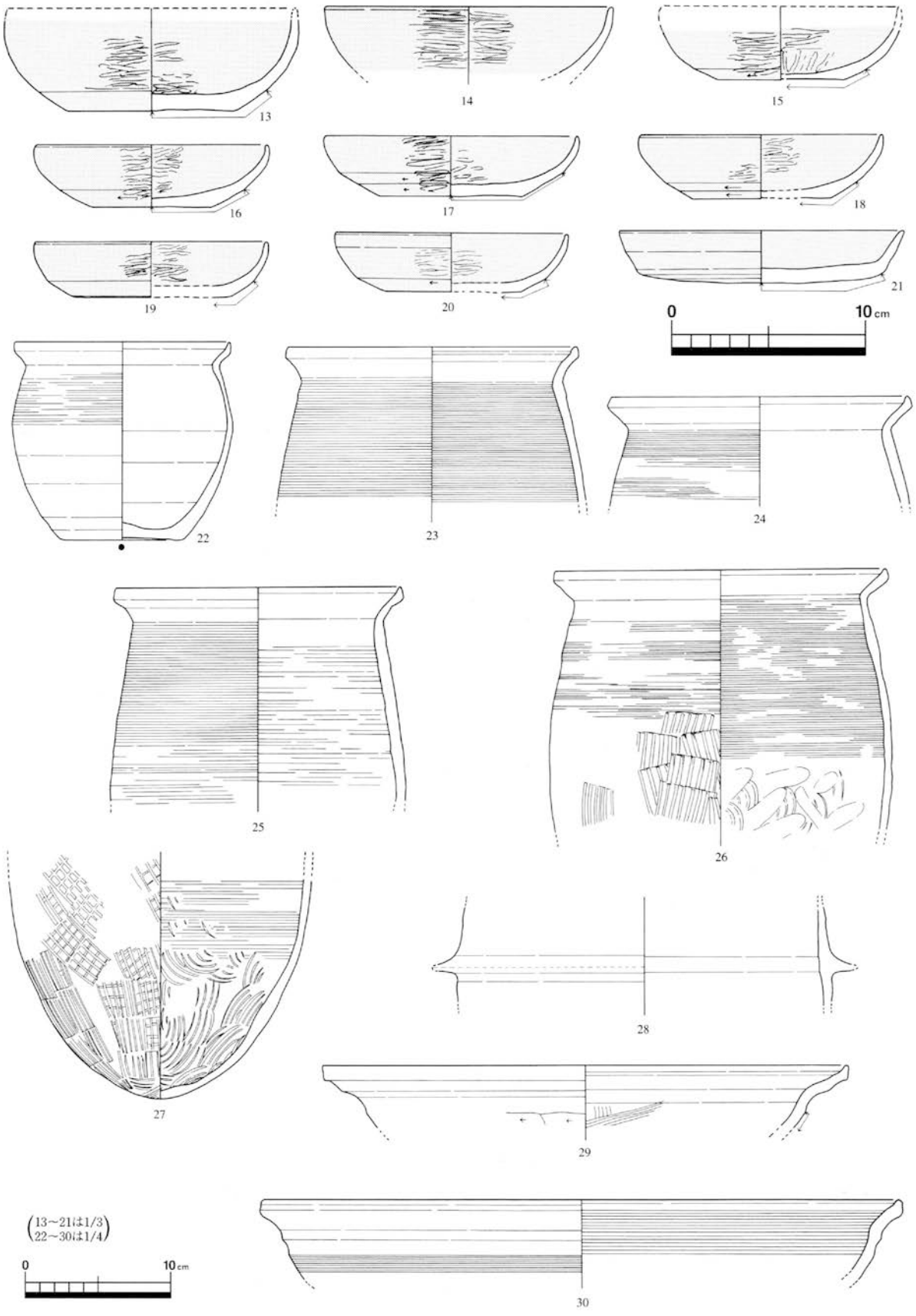
〈13号土師器焼成坑埋土中層一括〉





(1～8は1/3、9～12は1/5)　　(須 恵 器)

第147図　12号土師器焼成坑出土土器３・13号土師器焼成坑出土土器１



(土　師　器)

第148図　13号土師器焼成坑出土土器 2

器形ではなく、須恵器が酸化焔焼成されたもの（6～8）がまとまって出ている。底面ヘラ切りで横ナデ調整、赤彩でない点など当期の土師器食膳具とは異なるが、火色を発色させており、土師器焼成坑での焼成を想定できるものである。17個体まとまって出土していることから考えて、須恵器坏を意識的に土師器質で焼き上げたものだろう。口縁部計測値で示すと下表のとおりで、食膳具3：煮炊具7と、食膳具の率が高い。

食膳具は上記の坏A以外は、全て赤彩である。埦は深身大型の13・14と通常法量をもつ一群がある。大型埦は口径15㎝程度、底部厚手で口縁部が強く内湾する器形を呈し、丁寧に磨き調整を施す。通常法量の埦は口径12～13㎝程度、器高3.1～3.2㎝のもので、偏平気味の器形を呈す。8世紀後半に主体的に存在するタイプで、内外面の磨き調整は丁寧に施され、底面は回転削り調整が施される。盤Aは底部厚手で、体部立ちぎみの器形。底面には回転削りが施される。磨きはなくナデ調整のみ。

煮炊具は釜と鍋が2割以上を占める。小釜は13.5%で、図示できたものは22のみである。口縁端部短くつまみ上げるもので、胴部上半にカキ目が施される。釜は口縁部短めの器形で、口縁端部を僅かにつまみ上げる。底部叩き出しの上端には縦方向削りは施されず、古手の様相をもつ。鍋の口縁端部もほとんどつまみ上げしないものが主体。端部肥厚する程度かそのままの厚さで端面形成するものである。甑は図示できたものが多く、口縁部下に稜を形成するのは同様だが、口縁端部器形や稜形成の仕方に違いがある。おおまかには口縁端部へやや内湾気味となる32と口縁部外傾のまま立ち上がる31・33とに分けられる。後者は大きな口径をもつのに対し、前者は口径小さめで厚手を呈し、カキ目後に胴部下半を叩き成形する。また、底部器形についても、そのまま筒抜けとなる34と脚状に外屈する35に分けられ、いずれにおいても胴部下位付近にカキ目調整後の縦方向削り調整が施される。なお、35の外屈タイプであるが、屈曲箇所の外面に縮み皺が確認でき、脚状に端部を外屈させると同時に屈曲部を絞り込んだことがわかる。積み上げ成形後に倒立させて、回転力を使って作り出したものと考えられる。その他の煮炊具としては、28の羽釜鍔部分の破片、36の台付鉢、37の口縁部欠損する円筒形土器がある。台付鉢は口縁部外反する器形で、口縁部下に2段稜形成する器形。円筒形土器は底部が筒抜けとならない底部のあるものである。底部は厚手で、底面にはロクロ軸の窪み痕、内底面にはナデツケが施される。粘土紐積み痕を内外面に残しており、紐の単位がある程度確認できるものである。

器種	小型埦	坏A	坏B身	盤A	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	合計
口縁計測（○／36）	74	39	2	20	8	50	12	114	101	37	457
占有率	16.2	8.5	0.4	4.4	1.8	10.9	2.6	24.9	22.1	8.1	

第27表　13号土師器焼成坑埋土出土土師器器種構成表

《床下焼土出土遺物》

床下焼土からほとんど遺物が出土しておらず、図示した須恵器坏B身と土師器小釜以外は、ほとんどが破片である。時期は埋土一括資料と差がなく、同じⅣ2古期に位置付けられる。

14. 14号土師器焼成坑出土土器（第150図）

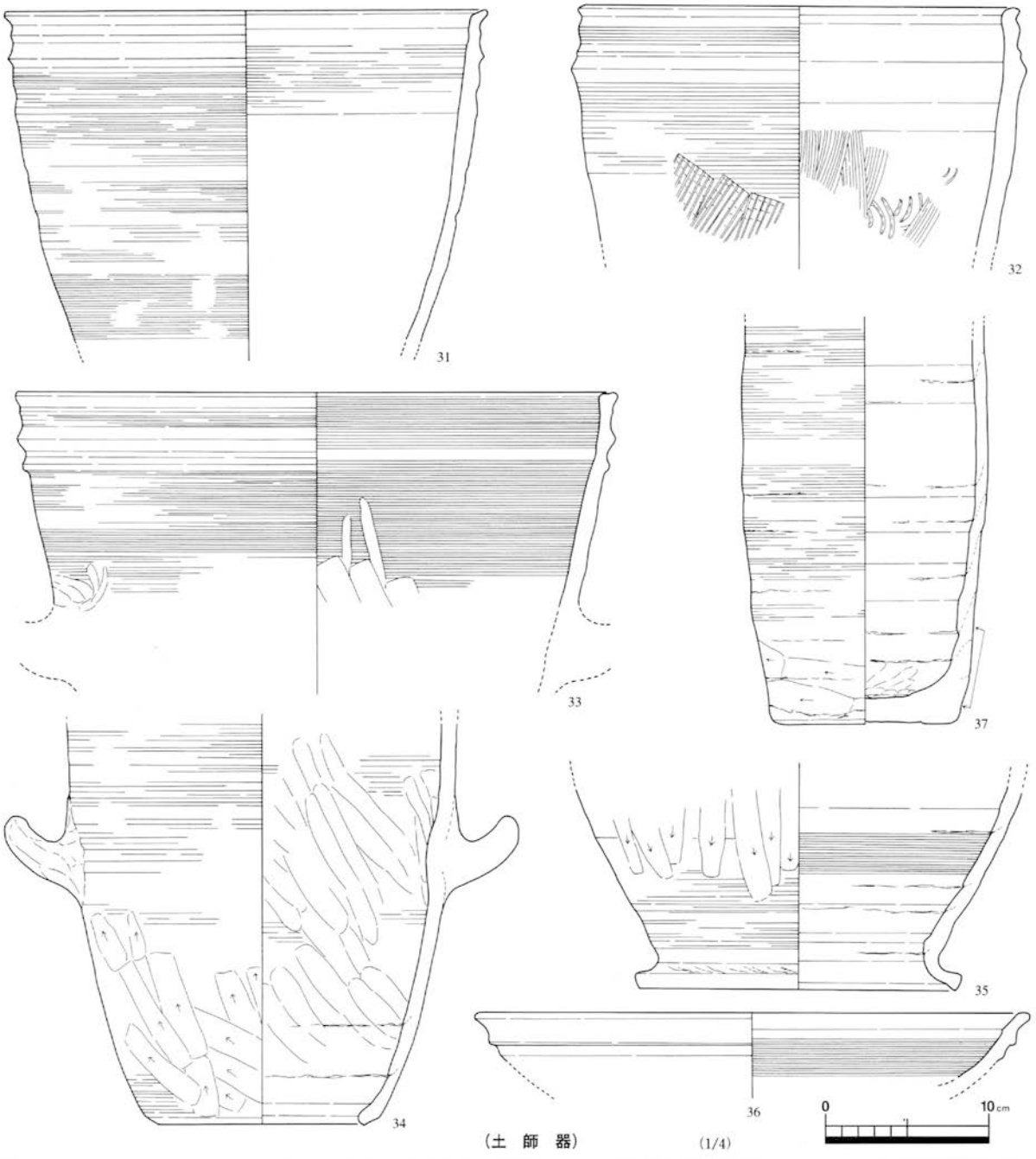
斜面下方側が削平されており、奥壁際のみ残存する焼成坑であるため、出土遺物は少ない。出土遺物の大半は下層ないは床面からのもので、中層より上の遺物は15号土師器焼成坑の灰層であるため、15号焼成坑に帰属させた。床面に一部貼床があるが、床下土坑などはなく遺物の出土はない。

須恵器は図示した盤Aのみで、破片のため確証にかけるが、Ⅳ2古期頃と判断する。

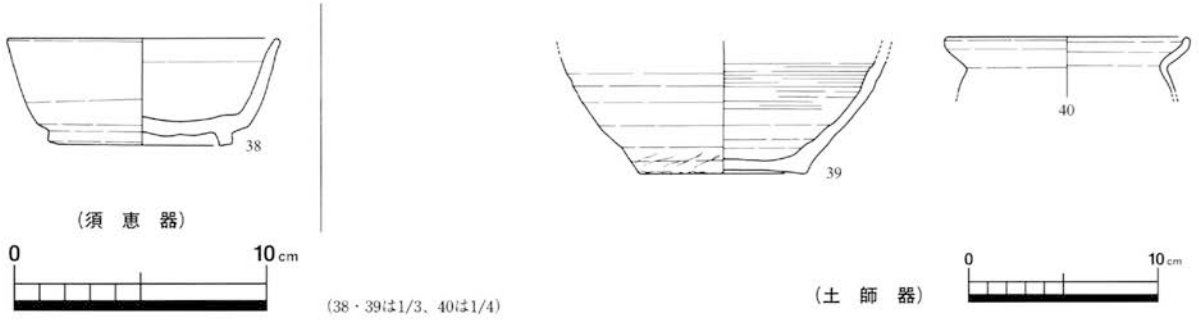
土師器は、食膳具の出土がなく、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑などの煮炊具で占められる。煮炊具では小釜が20/36（小型12、大型8）、釜が25/36、鍋が12/36、甑が11/36、台付鉢が11/36で、この他に管状土錘が1点出土している。小釜、釜、鍋ともに口縁端部をつまみ上げるものはなく、端部肥厚する程度のものである。台付鉢は浅い器高で、口縁部外反し、若干口縁端部を上に突出させて面形成する器形のものである。内底面に当て具痕が残っており、底部を丸く叩いたものと考えられる。

15. 15号土師器焼成坑出土土器（第150・151図）

斜面上方側が削平されており、焼成坑の前部側のみ残存する。このため、焼成坑内出土遺物は少ないが、焼成坑からかき出した灰層が14号焼成坑の上層から中層に厚く堆積しており、その部分からある程度の遺物が出土し

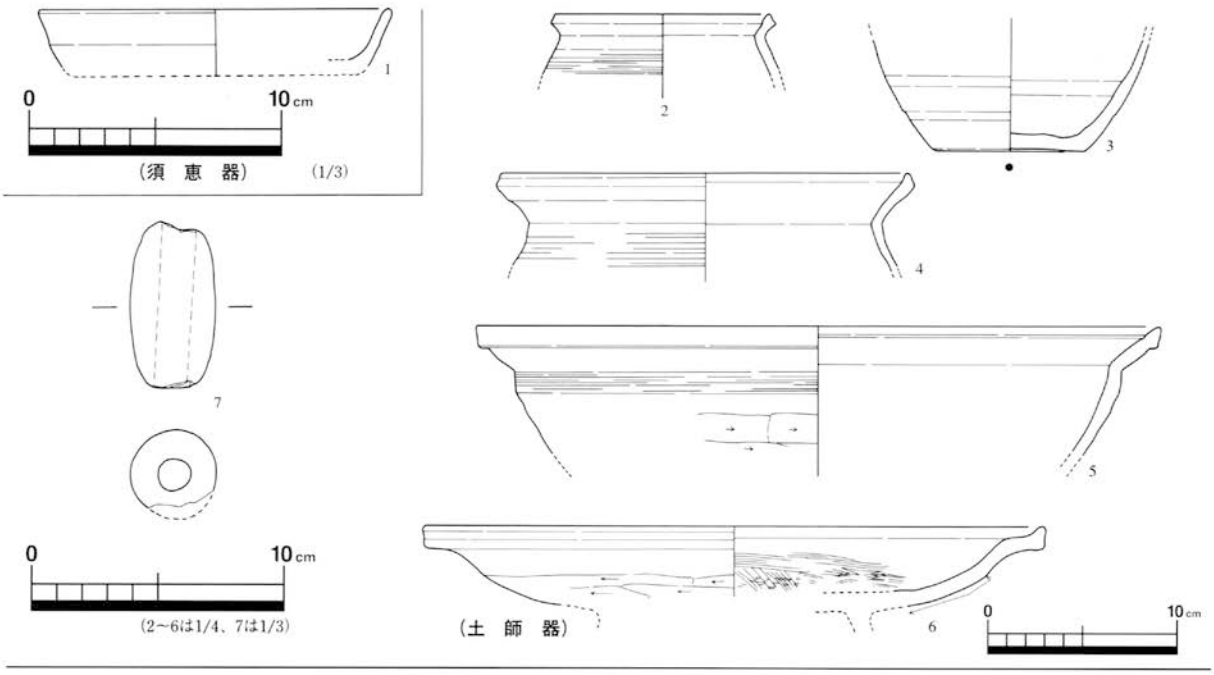


〈13号土師器焼成坑床下焼土〉

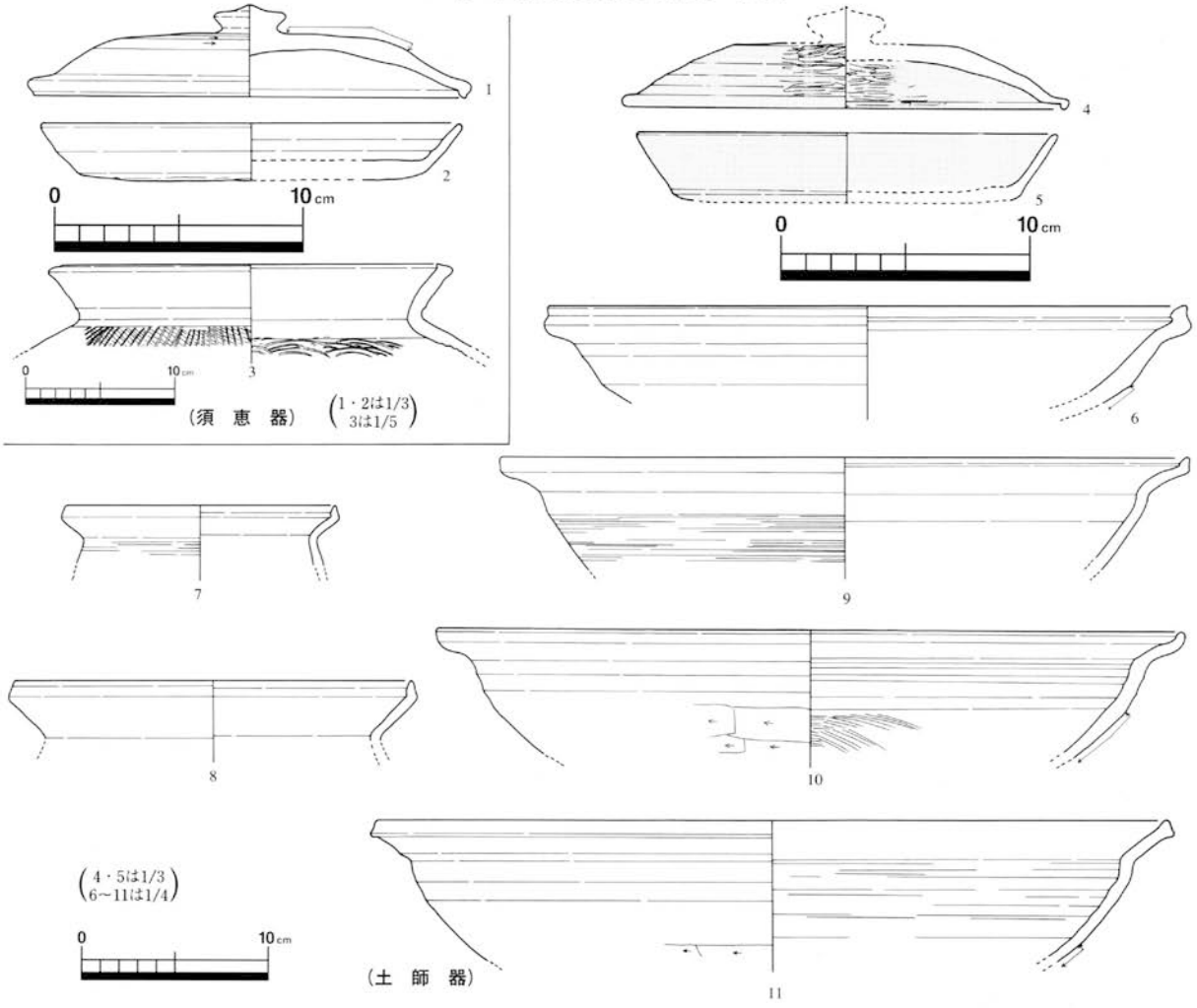


第149図　13号土師器焼成坑出土土器３

〈14号土師器焼成坑床面及び下層〉

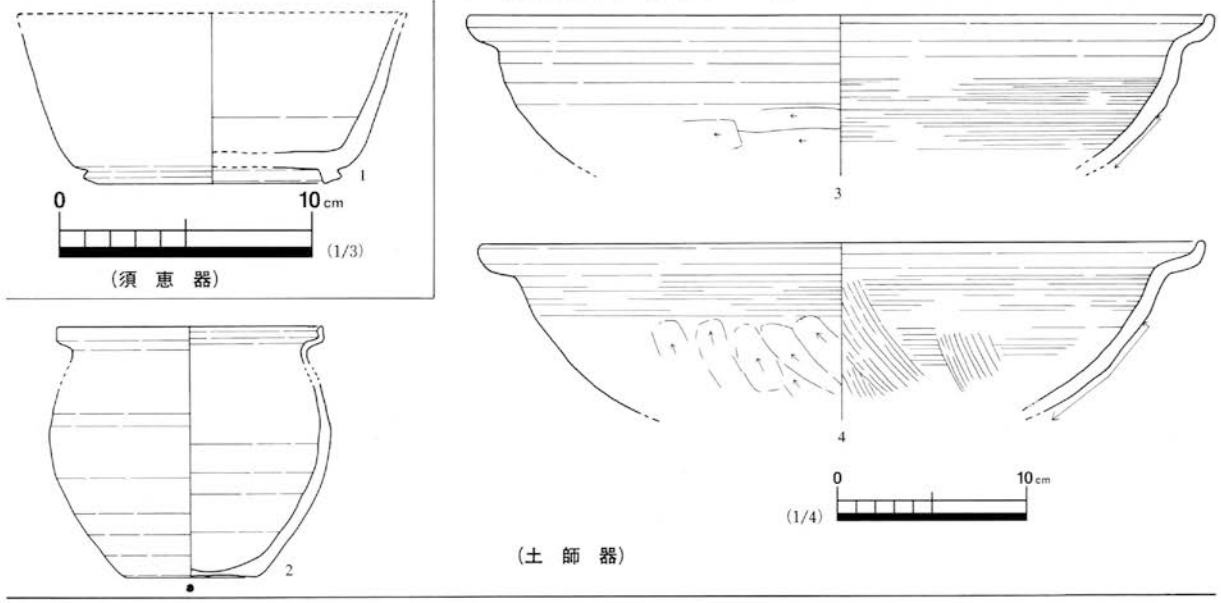


〈15号土師器焼成坑下層及び灰層〉

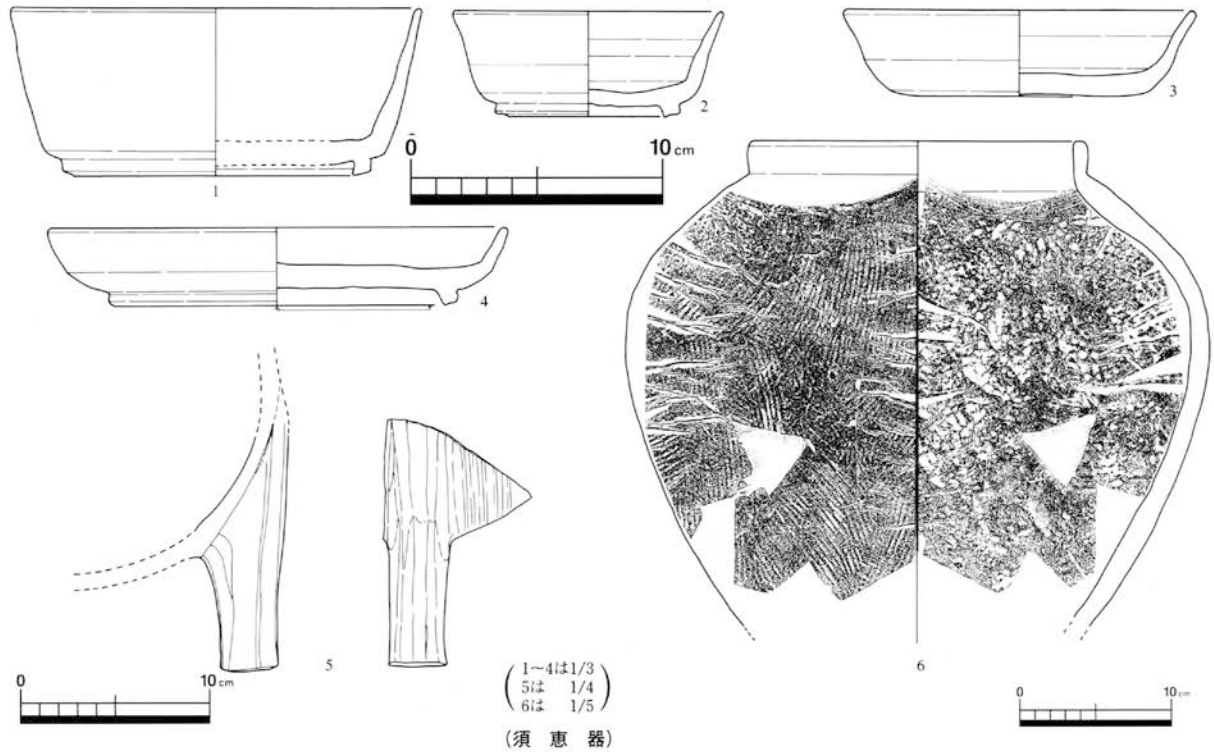


第150図　14号土師器焼成坑出土土器・15号土師器焼成坑出土土器 1

〈16号土師器焼成坑床面及び下層〉



〈17号土師器焼成坑2次床〉



第151図　15号土師器焼成坑出土土器２・16号土師器焼成坑出土土器・17号土師器焼成坑出土土器１

ている。床面は地山床のままであるため、床下遺物は存在しない。

須恵器は坏Ｂ蓋と盤Ａ、中甕が出土している。坏Ｂ蓋のつまみ形や口縁端部器形、盤Ａの体部外傾器形などからⅣ2新期からⅤ1期頃と判断する。中甕は短頸の口頸部をもつ８世紀的器形で、肩の張る器形と思われる。

土師器は坏Ｂ蓋、盤Ａ、盤Ｂ、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器の他、円盤形土製品が出土している。口縁部計測値で示すと以下の表のとおりで、釜と鍋を主体として構成される。食膳具は赤彩のみで、坏Ｂ蓋には内外面磨きを丁寧に施す。口縁端部の折り曲げは微弱で、端部が丸くなる。盤Ａは体部が長く外傾する器形で、内外面なで調整である。煮炊具では小釜、釜ともに口縁端部をつまみ上げる器形で、比較的薄い作りをする。鍋でもしっかりとつまみ上げる器形（９）が存在するが、端部肥厚するだけの11や内湾気味となる10が存在する。台付鉢は鍋よりも浅く、厚手であることが特徴である。他に、円盤形土製品があるが、12は切り取り円盤状のもので、内面側にロクロナデ痕跡が見られる。径10㎝程度の大型円盤であり、対応する器種が思い当たらないが、口頸部接合のための切り取り円盤であることは間違いなかろう。13も円盤形の土製品だが、径19㎝程度を測ると思われる大型円盤で、放射状の線刻が施される。断片であるため円盤形となるかもわからないもので、用途不明の線刻円盤としておく。

器種	坏Ｂ蓋	盤Ａ	盤Ｂ	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	円筒形	合計
口縁計測（○／36）	7	5	9	18	28	6	47	37	2	159
占有率	14.4	3.1	5.7	11.3	17.6	3.8	29.6	23.3	1.3	

第28表　15号土師器焼成坑埋土出土土師器器種構成表

16. 16号土師器焼成坑出土土器（第151図）

当焼成坑の上部が削平を受けているため、遺物の出土は少なく、出土遺物のほとんどは床面近くのものである。須恵器では坏Ｂ身１点、土師器では小釜６個体（小型35/36、中型6/36）、鍋６個体（10/36）、そして土師器破片が出土している。須恵器器形からⅤ1期頃と判断する。

土師器は、小釜が口縁端部を長めに直立させる器形で、胴部はナデ調整のみ。鍋は頸部で外屈後端部を内湾させるように立ち上げる。４の鍋の胴部外面には縦方向の削りが施されており、特徴的である。この時期に一般的となる釜の胴部中位付近での縦方向削りが影響したものの可能性をもつ。

17. 17号土師器焼成坑出土土器（第151～153図）

床面が地山のままであるため、床下土坑などはもたないが、２枚床面があり、１次床出土土器と２次床出土土器とに分けられる。

《２次床出土遺物》

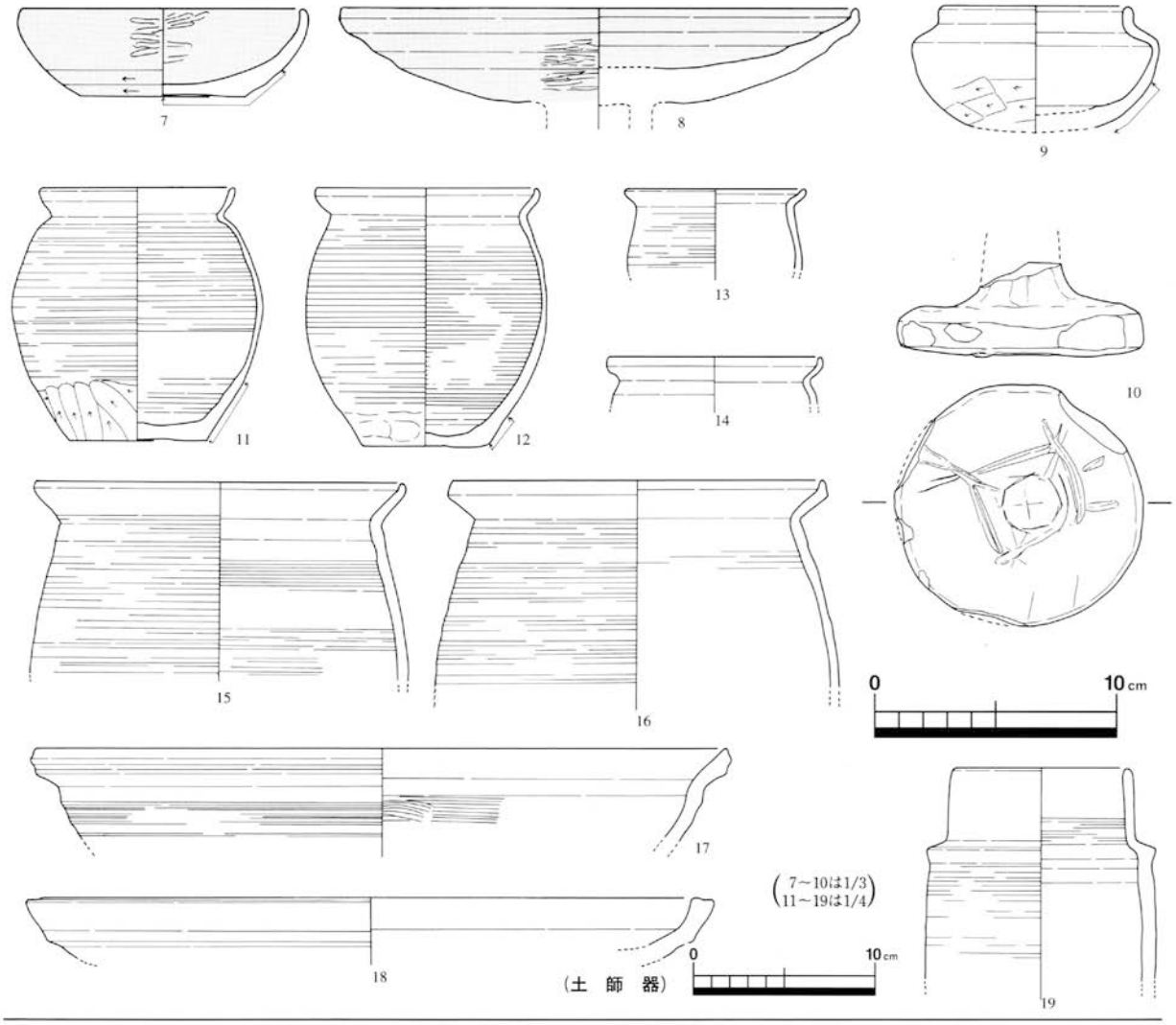
床面直上に薄く灰層が残っており、土器が多く遺存している。

須恵器は坏Ｂ蓋・身、坏Ａ、盤Ｂ、小甕の他に特殊な足付き瓶が出土している。坏Ｂ身の底部厚手の器形や坏Ａの偏平器形などからⅣ2古期に位置付けられるものと判断する。小甕（６）は短頸壺型のもので、外面は通常の平行線文叩きが使われるが、内面には特殊な車輪文状の当て具が使われている。やや崩れた形の車輪文で、格子状でもある。北陸で車輪文当て具の出土はなく、注目される。なお、特殊瓶（５）についてだが、胴部が横瓶ないしはフラスコ型瓶のような倒置型をしており、その側面に直立する棒状の足が付く。足の端部に特別な造作はないが、鳥形瓶など動物を模した特殊瓶と考えるのが妥当だろう。

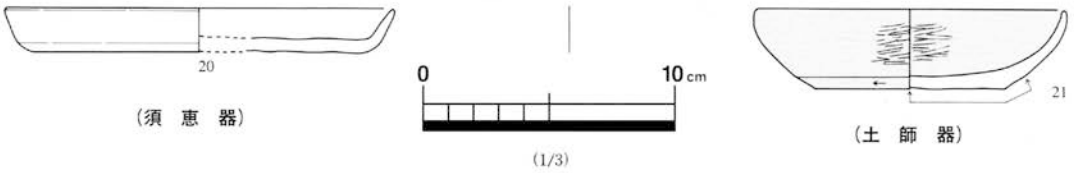
第152図　小甕内面の車輪文状当て具（1/2）

土師器は、埦、坏Ａ、坏Ｂ身、高盤、小型壺、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器の他、土製馬形、置き竈、当て具状の土製品、円盤形土製品など特殊品が出土している。口縁部計測値は以下の表のとおりで、食膳具１に対し煮炊具９程度で構成される。食膳具は全て赤彩。埦（７）は口径11.5㎝、器高3.6㎝で、やや深身を呈し、内外面ともに丁寧に磨かれている。高盤（８）は底部厚く口縁端部をしっかりと折り曲げるもの。内外面の磨きも丁寧で古い様相を止める。小型短頸壺（９）は底面手持ち削りを施す須恵器的な器種で、赤彩は施されていない。酸化焔焼成のため、土師器に入れたが、須恵器器種の可能性が高い。煮炊具は小釜の残存率が高く、それが

占有率の高さに現れている。小釜の口縁部器形は口縁端部を僅かにつまみ上げるもの（11・12）とつまみ上げずにやや内湾するもの（10）とに分けられる。内外面ともにカキ目調整が施され、胴部下位に削りやナデツケが入る。底面には切り離し痕がなく、成形台の軸の窪みが丸く出ている。出現期の小釜にはこのような切り離し痕をもたないものが定量あるが、この時期のものとしては異例である。釜の胴部も内外カキ目が入念に入るもので、口縁端部をつまみ上げる器形が主体をなす。端部へ肥厚する厚手の15とやや薄手に作る14がある。鍋は口縁部が短く外反するだけで、厚手を呈す。円筒形土器（19）は有段口縁のもの。台付鉢は厚手の鉢型器形のものである。特殊土器は破片ばかりで、図示できたものは当て具状土製品（17）のみである。円盤状を呈す当たり面はほぼ完

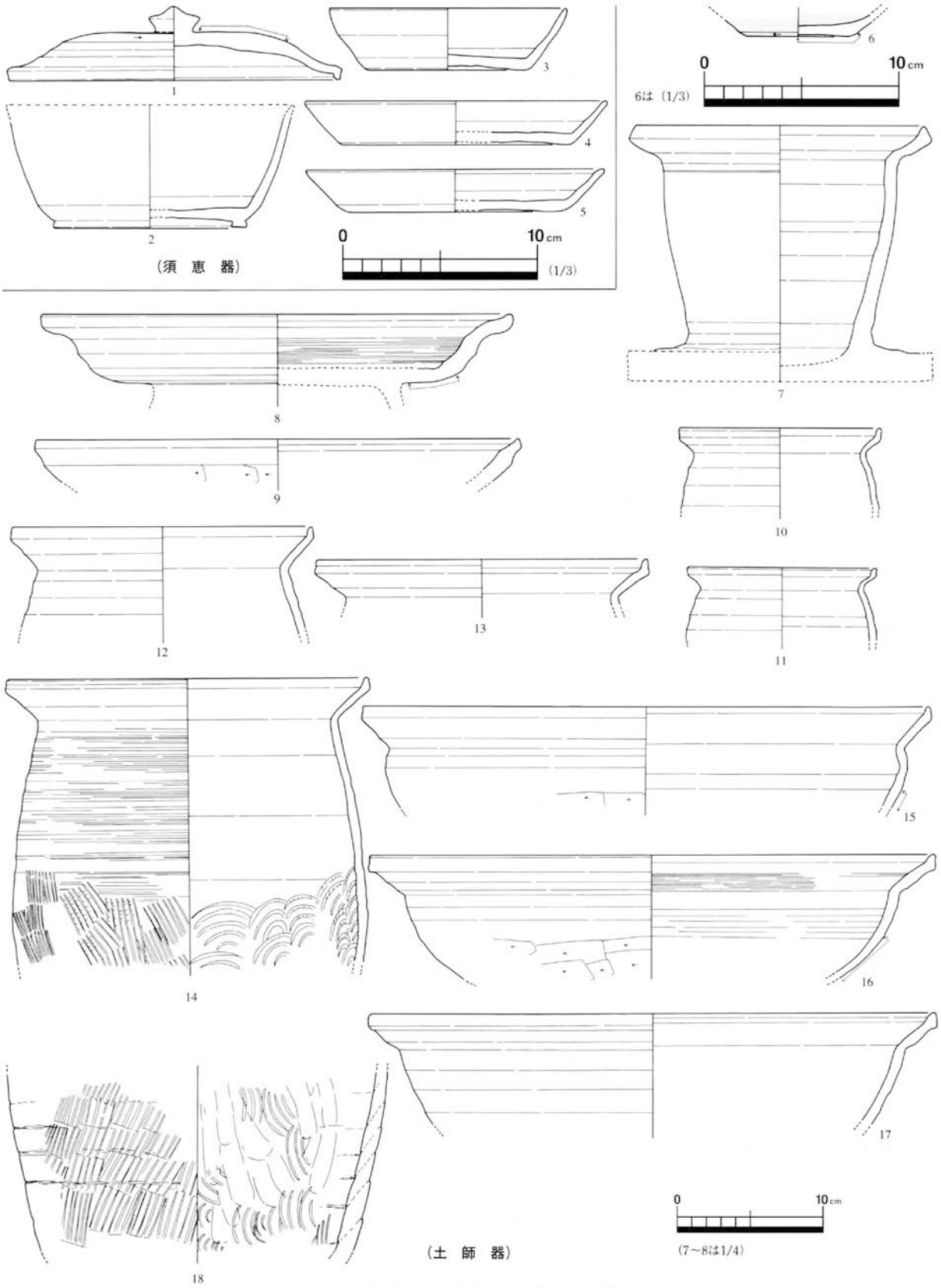


〈17号土師器焼成坑1次床〉



第153図　17号土師器焼成坑出土土器2

〈18号土師器焼成坑埋土〉



第154図　18号土師器焼成坑出土土器

存するが、持ち手部分を欠損する。当たり面径が10.4cm、厚さが2.6cmを測るもので、当たり面には線刻が施される。中心に「十」をもつ円が描かれ、その回りを方形に区画する。不明文様であり、実用的なものとは異なるだろう。窯祭祀に伴う成形道具模造品と判断する。

《1次床出土遺物》

2次床と1次床との間層が薄いため、遺物の出土は少なく、図示した須恵器盤Aと赤彩土師器埦以外では、土師器釜破片が数点出土する程度である。須恵器の時期はⅣ2古期ないしはそれより溯る時期。赤彩埦は比較的偏平で、古手の器形を呈す。

器種	小型埦	坏A	杯B身	高盤	小型壷	台付鉢	小釜小	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○/36)	15	2	4	1	9	14	92	37	16	3	24	217
占有率	6.9	0.9	1.8	0.5	4.1	6.4	42.4	17.1	7.4	1.4	11.1	

第29表　17号土師器焼成坑埋土出土土師器器種構成表

18. 18号土師器焼成坑出土土器（第154図）

当焼成坑と重複する9号土師器焼成坑が、当焼成坑埋土を掘りくぼめて構築されているため、焼成坑の上面が一部破壊を受けている。床に一部貼床があり、その床下に土坑が掘られているため、出土土器は埋土及び床面等から出土するものと床下土坑のものとに分けられる。しかし、床下土坑から出土する土器は赤彩埦6/36、小釜10/36、釜2/36のみで、図示したものもないため、説明では省くこととする。

焼成坑埋土及び焼成坑内灰層から出土する土器について述べるが、まず、須恵器については、坏B蓋・身、坏A、盤Aがある。各器種の器形からⅤ1期頃に位置付けられるものと考える。

土師器は、埦、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器。そして、須恵器の鉢F状器形をもつ鉢が出土している。口縁部計測値で示すと、以下の表のとおりで、小釜と釜、鍋でほぼ構成される。食膳具は赤彩の埦底部が出土しているだけで、全体的に出土量が極めて少ない。埦の底面には削りが施される。煮炊具は小釜、釜ともに口縁端部つまみ上げされるものばかりで、釜の器肉は薄く作られる。14の釜胴部中位の叩き成形上端には縦方向削りはなく、内面当て具にはDc類が使われている。鍋の口縁端部に長くつまみ上げしたものはなく、端部を若干つまみ上げして面形成するものが主体を占める。胴部下半は手持ち削り。18は甑と思われる胴部破片で、粘土紐積みに伴って叩き成形が施されるものである。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っており、粘土紐積み上げの単位で横軸にそろって叩きが施されているのが観察できる。成形叩き痕をそのまま残す事例と言える。粘土紐の圧着は弱く、十分に延ばしきっていない。内面には当て具を切って縦方向のナデツケが施されている。8・9は台付鉢で、前者は口縁部外反する鍋口縁のような器形を呈す。器肉厚手で、底面は平坦に作られる。9は体部外傾のまま口縁部に至る器形で、口縁部外反の弱い器形である。7は須恵器鉢Fに類似する器形で、特殊鉢としたものである。大きな円盤状を呈す底部から筒状の体部、そして短く外屈する口縁部に至るもので、体部に沈線を施す。口縁端部の器形が煮炊具の釜や鍋に類似し、この点だけが須恵器器形とは異なるが、他の器形特徴は須恵器と同様である。

器種	台付鉢	小釜小	釜	鍋	甑	特殊鉢	合計
口縁計測(○／36)	17	31	40	24	2	3	117
占有率	14.5	26.5	34.2	20.5	1.7	2.6	

第30表　18号土師器焼成坑出土土師器器種構成表

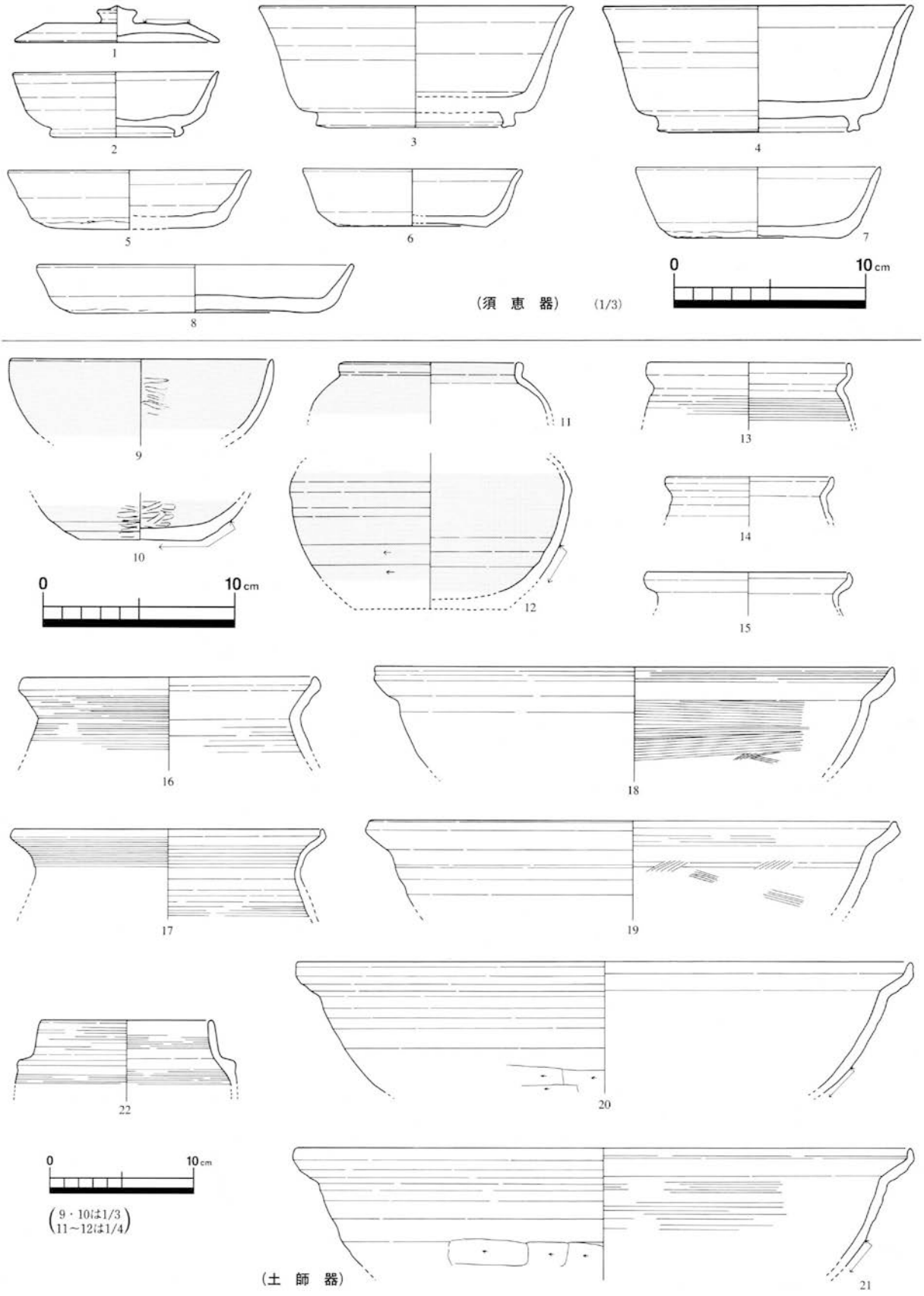
19. 19号土師器焼成坑出土土器（第155・156図）

床下に土坑等を掘る訳ではないが、貼床下に埋土があり、遺物が定量混在しているため、床上の灰層及び埋土出土遺物と、貼床下出土遺物とに分けて述べる。

《埋土及び灰層出土遺物》

須恵器は坏B蓋・身と坏A、盤Aが出土している。埋土上層出土が多いが、下層出土の2・3の坏B身器形を考えれば、12号土師器焼成坑とほぼ同時期のⅣ2新期とするのが妥当だろう。なお、6・7は酸化焔焼成の坏Aで、土師器焼成坑で焼成された可能性もある。

〈19号土師器焼成坑埋土及び灰層〉



第155図　19号土師器焼成坑出土土器 1

土師器は埦、坏B身、盤A、高盤、小型壷、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。口縁部計測値での数量は以下のとおりで、食膳具1：煮炊具9で構成される。食膳具は赤彩するもののみで、埦はやや深身の器形を呈すが、古手の器形のものである。磨きは丁寧で、底面に削りを伴う。小型壷（11・12）も赤彩品で、小型短頸壷器形を呈すものである。体部ヨコナデ。底面削り調整。外面のみならず、内面にも赤彩が施される。坏B蓋には内外面磨きを丁寧に施す。煮炊具では小釜、釜、鍋が25～30%と均衡する数値をもつ。いずれの器種も口縁端部に折り曲げやつまみ上げの確認できるものが多く、13・17・20・21のように、口縁端部を薄く長く立ち上がらせる器形が目立つ。円筒形土器は有段式の口縁部をもつ。

《貼床下土出土遺物》

須恵器は坏B蓋と坏Aが出土している。坏B蓋の偏平器形やつまみ形、坏Aの厚手で偏平な器形はⅣ2古期と位置付けできる。

土師器は埦、坏B蓋、小釜、釜、鍋、甑が出土している。口縁部計測値では坏B蓋8/36、小釜小型11/36、小釜大型8/36、釜16/36、鍋19/36であり、他のものは口縁部欠損する破片である。食膳具は赤彩で、埦器形は体部内湾の深身で、埋土と同様の器形を呈する。釜は口縁端部つまみ上げせずに、端部面形成する器形。甑は胴部たたき成形痕を残す底部付近の破片である。

器種	小型埦	坏B身	高盤	小型壷	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測（○／36）	23	3	5	6	60	16	79	88	9	9	298
占有率	7.7	1.0	1.7	2.0	20.1	5.4	26.5	29.5	3.0	3.0	

第31表　19号土師器焼成坑埋土出土土師器器種構成表

20. 20号土師器焼成坑出土土器（第157・158図）

当焼成坑に13号土師器焼成坑が重複しており、焼成坑の大半の埋土がなくなっている。一部焼成坑前壁付近のみ残存しており、その部分に遺存する灰層中から土器が出土している。出土量は極めて少なく、図化したものが大半である。これを埋土下層及び灰層出土土器とし、以下に提示する。また、20号土師器焼成坑灰層は斜面下方へ続いており、25号土師器焼成坑の埋土上層に黒色灰として堆積している。焼成坑内灰層とこの土層間で、接合関係も認められることから、この遺物群を20号土師器焼成坑の下方灰層と捉え、ここで提示する。ただし、20号土師器焼成坑の上に存在する13号土師器焼成坑の遺物も混在する可能性や隣接する11号・12号土師器焼成坑の廃棄遺物も混在する可能性があり、厳密には1基の焼成坑の廃棄土層と位置付けられない可能性もあることをあらかじめ断っておく。25号土師器焼成の時期を考えれば、20号焼成の2次的流込みと11号焼成灰が有力だろう。

《埋土下層及び灰層出土遺物》

須恵器は坏Aと盤A、盤Bが出土している。坏Aの偏平器形、盤Aの底部の厚さなどから考えて、Ⅳ2古期とするのが妥当だろう。なお、重複する13号土師器焼成坑も同時期のものである。

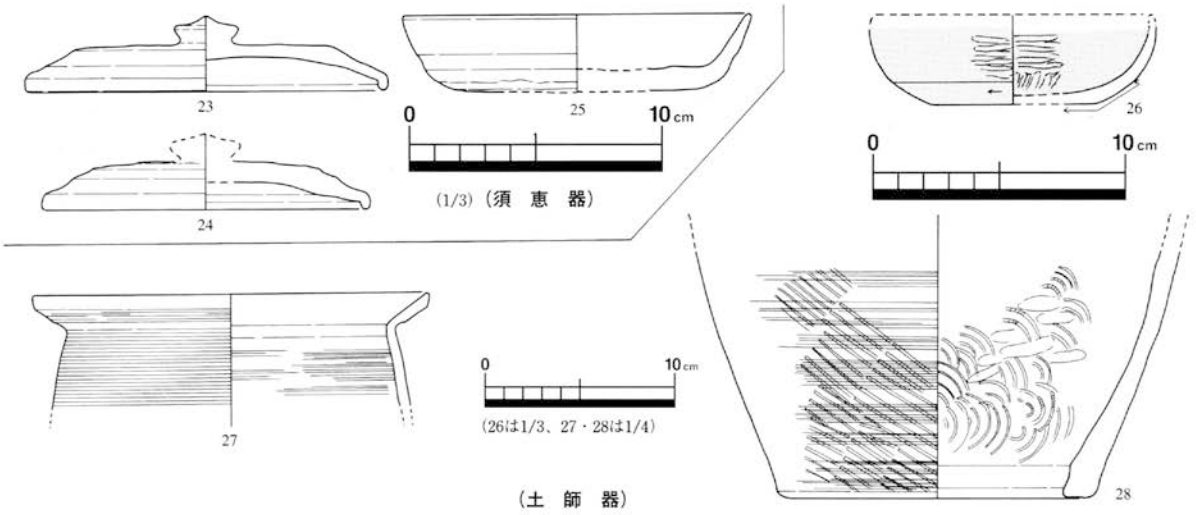
土師器は赤彩坏B身、小釜、釜、鍋、甑が出土しているが、出土量は極めて少なく、口縁部計測値で示し得たものは小釜10/36、釜21/36、鍋12/36、甑3/36である。煮炊具器種は全体的に器肉厚いものが主体的であるのが特徴と言える。口縁部器形は釜で端部が若干上につまみ上げる器形が目立つが、鍋の口縁部は端部つまみ上げをもたず、面形成するのが多い。

《焼成坑下方堆積灰層（25号土師器焼成坑埋土上層灰）出土遺物》

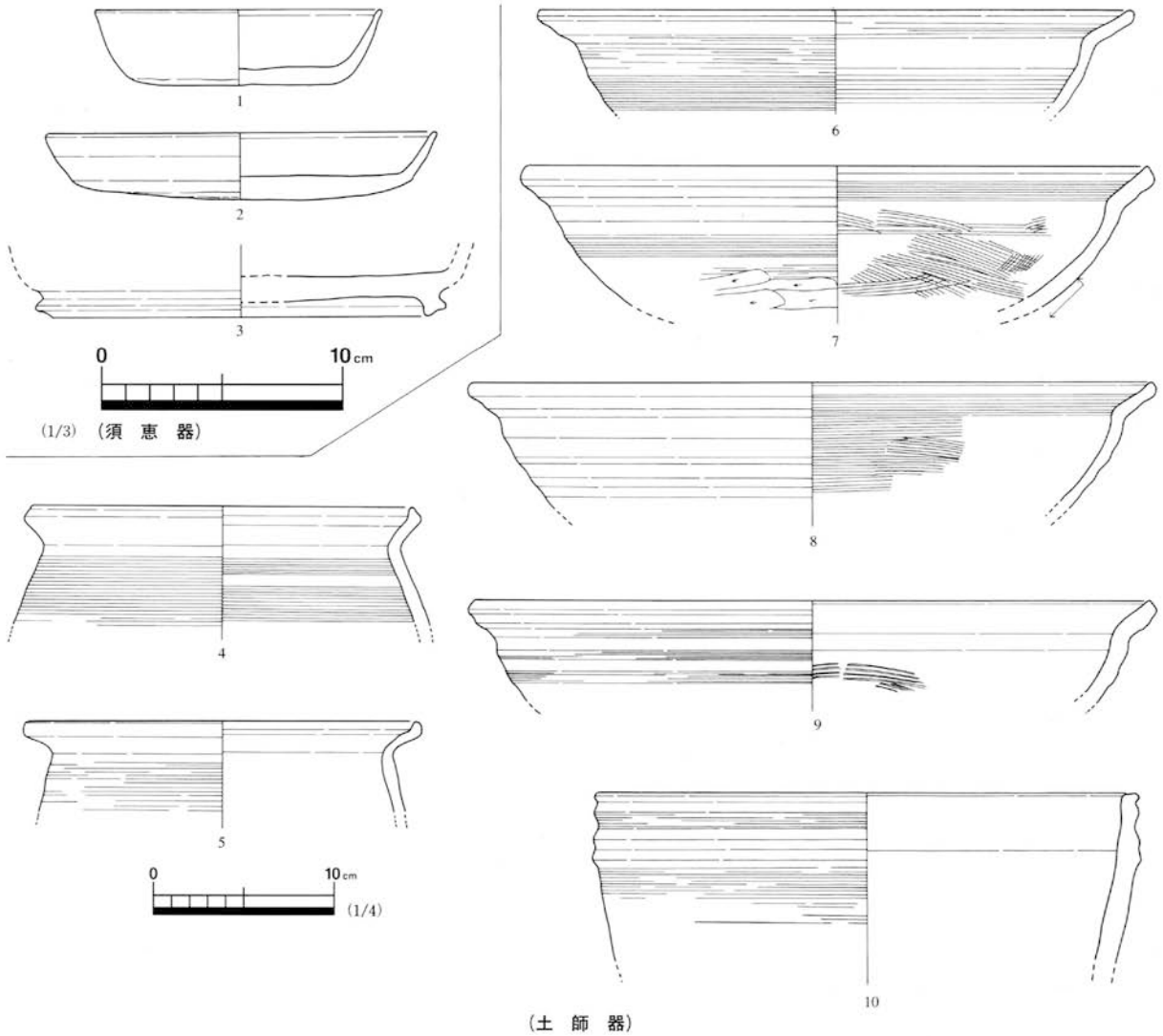
須恵器は坏B蓋、坏A、盤Aが出土している。やや時期幅があるが、Ⅳ2古期からⅣ2新期の中で収まるものと考えている。

土師器は埦、坏A、小型壷、小釜、鍋、甑が出土している。口縁部計測値で示すと、埦3/36、小型壷9/36、小釜21/36、釜24/36、鍋21/36、甑3/36の構成となる。食膳具はいずれも赤彩で、17の埦は19号焼成坑同様、内湾器形を呈す。16の坏Aは底面ヘラ切りの須恵器技法・器形で、Ⅳ2古期の器形を呈す。須恵器が赤彩されて土師器として焼かれたものだろう。他に赤彩する器種として小型短頸壷がある。19号焼成坑出土のものと同様の器形である。煮炊具は、小釜・釜ともに口縁端部が短くつまみ上げる器形のものである。釜（22）の胴部下半叩き出しの上端部分を縦方向の削りが施されている。鍋は口縁部内面端部に低い段をもつもの（24・25）があるが、端

〈19号土師器焼成坑床下土坑〉

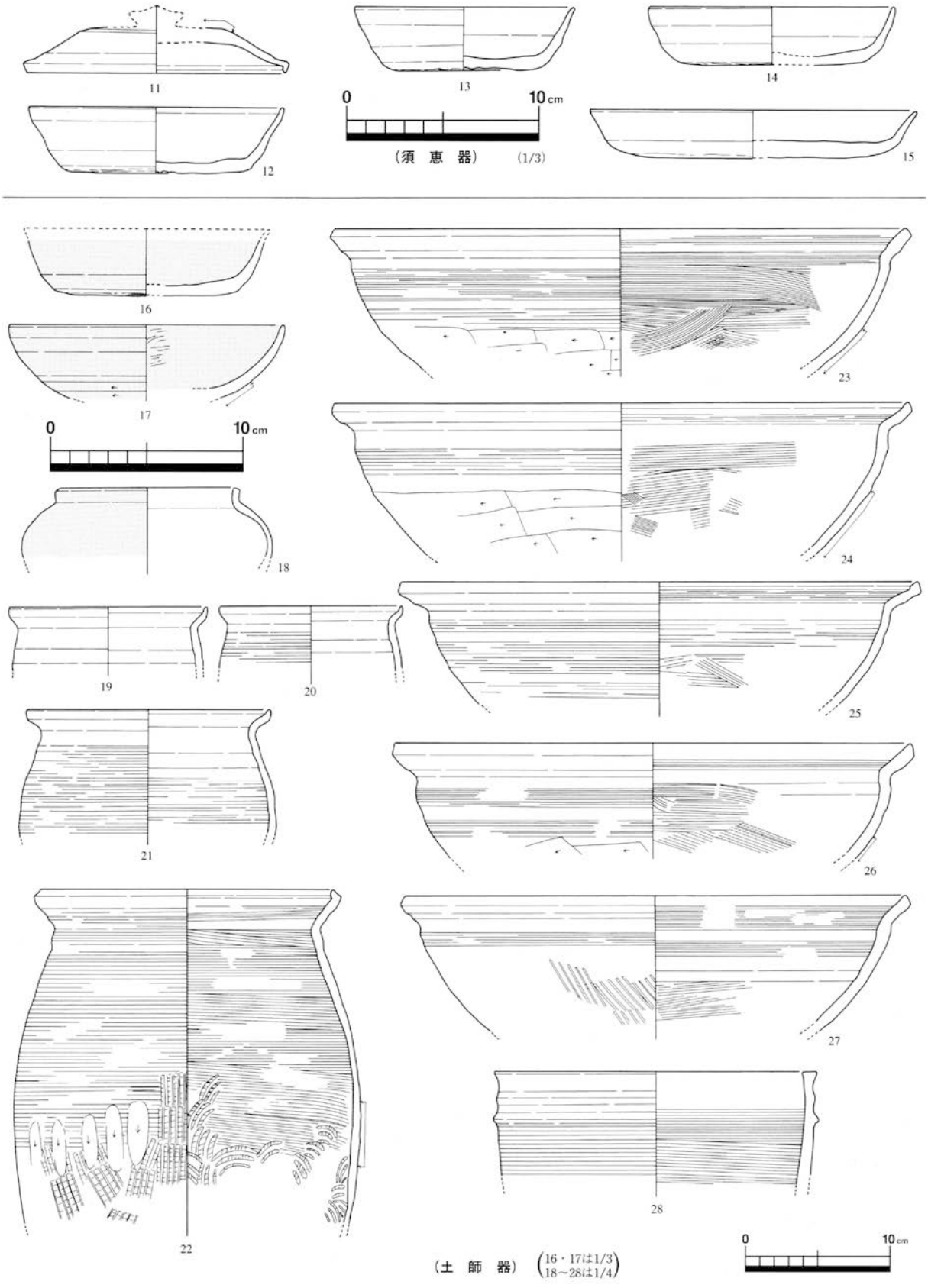


〈20号土師器焼成坑下層及び灰層〉



第156図　19号土師器焼成坑出土土器・20号土師器焼成坑出土土器 1

〈20号土師器焼成坑下方灰原〉



第157図　20号土師器焼成坑出土土器 2

部へ若干肥厚する程度のものが主体的である。また、厚手で深身を呈し、胴部下半に叩きを施す27が確認される。10号土師器焼成坑で検出されているものと同様のタイプである。

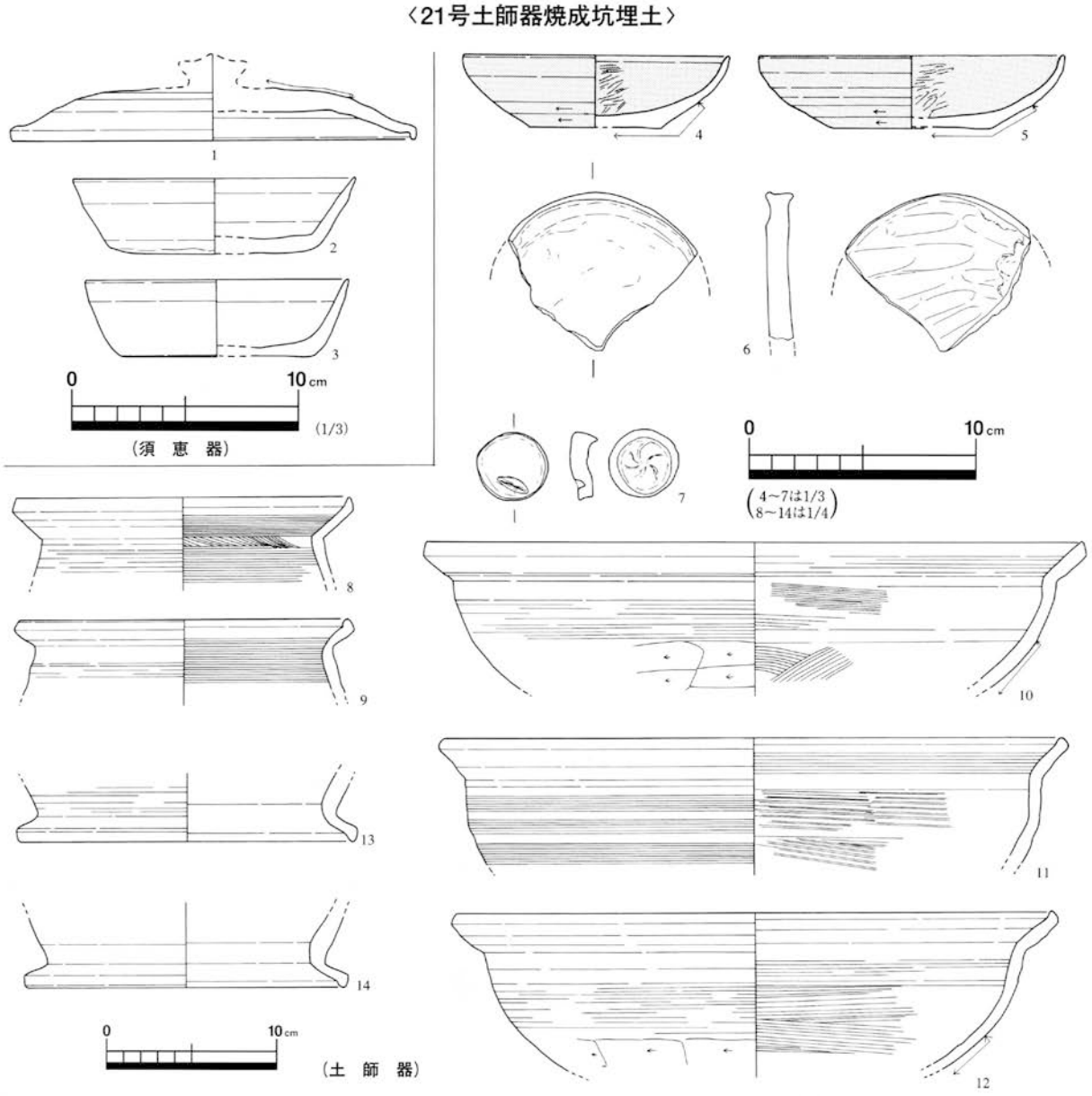
21．21号土師器焼成坑出土土器（第158図）

当焼成坑は、25号土師器焼成坑埋土上に築かれる焼成坑である。25号焼成坑埋土上にはさらに20号土師器焼成坑のものと思われる灰層が堆積しており、その上に床を構築する。床土出土の土器も20号土師器焼成坑灰層へ帰属しているため、当焼成坑に帰属するものは、埋土中の遺物である。

《埋土出土遺物》

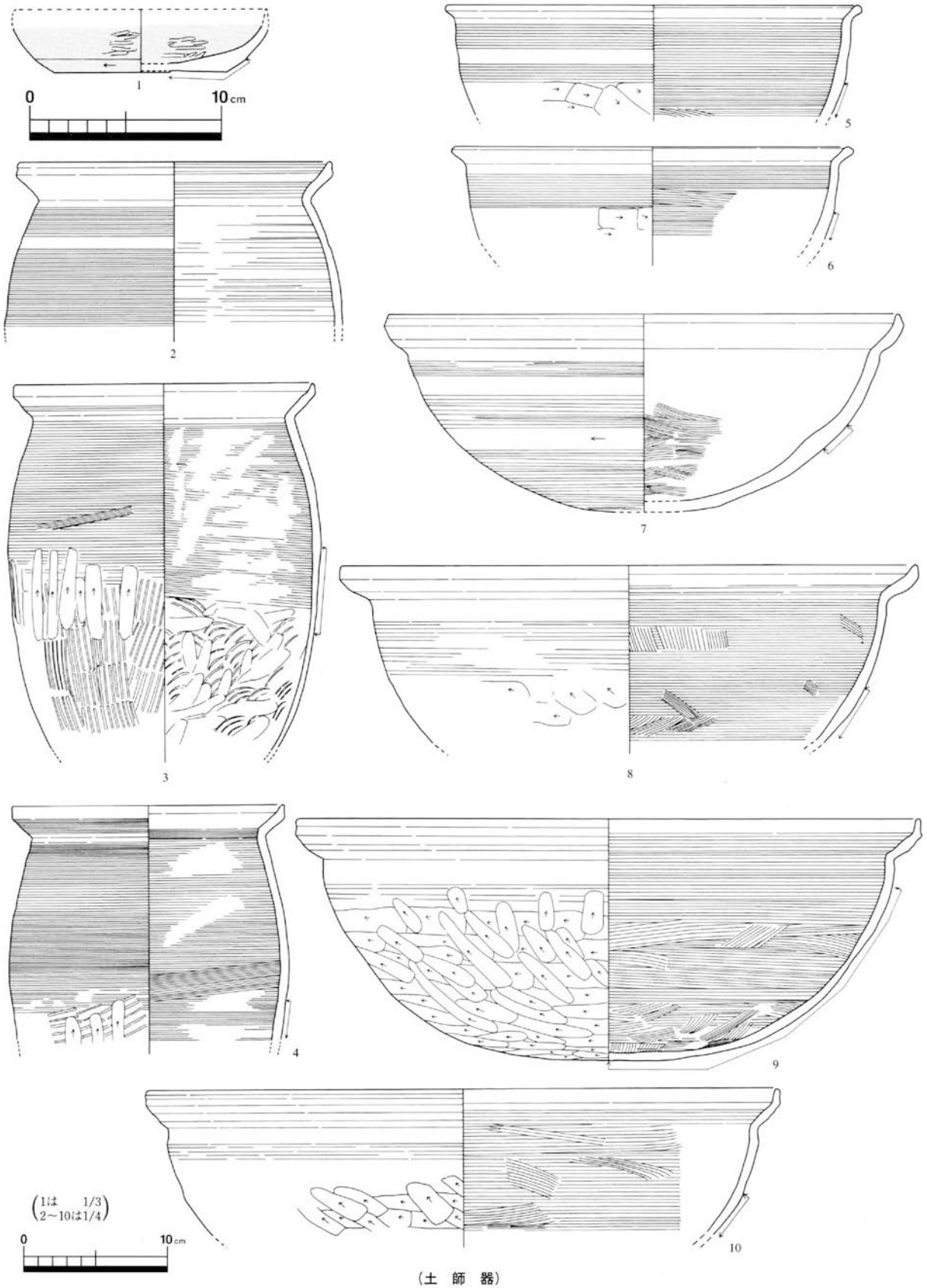
須恵器は坏Ｂ蓋と坏Ａが出土している。時期はⅣ2新期と判断する。

土師器は埦、坏Ｂ蓋・身、盤Ｂ、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑の他、円盤型土製品が出土している。口縁部計測値での数量は以下のとおりで、食膳具２：煮炊具８で構成される。食膳具は赤彩するもののみで、埦が大半を占



第158図　21号土師器焼成坑出土土器

〈22号土師器焼成坑床面及びかき出しピット〉



第159図　22号土師器焼成坑出土土器

める。やや低身の器形のもので（４・５）、底径小さく、体部開く器形を呈す。内面のみ磨きが施されるが、外面はロクロナデ調整されており、新しいタイプの埦と位置付けできる。ただ、底面削り調整は入念に入る。煮炊具では小釜、釜、鍋がほぼ均衡する数値をもつ。釜は口縁端部を若干つまみ上げる器形。鍋の口縁端部はつまみ上げなく、肥厚する程度である。甑は底部付近の破片（13・14）。底部が筒抜けとなる形態で、脚状に短く外屈する器形をもつ。円盤型土製品は、径10㎝程度の大型円盤（６）と径３㎝の小型円盤（７）とが出土している。大型円盤は切り取った時の粘土のハミ出しが内面側にでるもので、内面側には指なで痕が残る。切り取った痕跡は瓶類の切り取り円盤と類似するが、大きさなどから風船作りに伴うものとは考え難く、異なる目的のものと予想する。小型円盤は内面側に絞りによる縮み皺をもち、外面側にヘラ先刺突が認められる切り取り円盤である。胴部絞りきりによる風船技法に伴う長頸瓶の切り取り円盤と判断する。

器種	小型埦	坏Ｂ蓋	坏Ｂ身	盤　Ｂ	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	合　計
口縁計測（○／36）	43	12	6	1	2	60	5	91	86	19	325
占有率	13.2	3.7	1.8	0.3	0.6	18.5	1.5	28.0	26.5	5.8	

第32表　21号土師器焼成坑埋土出土土師器器種構成表

22. 22号土師器焼成坑出土土器（第159図）

当焼成坑は、壁の立ち上がりがほとんどない浅い焼成坑で、焼成坑内遺物は床面付近から少量出土するに過ぎない。ただ、斜面下方に落ち込みがあり、その部分から半完形に復元できる煮炊具が数個体出土している。遺物としてはいずれも焼成坑に伴うものであり、一括して扱うこととする。

《床面付近及びかき出しピット出土遺物》

須恵器は出土しておらず、全て土師器で構成される。器種は埦、釜、小型鍋、鍋のみで、口縁部計測値で示すと、釜45/36、小型鍋6/36、鍋43/36、個体数では赤彩埦１個体、釜５個体、小型鍋２個体、鍋６個体となる。埦（１）は赤彩で、底部大きく、偏平器形を呈す。内外面磨き調整、底面は削り調整を施す。釜（２～４）は口縁端部のつまみ上げが微弱なもので、端部面形成する器形。胴部下半叩き出しの上端に縦方向の削りが施されており、内面当て具は部分的にナデ消されている。小型鍋（５・６）は口径30㎝未満の鉢状器形のものである。胴部はやや深身を呈すが、器形や調整は鍋に類似し、口縁部が短く外屈する。煮炊具と同じ胎土をもつ。鍋は大型で薄手の９・10と厚手でやや小型の７・８がある。薄手のものは底面にやや平坦な部分をもち、口縁端部は長く折り曲がって立ち上がる。胴部のかなり上の部分まで手持ち削り調整が施されているのが特徴的と言える。厚手のものは口縁端部を僅かにつまみ出して外側に面を形成する器形である。８は胴部下位に手持ち削りが施されるが、７は丸底後に底面中央までカキ目が施されている。当資料は共伴する須恵器がないが、遺構切り合いの新旧や土師器からⅣ2新期に位置付けるのが妥当である。

23. 23号土師器焼成坑出土土器（第160～163図）

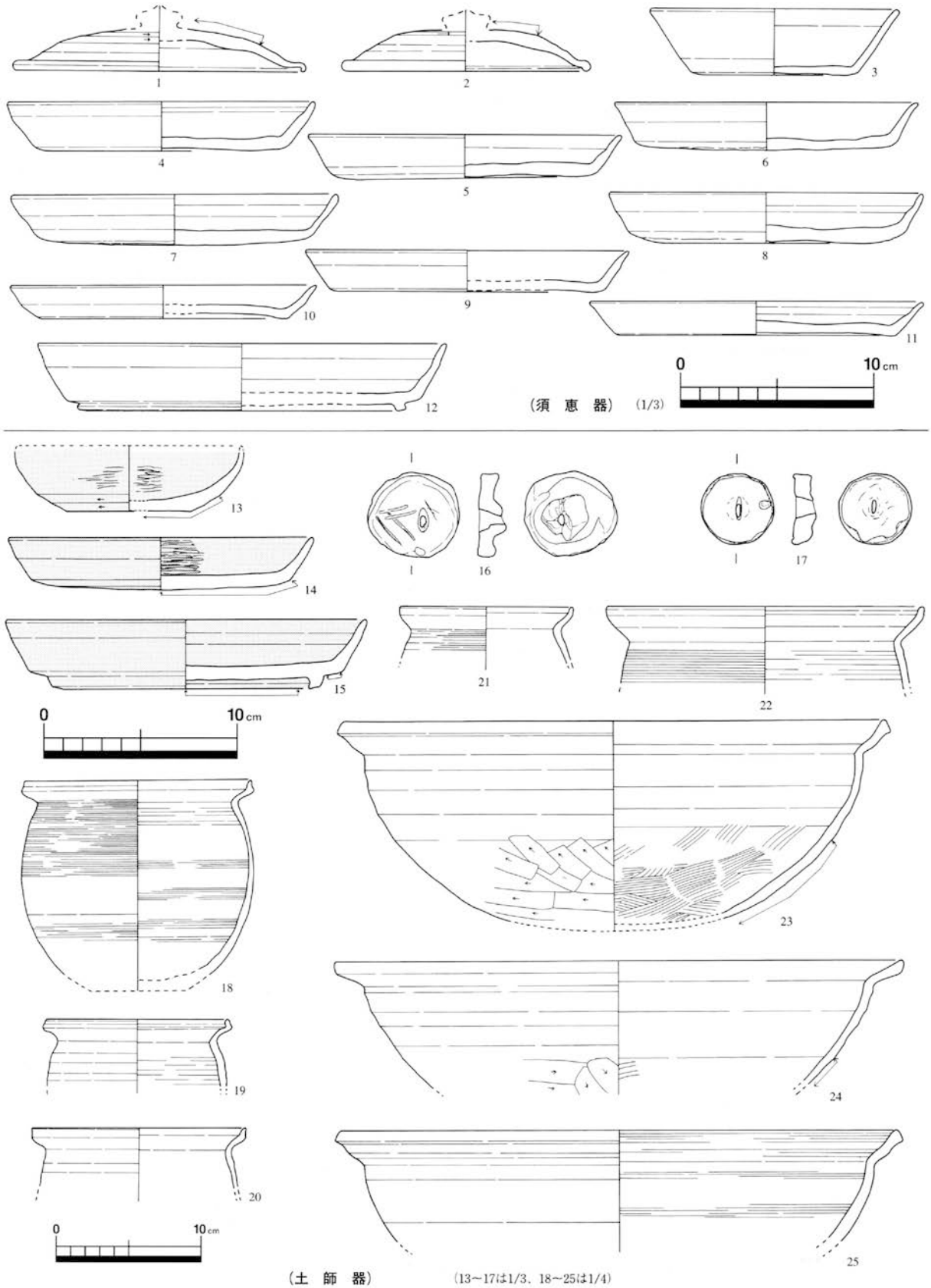
当焼成坑出土遺物は、焼成坑内の床面及び埋土等から出土する焼成坑に伴う遺物と焼成坑構築前に存在した土坑や構築に伴って掘られた床下土坑より出土した遺物とに分けられる。

《焼成坑床面及び埋土出土遺物》

須恵器は坏Ｂ蓋・身、坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂが出土している。比較的まとまった量が出土しており、土師器とともに廃棄されている。坏Ｂ蓋の口縁端部折り返しの微弱化や坏Ａ体部外傾器形、盤Ａの体部外傾及びロクロヒダ器形から見て、当資料はⅤ2期に位置付けられるものと判断する。

土師器は埦、坏Ｂ蓋・身、盤Ａ、盤Ｂ、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器の他、特殊土製品として、円盤型土製品や土製馬形が出土している。土製馬形は足部のみの破片のため、ここでは図示していない。口縁部計測値で示すと33表のとおりで、食膳具１割強、煮炊具９割弱で構成される。食膳具は全て赤彩で、口縁部計測値では埦が多数を占めるが、図示できたのは１点のみである。底径やや大きめのもので、内外面磨き、底面削りが施される。盤Ａ・盤Ｂともに須恵器器形同様のものであるが、盤Ａの内面には磨きが施される。外面はロクロナデ調整。底面削り調整である。埦・盤類ともに須恵器の時期から見れば、やや古手の形態をもつ。煮炊具は鍋が４割と高く、次いで釜が２割半、小釜は２割弱となる。小釜・釜ともに口縁部が「く」字外屈した後、口縁端部

〈15号土師器焼成坑下層及び灰層〉



第160図　23号土師器焼成坑出土土器 1

を折り曲げる器形で、折り曲げが長めとなってやや反る。これに対し、鍋の口縁部器形は端部を折り曲げたり、つまみ出すことはなく、端部へ向かって肥厚し、面形成する器形が一般的と言える。若干上端がつまみ出し気味となるものがあるが微弱であり、釜などとは異なる。一般的な胴部下半手持ち削りのものばかりである。甑は口縁部下に2段の稜を形成する一般的な器形を呈す。円盤型土製品は、径4㎝前後、厚さ1㎝弱のもので、風船技法で成形する長頸瓶の頸部切り取り円盤であると予想する。内外面ともに成形に伴うような痕跡はなく、円盤として切り取った痕跡と円盤ほぼ中央に外面側から内面側に貫通するヘラ先刺突痕が認められる。ヘラ先刺突は刺突した際に内面側へ粘土が押し込まれて突出しており、半乾燥の状態で行われたことが予想される。

《床下土坑等出土遺物》

深い床下土坑が掘り込まれており、焼成坑内よりも多く土器が出土している。

須恵器は完形に近い個体が比較的多く出土しており、器種は坏B蓋、坏A、盤A、盤B、瓶A、鉢Bが確認される。須恵器の時期は、坏B蓋のつまみ形や口縁部器形、坏Aや盤Aの体部外傾器形から考えて、Ⅴ1期と見るのが妥当だろう。また、46の鉢Bは、把手付きのタイプで、Ⅲ期から見られる器種である。当器種の最末期器形と言えよう。

土師器は埦と坏B蓋・身、盤A、台付鉢、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。口縁部計測値で示すと以下の表のとおりで、食膳具1：煮炊具9で構成される。食膳具は埦が圧倒的に多く、図示した点数も多い。すべて赤彩が施されるもので、口径11～12㎝の小型を呈す。体部は内湾器形だが、全体的に厚手で、比較的底径は大きい。内外面ともに磨きが施され、底面は削り調整を一般的とするが、52の底面には糸切り痕が残る。器形自体は古手の系統だが、厚手となって小型化しており、後出するものだろう。また、高盤の脚（53）が出土している。大型のしっかりとした器形のもので、古手の系統と言えるものである。煮炊具は小釜と鍋が3割以上、釜が2割程度で構成される。小釜は全体的に薄手で、口縁端部を長めに折り曲げる形態である。長めに反るような器形の55・56・57と折り曲げるだけの55がある。胴部カキ目調整もあるが、ナデ調整のみのものが主流化している。釜は口縁端部つまみ上げの60と端部へ肥厚して面形成するだけの61・62がある。いずれも胴部カキ目調整を顕著にもち、小釜に比べて古手の様相をもつ。鍋も同様で、口縁端部へ肥厚して面形成する器形が一般的である。つまみ上げは例外的で、口縁端部外側に沈線状の窪みをもつものがある。甑は口縁部下に稜を形成するもの。台付鉢（73）は、口縁端部が外側へ突出する器形のものである。体部外面は手持ち削り、内面は刷毛調整で、全体的に薄手を呈す。

器種	小型埦	坏B蓋	盤A	盤B	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合計
口縁計測(○/36)	20	3	21	18	12	76	18	121	196	9	4	498
占有率	4.0	0.6	4.2	3.6	2.4	15.3	3.6	24.3	39.4	1.8	0.8	

器種	小型埦	坏B蓋	杯B身	盤A	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	合計
口縁計測(○/36)	53	3	8	3	8	205	10	136	217	17	660
占有率	8.0	0.5	1.2	0.5	1.2	31.1	1.5	20.6	32.9	2.6	

第33表　23号土師器焼成坑出土土師器器種構成表（上段は焼成坑内、下段は床下土坑等出土）

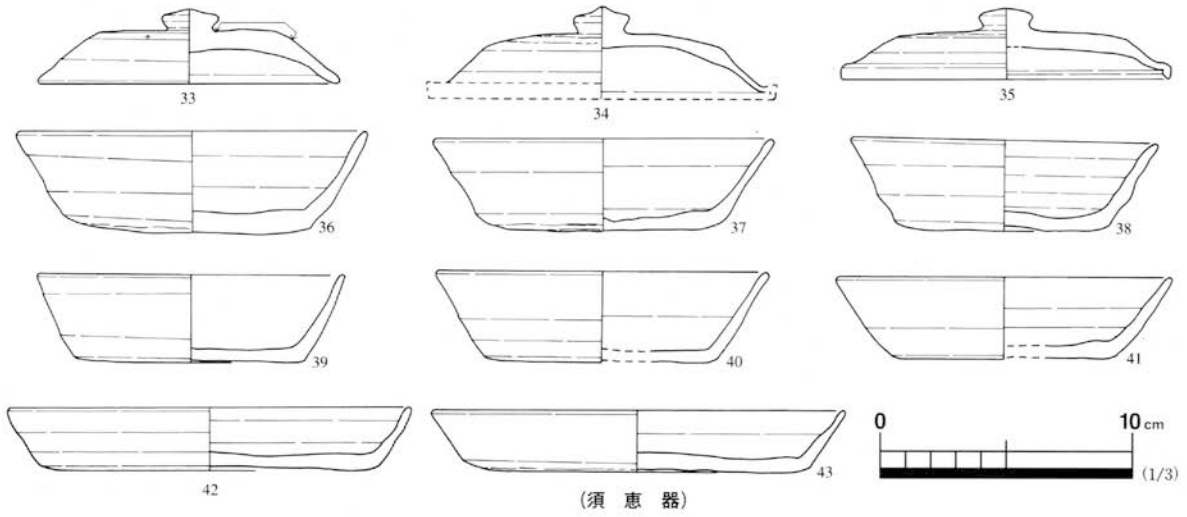
24. 24号土師器焼成坑出土土器（第164図）

撹乱を受け、遺構として残っていない焼成坑であるが、その破壊土と思われる焼土塊混在の土層から土師器が少なからず出土している。須恵器は細片のため図示していないが、土師器は赤彩埦と鍋を図化できた。赤彩埦は口径15㎝弱を測る開く器形のもので、厚手で底径は小さい。内面磨き、底面削りが施されるが、外面はロクロナデである。器形的にはⅤ2期そしてⅥ期へと繋がるものと言える。鍋は口径がやや小さく、厚手のもので、頸部屈曲後、口縁端部へ肥厚してゆく器形をもつ。大半は外端に面形成するだけだが、4はその部分に沈線状の窪みが入る。このような器形もⅥ期へ続くものであることから、当焼成坑はⅤ2期とするのが妥当だろう。

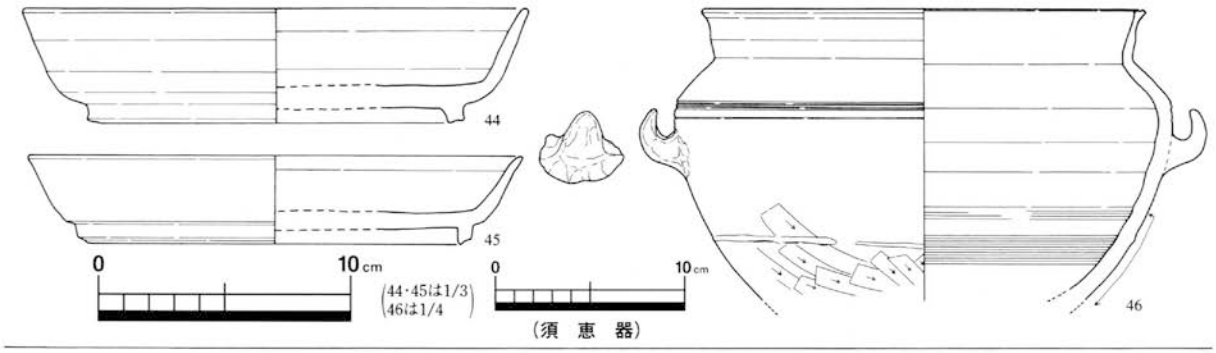
25. 25号土師器焼成坑出土土器（第164～167図）

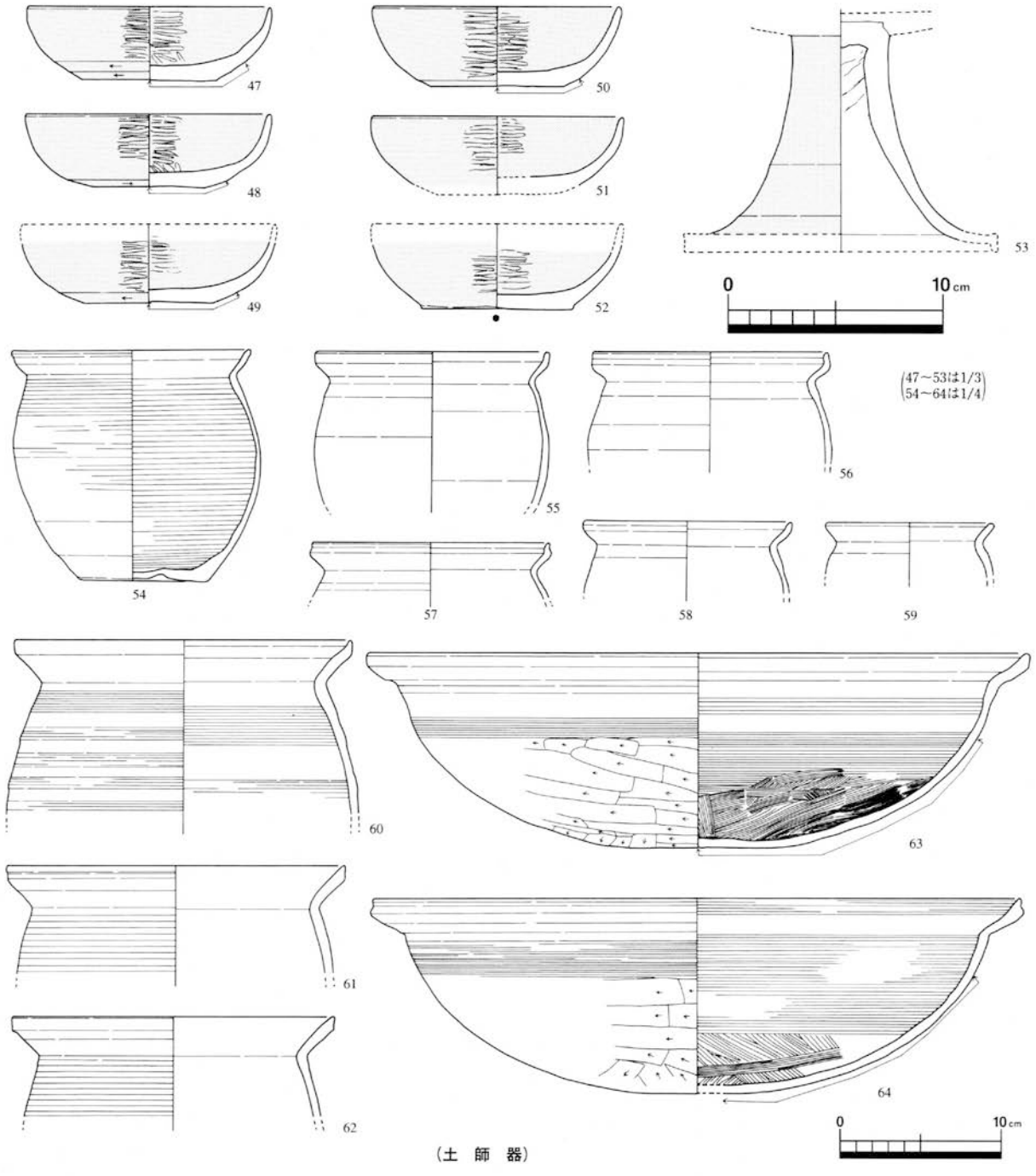
当焼成坑は床が2枚あり、上の床を2次床、下の床を1次床とする。1次床は地山床であり、床下遺構は存在しない。2次床時の埋土は、意識的に埋め戻されており、埋土への遺物混在が少ない。出土する遺物のほとんど

〈23号土師器焼成坑床下土坑〉

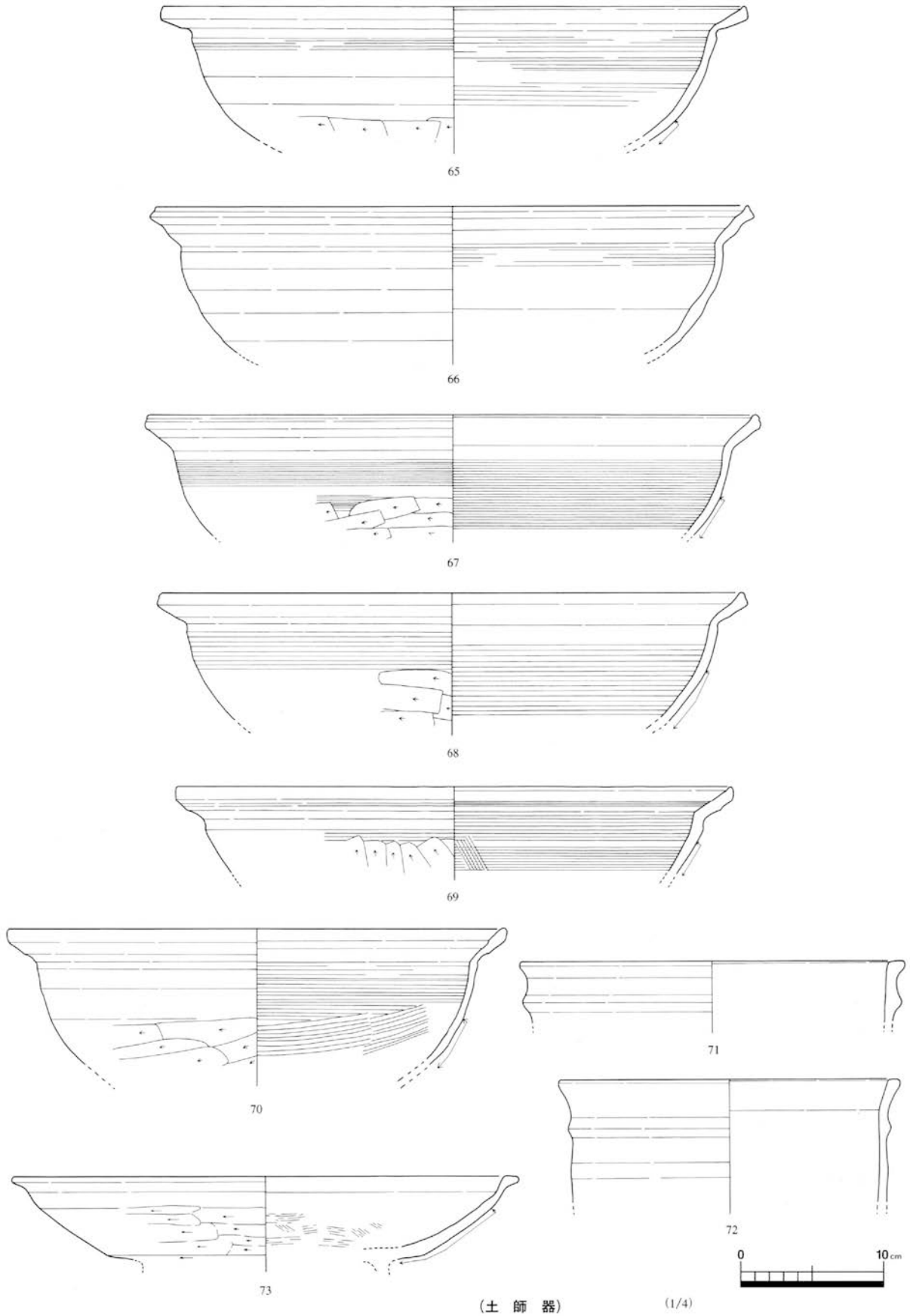


第161図　23号土師器焼成坑出土土器 2





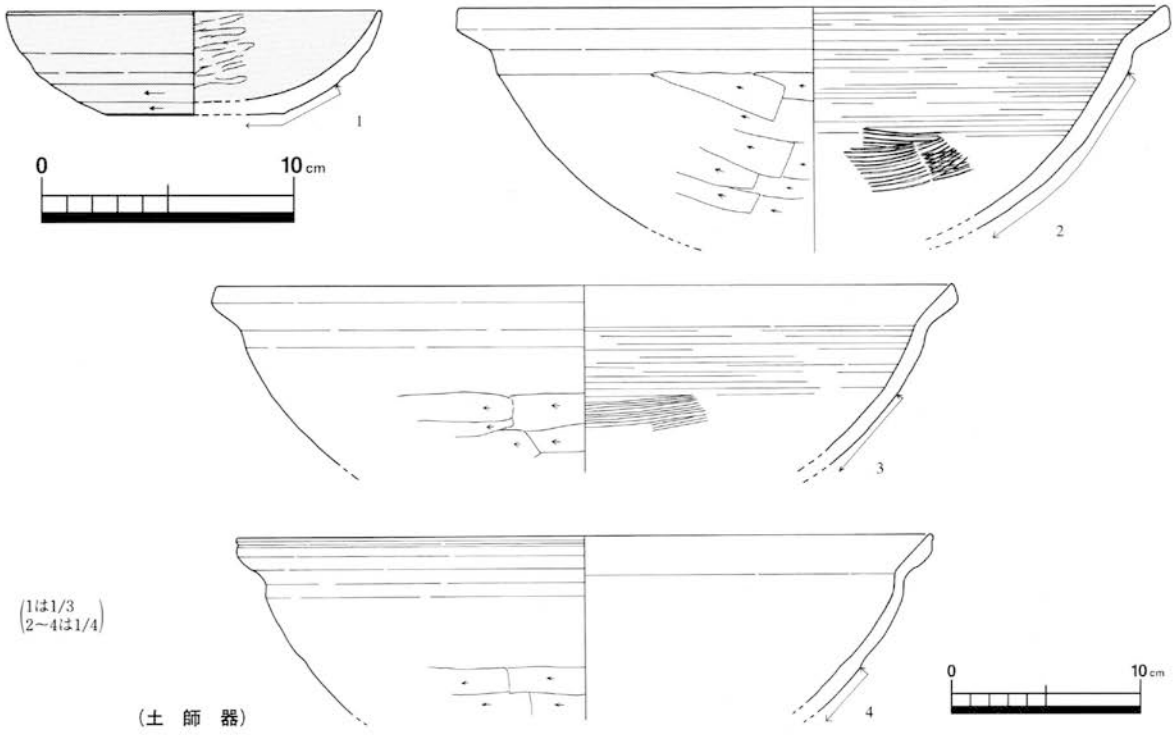
第162図　23号土師器焼成坑出土土器 3



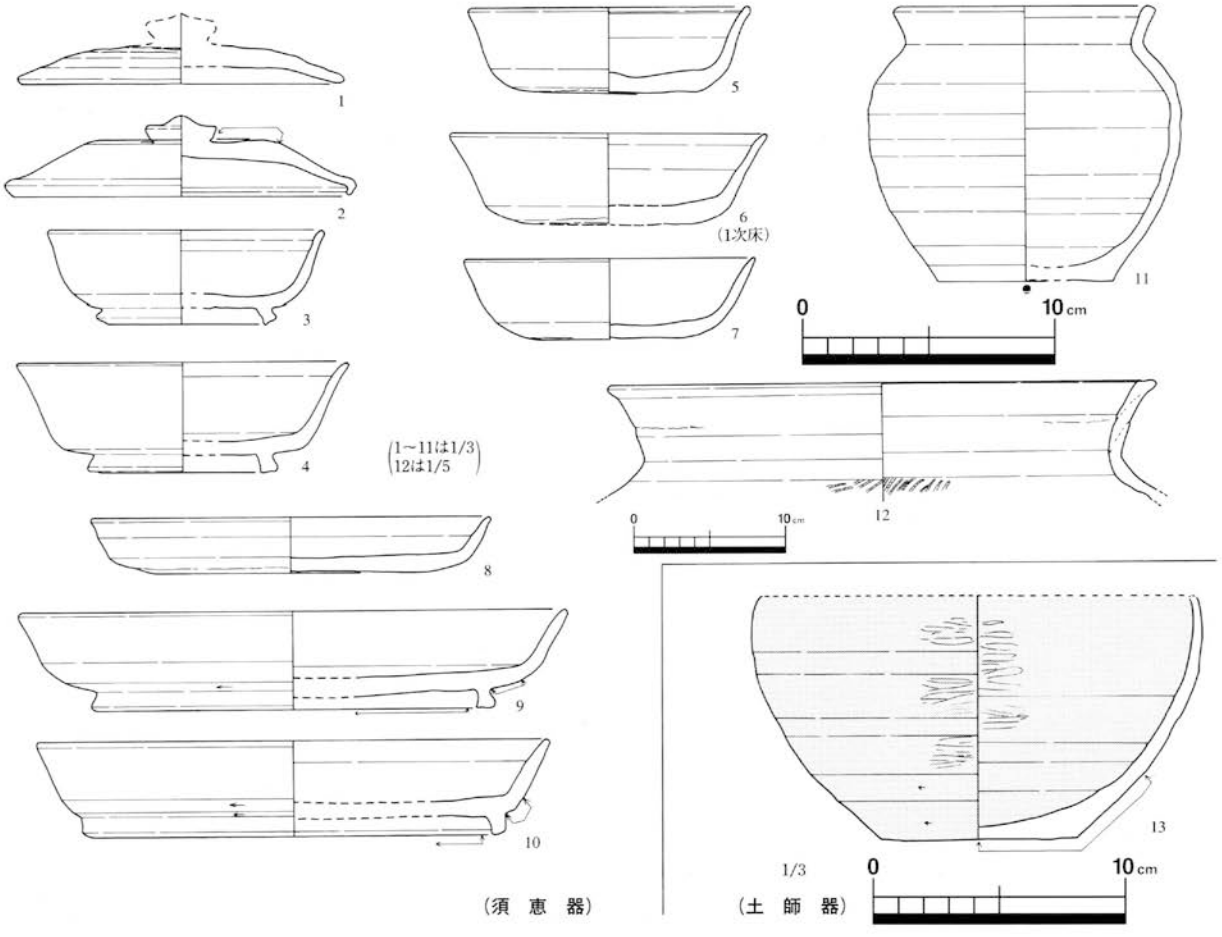
（土　師　器）　(1/4)

第163図　23号土師器焼成坑出土土器 4

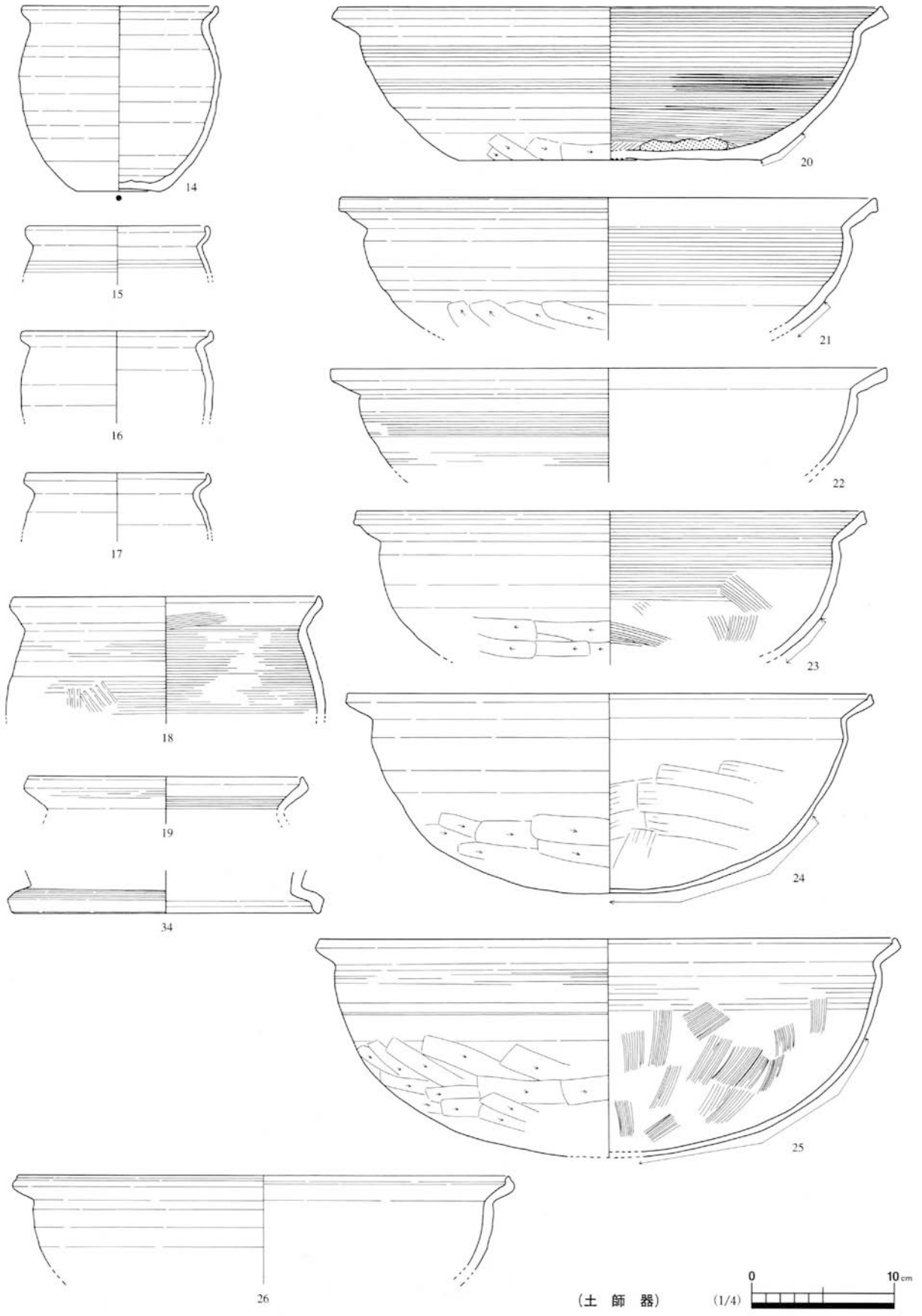
〈24号土師器焼成坑破壊土〉



〈25号土師器焼成坑2次床及び灰層〉



第164図　24号土師器焼成坑出土土器・25号土師器焼成坑出土土器1



第165図　25号土師器焼成坑出土土器 2

は２次床直上ないしは最下層にある灰層中に存在するもので、床面には多くの土師器鍋が遺存している。なお、当焼成坑の埋土上層に存在する灰層については、先述したとおり、当焼成坑に伴うものではないため、ここでは扱わない。20号土師器焼成坑と11号土師器焼成坑のかき出し灰層である可能性をもつ。

《２次床面及び灰層出土遺物》

須恵器は坏Ｂ蓋・身、坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂ、小型壷、中甕が出土している。床面からの出土は２と12のみであり、他は埋土であるが、時期的にはあまりばらつきがない。坏Ｂ蓋の器形や盤Ａ器形などからⅣ2古期に位置付けられるが、坏Ａ体部は外傾気味となっており、坏Ｂ身中も小型化するなどやや新しい様相を感じる。20号土師器焼成坑下方灰層よりも古いが、Ⅳ2新期に近い時期と位置付けておきたい。

土師器は埦、坏Ｂ蓋、台付鉢（盤）、小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。口縁部計測値で示すと下表のとおりで、床面に敷き詰めるようにして出土した鍋が７割近くの高率をもつ。他の器種は小釜が２割弱、釜が１割強程度で、両器種もほとんどが床面からの出土である。焼成に使用する被熱顕著な床面（焼成床面）に集中しており、床に敷き詰めたものであろう。食膳具は全て赤彩で、出土量は少ない。図示できたものは鉄鉢状器形を呈す13の大型埦のみで、底面を削り、内外面とも磨きが施される。煮炊具は、小釜・釜ともに口縁端部を短く折り曲げるかつまみ上げるものである。鍋も口縁端部つまみ上げのものが定量存在し、口縁外端面に沈線状の窪みをもって、外反気味となる30～32の器形が定量存在する。体部下半は外面手持ち削り、内面刷毛調整を施す丸底が基本であるが、例外的に20のような平底がある。底面は成形台のままの痕跡を残し、体部下位に手持ち削り、内底面には刷毛が施されるため、丸底にする意識はあったようで、製作途中のものである可能性がある。それを示すように、内底面には握っただけの粘土塊が付着し、工房内での廃棄を予想させる。甑は口縁部下に１段の稜を形成する口縁部破片（35）と脚状に下端が外屈する底部破片（34）が出土している。台付鉢（36）は底部平たく浅い盤形のもので、このタイプには獣足が付くものと予想する。円筒形土器（37）は底部が塞がるタイプのもので、底面にロクロ軸痕が残る。

《１次床面出土遺物》

出土遺物は少なく、須恵器では坏Ｂ蓋と坏Ａ、高盤。土師器では赤彩の坏Ｂ蓋、小釜、釜、管状土錘が出土するだけである。図示したのものはすべて須恵器で、２次床須恵器と同時期と位置付けられる。

器種	小型埦	坏Ｂ蓋	台付鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	合計
口縁計測（○／36）	2	3	6	50	12	47	265	4	389
占有率	0.5	0.8	1.5	12.9	3.1	12.1	68.1	1.0	

第34表　25号土師器焼成坑２次床出土土師器器種構成表

26. 27号土師器焼成坑出土土器（第167図）

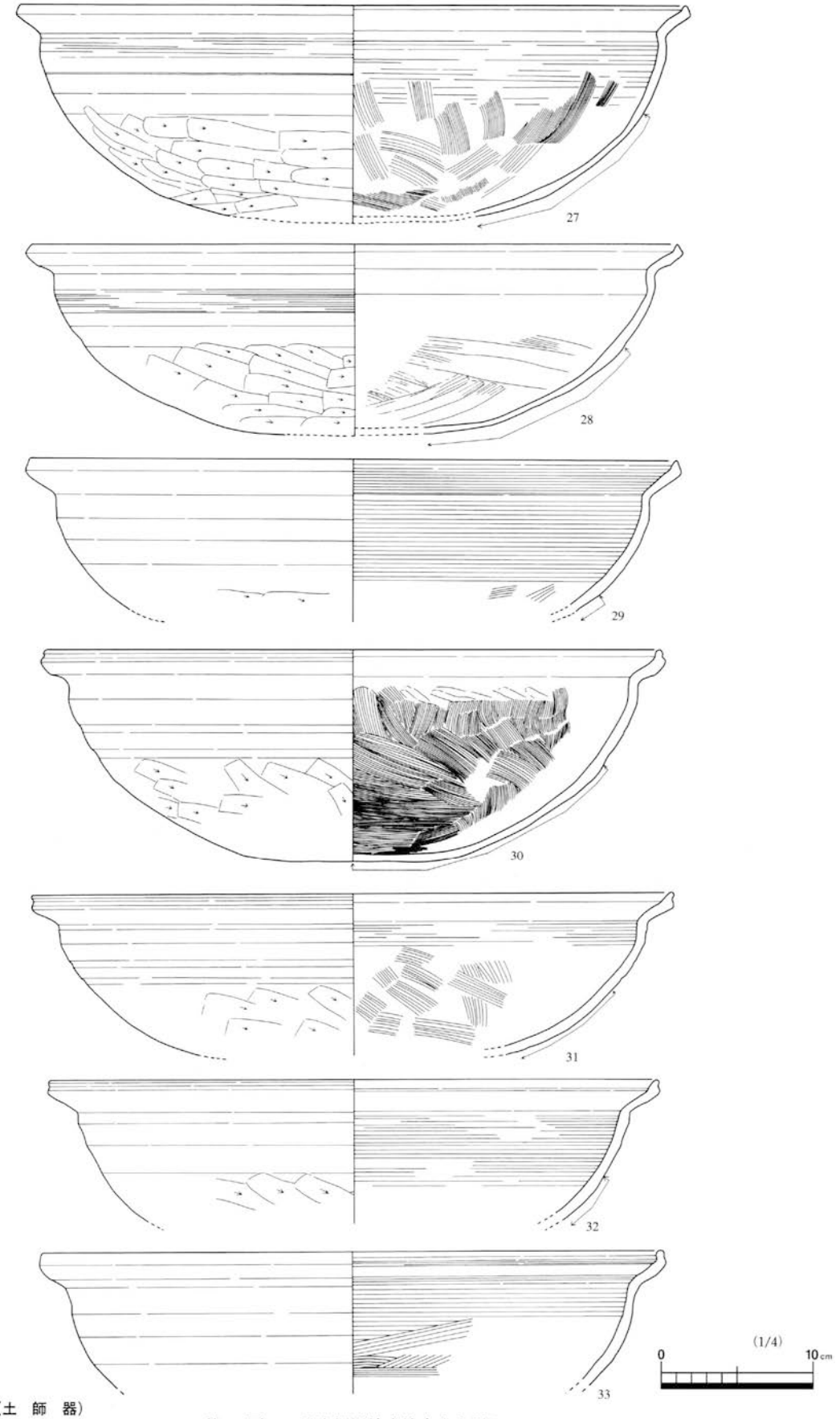
床下に溝等の遺構があるが、遺物の出土は少なく、土師器片が出土する程度である。当焼成坑出土遺物の多くは埋土からで、特に上層から多い。当焼成坑の斜面上方に存在する８号灰原と接合関係にあり、８号灰原の流れ込み土層であることが分かっている。ここで提示する遺物は、埋土上層を除くもので、床面付近及び下層灰から出土したものである。

須恵器は、坏Ｂ蓋、坏Ａ、盤Ａが出土している。３の盤Ａが下層灰出土のものであり、当焼成坑に伴うものと判断できるものである。１の坏Ｂ蓋とともに、Ⅴ2期に位置付けられるものと考えている。ただ、２のⅥ期に位置付けできそうな坏Ａもあり、Ⅶ1期に下る可能性もある。

土師器は赤彩の埦と盤、内面黒色の埦、小釜、釜、鍋、甑、管状土錘が出土している。口縁部計測値では以下のとおりで、小釜、釜、鍋で主に構成される。食膳具では赤彩土師器が主体で、４・５の盤を図示した。底面削り、体部内外面とも磨きの省略したロクロナデのみのもので、体部長く外傾する。また、細片のため図示してい

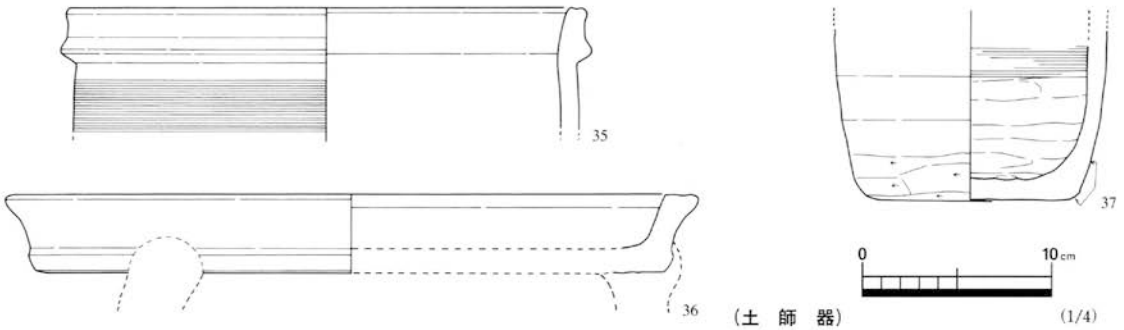
器種	赤彩埦	赤彩蓋	内黒埦	小釜小	釜	鍋	甑	合計
口縁計測（○／36）	4	4	4	41	53	35	7	138
占有率	2.9	2.9	2.9	29.7	38.4	25.4	5.1	

第35表　27号土師器焼成坑出土土師器器種構成表

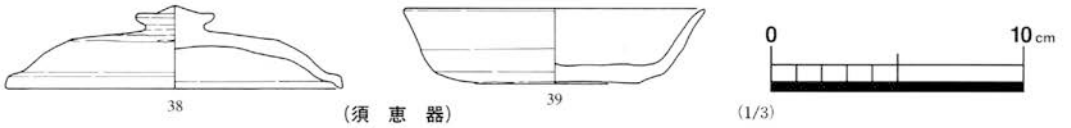


（土　師　器）

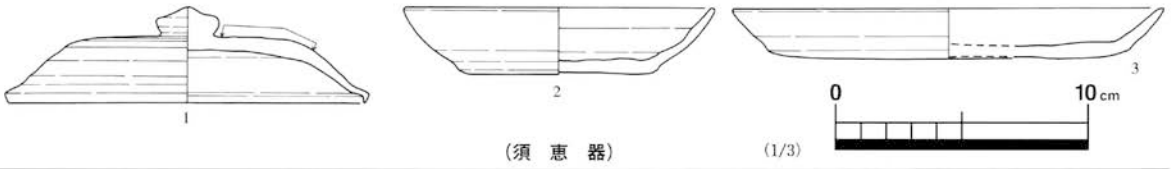
第166図　25号土師器焼成坑出土土器３

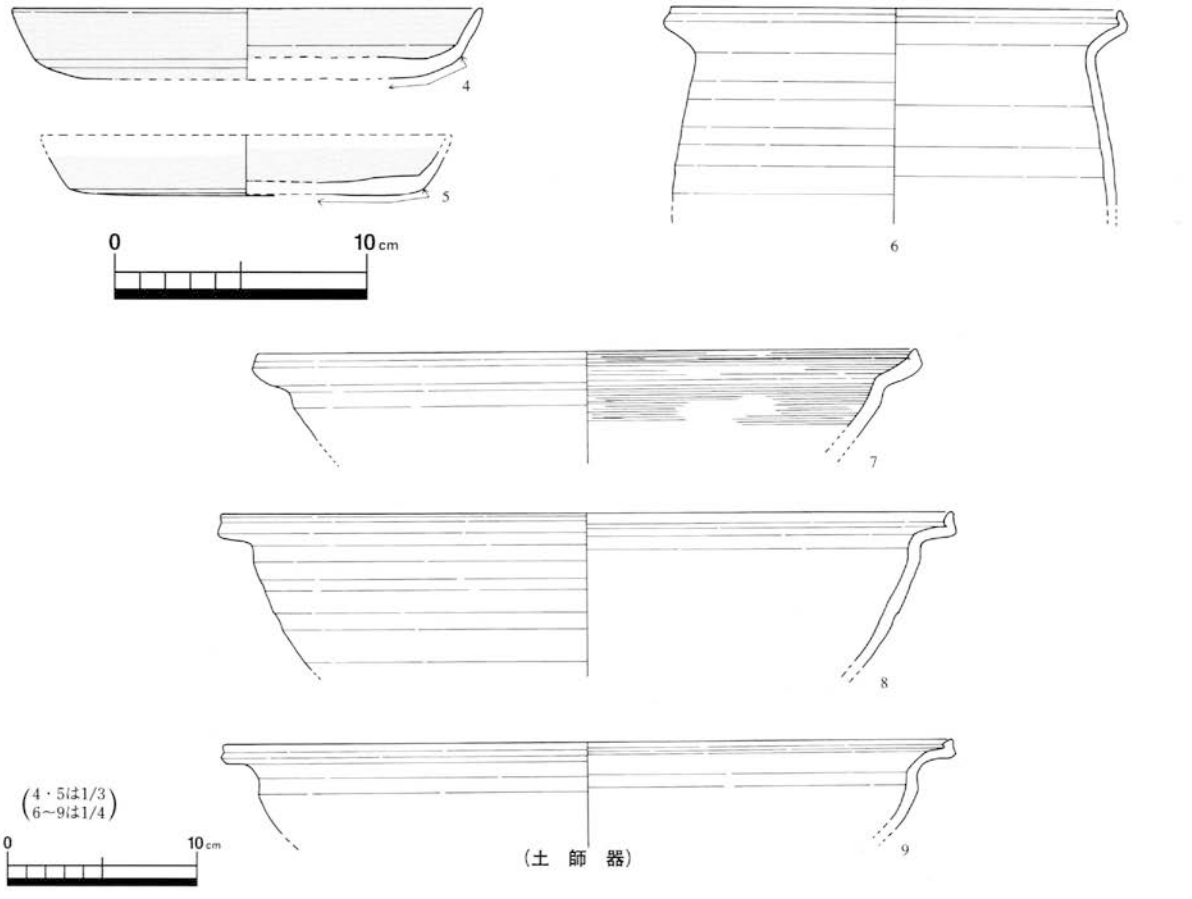


〈25号土師器焼成坑1次床〉



〈27号土師器焼成坑床及び灰層〉





第167図　25号土師器焼成坑出土土器 4 ・27号土師器焼成坑出土土器

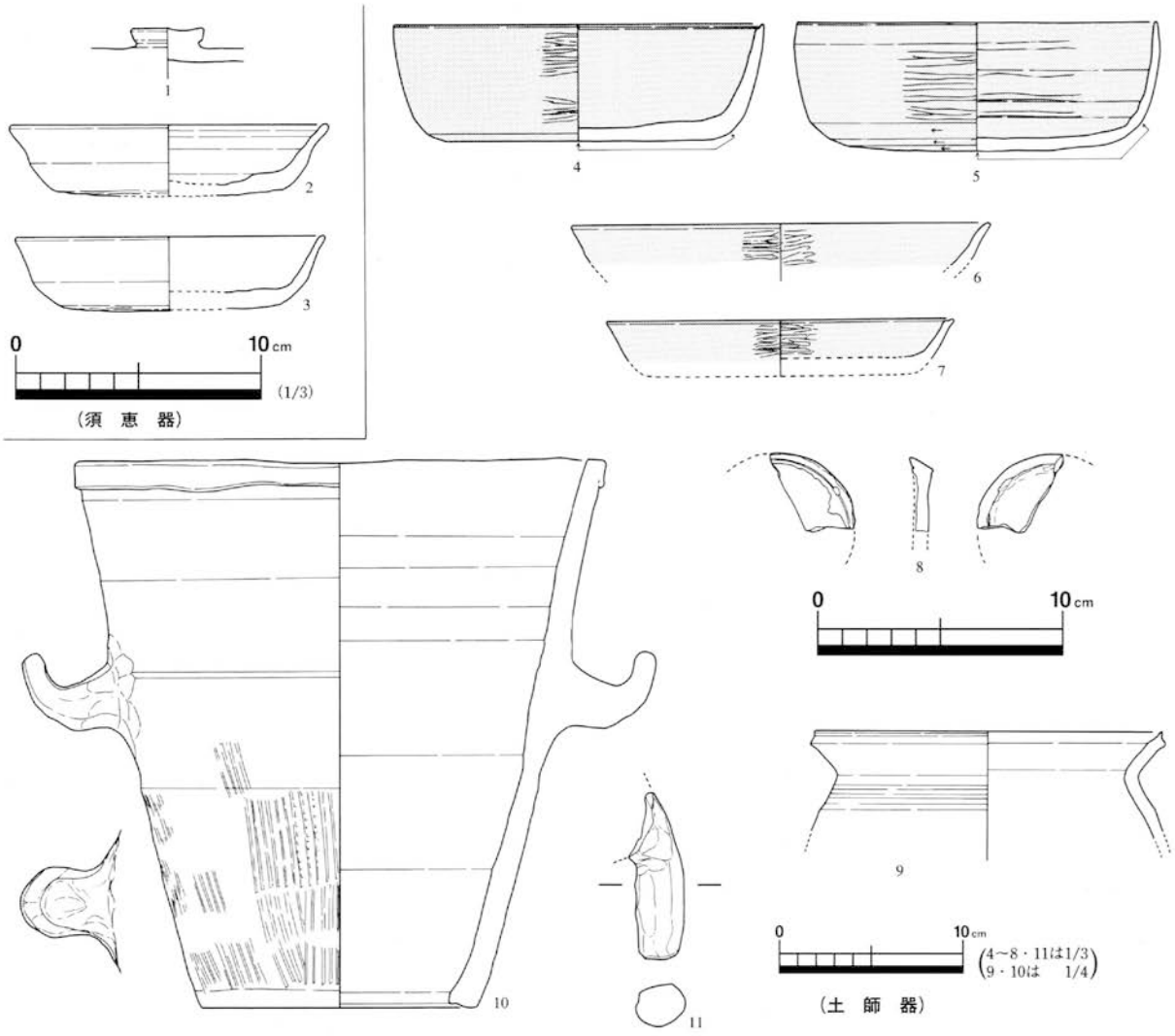
ないが、３点ほど内面黒色土師器がある。この時期には定量出現しているものと予想する。煮炊具は、６の釜、７～９の鍋ともに口縁端部を長く折り曲げて反り気味につまみ出す器形のもので、Ⅵ期的な器形をもつ。７はカキ目を残すなど古い様相を見せるが、床面出土のものはロクロナデのみのものであり、８世紀後半的な器形から脱却している。

27. 28号土師器焼成坑出土土器（第168図）

遺物出土量は少なく、床面付近と灰層から出土する程度である。床は地山床で、床下遺構も存在しない。

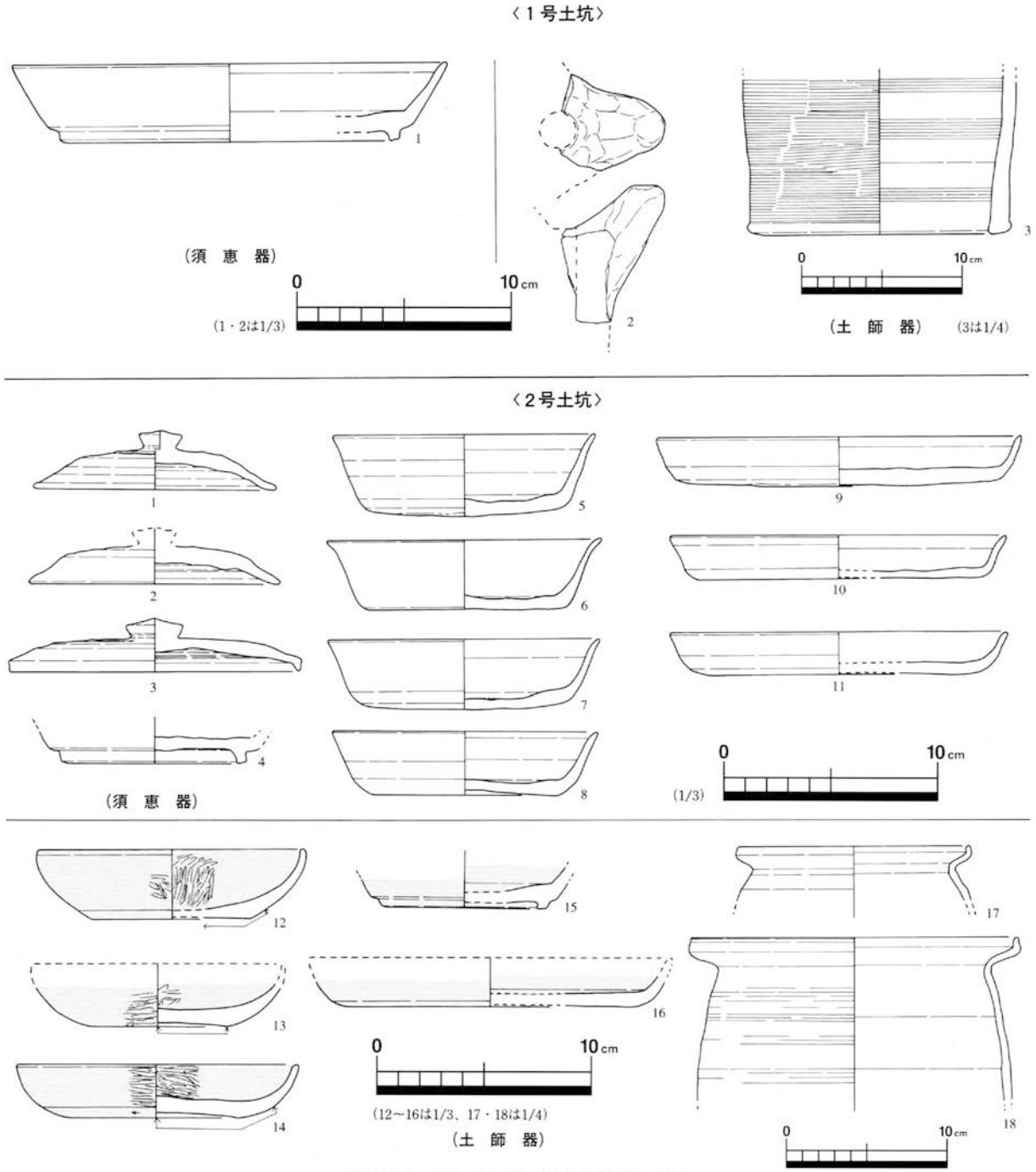
須恵器は、坏Ｂ蓋と坏Ａが出土している。蓋の偏平つまみや坏Ａの偏平器形から、Ⅳ1期の範疇に入ると予想するが、その中でも古相に位置付けられるものだろう。

土師器は、埦又は坏、小釜、釜、甑などの他、特殊品として土製馬形と円盤形土製品が出土している。食膳具が赤彩の埦類を中心に、ある程度（埦類23/36）出土しているわりには、煮炊具の出土量は極めて少ない。小釜が3/36、釜が11/36、甑が23/36で、甑は大型破片１点の数値であるし、鍋に至っては破片すら出土していない。これだけの出土量で語ることは危険ではあるが、Ⅱ3期やⅢ期の土師器焼成坑生産が食膳具中心であったことと関連性があるものと考えている。土師器焼成坑における煮炊具生産の本格的開始がⅣ2古期に下る可能性を示唆



第168図　28号土師器焼成坑出土土器

する資料と言えよう。食膳具は赤彩のみで、深身大ぶりの４・５と浅身の６・７がある。４・７の口縁端部に沈線が施され、宮都的な土師器の様相をもつ。底面は回転削り、内外面磨きが丁寧に施され、５の磨きにはロクロ回転が使用された可能性をもつ。底面の広さや内面見込み部分の窪みから考えて、ヘラ切りの可能性が高いと考えている。煮炊具は釜と甑が図示できただけで、釜の口縁端部は面形成するだけのもの。甑は口縁端部に折り返しの帯をもつ。厚手で、胴部に沈線が施されるなど、須恵器系甑の器形をもつ。８の円盤形土製品は径６㎝程度の比較的薄い切り取り円盤で、外面側に外周に沿った線刻がある。円盤切り取りのための事前の見込み線と思われるもので、径や薄さから考えて、風船技法による長頸瓶の切り取り円盤と予想する。胴部端の絞りきり痕や円盤重ね合わせの痕跡もないことから、大型円盤で閉塞するタイプの長頸瓶と判断する。11の小型足部破片は、土製馬形の足と思われる。



第169図　１号土土坑・２号土坑出土土器

（2）土坑、ピット、溝から出土した土器

Ｆ地区の緩斜面上には土師器焼成坑とほぼ同時期の遺物を出土する土坑やピット、溝などが存在する。土坑は、土師器焼成坑同様に、焼成坑での焼成破損品などを廃棄したもの。ピットも同様の性格をもつものもあるが、意識的な土器埋納を行ったものもある。また、溝は土師器焼成坑に伴う雨水排水溝が多いが、そこにも同様に須恵器・土師器が多量廃棄される。以下に、出土した須恵器と土師器の内容を遺構ごとに述べる。なお、個別の器種構成については、出土量が少なかったため、提示していない。口縁部計測の数値は一括して下方灰原に加算してある。

１．１号土坑出土土器（第169図）

出土遺物は少なく、図示できたものは須恵器盤Ｂ（１）と土師器円筒形土器（２）、土師質の把手状部分が付される土製品（３）である。須恵器盤ＢはⅣ2新期ないしはⅤ1期のもの。円筒形土器は底部のない筒抜けタイプのものである。土製品は中心に孔が開き、中空の脚状を呈する。破片のため、不確定要素を含むが、上部に三つ又突起のある中空の土製支脚ではないかと考えている。出雲地域に分布圏をもつ大型特殊土製支脚との関連性が考えられる。

２．２号土坑出土土器（第169図）

比較的出土遺物が大く、須恵器や赤彩土師器埦類を中心に出土している。須恵器の器形特徴はまとまりがあり、単一時期のものと理解される。坏Ｂ蓋中の偏平器形や坏Ａ・盤Ａの立ち気味となる体部立ち上がり器形から見て、Ⅳ2古期の範疇で考えられるものと言える。埦類は大きな底部と口縁部内湾器形が特徴で、14の偏平器形も存在する。底面削りや内外面の磨き調整は丁寧で、全体的に古い様相を残す埦類と言える。赤彩土師器のうち、須恵器系器種である15の坏Ｂ身や16の盤類は底面ヘラ切り離し痕を残す。なお、17・18の煮炊具が共伴して出土しているが、いずれも口縁端部を折り曲げる器形のもので、薄手である点など新しい様相をもつ。

３．３号土坑出土土器（第170図）

土師器煮炊具を主に出土している。須恵器は１の坏Ｂ蓋大のみで、２の赤彩土師器埦とともに、器形特徴から考えれば、Ⅳ2新期ないしはⅤ1期に位置付けられるものと考える。煮炊具は小釜、釜、鍋、甑、円筒形土器が出土している。小釜、釜ともに比較的薄手で、口縁端部が長く湾曲するように曲がる。鍋は口縁端部折り曲げの７と口縁端部へと肥厚して面形成するタイプの５・６がある。前者は薄手で、釜等のつくりに類似し、後者は厚手で古手の様相をもつ。甑は口縁部下に１段の稜を形成する器形で、底部は脚状に短く外屈する筒抜けタイプである。円筒形土器は口縁部と底部が出土している。両方の端部ともに面形成するタイプで、口縁部と底部との識別は、粘土紐積みの内傾接着痕を基本に考えて、決めている。

４．Ｐ125出土土器（第172図）

柱穴状のピットの下層から須恵器盤Ｂ１個体と赤彩土師器埦３個体が出土している。須恵器盤Ｂは1/3の破片だが、赤彩埦は完形に近い個体で、意識的に埋納されたものであると予想する。盤Ｂの底部厚や体部器形からⅣ2新期頃のものと考えられ、赤彩埦類も同時期のものと考えられる。通常法量の２とやや大ぶりで深身を呈する３に分けられ、２は底径小さめで底部厚手器形。３は薄手で体部内湾器形を呈す。両者とも内外面の磨きは丁寧で、底面の削りも丁寧に施される。

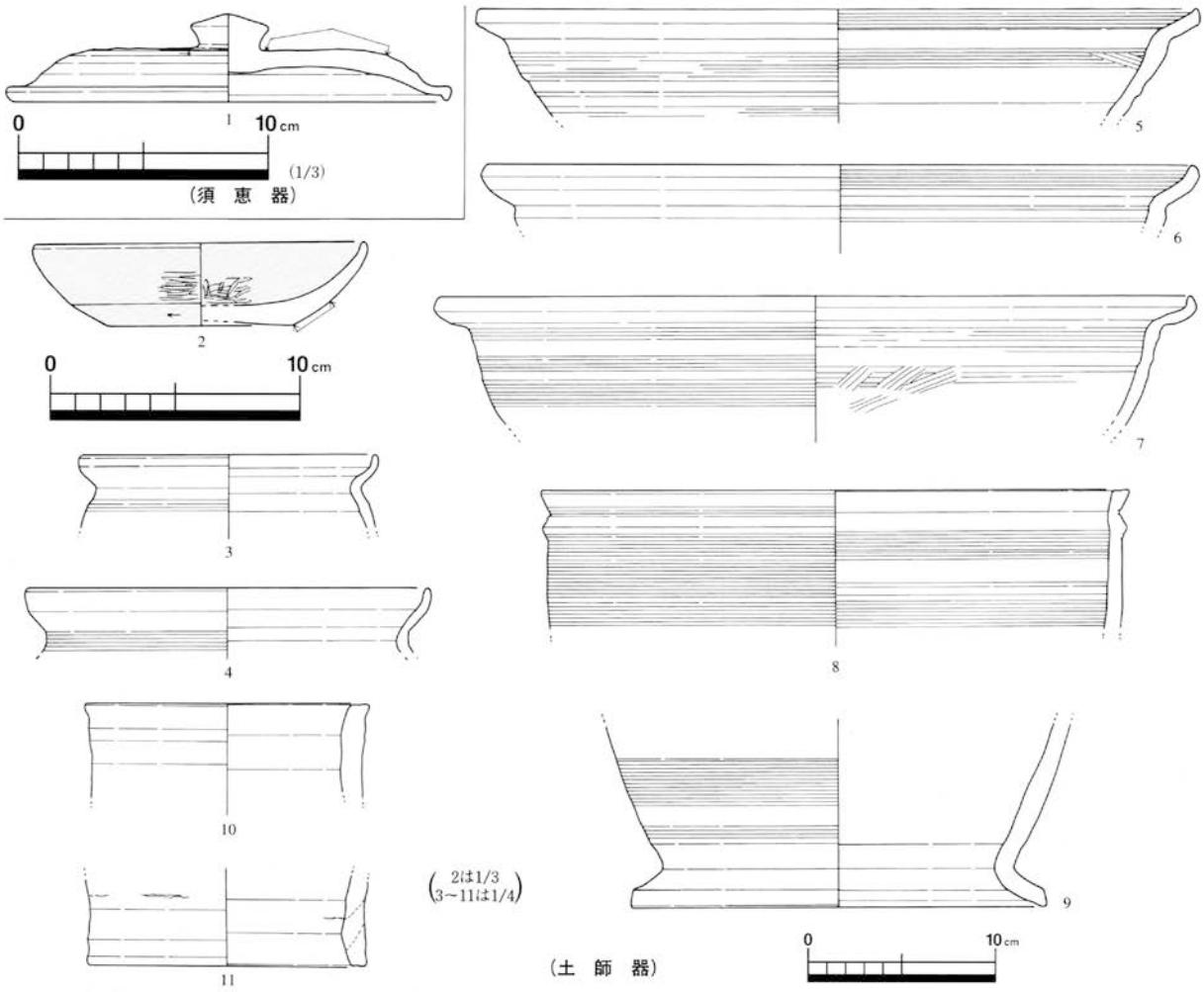
５．Ｐ148出土土器（第172図）

柱穴状のピットから須恵器盤Ａと赤彩土師器埦が出土している。赤彩土師器埦は上層からの出土。須恵器盤Ａは下層からの出土で、赤彩埦はほぼ完形の状態で重なって出土している。ピット埋納土器と位置付けられるものである。須恵器盤Ａは体部直立気味の器形から、Ⅳ2古期に位置付けられる。赤彩埦はＰ125同様に、大ぶり深身器形の３と通常の２とが存在する。Ｐ125よりも入念に磨きが入るなど、丁寧な作りをしており、２の底径が大きく偏平器形である点や、３の大型を呈する点など、Ｐ125よりも１型式古相をもつ。

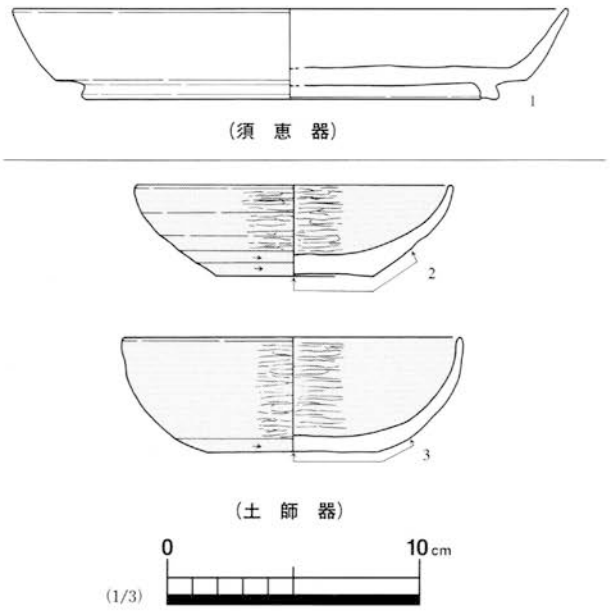
６．Ｐ156出土土器（第173図）

柱穴状のピットから須恵器坏Ｂ蓋中と須恵器坏身大の1/2程度の個体が出土している。意識的な埋納と判断される土器で、時期はⅣ2古期に位置付けられる。

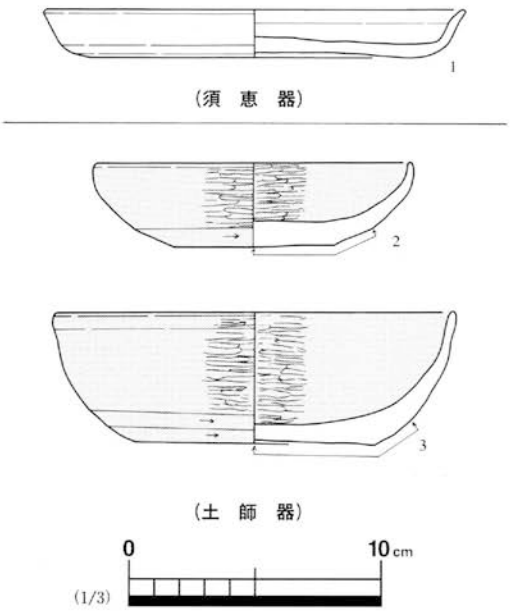
〈3号土坑〉



〈P125〉



〈P148〉



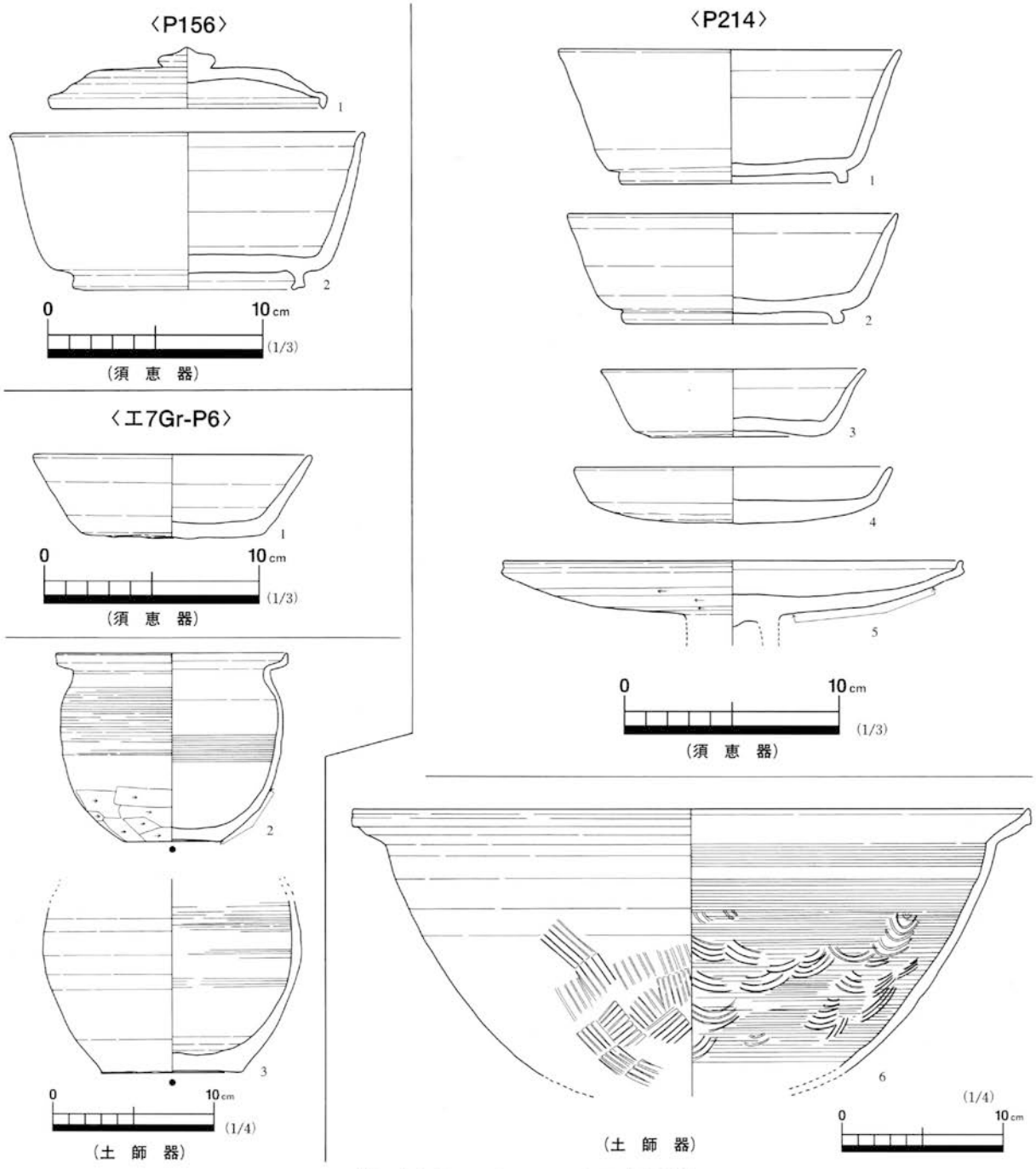
第170図　3号土土坑・P125・P148出土土器

7．エ７GrのＰ７出土土器（第171図）

柱穴状のピットから須恵器坏Ａ１個体と土師器小釜２個体が出土している。いずれも1/2以上残存する個体で、土師器小釜は入れ子状に重ねて埋められている。意識的な土器埋納ピットと位置付けられるものである。須恵器坏Ａの体部外傾器形からⅤ1期に位置付け可能と思われる。土師器小釜は、口縁端部を折り曲げて長くつまみ出す器形のもので、胴部下位は削りが施される。

8．Ｐ214出土土器（第171図）

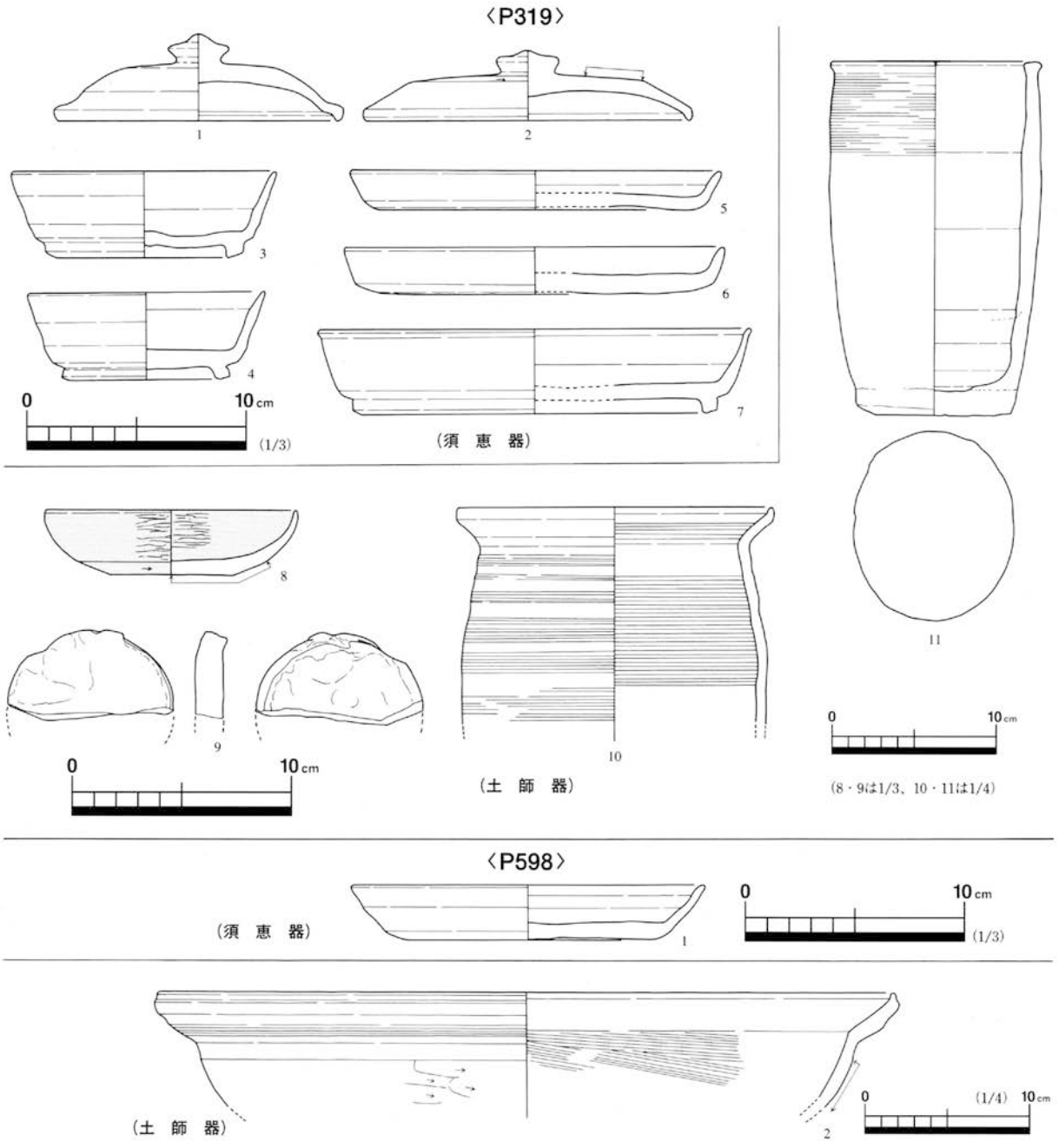
やや不整形を呈すピットから多くの須恵器と土師器が出土している。須恵器は坏Ｂ身大２個体と坏Ａ２個体、盤Ａ２個体、高盤・鉢Ｆ各１個体で、1/2以上の個体が多い。土師器は鍋のみで、これも大型の破片である。底部叩き出しの叩き痕と内面当て具痕を明瞭に残すもので、口縁端部は肥厚して面を形成する。須恵器器形から当土器群はⅣ2古期からⅣ2新期に位置付けられるものと考える。



第171図　P156・P214・エ7Gr-P6出土土器

9．P319出土土器（第172図）

土坑状の大型ピットから多くの須恵器と土師器が出土している。特に須恵器は半完形品が多く、器種も坏B蓋と身、坏A、盤A、盤Bなどと豊富で、出土点数も多い。1のような口縁部外屈する器形をもつ坏B蓋など、Ⅳ2新期以降へ下る資料もあるが、多くはⅣ2古期の範疇で考えられる資料である。土師器は赤彩埦と釜、円筒形土器、円盤形土製品がある埦赤彩　（8）は底部厚手で口縁部内湾器形をもつ偏平器形のもので、丁寧な作りをするものである。釜（10）は口縁端部を微弱につまみあげる器形のもの。両者とも、Ⅳ2古期に位置付け可能なものと言える。円筒形土器（11）は、完形に近い製品で、厚い底部が完存する。胴部上位にカキ目を残すが、底部は楕円形を呈しており、対称形をなしていない。回転台上での成形ではあるが、低速回転台と考えられよう。円盤形土製品（9）は径7㎝台のもので、切り取り面をもつ円盤である。径の大きさや厚手であることから瓶類の切り取り円盤である可能性は低い。



第172図　P319・P598出土土器

10. P598出土土器（第172図）

柱穴状のピットから須恵器盤Aが1個体と土師器鍋の半完形品が1個体が出土している。盤Aは体部外傾する器形のもの。鍋は頸部で屈曲した後、口縁端部で僅かにつまみ上げる形態のものである。器形から考えて、V1期頃に位置付けて妥当と考える。

11. 14号溝出土土器（第173図）

斜面下方に存在する溝で、斜面下方堆積灰原の下から検出された溝である。図示したように、須恵器食膳具を中心に出土している。器種は坏B蓋と坏B身、坏A、盤A、高盤で、1の坏B蓋や高盤のようなⅣ2古期にさかのぼるものもあるが、主にⅣ2新期が中心と思われる。土師器で図示できたものは赤彩埦のみで、通常法量の偏平器形のものとやや大型で深身のものとがある。

12. 15号溝出土土器（第173図）

14号溝と並走する溝で、出土土器が須恵器食膳具を中心とする点や須恵器の時期がⅣ2新期頃に位置付けられる点など、14号溝と併存した可能性が高い。1の坏B蓋特大は天井部平坦面の境に突帯をもつ器形のもので、大型宝珠形つまみを付すなど特殊金属器器種の蓋と思われるものである。当器種はV期に顕在化する器種で、この器種のものとしては古手に位置付けられる。

13. 27号溝出土土器（第173図）

4号土師器焼成坑と5号土師器焼成坑の奥壁に沿って、その斜面上方を切る形で掘られた溝で、両焼成坑の雨水排水として掘られたものと考えており、両焼成坑と同時併存する可能性の高いものである。また、溝は途中、3号土師器焼成坑によって切られており、その前後関係が重複から確認されている。出土土器は、須恵器食膳具を中心に出土しており、Ⅳ2新期を前後するものと判断される。土師器は大ぶり深身の赤彩埦と釜が出土している。赤彩埦は薄手で、底径の小さな器形のもので、当タイプの中では新しい様相のものである。釜は口縁端部を長く折り曲げるもの。いずれもⅣ2新期のものと判断される。

14. 32号溝出土土器（第174図）

18号土師器焼成坑の左側壁に沿って、その北西側に、斜面に直交する形で掘られる溝で、18号土師器焼成坑と併存する可能性が高いものである。出土土器は須恵器食膳具が中心で、坏B蓋の口縁部やつまみ器形及び盤Aの体部外傾器形等からV1期に位置付けられる。土師器は小釜のみで、口縁端部が短く折れる器形をもつ。須恵器同様、V1期頃のものと考えて妥当である。

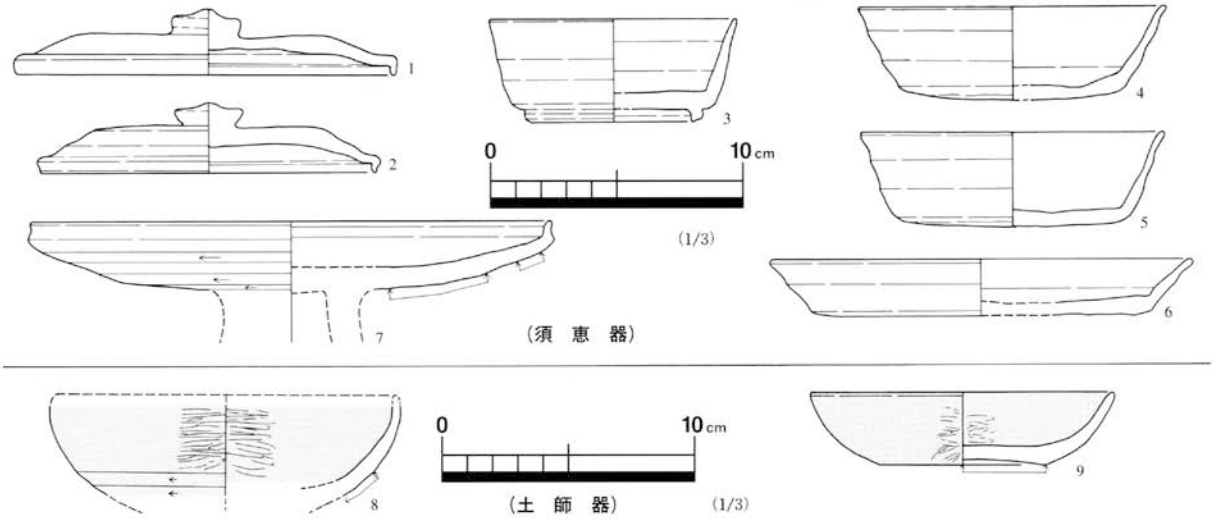
15. 35号溝出土土器（第174～177図）

7号土師器焼成坑、10・11号土師器焼成坑及び1号土器溜まりテラスの斜面上方に、等高線に沿って存在する雨水排水のための溝である。須恵器と土師器が大量に廃棄されており、半完形品も多く、図化可能な資料が多い。

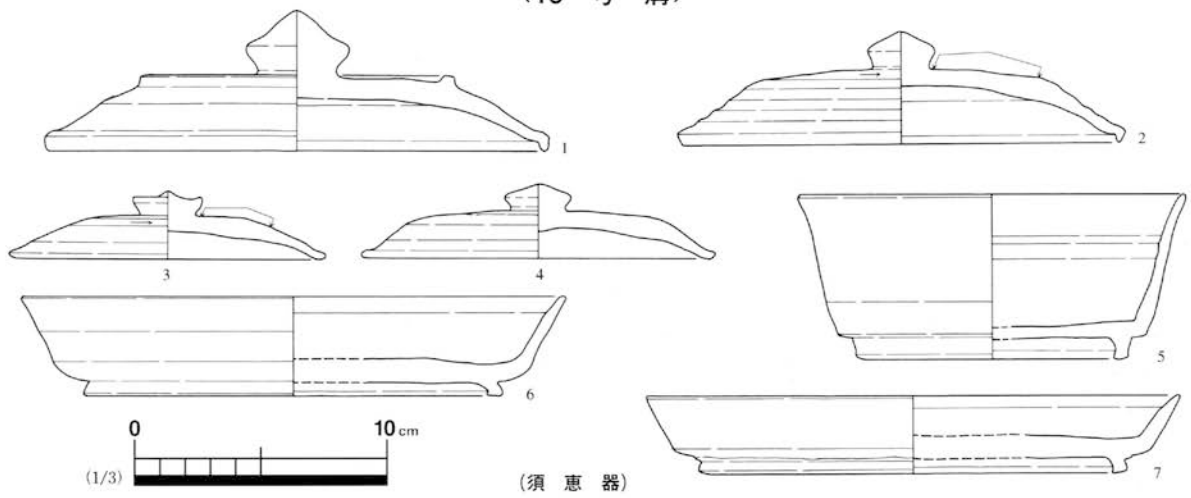
須恵器は主に食膳具が出土している。1の口縁端部丸くなった坏B蓋や6の底部薄い坏B身、18の体部外傾器形の坏AがⅥ1期に、21の底面削りを施す大型の盤AがⅣ2古期に位置付けられるが、他は概ねⅣ2新期からV1期の範疇に収まるものである。

土師器は、赤彩埦、小釜、釜、鍋、甑の他に土製馬形、台付鉢、円筒形土器が出土している。台付鉢の出土が目立ち、55の甑はほぼ完形品である。赤彩埦は、偏平気味の28と一般的器形の29、小型で深身を呈する30、薄手で大ぶりを呈す31がある。30の小型深身タイプはV期以降主体化する器形と言えるが、他のものはⅣ2古期からの系統にあるものと言える。いずれも底面削りを施し、31の体部外面は磨き調整を省略するが、他は内外面磨きを施す。小釜・釜・鍋も口縁端部器形等（端部へ肥厚して面形成する器形や端部短くつまみ上げないしは内側に段をもつ器形）から見て、須恵器同様、Ⅳ2期からV1期に位置付けられるものと考える。43・44の釜の底部叩き出しの上端に縦方向削りはなく、内面当て具痕も明瞭に残すなどの特徴が見られる。Ⅵ期に下る資料は少なく、42・48のような口縁端部を薄く長くつまみ上げる器形のものが、それに該当する。甑は口縁部上端を面形成し、その下に1～2段の稜を形成する一般的な器形のもので、胴部に叩き成形痕を残すものが目立つ。底部は筒抜けとなって内側に肥厚する通常の器形に加え、脚状に短く外屈させる58も存在する。58の粘土紐積み痕を見ると、胴部下位付近で粘土接着の角度が逆転しており、この部位で倒立させ、胴部下位から脚部までを最後に積み上げ

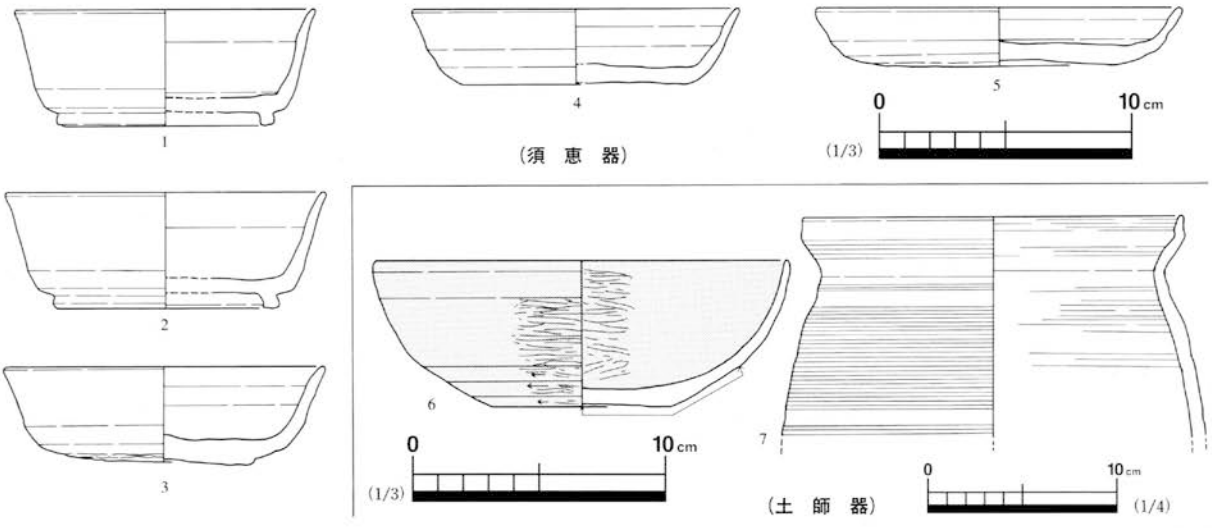
〈14 号 溝〉



〈15 号 溝〉

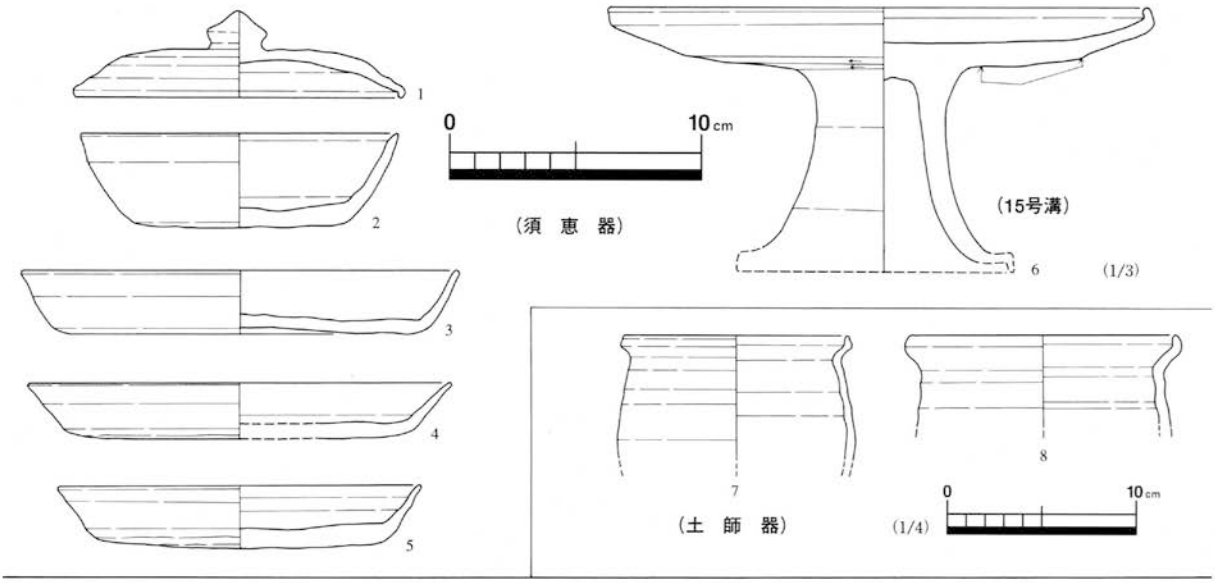


〈27 号 溝〉

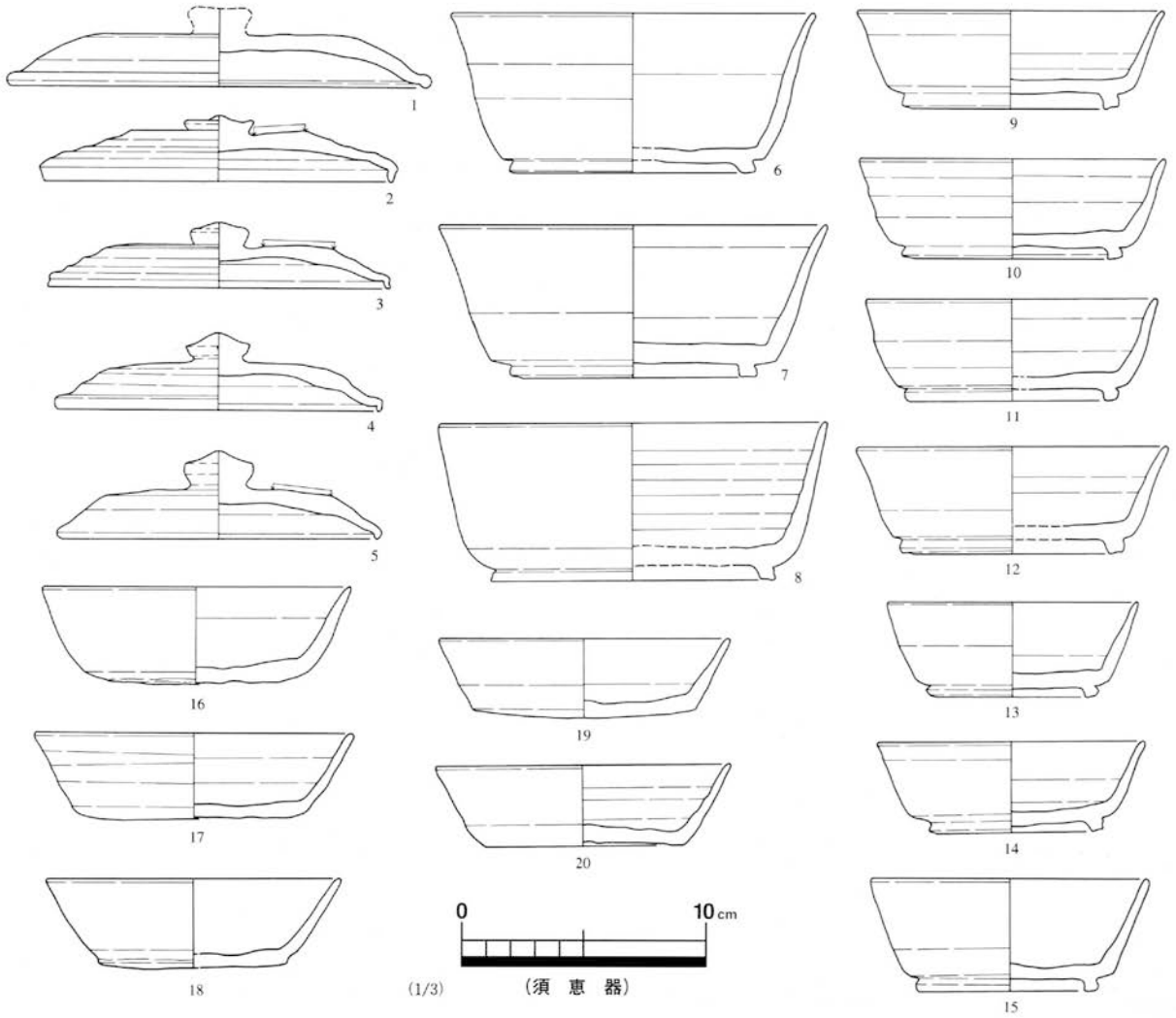


第173図　14号溝・15号溝・27号溝出土土器

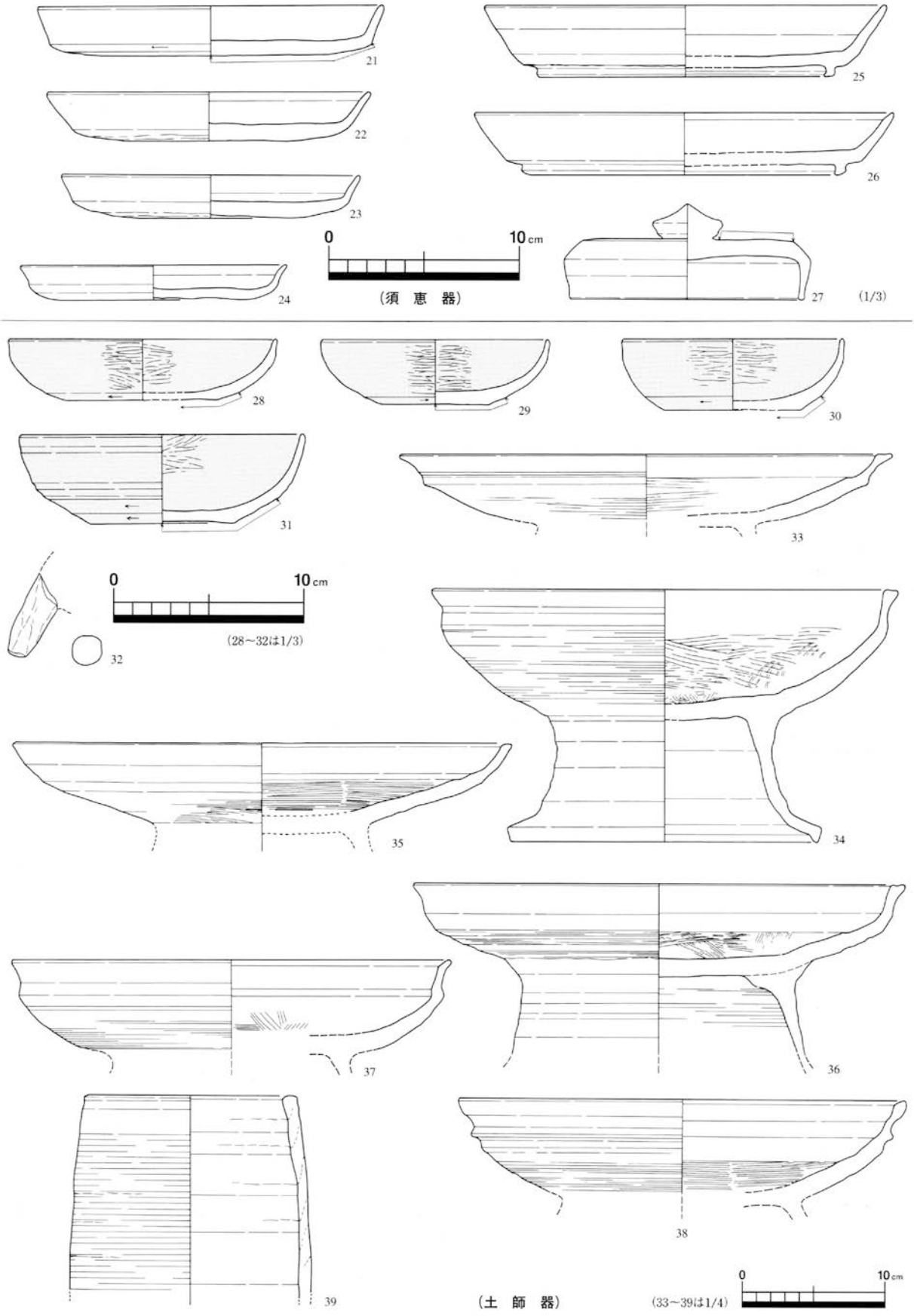
〈32 号 溝〉



〈35 号 溝〉



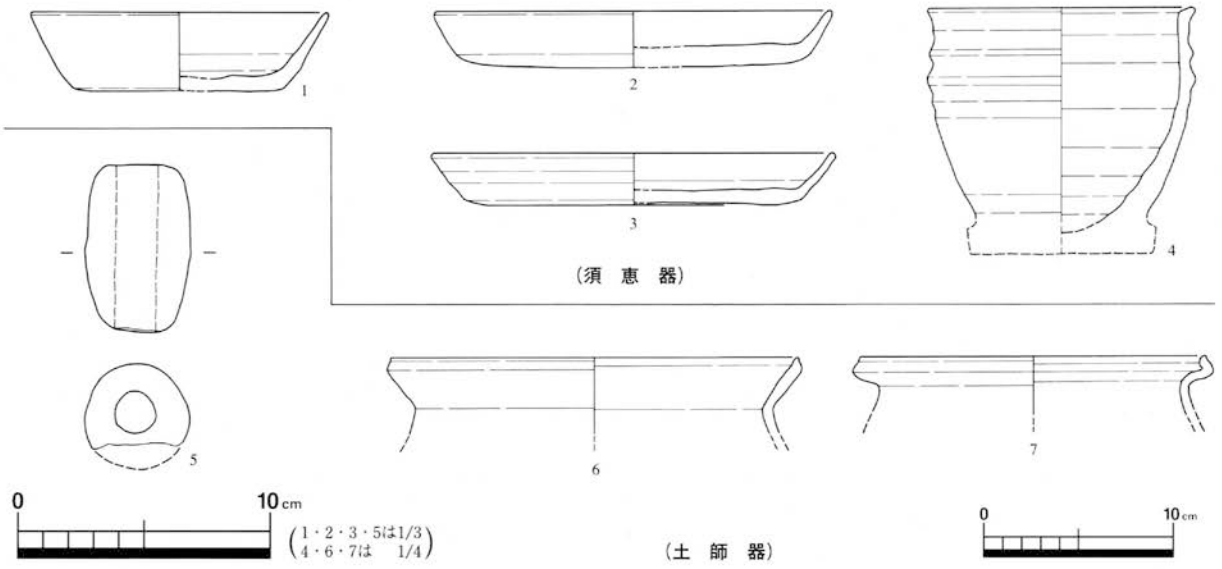
第174図　32号溝出土土器・35号溝出土土器 1



第175図　35号溝出土土器 2

第176図　35号溝出土土器３

〈36 号 溝〉



第177図　35号溝出土土器４・36号溝出土土器

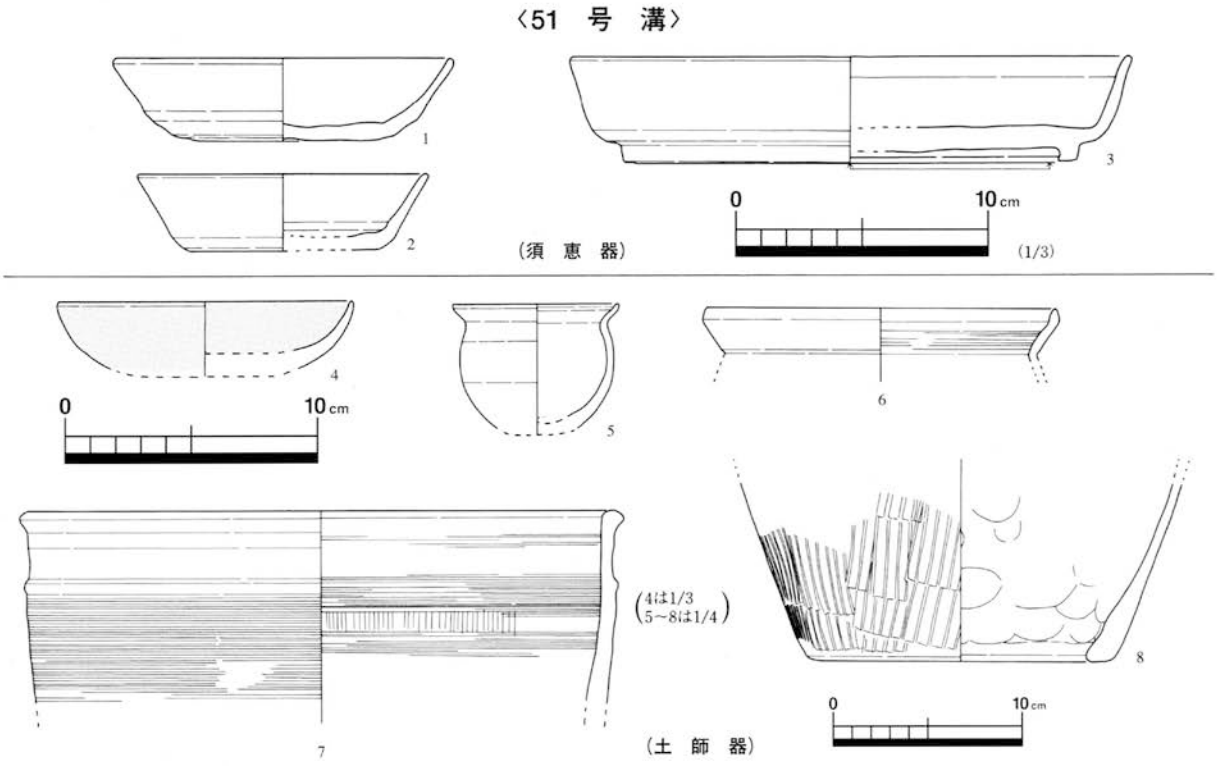
成形していたことが伺われる。成形には叩きが伴い、最終的な調整は脚部までの成形が完了した後、全体を施したものと予想する。台付鉢は鉢部器形が丸底気味となる鍋に似た器形のものと、槽型を呈するもの、浅い盤型を呈するものとがある。当資料では鍋型を呈するものが主体で、完形に図化できた34は、底部を丸くするための内面からの叩き出し痕（同心円文当て具痕）が残る。体部は直立気味となり、口縁端部は面形成する。脚は透かしなしで、脚端へ向かって外反する。37も同様の器形と言えるが、33・35・36は類似器形を呈するものの、底部があまり丸くはならずに、やや浅身を呈するものである。体部直立する箇所が折れて、稜を形成する33のような器形もある。同様の脚部が付くことから、基本的には同系統と言えるものであるが、浅身のものは口径の大きなものが目立ち、中には三足の付くものが定量存在した可能性がある。38も丸底気味となる鍋型器形を呈するものだが、体部立ち上がり部分がつまみ出しの稜を形成するものである。須恵器の稜形成に似ているものがある。円筒形土器は口縁部がそのまま筒状を呈すもの。土製馬形は棒状の足部のみの出土である。

16. 36号溝出土土器（第177図）

35号溝が斜面の等高線に沿ってクランク状にうねる箇所を直線的に連結する溝で、ある時期、35号溝の一部とかす溝である。７号土師器焼成坑を切って存在しており、前後関係がはっきりしている。出土土器は35号溝に比べると著しく少なく、図化できたものは須恵器坏Ａと盤Ａ、鉢Ｆ、土師器釜、管状土錘のみである。主に須恵器の器形からＶ1期前後のものと考えて妥当である。

17. 51号溝出土土器（第178図）

２号土師器焼成坑の斜面上方に等高線に沿って掘り込まれる細い溝で、２号土師器焼成坑の雨水排水を目的とした溝と考えられる。出土土器は少なめで、須恵器では坏Ｂ蓋、坏Ａと盤Ｂ、土師器では赤彩埦と小釜、釜、甑が確認される。斜面上方にある須恵器窯灰原の流れ込みも定量想定されるため、出土土器は溝の時期をそのまま示すとは限らない。ただ、土師器赤彩埦や釜の口縁端部つまみ上げ器形などから考えて、土師器はＶ1期を前後する時期のものが主体的であり、２号土師器焼成坑の時期に対応していると判断する。なお、８の土師器甑の底部付近の破片についてだが、胴部下位から底部付近まで外面叩き痕を明瞭に残す。叩き後に調整はなく、内面の無文当て具痕も無調整のままで残っている。粘土紐積み成形叩き痕の可能性がある。



第178図　51号溝出土土器

（３）１号土器溜まりテラス出土土器（第179～183図）

７号土師器焼成坑の南東側を一部切って掘り込まれる浅い竪穴状テラスに大量の須恵器、土師器が廃棄されている。鉄滓やフイゴ羽口の出土もあり、様々な遺物が混在して捨てられている。堆積土層は灰層であるため、土師器焼成に伴う廃棄土器が定量を占めると判断されるが、短期間で捨てられた土器ではなく、複数時期に及ぶものである。35号溝との接合関係もあり、時期も類似するなど出土土器には関連性がある。

須恵器は坏Ｂ蓋、坏Ｂ身、坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂ、埦Ａ、埦Ｂ、徳利形小瓶、水瓶、双耳瓶、甕など多くの器種が出土し、出土量も多い。量比については以下の表のとおりで、食膳具の出土が目立つ。須恵器の時期は、Ⅳ2新期～Ⅴ1期を中心にもち、Ⅳ2古期に位置付けられる２・４・21とⅤ2期に位置付けられる６・17が少なからず含まれる。また、Ⅵ1～Ⅵ2期に位置付けられるもの（14・22～25・28）も定量存在し、一見時期が連続するかのようだが、35号溝と同様に、Ⅳ2古期とⅤ2期・Ⅵ1期の須恵器は少なく、Ⅳ2新期～Ⅴ1期を中心とする時期とⅥ2期を中心とする時期の大きくは２時期に分けられる。食膳具中心のため、特筆すべき器種は少ないが、その中では26の球胴を呈す双耳瓶と28の平底中甕について述べる。26は底面に切り離し痕の確認できない平底の瓶で、下膨れの胴部器形を呈す短胴のものである。両肩に把手の痕跡があり、双耳瓶と思われるものである。器形から出現期に近い時期のものと予想でき、三耳形態の可能性が高い。28は底面にロクロ軸痕と思われる円形窪みの確認される平底甕で、外面は胴部下位手持ち削りの後に、下端から底面にかけて叩きを施すものである。内面に対応する当て具はなく、基本的には底部境の角を潰す程度の当て具を伴わない叩きであったと予想する。内面胴部下位には胴部成形に伴うと思われる横軸方向の当て具痕（木製無文当て具）が並び、縦軸の叩きに伴う当て具痕は確認されていない。

土師器は赤彩埦、赤彩坏Ｂ蓋、赤彩高盤、内黒埦Ａ、内黒埦Ｂ、内黒皿Ｂ、内黒高盤、非黒色埦Ａ、非黒色埦Ｂ、非黒色皿Ｂ、長頸瓶、小釜、釜、鍋、甑の他、台付鉢の脚部破片、円筒形土器、管状土錘（３個体）、土製馬形の足、足付き盤か釜の足、土製分銅、窯道具の可能性が高い匣鉢状土器なども出土している。須恵器同様に、Ⅳ2新期～Ⅴ1期を中心とする時期とⅥ1期からⅥ2期を中心とする時期に分けられ、仮に前者を古期、後者を新期とし、口縁部計測値を表にしたのが、以下のものである。古期は赤彩食膳具類、新期は内黒土師器ないしは土師器の食膳具類で、前者は金属器系ないしは須恵器系器種、後者は施釉陶器などの瓷器系器種を生産する。古期の食膳具が占める割合は４％と低く、これは赤彩埦の低率に影響されてのことである。通常の当期の赤彩埦率は１割近いのが一般的で、当資料の３％は例外的に低い率と言える。これに対し、新期の食膳具率は34％の高率を占める。まだ、煮炊具主体の生産だが、徐々に食膳具へ主体を移す生産へ変化していることがわかる。赤彩の食膳具から内黒の食膳具へ変化する段階で、生産の様相が変化することを物語る。煮炊具では古期・新期ともに鍋の率が比較的低く、古期では釜の率が高く、新期では小釜の率が高い。また、古期では甑と円筒形土器が目立ち、

器種	坏Ｂ蓋	杯Ｂ身	坏　Ａ	盤　Ａ	盤　Ｂ	埦　Ａ	埦　Ｂ	皿　Ｂ	食膳具計	鉢　Ｂ
口縁計測(○/36)	224	103	256	116	63	24	8	7	831	5
占有率	27.0	12.4	30.1	14.0	7.6	2.9	1.0	0.9	89.2	4.9

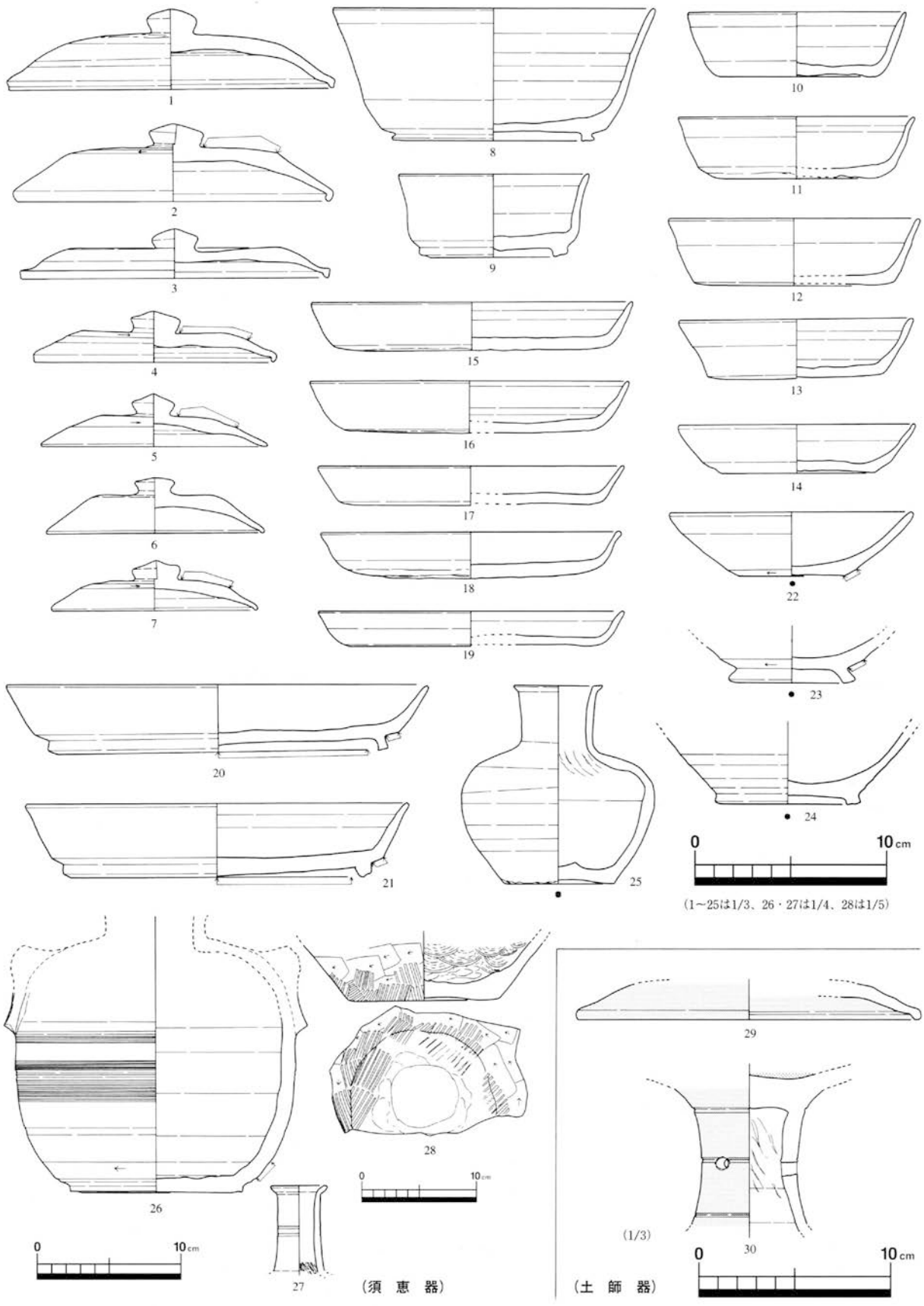
器種	小　瓶	水　瓶	瓶　Ａ	瓶　Ｆ	壷ＡＢ	壷Ａ蓋	壷　Ｆ	横　瓶	中　甕	貯蔵具計	合　計
口縁計測(○/36)	26	20	4	14	3	7	9	6	7	101	932
占有率	25.7	19.8	4.0	14.0	3.0	6.9	8.9	5.9	6.9	10.8	

第36表　１号土器溜まりテラス出土須恵器器種構成表

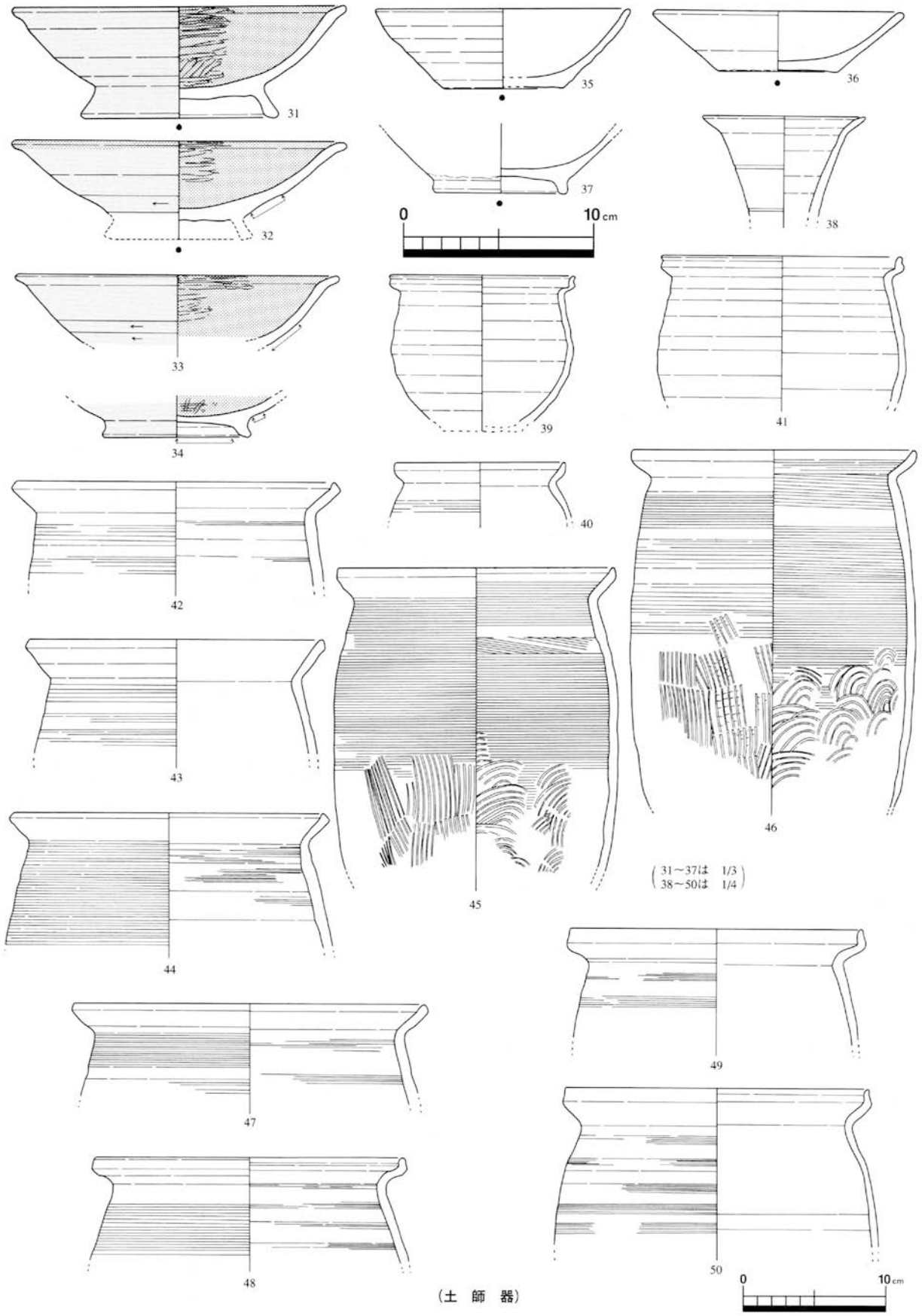
器種	赤　埦	赤坏蓋	長頸瓶	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	円筒形	合　計
口縁計測(○/36)	19	7	6	107	14	256	65	69	78	621
占有率	3.1	1.1	1.0	17.2	2.3	41.2	10.5	11.1	12.6	

器種	黒埦Ａ	黒埦Ｂ	黒皿Ｂ	土埦Ａ	土埦Ｂ	土皿Ｂ	匣　鉢	小釜小	小釜大	釜	鍋	合　計
口縁計測(○/36)	26	65	10	80	24	25	39	187	21	132	71	680
占有率	3.8	9.6	1.5	11.8	3.5	3.7	5.7	27.5	3.1	19.4	10.4	

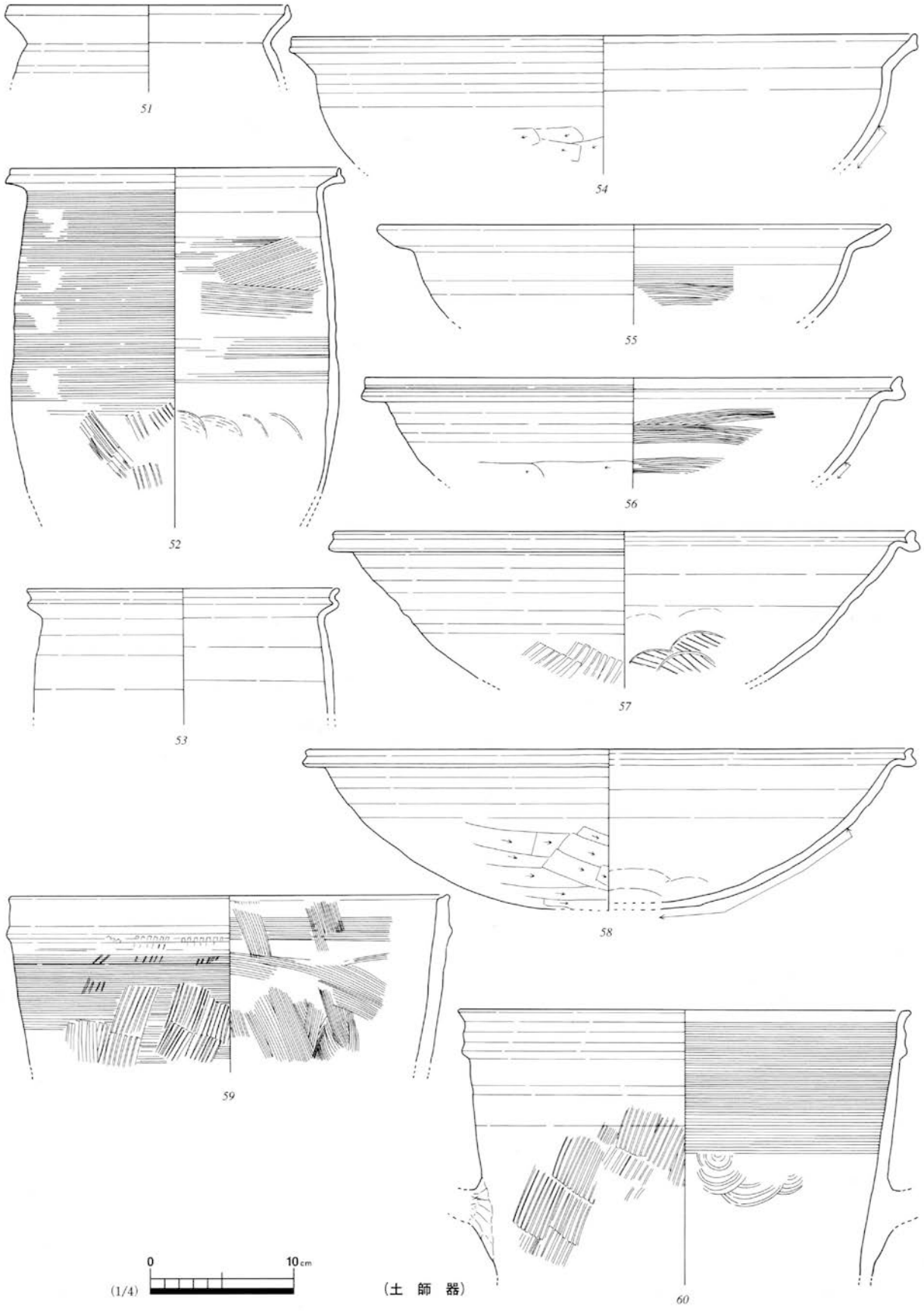
第37表　１号土器溜まりテラス出土土師器器種構成表（上段はⅣ2新期～Ⅴ1期中心、下段はⅥ1期～Ⅵ2期中心のもの）



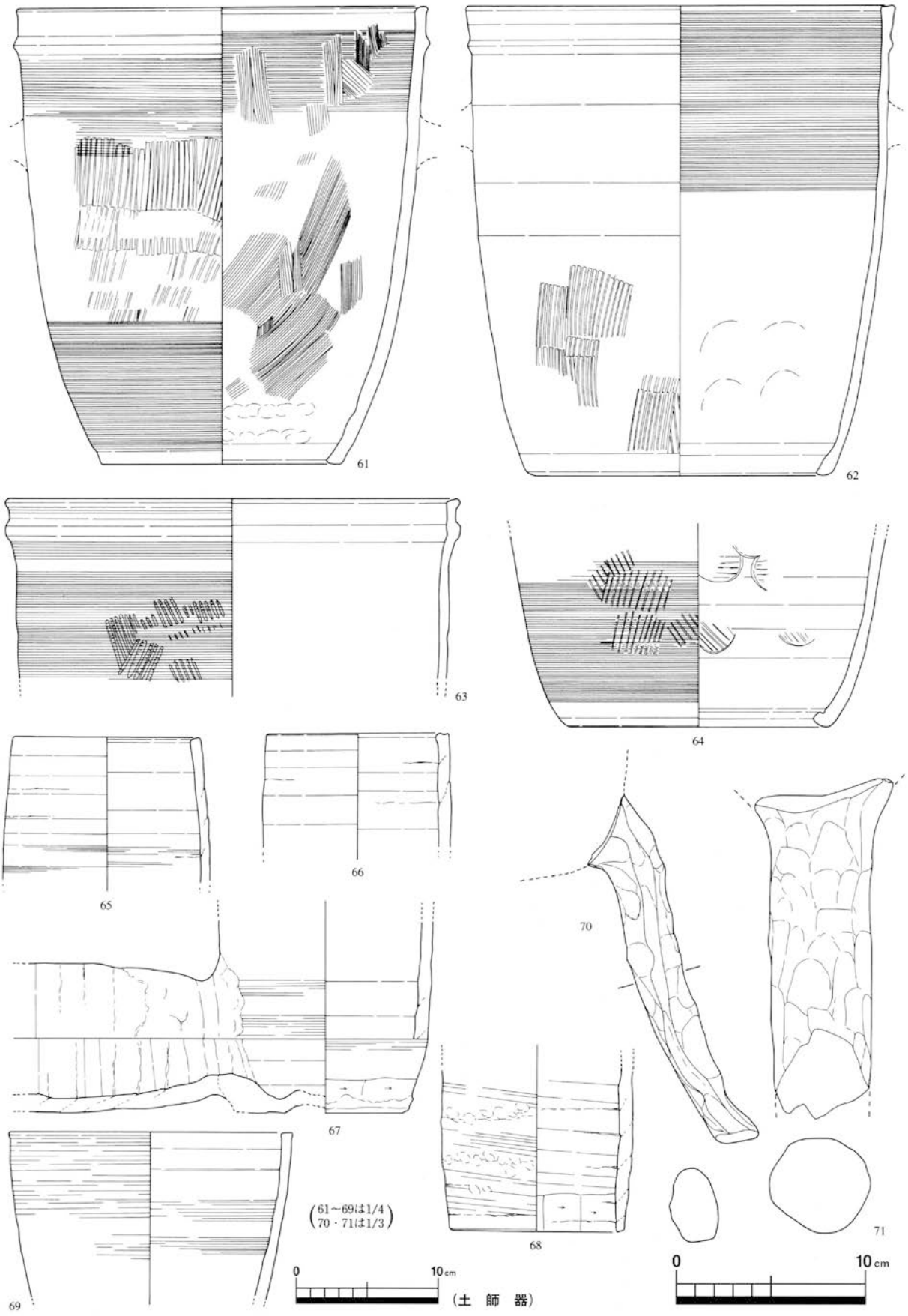
第179図　1号土器溜まりテラス出土土器1



第180図　1号土器溜まりテラス出土土器2



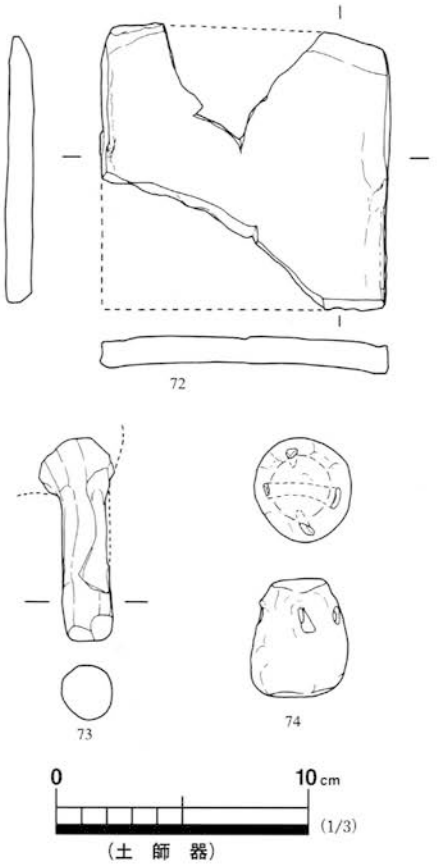
第181図　1号土器溜まりテラス出土土器3



第182図　1号土器溜まりテラス出土土器4

比較的高率を占める。甑は新期になると激減し、低率となるのが一般的で、新期と断定可能なものは確認しえなかった。

古期の土師器食膳具は、赤彩で占められるが、一部高盤で内面黒色したもの（30）が確認される。脚部がやや太い大型のもので、脚に3方の円孔透かしの入る特殊品である。外面は赤彩が施され、内黒土師器としては古手の資料と言えよう。南加賀窯跡群の初期内黒土師器は、坏Bや高盤など須恵器系器種であることが多く、特殊品として生産されているのが特徴である。新期の土師器食膳具は、内黒と非黒色となった土師器が近似した量比で存在する。器種は内黒が椀B、非黒色が椀A主体で構成され、皿の率は低い。図示できた31～33の内黒椀Bはいずれも口縁部強く外反する口径17㎝台の大型のもので、高台が長く踏ん張る器形をもつ（31）。内面磨きは丁寧で、外面赤彩する。器形や法量から特殊品と思われる。非黒色の35～37の椀A、椀Bは底面に糸切り痕を残すもので、雑なつくりをもつ。器形などから考えても、Ⅵ2期ないしはⅥ3期頃に位置付けられるもので、上記の内黒椀よりも後出するものと考えている。



第183図　1号土器溜まりテラス出土土器5

煮炊具は40の口縁端部短くつまみ上げる小釜が古期、39・41の長く反るように口縁端部を折る小釜が新期に位置付けられる。釜も同様の理由で、42～48を古期、49～53を新期に位置付けられる。古期の口縁端部は端部へ向かって肥厚するだけのものが主体的だが、口縁端部を短くつまみ上げるもの（42・45）や短く折り曲げるもの（48）が定量存在する。新期のものは53の口縁部長くS字状に折り曲げる器形が最も新しく、折り曲げの短い49～52がその中では古く位置付けられる。口縁端部器形からこの一群はⅤ2期に溯る可能性はあるが、52の胴部当て具には木製無文当て具が使われており、新期の可能性が高いと判断する。鍋も口縁端部の折り曲げ器形によって、54・55を古期、56～58を新期に位置付けできる。新期の口縁部の折り曲げはS字状となり、折り曲げが強調される。また、57の底部には丸底にするための叩き出し成形痕が残っており、内面には平行線文当て具が明瞭に残る。新期の鍋で叩き成形痕を残すものはまれであるが、丸底化に際して叩き出し成形が使われていた可能性を物語る。甑は大半が古期に位置付けられるものと考えるが、62のみは口径大きく薄手に作られる点、外面なで調整である点、内面当て具が無文である点などから新期に位置付けられる可能性が高い。また、64についても内面平行線文当て具が使われており、その可能性がある。他は古期のもので、全体的に厚手で、胴部叩き成形痕が残る。内面にも同心円文当て具痕が残るものがあるが、多くは縦刷毛調整が施される。

食膳具・煮炊具以外の器種としては円筒形土器が目立つ。古期のもので、基本的に新期へ下る資料はない。叩き成形するものはなく、粘土紐積み痕を残し、積み上げの際の粘土圧着した指痕跡が残る68がある。66のように、底部筒抜けが基本と言えるが、67には底部があり、さらに底部付近には横口連結するように円筒形の部分が伸びる。本体の円筒形部分よりもひとまわり細いもので、連結箇所はさらに絞っている。横瓶の口頸部成形するような形で、胴部側面に円孔を開け、そこから順次粘土紐を積み上げながら成形して行く方法をとる。粘土紐痕が内外面に残り、ナデツケが施されるだけで、回転利用した調整はない。この部分の成形に縦刷毛が施されるものが定量あり、また、横断面正円形ではないことが多いことから考えて、この部分の成形には回転台は使われず、かなり雑に成形されたことが伺われる。連結部をもつ個体は他にも数点確認例があり、当器種の用途を考えるうえで重要な資料と言える。なお、同様の古期に位置付けられるものとして、須恵器瓶Aと同様の器形、法量をもつ

つ土師器質に焼けた38がある。須恵器器種を土師器焼成坑で焼いたものか、須恵器製作途上品を土師器焼成坑の道具として使用したものかは不明。

時期比定が困難なものに、70・71の大型足部破片、72の方形板状土製品、73の土製馬形の足部破片、74の土製分銅がある。方形板状土製品は厚さ1cm、大きさ10cm程度の正方形に近いもので、左右側面は垂直に切るが、上下端面は斜めに切る。用途不明のものである。土製馬形は比較的足の細いもの。土製分銅は円筒形に近い雑な作りのもので、上方に四箇所の刺突があるが、貫通するのは一方向のみのものである。大型足部破片は太さ5cm以上の極めて大型を呈する71と三足付きの鉢か釜の足と思われる70とがある。前者は足が真っすぐ伸びるもので、足の長さは少なくとも17cm以上を測るものである。他の足部破片とは形態的に異なっており、容器の足部破片ではない可能性もある。後者は足の高さが15.5cmを測る高足を呈するもので、獣足意匠をもつ一群の獣足鉢・盤類よりも後出する可能性が高いものである。10世紀以降に増加する三足の器種につながるものと理解する。

（4）土師器焼成坑下方堆積灰原出土土器（第184～190図）

土師器焼成坑の立地する緩斜面下方には焼成坑からかき出された灰層が累積して厚い灰原を形成している。須恵器窯灰原と重複しているため、全て須恵器は除外し、また、焼成坑の時期（Ⅳ1期～Ⅴ2期）とは異なる土師器をも除外して提示したのが以下の資料である。確認される器種は、食膳具では埦と坏B蓋・身、盤A、盤B、高盤、それに灯明台として使われただろう口縁部外屈する坏。煮炊具では小釜、釜、鍋、甑、羽釜、台付鉢。貯蔵具では小型壺類。さらに、特殊品として獣足付鉢ないしは盤、円筒形土器、置竈。土製支脚や分銅形土製品、円盤形土製品、土製馬形、土錘などの土製品も多く確認される。口縁部計測値による器種構成比率は、以下の表に示したとおりで、食膳具が全体の16%、特殊品の比重も多い。

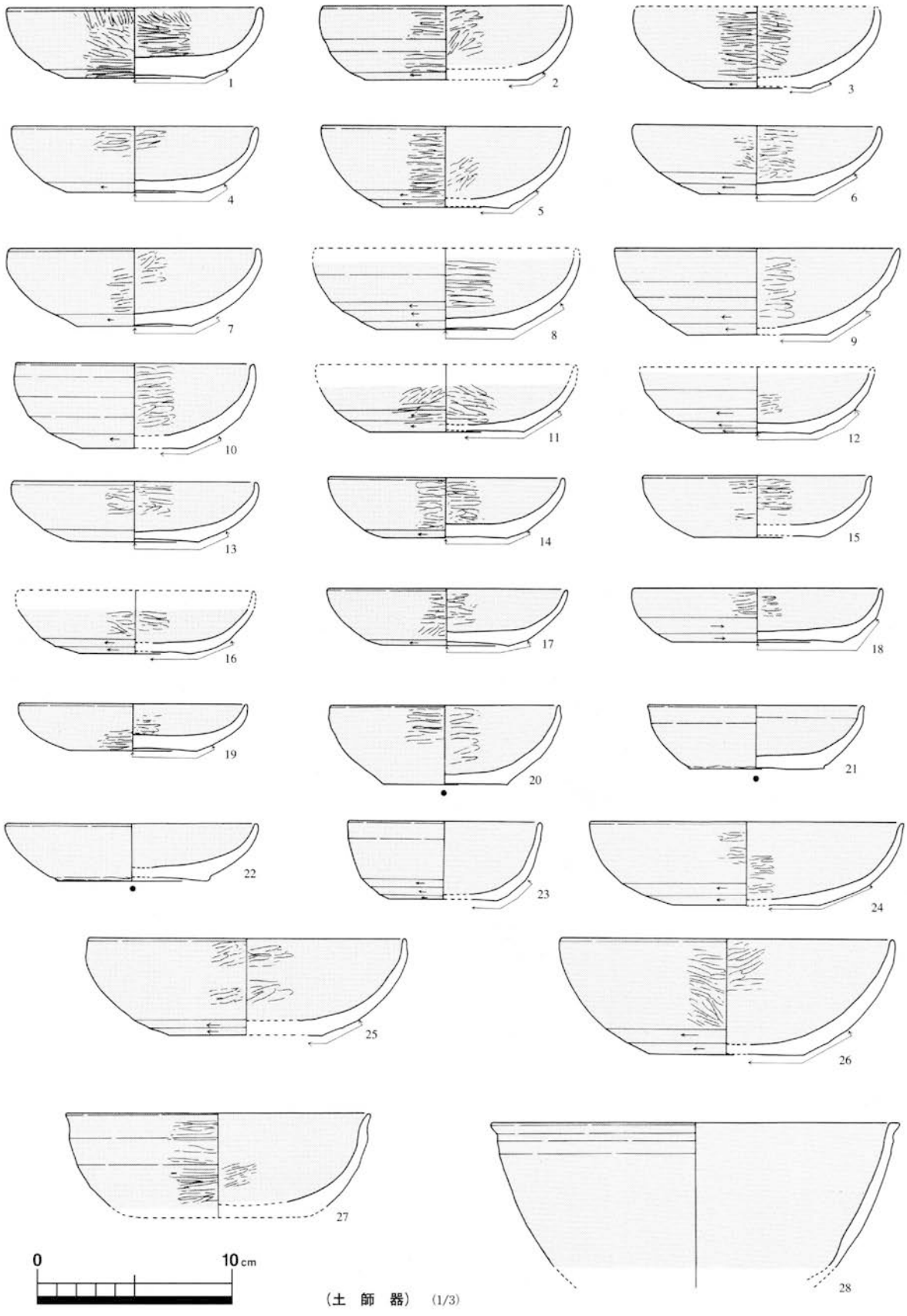
食膳具はいずれも赤彩を施すもので、埦が過半数を占め、次いで坏B蓋が目立つ。

埦は口径11～14.5cm程度の通常法量をもつ一群と16cm以上の大型法量をもつ一群に分けられる。通常法量は、底部径大きく偏平器形を基本とするが、その中でも偏平系統のものと深身のものとがあり、また、体部外傾器形や底径の大きさなどからも細分される。最も一般的と言えるa類器形は、1・2・4で、底径大きく偏平基調、底面削りを施し、内外面磨きを施すものである。これに対し、深身厚手の一群をb類とし、より偏平器形を呈す一群をc類とする。b類（3・5・10）は底径小さく体部内湾して立ち上がる器形で、底面削りは入念。磨きも内外面に入る。c類（11～19）はa類に比べて体部の開きが強いもので、比較的薄手に作られる傾向がある。18は底径大きく特に偏平器形を呈するもので、他のものとは異なる器形をもつ。基本的にはa類系統と言えるが、底径がやや小型化して体部開き気味となり、やや深身を呈す一群（d類、6～9）がある。体部外面ナデ調整を基本として、磨きは内面にのみ施される。後出の器形と考える。以上は、底面削りを基本とするものだが、調整なく底面に糸切りを残す一群（e類）がある。概して口径小さく、やや深身を呈す20・21と偏平器形の22がある。大型法量は深身を基本とする。器形から通常法量と同様の器形をもつa類と口縁部が短く外屈するb類（27）、口縁部上端に面をもつ鉢状器形のc類（28）に分けられる。そしてさらに、a類は偏平器形の24・25と深身器形の26に細分される。また、口径10cm未満の小型深身の23があるが、薄手のもので、磨きはなく、後出するものだろう。

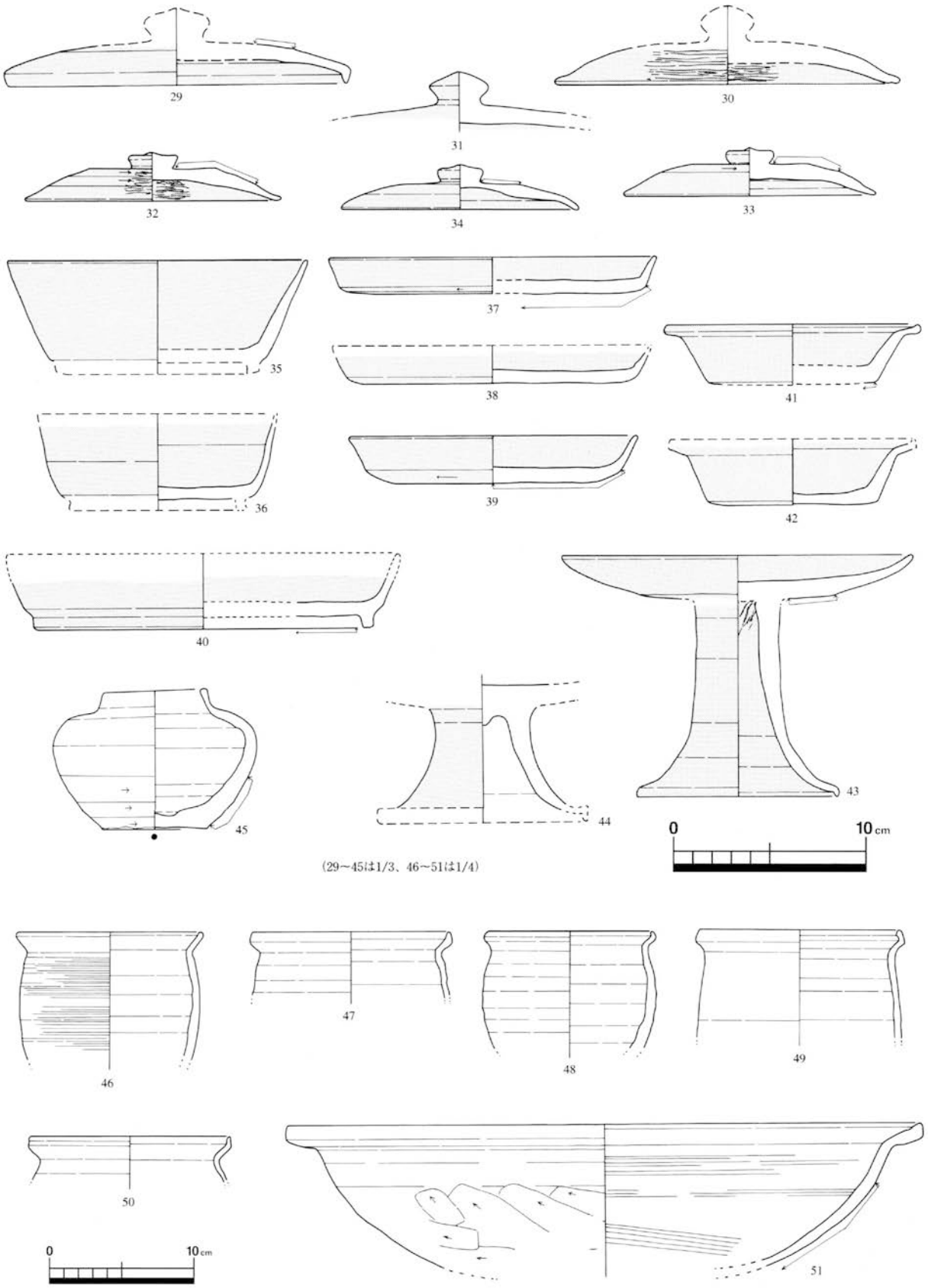
埦は底部糸切り器種だが、他の坏型器種は全て底部ヘラ切りのものである。坏Bは蓋・身ともに大法量と中小法量がある。基本的に須恵器坏Bと同様の器形をもつが、蓋の大法量に関しては口縁端部折り曲げが微弱か折り

器種	小型埦	大型埦	坏B蓋	坏B身	盤A	盤B	高盤	小壺	台付鉢
口縁計測（○／36）	684	15	151	42	52	16	21	9	51
占有率	11.2	0.2	2.5	0.7	0.9	0.3	0.3	0.1	0.8
器種	小釜小	小釜大	釜	鍋	甑	羽釜	置竈	円筒形	合計
口縁計測（○／36）	1,491	54	1,465	1,520	436	4	5	77	6,093
占有率	24.5	0.9	24.0	24.9	7.2	0.1	0.1	1.3	

第38表　斜面下方灰原出土土師器器種構成表（Ⅳ1期～Ⅴ2期の土師器のみ対象）



第184図　斜面下方灰原出土土器1

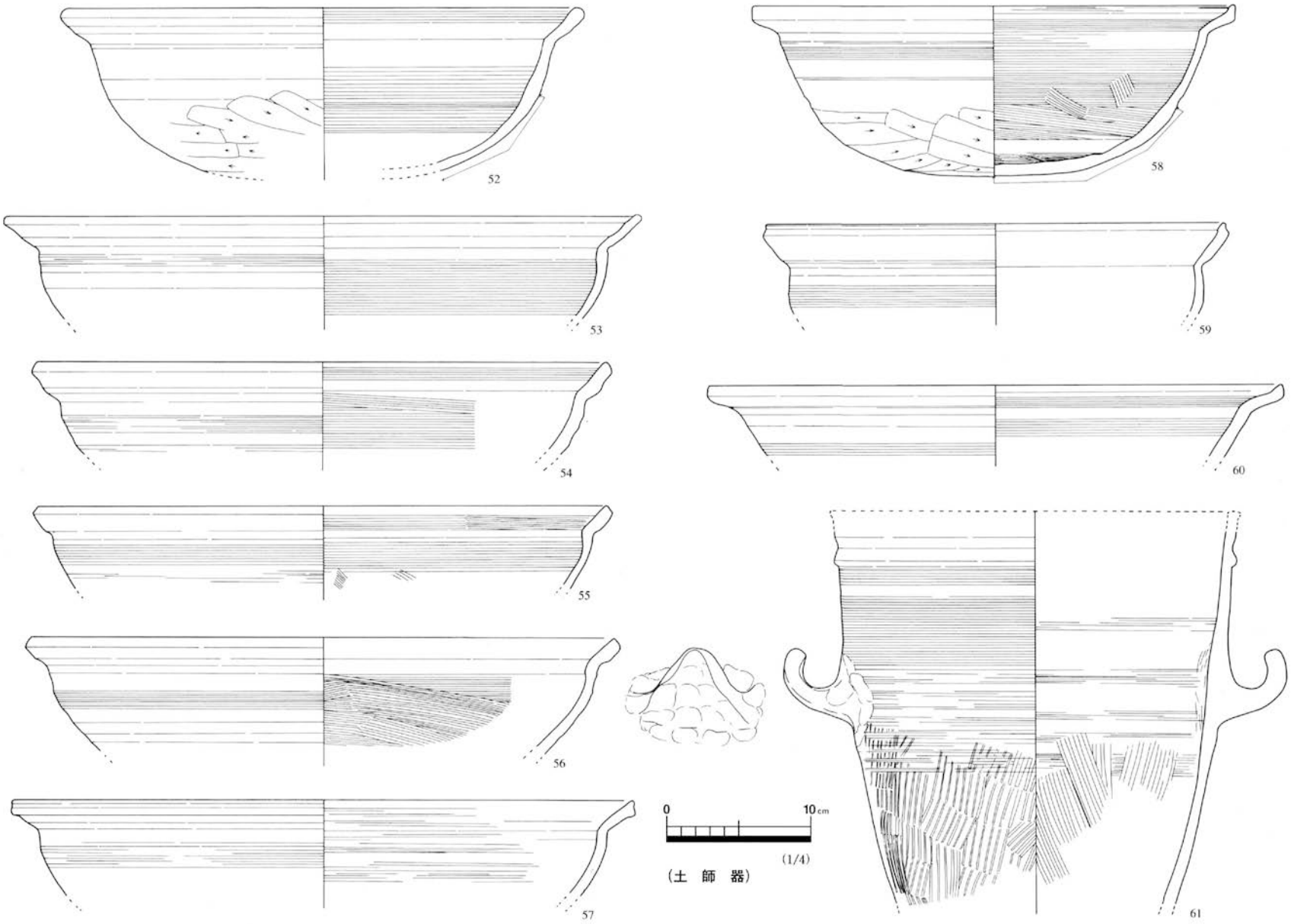


第185図　斜面下方灰原出土土器２

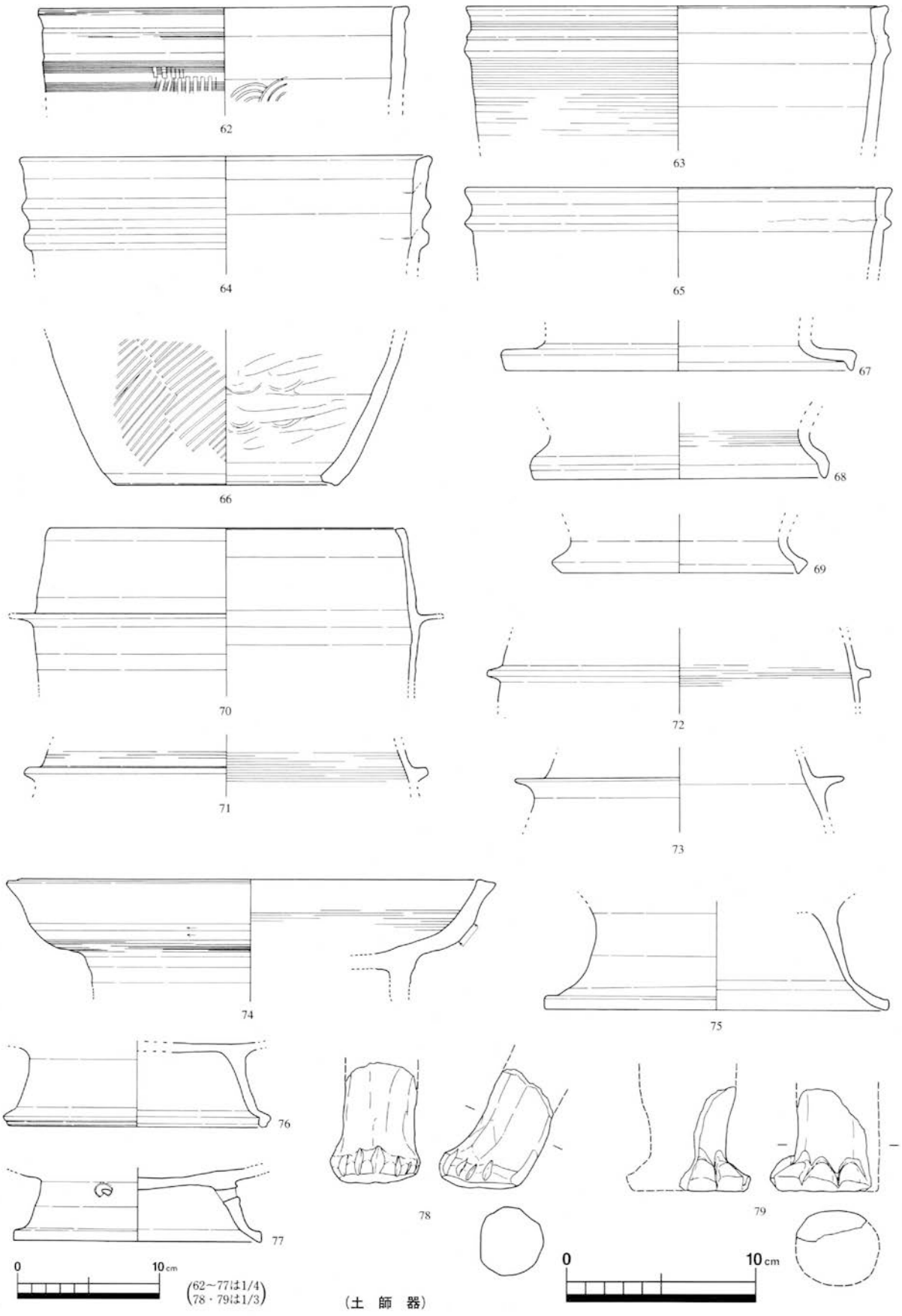
曲げなしが定量を占める。高盤の口縁端部の折り曲げも同様の傾向があり（43）、その点が須恵器とは様相が異なる点である。盤類は須恵器器形と基本的に同様で、無台盤の底面削りの頻度が須恵器よりも高い。磨き調整を施すものは例外的で、ナデ調整が基本である。坏Aの赤彩は極めて稀で、基本的には対象となっていない。ただ、41・42のような口縁端部を外屈させる折縁口縁の無台坏がある。須恵器でも田嶋Ⅲ～Ⅳ期に定量存在する器種で、これに脚の付く器種もある。油煙痕の付着など灯明台と理解される器種であり、須恵器でも土師器胎土が使われるなど火を使う器種に位置付けられている。

煮炊具では小釜と釜、鍋が25%前後と均衡した数値をもち、生産器種の過半数を占める。ただ、3器種のうち、図示したものは少なく、特筆すべきものも出ていない。甑は7%を占める。口縁部上端に平坦面をもち、その下に1～2段の稜を形成する器形で、底部はそのまま筒抜けとなるものと脚状に短く外屈するものとがある。前者が過半数を占めるが、脚状の底部も定量を占める。煮炊具では、他に台付鉢と獣足鉢、羽釜がある。台付鉢は大型の鍋に類する鉢部に台脚状のものが付く器種で、深い鉢部をもつものが多いが、浅い盤状を呈すものも存在する。また、口縁部器形も多様で、台付鉢として上げたものの数%は3足の獣足が付く獣足鉢である可能性をもつ。当資料では獣足は出土しているが、鉢部まで遺存するものはなく、足部だけの出土である。足部と鉢部との接合は足側に臍を切る差し込み式で、足を貼付接合したものはない。足は79のように直立するものもあるが、斜めに踏ん張る形態が主で、80のように外側上端に膝のような屈曲部をもつものもある。足端部には指や爪などの獣足装飾が施されるものが多く（78・79）、ないものはその部分が広がって裏側に平坦面を形成する（80・81）。足は比較的低いが、太く重厚な作りのものである。羽釜は全体的に薄手の作りを呈す。器形から、鍔が短く端部面形成するカキ目調整のa類（71・72）と鍔部が長く薄いもので、口縁部は長く立ち上がるb類（70・73）に分けられる。9世紀後葉段階の資料に羽釜が存在するため、ここで提示したものも下る可能性がある。ただ、a類のような器形は確認されておらず、当期まで溯る可能性をもつため、提示した。煮炊具器種ではないが、煮炊具同様に大粒砂粒を含む器種に置竈と円筒形土器がある。置竈は上部掛け口付近の破片（83）と側面炊口付近の破片（84）が出土している。いずれも叩き成形痕を残し、後者には内面同心円文当て具痕が残る。炊口には貼り付けの短い庇が付き、粗く面取り整形している。円筒形土器は口縁部有段式の85とそのまま立ち上がり口縁部端面形成する86がある。底部は筒抜けの87と底部をもつ88があり、後者の体部下位には横口が連結する。横口部の断面形は楕円で、外面調整は縦方向の刷毛調整が施されるなど、この部分の成形が横回転可能な成形台上で行われなかった可能性を物語る。他の横口部の成形も同様の特徴をもつ。

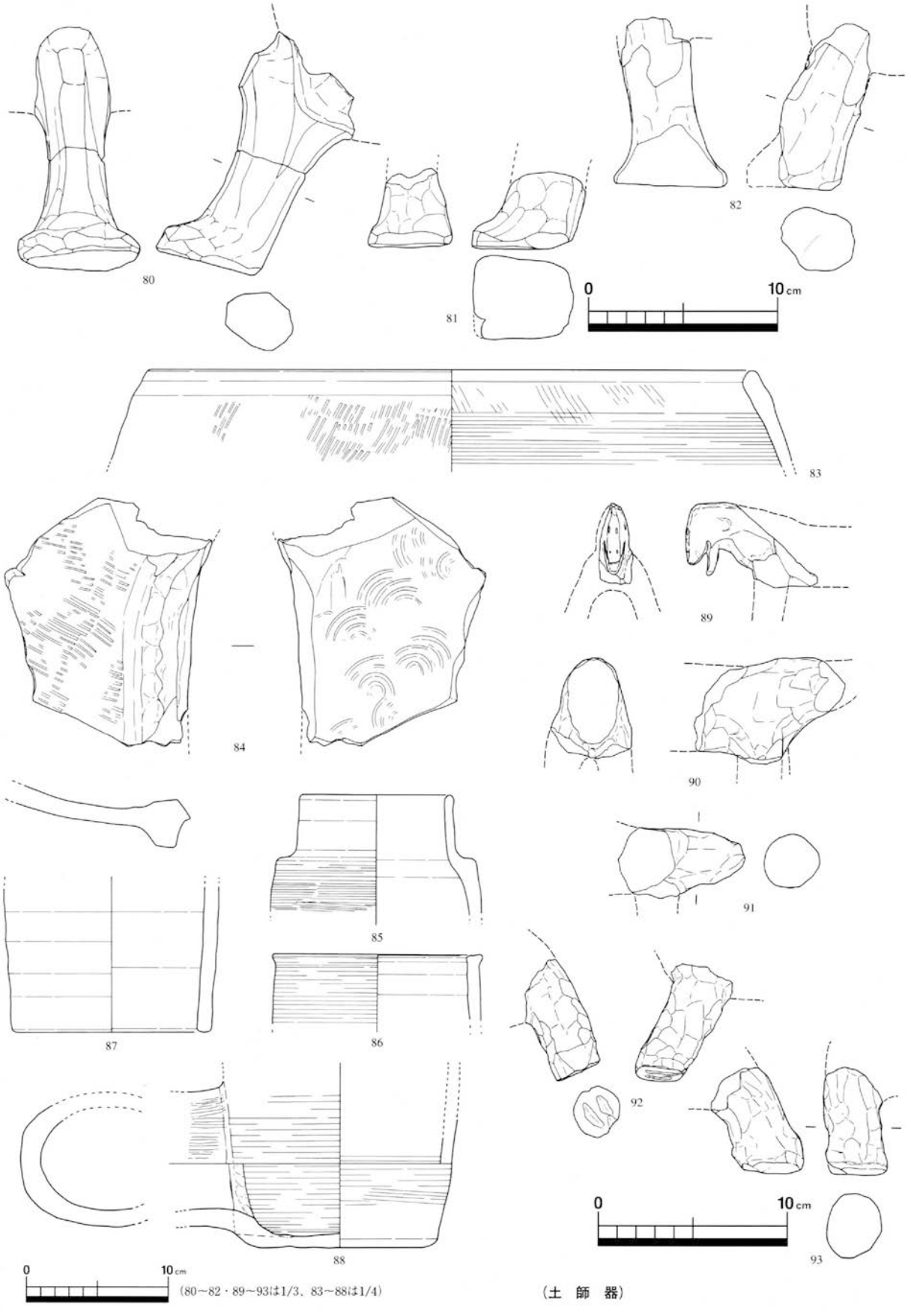
土製品では管状土錘、支脚状土製品、土製馬形、分銅型土製品、円盤型土製品がある。管状土錘は図示した35点の他、破片で61個体確認している。いずれも棒状のものに粘土を巻き付けて管状としたもので、長さにより3分類できる。a類（101～123）は6～7cmのもので、重量55～95gを測るもの。重量と土錘の太さとは比例関係にあり、細い117はこの中で最低重量、太い109は最高重量を測る。当資料の中では最も主体的な類型である。b類（124～133）は長さ4～5cmのもので、重量10～25gを測るものである。a類同様、重量と径は比例関係にあり、細い128は最低重量、太い124は最高重量を量る。数量的にはこの2類型で、ほぼ占められるが、僅かに長さ3cm以下のc類（134・135）が存在する。これについても、太さと重量は比例し、重量10～2gの間で分布する。支脚状土製品（100）は上部へむかって窄まる中空で円錐形を呈すものである。縦方向にヘラナデを施す、雑な作りのもので、竈支脚と予想する。土製馬形は、89の頭部破片、90の胴部破片、91の胴部端（尾）破片、92～99の足部破片が出土している。頭部や胴部から裸馬と予想でき、足部は短く太い傾向がある。特に、92の足端面には2本の線刻があり、蹄状を呈す。分銅型土製品は竿計り分銅の土製模造品と思われるものである。須恵質のものが多いが、当資料のように土師質のものも定量存在している。特に、137の縦穴円錐形のものは、土師質のみで、消費遺跡では額見町遺跡、生産地では二ツ梨グミノキバラ窯跡で出土している。136は山傘状の切り込みをもつ銅製分銅の模造品タイプで、頂部欠損するが、作り出しの鈕か鈕はめ込みの穴が頂部に付くものである。また、石製品のため、欄外扱いではあるが、146の石製分銅が出土している。横穴台形型のもので、石製分銅に多いタイプである。横穴には細かく欠けた部分があり、紐などを通した使用痕と予想する。つまり、実用品として使われた可能性をもつもので、石製分銅を土製品で模造する事例もあり、石製品に関しては実用品と判断するの



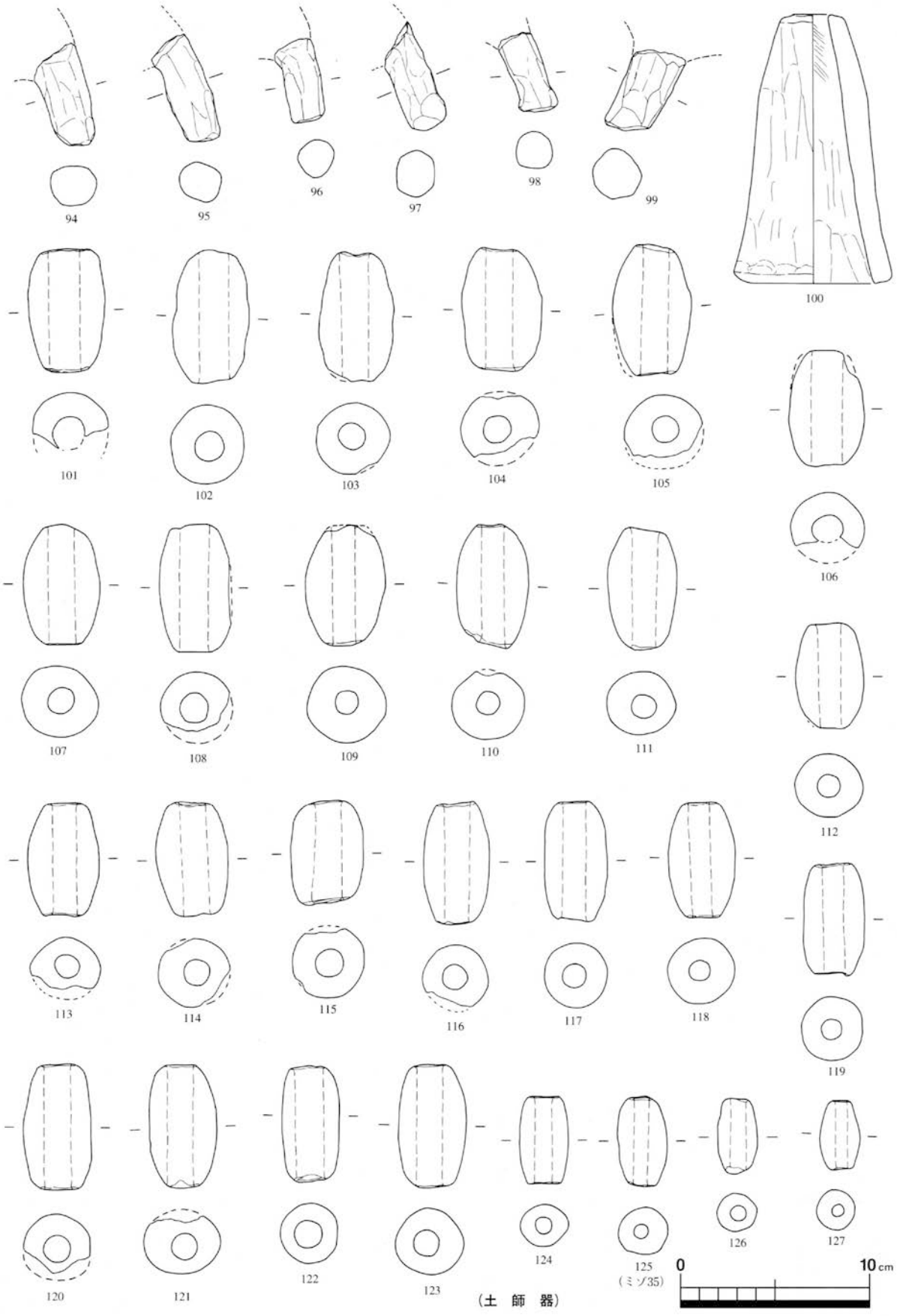
第186図　斜面下方灰原出土土器３



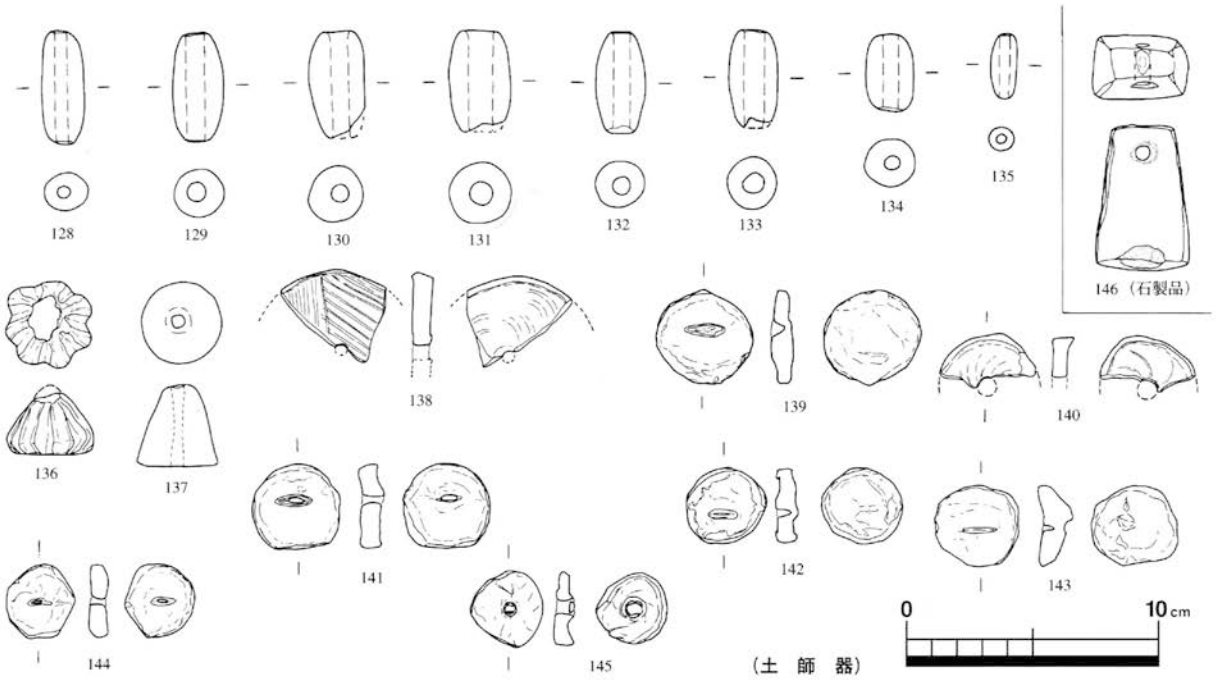
第187図　斜面下方灰原出土土器4



第188図　斜面下方灰原出土土器5



第189図　斜面下方灰原出土土器6（1/3）



第190図　斜面下方灰原出土土器７（1/3）

が妥当と考える。円盤型土製品は、いずれも円形に切り取った痕跡をもつ土製品で、径6㎝前後で叩き成形痕をもつ138と径3～4㎝前後、厚さ1㎝弱の139～145に分けられる。前者は、外面に平行線文叩き痕、内面に同心円文当て具痕を残し、中央に外面側からの穿孔をもつものである。頸部が細いが、横瓶口頸部接合の際の切り取り円盤の可能性をもつ。後者は風船技法で成形する長頸瓶の頸部切り取り円盤であると予想する。内面側に絞りによる縮み皺をもつ140・145と特に痕跡をもたないものとに分けられる。縮み皺は長頸瓶胴部成形の際の絞りきりに伴ってできる痕跡であり、そのような成形方法による長頸瓶のものである可能性をもつ。円盤中央には、外面側から内面側へ刺突があり、貫通するものと貫通しないものの両者が存在する。刺突も長細いヘラ先状工具によるものと円形の棒状工具によるものとがあり、ヘラ状工具が主体を占める。未貫通のものが定量あることから、突き刺すことに目的があったもので、円盤を取る時に付いた痕跡と考えられる。

（５）Ⅳ1期からⅤ2期までの土師器様相

以上、土師器焼成坑に伴う遺物について述べてきたが、特にここでは、焼成坑で生産されたと思われる土師器群についてまとめる。なお、土師器編年は、共伴する須恵器の編年的位置付けから求め、序列したものであり、土師器の型式編年から求めたものではないことをことわっておく。

１．器種構成の変化

以下に示した表は、時期別及び全体の器種構成を口縁部計測値で示したものである。時期別のものは土師器焼成坑出土のものを須恵器の時期に帰属させて示したもので、全体の総計は土師器焼成坑の合計値に土器溜まりや溝、ピット、土坑、下方灰原出土土師器を加算したものである。

まず、土師器総計では煮炊具が82.4％の圧倒的多数を占める。煮炊具量は各時期を通じ、80～85％の高い率を保持し、小釜、釜、鍋の３器種がほぼ同量で構成される。３器種は各時期で多少の増減はあるが、20～30％の中で推移し、漸次増加や減少などの傾向は認めがたい。つまり、８世紀後半から９世紀前半は土師器主要３器種を生産の基盤としていたことを示しており、そのバランスが崩れなかったことに特徴がある。これは南加賀地域の様相の可能性が高く、Ⅵ期まで継続される。甑も各時期を通じて生産される器種だが、３器種に比べると少なく、５％台を越えることはない。少ない生産量の中での推移であるため、どの時期に画期があるかは特定しにくいが、Ⅳ期に比べ、Ⅴ期は漸次減少の傾向が見られ、それはⅥ期に入ると、顕在化する。甑の大型化と連動しており、特殊用具化したものと理解される。

当期の食膳具は基本的に両面赤彩を施す精製器種のみで構成される。全体では13.2%を占めるが、土師器焼成坑での割合は12%を越えるものはなく、Ⅳ2古期からⅤ2期へと漸次減少の傾向が見られる。これは埦の減少と比例する動きで、減少がそのまま食膳具の減少へとつながっている。これに対し、坏型器種には減少傾向は見られず、Ⅴ2期になっても一定量の生産を続ける。特に、Ⅴ期以降の盤類生産は注目され、須恵器では減産傾向が見られる盤Bの生産が目立ってくるのは特徴的である。逆の意味で、全体的な赤彩土師器生産の低下を示すものと言えよう。一方、Ⅴ期に入ると生産が低下する器種も多い。Ⅳ2古期にのみ生産が確認される坏Aや高盤などもⅤ1期には減少してくる。また、赤彩を施す小型短頸壷や長頸瓶の生産もⅣ2期のものであり、加賀市篠原遺跡ではⅣ1期に赤彩の薬壷型壷Aが確認される。Ⅲ期の本格的な窯場への土師器生産導入後、赤彩土師器生産はⅣ期に全盛期を迎えていることがわかる。Ⅳ2期はロクロ成形の赤彩埦の完成期であり、それと同時に衰退へと向かって行ったものと言える。ただ、Ⅴ2期までは食膳具は赤彩埦主体であることは変わりなく、北加賀などのⅤ2期の内面黒色埦・Ⅲ類への転換様相は南加賀では1段階遅れる。南加賀のⅤ2期の内面黒色埦類の確認は、Ⅴ2期終末頃に僅かに確認される程度で、同時に坏型器種も内面黒色で焼かれる。これも南加賀の特徴と言えるものだろう。

当期の特殊器種としては、台付鉢と円筒形土器がある。各時期に一定量の生産を行っているようで、全体では2%前後の率を保つ。円筒形土器はⅥ期に入るとほとんど確認されておらず、当期に顕在化した器種と言える。台付鉢もこの時期に生産のピークがある。獣足の付く獣足鉢の生産も当期に顕在化するものであり、台付鉢の盛行と呼応するものだろう。鉢部の器形や法量は類似しており、口縁部計測では獣足鉢の定量が台付鉢として計測されている。獣足鉢は1ランク上の用具であろうが、基本的には同様の用途で使われたものと考えている。台付鉢はⅥ期に入っても生産を続けるが、減少傾向にあるものと言え、また、獣足鉢の形態も大きく変化して行く。

器種名	Ⅳ1期		Ⅳ2古期		Ⅳ2新期		Ⅴ1期		Ⅴ2期		総計		
赤小型埦	0	0%	161	7.8%	248	7.6%	53	5.4%	42	3.6%	1,207	8.4%	食膳具総計 1,887 (13.2%)
赤大型埦	18	30.0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	78	0.5%	
赤坏B蓋	0	0%	12	0.6%	41	1.3%	10	1.0%	17	1.4%	238	1.7%	
赤坏B身	0	0%	12	0.6%	39	1.2%	8	0.8%	2	0.2%	103	0.7%	
赤盤A	5	8.3%	25	1.2%	14	0.4%	8	0.8%	25	2.1%	129	0.9%	
赤盤B	0	0%	0	0%	1	0.1%	9	0.9%	18	1.5%	44	0.3%	
赤高盤	0	0%	9	0.4%	13	0.4%	0	0%	0	0%	43	0.3%	
赤坏A	0	0%	41	2.0%	0	0%	0	0%	0	0%	41	0.3%	
黒埦A	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	4	0.3%	4	0.1%	
赤小型壷	0	0%	18	0.9%	6	0.2%	0	0%	0	0%	33	0.2%	貯蔵具計 39(0.3%)
赤長頸瓶	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	6	0.1%	
小釜小	3	5.0%	408	19.7%	839	25.7%	299	30.3%	322	27.3%	3,469	24.2%	煮炊具総計 11,815 (82.4%)
小釜大	0	0%	45	2.2%	81	2.5%	22	2.2%	63	5.3%	279	1.9%	
釜	11	18.3%	465	22.4%	1,008	30.9%	233	23.6%	335	28.4%	3,773	26.3%	
小型鍋	0	0%	0	0%	12	0.4%	0	0%	0	0%	12	0.1%	
鍋	0	0%	649	31.3%	661	20.3%	278	28.2%	288	24.4%	3,461	24.1%	
甑	23	38.3%	69	3.3%	167	5.1%	19	1.9%	34	2.9%	817	5.7%	
羽釜	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	4	0.1%	
小型鉢	0	0%	0	0%	6	0.2%	3	0.3%	5	0.4%	14	0.1%	特殊土器総計 596 (8.3%)
台付鉢	0	0%	59	2.8%	33	1.0%	43	4.4%	19	1.6%	205	1.4%	
置竈	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	5	0.1%	
円筒形	0	0%	102	4.9%	94	2.9%	2	0.2%	19	1.6%	372	2.6%	
合計	60/36		2,075/36		3,236/36		987/36		1,178/36		14,337/36		

第39表　Ⅳ1期～Ⅴ2期の土師器器種構成（口縁部計測値による○／36で示してある）

以上の構成表に提示していないが、他に特殊土製品として、管状土錘111点、分銅型土製品２点、当て具形土製品１点、支脚形土製品９点、土製馬形36点が出土している。いずれも土師器焼成坑生産品と思われるものであり、獣足鉢も含め、特殊製品の生産が目立つ。また、製品というよりも窯道具として使われた可能性が高い円盤形土製品38点と方形板形土製品１点、焼成粘土塊多数が出土している。

２．各器種の変遷

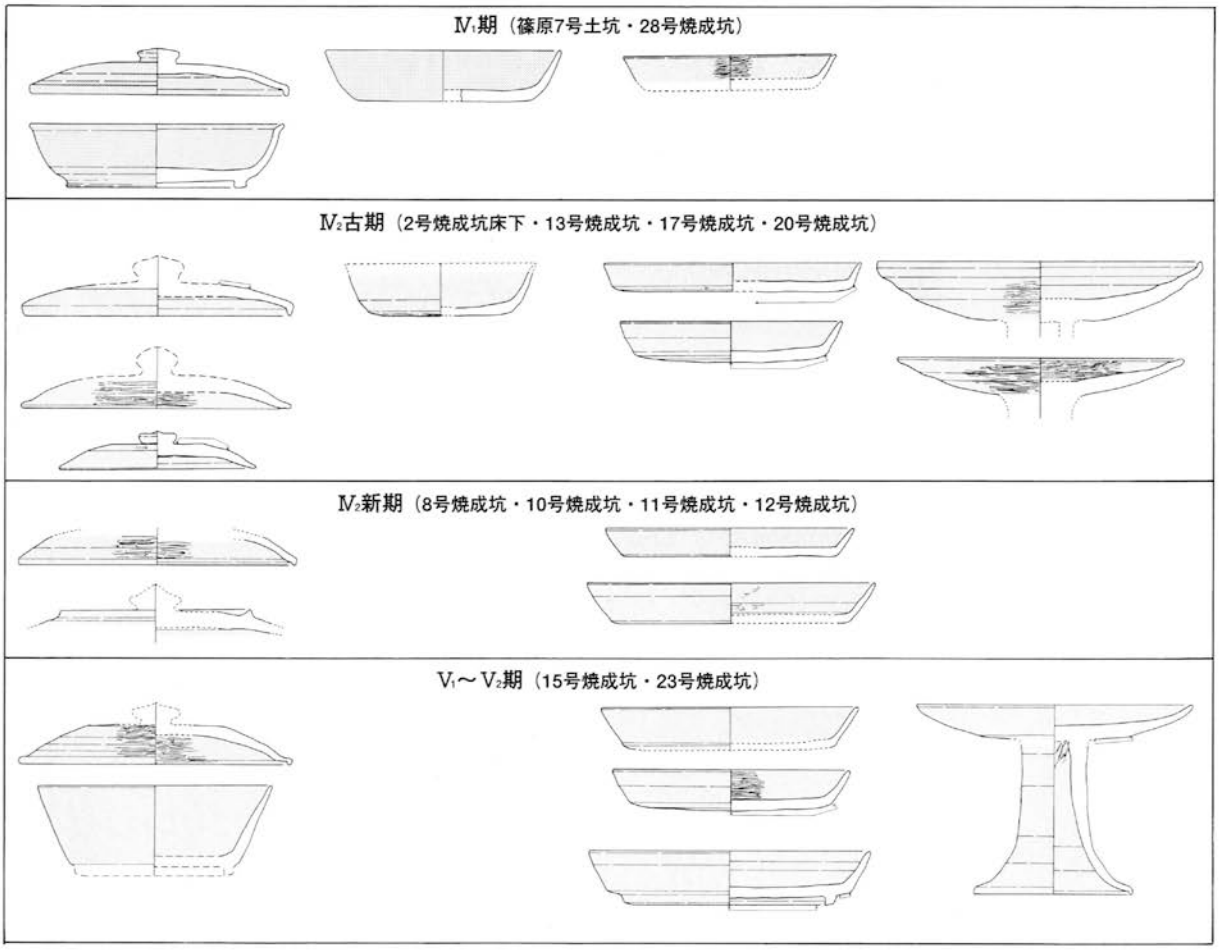
（１）赤彩土師器食膳具の変遷

《坏Ｂ》　全てヘラ切り器種で、蓋は磨き調整が入るが、坏身の多くは磨きが施されない。３法量分化や口径、器形特徴など須恵器坏Ｂを基本とする器種である。よって、器形変化の様相も、須恵器に準じた変化をたどる傾向をもつ。ただし、蓋口縁端部の折り曲げが微弱化するのは１型式程度早く現れる特徴があり、また、折り曲げない口縁部をもつ大法量が存在するなど、須恵器と異なる要素もある。全体的に坏身の出土が少なく、特にⅤ期以降はその傾向が強い。蓋の中で小法量の占める率が高いことを考えれば、蓋の中には埦類の蓋として生産されたものも存在していた可能性をもつ。

《坏Ａ》　器種構成で述べたように、坏ＡはⅣ2古期までは確認されるが、それ以降は消滅する器種で、赤彩する器種から除外されたものと考えられる。法量的に埦類との互換性によるものだろう。Ⅲ・Ⅳ1期で定量の坏Ａが存在していたこと、そして埦にヘラ切り器種が多かったことと関連性をもつだろう。Ⅳ2古期に生産量が増加する糸切り埦類に吸収されて言ったものと言える。底面ヘラ切りで、磨き調整は確認できない。

《盤Ａ》基本的にヘラ切り器種で、底面に削り調整を施すものが多く、底面切り離し痕の確認できないものがほとんどである。一部内面などに磨きが施されるが、頻度は低い。器形、法量ともに須恵器盤Ａと類似し、直立気味体部器形から外傾器形へと変化する。

《盤Ｂ》　基本的に須恵器盤Ｂと同様の特徴をもつが、須恵器では全盛期となるⅣ2期に目立たず、衰退してく



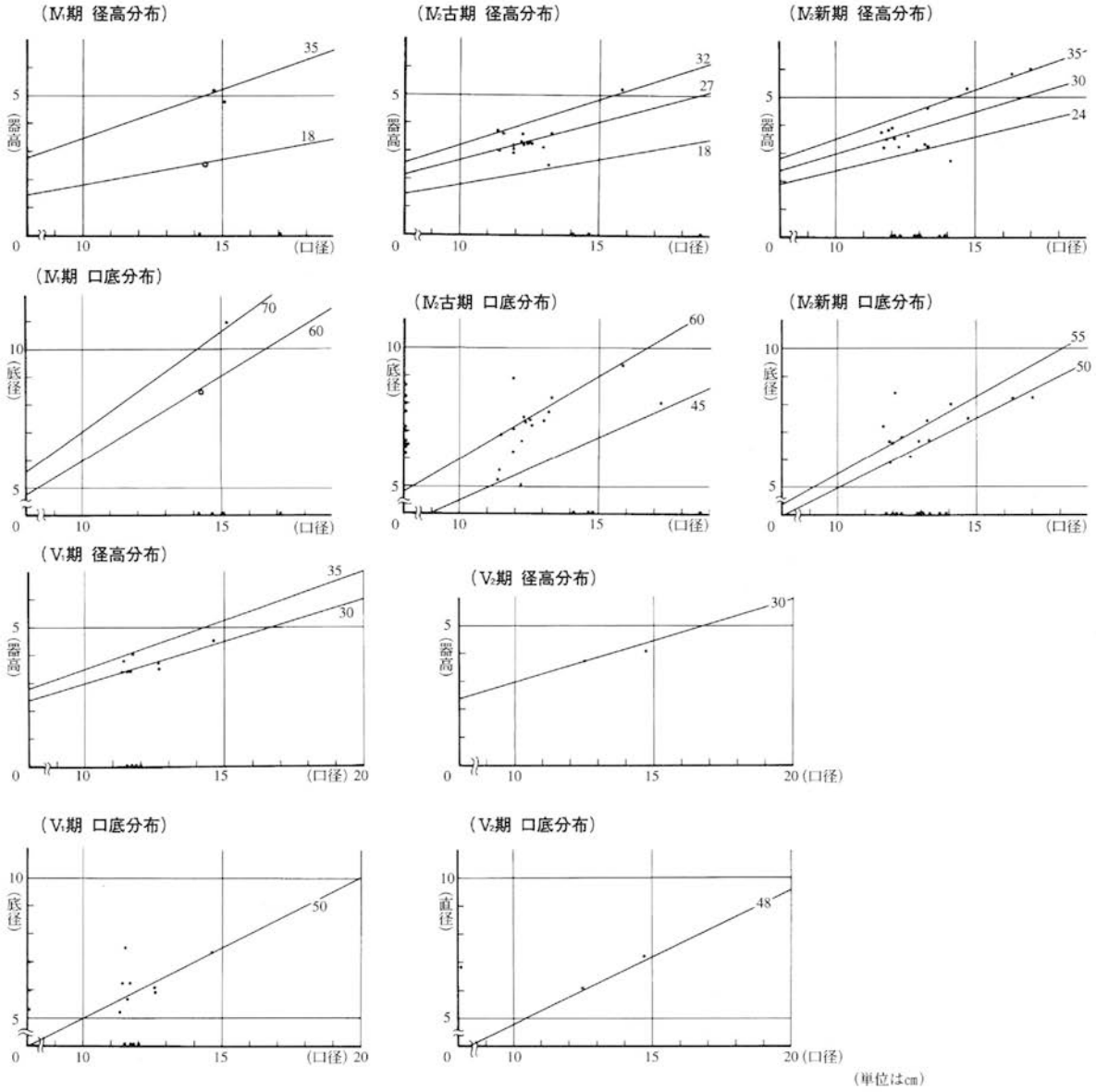
第191図　Ⅳ1～Ⅴ2期の赤彩土師器坏・盤類変遷図（1/5）

るⅤ期に増加する。須恵器よりもやや小型法量を呈し、底面には削りが施される。

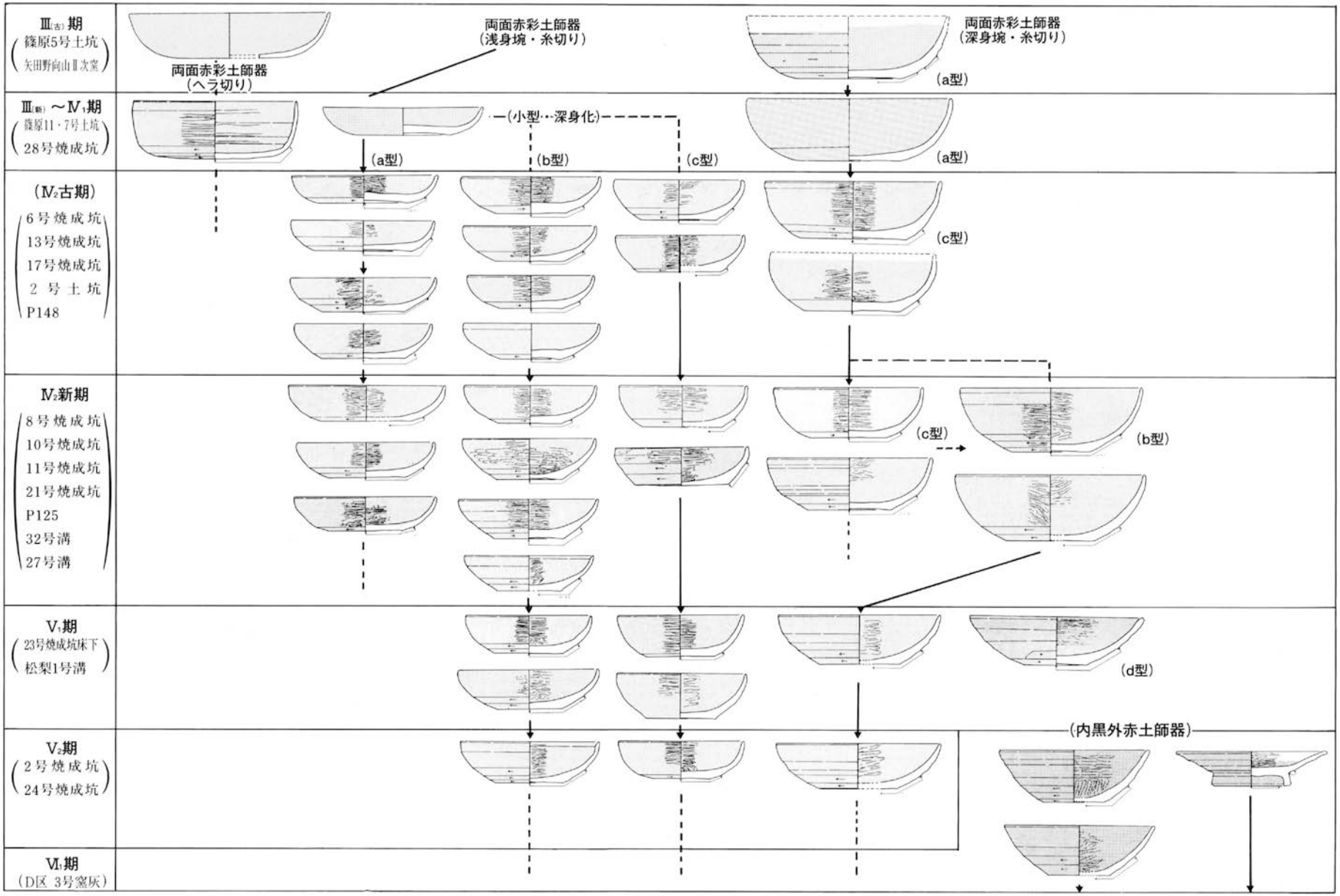
《高盤》　生産量は多くないが、一定量の出土が確認される器種で、蓋との識別が難しいため、構成表ではⅣ期で消滅となっているが、Ⅴ期まで存続する可能性の高いものである。蓋の口縁端部と同様の特徴をもち、しっかりと折り曲げる形態から折り曲げ微弱化して行く。また、端部折り曲げのない形態も同時に併存し、大型蓋と共通する。脚は徐々に基部が細く、長脚化し、盤部が小型化して行く。

《埦》　埦は底面削りが施されるため、底部切り離し痕を残すものは極めて少なく、破片も含め、糸切り痕を確認したものは僅か4点である。1％にも満たない数量であり、時期が新しくなるにつれて顕在化するといった訳でも無さそうである。確認できるものは糸切りに限られるが、Ⅳ1期に位置付けられる28号焼成坑出土の大型深身埦は、内底面や内面見込み、底面や立ち上がり器形などからヘラ切りであると判断される。体部には回転磨きが施され、出現期の赤彩土師器と共通項をもつ。二ッ梨一貫山窯のⅣ1期の埦は全てヘラ切りに限られるが、同時期ないしはその直前に位置付けられる篠原遺跡7号土坑・11号土坑では底面切り離しの境が明瞭な底部糸切りによる埦が主体を占める。つまり、Ⅳ1期は両技法が併存する時期で、二ッ梨一貫山窯資料では、Ⅳ2古期にはほぼ糸切り技法に統一されている。

さて、ロクロ成形埦の底部切り離しは、Ⅱ2期の出現当初は全てヘラ切りで、坏Aに類似する器形も定量存



第192図　赤彩埦A法量分布図



第193図　Ⅲ～Ⅵ1期土師器埦類変遷図（1/5）

在した。また、宮都的な坏Cを模倣した器形や放射状・螺旋状の暗文が目立ち、胎土を赤色調合して模倣するなど複雑な様相を示していた。Ⅱ3期も同様であるが、この時期に一部新たに糸切り技法が導入されたものと考えられる。糸切りの普遍化はⅢ期で、矢田野向山1号窯Ⅱ次窯の還元焼成された窯内出土の大型深身埦が生産地では最古事例となろう。また、越前坂井郡金津窯近隣の消費地資料（茱山崎遺跡）では当段階で糸切りがヘラ切りを凌いでいることを確認できる。地域差もあろうが、ヘラ切りから糸切りへの転換は、Ⅲ期の出現期からⅣ1期には急速に進行したものと理解したい。

Ⅳ2古期の埦は、糸切り技法に統一されるとともに、それまでの浅身3法量（小・中・大）、深身1法量（大）の多様な法量や器形が、浅身中法量（径高指数27前後、口径11～13cm）、深身大法量（径高指数32前後、口径15～17cm）に整理・淘汰される。当期の器形はそれまでの浅身（a型）を基本とはするが、全体的に口径は縮小し、器高／口径比は増して行く。それに伴い、小型化した一群に径高指数32前後の深身を呈す器形（c型）が出現し、一つの類型としてまとまって行く。また、浅身ではあるが、底径が小型化して体部外傾する一群（b型）も出現、全体的に底径／口径比が低下、それまでの坏形に類した器形から埦形へと変化して行く。Ⅳ2古期の埦形への傾斜は、Ⅳ2新期にb型主体化することによって顕在化し、全体的な底径／口径比はⅣ2古期の58前後から55～50に低下する。大型深身にもb型の底部小型傾向が見られるようになり、埦形が進行する。Ⅴ1期は底径大きな浅身器形のa型はなくなり、b型でほぼ構成されるようになる。また、口径はⅣ2新期からさらに縮小し、11cm台に集中。それに伴い径高指数は増加し、法量的にはc型との区別がなくなってくる。口径の縮小は、大型深身でより顕著に現れ、口径15cm程度に小型化してくる。以上の法量、器形での変化に加え、調整の簡略化がⅤ1期に見られてくる。基本的に赤彩埦の最終調整は、内外面ともに丁寧な磨きで、削りの後にも加えられるのが基本と言えるが、外面の磨き調整が簡略化され、ロクロ成形段階のナデ調整をそのまま残すものが確認されるようになってくる。これはⅤ2期にさらに進行するものと予想され、底径縮小及び体部外傾器形（d型）とともに、その延長線上に内黒埦A器形が存在している。ただ、内面黒色焼成の導入によって、単に赤彩埦が内黒埦へ転換したものとは考えていない。基本的な器種構成が異なる点や磨き単位の粗さなど、転換を機に変化した要素は多く、全体的な器形変化の流れの中で、同一の方向を向いていると見た方が妥当だろう。

（2）土師器煮炊具の変遷

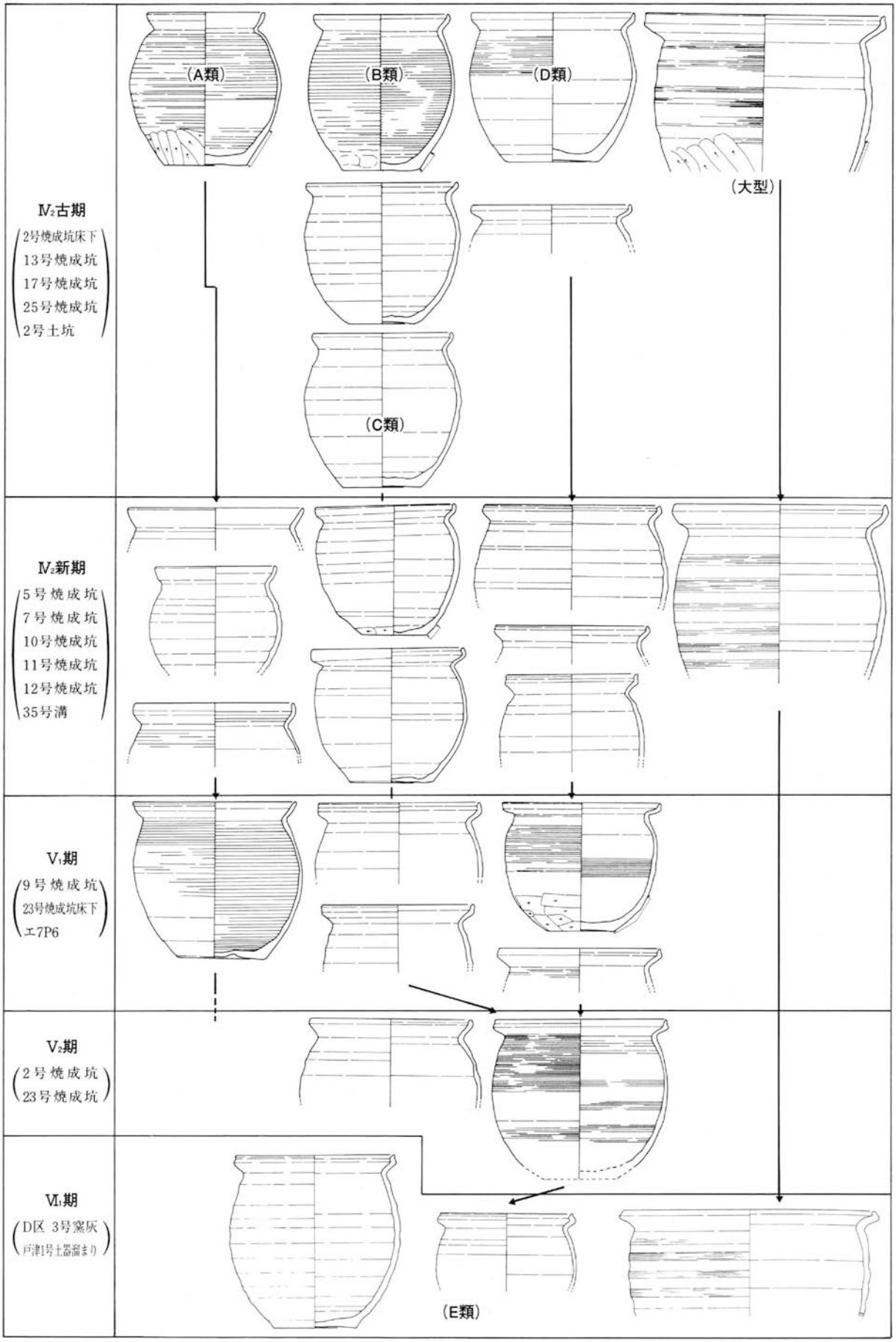
土師器煮炊具はロクロ台成形を基本とする北陸型煮炊具である。一部縦方向の手持ち削りや刷毛調整を施すことがあるが、在来型の非ロクロ成形につながるものとは考えられないものである。

《小釜》　口径18cm以上の大型と16cm以下の小型に分けられる。大型は器種構成で示したように、1割未満と低い率で生産されており、器形も基本的には主体的な小型品をひとまわり大型化しただけのものと言える。小型は口径12～15cm、器高12～14cmを中心とするものが通常である。口径10cm以下の一群も存在するが、これについては特小として扱っている。ただ、数量的に少なく、小型に包括して提示した。

当窯で生産する小釜は図示したように、ほとんどが平底であり、底面を丸く削ったり、内面から突き出して丸底とするものは例外的と言える。平底の底面には糸切り痕を残し、回転糸切りが主だが、静止に近いものもⅣ2古期では確認される。南加賀で北陸型の小釜が出現するのは早く、Ⅱ1期には初源的形態が確認され、Ⅱ2期には定量存在する。この時期の平底の底部切り離しを見ると、回転ヘラ切りによっており、Ⅲ期の篠原遺跡でもヘラ切りの存在が確認される。篠原遺跡では糸切りも併存しており、赤彩土師器埦の切り離し同様に、Ⅲ期からⅣ1期まで両技法が併存し、Ⅳ2古期に糸切りに統一された考えられよう。Ⅳ1期以前の資料が少ないため、転換の時期ははっきりしないが、Ⅲ期までは在来型の技法と言える削りや刷毛による丸底化が主体的であることを考えれば、Ⅳ2古期の平底化と糸切り技法統一とは同様の意味をもつ可能性も出てくる。赤彩埦とともに技法転換があった可能性が高い。

以上のように、Ⅳ2古期に平底となり、定型化した小釜器形は、それ以降、全体的な器形や法量に大きな変化はなく、Ⅵ1期の新たな成形方法の変化があるまでは同系統を保持する。ただ、細部器形においては出現期のⅡ2期以降、微妙に変化しており、また、口径も微増の傾向にある。

口径分布については、第195図に上げたように、前後4～5cmの幅の中でピラミッド形に分布し、Ⅳ2古期の13



第194図　Ⅳ2古～Ⅵ1期の土師器小釜変遷図（1/5）

cmからⅤ1期へと13.5、14cmと拡大してゆく。それに伴う器高の増加はないため、全体的には広口化してゆく。

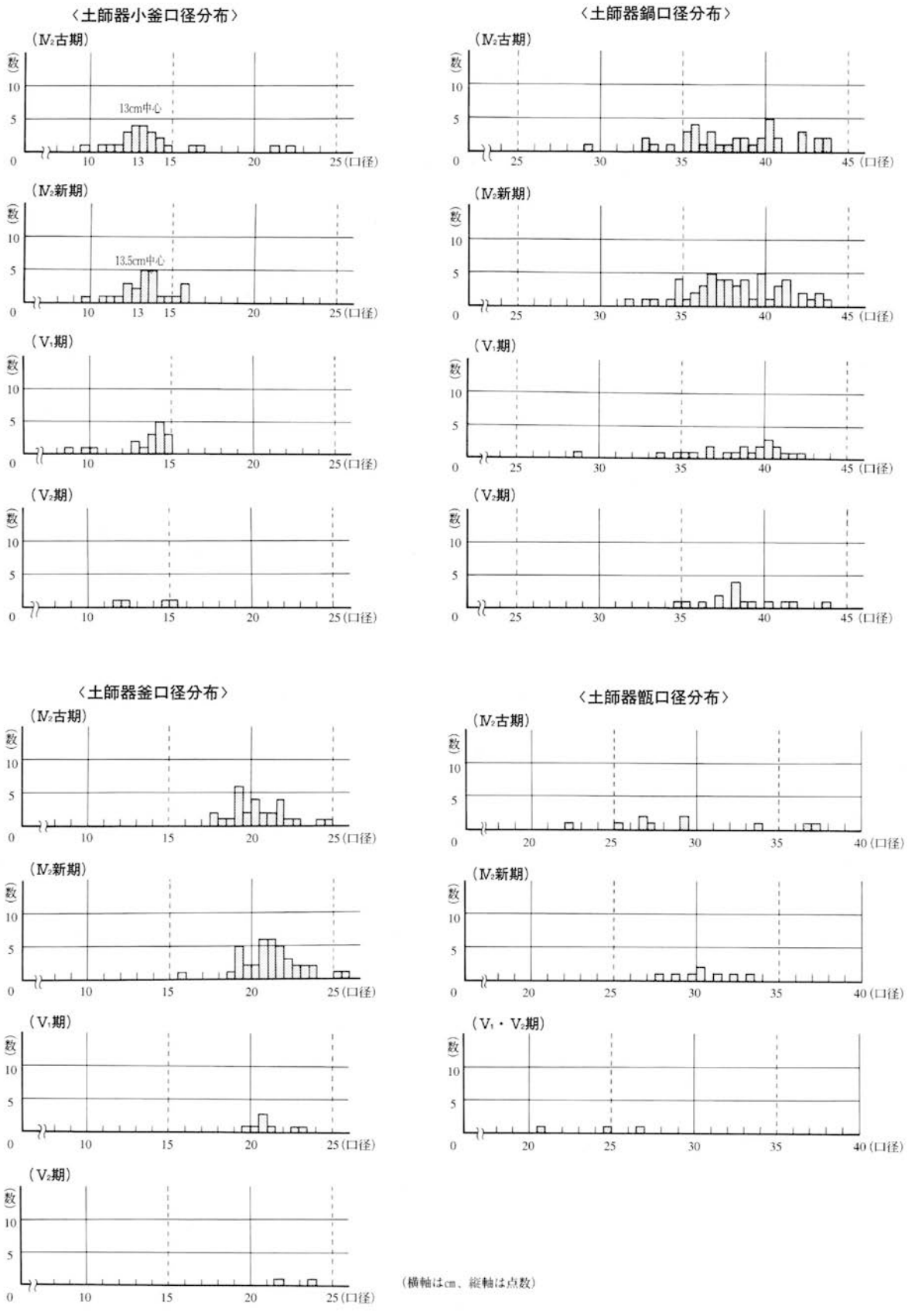
口縁部器形は、Ⅱ1期段階では頸部「く」字屈曲の口縁端部丸く収める器形（A類）が主であったものから、Ⅲ期ではそれに加え、内面端部を肥厚させたり、僅かにつまみ上げたり、端部面取り調整させたりなど、口縁端部をロクロ調整で面形成させる。Ⅳ2古期もA類口縁部は存続し、少量ながら定量を占める。概して、カキ目調整を顕著に施す、薄手の作りのものが目立つ傾向にある。これに対し、ロクロ調整で口縁部面形成させる類型は、Ⅲ期の面取り調整するものから、口縁端部を短く上へ曲げたり（B類）、上へつまみ上げたり（D類）する口縁部器形に変化してゆく。この中ではB類が主体を占め、B類からの展開で端部長く折り曲げるC類も出現してくる。Ⅲ期に比べると胴部ロクロナデ調整するものが増加し、薄手化する。Ⅳ2新期になると、C類が主体となる。D類もⅣ2古期の短くつまみ上げる器形から、長くつまみ上げる器形へと変化し、増加して行く。A類も少ないながら、定量存続し、Ⅴ1期まで確認される。Ⅴ1期・Ⅴ2期は、C・D類で構成され、Ⅳ2新期からの大きな変化は感じられないが、Ⅴ2期にD類の中から口縁端部長くつまみ上げて、「S」字に屈曲させるE類器形が出現し、Ⅵ1期に主体化して行く。E類器形の出現とともに胴部のロクロヒダが顕著となって薄手化し、胴部や口縁部を長く薄く引き出すような成形技法が登場したことを物語る。

《釜》　口径19～22cm、器高14～15cm程度の1法量のもので、ロクロ成形台上で長胴に成形した後、胴部下半を叩き出して砲弾型にした土器である。叩き出しは最終工程の成形で、二ッ梨一貫山窯では再調整によって叩きを消去するものは例外的と言える。小釜でも述べたが、北陸型煮炊具として成立した当初は、在来型の縦刷毛調整や縦削り調整で叩きを消去するものが主体を占めたが、それはⅢ期までの様相であり、Ⅳ1期ないしはⅣ2古期以降、生産量増加とともに在来型技法を払拭する形で北陸型として成形技法は定型化し、叩き出しを再調整することはなくなる。ただし、在来型の生産ではⅣ1期以降も依然として、在来型の技法が遺存する可能性は高く、須恵器窯場での北陸型煮炊具の様相であると考えている。

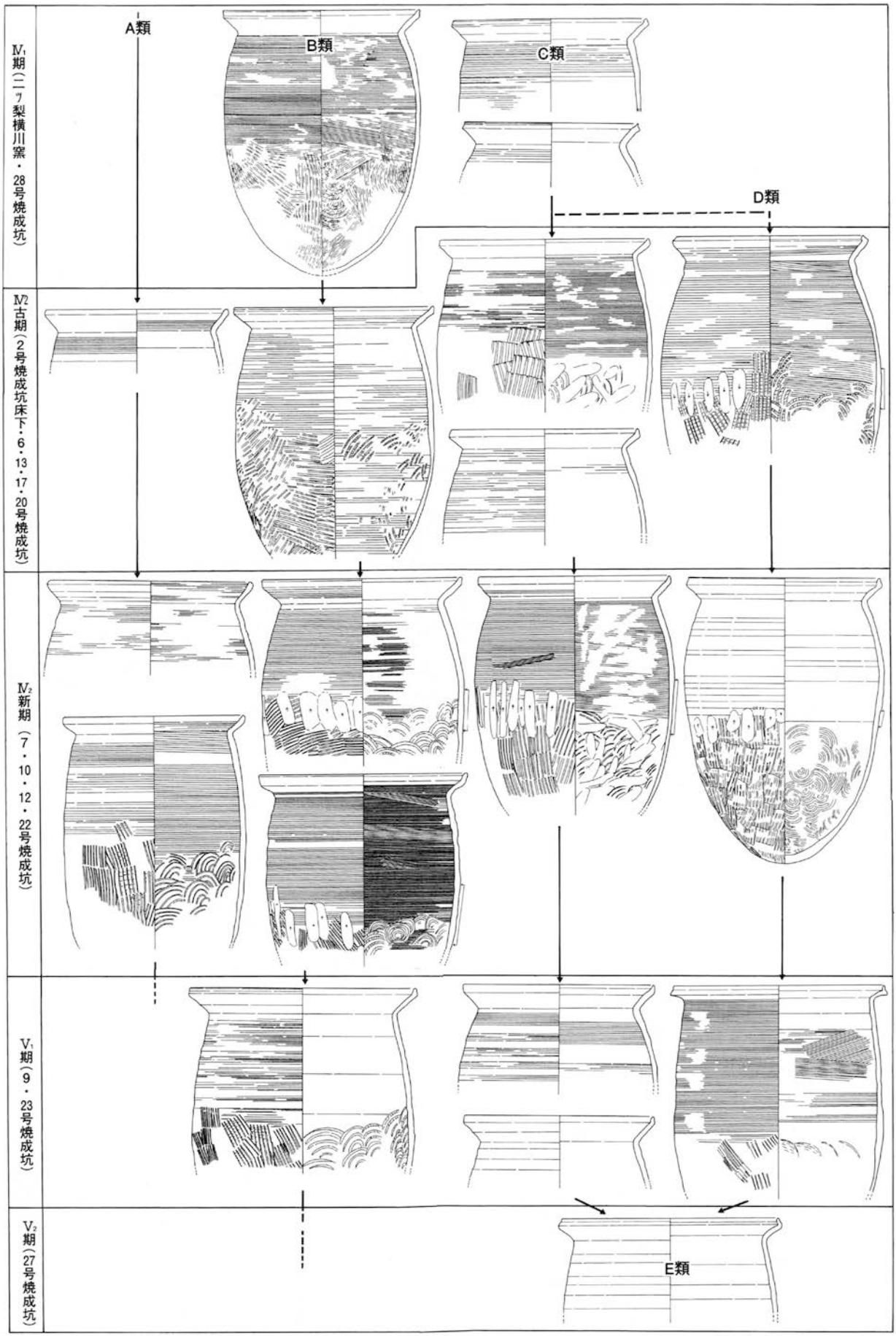
北陸型として定型化して以後の釜は、小釜同様、Ⅵ1期に大きく成形技法が変化するまで、同一系統の中での変化と言える。ただ、Ⅳ2新期を中心に顕在化する叩き成形痕上端境を縦方向削りする技法は、この時期にのみ見られる特徴的な調整であり、注目される。調整の意図は最終的な叩き出し成形で凹凸の生じた器面を整えるものであろうが、前後の時期に代用される調整は見られず、導入の要因は新たな工人の参画など他のところにある可能性がある。他地域でもこの部位に削りをもつ事例はあるが、縦削りを外面の広い範囲で施すものと併存するのが一般的で、この時期にのみ、局部的削りのみを採用する地域はない。他地域での局部的な削りの出現は、外面叩き部分を広く削り調整するのが上端のみへと簡略化された動きを示しており、もともとは在来型技法であった可能性をもつ。Ⅳ2期は在来型から窯場集約型へ土師器生産が移行した時期であり、在来型工人の新たな窯場への参画が予想される。それまでの須恵器工人による土師器生産に在来型土師器生産が融合したことに、出現の要因があったものと考えている。南加賀窯産の資料を見る場合の時期判断の指標となる可能性が高い。

口径分布については、第195図に上げたように、前後4～5cmの幅の中でピラミッド形に分布し、小釜同様、Ⅳ2古期からⅤ2期へと拡大してゆく。復元できる個体が少ないため、確実なことは言えないが、口径増加に伴って胴部径、器高についても増加の可能性があり、全体的に容量は増している可能性が高い。

次に、口縁部器形だが、小釜同様に、ロクロ調整によって口縁端部を面形成させる方法が端部を上へ引き伸ばして行く方向で変化している。北陸型と言えるロクロ調整による口縁端部面形成するものはⅡ2期に初源的形態が出現し、出現当初から口縁端部を面取り調整する器形（B類）、内面端部を突出ないしは肥厚させる器形（C類）の基本的な2種が存在する。これに頸部「く」字屈曲させた後端部丸くおさめる在来型A類が併存。この様相はⅢ期まで存続する。Ⅳ1期に入ると、A類は減少し（Ⅳ2新期までは残存する）、B・C類が主体となる。B類は上端を引き上げるように調整し、Ⅳ2古期には外端面に沈線状の窪みをもつようになる。また、C類の中からⅣ2古期に端部を意識的に上へつまみ上げるD類が出現、Ⅳ2新期に増加し、B類との形態的な差がなくなってゆく。Ⅴ1期は全体的に口縁端部長くつまみ上げる意識、全体的な胴部の薄手化が進行し、その中で、口縁端部長くつまみ上げて「S」に屈曲させるE類器形が出現してゆく。E類器形はⅤ2期に定型化し、Ⅵ1期以降の主体的な口縁部器形となる。E類器形の出現とともに胴部のロクロヒダが顕著となって薄手化し、カキ目調整も省略



第195図　Ⅳ2古～V2の土師器小釜・釜・鍋・甑口径分布図



第196図　Ⅳ1～Ⅴ2期の土師器釜変遷図（1/6）

されて、胴部や口縁部を長く薄く引き出すような成形技法が成立して行く。それはⅥ1期に成立し、Ⅵ2期に最も顕在化すると考えている。

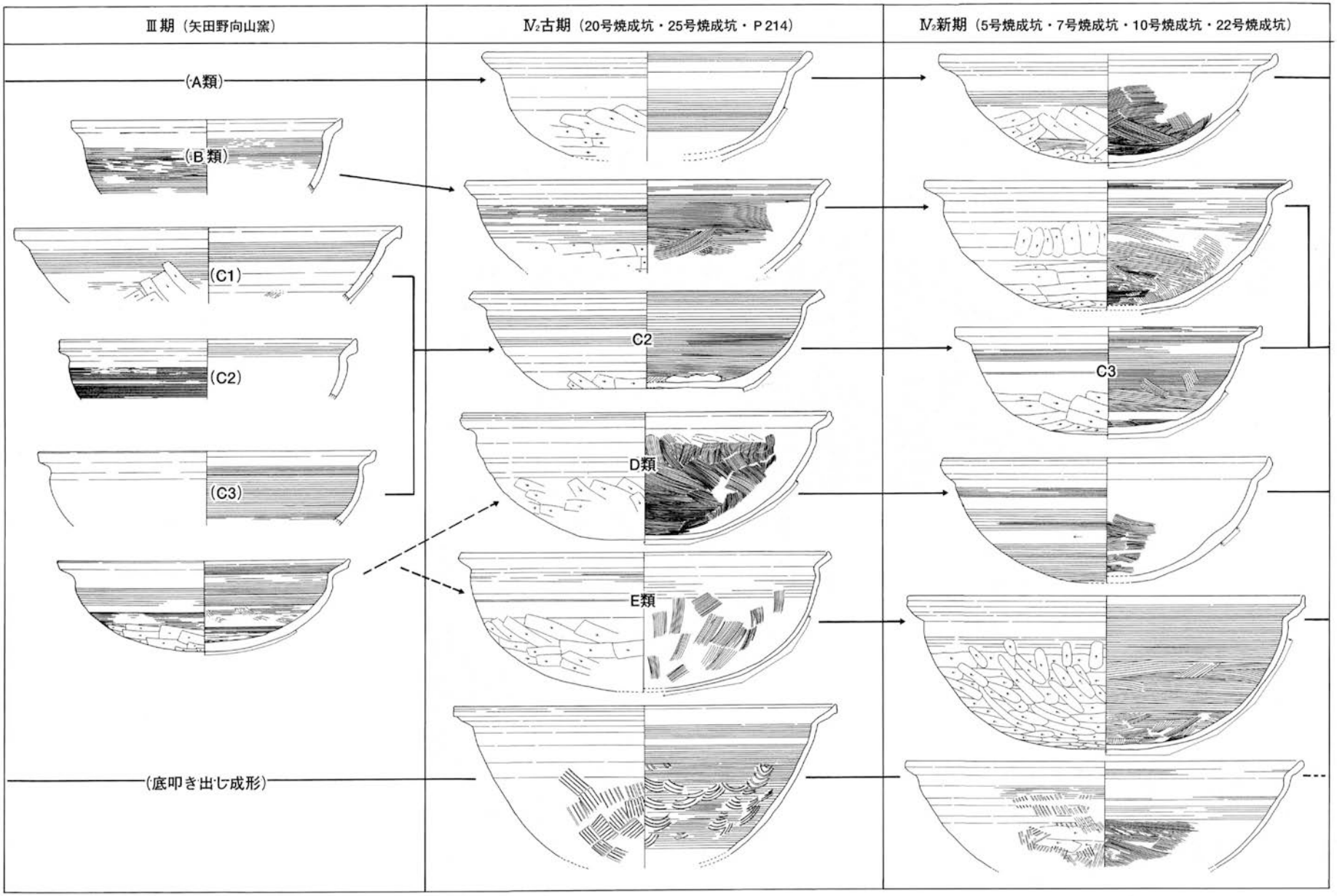
《鍋》　基本的に1法量だが、口径の分布は32～44㎝と範囲が広く、中心も35～41㎝とばらついて、ピラミッド形を作らない。底部は丸く、浅い胴体部をもち、頸部屈曲して口縁部が開く。胴体部から底部にかけては外面を手持ち削り、内面を刷毛調整するものが大半で、一部底部叩き出し痕を残すものがある。底部叩き出しについてはその範囲と外面削り、内面刷毛調整の範囲がほぼ似ていることから、削りや刷毛で叩き痕を消したものであり、基本的に鍋の丸底化には叩きが行われた可能性がある。ただ、内面の刷毛調整により底部を押し出し、外面削りによって丸底化することも十分に可能であり、底部円盤径の小さなものも存在することを考えれば、叩き成形痕を意識的に残すものは削り調整のものとは別の成形方法で作られた可能性が大きいと判断する。叩き成形痕をもつものが底部深身を呈するものが多く、厚手の傾向が強いこともその可能性を示唆する。叩き成形をもつ鍋は図では上がっていないが、出現期であるⅡ2期から存在し、Ⅳ2新期までは存続するものと考える。Ⅴ1期まで残存の可能性はあるが、Ⅴ2期ないしはⅥ1期には消滅するものと考えている。

以上のように、鍋は胴体部から底部の外面を削り、内面を刷毛調整するものがほとんどを占め、それはⅡ2期からⅥ3期までかわらない。口径分布も大きな変化はなく、Ⅵ1期に小釜や釜と同様に、胴部や底部を長く薄く引き延ばす成形技法が登場するまでは同様の特徴をもつものと言える。ただし、口縁部器形についてのみは、形態変化があり、それは基本的には小釜や釜と同様、ロクロ調整によって口縁端部を面形成させる方法が端部を上へ引き伸ばして行く方向での変化である。さて、北陸型と言えるロクロ調整による口縁端部面形成はⅡ2期ないしはⅡ3期に初源的形態が出現する。出現当初は口縁端部を面取り調整するB類が基本で、Ⅲ期になって、生産量が増加するに伴い、形態も多様化し、B類に加え、端部へ向かって肥厚して、上下端が出るC類と上端部つまみ上げるD類が出現する。Ⅳ1期も基本的には同様であり、Ⅳ2古期になっても、B類とC類を基本とすることは変わらない。ただし、口縁端部つまみ上げのD類が増え、その中からの展開で上端が突出するE類が出現する。また、当期には口縁端部を丸く収める在来型の器形を呈するA類が確認され、全体的にはⅢ期の端面形成の範疇の中にあると言える。Ⅳ2新期になると、上端つまみ上げないしは突出の系統の器形が増加し、A類も上端に巻き上げる器形に変化して行く。B類も上端へ伸び、E類の突出は長く伸びて行く。この傾向は、Ⅴ期に進行し、口縁端部長くつまみ上げて「S」に屈曲させるF類器形が出現してゆく。ただし、Ⅴ2期にはF類が定量存在し、Ⅵ1期ではF類にほぼ統一されて行く様相が見られるが、Ⅴ2期の主体を占めるのはⅢ期から続くC類器形であり、鍋口縁部器形は伝統的器形を残存させる傾向が強い。これは鍋、釜、小釜の順で見られ、大型器種で、厚手となるに従って、顕在化することと考えられる。

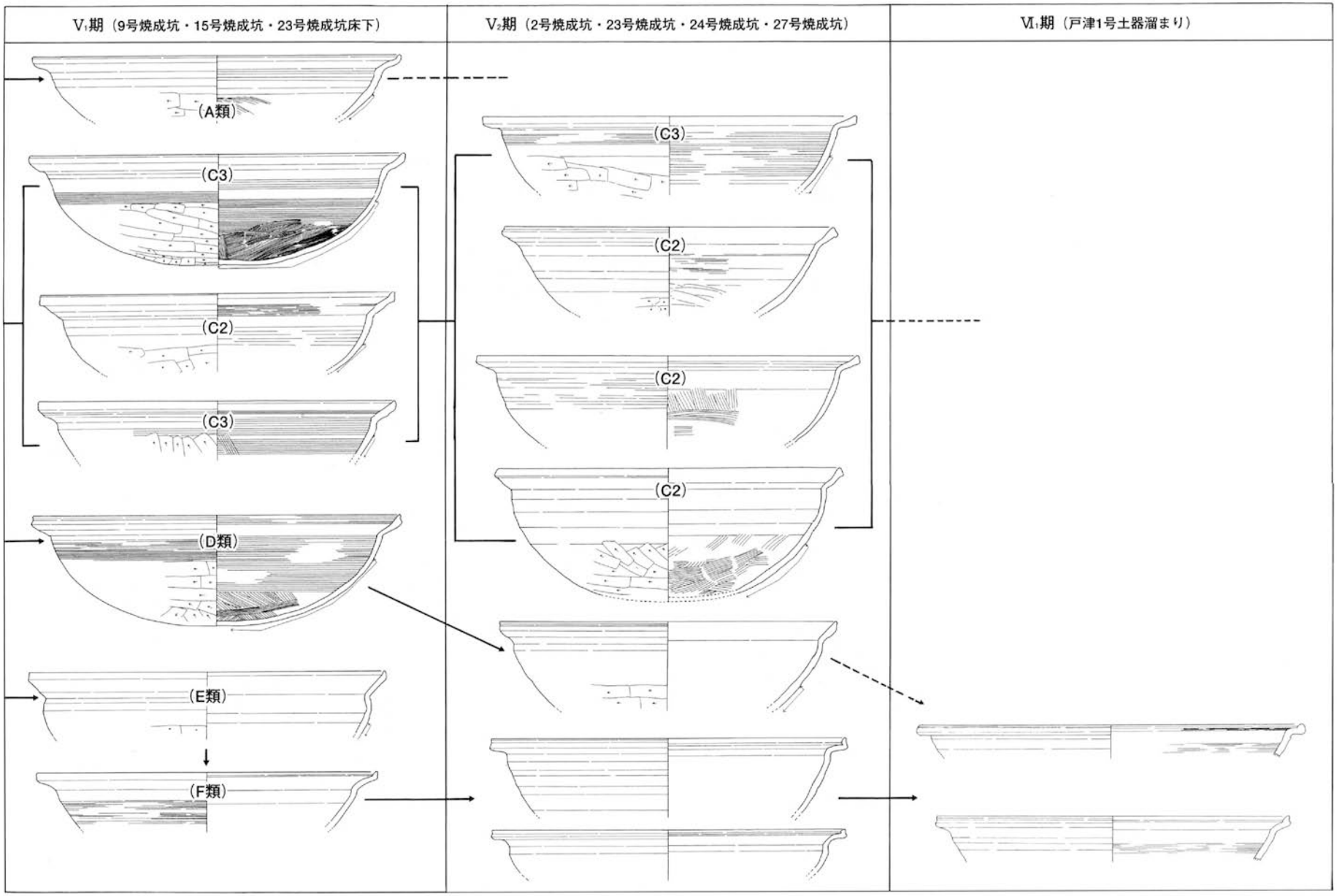
以上、口縁部器形について述べたが、Ⅳ2新期にのみ、外面削りの方向が一部変化する。通常は斜め下から上へと横方向に展開するのだが、Ⅳ2新期のみは削りの上端のみ縦方向の削りが並ぶ。その頻度は高いとは言えないが、この時期にのみ確認されるものであり、釜の叩き上端を局部削りする技法の影響ではないかと考える。

《甑》　須恵器系技法を使用する甑は、須恵器として6世紀には出現しているため、北陸型として成立した時期を特定しにくい。ただ、北陸型煮炊具の出現期であるⅡ2期に須恵器系技法による土師器甑が定量出現しており、基本的には他の煮炊具器種と同様の流れを辿る器種であると理解している。在来型の土師器甑は5世紀後半に出現し、7世紀後半には衰退、北陸型に吸収される形で消滅する。それとともに北陸型の器形をもつものに、在来型の刷毛調整や棒状把手が導入され、Ⅲ期まで確認される。ただ、全体的に甑の出土量は少ないため、在来型が融合した製品は目立たない。

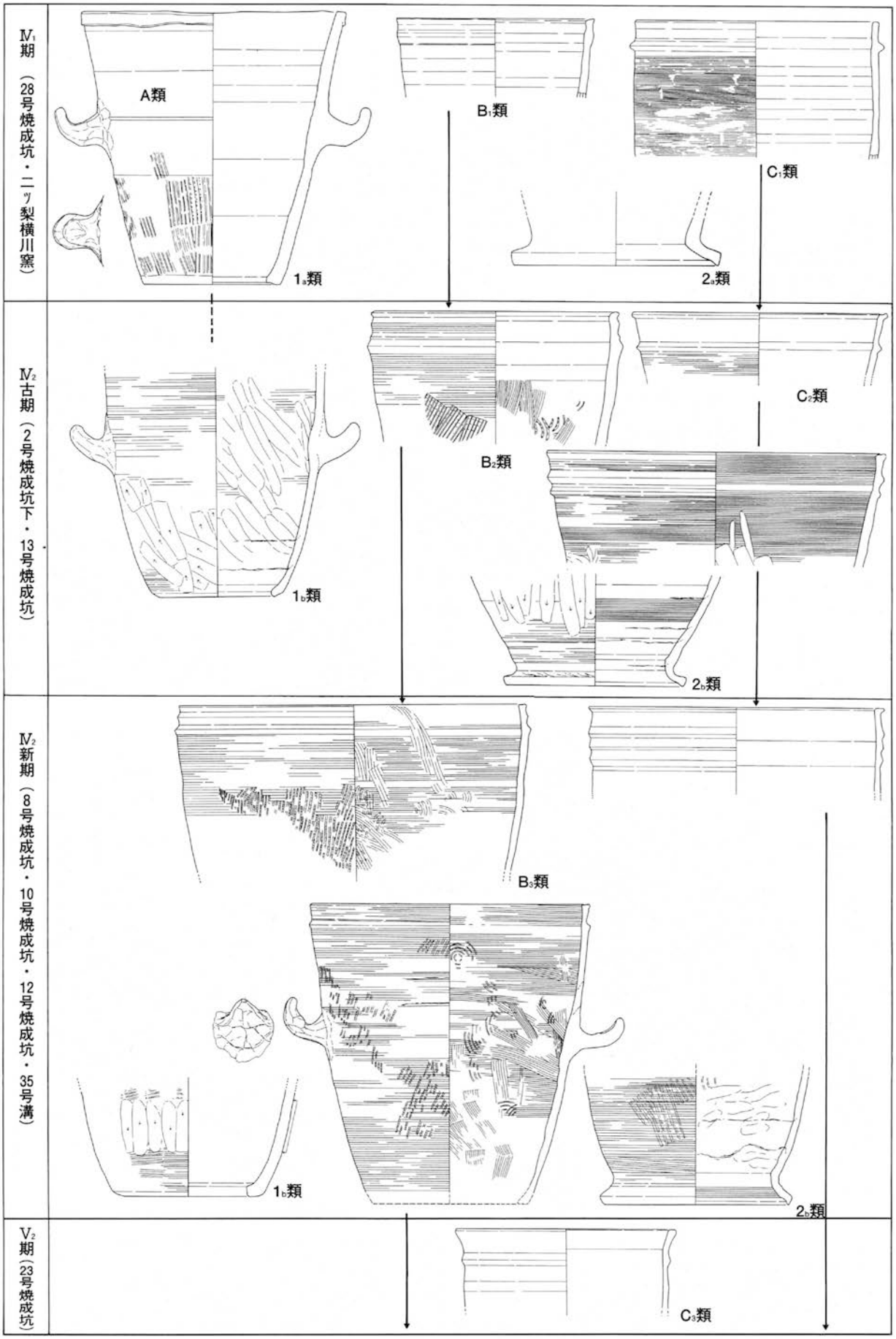
甑器形は口縁部と底部により分けられる。まず、底部器形だが、北陸の甑は基本的にすべて単孔のつつぬけタイプで、スノコ付きのものは確認されていない。桟渡し用の小孔を伴う事例も例外的で、胴下端の絞り込みによってスノコを受けるタイプである。そのまま円筒形につつぬけとなる1類と脚台状に下端が「く」字に外屈する2類とに分けられる。主体は1類で、須恵器系、在来型土師器にしても、出現期から北陸の中では最も一般的な形態と言える。1類は、端部が内側に肥厚するだけの1a類と短く内屈する1b類に分けられる。資料は少ないが、1a類から1b類へという流れと考えている。2類はⅡ3期以前に確認例がなく、Ⅲ期以降に出現してくるもの



第197図　Ⅲ～Ⅵ1期の土師器鍋変遷図1（1/6）



第198図　Ⅲ～Ⅵ1期の土師器鍋変遷図２（1/6）



第199図　Ⅳ1～Ⅴ2期の土師甑変遷図（1/6）

と考えている。能美窯の事例は確認していないが、越中射水窯では８世紀中頃の土師器焼成坑（流団No18Ａ遺跡、富山埋文1993）で多く確認できており、１類を凌ぐ。南加賀窯では１類の半数以下であるが、各時期を通して定量確認でき、特異な存在でないことを物語る。台の外屈部分は口縁部まで成形が完了した後、倒立して継ぎ足し成形しており、その部分で紐積み方向が転換していることが確認できる。台の形態により、長く強く開く２ａ類と短く釜口縁部器形のように外反気味となる２ｂ類に分けられる。２ａ類から２ｂ類の変化と考えている。

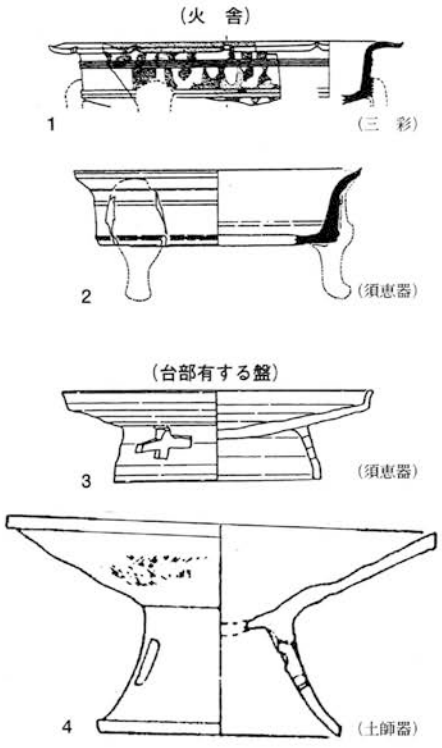
次に、口縁部器形だが、出現期のⅡ2期は円筒形のまま口縁部上端で面を形成するだけの器形で、須恵器甑と基本的に同様である。それはⅡ3期も同様と考えているが、Ⅲ期になると複合口縁状に突帯の巡るＡ類や口縁端部面形成して口縁部下に低い稜をもつＢ類、口縁部外端突出し、その下にも稜を形成するＣ類が出現してくる。Ａ類器形は口径が小さく厚手のもので、器形的に須恵器甑の延長線上にあるものと言える。Ⅳ2古期には衰退する器形であり、北陸型土師器甑中では古手の様相を残す器形と言える。Ａ類衰退とともに主体となるのは、Ｂ・Ｃ類で、Ｂ類もⅣ2古期までは厚手であるが、Ⅳ2新期には薄くなって、Ｃ類との識別が困難となる。全体的に薄手で、口径が大きく、口縁部下に稜を形成する器形にほぼ統一されてくる。把手はⅢ～Ⅳ1期には幅狭の楕円形や馬蹄形状のものが付くが、Ⅳ2古期には三角形状となり、Ⅴ期には幅広となって大型化し、内側に巻き込むようになってくる。

（３）その他の特殊器種について

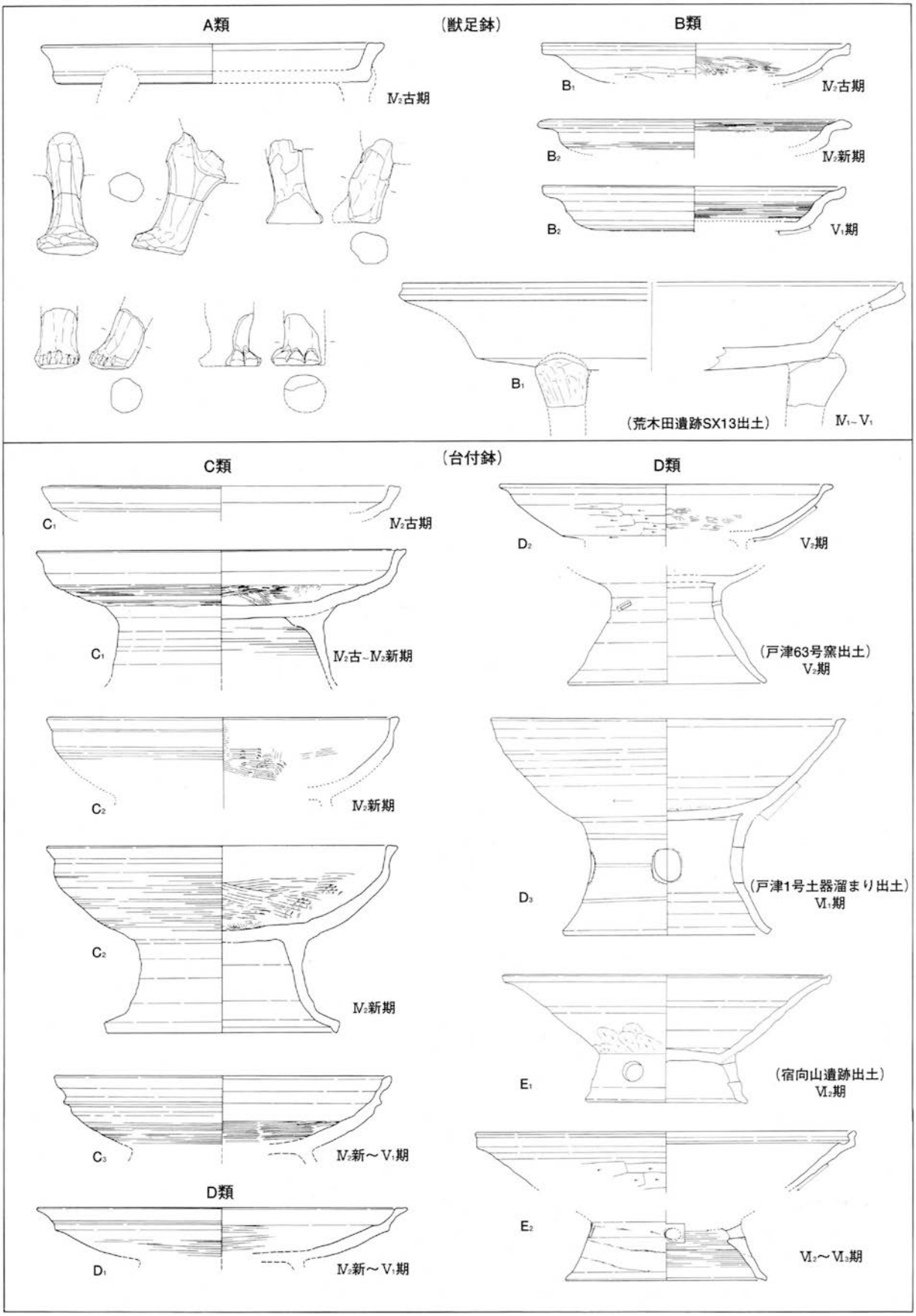
《台付鉢及び獣足鉢について》　円筒形の脚台をもつ鉢を台付鉢、獣足を模した三足の付く鉢を獣足鉢（盤）とする。鉢部だけの破片では台付か獣足付か判断は難しいが、獣足鉢は盤と付記したように、平底を呈し、体部は盤形に立ち上がる器形をもつ。これに対し、台付鉢はやや丸底気味となって鉢状器形を呈すると考えている。本文報告では鉢部破片は全て台付鉢と報告したが、底部形態によっておよその判断はつき、それらを整理すると、鉢類は以下のような分類が可能である。

鉢部器形のうち、底部平底を呈するものはＡ・Ｂの２種がある。体部短く直立気味に立ち上がるものをＡ類、体部立ち上がり後、口縁部で外屈する器形をＢ類とした。いずれも獣足鉢の鉢部であり、Ａ・Ｂ類ともにⅣ2古期に確認できる。Ａ類はこの時期のみの確認であるが、Ｂ類はⅤ1期まで確認でき、数量も多い。口縁部器形により、さらに、口縁端部をつまみ上げて外縁に面を形成するＢ１類と面形成が崩れるＢ２類に細分でき、Ｂ１類からＢ２類への変化が予測される。当資料では獣足の付く事例はないが、小松市荒木田遺跡ＳＸ13出土のＢ１類に獣足付のものがある（石川埋文1995）。荒木田遺跡のものはⅣ1期からⅤ1期と幅があり、どの時期に帰属できるものか判断できないが、形態から見るに、Ⅳ2古期頃の可能性が高い。

筆者は以前、獣足付き容器類を集成した際に、獣足鉢をまとめたことがある（望月1996A）。そこでは、獣足鉢のモデルについて、三彩釉陶器の火舎を上げたが、今回提示した口縁部外屈するＢ類器形はその系統で考えられるものであり、直接的ではないものの、同じ系譜にあるものと考えられる。さて、当器種の時期については、三彩釉陶器の出現や須恵器で一部８世紀前半に溯るものがあることから、８世紀前半代に出現すると考えている。当初は須恵器器種として導入されるが、８世紀後半になって、普及するとともに、南加賀では土師器で生産が行われる。当資料の出土の様相から、Ⅳ2古期以前に、須恵器での器種導入があった可能性があり、Ⅳ2古期になって、土師器生産の本格化に伴って、特殊器種として



第200図　獣足鉢と台付鉢のモデル（1/6）
１は平城宮出土（８ｃ前半）、２は和歌山県内池窯（８ｃ後半）、３は天狗谷７号窯址（８ｃ中頃）、４は長野県三の宮遺跡（９ｃ3/4）



第201図　Ⅳ2～Ⅵ期の土師器獣足鉢・台付鉢（1/6）

生産が始まったのだろう（小松市額見町遺跡では８世紀前半の土器溜まりから南加賀窯産の須恵器獣足鉢が出土している）。Ｂ類器形で獣足意匠をもつものはⅤ1期まで存続するが、これが終末と考えており、Ⅴ2期ないしはⅥ1期には獣足意匠をもたない長い棒状の足となって、丸底の鉢ないしは羽釜器形に付されるものへと変化する。三足で立つ鉢類器種である点では共通するため、両器種に系譜のつながりはあるだろうが、モデルは別のものだろう。９世紀後半代に宮都で生産が増える足釜の影響が強いと考えている。

鉢部の底部がやや鉢状に丸くなるものが台付鉢と考えている。鉢部器形により、口縁部付近で直立し、口縁端部が外側に突出して面形成するＣ類と口縁部付近に稜をもつが外傾して立ち上がるＤ類、底部から口縁部まで直線的に外傾するＥ類に分類される。そして、さらに、Ｃ類は底部が平坦気味で浅いＣ１類と底部丸底となって深身を呈すＣ２類、口縁部付近の直立部分に稜を１段形成するＣ３類に細分。Ｄ類は浅身で強い稜を形成するＤ１類と浅身だが稜形成の弱いＤ２類、深身で稜形成の弱いＤ３類に細分。Ｅ類は口縁部器形により、口縁端部を上につまみ上げるＥ１類と長く「Ｓ」字状に口縁端部を引き伸ばすＥ２類に細分される。脚台部も類型によって異なり、Ｃ類には脚高の大型脚で基部径太く脚端へ反って踏ん張る器形のものが、Ｄ類には脚高の大型脚だが、基部径細くなって、円形や方形の透かしを３～４方にもつものが付き、Ｅ類には、透かしをもつが、低く「ハ」字に踏ん張る小型台脚が付く。これらの類型と時間軸を対応させると、Ｃ類→Ｄ類→Ｅ類で変遷しており、Ⅳ2古期～Ⅳ2新期はＣ類で、Ｃ１類→Ｃ２類の前後関係。Ⅴ1期～Ⅵ1期はＤ類で、Ｄ１類→Ｄ２・３類の前後関係。Ⅵ2～Ⅵ3期はＥ類で、Ｅ１類→Ｅ２類の前後関係で捉えられる。

さて、当器種は胎土に混和材を多く含むことから、獣足鉢と同様に、火舎として使われたものと予想している。ただ、三足と円筒形の台脚では、火にかける方法が異なっていたものであり、全く互換性をもつ器種として位置付けられていたとは言い難い。

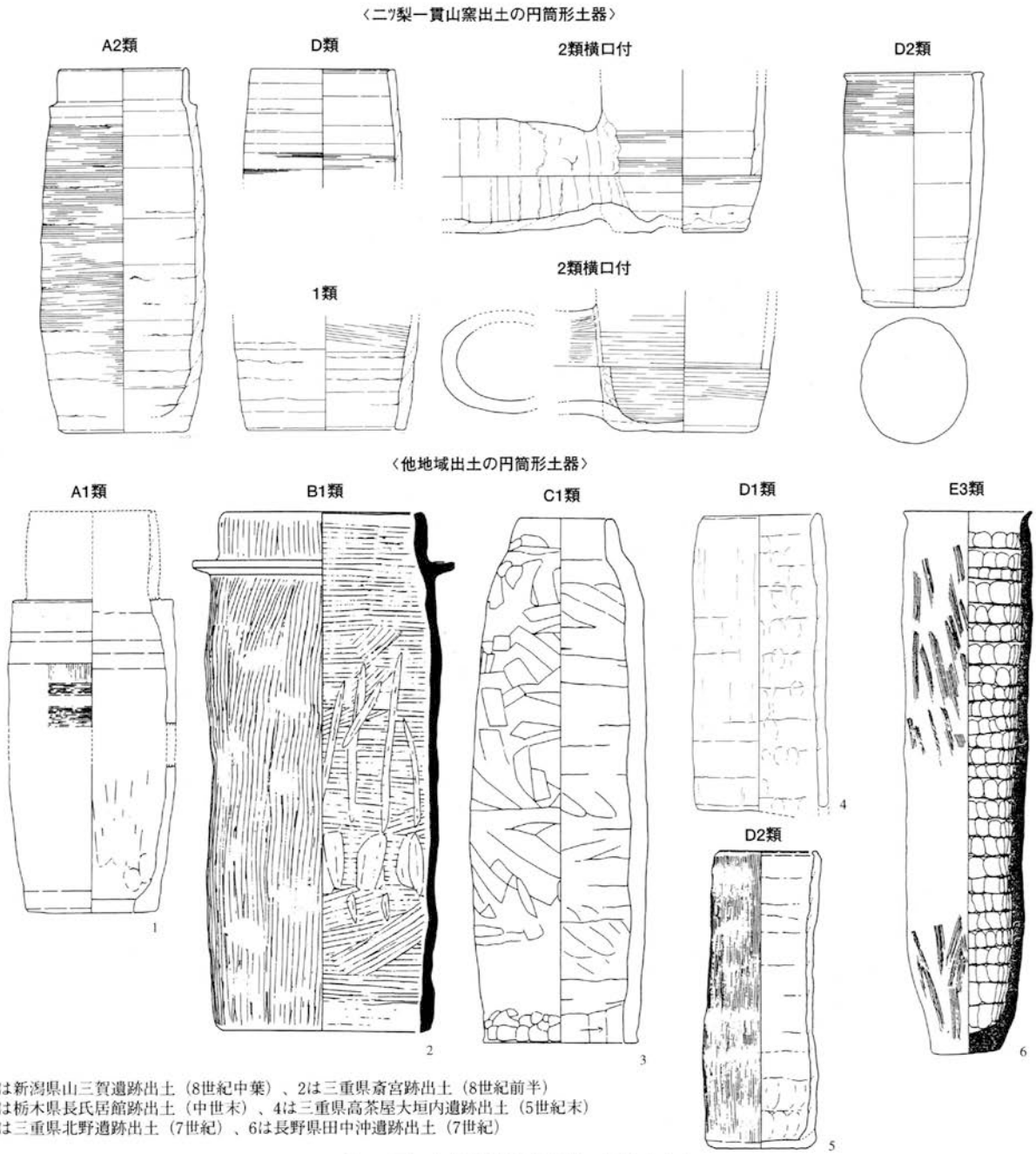
生産の開始は、獣足鉢と同様、Ⅳ2古期以降確認されている。獣足鉢よりは出土量が多く、一定の生産量で、Ⅵ3期まで生産を継続させる。南加賀窯で台付鉢の出現は、当資料を溯ることはなく、Ⅳ2古期以降の器種と考えているが、その出現の系譜は定説がない。円筒形の大型の脚台が付く鉢は６世紀に大型の器台として須恵器で生産されるが、それと当器種を直接結び付けるものはない。やや小型ではあるが、円筒形の脚台に透かしをもつ美濃洲衛窯の須恵器大型盤（台部有する盤と分類されている）が８世紀中葉（Ⅳ期第２小期）から定量生産され始めており、口縁部直立器形や脚台器形など、台付鉢との類似点がある。台付鉢の出現期の器形（Ｃ１類）が浅い盤形を呈することや、美濃洲衛窯の生産開始時期が近いこと、そして、土器生産に美濃洲衛窯からの強い影響を受ける長野県松本平で、当資料と類似形態をもつ土師器台付鉢がほぼ同時期に生産を開始していることなど（小平1990）、美濃洲衛窯の大型須恵器盤に台付鉢の系譜を求める要素は多い。ただ、法量の違いや材質の違いなど用途が異なっていた可能性もあり、直接的な系譜を求めることは難しいかもしれない。松本平の台付鉢と南加賀窯産との接点が系譜問題を解く鍵であると考えている。

《円筒形土器について》　円筒形土器については、土管や管状形土製品、円筒形土製品、筒形土器などと呼称されている。土管と呼称する場合は、底部をもつものは対象とならず、本項で扱う底部をもつものを含む場合は適切ではない。筒抜けの場合は、本来は土器とは言えないものであり、土製品とすべきだが、古くから使われている円筒形土器の名称を使用する。まず、円筒形土器の認定だが、胴体部と口縁部、底部とが大きな径の違いなく、細長く円筒形を呈するもので、調整が比較的粗雑なもの、特に内面調整に粘土紐積み痕を比較的残すものである。須恵質と土師質とがあるが、須恵質は飛鳥寺などで一部出土するだけの特殊なものであり、筒抜けのものに限られ、形態も定まっているなど、土管として使用されたことが明白なものであり、ここでは一応除外しておく。土師質のもののみを対象とするが、まず、口縁部形で、玉縁状にソケット型の段を形成するＡ類、段を形成する部分で鍔を巡らすＢ類、口縁部に向かって窄まるＣ類、円筒形のままのＤ類、口縁部が短く外反するＥ類の５つ分類できる。さらに、底部形で、筒抜けとなる１類と胴体部径と変わらない底部をもつ２類、壷底のように胴体部径よりも小さい底部をもつ３類に分類される。分布する地域は主に東日本で、長野県・山梨県及び関東と東北の一部、三重県、北陸を中心にしている。分布圏によって、選択される器形が異なり、隆盛の時期も若干ずれる。

まず、最も古い円筒形土器が確認される三重県について見れば（小山2001）、口縁部形はＢ類、Ｃ類、Ｄ類、

E類で、底部形は1・2類。B類には筒抜けの1類、D類も1類があるが、C～E類のほとんどは2類底部をもつ。A類はなく、B類の鍔形をもって有段としたものと言える。B類の分布は、三重県のみであり、特徴的な形態と言えよう。出現時期は5世紀末頃で、8世紀まで生産が確認されている。竈をもつ竪穴住居などの集落遺跡を始め、斎宮跡や土師器焼成坑群を形成する北野遺跡でも確認されている。全体的に出土量は多いとは言えないが、伊勢を中心にまとまった分布を示すと言える。

次に、古い時期に確認例のあるのは長野県・山梨県で、6世紀末から7世紀初頭に出現し、7世紀代に広い範囲で分布する（西山1996）。この時期の形態は、口縁部形D類・E類で、底部形は2・3類が多く、1類は少ない。極めて長胴を呈す釜のような器形が定量存在する。竪穴住居内の竈から多く出土しており、竈の袖芯材や煙道での使用が確認されている。この時期以降、衰退時期を挟むようだが、9世紀代に再び松本平周辺で顕在化する（小平1990）。この時期の器形は、底部筒抜けの1類が主体で、A類が半数近くを占めるなど、7世紀代の様相とは異なる。竈付設の竪穴住居から主に出土しており、土師器焼成坑群を形成する上ノ山窯跡群からも出土し



1は新潟県山三賀遺跡出土（8世紀中葉）、2は三重県斎宮跡出土（8世紀前半）
3は栃木県長氏居館跡出土（中世末）、4は三重県高茶屋大垣内遺跡出土（5世紀末）
5は三重県北野遺跡出土（7世紀）、6は長野県田中沖遺跡出土（7世紀）

第202図　土師器円筒形土器の分類（1/6）

ている（豊科町1999）。なお、会津や上越、関東の一部でも７世紀代に長野の事例と同様の形態をもつ円筒形土器が竪穴住居跡から出土している。詳細は不明だが、長野県からの伝播という形での広がりだろう。

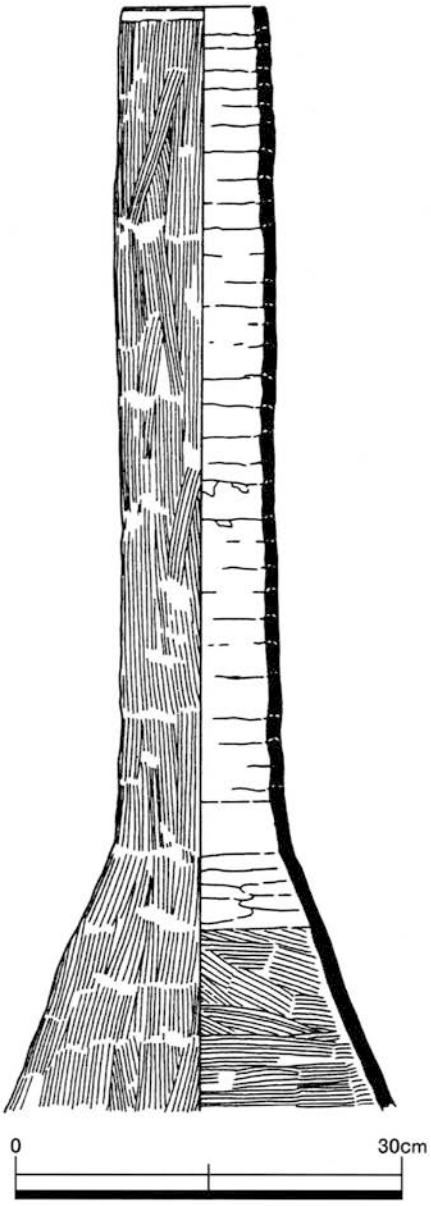
北陸では新潟県を中心にこれまで確認例が報告されている（坂井1998）。上越周辺の事例を除けば、８世紀中頃から９世紀代が主である。口縁部形はＡ類主体だが、Ｄ類も定量存在し、Ｃ・Ｅ類も少量確認される。底部形は１類が大半を占める。底部を有するものは少なく、３類底部は確認されない。竪穴住居を主体とする集落遺跡から出土しているが、掘立柱建物を中心とする官衙級の遺跡からも出土がある。北陸では新潟以外、富山県射水丘陵窯跡群の土師器焼成坑群からの出土が確認されていたが、近年、二ッ梨一貫山窯跡を始め、富山で栃谷南遺跡（８世紀中頃）、石川で額見町遺跡、松山Ｃ遺跡、指江Ｂ遺跡、福井で茱山崎遺跡（８世紀前葉）など出土事例が増えている。時期の確定しているものの中では茱山崎遺跡の８世紀前葉が最も古く、射水丘陵窯跡群や二ッ梨一貫山窯跡のように、８世紀後半代に生産のピークを迎えたものと考えている。９世紀以降は出土量が減少し、中頃には衰退・消滅したものと予想する。口縁部形はＡ類が主体で、Ｄ類も定量存在する。底部は筒抜けの１類が主体だが、二ッ梨一貫山窯では２類の存在が目立つ。２類底部は通常、Ｄ・Ｅ類口縁部であることが多いが、当窯ではＡ類口縁部のものが存在し、また、２類底部付近に横口の付くものがある。横口は直交して付けられ、管は「Ｌ」字に屈曲する。調整方法は、内面に粘土紐積み上げ痕を残すなど他地域と共通するが、北陸の円筒形土器はカキ目や叩き成形などの須恵器技法によっている。一部縦刷毛や削りなどの在来型の技法によるものがあるが、これは比較的初期の段階に限られる。

以上、各地の円筒形土器について述べたが、要約すると、伊勢地域は出現当初、Ｄ１類主体であったものから、６世紀後半から７世紀代にＤ２類が増え、Ｂ１類と併存する。甲信及びその周辺地域は７世紀代、Ｄ２・Ｄ３・Ｅ３類が目立ち、伊勢との共通性が感じられる。北陸は伊勢や甲信地域でやや衰退の様相が見られる８世紀になって出現してくる。８世紀後半までで衰退して行く越中以西と９世紀にピークを迎える越後とに地域が分けられ、両地域とも基本的にはＡ１類を主体とする。Ｄ２類も定量存在するが、筒抜け主体地域であり、Ｄ１類の確認も多い。９世紀に松本平周辺で確認されるＡ１類主体のものは、北陸との関連性で考えられるものと言える。

以上の円筒形土器は、いずれの地域も竈を有する竪穴住居主体の集落遺跡から出土することが多い。各地の円筒形土器衰退時期は竈を有する竪穴住居の衰退と強く関連していると考えられる。甲信地域の場合、特に竈の袖構築に使われた事例が多く、竈部材説が既に西山克己氏から提唱されている（西山1996）。竈袖構築には土師器長胴釜を転用して使うことが多く、円筒形土器も転用事例の一つと見る研究者も多いが、西山氏は竈部材として専用に焼かれたものと主張している。甲信の事例がＤ２・Ｅ３類などの底部を有するものが主体を占めることも関連するだろうが、Ａ１・Ｂ１類などのソケット式接合が可能なものが主体を占める北陸の事例では、導排水用管説が有力とされている（坂井1998）。ただ、口縁部はソケット式であっても底部の存在するものがあることは紛れも無い事実であり、底があっても土管として使用できるのかという問題がある。三重県の事例をまとめた小山憲一氏が指摘するように（小山2001）、これらを全て同一用途の土器として捉えることに問題があるのかもしれない。ただ、１類と２類とで、成形・調整方法、法量に違いはなく、口縁部形態がソケット式Ａ類・Ｂ類に１類底部が、Ｄ類・Ｅ類口縁部に２・３類底部がつく傾向はあるものの、それは必ずしも貫徹された訳ではない。つまり、製作段階では同一の器種として製作されていたにもかかわらず、基本的な機能を左右する底部の有無に分かれ、底部の有無によって、機能選択できるものであったと見なすことができよう。当器種が須恵器ではなく、土師器で作られていること、そして竈に関連するものであることは重要である。２・３類底部の存在を考えれば、全てを土管とする事はできないだろう。飛鳥寺の土管導入以前に（６世紀後半）、三重県の事例に竈使用があったことは、それを如実に物語るだろう（三重埋文2000）。８～９世紀資料でも、楕円形や方形断面をもつものが定量存在し、新潟県の事例に半裁したものも存在することから、その一部は導・排水管使用も全く否定できないが、出土の仕方は説得力に欠ける。

以上、土師器質の円筒形土器の多くは、導排水土管ではなく、竈部材であった可能性を支持したい。ただ、形態により竈への使用部位を使い分けていたもので、筒抜け１類は煙突土管として、２・３類は袖芯材や天井材として使用されたものなのだろう。当窯出土の「Ｌ」字屈曲部の出土は、煙突の立ち上がり部分にあたり、接合式

口縁は煙道・煙突を継ぎ足して伸ばす目的で採用されたものと予想する。竪穴住居の竈構造は不明な部分が多く、特に煙道（煙突）構造はわからないことが多い。伏屋構造の竪穴の場合、竈の存在する場所から、戸外までは煙道を長く継ぎ足し、そのうえで煙突を立てる必要があった訳で、このような土製煙道・煙突でなければ、木製の刳り貫き煙突が使われたのだろう。それを土製で製作する地域は、現在の事例では限られており、なおかつ一つの集落の中でもそれを使用する竈は少なかったことになる。造り付け竈の場合も、本来的にそのような土製品を使用する必要がなかった可能性もあり、円筒形土器がそのような用途、目的で製作されたのであれば、何故、出土の少ない特殊品的な存在なのかが問題となる。円筒形土器の最古事例は５世紀末の高茶屋大垣内遺跡だが、陶邑・伏尾遺跡の土坑５から片側がロート状に広がる円筒形土製品が出土している。陶邑・伏尾遺跡は５世紀中頃に位置付けられる大庭寺遺跡隣接の遺跡で、朝鮮系軟質土器が多く出土している（岡戸1991）。このロート型円筒形土製品は刷毛調整のものだが、器形から朝鮮系の可能性が考えられているもので、朝鮮半島では叩きをもつ軟質土器で円筒形を呈す「煙筒式土器」が存在している（６世紀代）。名称のとおり、朝鮮半島では煙突の機能を想定しているようで、竈とともに日本国内に持ち込まれたものなのだろう。ロート型円筒形土製品と円筒形土器とは直接的につながるものではないが、同一の系譜を辿れる可能性は高い。



第203図　陶邑伏尾遺跡出土の
円筒形土器（S=1/6）

また、円筒形土器の出土する遺跡には、二ッ梨一貫山窯同様に、土師器焼成坑群の群在する生産遺跡が多い。国内最古事例の高茶屋大垣内遺跡でも土師器焼成坑を検出しており、密接にからむ。しかも、円筒形土器の分布する地域は、土師器焼成坑分布地域、その中でも特に分布が顕著な地域にあたる。関東や東北での円筒形土器の確認例が少ないのは今後の課題であるが、地元での在来型生産の中で円筒形土器が作られ始めたのではなく、集約的に土師器生産を行う場所で作られ始めたことは重要と考える。土師器焼成坑技術を国内の弥生式土器からの発展と捉えるか、古代に入ってからの渡来系技術と捉えるかで異なるが、後者の立場に立てば、円筒形土器は、渡来系工人によってもたらされたことになるだろう。松本平で円筒形土器が再び出土してくる９世紀代は土師器焼成坑の営まれる時代であり、しかも、その時期に竪穴住居構造でオンドル構造に似た特殊な竈が付設されたり（岡田町遺跡、松本市1995）壁際礎石立ち構造などが確認される（宮の前遺跡、松本市1992）。どのような経路で、渡来系移民が入植したかわからないが、単なる偶然とは言えない。越後の円筒形土器の増加と同じ時期であり、注目される。

第６項　土師器焼成坑に関する考察

（１）Ⅳ1期からⅤ2期の土師器焼成坑分布について

Ｆ地区斜面に分布する土師器焼成坑について、時期別の分布の様相と占地、構築順序を述べる。

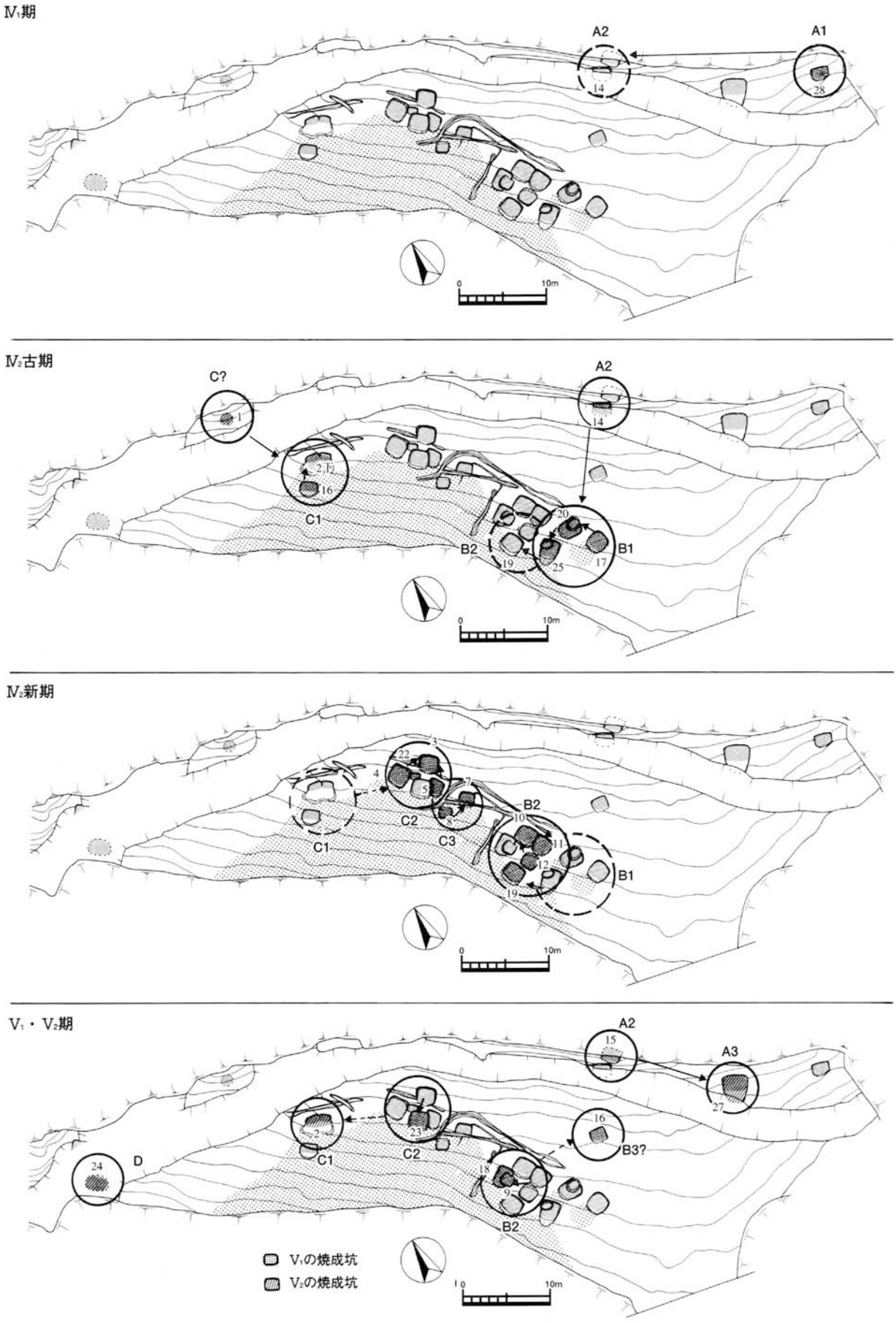
《Ⅳ1期》　Ｆ地区での土師器焼成坑構築初期にあたる。確実に当期に位置付けられる焼成坑は28号焼成坑のみで、調査区域の最も東側に立地する。標高16.3ｍ付近に奥壁を設定し、斜面に直交して構築される。コーナーのしっかりした横長型方形で、比較的小型の規模をもつ。土師器焼成坑出現期の様相を止める構造と理解できる。当焼成坑の北側、東側が削平されているため、当期の焼成坑は東北方向へ展開する可能性をもつが、灰原などに

Ⅳ1期に比定できるものは少なく、生産量は低い段階であったと予想する。なお、Ⅳ2古期に下るが、標高16.3m以上に立地する土師器焼成坑（14号焼成坑）が1基のみ存在する。奥壁側1/3のみの残存であるため、形態が不明であるが、高い奥壁をもつしっかりとした構造のものである。28号焼成坑に後続して営まれたものの可能性をもつ。以上の調査区域東側にあたる斜面上方に営まれる一群をA群とする。なお、その中でも28号焼成坑をA1群とし、14号焼成坑をA2群とする。

《Ⅳ2古期》　当期以降、焼成坑の数は増加し、同じ場所で連続構築されるなど、群集する様相をもつ。上述したように、斜面上方に営まれるA2群とした14号焼成坑が、28号焼成坑に後続して営まれるのに加え、南側斜面下方にB群が、北側の斜面中程にC群が構築される。B群（B1群）は規模の大きな3基の焼成坑が連続して営まれる。いずれも縦長型隅丸長方形の逆台形タイプを呈し、かさ上げする2次床をもつ（1次床は地山床）など、構造や形態がよく似る。出土する須恵器や焼成坑内埋土などから、17号→20号→25号の順で斜面下方、前部側へと構築されたものと予想しており、その後、北西側のB2群へと移動したものと考える。C群は北西側からC1群、C2群、C3群の3つのグルーピングが可能である。当期はそのうち最も北西側に位置するC1群で、2号焼成坑下土坑と6号焼成坑で構成される。2号焼成坑下土坑は土師器焼成坑の痕跡を残さないが、関連する廃棄土坑である。また、C1群の北側に撹乱溝が存在するが、それを挟んだ残丘にも当期の焼成坑（1号）が確認できており、撹乱箇所にも広がっていた可能性をもつ。6号焼成坑は横長型隅丸方形プランで、奥壁際の床面下に溝を掘り、土器を伏せて暗渠排水溝とした床下構造が確認される。

《Ⅳ2新期》　もっとも多くの土師器焼成坑が確認される時期であり、F地区斜面に分布する土師器焼成坑群では全盛期にあたる。斜面上方には当期の焼成坑は築かれず、B群とC群で構成される。B群は上述したように、B1群の北西側に移動して、B2群を構成する。出土する須恵器や焼成坑内埋土切り合いなどから、斜面下方に位置する19号焼成坑が最も古く、ほぼ同時期かで12号焼成坑が奥壁を向かい合わせにして逆向きで構築。その斜面上方には、10号焼成坑、11号焼成坑が連続して構築される。いずれもやや横長型の隅丸方形プランだが、11号焼成坑は逆台形気味、12号焼成坑は浅く、床面被熱層の厚い構造をもつ。12号のみは地山床のままだが、他の焼成坑は床下に土坑をもつなど貼床構造をもつもので、特に11号焼成坑には左側壁から奥壁にかけて床下暗渠排水溝をもつ。C群は、C2群とC3群が当期に位置付けられる。C2群とC3群は隣接するグループであるが、両群を隔てるように35溝が掘られており、両群を2つに、グループ分けした。C2群は4基の焼成坑で構成される。斜面下方に位置する4号焼成坑とそれに並列する5号焼成坑が古く、その奥壁に沿って斜面上方に排水溝が掘られる。この排水溝を切って、3号焼成坑が構築されており、4・5号焼成坑→3号焼成坑となる。いずれも正方形に近い横長型隅丸方形プランを呈する焼成坑で、床面は地山を基本とする構造をもつ。また、4号焼成坑を切って、22号焼成坑が築かれるが、浅い小型の焼成坑で、他のものとは異なる構造のものである。3号焼成坑との前後関係は不明で、3号と同時期併存の可能性もある。C3群は7号焼成坑と8号焼成坑で構成される。出土須恵器から8号→7号の前後関係が追えており、7号焼成坑は3号焼成坑と、8号焼成坑は4・5号焼成坑と併存する可能性をもつ。7号は左側壁から奥壁へ床下暗渠排水溝をもつ構造で、8号は斜面下方に奥壁を向ける浅い焼成坑形態をもつ。

《Ⅴ1・Ⅴ2期》　Ⅴ1期になっても、Ⅳ2新期に中心的な群であったB2群とC2群が継続して営まれる。ただ、B2群は18号焼成坑とそれに重複する9号焼成坑の2基のみで、それから派生した可能性をもつ16号焼成坑が斜面上方へと移動する。そのさらに、斜面上方、Ⅳ2古期のA2群に、15号焼成坑が営まれ、Ⅴ2期にはそれから移動する形で、27号焼成坑が営まれる（A3群）。C2群もⅤ1～Ⅴ2期に23号焼成坑が1基のみ存在するだけで、Ⅴ2期にはC1群に移動する（2号焼成坑）。また、調査区域の北西側に、2基の焼成坑が確認されるが、両焼成坑とも当期に位置付けられる可能性をもつ。以上、Ⅳ2期の中心的存在であったB・C群がⅤ期に入ると衰退し、終焉を迎えるとともに、F地区斜面上方から下方に至るまで、広く点在するようになる。分布密度は低く、生産量は半減の様相であったろう。生産の場を大きく移動したものと予想する。二ッ梨一貫山窯跡内には、F地区以外にも土師器焼成坑が分布するが、群在する箇所はなく、当窯跡内での移動は考え難い。隣接する戸津窯跡ないしは二ッ梨豆岡向山窯跡にⅥ期以降の土師器焼成坑が確認されており、特に、Ⅵ2～Ⅵ3期を中心に土師器焼成坑が密集する



第204図　F区土師器焼成坑時期別分布図

戸津窯跡はその可能性が大きい。

以上、F地区斜面に存在する各時期の土師器焼成坑分布を見てきたが、全体的には焼成坑が散漫な時期は、斜面上方から下方まで広く点在、分布する特徴があるのに対し、生産のピークを迎えるⅣ2期は、集中して経営されることがわかった。1基の焼成坑の存続期間にもよるが、群集は同時期併存の可能性を示すものと理解できよう。分布の散漫化はその逆の要因によるものと考えられる。また、斜面上での構築順序であるが、土師器焼成坑から排出されるかき出し灰層の捨て場確保から、斜面下方から上方へという構築順序が主体的であると予想してきた。しかし意外にも、その逆が定量存在していることが、今回の資料整理によってわかった。構築順序の法則性は検討の余地があり、理屈だけでは解決できないものと言える。

次に、Ⅳ2期の中心的な分布域であるB群とC群を対比し、その違いを提示すれば、焼成坑形態で、縦長型隅丸長方形逆台形プランの目立つB群に対し、横長型隅丸方形プラン主体のC群。そして、特に、B群初期のB1群では縦長型隅丸長方形逆台形プランが連続構築され、B2群でもそれが引き継がれる。B2群の中に横長型隅丸方形プランが定量存在するが、正方形に近く、前壁立ち上がるものが多いことが特徴で、C群の前部開放型主体とは様相が異なる。前部形態は斜面傾斜にも左右されるため、系統差とは言いきれないが、可能性は考えておきたい。

次に、須恵器窯との関連について述べると、F地区の土師器焼成坑経営は、Ⅳ2古期に集中経営が始まり、Ⅳ2新期までがピーク。Ⅴ1期に入ると、衰退の様相を見せ始めることがわかった。全盛期と言えるⅣ2期は、当斜面上方に存在する須恵器窯の営まれている時期であり、須恵器窯と土師器焼成坑の経営に関連性を見いだせた。南加賀窯の土師器焼成坑経営は、出現期であるⅡ3期～Ⅲ期まで、単独構築の須恵器窯に極めて隣接して同時期の土師器焼成坑が単独基で営まれる特徴をもつのに対し、Ⅳ期以降は、須恵器窯と土師器焼成坑とが棲み分ける特徴があるとしてきた（望月1996）。構築場所が須恵器窯の斜面下方へと移動する点と、須恵器窯も土師器焼成坑も複数基経営される点を強調し、棲み分けのイメージを強くもっていたが、今回の土師器焼成坑と須恵器窯との操業期間及びピークの連動性から、一体的な経営がかなり強かったことがわかった。それは、戸津窯跡なども同様で、須恵器生産の終焉期であるⅥ3期まで継続される経営体制であったのだろう。南加賀窯跡群の特徴と言えるものであり、当窯跡群の須恵器生産と土師器生産の一体的経営の強さを物語るものと言えよう。

（2）土師器焼成坑形態について

二ッ梨一貫山窯跡の土師器焼成坑形態は、本文にて詳しく述べてきたし、また、その特徴については、以前、北陸の土師器焼成坑についてまとめた際に、分類案を提示して、土師器焼成坑出現から終焉までの形態変遷の中で論じた（望月1996B）。その後、考えを大きく変更した部分もないため、ここであえて再論することはしない。詳しくは拙稿を参照していただきたい。よって、ここでは、二ッ梨一貫山窯跡の土師器焼成坑に見る、須恵器窯との関連性、須恵器窯技術の援用について、述べることとする。

まず、第1点としては、床下暗渠排水溝など床下施設の設けられている焼成坑が多いことである。また、床をかさ上げしたり、貼り壁するものも見られる。床下暗渠排水溝については、6号焼成坑と7号焼成坑、11号焼成坑で確認される。奥壁際から側壁際にかけて浅い排水溝を掘り、そのうえに須恵器や土師器を伏せて、床を貼るもので、6号の排水溝は斜面下方まで長く伸びてる。6号では須恵器鉢A完形を割った破片数点と土師器釜胴片が、7号では土師器釜と鍋の大きな破片が、11号では須恵器坏B蓋と坏Aの完形と盤Aと盤Bの大型破片が使われている。特に、11号の須恵器は完形であるが、焼き歪みのあるもので、一般的には須恵器窯内の転用置台として使用されるものである。須恵器の窯道具として工房などに保管されているものを土師器焼成坑構築の際に使用したものだろう。また、溝へ土器を伏せていないが、床下排水溝の上に床を貼る暗渠排水溝も27号焼成坑で確認されており、同様の性格をもっていたものと言える。さて、床下暗渠排水溝だが、土師器焼成坑には特異な構造であり、他地域での事例は知らない。通常は、須恵器窯に採用される床下構造であり、南加賀窯跡群ではⅢ期以降に事例が増え、Ⅳ2新期までの間で顕在化する。壁際に沿って浅い排水溝を掘り、土器で蓋をする土師器焼成坑と同様のもので、焼成部口境の舟底状ピットに連結するものが多い。当排水溝の目的は除湿にあり、当期の土師器焼成坑に床下土坑が多く見られることと関連性が強いだろう。全国的に見て、土師器焼成坑に、これほどの

湿気防止策がとられたものはなく、焼成方法の違いから、本来的には土師器焼成に必要ではなかったものと言える。また、7号焼成坑の壁の貼り直しや3号焼成坑、7号焼成坑、17号焼成坑、25号焼成坑の床のかさ上げ、2次貼床の存在も、土師器焼成坑には確認例が少なく、須恵器窯技術の援用ないしは構築理念の継承と考えられる。須恵器窯を築窯した工人たちが、土師器焼成坑構築そして焼成に携わったことを物語るであろう。

土師器焼成坑構築以外にも、須恵器窯と関連性の深い資料がある。それは、当土師器焼成坑内から比較的多く出土している円盤型土製品の存在である。円盤型土製品は、本文でも述べたように、須恵器長頸瓶の風船技法に伴うものである。別作り口頸部接合の際の胴部側切り取り円盤で、所謂製作途中の不要粘土と言える。これ以外にも、横瓶の切り取り円盤や、須恵器大甕の胴部端切り落とし三日月型土製品、または製作途中で失敗したヘラ切りの須恵器食膳具を潰した土製品、叩き痕もつ須恵器甕胴部片など、須恵器製作で不要となった小さな断片状土製品や粘土塊が、酸化焔焼成されて、土師器焼成坑から出土してくるのである。詳しくは後述するが、土師器焼成坑では、このような未焼成の小粘土塊を窯道具として使っており、土師器焼成には必要なものであったと理解される。特に、長頸瓶の頸部接合に伴う切り取り円盤を多用したことについては、大きさが手頃であったためと考えている。須恵器製作工房では、製作の際に生じる切れ端などの土製品や粘土塊を保管し、須恵器窯道具として使用することは一般的に行われていたものであり、それは特に7世紀前半に顕在化する。長頸瓶切り取り円盤が須恵器窯の窯道具として使われなかったのは、土師器とは窯道具として使用する方法が異なっていたものであり、須恵器窯道具には不要なものであったのだろう。須恵器長頸瓶の切り取り円盤が須恵器窯から出土した事例は、全国でも1例のみしか確認していないことが（播磨白沢5号窯、森内2001）、それを物語るであろう。

以上、二ッ梨一貫山窯跡に存在する土師器焼成坑に見られる須恵器窯技術の援用又は須恵器製作工房との強い関連性を述べたが、つまりは、須恵器と土師器とが一体的な生産を行っていたことを物語る。そのレベルは、須恵器甕と土師器釜の叩き道具の違いや食膳具の製作技法の違いなどから全くの同一とは考えていないが、工房を棲み分けるようなものではなかったと考えている。特に、窯の構築と焼成に関しては、同一工人が関与していた可能性は高く、燃料確保から窯焚きまで、一つの組織の中で行われていた可能性を考えたい。そこには、焼成の軟質と陶質の違いはあっても、別の焼き物を生産する意識は低かったろう。

参考引用文献

石川県立埋蔵文化財センター　1987　『篠原遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター　1995　『荒木田遺跡』

岡戸哲紀　1991　「陶邑・伏尾遺跡の検討」『韓式系土器研究Ⅲ』韓式系土器研究会

小平和夫　1990　「古代の土器」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（総論編）』長野県埋蔵文化財センター

小松市教育委員会　1990　『二ッ梨横川1号窯跡』

小松市教育委員会　1990　『二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』

小松市教育委員会　1991　『那谷桃の木山古窯跡』

小山憲一　2001　「包含層出土の筒形土器について」『発シB遺跡－第3次調査－』三重県埋蔵文化財センター

坂井秀弥　1998　「古代の土管」『新潟考古学談話会会報』第19号　新潟考古学談話会

富山県埋蔵文化財センター　1993　『小杉流通業務団地内遺跡群　第10・11次発掘調査概要』

豊科町東山遺跡調査会・豊科町教育委員会　1999　『筑摩東山－上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告書－』

西山克己　1996　「7世紀代に信濃で用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』第79号　長野県考古学会

松本市教育委員会　1992　『松本市宮の前遺跡』

松本市教育委員会　1995　『松本市岡田町遺跡Ⅱ』

三重県埋蔵文化財センター　2000　『高茶屋大垣内遺跡（第3・4次）発掘調査報告』

望月精司　1996A　「古代土製獣脚小考」『荒木田遺跡』小松市教育委員会

望月精司　1996B　「土師器焼成坑の分類」「北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

森内秀造　2001　「須恵器貯蔵具に残る製作痕跡－播磨地方の窯跡出土資料から－」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

F区　12号窯灰原出土須恵器観察表（第102～109図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋大	イ4盛土	口19.5, 高4.45 つまみ径3.4,つまみ高1.35	砂多	青灰白焼良	2/5	
2	〃	ウ1 下層暗褐土	口18.2, 高4.0 つまみ径2.9,つまみ高1.3	普通	灰白焼良	1/4	
3	〃	エ1・ウ1 下層暗褐土	口16.6, 高3.4 つまみ径2.7,つまみ高1.3	〃	灰色焼堅緻	1/4	
4	〃	ウ4	口16.4	〃	暗灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類
5	坏B蓋中	ウ1 12窯灰下灰	口13.4, 高2.45 つまみ径2.4,つまみ高0.55	砂多	〃	1/2	重焼Ⅱa類
6	〃	ウ1 下灰暗褐土	口14.4, 高2.65 つまみ径2.6,つまみ高0.9	普通	灰色焼堅緻	4/5	重焼Ⅰ類
7	〃	イ4	口14.0, 高2.8 つまみ径2.4,つまみ高0.8	〃	暗灰焼堅緻	1/4	
8	〃	エ2表土	口13.4, 高2.7 つまみ径2.6,つまみ高1.1	良	青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅱb類？
9	〃	12窯灰	口13.7, 高2.1 つまみ径2.4,つまみ高0.9	普通	〃	1/4	重焼Ⅰ類
10	〃	ウ1 下層暗褐土	口13.7, 高3.0 つまみ径2.6,つまみ高0.7	〃	青灰焼良好	1/4	重焼Ⅱb類
11	〃	ウ1	口13.0, 高3.15 つまみ径2.8,つまみ高0.85	〃	青灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
12	〃	ウ1 下層暗褐土	口13.2, 高3.0 つまみ径2.9,つまみ高0.7	〃	褐灰酸化焼良	1/2	重焼Ⅱa類
13	〃	ウ4	口12.1, 高2.85 つまみ径1.9,つまみ高0.75	〃	青灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅰ類
14	〃	イ4	口12.3, 高2.9 つまみ径2.4,つまみ高0.95	砂多	〃	1/2	重焼Ⅱa類
15	〃	ウ1	口12.5	普通	青灰焼良好	3/5	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「×」
16	坏B蓋小	ウ1 下灰暗褐土	口11.6, 高3.0 つまみ径2.1,つまみ高0.9	〃	〃	4/5	内天ヘラ記号「Ⅰ」
17	〃	〃	口12.2	〃	白焼堅緻	3/5	
18	〃	ウ1下灰	口11.2, 高2.3 つまみ径2.4,つまみ高1.1	〃	青灰焼堅緻	1/5	重焼Ⅰ類
19	〃	エ2上層 ウ2下灰	口10.6, 高2.3 つまみ径2.45,つまみ高0.9	〃	〃	1/4	重焼Ⅰ類
20	〃	ウ1 下灰暗褐土	口10.8, 高2.2 つまみ径1.85,つまみ高0.9	〃	青灰焼良好	1/6	重焼Ⅰ類
21	〃	〃	口12.7, 高2.6 つまみ径2.2,つまみ高1.1	〃	青灰焼堅緻	1/3	
22	〃	ウ3中層灰 下層暗褐土	口12.7, 高2.35 つまみ径2.4,つまみ高0.85	〃	青灰焼良好	1/2	
23	〃	ウ0	口12.3, 高2.8 つまみ径2.4,つまみ高0.95	〃	青灰白焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
24	〃	ウ3	口11.8, 高2.0 つまみ径2.2,つまみ高0.7	砂多	青灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅱa類
25	〃	ウ4	口11.0, 高1.9 つまみ径2.3,つまみ高0.8	〃	〃	完形	重焼Ⅱa類
26	〃	ウ1	口11.2, 高2.6 つまみ径2.3,つまみ高0.9	〃	〃	1/3	重焼Ⅱb類
27	〃	ウ1下灰 下層暗褐土	口12.5, 高3.1 つまみ径2.4,つまみ高0.9	普通	青灰白焼良	1/3	重焼Ⅱa類
28	坏B身大	ウ1 下灰暗褐土	台径11.2, 台高0.7	砂多	青灰焼堅緻	2/5	底ヘラ記号「×」
29	〃	エ2	口15.5, 高5.1 台径11.6, 台高0.65	〃	〃	1/3	
30	〃	ウ3	口15.4, 高6.2 台径11.8, 台高0.55	普通	青灰焼良好	1/2	底ヘラ記号「＋」
31	〃	ウ1 下灰暗褐土	口16.4, 高6.65 台径12.4, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	1/4	
32	坏B身大	ウ1	口14.5, 高6.7 台径11.9, 台高0.45	砂多	青灰焼堅緻	1/4	
33	〃	ウ3 下灰暗褐土	口14.9, 高6.0 台径11.0, 台高0.5	普通	〃	1/2	底爪痕a③
34	坏B身中	ウ1 下層暗褐土	口12.9, 高4.2 台径9.2, 台高0.6	〃	〃	1/3	
35	〃	〃	口12.5, 高4.5 台径9.2, 台高0.8	〃	青灰白焼良好	3/4	
36	〃	ウ0	口13.2, 高4.45 台径10.4, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	1/6	
37	〃	ウ1下灰	口13.0, 高3.9 台径8.9, 台高0.6	砂多	〃	2/5	底ヘラ記号「×」
38	〃	〃	口13.0, 高3.9 台径9.5, 台高0.45	普通	〃	1/6	
39	〃	〃	口12.0, 高4.1 台径8.3, 台高0.3	〃	〃	1/3	底爪痕b①
40	〃	ウ1 下層暗褐土	口12.3, 高3.8 台径9.1, 台高0.5	〃	暗灰焼堅緻	1/5	
41	〃	〃	口12.7, 高3.8 台径9.0, 台高0.6	〃	青灰焼良好	1/7	
42	〃	ウ2下灰	口12.3, 高3.6 台径8.4, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	1/6	
43	〃	ウ1 下層暗褐土	口12.3, 高3.5 台径8.6, 台高0.6	砂多	青灰焼良	1/2	
44	坏B身小	ウ1	口11.4, 高4.2 台径9.0, 台高0.5	普通	灰白焼不良	3/4	
45	〃	〃	口10.6, 高4.3 台径7.8, 台高0.5	砂多	〃	1/3	底爪痕a①
46	〃	ウ1 下層暗褐土	口10.0, 高4.0 台径8.0, 台高0.6	普通	灰白焼堅緻	1/2	底ヘラ記号「V」
47	坏A	ウ3 下灰暗褐土	口13.8, 高2.85	砂多	青灰焼堅緻	1/4	
48	〃	ウ3中層灰	口14.4, 高2.9	普通	灰白焼不良	3/5	
49	〃	ウ2暗褐土	口12.8, 高3.5	砂多	青灰焼良好	1/2	底ヘラ記号「Ⅰ」
50	〃	ウ1	口12.4, 高3.4	〃	灰色焼堅緻	1/2	
51	〃	ウ1 下灰暗褐土	口12.4, 高3.3	普通	〃	1/3	底ヘラ記号「⋊」
52	〃	ウ1 下層暗褐土	口12.5, 高3.35	砂多	青灰焼堅緻	1/2	
53	〃	ウ1 下灰暗褐土	口12.3, 高3.35	普通	青灰白焼良	1/3	
54	〃	〃	口12.2, 高3.4	砂多	灰白焼良	1/2	
55	〃	ウ4	口11.5, 高3.0	普通	青灰焼堅緻	1/4	底ヘラ記号「Ⅰ」
56	〃	エ2 上灰暗褐土	口12.2, 高3.55	〃	灰褐焼良	1/3	底ヘラ記号「×」
57	〃	ウ1 下灰暗褐土	口11.8, 高3.5	〃	青灰焼良好	1/2	
58	〃	ウ4	口11.2, 高3.4	〃	〃	1/4	
59	〃	エ2 上灰暗褐土	口12.0, 高3.8	〃	灰色焼堅緻	1/2	
60	〃	ウ1下土 ウ3上灰	口12.2, 高3.4	砂多	青灰焼堅緻	3/5	
61	〃	ウ2 下灰暗褐土	口12.8, 高3.55	〃	灰色焼堅緻	1/3	
62	〃	ウ2上灰	口12.0, 高3.5	普通	青灰焼堅緻	1/4	
63	〃	ウ4	口12.6, 高3.15	〃	青灰焼良好	1/4	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
64	坏 A	ウ2	口10.8, 高3.7	砂多	青灰焼良好	1/5	
65	〃	ウ2間層黄褐土	口14.4, 高3.45	普通	〃	〃	
66	〃	〃	口14.7, 高3.9	〃	〃	1/3	
67	盤 A	ウ1下層暗褐土	口16.0, 高2.0	〃	青灰焼堅緻	2/5	
68	〃	ウ1下灰暗褐土	口15.8, 高1.8	〃	〃	1/6	
69	〃	ウ1下灰	口16.0, 高2.0	〃	〃	1/2	
70	〃	ウ1下層暗褐土	口15.2, 高1.8	砂多	灰白焼不良	1/5	
71	〃	エ2	口13.6, 高1.9	普通	〃	2/5	
72	〃	ウ2下灰	口15.6, 高1.9	〃	青灰焼良好	3/5	
73	〃	ウ1下灰暗褐土	口15.8, 高2.0	砂多	青灰焼堅緻	1/4	
74	〃	エ1下灰暗褐土	口15.8, 高2.1	〃	青灰焼良好	1/5	
75	〃	ウ3下灰暗褐土	口15.4, 高2.1	〃	灰色焼堅緻	1/2	底ヘラ記号「Ⅰ」
76	〃	ウ1下灰暗褐土	口13.9, 高1.7	〃	青灰焼堅緻	1/5	
77	〃	ウ1下灰暗褐土 上灰	口15.3, 高1.75	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	
78	〃	ウ1下灰暗褐土	口14.8, 高1.95	〃	青灰焼堅緻	1/4	
79	〃	エ2上灰暗褐土 ウ1下灰暗褐土	口14.8, 高2.5	〃	青灰白焼良	1/3	
80	〃	ウ1	口14.0, 高2.15	〃	灰色焼堅緻	1/4	
81	〃	ウ1下灰暗褐土	口14.8, 高1.8	普通	暗灰焼堅緻	1/5	
82	〃	〃	口14.8, 高1.75	〃	青灰焼良好	〃	
83	〃	ウ5	口15.9, 高2.4	〃	青灰焼堅緻	2/5	
84	〃	〃	口15.7, 高2.25	〃	〃	1/5	
85	〃	ウ3	口14.8, 高2.2	〃	〃	1/4	
86	〃	エ2	口15.3, 高1.55	砂多	青灰焼良好	〃	
87	〃	ウ1	口15.5, 高1.6	普通	青灰焼堅緻	2/5	
88	〃	ウ1ウ4下灰	口15.2, 高1.7	〃	〃	3/5	
89	〃	ウ4イ4	口14.8, 高1.8	砂多	〃	1/3	
90	〃	ウ3下灰暗褐土	口14.8, 高2.45	良	白焼堅緻	2/5	
91	〃	ウ1	口15.2, 高2.5	〃	〃	1/2	
92	盤 B	ウ1下灰暗褐土	口19.8, 高3.2 台径17.2, 台高0.8	砂多	灰色焼不良	1/5	
93	〃	ウ1	口18.9, 高3.25 台径15.1, 台高0.9	〃	青灰白焼良	〃	
94	〃	〃	口21.3, 高3.45 台径17.2, 台高10.8	普通	青灰焼堅緻	〃	
95	〃	ウ2下灰	口19.4, 高3.1 台径16.1, 台高0.5	砂多	〃	〃	
96	〃	イ4	口20.8, 高3.65 台径16.35, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	1/2	
97	〃	ウ2中層灰 下灰暗褐土	口19.9, 高3.4 台径16.2, 台高0.65	〃	青灰焼堅緻	1/6	
98	〃	ウ4ウ2上灰	口19.7, 高3.15 台径15.6, 台高0.5	〃	青灰白焼堅緻	2/3	
99	〃	エ2下灰暗褐土	口18.7, 高3.6 台径16.0, 台高0.45	〃	青灰焼堅緻	1/4	
100	〃	ウ4	口21.3, 高3.8 台径18.0, 台高0.7	〃	灰色焼堅緻	〃	
101	〃	ウ1上灰	口21.6, 高3.9 台径18.0, 台高0.7	普通	暗青灰焼堅緻	〃	
102	〃	エ5下層	口19.7, 高3.8 台径15.1, 台高0.5	砂多	灰色焼堅緻	3/5	底爪痕a①
103	〃	ウ1下灰暗褐土	口23.0, 高4.9 台径18.4, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	1/8	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
104	盤 B	ウ1	口20.8, 高3.8 台径16.8, 台高0.6	普通	青灰焼堅緻	1/8	
105	〃	ウ2下灰	口20.6, 高3.85 台径16.5, 台高0.6	〃	〃	1/5	
106	〃	〃	口22.9, 高4.35 台径18.0, 台高0.7	〃	青灰焼良好	2/5	
107	〃	〃	口21.8, 高4.7 台径17.3, 台高0.8	砂多	青灰焼堅緻	1/6	
108	〃	〃	口21.8, 高4.7 台径17.3, 台高0.8	〃	〃	〃	
109	〃	イ4	口22.0, 高3.9 台径18.2, 台高0.6	〃	〃	1/5	底爪痕a③
110	〃	ウ1下灰暗褐土	口21.7, 高3.9 台径17.6, 台高0.7	良	青灰焼良好	1/3	
111	〃	エ2上灰	口20.2, 高3.6 台径16.6, 台高0.6	砂多	〃	〃	
112	〃	ウ1下灰暗褐土	口19.9, 高3.6 台径16.2, 台高0.65	〃	灰色焼堅緻	〃	
113	〃	ウ3下土中層灰	口23.8, 高4.75 台径20.2, 台高0.85	〃	青灰焼良好	2/5	
114	〃	ウ1	口20.5, 高3.45 台径16.6, 台高0.5	〃	暗灰焼堅緻	1/4	
115	〃	ウ4	口24.3, 高4.1 台径20.3, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	〃	
116	〃	エ1下灰暗褐土 ウ1下灰暗褐土	口22.6, 高4.1 台径18.2, 台高0.8	普通	青灰焼良好	1/5	
117	〃	ウ1ウ2	口21.4, 高3.85 台径16.7, 台高0.75	砂多	〃	1/4	
118	〃	ウ4	口22.8, 高4.25 台径18.4, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	1/5	
119	〃	ウ2上灰暗褐土 下土下灰暗褐土	口21.5, 高3.7 台径16.0, 台高0.55	普通	青灰焼良好	2/3	
120	〃	ウ3下灰暗褐土	口20.4, 高3.95 台径14.6, 台高0.6	〃	灰白焼堅緻	1/4	
121	〃	ウ3中層灰下土	口20.6, 高3.8 台径14.4, 台高0.5	〃	〃	1/2	
122	〃	イ4	口23.8, 高3.95 台径19.4, 台高0.75	〃	青灰焼堅緻	1/6	
123	〃	ウ0	口21.0, 高3.6 台径14.8, 台高0.5	砂多	青灰白焼良	1/2	底爪痕a③
124	高盤	ウ1下灰暗褐土	口21.8, 坏高2.3	〃	青灰焼堅緻	1/6	
125	〃	ウ1下灰	口21.5, 坏高3.0	〃	灰褐焼良好	1/6	
126	〃	ウ2下灰	口22.8, 坏高2.5	〃	灰色焼堅緻	1/10	
127	〃	ウ2中層灰	口20.5, 坏高2.8	〃	〃	1/8	
128	〃	ウ1下灰暗褐土	口20.7, 坏高2.2	〃	青灰焼良好	1/4	
129	〃	エ2上灰	口19.5, 坏高2.5	普通	暗青灰焼堅緻	1/5	
130	〃	ウ3上灰暗褐土 ウ3下灰暗褐土	脚12.2, 脚基5.2 脚高9.6	砂多	青灰焼良好	脚完	
131	〃	ウ3間層黄褐土	脚12.6, 脚基5.0 脚高10.0	〃	青灰焼堅緻	脚3/4	
132	〃	ウ3上層暗褐土	脚12.0, 脚基2.3 脚高8.5	普通	〃	脚4/5	内シボリ痕
133	〃	ウ3間層黄褐土	脚13.6, 脚基5.6 脚高8.5	砂多	灰白焼不良	〃	
134	〃	ウ3下土 ウ3上灰暗褐土	脚12.2, 脚基5.0 脚高8.4	〃	青灰焼堅緻	脚完	
135	〃	ウ3中層灰	脚13.0, 脚基5.7 脚高9.0	〃	青灰白焼良好	脚1/3	
136	小型壺	ウ3下灰暗褐土	口8.7, 胴大12.9	普通	灰色焼堅緻	1/4	
137	小型鉢	ウ3中層灰下土	口10.2, 高3.8	〃	青灰焼堅緻	3/4	底糸切り痕

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
138	小型鉢	エ2下灰暗褐土	口10.1, 高3.8	普通	灰色焼堅緻	1/4	底ヘラ切り
139	鉢F	〃	口17.0	砂多	〃	1/20	
140	〃	ウ1	口17.0	普通	〃	口縁片	
141	〃	ウ1下灰暗褐土	口15.8	〃	〃	〃	
142	〃	ウ1下灰暗褐土 ウ2下灰 エ2下灰暗褐土 エ2上灰	口21.2	砂多	青灰焼良好	1/3	口縁火ダスキ
143	鉢B	ウ2下灰 ウ3下灰	口24.9, 頸23.6 体25.0	普通	青灰焼堅緻	1/4	
144	瓶A	ウ1下灰暗褐土	頸4.8	〃	灰色焼堅緻	1/10	胴上端シボリ痕
145	瓶C	ウ1上層	頸9.0	〃	〃	1/12	
146	瓶D	ウ1下灰暗褐土 ウ2上灰暗褐土	頸8.3, 耳厚1.2	〃	〃	1/20	
147	〃	エ2下灰暗褐土	耳厚1.5	〃	青灰焼良好	耳片	
148	〃	ウ1下灰暗褐土	耳厚1.2	〃	暗灰焼堅緻	〃	
149	特殊瓶	エ4	胴20.6	良	青灰焼堅緻	胴片	
150	壺A蓋	ウ3下灰暗褐土	口11.9, 受高2.7	普通	灰色焼堅緻	1/5	
151	〃	イ3	口12.5, 受高2.1	〃	〃	略完	
152	〃	ウ1下灰暗褐土	つまみ径3.1,つまみ高1.8	〃	〃	1/4	
153	壺A	ウ2 ウ3下灰暗褐土	口11.3, 胴23.0 頸12.2, 頸高2.7	〃	〃	1/20	口縁有蓋重焼
154	〃	ウ2	台12.9, 台高2.4			1/9	底ヘラ記号「I」
155	〃	ウ3下土	台13.9, 台高2.5	〃	青灰焼堅緻	台片	
156	〃	ウ3上灰暗褐土	台20.5, 台高3.6	砂多	灰色焼堅緻	〃	
157	壺F	エ4エ5中層 エ5下層	口17.0, 器高21.2 頸14.6, 頸高3.6 最大胴20.0, 胴高17.6 底11.1	普通	〃	3/5	底ロクロ軸痕 容量8.332ℓ
158	〃	ウ1下層暗褐土	口17.8, 頸15.4, 頸高3.0	〃	青灰焼堅緻	口頸片	
159	横瓶	ウ1	口9.9 頸9.4, 頸高2.8	〃	灰色焼堅緻	〃	外H叩き 内Dc当て
160	〃	ウ3中層灰 ウ3間層黄褐土 ウ3下灰暗褐土	胴厚19.3	〃	〃	1/8	外He叩き 内Da当て
161	小甕	ウ1下灰暗褐土 ウ2下灰 ウ3下灰暗褐土	口12.8, 胴18.9 頸11.4, 頸高2.2	〃	青灰焼堅緻	1/3	容量推6.137ℓ
162	〃	ウ2下灰エ2 ウ3間層黄褐土	胴24.5	〃	〃	〃	外He叩き 内Da当て
163	〃	ウ0 ウ1下層暗褐土	口14.8, 胴19.2 頸13.4, 頸高2.2	〃	暗灰焼堅緻	1/8	外H叩き 内Da当て 容量推6.426ℓ

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
164	中甕	ウ1 エ2下灰暗褐土	口22.8 頸20.8, 頸高3.5	砂多	青灰焼良好	口縁片	外Hc叩き 内Dc当て
165	〃	ウ3下灰暗褐土	口25.3 頸21.4, 頸高4.2	〃	灰色焼堅緻	口頸片	外He叩き 内Dc当て
166	〃	ウ1下灰	口20.6 頸19.0, 頸高3.8	良	灰褐焼良好	〃	外Hc叩き 内Da当て
167	〃	ウ3中層灰 ウ3下灰暗褐土	—	普通	灰色焼堅緻	底 1/6	外Hc叩き 内Dc当て
168	〃	ウ1上灰 ウ1下灰暗褐土 ウ2間層黄褐土 エ2下灰暗褐土 エ2間層黄褐土	胴41.0	良	灰褐焼良好	1/7	外Hc叩き、内胴Da当て、底Db当て、内面粘土単位の色調濃淡
169	大甕	ウ1下灰暗褐土 ウ1間層黄褐土	—	普通	灰色焼堅緻	口縁片	波状文＋波線文＋波状文
170	〃	ウ1下灰暗褐土	—	〃	〃	〃	
171	〃	〃	—	〃	〃	〃	
172	〃	ウ2ウ3	口推60.0	〃	酸化焼良	〃	
173	〃	ウ3下灰暗褐土	頸33.8	〃	灰色焼堅緻	胴上片	外Hc叩き 内Dc当て
174	釜	ウ1下灰暗褐土	口16.3	砂多	〃	1/12	
175	〃	〃	口19.2, 頸16.8	大粒砂	〃	1/7	土師土・窯土溶着
176	〃	エ1下灰暗褐土	口23.0, 頸19.6	〃	青灰焼堅緻	1/8	土師土
177	〃	ウ3下層暗褐土 ウ3中層灰	口19.5, 頸16.0	〃	灰色焼堅緻	〃	〃
178	〃	ウ3下灰暗褐土	口16.5, 頸14.0	〃	青灰焼堅緻	1/7	〃
179	小釜	〃	口15.3, 胴15.0 頸13.4	〃	〃	1/6	〃
180	鍋	ウ1灰	口28.5	〃	〃		〃
181	手付鍋	ウ1下灰	口24.8, 胴27.0 頸23.0, 頸高2.2	〃	〃	1/8	〃
182	甑	ウ2下灰 エ2下灰暗褐土	底16.2	〃	灰色焼堅緻	底片	〃
183	〃	ウ2下灰	底13.7	〃	〃	〃	〃
184	特殊鉢	エ12下層暗褐土 上層暗褐土	口39.8, 高4.35	〃	灰色還元焼良 一部酸化焼	1/6	〃
185	平瓦	エ2下灰暗褐土	厚2.2	砂多	灰色焼堅緻	狭端片	凸縄目叩き 凹布目
186	〃	エ4	厚1.9	〃	灰色焼良好	側端片	〃
187	土師釜	ウ1下灰 ウ1下層暗褐土	口22.0, 頸19.6	大粒砂	5YR 7/6通 酸化焼	1/2	土師土

F区　10号窯灰原出土須恵器観察表（第110図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋中	イ15下層黒灰	口15.5	普通	灰色焼堅緻	1/8	
2	〃	〃	口15.3	〃	〃	1/4	
3	〃	〃	つまみ径3.0,つまみ高0.55		青灰焼堅緻	1/12	
4	〃	ア14	つまみ径2.8,つまみ高0.8	普通	灰色焼堅緻	1/10	
5	坏B身中	イ15上層	台11.0, 台高0.55	〃	灰白焼良好	1/15	
6	〃	〃	口13.9, 高3.5 台10.6, 台高0.4	〃	灰色焼堅緻	1/5	底爪痕a①
7	〃	イ14下層黒灰	台10.0, 台高0.4	〃	青灰焼良好	1/8	
8	〃	〃	口13.7, 高3.05 台10.0, 台高0.3	〃	灰色焼堅緻	1/6	
9	〃	イ15下層	台0.85, 台高0.45	〃	〃	1/10	
10	坏A	ア15下層	口12.7, 高2.9	〃	青灰焼堅緻	1/3	
11	〃	イ15下層黒灰	口12.6, 高2.6	〃	〃	1/2	
12	〃	イ15上層	口13.0, 高2.7	〃	〃	1/3	
13	坏A	イ15上層	口13.5, 高2.8	普通	青灰焼良好	2/3	
14	〃	ア15上層	口13.2, 高2.85	〃	〃	1/4	
15	〃	イ15上層	口13.2, 高3.15	〃	〃	1/2	
16	〃	〃	口13.1, 高3.0	〃	青灰白焼堅緻	1/5	
17	〃	イ14下層黒灰	口13.1, 高3.25	〃	青灰焼良好		
18	〃	イ15上層	口12.6, 高3.1	〃	青灰焼堅緻	1/5	
19	〃	〃	口13.7, 高2.8	〃	〃	1/3	
20	〃	イ15上層 下灰黒灰	口13.5, 高2.85	〃	〃	1/2	
21	〃	イ15上層	口13.8, 高3.3	〃	〃	1/4	
22	〃	ア14上層	口12.6, 高3.1	〃	〃	1/5	
23	坏B身中	イ15下層黒灰	口12.8	〃	灰色焼堅緻	1/15	
24	〃	イ5上層	口12.6	〃	〃	1/15	

F区　9号窯灰原出土須恵器観察表（第110図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋中	ア10暗褐土	口12.8, 高3.1 つまみ径2.6,つまみ高0.9	普通	青灰焼良好	略完	重焼Ⅱb類
2	坏B身大	ア10	口17.5, 高6.9 台12.3, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	〃	
3	〃	ア10暗褐土	口17.8, 高7.4 台12.2, 台高0.8	〃	青灰焼良好	2/3	
4	坏B身中	〃	口12.6, 高4.3 台9.5, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	1/3	
5	盤A	ア10暗褐土	口16.7, 高1.85	普通	青灰白焼良好	2/3	底ヘラ記号「Ⅰ」
6	〃	ウ4	口15.4, 高2.0	〃	青灰焼堅緻	1/5	11窯灰原に訂正
7	盤B	イ7	口17.7, 高2.55 台13.4, 台高0.4	良	白焼堅緻	1/15	〃
8	〃	イ8	口18.5, 高3.55 台12.6, 台高0.75	普通	青灰焼良好	1/10	〃

F区　11号窯灰原出土須恵器観察表（第111～113図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋大	イ7	口17.5	普通	灰色焼堅緻	1/5	重焼Ⅱb類
2	〃	イ8	口17.6	〃	青灰焼堅緻	1/10	重焼Ⅱa類
3	〃	イ7	つまみ径2.5,つまみ高0.9	〃	青灰白焼良好	1/4	〃
4	〃	イ8	口14.9, 高4.8 つまみ径2.4,つまみ高1.5	〃	青灰焼良好	1/3	重焼Ⅱb類
5	坏B蓋中	〃	口13.85, 高3.8 つまみ径3.1,つまみ高1.5	砂多	灰白焼不良	2/3	〃
6	〃	イ7	口13.7	普通	青灰焼堅緻	1/6	重焼Ⅰ類
7	〃	イ8	口12.8	〃	灰褐焼良好	1/5	重焼Ⅱb類
8	〃	〃	つまみ径2.75,つまみ高1.0	〃	灰白焼不良	1/4	
9	坏B蓋中	イ8	口12.4, 高3.15 つまみ径2.2,つまみ高1.0	普通	暗灰焼堅緻	2/3	
10	〃	〃	口13.4	良	白焼堅緻	1/10	重焼Ⅱa類
11	〃	〃	口13.8	普通	青灰焼良好	1/8	〃
12	坏B蓋小	ア7	口11.5, 高2.7 つまみ径2.0,つまみ高0.9	〃	青灰白焼良好	2/5	〃
13	〃	イ8	口10.8	良	青灰焼良好		重焼Ⅰ類
14	〃	〃	口11.8	普通	灰色焼堅緻	1/6	〃
15	〃	〃	口11.9	〃	青灰白焼良好	1/3	重焼Ⅱb類
16	坏B身大	〃	台13.4, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	1/3	
17	〃	ウ4	台11.6, 台高0.5	〃	青灰焼良好	1/10	底爪痕a③

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
18	坏B身大	イ8	口14.9	良	青灰白焼良好	1/6	
19	〃	ア7	口16.4, 高6.6 台10.8, 台高0.6	普通	青灰焼堅緻	1/2	底爪痕a③ 底ヘラ記号「Ⅰ」
20	坏B身中	イ7	台9.8, 台高0.85	〃	青灰白焼良	1/5	
21	〃	イ7 イ8	台9.7, 台高0.55	〃	灰色焼堅緻	1/2	
22	坏B身大	イ8	台10.0, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	1/3	
23	坏B身小	ア8	口10.7, 高4.1 台7.4, 台高0.5	良	暗青灰焼堅緻	1/7	
24	〃	ア7 イ7	口10.2, 高4.0 台7.1, 台高0.35	普通	青灰焼堅緻	2/3	
25	〃	不明	口10.7, 高4.2 台7.9, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	1/5	
26	〃	ウ7	台6.8, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	1/8	底爪痕a③
27	〃	イ8	台6.8, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	1/10	
28	坏A	イ7	口12.2, 高3.1	〃	〃	3/4	
29	〃	イ8	口12.2, 高3.7	砂多	灰色焼良好	4/5	
30	〃	〃	口12.4, 高3.6	〃	〃	1/3	
31	盤A	〃	口16.7, 高2.05	普通	青灰焼良好	1/3	
32	〃	イ7	口15.4, 高2.4	良	白焼堅緻	1/4	底ヘラ記号「Ⅰ」
33	〃	ア7	口16.4, 高2.45	普通	青灰焼堅緻	3/4	
34	〃	イ7	口15.6, 高2.25	〃	青灰焼良好	1/4	
35	〃	ア8	口16.4, 高2.15	〃	青灰焼堅緻	2/3	
36	盤B	〃	口18.7, 高3.1 台14.4, 台高0.7	砂多	灰色焼堅緻	1/5	
37	〃	〃	口20.8, 高3.6 台14.7, 台高0.75	〃	〃	2/3	
38	〃	イ8	口19.6, 高3.7 台16.0, 台高0.7	普通	青灰白焼堅緻	1/7	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
39	盤B	イ8	口17.8, 高3.0 台11.6, 台高0.45	良	白焼堅緻	1/5	底爪痕d
40	〃	イ7 イ8 ウ8	口19.6, 高2.85 台14.2, 台高0.45	普通	〃	1/3	〃
41	〃	ア7	口20.65, 高3.85 台17.55, 台高0.55	〃	青灰白焼良好	1/5	
42	〃	イ8 エ10	口21.9, 高4.1 台17.5, 台高0.75	〃	灰色焼堅緻	〃	
43	〃	イ8	台15.6, 台高0.65	〃	〃	〃	
44	〃	イ7 ウ8	台19.6, 台高0.75	〃	〃	1/10	
45	高盤	イ8 イ9 ウ8	脚基5.6	砂多	青灰白焼良好	1/3	
46	鉢F	ウ7 エ7	口18.1	普通	青灰焼良好	〃	
47	〃	ア8 イ8 ウ8 エ6	底10.3, 底厚1.8	〃	青灰焼堅緻	2/5	底糸切り痕
48	鉢A	イ8 ウ7 エ7	口29.9, 高9.8 底18.2	砂多	灰色焼堅緻	1/3	
49	瓶A	イ8	頸4.6	普通	暗灰焼堅緻	1/4	
50	〃	〃	台10.4, 台高1.6	〃	灰色焼堅緻	1/6	
51	水瓶?	イ7	台8.7, 台高0.7 胴14.3	〃	青灰白焼堅緻	1/5	底糸切り痕
52	瓶A(小型)	イ8 ウ8	台8.0, 台高0.75 胴12.2	〃	灰色焼堅緻	1/3	
53	小甕	ア10	口20.6, 胴34.7 頸19.1, 頸高3.9	〃	青灰焼堅緻	1/6	外Ha叩き、内Dc当て9窯灰に訂正
54	中甕	イ8	口28.7 頸22.5, 頸高5.7	〃	灰色焼堅緻	口頸片	

F区 斜面下方堆積灰原出土須恵器観察表(第113～122図)

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	坏B蓋特大	ウ6 エ6中層	突帯11.6	良	白焼堅緻	1/4	重焼Ⅰ類
2	〃	ウ7 ウ8	口20.8, 突帯12.0	普通	灰色焼堅緻	3/5	
3	坏B蓋大	ウ11下層下灰	口17.5, 高3.7 つまみ径3.1,つまみ高1.9	〃	灰白焼不良	1/4	
4	〃	ウ10下層下灰 集中・エ10中層 ウ11下層下灰	口17.8, 高4.6 つまみ径3.6,つまみ高2.0	〃	暗灰焼堅緻	2/5	重焼Ⅰ類
5	〃	エ11下層下灰 集中	口18.1, 高4.2 つまみ径2.35,つまみ高1.6	〃	青灰白良好	〃	重焼Ⅱa類
6	〃	ウ11下層下灰 集中	口16.2	〃	灰白焼不良	1/3	重焼Ⅱb類
7	〃	エ11下層下灰	口17.7, 高3.35 つまみ径2.7,つまみ高1.25	〃	青灰焼良好	完形	〃
8	〃	エ11下層下灰 集中	口16.8	〃	青灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類
9	〃	エ11下層下灰	口15.6, 高4.7 つまみ径2.45,つまみ高1.3	良	白焼堅緻	1/2	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
10	〃	イ9	口14.6	普通	青灰焼堅緻	1/4	〃 〃

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
11	坏B蓋中	ウ11下層下灰 集中	口13.25, 高2.55 つまみ径2.7,つまみ高0.9	普通	灰色焼堅緻	5/6	重焼Ⅰ類
12	〃	ウ11下層下灰	口12.0, 高2.95 つまみ径2.6,つまみ高0.9	〃	青灰焼堅緻	3/4	重焼Ⅰ類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
13	〃	〃	口13.4, 高2.75 つまみ径2.6,つまみ高1.05	〃	暗灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅱb類
14	〃	ウ11下層黒灰	口13.4, 高2.65 つまみ径2.6,つまみ高0.6	〃	青灰焼堅緻	〃	重焼Ⅱb類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
15	〃	イ8表土	口13.3, 高3.25 つまみ径2.7,つまみ高1.2	〃	青灰焼良好	1/5	〃 〃
16	〃	エ11下層下灰 集中	口13.0, 高3.1 つまみ径2.9,つまみ高1.2	〃	青灰焼堅緻	3/4	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
17	〃	ウ11中層	口14.2, 高3.6 つまみ径2.9,つまみ高1.2	〃	青灰焼良好	1/4	重焼Ⅰ類
18	〃	ウ12下層下灰	口13.6, 高2.9 つまみ径2.25,つまみ高0.95	〃	青灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅱa類
19	〃	エ11下層下灰	口12.4, 高2.5 つまみ径2.2,つまみ高0.9	良	青灰白焼良好	1/4	重焼Ⅱ類
20	〃	エ8下層下灰	口12.0, 高2.9 つまみ径2.4,つまみ高0.9	〃	白焼堅緻	1/5	重焼Ⅱa類

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
21	坏B蓋中	ウ13下層黒灰	口13.4, 高3.2 つまみ径2.3,つまみ高1.2	普通	灰褐焼良好	1/3	重焼Ⅱa類
22	〃	ウ14下層黒灰	口13.6, 高3.6 つまみ径2.4,つまみ高0.9	〃	青灰焼堅緻	3/4	〃
23	坏B蓋小	エ12下層下灰	口12.5, 高3.1 つまみ径2.4,つまみ高0.9	〃	〃	〃	重焼Ⅰ類
24	〃	ウ10下層下灰集中	口12.4, 高2.9 つまみ径2.4,つまみ高0.9	〃	灰色焼堅緻	1/3	〃
25	〃	ウ7 イ15	口11.6, 高2.4 つまみ径2.15,つまみ高0.75	〃	青灰焼堅緻	略完	〃
26	〃	オ13下層黒灰	口12.2, 高2.65 つまみ径2.4,つまみ高0.85	良	青灰焼良好	1/4	重焼Ⅱb類
27	〃	下層下灰	口12.1, 高2.8 つまみ径2.4,つまみ高1.1	普通	青灰焼堅緻	略完	重焼Ⅰ類
28	〃	エ10下層黒灰 エ11下層下灰	口12.4, 高3.0 つまみ径2.4,つまみ高1.0	〃	青灰焼良好	〃	重焼Ⅱa類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
29	〃	イ8	口11.2, 高2.9 つまみ径2.4,つまみ高1.0	砂多	灰色焼堅緻	3/5	重焼Ⅰ類 内天ヘラ記号「Ⅰ」
30	〃	エ11下層下灰	口10.9, 高3.1 つまみ径2.2,つまみ高1.1	普通	青灰焼良好	2/3	重焼Ⅱa類
31	〃	オ10下層黒灰	口11.5, 高3.3 つまみ径2.2,つまみ高1.0	〃	白焼堅緻	3/4	〃
32	〃	エ13下層下灰	口10.6, 高2.7 つまみ径1.8,つまみ高1.1	〃	暗灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅰ類
33	〃	エ8下層下灰	口11.2, 高3.6 つまみ径2.3,つまみ高1.1	〃	青灰焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類
34	〃	イ9	口10.8, 高3.0 つまみ径2.5,つまみ高1.1	〃	白焼堅緻	〃	〃
35	〃	エ10下層下灰	口12.2, 高2.8 つまみ径2.2,つまみ高1.0	〃	暗灰焼堅緻	4/5	〃
36	〃	ウ7	口10.8, 高2.6 つまみ径2.2,つまみ高0.8	〃	青灰白焼良好	略完	〃
37	坏B身大	エ10下層下灰集中	口16.7, 高6.75 台12.6, 台高0.85	〃	青灰焼堅緻	完形	
38	〃	オ12	口16.5, 高6.5 台11.8, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/5	
39	〃	イ11中層	口15.7, 高6.75 台11.3, 台高0.55	〃	灰褐酸化焼良好	2/3	底ヘラ記号「++」 底面火ダスキ
40	〃	ウ11下層下灰集中	口15.7, 高6.55 台11.2, 台高0.6	砂多	灰色焼堅緻	1/2	
41	〃	イ12中層	口15.2, 高6.6 台11.5, 台高0.5	普通	〃	1/6	
42	〃	オ14下層黒灰	口14.8, 高6.8 台10.35, 台高0.8	〃	青灰焼良好	1/5	
43	〃	ウ11下層下灰集中	口13.8, 高6.45 台10.4, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	〃	
44	〃	エ11下層下灰集中	口16.3, 高6.2 台12.4, 台高0.5	砂多	青灰焼良好	5/6	底ヘラ記号「×」
45	〃	〃	口15.8, 高5.7 台11.8, 台高0.65	普通	青灰焼堅緻	2/5	底爪痕c①
46	〃	イ12中層 ウ12下層下灰 オ15下層黒灰	口14.0, 高6.2 台12.0, 台高0.8	良	〃	1/2	
47	〃	エ11下層下灰集中	口14.2, 高5.8 台11.6, 台高0.9	普通	灰白焼良	1/4	
48	〃	エ6・7・8下層 エ8下層下灰	口14.6, 高6.2 台11.6, 台高0.35	〃	青灰白焼堅緻	1/5	
49	〃	オ12下層下灰	口16.0, 高6.55 台10.7, 台高0.45	〃	青灰焼堅緻	1/2	
50	〃	エ10・11下層下灰集中	口16.6, 高6.6 台11.4, 台高0.65	〃	青灰焼良好	略完	底爪痕a③
51	〃	オ12下層下灰	口14.8, 高6.2 台9.8, 台高0.45	〃	灰色焼堅緻	1/2	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
52	坏B身大	オ14下層黒灰 オ14中層	口15.3, 高6.5 台10.0, 台高0.4	普通	青灰焼堅緻	3/5	底ヘラ記号「Ⅰ」
53	〃	ウ7	口15.4, 高6.8 台10.8, 台高0.7	〃	〃	1/2	
54	〃	イ11中層 ウ11・エ11 下層下灰集中	口14.9, 高5.7 台10.6, 台高0.6	良	〃	1/3	
55	坏B身中	エ10下層下灰	口13.2, 高3.85 台9.8, 台高0.35	普通	〃	1/4	
56	〃	エ12下層黒灰	口11.4, 高3.8 台8.0, 台高0.6	〃	〃	1/2	
57	〃	ウ12下層下灰	口11.8, 高3.45 台9.2, 台高0.55	〃	〃	〃	
58	〃	ウ11下層下灰集中	口12.0, 高4.1 台8.8, 台高0.6	〃	青灰焼良好	2/3	底ヘラ記号「Ⅰ」
59	〃	エ10下層黒土 A灰	口12.3, 高4.2 台7.9, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	1/2	
60	〃	ウ7	口12.3, 高4.2 台8.4, 台高0.5	〃	灰色焼良好	1/3	底爪痕a
61	〃	ア10	口13.4, 高4.3 台9.0, 台高0.6	〃	青灰焼良好	1/6	
62	〃	オ13下層黒灰	口11.2, 高4.05 台8.4, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	1/2	底爪痕a③
63	〃	エ8下層黒灰 エ11下層	口12.5, 高4.8 台7.4, 台高0.65	〃	赤灰焼堅緻	〃	
64	〃	イ9	口11.5, 高4.5 台8.5, 台高0.7	〃	灰白焼不良	〃	底爪痕a①
65	〃	イ11中層 エ11下層下灰	口11.2, 高4.2 台6.9, 台高0.75	〃	赤灰焼堅緻	5/6	
66	坏B身小	ウ11中層 エ11下層黒灰	口10.6, 高3.7 台7.8, 台高0.4	〃	〃	1/4	
67	〃	エ12下層下灰	口10.6, 高3.9 台8.2, 台高0.5	〃	暗灰焼堅緻	1/8	
68	〃	ウ14中層	口10.3, 高4.05 台6.8, 台高0.6	〃	白焼堅緻	1/2	
69	〃	ウ10下層黒色灰	口9.9, 高4.1 台6.7, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	1/4	
70	〃	エ11下層黒灰	口10.3, 高4.1 台7.5, 台高0.4	〃	〃	2/3	
71	〃	ウ7	口10.3, 高4.1 台6.9, 台高0.35	〃	暗青灰焼堅緻	1/2	
72	〃	エ11下層下灰集中	口10.3, 高4.05 台7.0, 台高0.5	〃	青灰焼良好	1/3	
73	〃	オ13下層下灰	口10.3, 高3.9 台6.6, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	〃	
74	〃	イ10	口10.6, 高4.5 台7.0, 台高0.7	〃	白焼堅緻	3/5	
75	坏A	エ11下層下灰集中	口12.7, 高3.8	〃	灰褐焼良好	略完	底ヘラ記号「Ⅰ」
76	〃	〃	口13.2, 高3.6	〃	灰白焼良	4/5	〃
77	〃	〃	口12.5, 高3.7	〃	青灰焼良好	1/2	
78	〃	エ10下層下灰	口12.3, 高3.5	〃	青灰白焼良好	〃	底ヘラ記号「Ⅰ」
79	〃	エ11下層下灰集中	口13.2, 高3.5	〃	灰白焼不良	3/4	
80	〃	ウ12下層黒灰	口11.9, 高4.0	砂多	青灰焼堅緻	1/2	
81	〃	エ10下層下灰	口11.9, 高3.7	普通	赤灰焼良	2/3	底ヘラ記号「++」
82	〃	エ11下層下灰集中	口12.7, 高3.4	砂多	青灰焼堅緻	1/3	
83	〃	ウ12下層下灰	口12.4, 高3.3	普通	〃	2/3	
84	〃	ウ12下層黒灰	口11.7, 高2.65	〃	〃	1/4	底ヘラ記号「Ⅰ」

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
85	坏 A	ウ13中層	口11.9, 高2.9	普通	青灰白焼良好	1/2	
86	〃	イ12中層	口12.0, 高3.1	良	青灰焼良好	1/4	
87	〃	エ12下層下灰	口11.3, 高3.05	普通	青灰焼堅緻	1/3	
88	〃	ウ11下層黒灰	口12.0, 高3.45	〃	〃	1/2	
89	〃	オ13下層下灰	口12.2, 高3.15	〃	〃	3/5	
90	〃	エ10下層下灰	口11.7, 高2.85	〃	暗青灰焼堅緻	〃	底ヘラ記号「I」
91	〃	ア7	口12.2, 高3.1	〃	青灰焼堅緻	〃	
92	〃	ウ10下層黒灰	口12.2, 高3.1	〃	青灰白焼良	6/7	
93	〃	ウ11下層下灰	口12.6, 高3.3	砂多	暗青灰焼堅緻	4/5	
94	〃	オ16中層	口12.7, 高3.25	普通	青灰白焼良	3/5	
95	〃	エ10下層下灰	口13.0, 高3.5	〃	青灰白焼良好	1/3	
96	〃	ウ12下層黒灰	口12.4, 高3.4	〃	青灰焼良好	1/2	
97	〃	ウ11下層下灰集中	口12.0, 高3.7	〃	灰褐焼良	1/4	
98	〃	エ12下層黒灰	口11.7, 高3.4	〃	灰白焼良	1/2	
99	〃	ウ11下層下灰集中	口12.0, 高3.3	〃	青灰白焼良好	〃	
100	〃	エ10下層下灰	口12.2, 高3.4	〃	灰白焼不良	1/3	
101	〃	エ9下層下灰	口12.4, 高3.8	〃	青灰白焼良	1/2	
102	〃	エ12下層下灰	口12.6, 高3.6	砂多	灰色焼堅緻	2/5	
103	〃	ウ14下層	口12.4, 高3.5	良	赤灰焼良好	1/2	底ヘラ記号「×」
104	〃	ア7	口11.8, 高3.5	普通	白焼堅緻	〃	内外面摩耗痕
105	〃	エ11下層下灰集中	口12.1, 高3.7	〃	青灰焼堅緻	完形	内底摩耗痕 外底スス痕
106	〃	ウ10下層黒灰	口14.4, 高3.05	〃	灰白焼良	1/2	
107	盤 A	ウ11下層下灰	口15.1, 高2.3	〃	青灰焼堅緻	2/5	
108	〃	〃	口14.6, 高2.0	〃	暗灰焼堅緻	1/2	底ヘラ記号「I」
109	〃	オ12下層下灰	口14.8, 高2.6	〃	青灰焼良好	3/5	〃
110	〃	エ15下層下灰	口15.2, 高2.2	〃	青灰白焼良好	1/4	
111	〃	ウ11下層下灰集中	口16.0, 高2.05	〃	〃	1/2	
112	〃	ウ10下層下灰集中	口14.9, 高2.2	〃	青灰白焼良	2/3	
113	〃	エ10下層下灰	口15.9, 高1.8	〃	青灰焼堅緻	1/2	
114	〃	エ11下層下灰集中	口15.0, 高1.9	〃	〃	1/3	
115	〃	エ10下層下灰	口16.0, 高2.3	〃	灰色焼堅緻	1/4	底ヘラ記号「I」
116	〃	エ11下層下灰	口14.4, 高2.0	〃	青灰白焼良	5/6	
117	〃	エ10下層下灰	口15.8, 高2.3	〃	灰色焼堅緻	1/5	
118	〃	エ11下層下灰集中	口16.2, 高2.1	〃	灰白焼不良	1/2	
119	〃	エ10下層下灰	口15.9, 高1.65	〃	赤灰焼良	1/5	
120	〃	イ11	口14.3, 高2.25	砂多	青灰焼堅緻	1/4	
121	〃	エ8下層暗褐土	口14.2, 高2.3	普通	青灰焼良好	1/2	
122	〃	エ11下層下灰集中	口16.5, 高2.15	〃	灰色焼堅緻	2/5	
123	〃	ウ11・エ11下層下灰集中	口14.6, 高2.2	砂多	〃	1/2	
124	〃	エ11下層下灰	口15.3, 高2.4	〃	青灰焼良好	1/4	
125	〃	イ10	口16.1, 高1.95	普通	青灰白焼良	1/3	
126	〃	ウ11下層下灰	口15.4, 高1.7	〃	青灰焼良好	1/4	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
127	盤 A	エ11下層下灰	口14.7, 高1.8	普通	青灰焼良好	1/4	
128	〃	エ12下層黒灰	口14.7, 高2.15	〃	青灰白焼良好	2/5	
129	〃	エ11下層下灰集中	口14.0, 高1.95	砂多	青灰焼堅緻	1/2	
130	〃	ウ11下層下灰 エ11 〃	口16.9, 高2.4	普通	〃	2/3	
131	〃	ウ13	口17.8, 高2.2	〃	灰白焼不良	1/2	
132	〃	エ11下層下灰集中	口15.4, 高2.45	良	白焼堅緻	3/5	
133	〃	エ11下層下灰	口18.4, 高2.5	普通	灰白焼良	1/6	
134	〃	下灰	口17.4, 高2.4	〃	青灰焼堅緻	1/5	
135	〃	ウ14中層	口17.0, 高2.65	〃	青灰焼良好	1/4	
136	〃	エ11下層下灰集中	口16.2, 高2.8	〃	青灰白焼良	2/5	
137	〃	エ7下層	口18.2, 高3.3	良	灰白焼良	1/3	
138	〃	ウ13中層	口16.7, 高2.2	〃	白焼良好	〃	
139	〃	エ7中層	口16.5, 高1.8	〃	青灰白焼良好	1/2	
140	〃	ア13	口19.8, 高2.9	〃	青灰焼良好	1/4	
141	〃	イ7 イ8	口19.8, 高2.7	〃	白焼堅緻	1/3	
142	〃	エ13下層黒灰	口18.8, 高2.8	普通	青灰焼良好	〃	
143	盤 B	エ10下層下灰 エ11	口18.2, 高3.0 台15.4, 台高0.5	〃	灰白焼堅緻	3/4	
144	〃	ウ10下層下灰 エ10下層黒灰 A灰	口19.6, 高3.65 台15.8, 台高0.95	〃	灰色焼堅緻	1/5	
145	〃	エ11下層下灰集中	口19.4, 高3.35 台15.8, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	1/8	
146	〃	〃	口18.0, 高3.65 台14.5, 台高0.65	砂多	青灰焼良好	1/5	
147	〃	エ10下層下灰 イ11中層	口17.7, 高3.6 台14.4, 台高0.65	普通	青灰焼堅緻	1/3	
148	〃	オ14下層下灰	口22.6, 高3.65 台18.6, 台高0.8	〃	暗灰焼堅緻	1/6	
149	〃	エ11下層下灰集中	口21.4, 高3.45 台18.0, 台高0.55	〃	青灰焼良好	1/4	底爪痕a②
150	〃	イ16	口19.9, 高3.8 台17.2, 台高0.45	〃	灰色焼良好	1/6	
151	〃	ウ10下層下灰	口22.8, 高3.9 台18.8, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/4	
152	〃	エ11下層下灰集中	口22.5, 高4.25 台17.1, 台高0.75	〃	〃	3/5	
153	〃	ウ11下層下灰集中	口21.2, 高3.65 台16.4, 台高0.55	〃	灰色焼良	1/4	底爪痕a①
154	〃	ウ6	口22.0, 高3.9 台17.0, 台高0.6	〃	灰色焼良好	〃	
155	〃	エ11下層下灰集中	口20.4, 高3.8 台15.9, 台高0.5	良	青灰焼良好	〃	
156	〃	エ8下層黒灰	口21.2, 高4.1 台16.6, 台高0.7	普通	〃	1/6	
157	〃	イ11中層 ウ11下層	口21.4, 高4.0 台19.8, 台高0.5	〃	青灰白焼良	1/5	
158	〃	オ12下層下灰 オ13下層黒灰	口22.3, 高4.25 台17.9, 台高0.6	良	灰白焼良	1/6	
159	〃	ウ11下層下灰集中・エ11 イ11中層	口20.8, 高4.6 台17.2, 台高0.7	砂多	灰色焼堅緻	2/3	
160	〃	ウ11下層下灰	口23.8, 高4.75 台20.0, 台高0.75	普通	青灰白焼良好	1/7	底爪痕a

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
161	盤 B	ウ13中層	口19.6, 高3.15 台15.3, 台高0.55	普通	灰色焼堅緻	3/4	
162	〃	エ11下層下灰	口19.6, 高3.3 台15.8, 台高0.5	〃	〃	1/2	
163	〃	ア8	口19.4, 高3.5 台14.4, 台高0.4	〃	白焼堅緻	3/5	
164	〃	ウ8	口19.8, 高3.55 台14.9, 台高0.45	〃	〃	2/5	
165	〃	エ11下層黒色灰	口22.3, 高3.85 台16.4, 台高0.55	〃	灰白焼不良	1/6	底爪痕a①
166	〃	Cトレンチ	口20.8, 高3.7 台15.2, 台高0.5	〃	青灰焼良好	1/4	
167	〃	エ11下層下灰 集中・エ10	口22.4, 高4.35 台16.6, 台高0.6	砂多	灰白焼不良	1/3	
168	〃	ウ12下層下灰 エ9・オ12	口20.2, 高4.4 台15.5, 台高0.6	普通	橙色酸化焼良	1/4	底爪痕a
169	特殊杯	エ8下層	口16.7, 高4.8	良	橙色酸化焼良好	1/2	
170	〃	ウ13中層	底10.0	普通	青灰焼堅緻	1/10	
171	無台塊	エ10下層下灰	底5.1	〃	灰白焼良	1/8	内面磨き
172	〃	エ11下層下灰 集中	口12.3, 高3.2 底8.2	〃	灰白焼不良	5/6	底糸切り痕
173	コップ型?	エ11下層下灰	底8.5	〃	灰白焼良好	1/10	
174	高盤	エ10下層黒灰	口21.6, 坏高2.3	〃	灰色焼堅緻	坏部片	
175	〃	ウ10下層下灰 集中	口19.4, 坏高2.85	〃	〃	〃	
176	〃	エ9下層下灰	口20.0, 坏高3.0	〃	青灰白焼良好	〃	
177	〃	エ11下層下灰	脚12.2, 脚基5.0 脚高8.4	〃	青灰焼堅緻	1/2	
178	〃	エ10下層下灰 エ11下層黒色灰	脚8.3, 脚基4.6 脚高5.9	〃	灰色焼堅緻	1/4	
179	小型瓶	オ14下層黒灰	口4.7	〃	〃	口頸片	
180	〃	エ12下層黒灰	口4.9	〃	〃	〃	
181	〃	エ8下層黒灰	台5.2, 台高0.5	〃	白焼堅緻	1/6	
182	〃	エ11下層下灰 集中	台5.8, 台高0.7 胴10.5	〃	灰色焼堅緻	1/5	底糸切り痕＋ ヘラ記号「X」
183	小型壺	カ16中層	口4.0 頸4.8, 頸高0.9	〃	〃	口頸片	
184	〃	不明	底5.4, 頸7.8 胴10.2, 胴高4.0	砂多	〃	1/3	底糸切り痕
185	小型瓶	オ15下層下灰	底7.0	普通	白焼堅緻	1/10	〃
186	〃	エ9下層下灰	底6.3	〃	暗灰焼堅緻	1/6	
187	鉢 F	ウ11下層下灰集中 イ12下層下灰	口15.2	〃	灰色焼堅緻	1/9	
188	〃	ウ7・エ8中層	口16.0	良	暗青灰焼良	1/8	
189	〃	イ10中層 エ8下層黒色灰	口17.2	普通	灰色焼良	1/15	
190	〃	ウ7・ウ11下層 黒色灰A灰	口17.0	〃	青灰焼堅緻	1/20	
191	〃	ウ7 エ8・9下層下灰	口17.4, 高20.3 底10.0, 底厚2.8	〃	青灰焼良好	1/4	底糸切り痕＋ ヘラ先刺突 容量5.007ℓ
192	〃	エ9・10中～下層 エ12下層下灰 エ14・15中層 オ13中層	口17.0, 身高18.7	〃	暗青灰焼良好	1/3	容量4.882ℓ
193	〃	ウ9・ウ10・ウ11 エ9下層下灰	口18.6, 身高17.3	〃	灰色焼堅緻	〃	容量5.386ℓ
194	〃	エ13下層黒灰	口17.2	良	暗青灰焼堅緻	1/24	
195	鉢 F	ア8・ウ7・ウ8	口18.0	普通	灰色焼堅緻	1/10	
196	〃	エ6中層	底11.3, 底厚2.3	〃	灰白焼良	1/20	底竹管文刺突と ヘラ先刺突
197	〃	エ10・11・12下 層下灰 ウ12下層下灰	底11.3, 底厚1.4	砂多	灰色焼堅緻	1/3	底糸切り痕
198	〃	ウ7	底11.5, 底厚1.8	良	青灰色焼堅緻	1/12	底糸切り痕＋ヘラ 先刺突・内底及び 底面強く摩耗
199	〃	イ9	底9.4, 底厚2.8	普通	灰色焼堅緻	1/4	底刺突多
200	筒型鉢	エ11下層下灰	口11.3	〃	〃	1/9	
201	〃	ウ11下層下灰	口11.1	〃	青灰焼堅緻	1/10	
202	特殊鉢	エ6	口17.6, 高6.7 底9.8	良	灰色焼堅緻	1/4	内底強く摩耗 外底弱く摩耗
203	鉢A?	エ8下層黒灰	—	普通	灰色焼不良	把手片	
204	鉢 A	オ14下層下灰	—	〃	灰色焼堅緻	〃	
205	鉢 C	イ8・イ9・ウ8 エ9中層	口26.8	砂多	〃	1/3	
206	鉢 B	ウ8	口21.5, 頸21.4 胴24.2	普通	灰白焼不良	1/20	
207	〃	オ16中層	口20.5, 頸19.2 体21.7	〃	青灰焼良好	1/8	
208	〃	ウ13中層	口14.9, 頸13.8 体16.5	良	灰色焼堅緻	1/7	
209	壺 E	カ14下層下灰	口21.6, 胴23.6 頸20.8, 頸高2.3	普通	〃	1/5	胴下半火ダスキ 容量6.883ℓ
210	瓶 A	ウ11下層下灰 集中	口10.0	砂多	〃	口頸片	
211	〃	エ11下層下灰 集中	口12.0	普通	〃	〃	
212	〃	ウ12下層下灰	頸5.4	〃	暗灰焼堅緻	〃	
213	〃	イ11中層 ウ11下層下灰	頸4.2, 胴17.2	〃	青灰焼堅緻	1/10	
214	〃	エ9 エ10下層下灰	台12.0, 胴18.3	〃	灰色焼堅緻	1/4	
215	平底瓶	オ13下層黒灰	底8.6	砂多	青灰焼堅緻	1/6	底糸切り痕
216	瓶 C	ア11 エ11下層下灰	頸7.4, 胴19.4	普通	〃	1/20	
217	瓶 B	ウ13中層	口9.4	良	〃	口頸片	
218	瓶 D	イ11中層 エ9下層下灰	口8.2 頸6.1, 頸高5.1	〃	青灰焼良好	〃	内外ハケ目
219	〃	オ16中層	口8.1 頸5.2, 頸高4.7	普通	灰色焼堅緻	〃	
220	〃	エ11下層下灰	胴15.8, 耳厚0.9～1.1	〃	〃	1/20	
221	〃	ウ13下層下灰 ウ14中層	底10.0, 頸7.0 胴15.9, 胴高17.5 耳厚0.7～1.3	良	青灰焼堅緻	1/5	底ロクロ台痕・内 面指頭圧痕・内胴 上にシボリ痕
222	壺 A 蓋	ウ4 エ8下層黒灰	口12.0, 口高2.5	普通	灰色焼堅緻	1/4	正位重焼
223	〃	ウ13中層	口11.9, 口高2.1	〃	〃	1/5	
224	〃	イ10	口13.9, 口高2.5	〃	〃	1/8	底爪痕a①
225	壺 E	エ11中層	口18.3, 胴20.2 頸17.2, 頸高3.0	〃	〃	1/4	容量5.945ℓ
226	〃	ウ14・ウ15中層 エ14中層	頸18.0 胴22.2, 胴高11.6 台12.2, 台高1.3	良	青灰焼堅緻	1/3	胴下半重焼痕 容量6.082ℓ
227	壺A?	エ7	台18.8, 台高3.5	普通	灰色焼堅緻	台片	
228	〃	ウ8	台17.6, 台高3.6	〃	〃	〃	
229	〃	ウ14下層黒灰	台14.2, 台高3.9	良	〃	〃	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
230	壺A？	イ8	台18.9, 台高3.5	普通	灰色焼堅緻	台片	
231	壺 F	エ10-11下層下灰 エ14中層・ウ8 ウ12中層 オ11下層下灰	口23.4, 胴29.8 頸19.5, 頸高4.1	〃	〃	1/4	外面頸にヘラ記号「＋」 容量27.706ℓ
232	横瓶	イ8	口10.7 頸8.0, 頸高4.3	〃	〃	口頸片	
233	〃	イ10	口11.4 頸10.7, 頸高3.6	〃	赤褐色酸化焼良好	〃	
234	〃	エ10下層下灰	口10.8, 頸10.5, 頸高4.1	〃	暗灰焼堅緻	〃	外H叩き、内Da当て
235	〃	ウ10	口12.1 頸11.3, 頸高3.3	〃	灰色焼堅緻	〃	
236	〃	ウ11下層下灰	頸8.6, 胴厚18.5	〃	青灰色焼良好	1/3	外He叩き（風船）
237	〃	ウ12下層下灰 エ8下層黒灰 エ11・15下層 下灰ミゾ14	頸8.9, 胴厚18.3	〃	灰色焼堅緻	1/8	外He叩き、内Da当て・坏A転用置台溶着
238	〃	エ10下層下灰	——	〃	〃	1/20	
239	〃	ウ13下層下灰	——	〃	〃	胴片	
240	中甕	エ11下層下灰集中	口24.4 頸20.6, 頸高4.2	〃	褐灰酸化焼良	口頸片	外Ha叩き、内Dc当て
241	〃	ア14	口18.9 頸16.0, 頸高3.6	〃	白灰焼堅緻	〃	外Ha叩き、内Da当て

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
242	中甕	ウ13・14	胴51.6	砂多	灰色焼良好	胴片	外Hb叩き、内Dc当て、底面に砂付着、離れ砂か？
243	大甕	ウ・エ11下層下灰集中・イ11中層 ミゾ35・12窯上灰	口59.0 頸50.7, 頸高11.4	〃	青灰焼良好	胴上片	外Hb叩き、内Dc当て
244	獣足壺？	イ18	——	普通	灰色焼堅緻	脚破片	
245	円面硯	オ12表土 エ11下層灰	脚17.0	〃	〃	1/15	円形透し
246	土錘	カ15下層黒灰	長5.15, 孔0.9 幅2.0	〃	〃	略完	
247	〃	ウ14中層	長4.5, 孔0.95 幅2.9	〃	〃	4/15	
248	〃	エ11下層灰	長5.05, 孔1.2 幅2.5	〃	〃	4/5	
249	〃	エ16上層	長4.7, 孔0.6 幅2.75	〃	〃	略完	
250	分銅型土製品	イ15	孔0.4, 上1.5×1.3 下3.5×3.5, 高4.2	〃	灰色焼良好	完形	重量43.9g
251	〃	エ11地直	底3.0, 笠4.0 高2.8, 孔0.15	〃	青灰焼堅緻	〃	重量36.5g

F区　土師器焼成坑出土土器観察表（第128～190図）

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋	イ8	つまみ径2.7, つまみ高0.9	普通	暗灰焼堅緻	つまみ片	
	2	〃	〃	つまみ径3.2, つまみ高1.0	〃	青灰白焼良	〃	
	3	須恵坏B身	〃	台11.0, 台高0.7	〃	青灰焼堅緻	底片	
	4	須恵坏A	〃	——	〃	青灰焼良好	1/10	外底ヘラ記号「Ⅲ」
	5	〃	〃	口12.8, 高3.2	〃	青灰白焼良	〃	
	6	須恵盤B	フク土	口20.0, 高3.9 台16.8, 台高0.35	〃	灰白焼堅緻	1/20	
	7	須恵高盤	イ8	脚10.6	〃	青灰焼堅緻	脚片	
	8	赤彩埦	〃	底径7.6	〃	5YR7/6通	1/20	
	9	〃	〃	底径6.5	〃	7.5YR7/6通	〃	
	10	土師小釜	〃	口11.5, 頸10.3	〃	10YR8/2通	口頸片	
	11	〃	〃	底6.8	〃	7.5YR8/6良好	底片	
	12	〃	〃	底7.6	砂多	10YR8/2通	〃	
	13	土師釜	フク土	口16.4, 頸14.2	粗砂含	7.5YR8/3通	口頸片	
	14	土師台付鉢	イ8	脚15.3	〃	10YR8/2通	脚片	方形スカシ3方？
	15	〃	〃	脚15.4, 脚高3.9	〃	〃	〃	
2号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋小	aフク土	口11.8	普通	灰色焼堅緻	1/5	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏A	〃	口12.8, 高3.9	〃	灰色焼良	1/3	
	3	〃	bフク土	口12.0, 高3.2	〃	青灰焼良好	完形	底ヘラ記号「×」
	4	須恵盤A	aフク土	口17.6, 高1.9	〃	暗灰焼堅緻	1/8	
	5	〃	〃	口18.3, 高2.2	〃	灰白焼良	1/6	
	6	赤彩埦	〃	口11.5, 高3.4 底7.5	〃	5YR7/6通	1/3	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
2号土師器焼成坑	7	赤彩埦	aフク土	口12.6, 高3.7 底6.1	砂多	10YR8/2良	1/3	
	8	両黒埦	〃	口12.0	普通	〃	1/8	両面黒色に焼ける
	9	土師小釜	〃	口8.6, 頸8.0 胴9.0	粗砂含	7.5YR7/4通	1/3	外胴・口黒斑
	10	〃	〃	口12.2	普通	7.5YR8/4通	1/10	
	11	〃	〃	口9.8, 頸9.6	粗砂多	10YR8/4通	口縁片	内外黒斑
	12	〃	〃	口15.0, 頸14.0	粗砂含	7.5YR8/3通	1/10	
	13	〃	〃	口14.5, 頸13.3 胴16.6	〃	7.5YR8/3 ～8/4通	1/5	
	14	土師釜	〃	口23.2, 頸18.2	砂多	10YR8/3通	口縁片	外黒斑
	15	土師鉢	〃	口23.6	粗砂含	〃	1/6	
	16	土師鍋	〃	口36.0, 頸33.2	普通	10YR8/3 5YR7/6通	1/8	
	17	〃	〃	口40.4, 頸37.0	粗砂含	10YR8/3通	口頸片	外口黒斑
	18	〃	〃	口40.4, 頸36.2	〃	10YR7/4 5YR6/6通	1/10	
	19	〃	〃	口36.9, 頸33.4	普通	10YR8/3通	口頸片	
	20	土師甑	〃	口20.6	大粒砂多	10YR8/2通	口縁片	
	21	須恵坏B蓋中	床下P10 A2下・B1下	口13.3, 高2.9 つまみ径2.6, つまみ高0.9	普通	青灰白焼不良	3/7	重焼Ⅱb類
	22	〃	床下P2 B1下	口13.5	〃	灰色焼良好	1/8	重焼Ⅱa類
	23	須恵坏B身中	床下P3 C1下	口13.3, 高3.85 台9.3, 台高0.35	良	灰褐酸化焼	1/15	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
2号土師器焼成坑	24	須恵坏A	床下P7	口12.6, 高3.4	普通	灰褐酸化焼	3/5	
	25	〃	〃	口12.4, 高3.3	砂多	橙褐酸化焼	1/3	
	26	〃	床下P5	口12.7, 高3.8	普通	暗灰焼堅緻	1/4	
	27	須恵盤A	床下P7 A2上	口15.3, 高2.3	〃	肌色酸化焼	3/5	
	28	〃	床下P7 A1F	口16.5, 高2.55	〃	青灰焼堅緻	1/3	
	29	赤彩塊	床下P7	底7.7	〃	10YR8/4通	〃	
	30	〃	床下P2	底6.2	〃	7.5YR8/3 7.5YR7/1通	〃	黒斑・内ミガキ
	31	赤彩高盤	床下P5	口18.8, 坏高2.4	良	5YR8/4通	1/8	内外ミガキ
	32	土師円盤	床下P8	径5.5, 孔0.5 厚0.7～1.2	普通	10YR8/2 10YR4/1通	完形	黒斑
	33	〃	床下P5	径3.5～3.7, 厚0.7	〃	2.5Y8/3 5Y4/1通	完形	外面叩き、内面シボリジワ・黒斑
	34	〃	床下B2下	径3.1, 孔1.1×0.15 厚0.8	〃	10YR8/1～ 5Y4/1通	完形	内面シボリジワ 黒斑
	35	土師支脚	床下P7 エ10下層	高10.5, 上2.8, 下6.4	〃	2.5Y8/2通	略完	
	36	土師土製品	床下B2下	径3.4, 孔1.1 高3.0	良	7.5YR8/2通	完形	
	37	土師小釜	床下P11	口12.6, 高14.1 頸11.6, 胴14.3 底7.1	普通	7.5YR8/4通	3/4	外大黒斑 容量2.869ℓ
	38	〃	床下B2下	口13.2, 頸12.2	〃	10YR8/3 10YR6/1通	口頸片	黒斑
	39	土師中釜	床下P5 C1中	口21.4, 頸18.2 胴19.8	粗砂含	2.5Y8/2通	1/5	
	40	土師釜	床下C1下	口19.6, 頸18.0	〃	2.5Y8/2 10YR5/1通	口頸片	
	41	〃	床下P2	口19.6, 頸17.2	普通	10YR8/4通	1/15	
	42	〃	〃	口20.4, 頸17.2	粗砂含	10YR8/2通	口頸片	
	43	土師鍋	床下P5 C-1上	口38.5, 頸34.8	普通	7.5YR8/2通	1/10	
	44	〃	床下P7・10・11 A2下・B1下	口38.3, 頸36.2	〃	〃	1/8	外Ha叩き 内ナデ消し
	45	〃	床下B1下 C1中	口40.5, 頸37.0	大粒 砂多	7.5YR8/4良	1/15	
	46	〃	床下P6	口40.8, 頸36.8	粗砂多	10YR8/2通	1/20 以下	
	47	〃	床下P5 C1中	口40.9, 頸38.2	粗砂含	2.5Y8/2 5Y4/1通	口頸片	黒斑
	48	〃	床下P1 C2中	口40.7, 頸36.6	粗砂多	10YR8/2通	1/20 以下	
	49	〃	床下P5	口41.6, 頸38.0	普通	〃	〃	
	50	土師甑	床下P1	口27.4	砂多	10YR8/3通	口縁片	
	51	〃	床下P5	口26.9	〃	2.5YR7/3 7.5YR8/3通	〃	
	52	〃	〃	底16.4	普通	10YR8/3通	底部片	
3号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	B1下層灰	口12.6, 高3.4 つまみ径2.2, つまみ高0.8	〃	灰色焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類
	2	〃	〃	つまみ径2.2, つまみ高0.7	〃	〃	1/2	重焼Ⅰ類
	3	須恵坏B身小	〃	口10.7, 高3.8 台6.4, 台高1.4	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
	4	須恵坏A	B1下層灰 灰原	口12.3, 高3.3	〃	灰色焼堅緻	〃	
	5	須恵盤A	灰原	口15.4, 高2.1	良	〃	1/2	
	6	〃	B1下層灰	口14.0, 高1.9	普通	青灰焼堅緻	〃	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
3号土師器焼成坑	7	赤彩坏B蓋	下層灰	つまみ径2.8, つまみ高1.0	普通	2.5YR7/6 7.5YR8/3通	つまみ片	
	8	〃	灰原	口19.5	〃	10YR8/3通	1/10	
	9	赤彩塊	〃	底9.6	良	5YR7/6良好	1/15	内外底ミガキ
	10	〃	床	底8.4	普通	5YR7/6良	1/20	内外ミガキ
	11	須恵土錘	下貼壁土	長3.2, 孔0.8 幅1.9	〃	暗灰焼堅緻	完形	重量10.1g
	12	土師円盤	B1下	径3.3, 厚0.4	〃	10YR8/2通	3/4	黒斑
	13	土師馬形	灰原	——	〃	10YR8/3通	足部片	
	14	土師小釜	B1下層灰	口13.1, 頸11.4	〃	7.5YR8/4通	1/15	
	15	土師鍋	B2中	口36.2, 頸32.0	粗砂含	10YR8/2 2.5YR6/8通	1/10	
	16	〃	〃	口37.5, 頸34.8	普通	2.5Y8/3通	〃	黒斑
	17	〃	床・下層灰	口40.0, 頸36.2	粗砂多	10YR8/3通	1/40	
	18	〃	床	口40.8, 頸37.4	普通	2.5YR6/6 7.5YR8/3通	1/15	
	19	〃	床・C2下	口38.2, 頸34.2	粗砂多	10YR8/3通	1/7	
	20	〃	床下P1	口41.4, 頸39.1	普通	2.5Y8/3通	1/20 以下	
	21	〃	床下坑2	口39.2, 頸33.6	粗砂含	7.5YR8/3通	1/40	
	22	〃	床下P1	口39.7, 頸35.6	〃	7.5YR8/2通	1/30	外黒斑
4号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋小	B2中	口11.8	普通	灰色焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏B蓋大	床	口17.3, 高4.1 つまみ径2.95, つまみ高1.2	良	白焼堅緻	2/5	〃
	3	須恵坏B身中	床・A1下 B1下	口12.4, 高3.95 台8.0, 台高0.55	普通	灰色焼堅緻	略完	
	4	須恵坏B身大	A1下・B1下	口16.5, 高5.4	砂多	〃	1/5	
	5	須恵坏A	A1下	口12.3	良	青灰焼良好	〃	
	6	須恵盤A	A2床・下層	口15.8, 高1.7	普通	青灰白焼良	1/3	
	7	〃	B1下	口17.0, 高2.0	〃	灰色焼堅緻	1/5	
	8	〃	A2下	口16.4, 高2.3	〃	青灰焼良好	1/4	
	9	〃	床	口16.9, 高2.5	〃	灰色焼良好	2/3	
	10	須恵瓶A	床・B1下	口19.8 頸4.8, 頸高10.0	〃	灰色焼堅緻	1/3	
	11	〃	A1下	胴16.1	〃	青灰焼堅緻	胴片	
	12	赤彩高盤	床・A1下	基4.8	〃	7.5YR8/4通	1/5	
	13	土師円盤	A1上	径2.8, 孔0.7 厚0.9	〃	〃	完形	
	14	〃	B1中	径3.3, 孔0.8 厚0.5	〃	〃	〃	黒斑・未貫通
	15	〃	不明	径2.1, 厚0.7	良	7.5YR7/6通	1/2	内面シボリジワあり
	16	〃	A2中	径3.8, 孔0.8×0.4 厚0.8	普通	10YR8/4通	完形	〃
	17	〃	A1上	径11～13, 厚1.0	粗砂含	〃	1/6	
	18	土師小釜	A2下	口11.8, 頸10.1 胴11.3	普通	〃	1/12	容量1.427ℓ
	19	〃	床・A1下	口12.5, 高12.0 頸11.3, 胴12.9 底5.9	粗砂含	10YR8/3通	3/4	容量1.652ℓ
	20	〃	A2下	口13.5, 頸12.3	普通	7.5YR8/3通	1/20	
	21	〃	B1下	口15.0, 頸13.2	大粒 砂多	7.5YR8/4通	1/15	
	22	〃	〃	口13.7, 頸12.5	〃	7.5YR8/3通	1/20	
	23	土師釜	床	口21.9, 頸19.4	粗砂少	2.5Y8/3良	1/20	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
4号土師器焼成坑	24	土師釜	床	□21.8, 頸19.2	粗砂含	7.5YR8/4 10YR8/3通	1/15	
	25	土師鍋	〃	□38.8, 頸34.5	〃	2.5YR8/3通	〃	
	26	〃	〃	□40.8, 頸37.0	〃	10YR8/3通	1/20	
	27	〃	A1中	□36.5, 頸33.0	〃	10YR8/3良	〃	
	28	〃	〃	□41.0, 頸37.0	〃	7.5YR8/4通	〃	
	29	〃	A2中・B1中	□34.6, 頸30.8	大粒砂多	7.5YR8/6通	1/7	
	30	〃	B2中	□39.0, 頸35.6	〃	10TR8/3通	1/10	
	31	〃	〃	□36.7, 頸33.6	粗砂多	7.5YR8/4通	〃	
	32	須恵坏B蓋中	床下土坑	つまみ径2.7,つまみ高1.05	普通	青灰焼堅緻	つまみ片	
	33	須恵盤A	床下P1	□17.0, 高2.45 底13.0	〃	灰白焼良	1/6	
	34	土師円盤	床下P2	径3.4～3.7, 厚0.7 孔0.8×0.6	〃	10YR8/3良好	完形	外面で切り取り見込み線入る 内面シボリジワ
	35	土師小釜	床下土坑	□11.5, 頸9.1 胴10.4	〃	10YR8/3通	1/10	黒斑
	36	土師鍋	床下P1	□40.5, 高11.6 頸36.8	大粒多	〃	1/8	容量16.779ℓ
	37	〃	〃	□35.4, 頸31.7	大粒砂多	5YR8/4 10YR8/3通	1/12	容量11.744ℓ
	38	〃	〃	□38.9, 頸35.2	大粒砂含	10YR8/4通	1/20	
	39	〃	〃	□40.0, 頸35.8	大粒砂多	10YR8/2通	1/10	
	40	〃	床下P2	□38.1, 頸34.4	〃	〃	〃	
5号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	床	□13.6	普通	青灰焼堅緻	1/7	
	2	〃	B1	□13.2	〃	灰色焼堅緻	1/6	重焼Ⅱa類
	3	須恵坏B蓋小	床	□11.9	〃	〃	1/8	重焼Ⅱb類
	4	須恵坏A	A2	□11.7, 高3.3	〃	灰白焼良	1/5	
	5	〃	B2下	□12.0, 高2.9	〃	青灰焼堅緻	1/8	
	6	須恵盤A	A2	□15.3	〃	灰色焼堅緻	1/36	
	7	〃	〃	□16.3, 高2.15	〃	青灰白焼良	1/15	
	8	土師台付鉢	1次貼壁土	□35.0	大粒砂含	10YR8/3通	口頸片	
	9	土師小釜	B2下	□14.3, 頸13.4	粗砂多	10YR8/3 2.5YR6/8通	1/20	
	10	土師釜	フク土	□21.4, 頸18.8 胴21.8	〃	7.5YR8/4 2.5YR6/8通	1/20	
	11	土師鍋	床・A2下 B2下	□39.9, 高14.3 頸35.6	大粒砂含	10YR7/4 5YR8/4良	1/4	容量18.439ℓ
	12	〃	床	□42.6, 頸39.8	粗砂多	5YR7/6 10YR8/4通	1/30	
	13	土師甑	〃	□30.4	普通	10YR8/4通	1/20以下	
	14	須恵盤A	床下	□14.5, 頸2.6	〃	灰褐酸化焼	1/4	外底ヘラ記号「－」
	15	土錘	下方灰	長6.8, 孔1.2 幅3.4	〃	10YR8/2通	1/3	
	16	土師円盤	B1	径3.3, 孔1.6×0.4 厚0.5	〃	2.5YR8/3通	完形	孔未貫通・外面切り取り見込み線
6号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	A1下	□13.2	砂多	青灰焼堅緻	1/6	
	2	須恵坏B身中	中層一括	□12.3, 高4.4 台8.0, 台高0.6	普通	灰色焼堅緻	1/7	
	3	須恵坏A	A1下	□12.3, 高3.4	〃	青灰焼堅緻	1/4	
	4	〃	中層一括	□12.2, 高3.4	〃	灰色良好	2/9	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
6号土師器焼成坑	5	須恵坏A	中層一括	□14.6, 高4.2	普通	5YR7/6 酸化焼	2/3	
	6	須恵埦C	中層・A2下	□12.4, 高3.4	〃	7.5YR8/6 酸化焼	〃	
	7	〃	中層一括	底6.2	〃	5YR7/6 酸化土師器焼	3/4	
	8	須恵盤A	〃	□14.6, 高2.3	〃	灰白焼良	2/3	
	9	〃	A1下・B1上	□14.4, 高1.8	〃	青灰白焼良	2/7	
	10	〃	中層一括	□14.1, 高1.8	砂多	灰色焼堅緻	〃	
	11	赤彩埦	〃	□12.2, 高3.3	普通	10YR8/4通	2/5	
	12	土師埦	〃	□11.3, 高3.7 底5.2	〃	7.5YR7/6通	2/7	外黒斑 赤彩なし
	13	赤彩埦	〃	□13.3, 高3.6 底8.2	〃	7.5YR8/6通	1/4	
	14	〃	A1下	底7.2	〃	10YR8/3通	〃	底糸切り残
	15	〃	中層	底8.0	良	5YR7/6良	1/2	内外ミガキ 内外黒斑
	16	土師円盤	A1下	径10.2, 厚1.2	普通	5YR7/6通	1/4	片面黒斑
	17	土師台付鉢	中層一括 A1下	□31.8	大粒砂多	〃	口頸片	
	18	土師小釜	A1下	□14.0, 頸12.4	大粒砂含	〃	1/20	
	19	〃	中層一括	□13.9, 頸11.7	〃	5YR7/6 2.5Y8/3通	1/15	
	20	土師釜	中層一括 A1下	頸18.4, 胴20.8	粗砂含	10YR8/2良	1/8	カキ目後外He叩き,内Dc当て
	21	〃	A1下・B1上 B2下 床下P1・2・3 7・13	□21.6, 頸18.0 胴21.4	〃	5YR6/6通－窯下 7.5YR6/6良 黒斑有－窯内	1/3	外He叩き、内Dc当て H6窯内出土は焼台使用 容量15.715ℓ
	22	土師鍋	中層一括	□36.1, 頸32.8	〃	10YR8/3通	1/6	容量10.647ℓ
	23	〃	〃	□36.9, 頸34.0	大粒砂含	〃	1/10	
	24	〃	〃	□32.8, 頸30.2	大粒砂多	〃	1/7	内底黒斑 容量9.169ℓ
	25	〃	中層	□42.4, 高11.3 頸39.5	〃	〃	1/10	内面2ヶ所黒斑 容量18.494ℓ
	26	〃	中層一括	□36.8, 頸34.2	粗砂多	5YR7/6通	1/8	黒斑
	27	〃	〃	□43.6, 高11.2 頸40.4	大粒砂含	10YR8/3通	〃	外面円形状黒斑 容量19.791ℓ
	28	〃	〃	□43.8, 頸40.2	普通	10YR8/4通	口縁片	口縁黒斑
	29	土師円筒形土器(ジョイント部)	〃	□長11.4, □短13.6	大粒砂含	10YR8/2通	ジョイント式分岐部の口縁	外縦ハケ
	30	土師円筒形土器	B1上	□14.6	粗砂含	10YR7/4通	口縁片	
	31	土師円筒形土器(ジョイント型)	上層・中層一括・A1下層＋エ11下層下灰	胴15.0 ジョイント8.5	大粒砂多	5YR7/6通	1/15	
	32	須恵坏A	床下P2	□12.8, 高3.6	普通	淡灰褐酸化焼	1/7	
	33	須恵盤B	〃	□24.7, 高4.3 台11.1, 台高0.7	〃	橙褐酸化焼	1/5	
	34	須恵鉢A	床下排水溝C伏	□30.9, 高12.1 台14.9	〃	灰白焼良好	略完	
	35	赤彩埦	床下排水溝B伏	□18.6	〃	10YR8/3通	1/10	
	36	赤彩壺A	床下	胴24.3	〃	〃	胴片	
	37	赤彩鉢	床下P1	底12.4	大粒砂多	7.5YR8/3通	底1/2	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
6号土師器焼成坑	38	土師小釜	床下排水溝A伏	口13.4, 頸11.8 胴14.4	普通	7.5YR8/3通	1/3	胴黒斑
	39	土師釜	床下排水溝C伏	口24.2, 高33.1 頸20.8, 胴24.0	大粒砂多	7.5YR8/4 5YR6/6通	1/4	外He叩き、内Da当て・黒斑 容量19.316ℓ
	40	〃	床下排水溝B立	胴21.6	粗砂含	5YR7/6通	1/10	
	41	土師鍋	〃	口40.1, 高13.3 頸36.6	大粒砂含	10YR8/3通	1/6	口・胴黒斑 容量18.472ℓ
	42	〃	床下P2	口33.0, 頸30.0	普通	〃	1/20	
	43	土師甑	床下排水溝B伏	口25.1	大粒砂含	5YR6/6 10YR8/2良	1/20以下	外面黒斑
	44	土師円筒形土器	床下排水溝A伏・A1下	胴15.8	大粒砂多	10YR8/4通	1/2	
7号土師器焼成坑	1	須恵坏A	床	口11.8, 高3.35	普通	灰白焼良	略完	
	2	〃	〃	口11.7, 高3.3	〃	青灰焼堅緻	1/7	
	3	〃	灰	口12.0, 高3.5	〃	灰白焼良	1/2	
	4	〃	フク土	口12.2, 高3.5	〃	〃	1/6	
	5	須恵盤A	A上	口14.7, 高1.6	良	青灰焼堅緻	1/8	
	6	須恵盤B	灰・B上	口20.4, 高3.8	普通	青灰焼良好	1/6	
	7	赤彩杯B蓋	上	つまみ径3.2, つまみ高1.3	〃	7.5YR8/4通	つまみ片	
	8	〃	不明	つまみ径2.4, つまみ高1.1	〃	10YR8/4通	〃	
	9	土師小鍋	B2下	口13.7, 頸12.2	〃	7.5YR8/4通	1/6	
	10	赤彩台付鉢	A下	脚21.8	〃	7.5YR7/6通	脚片	外黒斑
	11	土師小釜	B下	口11.7, 頸10.4 胴13.2	〃	7.5YR8/4通	1/6	
	12	〃	灰	口13.5, 頸12.3	粗砂含	〃	1/10	
	13	〃	〃	口13.5, 頸12.2	〃	〃	〃	
	14	〃	A1下	口12.3	〃	2.5YR6/8 7.5YR8/4良	口縁片	
	15	土師釜	〃	口15.6, 頸14.2	〃	10YR8/3通	1/20	
	16	〃	床	口22.3, 頸19.2	〃	5YR8/4良	〃	
	17	土師鍋	A1下	口34.6, 頸30.9	〃	7.5YR8/3通	1/30	
	18	〃	A2床	口36.5, 頸33.5	大粒砂多	5YR7/6良	〃	
	19	〃	B1下	口38.4, 頸33.9	〃	5YR8/4~8/3通	1/20	
	20	須恵坏B蓋中	床下	口12.6	普通	灰白焼良	1/6	
	21	須恵坏A	〃	口11.8, 高3.2	〃	青灰白良好	1/3	
	22	須恵盤A	〃	口15.9	〃	青灰焼良好	1/5	
	23	〃	〃	口15.8, 高2.45	〃	〃	1/3	
	24	須恵鉢A	床下十溝35・溝36	口35.7, 高11.8 底10.6	〃	青灰焼堅緻	〃	
	25	赤彩埦	床下	底7.8	良	5YR8/2通	1/8	
	26	〃	〃	口12.8	普通	7.5YR8/4通	1/10	
	27	土師釜	床下排水溝伏	口22.7, 頸19.2 胴21.3	大粒砂含	5YR6/6良	1/2	外He叩き後削り、内Dc当て
	28	〃	〃	口20.3, 頸16.1	大粒砂多	7.5YR8/3通	1/20	
	29	〃	〃	口21.6, 頸17.8 胴22.2	粗砂含	7.5YR7/4通	1/4	外He叩き、内Dc当て
	30	土師鍋	〃	口35.9, 高14.0 頸33.5	粗砂多	7.5YR8/4 5YR7/6通	1/3	容量15.324ℓ
	31	〃	〃	口36.6, 高11.9 頸32.0	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/6	容量11.972ℓ

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
7号	32	土師甑	床下	底19.3	粗砂含	10YR7/3通	底片	外H叩き、内Dc当て・外黒斑
8号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋	B下	つまみ径2.9, つまみ高1.6	普通	青灰焼良好	つまみ片	
	2	須恵坏B身小	床	口10.9, 高3.85 台7.8, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	1/5	
	3	須恵盤A	A	口15.8	良	灰白焼良	1/7	
	4	赤彩埦	床	口12.3, 高3.2 底6.8	〃	5YR7/6良	2/3	
	5	〃	B上	口12.0	普通	7.5YR8/4通	1/6	内面黒斑
	6	赤彩坏B蓋	A下	つまみ径2.8, つまみ高1.5	〃	〃	つまみ片	外面黒斑
	7	赤彩盤A	B	口16.4, 高1.9	〃	〃	1/15	外底黒斑
	8	土師鍋	B1上	口31.8, 頸27.6	粗砂含	10YR8/2通	1/30	
	9	土師甑	床	底16.4	大粒砂多	10YR8/4通	1/20以下	外叩き、ハケ目後削り
	10	〃	B下	底13.6	粗砂含	7.5YR8/6通	底片	内面黒斑
	11	土師円筒形土器	床下	底14.6	〃	5YR7/6通	1/20	
	12	須恵坏B蓋大	〃	口17.0	普通	灰白焼良好	口縁片	
	13	須恵盤A	〃	口16.4, 高2.2	良	灰白焼堅緻	1/10	
	14	〃	〃	口15.8	普通	灰白焼良	1/15	
	15	赤彩埦	〃	底7.0	砂多	7.5YR8/6 7.5YR8/3良	2/3	内外とも赤彩
	16	〃	〃	底8.3	良	2.5YR8/2良	底片	
	17	土師埦	〃	底6.5	普通	5YR7/6 7.5YR8/3良	1/3	内ミガキ?底糸切り?・外面黒斑
	18	土師小鍋	〃	口20.9, 頸19.2 胴19.8	大粒砂含	2.5Y8/2通	1/6	
	19	土師釜	〃	口21.6, 頸17.6	〃	10YR8/4通	口縁片	外黒斑
	20	〃	〃	口19.4, 頸15.5	普通	7.5YR7/6良	〃	
	21	〃	〃	口19.0, 頸14.4	良	7.5YR8/4良	〃	
	22	土師鍋	〃	口36.7, 頸33.7	粗砂含	7.5YR7/6 5YR7/6通	1/6	
	23	土師甑	〃	底16.4	普通	10YR8/4良	底片	
9号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	床	口13.6	〃	青灰焼堅緻	1/6	重焼Ⅱ類
	2	〃	B1中	口13.5	〃	青灰焼良	1/5	重焼Ⅱa類
	3	赤彩埦	床	口11.5	良	5YR7/6通	1/15	
	4	〃	中層	口11.8	普通	7.5YR8/2通	〃	口縁黒斑
	5	土師釜	〃	口13.0, 高12.3 頸12.2, 胴24.0 底6.0	大粒砂含	5YR7/8通	1/3	容量2.403ℓ
	6	土師鍋	〃	口35.6, 頸32.4	大粒砂多	10YR8/3通	口頸片	
	7	土師円筒形土器	〃	口11.4, 肩14.6	〃	5YR7/6通	口縁片	
10号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	B2下	口12.8	普通	灰色焼良好	1/2	
	2	須恵坏A	B1上	口12.0, 高3.5	〃	青灰焼堅緻	1/5	
	3	須恵盤A	下層	口16.7, 高3.1	良[底口]	青灰焼良好	1/2	
	4	赤彩埦	B1下	口12.9	普通	5YR7/4良	1/7	外面黒斑
	5	赤彩高盤	A2中	脚基4.6	〃	7.5YR8/4通	1/5	
	6	土師小釜	A1中	口13.7, 頸12.2	〃	7.5YR8/3通	口頸片	内外黒斑
	7	土師釜	A2中	口22.1, 頸18.4	〃	7.5YR8/4良	〃	
	8	土師鍋	A1中	口37.7, 頸35.8	大粒砂含	10YR8/4良	1/6	内外黒斑 外Ha叩き

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
10号土師器焼成坑	9	土師鍋	床	□34.5, 頸30.8	大粒砂多	7.5YR7/6良	1/15	内外黒斑
	10	〃	〃	□41.2, 頸38.6	〃	7.5YR8/3良	1/20	外Ha叩き
	11	〃	〃	□43.2, 頸40.4	大粒砂含	10YR8/4良	1/10	外削り後Ha叩き 内外黒斑
	12	土師甑	A2中・下	□32.2	粗砂含	7.5YR8/4良	□縁片	
	13	〃	A2上	底19.0	粗砂多	10YR8/4通	底片	外Ha叩き、内Dc当て
	14	〃	床	底18.3	普通	7.5YR8/3・7/6良	1/5	外Ha叩き後ハケ目・内Da当て後ナデ
	15	土師台付鉢	A1中	□37.2	粗砂含	5YR7/6通	1/20	内底D当て後ハケ目
	16	土師円筒形土器	A2中・床	□12.3, 肩14.8	大粒砂含	〃	1/3	
	17	須恵坏B蓋小	床下土坑1	□10.6	普通	青灰焼堅緻	1/6	
	18	須恵坏B蓋中	床下	□12.5, 高3.4 つまみ径1.9, つまみ高0.9	〃	灰白焼良	略完	
	19	須恵坏B身大	〃	□14.9, 高5.8 台9.7, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	完形	
	20	須恵坏A	床下土坑1	□11.7, 高3.2	〃	灰白焼不良	1/6	
	21	〃	床下	□12.3, 高3.4	〃	青灰焼良	1/8	
	22	須恵盤A	床下土坑1	□16.1, 高2.1	〃	青灰焼良好	1/2	底ヘラ記号「I」
	23	〃	床下土坑3	□16.5, 高2.6	〃	青灰焼堅緻	1/4	
	24	須恵盤B	床下土坑1	□24.5, 高3.3 台17.8, 台高0.6	砂多	〃	1/10	
	25	赤彩坏B蓋	床下	□15.0	普通	10YR8/3通	〃	
	26	赤彩埦	床下土坑3	□11.9	良	7.5YR8/3良	3/7	外黒斑
	27	〃	〃	□12.3	普通	7.5YR8/4通	1/5	
	28	赤彩盤A	床下土坑	□19.0, 高2.7	〃	〃	1/20	内外黒斑
	29	赤彩盤B	床下土坑1	台15.7, 台高0.6	〃	10YR8/3通	〃	
	30	土師小型鉢	〃	□17.9	大粒砂含	10YR8/4通	1/6	
	31	土師小釜	床下土坑3	□13.5, 頸12.8	〃	5YR6/6通	1/15	
	32	〃	床下土坑1	□13.6, 高12.4 頸11.9, 胴13.8 底7.6	粗砂含	7.5YR7/4通	2/3	□H内にコゲ痕 胴外にスス痕 容量2.623ℓ
	33	〃	床下土坑	□15.2, 頸13.6 胴15.7	砂多	10YR8/2通	1/2	外口・胴黒斑
	34	〃	床下土坑2・3	□13.1, 高14.1 頸11.8, 胴13.6 底6.9	普通	7.5YR7/6通	2/3	容量2.506ℓ
	35	土師釜(平底)	床下土坑2	□19.1, 頸16.6 胴19.2	〃	7.5YR8/4通	1/4	
	36	〃	床下土坑1	□20.8, 頸18.4 胴19.5	砂多	5YR7/6良	1/10	
	37	土師釜	床下土坑1・3	□20.8, 高31.5 頸18.1, 胴21.8	粗砂含	5YR6/6良	1/2	外He叩き、内Da当て・胴外スス付着 容量14.929ℓ
	38	〃	床下土坑1	□22.4, 頸19.2 胴21.2	〃	7.5YR7/6通	1/10	外黒斑
	39	〃	床下土坑	□21.2, 頸19.1 胴22.2	〃	10YR7/4良	〃	外叩き後削り 外黒斑
	40	〃	床下土坑3	□23.5, 頸19.8	砂多	10YR8/2通	□頸片	内外黒斑
	41	土師円筒形土器	床下土坑1・2 B2下	肩14.5	大粒砂多	5YR7/6通	1/10	
	42	〃	床下土坑 B2下・エ14中	□11.6, 肩13.6	大粒砂含	〃	1/40	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
10号土師器焼成坑	43	土師円筒形土器	床土中	底14.4	大粒砂多	5YR6/6通	1/30	
	44	土師円筒形土器(ジョイント型)	床下+H11 A1上・A2下 床下土坑	——	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/6	
11号土師器焼成坑	1	須恵坏B身中	A1上	□11.8, 高4.2 台8.2, 台高0.5	普通	灰色焼堅緻	1/3	
	2	須恵坏A	B2上	□13.3, 高3.4	〃	灰色焼良	1/2	
	3	〃	B1下	□12.9, 高3.8	〃	灰白焼不良	1/5	
	4	須恵盤A	〃	□17.1, 高3.1	良(底口)	青灰焼良好	1/4	
	5	赤彩坏B蓋	B1上	□18.2	普通	7.5YR8/4良	1/15	
	6	赤彩埦	A1・2上	□12.1, 高3.5 底8.4	〃	10YR8/4良	1/3	内黒斑 底糸切り痕
	7	〃	A1上	□13.9	〃	5YR7/6良	1/10	
	8	〃	B1中	□12.1	良	5YR8/4通	1/9	
	9	〃	B1上	底7.7	普通	7.5YR8/4通	1/6	
	10	〃	A1上	底5.6	〃	10YR8/3良	1/15	黒斑・底糸切り痕
	11	〃	B1上	底6.6	〃	10YR8/2良	1/4	底黒斑
	12	赤彩高盤	A1上	脚10.3	〃	7.5YR8/2通	脚片	
	13	土師獣足鉢	A2上	——	〃	7.5YR7/6通	足部1/2	
	14	土師小釜	B2上	□15.6, 頸14.8 胴17.5	〃	〃	1/12	
	15	〃	B1上	□16.0, 頸14.4	〃	7.5YR5/2 7.5YR8/3通	1/20	
	16	土師釜	A2上	□21.2, 頸18.4	粗砂含	7.5YR7/6良	□縁片	
	17	〃	A2・B2上	□23.5, 頸20.2	〃	7.5YR7/4良	1/20	内外黒斑
	18	〃	B1下	□21.4, 頸18.4	普通	7.5YR7/6良	1/12	
	19	〃	B2上	□25.3, 頸21.8	粗砂含	10YR8/4通	1/20	
	20	土師鍋	A1上	□36.5, 頸33.6	普通	7.5YR8/3良	〃	
	21	土師甑	A1上・B1下	□33.1	〃	10YR7/3良	□縁片	
	22	土師台付鉢	B1下	□37.8	大粒砂含	10YR8/3通	□頸片	
	23	須恵坏B蓋大	床下排水溝伏	□17.3, 高4.3 つまみ径2.9, つまみ高1.5	普通	褐灰酸化焼堅緻	略完	
	24	〃	〃	□17.2, 高3.4 つまみ径3.0, つまみ高1.0	〃	〃	完形	
	25	須恵坏B身中	〃	□12.9, 高4.2 台9.3, 台高0.65	〃	暗青灰焼堅緻	4/5	
	26	須恵坏A	〃	□13.3, 高3.3	〃	灰褐酸化焼堅緻	5/6	
	27	〃	床下	□13.1, 高3.2	〃	褐灰酸化焼堅緻	3/5	
	28	〃	床下排水溝伏	□12.8, 高3.4	砂多	〃	完形	
	29	〃	〃	□13.4, 高3.1	〃	〃	〃	
	30	〃	〃	□12.5, 高3.7	普通	〃	4/5	
	31	〃	床下	□12.4, 高3.3	砂多	〃	4/7	
	32	須恵盤A	床下排水溝伏	□15.6, 高1.9	普通	暗灰焼堅緻	1/2	
	33	須恵盤B	〃	□20.6, 高3.8 台15.2, 台高0.6	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	
	34	〃	〃	□20.2, 高3.8 台14.0, 台高0.7	〃	灰褐酸化焼堅緻	2/3	
	35	〃	〃	□22.6, 高3.2 台16.4, 台高0.6	〃	〃	1/3	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
11号土師器焼成坑	36	赤彩埦	床下	口12.9, 高3.1 底6.7	普通	7.5YR8/3良	1/4	破片で色調異なり黒斑つく
	37	〃	〃	口12.0	〃	5YR7/6良	1/20	外面黒斑
	38	土師小釜	〃	口12.5, 頸11.4	〃	7.5YR8/4通	口頸片	
	39	土師釜	〃	口21.8, 頸19.2	〃	7.5YR8/3良	1/8	
	40	〃	〃	口22.5, 頸19.6	粗砂含	5YR7/4通	口頸片	内黒斑
	41	〃	〃	口25.7, 頸21.4 胴24.4	〃	5YR6/8 10YR8/2通	1/10	外黒斑
	42	〃	〃	口19.5, 頸16.9 胴21.3	大粒砂含	7.5YR7/6 10YR8/4通	1/8	胴外黒斑
	43	土師円筒形土器(土管)	床下+H21窯A1・B2上	口11.5, 高33.3 胴15.1, 底12.0	〃	2.5YR5/6良	2/3	外面広く黒斑
12号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋小	A1下	口11.9	普通	灰色焼堅緻	1/6	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏B蓋中	B1上	口13.4	〃	灰褐酸化焼堅緻	1/5	〃
	3	須恵盤A	B1・2上	口16.9, 高2.2	〃	灰白焼良	1/2	
	4	須恵盤B	A1下	台17.8, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	1/20	
	5	赤彩坏B蓋	埋土	つまみ径3.0, つまみ高1.0	砂多	7.5YR8/4通	つまみ片	
	6	赤彩蓋	A1上	——	良	5YR7/6良	体部片	内黒斑
	7	赤彩埦	床	口12.2, 高3.6 底6.6	普通	7.5YR8/4良	1/3	外黒斑
	8	土師管状土錘	A1下	長6.2, 孔1.3 幅3.2	砂多	10YR8/3通	略完	重量63g
	9	土師小釜	B2上	口14.4	普通	5YR7/6良	1/30	
	10	〃	B1下	口14.1, 頸12.8	〃	7.5YR8/4通	1/20	
	11	〃	B2	口16.0, 頸14.5	〃	7.5YR8/3・5/2良	口頸片	
	12	土師釜	B1下	口17.6, 頸15.1	砂多	7.5YR8/2通	〃	
	13	〃	B2上	口20.6, 頸18.6 胴22.0	粗砂含	7.5YR7/4・6/6通	1/12	
	14	〃	B2下	口22.5, 頸20.0 胴21.8	粗砂少	7.5YR6/6 7.5YR4/1通	〃	
	15	土師鍋	床	口39.8, 頸35.8	普通	10YR7/3通	1/17	
	16	〃	B1上	口35.2, 頸31.4	粗砂多	10YR8/3通	1/20	
	17	〃	B2上	口32.9, 頸30.0	大粒砂含	10YR8/4通	1/30	
	18	土師甑	B1下	口29.2	粗砂多	7.5YR8/3通	口頸片	
	19	土師特殊鉢	床	口32.6, 受36.0	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/30以下	
	20	土師台付鉢	B1上	口33.2	粗砂含	2.5YR7/6良	口頸片	内底当て具痕
	21	土師馬形	〃	——	普通	10YR8/4良	足部片	底面2条沈線
	22	須恵坏B身大	床下	口17.8	〃	灰白焼良	1/10	
	23	須恵盤A	床下土坑3	口18.4, 高2.05	〃	青灰焼堅緻	1/9	
	24	土師小釜	床下	口14.8, 頸12.8	大粒砂多	7.5YR8/3通	口頸片	
	25	土師釜	床下土坑1	口21.6, 頸19.0	〃	7.5YR8/4通	1/20	
	26	〃	床下土坑	口17.9, 頸15.6	粗砂多	7.5YR7/1通	1/30	
	27	〃	床下土坑4	口18.1, 頸16.5	大粒砂含	7.5YR8/3 5YR7/6良	口頸片	
	28	〃	床下土坑3	口21.7, 頸19.4	大粒砂多	10YR8/3通	1/20	
	29	土師甑	床下土坑4	口37.4	普通	10YR8/3 7.5YR6/4良	〃	外Hc叩き、内Dc当て・破片により焼き異なる
	30	土師円筒形土器	床下土坑+1号土器溜まり	口11.6, 肩14.1	大粒砂含	5YR6/6通	1/3	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
13号土師器焼成坑	1	須恵坏B身大	A1上	口14.4, 高5.9 台11.0, 台高0.5	普通	灰色焼堅緻	2/3	
	2	須恵坏B身小	下層一括	口10.0, 高4.3 台7.35, 台高0.35	〃	暗灰焼堅緻	完形	
	3	須恵坏A	〃	口12.9, 高3.45	〃	青灰焼良好	略完	
	4	〃	B2下	口13.8, 高3.7	〃	〃	1/3	
	5	〃	下層一括	口12.9, 高3.4	〃	青灰焼堅緻	4/5	底ヘラ記号「∧」
	6	土師杯A	A1中	口12.0, 高3.3	〃	7.5YR8/6通 須恵器酸化焼	2/3	
	7	〃	〃	口11.8, 高3.2	〃	7.5YR8/8通 須恵器酸化焼	1/6	
	8	〃	〃	——	〃	7.5YR8/4通 須恵器酸化焼	1/5	
	9	須恵中甕	下層一括	胴39.6	〃	暗灰焼堅緻	1/3	外Ha叩き、内Da当て→Dc当て(底叩き)→底面ハケ目
	10	〃	〃	口24.8, 頸22.8 頸高4.4	〃	青灰焼堅緻	口頸片	外Ha叩き、内Dc当て
	11	〃	〃	口15.2, 頸14.8 頸高2.2, 胴34.4	砂多	灰色焼堅緻	1/30	外Ha叩き、内Da当て
	12	須恵小甕	〃	口22.0, 頸19.2 頸高3.2	普通	青灰焼堅緻	1/10	〃
	13	赤彩埦	〃	底8.7	〃	7.5YR8/6通	2/3	
	14	〃	A1中	口14.6	良	5YR6/6良	1/6	
	15	〃	下層一括	底6.6	〃	2.5YR6/8良	1/5	外黒斑
	16	〃	B2上	口11.9, 高3.2 底6.2	普通	10YR6/6通	1/3	
	17	〃	下層一括	口13.0, 高3.1 底7.4	〃	7.5YR7/8通	略完	
	18	〃	フク土	口12.6, 高3.3 底7.2	〃	7.5YR8/4通	1/5	
	19	〃	A1上	口11.9, 高2.9 底8.4	〃	10YR8/4通	1/6	
	20	〃	フク土	口11.9, 高3.1 底7.1	〃	7.5YR7/6通	〃	
	21	赤彩盤A	下層一括	口14.7, 高2.7	〃	7.5YR8/4通	4/5	
	22	土師小釜	〃	口14.7, 高13.6 頸13.4, 底8.6	大粒砂含	7.5YR6/6通	3/5	容量3.275ℓ
	23	土師釜	A1中	口19.6, 頸18.0	粗砂含	5YR6/6良	1/20	外胴スス付
	24	〃	B1中	口20.3, 頸18.1	大粒砂含	10YR8/3通	口頸片	
	25	〃	A2中 下層一括	口19.6, 頸17.2 胴20.4	〃	2.5YR6/8良	1/15	外胴黒斑
	26	〃	A1中 下層一括	口22.6, 頸20.2 胴23.8	〃	7.5YR8/3通	1/3	外黒斑・外Ha叩き、内D当てナデ消
	27	〃	下層一括	——	粗砂含	5YR7/6通	1/15	外底黒斑
	28	土師羽釜	上層	——	粗砂多	10YR8/4通	羽部片	
	29	土師鍋	下層・H25窯	口35.8, 頸31.0	大粒砂多	2.5YR5/8通	1/20	
	30	〃	A1中・B1中	口43.3, 頸41.0	大粒砂含	5YR6/6良	1/30以下	
	31	土師甑	A2上・B2中	口29.2	大粒砂多	5YR8/4良	1/15	
	32	〃	下層一括 B灰	口27.0	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/10	外Ha叩き、内Da当て後刷毛
	33	〃	B1上	口36.8	粗砂含	〃	1/30以下	
	34	〃	下層一括	底12.6	大粒砂多	5YR6/8 7.5YR8/3通	1/10	
	35	〃	〃	底19.3	〃	7.5YR8/4通	〃	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
13号土師器焼成坑	36	土師台付鉢	A1中	口34.0	大粒砂含	10YR8/3 2.5Y4/1通	口頸片	
	37	土師円筒形土器	下層一括 焼土中	底11.4	大粒砂多	2.5YR6/8良	2/3	底面ロクロ軸痕残す
	38	須恵坏B身	床焼土	口13.7, 高4.2 台7.3, 台高0.5	普通	暗灰焼堅緻	6/7	
	39	土師小釜	〃	底8.4	〃	5YR7/6良	1/15	胴下・底黒斑
	40	〃	〃	口12.6, 頸10.6	粗砂多	7.5YR8/3通	口頸片	
14号土師器焼成坑	1	須恵坏A	中層	口13.7	普通	灰白焼良好	1/5	
	2	土師小釜	下層	口11.0, 頸10.8	大粒砂含	7.5YR8/3良	口頸片	外黒斑
	3	〃	床	底7.8	大粒砂多	〃	1/5	
	4	〃	〃	口21.2, 頸18.6	〃	7.5YR8/2通	口頸片	
	5	土師鍋	〃	口36.0, 頸32.0	大粒砂含	10YR8/3通	〃	
	6	土師台付鉢	床・中・下層	口32.6	粗砂含	7.5YR8/4通	1/30	
	7	土師管状土錘	中層	長6.6, 孔1.3 幅3.4	普通	10YR8/1～4/1良	4/5	
15号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋大	B中・B下	口17.3, 高3.7 つまみ径2.9, つまみ高1.0	〃	灰白焼良	1/5	重焼Ⅱb類
	2	須恵盤A	B中層	口16.8, 高2.3	〃	青灰焼良好	1/8	
	3	須恵中甕	A上	口27.0, 頸23.0 頸高3.5	〃	青灰焼堅緻	口頸片	外Hc叩き、内Da当て
	4	赤彩坏B蓋	B下	口17.6	〃	5YR8/4良	1/8	
	5	赤彩盤A	〃	口16.8	砂多	10YR8/3通	1/10	
	6	土師鉢	灰	口34.0, 頸31.4	粗砂多	7.5YR8/4通	1/20	
	7	土師小釜	B下	口14.4, 頸12.7	大粒砂含	10YR8/2通	口頸片	内黒斑
	8	土師釜	灰	口21.2, 頸18.0	普通	10YR8/2良	〃	外黒斑
	9	土師鍋	B中・下	口36.8, 頸32.5	粗砂多	10YR8/4通	〃	
	10	〃	B下層灰	口39.6, 頸36.0	大粒砂多	10YR8/2良	1/30	
	11	〃	灰	口42.0, 頸38.6	粗砂多	10YR8/4通	口頸片	
	12	土師円盤	B下層灰	径約10.0, 厚0.8	普通	10YR8/2・4/1通	1/6	
	13	土師線刻円盤	B中	径約19.0, 厚1.5	粗砂含	10YR8/4通	1/15	
16号土師器焼成坑	1	須恵坏B身大	フク土	台10.2, 台高0.5	普通	青灰焼堅緻	1/10	
	2	土師小釜	床	口13.8, 高13.3 頸12.2, 胴14.8 底7.0	大粒砂多	7.5YR8/3通	2/3	容量2.858ℓ
	3	土師鍋	〃	口39.4, 頸36.0	大粒砂含	2.5YR8/3通	1/20	
	4	〃	〃	口38.0, 頸34.4	〃	10YR8/2通	〃	外黒斑
17号土師器焼成坑	1	須恵坏B身大	2次床B1中	口16.2, 高6.8 台12.2, 台高0.6	普通	青灰焼良好	1/5	
	2	須恵坏B身小	〃	口10.6, 高4.3 台7.4, 台高0.4	〃	橙色酸化焼良	2/3	
	3	須恵坏A	〃	口13.6, 高3.5	〃	青灰焼良好	1/2	底ヘラ記号「I」
	4	須恵盤B	2次床A2中 B2下	口18.2, 高3.1 台13.8, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	2/3	
	5	須恵足付瓶	2次床B2中	脚径2.5, 脚長4.5	良	灰白焼堅緻	1/20	叩きをもつ横瓶又は提瓶状容器に棒状脚が付く
	6	須恵小甕	2次床A2中 B2中	口17.2, 頸17.8 頸高1.8, 胴30.8	普通	灰色焼堅緻	1/3	外Ha叩き、内特殊当て 容量推23.752ℓ
	7	赤彩埦A	2次床A2上	口11.5, 高3.6 底6.9	〃	2.5Y8/3通	1/2	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
17号土師器焼成坑	8	赤彩高盤	2次床A2上	口21.4, 坏高3.9	普通	10YR8/4通	1/10	
	9	土師小壺	2次床A1上	口17.6, 頸8.0 胴10.2	粗砂含	7.5YR8/4通	1/4	容量0.426ℓ
	10	土師当て具	2次床B1灰	径10.4, 厚2.6 手基部径3.4	普通	5YR6/8良	2/3	
	11	土師小釜	2次床	口10.6, 高13.9 頸9.5, 胴13.8 底7.6	粗砂多	5YR7/6良	〃	底ロクロ軸痕 容量2.534ℓ
	12	〃	〃	口12.1, 高14.3 頸10.8, 胴13.2 底7.0	粗砂含	7.5YR8/3通	完形	底ロクロ軸痕 容量2.573ℓ
	13	〃	2次床A2中	口19.6, 頸8.7 胴9.6	普通	7.5YR8/4通	1/10	
	14	〃	〃	口11.6, 頸10.5	〃	〃	口頸片	
	15	土師釜	〃	口20.0, 頸17.7 胴20.8	大粒砂含	7.5YR7/6通	1/10	
	16	〃	2次床	口20.4, 頸17.9 胴22.2	〃	7.5YR8/3通	〃	
	17	土師鍋	2次床A1中	口38.0, 頸35.4	粗砂含	2.5YR6/8良	1/30以下	外黒斑
	18	土師台付鉢	2次床A1上	口37.6	〃	10YR7/4通	口頸片	
	19	土師円筒形土器	2次床A1上 P514	口19.5, 肩12.5	大粒砂含	7.5YR7/6通	1/12	
	20	須恵盤A	1次床	口15.4, 高1.8	普通	淡灰褐酸化焼良	1/15	
	21	赤彩埦	〃	口12.3, 高3.2 底7.5	砂多	2.5YR8/3通	1/6	一部黒斑
18号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋大	A1・B1	口17.3, 高3.8 つまみ径2.6, つまみ高1.4	普通	橙色酸化焼	1/4	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏B身大	B1・2	台10.0, 台高0.4	〃	灰色焼堅緻	1/5	底ヘラ記号「×」
	3	須恵坏A	〃	口12.1, 高3.2	〃	〃	1/2	〃
	4	須恵盤A	A1	口15.5, 高2.25	良	青灰焼良好	1/5	
	5	〃	〃	口15.2, 高2.2	〃	〃	1/8	
	6	赤彩埦	A2	底5.3	普通	7.5YR8/4通	底片	
	7	土師厚底鉢	A1	口19.8, 高推17.6 頸16.0	大粒砂含	7.5YR8/4 −0.5YR5/1良	1/3	容量4.504ℓ
	8	土師台付鉢	床下P1	口32.0, 鉢高4.7	大粒砂多	5YR7/6通	1/15	
	9	〃	A2	口32.9	大粒砂含	10YR8/3通	口頸片	
	10	土師小釜	B2	口13.7, 頸11.8 胴13.6	普通	〃	1/10	
	11	〃	〃	口12.8, 頸11.3 胴13.1	〃	7.5YR6/1通	1/8	
	12	土師釜	A1	口20.5, 頸17.3	粗砂含	7.5YR8/3通	1/15	
	13	〃	B2	口22.6, 頸18.6	〃	10YR8/3通	口頸片	
	14	〃	内灰	口24.3, 頸20.6 胴24.4	〃	10YR8/3 5YR7/6通	1/5	外Ha叩き、内Dc当て
	15	土師鍋	B2	口38.8, 頸35.4	大粒砂多	7.5YR8/4良	1/25	
	16	〃	A2・灰	口38.7, 頸34.0	大粒砂含	7.5YR8/3通	1/6	
	17	〃	B2	口28.6, 頸24.8	粗砂含	10YR8/2通	1/10	
	18	土師甑	〃	——	〃	7.5YR8/2 5YR7/6良	胴片	
19号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋小	B1上	口10.7, 高1.9 つまみ径2.1, つまみ高0.9	普通	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
	2	須恵坏B身小	A1中・B1下	口10.6, 高3.4 台7.0, 台高0.5	〃	青灰白焼良	2/3	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
19号土師器焼成坑	3	須恵坏B身大	A2中	口16.2, 高6.35 台10.4, 台高0.8	普通	青灰白焼良	1/3	
	4	〃	A2上	口16.0, 高6.6 台10.6, 台高0.8	〃	〃	1/4	
	5	須恵坏A	B2上	口11.6, 高3.1	〃	青灰白焼良好	〃	
	6	〃	〃	口11.2, 高3.0	〃	黄橙色酸化焼	1/3	
	7	〃	A1上	口12.6, 高3.8	〃	赤橙色酸化焼	〃	
	8	須恵盤A	A2上	口16.6, 高2.5	〃	灰白焼良	4/5	
	9	赤彩埦	B2中	口13.7	〃	10YR8/3通	1/5	
	10	〃	B1上	底6.5	〃	7.5YR8/4良	1/10	
	11	赤彩小壺	A2上	口12.8, 頸12.6	〃	10YR8/4通	〃	
	12	〃	B2上	胴19.6	〃	〃	1/8	
	13	土師小釜	A2上	口14.0, 頸13.2	大粒砂含	7.5YR7/6通	口頸片	
	14	〃	B2中	口11.4, 頸10.8	普通	〃	〃	
	15	〃	A1上	口14.0, 頸12.6	粗砂含	10YR8/3通	〃	
	16	土師釜	B1上	口20.0, 頸18.2	大粒砂含	10YR6/6通	〃	
	17	〃	B2中	口21.4, 頸18.4	〃	7.5YR8/4良	〃	黒斑あり
	18	土師鍋	床	口35.6, 頸32.4	大粒砂多	10YR8/4通	1/15	
	19	〃	A2上	口36.2, 頸33.4	粗砂多	5YR7/6良	1/20	
	20	〃	床	口42.3, 頸39.2	大粒砂多	10YR8/3通	〃	
	21	〃	B1下	口42.4, 頸38.2	大粒砂含	〃	1/10	
	22	土師円筒形土器	A2中	口11.8, 肩15.2	〃	5YR8/4通	口縁片	
	23	須恵坏B蓋中	床下土坑	口13.4, 高3.0 つまみ径2.5, つまみ高1.1	普通	黄橙色酸化焼	1/4	重焼Ⅱa類
	24	〃	B2上	口12.7	〃	〃	1/5	〃
	25	須恵坏A	床下土坑	口13.6, 高3.0	〃	青灰焼堅緻	1/6	
	26	赤彩埦	〃	底6.5	〃	10YR8/4通	〃	
	27	土師釜	床下	口20.7, 頸17.3	粗砂含	7.5YR8/4通	1/20	
	28	土師甑	〃	底15.8	粗砂多	5YR7/6良	底部片	外Ha叩き、内Dc当て
20号土師器焼成坑	1	須恵坏A	B1灰	口11.7, 高3.15	普通	青灰焼堅緻	1/4	
	2	須恵盤A	灰	口16.2, 高2.8	〃	灰色焼堅緻	完形	
	3	須恵盤B	〃	台17.0, 台高0.8		青灰焼堅緻	1/20	
	4	土師釜	〃	口21.0, 頸19.7	粗砂含	7.5YR8/3良	口頸片	内外黒斑
	5	〃	B1下・B中	口21.3, 頸18.8	大粒砂含	7.5YR8/4通	〃	
	6	土師鍋	B1下	口32.8, 頸28.8	粗砂含	2.5YR5/8良	〃	
	7	〃	灰	口34.3, 頸31.7	大粒砂含	5YR6/6良	1/15	外黒斑
	8	〃	B1下灰	口39.5, 頸34.4	大粒砂多	7.5YR8/4	〃	
	9	〃	B1中	口37.2, 頸34.8	粗砂含	5YR6/6良	1/30以下	
	10	土師甑	B区下	口29.6	大粒砂含	5YR8/4通	口頸片	
	11	須恵坏B蓋中	H25窯上灰	口13.3	普通	青灰白焼良	1/6	
	12	須恵坏A	〃	口13.2, 高3.45	〃	灰色焼良好	3/4	底ヘラ記号「×」
	13	〃	〃	口11.3, 高3.3	〃	灰白焼良	〃	
	14	〃	〃	口12.6, 高3.0	〃	暗灰焼良好	1/4	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
20号土師器焼成坑	15	須恵盤A	H25窯上灰	口16.9, 高2.5	普通	褐灰酸化焼良	1/3	
	16	赤彩坏A	〃	——	〃	7.5YR8/4通	1/5	
	17	赤彩埦	〃	口14.1	〃	5YR6/6通	1/10	
	18	赤彩小壺	〃	口12.2, 頸12.7 胴17.3	〃	7.5YR8/4通	〃	
	19	土師小釜	〃	口13.6, 頸12.5	粗砂含	2.5YR6/6通	1/15	
	20	〃	〃	口12.5, 頸11.6	粗砂多	7.5YR7/4通	〃	
	21	〃	〃	口16.7, 頸14.8 胴17.8	大粒砂含	5YR7/6通	1/8	
	22	土師釜	〃	口20.2, 頸18.4 胴24.0	〃	5YR8/4通	1/3	外Ha叩き後削、内Dc当て
	23	土師鍋	〃	口29.3, 頸27.2	〃	5YR8/4良	1/6	
	24	〃	〃	口39.4, 頸36.8	大粒砂多	7.5YR8/6通	1/8	
	25	〃	〃	口35.6, 頸31.7	〃	7.5YR7/6通	1/15	
	26	〃	〃	口35.7, 頸32.8	粗砂多	10YR7/2 7.5YR7/4通	〃	
	27	〃	〃	口34.4, 頸32.6	大粒砂含	7.5YR8/4通	〃	外下半Ha叩き
	28	土師甑	〃	口22.2	〃	〃	〃	
21号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋大	B1	口17.7	普通	青灰焼良好	1/6	重焼Ⅱb類
	2	須恵坏A	A1	口12.3, 高3.3	〃	青灰白焼良	1/5	
	3	〃	A1上・A2	口11.6, 高3.4	〃	褐灰酸化焼良	〃	
	4	赤彩埦	A1	口11.7, 高3.2	〃	7.5YR8/3通	1/3	
	5	〃	A1上	口13.3, 高3.2	〃	7.5YR7/6通	〃	
	6	土師円盤	A2	径10.0, 厚0.9	砂多	7.5YR7/4 5YR6/6通	1/3	黒斑あり
	7	〃	A1	径3.0, 厚0.8 孔1.3×0.6	普通	5YR7/8通	完形	外未貫通孔 内シボリきり痕
	8	土師釜	A1上	口19.5, 頸16.5	大粒砂含	10YR8/6良	1/20	
	9	〃	A1	口19.4, 頸17.5	粗砂含	7.5YR6/4通	口頸片	外黒斑
	10	土師鍋	A1上・B1下	口38.3, 頸35.4	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/15	
	11	〃	A2	口36.2, 頸33.8	〃	2.5YR6/8通	1/20	
	12	〃	〃	口35.0, 頸32.0	〃	7.5YR7/6通	〃	
	13	土師甑	A1上	底19.4	〃	7.5YR8/6通	底部片	
	14	〃	〃	底18.5	〃	7.5YR8/4通	〃	
22号土師器焼成坑	1	赤彩埦	床	底9.0	普通	7.5YR7/6通	1/6	
	2	土師釜	カキ出し土坑	口21.6, 頸18.8 胴23.4	大粒砂多	7.5YR8/4 5YR7/6通	1/10	
	3	〃	〃	口20.6, 頸18.2 胴21.8	大粒砂含	10YR8/4 2.5YR6/8通	1/2	胴外広く白斑 外Ha叩き削り、内D当てナデ
	4	〃	〃	口18.8, 頸16.2 胴19.4	〃	5YR7/6通	1/8	
	5	土師小鍋	〃	口28.6, 頸27.6	〃	〃	1/10	
	6	〃	〃	口27.3, 頸26.0	〃	5YR7/6良	1/15	
	7	土師鍋	〃	口35.5, 高13.7 頸30.9	〃	7.5YR8/4通	1/10	外面黒斑 H22出土の一部破片に鉄滓溶着 容量13.908ℓ
	8	〃	〃	口39.6, 頸35.8	大粒砂多	10YR8/4通	1/5	
	9	〃	〃	口43.1, 高16.9 頸39.6	〃	10YR8/3	2/3	容量28.528ℓ

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
22号	10	土師鍋	カキ出し土坑	口43.8, 頸40.8	大粒砂含	10YR8/4通	1/10	
23号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	B1上	口14.2	普通	青灰焼良好	1/5	重焼Ⅱb類
	2	〃	B1中	口12.6	〃	灰白焼良	〃	〃
	3	須恵坏A	B2中	口12.4, 高3.4	〃	青灰焼良好	1/3	底ヘラ記号「×」
	4	須恵盤A	B1下	口15.8, 高2.6	〃	灰褐酸化焼	1/4	
	5	〃	B1上・B2中	口16.2, 高2.3	〃	灰白焼不良	4/5	
	6	〃	B2中	口15.6, 高2.5	〃	青灰焼堅緻	1/3	
	7	〃	A2上・中	口16.7, 高2.6	〃	青灰白焼良	〃	
	8	〃	B1上	口16.2, 高2.6	〃	暗灰焼堅緻	1/2	
	9	〃	B1下・B2中	口16.6, 高2.2	〃	灰色焼堅緻	1/3	
	10	〃	A1下	口15.8, 高1.7	良	〃	1/4	
	11	〃	B2中	口17.6, 高1.8	普通	灰色焼良	〃	
	12	須恵盤B	A2下	口21.0, 高3.5 台17.0, 台高0.4	〃	暗灰色焼堅緻	1/8	
	13	赤彩埦	B1下	底6.4	〃	10YR8/2通	1/3	
	14	赤彩盤A	下層	口15.6, 高2.7	〃	10YR8/4通	4/5	底黒斑
	15	赤彩盤B	〃	口18.5, 高3.6 台13.8, 台高0.6	〃	〃	2/3	
	16	土師円盤	B2下	径4.4～4.7, 厚0.7 孔1.2×0.5	〃	〃	完形	
	17	〃	B1上	径3.7, 厚0.8 孔1.2×0.3	〃	10YR8/2良	〃	
	18	土師小釜	床・B2中	口15.4, 頸13.8 胴16.0	大粒砂含	7.5YR6/6通	1/2	容量3.993ℓ
	19	〃	床	口12.4, 頸11.0	〃	5YR7/6通	1/12	
	20	〃	下層	口14.8, 頸12.8	粗砂含	10YR8/3通	口頸片	
	21	〃	〃	口11.9, 頸10.4	大粒砂含	7.5YR8/6通	〃	
	22	土師釜	B1中	口21.6, 頸18.7	粗砂含	2.5YR6/6 7.5YR8/3通	〃	
	23	土師鍋	下層	口37.2, 高推14.5 頸34.2	大粒砂含	10YR8/3通	1/5	外胴黒斑 容量17.951ℓ
	24	〃	B1中	口38.8, 頸35.0	〃	〃	1/8	
	25	〃	B2中・下層	口38.2, 頸35.0	粗砂含	2.5YR6/6通	1/15	
	26	〃	B1下	口43.8, 頸39.5	大粒砂含	10YR8/3通	1/6	
	27	〃	下層	口41.4, 頸37.6	〃	10YR8/3通	1/8	
	28	〃	B1下・A1上	口40.6, 頸36.8	〃	〃	1/10	
	29	〃	B1下	口39.4, 頸36.4	〃	10YR8/4通	1/8	
	30	〃	床	口41.6, 頸38.4	大粒砂多	7.5YR8/4通	1/12	
	31	〃	A1下	口35.6, 頸32.0	粗砂含	10YR8/4通	〃	
	32	土師甕	A2中	口24.8	粗砂多	7.5YR8/4通	口頸片	
	33	須恵坏B蓋小	床下	口11.8, 高3.0 つまみ径2.2, つまみ高0.9	普通	灰色焼堅緻	3/4	重焼Ⅱa類
	34	須恵坏B蓋中	床下A2	つまみ径2.2, つまみ高1.1	良	青灰焼堅緻	1/5	〃
	35	〃	〃	口13.0, 高2.8 つまみ径2.1, つまみ高0.8	普通	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
	36	須恵坏A	床下	口13.7, 高4.1	〃	灰白焼不良	3/4	
	37	〃	〃	口13.4, 高3.6	〃	〃	1/3	
	38	〃	〃	口12.0, 高3.6	〃	青灰焼良好	略完	
	39	〃	〃	口12.0, 高3.5	〃	青灰白焼良	4/5	底ヘラ記号「Ⅰ」

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
23号土師器焼成坑	40	須恵坏A	床下A2	口13.0, 高3.7	普通	黄橙酸化焼	1/5	
	41	〃	床下B2	口13.0, 高3.3	〃	青灰焼良	1/3	
	42	須恵盤A	〃	口15.7, 高2.6	〃	青灰白焼良	1/5	
	43	〃	床下	口16.4, 高2.4	〃	灰色焼堅緻	略完	
	44	須恵盤B	〃	口19.8, 高4.6 台15.0, 台高0.6	〃	浅黄橙酸化焼	1/8	
	45	〃	床下A2	口19.5, 高3.5 台15.6, 台高0.7	〃	青灰白焼良	1/10	
	46	須恵鉢B (手付)	床下A2・B2	口23.2, 頸22.0 胴25.8	〃	灰色焼堅緻	1/3	
	47	赤彩埦	床下	口11.6, 高3.4 底5.7	〃	7.5YR8/6通	3/4	
	48	〃	〃	口11.3, 高3.4 底5.2	〃	10YR8/3通	4/5	
	49	〃	床下B1	底6.0	〃	10YR8/4通	1/3	
	50	〃	床下B2	口11.4, 高3.8 底6.2	〃	5YR8/4通	4/5	
	51	〃	床下A2	口11.7	〃	10YR8/4通	1/3	
	52	〃	〃	底7.0	〃	10YR8/2通	3/5	
	53	赤彩高盤	〃	脚基4.5	〃	10YR8/3通	脚4/5	
	54	土師小釜	床下	口14.6, 高14.1 頸13.0, 胴15.2 底8.2	粗砂含	7.5YR8/4通	2/3	外底黒斑 容量3.485ℓ
	55	〃	床下A1・B2	口14.0, 頸12.6 胴14.5	〃	〃	1/5	
	56	〃	床下B1	口14.5, 頸13.0 胴15.2	〃	7.5YR8/4 5YR7/6通	1/10	
	57	〃	床下A2	口14.5, 頸13.2	大粒砂含	7.5YR8/4通	〃	
	58	〃	床下B2	口12.8, 頸11.2	〃	5YR7/6通	1/12	
	59	〃	床下A2・B2	口10.3, 頸9.1	粗砂含	10YR8/3通	1/10	
	60	土師釜	床下A2	口20.6, 頸17.8	大粒砂多	〃	〃	
	61	〃	床下B2	口20.8, 頸17.8	〃	10YR8/4通	1/20	
	62	〃	床下	口20.0, 頸16.6	〃	10YR8/3通	口頸片	
	63	土師鍋	床下B1	口40.6, 高12.1 頸37.0	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/3	容量17.351ℓ
	64	〃	〃	口40.0, 高12.0 頸36.0	粗砂含	2.5YR6/6通	1/12	容量16.286ℓ
	65	〃	床下	口40.4, 頸36.6	大粒砂含	10YR8/3通	1/8	
	66	〃	〃	口41.4, 頸37.6	〃	〃	1/10	
	67	〃	〃	口42.4, 頸39.0	粗砂含	10YR8/4通	1/4	
	68	〃	床下A2・B1	口40.6, 頸37.0	大粒砂含	〃	1/12	
	69	〃	床下B2	口38.5, 頸34.8	〃	7.5YR8/4通	口頸片	
	70	〃	床下A1・2	口34.6, 頸30.8	〃	7.5YR8/3通	1/6	
	71	土師甕	床下A2	口26.8	粗砂含	7.5YR7/6通	口頸片	外口黒斑
	72	〃	床下B2	口13.8	粗砂多	5YR7/6 10YR8/3通	1/20	外黒斑
	73	土師台付鉢	B2貼床下中	口35.5	粗砂含	7.5YR8/6通	1/15	
24号土師器焼成坑	1	赤彩埦	エ5カクラン上落ち込み	口14.7, 高4.1 底7.2	普通	〃	1/5	
	2	土師鍋	エ5カクラン落ち込み	口37.2, 頸33.9	大粒砂多	10YR8/3通	1/8	
	3	〃	〃	口38.7, 頸36.3	〃	10YR8/4通	1/10	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
24号	4	土師鍋	E5カクラン落ち込み	□36.4, 頸33.6	大粒砂多	7.5YR6/6通	1/10	
25号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋小	中層	□12.8	普通	浅黄橙酸化焼	1/5	重焼Ⅱb類
	2	須恵坏B蓋中	B1中・床	□13.4, 高3.2 つまみ径2.8, つまみ高1.0	〃	灰白焼良好	2/3	
	3	須恵坏B身小	B1中	□11.3, 高3.7 台6.4, 台高0.65	〃	青灰焼堅緻	1/4	
	4	須恵坏B身中	〃	□13.2, 高4.4 台7.5, 台高0.7	〃	灰色焼堅緻	1/3	
	5	須恵坏A	A1中・B1中	□11.0, 高3.4	〃	〃	2/3	
	6	〃	1次床	□12.6, 高3.7	〃	灰色焼不良	1/5	
	7	〃	A1中・B1中	□11.5, 高3.2	〃	〃	1/4	
	8	須恵盤A	A1中	□15.8, 高2.2	〃	灰色焼堅緻	〃	底ヘラ記号「I」
	9	須恵盤B	B1中	□21.6, 高3.9 台16.0, 台高0.7	〃	褐灰焼良	1/12	
	10	〃	A1中	□20.2, 高3.8 台16.8, 台高0.7	〃	灰色焼堅緻	1/8	
	11	須恵小壺	B1中・B2中	□10.4, 高11.0 頸9.4, 胴12.4 底7.0	〃	〃	2/3	底糸切り 容量1.567ℓ
	12	須恵中甕	床	□32.6, 頸28.6 頸高4.5	良	青灰焼堅緻	口頸片	
	13	赤彩埦	B1中	□17.2, 高推8.7 底8.0	普通	5YR7/6通	2/5	外黒斑
	14	土師小釜	床	□13.6, 高12.9 頸12.6, 胴14.2	大粒砂含	7.5YR7/2通	2/3	容量2.676ℓ
	15	〃	A1中	□12.4, 頸11.9	大粒砂多	10YR8/3通	口頸片	
	16	〃	〃	□13.1, 頸12.2 胴13.5	〃	7.5YR8/4通	1/5	
	17	〃	床	□12.6, 頸11.6	普通	7.5YR8/2良	口頸片	
	18	土師釜	A1中	□21.3, 頸19.8	大粒砂多	5YR7/6通	1/20	
	19	〃	〃	□19.1, 頸16.8	粗砂含	5YR7/4良	〃	
	20	土師鍋	床 B1中・B2中	□38.2, 高10.7 頸35.0, 底21.2	〃	7.5YR8/3通	1/3	内底に手びねり 粘土塊が数個着 容量14.722ℓ
	21	〃	床	□37.5, 頸34.0	〃	10YR8/3通	1/12	内黒斑
	22	〃	〃	□38.8, 頸34.8	粗砂多	10YR8/4通	1/15	
	23	〃	〃	□35.4, 頸32.2	大粒砂含	10YR8/4通	〃	
	24	〃	〃	□36.6, 高14.0 頸33.2	大粒砂多	10YR8/4通	1/6	容量17.01ℓ
	25	〃	〃	□40.2, 高15.5 頸38.0	〃	10YR8/3通	1/3	外面黒斑 容量24.333ℓ
	26	〃	〃	□34.4, 頸32.2	大粒砂含	10YR8/4通	1/10	
	27	〃	〃	□43.5, 高推14.3 頸41.0	大粒砂多	10YR8/3通	2/5	推容量26.42ℓ
	28	〃	〃	□42.2, 高推12.6 頸39.4	〃	10YR8/2通	1/5	外黒斑 推容量20.799ℓ
	29	〃	床・下層	□42.3, 頸38.9	粗砂含	10YR8/3通	1/10	
	30	〃	床	□40.2, 高14.0 頸37.2	大粒砂多	10YR8/3通	1/8	容量20.223ℓ
	31	〃	〃	□42.2, 頸38.6	〃	10YR8/4通	〃	
	32	〃	〃	□39.6, 頸36.2	粗砂含	7.5YR8/3通	1/10	
	33	〃	〃	□40.5, 頸37.4	〃	7.5YR8/4通	1/18	
	34	土師甑	A1中	底21.4	〃	7.5YR7/4良	底片	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
25号土師器焼成坑	35	土師甑	B中	□27.0	大粒砂多	5YR6/6通	1/15	
	36	土師足付盤	B1中 オ15下層下灰 エ9下層下灰 エ10下層黒灰	□36.6, 盤高4.1	粗砂含	7.5YR8/3通	1/20	
	37	土師円筒形土器	B1中	底10.8	大粒砂含	5YR7/6通	〃	底面ロクロ軸痕もつ
	38	須恵坏B蓋中	1次床	□13.2, 高3.3 つまみ径3.1, つまみ高0.9	普通	青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa類
	39	須恵坏A	〃	□11.9, 高2.9	〃	〃	完形	
27号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋中	A2中	□14.1, 高3.8 つまみ径2.4, つまみ高1.2	〃	暗灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏A	A1中	□12.2, 高2.65	〃	暗青灰焼堅緻	3/5	
	3	須恵盤A	A2下灰	□17.0, 高2.0	〃	〃	1/12	
	4	赤彩盤A	A2中	□18.7, 高2.8	良	5YR7/6通	1/15	
	5	〃	B2下		普通	〃	1/20	
	6	土師釜	床（前部）	□23.6, 頸21.0 胴23.2	粗砂含	10YR8/4通	1/15	
	7	土師鍋	B2下	□34.5, 頸31.2	大粒砂含	10YR8/3通	1/20	
	8	〃	床	□38.4, 頸35.2	粗砂含	2.5YR7/4 10YR8/4通	1/8	
	9	〃	床（前部）	□38.2, 頸34.6	〃	10YR8/3通	1/15	
28号土師器焼成坑	1	須恵坏B蓋	A2下	つまみ径3.0,つまみ高0.65	普通	暗灰焼堅緻	つまみ片	重焼Ⅰ類
	2	須恵坏A	B1上	□12.8, 高2.95	〃	橙褐酸化焼良	1/6	
	3	〃	A1上	□12.4, 高3.0	〃	にぶい橙酸化焼良	〃	
	4	赤彩坏D	床・B1下	□15.1, 高4.8	〃	5YR7/6通	2/3	底ヘラ切後削り 後ミガキ 内外ミガキ
	5	〃	床	□14.7, 高5.2	良	7.5YR7/4良	3/4	底ヘラ切後削り 内外回転ミガキ？
	6	赤彩埦	A2上	□17.1	〃	5YR8/4通	1/20	
	7	〃	〃	□14.2	〃	〃	1/10	
	8	土師円盤	B2下	径6.2, 厚0.6～0.7	普通	10YR8/2良好	1/6	切取見込み線 焼き強く剥離あり 一部黒斑
	9	土師釜	A2下	□18.9, 頸16.4	大粒砂含	10YR8/3通	口頸片	
	10	土師甑	床	□28.9, 高29.8 底10.0	大粒砂多	7.5YR7/3通	2/3	胴下半外Ha叩き 内ナデ消し 容量19.141ℓ
1号土坑	1	須恵盤B	1号土坑埋土	□20.2, 高3.65 台15.9, 台高0.45	普通	青灰焼良好	1/20	
	2	土師支脚（三叉タイプ）	〃	柱径4.8, 孔径1.7	大粒砂含	5YR8/4通	1/10	中空脚
	3	土師円筒形土器	〃	底16.5	大粒砂多	7.5YR7/6通	〃	
2号土坑	1	須恵坏B蓋小	2号土坑埋土	□11.5, 高2.7 つまみ径2.05,つまみ高0.85	普通	青灰焼堅緻	完形	重焼Ⅱb類
	2	〃	〃	□11.8	〃	暗灰焼良	2/5	重焼Ⅰ類
	3	須恵坏B蓋中	〃	□14.3, 高2.5 つまみ径2.3, つまみ高0.6	〃	青灰白焼良	1/3	重焼Ⅱa類
	4	須恵坏B身中	〃	台8.7, 台高0.6	〃	暗灰焼堅緻	〃	
	5	須恵坏A	〃	□12.4, 高3.8	〃	灰白焼良	3/4	
	6	〃	〃	□12.9, 高3.3	〃	青灰焼良好	1/3	
	7	〃	〃	□12.8, 高3.3	〃	青灰白焼良好	5/6	外底面摩耗
	8	〃	〃	□12.5, 高3.0	〃	〃	1/2	底ヘラ記号「I」

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
2号土坑	9	須恵盤A	2号土坑埋土	口17.0, 高2.3	普通	灰白焼不良	3/5	
	10	〃	〃	口15.7, 高2.0	〃	灰白焼良	1/3	
	11	〃	〃	口15.8, 高2.0	〃	暗青灰焼堅緻	1/4	
	12	赤彩埦	〃	口12.4, 高3.25 底7.3	〃	10YR8/3通	2/5	
	13	〃	〃	底6.4	〃	7.5YR7/6通	2/3	
	14	〃	〃	口13.2, 高2.5 底7.7	〃	7.5YR8/6通	3/4	
	15	赤彩坏B身小	〃	台7.7, 台高0.4	〃	7.5YR7/6通	1/10	
	16	赤彩盤A	〃	——	〃	7.5YR8/3通	1/5	
	17	土師小釜	〃	口14.2, 頸12.5	粗砂含	10YR8/4通	1/20	
	18	土師釜	〃	口20.5, 頸17.0 胴19.6	大粒砂含	7.5YR8/3通	〃	
3号土坑	1	須恵坏B蓋大	3号土坑埋土	口17.4, 高3.5 つまみ径3.1, つまみ高1.4	普通	青灰白焼良	略完	
	2	赤彩埦	〃	口13.2, 高3.35 底7.4	〃	7.5YR8/4通	1/3	
	3	土師小釜	〃	口15.7, 頸14.2	粗砂含	5YR6/6通	口頸片	
	4	土師釜	〃	口21.5, 頸19.4		7.5YR7/6通	〃	
	5	土師鍋	〃	口38.0, 頸35.2	粗砂多	7.5YR8/4通	1/20	外面一部黒斑
	6	〃	〃	口37.5, 頸34.6	粗砂含	2.5YR6/8通	口頸片	
	7	〃	〃	口40.0, 頸36.8	〃	7.5YR7/6通	1/30	
	8	土師甕	〃	口31.4	〃	2.5YR7/6通	口頸片	外面黒斑
	9	〃	〃	底22.0	大粒砂含	7.5YR6/6通	底部片	
	10	土師円筒形土器	〃	口15.2	粗砂含	10YR8/4通	口縁片	
	11	〃	〃	底14.8	〃	10YR7/4通	底部片	
P—125	1	須恵盤B	P125下層	口22.0, 高3.6 台16.6, 台高0.7	砂多	灰色焼堅緻	1/3	
	2	赤彩埦	〃	口12.6, 高3.6 底6.1	普通	5YR7/6通	4/5	底ヘラ記号「I」
	3	〃	〃	口13.3, 高4.6 底6.7	〃	7.5YR7/6通	2/3	
P—148	1	須恵盤A	P148下層	口16.5, 高1.9	〃	青灰白焼良好	1/2	
	2	赤彩埦	P148上層	口12.5, 高3.3 底6.4	〃	5YR7/6通	略完	底ヘラ記号「I」
	3	〃	〃	口15.8, 高5.2 底9.4	〃	7.5YR8/6通	4/5	底ヘラ記号「I」
P—156	1	須恵坏B蓋中	P156	口12.5, 高2.8 つまみ径2.6, つまみ高0.9	〃	青灰焼良好	1/3	
	2	須恵坏B身大	〃	口16.4, 高7.3 台10.8, 台高0.8	〃	灰色焼堅緻	2/3	
エ7Gr—P6	1	土師杯A	エ7・P6	口12.8, 高3.9	〃	5YR7/6通	〃	
	2	土師小釜	〃	口14.2, 高11.7 頸12.2, 胴13.8 底6.0	大粒砂含	7.5YR7/6通	1/2	胴～底外黒斑 容量2.408ℓ
	3	〃	〃	胴16.0, 底8.6	〃	7.5YR8/4通	2/3	
P—214	1	須恵坏B身大	P214	口15.9, 高6.3 台10.8, 台高0.5	砂多	灰白焼不良	4/5	
	2	〃	〃	口15.4, 高5.3 台10.4, 台高0.55	〃	黄橙酸化焼	1/2	
	3	須恵坏A	〃	口12.2, 高3.1	普通	暗灰焼堅緻	3/5	
	4	須恵盤A	〃	口14.7, 高2.6	〃	灰白焼不良	1/3	
	5	須恵高盤	〃	口21.0, 基4.5	〃	灰白焼良	1/4	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
P—214	6	土師鍋	P214	口41.6, 頸37.8	大粒砂含	5YR7/6通	1/5	外He叩き、内Da当て、容量25.498ℓ
P—319	1	須恵坏B蓋中	P319	口12.6, 高3.9 つまみ径2.8, つまみ高1.3	普通	灰白焼良	1/3	
	2	〃	〃	口14.7, 高3.2 つまみ径2.8, つまみ高1.0	〃	灰白焼不良	1/5	
	3	須恵坏B身中	〃	口12.0, 高3.9 台9.0, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	3/4	
	4	須恵坏B身小	〃	口10.7, 高4.0 台7.6, 台高0.6	〃	灰色焼良	〃	
	5	須恵盤A	〃	口16.7, 高1.8	〃	灰色焼堅緻	1/6	
	6	〃	〃	口17.1, 高2.1	〃	灰白焼良	1/5	
	7	須恵盤B	〃	口19.6, 高3.9 台16.6, 台高0.6	良	灰色焼堅緻	1/4	
	8	赤彩埦	〃	口11.4, 高3.0 底5.6	普通	5YR6/6通	2/3	
	9	土師円盤	〃	径7.5, 厚1.2	〃	10YR8/2通	1/3	一部黒斑
	10	土師釜	〃	口29.0, 頸26.4 胴28.5	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/10	
	11	土師円筒土器	〃	口12.8, 高21.5 底長11.5, 底短9.6	〃	7.5YR8/6通	2/3	
P—598	1	須恵盤A	P598	口18.0, 高2.5	普通	青灰焼良好	1/3	
	2	土師鍋	〃	口44.5, 頸40.0	大粒砂含	10YR8/3通	1/30	
14号溝	1	須恵坏B蓋中	ミゾ14・ウ12下層下灰	口15.0, 高2.65 つまみ径2.75, つまみ高1.2	普通	青灰焼良好	2/3	重焼Ⅱb類
	2	〃	ミゾ14・エ12下層下灰	口13.2, 高2.8 つまみ径2.7, つまみ高0.9	〃	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅰ類
	3	須恵坏B身小	ミゾ14埋土	口9.7, 高4.1 台7.0, 台高0.5	〃	〃	〃	
	4	須恵坏A	〃	口12.0, 高3.7	〃	褐灰酸化焼	〃	
	5	〃	〃	口11.8, 高3.7	〃	灰白焼不良	〃	
	6	須恵盤A	〃	口16.6, 高2.3	〃	灰色焼良好	〃	
	7	須恵高盤	ミゾ14 イ12中層	口20.6, 坏高2.7	〃	灰色焼堅緻	1/18	
	8	赤彩埦	ミゾ14埋土	——	〃	5YR8/4通	1/8	
	9	〃	〃	口12.0, 高2.9 底6.6	〃	7.5YR8/3通	2/3	
15号溝	1	須恵坏蓋特大	ミゾ15 エ11灰	口19.7, 高5.6 つまみ径4.1, つまみ高2.6	〃	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏B蓋大	ミゾ15埋土	口17.3, 高4.6 つまみ径2.65, つまみ高1.45	〃	白焼堅緻	〃	〃
	3	須恵坏B蓋小	ミゾ15・エ12下層下灰	口13.6, 高2.7 つまみ径2.7, つまみ高0.9	砂多	暗灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅰ類
	4	〃	〃	口14.0, 高2.8 つまみ径2.7, つまみ高1.1	普通	灰白焼良	1/3	〃
	5	須恵坏B身大	ミゾ15・エ11下層下灰	口15.2, 高6.6 台10.8, 台高0.8	〃	灰色焼良好	1/2	
	6	須恵盤B	ミゾ15・オ12 エ12下層灰	口21.4, 高4.0	〃	青灰白焼良	1/3	
	7	〃	ミゾ15埋土	口21.2, 高3.1 台17.0, 台高0.6	〃	暗灰焼堅緻	1/5	
27号溝	1	須恵坏B身中	ミゾ27埋土	口11.8, 高4.65 台8.6, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/7	
	2	〃	〃	口12.7, 高4.6 台9.0, 台高0.6	〃	〃	1/4	
	3	須恵坏A	〃	口12.6, 高3.8	〃	青灰焼良好	完形	
	4	〃	〃	口12.9, 高3.0	〃	青灰白焼良好	2/3	
	5	須恵盤A	〃	口14.4, 高2.35	〃	灰色焼堅緻	完形	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
27号溝	6	赤彩埦	ミゾ27+P441	口16.3, 高5.8通 底7.2	普通	7.5YR8/3通	2/3	
32号溝	1	須恵坏B蓋中	ミゾ32 ウ12中層	口12.7, 高3.4 つまみ径2.4, つまみ高1.5	〃	褐灰酸化焼	1/4	重焼Ⅱa類
	2	須恵坏A	ミゾ32埋土	口12.6, 高3.8	〃	灰色焼堅緻	1/2	
	3	須恵盤A	〃	口17.2, 高2.6	〃	灰白焼良	1/3	
	4	〃	〃	口16.6, 高2.25	〃	灰色焼堅緻	1/6	
	5	〃	〃	口14.3, 高2.5	〃	青灰焼良好	4/5	
	6	須恵高盤	ミゾ15・エ12 エ13下層灰	口21.3, 坏高2.4 脚基6.7	砂多	灰色焼堅緻	〃	
35号溝	1	須恵坏B蓋大	ミゾ35埋土	口17.0	普通	灰色焼不良	1/2	
	2	須恵坏B蓋中	〃	口14.0, 高2.7 つまみ径2.8, つまみ高0.8	〃	青灰白焼良	2/3	内天ヘラ記号「I」
	3	〃	〃	口13.8, 高2.7 つまみ径2.4, つまみ高1.0	〃	青灰焼良好	1/4	重焼Ⅱb類
	4	〃	〃	口13.1, 高3.2 つまみ径2.6, つまみ高1.2	〃	白焼堅緻	完形	重焼Ⅱ類
	5	〃	〃	口12.8, 高3.6 つまみ径2.8, つまみ高1.5	〃	黄橙酸化焼	1/4	重焼Ⅱa類
	6	須恵坏B身大	ミゾ35・オ15 下層黒灰	口14.8, 高6.5 台10.1, 台高0.4	〃	青灰白焼良	1/3	
	7	〃	ミゾ35埋土	口15.8, 高6.3 台9.9, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	3/5	底ヘラ記号「I」
	8	〃	ミゾ35 H7窯B2下	口15.8, 高6.5 台11.5, 台高0.6	〃	〃	1/2	
	9	須恵坏B身中	ミゾ35埋土	口12.5, 高4.0 台8.8, 台高0.6	〃	青灰白焼良	1/5	
	10	〃	〃	口12.4, 高4.1 台9.0, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	1/2	
	11	〃	〃	口11.7, 高4.2 台8.6, 台高0.5	〃	〃	1/3	
	12	〃	〃	口12.6, 高4.4 台9.0, 台高0.6	〃	灰白焼不良	1/6	
	13	須恵坏B身小	〃	口10.2, 高3.9 台6.8, 台高0.4	〃	灰色焼堅緻	略完	
	14	〃	〃	口10.8, 高3.8 台7.0, 台高0.4	〃	〃	2/3	
	15	〃	〃	口11.2, 高4.6 台7.2, 台高0.5	〃	暗灰焼堅緻	4/5	
	16	須恵坏A	〃	口12.6, 高4.0	〃	黄橙酸化焼	2/3	
	17	〃	〃	口12.9, 高3.65	〃	青灰焼良好	4/5	
	18	〃	〃	口11.9, 高3.6	〃	灰白焼不良	1/4	底ヘラ記号「I」
	19	〃	〃	口11.8, 高3.3	〃	〃	1/3	
	20	〃	〃	口12.0, 高3.35	良	青灰焼堅緻	3/4	
	21	須恵盤A	〃	口18.1, 高2.6	普通	〃	1/4	底ヘラ記号「×」?
	22	〃	〃	口17.0, 高2.6	〃	〃	2/3	
	23	〃	〃	口15.7, 高2.3	〃	灰白焼不良	1/2	
	24	〃	〃	口13.8, 高1.85	〃	暗灰焼堅緻	1/7	
	25	須恵盤B	〃	口21.0, 高3.8 台15.7, 台高0.6	〃	褐灰酸化焼	〃	
	26	〃	ミゾ35 ウ13中層	口22.0, 高3.3 台17.2, 台高0.55	良	灰色焼堅緻	1/5	
	27	須恵壺A蓋	ミゾ35埋土	口12.2, 高5.05 つまみ径3.7,つまみ高1.85	普通	〃	2/3	
	28	赤彩埦	〃	口14.1, 高3.3 底8.0	〃	7.5YR8/6通	1/7	
	29	〃	〃	口11.8, 高3.5 底5.7	〃	10YR8/4良	2/3	
35号溝	30	赤彩埦	ミゾ35埋土	口11.6, 高3.8 底7.2	普通	5YR7/6良	1/8	
	31	〃	〃	口14.7, 高4.7 底7.5	〃	5YR7/6通	1/2	
	32	土師土馬	〃	——	〃	7.5YR8/4通	脚片	
	33	土師台付鉢	〃	口34.4	大粒砂多	10YR8/4通	口頸片	
	34	〃	ミゾ35+P521 +ウ14下層黒灰	口32.8, 高17.7 台21.5, 台高8.8 鉢高8.7, 台基16.1	粗砂含	〃	1/3	内底D当て後ハケ目 容量8.255ℓ
	35	〃	ミゾ35埋土	口34.9, 鉢高6.2	大粒砂含	〃	1/20	容量5.404ℓ
	36	〃	ミゾ35 H9窯B1	口34.4, 鉢高6.3 台基21.6	〃	7.5YR8/6通	1/6	容量6.04ℓ
	37	〃	ミゾ35埋土	口30.5, 鉢高6.3	〃	10YR8/4通	1/8	容量5.764ℓ
	38	〃	〃	口31.2	〃	7.5YR8/4通	1/20	容量5.915ℓ
	39	土師円筒形土器	〃	口14.7	大粒砂含	10YR8/3通	1/12	
	40	土師小釜	〃	口19.8, 頸9.0 胴10.6	普通	7.5YR8/6通	1/4	容量1.099ℓ
	41	〃	〃	口10.7, 頸9.7 胴12.0	〃	10YR8/3良	1/3	
	42	〃	〃	口13.0, 頸12.6 胴14.6	大粒砂含	10YR8/4通	1/8	
	43	土師釜	ミゾ35一括	口22.8, 頸20.0 胴22.6	大粒砂多	5YR7/6通	1/10	外無文叩き、内当Da当て
	44	〃	ミゾ35埋土	口23.2, 頸19.8 胴22.8	大粒砂含	7.5YR8/4通	〃	
	45	〃	ミゾ35一括	口23.8, 頸29.6 胴21.3	〃	〃	1/15	
	46	〃	ミゾ35埋土	口20.5, 頸18.4	大粒砂多	10YR8/4通	口頸片	
	47	〃	〃	口19.5, 頸17.7	大粒砂含	5YR7/6良	1/10	
	48	〃	〃	口21.7, 頸18.7	大粒砂多	10YR8/3通	1/20	
	49	土師鍋	〃	口37.7, 頸33.6	〃	〃	口頸片	
	50	〃	〃	口33.5, 頸29.6	大粒砂含	10YR8/4通	1/30	
	51	〃	〃	口41.4, 頸37.0	〃	〃	1/20	
	52	〃	〃	口41.2, 頸37.4	良	5YR7/6良	1/10	
	53	〃	〃	口38.6, 頸35.2	大粒砂含	7.5YR8/3通	1/20	
	54	〃	〃	口37.6, 頸33.6	〃	10YR8/4通	1/30	
	55	土師甑	〃	口30.4	〃	2.5YR6/6通	2/3	外Ha叩き後カキ目 内Da当て後ハケ目 容量30.296ℓ
	56	〃	〃	口28.0	〃	7.5YR7/6通	口頸片	
	57	〃	〃	底17.1	普通	5YR7/6通	1/20	
	58	〃	ミゾ35+エ10 下層下灰	底20.0	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/5	底内黒斑・外He叩き後カキ目
36号溝	1	須恵坏A	ミゾ36 H8釜A1上	口11.6, 高3.15	普通	青灰焼良好	2/3	
	2	須恵盤A	ミゾ36埋土	口15.8, 高2.2	〃	〃	1/5	
	3	〃	ミゾ36 H8釜A2下	口15.8, 高2.1	〃	〃	1/6	
	4	須恵鉢F	ミゾ36埋土	口13.9	〃	暗灰色焼堅緻	1/3	容量2.091ℓ
	5	土師土錘	〃	長6.6, 幅4.2 孔1.6	〃	7.5YR8/3通	3/4	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
36号溝	6	土師釜	ミゾ36埋土	口21.5, 頸19.0	粗砂含	10YR8/4通	口頸片	
	7	〃	〃	口18.0, 頸16.3	〃	2.5YR8/3通	〃	
51号溝	1	須恵坏A	ミゾ51埋土	口13.2, 高3.3	普通	灰白焼良	2/3	底ヘラ記号「×」
	2	〃	〃	口11.4, 高3.1	〃	暗灰焼良好	1/5	
	3	須恵盤B	〃	口22.0, 高4.3 台18.0, 台高0.6	〃	青灰白焼良	1/10	
	4	赤彩埦	〃	口11.6	砂多	7.5YR8/4通	1/5	
	5	土師小釜	〃	口8.6, 頸7.6 胴8.2	粗砂多	〃	〃	容量0.429ℓ
	6	土師釜	〃	口18.3, 頸16.6	粗砂含	10YR8/4通	口頸片	
	7	土師甑	〃	口32.0	〃	〃	〃	
	8	〃	〃	底16.2	〃	〃	底部片	
1号土器溜まり	1	須恵坏B蓋大	土器溜まり一括	口16.8, 高4.15 つまみ径2.5, つまみ高1.3	普通	青灰焼堅緻	略完	重焼Ⅱa類
	2	〃	土器溜まり下層	口16.2, 高4.05 つまみ径2.8, つまみ高1.0	〃	青灰白焼良好	1/2	重焼Ⅱb類
	3	〃	〃	口16.0, 高2.6 つまみ径2.4, つまみ高1.2	〃	青灰焼堅緻	〃	重焼Ⅰ類
	4	須恵坏B蓋中	〃	口12.5, 高2.7 つまみ径2.5, つまみ高1.2	〃	青灰白焼良好	略完	〃
	5	須恵坏B蓋小	土器溜まり一括	口11.8, 高2.75 つまみ径2.2, つまみ高1.1	〃	灰色焼堅緻	〃	〃
	6	〃	土器溜まり	口11.3, 高2.9 つまみ径2.0, つまみ高0.8	〃	青灰焼良好	4/5	重焼Ⅱa類
	7	〃	〃	口10.6, 高2.65 つまみ径2.5, つまみ高1.0	〃	灰色焼堅緻	〃	〃
	8	須恵坏B身大	土器溜まり下層	口16.7, 高6.85 台10.6, 台高0.4	〃	〃	完形	
	9	須恵坏B身小	土器溜まり	口9.9, 高4.35 台7.7, 台高0.5	〃	黄橙酸化焼	3/5	
	10	須恵坏A	土器溜まり下層	口11.3, 高3.35	〃	青灰焼堅緻	2/3	
	11	〃	土器溜まり一括	口12.2, 高3.2	〃	暗褐酸化焼	1/3	
	12	〃	土器溜まり下層	口13.0, 高3.5	〃	灰白焼不良	〃	
	13	〃	〃	口12.1, 高3.15	〃	青灰焼良好	完形	
	14	〃	〃	口12.2, 高2.35	〃	青灰焼堅緻	3/5	
	15	須恵盤A	〃	口16.6, 高2.55	〃	青灰白焼良好	1/4	
	16	〃	〃	口16.6, 高2.7	良	青灰焼良好	〃	
	17	〃	土器溜まり	口15.9, 高2.0	普通	青灰焼堅緻	1/5	
	18	〃	土器溜まり下層	口15.6, 高2.4	〃	灰白焼良	2/5	内底ヘラ記号「Ⅰ」
	19	〃	土器溜まり	口15.9, 高1.8	〃	灰白焼堅緻	1/5	
	20	須恵盤B	土器溜まり下層	口21.9, 高3.5 台17.8, 台高0.6	〃	暗灰焼堅緻	3/4	外底ヘラ記号「Ⅰ」
	21	〃	〃	口19.9, 高3.85 台16.0, 台高0.5	〃	灰白焼不良	2/3	
	22	須恵埦A	土器溜まり	口12.5, 高3.35 底5.4	〃	灰色焼堅緻	4/5	
	23	須恵埦B	土器溜まり下層	台6.6, 台高0.7	〃	青灰焼良好	1/6	
	24	〃	土器溜まり	口7.6, 高0.35	〃	灰色焼堅緻	1/3	
	25	須恵小瓶	土器溜まり下層	口4.7, 高10.4 頸3.8, 頸長3.1 胴10.0, 底5.8	〃	青灰焼堅緻	略完	
	26	須恵三耳瓶	土器溜まり	口19.3, 高12.0	〃	灰色焼堅緻	1/6	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1号土器溜まり	27	須恵水瓶	土器溜まり	口4.0, 頸長5.9	普通	暗灰焼堅緻	口頸片	
	28	須恵中甕	〃	底12.0	〃	灰褐焼堅緻	底部片	外,削り後He叩き、内SD当て、外底中央にロクロ軸重
	29	赤彩坏蓋	土器溜まり下層	口17.6	〃	10YR8/2通	1/3	
	30	外赤内黒高盤	土器溜まり	脚基6.0	〃	10YR8/4通	脚1/2	
	31	外赤内黒埦B	土器溜まり下層	口17.4, 高5.9 台10.4, 台高1.2	〃	10YR8/3通	2/3	
	32	〃	土器溜まり	口17.4	〃	〃	1/10	
	33	外赤内黒埦	〃	口16.7	〃	〃	1/7	
	34	外赤内黒埦B	土器溜まり下層	台7.8, 台高0.6	〃	7.5YR8/3通	1/3	
	35	土師埦A	土器溜まり	口13.2, 高4.2 底6.4	〃	7.5YR8/6通	〃	
	36	土師Ⅲ A	土器溜まり下層	口13.0, 高3.2 底6.2	砂多	7.5YR8/4通	〃	
	37	土師埦B	土器溜まり	台7.0, 台高0.7	〃	7.5YR7/6通	1/2	
	38	土師長頸瓶	土器溜まりウ14下層	口11.3	普通	外10YR8/3 内2.5YR5/1通	口頸片	
	39	土師小釜	土器溜まり	口12.8, 頸11.4 胴12.8	〃	7.5YR8/4通	1/4	
	40	〃	土器溜まり下層	口11.8, 頸10.6	大粒砂含	5YR7/4通	1/10	
	41	〃	土器溜まり	口16.4, 頸15.4 胴17.4	普通	5YR6/4通	1/6	
	42	土師釜	土器溜まり下層	口22.0, 頸19.6	粗砂含	5YR7/6通	1/20	
	43	〃	土器溜まり	口20.6, 頸17.7	〃	7.5YR8/4通	1/15	
	44	〃	〃	口21.5, 頸19.6	粗砂多	5YR7/6通	〃	
	45	〃	〃	口19.2, 頸17.0 胴20.0	粗砂含	10YR8/3通	1/5	外He叩き、内Da当て
	46	〃	〃	口19.6, 頸17.2 胴20.0	〃	5YR7/6通	1/4	外Ha叩き、内Da当て
	47	〃	〃	口24.2, 頸21.8	粗砂多	〃	1/20	
	48	〃	〃	口21.5, 頸19.2	普通	7.5YR7/4良	1/10	
	49	〃	〃	口20.4, 頸17.8	粗砂多	5YR7/4通	〃	
	50	〃	土器溜まり下層	口21.2, 頸19.0	粗砂含	5YR7/6通	1/15	
	51	〃	土器溜まり	口19.3, 頸17.0	普通	〃	口頸片	
	52	〃	〃	口23.0, 頸20.7 胴22.8	大粒砂含	7.5YR8/3通	1/3	
	53	〃	〃	口21.6, 頸19.8 胴21.0	砂多	10YR8/2通	1/15	
	54	土師鍋	土器溜まり下層	口43.6, 頸40.4	大粒砂含	7.5YR7/6通	〃	
	55	〃	土器溜まり	口35.5, 頸30.6	〃	7.5YR8/3通	1/20	
	56	〃	〃	口37.2, 頸34.5	砂多	10YR8/2良	〃	
	57	〃	〃	口40.2, 頸38.4	〃	10YR8/4通	1/15	外He叩き、内He当て
	58	〃	土器溜まり下層	口42.4, 高11.3 頸40.0	普通	10YR8/4通	1/4	容量15.987ℓ
	59	土師甑	土器溜まり	口30.4	大粒砂含	10YR8/2通	1/25	
	60	〃	〃	口31.2	〃	10YR7/4通	1/20	
	61	〃	〃	口28.4, 高32.2 底16.8	〃	10YR8/4通	1/5	外He叩き 容量28.685ℓ

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1号土器溜まり	62	土師甕	土器溜まり	口30.3, 高33.1 底21.6	大粒 砂含	10YR5/4 5YR8/4通	1/5	外He叩き、内？ 容量35.414ℓ
	63	〃	〃	口31.3	〃	10YR8/4通	1/30	
	64	〃	〃	底18.0	粗砂含	10YR7/4良	1/20	
	65	土師円筒形 土器	〃	口13.2	大粒 砂含	7.5YR8/4良	1/30	
	66	〃	〃	口13.0	大粒 砂多	10YR8/3通	1/20	
	67	土師円筒形 土器 (ジョイント型)	土器溜まり 下層＋ミゾ35	底12.0, 胴15.0 ジョイント10.5	大粒 砂含	10YR7/3通	1/10	
	68	土師円筒形 土器	土器溜まり 下層	底12.3	砂多	10YR8/3通	1/6	粘土紐積み時の 指頭痕残す 外面調整はラセン状カキ目
	69	土師匣鉢状 土器	土器溜まり 一括	口20.0	粗砂含	5YR7/6通	1/15	
	70	土師獄足鉢	土器溜まり	足高15.7	砂多	10YR8/2通	脚片	
	71	土師棒状脚	〃	——	〃	7.5YR8/4通	足部 のみ	大型棒状脚
	72	土師方形板	土器溜まり ウ14中層	11.3×11.5, 厚1.0	〃	7.5YR7/6良	4/7	
	73	土師馬形	土器溜まり	——	普通	10YR8/3通	足部片	
	74	土師分銅	〃	上2.4, 下3.9 高4.7, 孔0.7～0.5	〃	〃	完形	黒斑あり 重量72.5g
斜面下方灰原	1	赤彩塊	ウ19下層黒灰 A灰	口13.0, 高3.6 底7.2	〃	5YR6/6良	2/3	
	2	〃	オ13	口12.6, 高3.8 底8.4	〃	5YR7/6良	1/6	
	3	〃	エ12下層下灰	底5.6	〃	5YR7/4良	〃	
	4	〃	エ10下層下灰	口12.6, 高3.4 底6.8	〃	5YR6/6通	2/3	底黒斑
	5	〃	ウ13中層	口12.8, 高4.2 底6.5	〃	5YR7/6通	1/8	
	6	〃	ウ10下層下灰 集中	口12.6, 高3.5 底6.0	〃	10YR8/3通	2/3	底ヘラ記号「I」
	7	〃	オ12下層下灰	口12.7, 高4.0 底5.8	〃	5YR7/6通	1/2	
	8	〃	エ11下層下灰	底7.0	〃	10YR8/3通	1/3	
	9	〃	エ5下層	口13.6, 高4.5 底7.2	〃	5YR7/6通	1/6	
	10	〃	エ11下層下灰 集中	口12.2, 高4.4 底5.5	〃	〃	1/4	体部外ロクロ、 内ミガキ
	11	〃	イ12中層	底8.0	〃	5YR7/6良	1/5	
	12	〃	ウ11下層下灰 集中	底5.5	〃	10YR8/3通	1/3	
	13	〃	オ13下灰	口12.4, 高3.1 底6.5	〃	5YR7/6通	〃	
	14	〃	エ11下層下灰 集中	口12.1, 高3.1 底6.2	〃	7.5YR8/4通	3/4	
	15	〃	エ10下層下灰 集中区	口11.7, 高3.2 底6.6	〃	5YR7/8通	1/5	
	16	〃	エ10下層下灰	底5.8	〃	7.5YR8/4通	3/5	外底黒斑
	17	〃	エ11下層下灰 集中	口12.3, 高2.9 底6.4	〃	7.5YR8/6通	1/2	
	18	〃	ウ10、ウ11下層 下灰集中	口12.7, 高2.8 底8.8	〃	5YR6/8通	3/4	
	19	〃	ウ11下層下灰 集中	口11.6, 高2.4 底6.3	〃	10YR8/4通	2/3	
	20	〃	P536	口11.7, 高4.1 底6.4	〃	10YR8/3通	1/5	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
斜面下方灰原	21	赤彩塊	エ10下層下灰 集中	口11.0, 高3.3 底7.0	普通	7.5YR8/4通	2/3	
	22	〃	エ11下層下灰	口12.8, 高3.0 底8.0	〃	10YR8/4通	1/5	底糸切り痕
	23	〃	エ11下層下灰 集中	口9.8, 高4.0 底5.5	〃	7.5YR8/4通	1/6	
	24	〃	ウ11下層下灰 集中	口16.0, 高4.3 底7.5	〃	5YR7/6通	1/3	
	25	〃	エ11下層下灰 集中	口16.2, 高5.0 底7.8	〃	7.5YR8/4通	2/3	
	26	〃	ウ12下層下灰	口17.0, 高6.0 底8.0	〃	〃	1/6	
	27	〃	エ12下層下灰	口15.5	〃	5YR7/6通	1/7	
	28	赤彩鉢？	エ14下層下灰	口20.9	〃	7.5YR8/4通	1/20	
	29	赤彩坏B蓋大	ウ11中層	口17.8	〃	10YR8/4通	〃	
	30	〃	ウ9中層	口17.9	〃	5YR8/4通	1/10	
	31	〃	ア1014灰暗褐	つまみ径3.0, つまみ高1.6	〃	7.5YR8/3通	1/6	
	32	赤彩坏B蓋小	下灰	口13.4, 高2.55 つまみ径2.6,つまみ高0.85	〃	10YR7/4通	完形	
	33	〃	オ13下層下灰	口13.0, 高2.5 つまみ径2.5, つまみ高0.8	〃	7.5YR8/3通	4/5	
	34	〃	エ11下層下灰 集中	口12.2, 高2.35 つまみ径2.3, つまみ高0.8	〃	10YR8/3通	略完	
	35	赤彩坏B身大	エ13下層下灰	口15.5	〃	5YR7/6通	1/10	
	36	赤彩坏B身小	エ10下層下灰 集中	——	〃	10YR8/2通	1/3	
	37	赤彩盤A	イ9	口16.8, 高1.9	〃	7.5YR8/4通	1/5	
	38	〃	ウ11下層下灰 集中	——	〃	〃	1/4	
	39	〃	エ11下層下灰	口14.8, 高2.45	〃	〃	1/3	
	40	赤彩盤B	ウ10下層下灰 集中	台17.6, 台高0.7	〃	〃	1/20	
	41	赤彩小型鉢	ウ11下層下灰 集中	口13.0, 高3.1	〃	5YR7/6通	1/6	
	42	〃	〃	——	〃	7.5YR8/4通	2/3	
	43	赤彩高盤	エ11・ウ12下層 下灰集中	口18.2, 高12.6 基部4.5, 脚10.4 脚高10.0	〃	〃	〃	
	44	〃	オ12下層下灰	脚基5.6	〃	2.5YR7/6通	1/20	
	45	土師小壺	ウ11下層集中区	口5.4, 高7.3 頸5.9, 胴10.6 底5.4	大粒 砂含	7.5YR8/4通	略完	容量0.508ℓ
	46	土師小釜	イ16下層	口12.6, 頸11.4 胴12.5	粗砂多	10YR8/3通	1/6	
	47	〃	ウ10中層	口13.4, 頸12.4	普通	10YR8/3良	1/20	
	48	〃	ウ11下層下灰	口11.2, 頸11.8 胴12.0	大粒 砂含	5YR6/6通	1/5	
	49	〃	ア10暗褐土	口13.8, 頸13.2	粗砂含	10YR8/3通	1/20	口縁に黒斑
	50	〃	エ11下層下灰	口13.8, 頸12.4	粗砂多	5YR7/4通	1/30	
	51	土師鍋	エ11下層下灰 集中	口43.6, 頸39.6	大粒 砂多	7.5YR8/4通	1/15	
	52	〃	ウ9下層下灰 (A灰)	口35.0, 頸32.0	大粒 砂含	5YR8/4良	1/20	
	53	〃	エ11下層下灰	口44.0, 頸39.2	粗砂含	7.5YR8/4通	〃	
	54	〃	オ14中層・下層 灰	口39.2, 頸36.4	大粒 砂含	〃	1/30	
	55	〃	〃	口39.1, 頸37.4	〃	5YR6/6～ 7.5YR8/3通	1/20	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
斜面下方灰原	56	土師鍋	エ11下層下灰集中	口140.1, 頸37.8	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/20	
	57	〃	エ10下層下灰	口142.5, 頸39.2	〃	10YR8/4通	1/30	
	58	〃	イ8上層	口133.4, 高11.8 頸29.6	大粒砂多	5YR7/6通	1/3	容量10.425ℓ
	59	〃	ウ11下層下灰集中	口131.8, 頸28.6	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/30	
	60	〃	エ11下層下灰	口139.5, 頸35.2	〃	10YR8/3通	口頸片	
	61	土師甑	下層下灰	——	〃	7.5YR8/3通	1/8	内面上位黒斑、外Ha叩き後カキ目
	62	〃	エ14下層下灰	口126.0	大粒砂含・砂多	7.5YR7/3通	口頸片	
	63	〃	オ13下層下灰	口129.6	粗砂多	5YR7/6通	1/20	
	64	〃	ウ13中層	口128.6	〃	10YR8/3通	口頸片	
	65	〃	ウ11下層下灰集中	口129.6	大粒砂多	7.5YR8/3通	〃	
	66	〃	エ10下層下灰集中区	底15.4	〃	10YR8/3通	1/20	
	67	〃	オ16中層	底24.4	〃	10YR8/2通	底片	
	68	〃	ウ9下層暗褐	底20.4	粗砂含	10YR8/3良	〃	
	69	〃	ウ16中層	底16.7	大粒砂多	10YR8/4通	〃	
	70	土師羽釜	ア811窯灰	口124.8	大粒砂含	〃	1/30	
	71	〃	ウ10下層黒灰	羽28.6	普通	〃	羽部片	
	72	〃	ウ11下層集中	羽27.0	大粒砂含	〃	〃	
	73	〃	ウ14中層	羽23.3	粗砂含	10YR8/3通	〃	
	74	土師台付鉢	ウ11下層下灰	口134.4, 台基23.5 鉢高6.3	大粒砂含	10YR8/2通	1/16	容量6.235ℓ
	75	〃	エ10下層下灰	台24.0, 台高6.9	〃	7.5YR8/4通	脚完形	
	76	〃	ウ13中層	台18.2, 台基15.1 台高5.4	粗砂含	2.5Y8/4通	脚のみ1/4	
	77	〃	イ9灰	台17.4, 台高4.0	粗砂多	10YR8/4通	台完形	三方透かし
	78	土師獣足鉢	ウ14下層黒	足端径4.4×3.9 足径3.3×3.7	粗砂含	10YR8/3通	足破片	
	79	〃	エ10下層	——	普通	〃	〃	
	80	〃	エ11下層下灰下層黒	足高12.4 足端径5.2×5.8 足径3.7×2.8	粗砂含	7.5YR7/6通	〃	足端に黒斑
	81	土師獣足鉢	下灰	足端径5.3×4.5 足径4.2×2.8	普通	10YR8/4通	〃	
	82	〃	エ17中層	足高6.2, 足径4.1×3.3	砂多	10YR7/3良	〃	
	83	土師カマド	エ11下層下灰集中	口42.5	粗砂多	10YR8/4通	口縁片	外Ha叩き
	84	〃	イ8灰	厚3.4	粗砂含	7.5YR8/6通	炊口付近破片	外Ha叩き、内Da当て
	85	土師円筒形土器	オ12下層下灰	口110.6, 肩14.0	大粒砂多	7.5YR7/6通	1/30	
	86	〃	エ11下層下灰	口14.7	粗砂含	10YR7/3通	口縁片	
	87	〃	エ12下層下灰	底14.0	大粒砂含	10YR8/4通	1/20	
	88	〃 (ジョイント型)	エ11下層下灰集中	ジョイント部 長12.5 無9.5, 底13.6	〃	7.5YR7/4通	1/5	底部付近に穿孔し、ジョイント、ジョイント部は楕円形呈し、タテ刷毛調整
	89	土師馬形	ウ15下層下灰	——	普通	5YR7/6通	頭部片	
	90	〃	オ17上層	——	〃	5YR7/6良	胴部片	

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
斜面下方灰原	91	土師馬形	エ9表土	——	普通	7.5YR7/6通	尾部破片	
	92	〃	オ14下層黒	——	〃	2.5YR6/6良	足部片	
	93	〃	カ15下層下灰	——	〃	7.5YR7/6良	〃	
	94	〃	エ11下層黒	——	〃	7.5YR8/6通	〃	
	95	〃	オ13下層	——	〃	10YR8/3通	〃	
	96	〃	エ15下層下灰	——	〃	10YR5/2通	〃	
	97	〃	エ9下層黒灰(A灰)	——	〃	10YR3/1通	〃	
	98	〃	ウ12下層黒灰	——	〃	10YR8/4通	〃	
	99	〃	オ13下層	——	〃	7.5YR7/4良	〃	
	100	土師支脚	エ10下層下灰集中	上3.3, 下8.3 高14.3	〃	10YR8/4通	1/3	外縦ヘラナデ
	101	土師土錘	ア8灰	長6.55, 幅4.05 孔1.7	〃	〃	1/2	重量54.2g
	102	〃	エ12下層下灰	長7.05, 幅4.0 孔1.6	〃	10YR8/3通	7/8	黒斑あり 重量92.5g
	103	〃	イ11表土	長6.8, 幅3.9 孔1.45	砂多	10YR7/2通	〃	重量83.5g
	104	〃	下灰	長6.45, 幅4.25 孔1.45	普通	7.5YR8/4通	3/4	重量75.1g
	105	〃	イ7灰	長6.9, 幅4.15 孔1.4	〃	7.5YR8/3通	4/5	円形黒斑 重量69.6g
	106	〃	ウ13中層	長6.1, 幅4.0 孔1.65	〃	10YR8/3通	2/3	一部黒斑 重量57.9g
	107	〃	イ10表土	長6.4, 幅4.05 孔1.4	〃	7.5YR6/2通	完形	重量83.5g
	108	〃	ウ8下層	長6.75, 幅3.7 孔1.6	〃	7.5YR8/4通	4/5	半面黒斑 重量73.5g
	109	〃	ア14灰	長6.3, 幅4.2 孔1.2	〃	10YR8/3通	7/8	1/4黒斑 重量94.7g
	110	〃	ウ11中層	長6.5, 幅3.8 孔1.25	〃	10YR8/3 5YR7/6通	〃	重量82.5g
	111	〃	下灰	長6.4, 幅3.7 孔1.3	〃	10YR8/3通	完形	1/6黒斑
	112	〃	下灰	長5.6, 幅3.6 孔1.2	〃	〃	9/10	1/5黒斑 重量57.4g
	113	〃	オ11下層下灰	長6.0, 幅3.75 孔1.3	〃	10YR8/2通	7/8	重量53.9g
	114	〃	イ17灰	長6.1, 幅3.8 孔1.3	〃	10YR8/3通	〃	一部黒斑 重量59.0g
	115	〃	エ6中層	長5.4, 幅3.8 孔1.6	〃	10YR7/3通	〃	重量69.9g
	116	〃	イ11中層	長6.4, 幅3.5 孔1.3	〃	10YR8/2良	9/10	重量64.3g
	117	〃	ウ8下層	長6.35, 幅3.3 孔1.2	砂多	10YR7/6通	完形	一部黒斑 重量57.4g
	118	〃	エ11下層下灰	長6.1, 幅3.55 孔1.1	普通	10YR8/3 5YR7/6通	〃	一部黒斑 重量72.6g
	119	〃	ウ8下層	長5.9, 幅3.2 孔1.1	〃	10YR8/4通	〃	重量59.0g
	120	〃	イ8灰	長6.65, 幅3.6 孔1.4	〃	10YR8/3通	7/8	重量60.9g
	121	〃	下灰	長6.55, 幅3.55 孔1.4	砂多	10YR8/4 2.5YR7/4通	9/10	重量61.1g
	122	〃	エ10表土	長7.1, 幅3.0 孔1.5	普通	10YR8/4通	7/8	一部黒斑 重量42.3g
	123	〃	盛土Bトレ	長6.5, 幅3.6 孔1.4	〃	〃	完形	重量76.2g

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
斜面下方灰原	124	土師土錘	イ14灰	長4.6, 幅2.55 孔0.9	普通	10YR8/2通	完形	重量23.3g
	125	〃	ミゾ35	長4.75, 幅2.6 孔0.75	〃	5YR6/8通	9/10	重量26.8g (ミゾ35)
	126	〃	オ11下層下灰	長4.0, 幅2.1 孔0.8	〃	10YR8/2通	完形	重量12.9g
	127	〃	エ12下層下灰	長3.7, 幅2.1 孔0.65	〃	〃	〃	重量14.1g
	128	〃	ウ10中層	長4.5, 幅1.7 孔0.45	〃	5YR6/8通	〃	重量9.8g
	129	〃	表土	長4.3, 幅2.0 孔0.75	〃	10YR8/3通	〃	重量14.4g
	130	〃	エ14下層下灰	長4.2, 幅2.2 孔0.7	〃	5YR7/6通	4/5	重量17.4g
	131	〃	ウ8下層	長4.0, 幅2.45 孔0.95	〃	10YR8/1通	9/10	重量19.6g
	132	〃	イ15下層灰	長4.0, 幅1.95 孔0.7	〃	7.5YR7/6通	完形	半面黒斑 重量12.5g
	133	〃	ウ11下層下灰	長3.8, 幅1.95 孔0.9	〃	〃	9/10	重量12.3g
	134	〃	ウ10中層	長3.05, 幅1.9 孔0.6	〃	7.5YR7/1通	〃	重量10.4g
	135	〃	下灰	長2.5, 幅1.0 孔0.4	〃	10YR8/2通	7/8	重量1.9g

	番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
斜面下方灰原	136	土師分銅	イ11中層	下2.85～3.4	大粒砂含	10YR8/2通	略完	
	137	〃	エ10下層下灰	上1.0, 底3.1 高3.3, 孔0.4～0.3	普通	5YR7/6良	完形	重量24.8g
	138	土師円盤	〃	径6.0, 厚0.7	〃	10YR8/3通	1/4	外面He押き痕 内面Da当て具痕 片面黒斑
	139	〃	下灰	径3.7, 厚0.8 孔1.5×0.5	〃	7.5YR8/4通	完形	一部黒斑
	140	〃	〃	径4.0, 厚0.6 孔0.8	良	10YR8/2通	2/5	内シボリきりの 粘土ちぢみ痕
	141	〃	エ9最下灰層	径3.4, 厚0.95 孔1.4×0.4	普通	2.5YR7/6通	完形	
	142	〃	エ19下層下灰	径2.95, 厚0.6 孔0.3×1.2	〃	7.5YR8/2通	〃	片面黒斑
	143	〃	エ9下層下灰	径3.2, 厚0.8 孔1.4×0.2	〃	10YR8/4通	〃	〃
	144	〃	〃	径2.9, 厚0.8 孔0.9×0.2	〃	10YR8/3通	〃	
	145	〃	ウ10中層	径2.9, 厚0.6 孔0.5～0.65	〃	7.5YR8/4通	〃	内シボリきりの 粘土ちぢみ痕
	146	石製分銅	エ11下層下灰	上幅2.4×1.2 下幅3.7×2.5 高5.8, 孔0.6	石		〃	

第３節　９世紀後葉～10世紀前半の製陶関連遺構と遺物

第１項　製陶関連の遺構

第２節で述べたように、８世紀中頃～９世紀中頃の製陶関連遺構は、９～16Grを中心にしてＦ地区のほぼ全域に分布していたのに対し、当期の製陶関連遺構は、Ｆ地区の南東側に偏って存在する（18～22Gr）。須恵器窯や土師器焼成坑などの焼成遺構は確認されず、７号窯灰原、８号窯灰原として提示したものも須恵器と土師器が混在し、単独の焼成遺構に伴う純粋な灰原資料ではない。ただ、遺物の時期はまとまっており、短期間に廃棄されたものと言える。須恵器や土師器の中に使用痕跡のあるものが少なからず確認できており、生活に伴う廃棄品も同様に廃棄されている。ただ、焼け歪んで薄く剥離したり、焼け歪み、窯壁や焼台など焼成廃棄品がほとんど占めており、須恵器・土師器焼成に伴う製陶関連遺構の廃棄資料であることは間違いない。

遺構としては、土坑が多数確認されている。小型廃棄土坑的なものも存在するが、その多くは大型の粘土採掘坑で、斜面下方の急激に落ち込んだ箇所に密に掘られている。その斜面上方には斜面に直交する形で溝が数条掘られ、掘立柱建物跡が１棟検出される。以下に、各遺構について述べる。

１．土坑

土坑のうち、粘土採掘坑を除いたものについてのみ述べる。当期に位置付けられる土坑は、４号土坑と５号土坑、６号土坑、８号土坑、９号土坑、10号土坑、11号土坑の７基である。

《４号土坑と６号土坑》　両土坑は斜面上方、８号窯灰原の分布する区域に存在する。土坑の立ち上がりが不明瞭な浅い落ち込み状を呈し、８号窯灰原に伴う浅いくぼみ状の土器溜まりにあたる。

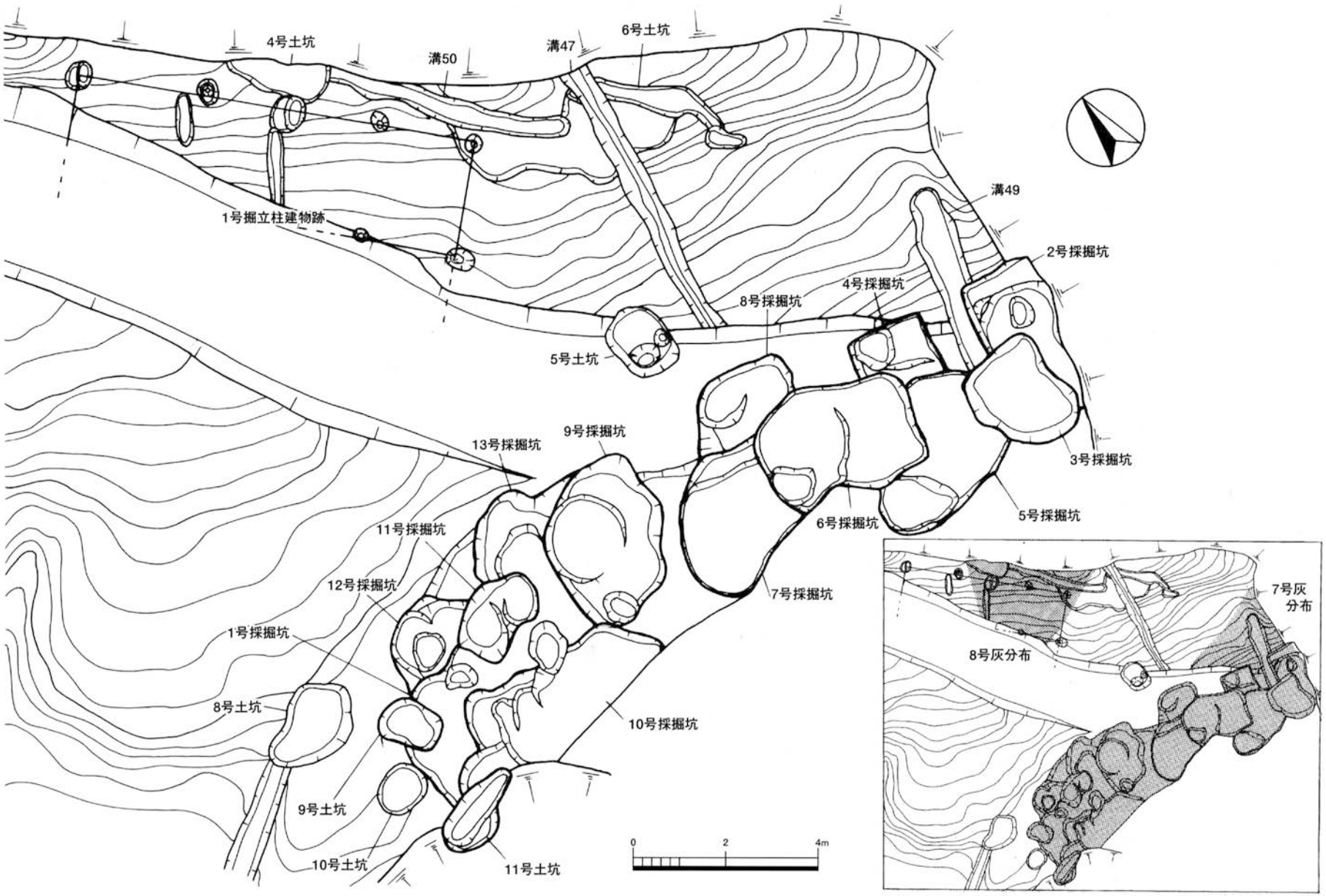
《５号土坑》　斜面中腹に位置し、壁の直立する深い井戸状を呈す。160×120cmの隅丸方形プランのもので、深さ135cmを測る。土坑底面はフラットだが、南側にくぼみがある。底面が白色粘土層に達しているため、粘土採掘の目的で掘られた可能性もあるが、他の粘土採掘坑とは形態が異なっており、水溜めないしは粘土溜め土坑が妥当ではないかと考える。土坑内覆土は最下層に遺物をさほど含まないが、下層から中層にかけては須恵器を中心に極めて多量に混在している。須恵器は食膳具が主体で、破片数換算では食膳具90%、貯蔵具１%、焼台10%、焼台とともに癒着した窯床片や窯壁片などが遺物箱で３箱ほど出土している。須恵器食膳具は細片が多く、貯蔵具は完形や半完形のもので構成される。土師器も完形や半完形が多く、煮炊具類の胴部破片などは少ない。概して、須恵器貯蔵具類と土師器煮炊具類は下層に、須恵器窯廃棄土は中層にあり、廃棄段階が分けられる可能性をもつ。下層の完形、半完形には使用痕跡の付くものが定量確認され、また、双耳瓶の完形品なども意識的に廃棄されている。

《８号・９号・10号土坑》　３基の土坑は、斜面下方付近、粘土採掘坑が密集する箇所の西側に隣接して掘り込まれる土坑である。粘土採掘坑のような深い掘り込みはなく、深さ40cmで、白色粘土層には達していない。土坑形態は、８号土坑のみもう一つの土坑との重複で不整形を呈すが、いずれも隅丸方形の比較的壁のしっかりと立ち上がる形態をもつ。規模は130×100cm前後で、焼土塊や粘土塊を多量混在する。形態が比較的５号土坑に近いが、目的は粘土採掘や水溜めではなかったであろう。粘土採掘坑に隣接することから粘土溜めの目的で掘られた可能性をもつ。埋土には５号土坑同様に、須恵器が中心に廃棄されているが、５号土坑下層のような一括廃棄品が多く、須恵器窯焼成に伴う廃棄層は確認されない。須恵器はⅥ3期を中心に、双耳瓶や甕などの完形や半完形が多く、５号土坑下層出土と共通する。なお、土坑番号は付していないが、同時期に位置付けられる土器を混在させる土坑がある。９号土坑の東側、12号粘土採掘坑とされている箇所で、下に粘土採掘坑が掘られるが、その上に径100cm程の土坑が掘られている（12号粘土採掘坑上層とする）。同様の性格をもつものと理解する。

《11号土坑》　斜面下方末端に位置する長楕円形土坑で、70×200cmを測る。70～90cmの深さをもつ。長楕円形にこの部分のみ掘り込まれていたため、粘土採掘坑内にあっても、意識的に分けたが、包括されるものの可能性をもつ。出土土器は上記の５・８～10号土坑とは異なり、須恵器食膳具や土師器煮炊具などを含む。

２．粘土採掘坑

Ｆ地区の南側斜面下方には、幅17ｍにわたって深い落ち込みが確認されるが、その部分に厚く灰層が流れ込ん



第205図　F区9世紀後葉～10世紀製陶関連工房遺構分布図（1/120）

で堆積している（７号窯灰原）。この落ち込みは13基の土坑が重複して掘り込まれたもので、ここに密集して掘り込まれた土坑群を粘土採掘坑と位置付けている。基本的には竪坑掘りで、土坑底面は白色粘土層まで達し、その部分でオーバーハングして横に掘り込んだり、局部的に掘り下げたりしている。白色粘土層は砂粒を多く含むものだが、他の粘土などと調合して陶土として使用したものだろう。粘土採掘坑は連続して掘り込まれるため、壁の立ち上がりや土坑ごとの重複関係は不明瞭なものが多く、ほぼ同時期に埋められたと考えられる。いずれの土坑出土土器もⅥ2期に位置付けられるもので、その上層に厚く堆積する７号窯灰原についてもⅥ2期に位置付けられる。13基の粘土採掘坑は、比較的短期間で掘り込まれ、採掘の目的が完了するとともに一気に埋め戻されたのだろう。粘土採掘坑のおおまかな特徴については上述したとおりだが、土坑形態から３種に大別できる。

《Ａ類》　山側の面を等高線に沿って直線的に掘り込むもので、幅２ｍ前後に方形にしっかり掘られるものである。２号・４号・８号が該当し、３基並ぶように掘られている。壁は直立して立ち、底面に浅い土坑がさらに掘り込まれる。３号粘土採掘坑も類似する形態であるが、やや斜面の下方に位置する。採掘坑内埋土は、上層から中層が地山の流れ込んだような褐色系の土層、下層が白色系砂質粘土である。土はいずれも締まりが強く、特に下層土は叩き締められたように硬化している。粘土採掘坑上層から中層では須恵器や土師器など破片を中心に出土するが、出土量は概して少なく、中下層ないしは土坑底面に多く捨てられている。破片は少なく、土師器煮炊具の完形ないしは半完形が数個体まとめて捨てられており、重ねたり、入れ子状にするなど、意識的な廃棄と言える。底抜けやヒビ、焼き弾けが目立ち、選別段階で不良品をまとめて捨てたものと思われる。使用痕跡のあるものも一部含まれており、工房から排出される生活不用品もともに廃棄されたのだろう。

《Ｂ類》　楕円形プランを基調とするもので、壁が直立ないしはオーバーハング気味となるのはＡ類と同様である。規模は２×３ｍ程度のものが多いが、２基の土坑が連続して掘られて不整形や楕円形土坑となっているものもあり、基本的には２ｍ弱の穴であったものと理解している。１号・５号・６号・９号・11号・12号・13号が該当する。採掘坑内埋土は、基本的にＡ類と同様で、中下層や土坑底面にまとまった土器の廃棄が確認される。土坑底面付近での廃棄が多いが、中層や下層で一括廃棄される場合もある。

《Ｃ類》　規模４～５ｍの大型楕円形ないしは不整形土坑で、比較的底面の平坦なものである。７号・10号が該当する。両採掘坑ともに、他の採掘坑に切られる前後関係が確認でき、一部10号採掘坑にはⅤ期に遡る須恵器が含まれている。採掘坑内埋土は、上記の特徴と大きくは変わらないが、10号採掘坑のみは、一部須恵器窯壁塊や須恵器片を多量混在する土層が入り込んでおり、特徴的である。

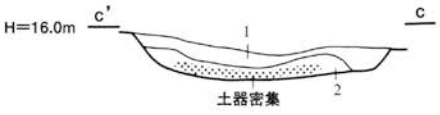
３．灰原

この地区からは７号窯灰原と８号窯灰原の２カ所、灰原の分布が確認されるが、上述したように、須恵器と土師器が混在する灰原であり、単独基の焼成遺構に伴う灰原ではない。ただ、時期は７号窯灰原がⅥ2期、８号窯灰原がⅥ3期と明確に分かれており、窯壁片や窯道具、焼き弾け品など須恵器・土師器焼成に伴う黒色灰層を含む廃棄土層と言える。

７号窯灰原は南東側の隅から粘土採掘坑群の存在する落ち込み部分にかけて厚く堆積する。粘土採掘坑群の地山系埋土が埋まった後、その直上に存在しており、灰原の廃棄及び埋没は短期間であったと言える。ただ、黒色灰層は２～３層に分層可能であり、短期間と言っても、廃棄は数回（段階）に及んだであろう。各灰層の広がりや灰層の土器構成など細かく検討していないが、須恵器と須恵器窯壁塊を主体的に混在させる土層（12層）や土師器や焼土塊を多量に混在する土層（27層）が確認できており、須恵器焼成に伴う廃棄層と土師器焼成に伴う廃棄層とが存在した可能性が高い。また、土坑などで確認できたような、須恵器双耳瓶や甕の使用痕跡をもつ完形、半完形、または土師器煮炊具類の使用痕をもつもの、須恵器食膳具でも墨書土器や使用痕をもつものなどが確認でき、工房などでの生活使用に伴う廃棄品も同時にこの中に捨てられている状況を確認できる。出土土器の内容は、土師器が過半数を占め、特に土師器煮炊具の割合が高い。破片数による割合は出していないが、須恵器の倍近い量を土師器が占めていると考えられる。

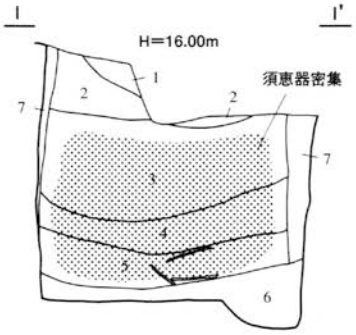
８号窯灰原はイ19Gr付近の斜面上方から27号土師器焼成坑に一部落ち込む形で広がるⅥ3期の灰原である。須恵器と土師器を混在し、匣鉢などの窯道具も含まれる。４号土坑、６号土坑のテラス及び溝50は、当灰原と同時

＜2号土坑＞



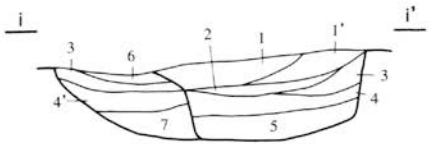
1層　黒褐色土(10YR3/2):炭化小塊多め、焼土小塊少なめ含有。
2層　黒褐色土(10YR2/3):褐色土塊(7.5YR4/6)多量混在。須恵器・土師器多量、焼土小塊・炭化小塊多め含有。

＜5号土坑＞



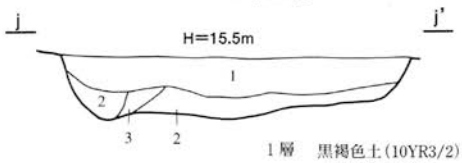
1層　黒褐色土(10YR3/2):窯壁塊多量含有。
2層　黒褐色土(10YR3/1):炭化塊・窯壁塊・黄褐色土塊多量含有。
3層　黒褐色土(2.5Y3/1)ベースににぶい黄褐色土塊(10YR5/4)混在土:窯壁大塊・須恵器・焼台等極多量、炭化塊多量、焼土小塊少量含有。しまりない土。須恵器窯破壊廃棄層。
4層　黒褐色土(10YR3/1):炭化塊極多量、にぶい黄褐色土塊(10YR4/4)・窯壁塊多量含有。しまりなし。
5層　黒褐色土(10YR3/1):炭化大塊極多量、須恵器多量、窯壁塊少量含有。
6層　黄灰色粘土(2.5Y6/1):炭化粒多め含有。窯壁塊少量含有。
7層　褐灰色砂質粘土(10YR6/1):締まり欠く。

＜8号土坑＞



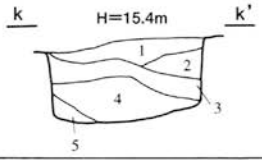
1層　黒褐色土(10YR3/2):土師器多量、炭化小塊多め、焼土小塊少量含有。
1'層　炭化小塊多量含有。
2層　暗赤褐色焼土(5YR3/6)ベースに灰黄褐色砂質土(10YR4/2)混在土層。非被熱層。
3層　にぶい黄褐色土(10YR4/3):浅黄色土塊(2.5Y7/3)多量混在。炭化塊少量含有。
4層　灰黄褐色土(10YR4/2):炭化塊多量、焼土小塊少量含有。
4'層　炭化塊の混在少なめ。
5層　暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2):灰白色土塊(2.5Y7/1)・焼土塊・炭化塊少量含有。
6層　灰黄褐色砂質土(10YR4/2):炭化小塊・焼土小塊多め含有。
7層　暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)ベースに灰白色土塊多量混在土:炭化小塊多め含有。

＜9号土坑＞



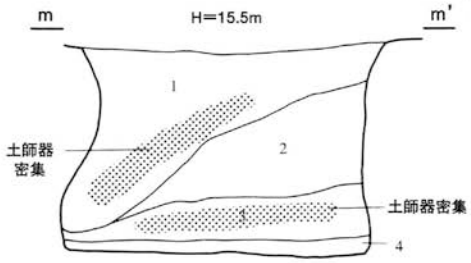
1層　黒褐色土(10YR3/2):土師器・炭化小塊多め、焼土小塊少量含有。
2層　灰黄褐色砂質土(10YR4/2):土師器多量、炭化塊多め、焼土小塊少量含有。
3層　灰黄褐色土(10YR5/2)と浅黄橙色土(10YR8/3)との混在土:炭化粒・焼土粒微量含有。

＜10号土坑＞



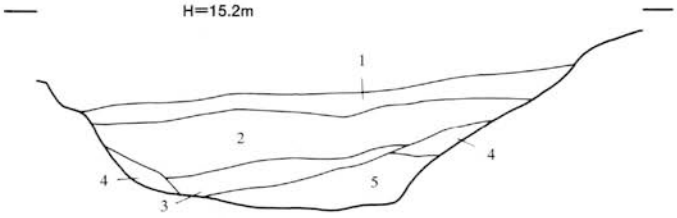
1層　灰黄褐色土(10YR4/2):土師器多量、炭化塊多め含有。
2層　黄褐色土(2.5Y5/3)と灰黄褐色土(10YR4/2)の混在土:炭化粒多め含有。
3層　にぶい黄色砂質土(2.5Y6/4)締まり強い。
4層　暗灰黄色土(2.5Y4/2):土師器・炭化塊多め含有。
5層　黄灰色砂質土(2.5Y5/1):炭化小塊少量含有。

＜4号粘土採掘土坑＞

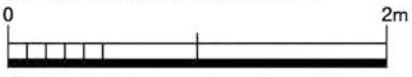


1層　褐色土(10YR4/4):炭化小塊・焼土小塊多め含有。下層で土師器多量含有。
2層　灰白色砂質粘土(5Y7/1)ベースに灰黄褐色土(10YR4/2)と黄灰色土(2.5Y6/1)混在土。
3層　灰白色砂質土(5Y7/1)ベースに黄灰色土(2.5Y6/1)混在土:土師器極多量含有。
4層　灰色砂質土(5Y6/1):黄灰色土(2.5Y6/1)混在。

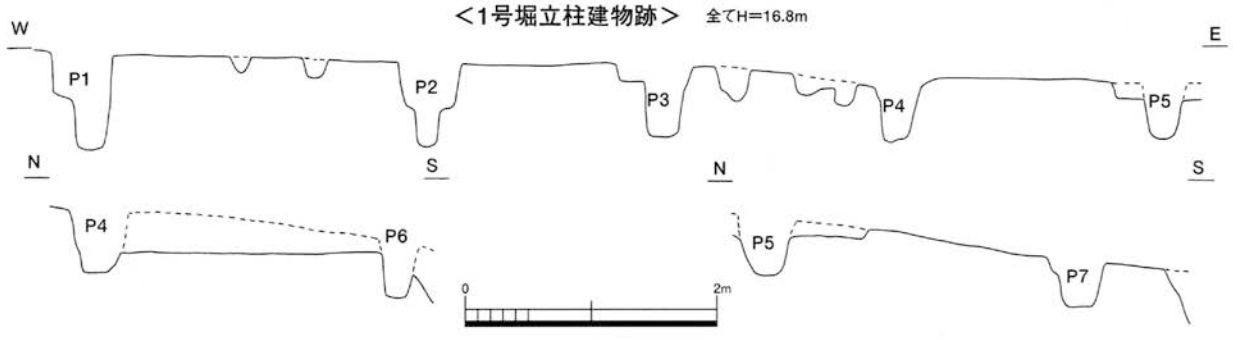
＜5号粘土採掘土坑＞



1層　灰白色砂質土(2.5Y7/1)と灰黄褐色土(10YR5/2)の混在土:炭化粒少量含有。締まり強い。
2層　褐灰色土(10YR4/1):灰白色砂質土塊多量、炭化塊多め含有。
3層　褐灰色土(10YR4/1)ベースに灰黄色砂質土(2.5Y6/2)の混在土:炭化小塊少量含有。
4層　褐灰色土(10YR5/1)と灰白色粘土(5Y7/1)の混在土:炭化小塊少量含有。
5層　浅黄灰色砂土(2.5Y7/4)と灰白色土(5Y7/1)の混在土:炭化粒微量含有。



＜1号堀立柱建物跡＞　全てH=16.8m



第206図　土坑・粘土採掘土坑・堀立柱建物跡土層断面図(上:1/40,下:1/60)

期の遺構であり、関連するものと理解される。灰原というよりも土器溜まりに近いものだろう。

4．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は1棟のみ斜面上方で確認されている。山側が崖によって、谷側が撹乱溝によって破壊されており、1本の柱穴列しか確認できていない。柱穴列は斜面等高線に沿って配置しており、斜面下方側で並ぶようなピットが確認できるため、建物は柱穴列から谷側へと伸びるものと理解しているが、27号土師器焼成坑の存在を考えれば、山側へ伸びる可能性もある。ただ、柱穴列の掘り方や柱痕はしっかりとして深く、これだけの斜面であれば、通常はこちら側が山側の柱穴列と言える。建物の主軸はN-45°-Wで、桁行は4間（900cm）の規模をもつ。梁行1間で柱が並ぶため、梁間1間程度の作業小屋の可能性もあるが、総柱建物も可能性があろう。柱穴内遺物からⅥ2期と判断でき、斜面下方に存在する粘土採掘坑群に伴う工房関連の建物と予想する。柱穴掘り方は50cm前後、柱痕をもち、深さは40～70cmを測る。

5．溝

溝は、斜面等高線に沿って走る溝50と斜面に直交して真っすぐ伸びる溝47・溝49がある。

溝50はⅥ3期の土器を多く出土する溝であるが、27号土師器焼成坑の雨水排水溝の可能性をもつ。溝の幅は45～50cmで、深さ15cmを測る。溝の覆土は焼土小塊や炭化塊を多く含む暗褐色土で、半完形の須恵器・土師器埦類が多く出土している。

溝47・溝49は出土土器が少ないが、Ⅵ2期に位置付けられ、斜面下方に存在する粘土採掘坑群及び掘立柱建物跡などの工房に関連する溝と考えている。溝47は幅50～60cm、深さ30～35cmで、断面「V」字形のしっかりとした掘り込みをもつ。溝49は幅80～90cm、深さ15cmの幅広溝で、浅い谷筋に掘り込まれ、通路的な機能が予想される。

第2項　製陶関連遺構から出土した遺物

前項で述べたように、F地区の南東区域からはⅥ2期からⅥ3期にかけての須恵器、土師器が出土している。出土量は膨大で、特に粘土採掘坑群とその上層に堆積した7号窯灰原からが多い。以下に、器種構成と各遺構より出土した土器の概要を述べるが、Ⅵ2期とⅥ3期に時期が分けられ、比較的識別が容易であるため、以下の説明では、2時期に分けて提示する。

（1）器種構成について

当期の資料は遺構等の重複多く、遺構ごとに土器の帰属が明瞭とならない箇所もあるため、各遺構の土器の構成を述べることが不可能である。ただ、当期の土器はⅥ2期とⅥ3期の2時期におさまるものであり、比較的容易に時期振り分けが可能な土器構成をしているため、Ⅵ2期とⅥ3期に大きく分けた時期提示で土器の構成を述べることとする。なお、各遺構によって、偏った器種の土器がまとめて廃棄されたものもある。これについては、各遺構出土の土器の説明において触れることとする。

1．Ⅵ2期の土器構成

12号粘土採掘坑を除く11基の粘土採掘坑、5号土坑、10号土坑、11号土坑、そして7号窯灰原が当期に位置付けられる。また、遺物量は極めて少ないが、1号掘立柱建物跡と溝47・49も当期に位置付けられる。当期の土器資料は、遺構によって、須恵器食膳具を中心に大量廃棄するものや土師器煮炊具を中心に廃棄するものなどがあるが、合計した破片数量では、若干土師器が多い程度で、ほぼ同量で構成される。

須恵器では、食膳具84.7%、小型貯蔵具0.2%、貯蔵具15.1%の口縁部計測値をもつ。当期の須恵器窯灰原資料の数値では、食膳具90%という数値がこれまで提示されており、それから比べれば、食膳具率は低いが、完形の鉢Bや鉢Fが比較的多く出土したことに起因するだろう。誤差範囲と考えている。食膳具は坏B蓋身、坏E蓋身、坏A、小型坏、盤A、盤Bの坏型食膳具と、ⅢA、ⅢB、埦A、埦Bの瓷器系食膳具が確認される。坏型食膳具が85%近くを占め、まだ瓷器系食膳具は15%程度を占めるにすぎない。しかも、瓷器系食膳具の大半はⅢBであり、埦類は1～2%と極めて少ない。過半数を占める坏型食膳具の中心は坏Aで、6割近くを占め、盤Aの

9％とともに、無蓋坏型食膳具は68％の高い率を保つ。当期をもって、坏型食膳具はほぼ終焉し、Ⅵ3期に埦皿中心の組成へと転換を見せるが、坏Ａへの集約化は坏型器種の器種淘汰の最終局面という評価が可能である。小型貯蔵具では徳利型小瓶と小型壷の類のみだが、貯蔵具では多様な器種が確認される。鉢類では、槽型鉢とした鉢Ａ、くびれ鉢の鉢Ｂ、椀形鉢の鉢Ｃ、厚底鉢の鉢Ｆ、筒型鉢の鉢Ｇの５器種、壷類では、有蓋短頸壷の壷Ａ、肩衝壷の壷Ｅ、直口壷の壷Ｆの３器種、瓶類では、丸肩長頸瓶の瓶Ｂ、双耳で長胴瓶の瓶Ｄ、徳利型の瓶Ｅの３器種、甕類では中小型甕と大甕の２器種がある。鉢類では鉢Ｂが28％の高率を占め、鉢Ｆも10％の占有率をもつ。壷瓶類では瓶Ｄの20％、壷Ｆの９％は高いが、他の器種は量的に少ない。甕は中小型甕が12％と高く、大甕も４％を占める。鉢Ｂと瓶Ｄの卓越は当期の貯蔵具の特徴と言えるが、壷Ｆの量は意外に少なく、中型壷瓶類の主体が瓶Ｄに移っていることが読み取れる。その他、特殊器種として、管状土錘が12点、風字硯が１点出土する。須恵器窯道具の出土も多く、100点以上の壷瓶専用焼台が出土している。形態は体部直立の盤型を呈すＢ類が７割以上を占め、有台専用の焼台であるＣ類や丸底器種用のＤ類はそれぞれ１割と少ない。Ⅴ2期前後の様相からＣ・Ｄ類がかなり減少しており、有台器種や甕類の減少と平底化、そして平底壷・瓶類が増加したことを伺わせる。

土師器では、食膳具23.9％、煮炊具76.0％、特殊土器0.1％で構成される。８世紀後半から９世紀前葉の食膳具率13.2％に比べると倍増しており、内黒土師器食膳具生産の開始とともに、土師器食膳具生産が急増していったものと言える。ただ、依然として主体は煮炊具が占める状況にあり、土師器において煮炊具生産が重要な部分を占めていたことがわかる。食膳具では、一部黒色しない土師器（無垢土師器）が確認されるが、当期は定量生産の段階にはない。内黒土師器でほぼ占められ、外面赤彩を基本とする。器種では埦Ａ、埦Ｂ、皿Ａ、皿Ｂ、鉢状の大型埦、小型埦があり、皿Ｂが49％の高率を占める。埦類では埦Ａが32％と高く、埦Ｂは17％、埦Ｂの半数を大法量が占める。皿Ｂが高い率をもつのは、同時期の須恵器埦皿類と同様であるが、須恵器ではほとんど埦類が確認できなかったのに対し、内黒土師器では埦類が５割を占める。須恵器とは器形も若干異なっており、埦皿導入の様相にはズレがある。煮炊具では、小釜、釜、鍋、甑の通常の器種が確認でき、うち小釜が60％を占める。釜はその半分以下、鍋にいたっては７％を占める程度である。８世紀後半から９世紀前葉にわたって均衡を保っていた小釜、釜、鍋の煮炊具３器種構成が崩壊したものであり、大型煮炊具から小型煮炊具へと言う流れが読める。食膳具の増加とあわせ、大型器種の生産は低下する様相にあったと言えよう。小釜の増産に伴い、法量のばらつきが目立ち始め、大きくは大・小、細かく見れば４法量程度に分かれてくる。小釜の急増は、煮炊き形態の変化に対応した可能性もあるが、当期は金属器普及の可能性もあるため、土製煮炊具だけで語ることは難しい。また、煮炊具とは考え難い法量の小釜の存在もあり、増加は異なる用途で使われた可能性を示唆する。これ以外の特殊容器では、羽釜が1.4％と定量確認され、台付鉢と円筒形土器が極少量出土している。また、土製品として、火舎の脚部と思われる獣足片１点、土製支脚１点、管状土錘80点、土馬足片２点が確認される。用途不名の土製板も９点確認され、これについては内外面に叩き痕やカキ目調整痕をもつ。須恵器甕胴部や土師器釜・甑の胴部を方形に切断したものと考えられ、焼成道具の一種の可能性をもつ。さらに、土師器焼成坑の焼成道具と予想している匣鉢形容器も定量確認できており、内黒土師器焼成の道具と考えている。

２．Ⅵ3期の土器構成

当期の遺構は、Ⅵ2期に比べて少なく、土器出土量も少ない。斜面上方と下方の２カ所に遺構の分布があり、上方では８号窯灰原を中心に、51溝と４号土坑が、下方では８・９号土坑と12号粘土採掘坑が存在する。Ⅵ2期が須恵器と土師器出土量拮抗した様相であったのに対し、当期は土師器主体の構成で、破片数総量比較で土師器が77％を占める。土師器食膳具の占める割合が増加したことが大きな要因と言える。

須恵器は食膳具が92％を占める。食膳具は坏盤類の坏型食膳具が激減し、２割強程度まで減る。Ⅵ2期に高い率を占めた皿Ｂも当期には７％弱まで低下し、主体は埦Ａ29％と埦Ｂ40％に移る。当期にどれだけの坏型食膳具生産が残るか、窯によっても異なるだろうが、坏型器種の生産はほぼ終焉期と言え、かろうじて坏Ａが少量継続される程度であろうと考える。当資料の坏型器種の比率はやや高いが、混在や転用置台の廃棄も十分に考えられる。貯蔵具は少なく、鉢Ｂと瓶Ｄ、中小型甕が定量存在する以外は、５％程度である。その他の器種では管状土錘が１点のみ。須恵器貯蔵具専用焼台は率として、Ⅵ2期のものから倍増する。形態は灰皿形のＡ類が大半を占

める。当期の焼台に目立つ形態である。

土師器は食膳具が53%の過半数を占め、煮炊具は47%となる。Ⅵ2期に食膳具の90%以上を占めた内黒土師器は2割以下となり、無垢土師器が82%を占める。内黒土師器では埦A、埦B、皿Bが5～6%で構成され、皿Bの卓越はなくなる。無垢土師器では埦Aが52%の過半数を占め、次いで、埦B19%、皿類は6%を占める程度。須恵器、土師器ともに埦類が食膳具の主体器種となる。須恵器では埦B主であったのに対し、無垢土師器は埦A主体で、作りなど異なる点がある。煮炊具は、Ⅵ2期同様に、小釜が5割以上を占め、釜は27%、鍋は21%である。鍋の量はⅥ2期に比べて多いが、増加したとは考え難く、出土量の少なさによる比率のばらつきであろう。甑も少ないが、確認でき、基本4器種の生産は生産終焉期まで保持される。特殊容器としては台付鉢が極少量、火舎の足部が1点、土製支脚1点、土馬の足部1点、管状土錘5点出土する。また、方形に切り取ったような土師器板は出土していないが、匣鉢形容器が定量出土している。窯道具として考えている。

以上の器種構成は、出土量全体であり、個別には消費痕跡をもつものがあるなど、そのまま生産器種構成を示している訳ではない。ただ、おおむね妥当な数値と考えており、当期の土器の構成を示す資料と考えている。

須恵器器種	Ⅵ2期須恵器		Ⅵ3期須恵器	
坏 B 蓋	(694)		27	2.3%
坏 B 身	1,089	8.9%	(24)	
坏 E 蓋	(735)		0	0%
坏 E 身	799	6.5%	0	0%
坏 A	7,173	58.3%	212	17.7%
小 型 杯	53	0.4%	0	0%
盤 A	1,125	9.1%	15	1.3%
盤 B	21	0.2%	0	0%
皿 A	34	0.3%	35	2.9%
皿 B	1,603	13.0%	79	6.6%
埦 A	150	1.2%	351	29.3%
埦 B	250	2.0%	480	40.0%
食膳具計	12,297	84.7%	1,199	91.7%
小 瓶 E	10	32.3%	0	0%
小 壷 B	(7)		0	0%
小壷B蓋	21	67.7%	0	0%
小貯蔵計	31	0.2%	0	0%
鉢 A	42	1.9%	0	0%
鉢 B	620	28.2%	32	29.4%
鉢 C	31	1.4%	0	0%
鉢 F	219	10.0%	0	0%
鉢 G	73	3.3%	0	0%
壷 A	63	2.9%	0	0%
壷 A 蓋	(14)		0	0%
壷 E	32	1.5%	0	0%
壷 F	205	9.3%	6	5.5%
瓶 B	70	3.2%	0	0%
瓶 D	448	20.4%	41	37.6%
瓶 E	33	1.5%	0	0%
中 甕	269	12.2%	24	22.0%
大 甕	91	4.1%	6	5.5%
貯蔵具計	2,196	15.1%	109	8.3%
須恵器合計	14,524		1,308	
焼台A類	121	7.0%	137	67.5%
焼台B類	1,234	71.5%	66	32.5%
焼台C類	179	10.4%	0	0%
焼台D類	193	11.1%	0	0%
焼台合計	1,727		203	

須恵器器種	Ⅵ2期土師器		Ⅵ3期土師器	
内黒埦A	860	31.9%	94	6.1%
内黒埦B	205	7.6%	89	5.8%
内黒埦B大	254	9.4%	0	0%
内黒埦特大	12	0.4%	6	0.4%
内黒皿B	1,314	48.8%	93	6.1%
内黒小型杯	25	0.9%	0	0%
無垢埦A	0	0%	855	55.6%
無垢埦B	0	0%	298	19.4%
無垢皿A	0	0%	66	4.3%
無垢皿B	22	0.8%	36	2.3%
食膳具計	2,692	23.9%	1,537	52.8%
小 釜 小	3,726	43.5%	681	49.6%
小 釜 大	1,335	15.6%	23	1.7%
小 型 鉢	66	0.7%	0	0%
釜	2,412	28.1%	370	27.0%
羽釜	116	1.4%	0	0%
鍋	638	7.4%	290	21.1%
甑	271	3.2%	6	0.4%
煮炊合計	8,558	76.0%	1,370	47.1%
台 付 鉢	3	23.1%	2	100%
円 筒 形	10	76.9%	0	0%
特殊土器計	13	0.1%	2	0.1%
土師器合計	11,263		2,909	
匣鉢	90		47	
窯道具計	90		47	

第40表　9世紀後葉～10世紀前半の須恵器、土師器器種構成（口縁部計測値）

（2）各遺構出土の土器

1．Ⅵ2期に位置付けられる遺構出土土器

《5号土坑》（第207～211図）

中層と下層で出土土器の内容が若干異なるが、出土土器の内容は一括して述べる。遺構のところでも述べたように、須恵器は須恵器窯廃棄品が目立ち、破片数では須恵器が75％を占める。焼台や癒着窯土も加えると、85％は須恵器窯廃棄品が占める。

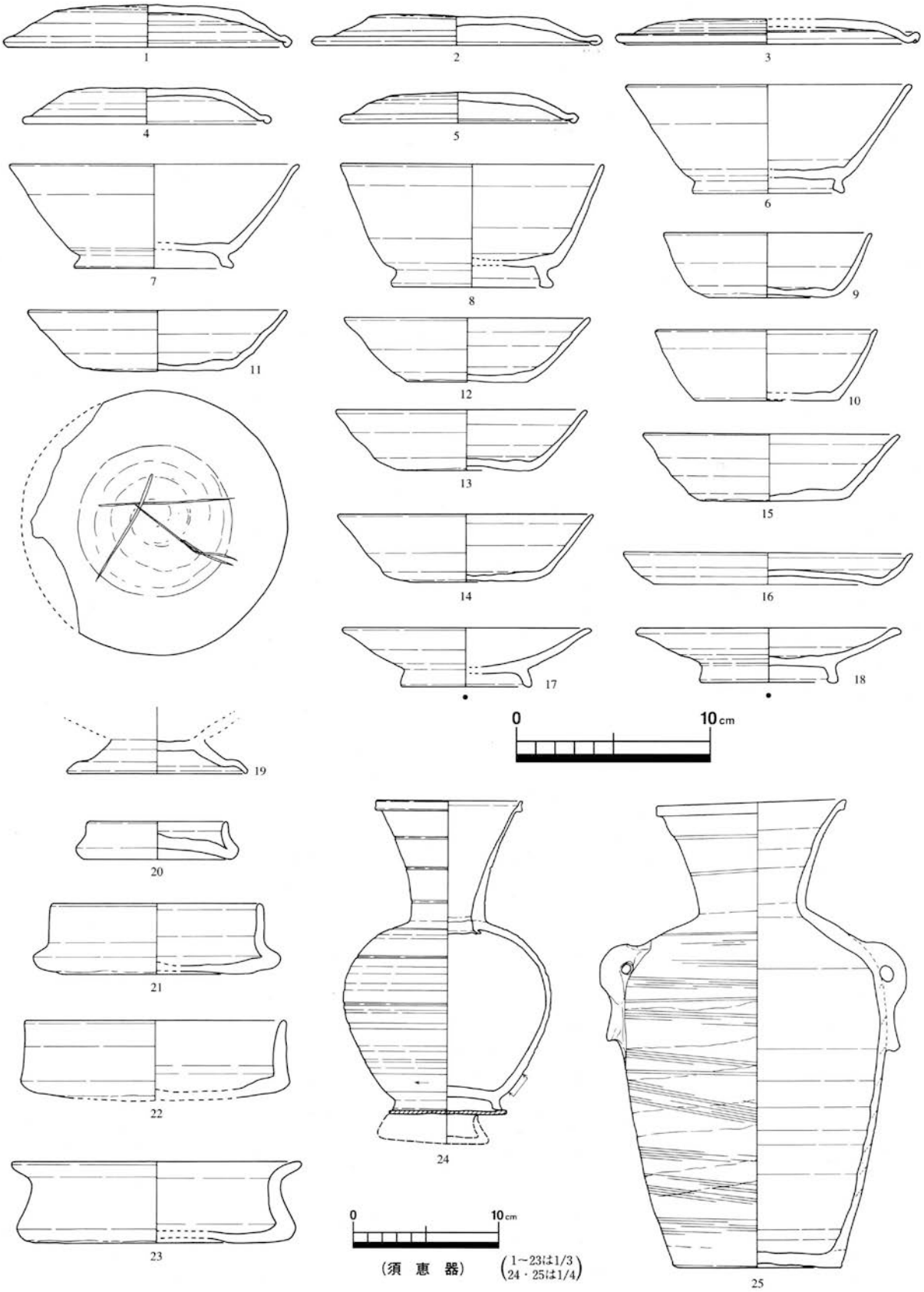
須恵器では坏B蓋・身、坏E蓋・身、坏A、盤A、皿B、埦B、瓶B、瓶D、大甕がある。坏型器種が大半を占め、埦類はほとんど確認できない。中層からの須恵器出土は多いが、歪み品や破片が多く、図示したもののほとんどは下層出土のものである。中層に比べると1・3・6・8・11～16・18に見るように、やや古手の様相を残すものが目立ち、Ⅵ2期の中でもやや古手、戸津11号窯ないしは10号窯の時期に比定できる。図示した坏A6個体は全て略完形のもので、土坑下底に6枚重ねて埋められていたものである。類似した作風があり、同時焼成の一括廃棄品と考えられる。うち1枚に「大」のヘラ書き文字が見える。貯蔵具では、瓶B1個体と瓶D3個体の略完形、大甕口頸部から肩部完形と1/6の大片が出土する。瓶Dの口縁部に縦3本のヘラ記号、大甕口縁部に「大」のヘラ書き文字があり、廃棄の一括性などからこれらが関連したものの可能性がある。瓶Bは胴部円盤閉塞痕の確認できないもの。瓶Dは耳1穴タイプの中小型と耳2穴＋1穴タイプの大型がある。両器種とも底部に焼台が溶着するが、打ち欠いており、焼き歪み品ではないことから、焼成廃棄の可能性は薄いものである。特に、27の瓶Dは底部癒着焼台部分が摩耗し、口縁部欠損してからその部分で端部摩耗が確認できる。胴部には、1次成形時のナデ調整後に、胴部を薄くするための縦軸叩き整形が施される。大甕は口径40～50㎝のもので、口縁部は短く強く外反する器形をもつ。30の底部は丸底の可能性が高く、胴部には縦軸叩きが三段階にわたって施される。内面当て具は彫りの浅いＨｅ類、29の胴部内面には非回転の刷毛調整が施されている。また、還元焔焼成された土師器器種が確認されている。28の台付鉢がそうで、胎土は土師器同様の粗砂を含むものである。脚部に四方向の六角形透かしをもつ。

土師器は復元可能なものが多く、破片の出土は極少ない。図示したもののうち38・48以外は全て下層に廃棄された土器群である。食膳具の出土はなく、小釜と釜、鍋で構成される。小釜は31の特殊小型を除けば、32～34の小、35～37の中、38～42の大の3法量に分けられる。胴径によって分けられ、小は10㎝台程度、中は14～15㎝前後、大は16㎝台程度となる。粘土紐積み上げ痕を残すものはなく、胴部から口縁部にかけて概して薄く挽き伸ばされている。口縁部外反した後に上へ屈曲させて薄く伸ばす口縁部特徴をもち、口縁部上端挽き伸ばしは薄く外反気味となるのが特徴と言える（ｂ類口縁部、特に長く外反するb1類が主で、短めのb2類は少ない）。なお、小釜の口縁部に小釜底部が重なった状態で接着している34が出土している。焼成で癒着したものではないため、生の状態で接着したものと考えられるが、焼成道具として使用したものかもしれない。釜は1法量であるが、胴部から底部にかけての器形により、ずん胴で砲弾型を呈すＡ類（薄手のものはA1類、43）とやや胴が張り底部へ尖底気味となるＢ類（胴張り弱く尖底気味程度のB1類と胴張り強く尖底となるB2類がある。45はB2類）に分けられる。一部胴部にカキ目を残すものがあるが、顕著なものは少なく、ナデ調整が主体となる。胴部下半叩き出しは上から下への縦軸基本で、かなり薄くなるまで叩いている。内面同心円文が依然として目立つ。口縁部器形は、小釜同様に、口縁部上端長く挽き伸ばすｂ類口縁部が主体であるが、b1類（46）は少なく、短く外反するb2類が主体を占める。また、口縁部上端を曲げて直立させ、内側に肥厚させるc2類（48）も確認されるが、これは中層出土のものである。やや後出の感がある。なお、47の口縁部内面には赤彩が施される。鍋にも同様のｃ類口縁を呈す51がある。外面下半手持ち削り、内面は横ナデ調整で、底面の成形台痕がそのまま残るものである（Ｂ類）。これは一般的な器形とは言い難く、49・50の外底面にも削りが及び、内面下半は刷毛調整を施すＡ類が通常の器形である。口縁部はｂ類口縁部でも上から潰れたような「Ｓ」字状を呈す（b3類口縁）。

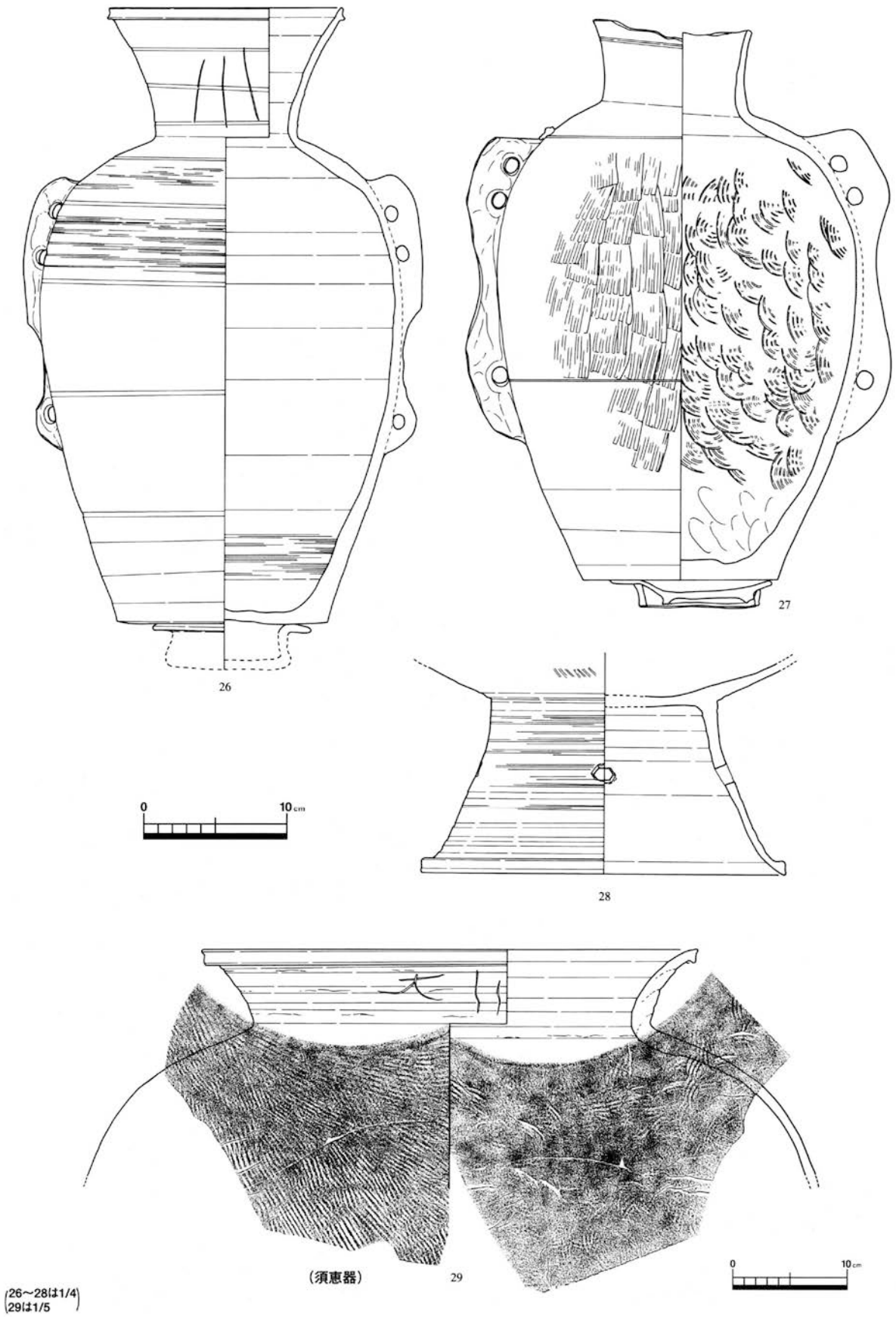
《10号土坑》（第211図）

遺物量は少なく、図示できたものは須恵器瓶Ｂと瓶Ｄの胴部である。瓶Ｂは頸部に風船造りの際の閉塞円盤貼り付け痕が見られる胴部1/2の破片。瓶Ｄは口頸部欠損の胴部4/5の破片である。瓶Ｄは1穴タイプの耳が付く中型タイプ。

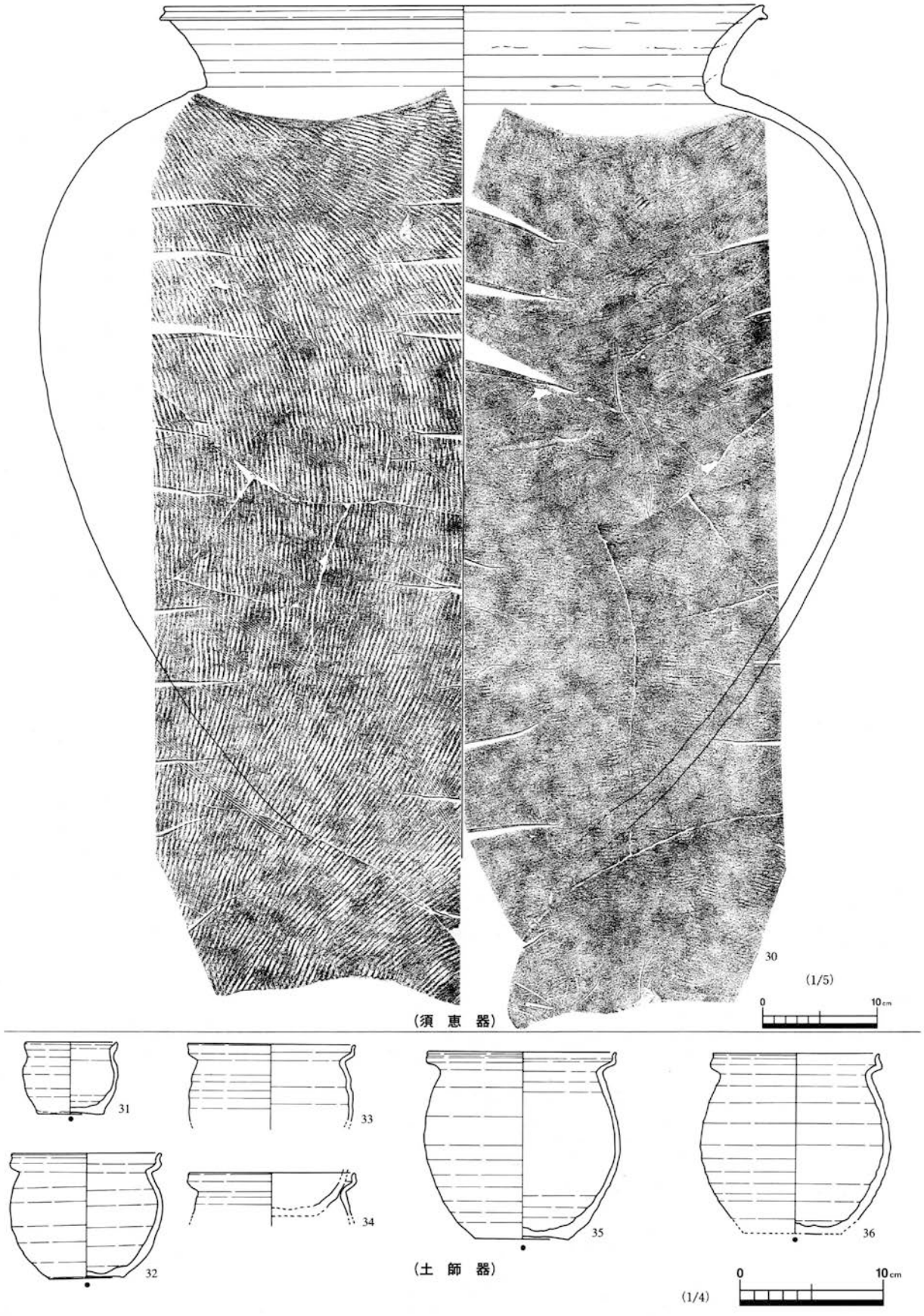
〈5号土坑〉



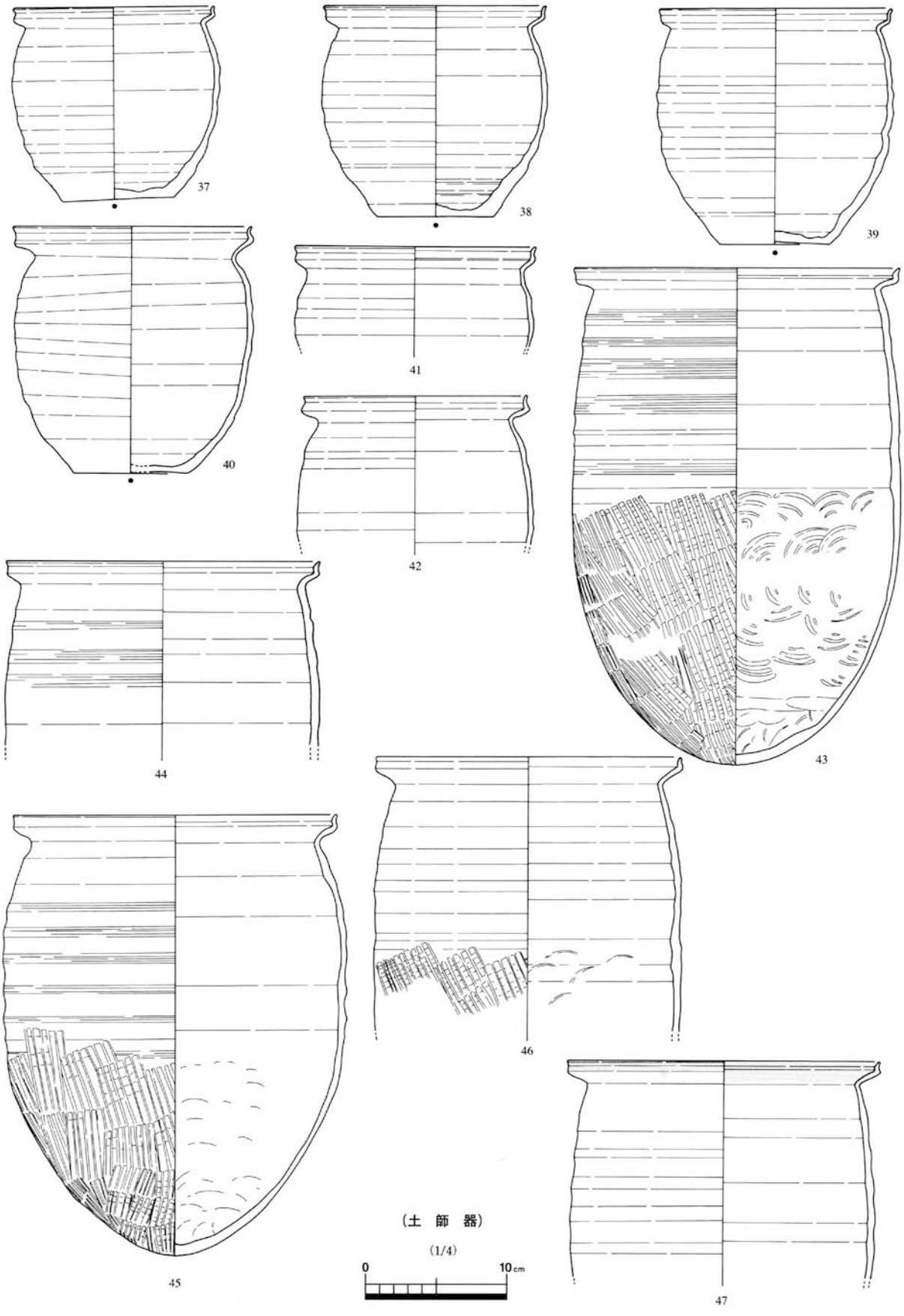
第207号　5号土坑出土土器（1）（1/3,1/4）



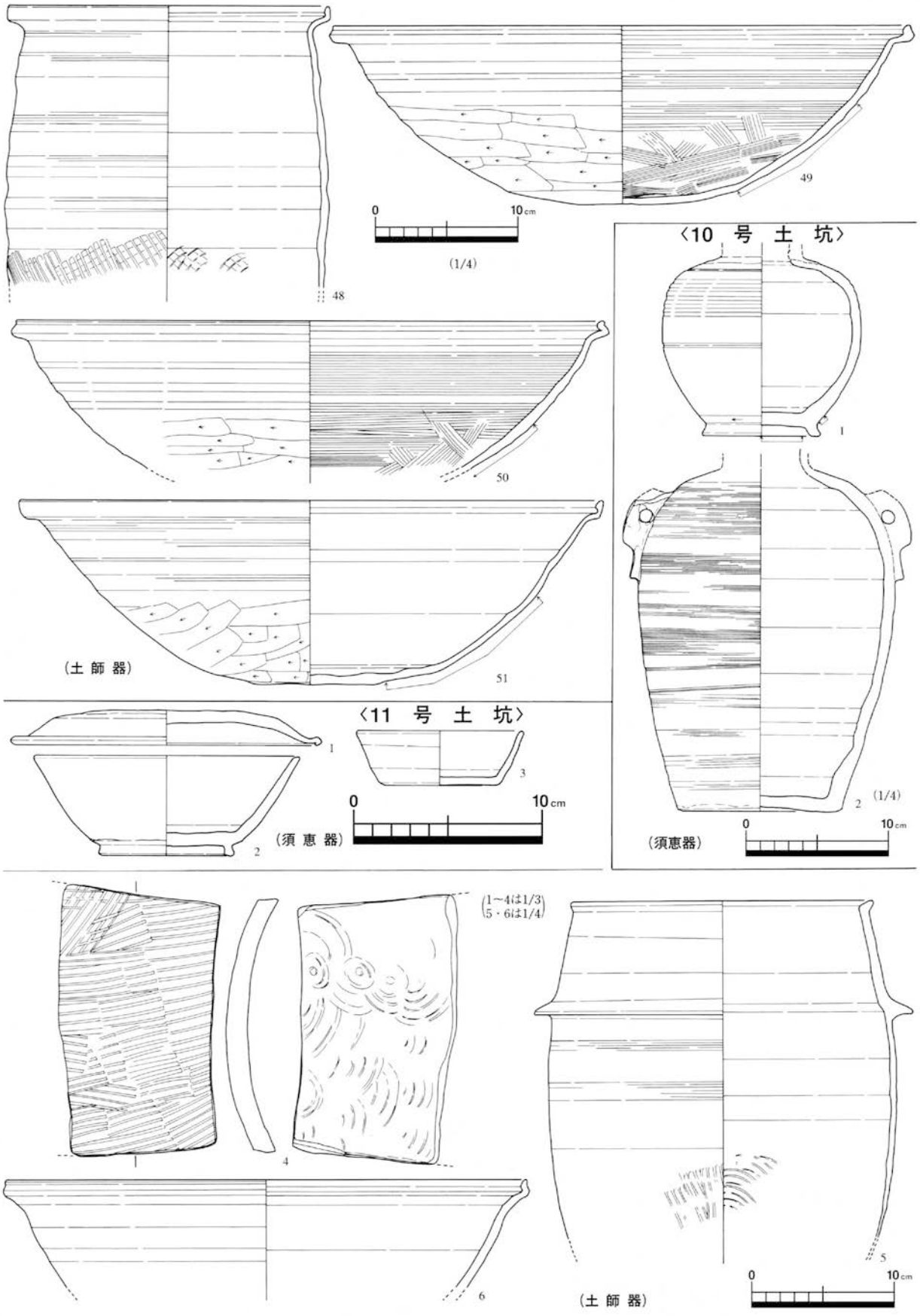
第208図　5号土坑出土土器(2)(1/4,1/5)



第209図　5号土坑出土土器（3）（1/5、1/4）



第210図　5号土坑出土土器（4）（1/4）



第211図　5号土坑出土土器（5）、10号土坑出土土器、11号土坑出土土器（1/3、1/4）

《11号土坑》（第211図）

遺物量は少なく、須恵器では坏Ｂ蓋・身と小型坏、土師器では小釜、羽釜、鍋、方形切り取り板を確認するのみである。須恵器はⅥ2期でもやや古手の様相に位置付けられる。土師器は小釜がb1類口縁部、鍋がc2類口縁部、羽釜は口縁端部肥厚して上端面形成するタイプである。胴部下半に叩き出し成形痕が残る。胴外面と鍔に煤が付着している。４の板状土製品は、外面平行線文、内面同心円文の叩きをもち、方形に切り取った跡の残る土製品である。器形から見て甑を切り取ったものと考えられる。土師質によく焼けており、成形失敗品を転用して、焼成道具に使ったものと考えている。

《１号粘土採掘坑》（第212・213図）

比較的出土量が多く、土師器１に対し須恵器４程度で廃棄されている。

須恵器では食膳具が主体で、食膳具器種は坏Ｂ蓋・身、坏Ｅ蓋・身、坏Ａ、小型坏、盤Ａ、盤Ｂ、ⅢＢ、埦Ａが確認される。坏型食膳具が主体であるが、瓷器系食膳具も16％程度を占める。１の坏Ｂ蓋につまみが付される点や坏Ｂ身の体部立ち上がり器形、坏Ａや盤Ａの体部立ち上がり器形、33の盤Ｂの存在などから考えて、Ⅵ1期の様相を色濃く残す段階と位置付け、Ⅵ2期の古期に位置付けた戸津11号窯に併行する時期と判断する。瓷器系器種も同様に古手の器形を呈し、ⅢＢは大型で高台高くしっかりして作られ、埦Ａも底部削りを施す古手器形を呈す。貯蔵具は破片が多く、図示できたものは瓶Ｂ、壷Ａ蓋・身、壷Ｆで、そして焼台もある。瓶Ｂ（40）の胴部閉塞はしぼりきりによる粘土の縮み皺が確認され、しぼりきり閉塞の可能性の高いものである。

土師器は、内黒土師器食膳具が定量確認されるが、煮炊具は胴部破片が主で図示できたものは少ない。内黒は全て外面赤彩され、埦Ａ、埦Ｂ、ⅢＢがあり、ⅢＢが目立つ。埦Ａはやや深身を呈し、埦Ｂの高台は高くしっかりしている。ⅢＢの口径は大きく、低平で、高台径も大きい。50は無台の特大埦で、特殊品である。煮炊具は、小釜と釜を図示できた。小釜はb2類口縁部のものと口縁端部が丸く内傾して立ち（ｄ類）、端部内側に巻き込むd4類口縁部（52）がある。釜の口縁部はいずれもｂ類で、特に短く屈曲するb4類を呈す。これ以外に、55の土製支脚、56の獣脚がある。支脚は底面に糸切り痕をもつ円筒形にロクロ挽きされた小型土製品で、底面円孔を穿つものである。獣脚は18㎝の高さをもつ棒状脚で、三足を付す鍋の脚部と思われる。火舎的な器種だろう。脚は面取り整形を施すものである。

この他、施釉陶器（57）が１点出土している。被熱を受け、釉が剥落しているが、灰釉陶器と判断されるものである。底面に一部糸切り痕が残り、高台は小型方形を呈す。高台の形態はやや古手の様相を残すが、黒笹90号窯式期に位置付けられるものと考える。

《２号粘土採掘坑》（第214図）

出土量は比較的少なく、土師器主体の廃棄である。

須恵器は坏Ｂ蓋・身、盤Ａ、鉢Ｂ、瓶Ｄ、焼台が出土しており、食膳具は坏型食膳具のみで構成される。坏Ｂ等の器形からⅥ2期の中段階に位置付け可能である。なお、７の瓶Ｄは三耳タイプの大型品である。Ⅴ期以降、大型品にのみ存続する耳のタイプで、当期が最終段階と考えている。

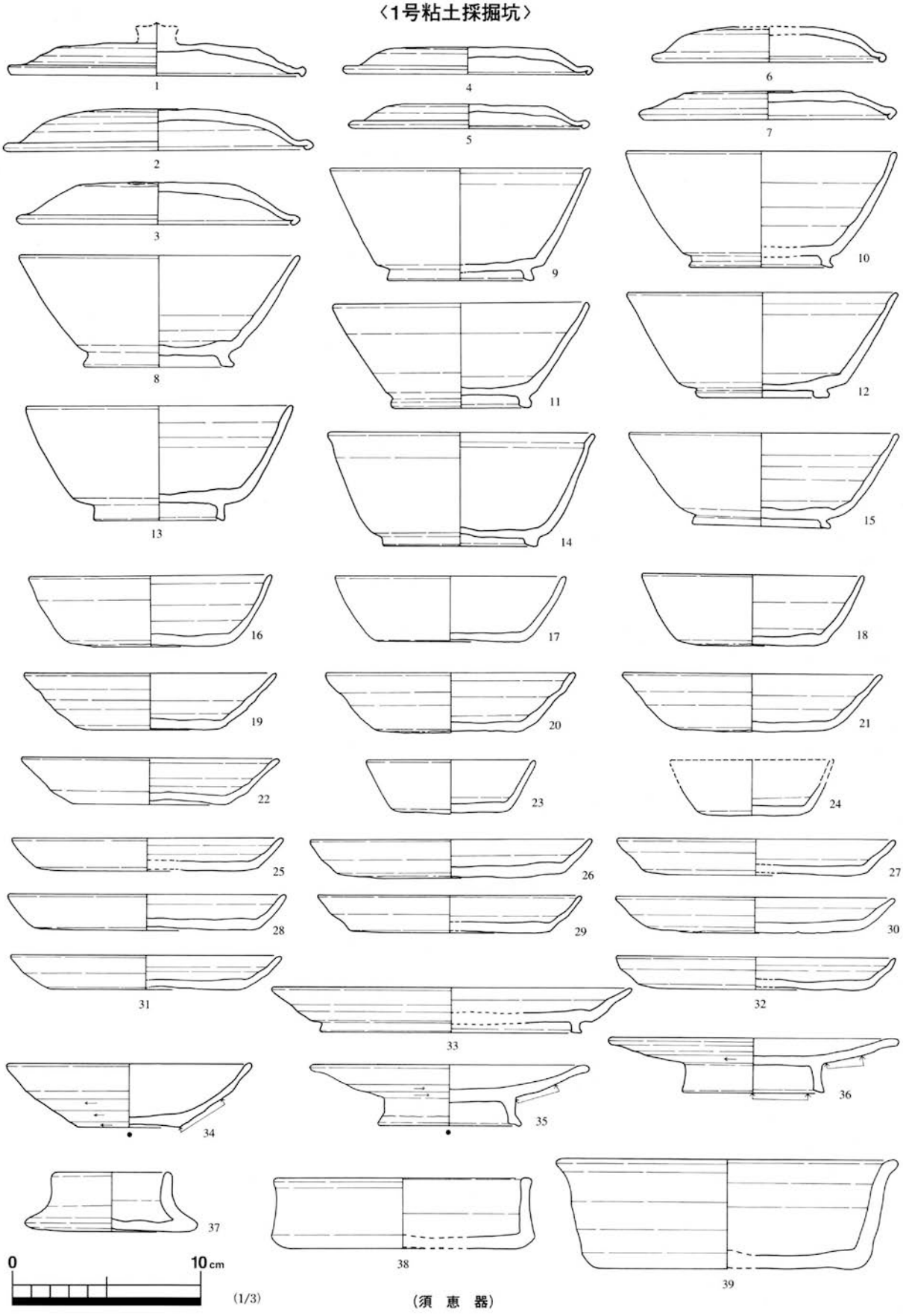
土師器は小釜、釜、羽釜、鍋、台付鉢と方形に切り取った板状土製品が出土している。小釜（９）は中型で、口縁部b1類器形。釜（10）はＡ類器形で、口縁部ｃ類器形。羽釜（11）は鍔がやや下向きに付されるものである。鍋（12）は口縁端部が短く内傾するa3類器形。台付鉢（13）は円孔透かしを３方にもつ脚部破片。方形切り取り板（８）は薄手のもので、外面平行線文叩き、内面木製無文当て具痕をもつ。

《４号粘土採掘坑》（第215・216図）

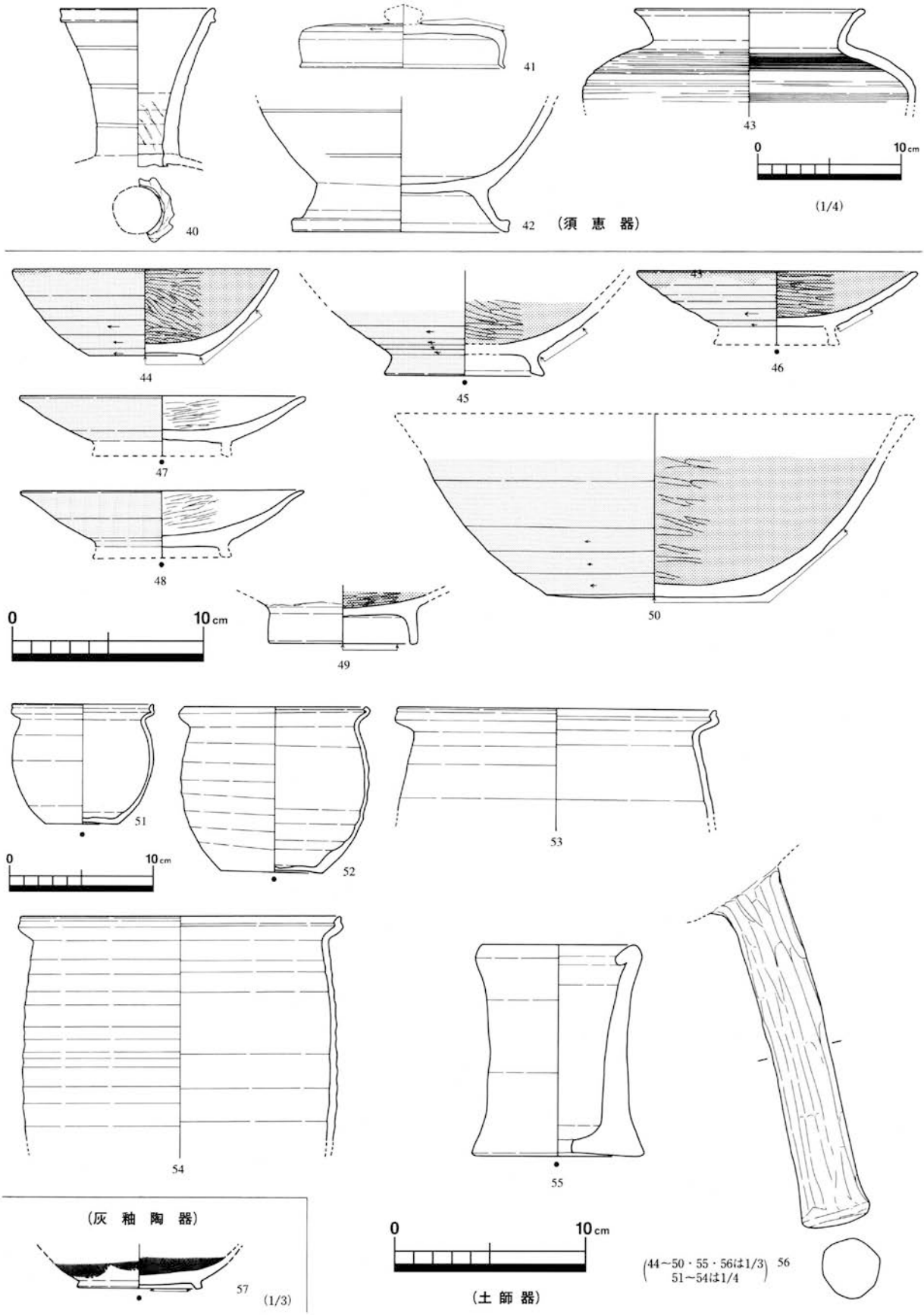
土坑下底面付近に須恵器食膳具と土師器煮炊具がまとまって廃棄されており、一括廃棄品はいずれも完形か半完形のものである。構成は土師器主体で、須恵器は食膳具中心である。

須恵器は坏Ｂ蓋、坏Ｅ身、坏Ａ、盤Ａ、ⅢＢが出土している。ⅢＢ高台は高くしっかりしているが、高台径はやや小型化しており、坏Ａの器高低下や薄手化を考えると、５号土坑の下層一括よりも後出する時期、Ⅵ2期の中段階である戸津９号窯併行に考える。

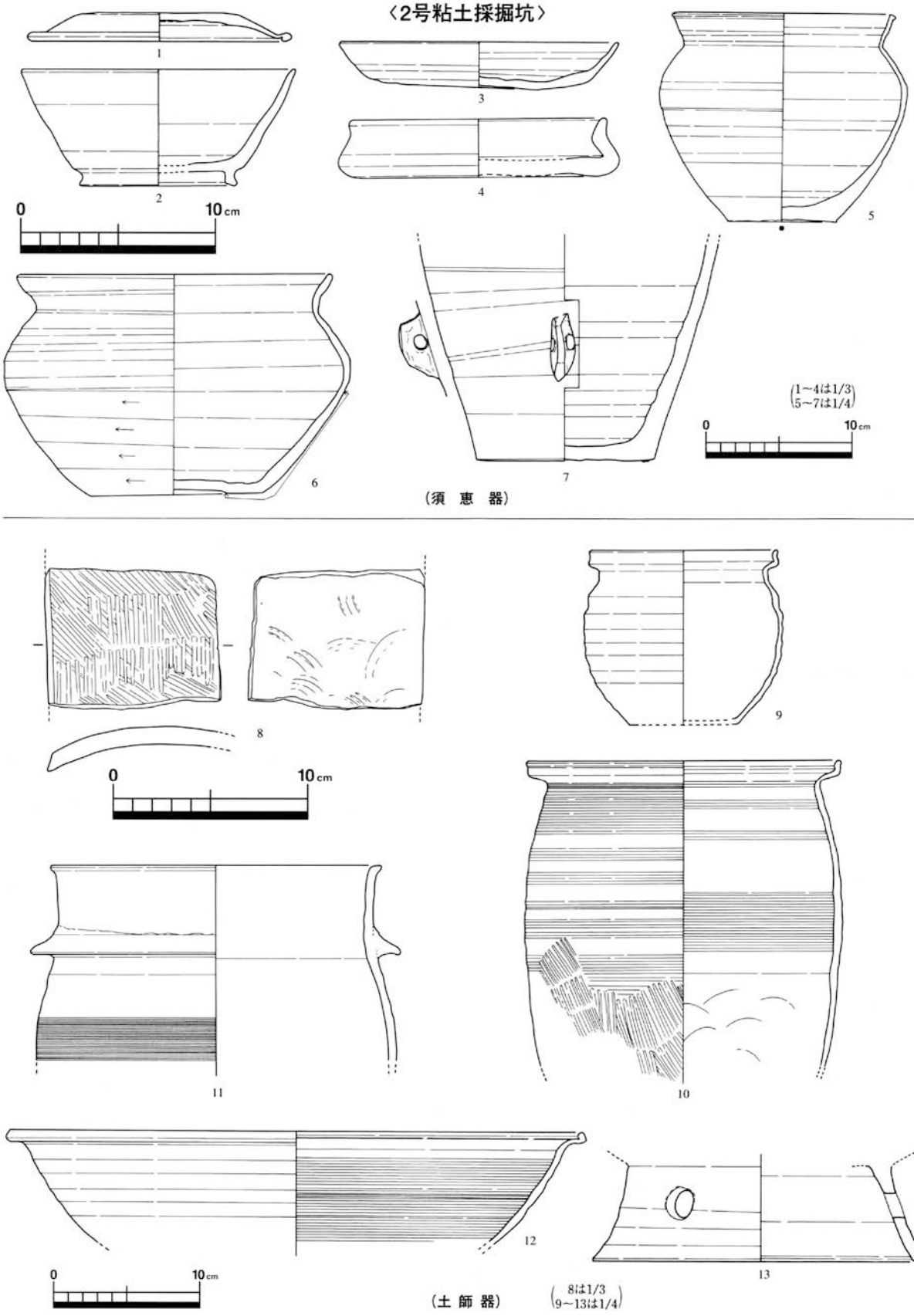
土師器は小釜が過半数を占めるが、釜も比較的多く、羽釜も５個体確認される。小釜は胴径10㎝台程度の小型



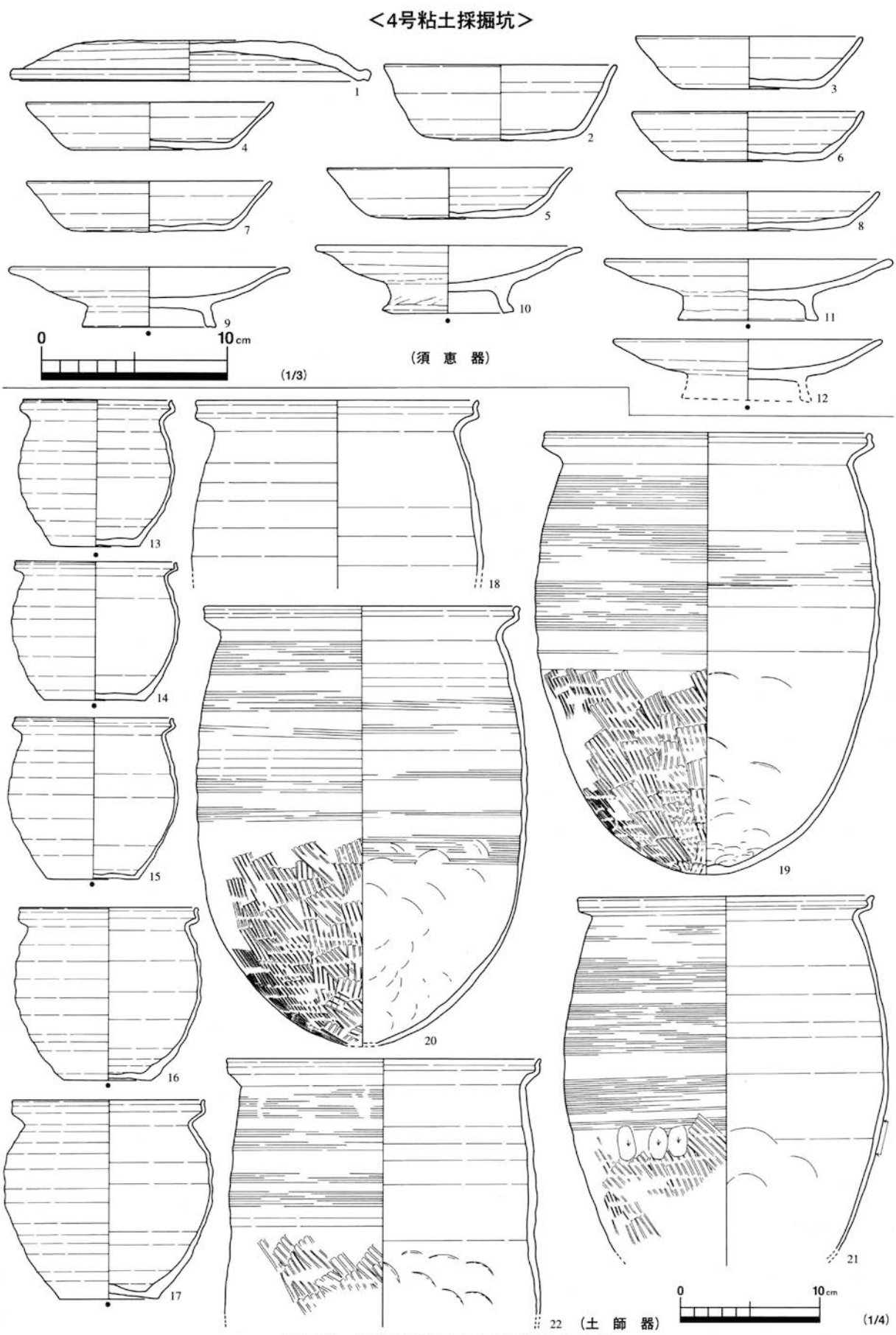
第212図　1号粘土採掘坑出土土器（1）（1/3）



第213図　1号粘土採掘坑出土土器（2）（1/3、1/4）



第214図　2号粘土採掘坑出土土器（1/3、1/4）



第215図　4号粘土採掘坑出土土器(1)(1/3、1/4)

（13～16）と14～15㎝前後の中型（17）がある。口縁部器形から長く直立するa1類（16・17）と長く直立後に上端のみ短く外反するa5類（13～15）に分けられる。胴部は薄く、ロクロヒダが目立つ。釜はずん胴器形のA1類（22～24）と胴張り器形のB1類に分けられる（19～21）。B1類器形は、いずれも口縁部直立後に端部肥厚するa4類口縁部で、A1類器形は口縁部が丸く折れて端部で短く外屈するe1類を呈す。他に口縁部器形はb1類（18）とC2類（25）がある。胴部調整は上半のカキ目が定量確認でき、胴部下半叩き出しは内面当て具がいずれもナデ消される。外面叩き出しの上端境に一部縦方向削りが確認される（21）。Ⅳ2新期頃に顕在化する釜の胴部調整で、Ⅴ1期以降は減少するものである。当期のものは突発的なものと評価している。羽釜は胴膨らみから、口縁部へとやや窄まる器形で、口縁部は直立気味となる。鍔は厚手で短めのもので、鍔部分の内面に粘土継ぎ痕が見られる。器形や痕跡から考えて、積み上げた上端を逆L型に外屈させて、屈曲部からその上に口縁部を粘土紐積み上げ成形したものと予想される。カキ目を切って、叩き成形が行われており、胴部下半叩き出し成形がかなり上まで及んでいる。内面は無文当て具。

《5号粘土採掘坑》（第216・217図）

須恵器と土師器が混在して捨てられた資料で、比較的出土量は多い。

須恵器は食膳具主体で、食膳具では坏B蓋・身、坏E身、坏A、盤Aの坏型食膳具が主体だが、皿Bが2割以上の高い率をもつ。5号土坑に類似する器形特徴で、同時期に位置付けられる。なお、坏B身の特大（3）が1個体出土しているが、これに関しては古段階にのみ見られる形態である。他の器種では鉢B（11）と鉢F（10）を図示している。鉢Bはほぼ完形品、鉢Fは底部のみ欠損のもので、底抜けなどの焼成破損品と判断される。鉢Bの体部外面には粘土紐積み痕が残るが、粘土紐は螺線を描いており、右回転に巻き上げられたことがわかる。同様の粘土紐巻き上げ痕をもつものは、鉢類の他に壷Fや瓶Dに確認できており、叩き成形を行わない粘土紐成形のものは、粘土紐巻き上げ成形である可能性が高い。須恵器では他に甕などの胴部破片、そして焼台がある。当期に一般的なB類形態のものである。

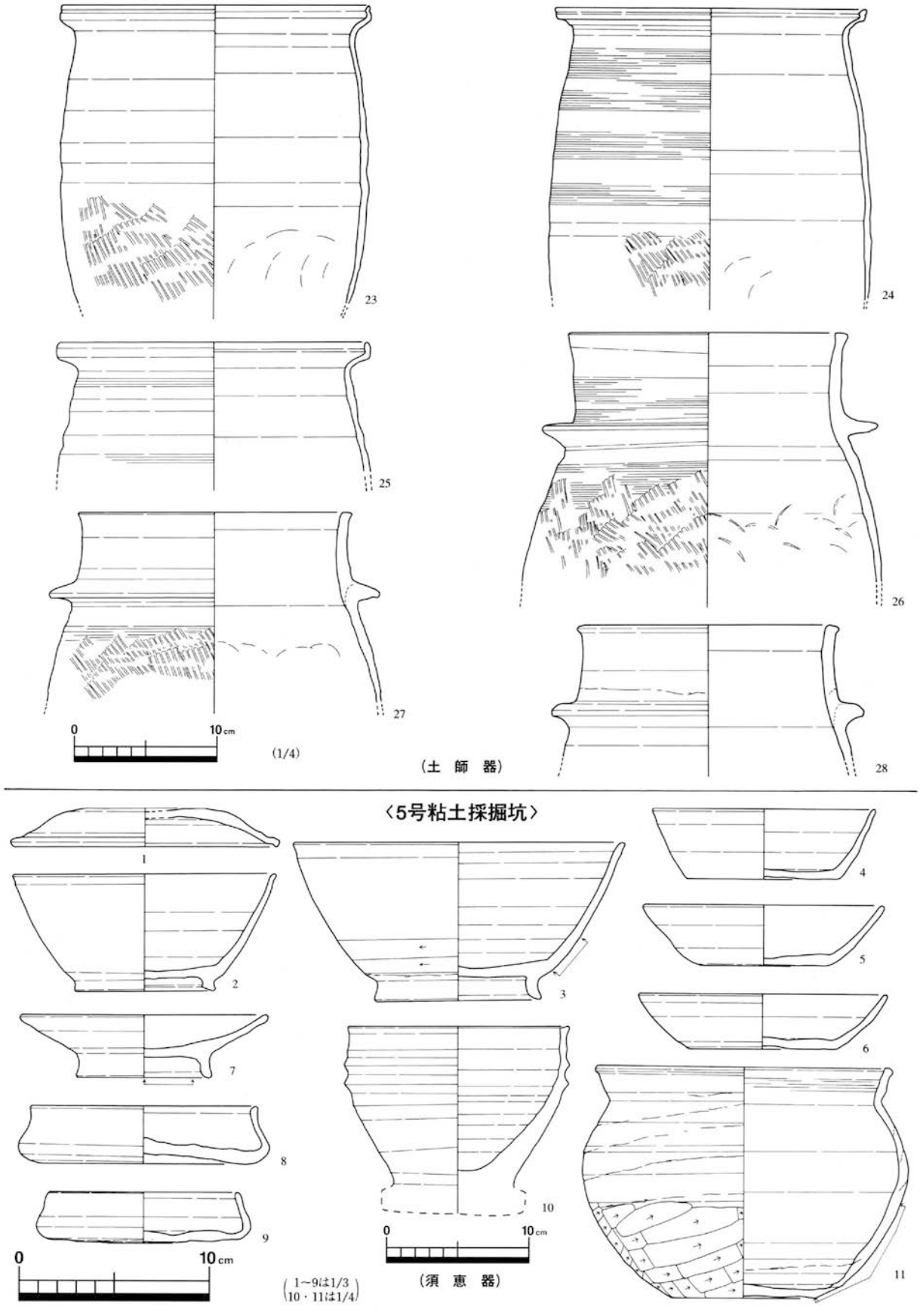
土師器は、内黒土師器が少量確認されるが、大半は煮炊具である。内黒は皿Bのみで、口径大きめのもの。煮炊具は釜が主体的に廃棄されている。小釜は小型（13）と中型（14）、大型（15）がある。口縁部器形は小と大が口縁長く立つa1類、中がb1類で、薄く作られている。釜はA1類器形で、17はb3類の上端屈曲の短いb4類口縁部。18は口縁部長く立って上端のみ外屈するa5類口縁部で、19も同様のa5類である。16は端部肥厚のa4類口縁部を呈す。胴部カキ目は少なく、叩き出しの内面当て具はなで消されている。甑は薄手で大型のもの（A類）。

《6号粘土採掘坑》（第217・218図）

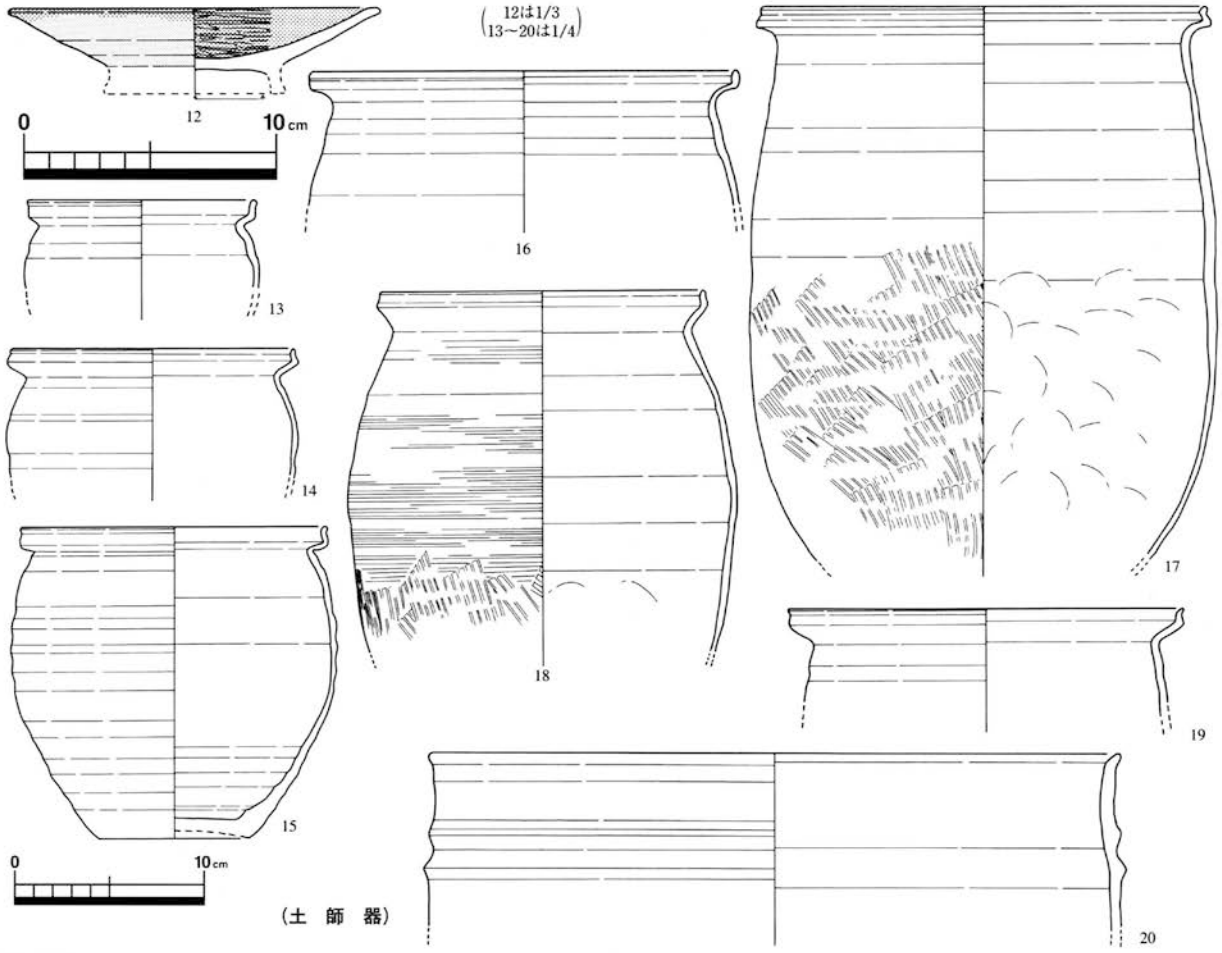
粘土採掘坑の底面付近に完形ないしは半完形の須恵器、土師器が一括廃棄されており、特に3～6、10～19、22、25は一括性高い。土師器は焼き弾けなど確認でき、焼成廃棄品の可能性高いものだが、顕著な摩耗痕をもち、油煙痕の付く坏A（4）などもあり、生活用具もともに廃棄されている。出土量多く、全体的に土師器特に煮炊具が主体的に廃棄されている。

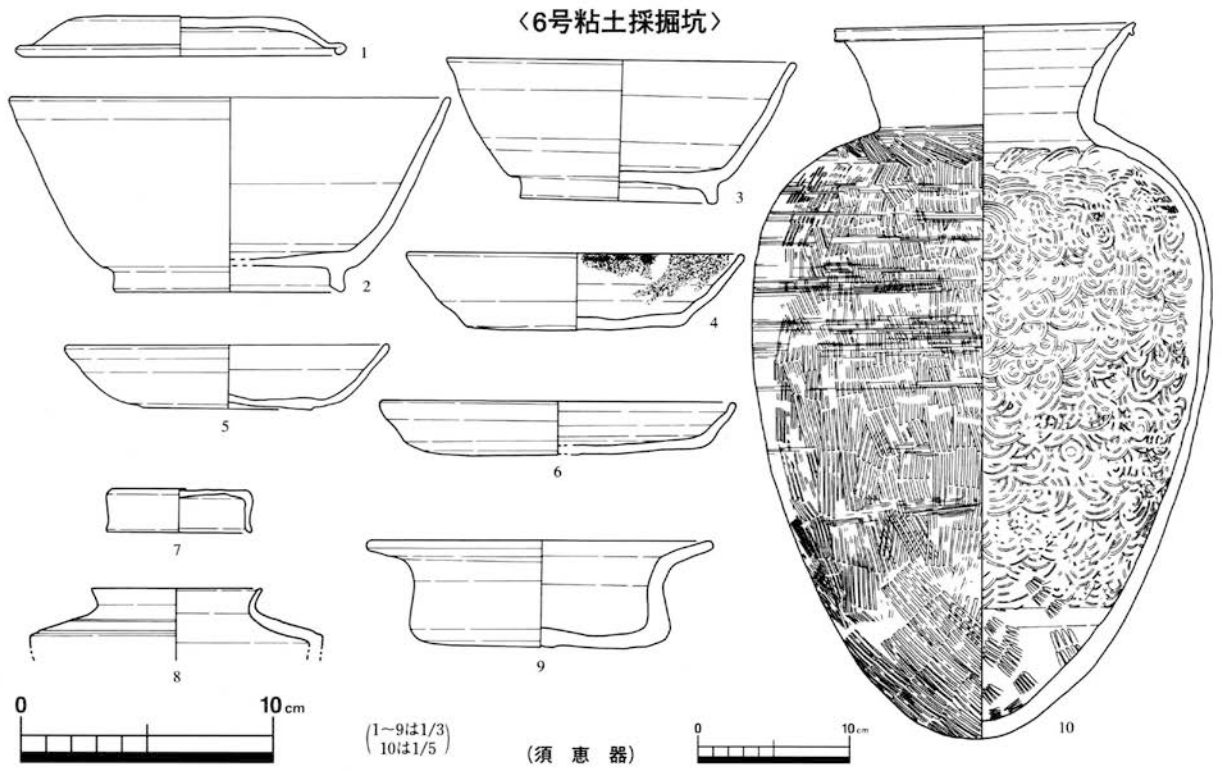
須恵器は、坏E蓋、坏B身、坏A、盤A、小型壷、鉢G、中甕、焼台が出土している。坏B身には特大法量が存在し、土坑底面一括廃棄を中心に考えれば、Ⅵ2期の中段階、戸津9号窯併行が妥当と考えている。須恵器中甕の略完形があり、成形技法痕跡を残している。なで肩長胴器形の尖底状叩き出しのもので、胴部縦軸整面叩き（内面Da当て）の後に、胴部最上位部分の整面叩きそして底部叩き出し成形を行っている。両叩きとも、内面平行線文当て具が使われており、胴部叩きの道具とは異なっている。成形方法を見るうえで重要な資料である。

土師器は煮炊具のみで、小釜と釜、羽釜、鍋、甑、台付鉢が出土している。小釜は胴部径によって小型（12）と中型（13～15）に分けられ、小型はa5類口縁部、中型はb1類系統口縁部で、ややe2類に近いものもある。中型の胴部外面にはロクロヒダが顕著となったためによる段を数段もち、特徴的である。釜は、いずれもB1類器形を呈すが、胴下半叩き出しの内面当て具が同心円文と平行線文で異なる様相があり、前者（17・18）は胴部上半ナデ調整、後者（16・19）はカキ目調整となる。口縁部器形も、前者がb1類又はb2類の上端外反に対し、後者はb3類かa5類の端部外屈の特徴をもつ。羽釜（20）は口縁部内傾の胴部薄手のもの。鍋は内面刷毛調整のないB類（23）と刷毛調整を施すA類がある。A類は底部丸く深いA2類（21・22）で、口縁部はa5類を呈す。台付鉢（24）

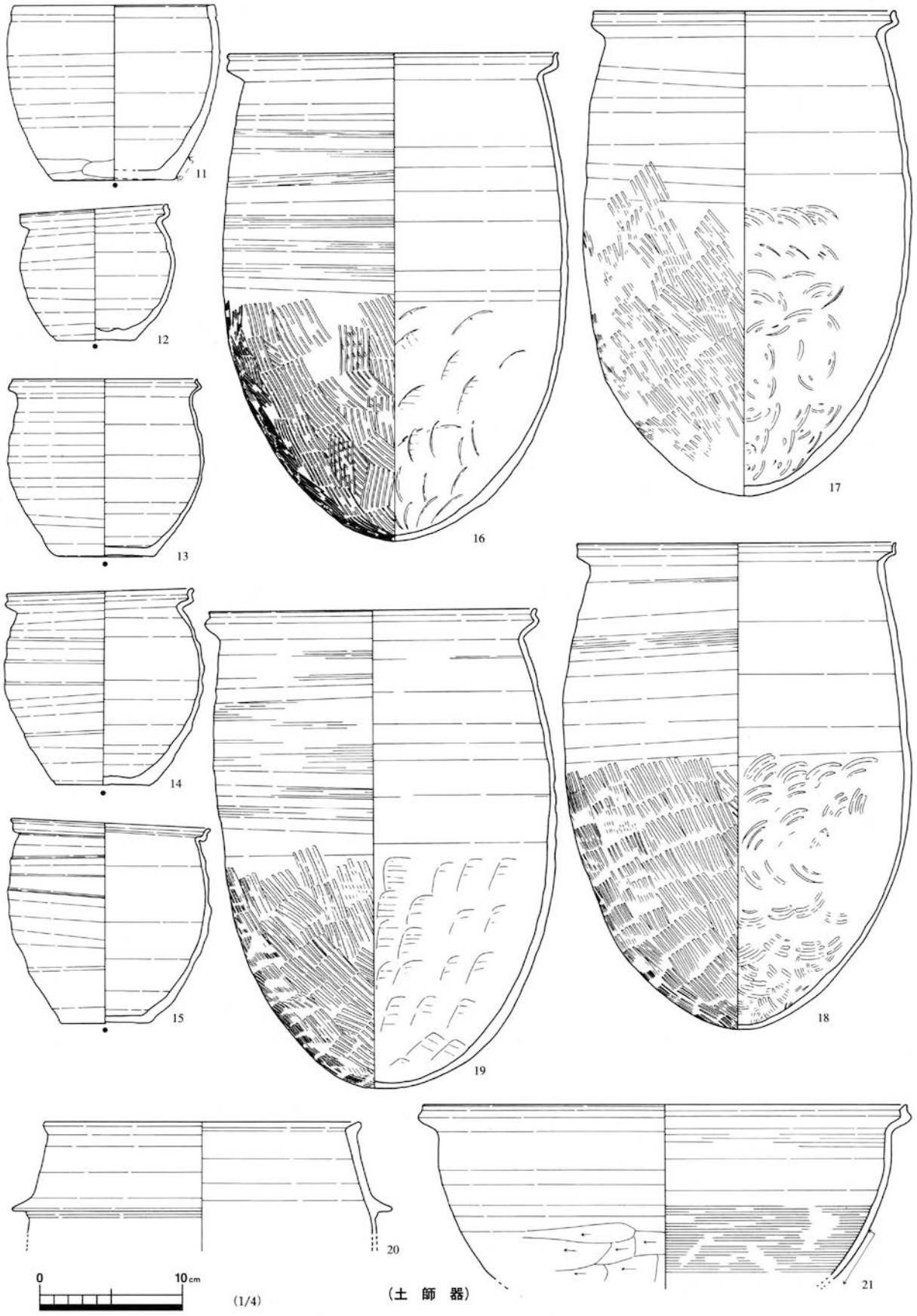


第216図　4号粘土採掘坑出土土器（2）、5号粘土採掘坑出土土器（1）（1/3、1/4）





第217図　5号粘土採掘坑出土土器(2)、6号粘土採掘坑出土土器(1)（1/3、1/4、1/5）



第218図　6号粘土採掘坑出土土器（2）（1/4）

は鉢部破片で、開く器形。甑は薄手で大型のA類器形。口縁部下に2段の稜をもち、底部は下端がやや内側に肥厚するだけの筒抜け形態。把手は幅広三角形状のものが内側に巻き込むようにつく。

《7号粘土採掘坑》（第219～221図）

出土量は多い方でないが、下底面付近に須恵器坏Aや甕、内黒土師器食膳具が完形ないしは半完形で数個体捨てられている。全体的な量比は土師器が7割以上を占め、釜などの煮炊具も廃棄されている。

須恵器は、坏B身、坏A、盤A、皿B、中甕がある。須恵器食膳具の特徴から、Ⅵ2期の中段階併行と考えられるものである。当資料には7・8の中甕半完形品があり、貴重な成形技法痕跡を数多く残している。7は平底タイプで、底面叩きは全く行われず、胴部下端から底面にかけて叩き後に手持ち削りしている。底径大きく薄く作られている。胴部叩きは1次成形及び2次成形の胴部上半叩き出しに伴うものと予想する横軸叩き（内面木製無文当て具）が胴部上半に残り、それを切って、中位以下に縦軸の整面叩き（平行線文当て具）が施される。その後、胴部最上位整面叩き（同心円文当て）と胴部下端整面叩き（平行線文当て具）が施され、最終工程で底面削りが行われる。全体的に薄く作られており、作りは精巧である。底面に径7㎝台の焼台B類痕が3カ所見られ、3点支持で固定していたことがわかる。8は丸底タイプで、最終工程で底部叩き出し成形を行っている（内面当て具は平行線文）。胴部叩きは縦軸整面叩きで、内面同心円文当て具が下から上へ施される。これに切られて、胴部には異なる木製無文当て具痕があり、成形叩きに伴う当て具痕と予想する。底面にはD類焼台の痕跡が残る。

土師器は内黒土師器で埦Aと皿B、無垢土師器で皿B、煮炊具では小釜、釜、鍋、甑がある。粘土採掘坑の中では内黒土師器食膳具をまとめて廃棄しており、略完形から半完形の皿B6個体（9～14）が確認できる。外面赤彩するやや大ぶりのもので、高くしっかりした高台が付される。いずれも底面削りしないなど、共通する作風をもっており、同一工人の手によるものと予想する。無垢土師器皿B（15）は底部厚手で、高台の華奢な特徴的な作りのもの。小釜（16・17）は大型法量のもので、a1類口縁部である。釜（18）も類似するa2類口縁部（短く立つ）を呈す。甑（19）は比較的厚手だが、大型のA類器形に属す。6号粘土採掘坑と同様の幅広三角形状把手が内側に巻き込むように付けられる。20は内外面に叩き成形痕を残す方形に切り取った粘土板状土製品で、口縁端部が残っているものである。外傾角度や端部器形から甑の口縁部付近と判断でき、A類甑の1次成形途中に、破損などのために、焼成道具に転用したものと予想する。

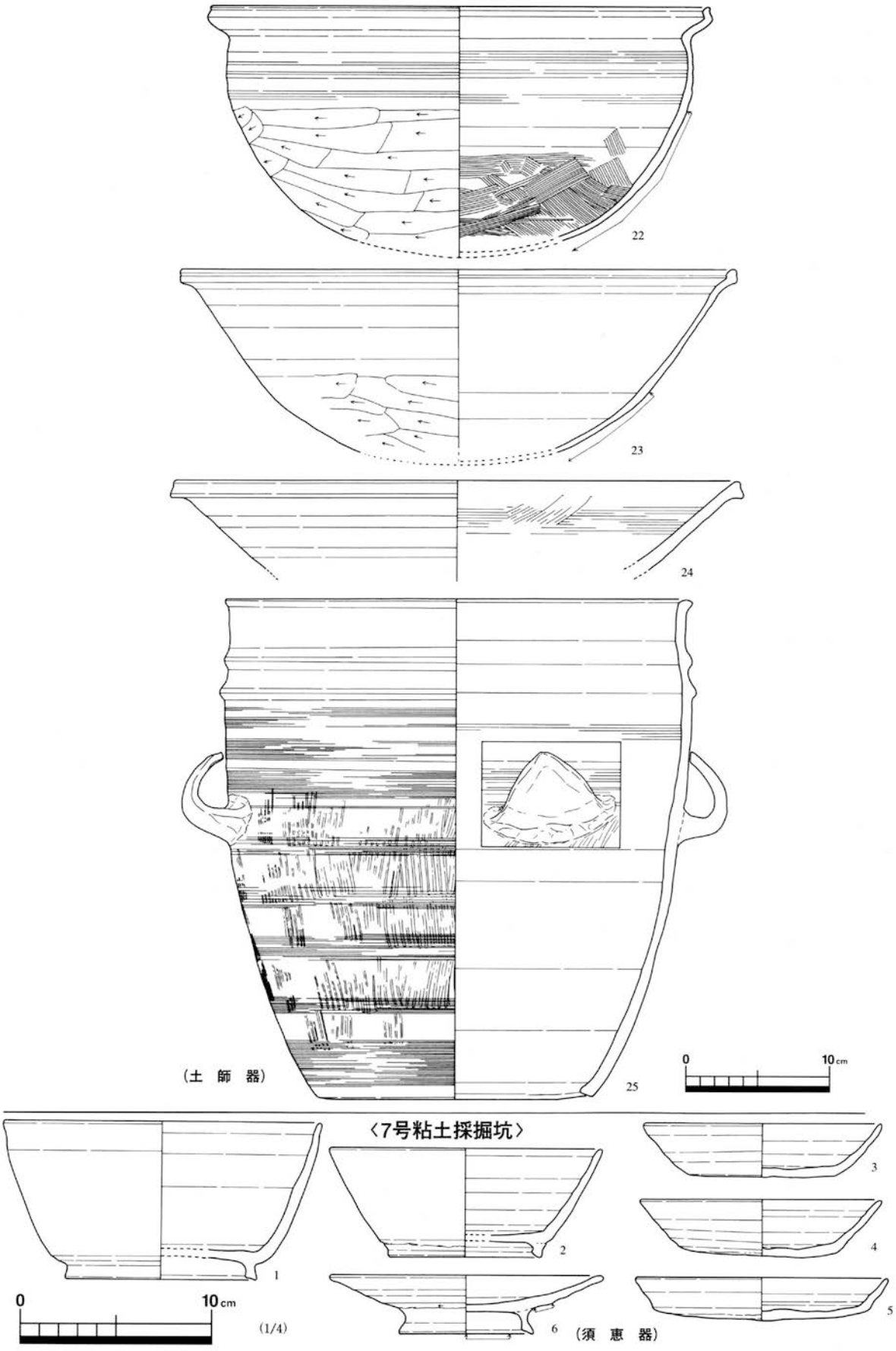
《8号粘土採掘坑》（第221～223図）

粘土採掘坑下層から底面付近にかけて土師器を中心に大量に廃棄されている。須恵器は少なく、土師器は煮炊具が主体を占める。

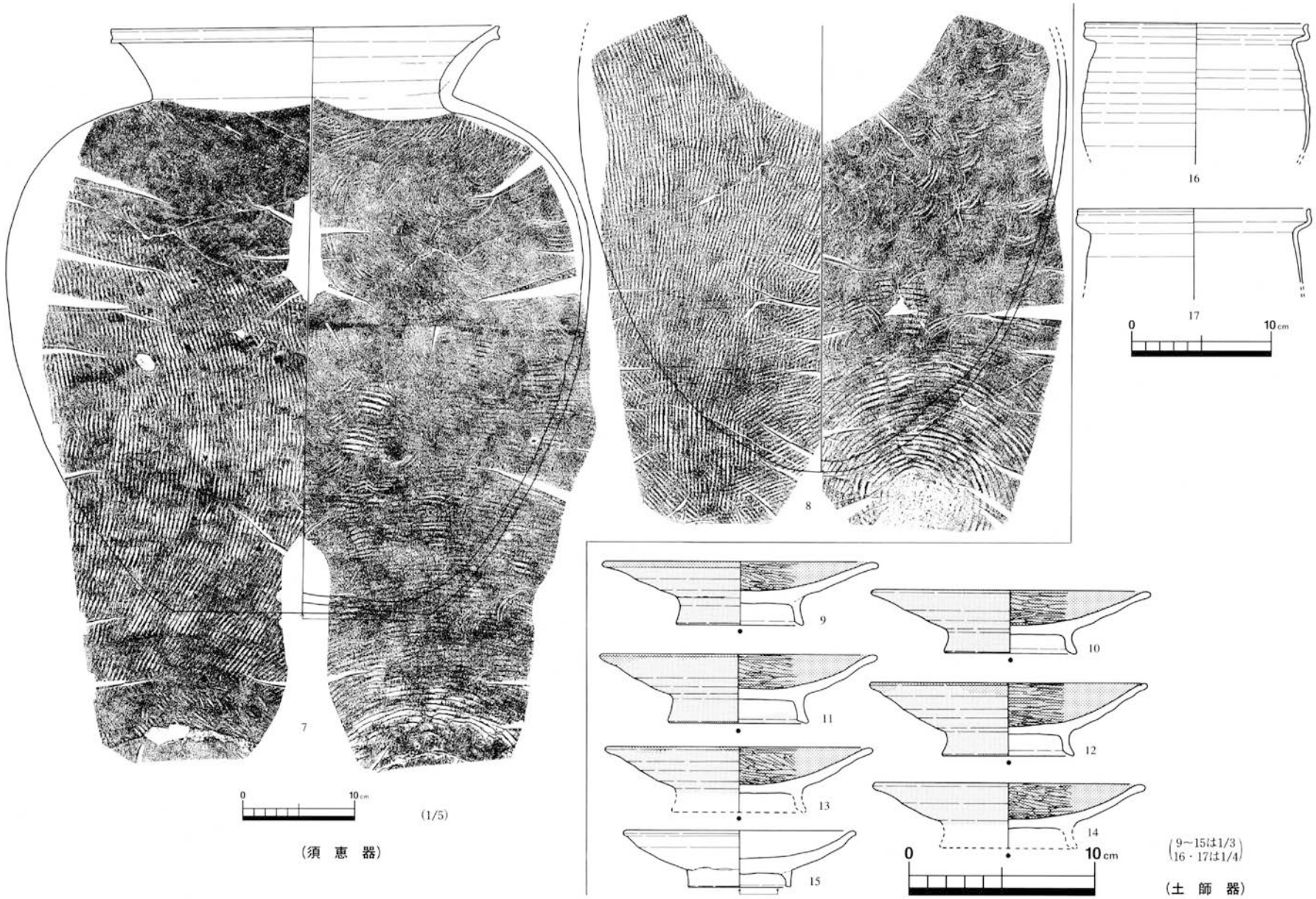
須恵器で図示できたものは盤Aと中甕底部である。盤A器形はⅥ2期に位置付けられるものであるが、細分時期での対比は、盤Aのみでは困難だが、器形から中段階以降の可能性が高い。中甕は平底形態をもつ。胴部縦軸整面叩きを施した後、胴部下位のみ削り調整し、その後、下端から底面縁辺にかけて外面のみの叩きが施されるものである。底面中心までは叩きは及ばず、7号粘土採掘坑の平底甕に類する成形技法のものと判断する。

土師器食膳具は全て外面赤彩で、内黒のものである。埦A35%、埦B62%、皿B23%と、埦類の比率が高い。埦Aは体部やや外傾気味の器形を呈し、埦Bも同様である。埦Bの体部下位から底面に削りはなく、糸切り痕を残す。高台は断面方形が踏ん張って付く。皿Bの高台も高くしっかりしたもので、底面削りされる。器種構成の変化や削りの省略、体部外傾化は後出の様相と言える。

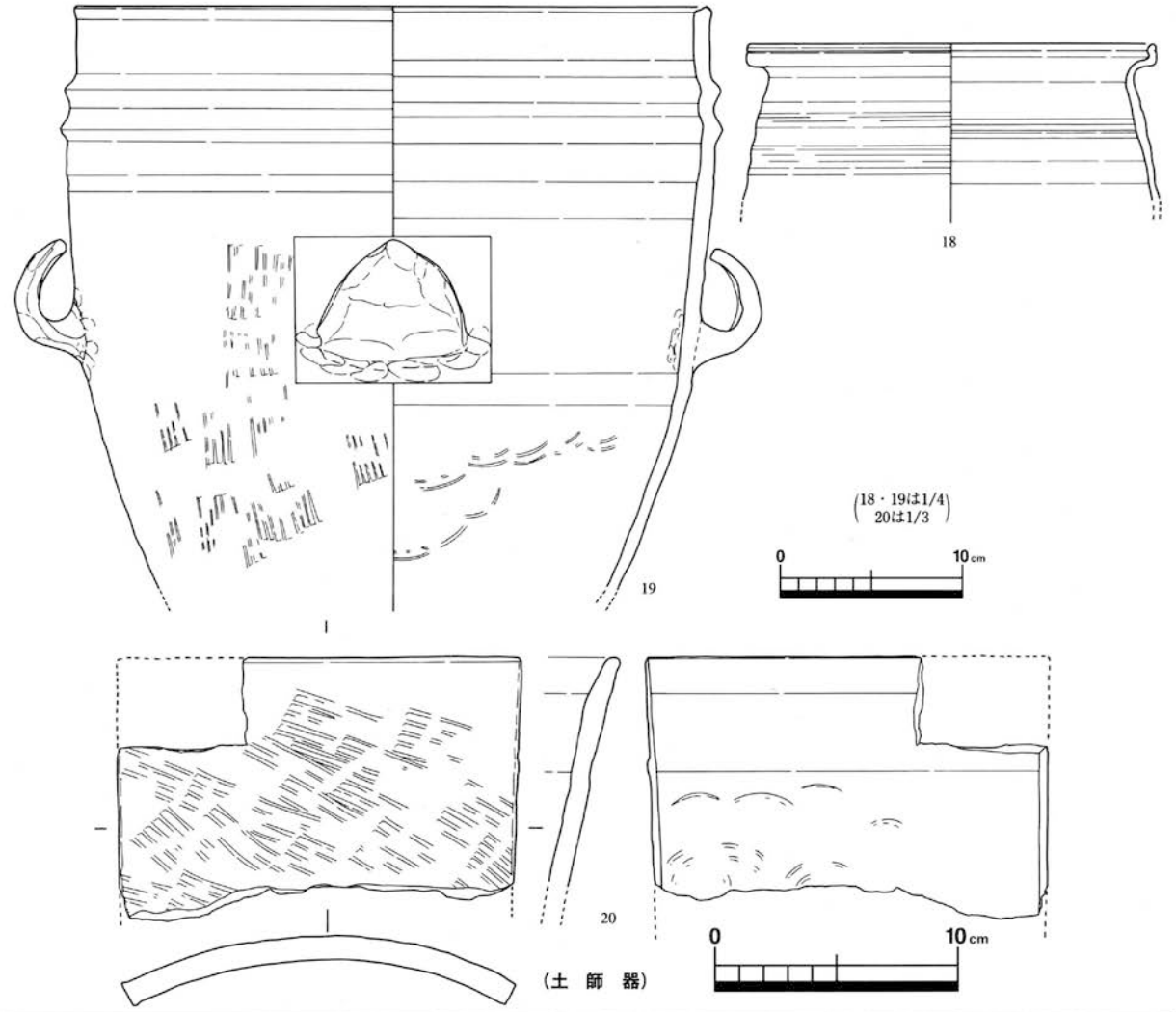
土師器煮炊具は検出個体数が多く、小釜で完形や略完形がある以外は、1/3以下の破片が主体である。小釜は小型（13・14）と中型（15～21）に分けられる。小型の13・14はa4類口縁部、中型のうち16は短く内傾するa3類、21は立ち上がり短いa2類、それ以外は長く直立するa1類である。一部カキ目の見られるものもあるが、ほとんどはロクロナデのみで、薄手でヒダが顕著である。釜は、胴部膨らみのB1類と厚手でずん胴型のA2類に分けられる。B1類が主体で、薄手の作りで。口縁部形態は22・23はa2類、24はe2類、25はa5類、26・27はb2類と様々であるが、口縁部は比較的薄く、上端直立か外反する系統のものである。これに対し、A2類は28が端部内外肥厚のc3類、29・30がc2類と、口縁部厚く内側に巻き込むような系統のものが主で、新しい様相をもつ。胴下半部叩き出しは内面同心円文当て後にナデており、一部完全にナデ消すものがある。鍋はいずれも一般的なA1類で、口縁部形は31・



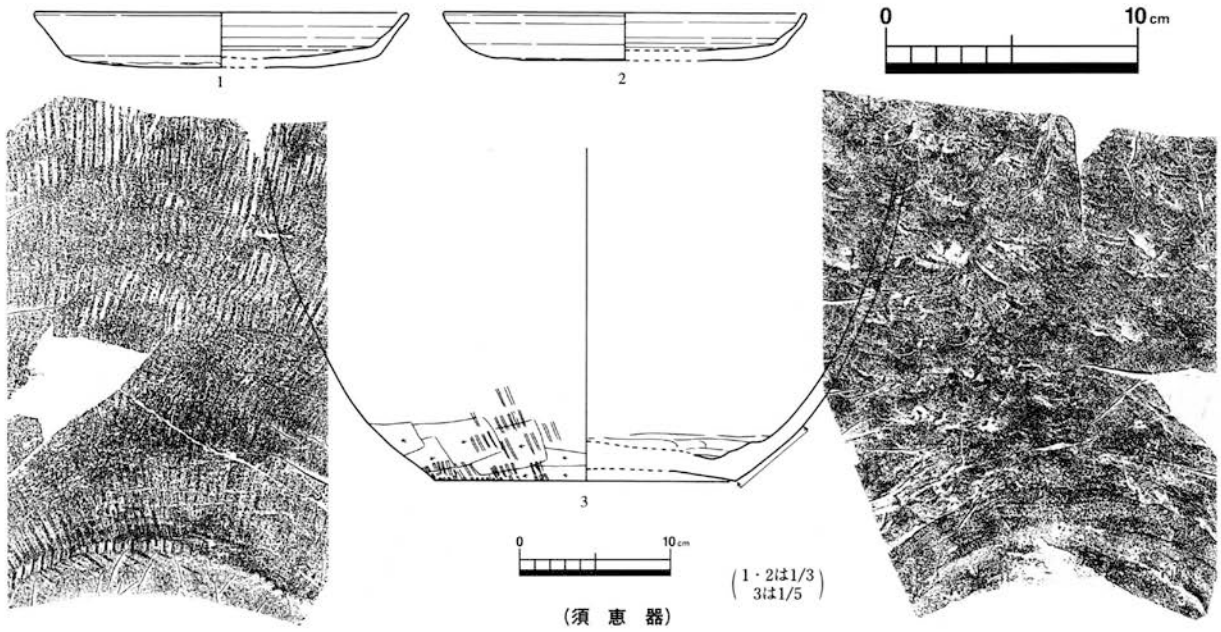
第219図　6号粘土採掘坑出土土器(3)、7号粘土採掘坑出土土器(1)（1/3、1/4）



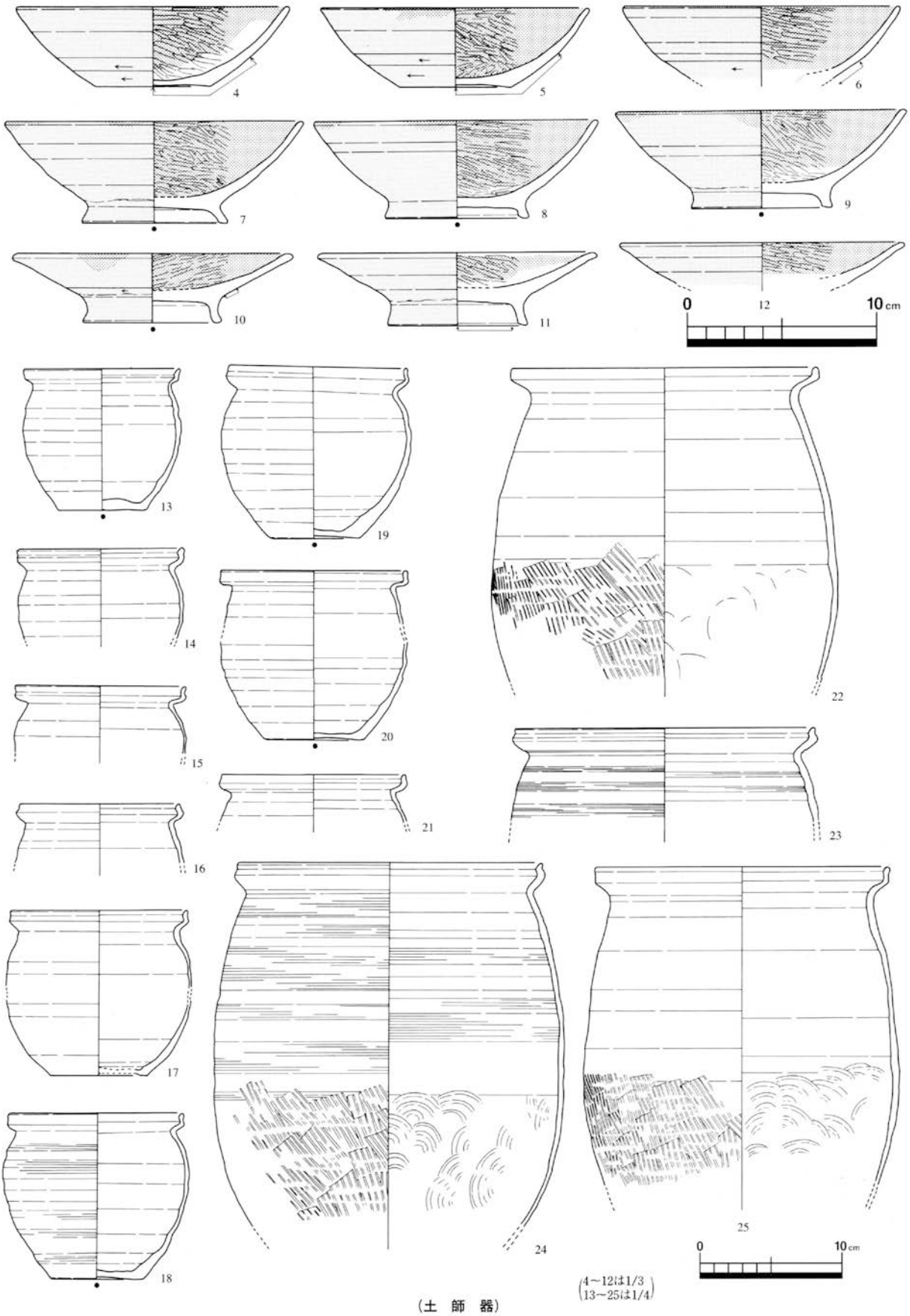
第220図　7号粘土採掘出土土器（2）（1/3、1/5）



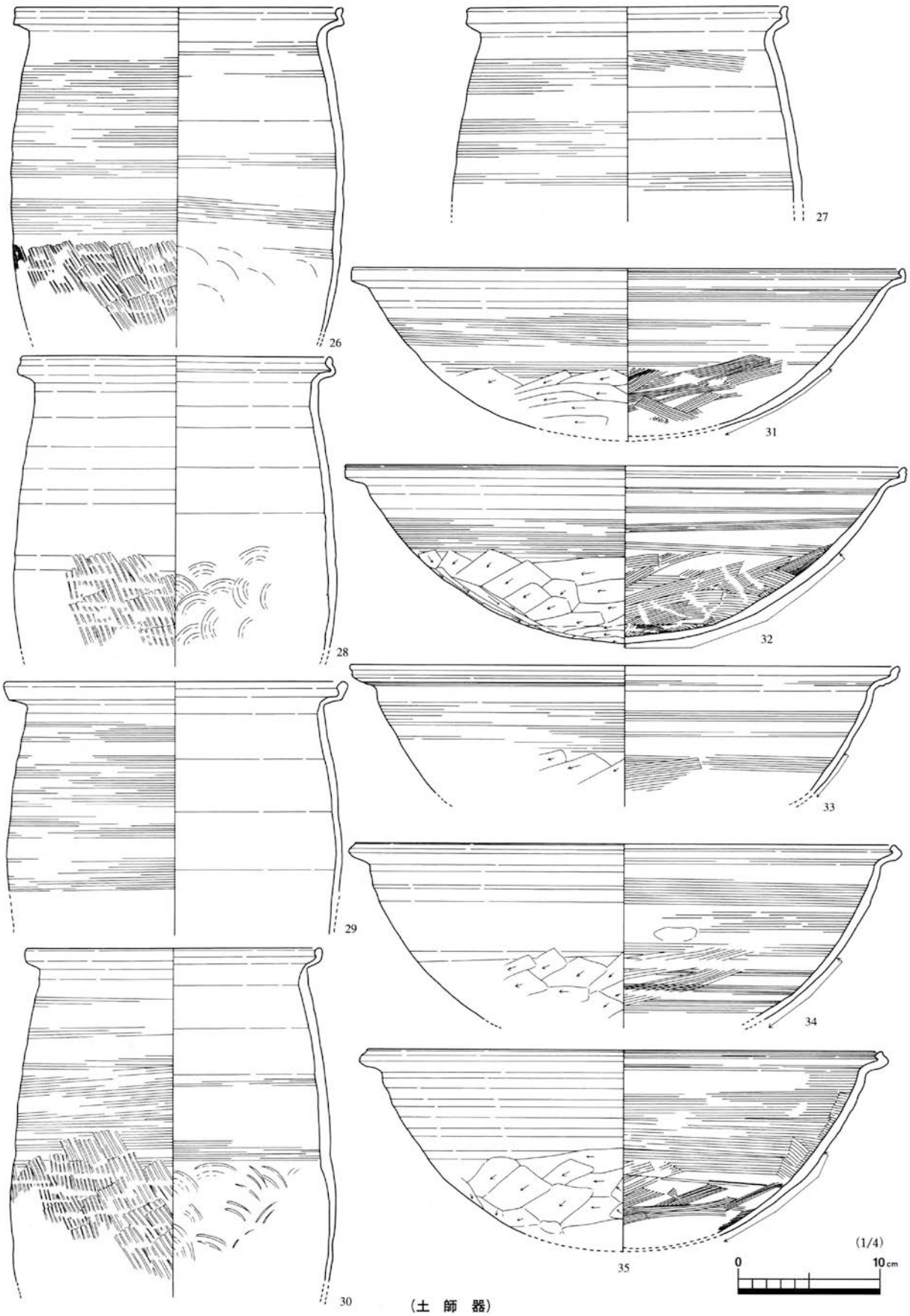
〈8号粘土採掘坑〉



第221図　7号粘土採掘坑出土土器(3)、8号粘土採掘坑出土土器(1)（1/3、1/4、1/5）



第222図　8号粘土採掘坑出土土器（2）（1/3，1/4）



第223図　8号粘土採掘坑出土土器(3)(1/4)

32がc2類、33がc3類とｃ類系統が主でとなる。34・35は上端短く内傾するa3類で、鍋特有の形態である。32は底部まで遺存する数少ない資料だが、底部円盤痕の確認できるものである。体下半から底部はかなり薄く作られており、外面削りが顕著に行われていたことがわかる。叩きを施した形跡はなく、内面からの刷毛工具による押し出しと、外面の削り調整によって丸底化させたことが読み取れる。

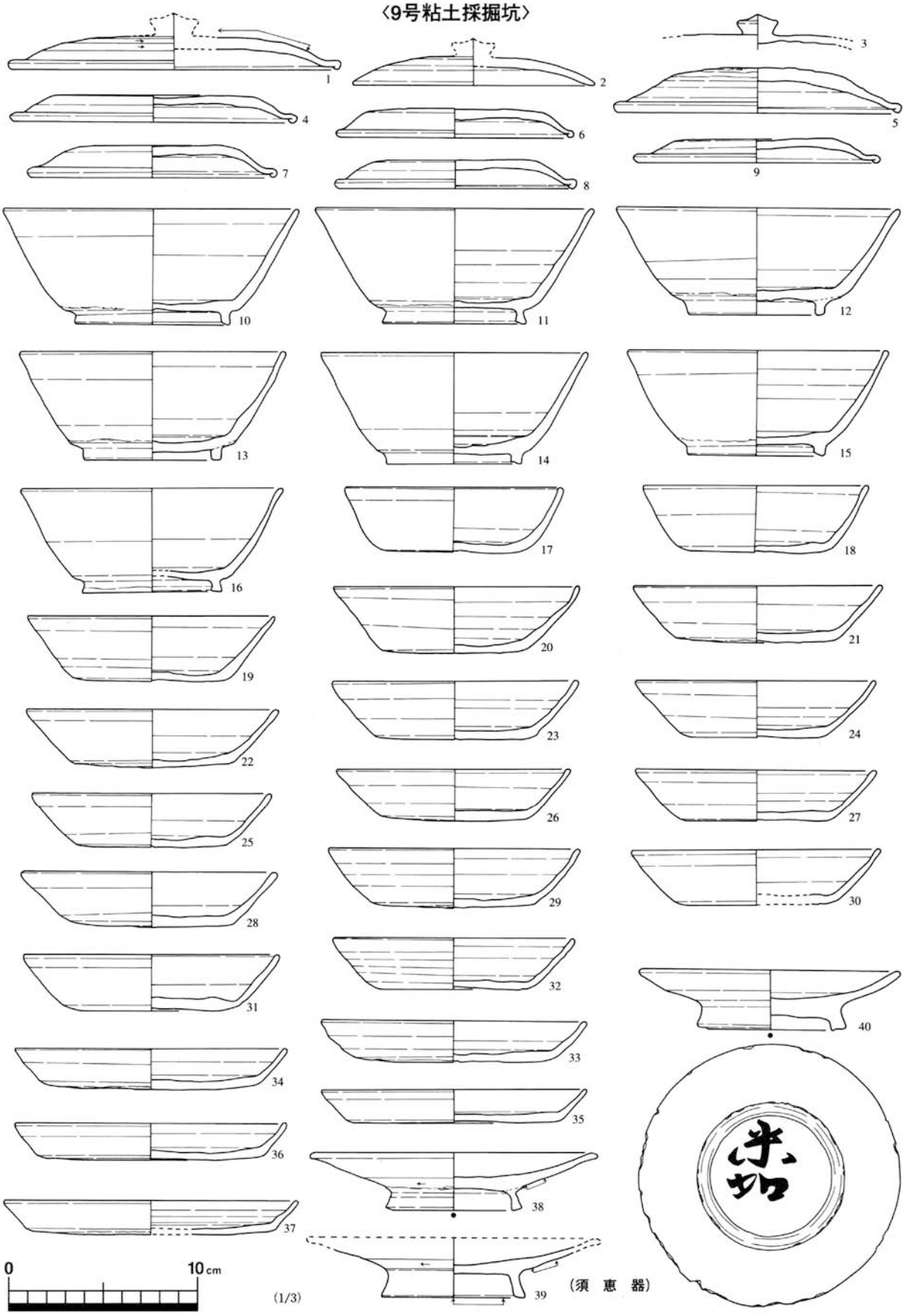
《９号粘土採掘坑》（第224～228図）

下層から土坑底面にかけて大量の須恵器と土師器が廃棄されている。須恵器は食膳具を中心に瓶Ｄの完形品を１個体含む。皿Ｂの底面に墨書したものがあり、使用品の廃棄も目立つ。土師器は内黒土師器食膳具を定量含むものの、煮炊具が大半を占める。

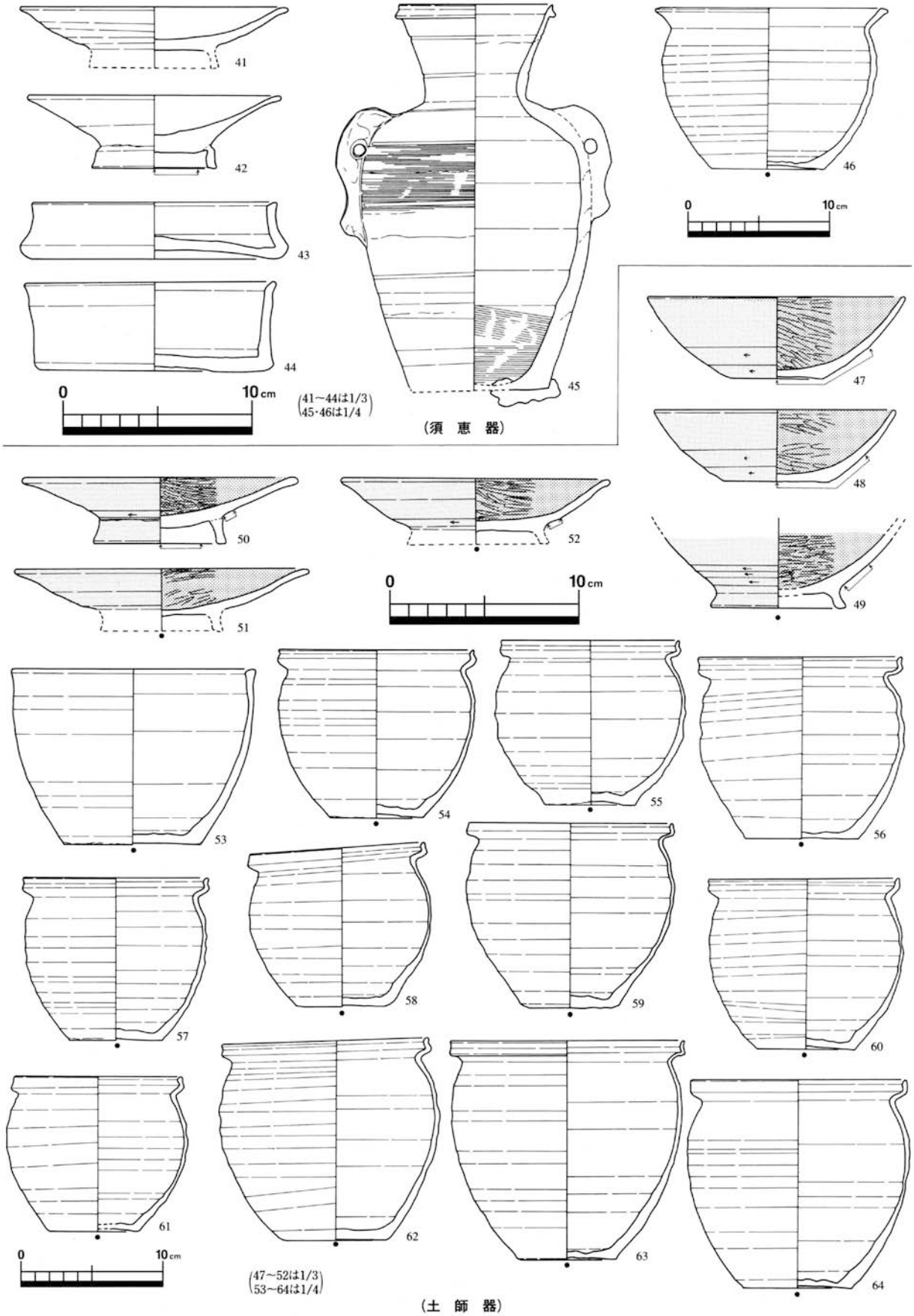
須恵器は、鉢Ｂ、瓶Ｄ、中甕、各１個体と数点の焼台以外は、食膳具が占める。坏Ｂ蓋・身、坏Ｅ蓋・身、坏Ａ、盤Ａなどの坏型食膳具が主で、皿Ｂは14％を占めるに過ぎない。坏Ｂ蓋に１～３のようなつまみを付すものがあり、Ⅵ1期のものが混在している可能性がある。ただ、全体的にⅥ1期の様相を残す古手のものであり、Ⅵ2期の中でも古段階に位置付けられるものと考える。食膳具は1/3以上の個体が多いが、摩耗痕のあるものは40の皿Ｂのみである。口縁端部や高台端が細かく欠け、内面が顕著に摩耗している。かなりの使用度をもつもので、底部厚く高台も分厚いものを付すなど特徴的な器形を呈している。底面に２字墨書があり、「米加ヵ」と読める。「米」墨書は確認例が少ないが、南加賀窯跡群の南端に近い松山Ｃ遺跡においてまとまって出土している。ほぼ同時期に位置付けられる墨書土器で「米」１字が多い。直接的な関連性は難しいが、「米」は「江沼」の表記とも言われており、「加」を加賀とすれば、加賀国江沼という表記を意味するかもしれない。松山Ｃ遺跡の南側に広がる江沼盆地には江沼郡衙が存在したと筆者は考えているが、郡衙関連での位置付けが可能なのかもしれない（石川県埋蔵文化財センター湯川氏にご教示いただいた）。

土師器は内黒土師器食膳具で埦Ａと埦Ｂ、皿Ｂが、煮炊具で小鉢、小釜、釜、鍋、甑が出土している。食膳具率は９％、煮炊具は小釜が60％以上、釜が26％、鍋９％、甑４％で構成される。食膳具は皿Ｂが主である。いずれも外面赤彩を施し、底面削り調整するものが目立つ。器形は埦Ａのやや深身を呈す特徴、皿Ｂの台径大きく踏ん張る高台形態など、古手の様相と位置付けできる。煮炊具は小釜と釜で完形ないしは半完形がまとまって存在し、甑も完形と半完形が各１個体ある。小釜は小型法量がなく、中型（54～61）と大型（62～71）に分けられる。中型は口縁部ｂ類系統とａ類系統とに分けられる。ｂ類系統が主体で、ｂ類は55～57がb1類、54・60がb2類、ａ類は58・59がa1類、61がa4類である。大型も口縁部ｂ類系統が定量存在するが、ａ類系統ないしはそれに近いｃ類系統が主体的である。62・63はb1類、66はb2類、64はa1類、67～70はa3類、71はa4類、65はc2類である。焼成の際に円形剥落したものもあり、多くは焼成失敗廃棄品と考えているが、59・66の胴部には被熱による赤変や煤痕跡が残り、使用による廃棄品も含まれている。釜は厚手ずん胴のA2類（73・76）と胴張り弱いB1類（74・78～81）、胴張り強いB2類（72・75・77）、器形はB1類と同様だが、胴部上位につまみ出し稜を１段形成するＣ類（82～84）がある。このＣ類器形については、当資料で顕在化する羽釜の影響が想定される。稜形成が貼り付けではなく、つまみ出す方法によっているため、ロクロヒダの顕著となったものという理解も可能であるが、通常の器形のものよりも確実に器高が高く、稜形成の箇所が羽釜の鍔の位置に似ることを重視し、竈掛け口用の鍔の代用と考えておきたい。他の遺構では確認できておらず、かなり突発的なものだったのだろう。口縁部器形は、A2類がc2類器形、B2類も同様のc2類を呈す。これに対し、B1類はｂ類系統が主で、78～81がb1類、74がa4類、器形がA2類と同様のＣ類も同系統のb2類口縁部をもつ。胴部下半の叩き出しは上位から底部への縦軸の叩きで、基本的に内面ナデが施される。当て具の残るものはいずれも同心円文当て具で、完全にナデ消すものが主体的である。当期に叩き出し境を縦方向削りするものは例外的だが、76で確認できる。鍋は、85のような小型で浅身タイプも確認されるが、内面横ナデ調整のＢ類（86・87）が主で、いずれもc2類口縁部をもつ。甑は通常の薄手大型のＡ類（88）と小型のＢ類（89）がある。口縁部形態や口縁部下の２段の稜形成、筒抜け底部形態、三角形状把手を内側に巻き込むように貼り付ける特徴など、共通しており、Ａ類の小型化した形態だが、概して、Ｂ類の方が細長い形態であり、厚手に作られる。

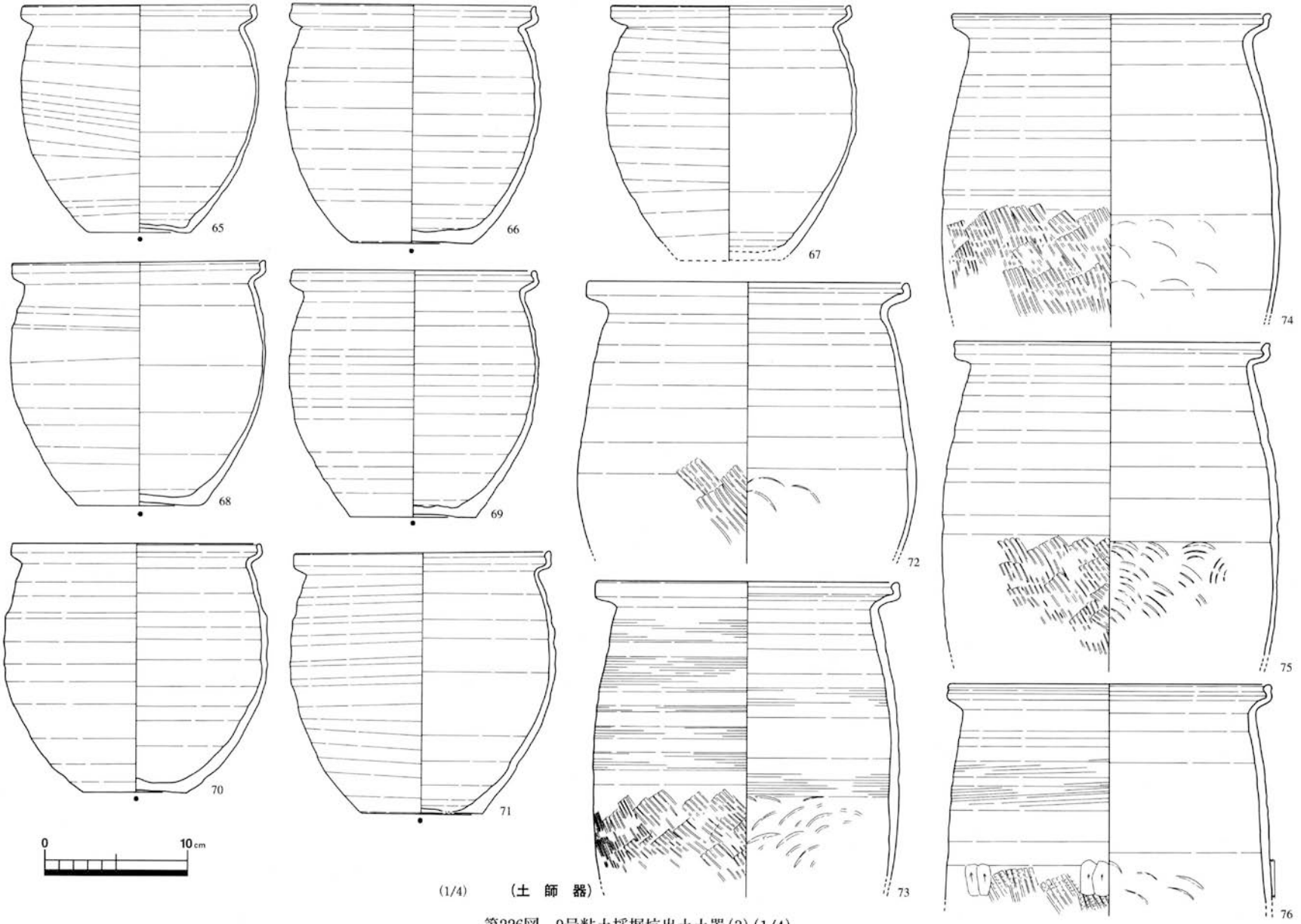
《10号粘土採掘坑》（第229～234図）



第224図　9号粘土採掘坑出土土器(1)(1/3)

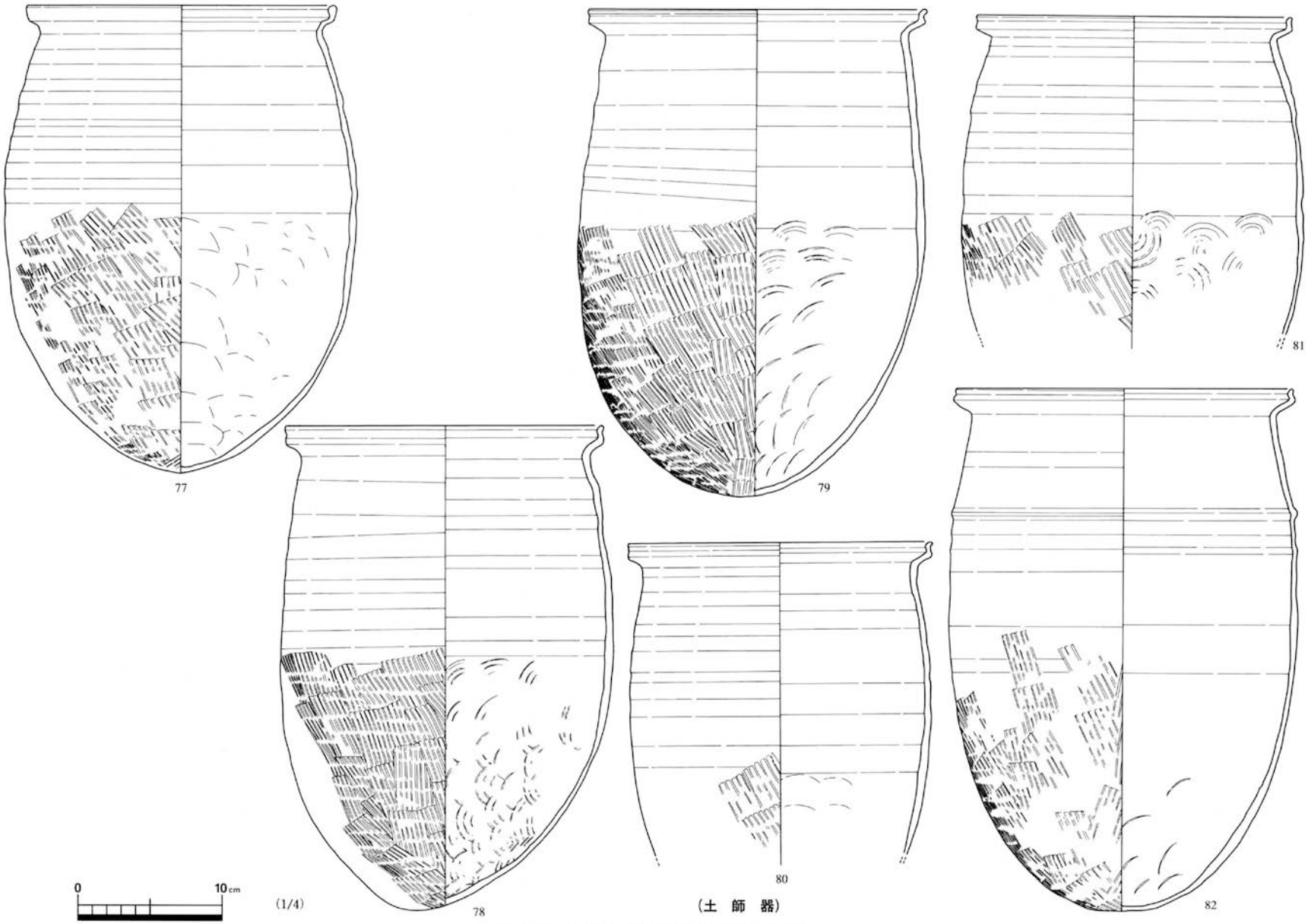


第225図　9号粘土採掘坑出土土器(2)(1/3,1/4)

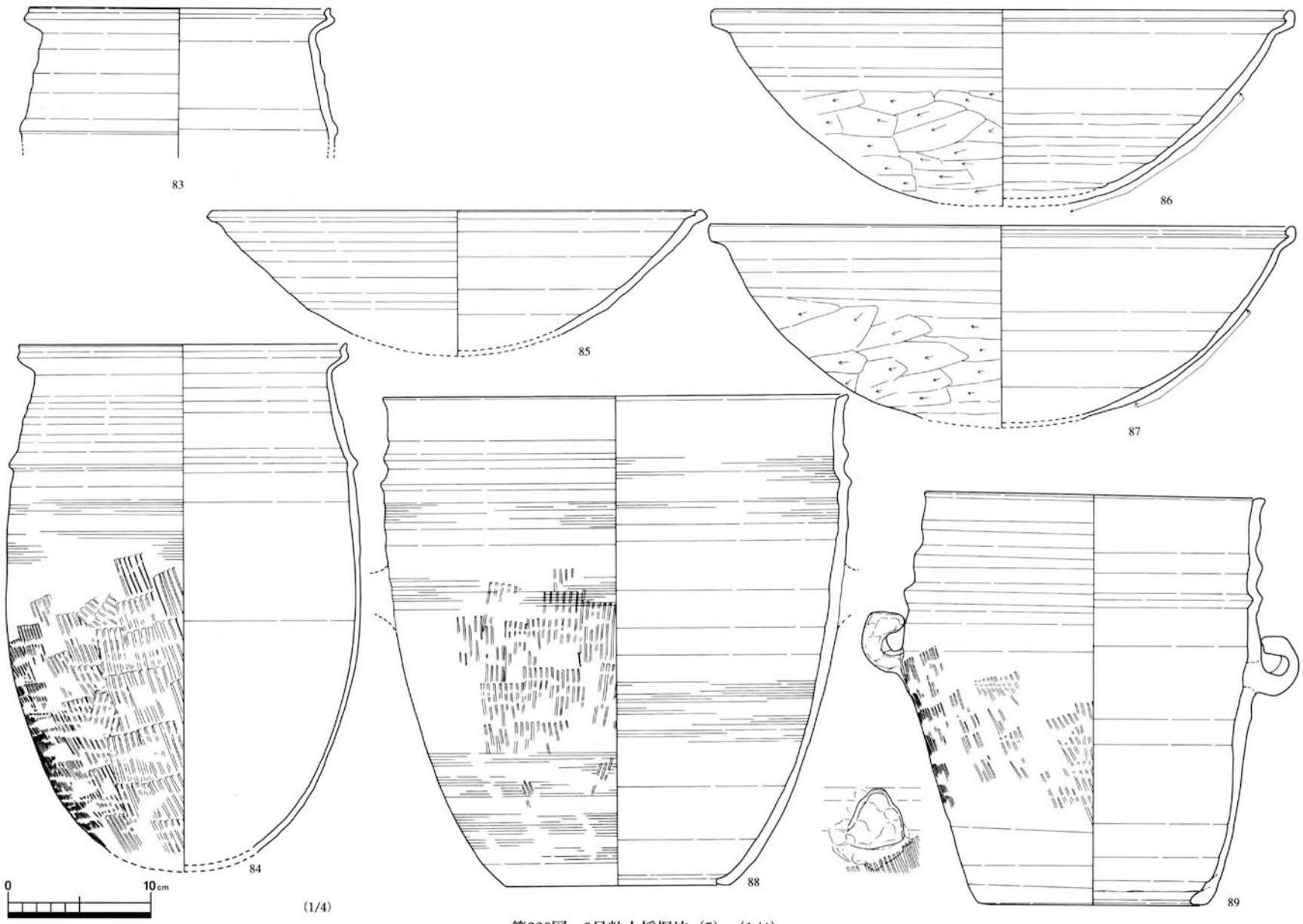


(1/4)　　(土　師　器)

第226図　9号粘土採掘坑出土土器(3)(1/4)



第227図　9号粘土採掘坑出土土器(4)(1/4)



第228図　9号粘土採掘坑（5）（1/4）

須恵器、土師器ともに大量に廃棄されている。破片数量で須恵器が７割以上を占め、食膳具も多いが、鉢類や瓶Ｄなど貯蔵具類も多い。摩耗痕や煤痕など使用に伴う廃棄品も定量含まれている。

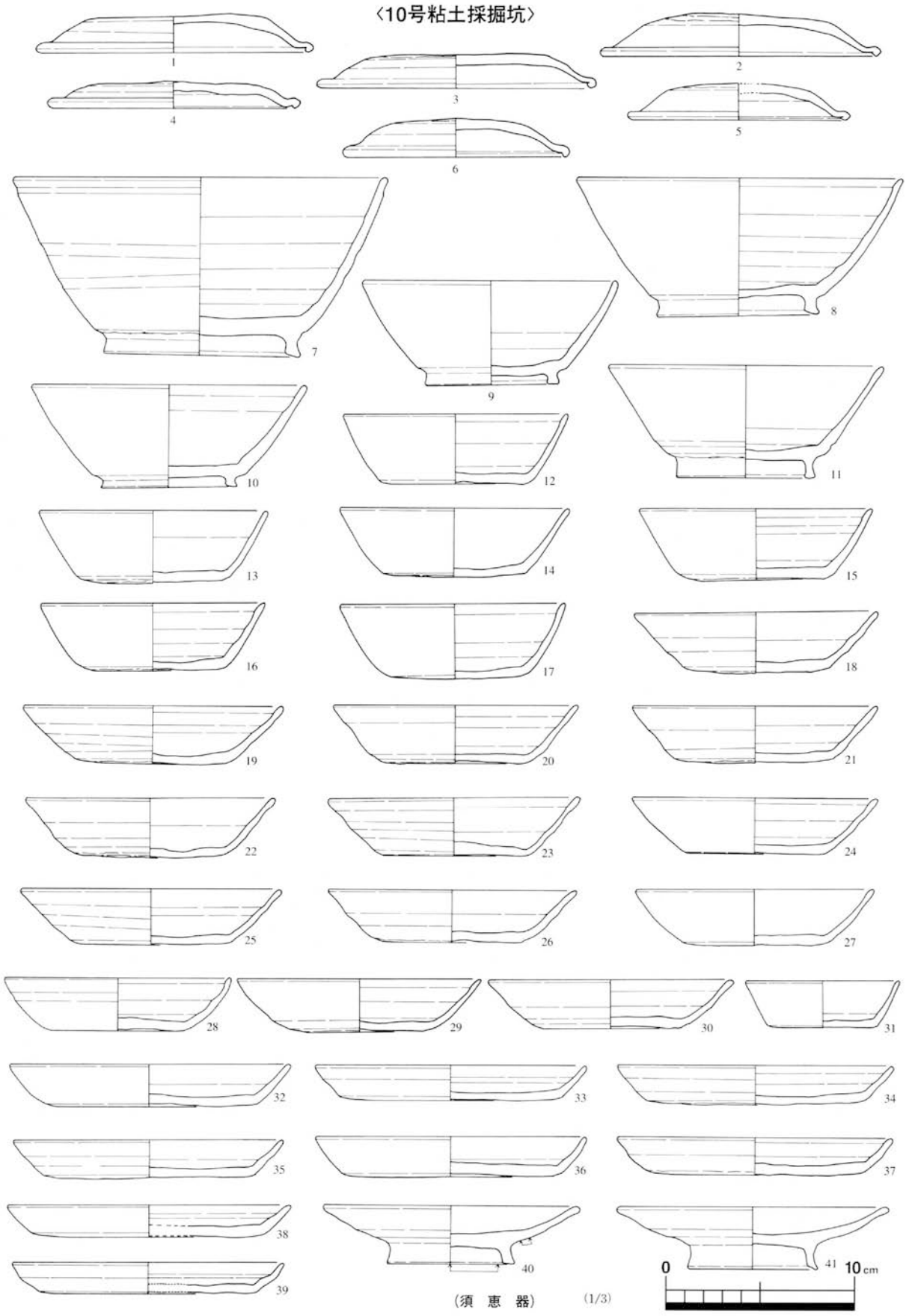
須恵器は、口縁部計測値で食膳具８割、貯蔵具２割の構成。食膳具では坏Ａと皿Ｂが23％程度を占める。坏Ｂと坏Ｅが15％程度と比較的多く、盤Ａも同量、小型坏も少ないながら出土している。食膳具を概観すると、深身の坏Ａや盤Ａ器形、坏Ｂ身の高台形態、坏Ｅ身の体部立ち上がり器形など、Ⅵ2期でも古手に位置付けられる傾向が強く、主体はⅥ2期の古段階から中段階にかけてと予想する。ただし、26・29・30のような浅身で薄手の坏Ａや39の盤Ａ、そして46・50・51のような高台径の小さな皿Ｂ、底径大きく深身の埦Ａ器形など、中段階から新段階にかけての様相をもつ一群がある。これは、貯蔵具でも同様で、71の瓶Ｄも口縁部器形から見るに新しい様相と判断する。単一の廃棄土器群ではなく、複数の廃棄土器群と位置付けるのが妥当だろう。

貯蔵具で図示した鉢Ｂや鉢Ｆ、鉢Ｇ、瓶Ｄ、壷Ａ、中甕は、いずれも完形か略完形のものである。底部欠損や底割れして廃棄されたものがほとんどだが、61の鉢Ｆは内底面の摩耗痕、72の壷Ａは台を欠いた後に台を割り揃えて摩耗、73の中甕は底部付近に摩耗痕がある。なお、中甕の成形痕跡についてだが、胴部縦軸整面叩き後に胴部最上位を横軸で整面叩き、底部叩き出しを行う。胴部縦軸整面叩きは内面木製無文当て具、最上位整面叩きは同心円文当て具、底部叩き出しは平行線文当て具を使用している。典型的ななで肩長胴甕の成形方法と言える。また、大甕については、胴部が横軸叩き、その後口頸部成形し、頸部を横刷毛調整、その上から胴部最上位整面叩きを施す。横軸叩きの内面は木製無文当て具、最上位整面叩きの当て具は平行線文当て具が使われている。

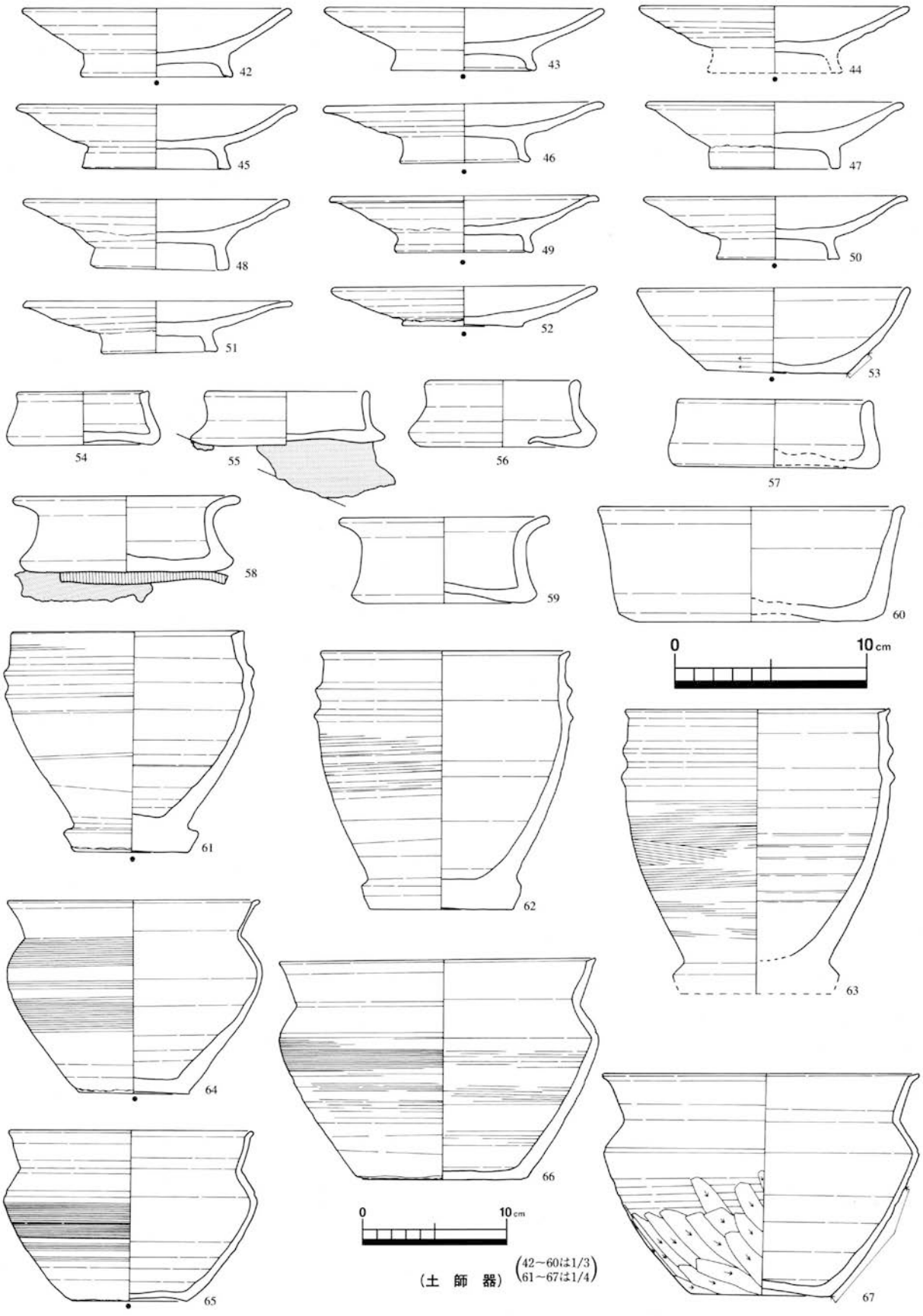
土師器は、口縁部計測値で食膳具が65％の高い率をもつ。食膳具では僅かに内外面赤彩土師器が確認されるが、他は内黒土師器で占められる。内黒土師器は外面赤彩を基本とするが、一部施されないものもある。器種は小型埦、埦Ａ、埦Ｂ、特大埦、皿Ｂで、皿Ｂが４割近くを占める。赤彩埦Ａ（75）は、内黒土師器に比べると薄手で内湾器形を呈し、作りが丁寧である。磨きは内面のみで、外面はロクロ調整のままである。器形から、Ⅵ期のものと判断できるが、当期まで下るものであるかは判断できない。次に、内黒埦Ａだが、立ち上がり立ち気味のものが目立つ。底面は薄く削られており、作りは丁寧。外面赤彩をしない78は体部厚手に作られる。小型埦79も外面赤彩しないものである。後出の可能性がある。埦Ｂは口径14～16㎝の通常法量と口径17㎝以上の大型法量がある。通常法量（80～85）は低平な器形のものもあるが、体部立ち上がり内湾気味のものがあるなど比較的深身で、高台は高くしっかりしている。底面と体部下位に削りをもち、作りが丁寧である。大型法量も基本的には通常法量と同様の器形を呈すが、よりつくりがよい印象を受ける。また、大型は口径からさらに、19㎝以下の86～88と20㎝程度の89・90に分けられる。特大埦（93・94）は口縁外端突出して上端に平坦面を形成する平底の埦で、口径25～30㎝を測る。薄手の作りで、丁寧な磨きが施される。皿Ｂは体部が強く開き、低平な皿部を形成する95～101と体部がやや内湾気味に立ち上がる102～108とがある。前者は台径大きく高い高台がつき、古手の様相をもつのに対し、後者は高台が小型であるなど後出する様相をもつ。ただ、102・103に関しては高台はしっかりとしており、古手のものかもしれない。

煮炊具は相対的に少なく、小釜と釜がほぼ同量程度、鍋はそれよりもやや少ない。小釜は胴部径により小型（118～122）と中型（123～127）に分けられる。小型はｂ類系統の口縁部器形で、120・121はb1類、118・119はb2類、122はb3類である。中型もｂ類系統が主体であるが、123はa4類、126はb1類、124・125はb2類、127はb3類である。釜は、129がA1類器形である以外は、いずれもB1類と考える。口縁部器形は、128がb1類、130がb2類、129・131がb3類、135がa4類、132・133が口縁部内端に肥厚して段もつa6類、134がc2類で、小釜同様、ｂ類系統が目立つ。また、胴部上位に稜を１段形成するＣ類（136）が確認されているが、胴部A1類器形で、口縁部はb4類に属すものである。釜はカキ目調整の施されるものが定量あるが、体部薄く引き伸ばす技法が主体的である。胴部下半叩き出しの確認できるものは内面当て具をナデ消す傾向が強く、一部同心円文が残るものもある。鍋はＡ類技法、a6口縁部器形をもつもの。

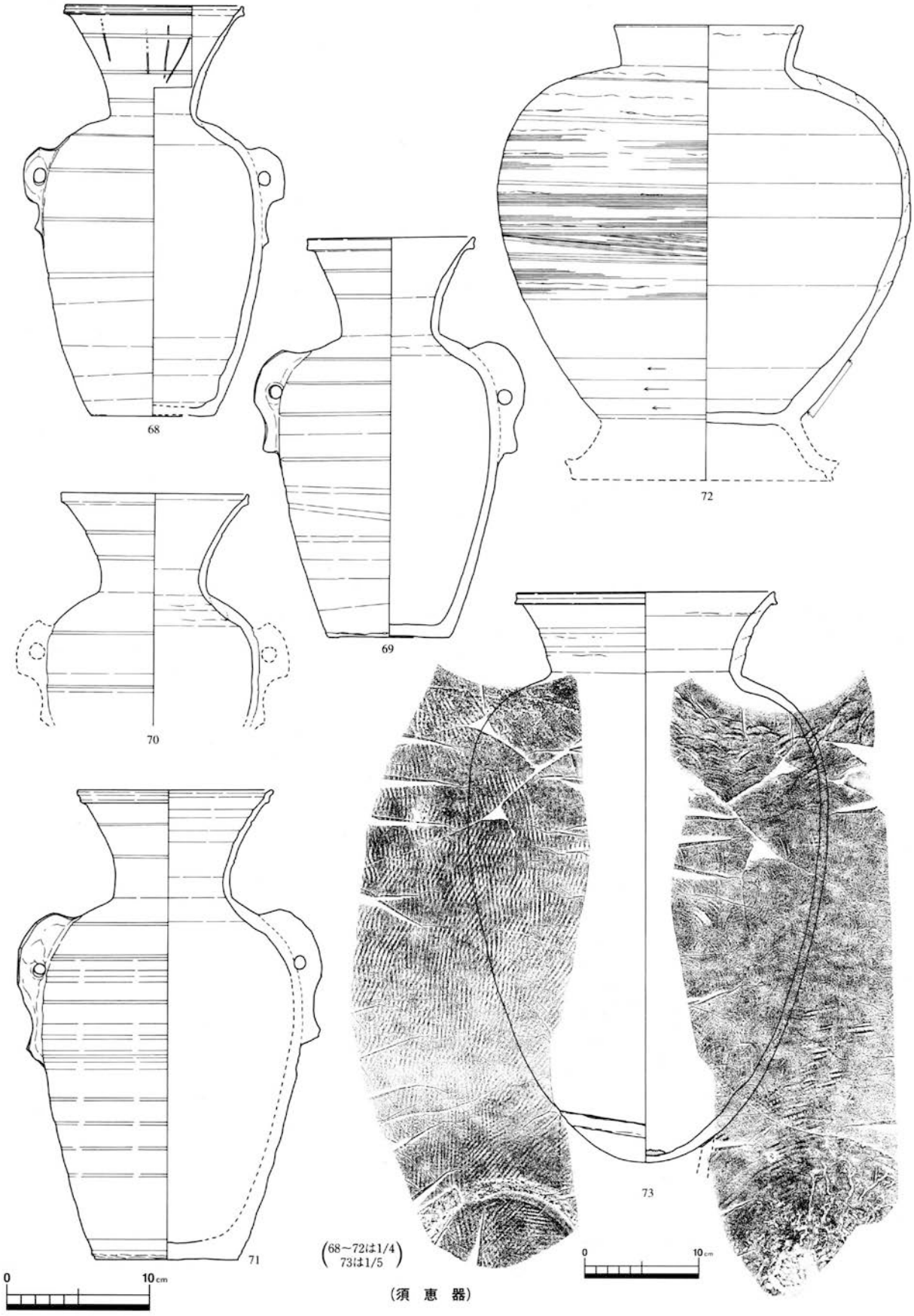
その他の器種として、管状土錘も確認される。また、窯道具として匣鉢が多く出土している。内黒土師器食膳具の出土が多いことと対応関係にあり、内黒焼成用の窯道具である可能性を高めている。体部薄手で直立器形をもつ通常タイプが大半を占めるが、114のような体部やや厚手で、底径小さめ、体部やや開き気味のものがある。



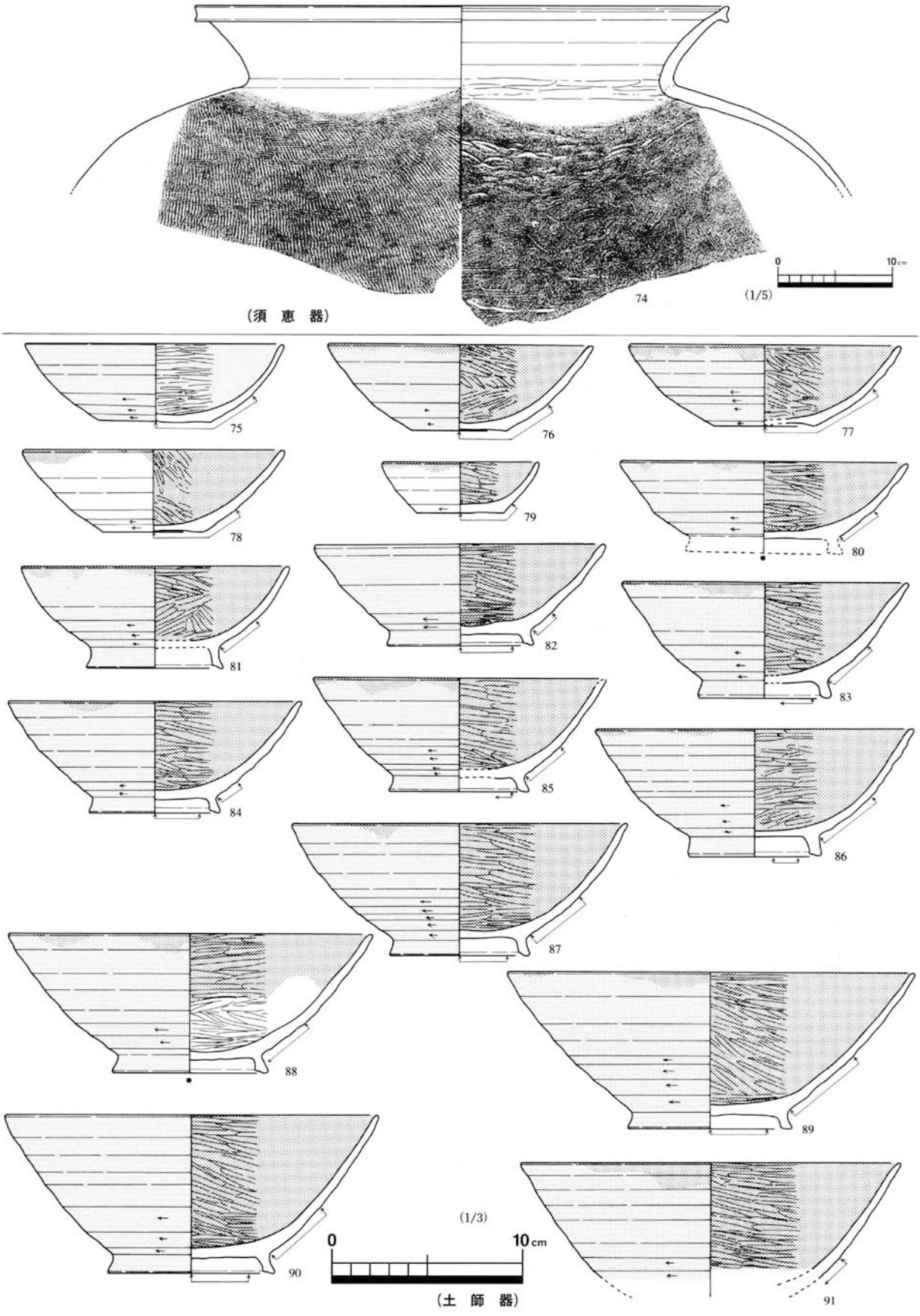
第229図　10号粘土採掘坑出土土器(1)(1/3)



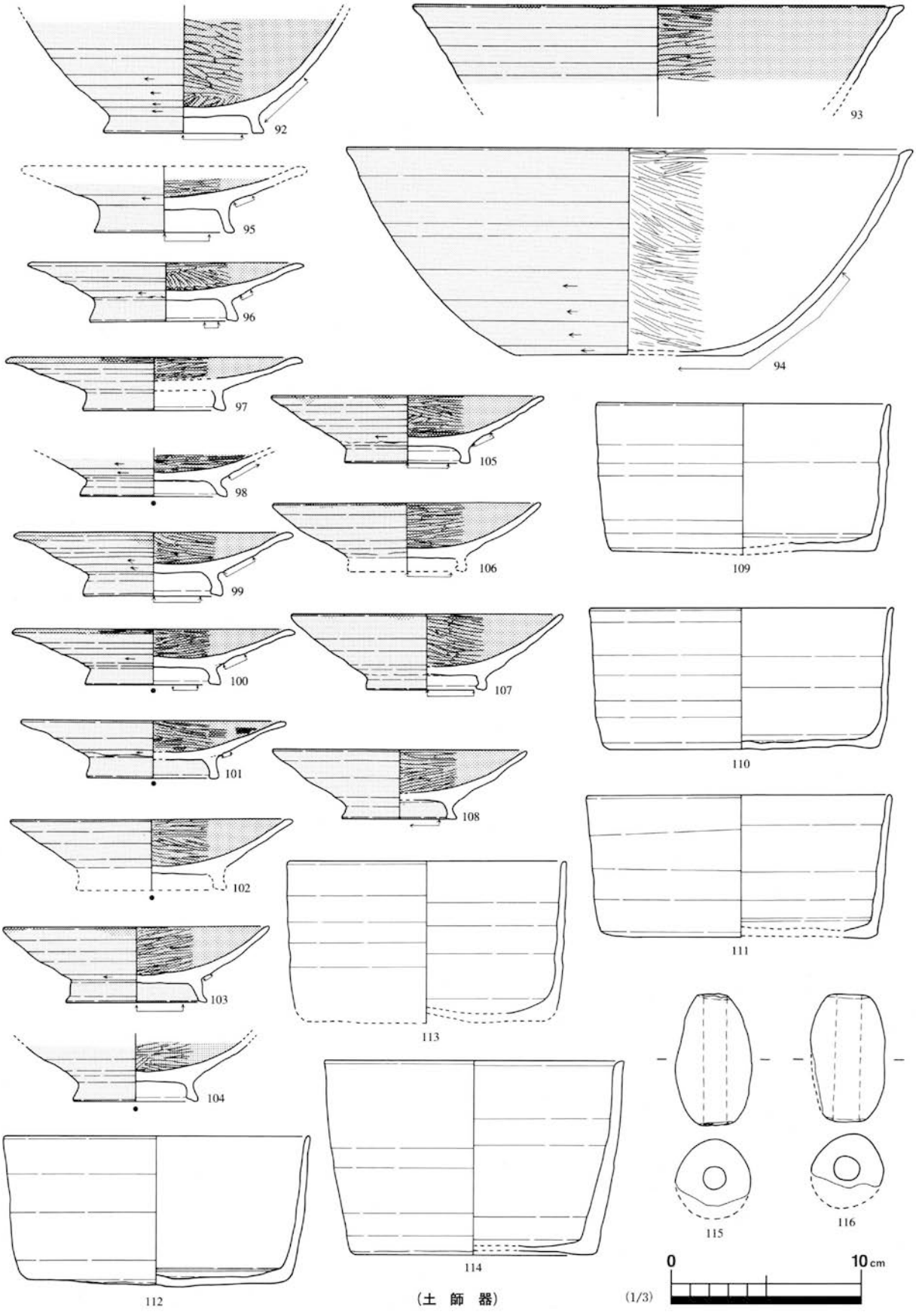
第230図　10号粘土採掘坑出土土器（2）（1/3，1/4）



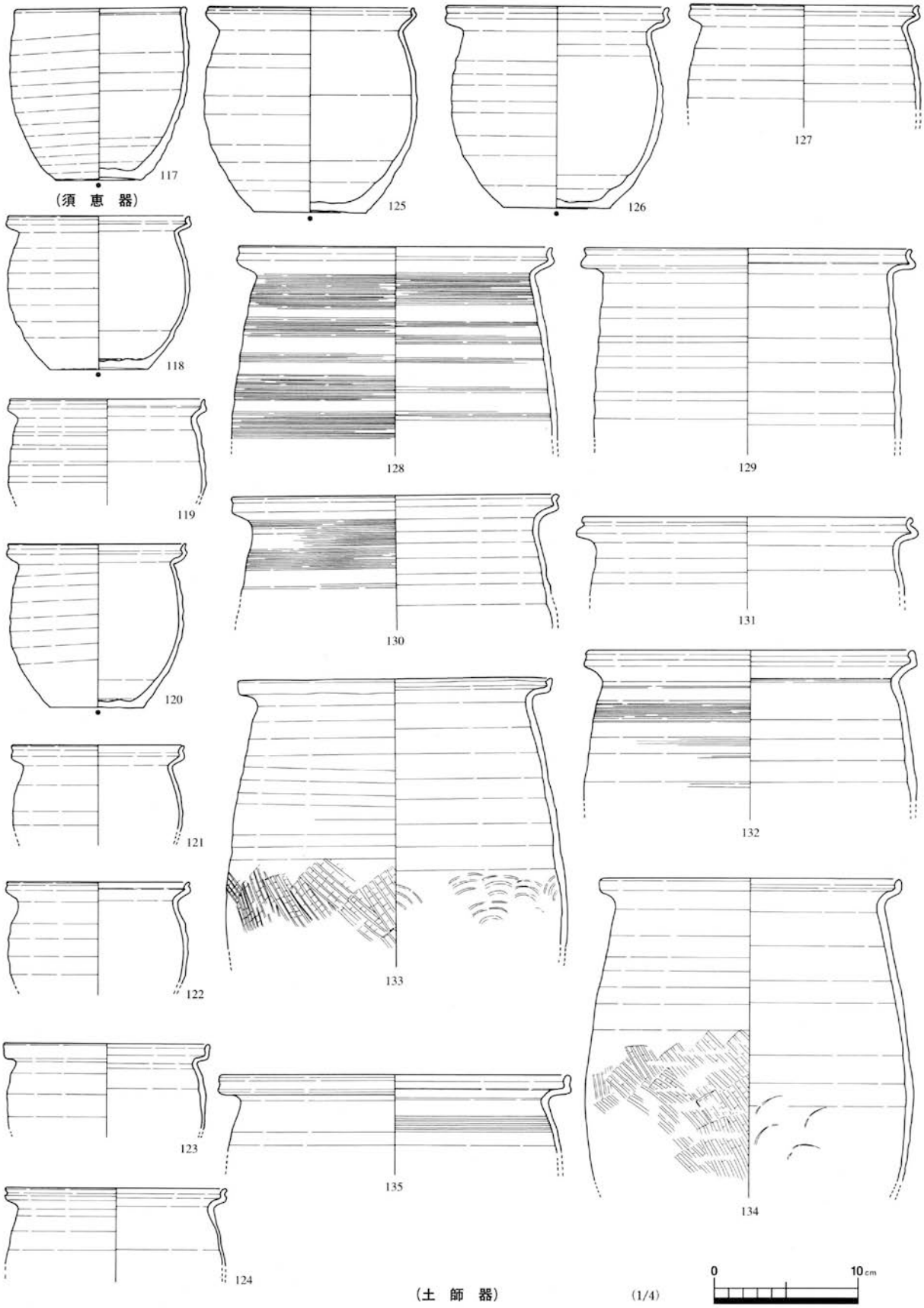
第231図　10号粘土採掘坑出土土器（3）（1/4、1/5）



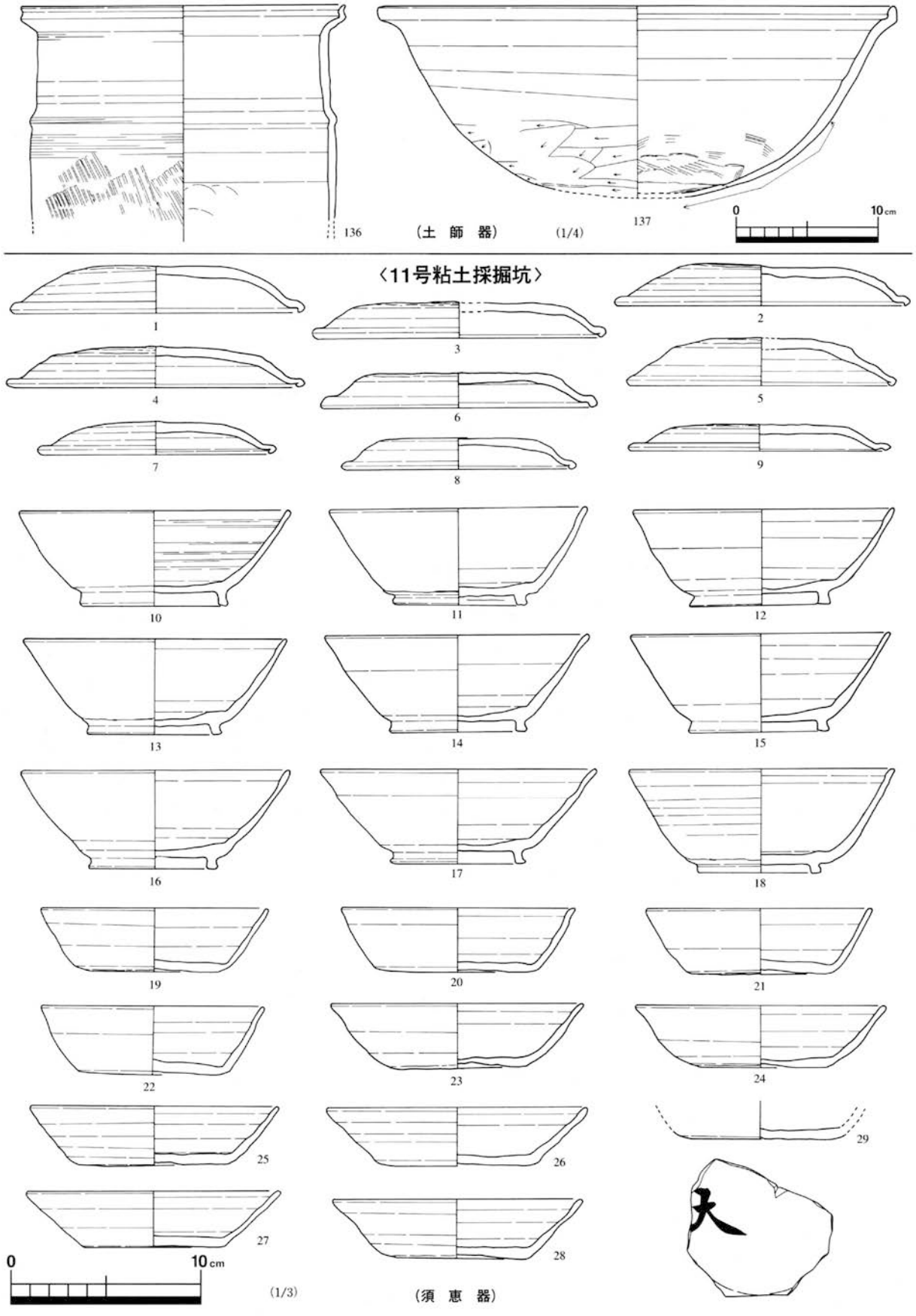
第232図　10号粘土採掘坑出土土器（4）（1/3，1/5）



第233図　10号粘土採掘坑出土土器（5）（1/3）



第234図　10号粘土採掘坑出土土器（6）（1/4）



第235図　10号粘土採掘坑出土土器(7)、11号粘土採掘坑出土土器(1) (1/3、1/4)

《11号粘土採掘坑》（第235～240図）

全体的に出土量は多く、須恵器食膳具の比率が高い。総量では須恵器が６割、土師器が４割で構成される。10号粘土採掘坑に類似した土器の出方をしており、複数の廃棄による土器群である可能性が高い。

須恵器は、口縁部計測値で食膳具が86％の主体を占める。食膳具では坏Ａ36％を始め、坏型食膳具が主体を占めるが、埦類で10％、皿Ｂも15％の率を占めており、定量含まれる。図示したものはほとんどが完形又は半完形のもので、焼成失敗品がほとんどを占めると予想する。ただ、一部摩耗痕のあるものや底面墨書「大」のある坏Ａ（29）もあり、使用品も混在する様相をもつ。食膳具はいずれもⅥ2期の範疇で収まるものであるが、器形から古から中段階に位置付けられるものと中段階から新段階に位置付けられるものとがあり、10号粘土採掘坑と同様程度の時期幅をもつ。ただ、主体は中～新段階で、坏Ｂ蓋・身の形態のしっかりした１～３・10～13や７・８・19～22の坏Ｅ、坏Ａ・盤Ａの深身を呈す23～28・43～46、高台高くしっかりした49・51は、古手に位置付けられる。埦類は中～新段階のもので、Ⅵ3期のものに比べて、内湾器形を呈し、底面削りを入念に施すなど丁寧な作りをもつ。

貯蔵具はこの時期に一般的な鉢Ｂ、鉢Ｃ、鉢Ｆ、瓶Ｂ、瓶Ｄ、瓶Ｅ、壷Ｆ、甕の他、鉢Ａと瓶Ａと思われるものが出土している。出土量は10号粘土採掘坑に比べると少なく、完形に復元できるものも少ない。特殊な鉢Ａと瓶Ａについてだが、鉢Ａ（64）は口径30㎝程度で、やや体部外傾する浅い盤型のものである。把手はつかず、全体的に薄く作られている。当期に位置付けられるものと考える。口径40㎝以上を測る69も鉢Ａの可能性を考えている器種であるが、かなり深い印象で、この時期に位置付けられるものかも不明である。また、同様に時期不詳のものとして、72の瓶Ａと思われるものがある。口頸部のみであるため、器種の認定が難しく、頸部内面が内側に突出している。頸部中央に貼り付けの突帯をもち、口縁部やや外反する程度で端部は短くつまみ出す程度である。

土師器は口縁部計測値で食膳具率45％と高い。埦類が５割、皿Ｂが５割で、埦類では埦Ｂが大半を占める。埦Ａは外面赤彩で磨きを施さない小型坏Ａ器形の78と通常器形の内黒土師器79がある。前者は底面削り調整で、薄手の作りをしている。埦Ｂは外赤内黒土師器で、口径12㎝台の小型78と通常法量の79・80、口径17㎝以上の大型、25㎝以上の特大型がある。大型は体部開く浅型の83と通常器形の82・84、体部深く立って口径が小さめを呈す深型の81に分けられる。いずれの埦Ｂも高台がしっかりと踏ん張って立つ器形で、体部下位から底面の削りも施される。また、埦Ｂの中には内黒しない86がある。体部中位に稜を形成して口縁部外反する稜椀器形のもので、内面は磨きが施される。皿Ｂは87が台径大きめで、体部開く器形を呈しており、古手の様相をもつが、他は高台径小さめで、やや体部埦形を呈すなど中段階以降の様相をもつ。また、93～95の一群は台径大きいものであるが、厚手で作りが雑であり、底面糸切りを残すなど後出様相をもつ。

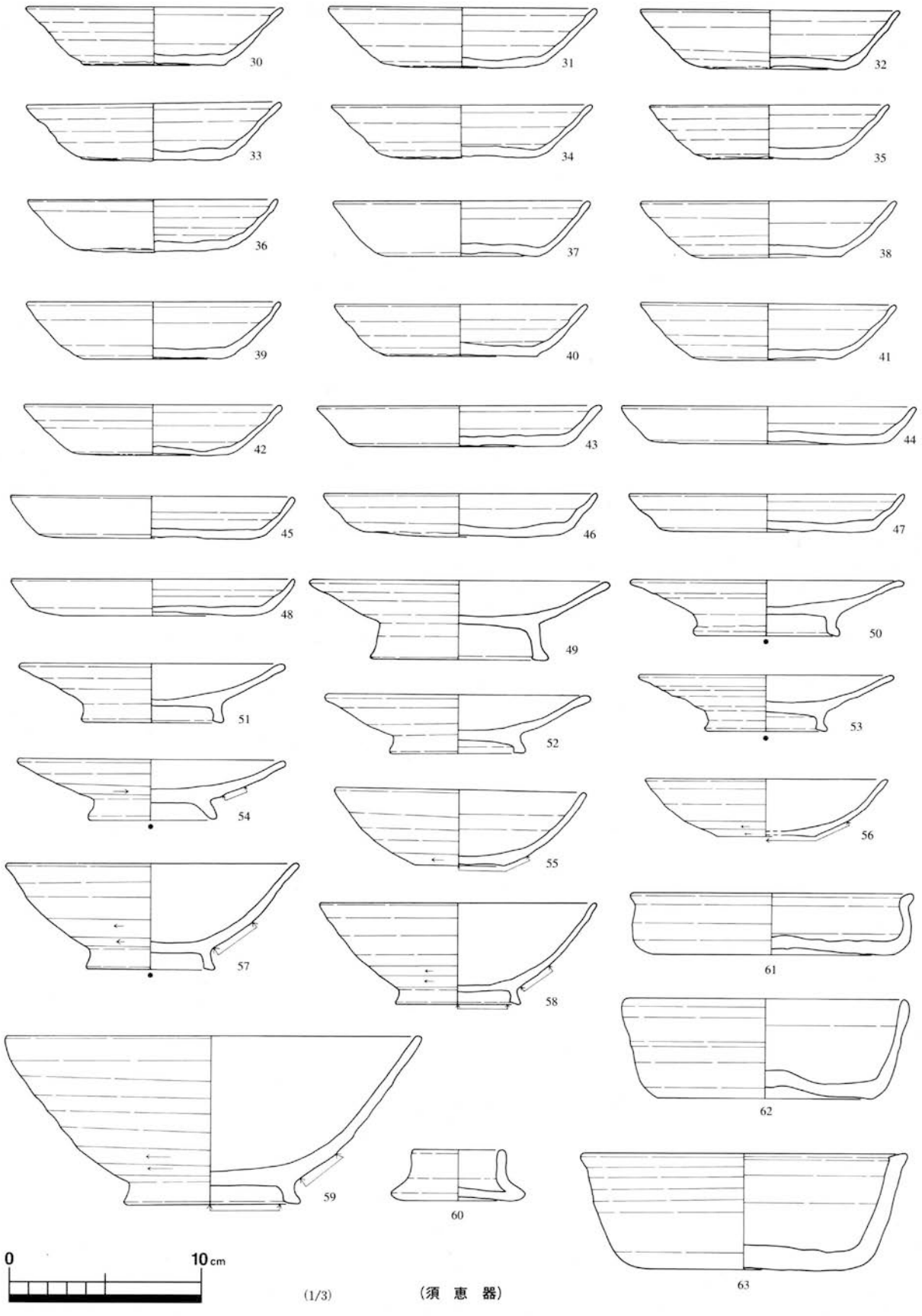
煮炊具は小釜の率が高く、口縁部計測値で６割以上、釜が３割以上、鍋は少ない。10号粘土採掘坑に比べると、図化できた個体数は多く、特に小釜と釜が多い。小釜は、胴部径から小型（99・101～105）と中型（96～98・106～111）、大型（112～116）の３法量に区分できる。口縁部器形では小型がいずれもc2類器形、中型では98がb1類、96・97がb2類、107・109・111がb3類と、ｂ類系統が主体を占める。106はa3類、108・110はa5類である。大型もｂ類系統が主で、112・113はb2類、114～116はb3類である。ロクロヒダ顕著で体部薄いものが目立つ。釜はいずれもB1類器形で、口縁部器形は123・124・126・127がa1類、117がa2類、118～120がb2類、121・122がb4類、125がc2類である。ｂ類系統が主体的である。外面カキ目調整が目立ち、胴部下半叩き出しは同心円文を残すものが多い。鍋は128がb1類、129がb2類口縁部器形で、ｂ類系統口縁部が主体的である。

《１号掘立柱建物跡》（第241図）

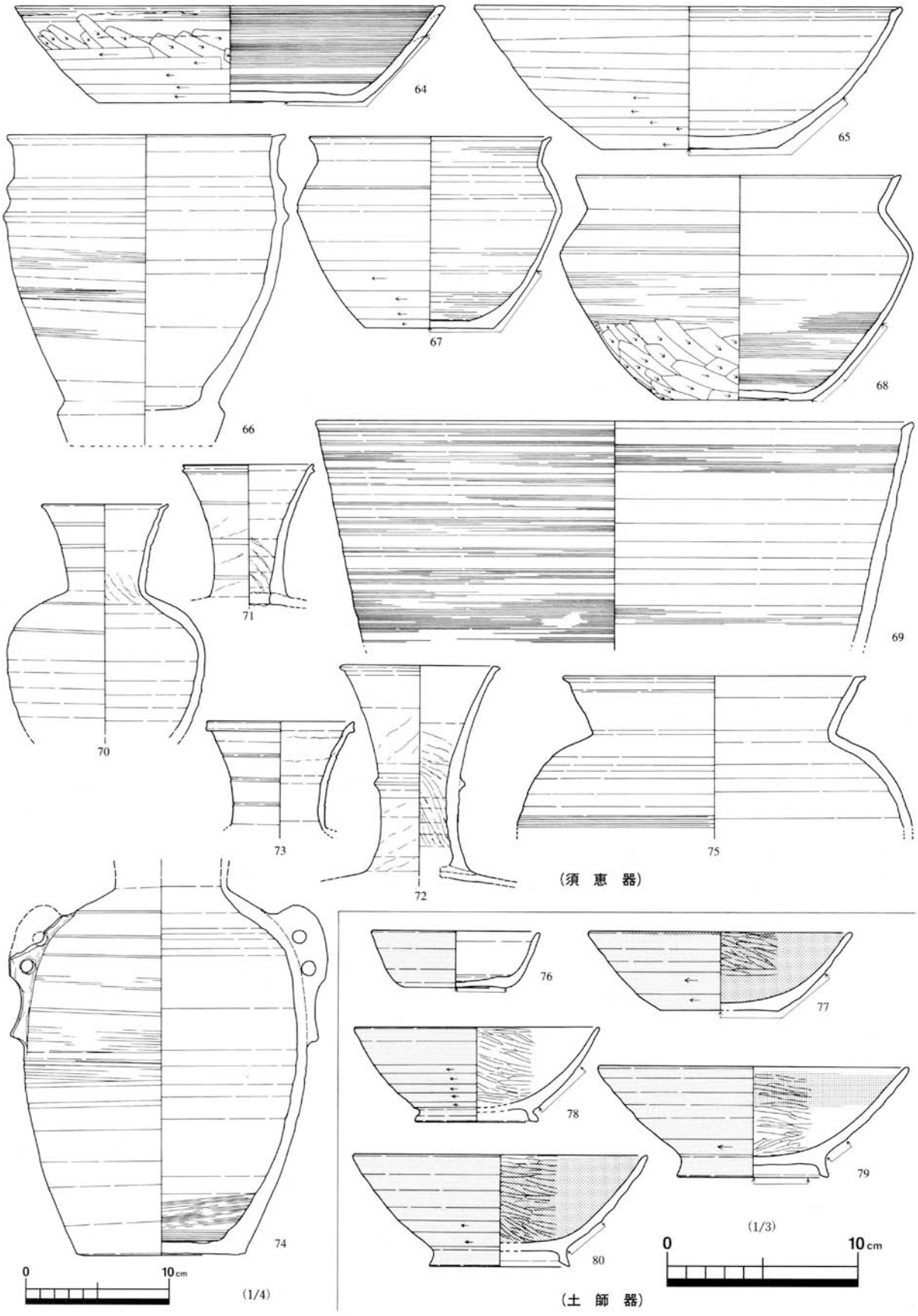
遺物は少なく、図化できたのは須恵器坏Ｂ蓋と須恵器鉢Ｂ、土師器鍋である。須恵器坏Ｂ蓋の器形からⅥ2期と位置付けられるものであり、土師器鍋に関しても同時期で差し支えない。

《７号窯灰原》（第241～249図）

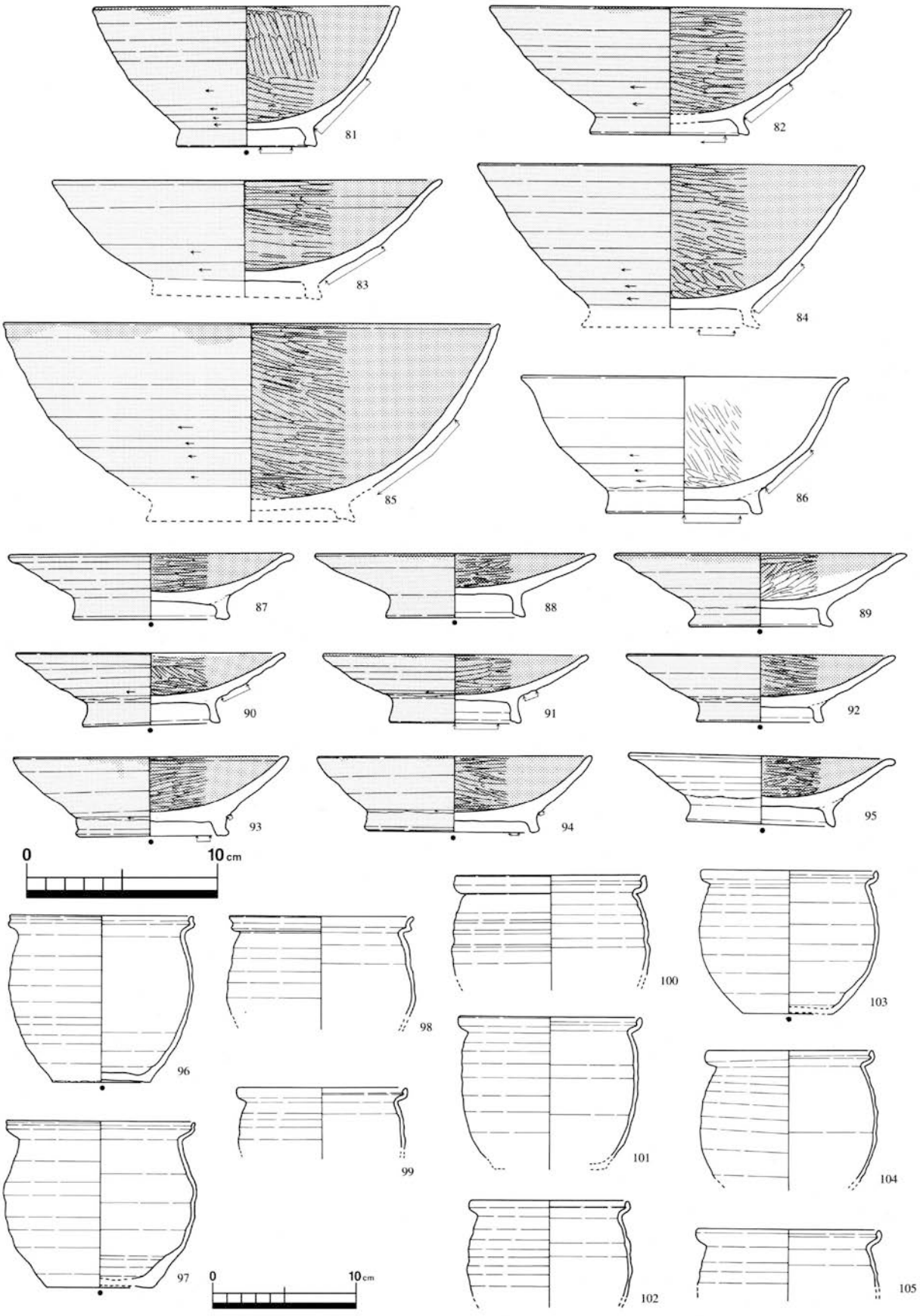
粘土採掘坑群の陥没穴に堆積した灰原であり、その一部は各粘土採掘坑の上層部分と混在している。また、当灰原には数箇所、土器集中箇所があり、それらは各粘土採掘坑の一括廃棄に類似する性格をもつ可能性がある。



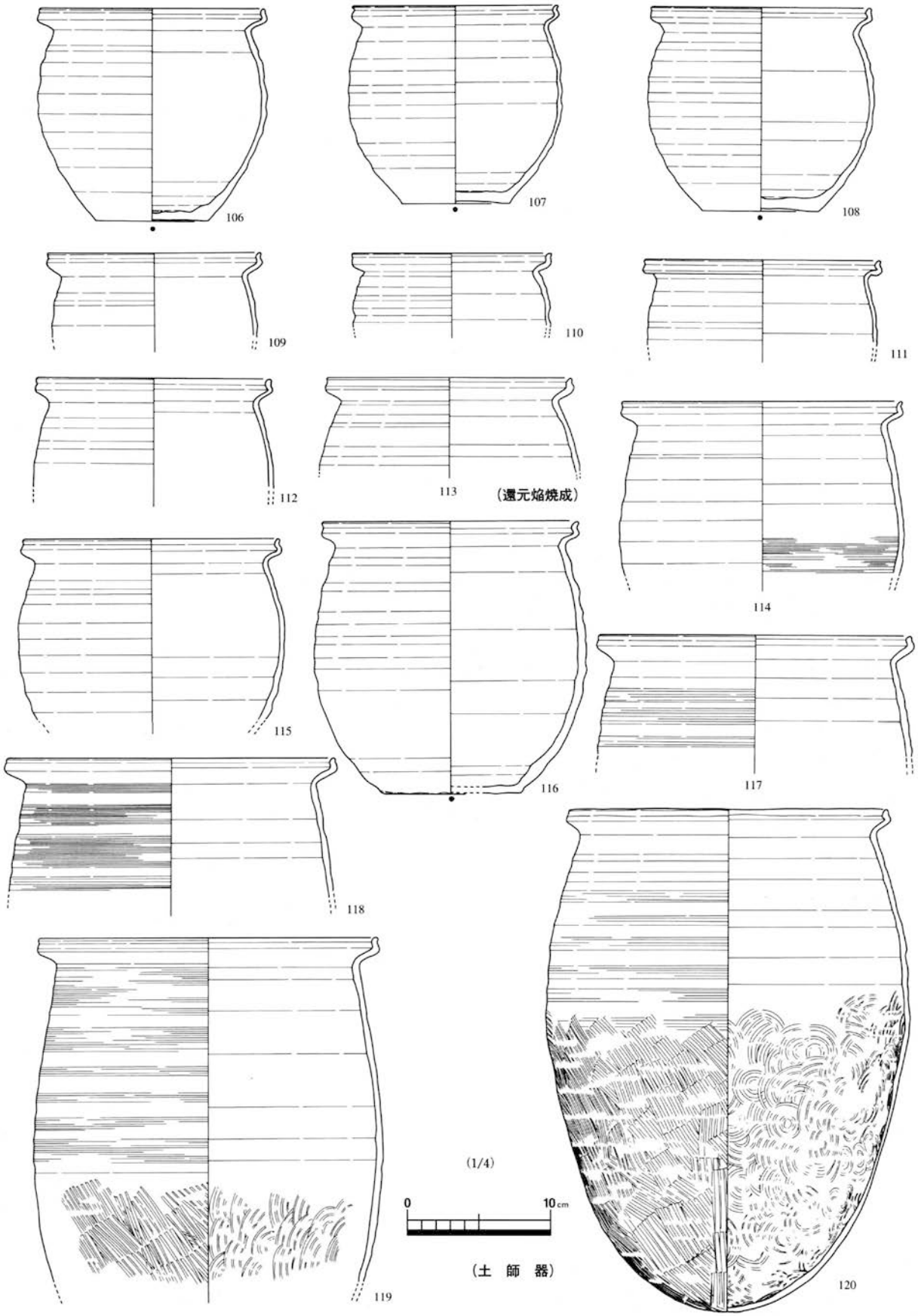
第236図　11号粘土採掘坑出土土器（2）（1/3）



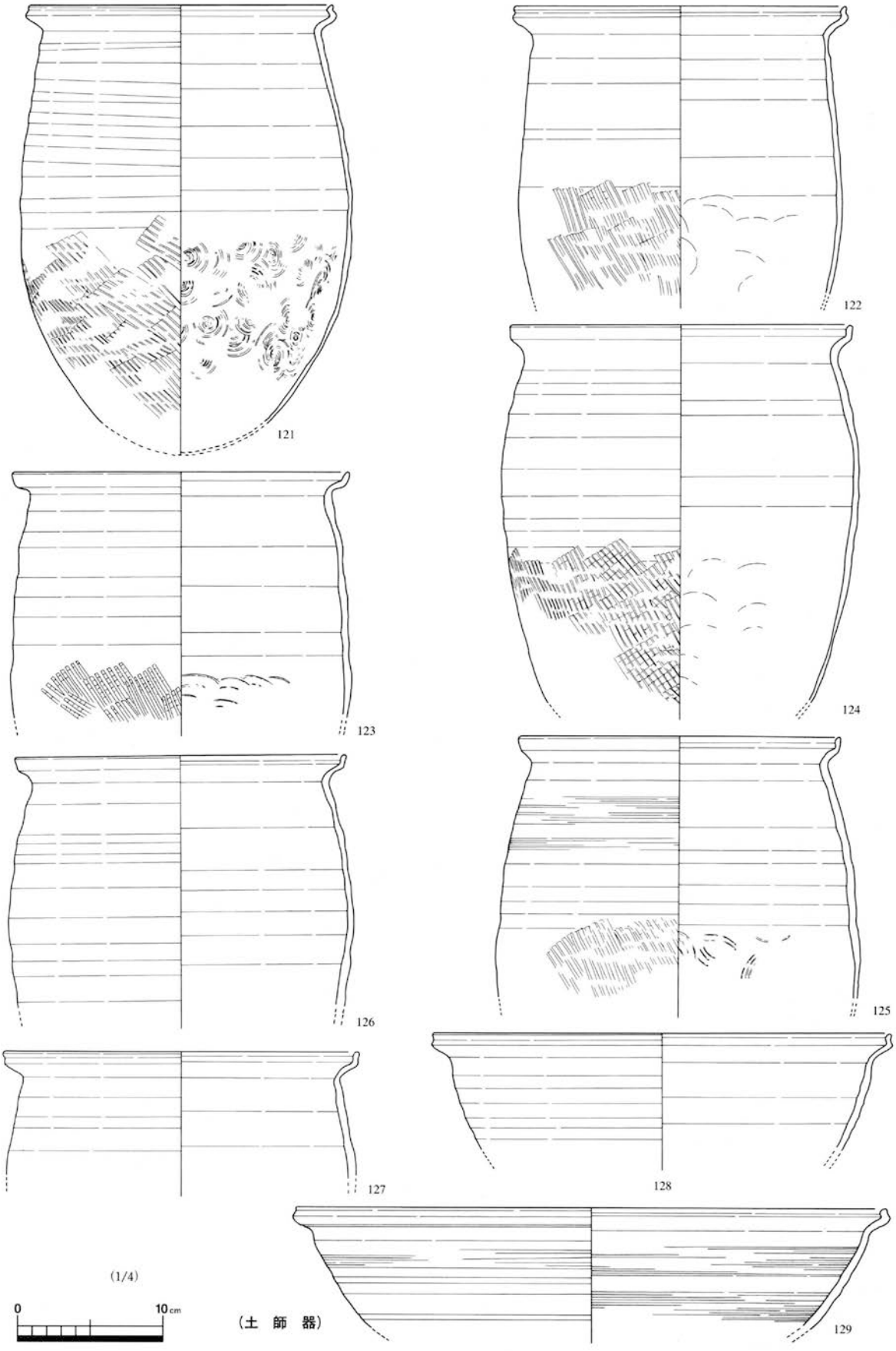
第237図　11号粘土採掘坑出土土器（3）（1/3、1/4）



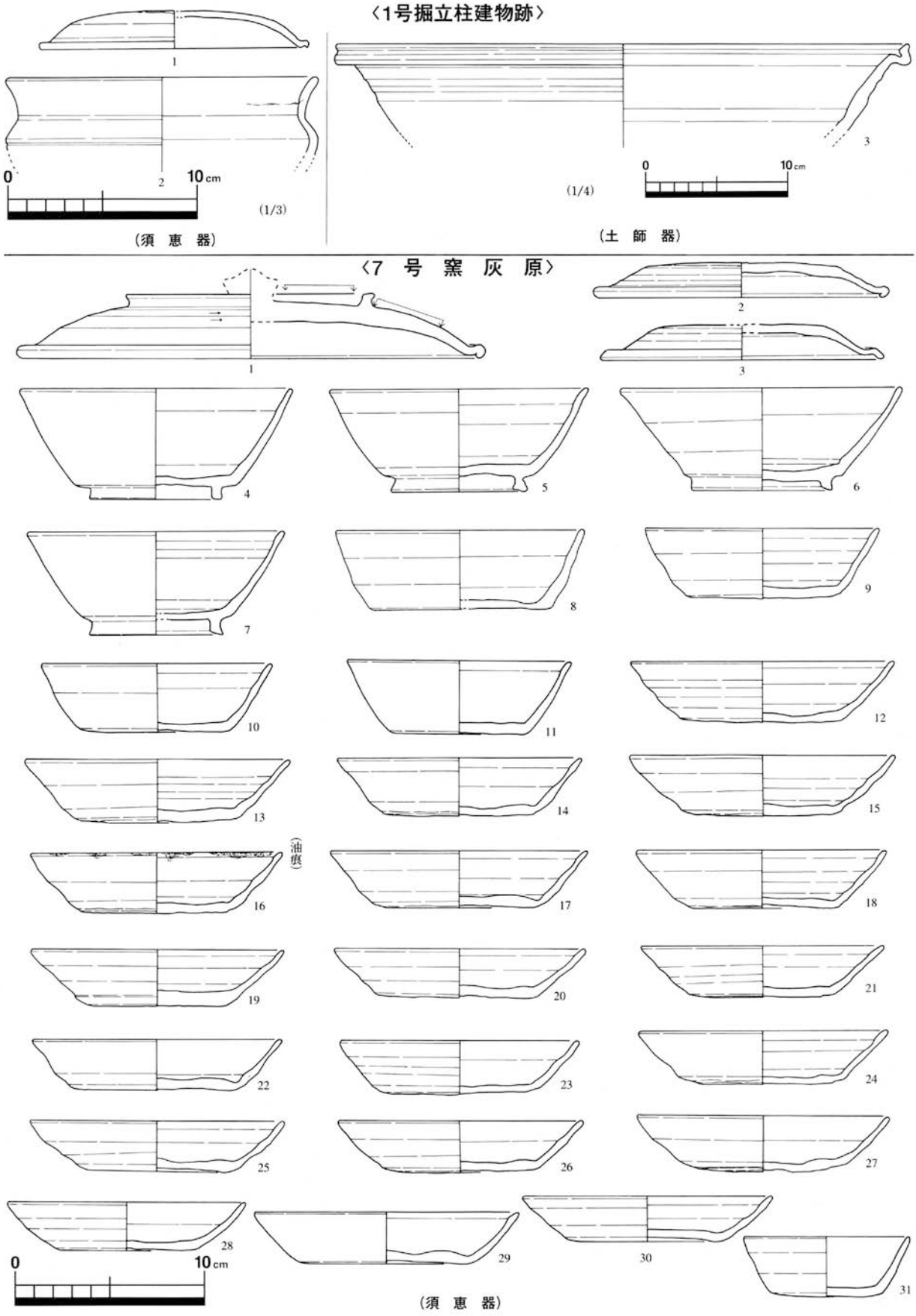
第238図　11号粘土採掘坑出土土器（4）（1/3、1/4）



第239図　11号粘土採掘坑出土土器（5）（1/4）



第240図　11号粘土採掘坑出土土器（5）（1/4）



第241図　1号掘立柱建物跡出土土器、7号窯灰原出土土器(1)　(1/3、1/4)

ただ、当資料ではそれらを明瞭に区分できておらず、７号窯灰原で一括して提示する。出土量多く、須恵器と土師器が出土しているが、主体は須恵器で、土師器は完形ないしは半完形に復元できるものが少ない。

須恵器は食膳具が主体であるが、貯蔵具類も目立つ。食膳具は特大坏蓋、坏Ｂ蓋・身、坏Ｅ身、坏Ａ、小型坏、盤Ａ、皿Ｂ、埦Ａ、埦Ｂがある。特大坏蓋は環状突帯をもつ特殊大型蓋で、金属器的坏身器種に付くものである。時期はⅥ2期の範疇で捉えられるものと考えるが、時期幅があり、古手のものは少なく、中段階から新段階にかけてが主体と言える。坏類よりも埦皿類が目立つ傾向にあるのはそのためであり、43・44の皿Ｂや52・53の埦ＢはⅥ3期まで下る可能性もある。16の坏Ａ口縁部には油煙痕が付いている。

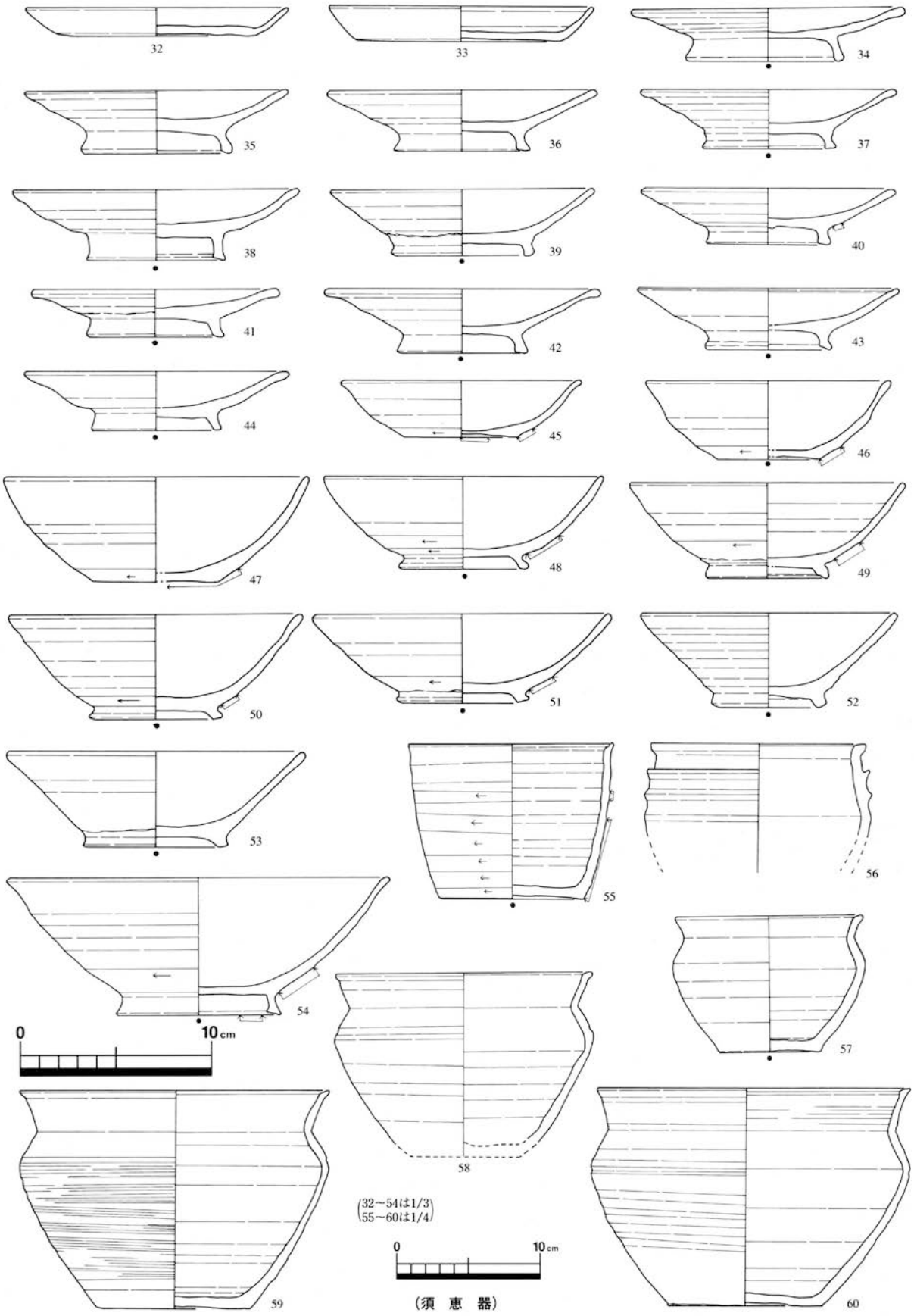
貯蔵具は完形や半完形が目立つ。器種は鉢類で、鉢Ｂ、鉢Ｆ、鉢Ｇがある。鉢Ｇ（55）は筒形の鉢で、体部外面に削りを施す丁寧な作りのものである。鉢Ｂはほぼ完形のものが多く、大型と小型がある。鉢Ｆは図示したものの他、底部破片が２個体出土している。

壷・瓶類は瓶Ｂと瓶Ｄ、瓶Ｅ、壷蓋、壷Ｆ、壷Ｅがある。瓶Ｂは胴部風船作りのもので、66は円盤閉塞、67は胴部絞りきり閉塞による風船の可能性が高いものである。瓶Ｄは完形に近いものが多く、68は完形、69は口縁端部欠損、71は口頸部欠損の完形である。使用による摩耗痕は確認できず、焼成破損品の可能性が高いものである。瓶Ｅ（87）はいわゆる徳利型瓶で、原型は片側把手と注口の付く手付き注口瓶である。薄手の作りで、当期に特徴的な器種と言える。壷蓋は口径20㎝以上を測る大型の73と口径14㎝程度の74がある。前者は大型壷Ａの蓋と思われるものである。壷Ｆは小型の75・76と大型の77がある。75と77は略完形のもので、歪みがあり、焼成破損廃棄品と思われる。壷Ｅ（78）は鉢Ｂをやや深くして底部に高台を付したような器形を呈するもので、比較的器高の低いものである。頸部と肩、胴部上位に沈線が施され、高台は壷Ａに類する台脚状のものが付く。

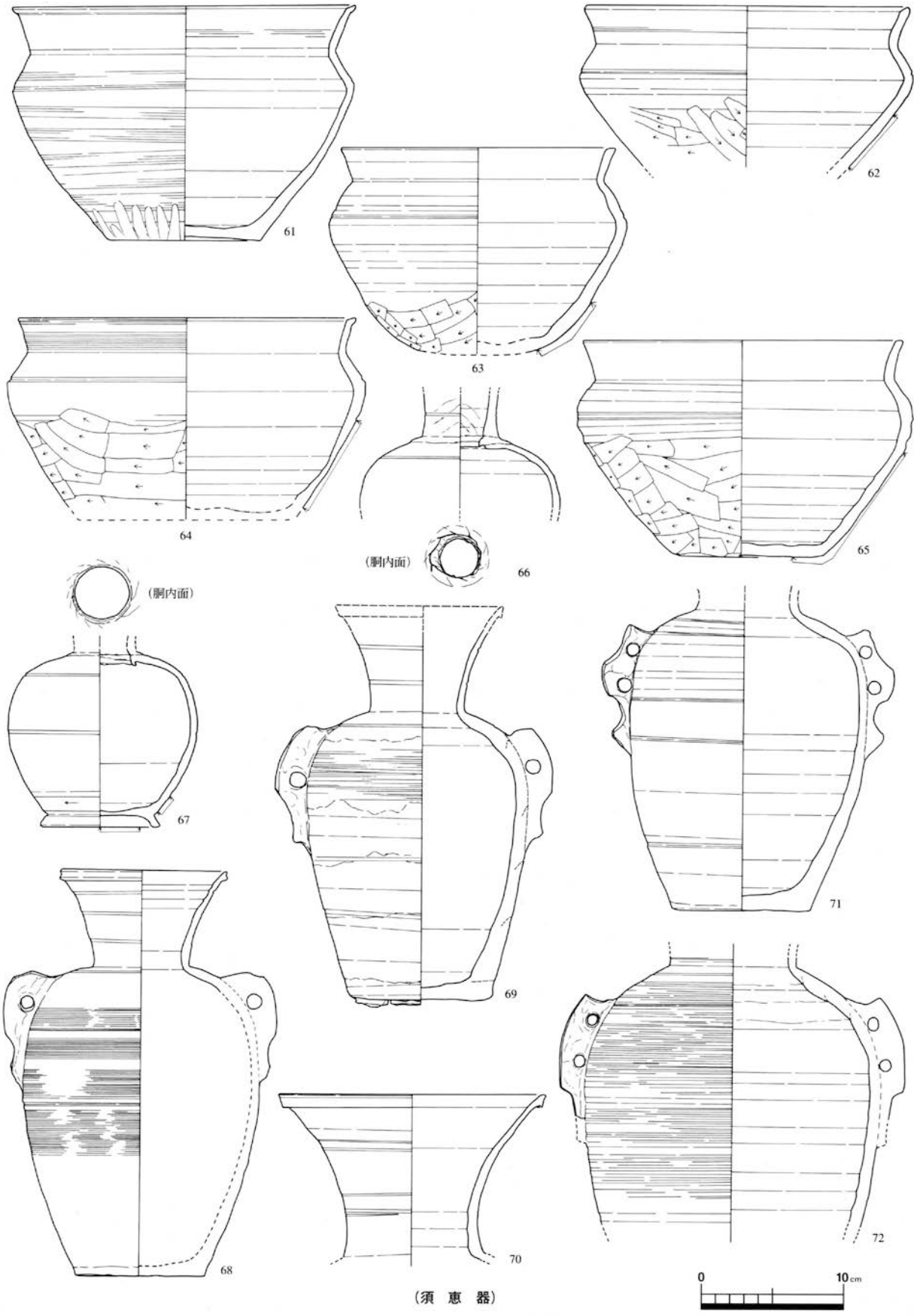
甕は80の中甕が古く位置付けられるものと予想されるが、他はⅥ2期に位置付けられるものと考えている。84は大甕の可能性をもつが、他は中甕で、底部丸底と平底風のものとがある。底部丸底の83は略完形のもので、やや胴部上位に張りのある器形を呈す。胴部叩きは１次成形ないしは２次成形に伴う横軸叩き（内面細平行線文当て）後、縦軸整面叩き（内面芯もち材平行線文当て）を上へ向けて間隔粗く施し、口頸部成形後胴部最上位整面叩き（内面芯もち材平行線文当て）を横軸で叩く。その後、成形台から外して、胴部下端の厚くなった部分を横方向の削りで切り取り、最終工程の底部叩き出し（内面太平行線文当て）を縦底部方向に施す。底部叩き出し以前の削りは、他にも類例があり、叩く前にこの部位を削り落とすことは理にかなっている。底部叩き出しによって消されるため、分かりにくいが、この部分での細かな観察が要される。次に、平底風の86だが、あまり胴の張らないなで肩器形を呈すもので、底部叩き出しを行わないものである。１次成形時に叩きを施した可能性が薄く、胴部下位内面には部分的に叩きの施されない部分があり、そこで粘土紐積み痕跡が残っている。内底面は指ナゾリ痕が明瞭に残り、当て具痕は確認できない。胴部積み上げ後、縦軸整面叩き（内面芯もち材平行線文当て）が下から上へと施される。胴部最上位のみ１段横軸整面叩き（同様の当て具）を施し、胴部叩きは完了する。成形台から外した後、底部下位から底面にかけて、外面のみの叩きが施される。底面を締めるためのものと予想され、内面当て具を使用しないところから、だいぶ乾燥した状態であったものと予想する。同様の平底風は85でも確認できる。底面叩きは中央付近まで施されず、縁辺が多い。小型壷瓶類では、小瓶Ｅのみ出土している。底面糸切りのものである。

その他の器種としては、91の宝珠形を呈すような特殊品、92の風字硯、93～96の管状土錘がある。宝珠形特殊品は中空となるもので、外面に数条の沈線が施される。上端を絞り上げて塞いでいるため、容器状を呈さないが、上端に口が空けば、浄瓶の口縁部に近い。風字硯は小型のもの。管状土錘は35～40ｇの重量をもつ中小型のものである。他に８点出土している。また、特殊品として置き竈の下端部分と思われる破片（79）が出土している。外面縦刷毛が認められ、焼きは還元焔焼成の土師器煮炊具に似ている。

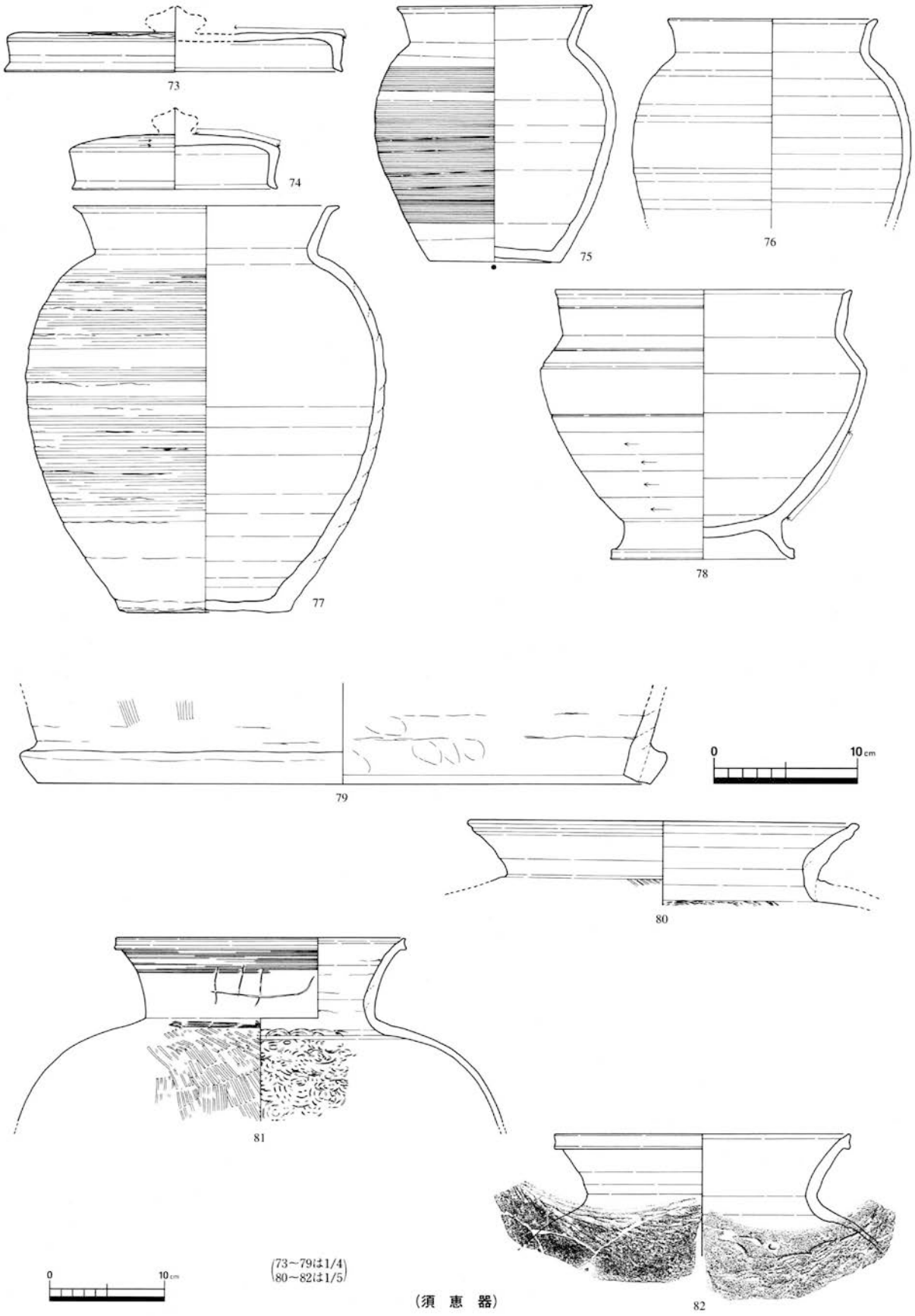
土師器は煮炊具の破片が多く、口縁部計測値においても７割以上の高い率をもつ。ただ、破片が多く、図示できたものは食膳具の方が多い。食膳具は、外面赤彩内黒土師器が基本であるが、赤彩しないものも一部ある。器種は埦Ａと皿Ｂが多く、埦Ｂは目立たない。埦Ａは底部大きめで、立ち上がり深い器形の107～109と底部やや小型で体部外傾する112～114とがある。前者は古手、後者は新手のものと位置付けられる。また、口径８㎝程度の



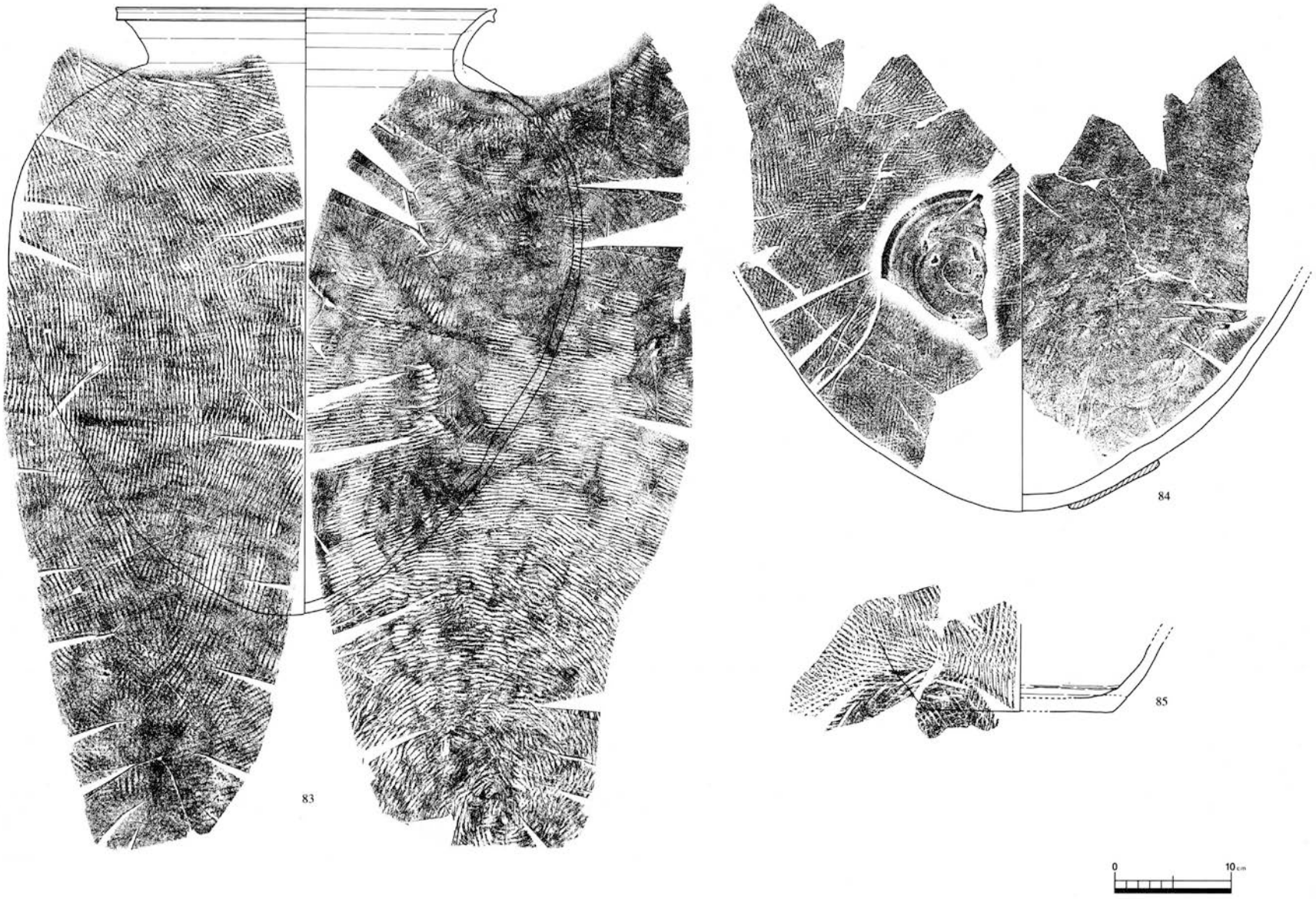
第242図　7号窯灰原出土土器（2）（1/3、1/4）



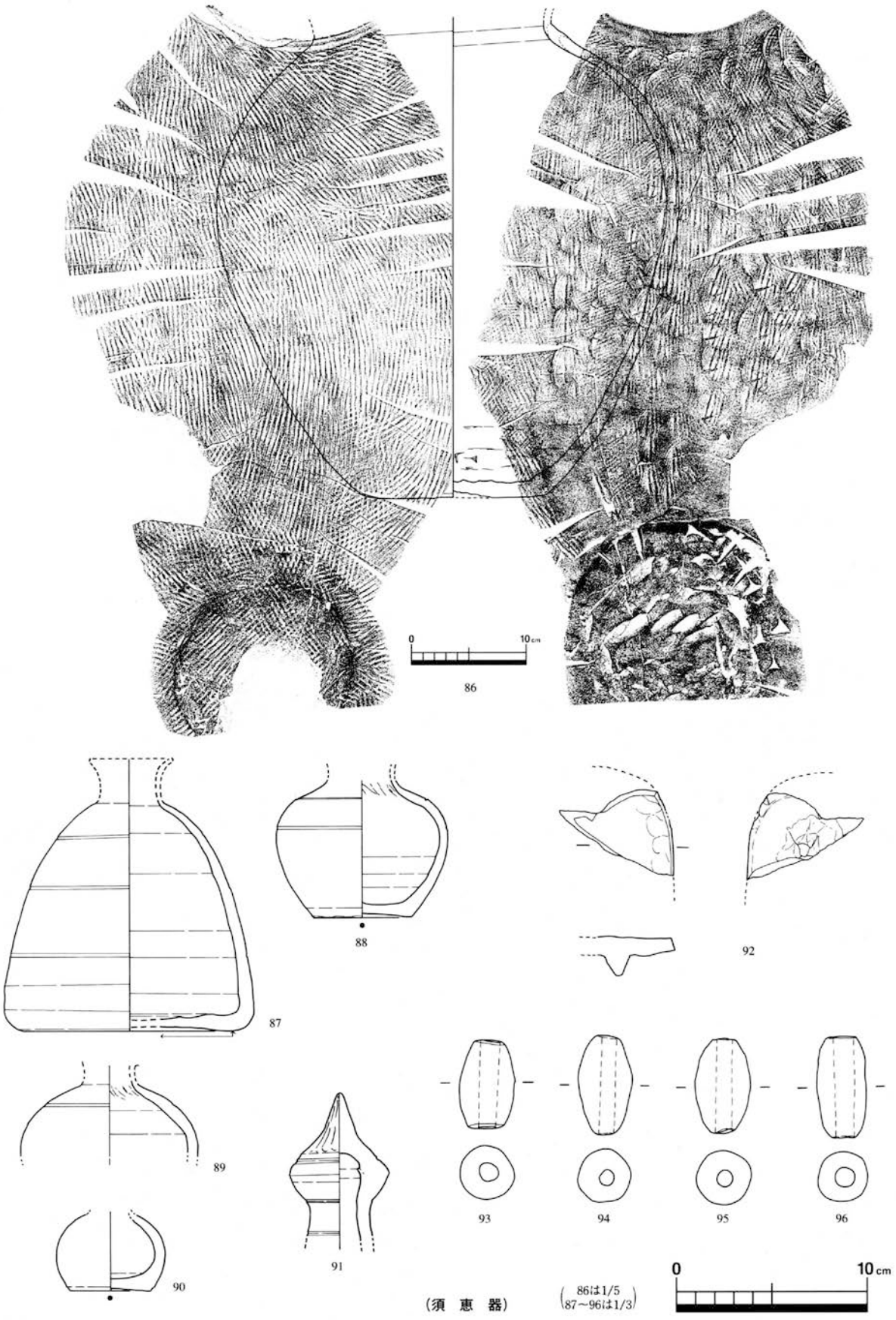
第243図　7号窯灰原出土土器（3）（1/4）



第244図　7号窯灰原出土土器（4）（1/4、1/5）



第245図　7号窯灰原出土土器（5）（1/5）



第246図　7号窯灰原出土土器（6）（1/3、1/5）

小型埦もあり、これに関しては外面赤彩しないものである。埦Bは通常の法量をもつ118～120と口径20㎝以上の大型を呈す121～123に分けられる。また、やや小型で低い117もある。117は台径大きく、器高低い器形のもので、底面糸切り痕を残すなど作りが雑なものである。皿Bは台径大型で、体部強く開く器形の124・125・129と台径小型でやや体部高い126・127、台部大型で厚く、体部やや深い、厚手で底面糸切り残す雑な作りをもつ130～133がある。前者は古手、後2者は新手のものと位置付けられる。また、口径10㎝程度の小皿に台の付いた134があるが、これも内面磨きを施す内黒土師器で、外面赤彩を施している。

煮炊具で図示できたものは小釜、釜、羽釜、甑で、小釜はいずれも中型のもの。口縁部形は136がa3類、135がb2類である。釜は137がB1類器形。口縁部形は138・139がa5類、137がb2類、140がc2類である。羽釜（141・142）は上端折り曲げて鍔部とし、その上に口縁部を継ぎ足す器形。甑は143が大型A類器形。144がB類器形である。このB類器形については、当期よりも古く位置付けられる可能性がある。

特殊器種としては、台付鉢と円筒形土器、瓶形土器、土製馬形、管状土錘が出土している。台付鉢は脚部のみだが、3個体（145～147）出土している。円孔透かしを4方にもつ脚で、当期には一般的な脚形態である。円筒形土器（148）は破片。当期に位置付けられるものか、定かでない。瓶形土器（149）は頸部破片で、上下沈線区画の中を絵画調の線刻がある。土製馬形（150）は足部破片。管状土錘は図示したものも含め73点出土している。重量により、200ｇ以上の特大（151・152）と150～50ｇの大型、10ｇ以上の中型、10ｇ未満の小型（169・170）に分類する。大型は100～150ｇの大（153～157）、80ｇ前後の中（158～160）、60ｇ前後の小（161・162）に分けられる。そして中型も30～40ｇの大（163～165）と10ｇ前後の小（166～168）に分けられる。特大は中程の膨らみ強い球に近い形状、大は紡錘形だが、やや細長くなった形状、その中で大中小は長さによって分かれる。中型、小型も同様の形状である。

この他に、窯道具の匣鉢状容器（174）と土製方形板（171～173）がある。匣鉢は他で出土するものと同様の器形。土製方形板も他のものと同様、内外面叩きをもつ土師器器種（甑や釜）の切り取り板である。ただ、171のみは叩きや厚さなどから須恵器甕と思われるものである。土師質に焼けているが、質感が他のものと異なる。いずれも土師器焼成坑内で使われた焼成道具と考えられる。

2．Ⅵ3期に位置付けられる遺構出土土器

《4号土坑》（第250図）

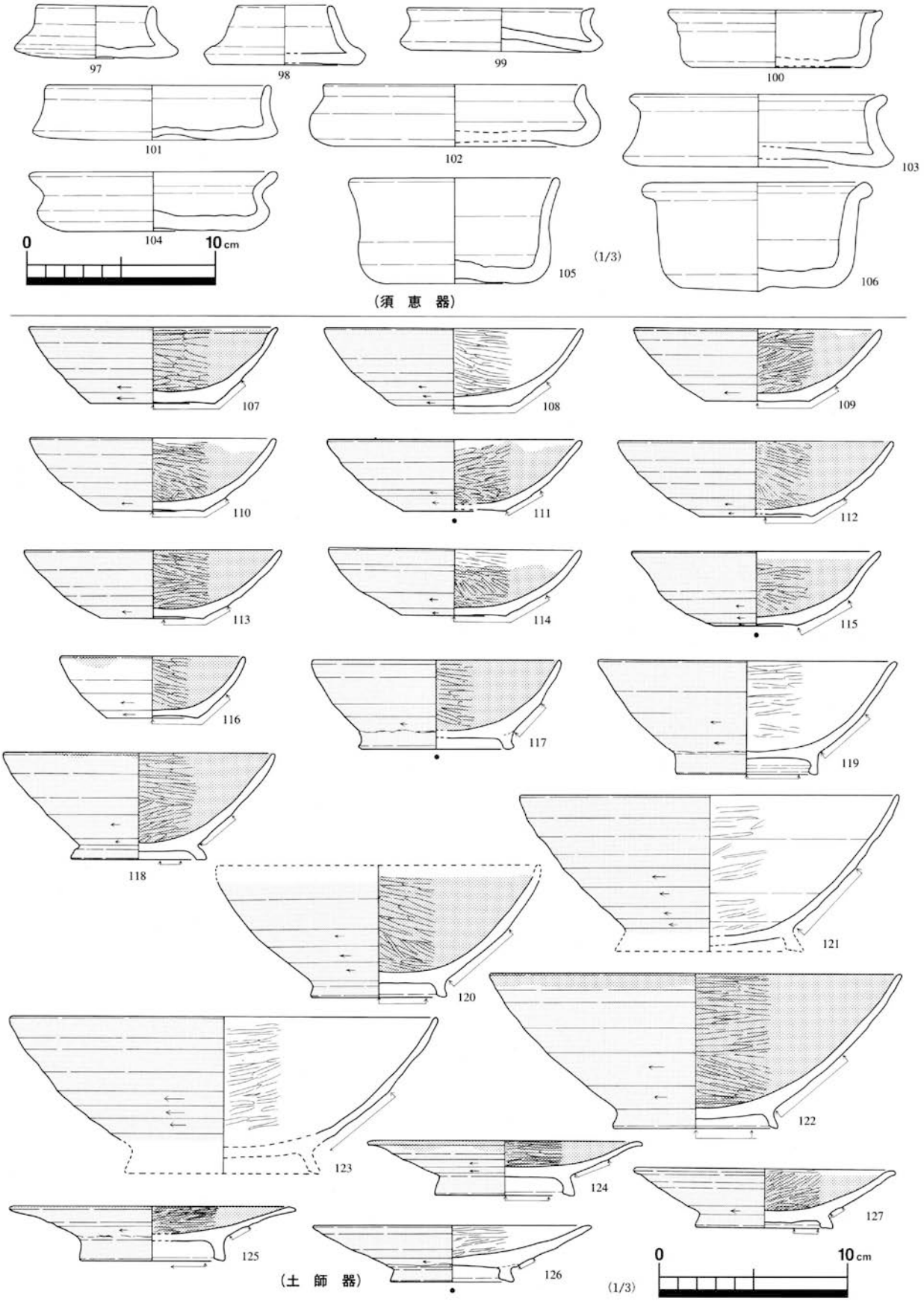
8号窯灰原の下底面にあたる若干の落ち込みから出土した土器群で、出土量は多くない。須恵器では坏B蓋と埦A、埦Bが出土している。図示したものは埦Bの1・2のみで、厚手でロクロヒダの目立つもの。底面糸切りを残す。土師器では内黒土師器埦Aと埦B、無垢土師器埦B、小釜、釜、鍋が出土している。内黒土師器埦A（3）は外面赤彩施す厚手で体部開く器形。底部糸切り痕を残す。同埦B（4）も底面糸切り残すもので、高台は小型化している。無垢埦B（5）は小型高台のもの。小釜（6・7）は中型で、口縁部器形b2類のもの。出土量少なく、判断材料に乏しいが、須恵器埦Bの高台と全体的な器形は、Ⅵ3期の古から新段階のものであり、それは土師器に内黒が目立つことからも伺える。

《8号土坑》（第250・251図）

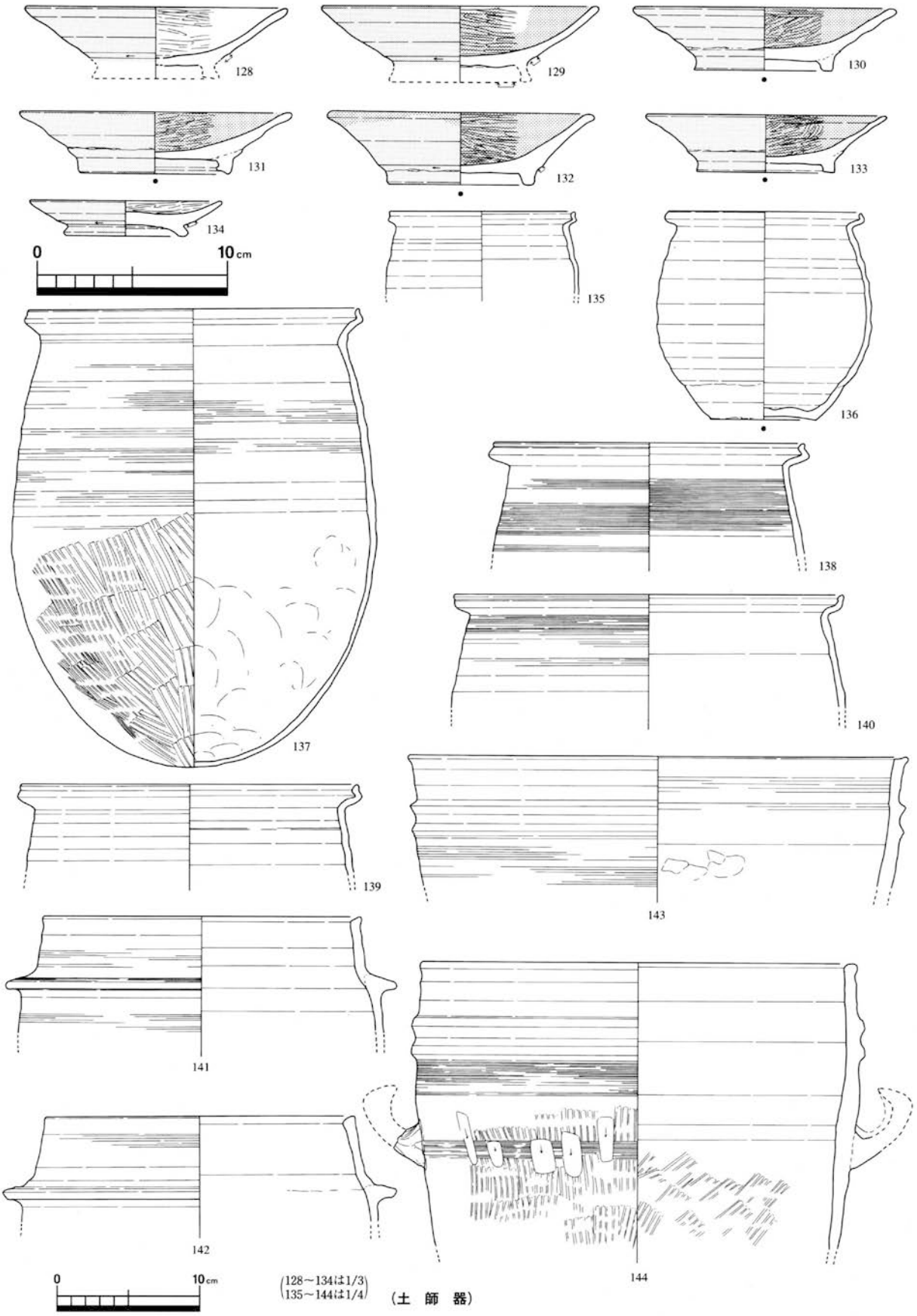
須恵器が少なく、土師器食膳具主体で構成される。

須恵器は坏A、坏B蓋、盤A、皿B、埦A、埦B、瓶D、中甕が出土している。食膳具の中では埦Aと埦Bが多く、両器種で85%。皿Bの量も少ない。坏型食膳具は小破片のみの出土である。埦A（1）はロクロヒダ顕著な厚手のもので、底径小さく開く器形のものである。埦B（2・3）も高台小型で、体部開く器形。4号土坑のものよりも体部外傾度増して底径小型化している。瓶D（4）は頸部太くて口縁部外反する器形のもの。中甕（5）はなで肩器形で、器高38㎝程度と小型を呈すものである。胴部縦軸整面叩き（内面芯持ち材無文当て）後に外面所々カキ目、内面縦刷毛調整するもので、その後底部叩き出し（内面平行線文）を施す。底面が強く摩耗しており、内底面も弱く摩耗痕がある。口縁部も細かく欠けがあり、比較的長く使用されたものと予想する。

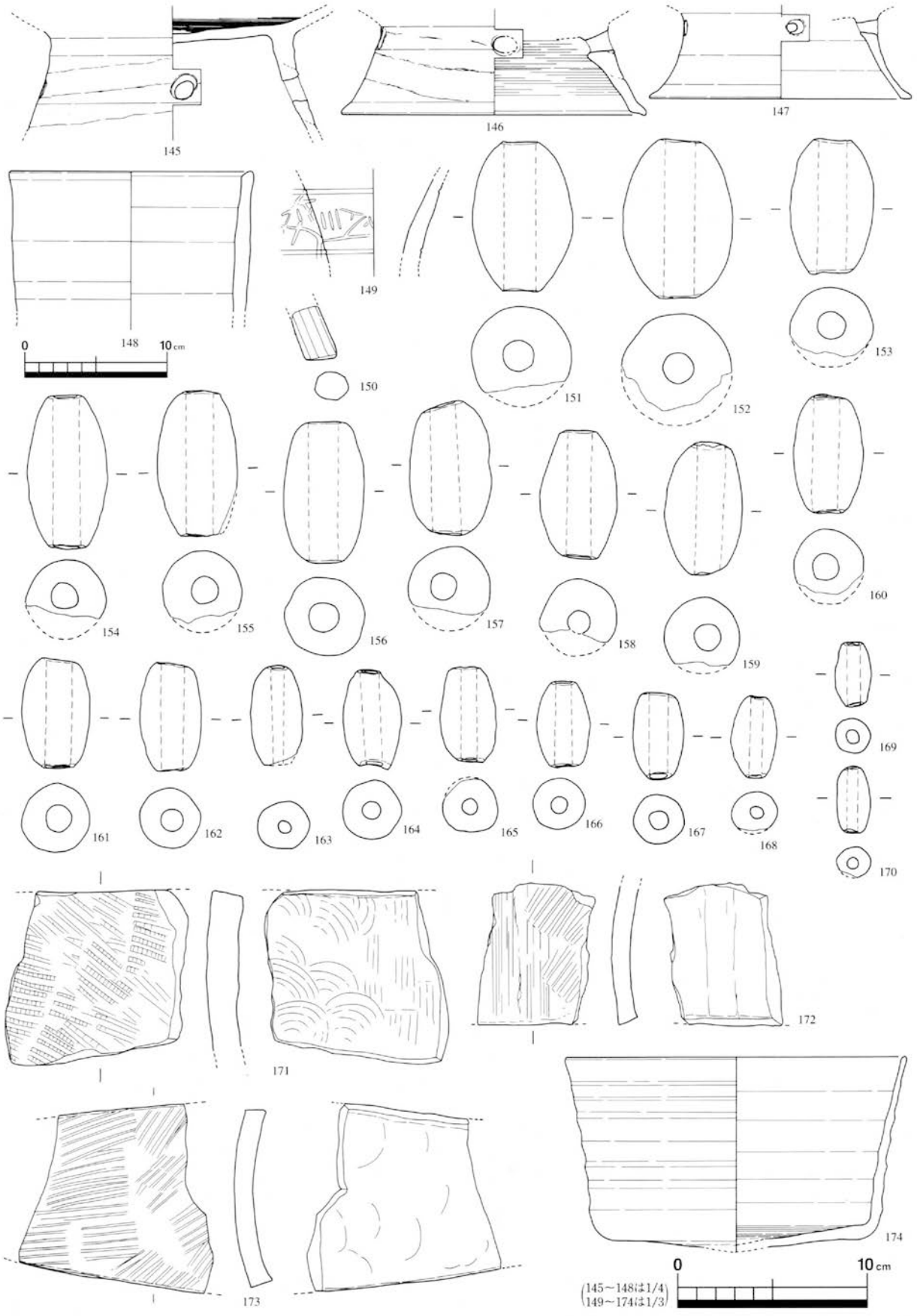
土師器は食膳具率高く、70%近くを占める。食膳具は内黒土師器15%、無垢土師器85%で構成される。内黒はすべて外面赤彩で、埦Aと埦Bのみ。無垢土師器は埦Aと埦B、皿A、皿Bがある。無垢埦Aが食膳具の中で最



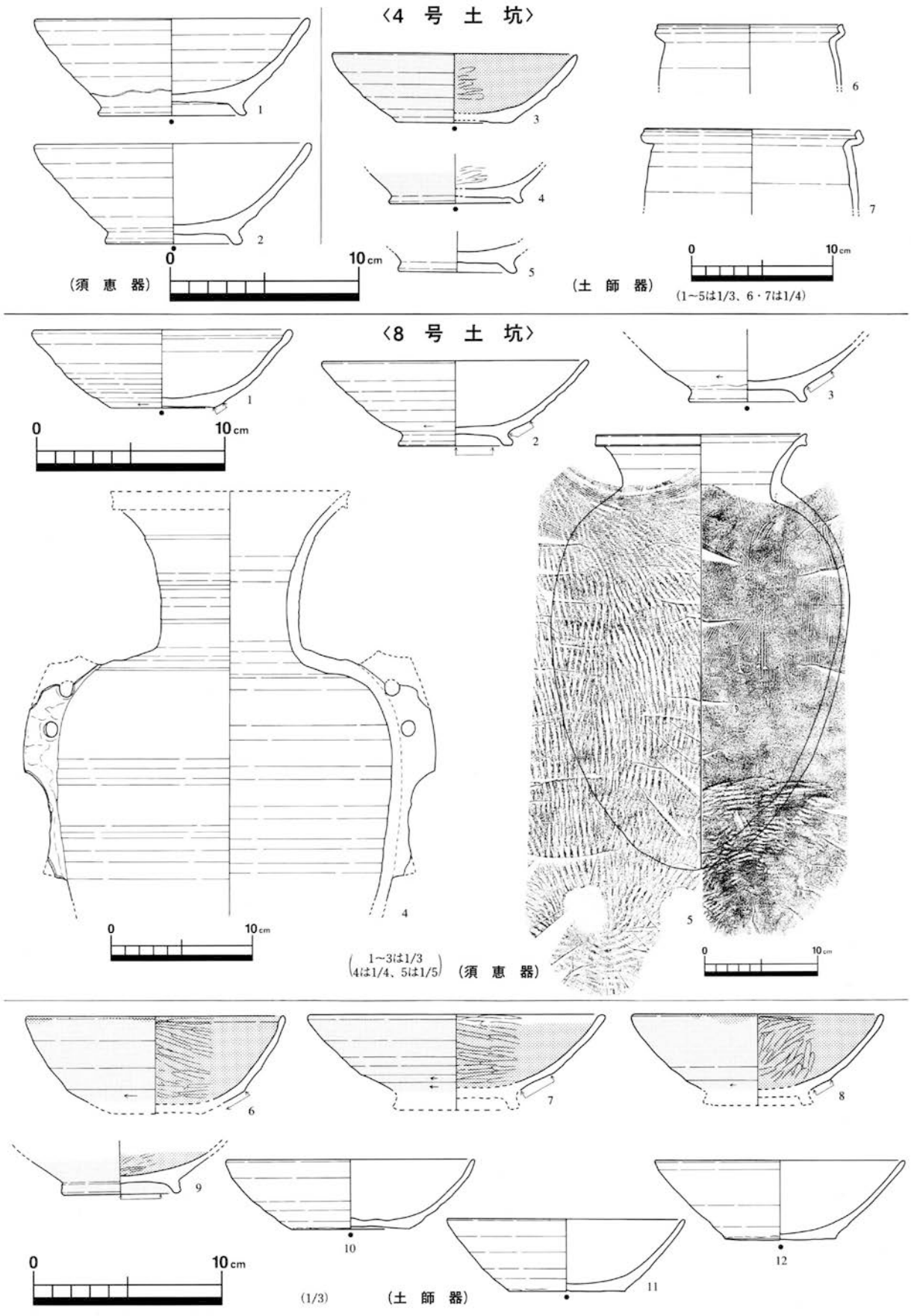
第247図　7号窯灰原出土土器（7）（1/3）



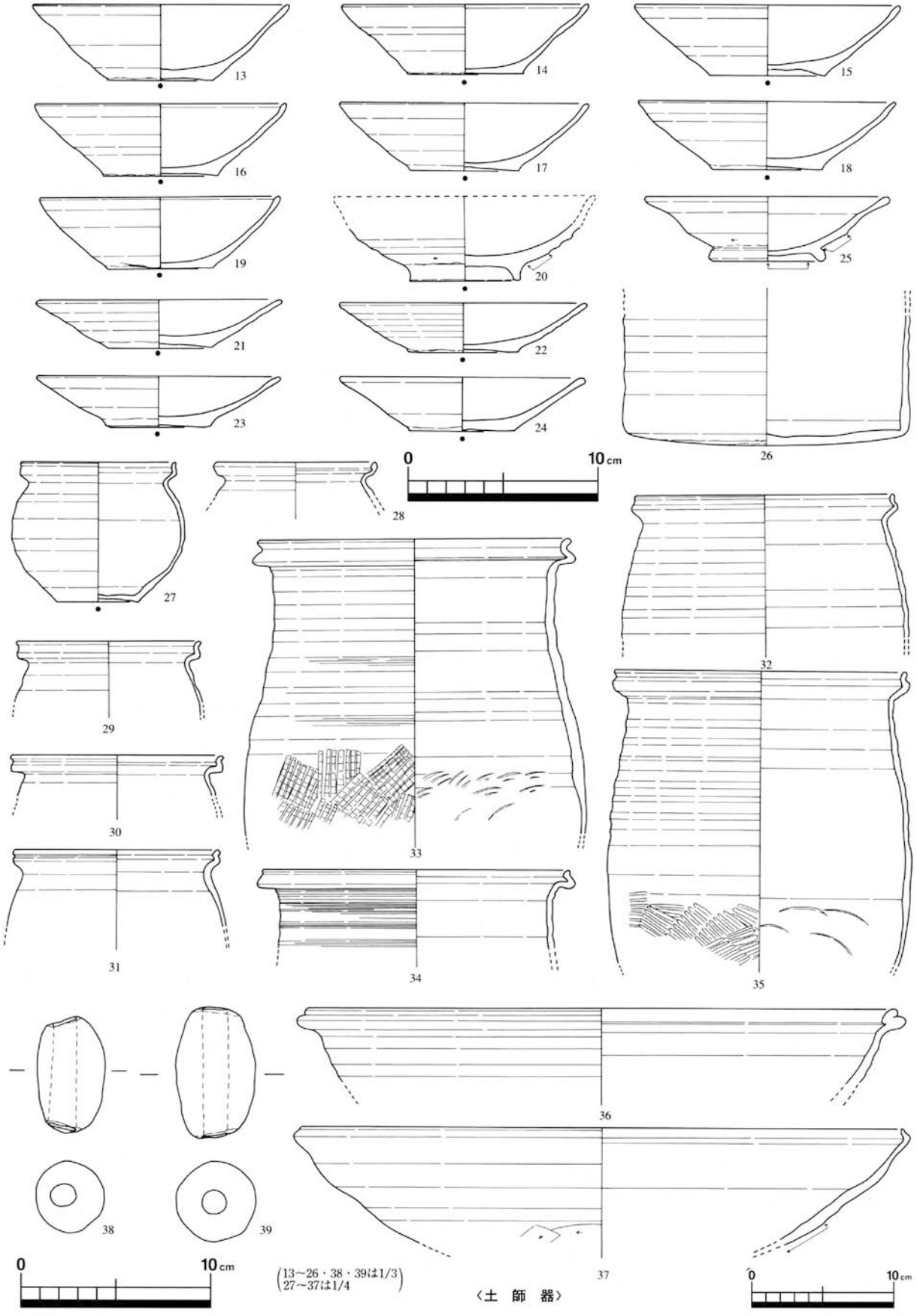
第248図　7号窯灰原出土土器（8）（1/3、1/4）



第249図　7号窯灰原出土土器（9）（1/3、1/4）



第250図　4号土坑出土土器、8号土坑出土土器（1）（1/3、1/4、1/5）



第251図　8号土抗出土土器（2）（S=1/3、1/4）

も高く66%、次いで無垢皿Aの12%、内黒埦A・Bと無垢皿Bは7%程度。無垢埦Bは1%と少ない。内黒は完全に器形復元できるものはなく、特徴を提示しにくいが、比較的薄手で、高台端は丸く作られる。無垢埦Aは全体的が薄く作られる特徴的なもので、ロクロヒダは顕著でないが、かなり薄く挽き延ばされた印象を受ける。器形から底径大きめでやや低い器形の10とやや深い器形の11・12、底径小さく体部開く器形を呈す13～19に分けられる。いずれも底面糸切り痕を残す。無垢皿A（21～24）は無垢埦Aの最も一般的な開く器形が一層外傾して皿となった形状のもの。無垢埦B（20）は高台付近の破片で、ロクロヒダ顕著なもの。無垢皿B（25）は高台小型で、やや埦形に立ち上がる器形のものである。

煮炊具は、小釜と釜、鍋、甑がある。小釜は小型（27）、中型（28・29）、大型（30～32）で、小型の口縁部器形はa5類、中型は内巻き込みのd4類（28）とb1類（29）、大型はb1類（32）とb3類（30・31）を呈す。概してb類系統が多く、口縁部が薄く挽き延ばされている。釜は35がA1類、33・34がA2類を呈す。A1類はb1類口縁部器形。A2類もb類系統だが、上から潰れたようなb3類、、b4類を呈し、口縁部の挽き延ばしは長い。胴部は比較的厚く、胴部下半の叩き出し部分は薄くなる。鍋もb類系統口縁部で、顕著に潰れるb5類（36）となる。また、37のような口縁部を短く内傾させただけの器形（d1類）もある。

その他のものとしては大型中クラスの管状土錘と匣鉢状容器が出ている。匣鉢状は内黒土師器焼成用の窯道具と思われるものだが、内黒土師器減少のためか、食膳具出土量の多い当資料でも、匣鉢状は少ない。匣鉢として重ねることよりも内黒焼成にこの窯道具使用の目的があったことを示すだろう。

以上の土器群はⅥ3期に位置付けられると考えるが、4号土坑よりも後出するものであり、須恵器食膳具量の低下や須恵器器形などから最末期に位置付けられるものと予想する。

《9号土坑》（第252図）

出土量は少なく、須恵器では埦B2個体と瓶D2個体、土師器では内黒埦Bと同皿B、無垢土師器埦、小釜、鍋、匣鉢状容器が出ているのみ。埦Bは体部開く器形で、高台小さく、ロクロヒダも顕著であるなどⅥ3期でも新段階に位置付けられるものである。3の瓶Dは縦軸叩きを施すもの。4の瓶Dは胴部と頸部繋ぎ目が確認できるものである。

土師器は内黒埦B、無垢埦いずれも体部薄く作られるもので、内黒の体部外面には赤彩が施される。小釜（8・9）は中型でe1類口縁部をもつもの。鍋（10）の口縁部器形もe1類である。

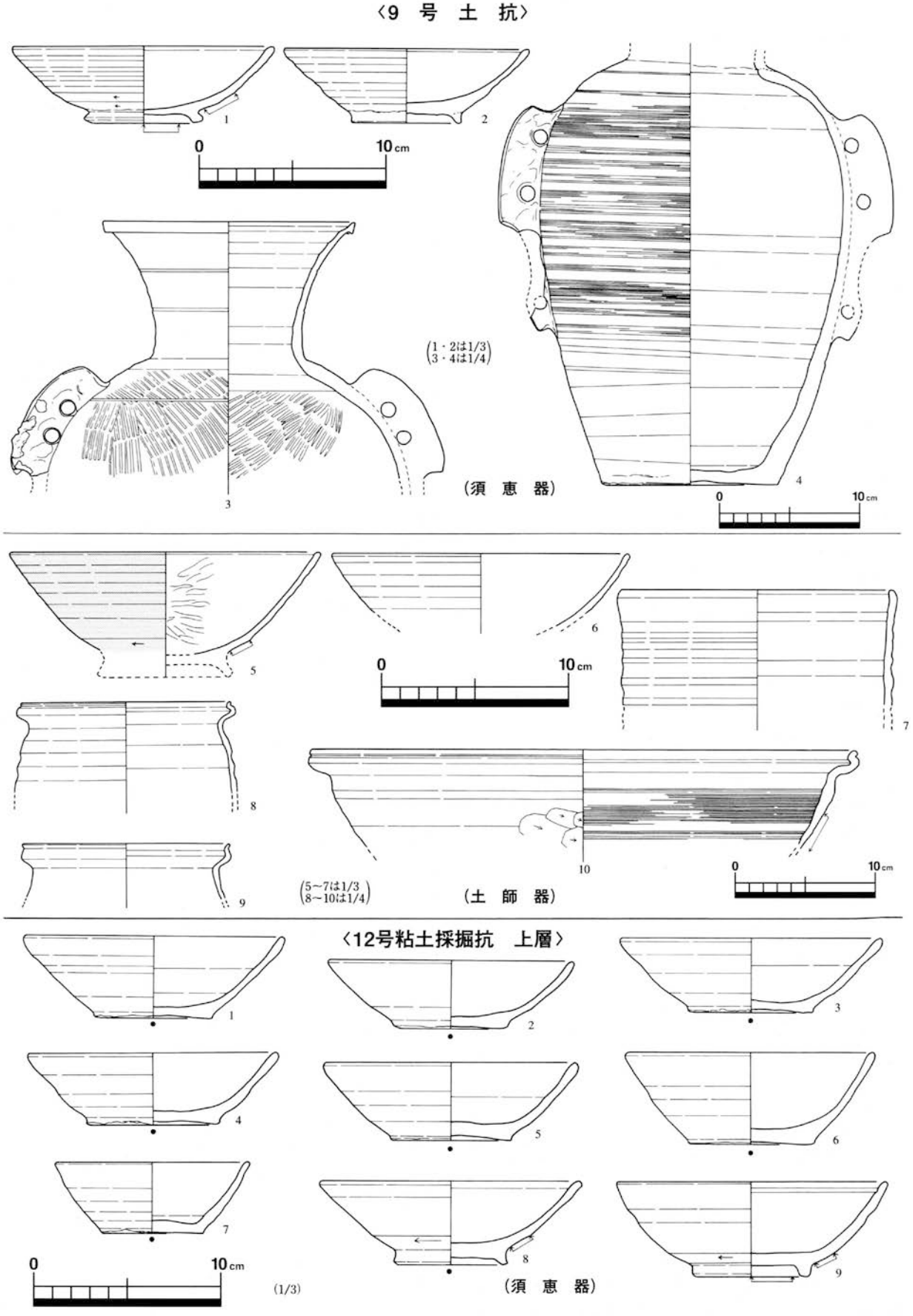
《12号粘土採掘坑》（第252・253図）

12号粘土採掘坑の上層に廃棄された土器群で、8・9号土坑に近接することから考えて、関連する土坑資料と言える。須恵器は埦Aと埦B、皿A、瓶D、焼台が出土している。埦A（1～6）は底径大きくやや深身呈すものが多く、埦Bも同様である。古～中段階に位置付けられるものが大半と予想する。ただ、15～17の埦Bは高台径小さく、体部外傾する器形で、中～新段階に位置付け可能と判断する。皿A（18）も底径小さく体部強く開く器形であり、同様に新手のものだろう。この皿A底面には単字句墨書「豆ヵ」がある。瓶Dは双耳の1穴タイプ。焼台は当期に目立つA類形態の横穿孔のものである。

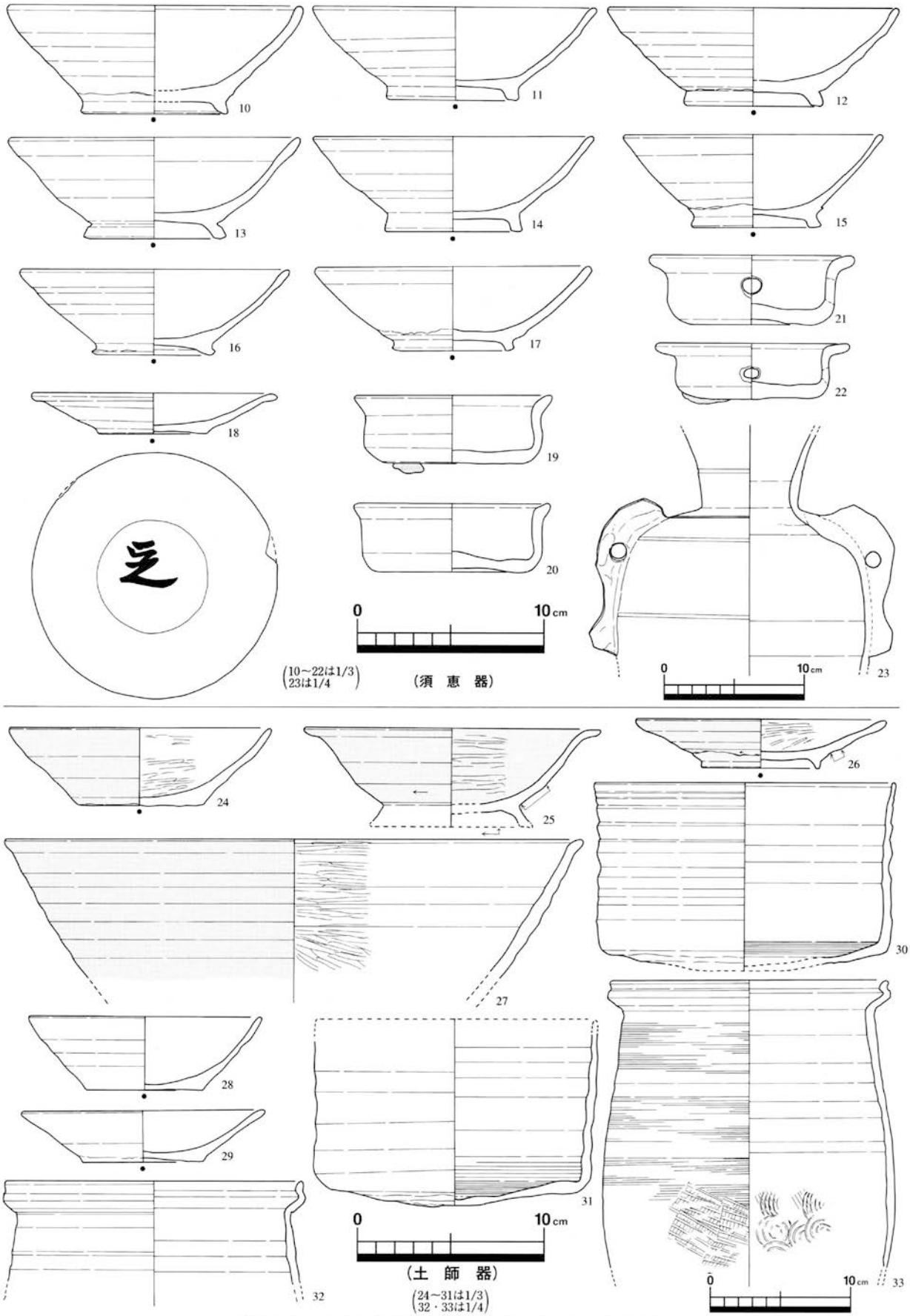
土師器は食膳具で内外赤彩土師器の埦B、内黒土師器の埦Aと特大埦、皿B、無垢土師器の埦Aと皿Aがある。赤彩埦B（25）は内面磨きを施すもので、体部下位に稜をもつ稜埦器形を呈すものである。高台長く踏ん張り、精製品の感がある。内黒埦A（24）は底径大きめのもの、同皿B（26）は全体的に作りが雑で、華奢な高台の付くものである。無垢埦A（28）は底径大きめで深い器形、皿A（29）も比較的底径の大きな器形を呈す。稜埦は古段階かⅥ2期にさかのぼる可能性あるが、他のものは当期に位置付けられるもので、古～中段階に位置付けられるものと予想する。釜（32・33）はいずれもA2類器形で、b3類口縁部のもの。匣鉢状容器は2個体出土している。

《溝50》（第254図）

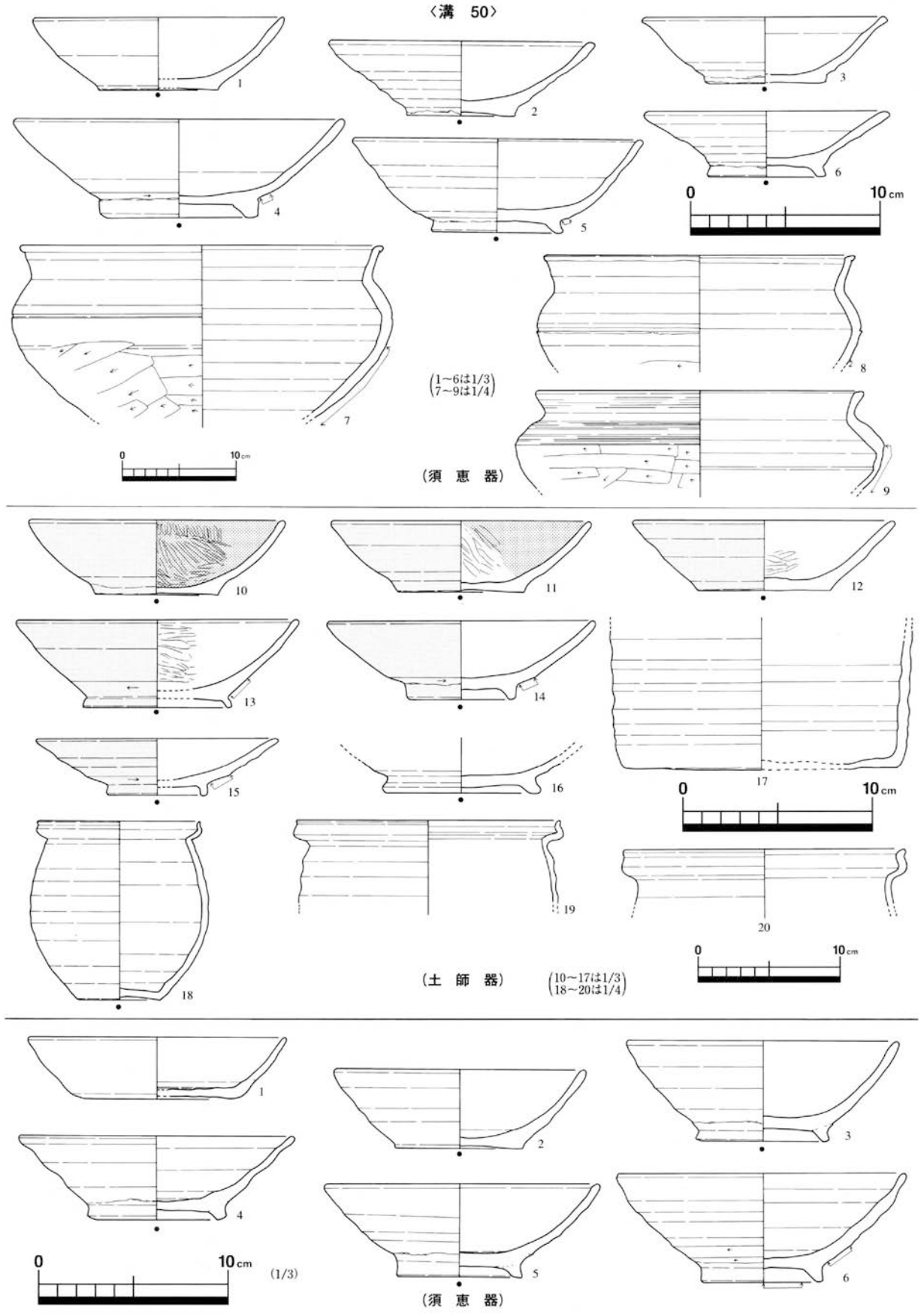
出土量は多くはないが、須恵器では埦Aと埦B、皿B、鉢B。土師器では内黒土師器の埦A・埦B・皿B、無垢土師器の埦B、小釜、釜、匣鉢状容器が出土している。須恵器埦A（1～3）は体部開く器形で、ロクロヒダ顕著。埦B（4・5）も同様体部外傾する。皿B（6）は埦形を呈して小型の高台が付く。いずれも底面糸切り



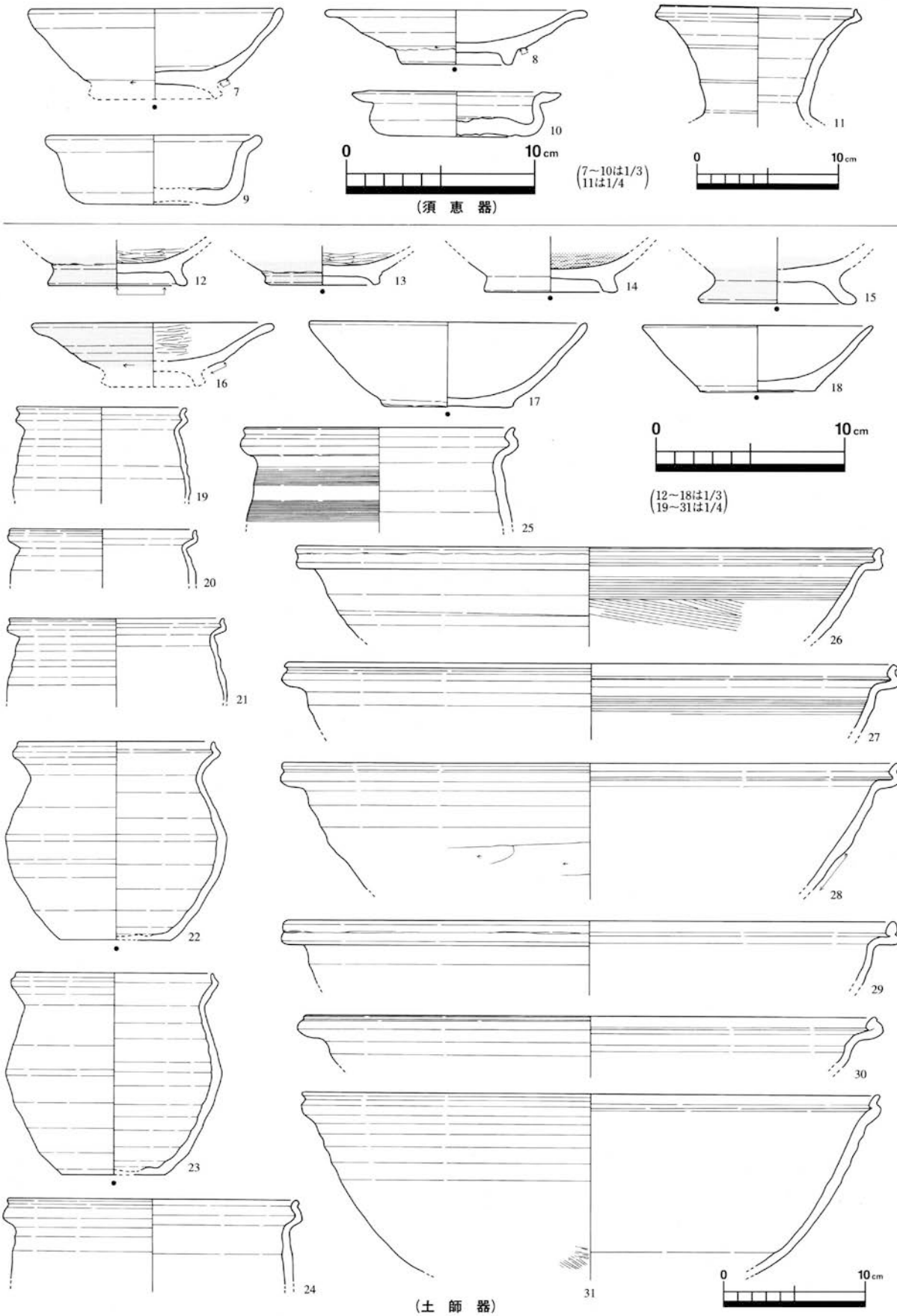
第252図　9号土抗出土土器、12号粘土採掘抗上層出土土器（1）（S=1/3、1/4）



第253図　12号粘土採掘抗上層出土土器（2）（S=1/3、1/4）



第254図　溝50出土土器、8号窯灰原出土土器（1）（S=1/3、1/4）



第255図　8号窯灰原出土土器（2）（S=1/3、1/4）

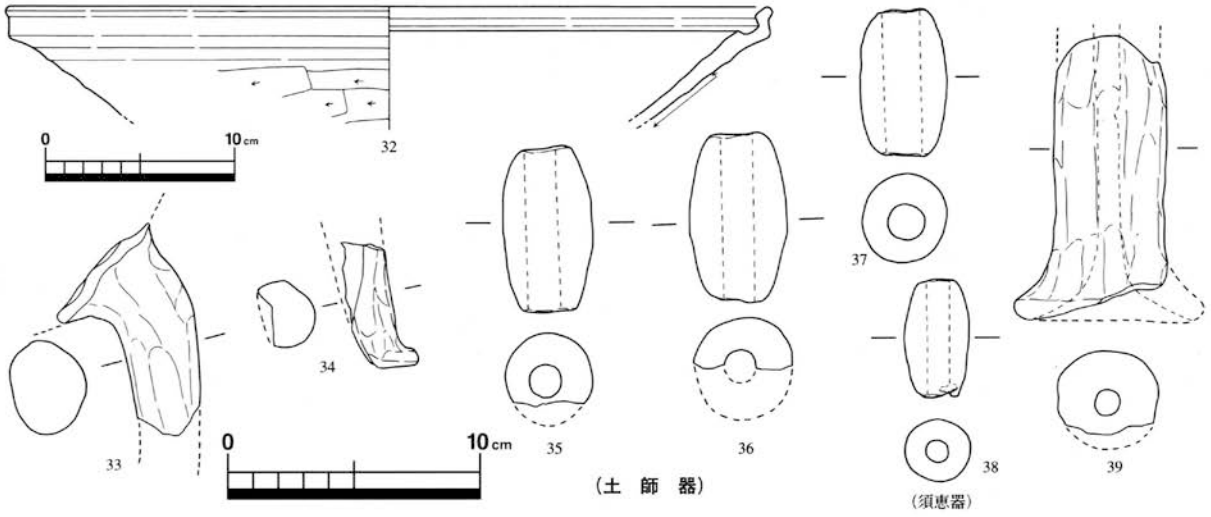
を残し、Ⅵ3期でも中～新段階と考える。土師器は内黒土師器が主体で無垢土師器は少ない。内黒はすべて外面赤彩のもので、内黒の飛ぶものが多い。埦A（10～12）は底径大きく体部開く器形。埦Bも同様である。ⅢB（15）の高台は小型化しており、ロクロヒダ顕著。小釜小型（18）は口縁部e2類器形。釜はb3類（19）とe2類（20）の口縁部器形がある。

《8号窯灰原》（第254～256図）

出土量はさほど多くはなく、須恵器よりも土師器の方が破片数では勝っている。

須恵器は坏Aと埦A、埦B、ⅢB、瓶D、焼台が出土している。坏A（1）は薄手偏平なⅥ2期後半に通常見られる器形で、Ⅵ3期まで僅かながら残存するものと予想される。埦A（2）は厚手でロクロヒダ目立つもの。埦Bも同様に厚手で、ロクロヒダ顕著。高台の作りは粗雑である。底面削りをもつものが一部あるが、大半は糸切り痕を残すものである。ⅢB（8）は小型高台で埦形器形、口縁部で外反する。高台は雑な作りのもので、底面糸切り痕を残す。これらの特徴から、当資料はⅥ3期でも古～中段階のものと言える。

土師器は煮炊具が多い。食膳具では内黒土師器が主体的で、無垢土師器は17・18の埦Aに限られる。8号土坑のものよりもやや厚手で、深身呈す。内黒土師器は埦BとⅢBのみで、外面赤彩を基本とするが、赤彩しない14もある。高台は小型で作りは雑である。また、内外面赤彩を施す埦B（15）が出土している。やや足高の高台がつき、大型のものである。煮炊具は小釜と釜、鍋が出土しており、小釜と鍋が目立つ。小釜は小型（19・20）と中型（21～23）に分けられ、小型は19がb1類、20がb2類口縁部を呈す。釜（24・25）は胴部ずん胴のA2類器形で、口縁部はe2類を呈す。鍋もe類系統が多く、26～28がe1類。29はb3類、30・31はb5類を呈す。また、特殊器種として、台付鉢（32）、足付鉢（33）、足付小型鉢（34）、支脚（39）、管状土錘（35～38）がある。台付鉢は台部の破片で、体部外傾する器形のもの。足付鉢は足の付け根部分の破片、足付小型鉢は足端破片である。前者は鍋や釜に類するものに足の付く器種。後者は小型の火舎状のものだろう。支脚は端部が若干裾広がりする太い棒状の土製品で、中心に孔が開いている。管状土錘は、形状、大きさともにⅥ2期のものと同様。



第256図　8号窯灰原出土土器（3）（1/3、1/4）

（3）Ⅵ2期～Ⅵ3期の土師器様相変遷

以上、F地区の南東側に分布するⅥ2期からⅥ3期に位置付けられる遺構出土土器について個別に説明を加えてきた。当期の須恵器については、これまで須恵器窯資料をもとに細かく編年序列し、様相もまとめたことがあるため、ここでは土師器と特殊土器についてのみまとめる。なお、土師器の編年序列については、共伴する須恵器資料の編年的位置付けを基本として、組み立てている。その序列の中でどのような変遷が読み取れるかを以下に述べることとする。

1．土師器食膳具

器種構成で述べたように、当期は土師器食膳具の占める率が向上する。Ⅴ期まで13%だったものが、Ⅵ2期に

は25%近くまで増加し、Ⅵ3期には土師器の半数以上を食膳具が占めるようになる。また、当期はそれまでの赤彩土師器から内黒土師器へと転換する時期で、それとともに埦Aに加えて、埦B、ⅢA、ⅢBが出現し、法量も大・特大のものが加わるなど、分化する。そして、さらに、Ⅵ3期には無垢土師器が増加し、内黒土師器を凌ぐ。以下に、各器種の器形変化の様相を述べることとする。

《土師器埦A》　金沢末窯のように、Ⅴ2期に当器種が既に出現している可能性はなくはないが、赤彩埦主体の段階であり、存在していたとしても、特殊なものであったと予想する。南加賀窯跡群で内黒土師器が定量生産されるのは、Ⅵ1期と言え、Ⅵ2期に増加すると考えている。いずれも外面赤彩を基本とし、それはⅥ3期においても同様である。Ⅵ1期資料として提示したものは、二ッ梨一貫山窯跡のD地区3号窯灰原資料と戸津窯1号土器溜まり資料で、口径13～14cmの通常法量と25cm以上の特大法量とが存在する。器形はやや深身で底径大きめ、厚手傾向をもつa類とやや深身で底径小型、薄手傾向のb類とがあり、全体的に深身傾向をもつ。特大も類似する器形をもつが、口縁部上端に面をもつのが特徴と言える。いずれも、体部下位から底面にかけて削り調整があり、内面磨きも丁寧である。

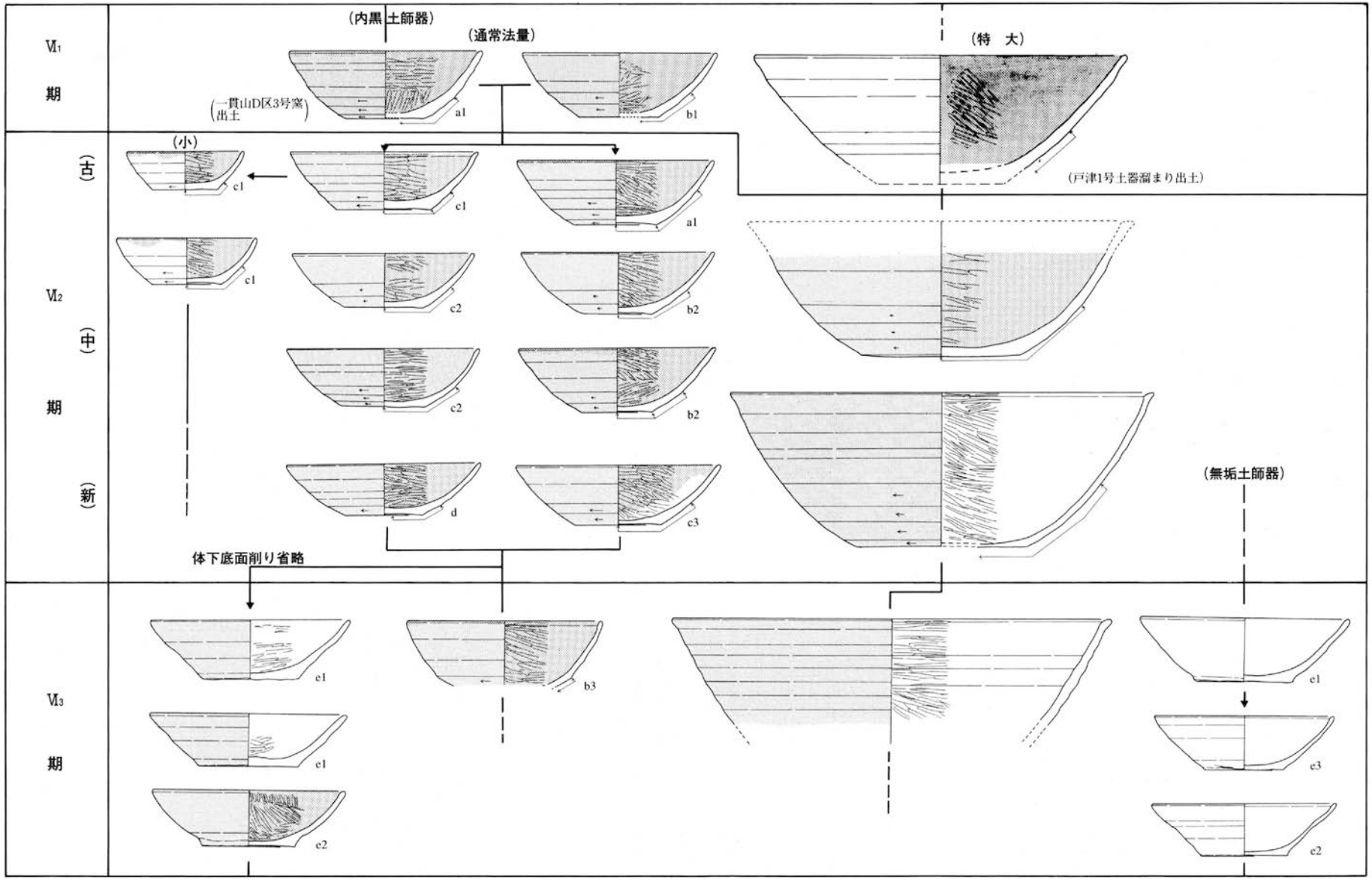
Ⅵ2期以降も通常法量、特大法量ともに大きな変動はないが、口径10cm未満の小型が加わる。数量少なく、特殊小型品であり、特殊大型品同様の扱いでよい。法量分化という意識は低く、基本的には通常法量の1法量と見るべきである。Ⅵ2期にはa・b器形に、底径大きく体部開き気味となるc類、底径大きく体部の外傾して寝てくるd類が加わる。a類器形からc類器形、b類器形からd類器形という時間的流れを感じるが、全体的な傾向として、体部外傾化と底面削りの粗雑化があり、中段階から新段階へ径高指数低下と底径増加の傾向として現れる。ただ、各器形類型は各段階で併存の様相をもち、Ⅵ2期の中で漸次変化すると言える。

Ⅵ3期も、内黒土師器が定量を占めるが、主体的であったのは古手の段階であり、後半には無垢土師器が主体的となる。当期の内黒土師器は、体部下位から底面を削らないe類が主体を占め、底径が大型化、厚手で、内面磨きも粗いものが主体的となる。特殊小型は未確認だが、特大は存在しており、Ⅵ2期と大きな変化はない。無垢土師器はⅥ2期に若干量確認されるが、定量生産される段階にはなく、この時期のものは須恵器の土師器焼成というイメージであったと考えている。Ⅵ3期は、古手の体部器肉厚手のものから薄く作るものへと変化し、底径が小型化してくる。全体的にはこの時期のものも、須恵器の埦A器形や作りに類似する傾向がある。無垢土師器埦Aの薄手で底部小型化した一群（e2）については、Ⅶ1期に入れるかで議論のあるところだが、Ⅶ1期の指標と言える口径11cm台の小型一群や作りの変化の出現前と判断し、Ⅵ3期の末期と位置付けておきたい。

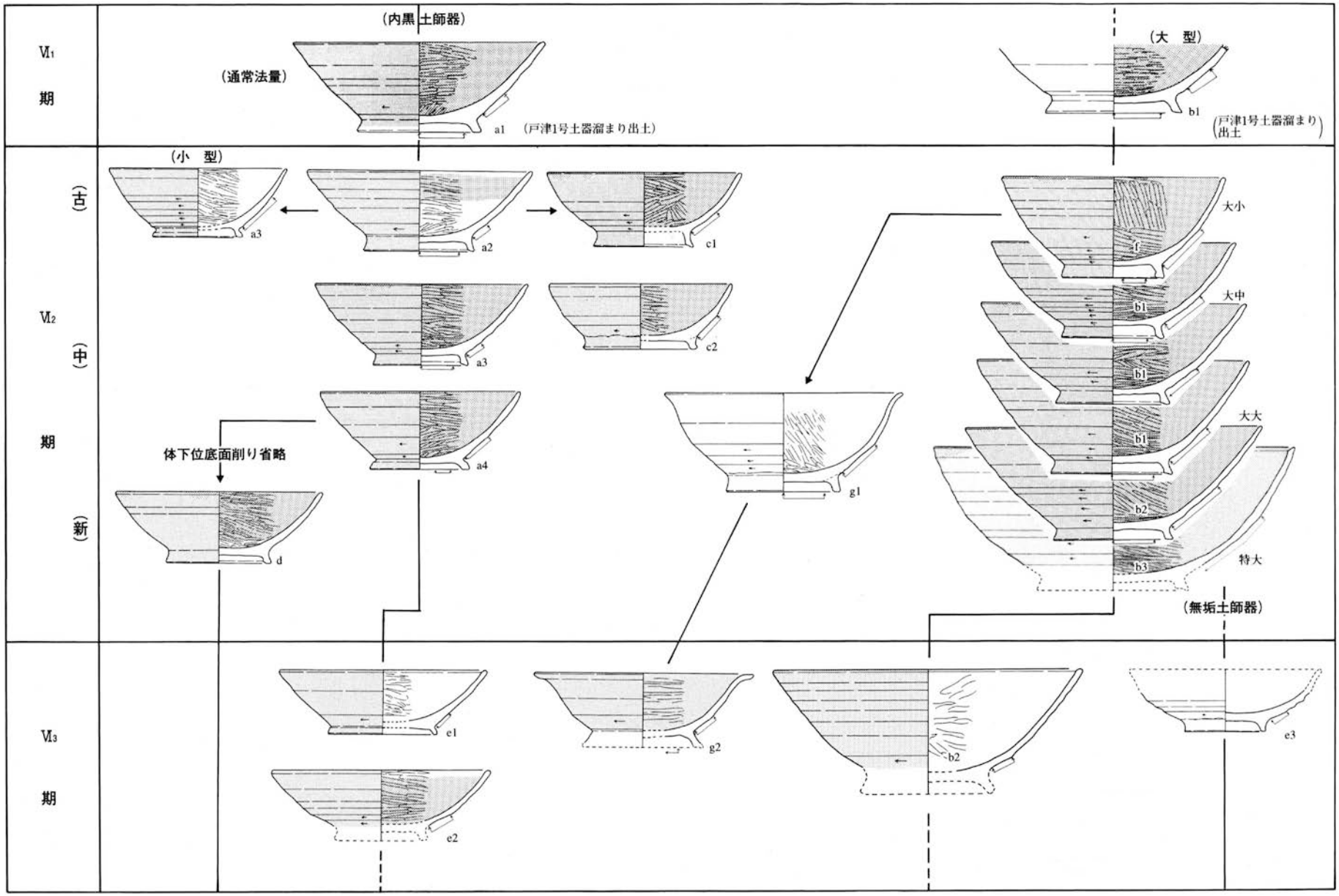
《土師器埦B》　Ⅵ1期に既に通常法量と大型法量とが確認されており、出現当初から明確な法量分化が行われている。通常法量は体部外傾器形で台径大きく、高台踏ん張って付くa類。大型法量は体部内湾器形で、やや深身を呈す傾向がある。高台は高く踏ん張り、作りが丁寧である（b類）。いずれも体部下位から底面にかけて削りを施し、外面赤彩の内黒焼成を基本とする。Ⅵ2期期まで同様の特徴が維持されるが、Ⅵ3期には体部下位のみの削りが主となって底面削りは省略される傾向をもつ。

Ⅵ2期も通常法量の外傾器形と大型法量の埦形器形は踏襲される。通常法量の口径は、Ⅵ1期の18cmから15～16cm前後へと小型化し、高台も小型化、やや薄手になる。また、当期には口径13cm以下の小型法量が加わり、器形も体部内湾器形で偏平を呈するc類器形や体部開き気味で底面削り省略のd類が存在する。ただ、これらのものは従的存在で、主体はa類器形であり、a2類からa4類への底径小型化の流れがⅥ2期の中での時間的推移に対応する可能性をもつ。ただし、これに関しても、中から新段階への法量変化では確認できず、型式的な流れという意味合いのものである。当期の高台はいずれも断面方形のしっかりとしたものが踏ん張って、丁寧に作られる。大型法量は、小・中・大・特大と法量の幅が広く、体部下位から底面の削りや内面磨きなど丁寧に作られる。器形は体部内湾器形のb類で、次第に体部外傾気味のb2類へと変化する。いずれも高台は高く、しっかりと作られ、特大口縁部形態には、埦Aの特大同様の面形成が見られる（b3）。この大型法量の小型一群にf類とした体部内湾の顕著な器形があり、高台高く、作りも丁寧であるなど、精製品の感がある。同時期、体部下位に稜を形成する稜埦器形のg類が確認されており、類似している。

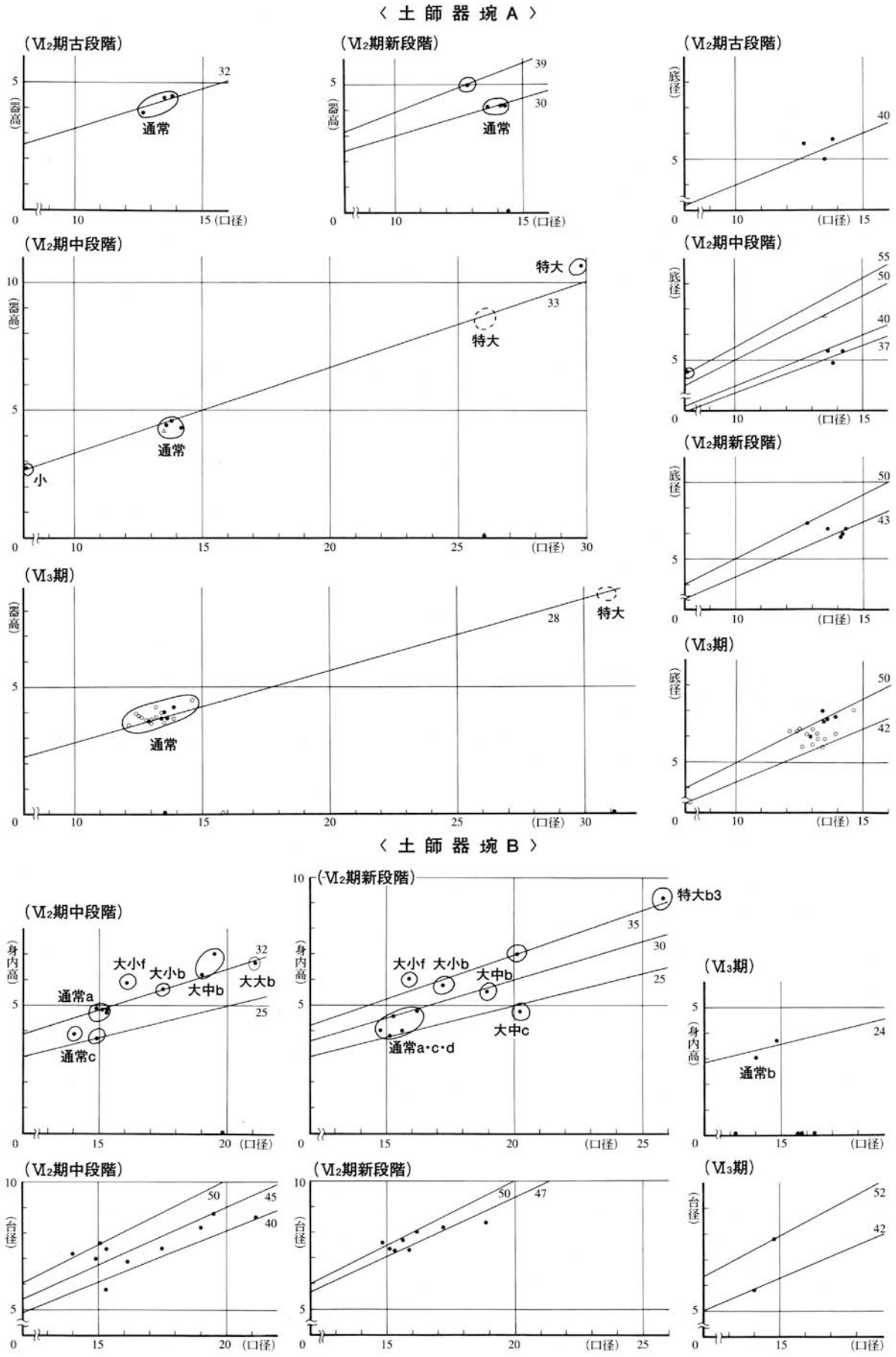
Ⅵ3期は、埦Bの数量が低下し、少量の内黒土師器と無垢土師器で構成される。通常法量の内黒土師器は外面



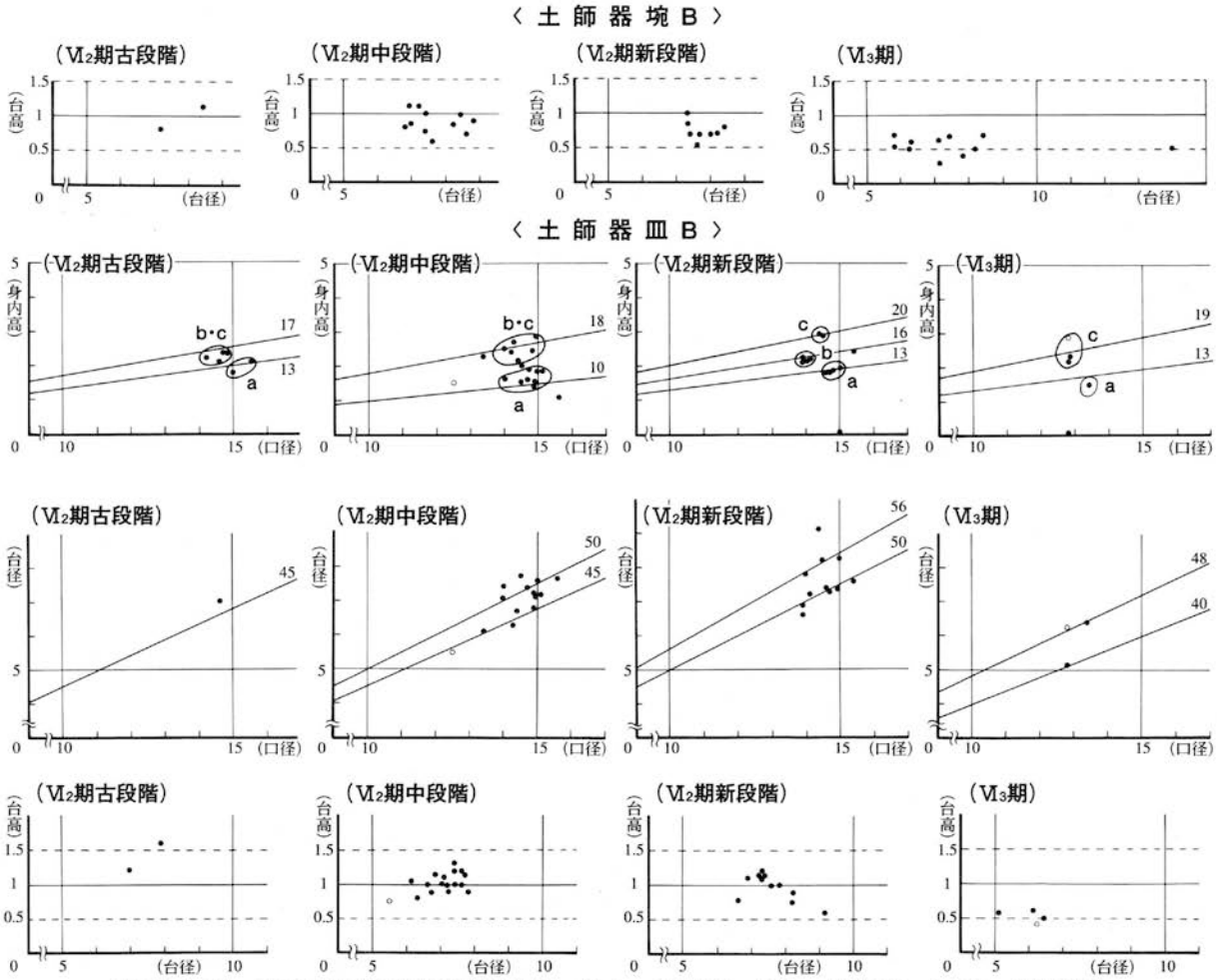
第257図　土師器椀A変遷図（S=1/4）



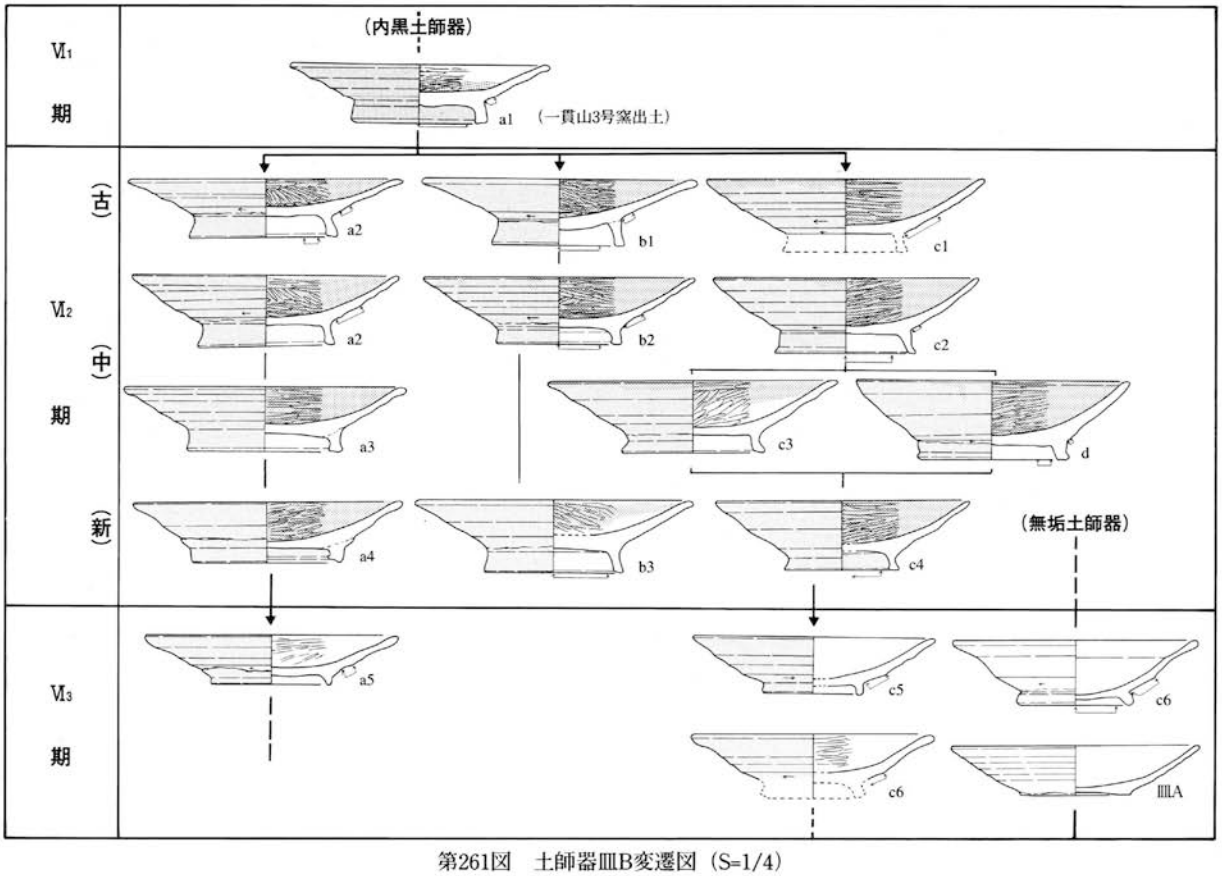
第258図　土師器椀B変遷図（S=1/4）



第259図　Ⅵ2・Ⅵ3期土師器食膳具法量分布図1（白丸…赤彩土師、黒丸…内黒土師、白三角…無垢土師）



第260図　Ⅵ2・Ⅵ3期土師器食膳具法量分布図2（白丸…赤彩土師、黒丸…内黒土師、白三角…無垢土師）



第261図　土師器ⅢB変遷図（S=1/4）

赤彩を保持するも、底面削りは省略の傾向にあり、作りも雑となる。高台は端部丸くなったり、三角形状を呈すなど、全体的に低下して華奢になる。体部器形は外傾強く、低平化する傾向にある。稜埦器形のｇ類は存続し、大型法量も少量残る。また、高台だけだが、台径14㎝の特殊大型が確認され、埦Ａの特大法量に匹敵する特殊大型品が埦Ｂでも存在した可能性がある。無垢土師器は須恵器的な器形のものが少量確認されるのみで、後半段階では粗雑な作りのものが僅かに残存する程度である。埦の主体は埦Ａに完全に移行した段階と言える。

《土師器皿Ａ・皿Ｂ》　皿類はⅥ1期に定量の内黒皿Ｂが確認されている。外面赤彩、体部下位から底面を削るもので、径大きな高台が高くしっかりと作られる。体部は内底面の広く身の浅い器形を呈し、磨きが丁寧に施される（a1類）。

Ⅵ2期は皿Ｂが増加。ａ類器形に、身内面の平坦面が狭く、体部外傾して立ち上がるｂ類器形と体部がやや内湾気味に立ち上がるｃ類器形が加わる。ｂ類器形の高台径は小さめだが、台高の高いしっかりした形態が目立つ。ｃ類器形の高台は高台径の大きな形態が古く（c2類）、径が小型で低めの高台の付く形態（c4類）へと変化するものと予想する。また、中～新段階にはｃ類器形系で厚手の雑な作りのｄ類が加わる。ａ類器形も高台高く、作りの良いa2類が古手。厚手で高台低く、雑な作りとなるa3類、a4類は中～新段階のものである。

Ⅵ3期は内黒皿Ｂの数量が激減し、消滅に近い様相をもつ。内黒土師器に加え、無垢土師器が定量加わるが、埦に比べるとかなり少ない。内黒土師器は外面赤彩で、ａ類・ｃ類器形が残るが、全体的に小型し、底面糸切りを残すなど作りが雑になる。ａ類器形は断面三角形の低い高台が付くa5類となり、ｃ類器形も高台径小さい小型高台となって、全体的に低平な埦Ｂ状器形（c5・c6類）となる。無垢土師器皿Ｂはｃ類器形のみで、埦形化したc6類がある。また、当期の無垢土師器皿は、皿Ｂよりも皿Ａの方が数量的に多く、無垢土師器埦Ａの体部が強く開いたような低平器形を呈す。無垢土師器埦が埦Ａ主体となったことと関連性があろう。

２．土師器煮炊具

土師器煮炊具は、小釜、釜、鍋、甑の従来の器種に加え、小型鉢と羽釜が組成の中に含まれる。台付鉢や円筒形土器は極めて少なく、衰退の様相を呈す。

さて、煮炊具の基本的な小釜、釜、鍋の３器種だが、この時期にかなり薄く作られる傾向が見られる。特に、小釜については顕著であり、ロクロヒダの顕著なものが目立つ。器面ロクロ調整の小釜は７世紀後葉より継続する器種であり、底面平底の当器形は８世紀中頃以降、Ⅵ2期に至るまで大きな変化はない。ただ、当期の小釜はⅤ期のものに比べると、胴部から口縁部にかけて、薄く引き延ばして作られており、ロクロヒダの凹凸が内外で対応するようなものも現れる。粘土紐積み痕跡はほとんど確認できなくなり、成形段階で強い回転力が使われた可能性をもつ。それまでの土師器煮炊具に使われるロクロは、主に調整段階での使用であったと理解しているが、当期の小釜は成形段階でロクロによる回転力を使い、挽き上げる成形が行われていた可能性をもつ。これは大型品である釜や鍋についても同様であるが、小型の小釜では、Ⅵ1期に既に先行していた可能性高く、釜や鍋はⅥ2期の中で定着したものと考える。当期には須恵器においても、薄く挽く上げる坏Ａや坏Ｂ、埦皿類、そして小型の瓶類においてもかなり薄く挽き上げているものが見られる。薄く作り上げる技術、つまり、ロクロ成形台の改良やロクロを使った成形方法の進化など、この時期にロクロを使った成形方法が躍進した可能性がある。しかし、一方では技術論ではなく、薄く作り上げるという製品に対する指向性、例えば脆い品という意識や使い捨ての観念、又は材料粘土コスト削減など、他の要素があった可能性も捨て切れない。ロクロ成形方法が躍進したと評価すれば、南加賀窯跡群のみの問題ではなく、全国的な技術変革の問題にも関わることであり、十分に検討した後、この問題は答えを出すべきと言える。今後の課題としておく。

なお、各煮炊具の変遷様相については、以下に述べる。

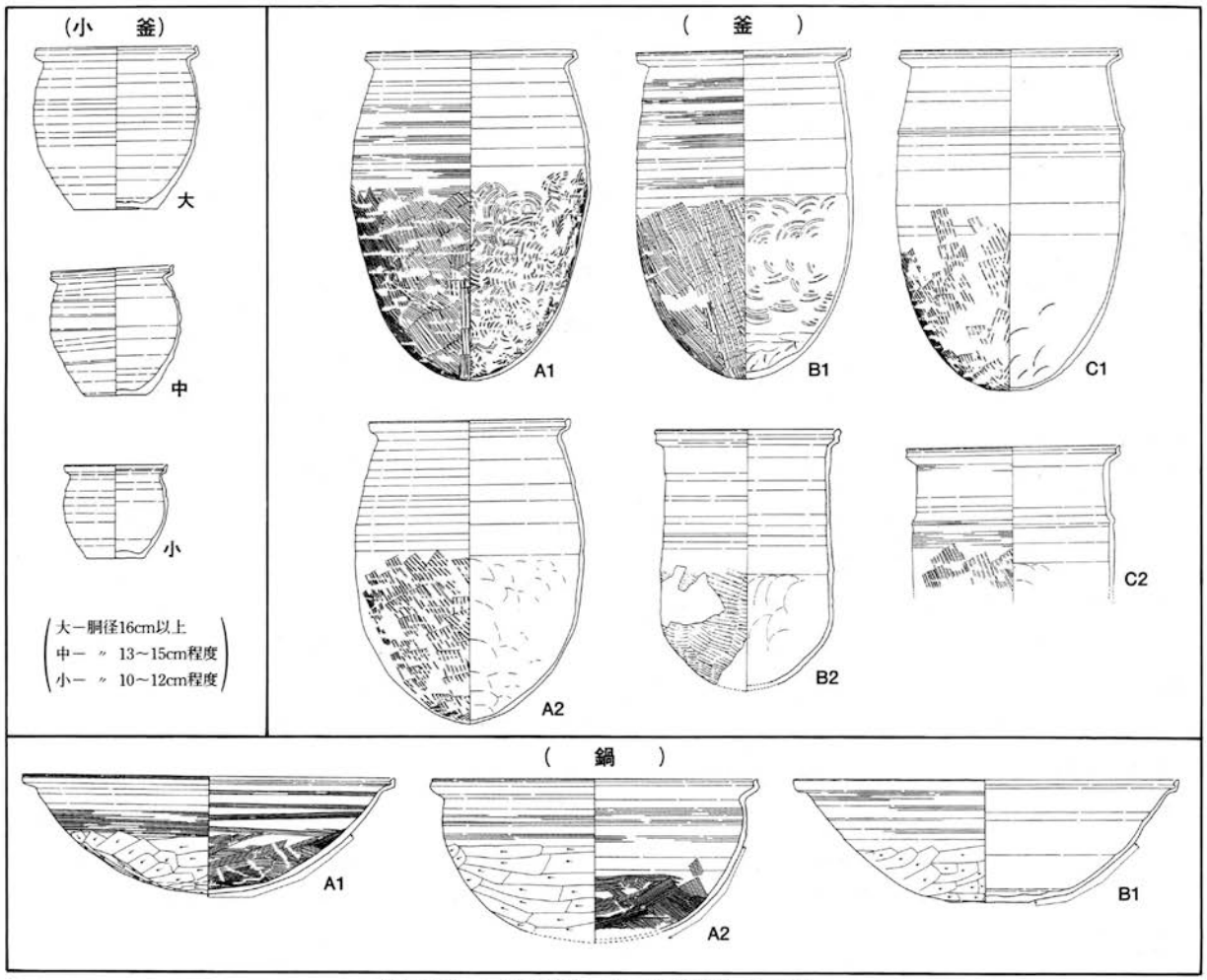
《土師器小釜》　小釜は底部平底の短胴器形で、基本的な器形は１種類である。胴径部から、16㎝以上のものを大、13～15㎝程度のものを中、10～12㎝程度のものを小、10㎝未満のものを特小とする。各法量間で、明確な法量の断絶はなく、明瞭な法量分化をしている訳ではない。時期的な変化を示すものに口縁部器形がある。細分すると、21類型あるため、大まかな系統に分けて、Ⅵ2期の古段階からⅥ3期までの流れを概観する。Ⅵ2期古段階は口縁部上端を基本的に上へと摘まみ上げるａ系統と口縁部上端を反らせて摘まみ上げるｂ系統とに分けられる。

古段階のａ系統は長く摘まみ上げるa1類と短く摘まみ上げるa2類。ｂ系統も基本的に同様の長く沿って摘まみ上げるa1類と短い摘まみ上げのa2類とがある。Ⅵ1期資料が乏しいため、確実な資料提示は難しいが、Ⅵ1期の主体は口縁部上端の摘まみ上げが短いa2類とb2類が主流であり、長く摘まみ上げるものは例外的であったと理解している。Ⅵ2期に比べてまだ胴部から口縁部にかけて厚手であり、長く挽き延ばす技術の過渡的段階であったと理解している。Ⅵ2期古段階のa2類は短く立ち上がる部分でやや反り気味となるb2類との区別が不明瞭なものが定量あり、中段階ではb2類的な短い立ち上がりのものが主体となる。ｂ系統の流れとは異なる形で、短い立ち上がりの終焉形態を呈す。また、ａ系統の中段階ではa1類の端部がやや肥厚したa4類となり、徐々にシャープさを欠いてくる。新段階にはa4類の立ち上がりがやや短めとなり、そこからの派生形であろうか、口縁部上端立ち上がりの丸くなるｃ・ｄ類系の器形へと変化する。そして、Ⅵ3期にかけて、内側に肥厚気味となるd2類や内側に巻き込むd4類が目立つようになる。以上、ａ類系統は、口縁部上端短く立ち上がる器形から、口縁部長く摘まみ上げる器形、そしてその摘まみ上げが端部肥厚したり、立ち上がり丸くなって内側に巻き込む器形へと変化する様相が見える。これに対し、ｂ系統は端部を反らせる器形が基本であり、反り方によって変化している。Ⅵ2期古段階では、Ⅵ1期以来の摘まみ上げがやや短めのb2類に加え、口縁端部を長く外反して摘まみ上げるb1類が存在し、中段階には反りが強くなってＳ字状を呈すb3類に変化。頸部屈曲後に丸く膨らむｅ類系統も加わる。新段階、Ⅵ3期へは、ｅ類が膨らみ強くなり、Ｓ字呈すb3類は徐々に上から潰れたようなb4・b5類器形が目立つようになる。以上、ｂ類系統の口縁部器形変化をまとめると、Ⅵ2期古段階で反りながら上へと長く摘まみ上げた口縁端部が徐々に反りを強くし、上から潰したようなＳ字状へと変化。また、それとともにＳ字の下の膨らみが大きくなってくる。Ⅵ2期以降の小釜口縁部器形変化は、南加賀窯跡群全体に共通するものと考えているが、南加賀地域全体においても、ほぼ共通する様相と理解している。

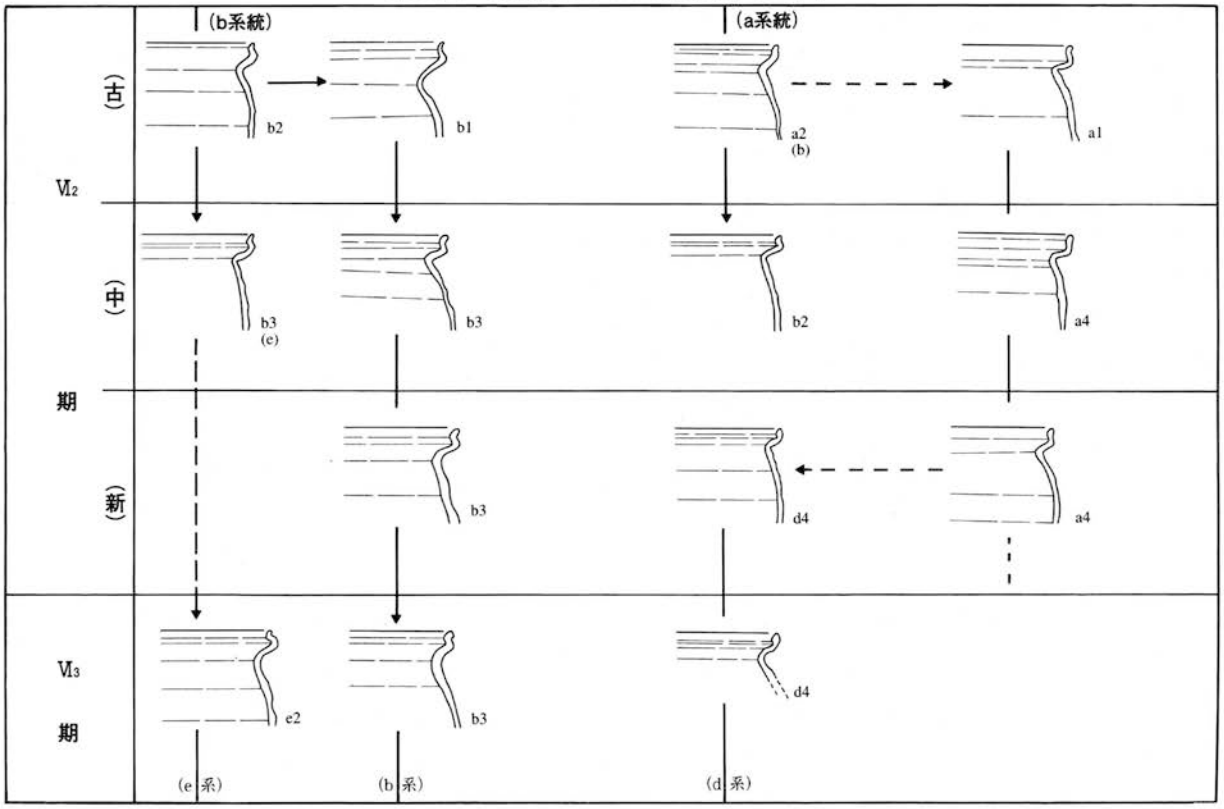
《土師器釜》　土師器釜は、胴部の全体的器形から、胴張り系統のＡ類とずん胴系統のＢ類に大別でき、Ａ類はさらに胴張り弱めのA1類と胴張り強く、底部へと尖底状となるA2類に細分。Ｂ類も比較的薄手のB1類と厚手で胴部下半が膨らむ器形を呈すB2類に細分される。また、当期にはＢ類器形で、羽釜の影響と思われる鍔状の稜を胴部上位に形成するＣ類もあり、これについてはＢ類胴部器形同様に、C1類とC2類に細分する。C1類は９号粘土採掘坑で、C2類は10号粘土採掘坑でのみ確認されており、突発的なものと言える。

Ⅵ1期もそうであるが、Ⅵ2期についても、主体的な器形は、A1類とB1類で、Ⅵ2期中～新段階において、B2類が出現し、Ⅵ3期へと増加する。Ⅵ3期においては、過半数を占める器形であり、胴部厚手化に対し、胴部下位の叩き出し部分が薄く作られるのが特徴的である。底部の叩き出しは胴部ロクロ成形・調整後、最終工程で行われるものであり、胴部側から底部中心へと縦軸に施されるのが基本である。Ⅳ2新期に定量見られた胴部外面の叩き出し上端の境に縦方向削りをもつものが数点ではあるが、Ⅵ2期にも確認される。削り範囲は狭く、部分的に施すもので、Ⅳ2新期のものとは異なるが、叩き出しの境の段差や粘土のはみ出しを削り取るのに必要な調整であったのだろう。外面の叩き具文様は基本的にHa類とHe類で、後者が主体的と言える。内面当て具痕はDa類とSD類（芯持ち木製無文当て具）が主体で、木製と思われるが年輪文様のない無文当て具も定量存在する。また、僅かであるがDc類とHe類が確認できる。叩き後に当て具痕をなで消す調整が一般的に行われており、Ⅵ2期、Ⅵ3期を通し、なで調整の加わるものが大半を占め、完全に当て具痕をなで消すものも一定量見られる。なで調整は胴部下半叩きによる歪みなど器形を整える働きがあった可能性を持つが、これ以前でも同様であり、特に当期に顕在化する理由にならない。Ⅵ2期の釜の全体的な薄手化に伴って、底部も薄くするために行われていたとも評価できるが、Ⅵ2期に盛行する須恵器甕の胴部内面なで調整と関連性があると見るのが穏当だろう。

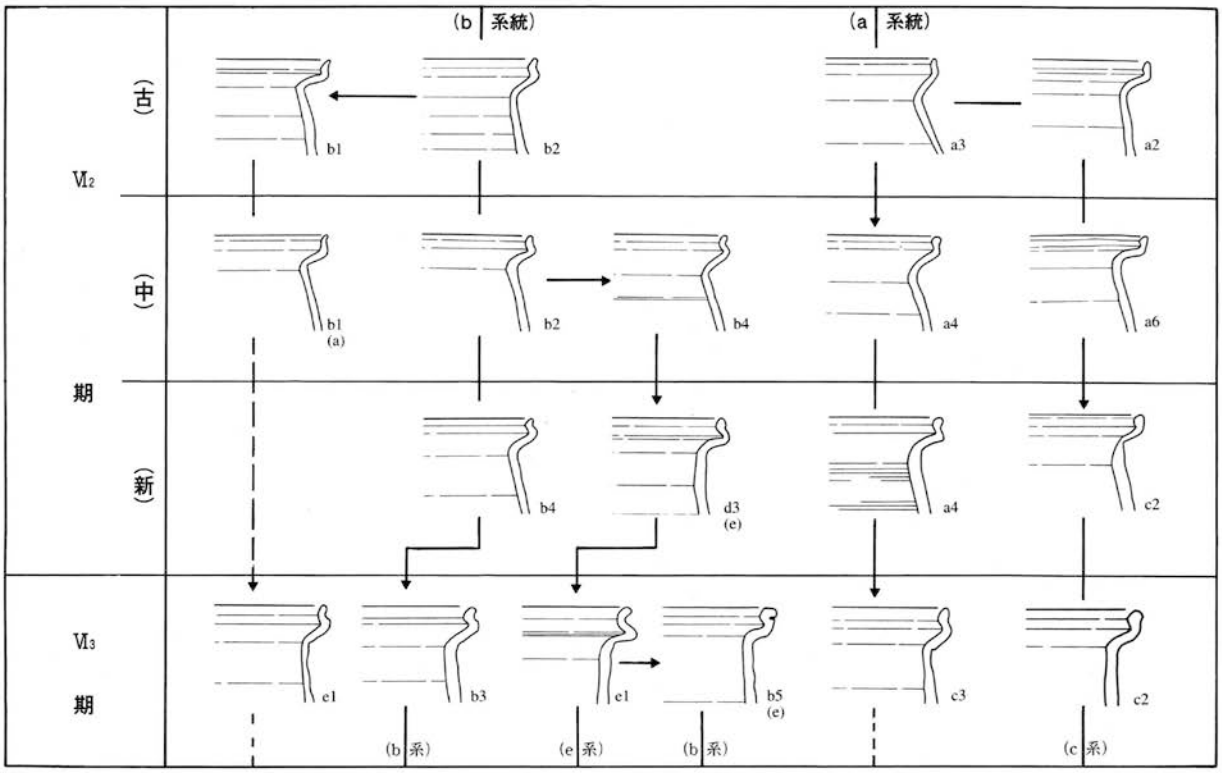
釜の口縁部器形も、小釜同様に、Ⅵ2期からⅥ3期へと変化が確認でき、ａ系統、ｂ系統で変化する点など、大枠では小釜と同様の変化と位置付けできる。ただ、ａ系統では長くつまみ出すa1類は古段階に顕在化せず、長く挽き出すものはｂ系統を呈す。ａ系統は比較的短めのものが主体的で、中段階で端部肥厚するa4類や内面肥厚の段を形成するa6類が主体的になり、新段階には立ち上がりの丸いｃ類系統へと変化する。Ⅵ3期にはａ類系統はほぼｃ類系統になり、立ち上がりが長くなって、内面肥厚や段をもつc2類やc3類が主体化する。釜ではａ類系統よりもｂ類系統の率が高く、口縁端部を長く挽き延ばして、Ｓ字に折り曲げるb3類、そしてそれが上から潰れる



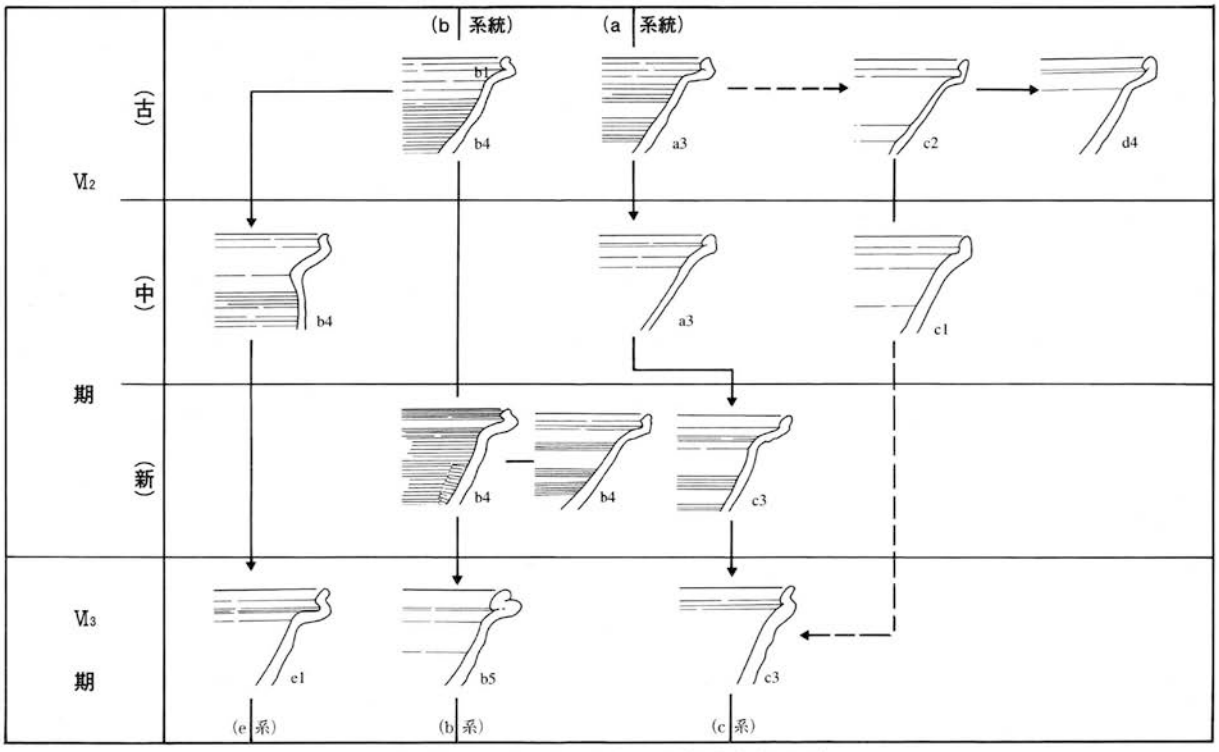
第262図　土師器小釜・釜・鍋分類図（S=1/8）



第263図　小釜口縁部器形変遷図（S=1/4）



第264図　土師器釜口縁部器形変遷図（S=1/4）



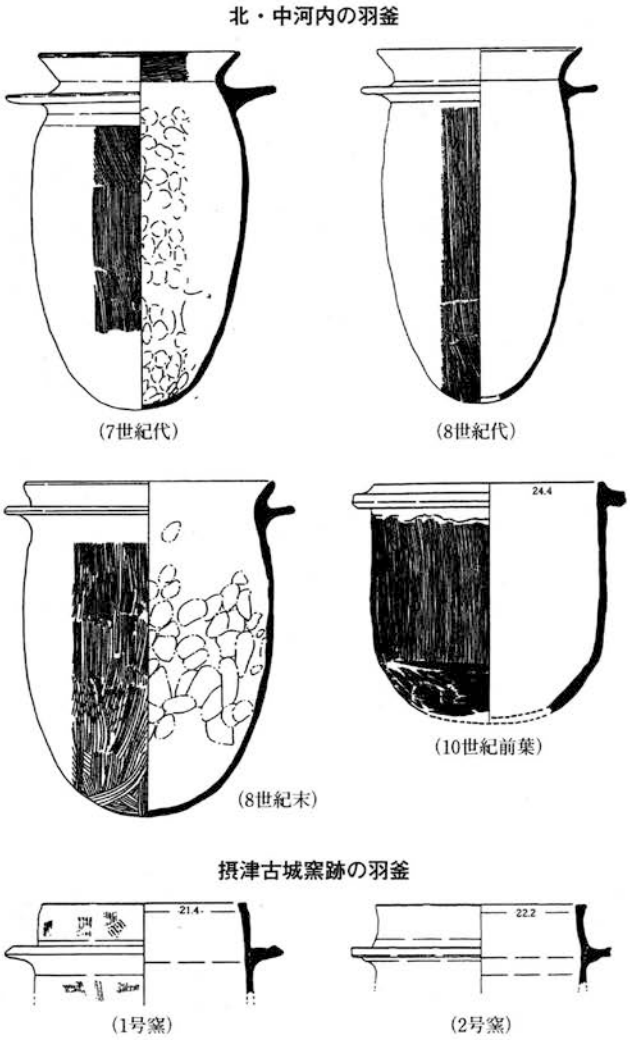
第265図　土師器鍋口縁部器形変遷図（S=1/4）

b4・b5類へと変化する。また、S字の下の屈曲が丸く膨らむe類が新段階以降増加し、Ⅵ3期には主体化する。小釜の変化と同様だが、釜では特に上から潰れる器形のものが多く、S字の下の膨らみも大きい特徴がある。

《土師器鍋》　鍋は底部整形・調整技法により、体部内面下半を刷毛調整で丸く整形する一般的なA類と内面ロクロナデ調整のままで、刷毛調整が施されず、底部の小型な円盤痕を残すB類とに大別できる。また、さらに、体部下半から底部にかけての器形から、通常の浅い器形を呈す1類と底部丸く深身を呈す2類とに分類される。一般的なA1類が半数程度を占めるが、B類も定量存在。A2類は少ない。さて、鍋の成形方法であるが、体部下半に叩き出し痕の残るものは確認できず、叩き出しによる丸底化ではない技法によって丸底器形を作り出していると言える。A2類に関しては、叩き出し後削りや刷毛調整で消している可能性はあるが、A1類やB類に関しては、叩き出し成形を行っているとは考えがたい。A1類に関しては、内面からの刷毛調整によって体部下半から底部を押し出すようにし、外面削りで形を整えるものと考えるが、B類に関しては、ロクロ成形・調整時の痕跡をそのまま内面に残しており、底部円盤痕も残っている。外面は成形台よりはずした後、削りによって、形は整えるが、底部外面は削らずに成形台痕をそのまま残しており、ロクロ成形時に丸底器形の概形はおおよそできていたものと考えられる。底部円盤を小型にしているのはそのためもあろう。また、底部の内面のみ内側からのナデが施されており、丸底にするため、内面からの押し出しも行われていると言える。ロクロ成形台上で、これだけの大型製品で口縁部の開く器形を薄く作り上げることができたのだろうか。釜など大型品も薄く挽き出すように作られており、ロクロ成形技術の進化を考えたくなる。ただ、あれだけの大型品かつ口縁部開く器形で、薄く一気に挽き上げたのか疑問もあり、短絡的には技術を論じられない。これについても、今後の課題としておく。

さて、口縁部器形であるが、釜同様、a類系統とb類系統が存在する。b類系統はⅥ1期ではb2類的な短い摘まみ上げ器形であったが、Ⅵ2期には内側に強く折って端部を反らせるS字状に近いb4類へ変化する。古段階から新段階へと摘まみ上げは長くなり、Ⅵ3期には釜同様、厚手となってe類やb5類が主体的となる。a類系統も、Ⅵ1期には短いa2類であったものが、Ⅵ2期には口縁端部を内側に曲げるa3類へ変化し、長く立ち上がるものに関しては口縁部立ち上がりの丸いc類やd類器形となる。a3類器形もⅥ2期新段階にはc・d類器形へ変化し、a類系統は徐々に減少する。Ⅵ3期のc・d類としたものは、折り曲げた際の潰れたS字痕跡が残るか否かだけで、基本的には長く挽き延ばしたものを上から潰した器形であり、a3類の延長線上にあるものと言える。

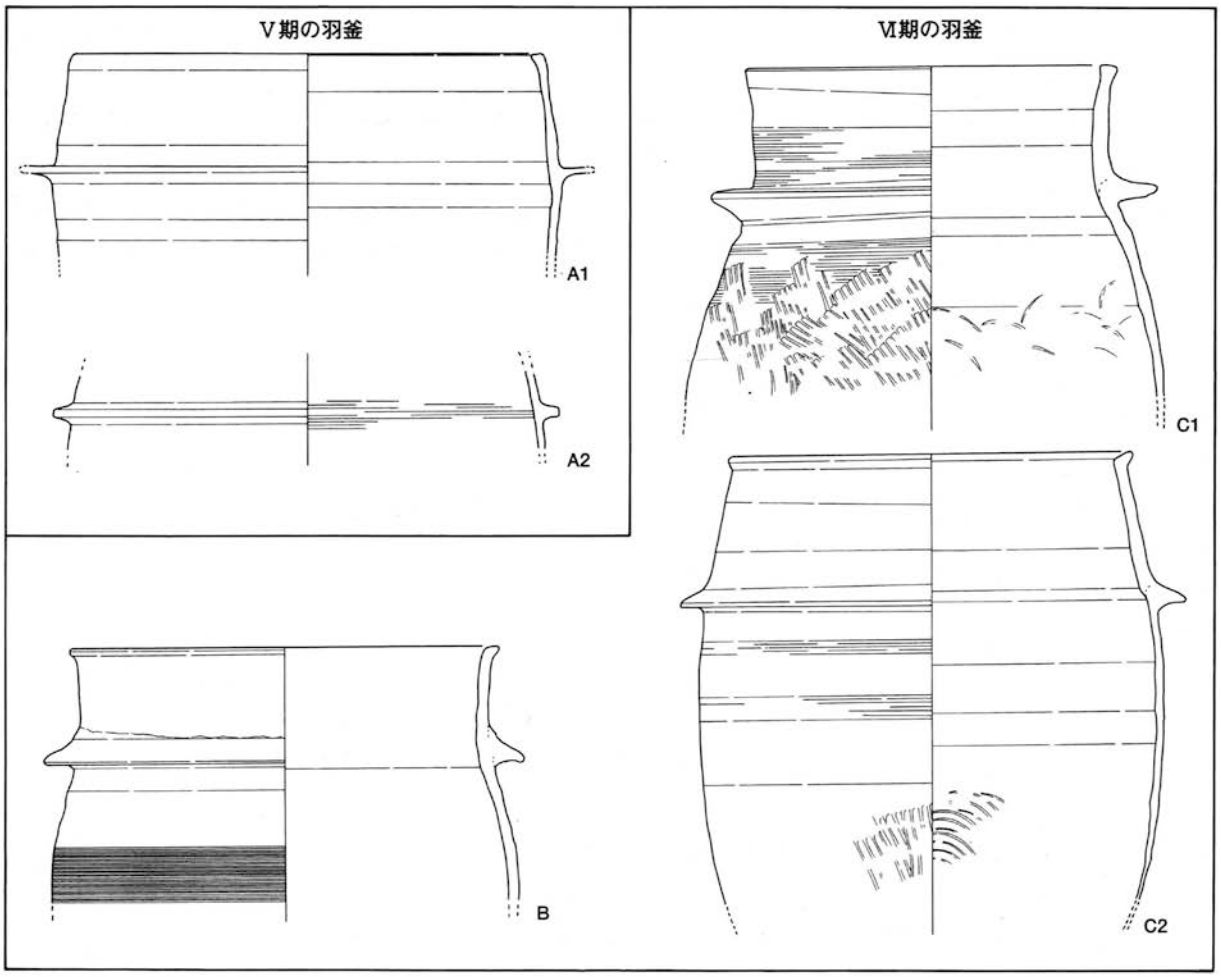
《土師器羽釜》　土師器羽釜はⅤ期頃に少量出現しているようだが、定量確認されるのはⅥ2期である。Ⅵ3期の羽釜の確認はなく、Ⅵ2期のみに顕在化した特殊煮炊具という位置付けがなされるものだろう。羽釜の器形は、底部丸底で、長胴の砲弾型器形を呈し、口縁部がやや内傾かそのまま立ち上がって、内外肥厚して上端面形成するものである。5世紀末以降、畿内特に河内を中心に定量確認される羽釜器形（長胴の釜



第266図　関西地域土師器羽釜（1/8）
（古代土器研　1996A・Bより転載）

器形に鍔が付くだけの器形）ではなく、当窯のものは鉄製品を模倣したような口縁部直立の器形を呈すことが特徴と言える。このような器形は、畿内では10世紀代に入ってから顕在化するものであり、当窯の９世紀代には、河内ではまだ、釜の口縁部器形に類している。畿内の10世紀代のものは鍔から上の口縁部がとても短いのが特徴と言え、当窯資料とは異なる。鍔から上へ長く立ち上がる器形は類例に乏しく、僅かに摂津の古城１・２号窯に確認される程度である。古城窯資料も９世紀後葉と古く、叩き成形を施すなど関連性があるかもしれない。

当窯の羽釜は、鍔の器形や成形方法によって、薄く小さな鍔を摘まみ出して作り出すＡ類と、やや下向きの鍔が貼り付けで作られるＢ類、胴部上端を「く」字に外屈させ、その屈曲部から上に口縁部を積み上げ成形する折り曲げ鍔のＣ類に分類される。Ａ類は、Ⅴ期に位置付けられると考えられるもので、全体的に薄手。胴部から口縁部へとそのまま立ち上がり、若干口縁部へと窄まる器形を呈す。鍔の長さから長く摘まみ出しているA1類と短いA2類とに分けられ、A2類にはカキ目調整が見られる。Ｂ類はやや膨らみもつ胴部から口縁部へと立ち上がる器形で、口径の比較的大きなものである。胴部にカキ目が施されている。Ｃ類は口縁部継ぎ足し成形の繋ぎ目が内面に痕跡として残り、この部分で厚さが異なる。口縁部立ち上がりが長いものであり、立ち上がり器形からほぼ直立気味に立ち上がるC1類と胴部からの器形のまま口縁部へと徐々に窄まって行くC2類に細分される。前者は厚手で、胴部叩きが鍔付近まで施されるもの。後者はＢ類同様の厚さで、叩きは胴部下半の叩き出しに限られるものである。Ｂ類は２号粘土採掘坑、C1類は４号粘土採掘坑、C2類は11号土坑と６号粘土採掘坑から出土する。いずれもⅥ2期の中段階、その中でもやや古相呈する一群と評価でき、Ⅵ2期古段階は未確認だが、釜C1類器形の存在を考えれば、定量存在していたものと考えている。他地域の羽釜器形から考えれば、10世紀へは徐々に口縁部



第267図　土師器羽釜分類図（1/4）

の短縮が予想されるが、当窯資料でそのような器形のものが確認されないのは、Ⅵ2期新段階からⅥ3期では羽釜生産は終わっていたものと理解する。生産されていたとしても僅かなものであったろう。

《土師器甑》　いずれもずん胴で、筒抜け底部を持つ器形である。胴部下端が僅かに窄まり内側に肥厚する形で、簀の子を止める形態のものに限られ、Ⅴ期まで定量存在した脚状に「く」字外屈する器形のものは確認されない。口縁部下に2条の稜を形成し、上端は内外に肥厚して面形成するものである。把手は幅広三角状が内側に巻き込むように付き、上端が接するものや接着して繋がる形態もある。口径大きい割に器高の低い器形で、薄手の作りをするA類が一般的であるが、厚手で小型の作りを持つB類が少量存在する。全体的には煮炊具の少量を占めるだけの器種であり、器形もほぼ統一されており、Ⅴ期の最も一般的な器形が、口径拡大・短胴化して薄手になったものと理解できる。薄手化はⅥ2期の全体的な傾向であり、これに関しても、ロクロ成形が存在した可能性がある。

補注　当期の須恵器編年観については、従来の1988年北陸古代土器研究会シンポジウムによる田嶋編年案に基づいているが、1997年北陸古代土器研究会シンポジウム「北陸の10・11世紀代の土器様相」において、田嶋明人氏は「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」と題した報告をされた際、南加賀窯対比資料の修正を提示された。内容は、従来、南加賀窯終末期に位置付けていた戸津48号窯をⅦ1期からⅥ3期内で収まると修正された点で、これを受ければ、南加賀窯はⅥ3期でほぼ終焉するということになる。筆者自身が、南加賀窯編年に対比できる土師器資料を持ち合わせていないことが混乱の要因であったと言えるが、筆者も1992年に提示した戸津窯編年案（望月1992B）の中で、Ⅵ2期以降の須恵器編年を2期、6小期に細分したことがある。その時点では、戸津48号窯をⅦ1期に下ろす意識が強かったため2期6小期を3期に割り振ったが、編年観とすれば、1期がⅥ2期、2期がⅥ3期とする形でまとまる。ただ、南加賀窯をⅥ3期終焉とすることに関しては、加賀市耳聞山遺跡下層ＰＯ－１土器群内の南加賀窯産須恵器が問題となる。Ⅶ1期に位置付けられる土師器塊資料に少量の須恵器塊Ａ・Ｂが含まれている。器形的には2期新段階に位置付けられるものであるが、焼きは半還元状態で軟質化している。須恵器占有率の低下は生産量の激減を物語るものであり、基本的には須恵器生産は終焉期にあったものと考えられるが、Ⅶ1期までは生産体制解体直後程度に小型の窯による小規模生産が存続した可能性を示している。また、軟質な焼成である点から、窖窯ではない構造の焼成も考えておく必要があろう。

引用・参考文献

加賀市教育委員会　1994　『耳聞山遺跡』

古代土器研究会　1996A　『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』

古代土器研究会　1996B　『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』

小松市教育委員会　1991　『戸津古窯跡群Ⅰ』

小松市教育委員会　1992　『戸津古窯跡群Ⅱ』

小松市教育委員会　1993　『二ッ梨豆岡向山古窯跡』

田嶋明人　1988　「編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会・石川考古学研究会

田嶋明人　1997　「加賀地域での１０・１１世紀土器編年と暦年代」『北陸の１０・１１世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会シンポジウム資料

出越茂和　1997　「北陸古代後半期における椀Ⅲ食器（前）」『北陸古代土器研究会』第６号　北陸古代土器研究会

望月精司　1992A　「須恵器のまとめ」『戸津古窯跡群Ⅱ』　小松市教育委員会

望月精司　1992B　「加賀地域における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』第２号　北陸古代土器研究会

F区　9世紀後葉～10世紀前半の遺構出土土器観察表

5号土坑出土土器（第207～211図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	5号土坑下層	口14.5, 高2.2	普通	灰色焼良好	1/2	
2	〃	〃	口14.6, 高1.6	〃	青灰焼堅緻	4/5	重焼Ⅲ
3	〃	〃	口15.6, 高1.3	〃	灰白焼良	3/4	〃
4	須恵坏E蓋小	5号土坑	口12.5, 高1.9	〃	暗灰焼堅緻	1/4	
5	〃	〃	口11.8, 高1.7	〃	暗青灰焼堅緻	完形	重焼Ⅲ・ヘラ記号「×」
6	須恵坏B身大	5号土坑下層	口14.8, 高5.65 台7.7, 台高0.75	〃	青灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅲ・爪痕b②
7	〃	5号土坑	口14.8, 高5.4 台8.2, 台高0.8	〃	青灰白焼良	1/5	重焼Ⅱ
8	〃	5号土坑下層	口13.6, 高6.4 台8.4, 台高1.1	砂多	灰色焼良好	1/4	
9	須恵坏E身小	〃	口10.65, 高3.35	普通	青灰焼堅緻	〃	重焼Ⅲ
10	〃	5号土坑	口11.3, 高3.75	〃	暗灰焼堅緻	1/5	
11	須恵坏A	5号土坑下層	口13.2, 高3.2	〃	灰白焼良	5/6	6枚重ねの3枚目 底面に「大」のヘラ描
12	〃	〃	口12.6, 高3.35	〃	〃	3/4	6枚重ねの上から1枚目
13	〃	〃	口12.8, 高3.2	〃	〃	〃	6枚重ねの2枚目 内面体部ヘラ記号「I」
14	〃	〃	口13.2, 高3.5	〃	〃	5/6	6枚重ねの4枚目
15	〃	〃	口13.0, 高3.5	〃	〃	7/8	6枚重ねの5枚目
16	須恵盤A	〃	口14.8, 高1.6	〃	青灰焼堅緻	略完	底面ヘラ記号「I」
17	須恵ⅢB	5号土坑	口12.8, 高3.1 台6.8, 台高0.7	〃	青灰焼良好	1/2	糸切痕
18	〃	5号土坑下層	口13.2, 高2.9 台7.2, 台高0.8	〃	灰色焼良好	略完	糸切痕
19	須恵壺B(足高)	5号土坑	台9.2, 高1.25	〃	青灰焼良好	台片	内底Da当て具押圧痕
20	須恵焼台B	5号土坑下層	口7.1, 高2.0	〃	灰色焼堅緻	4/5	糸切痕
21	〃	〃	口10.7, 高3.7	砂多	灰色焼良	1/4	
22	〃	〃	口13.2	普通	灰色焼堅緻	1/3	
23	〃	〃	口14.9, 高4.2	〃	〃	1/4	
24	須恵瓶B	〃	口9.9, 高21.2 頸5.2, 頸高8.2 胴14.2, 胴高12.2 台7.4, 台高0.7	〃	〃	4/5	台に坏A転用焼台付着し、その下に専用焼台 容量2.699ℓ
25	須恵瓶D (双耳)	〃	口12.9, 高32.0 頸7.4, 頸高7.6 胴18.2, 胴高24.4 底11.5, 耳厚0.8~1.4	普通	〃	完形	底面焼台痕 胴部にラセン状粘土紐巻き上げ痕残す 容量8.432ℓ
26	〃	〃	口16.2, 高42.8 頸9.9, 頸高9.1 胴25.4, 胴高33.7 底14.7, 耳厚0.6~1.5	〃	〃	〃	口頸外にヘラ記号「Ⅲ」 底面焼台付着 底部焼きヒビ入るが、使用の可能性大きい。 容量22.160ℓ
27	〃	〃	頸10.5 胴25.6 胴高33.0 底13.7 耳厚0.7～1.8	〃	〃	5/6	底面ⅢB転用焼台その下に、専用焼台付着 胴に縦軸整面叩き (外Ha叩き,内SD当て) 口縁欠き後に使用による摩耗 胴一部欠損・口縁欠損 容量21.469ℓ
28	須恵台付鉢	〃	脚25.4, 脚高12.0 脚基15.8	粗砂多 (土師 胎土)	〃	1/4	4方向6角形孔 鉢部下位外面H叩き

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
29	須恵大甕	5号土坑下層	口43.3 頸34.7 頸高6.5	普通	灰色焼堅緻	1/10	口縁外面ヘラ描「大」 胴横軸叩き→ハケ調整→口頸成形→頸部整面叩き 胴外Ha叩き,頸外He叩き、内Da当て
30	〃	〃	口52.3 頸45.0 頸高7.0 胴74.3	〃	灰色焼良好	1/6	(横軸叩き)→縦軸叩きを3段階、胴上位は横軸叩き後、口頸形成し、縦軸叩き 外面Ha叩き,内面He当て,丸底の可能性大きい。 容量推391.217ℓ
31	土師小釜	〃	口16.4, 高5.05 頸6.0, 胴6.6 底4.7	粗砂多	10YR8/2通	2/5	外面縦長・黒斑 容量0.209ℓ
32	〃	〃	口10.3, 高8.7 頸9.3, 胴10.6 底5.2	〃	7.5YR8/4通	3/4	外面1/5に縦長黒斑 容量0.98ℓ
33	〃	5号土坑	口11.6 頸10.3, 胴11.6	粗砂多 (土師 胎土)	灰色焼堅緻	1/18	
34	〃	5号土坑下層	口11.5, 頸10.3	粗砂多	〃	1/15	同一器種重焼
35	〃	〃	口13.1, 高13.0 頸11.4, 胴13.7 底6.6	粗砂含	7.5YR8/3通	4/5	容量2.5ℓ
36	〃	〃	口11.6, 高12.5 頸10.6, 胴13.4	〃	〃	2/3	容量2.160ℓ
37	〃	〃	口14.1, 高13.4 頸12.8, 胴14.7 底8.0	〃	〃	4/5	底面黒斑 外面胴上半～口縁にうすい黒斑（広い） 容量3.246ℓ
38	〃	〃	口15.7, 高14.8 頸13.7, 胴16.0 底8.2	〃	7.5YR8/2通	2/3	糸切り 容量3.934ℓ
39	〃	〃	口16.4, 高16.6 頸14.8, 胴16.8 底7.8	粗砂多	10YR8/1通	3/5	焼成不良・段面還元 糸切り 容量5.381ℓ
40	〃	〃	口16.8, 高17.3 頸14.2, 胴16.7 底8.2	粗砂含	10YR8/2通	〃	糸切り 容量5.748ℓ
41	〃	〃	口17.1 頸15.6, 胴16.9	〃	10YR8/3通	1/6	
42	〃	〃	口15.7 頸13.7, 胴16.8	〃	〃	〃	外面黒斑
43	土師釜	〃	口22.8 高33.8 頸20.3 胴23.2	〃	〃	4/5	胴全体に縦に黒斑 倒て焼成？ 胴下半叩き、外Ha内Da後ナデ 容量20.483ℓ
44	〃	〃	口21.9 頸20.0, 胴22.0	大粒 砂含	10YR8/2通	1/10	
45	〃	〃	口22.7, 高30.9 頸20.3, 胴24.2	粗砂含	7.5YR8/3通	1/3	胴下半叩き外Ha叩き 内無文当て 容量19.447ℓ
46	〃	〃	口21.3 頸18.9, 胴19.7	〃	7.5YR8/2通	1/10	胴叩きは外Ha叩き 内無文当て
47	〃	〃	口21.8 頸19.0, 胴21.5	〃	10YR8/2通	〃	口縁内外赤彩
48	〃	5号土坑	口22.3 頸20.2, 胴22.6	粗砂多	7.5YR8/3通	3/5	胴下半叩き 外面Ha、内面Dc
49	土師鍋	5号土坑下層	口40.3, 高12.5 頸38.0	〃	7.5YR8/2通	1/2	外底面付近に黒斑 容量16.465ℓ
50	〃	〃	口41.2, 頸39.3	〃	7.5YR8/4通	1/6	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
51	土師鍋	5号土坑下層	口40.6, 高13.1 頸38.8	粗砂多	7.5YR7/4通	3/4	外面底部に広く黒斑 容量18.092ℓ

10号土坑出土土器（第211図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵瓶B	10号土坑下層	頸5.7 胴13.9, 胴高11.7 台8.1, 台高0.6	普通	青灰焼良好	1/3	
2	須恵瓶D （双耳）	10号土坑 ＋オ19下灰	胴18.0, 胴高24.2 底11.6, 耳厚0.4~0.8	〃	灰色焼堅緻	2/3	底面ロクロ軸痕

11号土坑出土土器（第211図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	11号土坑	口15.8, 高1.9	普通	灰白焼良	1/4	重焼Ⅲ
2	須恵坏B身大	11号土坑＋ オ20集中③	口13.8, 高5.25 台7.0, 台高0.55	〃	青灰焼堅緻	3/4	〃
3	須恵小型杯	11号土坑	口8.6, 高2.9	〃	灰色焼堅緻	4/5	
4	土師杖	〃	厚1.1, 巾12.2	粗砂含	10YR8/3 5YR6/6良	破片	土師瓶胴部のち形板状 切り取り品（焼成前） 外He叩き、内SD当て
5	土師羽釜	15灰Ⅲ土坑F	口21.0, 口1高7.8 胴24.4, 鍔26.5	〃	10YR8/3通	1/3	鍔～胴外面にスス付着 外He叩き、内SD当て
6	土師鍋	〃	口36.3, 頸34.0	大粒砂含	10YR8/2通	1/10	外面火色

1号粘土採掘坑出土土器（第212～213図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	1号採掘坑	口15.4	普通	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅱa
2	〃	〃	口15.8, 高2.3	〃	青灰白焼良好	4/5	〃
3	〃	〃	口14.5, 高2.2	〃	灰白焼良	1/3	重焼Ⅲ
4	須恵坏E蓋小	〃	口12.7, 高1.45	〃	黄灰白焼良	1/4	〃
5	〃	1号採掘坑 ＋11号採掘坑	口12.5, 高1.4	〃	青灰焼堅緻	4/5	〃
6	〃	1号採掘坑	口12.0, 高1.9	〃	〃	1/5	〃
7	〃	〃	口13.1, 高1.5	〃	〃	2/3	〃
8	須恵坏B身大	1号採掘坑 ＋11号採掘坑	口14.8, 高6.0 台8.0, 台高0.6	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅲ・爪痕a①
9	〃	〃	口13.7, 高6.0 台7.8, 台高0.55	〃	〃	1/4	
10	〃	1号採掘坑	口14.1, 高6.2 台7.6, 台高0.6	〃	青灰焼堅緻	1/5	重焼Ⅲ
11	〃	〃	口13.4, 高5.6 台7.4, 台高0.6	〃	暗青灰焼堅緻	1/4	〃
12	〃	〃	口14.2, 高5.7 台7.1, 台高0.4	〃	灰色焼良	2/3	底ヘラ記号「卌」
13	〃	〃	口13.9, 高6.1 台7.0, 台高0.9	〃	暗灰焼堅緻	1/2	重焼Ⅱ・爪痕e
14	〃	〃	口13.8, 高6.05 台8.1, 台高0.4	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅱ
15	〃	〃	口14.0, 高5.0 台7.2, 台高0.45	〃	〃	略完	重焼Ⅲ・爪痕c1
16	須恵坏E身	〃	口12.7, 高3.75	〃	灰色焼堅緻	2/3	重焼Ⅱ
17	〃	〃	口12.1, 高3.45	〃	暗灰焼堅緻	1/3	重焼Ⅲ,底ヘラ記号「Ⅰ」
18	〃	〃	口11.6, 高3.7	〃	〃	4/5	重焼Ⅲ
19	〃	〃	口13.2, 高3.05	〃	灰色焼良好	2/3	
20	須恵坏E身	1号採掘坑	口13.1, 高3.2	普通	暗灰焼堅緻	略完	
21	〃	〃	口13.5, 高3.1	〃	にぶい 黄橙酸化焼良	2/3	
22	〃	〃	口13.5, 高2.5	〃	暗青灰焼堅緻	〃	底ヘラ記号「Ⅰ」
23	須恵小型杯	〃	口9.7, 高2.8	〃	褐灰酸化焼良好	1/5	底ヘラ記号「×」
24	〃	〃	—	〃	〃	3/5	〃
25	須恵盤A	〃	口14.2, 高1.75	〃	灰白焼良	1/3	
26	〃	〃	口14.8, 高2.15	〃	青灰焼良好	〃	底ヘラ記号「Ⅰ」
27	〃	〃	口14.6, 高1.9	〃	褐灰酸化焼良好	1/4	
28	〃	〃	口14.5, 高1.9	〃	青灰焼堅緻	1/2	
29	〃	〃	口13.8, 高2.0	〃	灰色焼堅緻	1/4	底ヘラ記号「Ⅰ」
30	〃	1号採掘坑＋ 10号採掘坑	口14.6, 高1.9	〃	暗青灰焼堅緻	3/4	
31	〃	1号採掘坑	口14.2, 高1.8	〃	暗灰焼堅緻	1/4	
32	〃	〃	口14.8, 高1.7	〃	青灰焼良好	〃	
33	須恵盤B	〃	口19.0, 高2.4 台13.8, 台高0.6	〃	暗青灰焼堅緻	3/5	
34	須恵埦A	〃	口12.8, 高3.4 底5.4	〃	青灰焼良好	2/5	糸切痕
35	〃	〃	口14.8, 高3.25 台7.6, 台高1.3	〃	褐灰酸化焼良好	9/10	正位重焼 糸切痕
36	〃	〃	口15.4, 高2.9 台7.5, 台高1.4	〃	暗灰焼堅緻	2/3	正位重焼 爪痕a①
37	須恵焼台	〃	口6.2, 高3.2	〃	灰色焼堅緻	完形	
38	〃	〃	口13.6, 高3.8	〃	青灰白焼良	1/3	
39	〃	〃	口17.8, 高5.8	〃	灰色焼良好	〃	
40	須恵瓶B	〃	口10.6 頸5.9, 頸高10.1	砂多	灰色焼堅緻	1/4	胴端シボリきり痕
41	須恵壺A蓋	〃	口19.0	普通	〃	1/5	
42	須恵壺A	〃	台15.0, 台高2.9 台基12.0	〃	灰色焼良好	底部片	
43	須恵壺F	〃	口16.1, 胴23.2 頸13.4, 頸高2.2	〃	青灰焼堅緻	1/20	
44	外赤内黒埦A	〃	口13.8, 高4.5 底5.8	〃	7.5YR8/3良	1/2	赤彩ハケ塗り痕見える 内黒口縁外はみだし
45	外赤内黒埦B大	〃	台8.4, 台高1.15	〃	10YR8/3通	1/15	底面黒斑
46	外赤内黒ⅢB	〃	口14.7	〃	10YR8/2通	2/3	内黒口縁外はみだし
47	外赤ⅢB	〃	口15.0	〃	10YR8/4通	〃	内黒とぶ
48	〃	〃	口14.8	〃	10YR8/2通	1/4	〃
49	内黒ⅢB	〃	台7.8, 台高1.6	〃	10YR8/3通	1/10	内底黒斑
50	外赤内黒 埦A特大	〃	底11.2	〃	7.5YR8/4通	1/2	
51	土師小釜	〃	口9.7, 高8.4 頸8.6, 胴9.8 底5.0	粗砂含	10YR8/3通	2/3	外胴黒斑 容量0.862ℓ
52	〃	〃	口12.7, 高11.5 頸11.8, 胴13.1 底7.0	〃	7.5YR8/1通 10YR8/2通	略完	内面黒斑 容量2.224ℓ
53	土師釜	〃	口22.0, 頸19.8	〃	7.5YR8/3通	口縁片	
54	〃	15灰Ⅱ土坑E	口22.2 頸20.6, 胴21.9	〃	10YR 8/1・8/3通	1/8	
55	土師支脚	1号採掘坑	口8.0, 高11.1 底9.0, 孔1.4	普通	10YR8/3通	2/5	
56	土師獣足鍋	〃	足高16.5	〃	7.5YR8/4通	足片	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
57	灰釉埦B	1号採掘坑	台6.6, 台高0.3	良好	灰白色焼堅緻	1/3	釉つけ掛け。 内面釉は釉がとぶ。 2次被熱受けた可能大 底面削、中央に糸切痕。 畳付部に圧痕。

2号粘土採掘坑出土土器（第214図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏E蓋小	2号採掘坑	口13.0, 高1.5	普通	青灰色焼堅緻	4/5	重焼Ⅲ
2	須恵坏B身大	〃	口13.9, 高6.0 台8.0, 台高0.75	〃	青灰色焼堅緻	1/4	〃
3	須恵盤A	〃	口14.2, 高2.3	〃	灰褐焼良好	完形	
4	須恵焼台	〃	口13.1, 高3.0	〃	灰色焼堅緻	1/4	
5	須恵鉢B	〃	口14.6, 高14.3 頸13.6, 体16.9 底7.5	〃	〃	4/5	底糸切り 容量3.885ℓ
6	〃	〃	口21.3, 高15.0 頸19.3, 体23.6 底11.8	〃	灰色焼良	9/10	底面ロクロ軸痕 容量8.593ℓ
7	須恵瓶D （三耳）	〃	底12.3 耳厚0.5～1.2	〃	灰色焼堅緻	1/5	底面焼台付着
8	土師方形板	〃	厚0.8	粗砂多	7.5YR8/4通	不明	外He叩き、内SD当て （煮炊具土）
9	土師小釜	〃	口12.6, 高11.8 頸11.7, 胴13.6 底7.4	〃	7.5YR8/3通	4/5	外胴下黒斑 容量2.488ℓ
10	土師釜	〃	口21.4 頸18.6, 胴21.8	粗砂含	10YR8/3通	1/4	外面黒斑と火色 外He叩き内ナデ消し
11	土師羽釜	〃	口22.4, 胴24.6 つば25.2	〃	10YR8/3・ 8/4通	1/15	外面火色
12	土師鍋	〃	口39.0, 頸37.0	〃	10YR8/4通	〃	
13	土師台付鉢	〃	脚22.9, 脚高6.6 脚基17.6	〃	10YR8/3通	脚完	

4号粘土採掘坑出土土器（第215・216図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋特大	土坑7	口19.1, 高2.15	普通	灰色焼堅緻	完形	重焼Ⅲ
2	須恵坏E身小	〃	口12.4, 高4.1	〃	浅黄橙酸化焼良	2/3	〃
3	須恵坏A	〃	口12.2, 高2.8	〃	にぶい橙酸化焼良好	〃	
4	〃	〃	口13.3, 高2.5	〃	浅黄橙酸化焼不良	〃	一部黒色部あり
5	〃	〃	口13.1, 高2.75	〃	〃	〃	
6	〃	〃	口12.4, 高2.7	〃	灰赤～青灰焼堅緻	〃	
7	〃	土坑7・下層	口13.1, 高2.7	〃	橙酸化焼不良	〃	
8	須恵盤A	〃	口14.1, 高2.1	〃	にぶい赤褐酸化焼良好	1/3	
9	須恵Ⅲ B	土坑7 上層・下層	口15.1, 高3.2 台7.2, 台高0.9	〃	浅黄橙酸化焼良	2/3	底面爪痕c①
10	〃	土坑7・下層	口14.4, 高3.6 台7.0, 台高1.2	〃	〃	〃	正位重焼 底面爪痕b① 高台にねじりしわ
11	〃	〃	口15.5, 高3.3 台7.5, 台高1.1	〃	〃	略完	正位重焼
12	〃	〃	口14.4	〃	〃	4/3	正位重焼 底面爪痕b③

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
13	土師小釜	土坑7・下層	口10.7, 高10.4 頸9.6, 胴11.2 底6.4	粗砂含	7.5YR8/5 10YR8/4通	2/3	容量1.415ℓ
14	〃	〃	口11.4, 高9.9 頸10.3, 胴12.0 底7.2	〃	7.5YR8/5・ 8/3通	〃	底部～胴下位に黒斑 容量1.601ℓ
15	〃	〃	口11.2, 高11.6 頸10.3, 胴12.2 底6.6	〃	〃	〃	容量1.877ℓ
16	〃	土坑7	口12.7, 高12.3 頸11.6, 胴13.4 底6.3	〃	10YR7/4・ 8/4通	4/5	容量2.413ℓ
17	〃	〃	口13.7, 高14.2 頸12.0, 胴15.1 底7.1	〃	10YR8/2・ 8/3通	1/2	容量3.348ℓ
18	土師釜	土坑7・下層	口20.1 頸17.6, 胴20.8	〃	7.5YR8/4通	1/20	
19	〃	土坑7	口23.2, 高31.7 頸20.8, 胴24.6	〃	10YR7/4通	3/5	胴下位に黒斑 外He叩き、内ナデ消し 容量20.659ℓ
20	〃	〃	口22.3, 高31.6 頸20.2, 胴23.6	〃	10YR7/6通	1/3	外He叩き、内ナデ消し 容量20.757ℓ
21	〃	土坑7・下層	口21.0 頸19.1, 胴23.2	〃	10YR8/4通	1/5	外面胴上半火色 外He叩き、内ナデ消し
22	〃	土坑7	口22.5 頸20.4, 胴22.6	〃	10YR8/3通	1/8	外He叩き、内ナデ消し 窯焼成？
23	〃	〃	口21.4 頸19.5, 胴21.6	粗砂多	10YR8/2通	〃	外He叩き、内ナデ消し
24	〃	〃	口21.6 頸19.1, 胴24.0	粗砂含	10YR8/3通	〃	〃
25	〃	土坑7・下層	口21.4, 頸19.0	〃	7.5YR8/5通	口頸片	
26	土師羽釜	土坑7	口19.6 羽23.5, 胴24.2	粗砂多	7.5YR8/6通	1/3	外He叩き、内無文当て？
27	〃	〃	口19.1, 羽23.2	〃	10YR8/3通	1/10	外He叩き、内無文当て
28	〃	土坑7・下層	口18.4, 羽21.9	粗砂含	10YR8/4通	1/6	

5号粘土採掘坑出土土器（第216・217図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	土坑10・下層	口13.8, 高2.1	普通	灰色焼堅緻	1/6	重焼Ⅱa
2	須恵坏身大	土坑10・上層	口13.7, 高6.2 台7.3	〃	暗灰色焼通	略完	
3	須恵坏B身特大	〃	口17.3, 高8.3 台8.6, 台高1.25	〃	灰色焼良	4/5	
4	須恵坏B身小	〃	口11.6, 高3.7	〃	青灰焼堅緻	〃	重焼Ⅱ？
5	須恵坏A	〃	口12.4, 高3.2	〃	暗灰色堅緻	略完	
6	〃	土坑10・下層	口12.9, 高2.9	〃	青灰白焼良	1/2	
7	須恵Ⅲ B	土坑10・上層	口13.1, 高3.35 台7.2, 台高1.1	〃	灰色焼堅緻	完形	内ヘラ記号「Ⅰ」 内底摩耗
8	須恵焼台	〃	口11.8, 高3.0 底13.1	〃	灰色焼良好	略完	
9	〃	〃	口9.8, 高2.6 底11.2	〃	〃	1/2	
10	須恵鉢F	5号採掘坑	口15.4, 台基8.4	砂多	灰色焼堅緻	5/6	底のみ欠損
11	須恵鉢B	〃	口20.5, 高16.0 頸19.0, 体22.8 底10.0	普通	〃	略完	粘土紐ラセン状巻き上げ痕を残す。 容量7.814ℓ
12	外赤内黒ⅢB	土坑10・上層	口14.7	〃	10YR8/2通	4/5	内黒外口縁はみ出し
13	土師小釜	〃	口12.1 頸10.8, 胴12.4	粗砂含	〃	1/10	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
14	土師小釜	土坑10・下層	口14.8 頸13.4, 胴15.3	粗砂含	10YR8/3通	1/15	
15	〃	土坑10・上層	口16.1, 高16.45 頸14.6, 胴17.2 底8.0	〃	〃	2/3	外面被熱赤変及び、スス付着、内面一部コゲ。 容量5.197ℓ
16	土師釜	〃	口22.4, 頸20.1	〃	10YR7/3通	1/20	
17	〃	〃	口23.3 頸21.9, 胴24.6	〃	10YR8/3通	1/3	胴外一部黒斑、 外He叩き、内ナデ消し 容量推27.084ℓ
18	〃	〃	口17.1 頸15.7, 胴20.5	〃	10YR8/2通	1/8	外He叩き、内ナデ消し
19	〃	〃	口20.7, 頸18.2	粗砂多	〃	口頸片	外面一部黒斑
20	土師甑	〃	口36.3	粗砂含	〃	〃	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
19	土師釜	6号採掘坑	口22.6, 高33.7 頸21.2, 胴23.9	粗砂含	7.5YR8/3通	2/3	外面底部付近に円形黒斑。 底叩き出し、外He叩き、内SH当て。 容量20.155ℓ
20	土師羽釜	6号採掘坑 下層	口22.0 つば26.6	〃	10YR7/3良	1/30	内外スス付着
21	土師鍋	〃	口33.8, 頸31.7	〃	10YR8/3良	1/6	
22	〃	6号採掘坑	口34.5, 頸32.0	〃	10YR8/4通	1/2	容量推19.834ℓ
23	〃	〃	口38.4, 頸36.6	粗砂多	内2.5Y8/2 外2.5Y7/2通	1/4	外面広く黒斑 容量推16.058ℓ
24	土師台付鉢	〃	口39.2	〃	7.5YR8/1通	1/30	
25	土師甑	6号採掘坑 下層	口31.9, 高34.9 底19.1	粗砂含	7.5YR8/3通	完形	底面一部黒斑 胴下半叩き外面He叩き、内面ナデ消し。

6号粘土採掘坑出土土器（第217・218図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏E蓋	6号採掘坑 下層	口12.5, 高1.7	普通	灰色焼堅緻	1/2	重焼Ⅲ
2	須恵坏B身特大	6号採掘坑 下底	口17.4, 高7.7 台9.0, 台高1.0	〃	暗灰焼堅緻	2/5	〃
3	須恵坏B身大	6号採掘坑	口13.9, 高5.6 台7.8, 台高0.6	〃	灰色焼堅緻	略完	底面爪痕d
4	須恵坏A	〃	口13.3, 高3.0	〃	灰白焼良	〃	口縁内外に油煙痕 内部内外面摩耗
5	〃	〃	口12.8, 高2.5	〃	〃	完形	
6	須恵盤A	〃	口14.0, 高2.2	〃	青灰焼堅緻	略完	
7	須恵小壺蓋	〃	口15.8, 高1.7	〃	暗灰焼堅緻	2/3	逆位重焼
8	須恵小壺B	〃	口6.7 頸6.2, 肩11.6	〃	灰色焼堅緻	1/10	
9	須恵焼台	〃	口13.6, 高4.3	砂多	〃	9/10	
10	須恵中甕	〃	口19.6, 高47.3 頸14.0, 頸高6.5 胴30.2, 胴高40.8	普通	〃	3/4	底面にD類焼台使用痕跡。底面摩耗痕。 胴縦軸叩き中心に横軸混合→口頸成形、調整→頸部整面叩き、底叩き出し。 外He叩き、内胴Da当て内底He当て、内頸He当て？容量35.419ℓ
11	須恵鉢G	6号採掘坑 下層	口13.9, 高12.1 底8.5	〃	灰色焼良好	4/5	有蓋、糸切り痕 容量2.623ℓ
12	土師小釜	6号採掘坑	口10.3, 高9.2 頸9.3, 胴10.8 底5.6	粗砂多	10YR8/2通	2/3	回転糸切り痕 容量1.105ℓ
13	〃	〃	口13.0, 高12.4 頸12.3, 胴13.75 底7.0	〃	10YR8/3通	4/5	糸切り痕 容量2.635ℓ
14	〃	6号採掘坑 下底	口12.9, 高13.6 頸11.6, 胴14.0 底6.6	粗砂含	10YR8/3良	〃	回転糸切り痕 容量2.692ℓ
15	〃	6号採掘坑	口13.8, 高14.0 頸12.5, 胴14.3 底6.3	〃	2.5Y8/2通	略完	外胴上半うすい黒斑 回転糸切り痕 容量2.915ℓ
16	土師釜	〃	口22.8, 高34.2 頸20.8, 胴24.1	粗砂多	10YR8/2良	4/5	外面胴下半に黒斑 底叩き、外He叩き、内He当て。 容量22.176ℓ
17	〃	〃	口20.9, 高33.7 頸19.6, 胴22.9	粗砂含	7.5YR8/3通	9/10	底叩き、外He叩き、内Da当て。 容量22.722ℓ
18	〃	〃	口22.3, 高34.1 頸20.6, 胴24.4	〃	10YR8/3通	完形	底叩き、外He叩き、内Da当て。 容量21.621ℓ

7号粘土採掘坑出土土器（第219～221図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B身大	土坑17	口16.3, 高8.25 台10.0, 台高1.0	普通	灰色焼堅緻	1/8	重焼Ⅱ
2	〃	〃	口14.1, 高5.7 台7.9, 台高0.7	〃	〃	1/3	〃
3	須恵坏A	〃	口12.3, 高2.8	〃	灰色焼良好	3/4	底ヘラ記号「Ⅰ」
4	〃	〃	口12.5, 高2.95	〃	灰白焼良	〃	
5	須恵盤A	〃	口13.1, 高2.25	〃	褐色酸化焼良	1/2	
6	須恵Ⅲ B	〃	口14.3, 高3.1 台7.0, 台高1.2	〃	灰色焼堅緻	1/3	正位重焼 底ヘラ記号「Ⅱ」
7	須恵中甕	7号採掘坑	口34.6, 高52.5 頸27.0, 頸高6.0 胴52.2, 胴高46.5	〃	〃	3/4	底面B類焼台痕3ヶ所 胴横軸叩き→胴縦軸叩き→底叩き→口頸成形→頸整面叩き→底削り。 外He叩き、内頸Da当て、胴上SD当て、胴下Ha当て 容量133.723ℓ
8	〃	〃	胴43.8	〃	〃	1/3	底面D類焼台痕 （横軸叩き）→胴縦軸叩き→底叩き出し。 （外）胴Ha叩き、底He叩き。 （内）胴SD当て後Da当て、底He当て。
9	外赤内黒ⅢB	土坑17	口14.9, 高3.4 台6.8, 台高1.15	〃	10YR7/3通	1/4	内黒口縁外はみ出し、底面に黒斑。
10	〃	〃	口15.1, 高3.4 台7.2, 台高1.0	〃	10YR8/3通	2/3	底面及び外面一部に黒斑。
11	〃	〃	口15.0, 高3.7 台7.6, 台高1.2	〃	10YR8/4通	3/4	内黒口縁外はみ出し、高台内面赤彩。
12	〃	〃	口14.95, 高3.9 台7.1, 台高1.1	粗砂多	〃	2/3	内黒口縁外はみ出し。
13	〃	〃	口14.5	普通	10YR7/4通	3/4	内黒口縁外はみ出し、底面に黒斑。
14	〃	〃	口14.7	〃	10YR8/4通	2/5	
15	土師Ⅲ B	〃	口12.5, 高3.1 台5.5, 台高0.75	粗砂多	10YR8/3通	3/4	
16	土師小釜大	〃	口15.9, 頸14.4 胴16.3	〃	10YR8/2通	1/6	
17	〃	〃	口16.5, 頸14.8	〃	〃	口頸片	
18	土師釜	〃	口22.2, 頸20.0	粗砂含	10YR8/2・8/3通	1/20	
19	土師甑	〃	口34.4	〃	7.5YR8/3通	3/4	外He叩き、内Da当て後ナデ。

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
20	土師方形板	土坑17	巾16.3, 厚1.0 推定復元口径35.0	粗砂含	7.5YR7/4通	不明	土師甕胴上半部分を方形に切り取った土製品。 外He叩き、内Da当て後ナデ。

8号粘土採掘坑出土土器（第221～223図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵盤A	8号採掘坑	□14.7, 高2.2	普通	青灰白焼良	1/8	
2	〃	〃	□14.2, 高1.9	〃	灰色焼良好	1/6	
3	須恵中甕	8号採掘坑 上層＋エ20 中層	底19.8	〃	灰色焼堅緻	1/15	胴縦軸叩き→胴下下位削り→胴下～底叩き、縦軸叩き、外He叩き、内SD当て、胴下叩きは外面のみのHe叩き。
4	外赤内黒埦A	8号採掘坑	□14.3, 高4.2 底6.0	〃	10YR8/3通	1/4	内底の内黒とぶ
5	〃	〃	□14.1, 高4.2 底5.9	〃	〃	2/3	底面黒斑 内黒口縁外はみ出し
6	〃	〃	□14.4	〃	〃	1/6	
7	外赤内黒埦B	〃	□15.6, 高5.4 台7.7, 台高0.7	〃	〃	1/3	内黒口縁はみ出し
8	〃	〃	□14.8, 高5.15 台7.6, 台高0.55	〃	10YR8/4通	2/3	内底の内黒とぶ 内黒口縁外はみ出し
9	〃	〃	□15.1, 高5.2 台7.4, 台高0.7	〃	10YR8/2通	1/3	内底の内黒とぶ 内黒口縁はみ出し
10	外赤内黒皿B	〃	□14.8, 高3.65 台7.3, 台高1.1	〃	10YR8/4通	〃	内黒口縁はみ出し
11	〃	〃	□14.6, 高3.9 台7.4, 台高1.15	〃	10YR8/3通	〃	内底と口縁内の内黒とぶ
12	〃	〃	□15.0	〃	10YR8/4通	1/5	
13	土師小釜	〃	□10.8, 高9.9 頸9.6, 胴11.0 底6.3	粗砂多	〃	1/2	容量1.309ℓ
14	〃	〃	□11.5 頸10.4, 胴11.6	粗砂含	2.5Y7/1通	1/12	全体黒斑
15	〃	〃	□11.9, 頸10.2	〃	10YR8/3通	1/10	
16	〃	〃	□11.2, 頸10.4	〃	2.5Y5/1通	〃	
17	〃	〃	□12.2, 高11.6 頸11.3, 胴13.0 底6.8	〃	2.5Y8/4通	1/2	容量2.601ℓ
18	〃	〃	□12.1, 高11.7 頸11.2, 胴13.0 底6.5	〃	2.5Y8/3通	5/6	容量2.021ℓ
19	〃	〃	□12.4, 高12.1 頸11.2, 胴13.3 底6.4	〃	10YR8/3通	3/4	容量2.142ℓ
20	〃	〃	□12.9, 高推11.9 頸11.4, 胴13.0 底7.0	〃	10YR8/1通	2/3	底面黒斑 容量推2.23ℓ
21	〃	〃	□12.4, 頸11.5	〃	10YR8/3通	□頸片	
22	土師釜	〃	□21.4 頸18.8, 胴24.3	〃	〃	1/3	外He叩き、内ナデ消し。
23	〃	〃	□20.8, 頸19.0	大粒砂含	7.5YR8/6良	□縁片	
24	〃	〃	□21.2 頸20.1, 胴24.6	粗砂含	10YR8/2通	1/3	外He叩き、内Da当て後ナデ。
25	〃	〃	□20.5 頸18.5, 胴22.2	粗砂多	10YR7/2通	2/5	〃
26	〃	〃	□23.1 頸21.0, 胴23.4	粗砂含	10YR7/1良	1/5	外面一部黒斑 外He叩き、内ナデ消し。
27	土師釜	8号採掘坑	□22.6, 頸20.6	粗砂含	10YR8/2良	1/10	
28	〃	〃	□21.6 頸20.0, 胴22.8	粗砂多	7.5YR8/4通	〃	外He叩き、内Da当て後ナデ。
29	〃	〃	□24.0 頸20.8, 胴23.6	粗砂含	2.5YR8/1良	1/15	
30	〃	〃	□20.6 頸18.8, 胴22.9	〃	10YR8/3通	1/6	外He叩き、内Da当て後ナデ。
31	土師鍋	〃	□38.7, 頸36.5	〃	2.5YR8/4良	1/3	容量推14.542ℓ
32	〃	〃	□39.3, 高12.5 頸3.68	〃	10YR8/4良	1/2	底面黒斑 容量14.479ℓ
33	〃	〃	□38.5	大粒砂含	10YR8/3通	1/20	
34	〃	〃	□37.9, 頸36.0	粗砂含	2.5Y7/1 10YR6/1通	1/8	外全体黒斑
35	〃	〃	□36.3, 頸34.0	〃	2.5Y7/1良	1/3	外下半黒斑 容量推15.406ℓ

9号粘土採掘坑出土土器（第224～228図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	9号採掘坑	□17.0	普通	青灰焼良好	1/7	重焼Ⅱa
2	須恵坏B蓋小	〃	□12.8	〃	灰色焼堅緻	1/8	内天ヘラ記号「Ⅰ」
3	須恵坏B蓋大	〃	つまみ径2.1,つまみ高1.0	〃	灰白焼良	つまみ片	内天ヘラ記号「Ⅱ」
4	〃	〃	□14.8, 高1.4	〃	暗灰焼堅緻	1/8	重焼Ⅲ
5	〃	〃	□14.8, 高2.4	〃	灰色焼堅緻	4/9	〃
6	須恵坏E蓋小	〃	□12.2, 高1.55	〃	〃	1/3	〃
7	〃	〃	□12.8, 高1.75	〃	青灰焼堅緻	3/5	重焼Ⅲ 内天ヘラ記号「Ⅰ」
8	〃	〃	□12.5, 高1.5	〃	暗青灰焼堅緻	4/5	重焼Ⅲ
9	〃	〃	□12.5, 高1.4	〃	〃	略完	〃
10	須恵坏B身大	〃	□15.5, 高6.2 台8.2, 台高0.7	〃	暗褐酸化焼良	9/10	重焼Ⅱ 底爪痕d
11	〃	〃	□14.6, 高6.1 台7.6, 台高0.8	〃	灰色焼堅緻	2/5	重焼Ⅲ 底爪痕a①
12	〃	〃	□14.8, 高5.7 台7.2, 台高0.7	〃	灰白焼不良	2/3	
13	〃	〃	□13.9, 高5.75 台7.3, 台高0.55	〃	灰色焼堅緻	3/4	重焼Ⅲ 底爪痕b②
14	〃	〃	□14.1, 高5.9 台7.2, 台高0.55	〃	〃	〃	
15	〃	〃	□13.7, 高5.6 台7.2, 台高0.6	〃	青灰焼良好	4/5	重焼Ⅲ
16	〃	〃	□13.7, 高5.45 台7.4, 台高0.65	〃	灰色焼堅緻	1/3	〃
17	須恵坏E身小	〃	□11.4, 高3.45	〃	青灰焼堅緻	2/3	〃
18	〃	〃	□11.9, 高3.6	〃	青灰焼良好	完形	重焼Ⅲ 外底～体下位摩耗
19	須恵坏A	〃	□13.0, 高3.5	〃	〃	3/4	
20	〃	〃	□13.1, 高3.6	〃	青灰焼堅緻	〃	底ヘラ記号「Ⅰ」
21	〃	〃	□13.1, 高3.0	〃	灰白焼良	2/3	
22	〃	〃	□13.2, 高3.1	〃	灰色焼良好	1/4	
23	〃	〃	□12.8, 高3.1	〃	灰白焼良	3/4	
24	〃	〃	□12.6, 高3.0	〃	灰色焼良好	略完	底ヘラ記号「#」
25	〃	〃	□12.6, 高2.9	〃	青灰焼良好	3/5	
26	〃	〃	□12.3, 高2.9	〃	青灰焼堅緻	7/8	底ヘラ記号「Ⅰ」

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
27	須恵坏A	9号採掘坑	口12.7, 高2.8	普通	灰白焼不良	9/10	
28	〃	〃	口13.3, 高2.9	〃	〃	3/4	
29	〃	〃	口13.2, 高3.1	〃	青灰白焼良	1/3	底ヘラ記号「I」
30	〃	〃	口13.0, 高2.9	〃	灰色焼堅緻	1/5	
31	〃	〃	口13.4, 高3.0	〃	灰白焼不良	3/4	
32	〃	〃	口12.8, 高2.75	〃	青灰焼良好	9/10	
33	須恵盤A	〃	口13.9, 高2.2	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	
34	〃	〃	口14.3, 高2.2	〃	青灰焼堅緻	〃	
35	〃	〃	口13.9, 高1.8	〃	暗青灰焼堅緻	3/5	
36	〃	〃	口14.2, 高2.0	〃	青灰白焼良	2/5	
37	〃	〃	口15.5, 高1.8	〃	〃	1/6	
38	須恵皿B	〃	口15.2, 高3.1 台7.2, 台高1.0	〃	灰色焼良好	5/8	合わせ口重焼
39	〃	〃	台7.6, 台高1.2	〃	灰色焼堅緻	2/3	底ヘラ記号「I」
40	〃	〃	口13.8, 高3.15 台7.9, 台高0.65	〃	〃	完形	口欠け・台端欠け、内摩耗 底面墨書き「米加ヵ」
41	〃	〃	口14.2	〃	〃	3/4	正位重焼 底ヘラ記号「I」
42	〃	〃	口13.4, 高3.9 台6.6, 台高1.0	〃	暗灰焼堅緻	5/6	正位重焼 底爪痕b①
43	須恵焼台	〃	口12.8, 高3.0 底14.2	〃	灰色焼堅緻	1/3	
44	〃	〃	口13.3, 高4.8 底12.6	〃	暗灰焼堅緻	略完	
45	須恵瓶D(双耳)	〃	口10.8, 高27.0 頸7.1, 頸高6.6 胴16.4, 胴高20.4 底9.6, 耳厚0.7～1.6	〃	灰色焼堅緻	〃	底窯土付着 容量6.247ℓ
46	須恵鉢B	〃	口15.7, 高11.4 頸14.0, 体15.2 底8.1	〃	〃	9/10	底糸切り痕 容量3.836ℓ
47	外赤内黒瓺A	〃	口13.5, 高4.4 底5.0	〃	10YR8/1通	4/5	内黒口縁外はみ出し
48	〃	〃	口12.7, 高3.8 底5.6	〃	10YR8/2通	2/3	〃
49	外赤内黒瓺B	〃	台7.2, 台高0.8	〃	7.5YR8/2通	2/5	
50	外赤内黒皿B	〃	口14.6, 高3.5 台7.0, 台高1.2	〃	2.5Y8/1通	1/3	内口縁の内黒とぶ
51	〃	〃	口15.5	〃	2.5Y8/2通	1/5	
52	〃	〃	口14.2	〃	10YR8/2通	9/10	外面黒斑
53	土師小鉢	〃	口17.1, 高12.3 底9.6	粗砂含	〃	〃	体下位一部黒斑 容量3.511ℓ
54	土師小釜	〃	口13.5, 高11.9 頸12.5, 胴13.8 底6.6	〃	10YR8/4通	2/3	容量2.432ℓ
55	〃	〃	口12.5, 高11.6 頸11.3, 胴13.4 底6.4	〃	10YR8/3通	〃	容量2.141ℓ
56	〃	〃	口14.2, 高12.9 頸12.4, 胴14.4 底8.0×6.8	〃	〃	完形	容量2.495ℓ
57	〃	〃	口12.8, 高11.5 頸11.6, 胴12.8 底6.6	〃	10YR8/3・8/1通	2/3	容量2.146ℓ
58	〃	〃	口12.2, 高11.2 頸11.0, 胴12.8 底6.2	〃	10YR8/4通	9/10	底～体下位一部黒斑 容量1.953ℓ
59	〃	〃	口14.2, 高13.1 頸12.8, 胴14.7 底6.9	〃	10YR8/2通	2/3	外面全体赤化剥落、内面胴上半コゲ痕 容量2.907ℓ

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
60	土師小釜	9号採掘坑	口13.4, 高12.0 頸12.1, 胴13.6 底6.8	粗砂含	2.5Y8/3良	略完	容量2.481ℓ
61.	〃	〃	口11.6, 高10.9 頸11.1, 胴12.7 底6.2	〃	〃	9/10	一部線帯状黒斑 容量1.795ℓ
62	〃	〃	口14.4, 高14.1 頸13.3, 胴15.8 底7.1	粗砂多	10YR8/2通	完形	底部糸切り痕 容量3.66ℓ
63	土師小釜大	〃	口16.4, 高17.5 頸14.5, 胴16.2 底7.0	粗砂含	2.5Y8/3通	2/5	胴中位黒斑 容量4.24ℓ
64	〃	〃	口15.1, 高14.55 頸13.6, 胴15.7 底7.6	〃	2.5Y7/1・4/1通	1/3	底黒斑 容量3.867ℓ
65	〃	〃	口16.1, 高15.9 頸14.75, 胴16.6 底7.1	〃	7.5YR8/4通	略完	底部糸切り痕 容量4.102ℓ
66	〃	〃	口17.2, 高16.6 頸15.5, 胴18.0 底8.6	〃	7.5YR7/4通	2/3	外面全体被熱による赤変及び剥落、内面胴下位と胴上位～口縁に厚くコゲ付着 容量5.476ℓ
67	〃	〃	口16.6 頸14.7, 胴17.5	粗砂多	10YR8/1・8/3通	4/5	胴下位～中位に黒斑 容量推5.551ℓ
68	〃	〃	口17.5, 高17.3 頸16.0, 胴17.8 底8.8	〃	7.5YR8/3通	7/8	底部糸切り痕 容量5.972ℓ
69	〃	〃	口16.9, 高17.2 頸15.6, 胴17.4 底8.8	粗砂含	10YR8/3通	3/5	容量4.595ℓ
70	〃	〃	口17.4, 高17.3 頸16.0, 胴18.5 底7.2	〃	7.5YR8/4通	9/10	胴下位～中位に黒斑 容量6.246ℓ
71	〃	〃	口17.8, 高18.2 頸16.2, 胴18.6 底8.6	粗砂多	7.5YR8/2通	完形	底部糸切り痕 容量6.892ℓ
72	土師釜	〃	口22.1 頸19.5, 胴23.6	粗砂含	10YR8/3通	1/8	胴上位黒斑 外He叩き,内ナデ消し
73	〃	〃	口20.9 頸18.3, 胴21.4	〃	10YR8/3良	1/6	外He叩き、内Da当て後ナデ
74	〃	〃	口22.0 頸19.8, 胴23.4	〃	7.5YR8/4通	1/5	外He叩き,内ナデ消し
75	〃	〃	口21.7 頸19.6, 胴23.4	〃	10YR8/3良	1/6	外He叩き、内Da当て後ナデ 外面火色あり
76	〃	〃	口22.4, 頸20.4	〃	7.5YR8/3良	1/8	外Ha叩き＋縦位削り、内ナデ消し。 外面火色あり
77	〃	〃	口21.2, 高32.4 頸19.5, 胴24.3	〃	5YR8/3通	3/8	外He叩き,内ナデ消し。底付近に黒斑 容量20.577ℓ
78	〃	〃	口21.9, 高33.5 頸20.0, 胴23.1	〃	10YR8/2通	3/4	外He叩き、内Da当て後ナデ。 容量18.646ℓ
79	〃	〃	口23.2, 高33.8 頸21.0, 胴24.1	〃	7.5YR8/3通	9/10	外He叩き、内Da当て後ナデ。 容量20.772ℓ
80	〃	〃	口20.9 頸19.1, 胴20.9	〃	2.5Y8/2通	1/8	外He叩き,内ナデ消し
81	〃	〃	口21.8 頸19.8, 胴23.6	粗砂多	10YR8/3通	1/6	外He叩き、内Da当てナデ消し。 内外、火色
82	〃	〃	口23.3, 高36.0 頸21.1, 胴24.2	粗砂含	〃	3/5	外He叩き,内ナデ消し。胴下位～底に黒斑 容量24.204ℓ
83	〃	〃	口20.8, 頸19.1	〃	10YR8/2通	1/20	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
84	土師釜	9号採掘坑	口22.8, 高推36.8 頸20.7, 胴24.8	粗砂含	7.5YR8/2通	1/2	外He叩き、内ナデ消し 容量推25.4ℓ
85	土師鍋	〃	口34.2, 頸33.0	〃	10YR8/2通	2/5	
86	〃	〃	口40.2, 高推13.7 頸38.0	〃	7.5YR8/2通	1/2	容量推17.737ℓ
87	〃	〃	口40.4, 高推14.0 頸38.7	粗砂多	10YR8/3通	4/5	体下位付近に黒斑 容量推19.479ℓ
88	土師甑	〃	口32.3, 高34.2 底15.7	粗砂含	7.5YR8/1通	1/2	外He叩き、内ナデ消し 外面一部火色
89	〃	〃	口23.5, 高28.8 底16.0	大粒 砂含	10YR8/4通	略完	外He叩き、内ナデ消し 口縁に一部黒斑

10号粘土採掘坑出土土器（第229～234図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	10号採掘坑	口14.2, 高1.9	普通	青灰焼堅緻	4/5	重焼Ⅲ
2	〃	〃	口14.4, 高2.3	〃	灰色焼堅緻	完形	重焼Ⅱa
3	〃	〃	口14.2, 高1.8	〃	暗青灰焼堅緻	4/5	重焼Ⅲ
4	須恵坏E蓋小	〃	口12.7, 高1.4	〃	〃	1/2	
5	〃	〃	口11.3, 高1.9	〃	灰色焼堅緻	1/3	重焼Ⅲ
6	〃	〃	口11.5, 高2.1	〃	黄灰白焼良	4/5	〃
7	須恵坏B身特大	〃	口19.6, 高9.5 台10.4, 台高1.2	〃	褐灰酸化焼良	略完	重焼Ⅲ 須恵坏B身特殊
8	〃	〃	口17.1, 高7.3 台8.6, 台高1.0	〃	灰色焼堅緻	5/6	爪痕a③ 重焼Ⅲ
9	須恵坏B身大	〃	口13.3, 高5.5 台7.1, 台高0.5	〃	灰色焼良好	4/5	爪痕b② 重焼Ⅱ
10	〃	〃	口14.3, 高5.4 台7.2, 台高0.6	〃	暗灰色焼堅緻	略完	爪痕b② 重焼Ⅲ
11	〃	〃	口14.4, 高5.9 台7.3, 台高0.95	〃	青灰焼堅緻	〃	爪痕C1 重焼Ⅱ
12	須恵坏E身	〃	口11.8, 高2.7	〃	暗青灰焼堅緻	3/4	底面ヘラ記号「Ⅰ」 重焼Ⅲ
13	〃	〃	口11.8, 高3.8	〃	灰色焼堅緻	完形	〃
14	〃	〃	口12.0, 高3.65	〃	暗灰焼堅緻	5/6	重焼Ⅲ
15	〃	10号採掘坑 ＋1号採掘坑	口12.2, 高3.8	〃	灰色焼良好	2/3	〃
16	〃	10号採掘坑	口11.8, 高3.6	〃	灰色焼堅緻	7/8	〃
17	〃	〃	口11.6, 高4.0	〃	青灰白焼良好	略完	〃
18	須恵坏A	〃	口12.8, 高3.2	〃	灰色焼良好	3/4	
19	〃	〃	口13.6, 高3.15	〃	灰白焼良	7/8	
20	〃	10号採掘坑 ＋11号採掘坑	口12.8, 高3.1	〃	青灰焼堅緻	3/4	
21	〃	10号採掘坑	口12.8, 高3.0	〃	灰白焼不良	2/3	
22	〃	10号採掘坑 ＋7号灰集中	口13.0, 高3.2	〃	灰白焼良	1/3	
23	〃	10号採掘坑	口13.2, 高3.1	〃	青灰焼良好	略完	
24	〃	10号採掘坑 ＋7号灰暗土	口12.8, 高3.0	〃	〃	完形	
25	〃	10号採掘坑	口13.6, 高3.0	〃	〃	1/2	
26	〃	〃	口13.0, 高2.8	〃	〃	〃	
27	〃	〃	口12.5, 高3.0	〃	灰色焼良好	4/5	
28	〃	〃	口11.8, 高2.85	〃	にぶい赤褐 酸化焼良好	6/7	底ヘラ記号「Ⅰ」
29	〃	〃	口12.7, 高2.8	〃	青灰焼堅緻	完形	底面ヘラ記号「ハ」
30	須恵坏A	10号採掘坑	口12.8, 高2.6	普通	青灰焼堅緻	2/3	
31	須恵小型杯	〃	口8.0, 高2.5	〃	灰色焼堅緻	3/4	
32	須恵盤A	〃	口14.7, 高2.3	〃	灰色焼良好	2/3	
33	〃	〃	口14.2, 高1.9	〃	青灰焼堅緻	5/6	
34	〃	〃	口14.4, 高2.1	〃	青灰焼良好	略完	
35	〃	〃	口14.1, 高2.0	〃	灰色焼堅緻	3/4	
36	〃	10号採掘坑 ＋7号灰集中	口14.2, 高2.15	〃	にぶい橙 酸化焼良	1/2	
37	〃	10号採掘坑	口14.4, 高2.0	〃	灰色焼良好	3/4	内底摩耗痕もつ
38	〃	〃	口14.8, 高1.7	〃	灰色焼堅緻	1/5	
39	〃	〃	口14.3, 高1.65	〃	青灰焼堅緻	1/4	
40	須恵Ⅲ B	〃	口13.6, 高3.1 台6.7, 台高0.8	〃	灰色焼堅緻	4/5	正位重焼 内底摩耗痕あり。
41	〃	〃	口14.4, 高3.3 台6.7, 台高1.1	〃	暗青灰焼堅緻	略完	合わせ口重焼 底面ヘラ記号「Ⅰ」 底ナデ消し
42	〃	〃	口14.0, 高3.6 台7.9, 台高0.7	〃	青灰白焼良好	3/5	正位重焼 底糸切痕
43	〃	〃	口14.5, 高3.3 台7.6, 台高0.75	〃	灰色焼良好	2/3	〃
44	〃	〃	口14.0	〃	灰色焼堅緻	4/5	爪痕b② 底糸切痕
45	〃	〃	口14.6, 高3.4 台7.7, 台高1.1	〃	〃	完形	正位重焼 底ナデ消し
46	〃	〃	口14.5, 高3.1 台6.7, 台高1.2	〃	青灰焼堅緻	7/8	内面摩耗痕あり 底ヘラ記号「×」 底糸切痕
47	〃	〃	口13.4, 高3.5 台6.8, 台高1.0	〃	青灰焼良好	3/4	正位重症 底ナデ消し
48	〃	〃	口13.9, 高3.7 台7.2, 台高1.4	〃	灰色焼堅緻	7/8	爪痕b② 合わせ口重焼 底ナデ消し
49	〃	〃	口14.0, 高3.1 台7.2, 台高0.9	〃	暗青灰焼堅緻	2/3	正位重焼
50	〃	〃	口13.7, 高2.3 台6.4, 台高1.0	〃	〃	略完	正位重焼 底糸切痕
51	〃	〃	口14.0, 高2.7 台6.2, 台高0.8	〃	灰色焼良好	2/3	爪痕b②・合わせ口重焼 内面中央摩耗痕 底ナデ消し
52	須恵Ⅲ A	〃	口13.8, 高2.1 底6.3	〃	灰白焼良	略完	
53	須恵埦A	〃	口13.8, 高4.45 底7.35	〃	青灰白焼良好	5/6	底面ヘラ記号「十」 底糸切痕
54	須恵焼台	〃	口6.7, 高2.8	〃	灰色焼堅緻	1/4	
55	〃	〃	口8.4, 高2.8	〃	暗灰焼堅緻	7/8	底に粘土塊置台溶着
56	〃	〃	口7.7, 高3.5	〃	灰色焼堅緻	1/3	底が切れる
57	〃	〃	口10.2, 高3.7	〃	〃	1/4	底窯土付着
58	〃	〃	口11.7, 高4.0	〃	灰白焼堅緻	4/5	底須恵坏片と黒土付着
59	〃	〃	口10.8, 高4.5	〃	灰色焼堅緻	〃	底窯土付着
60	〃	〃	口15.8, 高6.0	砂多	灰色焼良好	1/2	
61	須恵鉢F	〃	口16.1, 高15.2 台基7.8, 底7.8	普通	〃	略完	内底弱く摩耗、外底摩耗顕著 底面にスノコ状痕 容量3.345ℓ
62	〃	〃	口17.3, 高17.9 台基10.3, 底10.0	砂多	〃	〃	容量5.25ℓ
63	〃	〃	口18.3 台基10.2	普通	灰色焼堅緻	底のみ 欠損の 29/30	容量5.809ℓ

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
64	須恵鉢B	10号採掘坑	口17.3, 高13.4 頸15.0, 体17.7 底7.6	普通	灰色焼堅緻	5/6	底糸切り痕 容量3.91ℓ
65	〃	〃	口16.7, 高11.8 頸15.4, 体17.6 底8.0	〃	暗青灰焼堅緻	3/4	容量3.66ℓ
66	〃	〃	口21.9, 高15.3 頸19.6, 体22.1 底10.8	〃	灰色焼堅緻	略完	底面ロクロ軸痕 容量7.448ℓ
67	〃	〃	口22.0, 高15.3 頸19.1, 体21.8 底9.8	〃	青灰焼良好	〃	底面ヘラ記号「×」 底成形台痕？それとも乾燥台痕。 容量7.262ℓ
68	須恵瓶D（双耳）	〃	口12.4, 高28.6 頸6.1, 頸高7.6 胴15.4, 胴高21.0 底8.7, 耳厚0.9～1.3	〃	灰色焼堅緻	9/10	底面と口頸外面にヘラ記号「Ⅲ」 容量5.413ℓ
69	〃	〃	口11.7, 高27.9 頸7.0, 頸高6.8 胴15.5, 胴高21.1 底8.6, 耳厚0.8～1.3	〃	〃	完形	底面焼台痕 容量5.126ℓ
70	〃	10号採掘坑 ＋エ20	口12.9 頸7.6, 頸高6.9	〃	〃	1/10	
71	〃	10号採掘坑	口13.6, 高32.9 頸8.3, 頸高7.6 胴18.1, 胴高25.3 底10.0,耳厚0.9～1.4	〃	〃	完形	底ロクロ軸痕及び焼台痕。 容量8.045ℓ
72	須恵壺	〃	口13.1, 頸12.2 胴28.9, 胴高27.9 台基14.2	〃	〃	台のみ欠損する完形	摩耗痕ないが台を欠いて使用 容量19.346ℓ
73	須恵中甕	10号採掘坑 ＋オ20焼土＋ 7号灰集中③	口22.6, 高50.1 頸16.7, 頸高7.1 胴31.6, 胴高43.0	〃	〃	3/5	胴縦軸叩き→口頸成形→頸部整面叩き・底叩き出し、外He叩き、内頸Da当て胴SD当て、底He当て 底面D類焼台痕 容量44.308ℓ
74	須恵大甕	10号採掘坑	口46.7 頸37.2, 頸高6.7	〃	灰白焼良	1/30	胴叩き→口頸成形→ハケ目→頸部整面叩き外He叩き、内胴SD当て、内頸He当て。
75	赤彩埦A	〃	口13.5, 高4.15 底5.7	〃	7.5YR8/4通	1/3	
76	外赤内黒埦A	〃	口13.8, 高4.6 底4.9	〃	〃	2/3	外底付近に一部黒斑 内黒口縁外はみ出し
77	〃	〃	口14.2, 高4.3 底5.3	〃	7.5YR8/3通	〃	底面黒斑 内黒口縁外はみ出し
78	内黒埦A	〃	口13.6, 高4.4 底5.4	〃	7.5YR7/2通	〃	外面に黒斑 内黒口縁外はみ出し
79	内黒埦A小	〃	口8.1, 高2.7 底4.5	砂多	10YR7/2通	4/5	内黒口縁外はみ出し
80	外赤内黒埦B	〃	口14.9	普通	10YR8/3良	3/4	〃
81	〃	〃	口14.0, 高5.4 台7.2, 台高1.1	〃	〃	1/2	〃
82	〃	〃	口15.1, 高5.35 台7.6, 台高0.6	〃	10YR8/2良	〃	外底黒斑
83	〃	〃	口14.9, 高6.1 台7.0, 台高0.85	〃	10YR8/2通	2/3	赤彩ハケ塗り痕 底面黒斑
84	〃	〃	口15.3, 高5.9 台6.8, 台高0.8	〃	10YR8/3良	〃	内黒口縁外はみ出し
85	〃	〃	口15.3, 高6.0 台7.4, 台高0.75	〃	10YR7/2通	1/2	内黒口縁外はみ出し 底面黒斑
86	外赤内黒埦B大㊉	〃	口16.1, 高6.75 台6.9, 台高1.1	〃	10YR8/3通	1/3	内黒口縁外はみ出し
87	〃	〃	口17.5, 高6.9 台7.4, 台高1.0	〃	7.5YR8/4通	3/4	〃
88	外赤内黒埦B大	〃	口19.0, 高7.3 台8.2, 台高0.85	〃	〃	〃	内黒口縁外はみ出し 内底の内黒とぶ 底面黒斑

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
89	外赤内黒埦B大	10号採掘坑	口21.2, 高8.2 台8.6, 台高0.7	普通	7.5YR8/3通	2/3	内黒口縁外はみ出し 体外～底に黒斑
90	〃	〃	口19.5, 高8.3 台8.8, 台高0.9	〃	〃	〃	底面黒斑
91	〃	〃	口19.8	〃	〃	1/8	内黒口縁外はみ出し
92	〃	〃	台8.4, 台高1.0	〃	〃	1/4	
93	外赤内黒埦A特大	〃	口26.0	〃	〃	口縁片	内黒口縁外はみ出し
94	〃	〃	口29.8, 高10.9 底12.0	〃	7.5YR8/2・8/4通	1/10	内黒とぶ
95	外赤内黒ⅢB	〃	台7.4, 台高1.2	〃	10YR8/3通	1/3	
96	〃	〃	口14.5, 高3.1 台7.7, 台高1.15	〃	10YR8/3良	略完	合わせ口焼
97	〃	〃	口15.6, 高2.8 台7.6, 台高1.0	〃	10YR7/2通	1/4	外底黒斑
98	〃	〃	台7.8, 台高0.9	〃	10YR7/3通	〃	内黒ハケ工具
99	〃	〃	口14.7, 高3.35 台7.4, 台高1.3	〃	10YR7/2通	2/3	内黒口縁外はみ出し
100	〃	〃	口14.9, 高2.9 台7.2, 台高0.9	〃	10YR7/1通	〃	内黒口縁外はみ出し 外面広く黒斑
101	〃	〃	口14.0, 高3.05 台7.0, 台高1.0	〃	10YR7/3通	1/4	内面ハケ工具
102	〃	〃	口14.8	〃	10YR8/3通	2/3	
103	〃	〃	口14.0, 高4.0 台7.4, 台高1.0	〃	〃	略完	内黒口縁外はみ出し
104	外赤内黒埦B	〃	台6.6, 台高1.0	〃	10YR8/2通	1/4	
105	外赤内黒ⅢB	〃	口14.4, 高3.55 台6.7, 台高0.9	〃	10YR8/3良	2/3	内黒口縁外はみ出し
106	〃	〃	口14.2	〃	10YR7/3良	1/2	〃
107	〃	〃	口14.3, 高4.0 台6.3, 台高0.8	〃	10YR8/2良	〃	〃
108	〃	〃	口13.4, 高3.7 台6.1, 台高1.05	〃	10YR8/3通	〃	口縁外に黒斑
109	土師匣鉢	〃	口15.4, 高7.8	粗砂含	7.5YR8/3通	〃	底面火色
110	〃	〃	口16.0, 高7.4	〃	〃	〃	
111	〃	〃	口15.9, 高7.6	〃	〃	3/4	
112	〃	〃	口16.1, 高7.9	普通	7.5YR8/2・8/3通	4/5	
113	〃	〃	口14.5	粗砂多	7.5YR8/3通	1/3	
114	土師匣鉢状土器	15灰Ⅲ 土坑D	口15.7, 高10.2 底13.0	〃	10YR8/4通	1/4	
115	土師土錘	10号採掘坑	長6.95, 幅4.0 孔1.2	普通	7.5YR8/1通	完形	一部黒斑
116	〃	〃	長6.75, 幅3.9 孔1.3	〃	10YR8/1良	4/5	〃
117	須恵鉢G	〃	口11.8, 高11.9 底6.1	〃	暗灰焼堅緻	3/4	有蓋・糸切痕 容量1.943ℓ
118	土師小釜	〃	口12.4, 高10.8 頸11.0, 胴12.6 底6.8	粗砂含	7.5YR7/3通	〃	口～頸に黒斑 容量1.946ℓ
119	〃	〃	口13.4 頸12.4, 胴13.8	普通	7.5YR8/3通	1/6	
120	〃	〃	口12.2, 高11.5 頸10.7, 胴12.0 底6.4	粗砂含	7.5YR8/3・8/4通	略完	外面広く黒斑 容量1.724ℓ
121	〃	〃	口11.8 頸10.3, 胴11.8	〃	7.5YR7/3通	1/10	
122	〃	〃	口12.6 頸11.1, 胴12.5	大粒砂含	7.5YR7/2・7/3通	1/15	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
123	土師小釜	10号採掘坑	口14.1 頸12.1, 胴13.5	粗砂含	7.5YR7/4通	1/10	口縁内黒斑
124	〃	〃	口15.2 頸13.6, 胴15.3	粗砂多	7.5YR8/2・8/3通	〃	
125	〃	〃	口14.1, 高14.3 頸12.7, 胴14.7 底7.8	普通	10YR8/2通	1/2	容量3.278ℓ
126	〃	〃	口15.3, 高14.0 頸13.0, 胴14.6 底7.4	粗砂含	7.5YR8/2通	4/5	容量3.297ℓ
127	〃	〃	口15.6, 頸14.2	〃	10YR8/3良	1/8	
128	土師釜	〃	口21.7, 頸19.4	〃	7.5YR8/4通	〃	
129	〃	〃	口22.4, 頸20.0	粗砂多	〃	1/6	
130	〃	〃	口22.5, 頸19.9	〃	7.5YR8/4良	1/20	
131	〃	〃	口22.8, 頸21.3	粗砂含	10YR8/3通	口縁片	
132	〃	〃	口22.6 頸20.1, 胴23.0	普通	7.5YR8/3・8/4通	1/20	
133	〃	15灰Ⅲ 土坑D	口21.8 頸19.0, 胴23.8	大粒砂含	7.5YR8/4通	1/3	外Ha叩き、内Da当て後ナデ
134	〃	〃	口20.6 頸18.6, 胴22.8	粗砂多	10YR8/2通	1/8	外面胴中位円形黒斑 外Ha叩き、内ナデ消し
135	〃	10号採掘坑	口23.9, 頸21.2	粗砂含	7.5YR8/3・8/4良	口縁片	
136	〃	15灰Ⅲ 土坑D	口22.7 頸20.6, 胴21.5	〃	2.5Y8/2通	1/10	外He叩き、内ナデ消し
137	土師鍋	〃	口36.0, 高13.4 頸33.6	粗砂多	10YR8/3通	2/3	内底当て具痕残る 底面一部黒斑 容量14.767ℓ

11号粘土採掘坑出土土器（第235～240図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	11号採掘坑	口15.0, 高2.5	普通	暗青灰焼堅緻	略完	重焼Ⅱa
2	〃	〃	口15.1, 高2.1	〃	〃	完形	重焼Ⅲ
3	〃	〃	口14.8, 高1.9	〃	青灰白焼良	1/3	〃
4	〃	〃	口15.2, 高2.2	〃	青灰焼良好	〃	〃
5	〃	〃	口13.6, 高2.5	〃	灰白焼良	〃	〃
6	〃	〃	口14.3, 高1.8	〃	青灰焼良好	1/2	〃
7	須恵坏E蓋小	〃	口12.0, 高1.8	〃	暗青灰焼堅緻	略完	〃
8	〃	〃	口12.0, 高1.65	〃	〃	1/2	
9	〃	〃	口13.2, 高1.4	〃	青灰焼堅緻	〃	重焼Ⅲ
10	須恵坏B身大	11号採掘坑 ＋エ20暗土	口14.0, 高5.0 台7.7, 台高0.8	〃	暗灰焼堅緻	4/5	
11	〃	11号採掘坑	口13.4, 高5.1 台7.1, 台高0.5	〃	黄橙色酸化焼良	2/3	爪a① 重焼Ⅲ
12	〃	〃	口13.6, 高5.1 台7.4, 台高0.7	〃	暗青灰焼堅緻	完形	重焼Ⅲ
13	〃	〃	口13.7, 高5.1 台7.15, 台高0.6	〃	暗灰焼堅緻	略完	〃
14	〃	〃	口13.8, 高4.1 台7.1, 台高0.6	〃	暗青灰焼堅緻	〃	〃
15	〃	〃	口13.5, 高5.3 台7.4, 台高0.6	〃	〃	〃	
16	〃	〃	口14.0, 高5.25 台6.7, 台高0.6	〃	〃	〃	重焼Ⅲ
17	〃	〃	口14.5, 高5.05 台7.2, 台高0.7	〃	〃	4/5	〃
18	須恵坏B身大	11号採掘坑	口13.8, 高5.5 台6.4, 台高0.5	普通	灰色焼堅緻	略完	重焼Ⅲ
19	須恵坏E身	〃	口11.8, 高3.3	〃	暗青灰焼堅緻	〃	〃
20	〃	〃	口12.2, 高3.4	〃	暗灰焼堅緻	2/3	重焼Ⅱ
21	〃	〃	口11.8, 高3.5	〃	暗青灰焼堅緻	4/5	重焼Ⅲ
22	〃	〃	口11.6, 高3.6	〃	灰色焼堅緻	9/10	
23	須恵坏A	〃	口13.2, 高3.45	〃	灰白焼良	略完	
24	〃	〃	口13.0, 高3.3	〃	〃	7/8	
25	〃	〃	口12.8, 高3.15	〃	〃	4/5	
26	〃	〃	口13.6, 高3.1	〃	青灰焼良好	2/3	底面ヘラ記号「I」
27	〃	〃	口13.6, 高3.0	〃	灰白焼良	1/2	
28	〃	〃	口13.0, 高3.1	〃	青灰焼堅緻	略完	
29	〃	〃	—	〃	青灰白焼良	1/5	底ヘラ記号「I」 底面墨書「大」
30	〃	〃	口13.2, 高3.0	〃	青灰焼堅緻	1/2	
31	〃	〃	口13.8, 高3.1	〃	灰色焼良	2/3	底面ヘラ記号「I」
32	〃	〃	口13.3, 高3.0	〃	灰色焼良好	6/7	
33	〃	〃	口13.0, 高3.0	〃	暗青灰焼堅緻	略完	
34	〃	〃	口13.4, 高2.75	〃	青灰焼堅緻	〃	
35	〃	〃	口12.4, 高2.8	〃	青灰白焼良好	2/3	
36	〃	〃	口12.9, 高2.7	〃	青灰焼堅緻	3/4	
37	〃	〃	口13.0, 高2.85	〃	にぶい黄橙酸化焼良	3/5	
38	〃	〃	口13.2, 高2.9	〃	青灰焼堅緻	4/5	底ヘラ記号「I」
39	〃	〃	口13.0, 高3.0	〃	青灰焼良好	1/3	
40	〃	〃	口13.0, 高2.7	〃	灰色焼堅緻	3/4	
41	〃	11号採掘坑 ＋オ19下層	口13.1, 高2.9	〃	青灰焼堅緻	2/3	
42	〃	11号採掘坑	口13.3, 高2.6	〃	〃	3/4	
43	須恵盤A	〃	口14.5, 高2.1	〃	暗青灰焼堅緻	1/3	
44	〃	〃	口15.1, 高2.0	〃	〃	3/4	
45	〃	〃	口14.5, 高2.2	〃	青灰焼堅緻	4/5	
46	〃	〃	口14.1, 高2.3	〃	暗青灰焼堅緻	完形	
47	〃	〃	口14.2, 高2.0	〃	青灰白焼良	1/5	
48	〃	11号採掘坑 ＋1号採掘坑	口14.6, 高1.9	〃	青灰焼良好	2/3	
49	須恵Ⅲ B	〃	口15.6, 高4.1 台9.2, 台高1.7	〃	暗青灰焼堅緻	3/4	正位重焼 底面ナデ消し
50	〃	11号採掘坑 ＋10号採掘坑	口14.2, 高2.9 台7.6, 台高1.0	〃	〃	4/5	正位重焼 底面糸切痕
51	〃	11号採掘坑	口13.9, 高3.05 台7.5, 台高0.8	〃	灰色焼良好	完形	正位重焼 爪痕b②・底面糸切痕
52	〃	〃	口13.8, 高3.15 台7.05, 台高0.7	〃	暗青灰焼堅緻	〃	正位重焼 底面ナデ消し
53	〃	〃	口13.3, 高2.95 台6.4, 台高0.8	〃	青灰白焼良	4/5	正位重焼 底面糸切痕
54	〃	〃	口13.9, 高3.2 台6.7, 台高1.0	〃	灰白焼良好	略完	正位重焼・底面糸切痕 内面中央摩耗
55	須恵埦A	〃	口12.8, 高4.0 底4.6	〃	暗青灰焼堅緻	〃	
56	〃	〃	口12.4, 高3.05 底5.0	〃	青灰焼堅緻	1/4	
57	須恵埦B	〃	口15.1, 高5.5 台6.7, 台高0.9	〃	灰白焼良	4/5	底面ヘラ記号「×」 底糸切痕

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
58	須恵塊B	11号採掘坑	口14.2, 高5.3 台6.4, 台高0.7	普通	青灰焼堅緻	略完	
59	須恵塊B大	〃	口21.4, 高8.8 台9.2, 台高0.9	〃	暗灰焼堅緻	〃	
60	須恵焼台	〃	口4.6, 高2.7	〃	灰色焼堅緻	2/3	
61	〃	〃	口14.6, 高3.2	〃	〃	〃	
62	〃	〃	口14.4, 高5.2	〃	灰色焼良好	4/5	
63	〃	〃	口16.9, 高6.1	砂多	灰色焼堅緻	〃	
64	須恵鉢A	〃	口29.9, 高6.6 底18.6	普通	〃	完形	容量5.411ℓ
65	須恵鉢C	〃	口29.6, 高9.9 底12.2	〃	青灰焼良好	2/3	容量6.914ℓ
66	須恵鉢F	〃	口19.4 台基10.4	砂多	灰色焼堅緻	底のみ欠損の9/10	容量6.584ℓ
67	須恵鉢B	11号採掘坑 +1号採掘坑 +オ19暗土	口16.7, 高13.4 頸15.6, 体18.5 底9.0	普通	〃	1/4	容量4.369ℓ
68	〃	11号採掘坑	口22.3, 高15.8 頸20.8, 体24.6 底10.5	〃	〃	9/10	底面ロクロ軸痕 容量9.201ℓ
69	須恵鉢A	〃	口41.5	〃	〃	1/10	
70	須恵瓶E	〃	口8.6, 胴13.7 頸5.4, 頸高6.1	〃	灰色焼良好	1/2	
71	須恵瓶B	〃	口9.0 頸5.4, 頸高9.2	〃	灰色焼堅緻	1/10	頸部シボリ痕
72	須恵瓶A	〃	口11.1 頸7.4, 頸高14.3	〃	〃	1/4	内面シボリ痕 外面ヨジレ
73	須恵瓶D	〃	口10.2 頸6.6, 頸高7.4	〃	〃	口頸片	
74	須恵瓶D (双耳)	〃	頸7.8, 底11.7 胴19.8, 胴高25.7 耳厚0.6～1.2	〃	〃	3/5	底面焼台痕
75	須恵壺F	11号採掘坑 +10号採掘坑 +1号採掘坑	口20.8 頸16.8 頸高4.0	〃	〃	1/6	
76	外赤坏A小型	11号採掘坑	口8.8, 高2.95	〃	7.5YR8/2・7/4通	2/3	
77	外赤内黒塊A	〃	口13.6 高4.15 底6.2	〃	7.5YR7/4通	1/2	内ミガキ体上半のみ 下半は省略 外面ところどころ黒斑
78	外赤内黒塊B	〃	口12.8, 高5.0 台6.4, 台高0.7	〃	7.5YR8/4通	1/4	内黒とぶ
79	〃	〃	口16.2, 高5.8 台8.0, 台高0.7	〃	10YR8/3通	2/3	内面口縁・内底面の 内黒とぶ
80	〃	〃	口15.3, 高5.8 台7.3, 台高0.85	〃	10YR6/1通	1/2	合わせ口焼の口縁ズレによって内黒とぶ
81	外赤内黒塊B大㊙	11号採掘坑 +10号採掘坑	口15.9, 高7.3 台7.3, 台高1.0	〃	10YR8/2通	2/3	内黒口縁外はみ出し
82	外赤内黒塊B大	11号採掘坑	口18.9, 高6.7 台8.4, 台高0.8	〃	10YR8/3通	1/5	
83	〃	〃	口20.3	〃	7.5YR8/4通	略完	
84	〃	11号採掘坑 +1号採掘坑	口20.1	〃	7.5YR8/3通	1/2	底面黒斑
85	外赤内黒塊B特大	11号採掘坑	口25.9	〃	7.5YR8/4通	〃	内黒口縁外はみ出し
86	土師稜塊	〃	口17.2, 高7.2 台8.2, 台高0.7	〃	7.5YR8/3通	2/3	
87	外赤内黒ⅢB	〃	口15.0, 高3.45 台8.2, 台高0.9	〃	10YR8/3良	〃	
88	〃	〃	口14.7, 高3.3 台7.3, 台高1.2	〃	10YR6/1通	1/2	外面ひろく黒斑 内黒口縁外はみ出し
89	外赤内黒ⅢB	11号採掘坑	口15.4, 高3.8 台7.6, 台高1.0	普通	10YR8/3通	1/2	内底の内黒とぶ 内黒口縁外はみ出し
90	〃	〃	口14.1, 高3.8 台7.2, 台高1.15	〃	〃	4/5	外面広く黒斑 口縁端の内黒とぶ
91	〃	〃	口13.9, 高3.6 台6.9, 台高1.1	〃	10YR7/1通	2/3	外面全体黒斑・内黒口縁外僅かにはみ出し
92	〃	〃	口13.9, 高3.45 台6.6, 台高0.8	〃	7.5YR8/3通	1/2	
93	〃	〃	口14.5, 高4.2 台8.2, 台高0.75	〃	10YR8/3通	2/3	内黒口縁外はみ出し
94	〃	〃	口14.4, 高4.05 台9.15, 台高0.6	〃	10YR8/2通	略完	〃
95	内黒ⅢB	〃	口14.0, 高3.6 台7.8, 台高1.0	〃	10YR8/4通	4/5	
96	土師小釜	〃	口12.6, 高11.7 頸11.6, 胴12.8 底6.8	粗砂含	7.5YR8/4・8/5通	1/2	底面に黒斑 容量2.148ℓ
97	〃	〃	口13.0, 高11.6 頸11.3, 胴13.4 底7.3	普通	10YR8/1・8/3通	2/3	容量2.209ℓ
98	〃	〃	口12.8 頸11.3, 胴13.1	〃	10YR8/3良	1/10	外面火色
99	〃	〃	口11.6 頸10.6, 胴11.6	粗砂含	7.5YR8/5通	〃	〃
100	〃	〃	口13.1 頸11.9, 胴13.9	普通	7.5YR8/3・8/4通	1/8	
101	〃	〃	口12.5 頸11.4, 胴12.3	粗砂含	7.5YR8/4通	1/6	
102	〃	〃	口10.8 頸10.0, 胴11.5	〃	7.5YR8/5通	〃	
103	〃	〃	口12.0, 高10.1 頸11.0, 胴12.4 底6.2	〃	7.5YR8/2・8/3通	1/4	容量1.768ℓ
104	〃	〃	口11.4 頸10.4, 胴12.4	〃	7.5YR8/3・8/5通	3/5	
105	〃	〃	口12.5, 頸11.4	〃	〃	1/15	
106	〃	〃	口15.5, 高14.9 頸13.7, 胴16.0 底7.8	〃	10YR8/2・8/3通	2/3	容量4.3ℓ
107	〃	〃	口14.4, 高13.8 頸13.0, 胴15.0 底7.5	〃	7.5YR8/3通	1/3	容量3.361ℓ
108	〃	〃	口15.3, 高14.3 頸13.6, 胴15.8 底8.0	〃	10YR8/2通	3/5	外底に火色 容量3.924ℓ
109	〃	〃	口14.8 頸13.0, 胴14.3	〃	7.5YR7/3・7/4通	1/10	
110	〃	〃	口13.8 頸12.2, 胴13.8	〃	10YR8/3良	〃	
111	〃	〃	口16.3 頸14.8, 胴16.0	〃	10YR8/4良	1/8	
112	〃	〃	口16.1 頸14.6, 胴16.7	粗砂多	7.5YR8/2通	1/6	
113	須恵釜	〃	口16.9 頸15.2	粗砂多 (土師) (粘土)	灰色焼堅緻	口頸片	
114	土師小釜大	〃	口19.4 頸17.5, 胴19.8	粗砂含	7.5YR8/3・6/2通	1/10	
115	〃	〃	口17.8 頸16.3, 胴18.5	〃	7.5YR8/3通	1/8	
116	土師小釜大型	〃	口17.8, 高19.0 頸15.8, 胴18.8 底10.0	粗砂多	7.5YR7/1・6/1通	2/3	容量7.521ℓ
117	土師釜	15灰Ⅱ 土坑A	口21.7, 頸19.8	粗砂含	10YR8/2通	1/15	外面胴スス付着

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
118	土師釜	15灰Ⅱ 土坑A	口22.8 頸20.3	粗砂含	7.5YR8/2・ 8/4通	1/15	外面胴スス付着
119	〃	〃	口23.5 頸21.1, 胴24.4	粗砂多	7.5YR8/4通	1/3	外面全体スス付着 外Hе叩き、内Da当て
120	〃	〃	口22.1, 高35.0 頸20.7, 胴25.4	〃	2.5Y8/1通	2/5	外面全体黒斑 外Hе叩き、内Da当て 容量23.864ℓ
121	〃	〃	口20.8 頸19.2, 胴22.9	粗砂含	10YR8/1通	1/2	外Hе叩き、内SD当て 容量推17.814ℓ
122	〃	〃	口22.7 頸20.6, 胴22.3	粗砂多	10YR8/2通	1/9	外Ha叩き、内ナデ消し
123	〃	〃	口23.1 頸20.8, 胴23.5	普通	〃	1/10	外Ha叩き、内SD当て
124	〃	〃	口23.4 頸21.6, 胴24.6	粗砂含	10YR8/2良	1/3	外Ha叩き、内無文当て 後ナデ 外面火色
125	〃	〃	口21.9 頸20.3, 胴25.0	〃	10YR8/1通	1/8	外Hе叩き、内SD当て
126	〃	〃	口22.6 頸20.4, 胴23.7	〃	7.5YR8/3通	〃	外面黒斑及び火色
127	〃	〃	口24.2, 頸21.8	普通	10YR8/3通	口縁片	
128	土師鍋	〃	口31.3, 頸28.9	粗砂含	10YR8/2通	1/10	
129	〃	〃	口40.4, 頸38.2	大粒 砂含	7.5YR8/4 10YR8/1通	1/12	

1号掘立柱建物跡出土土器（第241図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋大	1号掘立P5	口14.1, 高2.0	普通	暗灰焼堅緻	1/5	
2	須恵鉢B	1号掘立P1	口16.2 頸15.1, 体16.5	〃	青灰焼良好	1/10	
3	土師鍋	〃	口40.2, 頸37.6	大粒 砂含	10YR8/3通	1/20	

7号窯灰原出土土器（第241～249図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏B蓋 特殊	オ19 7号下灰	口24.2	普通	灰色焼堅緻	1/4	重焼Ⅱa
2	須恵坏B蓋大	オ19最下灰	口14.8, 高1.8	〃	青灰焼堅緻	3/5	重焼Ⅲ
3	〃	エ20黒灰	口14.6, 高1.9	〃	〃	1/4	
4	須恵坏B身	エ21最下層 オ19灰	口14.1, 高5.9 台7.0, 台高0.7	〃	〃	2/3	重焼Ⅲ
5	〃	7号灰集中 ③	口13.5, 高5.45 台7.2, 台高0.8	〃	暗青灰焼堅緻	2/5	〃
6	〃	〃	口14.7, 高5.45 台7.4, 台高0.5	〃	〃	完形	〃
7	〃	オ20下層灰	口13.4, 高5.5 台7.0, 台高0.85	〃	青灰焼堅緻	2/5	重焼Ⅲ 爪痕a①
8	須恵坏A	オ19下灰	口12.8, 高3.2	〃	〃	1/2	重焼Ⅲ
9	〃	〃	口12.2, 高3.7	〃	灰白焼良	2/3	〃
10	〃	7号灰集中③	口12.0, 高3.6	〃	青灰焼堅緻	略完	〃
11	〃	エ21最下灰	口11.6, 高3.9	〃	灰色焼堅緻	2/5	〃
12	〃	オ19最下灰	口13.8, 高3.2	〃	灰白焼良	1/2	
13	〃	オ19下灰	口13.8, 高3.4	〃	〃	4/5	
14	〃	7号灰集中①	口12.7, 高3.2	〃	青灰焼堅緻	略完	
15	〃	7号灰集中②	口13.8, 高3.3	〃	灰白焼良	2/3	
16	須恵坏A	オ20下層埋土+7号灰+11号採掘坑埋土	口13.0, 高3.3	普通	灰白焼良	2/3	口縁に油煙痕
17	〃	オ19最下灰	口13.5, 高3.0	〃	青灰焼堅緻	5/6	内底「×」、外底「Ⅲ」のヘラ記号
18	〃	7号灰	口13.0, 高3.05	〃	灰色焼良好	3/4	
19	〃	オ19下灰	口13.2, 高3.0	〃	にぶい 黄橙酸化焼良	1/2	
20	〃	7号灰集中 ③	口13.2, 高2.6	〃	青灰焼良好	5/6	
21	〃	オ19最下灰	口12.6, 高2.8	〃	青灰焼堅緻	3/4	
22	〃	オ19最下灰 一括	口13.0, 高2.7	〃	〃	4/5	外底「Ⅲ」、内底「×」のヘラ記号
23	〃	7号灰集中 ④	口12.4, 高2.9	〃	〃	完形	
24	〃	〃	口13.0, 高2.85	〃	〃	5/6	
25	〃	オ19最下灰 一括	口13.2, 高2.65	〃	〃	6/7	
26	〃	7号灰集中 ③	口12.8, 高2.8	〃	青灰焼良好	略完	
27	〃	オ19最下灰 一括	口13.1, 高3.0	〃	灰白焼良好	2/3	
28	〃	オ19最下灰	口12.4, 高2.55	〃	青灰白焼良	略完	
29	〃	オ19最下灰 一括	口13.8, 高2.7	〃	青灰白焼良好	2/3	底ヘラ記号「×」
30	〃	オ19最下灰 暗土	口13.1, 高2.35	〃	〃	3/5	
31	須恵小型坏	ウ21上層	口8.6, 高3.15	〃	〃	1/4	
32	須恵盤A	オ19最下灰	口13.5, 高1.5	〃	青灰焼良好	略完	
33	〃	7号灰集中 ③	口13.5, 高1.9	〃	〃	4/5	
34	須恵Ⅲ B	オ19最下灰	口14.3, 高2.8 台8.3, 台高1.2	〃	灰白焼良	完形	正位重焼 底糸切痕
35	〃	オ20焼土	口13.8, 高3.3 台7.9, 台高1.0	〃	灰色焼堅緻	2/3	底ナデ消し
36	〃	オ19最下灰	口14.1, 高3.2 台7.0, 台高1.0	〃	青灰焼良好	〃	正位重焼 底ナデ消し
37	〃	オ19灰	口13.4, 高3.1 台7.0, 台高0.8	〃	灰色焼良好	〃	正位重焼 底糸切痕
38	〃	7号灰集中 ③	口15.0, 高3.7 台7.2, 台高1.2	〃	青灰焼堅緻	1/2	〃
39	〃	オ19下灰 黒灰	口13.8, 高3.5 台7.4, 台高0.6	〃	〃	2/3	内面摩耗痕あり
40	〃	オ19下灰	口13.3, 高2.95 台6.5, 台高0.8	〃	褐灰酸化焼良	〃	底ヘラ記号「Ⅱ」 ナデ消し
41	〃	オ20下層	口13.0, 高2.5 台7.1, 台高0.8	大石 まじる	暗灰焼堅緻	略完	正位重焼 底糸切痕
42	〃	オ19最下灰	口14.4, 高3.4 台6.8, 台高0.9	普通	青灰白焼良好	〃	〃
43	〃	7号灰集中 ③	口13.7, 高3.2 台6.6, 台高0.8	〃	灰白焼良	1/3	合わせ口重焼 底ヘラ記号「廿」?
44	〃	オ19表土	口13.8, 高3.1 台6.7, 台高0.7	〃	青灰焼良好	1/5	内底ヘラ記号「×」 外底爪痕b①
45	須恵埦A	オ19最下灰 +オ20上層	口12.3, 高3.0 底5.9	〃	暗青灰焼堅緻	3/4	
46	〃	オ19下灰	口12.8, 高5.15 底5.4	〃	青灰焼良好	1/4	底糸切痕
47	〃	エ20焼土 +オ20焼土	口15.8, 高5.5 底6.6	〃	青灰白焼良好	1/5	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
48	須恵埦B	オ19最下灰	口14.5, 高4.85 台6.8, 台高0.7	普通	青灰焼堅緻	4/5	底糸切痕
49	〃	オ19最下	口14.2, 高5.0 台6.2, 台高0.5	〃	青灰白焼良好	1/3	爪痕a
50	〃	オ19集中①	口15.1, 高5.5 台7.0, 台高0.4	〃	青灰焼堅緻	7/8	底糸切痕
51	〃	オ19下灰	口15.2, 高4.7 台6.8, 台高0.5	〃	青灰焼良好	1/2	内底摩耗痕あり 爪痕a③・糸切痕
52	〃	〃	口13.1, 高5.0 台6.0, 台高0.45	〃	青灰白焼良	2/5	爪痕c②・糸切痕
53	〃	〃	口15.2, 高5.05 台7.5, 台高0.45	〃	にぶい 褐色酸化焼良	1/2	底糸切痕
54	須恵埦B大	オ19最下＋ 11号採掘坑	口19.8, 高7.2 台8.6, 台高1.1	〃	青灰焼堅緻	3/4	
55	須恵鉢G	オ19最下灰	口14.2, 高10.7 底10.1	〃	〃	略完	有蓋・底ヘラ記号「×」 底糸切痕 容量2.179ℓ
56	須恵鉢F	オ19灰	口15.0	〃	灰色焼堅緻	1/4	
57	須恵鉢B	オ19	口13.0, 高9.5 頸11.9, 体13.4 底7.0	〃	青灰焼堅緻	1/3	底糸切痕 容量1.511ℓ
58	〃	オ19最下灰	口17.8 頸15.8, 体18.0	〃	青灰焼良好	3/4	容量推3.939ℓ
59	〃	7号灰集中 ③	口21.5, 高15.2 頸19.2, 体21.5 底10.8	〃	青灰焼堅緻	略完	容量7.618ℓ
60	〃	オ19下灰 最下灰	口21.7, 高15.1 頸19.8, 体22.1 底10.8	〃	青灰焼良好	9/10	底面ロクロ軸痕 容量7.389ℓ
61	〃	7号灰集中 ③	口24.1, 高16.4 頸21.4, 体23.9 底10.7	〃	暗灰焼良好	略完	底面ロクロ軸痕 容量8.917ℓ
62	〃	オ19下層 黒灰・オ20	口22.6 頸21.2, 体23.4	〃	青灰焼良好	1/10	
63	〃	エ20 オ19・オ20	口19.2 頸17.7, 体20.9	〃	灰色焼良好	1/2	容量推4.913ℓ
64	〃	7号灰集中① エ19黒灰 オ19暗土	口23.6 頸22.3 体25.1	〃	暗灰焼良好	〃	容量推9.125ℓ
65	〃	オ19暗土	口22.4, 高15.2 頸20.9, 体23.6 底10.6	砂多	灰色焼良	5/6	口縁内面に重焼のため の火ダスキ痕 容量8.231ℓ
66	須恵瓶B	オ19黒灰	頸5.4, 胴14.0	〃	暗灰焼堅緻	1/10	円盤閉塞タイプ
67	〃	オ19最下灰	頸4.5 胴13.3, 胴高11.4 台8.4, 台高0.8	普通	灰色焼堅緻	4/5	底焼台付着痕 胴シボリきり閉塞
68	須恵瓶D (双耳)	7号灰集中 ③	口11.6, 高28.3 頸6.6, 頸高6.8 胴16.6, 胴高21.5 底9.1, 耳厚0.8～1.3	〃	〃	完形	底ヘラ記号「I」 底焼台痕,成形台のまま 容量推6.248ℓ
69	〃	7号灰集中	頸6.7, 底10.0 胴15.6, 胴高20.2 耳厚0.6～1.3	〃	〃	口縁の み欠損 の9/10	底面褒破片付着 底成形台痕 容量推4.806ℓ
70	須恵瓶D	7号灰集中 ①	口18.7 頸9.9, 頸高11.1	〃	暗褐灰酸化焼 良好	口頸片	
71	須恵瓶D (双耳)	オ19下灰 最下灰	頸7.4, 底9.6 胴16.7, 胴高21.1 耳厚0.6～1.8	〃	灰色焼堅緻	2/3	底ロクロ軸痕
72	〃	エ19下灰 オ19表土 オ20下灰	頸8.8 胴20.6 耳厚0.7～1.6	〃	〃	1/10	
73	須恵壺A蓋	エ19最下灰 エ20下灰 7号灰集中②	口23.4	〃	〃	2/3	
74	〃	オ19下灰	口14.1	〃	〃	4/9	

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
75	須恵壺F	オ19黒灰	口13.5, 高17.8 頸11.4, 頸高2.6 胴16.7, 底9.2	普通	青灰焼堅緻	完形	底面ロクロ軸痕残す 底面焼台痕 容量4.53ℓ
76	〃	オ19下灰	口14.5, 胴19.4 頸13.5, 頸高2.4	〃	〃	1/5	
77	〃	オ19下灰 黒灰	口18.5, 高28.1 頸15.4, 頸高3.35 胴25.0, 底12.0	〃	灰色焼堅緻	6/7	容量16.076ℓ
78	須恵壺E	オ19黒灰 下灰	口20.4, 高18.7 頸19.6, 肩22.6 台12.8, 台基11.0	〃	〃	1/3	容量8.241ℓ
79	須恵カマド?	エ21上層		〃	青灰焼堅緻	底部片	外面ハケ
80	須恵大甕	ウ21中層	口34.2 頸27.1, 頸高4.9	〃	灰色焼良好	口頸片	外He叩き、内SD当て 後口頸成形
81	須恵中甕	ウ21中層＋ エ20中層＋ エ21中層＋ 8号採掘坑	口25.2 頸20.0 頸高7.0	〃	灰色焼堅緻	1/12	口縁外面ヘラ描き「山」? 胴・縦軸叩き→口頸成形 →頸横軸叩き。 外He叩き、内SD当て
82	〃	オ19最下灰 オ20黒灰	口25.6 頸19.8, 頸高5.3	〃	〃	1/20	胴叩き後、頸整面叩き 外He叩き、内Da当て
83	〃	オ19暗土一括 ＋ 11号採掘坑	口32.6 高52.2 頸27.0 頸高4.7 胴49.3 胴高47.5	〃	灰色焼良好	4/5	胴横軸叩き→胴上半 縦軸叩き→口頸成形→ 頸部整面叩き→胴下位 削り→底叩き出し。 外面叩きは頸部整面のみHe叩き,他はHa叩き,内面胴部横軸He当て、胴部～頸部縦軸芯持ち材の平行線文当て、底部He(太)当て、底面摩耗。 容量118.607ℓ
84	須恵大甕	オ19下灰	—	〃	灰色焼堅緻	1/30	底面杯B蓋転用焼台付着。 胴外Ha叩き後底外He叩き。 胴内He当て後底内He当て（別当具）
85	須恵中甕	イ18灰	底16.0	〃	黄橙酸化焼良	底片	外胴叩き→底面叩き（He叩き） 内ナデ消し
86	〃	オ19暗土一括	頸20.8 胴40.3 胴高40.6 底15.9	〃	灰色焼堅緻	2/3	胴縦軸叩き(上から下)→口頸成形→頸部整面叩き→底叩き 外Ha叩き、内心持ち材のHe当て。 底面摩耗
87	須恵瓶E	オ19最下灰・ 黒灰 オ20下灰	頸3.5 胴高12.1 底11.9	〃	青灰焼堅緻	〃	注口付か？
88	須恵小瓶E	オ19下灰	頸3.5, 胴9.0 底5.2	〃	灰色焼堅緻	1/3	底ヘラ記号「×」 底糸切痕
89	〃	エ19黒灰 エ20下灰	頸2.9 胴9.3	〃	灰色焼良好	1/5	
90	〃	オ20下底灰	胴5.7, 底4.2	〃	暗灰色焼堅緻	1/3	底糸切痕
91	須恵不明	オ19暗土		〃	灰色焼堅緻		
92	須恵風字硯	オ20黒灰	厚0.9, 足高1.1	〃	暗灰焼堅緻	1/10	
93	須恵土錘	エ19中層	長4.6, 幅2.85 孔0.95	〃	灰色焼堅緻	完形	重量36.7g
94	〃	オ19黒灰	長5.2, 幅2.8 孔0.75	〃	〃	〃	重量38.2g
95	〃	オ20 下層埋土	長5.0, 幅2.9 孔0.8	〃	暗灰焼堅緻	〃	重量40.5g
96	〃	カ19中層	長5.35, 幅2.6 孔1.1	〃	灰色焼堅緻	〃	重量38.3g
97	須恵焼台	7号灰集中①	口16.3, 高2.8	〃	灰色焼良好	略完	
98	〃	オ19黒灰	口15.0, 高3.2	〃	灰色焼堅緻	1/3	
99	〃	7号灰集中③	口19.8, 高2.3	〃	暗青灰焼堅緻	完形	底窯土付着

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
100	須恵焼台	オ19下灰	口11.2, 高3.1	普通	灰色焼堅緻	1/3	
101	〃	7号灰集中③	口11.8, 高2.9	〃	〃	1/2	
102	〃	オ20焼土	口13.7, 高3.4	〃	灰色焼良好	1/4	
103	〃	7号灰集中②	口13.4, 高3.8	〃	灰色焼堅緻	1/5	
104	〃	オ19·20黒灰	口13.1, 高3.1	〃	灰白焼良	1/4	
105	〃	エ20 オ20下層	口10.8, 高5.6	〃	灰色焼堅緻	2/3	
106	〃	エ19最下灰	口11.5, 高5.7	砂多	〃	1/2	
107	外赤内黒埦A	オ19最下	口13.1, 高4.1 底6.6	普通	7.5YR8/4通	1/3	内口縁内黒とぶ 体外一部黒斑
108	外赤埦A	オ20下層 埋土	口13.7, 高4.1 底6.0	〃	10YR8/3通	〃	内黒とぶ
109	外赤内黒埦A	オ19黒灰	口13.0, 高3.85 底5.5	〃	7.5YR8/4通	2/3	
110	〃	〃	口12.9, 高3.9 底5.5	〃	〃	〃	赤彩ハケ塗り痕 口縁内の内黒とぶ
111	〃	〃	口13.4, 高3.8 底5.4	〃	7.5YR8/3通	〃	体外一部黒斑 口縁内の内黒とぶ
112	〃	Ⅲ層集中③	口14.4, 高4.0 底6.0	〃	7.5YR8/1通	1/3	体外一部黒斑
113	〃	オ19黒灰	口13.6, 高3.65 底5.4	〃	7.5YR7/4通	1/2	
114	〃	オ19黒灰 下灰	口13.3, 高3.5 底5.5	〃	7.5YR8/4通	2/3	体外一部棒状黒斑 口縁内の内黒とぶ
115	〃	オ19下灰 エ20表土	口13.1, 高3.9 底4.3	〃	7.5YR8/5通	〃	口縁内の内黒とぶ
116	内黒埦A小	Ⅲ層集中③	口9.8, 高3.3 底4.8	〃	10YR8/2通	〃	内黒口縁外はみ出し 底面棒状黒斑
117	外赤内黒埦B	オ20下灰	口13.1, 高4.7 台7.9, 台高0.6	〃	10YR8/3通	1/3	
118	〃	オ19黒灰	口14.3, 高5.7 台7.2, 台高0.5	〃	10YR8/4通	〃	内黒口縁外はみ出し
119	赤彩埦B	Ⅲ層集中③	口15.8, 高6.1 台7.6, 台高0.9	〃	7.5YR8/4通	1/2	内黒とぶ
120	外赤内黒埦B大㊥	Ⅱ層集中④	台7.2, 台高0.8	〃	10YR8/3通	1/5	
121	外赤埦B大	Ⅱ層集中②	口20.0	〃	10YR8/3 7.5YR8/3通	1/4	内黒とぶ
122	外赤内黒埦B大	Ⅲ層集中③	口21.8, 高8.2 台8.7, 台高0.8	〃	7.5YR8/3通	2/3	内黒口縁外はみ出し
123	外赤埦B大	Ⅱ層集中②	口22.6	〃	10YR8/3 7.5YR8/3通	1/6	内黒とぶ
124	外赤内黒ⅢB	エ20Ⅲ層 焼土	口14.6, 高2.9 台7.4, 台高1.0	〃	10YR8/3通	3/4	内黒口縁外はみ出し
125	〃	〃	口15.2, 高2.9 台7.7, 台高1.1	〃	10YR6/2通	1/4	外黒斑
126	外赤ⅢB	オ19下灰	口14.8, 高3.0 台6.4, 台高0.75	〃	10YR8/4 7.5YR7/5通	1/3	内黒とぶ
127	外赤内黒ⅢB	オ19黒灰	口13.8, 高3.15 台7.3, 台高0.3	〃	10YR8/4通	1/2	口縁内の内黒とぶ
128	外赤ⅢB	オ19最下層	口13.8	〃	10YR8/3通	1/3	内黒とぶ
129	外赤内黒ⅢB	オ19Ⅱ層 暗土	口14.5	〃	10YR8/4通	1/2	内黒一部とぶ 外面ところどころ黒斑
130	〃	オ19最下層	口13.8, 高3.3 台7.2, 台高0.5	〃	10YR8/3通	2/3	外口縁に黒斑
131	〃	オ20下層	口14.3, 高3.25 台7.8, 台高0.8	〃	〃	1/2	
132	〃	オ19 オ20下層	口14.0, 高3.7 台7.8, 台高0.6	〃	10YR8/4通	2/3	内黒口縁外はみ出し

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
133	外赤内黒ⅢB	オ20下層・ 埋土	口12.7, 高3.05 台7.2, 台高0.5	普通	10YR8/3通	1/2	
134	外赤ⅢB小	オ19黒灰	口10.2, 高1.85 台6.6, 台高0.5	〃	10YR8/4通	4/5	内黒とぶ
135	須恵小釜	オ19下層 オ19最下	口12.9 頸12.1, 胴13.5	砂多	灰色焼堅緻	1/8	
136	土師小釜	オ19Ⅱ層 暗土	口13.4, 高14.55 頸12.2, 胴15.0 底7.4	粗砂多	7.5YR7/5通	2/3	内口縁にコゲ痕 外赤変、外底黒化 容量3.452ℓ
137	土師釜	Ⅲ層集中③	口23.0, 高32.0 頸21.4, 胴25.6	粗砂含	10YR8/3通	1/4	外酸付近黒斑 外He叩き、内ナデ消し 容量22.831ℓ
138	〃	オ19最下	口21.6, 頸19.5	粗砂多	10YR8/4 7.5YR8/4良	口縁片	
139	〃	〃	口23.3, 頸21.5	普通	10YR8/4 7.5YR8/3良	〃	
140	〃	〃	口27.0, 頸25.0	粗砂含	10YR8/5通	〃	
141	土師羽釜	〃	口22.2, 口高4.8 鍔27.4	〃	7.5YR8/4通	1/20	外面ス ス付着
142	〃	オ19下灰	口21.4, 口高5.2 鍔27.6	〃	10YR8/3良	胴上片	胴外面ス ス付着
143	土師甑	Ⅱ層暗土	口34.7	〃	10YR6/1 2.5Y8/2通	口縁片	
144	〃	Ⅱ層集中②	口30.4	〃	10YR8/4良	1/8	外He叩き、内He当て
145	土師台付鉢	オ19	台基17.2	粗砂多	2.5Y8/3通	台片	4方向円形スカシ 粘土紐巻き上げ成形痕。台は倒立成形
146	〃	オ19下灰	台21.4, 台高5.5	粗砂含	5YR7/6通	〃	〃
147	〃	〃	台18.4, 台高6.0 台基13.6	普通	7.5YR8/6通	〃	
148	円筒形土器	オ20下灰	口12.7	粗砂含	7.5YR8/4通	口縁片	
149	土師瓶	オ20	—	普通	10YR8/3通	頸部片	頸部絵画的線刻
150	土師馬形	ウ22 下層黒灰	—	〃	10YR7/4通	足部片	
151	土師土錘	オ19	長7.9, 幅5.3 孔1.6	〃	2.5YR8/3通	7/8	重量推180.5g
152	〃	Ⅱ層集中②	長8.4, 幅5.8 孔1.6	〃	2.5YR8/2 10YR8/2通	9/10	重量推222.6g
153	〃	エ21最下層	長7.25, 幅4.4 孔1.5	〃	7.5YR8/6通	4/5	一部黒斑
154	〃	Ⅲ層集中③	長8.2, 幅4.25 孔1.4	〃	2.5YR8/1通	3/4	〃
155	〃	イ20	長7.7, 幅4.2 孔1.4	〃	10YR8/2通	4/5	
156	〃	オ19最下灰	長7.45, 幅4.25 孔1.55	〃	10YR8/4・ 7/2通	完形	重量121.1g
157	〃	7号灰	長7.15, 幅4.35 孔1.4	〃	2.5YR8/2通	5/6	一部黒斑
158	〃	オ20	長6.85, 幅4.1 孔1.2	〃	10YR8/2通	3/4	
159	〃	オ20下灰	長7.0, 幅4.0 孔1.4	〃	10YR8/2・ 4/1通	4/5	黒斑 重量83.3g
160	〃	カ19	長6.2, 幅3.7 孔1.4	〃	7.5YR8/6通	〃	重量70.6g
161	〃	イ19	長5.85, 幅3.6 孔1.4	〃	2.5YR8/2通	完形	重量63.3g
162	〃	7号灰	長5.8, 幅3.25 孔1.2	〃	10YR8/3通	〃	重量52.8g
163	〃	イ21	長5.15, 幅2.75 孔0.6	〃	2.5YR8/3通	略完	重量推33.9g
164	〃	エ19黒灰	長5.05, 幅3.1 孔0.95	〃	10YR8/4通	完形	重量39.5g

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
165	土師土錘	オ19無灰	長3.1, 幅2.95 孔0.8	普通	10YR8/4・ 7/4通	略完	重量34.3g
166	〃	オ19	長4.6, 幅2.85 孔0.9	〃	7.5YR7/6通	完形	重量25.1g
167	〃	エ21最下層	長5.65, 幅2.7 孔1.0	〃	2.5YR8/3通	〃	重量24.5g
168	〃	エ20黒灰	長4.4, 幅2.4 孔0.7	〃	2.5Y7/1通	略完	重量17.2g
169	〃	エ22下層	長3.4, 幅1.9 孔0.7	〃	2.5YR8/3通	完形	黒斑 重量9.3g
170	〃	ウ19上層	長3.6, 幅1.8 孔0.6	〃	10YR6/4通	略完	重量7.7g
171	須恵板	7号灰	厚1.7	〃	7.5YR8/3 10YR8/1 酸化焼成	破片	須恵甕破損品を方形に切り取り、窯道具として酸化焼成したもの。 外Ha叩き、内SD当て
172	土師板	〃	厚1.0	粗砂含	10YR8/3 7.5YR7/4良	〃	土師甑胴部の方形板状切り取り品 外He叩き
173	〃	〃	〃	〃	10YR8/3通	〃	土師甑胴部の方形板状切り取り品 外He叩き、内無文当て 一部黒斑
174	土師匣鉢	オ19Ⅱ層 暗土	□17.9, 高10.2	〃	7.5YR7/5通	2/3	

4号土坑出土土器（第250図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵塊B	4号土坑	□14.4, 高5.15 台7.8, 台高0.6	普通	灰白焼良	1/2	内底摩耗
2	〃	〃	□14.5, 高5.4 台7.2, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	2/3	
3	外赤内黒塊A	〃	□12.9, 高3.65 底6.0	砂多	10YR8/4通	1/4	
4	外赤塊B	〃	台7.1, 台高0.3	普通	7.5YR8/4良	〃	
5	土師塊B	〃	台6.3, 台高0.5	〃	10YR8/3通	1/8	
6	土師小釜	〃	□13.1, 頸12.2	粗砂含	7.5YR8/3通	1/10	内面頸部に黒斑
7	〃	〃	□15.2, 頸14.0	〃	10YR7/4通	1/15	

8号土坑出土土器（第250・251図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵塊A	8号土坑+ オ19・7号灰	□13.5, 高5.15 底5.4	普通	灰白焼良	1/4	内底摩耗痕あり 底糸切痕
2	須恵塊B	8号土坑	□14.0, 高4.5 台6.1, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	2/3	底爪痕b②
3	〃	〃	台6.2, 台高0.6	〃	灰色焼良	1/3	
4	須恵瓶D (双耳)	8号土坑下層 +オ20黒灰	頸10.2, 胴24.4 耳厚0.6～1.8	〃	灰色焼堅緻	1/4	
5	須恵中甕	8号土坑	□18.8 高38.5 頸14.1 頸高4.4 胴26.4 胴高34.1	〃	青灰白焼良	略完	胴縦軸叩き→ハケ目→底叩き出し 外He叩き、内SD当て 内底He当て 底面D類焼台痕 底面強く摩耗、内底弱く摩耗 容量21.132ℓ
6	外赤内黒塊A	〃	□13.5	〃	10YR8/4通	1/5	内黒口縁外はみ出し
7	外赤内黒塊B	〃	□15.6	〃	〃	1/4	口縁の内黒とぶa
8	〃	〃	□13.2	〃	〃	1/6	内黒口縁外はみ出し
9	外赤内黒塊B	8号土坑	台6.3, 台高0.6	普通	10YR8/4通	1/8	底面赤彩
10		〃	□13.0, 高3.7 底6.3	〃	〃	2/3	
11	〃	〃	□12.5, 高3.85 底6.3	〃	2.5Y8/2通	1/2	内底ラセンヒダ
12	〃	〃	□13.2, 高4.2 底5.9	〃	7.5YR8/4通	1/3	
13	〃	〃	□13.4, 高4.0 底5.6	〃	7.5YR8/5通	2/3	内ラセンヒダ
14	〃	〃	□12.8, 高3.7 底6.1	〃	10YR8/4通	5/6	底面一部黒斑 内底ラセンヒダ
15	〃	〃	□13.9, 高3.75 底6.1	〃	7.5YR8/5通	1/2	
16	〃	〃	□13.2, 高3.8 底6.1	砂多	10YR8/3通	2/3	内底黒斑
17	〃	〃	□13.0, 高3.55 底5.7	普通	〃	1/3	
18	〃	〃	□13.5, 高3.6 底5.9	〃	7.5YR8/5通	1/2	内底ラセンヒダ
19	〃	〃	□12.6, 高3.8 底5.6	砂多	10YR8/4通	〃	内底ラセンヒダ 体下位黒斑
20	土師塊B	〃	台5.8, 台高0.7	普通	2.5Y8/4通	1/6	内底ラセンヒダ
21	土師Ⅲ A	〃	□13.0, 高2.55 底5.5	〃	7.5YR8/4通	1/2	
22	〃	〃	□12.9, 高2.6 底5.8	〃	10YR8/3通	〃	
23	〃	〃	□12.9, 高2.7 底5.6	〃	〃	〃	
24	〃	〃	□13.0, 高2.85 底5.5	〃	10YR7/4通	1/3	一部黒斑
25	土師Ⅲ B	〃	□12.8, 高3.4 台6.2, 台高0.4	〃	10YR8/4・ 7/4通	3/4	
26	土師匣鉢	〃	底15.0	粗砂含	7.5YR8/5通	1/3	
27	土師小釜	〃	□10.7, 高9.8 頸9.7, 胴12.0 底5.7	〃	10YR8/4通	2/3	外面被熱痕 容量1.493ℓ
28	〃	〃	□11.0, 頸9.8	普通	10YR7/2良	口頸片	
29	〃	〃	□12.8, 頸11.2	粗砂含	10YR8/4通	〃	
30	〃	〃	□14.8, 頸12.9	〃	〃	〃	
31	〃	〃	□14.2, 頸13.1	〃	7.5YR7/4 10YR8/4通	1/8	外面赤変、内面コゲ付着
32	土師小釜大	〃	□18.0, 頸17.1	〃	10YR8/4通	1/15	
33	土師釜	〃	□21.8 頸20.3, 胴24.0	〃	10YR8/3良	1/4	窯焼成？ 外Ha叩き、内Da当て
34	〃	〃	□21.3, 頸19.8	〃	10YR8/4良	口頸片	
35	〃	〃	□20.3 頸18.6, 胴21.3	〃	10YR8/4通	1/8	外、胴下半黒斑 外He叩き、内ナデ消し
36	土師鍋	〃	□41.2, 頸39.0	〃	〃	1/20	
37	〃	〃	□42.0	〃	〃	1/15	外面火色
38	土師土錘	〃	長6.1, 幅3.1 孔1.1	普通	〃	完形	一部黒斑 重量70.3g
39	〃	〃	長6.8, 幅4.2 孔1.3	〃	〃	〃	一部黒斑 重量103g

9号土坑出土土器（第252図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵塊B	9号土坑	口13.9, 高4.1 台6.4, 台高0.45	普通	灰褐酸化焼良	完形	内面爪痕c① 内底摩耗痕
2	〃	〃	口12.9, 高3.95 台5.9, 台高0.45	〃	青灰白焼良	2/3	底面爪痕b①
3	須恵瓶D （双耳）	〃	口17.9,耳厚0.6～1.3 頸10.8, 頸高9.8	〃	灰色焼堅緻	1/20	胴整面叩き （外Ha叩き、内Ha当て）
4	〃	〃	頸10.2, 底12.6 胴22.3, 胴高29.9 耳厚0.6～1.4	〃	青灰焼良好	1/3	底面ロクロ軸痕及び 焼台痕
5	外赤塊B	〃	口16.3	〃	10YR8/4通	1/10	内面内黒とぶ
6	土師塊A	〃	口15.8	〃	7.5YR8/5通	5/36	重焼痕
7	土師匣鉢	9号土坑＋上層	口14.5	粗砂含	10YR8/3通	1/10	
8	土師小釜	9号土坑	口14.8, 頸13.8	大粒 砂含	5YR7/4 10YR8/4通	1/15	外面赤変
9	〃	9号土坑上層	口14.6, 頸13.2	粗砂含	10YR8/4通	口頸片	
10	土師小鍋	9号土坑＋下層	口38.6, 頸35.7	粗砂多	10YR8/3通	1/25	外面ススうすく付着

12号粘土採掘坑出土土器（第252・253図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵塊A	7号灰集中①	口13.6, 高4.4 底6.3	普通	にぶい 赤褐酸化焼良	2/3	底糸切り痕
2	〃	エ20下灰	口13.0, 高3.7 底6.0	〃	青灰焼良好	1/3	〃
3	〃	エ19暗土	口13.8, 高4.0 底6.6	〃	〃	〃	〃
4	〃	12号採掘坑 ＋エ19暗土	口13.2, 高3.85 底6.8	〃	青灰焼堅緻	2/3	〃
5	〃	12号採掘坑	口13.3, 高4.15 底6.4	〃	青灰焼良好	〃	〃
6	〃	オ19最下灰	口13.2, 高4.9 底6.7	〃	黄灰白酸化焼	〃	〃
7	〃	オ19黒灰 暗土	口10.2, 高3.8 底5.4	〃	暗灰焼堅緻	〃	〃
8	須恵塊B	オ20・7号灰 エ19黒灰	口13.6, 高4.45 台6.0, 台高0.3	〃	にぶい 赤褐酸化焼良	1/3	〃
9	〃	オ19暗土 一括	口14.3, 高5.1 台6.3, 台高0.6	〃	にぶい橙色 酸化焼不良	2/3	内底摩耗痕あり
10	〃	オ19暗土 下灰	口15.4, 高5.8 台7.8, 台高0.6	〃	にぶい 褐色酸化焼良	1/4	底ナデ消し
11	〃	オ19暗土	口15.0, 高5.0 台7.0, 台高0.6	〃	にぶい 橙色酸化焼良	4/5	爪痕a① 底糸切り痕
12	〃	エ19・20下灰 オ19暗土	口15.4, 高5.3 台7.4, 台高0.7	〃	にぶい 褐色酸化焼良	1/3	
13	〃	オ19暗土	口15.3, 高5.4 台7.6, 台高0.7	〃	灰色焼良	2/3	爪痕a③ 内面摩耗顕著
14	〃	〃	口14.8, 高5.1 台7.3, 台高0.7	〃	青灰白焼良	3/4	底ナデ消し
15	〃	12号採掘坑	口13.6, 高5.0 台6.9, 台高0.5	〃	青灰焼堅緻	〃	爪痕a③ 底糸切り痕
16	〃	オ19最下	口14.3, 高4.6 台6.6, 台高0.4	〃	青灰白焼良	1/2	底糸切り痕
17	〃	オ19黒灰	口14.5, 高4.5 台6.4, 台高0.5	〃	暗灰焼堅緻	1/3	〃
18	須恵皿A	7号灰集中③	口13.1, 高2.1 底5.8	〃	灰色焼堅緻	完形	底面墨書「夏ヵ」 吹け少なく、摩耗なし
19	須恵焼台	オ19暗土	口10.5, 高3.7	〃	〃	5/6	底窯土付着
20	〃	〃	口10.6, 高3.7	〃	青灰白焼良好	3/5	
21	〃	〃	口10.6, 高3.7	〃	灰色焼堅緻	4/5	体2ヶ所穿孔
22	須恵焼台	オ19最下灰	口10.2, 高3.0	普通	灰色焼緊緻	完形	体2ヶ所穿孔 底窯土付着
23	須恵瓶D （双耳）	オ19暗土	頸6.8, 胴18.4 耳厚0.6～1.1	〃	〃	1/5	
24	外赤塊A	オ19Ⅱ層 暗土	口13.9, 高4.2 底6.8	〃	7.5YR8/4・ 8/5通	1/3	内黒とぶ
25	赤彩稜塊B	12号採掘坑	口15.8	〃	7.5YR8/3・ 8/5通	〃	
26	外赤皿B	〃	口13.4, 高2.6 台6.4, 台高0.5	〃	10YR8/4通	2/3	内黒とぶ
27	外赤塊A特大	〃	口31.1	〃	7.5YR7/2・ 8/3通	1/15	〃
28	土師塊A	Ⅱ層暗土	口12.4, 高3.95	〃	10YR8/4通	1/3	
29	土師皿A	エ19中層	口13.0, 高2.8 底6.4	〃	〃	1/2	
30	土師匣鉢	オ19Ⅱ層 暗土	口16.1, 高推10.1	〃	7.5YR8/5・ 7/5良	〃	
31	〃	〃	口推15.0	粗砂含	7.5YR8/3通	3/4	
32	土師釜	〃	口20.9, 頸19.4	普通	10YR8/2通	口縁片	
33	〃	〃	口19.4 頸17.8, 胴20.8	粗砂多	10YR8/3良	1/8	外Ha叩き、内Hf当て

溝50出土土器（第254図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵塊A	ミゾ50	口13.2, 高3.8 底6.4	砂多	灰白焼良	1/3	底糸切り痕
2	〃	H27窯上層	口13.6, 高4.0 底5.7	普通	灰白焼不良	2/3	〃
3	〃	〃	口12.6, 高3.5 底6.4	〃	青灰白焼良好	1/3	〃
4	須恵塊B大	〃	口17.4, 高5.2 台8.2, 台高0.7	〃	灰色焼良好	2/3	
5	須恵塊B	ミゾ50	口15.2, 高5.0 台7.0, 台高0.5	〃	灰色焼堅緻	3/4	底糸切り痕
6	須恵皿B	〃	口12.7, 高3.5 台6.2, 台高0.5	〃	灰白焼不良	略完	〃
7	須恵鉢B	〃	口25.3 頸24.0, 胴26.8	〃	灰色焼堅緻	1/6	
8	〃	〃	口21.5 頸20.3, 胴22.8	〃	〃	1/15	
9	〃	〃	口23.0 頸21.8, 胴26.0	砂多	暗灰色焼堅緻	1/5	
10	外赤内黒塊A	〃	口13.4, 高4.0 底6.6	普通	7.5YR8/3通	1/2	底糸切り痕
11	〃	〃	口13.6, 高3.8 底6.7	〃	10YR8/4通	2/3	内面2/3黒色とぶ 内底にラセン痕 底糸切り痕
12	〃	〃	口13.4, 高3.75 底7.0	〃	10YR7/3通	〃	内面内黒とぶ 内底ラセン痕 底糸切り痕
13	外赤内黒 不明黒塊B	〃	口14.8, 高4.7 台7.8, 台高0.4	〃	7.5YR8/3通	1/5	
14	外赤(内黒)塊B	ミゾ50＋イ19 ＋H27窯上層	口14.0, 高4.2 台5.8, 台高0.55	〃	〃	2/3	内面内黒とぶ
15	外赤(内黒)皿B	ミゾ50＋ H27窯上層	口12.8, 高3.05 台5.1, 台高0.6	〃	7.5YR8/4通	略完	〃
16	土師塊B大	ミゾ50	台8.2, 台高0.5	〃	5YR7/6通	1/10	
17	土師匣鉢	〃	体15.5	〃	内10YR8/1 外10YR6/1良	1/4	底ヘラ切り

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
18	土師小釜	ミゾ50	口11.3, 高12.55 頸10.1, 胴12.6 底5.7	普通	10YR8/3良	3/5	底糸切り痕 容量1.97ℓ
19	土師釜	〃	口18.4, 頸16.6	粗砂含	7.5YR8/3通	口頸片	
20	〃	〃	口19.5, 頸17.8	普通	〃	〃	

8号窯灰原出土土器（第254～256図）

番号	器種名	出土地点	法量(cm)	胎土	焼成と焼色	完存	備考
1	須恵坏A	ウ20下層	口13.5, 高3.3	普通	青灰焼良好	1/5	
2	須恵埦A	イ19黒灰	口13.0, 高4.15 底6.8	〃	暗灰褐焼良好	2/3	
3	須恵埦B	イ18 黒灰下層	口14.3, 高5.3 台7.0, 台高0.5	砂多	灰白焼不良	3/4	
4	〃	〃	口14.4, 高4.4 台7.4, 台高0.4	普通	青灰焼堅緻	1/2	底爪痕a③
5	〃	イ19黒灰	口14.4, 高4.9 台6.5, 台高0.5	〃	暗灰褐焼良	3/4	
6	〃	イ18 黒灰下層	口15.2, 高5.7 台6.4, 台高0.7	〃	灰褐焼不良	〃	
7	〃	イ18黒灰	口13.4	〃	青灰焼良好	3/5	
8	須恵皿B	〃	口13.8, 高2.9 台6.0, 台高0.6	〃	浅黄橙焼不良	2/3	
9	須恵焼台	ウ18	口11.4, 高3.75	〃	灰色焼堅緻	1/5	
10	〃	イ18黒灰	口11.1, 高2.4	〃	〃	3/4	
11	須恵瓶D	イ19上層	口13.8 頸7.4, 頸高7.6	砂多	〃	口頸片	
12	外赤埦B	イ18黒灰	台7.4, 台高0.7	普通	7.5YR8/5通	1/4	内黒とぶ
13	〃	イ18黒灰下層	台6.2, 台高0.5	〃	10YR8/4通	〃	〃
14	内黒埦B	イ19上層	台7.1, 台高0.65	〃	〃	〃	
15	赤彩埦B	イ18黒灰下層	台8.4, 台高0.7	砂多	7.5YR8/5通	高台片	
16	外赤皿B	イ19黒灰	口12.8	普通	10YR8/5通	1/3	内黒とぶ
17	土師埦A	イ20黒灰	口14.6, 高4.5 底7.0	〃	10YR7/4通	〃	
18	〃	イ18黒灰	口12.1, 高3.5 底6.2	〃	7.5YR7/5通	2/3	
19	土師小釜	〃	口11.7 頸10.9, 胴12.6	〃	10YR8/3通	胴上片	
20	〃	イ19黒灰	口13.2, 頸11.8	〃	10YR7/3通	口頸片	
21	〃	イ18黒灰下層	口15.0, 頸13.7	〃	10YR8/3通	胴上片	
22	〃	イ18黒灰	口13.7, 高14.1 頸12.0, 胴15.6 底7.6	〃	10YR7/4通	2/5	容量3.265ℓ
23	〃	〃	口13.8, 高14.3 頸12.7, 胴15.1 底7.2	〃	10YR8/4通	1/4	容量3.186ℓ
24	土師釜	イ18	口20.2, 頸19.2	粗砂含	〃	口頸片	
25	〃	イ19上層	口19.0, 頸17.2	〃	〃	〃	
26	土師鍋	イ18黒灰	口41.0, 頸38.8	粗砂多	7.5YR8/4通	〃	
27	〃	〃	口42.5, 頸40.2	粗砂含	7.5YR7/5通	〃	
28	〃	〃	口43.0, 頸40.2	〃	10YR8/4通	1/20	
29	〃	〃	口42.6, 頸40.0	〃	〃	口頸片	
30	〃	〃	口40.2, 頸37.4	普通	10YR7/4通	〃	外面黒斑あり
31	〃	イ18 黒灰下層	口40.6, 頸38.8	粗砂含	10YR8/4通	1/20	外面火色 外底He叩き
32	土師台付鉢	イ18黒灰	口40.0	粗砂含	10YR8/3通	1/20以下	外面火色
33	土師足付鉢	〃		普通	7.5YR7/4良	足部片	
34	〃	〃		〃	10YR8/3通	〃	
35	土師土錘	イ18下層	長6.6, 幅3.55 孔1.3	〃	10YR7/3通	4/5	
36	〃	イ18灰	長6.7, 幅3.9 孔1.25	〃	10YR8/4通	2/3	
37	〃	〃	長5.8, 幅3.4 孔1.5	砂多	10YR7/4通	5/6	重量50.0g
38	須恵土錘	ウ19上層	長4.7, 幅2.6 孔0.9	普通	灰色焼堅緻	〃	重量37.0g
39	土師支脚	イ18灰	脚径4.4, 脚端7.5 孔0.85	砂多	10YR8/4通	2/3	

第４節　砂鉄製錬・精錬鍛冶に伴う製鉄関連遺構・遺物

第１項　製鉄関連の遺構

Ｆ地区で検出された製鉄関連の遺構は、北西側の区域と南側区域に分けられる。

北西側の区域には炭窯灰原（１号炭窯灰原）、砂鉄製錬に伴う排滓場（１号製鉄排滓）、製炭土坑（２号炭窯）がある。当地には須恵器窯灰原である12号窯灰原が存在し、これらの製鉄関連遺構と一部重複しながら存在している。須恵器窯灰原はⅣ2古期のものであり、１号製鉄排滓の上に乗っている（第80・81図断面図参照）。明瞭な間層を間に挟んでおり、間層には須恵器窯壁塊や12号窯灰原の須恵器が混在する。12号窯灰原と間層を切って、土層が流れ込み、その延長線上東側に２号炭窯が掘り込まれている。２号炭窯埋土に繋がる土層であり、12号窯灰原後に２号炭窯が掘り込まれたことが予想できる。12号窯灰原等を切ったテラス状の部分は２号炭窯に伴う作業場的存在であったのだろう。また、２号炭窯の床構築された部分の直下には１号炭窯灰原が存在しており、２号炭窯→１号炭窯の前後関係が明白である。１号製鉄と１号炭窯の接点はないため、前後関係があるかもしれないが、ほぼ同時期と予想しており、製鉄に伴う炭窯と位置付けたい。

南側区域は、オ・カ－15Gr付近に大型の製炭土坑（３号炭窯）、エ－17Gr付近に小型製炭土坑（４号炭窯）、エ・オ－10～16Gr付近及びキ－18Gr付近に鉄滓の分布がある。鉄滓の分布は、須恵器、土師器焼成に伴う灰原中に混在する形であり、排滓土層を形成する訳ではない。以下に各製鉄遺構について、概要を述べる。

１．１号製鉄排滓

調査区の北西端へ向けて層が厚くなっており、その部分で最大45㎝を測る。既に削平された北西側に排滓場があったものと予想され、その縁辺がかかったものだろう。排滓土層中には総重量142.78kgの鉄滓が存在する。

２．１号炭窯灰原

調査区北側崖面に露出しており、灰層純度高いことから、窯本体に近い箇所と考える。木炭片が多く、太い材も残る。炭化材材質鑑定から、材質の硬いイヌシデ節、モクレン属、ナツツバキ属を確認している。

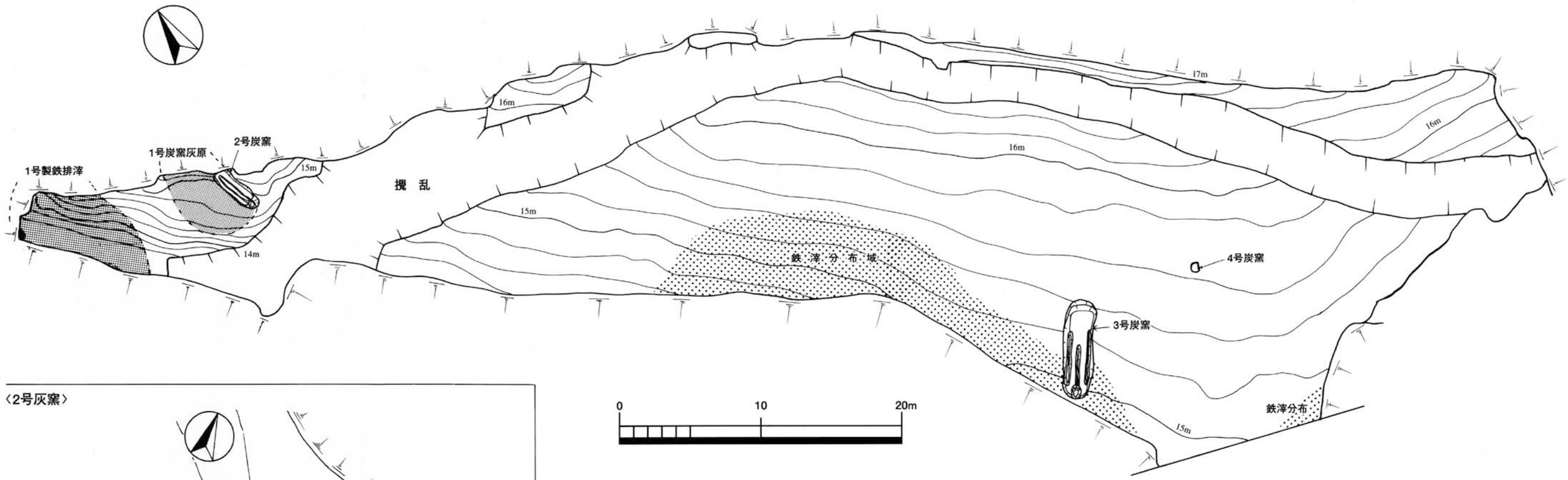
３．２号炭窯

斜面上方が一部削平されるが、ほぼ完存状態で、全長310㎝（前壁手前部を含め全長370㎝）、幅は130㎝を測る。主軸を北にもち、斜面に対し斜めから平行する角度で掘り込まれる長楕円形土坑で、山側に若干傾斜する。壁高は最大18㎝。土坑中程の側壁と粘土構築された前壁部分が被熱する。赤褐色に焼結しており、表面のみ吸炭する。床は平坦で、土坑中軸線状に沿い幅20㎝の浅い溝が掘り込まれる。溝内には炭が充填され、溝底は焼けていない。床の被熱は、溝に沿った中程部分、前壁から奥へ50㎝付近から奥壁手前80㎝付近までが酸化状態で焼ける。焼結硬化しており、中軸の溝壁にも一部被熱が及ぶ。床面に一部木炭が遺存し、長軸に沿って８㎝太の木炭が並べられる。それに直交して短く細い木炭が並べられ、規則的に配置している様子が伺われる。木炭材はスギ、ヤシャブシ亜属、イヌシデ節、コナラ節、モクレン属、タラノキがあり、イヌシデ節、コナラ節、モクレン属が多い。１号炭窯同様、硬い材質の木炭ができる。なお、前壁手前の浅い土坑部分は灰堆積し、被熱していない。

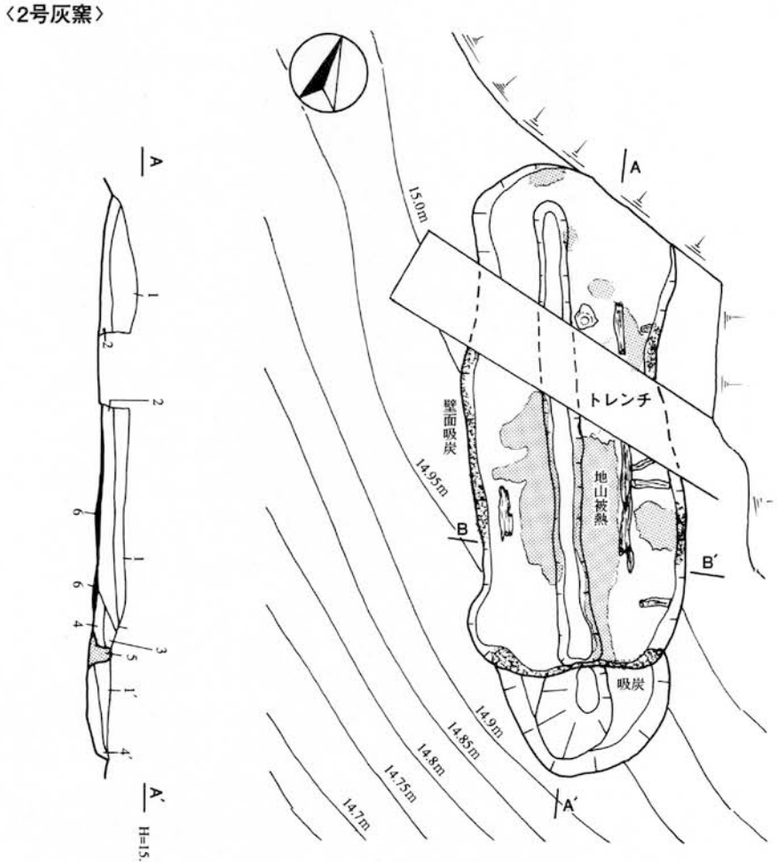
４．３号炭窯

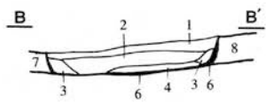
緩斜面上、斜面に対し直交して掘られる大型製炭土坑で、全長700㎝、幅195～225㎝を測る。奥壁側は丸く、前壁側は隅丸方形状となる。側壁はほぼ同じ幅で、山側への傾斜角度１度程度と、ほぼ水平に床面を作る。壁高は前壁で５㎝程度と低いが、奥壁では45㎝を測る。壁の傾斜は奥壁で50度と緩く、側壁で部分的に70度の角度をもつが、多くは45～50度の緩い傾斜である。床面には前壁際に径80㎝の浅いピット、そしてそれに連結して中軸線上と両側壁際に計３本の排水溝が掘られる。中軸溝は前壁から奥へ375㎝付近、両側壁際の溝は奥へ480㎝付近で切れる。３本とも10㎝以下の浅い溝で、幅は左側壁が30㎝前後と太いが、中軸と右側壁の溝は20～25㎝と細い。溝内には灰が充填され、部分的に炭化材が遺存する。溝の存在する区域の床は酸化被熱し、両側壁溝の途切れる付近から弱くなる。奥壁手前130㎝の範囲では床面や壁の被熱を確認できず、主に手前側の温度が高かったものだろう。側壁は前壁近くのみ両側壁とも被熱を確認するが、奥壁から手前500㎝付近まではほとんど焼けておらず、床面被熱箇所で僅かに薄い被熱を確認するのみである。いずれも酸化被熱で、表面が強く吸炭することはな

〈製鉄関連 遺構分布〉

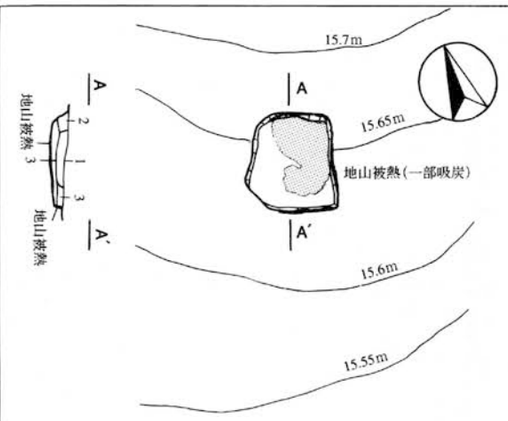


〈2号灰窯〉





1層　褐色土(10YR4/4)：炭化小塊多め含有
1'層　炭化小塊少なめ含有。
2層　黒褐色土(10YR3/1)：黒色灰混在。炭化塊多量含有。
3層　黒褐色土(10YR3/1)：炭化塊・黄褐色土塊・焼土塊多め含有
4層　黒色土(10YR1.7/1)：黒色灰混在の窯内灰層。炭化塊多量含有。
4'層　黒色土(N1.5/　)：黒色灰層。窯内灰層。
5層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：粘土貼付の２次壁。被熱して焼結硬化。
6層　褐色焼土(7.5YR4/6)：焼結硬化した貼床土。部分的に被熱弱く、赤褐色を呈したり、暗褐色を呈する。
7層　黒色土(2.5Y2/1)：炭化大塊極多量含有。１号炭窯灰層。
8層　黒褐色土(10YR3/2)：炭化塊・焼土塊少量含有。

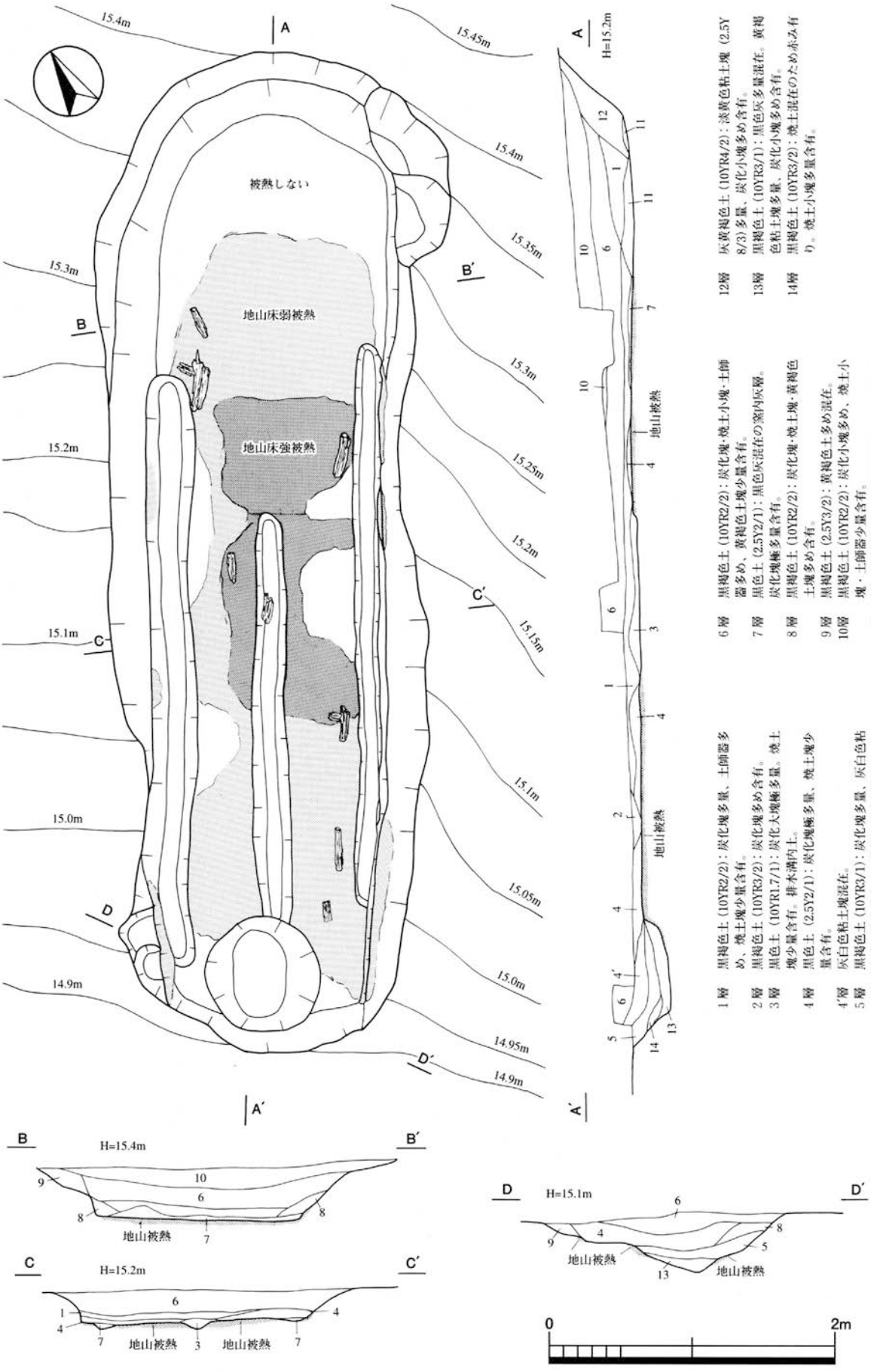


〈4号灰窯〉

1層　にぶい黄色土塊(2.5Y6/4)とにぶい黄褐色土(10YR4/5)混在土
2層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：にぶい黄色土塊(2.5Y6/4)少量含有。
3層　黒褐色土(2.5Y3/1)：黒色土灰混在する窯内灰層。炭化粒多量、にぶい黄色土少量含有。

0　2m

第268図　製鉄関連遺構分布図（S=1/300）及び2号炭窯・4号炭窯平面・断面図（S=1/40）



1層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化塊多量、土師器多め、焼土塊少量含有。
2層　黒褐色土（10YR3/2）：炭化塊多め含有。
3層　黒色土（10YR1.7/1）：炭化大塊極多量。焼土塊少量含有。排水溝内土。
4層　黒色土（2.5Y2/1）：炭化塊極多量、焼土塊少量含有。
4′層　灰白色粘土塊混在。
5層　黒褐色土（10YR3/1）：炭化塊多量、灰白色粘土塊・焼土塊多め、黄褐色土少量含有。
6層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化塊・焼土小塊・土師器多め、黄褐色土塊少量含有。
7層　黒色土（2.5Y2/1）：黒色灰混在の窯内灰層。炭化塊極多量含有。
8層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化塊・焼土塊・黄褐色土塊多め含有。
9層　黒褐色土（2.5Y3/2）：黄褐色土多め混在。
10層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化小塊多め、焼土小塊・土師器少量含有。
11層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化塊極多量、淡黄色粘土塊（2.5Y6/3）多め含有。
12層　灰黄褐色土（10YR4/2）：淡黄色粘土塊（2.5Y 8/3）多量、炭化小塊多め含有。
13層　黒褐色土（10YR3/1）：黒色灰多量混在。黄褐色粘土塊多量、炭化小塊多め含有。
14層　黒褐色土（10YR3/2）：焼土混在のため赤み有り。焼土小塊多量含有。

第269図　3号炭窯平面・断面図（S=1/40）

いが、床面には薄く黒色灰が乗る。排水溝壁も上端のみ被熱が確認されるだけだが、前壁際のピットでは壁がしっかりと被熱する。床面上には3本の排水溝に沿って縦に炭化材が遺存しており、木材の置き方を示す可能性をもつ。木質は、スギ、イヌシデ節、クヌギ節、コナラ節、モクレン属が確認され、スギ以外は確認点数が多い。2号炭窯ではクヌギ節の確認はないが、共通する材が多く、製炭土坑形態の類似性から考えても、2号炭窯と同時期のものと予想する。3号炭窯の床面直上には3・4・7層の炭化材片を多量に含む黒色灰層が乗るが、その上には周辺の土師器焼成坑からの流れ込みと思われる土師器を含んだ黒褐色土が厚く堆積する。

5．4号炭窯

エ・オ－17Gr付近の緩やかな所に立地する製炭土坑で、奥壁を東南方向に向けて掘られる。奥壁と両側壁の立ち上がりはほぼ直立し、前壁のみ若干傾斜をもつ。縦軸長52㎝、横軸長60㎝の方形で、壁は5～10㎝を測る。床面の奥壁側2/3が酸化被熱し、比較的強く焼けている。壁面も奥壁から両側壁にかけて酸化被熱しており、床面直上に炭化塊を混在する黒褐色灰層がのる。壁や床が炭化することはないが、土師器などの出土はなく、床直灰層や土坑形態から考えて、製炭土坑とするのが妥当だろう。

6．斜面下方堆積の鉄滓

土師器焼成坑の灰原が堆積する区域に須恵器や土師器に混在して、製鉄関連遺物が出土している。比較的広範囲からの出土であり、集中箇所は確認されない。出土量は1号製鉄排滓よりも少なく、滓の種類も多岐に及ぶ。

第2項　製鉄関連遺構より出土した遺物

1．土器及び土製品（第270図）

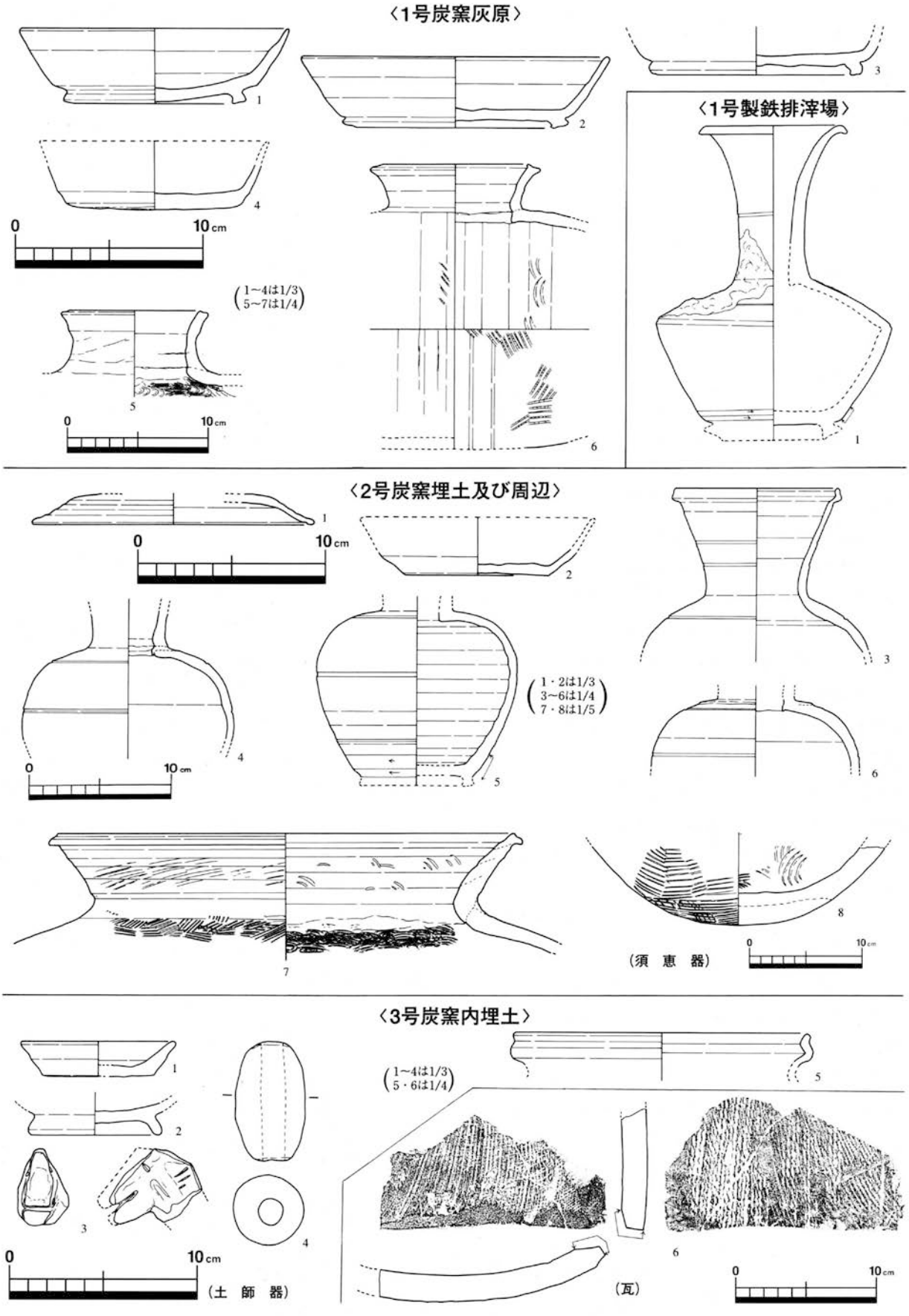
《1号製鉄排滓場》　製鉄排滓層の直上に12号窯灰原が乗っているため、12号窯の須恵器が製鉄排滓層に混在しており、当遺構に伴うと断定できる資料は皆無に近い。図示した須恵器瓶Aは地山に掘り込まれた小ピット内から出土したもので、その可能性が高いものと言えるが、鉄滓の供伴はなく、1号製鉄の時期を特定する資料とは言い難い。瓶Aは高台のみ欠損する完形品で、欠損後の使用が想定される。Ⅱ3期かⅢ期と判断する。

《1号炭窯灰原》　灰層に混在して、須恵器坏B身と坏A、横瓶が出土している。Ⅱ3期末～Ⅲ期前半の中で捉えられるもので、時期的に1号製鉄排滓場の瓶Aに近い。一方、1号炭窯灰原の東側には二ッ梨一貫山1・2号窯跡が存在している。1号炭窯出土の須恵器は、この須恵器窯出土坏類と類似し、混在した可能性をもつ。本来、製鉄関連遺構から土器等の出土は少ないものであり、これだけの土器が出土するのは他遺構からの紛れ込みの可能性が高い。1号製鉄排滓と1号炭窯が同時期であるという前提だが、製鉄排滓層の直上に12号窯灰原が乗ること、そして須恵器窯と同時期に製鉄炉経営がなされる状況を占地などの問題から想定しにくいことを考え合わせれば、1号製鉄炉及びそれに伴う木炭窯は、二ッ梨一貫山1・2号窯と12号窯の間の時期に操業した可能性が高い。つまり、Ⅲ期後半～Ⅳ1期であり、隣接地須恵器窯操業時期も除外すれば、Ⅲ期後半頃とするのが妥当。

《2号炭窯内及び周辺》　炭窯内から出土したのは2の須恵器坏A（下層）と4の須恵器瓶B（埋土）のみで、他は2号炭窯周辺から出土である。周辺出土のものも2号炭窯とほぼ同時期と判断されるものであり、周辺の須恵器窯灰原とは別時期のものである。時期はⅥ2期とするのが妥当で、周辺に当期の遺物が散見されるため、Ⅵ2期後という時期判断しかできないが、炭窯の操業時期をおおむね須恵器の時期に近いものと判断する。

ここで、特に7の中甕口頸部と8の中甕底部の成形痕跡について述べておく。7は胴部端を切らずに、そのまま口頸部へ粘土紐積み上げ成形する短頸の口頸部をもつものであるが、胴部から口頸部にかけて粘土紐痕が明瞭に残る。積み上げ時の叩き成形痕が内外面に残り、叩き痕はナデによってほぼ消される。一般的に粘土紐痕は内面に残りがちだが、叩き成形痕は外面でよく残り、成形叩きの叩き具食い込み、つまりは叩く力の差が内外面で異なっていたことを示す。外面叩きを強くし、内面当て具は軽く当てるだけだったのだろう。口頸部叩き成形痕は、内外両面で確認される事例は少なく、主に外面からの叩き痕が残る。叩き後のナデによって消されるため、残るものは少ないが、内面当て具痕の残る例が少ないのは内面当て具食い込みが弱いことも関連するのだろう。

次に、8の甕の底部破片だが、厚手底部で、外面は平行線文（He）、内面は同心円文（Da）叩きが残る。底部中央付近の断面に粘土接合痕が残っており、底部外面に粘土円盤を貼り足したことが伺える。径16㎝のもので、



第270図　1号炭窯・2号炭窯・3号炭窯出土土器（1/3、1/4、1/5）

1.7㎝の厚さをもつ。粘土円盤の剥離した面にも上側に平行線文叩きがあり、下側の粘土円盤には反転した平行線文の圧痕が残る。柔らかい状態の粘土円盤を叩き成形が終わった硬めの底部に貼り付けたために圧痕として残ったものと考えられ、下の粘土円盤は継ぎ足し粘土塊であったと考える。底部叩き出し中ないしは完了後、底部中心が薄くなったため、粘土補強して底部強度を増したものと予想する。

《３号炭窯下層》　３号炭窯内には隣接する土師器焼成坑から流れ込んだ８世紀後半～９世紀前葉の土師器が混在するが、下層灰からは図示した土師器や瓦が出土している。土師器はⅥ2期からⅥ3期頃、瓦も戸津窯周辺などでの生産時期を考えれば、Ⅵ2期からⅥ3期とするのが妥当だろう。なお、３の土馬は土師質で、頭部破片である。たてがみ部分を表現するなど、比較的大型のもので、Ⅵ2期に下るものとは考え難い。

２．製鉄関連遺物（第271～273図）

製鉄関連遺物は鉄滓がほとんどで、製品は僅少である。鉄滓は砂鉄製錬に伴うもの、精錬鍛冶に伴うもの、鍛練鍛冶に伴うものとがあるが、砂鉄製錬に伴うものが大半で、鍛冶に伴う遺物は少ない。鍛冶滓は精錬鍛冶滓と鍛練鍛冶滓の区別を明確に提示できておらず、今回は鍛冶滓として一括する。以下に各遺構出土の製鉄関連遺物を説明するが、概要のみ述べ、個別の説明は、観察表で示す。なお、今回は経費不足から、金属学的分析調査を依頼することはできなかったが、穴澤義功氏と大澤正己氏に製鉄関連遺物を実見いただき、鉄滓の分類及び実測等において多くのご教示を受けた。実測図及び観察表は、極力その指示に従った。

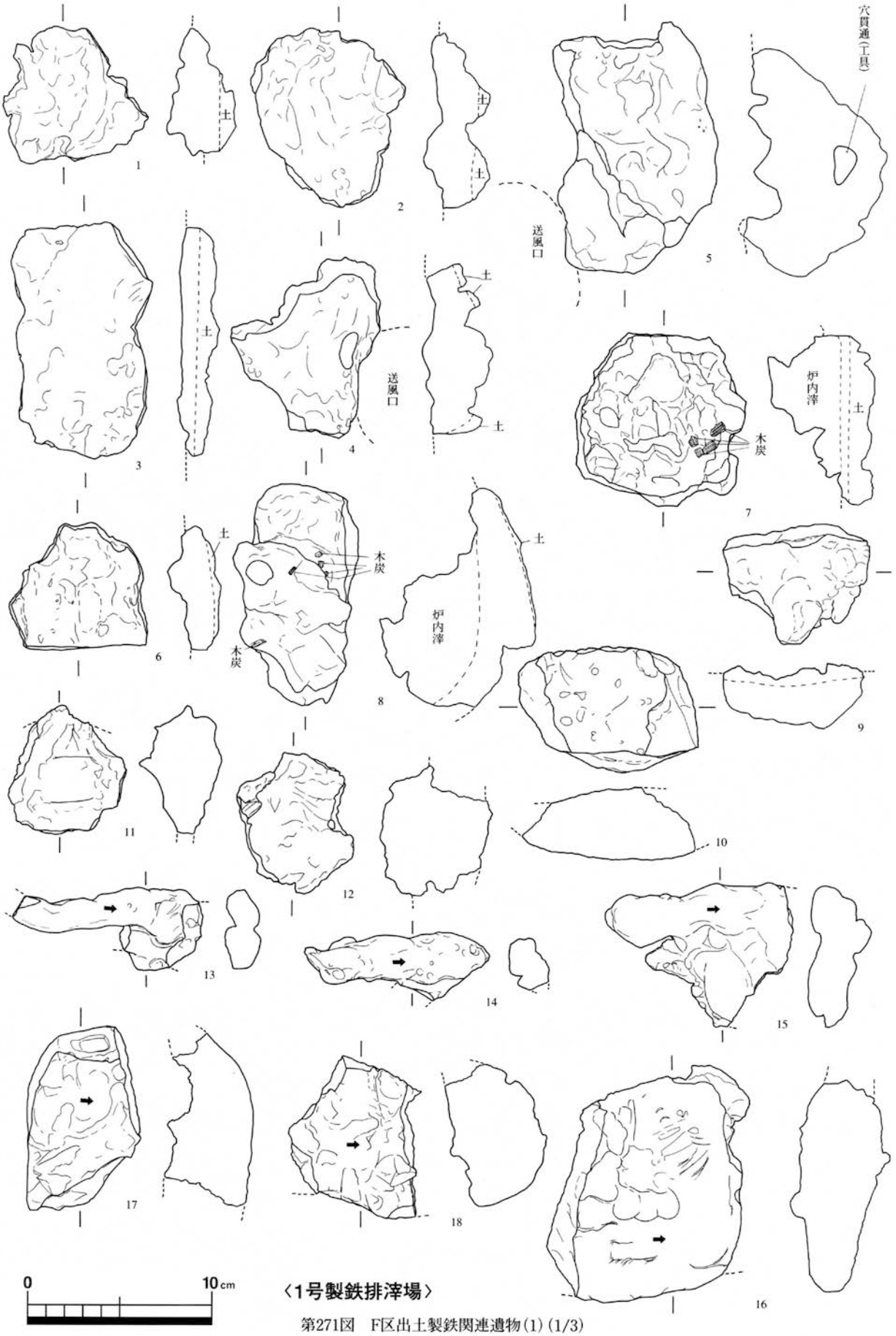
《１号製鉄排滓場》　総重量142.78kgに及ぶ鉄滓が出土している。いずれも、砂鉄製錬に伴う鉄滓で、鉄塊系遺物が0.47kg、炉壁が26.64kg、炉底滓が7.21kg、炉内滓が39.28kg、炉外流出滓が69.18kgである。炉外流出滓が全体の半数近くを占め、炉壁片も目立つ。調査区域が排滓場の一部にあたる断片的資料であるため、全体像は計り知れないが、炉壁の送風口や流出溝滓などから製錬炉形態は箱型炉の形態をもつと予想される。供伴する土器資料及び周辺の状況を鑑み、当製錬炉はⅢ期後半頃と想定されるが、炉形態はこの時期に矛盾しない。

《３号炭窯》　窯体内下層から図示した竪型炉の炉壁塊が出土している。他に竪型炉の炉内滓と思われるものが出土している。竪型炉の炉壁塊は形状や色調などから斜面下方堆積の鉄滓の竪型炉炉壁片と同一のものと判断でき、当製炭土坑は竪型炉に伴う木炭窯である可能性が高い。

《斜面下方堆積》　精錬・鍛練等の鍛冶に伴うものと砂鉄製錬に伴うものとがある。鍛冶滓は4.37kg出土している。所謂椀形滓が大半で、含鉄鉄滓（鉄塊系遺物）も1.73kg出土する。ただし、含鉄鉄滓に関しては、後述する砂鉄製錬に伴う遺物であるものも含んでおり、識別はできていない。また、鍛冶炉の羽口も５点ほど出土しており、関連する可能性をもつ鉄製品も僅少だが出土する。砂鉄製錬に伴う遺物は、竪型炉の炉壁1.86kg、同炉内滓が12.82kg、そして、１号製鉄排滓からの流れ込みと思われる箱型炉の炉壁0.33kg、同炉内滓3.48kgがある。多くは箱型炉と思われるが、砂鉄製錬に伴う炉外流出滓が11.56kg出土している。純粋な排滓場資料ではないが、同一斜面上ないしは同一丘陵上に砂鉄製錬に伴う竪型炉の存在を予測させるに十分な資料であると判断する。時期は竪型炉壁塊を出土する３号炭窯を同時期存在と考え、炭窯出土遺物からのⅥ2期～Ⅵ3期を当てるのが穏当と考える。炉形態についても、矛盾はないが、Ⅵ3期以降である可能性も捨て切れない。鍛冶炉に関しては、炉自体の存在を確認していないが、同一斜面に存在していた可能性は高いだろう。時期は箱型炉に併存する時期、竪型炉に併存する時期、両製錬炉とは別に行われた鍛冶に伴うその他の時期と３通り考えられる。

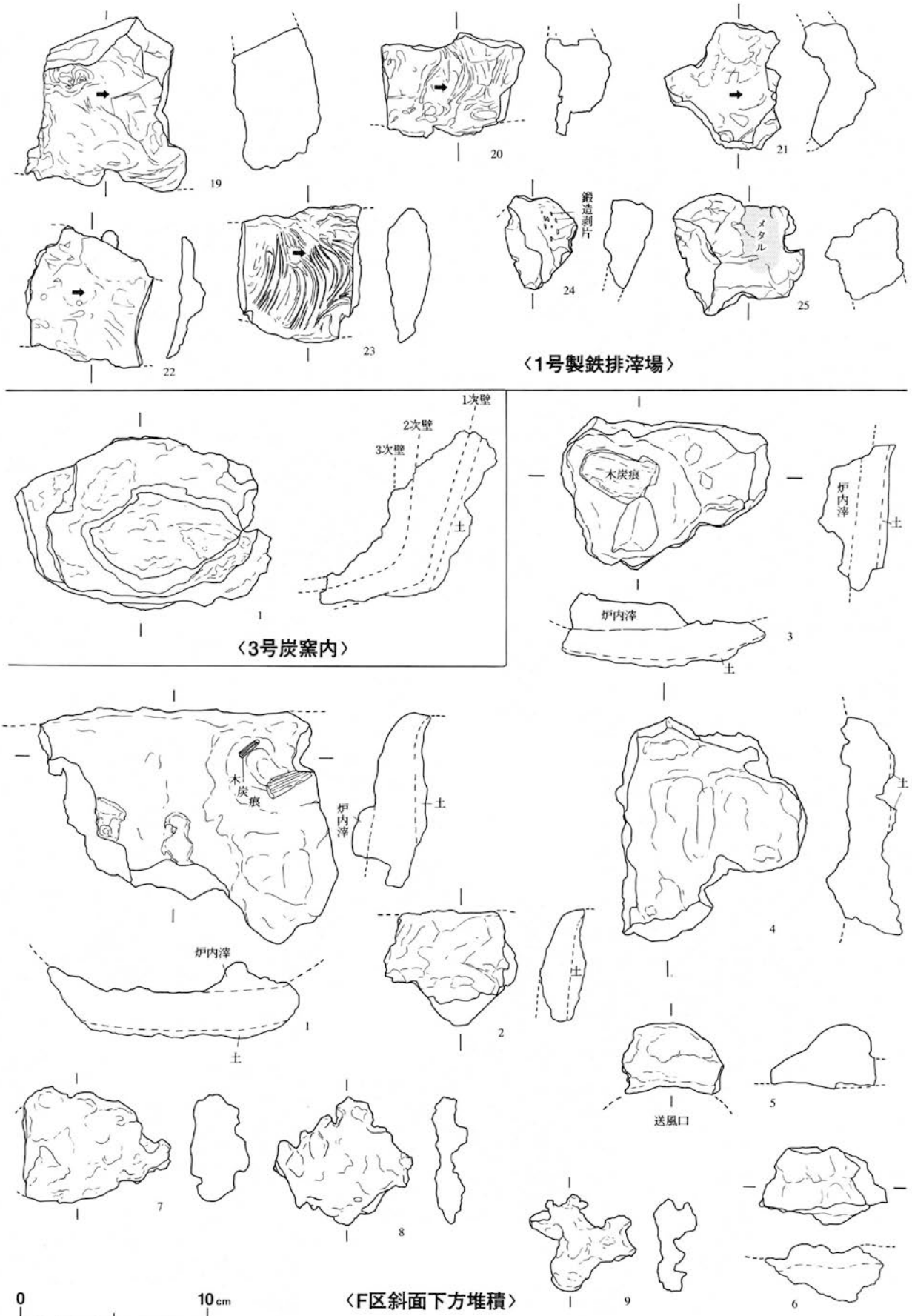
《１号製鉄排滓場出土製鉄関連遺物観察表》

番号	種　　類	長径×短径×厚さ	重　量	磁着度	メタル	色　　調	特　　記　　事　　項
1	炉壁砂鉄焼結帯	7.7× 7.2× 3.4	140ｇ	弱	無	内面5PB4/1	胎土砂土。内面砂鉄焼結。
2	炉壁（上位）	9.7× 8.3× 3.0	220ｇ	無	無	内面N3/0	胎土砂土。内面溶解黒色ガラス化。
3	炉壁（上～中位）	12.7× 7.3× 2.0	200ｇ	無	無	内面5P1.7/1～5PB1.7/1	胎土スサ入り砂土。内面溶解黒色ガラス化。
4	炉壁（中～下位）	9.7× 7.9× 3.7	180ｇ	無	無	内面5RP1.7/1～10P3/2	胎土砂土。内面溶解赤黒くガラス化。右下方に通風孔開く。
5	炉壁（中～下位）	13.5× 8.6× 7.2	525ｇ	無	無	内面5R1.7/1～10R2/3	胎土砂土。内面溶解赤黒ガラス化。左下方通風孔。横に貫通穴工具痕
6	炉壁（下位）	7.3× 6.7× 2.5	110ｇ	無	無	内面5B3/1	胎土砂土。内面溶解濁黒色化。
7	炉壁（下位）	9.2× 9.1× 5.6	340ｇ	無	無	内面5PB2/1～10R3/2	胎土スサ入り砂土。内面上方炉内滓溶着、下方内に曲がる。木炭痕。
8	炉壁（下位）	12.0× 5.9× 8.3	643ｇ	無	無	内面5B2/1、破面10BG4/1	胎土砂土。炉底付近で一部結晶化。木炭痕。
9	炉底塊	7.5× 6.5× 3.2	158ｇ	無	無	表面5PB3/1	下面に粗砂などの炉底土付着。



〈1号製鉄排滓場〉

第271図　F区出土製鉄関連遺物(1) (1/3)



第272図　F区出土製鉄関連遺物(2)(1/3)

第273図　F区出土製鉄関連遺物(3)(1/3)

番号	種　　類	長径×短径×厚さ	重 量	磁着度	メタル	色　　調	特　　記　　事　　項
10	炉底塊	9.4× 6.7× 3.7	420 g	無	無	表面5PB3/1	下面に粗砂などの炉底土付着。
11	炉内滓	7.0× 6.0× 4.4	225 g	無	無	表面5PB2/1	表面に工具痕残る。
12	炉内滓	7.6× 6.2× 5.9	225 g	無	無	表面5P1.7/1～7.5R3/2	
13	流出孔滓	10.3× 4.4× 2.0	90 g	無	無	表面5PB3/1	横断面円形。炉壁孔から流出。
14	流出孔滓	10.1× 3.6× 2.2	95 g	無	無	表面5PB3/1	横断面楕円形。炉壁孔から流出。
15	流出孔滓	10.0× 7.8× 2.8	250 g	無	無	表面5PB3/1	横断面楕円形。炉壁孔から流出。
16	流出溝滓	11.9×10.4× 5.0	730 g	無	無	表面5PB2/1	幅広く、下面は平坦で、土と木炭噛む。
17	流出溝滓	9.4× 6.0× 4.7	360 g	無	無	表面N3/0	横断面はやや平坦。下面に土噛む。
18	流出溝滓	7.8× 6.7× 4.7	343 g	無	無	表面5PB3/1	横断面半円形。下面に土噛む。
19	流出溝滓	8.7× 8.5× 4.5	424 g	無	無	表面5PB2/1	横断面やや偏平。
20	流出溝滓	7.4× 5.4× 3.1	182 g	無	無	表面5P2/1～5R3/1	横断面半円形。
21	流出溝滓	6.6× 6.0× 2.7	102 g	無	無	表面5B2/1	横断面Ｖ字形。下面に土噛む。
22	流出溝滓	6.7× 6.5× 1.4	58 g	無	無	表面5PB3/1	薄く、横断面平坦。下面に土噛む。
23	流出溝滓	7.3× 6.4× 2.3	214 g	無	無	表面5PB3/1	横断面やや平坦。
24	再結合滓	4.8× 3.9× 2.2	45 g	弱	無	表面5PB2/1	小礫や鍛造薄片が結合する。
25	含鉄鉄滓（鉄塊系）	6.7× 5.0× 3.9	165 g	強	S	表面5PB3/1～10R4/1	炉内滓中に含有。

《３号炭窯内出土製鉄関連遺物観察表》

番号	種　　類	長径×短径×厚さ	重 量	磁着度	メタル	色　　調	特　　記　　事　　項
1	炉壁（竪炉、炉底付近）	13.6× 9.7× 4.5	698 g	無	無	内面5PB2/1	胎土砂粒多。内面溶解し黒色化。１次壁の内側に２枚の補修壁。

《Ｆ地区斜面下方堆積出土製鉄関連遺物観察表》

番号	種　　類	長径×短径×厚さ	重 量	磁着度	メタル	色　　調	特　　記　　事　　項
1	製錬炉壁（竪炉頂部）	14.6×12.5× 4.1	919 g	弱	無	内面5B3/1～2.5YR3/1	胎土スサ入り砂土。内面木炭痕、炉内滓溶着。
2	製錬炉壁（竪炉頂部）	7.0× 6.1× 2.2	86 g	弱	無	内面5B4/1～2.5YR4/1	胎土粘土。内面溶解黒色化。
3	製錬炉壁（竪炉上～中）	11.2× 8.0× 3.5	332 g	強	無	内面5B3/1～2.5YR4/3	胎土砂土。内面に炉内滓溶着。出土地ウ８Gr。
4	製錬炉壁（竪炉中位）	11.9× 9.9× 3.4	458 g	弱	無	内面5B3/1～5YR4/1	胎土砂土。内面溶解ガラス化し、炉内滓付着。
5	製錬炉壁（竪炉中位）	5.3× 3.5× 5.6	98 g	無	無	内面5B3/1～5YR4/2	羽口の上に垂れて被さった炉内滓部分。
6	製錬炉壁（竪炉中位）	6.8× 4.2× 3.1	60 g	無	無	内面5PB3/1～10R3/1	胎土粘土。内面溶解しガラス化。羽口付近のために酸化。
7	製錬炉内滓（竪炉）	7.8× 6.2× 3.1	153 g	無	無	表面10R3/3～5B3/1	
8	製錬炉内滓（竪炉）	7.3× 6.9× 1.7	88 g	弱	無	表面10R3/3～5P2/1	木炭痕あり。
9	製錬炉内滓（竪炉）	5.4× 4.3× 2.3	40 g	無	無	表面7.5R3/2～5PB3/1	
10	製錬炉内滓（竪炉）	7.7× 6.2× 2.4	129 g	弱	無	表面10R3/3～5PB3/1	出土地点ウ８Gr。
11	製錬炉内滓（竪炉）	6.3× 6.2× 2.3	68 g	弱	無	表面10R4/3～5B2/1	
12	製錬炉内滓（竪炉）	6.5× 4.0× 1.7	38 g	無	無	表面10R4/3～5PB3/1	
13	製錬炉外流出滓（竪炉）	3.5× 3.2× 2.2	21 g	無	無	表面5PB3/1	
14	製錬炉底滓（箱炉）	8.4× 5.4× 8.5	587 g	無	無	表面7.5R3/3～5PB2/1	表面に木炭痕、下面に炉床土付着。
15	製錬炉外流出滓（箱炉）	9.0× 6.9× 4.2	370 g	無	無	表面5B1.7/1～7.5R3/2	流出溝から排出された大型の滓。
16	製錬炉外流出滓（箱炉）	12.1× 9.5× 4.6	599 g	無	無	破面5PB4/1	流出溝から排出された大型の滓。出土地点１号土器溜まり。
17	精錬鍛冶滓	8.6× 7.4× 3.7	200 g	無	無	表面2.5YR4/2～5PB3/1	木炭・鍛造剥片付着。
18	精錬鍛冶滓	6.8× 5.9× 2.9	132 g	強	無	表面5B3/1～10R4/2	木炭・鍛造剥片付着。
19	精錬鍛冶椀型滓	9.0× 8.4× 4.5	483 g	弱	無	表面5B4/1	出土地点イ14Gr。
20	精錬鍛冶椀型滓	7.7× 4.8× 2.9	169 g	弱	無	表面5PB3/1～5YR4/4	出土地点イ14Gr。
21	精錬鍛冶椀型滓	6.8× 4.0× 2.4	92 g	強	無	表面5PB3/1～5YR4/4	
22	精錬鍛冶椀型滓	6.7× 4.3× 2.3	136 g	弱	無	表面5B3/1	
23	含鉄鉄滓（鉄塊系）	12.7× 9.5× 5.8	710 g	強	S	表面5B3/1～7.5YR4/2	
24	含鉄鉄滓（鉄塊系）	10.7× 6.2× 7.7	645 g	強	M	表面5PB3/1～10R4/1	出土地点ウ８Gr。
25	含鉄鉄滓（鉄塊系）	4.4× 2.6× 2.7	53 g	強	M	表面5PB3/1	
26	含鉄鉄滓（鉄塊系）	3.4× 3.3× 2.4	30 g	強	M	表面5P1/3～5YR4/2	
27	含鉄鉄滓（鉄塊系）	4.7× 3.3× 1.8	36 g	強	M	表面5P4/1～5P2/1	
28	含鉄鉄滓（鉄塊系）	4.8× 4.3× 2.6	76 g	強	M	表面5PB3/1～5YR4/1	

番号	種　　類	寸　　法	残存部	色　　調	特　　記　　事　　項
29	精錬鍛冶羽口	孔端内径2.8、厚1.3	先端のみ。	溶解部5B2/1～5B4/1	胎土大粒砂含有粘土。先端溶解し、黒色ガラス化。出土地点エ９Gr灰層。
30	精錬鍛冶羽口	孔端内径2.5、厚1.0	先端のみ。	溶解部5B2/1～5R3/1	破片全体が溶解し、破面も黒色ガラス化する。
31	精錬鍛冶羽口	孔端内径2.1、厚1.1	先端のみ。	溶解部5P1.7/1	胎土砂粒含有粘土。先端溶解し、黒色ガラス化。出土地点エ14Gr灰層。
32	精錬鍛冶羽口	孔端内径2.0、厚1.1	先端のみ。	溶解部5B3/1	胎土大粒砂粒含有粘土。先端溶解し、黒色ガラス化。出土地点イ21Gr。
33	砥石	5.4×5.2角、残長7.5	1/2程度。	2.5Y8/3。	材質凝灰岩。端部剥落、摩耗擦痕有り。出土地点イ８Gr。
34	砥石	3.0×2.4角、残長7.1	1/2程度。	2.5Y6/2。	材質砂岩。端部剥落、摩耗擦痕有り。出土地点エ８Gr。

F地区全体遠景写真（西方から）

F地区全景写真（b区は未着手状態）

写真14　F地区全景航空写真

F区西端、12号窯灰及び１号製鉄灰掘り下げ前

12号窯灰・１号製鉄灰土層断面（A－A′）

12号窯灰・１号製鉄灰土層断面（D－D′）

F区西端、12号窯灰及び１号製鉄灰調査後（右下：2号炭窯）

12号窯灰・１号製鉄灰・土層断面（B－B′）

F区の土師器焼成坑の位置と下方灰原の分布（左：西側半分、右：東側半分）

F区下方灰原の傾斜地形

F区下方灰原の土層断面（上：タテ③ライン、下：ヨコ③ライン）

写真15　F地区12号窯灰と下方灰原

土師器焼成坑の位置と下方灰原の分布
（左は2号（上）と6号（下）、右は3～5号・23号）

2号土師器焼成坑
（手前は下部土坑まで堀削状態）

2号土師器焼成坑下部土坑

2号土師器焼成坑確認面

2号土師器焼成坑埋土層断面

6号土師器焼成坑終床完掘

6号土師器焼成坑確認面

6号土師器焼成坑中層一括廃棄

6号土師器焼成坑埋土縦土層断面

写真16　F地区a区土師器焼成坑1

6号土師器焼成坑床下暗渠排水溝

6号土師器焼成坑奥壁床下の土器伏せ暗渠

6号土師器焼成坑奥床面立ち割り土層断面

土師器焼成坑密集区Ⅰ（3・4・5・22・23・8・7号）

土師器焼成坑密集区Ⅰの完掘状態

3号土師器焼成坑確認面

3号土師器焼成坑2次床（一部1次床露出）

3号土師器焼成坑奥壁
（壁は地山で強く被熱）

3号土師器焼成坑埋土縦土層断面
（1次床面検出時、断面に2次床面あり）

写真17　F地区a区土師器焼成坑2

4号土師器焼成坑終床完掘

5号土師器焼成坑終床完掘

4号土師器焼成坑埋土縦土層断面

5号土師器焼成坑埋土縦土層断面

23号土師器焼成坑終床完掘
（一部床下土坑まで掘り下げ）

23号土師器焼成坑埋土横土層断面

23号土師器焼成坑床下土層断面

5号・23号土師器焼成坑床下土坑完掘後全景
（左奥が5号土師器焼成坑）

22号土師器焼成坑
（土師器一括廃棄はかき出し土坑のもの）

写真18　F地区a区土師器焼成坑3

7号土師器焼成坑終床完掘

7号土師器焼成坑床下暗渠施設完掘

7号土師器焼成坑埋土縦土層断面

7号土師器焼成坑床下暗渠施設土層断面

8号土師器焼成坑終床完掘

8号土師器焼成坑埋土土層断面

8号土師器焼成坑床下土坑土層断面

土師器焼成坑密集区Ⅱ
（上から確認面、掘り下げ中、完掘全景。9～13、17～21、25号）

写真19　F地区a区土師器焼成坑4

9号土師器焼成坑（奥は18号土師器焼成坑）

9号土師器焼成坑確認面

18号土師器焼成坑（右側壁が9号焼成坑に切られる）

9号・18号土師器焼成坑埋土縦土層断面
（黒色灰は9号焼成坑埋土、その直下焼土が床土）

10・11・12号土師器焼成坑（右奥が11号、奥左が10号、手前右が12号）

写真20　F地区a区土師器焼成坑5

11号土師器焼成坑終床完掘

11号土師器焼成坑床下暗渠施設完掘

11号土師器焼成坑床下暗渠施設の坏蓋と土層断面

12号土師器焼成坑終床完掘

10・11号土師器焼成坑確認面

10号土師器焼成坑埋土縦土層断面

11号土師器焼成坑埋土縦土層断面

10号土師器焼成坑床下土坑土層断面

11号土師器焼成坑床下施設、土坑土層断面

12号土師器焼成坑確認面

写真21　F地区a区土師器焼成坑6

12号土師器焼成坑埋土縦土層断面

12号土師器焼成坑埋土横土層断面

12号土師器焼成坑被熱床面タチワリ断面

19号土師器焼成坑埋土縦土層断面

19号土師器焼成坑床下完掘

19号土師器焼成坑貼床土タチワリ断面

19号土師器焼成坑終床完掘
（中央の深い土坑は、後の粘土採掘穴）

19号土師器焼成坑確認面

25号・20号・17号土師器焼成坑
（奥左が20号、奥右が17号、手前が25号、右中央が３号炭窯）

21号土師器焼成坑（25号焼成坑埋土上に構築）

写真22　F地区ａ区土師器焼成坑７

25号土師器焼成坑終床完掘

25号土師器焼成坑埋土土層断面（上層の黒は21号）

25号土師器焼成坑終床土器出土（奥から）

25号土師器焼成坑奥壁（工具痕）

25号土師器焼成坑終床土器出土全景

工具痕アップ

前壁の状況（被熱しない）

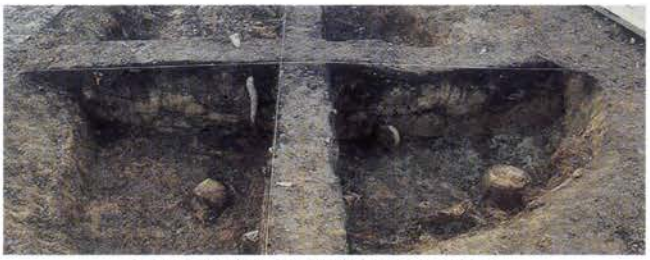
側壁被熱層タチワリ

終床下～１次床埋土土層断面
（１次床直にうすく灰層が存在）

25号土師器焼成坑１次床完掘▶

写真23　F地区ａ区土師器焼成坑８

17号土師器焼成坑終床完掘



17号土師器焼成坑終床埋土横土層断面

17号土師器焼成坑１次床完掘

17号土師器焼成坑１次床奥壁

17号土師器焼成坑１次床前壁付近

17号土師器焼成坑終床～１次床埋土

17号土師器焼成坑１次床被熱層タチワリ

13号土師器焼成坑（20号焼成坑の後に構築）

13号土師器焼成坑（壁面は焼土化）

写真24　F地区ａ区土師器焼成坑９

20号土師器焼成坑終床完掘
（中央左の土坑は13号土師器焼成坑）

13号土師器焼成坑埋土縦土層断面
（左下の黒色灰は20号焼成坑灰）

13号土師器焼成坑確認面

14号土師器焼成坑被熱壁面

◀14・15号土師器焼成坑
（奥が15号、手前が14号）

14号土師器焼成坑奥壁

15号土師器焼成坑崖面土層

14号土師器焼成坑埋土横土層断面

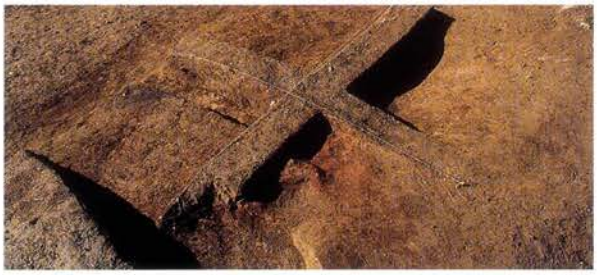
16号土師器焼成坑▶

写真25　F地区a区土師器焼成坑10

16号土師器焼成坑確認面

16号土師器焼成坑埋土土層断面

16号土師器焼成坑終床土師器



1号土師器焼成坑（被熱面）

24号土師器焼成坑（カクラン）

並走する2本の溝（14号溝：左、15号溝：右）

1号土器溜まりテラス下層土器群

35号・36号溝土器出土状況

1号土器溜まり上層土器

1号土器溜まり下層土器

写真26　F地区a区土師器焼成坑11及び土器溜まり、溝

2号炭窯（製炭土坑）完掘（手前は斜面下方）

2号炭窯（製炭土坑）埋土縦土層断面

4号炭窯（製炭土坑）完掘

4号炭窯埋土土層断面

3号炭窯（大型製炭土坑）完掘

3号炭窯埋土横土層断面
（床面酸化被熱、埋土最下層には炭層）

写真27　F地区a区炭窯（製炭土坑）

F地区ｂ区域全景航空写真

27号土師器焼成坑終床埋土縦土層断面

27号土師器焼成坑床下排水溝（奥から）

28号土師器焼成坑終床完掘

27号土師器焼成坑終床完掘

▲27号土師器焼成坑確認面

◀27号土師器焼成坑床下排水溝埋土土層断面

28号土師器焼成坑終床奥壁の内傾

28号土師器焼成坑終床埋土横土層断面

写真28　F地区ｂ区土師器焼成坑

7号灰原除去後の下底土器集中、その下に粘土採掘坑存在

7号灰原の下に存在する粘土採掘坑群（1～13号採掘坑）

7号灰原横土層断面エ21－22Gr（黄白色の間層）

7号灰原横土層断面オ19－20Gr（左は採掘坑）

7号灰原縦土層断面エ－オ21Gr（黄褐土下に黄白粘土層）

7号灰原縦土層断面ウ－エ22Gr（下層に黄白粘土層）

写真29　F地区b区7号灰原及び粘土採掘坑群

1 号粘土採掘坑土器出土

4 号粘土採掘坑中層土器出土

2 号粘土採掘坑完掘

4 号粘土採掘坑完掘（下層土器）

4 号粘土採掘坑中層土器

5 号粘土採掘坑埋土土層断面

6 号粘土採掘坑完掘

8 号粘土採掘坑完掘

8 号採掘坑下底土器出土

8 号採掘坑埋土土層断面

8 号採掘坑下底出土の釜

写真30　F地区 b 区粘土採掘坑 1

9 号粘土採掘坑下層土器大量廃棄

10号粘土採掘坑に廃棄された大量の土器群

9 号粘土採掘坑下層土器出土

11号粘土採掘坑に廃棄された大量の土器群

9 号粘土採掘坑完掘

11号粘土採掘坑土層断面（中層の黒色灰は 7 号灰、その下が採掘坑）

11号粘土採掘坑土器出土状況

12号粘土採掘坑完掘▶

写真31　F地区 b 区粘土採掘坑 2

5号土坑下底土器出土完掘

5号土坑埋土土層断面

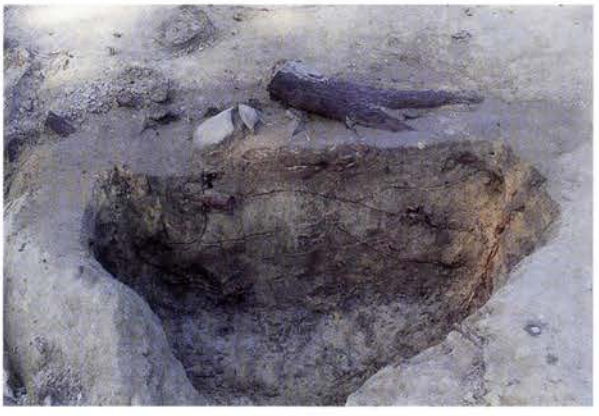
5号土坑下層土器出土状況

5号土坑下底出土坏A重ね

8号土坑下底土器完掘

10号土坑完掘

8号土坑下底土器出土状況



10号土坑埋土土層断面

◀8号土坑埋土土層断面

写真32　F地区b区土坑

11号土師器焼成坑床下暗渠排水溝の伏蓋須恵器（酸化して赤化）

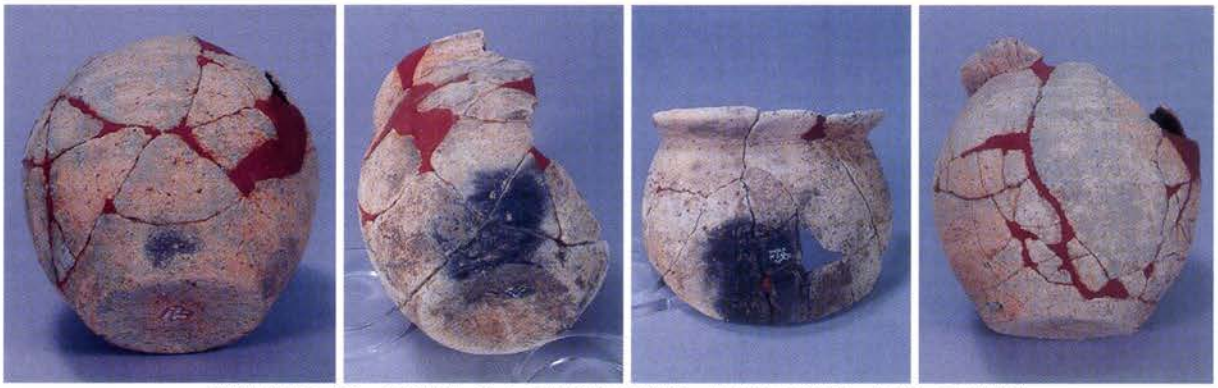
F区土師器焼成坑群出土の赤彩土師器椀

F区土師器焼成坑群出土の赤彩土師器坏盤類

28号焼成坑出土の赤彩土師器椀

写真33　F地区土師器焼成坑群出土の土器1

F区土師器焼成坑群の土師器小釜



土師器小釜のA面・B面黒斑（左から胴下位A面黒斑、胴中位A面黒斑、胴縦にB面黒斑）

土師器釜の黒斑と白斑（左から胴下位のA面黒斑、酸化部分と白斑、叩き境の縦削り）

土師器鍋の黒斑と火色のつき方

外面に粘土カス、内底面に粘土塊のついた土師器鍋▶

写真34　F地区土師器焼成坑群出土の土器 2

土師器甕（上：Ⅳ1期、下：Ⅳ2～Ⅴ期）

土師器円筒形土器（全て底部付のもので、右は楕円形。中央A面黒斑）

土師器円筒形土器、有段口縁型

土師器台付鉢（煮炊具と同じ胎土）

土師器円筒形土器横口付タイプ
（横瓶と同様のつくり方で横口をつける）

土師器置き竈破片（叩き成形）

写真35　F地区土師器焼成坑群出土の土器３

石製分銅（左）と須恵質の土製分銅（右）

土師質土製分銅

土師質管状土錘

土師質馬方（左上：胴、右上：頭）

土製支脚（中空）

土師質土製当て具

須恵器脚付瓶（鳥形？）

土師器獣足鉢の脚（はめ込み接合）

土師質獣足鉢▶
（左は刻目、右は浮彫）

特殊な土師器足付容器（大型脚と三足付鍋）▶

写真36　F地区土師器焼成坑群出土の土器 4

土師質円盤（焼成道具AⅢe類、切り取り円盤、黒斑と火色がつく）

切り取り円盤Ⅰ類（胴端とともに切り取り）　切り取り円盤Ⅱ類（薄く掌紋痕）　切り取り円盤Ⅲ類（内シボリ痕）

焼成粘土塊AⅠa・AⅠd類　焼成粘土塊AⅠc・AⅡ類　焼成粘土塊AⅢa・AⅢb・AⅢd類

AⅠb2類甲面の稲藁圧痕跡と籾痕

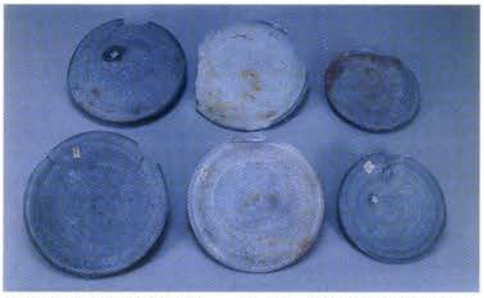
焼成粘土塊AⅠb1・AⅠb2類　焼成粘土塊AⅠb3類　AⅠ類の布目左痕

写真37　F地区土師器焼成坑群出土の焼成道具

7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土須恵器食膳具（Ⅵ2期）

須恵器坏B大と坏E中小

須恵器坏Aと小型坏（中央）



坏B蓋大（Ⅲ類重焼）、同（Ⅱa類重焼）E蓋中小

坏B身特大・大・中・坏E身中小

外底「|||」、内底「||」のヘラ記号もつ坏A

口縁に油痕の付いた坏A

須恵器盤A（下）と皿B（上）

皿Bの重ね焼き痕（左：合わせ口法、右2つは正位焼）

須恵器埦A（下）と埦B（上）

皿B底「米加」墨書

皿A底「完ヵ」墨書

坏A底「大」墨書

埦A・埦B底部▶

写真38　F地区7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土須恵器1

須恵器鉢A（槽・盤形鉢・Ⅵ2期）

須恵器鉢B（くびれ鉢・Ⅵ2期）

須恵器鉢F（原底鉢、Ⅵ2期）

須恵器筒形鉢（Ⅵ2期）

須恵器瓶D（双耳瓶・Ⅵ2期）

須恵器壺A（短頸壺、Ⅵ2期）

須恵器特殊瓶Aと
宝珠形土製品

須恵器瓶D底部溶着の焼台A類

須恵器瓶D底部の焼台B類痕

須恵器平底甕底部の焼台痕

須恵器壺F（広口壺、Ⅵ2期）

須恵器丸底甕底部の焼台痕

須恵器丸底中小甕の焼台D類痕

写真39　7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土須恵器2

須恵器貯蔵具専用焼台（Ⅵ2期）

焼台B類と粘土塊置台の溶着
（口縁部溶着のため小さく欠ける）

焼台A類（口縁部内面に溶着痕）

焼台C類（口縁部近くは降灰しない）

7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土の内黒土師器埦皿（Ⅵ2期）

内黒土師器埦Aの内黒の状況
（左側3個：口縁はみ出し、右側3個：口縁とび）

内黒土師器埦Bの内黒の状況
（右前の3個：口縁とぶ。他は口縁に黒はみ出し）

写真40　F地区7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土須恵器3・土師器1

内黒皿Bの内黒状況（左：はみ出し、中：底とび、右：口とび）

土師器（無垢）稜埦・埦・有台皿

7号窯灰原及び粘土採掘炭坑群出土の土師器小釜（Ⅵ2期）

土師器小釜の主体的黒斑（A面黒斑は胴下位、B面黒斑・火色なし）

土師器小釜の主体的黒斑
（A面黒斑は胴中位中心、B面黒斑は一部で見える）

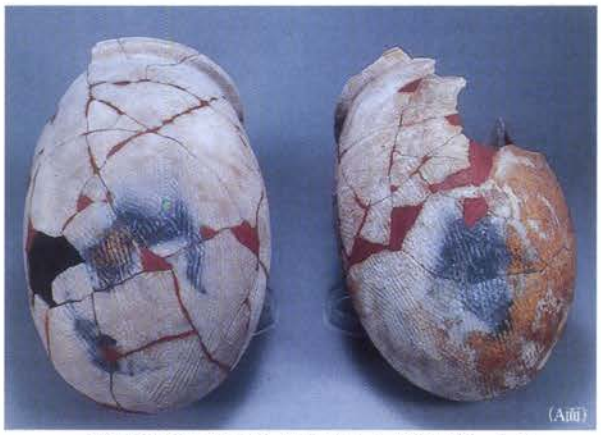
写真41　F地区7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土土師器2

土師器小釜B面についた火色

使用痕をもつ土師器小釜（外面にスス、内面にコゲバンド）

7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土の土師器釜（Ⅵ2期）

土師器釜胴部中位以上のA面棒状黒斑



土師器釜のA面黒斑（胴下位）とB面黒斑・火色

土師器釜C類器形（稜形成）

写真42　F地区7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土土師器3

土師器鍋（Ⅵ2期）の火色と黒斑

土師器？（Ⅵ2期）の口縁と底部の点状黒斑

土師器羽釜（Ⅵ2期）

脚付容器（棒状脚）

土師質支脚（中空）

土師質管状土錘（Ⅵ2期）

土師器は匣鉢状容器（底面ヘラ切り）

土師質板（叩きもつ瓶胴部の方形切り取り板）

写真43　F地区7号窯灰原及び粘土採掘坑群出土土師器4

第5章　考　　察

第1節　二ッ梨一貫山窯跡の土師器黒斑観察と焼成道具

第1項　はじめに

筆者は二ッ梨一貫山窯跡の土師器資料及び焼成粘土塊の成果をベースに土師器焼成坑を使った古代の覆い焼きによる土師器焼成方法の復元を行ったことがある（『窯跡研究』創刊号に掲載予定）。そこでは、焼成粘土塊を2つに大別し、覆い焼き天井塊や貼り壁塊など焼成坑部材（B類）と置台や支台、かませ台など焼成道具類（A類）に分けた。古代の土師器焼成坑ではB類の検出は少なく、大半はA類で、遺跡によって多寡はあるが、古代の土師器焼成坑では頻繁に焼成道具が使われていることがわかった。また、土師器煮炊具の黒斑観察から土師器焼成坑内でどのように煮炊具器種がおかれていたのかを復元し、焼成道具をそこに関連させて論じた。考察的な部分はそこで述べているので、本稿ではベースとなった二ッ梨一貫山窯跡の資料を報告する形をとる。

第2項　土師器煮炊具の黒斑観察

1．黒斑観察について

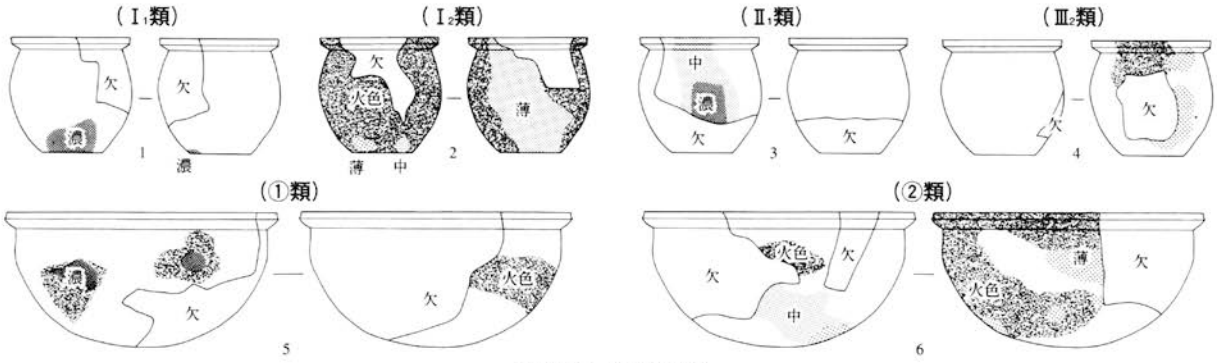
土師器焼成遺跡では黒斑遺存点数が消費地よりも多く、黒斑の顕著なものはキズモノとして廃棄された可能性が指摘されている（秋山1994）。二ッ梨一貫山窯跡でもこのような現象は確認でき、それは特に食膳具において顕著である。生産地での黒斑率を器種別や時代別で提示することは重要であり、製品価値を考えるうえで、有黒斑土師器はどのような位置付けがなされていたのか興味深い。有黒斑のものは意識的に再焼成によって黒斑を消していた可能性もあるだろうし、また、黒斑の付かないような焼成方法も考えられたであろう。ただ、今回はこの問題を取り上げず、専ら、焼成方法復元の前提資料として、野焼き時に生じる黒斑観察を行うこととする。主に、対象は、煮炊具であり、食膳具については、全体的な酸化不十分による黒斑や偶発的なもの、または内黒土師器などの存在によって、黒斑部位の法則性を捉えにくく、今回の黒斑観察からは除外する。

黒斑観察は、土器全体がほぼ遺存する個体を主に行ったが、釜や鍋については該当資料が少なく、片面の状況しか確認できない半欠け品も対象とした。内外面に付く黒斑の形状と位置、色の度合い、そして火色（珪酸分を多く含んだ稲藁などの草燃料が接触燃焼したことによっておこる赤化）の範囲を観察した。内面については、十分に酸化しているものが多く、全体が酸化不十分の色調を呈すものや外面黒斑がそのまま内面にも出たもの以外は、特徴ある内面黒斑は観察できず、資料提示項目から除外した。よって、図示したものは全て外面の黒斑・火色であり、黒斑の形状・位置と火色から野焼き時に土器が下向きになった面と上向きになった面を判断し、北野博司氏らの使用する黒斑名称に則って、前者をA面黒斑、後者をB面黒斑とした。図ではA面黒斑を左、B面黒斑を右に示し、欠損部分については、欠損ラインを示し、「欠」と記した。なお、黒斑の形状であるが、燃料薪が接していたことによって生じる棒状の黒斑を「棒状黒斑」、円形・楕円形の大きな黒斑を「楕円形黒斑」、点状の小型黒斑を「点状黒斑」とする。

2．二ッ梨一貫山窯跡の土師器煮炊具黒斑

（a）8世紀後半～9世紀前半の土師器煮炊具黒斑

当期の良好な資料は少なく、図示した小釜で4個体、鍋で2個体を提示できたのみである。観察可能資料で両面「黒斑なし」というものはなく、部分的だが有黒斑に限られた。1はA面胴下位から底面にかけて楕円形黒斑（濃）が確認できた。ここ以外はB面にも火色・黒斑はなく、このタイプをI_1類とする。2は全体的に火色が見られるもので、A・B面の識別が困難なものである。胴部下位に付く点状黒斑があり、これをA面と捉え、色調の薄い白斑状の広い黒斑をB面黒斑と捉えた。火色を考慮せず、このタイプをI_2類とする。3は底部欠損し、



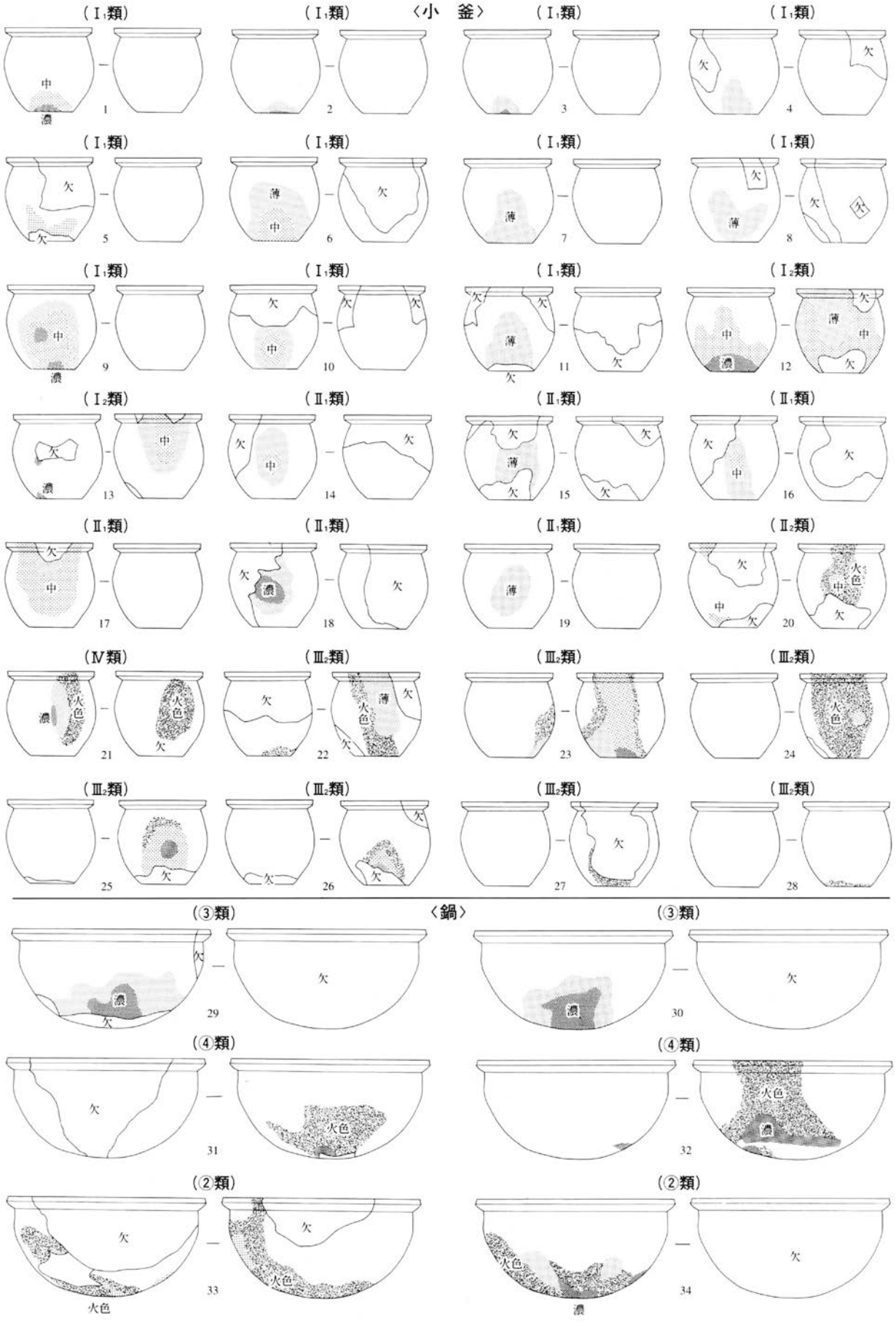
第274図　8世紀後半
～9世紀前半の土師器煮炊具黒斑と火色（左はA面右はB面、網点スクリーン種は黒斑濃淡）

底部への黒斑の広がりがつかめていないが、胴部中位付近に大きな楕円形黒斑（濃）があり、これをA面とし、B面は黒斑なしとした。このタイプをⅡ1類とする。4は薄い黒斑と火色が見られるもので、この面をB面と捉え、A面は黒斑なしとした。B面黒斑は胴部中位に広く確認でき、このタイプをⅡ2類とした。鍋は黒斑や火色の位置が不規則で、A面とB面の識別が困難なものである。内面に火色の確認できる部分もあるが、口縁部付近で多く、内底面に黒斑や明瞭な火色が目立つものはないと言える。このような身の浅い広口器形を呈すものは内面に藁灰が落ち込まないよう伏せ気味で焼いた可能性があり、単純にA面・B面に区別できない。5・6ともに火色が片面に偏ることはなく、小黒斑が火色に伴って付く。5の黒斑と火色は体部中程に帯状に付く傾向があり、底面は黒斑なしである。6も火色は中程から口縁部にかけてで、底面に黒斑はないが、中程から下位付近に楕円形黒斑（中）がある。この黒斑の付く面がA面と判断すれば、正位で焼いたこととなるが、伏せて焼けばこの部分はB面黒斑となる。両方の可能性がある。なお、5は①類、6は②類とする。また、図示していないが、胴部に広く縦長の楕円形黒斑が付く甑破片が確認されている。黒斑はA面黒斑と考えられ、横倒しの設置角度が予想される。黒斑類型Ⅱ類に該当しよう（写真30参照）。

（b）9世紀後葉～10世紀前半の土師器煮炊具黒斑

粘土採掘坑群内に部分的に被熱破損した土師器煮炊具完形品が廃棄されており、黒斑観察をするうえで格好の資料と言える。小釜が大半で、45個体を数えるが、釜と鍋の完形品は少ない。釜と鍋については半完形品も含め、釜で17個体、鍋で11個体、甑で2個体を提示する。

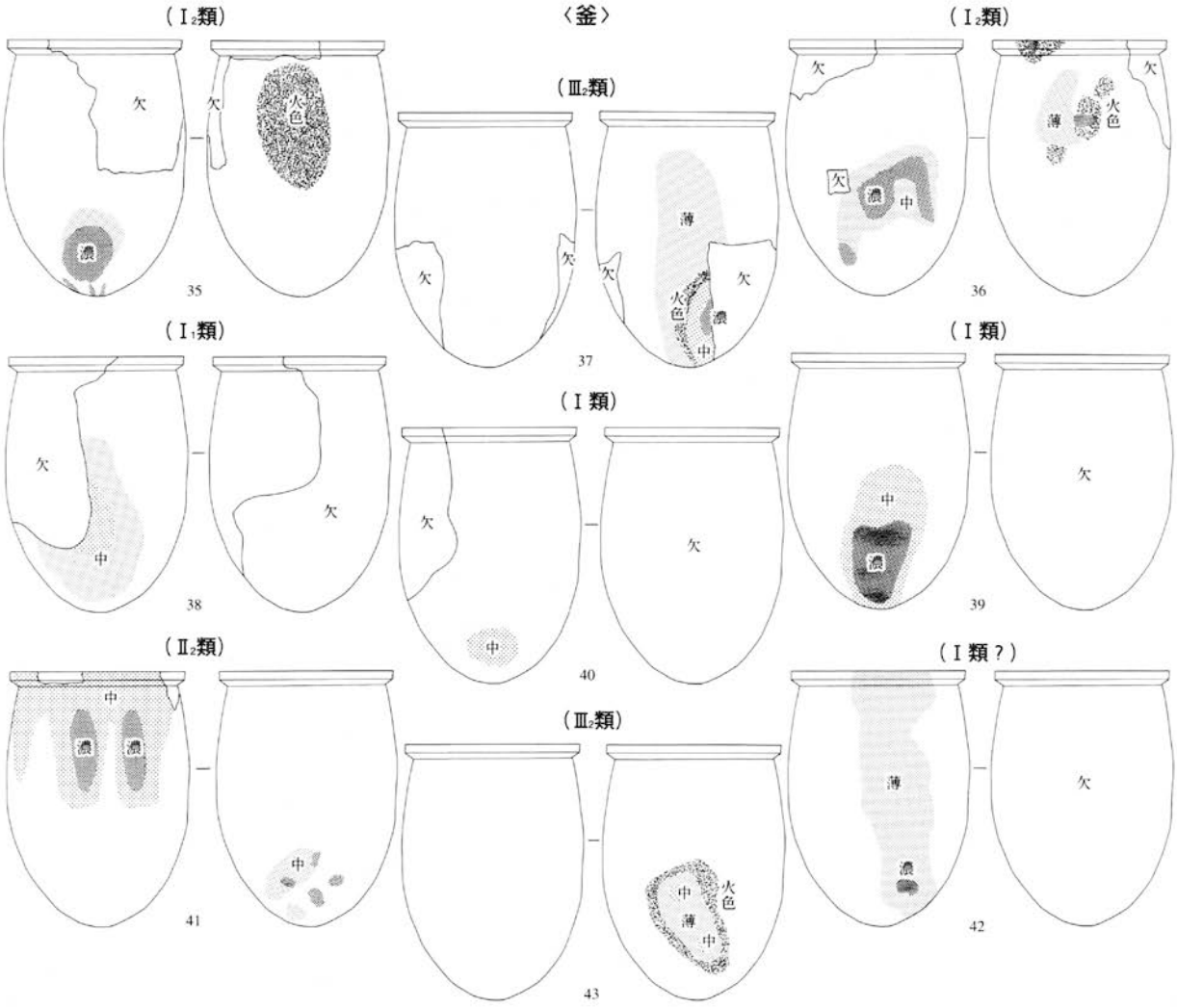
まず、小釜であるが、A・B面とも黒斑を有す個体は少なく、ほぼ片面に限られるかAB面黒斑なしが主体的である。A面黒斑は概して、B面黒斑よりも色調が濃く、火色を伴わない。黒斑の位置が胴部下位付近から底面にかけて楕円形黒斑で見られるものをⅠ類、胴部最大径付近に見られるものをⅡ類とした。Ⅰ類はB面黒斑・火色の付くもの（Ⅰ2類）は12・13のみと少なく、12は焼成不良による黒斑の傾向もある。ほとんどは黒斑や火色のないⅠ1類で、図示した11個体に加え、半完形でも5個体が当類型に該当すると判断される。A面黒斑の位置は底部付近に主体をおく1～5と胴部中位付近にまで広がる6～11に分けられるが、それは設置角度の違いを示すものと判断する。Ⅱ類もⅠ類同様、B面黒斑の付くもの（Ⅱ2類）は少なく、黒斑・火色なしのⅡ1類が大半を占める。Ⅱ1類は図示できた6個体と図示しなかった1個体を加え、7個体。Ⅱ2類も図示していない1個体を加え、2個体となる。Ⅰ・Ⅱ類比率はⅠ類18個体／Ⅱ類9個体で、2：1の割合。B面黒斑のないものが主流であることは2段以上積み上げて設置した可能性が高い。これは火色の見られるものがA面に黒斑をもたないことからも伺われる。このA面に黒斑をもたず、B面に火色・黒斑の付くもの（Ⅲ2類）は7個体確認できるが、B面にも黒斑のないもの（Ⅲ1類）が15個体あり、Ⅲ類が必ずしも、積み重ねて焼成した根拠とはなりにくい。ただ、Ⅰ1類とⅡ1類、Ⅲ2類がかなりの量を占める状況は、2段重ね焼成を示唆する。なお、Ⅲ2類のうち、B面に広く火色の確認できるものと胴部中位から下位ないしは底面にかけて火色の確認できるものとがあり、特に底面近くの26・28は伏せ気味の設置である可能性が高い。類型は分けていないが、後述するⅣ類の可能性もある。また、21は胴部両面に火色が見られるもので、不規則な火色の位置を呈すが、両火色の間の黒斑なし部分をA面と考え、Ⅲ類の範疇とし、Ⅲ3類としたい。



第275図　9世紀後葉～10世紀前半の土師器煮炊具黒斑と火色(1)（左はA面、右はB面、網点スクリーントーンは黒斑濃淡）

次に、釜についてだが、両面遺存する個体は少なく、ＡＢ面黒斑を確認できたものは５個体に過ぎない。その中ではＢ面黒斑・火色の付く確率が高く、Ｂ面黒斑の付かない事例は６個体中１個体のみである。さて、Ａ面黒斑では胴部中位から底部付近に付くⅠ類と胴部中位から口縁部にかけて付くⅡ類、黒斑の付かないⅢ類に分けられる。図示していない半欠品も含めれば、Ⅰ類11個体、Ⅱ類３個体、Ⅲ類２個体とⅠ類が大半を占める。Ⅰ類は底部付近に付く35・39・40と下位から中位付近に付く36・38・42があり、設置角度を物語る。黒斑形状は楕円形が大半であるが、36の黒斑は逆Ｕ字状を呈しており、２本の棒状黒斑が連結したような形状をもつ。薪の接触によるものかもしれない。Ｂ面黒斑は胴部下位付近のＡ面黒斑の位置に対応して、胴部中位から口縁部にかけて付き（35・36）、斜め上向きに釜が設置されていたことを示す。Ⅱ類（41）はＡ面に２本の棒状黒斑が胴部上位付近にあり、その付近及び内面が酸化不十分となっている。Ｂ面は胴部下位に点状の黒斑が確認されるが、この部位で火色は見られず、薪などの接触の可能性もある。やや下向きで横倒し設置されたものだろう。Ⅲ類はＢ面に黒斑・火色の確認できるもののみで、黒斑なしのⅢ1類は確認されていない。Ｂ面の火色の位置は胴部下位付近にあり、横倒しに設置されていた可能性がある。Ⅱ類同様の設置角度が予想される。床敷き薪燃料が十分に燃焼し、Ａ面黒斑を酸化させたものと考えられるだろう。

鍋は、両面遺存する個体が３個体のみであり、片面遺存する個体を補足資料として、復元予想する。８世紀後半～９世紀前半資料で指摘したように、鍋は黒斑や火色の位置が不規則で、Ａ面とＢ面の識別が困難なものである。内底面に黒斑や明瞭な火色が目立つものはないことから、内面に藁灰が落ち込まないような伏せ気味で焼いた可能性を考えているが、特に、底面から両面にかけて火色の確認できる33・34はその可能性が高いだろう（②類）。底面を中心にそこから体部へと楕円形黒斑の付く29・30も火色のないＢ面黒斑と考えれば、②類と同様に



第276図　9世紀後葉～10世紀前半の土師器煮炊具黒斑と火色(2)（左はA面、右はB面、網点スクリーントーンは黒斑濃淡）

位置付けられるが、A面黒斑の可能性も高く、その場合は底部を下に斜めに設置する方法が考えられる。片面遺存個体のため、判断は難しく、②類とは分けて、③類としておく。また、31・32は、底部から片側体部へと黒斑をもつ点は③類と同様だが、火色が伴い、もう片面は黒斑なしのものである（④類）。黒斑や火色の形状から伏せている可能性が高いものであるが、底面や片面に火色のないことは、横に近い設置角度が予想されるだろう。

甑は完形に近いものは2個体だが、片面のみ確認できる破片2個体も観察した。完形のものは胴部に黒斑の確認はなく、口縁部端面と胴部端面（筒抜け底部端面）にそれぞれ黒斑が見られる。口縁部端のものは3カ所点状黒斑が付き、それがやや内面にも及んでいる。胴部端面部のものは2カ所の点状黒斑が付き、その箇所につながる部位で外面にも点状に確認される。正位か逆位の違いはあるが、両個体とも直立設置角度をもつものと判断でき、Ⅴ類に分類しておく。なお、破片のものは胴部全体に縦長の楕円形黒斑が確認できるもので、この面をA面とし、横倒し設置のⅡ類が想定される（写真43参照）。

3．土師器煮炊具黒斑から見た煮炊具の設置角度と方法

（a）二ッ梨一貫山窯跡出土煮炊具の事例検討

これまで、8世紀後半～9世紀前半、9世紀後半～10世紀前半の2時期の土師器煮炊具資料を見てきたが、8世紀後半から9世紀前半の資料は乏しく、時期比較できる資料ではないため、時期を問わず一括して扱うこととする。各器種の黒斑類型をまとめると、A面黒斑の胴部下位～底面に付くⅠ類、A面黒斑の胴部中位付近に付くⅡ類、A面に黒斑が付かないⅢ類、A面黒斑なく、胴体部中位から底面付近にB面黒斑が見られるⅣ類、口縁部端か底部端にのみ点状黒斑が付くⅤ類に分類できる。鍋で提示した③類はⅠ類の可能性があるが、他の①・②・④類はⅣ類に該当するものと言える。

小釜はⅠ類が20点、Ⅱ類が10点、Ⅲ類が24点（うちⅣ類的なもの2点）で、Ⅰ類の中に角度からⅤ類に近いものもあるが、基本的にはⅠ類の範疇で考える。A面黒斑を示さないⅢ類を除外し、A面黒斑の位置から設置角度を見れば、口縁部が斜め上方を向く角度のⅠ類が全体の2/3、口縁部が横を向く横倒し角度のⅡ類が1/3の割合となる。Ⅱ類のような胴部に大きく残る黒斑を避けるため、Ⅰ類の設置角度をとったものと考えるが、小釜の場合、短胴器形のため重心が下にあり、胴部下位で据えると斜め角度でも十分に安定する。大型の支柱がなくても、さほど無理なく斜め設置できる器種であったと言える。さて、Ⅰ類・Ⅱ類のB面黒斑を見ると、B面有りは僅か17％（30点中5点）であり、B面に火色・黒斑をもたない確率が高い。これと対応するように、A面黒斑なく、B面黒斑・火色のもつ個体は8個体あり、A・B面黒斑のものよりも凌いでいる。A面のみ・B面のみについて、燃焼時の酸化が十分で、黒斑のとんだことも考えられるが、個体数的に対応関係にある様子を見ると、A面黒斑のみは下段、B面黒斑のみは上段の位置にあった可能性がある。さらに、AB面黒斑なしが15個体存在することを考えれば、3段積みの可能性もあろう。

小釜の複数段積み上げ設置は、釜の黒斑の状況と比較することによって、より信憑性が増す。長胴器形という違いや確認個体数が少ないため、一概に比較はできないのだが、A面黒斑の付く確率が88％（16個体中14個体）と高く、小釜の47％とは大きく異なる。さらに、A面黒斑の付く個体はB面黒斑・火色をもつ資料でほぼ占められ、A面黒斑のみのものは確実な資料に欠ける。ただ、A面黒斑のないものも確認できており、釜は2段積みしないという前提であれば、A面黒斑が十分な燃焼で酸化したことの傍証となろう。ただ、傾向としては、釜は1段基本、小釜は2段以上基本であると言えそうである。なお、釜の設置角度であるが、口縁部上向きのⅠ類が78％の高い率を占め、横倒しは例外的なものであったと言える。この釜の斜め設置率の高さも、釜が1段積みを指向したことを示すものと言えよう。

次に、鍋についてだが、器形から考えて、釜や小釜とは異なる設置方法が予想される。外面底部から口縁部にかけて不規則にB面黒斑が付き、明瞭なA面黒斑は確認できない。③類の黒斑がA面黒斑である可能性はあるが、現状で断定はできない。内底面黒斑が存在しないことや口縁部の広がった器形を考えれば、伏せ気味に焼くのが妥当だろう。Ⅳ類はそのような設置を物語るものと考えている。鍋のみで焼くことも考えられるが、小釜や甑など他の器種の上に積んだ可能性も十分に考えられよう。

甑は８世紀後半～９世紀前半で胴部に大型の楕円形黒斑の確認できるものが定量存在したのに対し、９世紀後半～10世紀前半では口縁部端面か胴部下端面（筒抜け底部端）に点状黒斑が付く程度のものが半数を占め、設置角度が変化したことを物語る。前者は横倒しⅡ類、後者は直立Ⅴ類が基本だった訳であり、これは甑器形が８世紀の底部小型で長胴気味の器形から９世紀後半以降の胴短器形で口径・底径の大型なものへと変化したことに対応する。甑の短胴化の意図は他のところにあろうが、器形変化により直立でも安定した設置ができるようになったものと言えよう。

（ｂ）北陸型煮炊具の黒斑と設置角度

これまで北陸型煮炊具の黒斑観察を提示した資料はなく、報告例は皆無に等しい。ただ、最近、筆者は各地の８～９世紀北陸型煮炊具資料を実見する機会に恵まれ、福井県茱山崎遺跡（集落資料）や富山県向野池遺跡（土師器焼成遺構）、加賀地域の集落資料などを資料調査した。細かな観察結果は提示できないが、およその傾向として、二ッ梨一貫山窯跡資料と同様の黒斑類型Ⅰ類過半数、Ⅱ類定量の傾向が出た。１段積みか２段積みかということまでは確認しきれていないが、釜はＢ面対応黒斑の確認例が多かった印象をもつ。全体的に黒斑の遺存する率は高く、集落資料でも同様で、北陸型煮炊具になって、著しく黒斑が減少したとは言い難い。

以上の、口縁部上向き設置には角度を固定するための焼成道具の存在が想定される。また、横倒しにおいても極力黒斑の発現を抑えるため、焼成道具が使われたものだろう。二ッ梨一貫山窯跡では土師器焼成坑に伴う明確な専用焼成道具の出土はなく、土器製作時の不用品や製品の転用、不定形な道具類が使われたものと予想している。この点について、道具としての認定も含め、以下に述べることとする。

第３項　土師器焼成道具

１．焼成道具として使われた焼成粘土塊

（ａ）焼成粘土塊の特徴と出土量

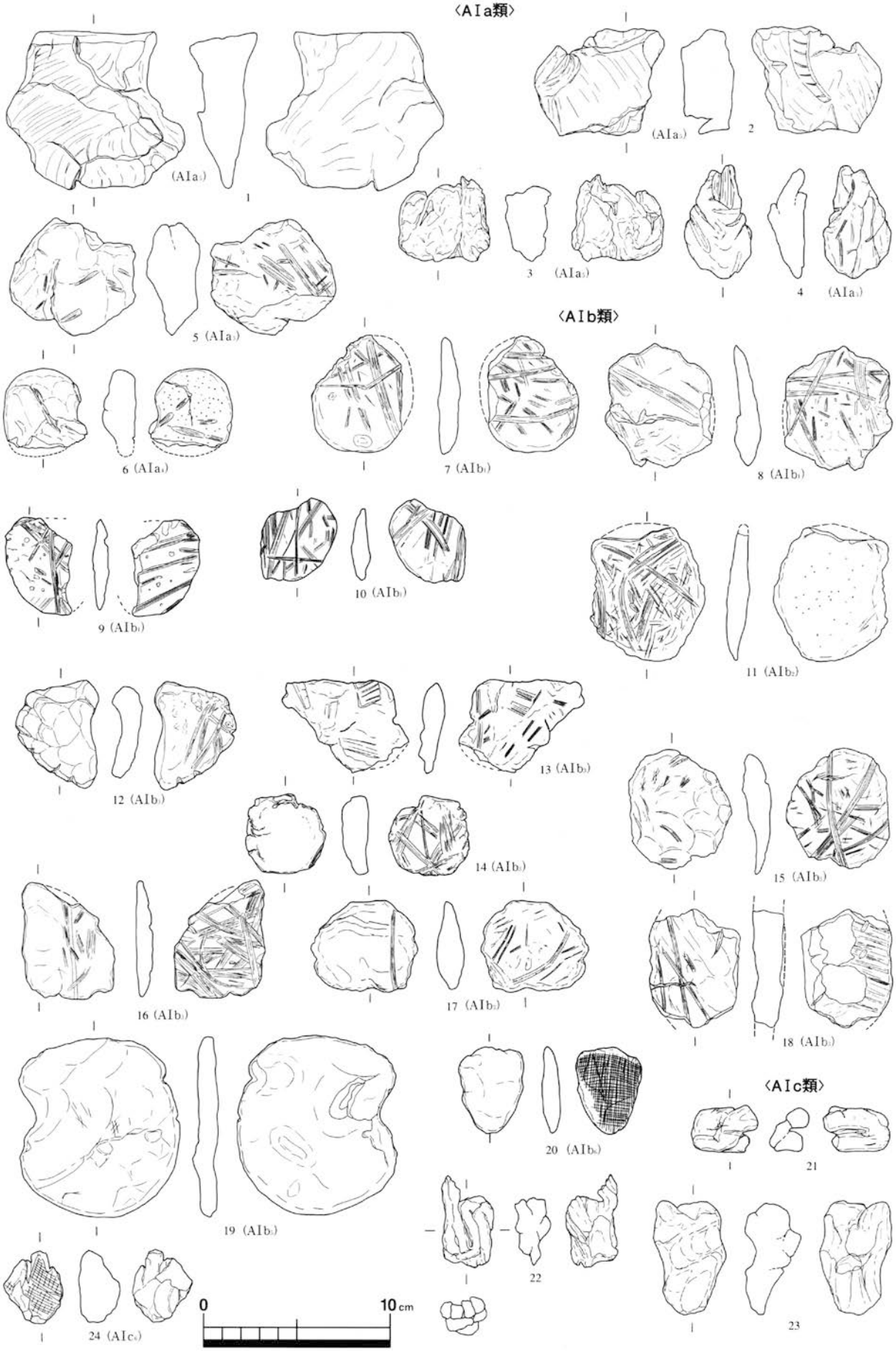
二ッ梨一貫山窯跡では、全体で約5,500点、総重量では62.42kgに及ぶ焼成粘土塊が出土する。大半は、８世紀から９世紀前半の土師器焼成坑に伴うもので、９世紀後葉～10世紀前半のものは52点、500ｇ程度と少ない。これら焼成粘土塊には、焼土塊と識別できなかったものも一部含まれており、そのような不確かなものを除外すると、約4,000点程度、総重量は55kg程度であろうと予想する。冒頭でも述べたが、焼成粘土塊にはＡ類（土器胎土と同質で、破面がほとんどない粘土塊単体として形成される小粘土塊）とＢ類（土器胎土とは異なる胎土で、粘土中に意識的に異物混入の見られるものも有る。粘土塊端が破面となり、粘土塊ではなく粘土片と呼べるもの）に大別され、Ａ類は焼成道具として、Ｂ類は焼成坑部材として位置付けられる。二ッ梨一貫山窯跡で出土する焼成粘土塊の９割以上はＡ類で、Ｂ類は数％。Ｂ類はいずれも土師器焼成坑の貼壁塊であり、弥生時代の覆い焼きのような覆い天井塊と思われるものは確認できていない。

（ｂ）Ａ類焼成粘土塊の分類と諸特徴

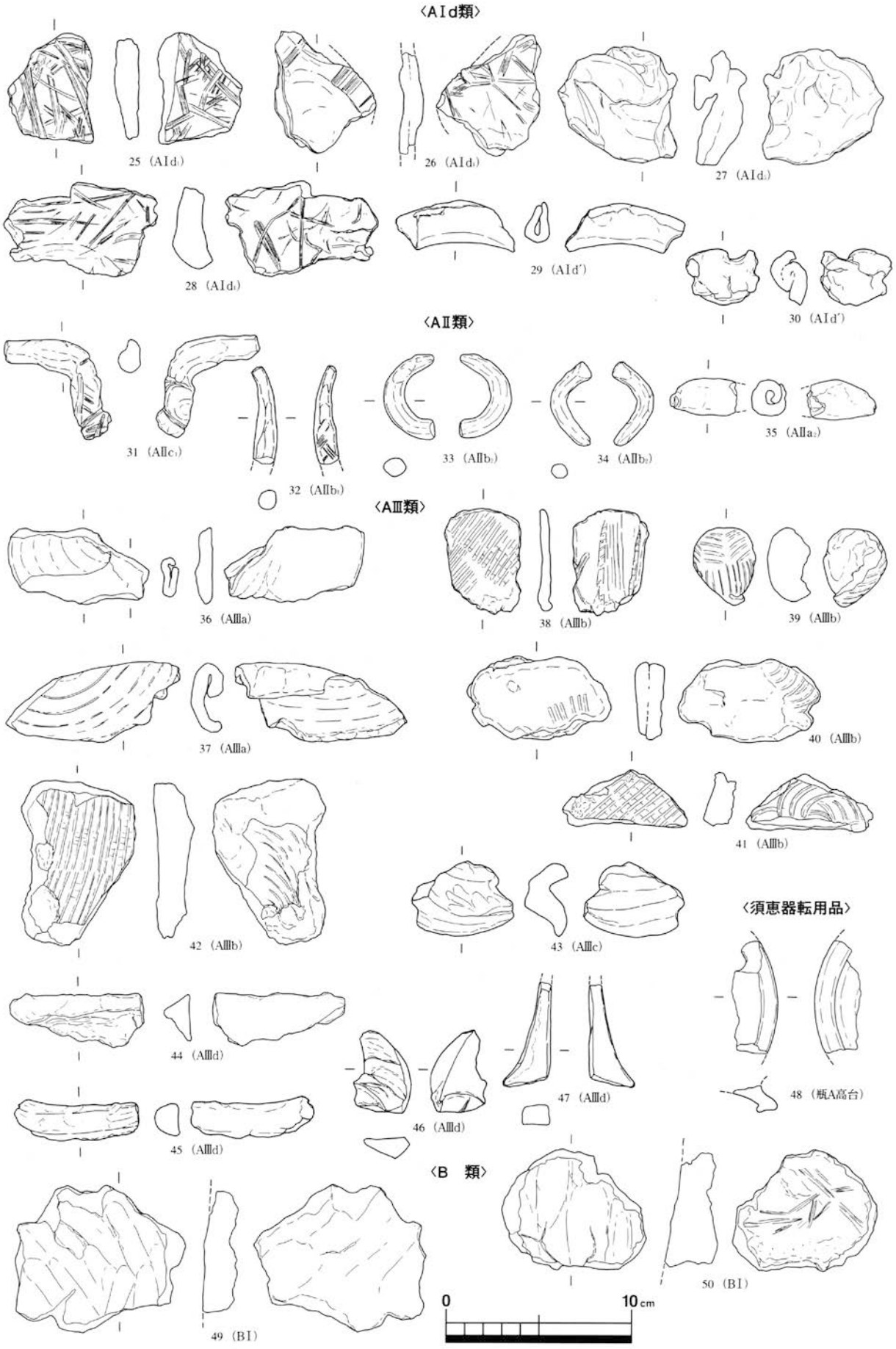
Ａ類焼成粘土塊については、形状や成因、付着圧痕などから、以下のように分類される。

《ＡⅠ類》粘土塊を作る目的で粘土を潰したり、丸めたりしたもので、比較的塊状や円盤状を呈す。全体の８割以上がこの類型で、古代土師器焼成坑の焼成粘土塊の代表的なものである。当類型は、さらに、粘土塊形状や形作る過程での要素から、ａ類（粘土塊そのままの形状）、ｂ類（粘土塊を押し潰して円盤状塊としたもの）、ｃ類（紐状粘土を丸めたもの）、ｄ類（板状粘土を折り重ねたもの）に細分され、また、圧痕や付着物により、稲藁圧痕が両面に着く１類と片面稲藁圧痕、もう一方の面に砂粒食い込む２類、片面に押し付けた指痕、もう一方の面に稲藁圧痕の付く３類、片面に押し付けた指痕、一方の面に砂粒食い込む４類、両面とも付着圧痕のない５類、片面に布目圧痕が付く６類に分けられる。

この類型の場合、塊状を呈するａ類とｃ類は面が硬く、１・２のような粘土をちぎったり、切ったりした面をもつものや21・22のような紐の痕跡が残るなど、粘土としては硬い状態のものが使われている傾向が強い。圧痕の付着は少なく、乾燥した状態で、土師器焼成坑の中に入れられたものの可能性が高い。仮に24のような布目圧痕や５のような稲藁圧痕の付着するものであっても、焼成坑内で付着したというよりも、工房等で付着した可能



第277図　8世紀後半～9世紀前半の焼成粘土塊1(1/3、左は甲面、右は乙面)



第278図　8世紀後半～9世紀前半の焼成粘土塊2(1/3、左は甲面、右は乙面)

性が高いだろう。ただ、6に関しては、指で押し付けたような痕跡と砂の付着があり、形状的にもAⅠb類に近いものと言える。板状粘土のd類に関しても、面の部分が硬く、a類やc類に類するものだが、25・26・28など稲藁圧痕の付着するものが多い。端面部分に稲藁痕が付かないことを考えると、これに関しても工房等での付着を予想するのが妥当だろう。なお、29・30は切れ端状の薄い板状粘土を折り曲げたもので、AⅠc類に近いものである。

AⅠ類の中で、最も定型的な形状、大きさをもつものがAⅠb類である。径5～7cm、厚さ1cm弱のものが多く、偏平器形で、中央から端部にかけて薄く延ばされている。基本的に押し付けた側と押し付けられた側がわかり、これを甲面、乙面とする。いずれかの面に稲藁圧痕の付く確率が高く、当類型では過半数を占める。この中でも主体は甲面指痕、乙面稲藁圧痕の3類で、次いで甲面指痕、乙面砂粒付着の4類、甲面に稲藁圧痕の付く1類や2類は量的に少ない。稲藁とともに籾圧痕も混じることが多く、意識的に稲藁を巻いたり、粘土塊に稲藁まぶすように付けたというよりは、焼成坑内にある稲藁が偶然付いたものと言えよう。押し付けた指痕や砂の付着、そして面として切ったような部分が確認できないことにより、工房などで排出される粘土屑ではなく、土師器焼成の場で、粘土塊を押し潰して使われたものであったろう。稲藁圧痕の食い込みの深さから考えて、粘土は製品に貼り付くような全くの生粘土ではなく、ある程度乾燥した硬さをもつ粘土塊であったと予想する。

《AⅡ類》 AⅠ類同様粘土を丸めたりするものだが、特に棒状又は紐状の形状を呈すものである。薄い粘土板を丸めて棒状としたa類と細い紐状を呈すb類、紐を潰したようなc類に分類される。屑粘土状の小粘土塊であり、偶然、紛れ込んだものの可能性もある。稲藁圧痕の付くものは概して少ないが、付くものを1類、圧痕無しを2類とする。

《AⅢ類》 土器を成形する途中に排出された不要粘土を利用して、変形、切断ないしはそのまま粘土塊としたものである。当類型は製作器種や技法・部位などによりa類（底面ヘラ切り痕を残す須恵器食膳具底部に類する板状粘土を変形したもの）、b類（叩き成形痕を内外面に残す製作途中に破損などした須恵器甕胴部片に若干変形を加えた粘土塊、ないしは切り取って方形板状としたもの＝b´類）、c類（ロクロナデ痕やカキ目痕、刷毛目痕など須恵器・土師器釜・壺類製作途中の破損片に変形を加えた粘土塊、ないしは切り取っただけのもの＝c´類）、d類（須恵器大甕や横瓶など口頸部接合の際に余分な部分を切り落とした切り屑に変形を加えた粘土塊、ないしはそのままの切り屑片＝d´類）、e類（須恵器風船技法を使う長頸瓶や横瓶などの頸部切り取り円盤に変形を加えた粘土塊、ないしは切り取ったままの土製円盤＝e´類）に分類される。当類型は土器成形時の外面と内面とで示すが、AⅠ類同様に甲面、乙面の関係にあるものもある。基本的に稲藁圧痕などは付かず、少なくとも焼成坑内で焼かれる時点では、稲藁圧痕の付かない程度に乾燥していたものと言える。

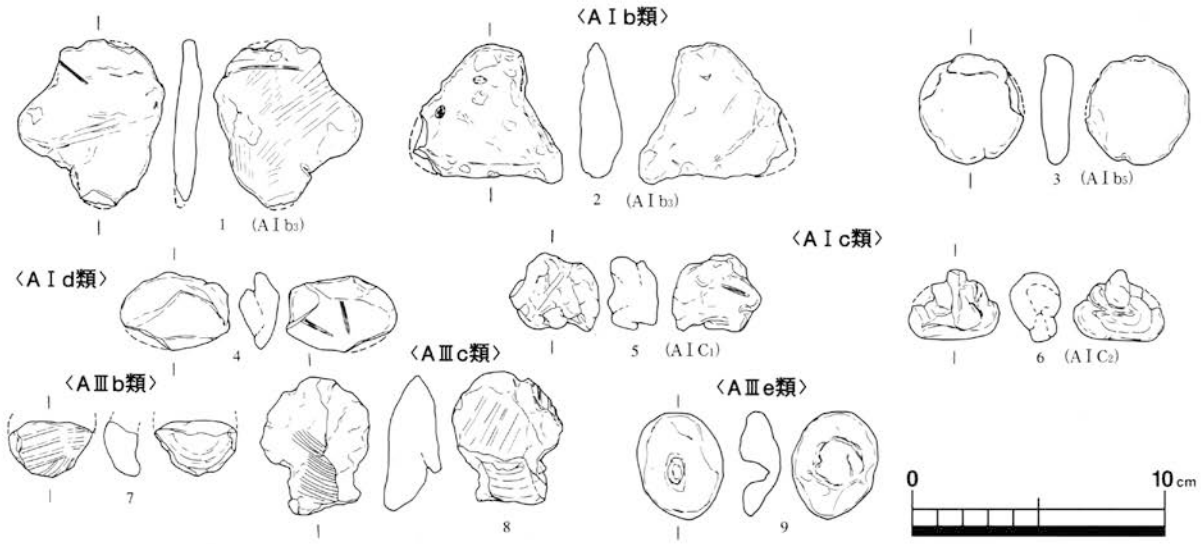
当類型の土器成形に伴う不要粘土には、土師器成形に伴うものと須恵器成形に伴うものとがある。須恵器成形に伴うものが過半数で、土師器成形に伴うものは、b類とc類で僅かに確認できるだけである。多くが須恵器成形に伴うものであるのは、当遺跡が須恵器窯と併設された土師器生産遺構だからである。須恵器成形と土師器成形を同一の工房で行った可能性が高く、成形時に排出される不要粘土片をそのままないしは適度な大きさ・形状に切り落として、焼成道具としてストックしておいたのだろう。三重県北野遺跡でも同様の成形時不要粘土片が焼成道具として使われているが、土師器生産専門であるため、土師器成形に伴うAⅢc類に限られる。土師器甕の削りカスが出土する事例（熊本県田子山遺跡）についても同様の意味合いで小片をストックしていたと考えるべきだろう。ただ、須恵器窯ではこのような須恵器成形に伴う不要粘土片は例外的で、二ッ梨一貫山窯跡を始め、南加賀窯跡群では7世紀前半以外は皆無に近い。何故、このような不要粘土片を土師器焼成坑で多用したのか、土師器焼成と土師器成形が異なる人間の手によっていたのか、そこに須恵器工人がどのように関連するのかなど、工房組織を考えるうえで興味深い資料と言える。しかしながら、単に土師器焼成に適当な大きさのものであった可能性もあり、特別な意味はなかったかもしれない。

（c） A類焼成粘土塊の焼成道具使用と焼成具合

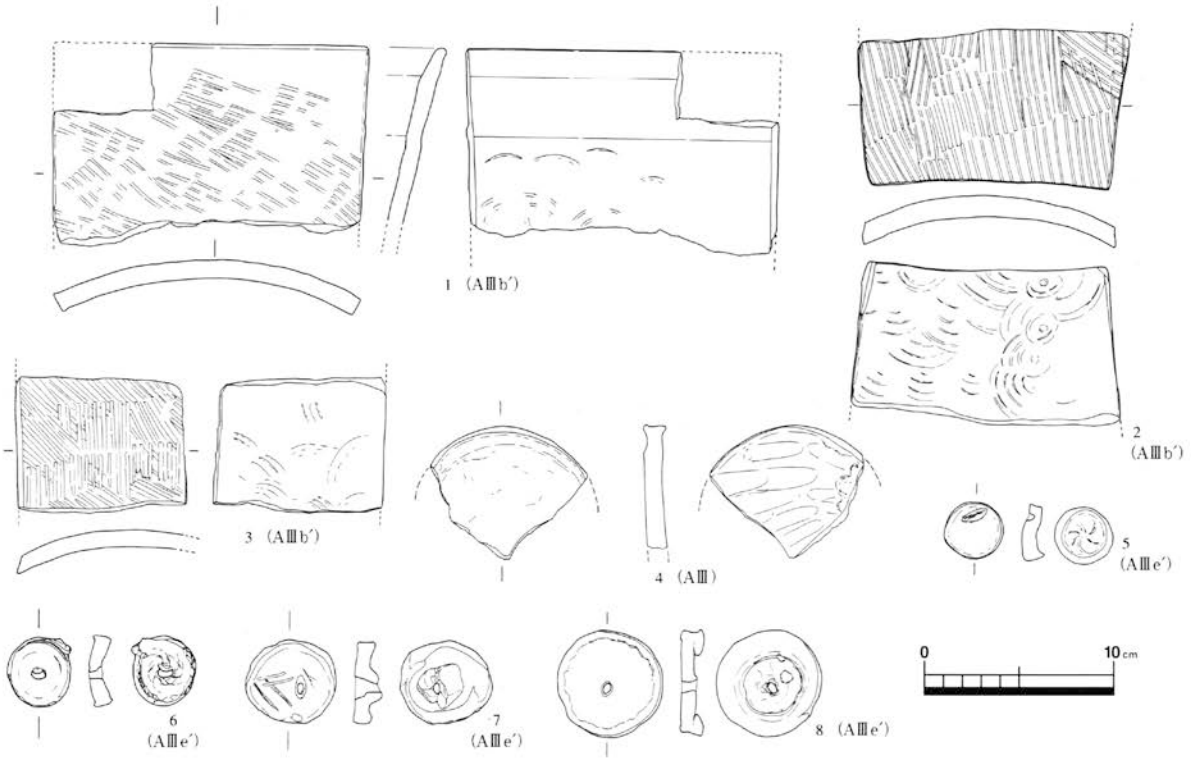
以上、A類焼成粘土塊については、土器製作の胎土と同一であることや稲藁圧痕の付き方、単体の小粘土塊であることにより、焼成坑の覆い天井塊であるBⅡ類とは明確に異なるものと言える。では、これらは焼成のため

の製品であるかというと形状などからその可能性は薄い。また、偶発的な粘土塊の紛れ込みとするには、出土量の多さや土器成形に伴う不用断片（AⅢ類）再利用という点から想定しにくい。つまりは、土師器焼成坑内に意図的に置かれ、焼かれたものという考えに達する訳であり、消去法で言えば、焼成道具とするのが穏当と言える訳である。

さて、A類焼成粘土塊の焼成道具使用を考える根拠としては、粘土塊の焼成・色調具合からも想定可能である。観察表に示すように、焼成粘土塊は、通常の土師器（通常の土師器の焼成は良に設定している）に比較すると、焼成が良く、強く被熱している。土師器では例外的な堅緻に焼き上がるものも定量確認されており、直接火を受ける箇所で焼成された可能性が高い。稲藁燃料の燃焼と関連性高い火色の発現も目立ち、全体が酸化不十分なもの以外は、半数近くが火色を呈す部分をもっている。甲面に火色、乙面に黒斑というものが定量存在しており、



第279図　9世紀後葉～10世紀前半の焼成粘土塊（S=1/3、左が甲面、右が乙面）



第280図　焼成道具と思われる土師質方形板と土師質円盤

黒斑率の6割弱という高率や被熱の強さをも考え合わせると、A類焼成粘土塊は床に直に置かれた可能性が高い。黒斑は床に面する部分で酸化不十分のために付いたものだろう。または床に溜まった灰に接していたものかもしれない。土師器の黒斑遺存を極力避けるため、焼成方法は工夫されていたはずであり、製品を直に床に接することを避けていたと考えて間違いない。偏平な粘土塊でどれだけの効果があるかは、難しい問題だが、下に僅かでも隙間を作ることによって空気は循環するものであり、燃焼効率を高める働きは十分に有ったものと予想する。土器を浮かせるためだけのみならず、土器を固定したり、角度を補強したりするために支台やかませ台として使われたものと予想する。

2．須恵器片や土師器片の土師器焼成道具使用

A類焼成粘土塊について、床から製品を浮かせるための支台的機能を想定したが、偏平形の小塊である点で、須恵器・土師器片でも十分に代用できるものである。土師器片の代用については、細かく観察していないので、どれだけの量が存在するか、何とも言えないが、不自然な黒斑や同一個体で破片毎に焼き色の違うものなどが存在し、本文で報告した土師器のうちの一定量はそのような焼成道具使用が考えられる。ところが、須恵器については、焼成道具使用を積極的に示す事例に乏しく、48以外では10点を数えたに過ぎない。須恵器を野焼きした場合に想定される変化は、酸化被熱して全く土師質に変化する訳ではなく、表面が酸化色を呈すだけである。火色や黒斑の付く例もあるが、出土例は皆無に等しく、須恵器を野焼きした場合に、本当に変色するのか、黒斑などが付くのかという疑問がわく。周辺に存在する須恵器窯灰原には大量の須恵器片が捨てられており、道具として使用できない要因がない限り、周辺の須恵器片を使うことは自然だろう。実験検証してみる必要はあるが、須恵器が度重なる野焼き焼成でない限り、色調に変化しない可能性を想定し、土師器片はもとより、須恵器片もかなりの量が土師器焼成坑の焼成道具として使われていたものと考えたい。未焼成の生状態で、使われる焼成粘土塊は、土器胎土と同質に焼き縮みするという利点があり、収縮率の異なる焼成済みの土師器や須恵器片を使うよりは有効であったと予想するが、全く焼成粘土塊を出土しない土師器焼成坑群も存在しており、必ずしも、未焼成である必要はなかったのだろう。焼成粘土塊を出土しない富山県向野池遺跡では、焼成坑床面に土師器片が多く遺存している事例があり、焼成道具として使われた可能性を想定している。それを物語るかのように、それらの土師器片には不規則な内面黒斑や破面火色、各破片の色調の違いなど確認できる。床に遺存する土師器片は多く、最終操業段階での使用道具をそのまま残したものかは断定できないが、その可能性が十分ある資料と判断する。

第4項　土師器焼成坑における土師器設置方法の復元

これまで、煮炊具の黒斑観察と焼成粘土塊について述べてきたが、まとめると、煮炊具では小釜・釜・鍋・甑と火色・黒斑の付くパターンが異なり、器種によって設置方法が異なっていた可能性がある。さらに、他器種混成で設置することは想定しにくく、少なくとも主体を占める器種は単一のものに限られていたと予想する。

各器種の設置方法については、小釜が口縁部斜め上方を向く程度に底部境付近接地する角度を主体とするが、胴部中央の接地する横向き設置も一定量を占めた。小釜で特徴的なのは、A面黒斑をもつものにB面黒斑が少なく、B面黒斑をもつものにA面黒斑が少ない現象にある。つまり、これは2段積み上げを物語る資料となり得、定量存在した黒斑・火色なしは、3段積みの可能性も示唆する。土師器焼成坑の奥壁の深さからすれば、3段積み上げも十分に考えられる。このような複数段積み設置が小釜において横向き設置を定量占めさせた要因になるかもしれない。床敷き燃料の十分な燃焼によって、A面黒斑が残らない可能性はあるのだが、小釜にのみこのような傾向が見られたことは重視して良く、確率として複数段積み上げ設置を想定可能と考える。

これに対し、釜はA面黒斑とB面黒斑とが対応関係にあるものが目立ち、平積み設置が想定される。胴部下位にA面黒斑を残すものが大半を占め、口縁部斜め上方を向く設置角度が一般的であったと予想する。胴部A面黒斑を残す横向き設置も存在するが、量的には少ない。長胴器形のため、立ち気味に設置すれば、かなりの高さとなり、その上にさらに積み上げることは焼成坑の深さからして無理がある。立ち気味に設置することによって、個体数を多く焼成坑内に積めることができたのだろう。横向き設置のものは奥壁浅い焼成坑において採用された

可能性が高い。

鍋は、黒斑観察から底部を上にして伏せ気味の角度で設置した器種である。口縁部広い浅鉢器形のため、内面に藁灰が落ち込まないよう、伏せ気味にしていたのであろう。鍋のみで焼成する場合、下段の設置方法が難しい。下段も伏せて焼いたとは考え難く、底部付近に黒斑の見られる個体もあるため、下段は上向きにした可能性もある。しかし、A面黒斑とは言い切れない部分もあり、現段階では不明と言わざるおえない。小釜のB面黒斑の少なさから、小釜の設置の際に、上段は鍋を伏せるように被せた可能性もあるが、今後の課題と言える。

甑は、横倒しにするか、直立で設置するかであり、底径・口径の大きさと胴の長さによって変えていたものと言える。どちらも上に積み上げることは可能で、2段積みを想定可能な器種と言える。

以上の各器種の設置角度・積み上げ方法と焼成粘土塊とはどのような関連性をもつのであろうか。まず、主体を占める斜め設置の小釜や釜については、それを支持するための高さをもった支脚状道具が必要である。しかし、そのような形状の焼成粘土塊は出土していないのが現状であり、低い塊状の粘土塊を代用する方法はやや無理がある。つまり、焼成粘土塊は設置角度を支えるためのものではないことになる。焼成粘土塊の黒斑や圧痕などから、床に接して置かれていたことが想定でき、偏平形を基本とする形状から考えて、製品と床とが接する箇所の隙間に入れるようなものと考えられる。前述したが、製品を床から浮かせることにより、黒斑の発現を抑えたり、火のとおりを良くして燃焼効率を高める効果が想定できる。製品のズレを防止し、角度や位置を固定する働きもあったであろう。また、痕跡としては残っていないが、複数段積み上げ設置する場合の製品どうしの隙間に入れた可能性もある。小型で、偏平な形はそのような隙間に入れるのに適したものだったのだろう。

焼成粘土塊では小釜や釜の斜め角度を支え切れないとすれば、どのような方法が想定できるであろうか。北野博司氏らの焼成実験（北野他1997）では釜を焼成坑の縦中軸ラインに口縁部が並ぶように設定し、口縁部が合わせ口になるように横倒しで設置されている。この設置方法の援用で、2個が対の状態で双方の個体を支える形で合掌式に斜めに据える方法が考えられる。ただ、両個体で支えているため、ズレて倒れる危険性があり、破損の確率も高い。さらに、合掌式に浮いているだけで、その下の空間が無駄であり、量産化の指向からは想定しにくい設置方法である。最も効率的に個数を積める方法としては、奥1列目が奥壁に立て掛けるように並べて設置し、2列目からその奥列に立て掛けるようにして、積める方法である。最奥のものが奥壁に接するため、火回りの効果など、燃焼不十分となる可能性はあるが、支脚なしで斜めに設置する方法は他に考え難い。個体数を多く積める意味でも、効率的な方法であると言える。

引用参考文献

秋山浩三　1994　「キズモノの土器－古代土師器の黒斑への視点と流通－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2　(財)大阪府埋蔵文化財協会

植木町教育委員会　1996　『田子山遺跡』

上村安生　1998　「三重県内の土師器焼成坑について」『研究紀要』第7号　三重県埋蔵文化財センター

北野博司・久世建二・小林正史・徳澤啓一・山田美和　1997　「古代の土師器長胴甕の野焼き方法」『日本考古学協会第63回総会研究発表要旨』　日本考古学協会

望月精司　2002　「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と焼成技術－石川県二ッ梨一貫山窯跡の事例検討を中心として－」『窯跡研究』創刊号　窯跡研究会

《二ッ梨一貫山窯跡出土焼成粘土塊観察表》

番号	出　土　地	類型	長径×短径×厚さ	焼成	黒斑・火色	色　　調	特　　記　　事　　項
1	4焼成坑下Ｐ2	AIa5	9.5× 8.3× 2.0	堅緻	全面火色	5YR8/4、一部2.5YR7/4	側面に切離面をもち、A面に擦痕による皺伴う。
2	オ15下層下灰	〃	6.2× 5.6× 2.6	良好	〃	5YR8/4	工具で削り取った痕跡や粘土縮み皺あり。側面に粘土をちぎり取った跡。
3	下灰	〃	4.9× 4.4× 2.1	〃	〃	2.5YR6/6	粘土の切れ端を集めて塊にしたような粘土塊。
4	〃	AIa3	6.0× 3.6× 1.7	良	乙面一部黒斑	7.5YR8/4、10YR8/3	粘土を握ったような塊、甲面稲藁圧痕僅か付着。
5	オ16中層	〃	6.7× 6.0× 2.6	〃	甲面火色乙面黒斑	2.5YR6/6	粘土継ぎ目あり、甲面押し潰し、乙面稲藁圧痕付着。側面粘土ちぎり痕跡。
6	12焼成坑B2上層	AIa4	4.4× 4.1× 1.4	良好	乙面一部黒斑	7.5YR8/4	乙面に粘土押し付けたもの。甲面に指痕、乙面に砂粒と稲藁圧痕付く。
7	14焼成坑上層	AIb1	6.3× 4.8× 1.2	不良	乙面全体黒斑	甲面10YR8/3	甲乙両面に稲藁圧痕。
8	オ15下層黒灰	〃	6.4× 5.6× 1.1	良好	甲面火色乙面黒斑	甲面5YR5/8	甲面稲藁・籾圧痕。乙面稲藁圧痕、砂粒多食い込み。
9	23焼成坑B1下層灰	〃	5.0× 3.6× 0.8	堅緻	乙半黒斑他は火色	5YR6/6	甲乙面に稲藁圧痕。胎土は混和材含む煮炊具胎土。
10	2焼成坑B2中層	〃	4.5× 3.5× 0.8	良好	〃	2.5YR6/6	甲乙面に稲藁圧痕。甲面に指痕あり、乙面稲藁圧痕多。
11	23焼成坑A2床下	AIb2	7.1× 5.9× 1.0	良	甲面火色乙面黒斑	2.5YR6/8	甲面稲藁圧痕と籾圧痕。乙面には砂粒食い込み。
12	オ14下層下灰	〃	5.8× 3.9× 0.8	良好	全面火色	5YR7/6	粘土塊を押し潰したもので、端部ヒビ割れ。甲面指痕、乙面稲藁圧痕。
13	ウ9中層	AIb3	7.0× 5.3× 1.1	〃	甲乙面一部黒斑	2.5YR6/6	甲面に指痕と木材圧痕、乙面に稲藁圧痕。
14	オ15下層黒灰	〃	4.3× 4.2× 1.4	良	甲面中央黒斑	10YR7/1、10YR8/3	乙面平坦で、稲藁圧痕多。
15	2焼成坑B2下層	〃	6.5× 5.5× 1.0	良好	甲乙面一部黒斑	10YR8/3、7.5YR8/3	甲面指押さえ痕、乙面稲藁圧痕多。
16	2焼成坑C1上層	〃	6.1× 4.8× 0.8	〃	全面火色	5YR7/6	甲面指痕と稲藁圧痕僅少、乙面稲藁圧痕極多付着。
17	23焼成坑A1中層	〃	5.7× 4.9× 1.3	〃	〃	5YR7/6	乙面稲藁圧痕。
18	21焼成坑A1上層	〃	6.3× 4.6× 1.4	堅緻	〃	10YR6/6、5YR6/6	甲面指痕、稲藁僅少、乙面並んだ稲藁圧痕。籾圧痕も付着。焼けヒビ有り。
19	16焼成坑床	AIb5	9.6× 8.4× 1.3	良	なし	7.5YR8/4	粘土を指で大きく延ばしたもの。甲面に極僅少の稲藁痕。
20	4焼成坑上層	AIb6	4.6× 3.5× 0.9	〃	甲乙面一部黒斑	7.5YR8/3	乙面に布目圧痕。
21	4焼成坑B2中層	AIc5	3.4× 2.3× 1.6	〃	なし	10YR7/3	粘土紐をまとめて塊状としたもの。
22	21焼成坑床土	〃	4.5× 2.5× 1.8	堅緻	甲面火色乙面黒斑	5YR6/6	切れ端状の細い粘土紐をまとめて塊状としたもの。
23	エ11下層下灰	〃	6.0× 3.7× 1.8	良好	乙面一部黒斑	5YR7/6、7.5YR7/6	粘土紐をまとめて握り塊状としたもの。握った指痕あり。
24	下灰	AIc6	3.8× 3.1× 2.0	〃	全面火色	5YR6/6	粘土紐をまとめたもの。甲面に布目圧痕が付く。
25	2焼成坑B1下層	AId1	5.8× 4.2× 1.2	〃	〃	5YR6/6	成形途中の粘土板状片、焼成前破面もつ。甲乙面稲藁圧痕。
26	2焼成坑B2中層	〃	4.5× 3.5× 0.8	〃	乙半黒斑他は火色	2.5YR6/6	甲乙面に稲藁圧痕。甲面に指痕あり、乙面稲藁圧痕多。
27	23焼成坑B1上層	AId5	6.2× 6.1× 2.0	〃	甲乙面一部黒斑	10YR8/3	板状粘土を2枚折り重ね粘土塊としたもの。甲面粘土紐状。
28	11焼成坑床下	AId1	8.1× 4.9× 1.3	〃	全面火色	5YR7/4、10YR8/3	成形途中の粘土板状片、焼成前破面もつ。甲乙面稲藁圧痕。胎土混和材含。
29	5焼成坑上層	AId′5	5.9× 2.2× 1.0	〃	端部黒斑	2.5YR6/6	薄い粘土板(切れ端)を折り曲げたもの。
30	下灰	〃	3.8× 2.9× 1.9	良	乙面火色	7.5YR8/4、5YR7/6	薄い粘土板(切れ端)を折り重ね、塊状としたもの。
31	〃	AIIb1	7.2× 1.8× 1.2	〃	なし	5YR6/6、7.5YR8/3	粘土紐。端部指でつぶしている。その部位で稲藁圧痕。
32	9焼成坑B2	〃	5.3× 1.2× 1.0	〃	全面黒斑状	7.5YR4/1	粘土紐。指痕有り。稲藁圧痕僅少付着。
33	1土器溜まり下層	AIIb2	4.6× 1.1× 1.1	〃	なし	5YR6/6、7.5YR7/4	粘土紐。
34	下灰	〃	4.5× 1.0× 0.8	〃	一部火色	7.5YR6/6～8/4	粘土紐。端部指でつぶす。
35	23焼成坑B1上層	AIIa2	3.8× 2.2× 2.1	〃	一部黒斑	10YR8/3	薄い粘土板状を巻いて棒状にしたもの。
36	23焼成坑B2床下	AIIIa2	7.3× 4.1× 1.0	〃	〃	7.5YR8/4	回転ヘラ切り痕をもつ薄い粘土盤状の成形不要粘土片を握ったもの。
37	1土器溜まり下層	〃	7.5× 4.1× 0.7	〃	一部火色	10YR8/4	回転ヘラ切り痕有す薄粘土盤状粘土を握ったもの。握った指痕残す。
38	エ11下層下灰	AIIIb1	5.6× 4.1× 0.5	良好	甲面火色乙面黒斑	2.5YR6/6	甲面Ha叩き成形痕もつ成形不要粘土片。端曲がる。乙面に木材痕。
39	4焼成坑A1中層	AIIIb2	4.2× 3.4× 2.3	良	乙面一部黒斑	7.5YR8/4、5YR6/6	甲面叩き成形痕もつ成形不要粘土片を握って丸めたもの。
40	13焼成坑B1下層灰	〃	7.5× 4.5× 1.6	〃	乙面一部黒斑	10YR8/2	甲面叩き痕、乙面当て具痕もつ成形不要粘土片を2枚折り重ねたもの。
41	12焼成坑A2上層	〃	6.5× 2.9× 1.3	堅緻	全面火色	5YR6/6	須恵器甕叩き成形痕。焼成前破面もち、粘土滓付着。成形途中破損片転用。
42	23焼成坑B2床土	〃	8.9× 6.0× 1.7	良	甲面火色	2.5YR6/6、7.5YR8/4	須恵器甕叩き成形痕。焼成前破面もち、粘土滓付着。成形途中破損片転用。
43	2焼成坑床下P3	AIIIc2	5.3× 4.0× 1.0	〃	全面火色	5YR6/6	口縁部切れ端を曲げて、粘土塊。ロクロナデ痕あり。
44	14焼成坑床下土坑	AIIId2	7.2× 2.8× 1.4	不良	全体酸化不十分	10YR7/1	成形途中の胴端切り取り片。切り面シャープ。
45	2焼成坑床下P7	〃	6.7× 1.9× 1.4	良	甲面黒斑	10YR8/4、7.5YR7/6	成形途中の胴端切り取り片。切り面シャープ。
46	23焼成坑B1床	〃	4.3× 3.0× 1.2	良好	全体酸化不十分	10YR8/2、10YR4/1	成形途中の胴端切り取り片。切り面シャープ。切った際の縮み皺有り。
47	14焼成坑床下土坑	AIIIc2	5.3× 2.2× 1.0	良	なし	7.5YR8/4	成形に伴う三角形切り取り片。切り面シャープ。
48	2焼成坑C1中層	転用	6.0× 2.5× 1.4	堅緻	一部酸化他は黒斑	7.5YR6/6	須恵器長頸瓶高台片を転用。2次的に野焼き酸化焼成されたもの。
49	19焼成坑B1上層	BⅠ	9.0× 7.8× 1.9	良	表面酸化裏面還元	表7.5YR8/4～7/6	表面ナデツケ痕、裏面剥離痕。焼成坑貼壁土。土は大粒砂混じる脆いもの。
50	11焼成坑貼壁土	〃	7.5× 6.5× 2.5	〃	表面酸化	表7.5YR8/4	表面ナデツケ痕、裏面剥離痕。土は同上のもの。裏面藁スサ混在。
51	8土坑	AIb3	6.4× 5.6× 0.9	良	乙面黒斑	7.5YR7/3	甲面稲藁圧痕僅少。乙面に粘土の縮み皺。
52	8土坑下層	〃	5.9× 5.3× 1.5	良好	全面火色	5YR8/4	甲面に籾圧痕僅少。
53	8土坑	AIb5	4.3× 4.1× 1.2	良	なし	10YR8/2	粘土を潰して偏平な円盤状としたもの。
54	オ19、7号灰Ⅱ暗土	AId1	4.3× 3.1× 1.6	〃	乙面黒斑	10YR8/2	薄い板状粘土を折り曲げたもの。乙面に稲藁圧痕僅少。
55	オ19、7号灰黒灰	AIc1	3.5× 3.0× 1.7	〃	乙面一部黒斑	7.5YR7/4	粘土切れ端を丸め、乙面に押し付けたもの。乙面稲藁圧痕僅少。
56	7号灰	AIc2	3.6× 2.7× 2.0	〃	〃	5YR6/6	粘土紐を丸めた粘土塊。
57	オ19、7号灰下灰	AIIIb2	3.3× 2.2× 1.3	良好	全面火色	7.5YR7/4	土師器釜底部叩き出し部分の成形破損粘土塊。
58	オ19、7号灰黒灰	AIIIc2	5.4× 4.3× 2.0	良	〃	5YR6/6	成形途中の切れ端を利用した粘土塊。甲面に擦痕。側面にちぎれ痕あり。
59	8土坑	AIIIe1	4.2× 3.3× 1.3	〃	なし	10YR4/1	長頸瓶の切り取り円盤状呈す。中央に未貫通の刺突有り。

第2節　二ッ梨一貫山窯跡出土須恵器貯蔵具の成形痕跡

第1項　はじめに

本稿では二ッ梨一貫山窯跡出土の各時期の須恵器貯蔵具について、その成形技法復元を前提とした成形痕跡提示を行うものである。対象とする器種は、瓶A・瓶B・瓶C・瓶D・瓶Eなどの長い口頸部をもつ瓶類、横瓶、甕の3器種についてであり、短い口頸部をもつ壷類については、特別取り上げることはしない。壷類については、底部円盤から粘土紐を順次上へ口縁部まで積み上げ成形し、最終工程でロクロ回転によるナデ・カキ目で形を調整するものと考えている。粘土積み上げ成形時に叩き成形を伴うものが定量存在するが、多くは最終工程の調整で消されている。胴部薄作りで、胴張り器形を呈す壷Aや肩の角張る器形をもつ壷Eなどに付いては、積み上げ成形後、ロクロ回転を使ってひき延ばしが行われたものと言えるが、基本的な成形技法は同様の範疇であったと現段階では想定している。ただ、胴部や肩部を張らせる際に粘土自重によって器形を支え切れない可能性もあり、この点に関しては、再考の余地がある。内側からのコテの使用も含め、検討が必要であろう。

さて、今回の資料では、このような器種に恵まれていないため、上述した瓶類、横瓶類、甕類の3器種について、成形痕跡を述べることとする。

第2項　瓶類の胴部成形と口頸部成形痕跡

1．胴部風船技法による長頸瓶

当成形技法を行う長頸瓶器種は7世紀後葉段階に出現し（Ⅰ1期の林タカヤマ窯では出現しておらず、Ⅱ1期の柳田タンワリ窯では出現している）、8・9世紀に長頸瓶の主体を占めた器種である。出現期の器形はやや胴の張り出しが丸いが、8世紀には算盤型胴部をもつ肩張り瓶Aに定型化し、Ⅴ2期に位置付けられる3号窯灰原の時期をもってほぼ消滅する。瓶Aの消滅と同時に長頸瓶の主体となるのは、肩丸器形でやや胴部長い瓶Bで、10世紀まで存続する。瓶Bの出現は8世紀前半代にあるが、当期は水瓶同様金属器模倣の特殊器種であり、普及型を呈すのは8世紀後葉段階と言える。

さて、胴部風船技法とは、胴部成形段階で胴部上端を一度閉塞して中に空気を閉じ込める、つまり胴部を風船状態する技法（北野2001A）である。この技法は、須恵器製作技術の根幹にある陶質土器にもともとあり、須恵器生産伝播とともに朝鮮半島からもたらされたものと言える。ただ、当技法が定着して行くのは、6世紀の提瓶からであり、7世紀の平瓶へと受け継がれる。本来的には口頸部を胴部主軸とは異なる場所に接合させるための異形土器に使用されたものであるが、ただ、7世紀中頃以降の平瓶では胴部を偏平にし、肩を付けるよう胴部変形を意図している。7世紀中頃か後半に出現してくる瓶Aの風船技法は、この平瓶からきていると言え、7世紀後半代が、胴部変形させる風船技法の確立期と言えよう。7世紀代の平瓶に空気抜きの穴が確認される事例があり、その可能性を裏付ける（岡山県寒田4号窯や兵庫県思い出遺跡、陶邑窯跡群TK116号窯など）。

さて、瓶Aの成形方法であるが、ロクロ成形台上で通常の胴部成形を行うように、粘土紐積み、回転ひき出し成形後、胴部上端を粘土円盤ないしはそのままひき絞って閉塞する。風船状態にした胴部を中の空気を抜きながら調整して偏平にしてゆき、肩を張らせて、算盤玉型に変形する。その後、成形台から切り離して倒立させ、成形台上に固定し、高台部分を貼り付け成形して行く。高台成形後、肩が粘土自重ないしは口頸部の重さに耐え得る程度の乾燥時間を挟み、再び、成形台上に固定して口頸部成形をする。胴部に頸部穴を円形に切り取り、別作り成形しておいた口頸部を貼り付け、ないしは頸部の上に粘土紐を巻き上げて頸部上で成形する。

胴部を風船のままにして、高台と口頸部を成形することは胴部変形を生じさせないという意味で、有効な方法と言える。この一度切り離した胴部をロクロ成形台に再固定する場合には、高台成形時もそうであるが、口頸部成形時にも器体を保護して固定するための湿台（シッタ）が必要となる。当窯跡資料ではこのような目的で使用されただろう湿台痕跡は確認されず、南加賀窯跡群資料及び北陸の資料を見ても、ほとんど確認されない。他地域では稀にだが、湿台痕と思われる粘土カス付着や粘土が剥がれた痕跡、布付着痕が胴部下位に巡る事例が確認されており（向井2001）、このような成形台固定道具が使われていた可能性はある。ただ、通常は痕跡の残らな

いような湿台を使用したか、またはこのような痕跡を意識的にナデ消していた可能性があり、痕跡からは湿台使用の有無を考えるのは難しいのが現状である。胴部上での口頸部成形を行っていなければ、湿台痕は残らない可能性もあり、この点から考えれば、湿台痕の確認がないことは重要な痕跡とも評価可能である。

以上のような風船技法を使った胴部成形方法は、瓶Bでも同様で、肩張り偏平器形、肩丸球胴・長胴気味器形にかかわらず、当技法が使われる。ただ、胴部閉塞する際の方法が異なると言われており、以下に当窯跡資料を使って、器形の変化とどのように対応するのか、その痕跡を提示しながら、論じる。

2．長頸瓶の胴部閉塞痕跡と風船技法（第281・282図）

第281図に示したように、胴部閉塞痕跡には、内面に成形時胴部端が確認でき、その上に粘土円盤が貼り付けられるA類と内面に胴部端の確認ができないものだが、外面に粘土円盤貼り付け痕や断面で円盤の貼り重ねが確認できるB類、内面胴部端及び外面円盤貼り付け痕が確認できず、胴部上位がかなり薄くなっているC類に分類される。A～C類いずれも、頸部内面に円形切り取りの際の切り面が明瞭に確認できるもので、一度胴部風船にしたものであることを物語る。ただ、円盤切り取り後で口頸部成形前に切り面をなでつけるものがあり、このようなものはダッシュを付した。

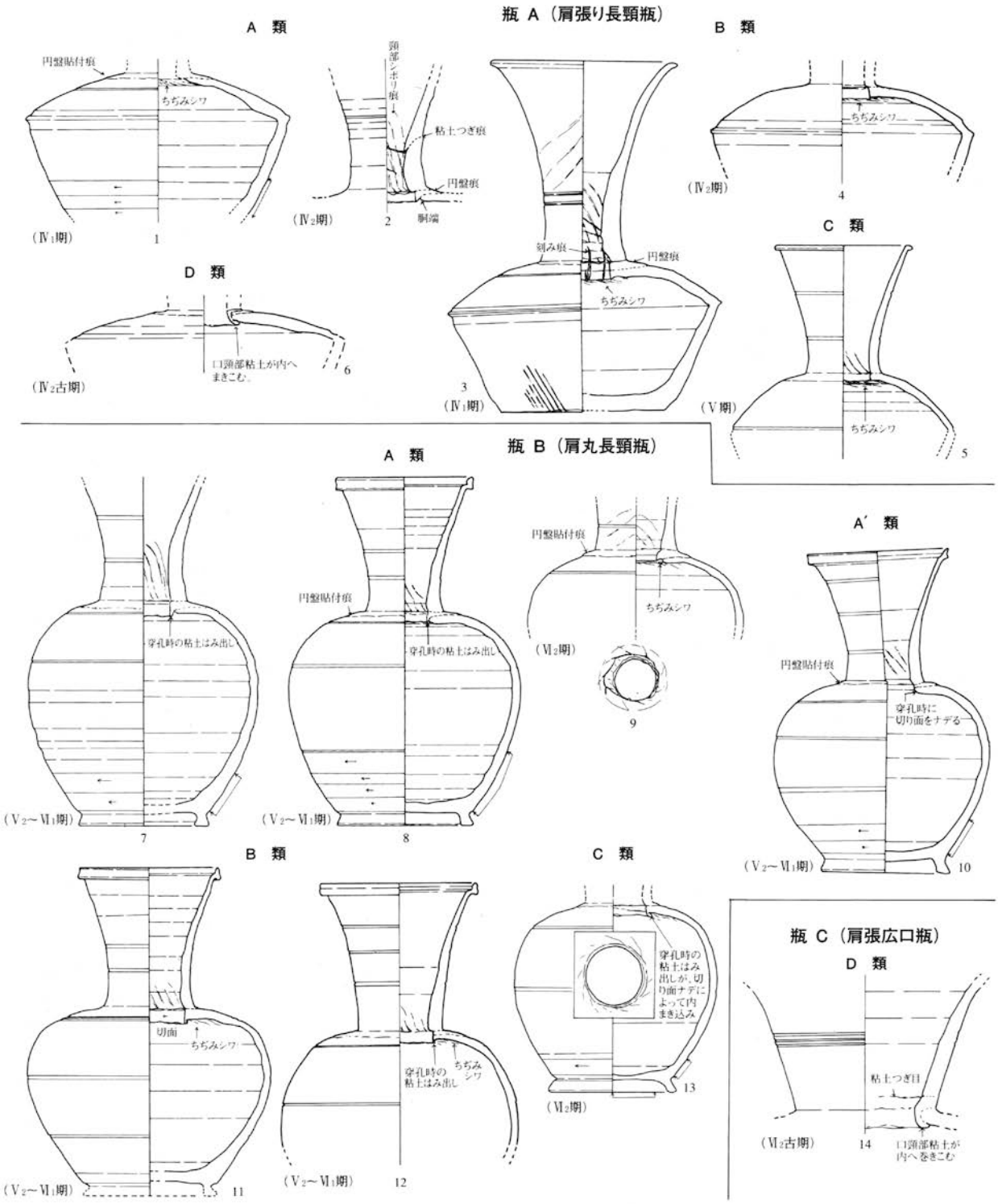
A類は概して貼り付け粘土円盤の小さなもので、南加賀窯全体を見ても、東海猿投窯のような大型円盤を付す長頸瓶は確認できない。内面胴部端は丸く粘土円盤重なりによってこの部分がやや下がる感じとなり、胴部端を絞った際の粘土縮み皺の寄るものが定量確認される（1・9、写真②）。頸部周縁の胴部外面には粘土円盤の重なり痕が定量確認されるが（7～9、写真①）、ナデによって消されるものも多く、口頸部接合の際の頸部粘土盛り上がりとの見極めも難しい。明らかに円盤痕と思われるものを写真②に提示した。当類型は瓶A、瓶B両方に確認できるが、瓶Bのものはかなり円盤が小型化しており、切り取り径と同じ程度の円盤を貼っているものが多い（7～10、写真②）。

A類以外で、風船技法による胴部閉塞痕跡は、B類とC類があるが、胴部端を極力絞ったが絞り切れず円盤で閉塞したものか（B類）、胴部端を絞りきれたたものか（C類）の違いであり、仮に絞り切れたとしても、その部分の器肉が薄いために補強のための円盤を貼付したことも想定できる。その場合は、B類ということとなるが、両者とも、極力胴部を絞る意識があり、そのため、内面胴部端には軸中心へ螺旋状に巻き込むような縮み皺が残る場合が多い（3～5・11～13）。つまり、B・C類の識別は、内面のみでは判断できず、外面の粘土円盤貼付痕（12）と断面の粘土の重なり（3）が判断材料となるが、これらの痕跡を確認できるものは稀であるのが現状である。ただ、概して、B類は円盤を貼ったために胴部端付近が厚くなる傾向があり、C類を特定する場合はその点が有効な判断材料（5・13）となる。当窯資料では、B・C類とも、瓶A・瓶Bに確認でき、従来言われているような、瓶B統一後にC類が急増する傾向は確認できない（北野2001A）。円盤閉塞と胴部器形とは因果関係をもたないとは言い切れないが、南加賀窯では瓶A出現当初からA類でも小型円盤のものが多く、B類も一部確認できるなど、胴部端を絞り、胴部閉塞穴を小さくする意識が強かったものと言える。それは技術的な問題や粘土性質の問題など、複合的要素があると想定されるが、尾張猿投窯の瓶A・Bに見られる大型円盤閉塞を考えると、伝統的な技術系統を感じる。越後でも、猿投窯系器種・器形の導入される上越の窯で大型円盤閉塞であることはその裏付けとなろう。

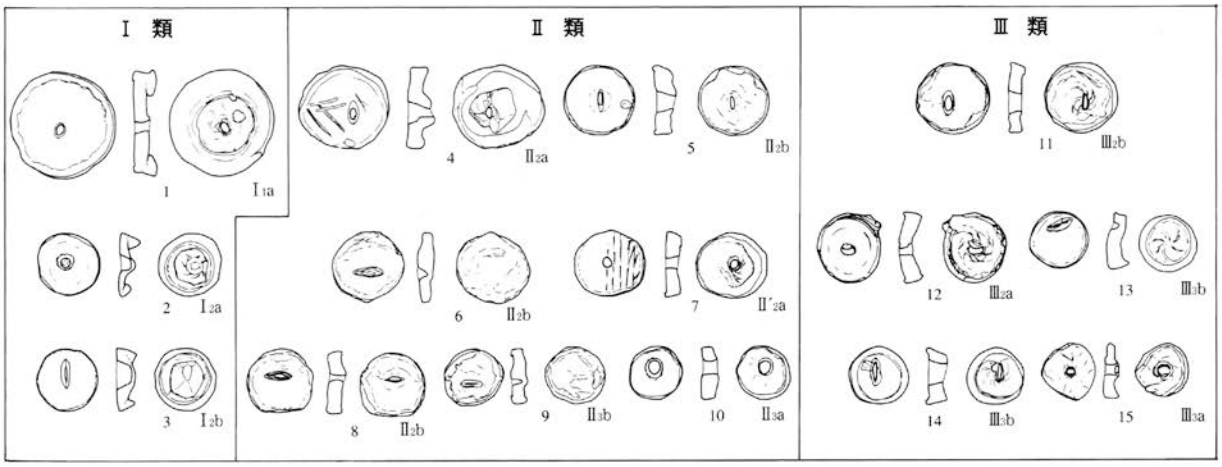
胴部ひき絞りの痕跡と想定されるC類について、南加賀窯では8世紀後半には確認されるのであるが、それ以前より存在する技術であることを北野博司氏は指摘している（北野2001A）。長頸瓶の場合、胴部中心を切り取るために、確実にひき絞っているのかという問題はあるが、口頸部を別の場所に接合する提瓶や平瓶では絞りきりの確実な事例が認められる。極小円盤貼り付けとともに7世紀の確認例が目立ち、古い時期には定量存在していた技術であったと言える。逆に明瞭な円盤貼り付けや大型円盤はこの時期少なく、瓶A出現後になって定着したものと言え、胴部成形工程でそのまま閉塞できれば、その方が工程としては楽なのであろう。筆者は、瓶A出現後増加する円盤貼り付けはこの部分での重さに耐え得る強度補強に目的があったのではないかと考えている。かなり絞り込んでいるにもかかわらず、粘土円盤を貼付することはそれを示すだろうし、胴部上位中心付近が薄くても構わない提瓶・平瓶に、絞りきりや極小円盤が目立つのはそのためだろう。そのように考えれば、円盤貼

付しない器種は瓶A・Bでは存在しにくいこととなるが、現実には、南加賀窯では定量存在する訳であり、粘土の性質などとも関連するのかもしれない。

さて、当窯跡資料では、長頸瓶などの頸部を円形に切り取った際の粘土円盤が多く出土している。須恵質に焼かれたものではなく、8世紀後半から9世紀前葉の土師器焼成坑の中で窯道具として使われ、土師質に焼けたものである。第282図に分類して提示してあるが、Ⅰ類は内面に胴部端が付着しているもので、胴部成形痕跡ではB類に該当する小円盤貼り付けの切り取り円盤と言えるものである。Ⅲ類は内面に絞りによる縮み皺が巻き込むように確認されるもので、これはC類の胴部絞りきりに伴う切り取り円盤と言える。以上のような目立った痕跡



第281図　瓶A・B・Cの胴部端と口頸部成形痕跡（S=1/4）



第282図　瓶類切り取り円盤分類図（S=1/4）

のないものをⅡ類としているが、貼り付け円盤部分にあたるものと考えており、A類に該当するものが多くを占めると考えている。ただし、C類も含まれる可能性があり、全てがA類とは断定できない。また、円盤径により、5㎝以上の1類、3～5㎝の2類、3㎝未満の3類に細分し、穿孔・刺突の穴の形により、円形のa類と長楕円形のb類に細分する。円盤径は瓶類の胴部穿孔径を示すものであり、径によって大まかな器種の想定が可能である。当期に存在する瓶類は、瓶Aが大半を占めるが、広口の瓶C・瓶Dや水瓶も少なからず存在し、後出するものは瓶Bの出現期にもあたっている。当期の瓶Aと瓶Bでは胴穿孔径に大きな差はなく、概ね2.4～4.8㎝程度、25点計測したものの平均値では3.6㎝の径となる。これは円盤2類に該当し、円盤総量の凡そ7割を占めることからも、それが伺われる。円盤2類ではⅡ類、つまり、A類閉塞痕跡が多く、瓶A・BはA類が主体を占めることとなる。ただ、Ⅰ類、Ⅲ類も定量存在し、それは瓶A・Bの先に示した痕跡とほぼ合致する。円盤3類は穿孔径の細さから、水瓶が想定される。技法痕跡ではⅡ類とⅢ類に限られ、特に絞りきり痕跡をもつⅢ類が目立つ。小型の口頸部をもつ瓶類では重量に耐えるための円盤貼付は不要なため、絞りきりが主体を占めた可能性がある。今回、水瓶の胴部成形痕跡は示していないが、当期の南加賀窯産水瓶は絞りきりC類が確認されており、この結果にほぼ合致すると言える。最後に、円盤1類であるが、長頸瓶の中にこれだけの大型径をもつものがないとは言いきれないが、広口の口頸部をもつ瓶Cや瓶Dの可能性が高い。瓶C・Dの成形痕跡については後述するが、瓶Dに円盤切り取り痕跡のあるものがあり、その可能性をもつ。

円盤には全て未貫通ないしは貫通の孔が外面側から内面側に穿たれている。貫通していないものが3割近くを占めており、穴を開けることに目的があったのではないことを示している。刺突に近い行為であり、切り抜いた円盤を剥ぎ取るのに突き刺した痕跡であろう。刺突工具の種類が細い棒状のa類と先の尖ったヘラ状のb類とがあり、出土する土師器焼成坑ごとに工具痕跡種類がまとまる傾向がある。瓶類成形に使われる道具類を刺突具として使ったものと考えられるが、どのような成形に使われたものかは判断が難しい。なお、この刺突孔について、風船技法に伴う変形の際の空気抜き穴である可能性も指摘されている（北野2001A）。長頸瓶類には平瓶で確認できるような空気抜き穴を確認できる事例がなく、後で切り取る円盤部分に空気穴を開けていた可能性が考えられている。当資料の円盤の多くが未貫通であることから、その可能性は否定されるが、ただ、成形時に空気抜き穴として使っていた部分に剥ぎ取り時の刺突を行った可能性もある。風船状態での乾燥時、空気圧による破裂を防ぐため、空気抜き穴を開けておくのは常識とされており、その方向性で刺突痕を考えておく必要があろう。

3．長頸瓶の口頸部成形痕跡と成形方法（第281図）

上述したように、長頸瓶は風船技法による胴部成形を行う器種であるが、口頸部成形のための円形切り取り後の工程については、口頸部別作り成形後の接合と胴部上で粘土紐巻き上げないしは粘土紐積みひき出し成形とが考えられる。尾張猿投窯の長頸瓶資料では、頸部つけ根を胴部内面に大きく延ばし、巻き込ませるようにしており、別作り接合ではなく、後者の口頸部胴部上成形が一般的であったと理解されている（尾野2001）。当窯資料でも、頸部粘土が胴部内面へ巻き込む瓶A資料があるが（6、B・C類の風船技法によるものと思われるが、痕

跡としては切り面が確認できず、頸部粘土が巻き込むなど広口瓶に見られるものと同様のＤ類痕跡を呈す）、１例のみであり、例外的である。粘土巻き込みはないが、胴部円形切り取り部分から下へ粘土がはみ出す事例は多く確認される。このはみ出しは円形に切り取る際の外面から内面へ切り取り工具が差し込まれた際の粘土カスであり、切り取り円盤でも同様のことが看取できる。切った面はシャープなものが多く（11）、かなり乾燥した状態で切り取りが行われている。円形切り取り後、切り面から胴部内面にかけてナデを施すもの（10）や粘土カスを指で押し付けたようなもの（13）もあるが、このようなものは少なく、切ったままである場合が多い。円形切り取り後に胴部上で口頸部を成形する場合、その上で頸部のヨジレ痕（絞り皺）ができるほどであるから、胴部に口頸部成形の粘土紐がよく接着していなければならない。つまり、猿投窯のような頸部粘土を胴部側へ巻き込ませる必要があるわけで、当窯の事例はそのような方法によらない可能性を示す。さらに、２や12のような円盤切り取り径と頸部径とが異なるものもあり、別作りで成形したものを接合したことを示唆する。頸部細い水瓶や胴部中心軸上に口頸部をもたない横瓶や平瓶に関しても切り取り径の合わないものが定量確認できており（横瓶には三日月状の頸部切り取り片の出土することがある。これは別作り口頸部の頸部径の合わない部分を切り取ったものであり、別作りを示唆する資料と言える）、風船技法の場合、口頸部別作りが主体的であったと考える。頸部粘土の胴部内面への粘土巻き込みに関しては、口頸部接着のためのジョイント粘土紐である可能性も考えておく必要があろう。また、瓶Ａの口頸部内面に、粘土紐巻き上げの痕跡が残るものがある（２）。これに関しても、胴部切り取り穴と頸部径はずれており、別作り接合と考えている。粘土紐巻き上げ痕は下位でのみ確認でき、中程から上位では見られない。粘土紐を二巻き程度して、ひき上げたものだろう。

補注　別作りの口頸部を胴部に接着する際、乗せただけで接着するものか、接着粘土の必要性などを想定していた。しかし、長頸瓶の復元実験を行って見て（北陸古代土器研究第９号添付ＣＤ）、口頸部側の接着面を水に濡らして、胴部にそのまま押し付けただけで、十分に接着できた。口頸部別作りであっても、頸部での剥離の危険性はさほどないと感じた。

４．瓶Ｃの成形痕跡と成形方法（第281図）

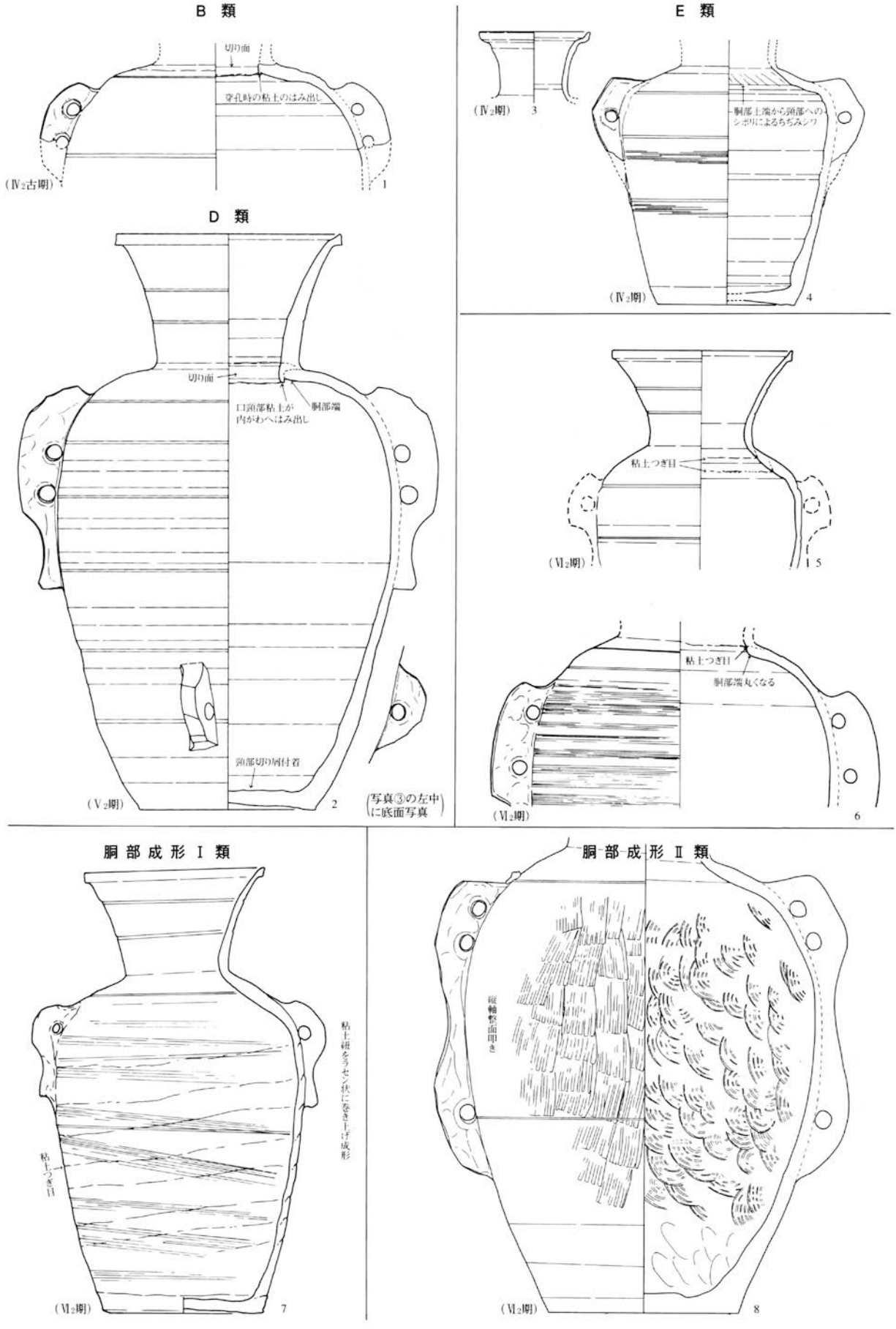
瓶Ｃは頸部は太いが、肩張り胴部器形を呈す点で、長頸瓶と同様の胴部成形を行った可能性のある器種である。当資料では胴部は出ていないが、他の南加賀窯資料を見ると、胴部屈曲箇所の痕跡や屈曲角度など、長頸瓶と類似する特徴を有する。当資料では胴部端に口頸部の粘土が巻き込んでいるため、端部が切っているのか判断できないが、他の南加賀窯資料では切り面の確認できるものがあり、胴部風船技法によるものであると想定しておきたい。それを示すように、長頸瓶切り取り円盤より大型径をもつ円盤１類が出土している。切り取り径が大きいために円盤に胴部端が付いており、胴部内面には円盤貼り付け痕は残らない資料である。

胴部風船技法により成形し、円形に切り取り後、口頸部成形に入るが、瓶Ｃでは長頸瓶のような頸部のズレや切り面未調整はなく、14のような頸部粘土の巻き込むものが主体的である（Ｄ類）。胴部端に粘土紐が巻き付くようにしてあり、胴部上で紐積み＋ロクロひき上げ成形した可能性が考えられる。ただ、広口瓶は長頸瓶と異なり、口頸部接合後でも頸部内面の調整が可能なものであり、はみ出し部分の切り取りも容易である。このため、頸部での径のズレはなく、頸部接着のため粘土補強することも十分に可能である。現段階では根拠資料に乏しいが、口頸部別作り成形後に胴部に接合した可能性を考えたい。後述するが、同じ広口の口頸部を呈す瓶Ｄでそれを示す資料が出ており、それを根拠としたい。

５．瓶Ｄの成形痕跡と成形方法（第283図）

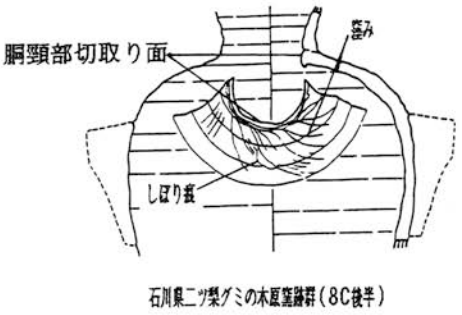
瓶Ｄは平底、長胴器形の広口瓶であるが、ここでは双耳瓶全般を扱う。双耳瓶出現期（Ⅳ期）は短胴器形であったものが、Ⅴ期以降長胴化し、Ⅵ期に長胴瓶として定型化される。

Ⅳ期の短胴器形は、比較的薄手のものであり、肩から頸部にかけて丸く張るような器形を呈すものが多い。粘土紐積み痕跡の残るものはなく、ロクロで薄くひき上げている。胴部端の痕跡には切り取り面の確認できるＢ類と明瞭な胴部端をもたず、絞り皺をもちながら頸部で屈曲するＥ類とがある。Ｅ類は、頸部へ向かって上へ引き上げる形状を呈し、頸部箇所が最も薄くなる特徴をもつ。胴部端を上へつまみ上げて、頸部を絞って作り出し、開口したまま、口頸部へと継ぎ足してロクロ水挽き成形したものと考えられる（「開口法」北野2001A）。当類型はなで肩器形であることと頸部屈曲が弱く、その部分で薄くなる特徴をもつ。Ｂ類は胴部上位が丸く張った器



第283図　瓶D（双耳瓶）の胴部端と口頭部成形痕跡 及び 胴部成形痕跡（S=1/4）

形を呈すもので、胴部端の切り面が明瞭なものである。胴端には外面から切り込んだ際の粘土カスのはみ出しが見られ、頸部外面に口頸部接合痕が明瞭である。風船技法による長頸瓶のB類と同様の痕跡と言えるものであり、また、ほぼ同時期の南加賀窯資料（二ッ梨グミノキバラ窯窯跡）ではひき絞りの螺旋状皺が確認される（C類）など、風船技法痕跡を止める。胴部風船技法による理由は、著しい加圧変形を伴わないため、根拠が希薄であるが、この類型の肩から頸部への丸く張り出す器形と瓶B器形の類似性から、このような器形においても風船技法による加圧変形が必要であったと理解する。



石川県二ツ梨グミの木原窯跡群（8C後半）

第284図　瓶DのC類技法痕跡
（1/4、笹沢2001より転載）

風船技法痕跡を止めるものはV期にも存在する（2）。大型の長胴を呈するが、肩から上は丸く張り出す器形で、胴部端には口頸部からの粘土が巻き込む（D類）。口頸部は重厚で、開口法の口頸部とは大きく異なる。当痕跡は瓶Cと類似する特徴をもつもので、胴部端に頸部粘土が巻き込む理由については、太い頸部を有するため頸部内面の調整が可能であったためによると考えている。さて、当資料には口頸部が別作りであった可能性を示す資料が出ている。口頸部別作りである場合、胴部切り取り径と合わず、径がズレることは長頸瓶で述べたが、広口の場合は、はみ出した胴部端を切り落とすことができる。横瓶などに確認される三日月状のものであるが、当資料でも内底面に頸部径を合わせるためにはみ出し部分を切り落としたと思われる粘土切り屑が付着している。3片が等間隔に付着しており、切り落としたそのままで焼かれたものと考える（写真③の左列中）。風船技法による広口瓶類の口頸部成形方法を示す良好な資料と言えよう。

風船技法はV期まで一部残るが、大半は開口法に転換しており、Ⅵ期には開口法に統一される。当期の開口法は、胴部上位で厚手を呈するが、頸部へかけて薄くなり、屈曲弱く、薄手の口頸部へと外反してゆく、なで肩器形のものである。胴部上位の絞り痕はなく、この部分で粘土継ぎ足し痕跡が多く見られる（F類）。粘土を継ぎ足しながら、ロクロ挽き出しによって口頸部を成形していったものと理解する。胴部成形は壷F同様、粘土紐積み成形＋ロクロナデ・カキ目調整するものである（胴部成形Ⅰ類）。7のように粘土紐痕跡が明瞭に確認できるものがあり、それでは螺旋状に粘土紐を巻き上げているのがわかる。同様の事例は、時期は異なるが小甕や壷Fにもあり、粘土紐積み上げにおいては巻き上げ状となるものが基本であったろう。また、粘土紐の幅を観察すると、2㎝前後であり、さほど紐が延びた感じはない。V期以降、増加する長胴器形の双耳瓶はロクロでひき上げたというよりは、ロクロは調整程度が大半であったのではないかと考える。胴部成形の大半は上記のものであるが、一部大型品で叩きの施されるものが確認されている。叩きは紐積み成形後に施されるもので、胴部下位から肩付近にかけて下から上へ縦軸に施される（胴部成形Ⅱ類）。調整的に施される縦軸整面叩き（望月2001）であり、Ⅵ期のなで肩中型甕に施されるものと同様のものと理解する。

6．瓶類の成形方法に関する私見

これまで瓶類の成形痕跡について、二ッ梨一貫山窯跡出土資料をもとに述べてきた。長頸瓶や水瓶、浄瓶など頸部細く頸の長く伸びる器種については、胴部を風船技法により成形し、口頸部を別作り後、接合する方法を想定した。他地域では、口頸部成形を胴部上で粘土紐を巻き、ロクロで挽き上げるものと想定するものもあるが、南加賀窯事例ではそれを積極的に示す資料が確認できなかった。また、胴部切り取りの内面に口頸部から粘土が巻き込む事例に関しても、この部分での別作り口頸部を接着させるためのジョイント粘土の可能性を提示しておきたい。高台成形の際に、一度胴部は成形台からはずす訳であるから、再度胴部を成形台に固定して、口頸部を挽き出すよりも口頸部をまとめて製作し、接合した方が合理的ではないかと考える。口頸部にロクロによるヨジレができるほどの挽き出しであるから、胴部上成形の場合、口頸部粘土の胴部への接着は十分でなければならないし、胴部の成形台への固定も湿台などによって高台を保護する必要性がある。頸部長い長頸瓶で湿台痕の確認事例は現在のところなく、湿台確認例はいずれも口頸部が短いものに限られる点を考慮すれば（森内2001）、口頸部の胴部上成形は、口頸部の短い器種に、主に採用された作り方ではないかと考える。

胴部を風船技法による器種は、長頸に限らず、太い頸部をもつ広口瓶類においても確認されている。頸部の内

側が切られていることをその根拠としているが、開口法のなで肩器形と異なり、胴部上位器形が張る点も一度風船にして胴部上位を加圧変形したことを示すものと理解している。胴部を風船にする意図は胴部を加圧変形することにあると理解されているが、それは必ずしも算盤型にすることや胴部偏平にすることではなく、胴部上位の張り方にあると言える。また、胴部を倒立させて高台を成形する際にも、風船にしていれば、変形の危険性を防ぐことができよう。さらに、長頸瓶の場合、口頸部の重量を支える強度までに胴部だけの状態で乾燥させることも重要な要素ではなかったかろうか。双耳瓶の風船技法と考えているものと開口法と考えているものとで、口頸部の厚さが大きく異なっていることがその根拠と言える。胴部上位からそのまま粘土紐を継ぎ足して口頸部へと成形して行く方法では、口頸部を薄く作らなければ、口頸部の重量に胴部上位が耐えられなかったのだろう。それは甕に関しても言えることであり、短頸と長頸とが口頸部別作りの大きな要因ではなかったかと考える。

第3項　横瓶の胴部成形痕跡と成形方法

1．横瓶の胴部成形方法と両面閉塞・片面閉塞（第285図）

横瓶はⅣ期の資料のみで、Ⅴ期以降は消滅している。胴部を閉塞して風船状態にし、横倒し状態の側面に口頸部を接合する器種で、一種の風船技法による成形を行うものである。胴部を風船状態にする際、片面は底部のままで片面のみ円盤閉塞する片面閉塞技法と筒状のものを両面とも円盤閉塞する両面閉塞技法とに分けられ、当資料では後者が主体的となっている。

両面閉塞、片面閉塞ともに、当資料では、胴部成形は粘土紐積み成形＋ロクロ調整が基本となっている。叩きは円筒形に積み上げ成形が完了した後に、閉塞部を絞るためか閉塞後に閉塞面外面を丸く成形するために叩いたものである。南加賀窯ではⅡ・Ⅲ期の良好な資料に恵まれないが、Ⅰ期では片面閉塞の大型横瓶が多く確認でき、胴部成形は粘土紐積み＋成形叩きによっている。Ⅰ期のものは、さらに、円盤閉塞した部分も内面から当て具を差し入れて叩いており、両側面を叩き出す両面叩きが施される（望月1999）。このような横瓶成形技法は、Ⅱ期の中で消滅し、やや小型化して当資料（Ⅳ期）のような胴部成形技法に転換して行ったものと理解する。それに伴って、両面閉塞技法が定着して行ったのであろう。両面閉塞技法は、北陸のⅡ2期資料（越前武生南部窯跡群王子保窯及び加賀能美窯跡群湯屋ＡⅠ支群窯）を始め、全国的にも7世紀後葉～末が最も古く、横瓶の小型化と胴部成形方法の転換に伴って成立したものであろう。

2．上側面の閉塞痕跡と成形方法（第285図）

片面閉塞横瓶と両面閉塞横瓶とは底部円盤があるか、ないかだけで、胴部を円筒形積み上げ成形する点では同一である。円筒形に成形・調整が済んだ後、上端を絞り、円盤で閉塞する訳であるが、胴部上端の絞り込みはいずれもロクロ回転による挽き絞りによっている（8）。ロクロ成形台の固定が必要であり、下側面（底部側面）の閉塞や叩き成形を行う前工程として行われたものと理解する。円盤閉塞部の特徴は、円盤重なりによる胴部端盛り上がりが内面で確認でき、長頸瓶などと類似している。円盤閉塞後は閉塞面をカキ目による加圧整形か外面のみの風船叩きによる叩き整形によって、丸く仕上げる。

3．底部側面及び下側面の痕跡と成形方法（第285図）

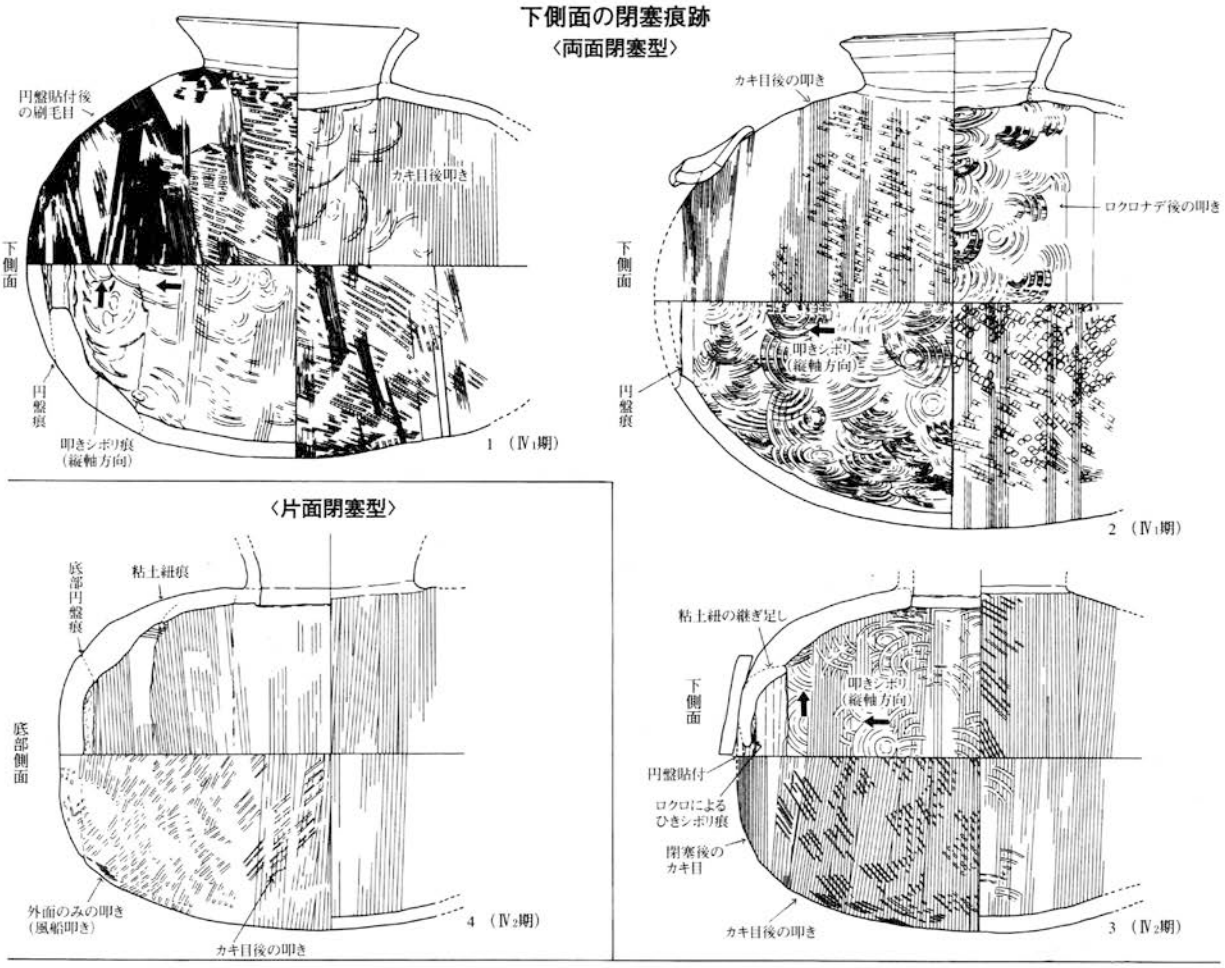
片面閉塞の底部側面の成形は、当て具を内面から差し入れて叩き出すものはなく、外面からの叩き成形のみにより丸く成形している（4）。胴部内外面にはカキ目が施されているが、外面叩きはこのカキ目の上から叩いており、上側面の円盤閉塞後に風船状態で叩いたものと理解される。底部円盤は厚く、径の小さなものを使っており、1次成形当初から砲弾型にし易いようにしてある。内面当て具が伴わないのは既に上側面が閉塞されているためで、胴部成形の最終工程で行われる成形と言える。

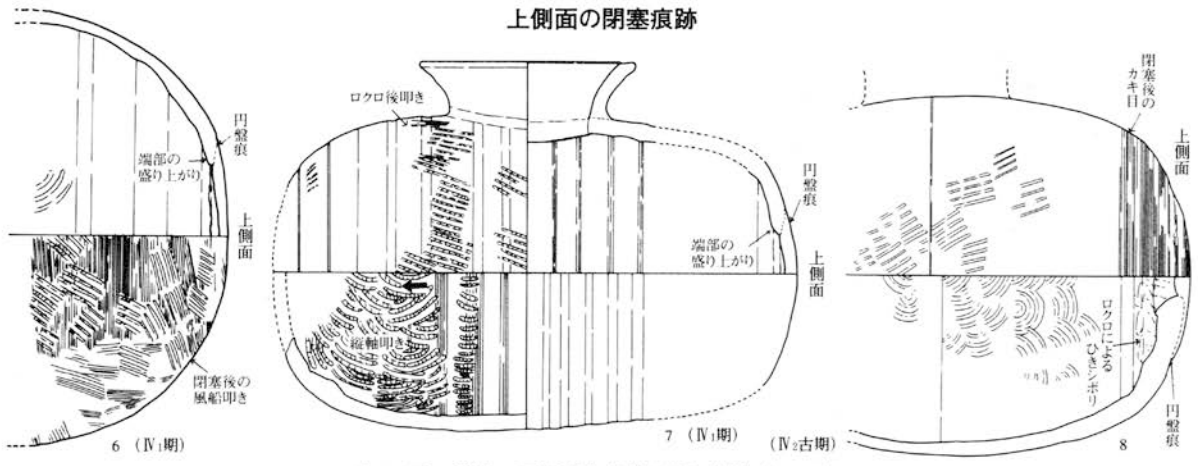
両面閉塞の下側面成形は、ロクロ成形台からはずした後、倒立させて固定し、開口部分から当て具を差し入れて叩きによる口の絞り込みを行っている（1～3）。叩きは下から上への縦軸方向を基本とし、特に末端では横軸に叩いて形を整えている（1）。叩きはいずれも胴部のカキ目の上から施されており、成形の最終工程であることがわかる。円盤閉塞後横方向の刷毛調整又は回転使用のカキ目調整により、丸く形を整えて仕上げる。通常の両面閉塞横瓶は以上の工程・痕跡を残すのであるが、3は叩きによる絞りでは絞り込みが不十分であったため

か、他と異なる痕跡を残している。胴部絞りのための叩き痕の上に粘土紐をひと巻き内側から巻かれるもので、粘土紐をロクロ回転により絞り込み（絞りによる螺旋状皺が残る）、外面から小円盤を貼り付けて完全に閉塞する。外面にカキ目調整を施して仕上げる。

4．口頸部成形痕跡と成形方法

胴部成形完了後、乾燥を挟み、口頸部成形に入るが、以前横瓶成形方法について復元案を提示したように（望月1999）、口頸部は別作りのものを接合したものと理解している。林タカヤマ窯で出土する三日月状の切り屑は別作り口頸部の径が切り取り円の径とずれることを補正するために、はみ出し部分を切り取ったものと評価する。当資料では胴部円形切り取り面はなでる程度のものが多く、口頸部粘土が内側に巻き込むものは2で確認できただけである。口頸部は上に乗っているだけであり、胴部上で粘土紐を積んで成形したものとは理解できない。





第285図　横瓶の胴部閉塞痕跡と叩き痕跡（S=1/4）

当資料では三日月状切り屑は出土していないが、別作り接合であると考えたい。

5．横瓶の叩き絞り痕跡と両面閉塞技法

横瓶の両側面が遺存している資料に関しては、片面閉塞技法か両面閉塞技法かの判断はできるが、閉塞部分の片面のみの遺存では、それを判断することは難しい。現状では、胴部の叩き絞りのあるものに関しては、両面閉塞技法の可能性高い資料と認定しているが、実は叩き絞りがあっても、その根拠にはなりえない。片面閉塞技法では底部側面の叩き出しがどの段階でどのように行われたのかが重要な問題である。胴部成形後、そのままロクロ挽きによって胴部端を絞り、円盤閉塞してしまえば、風船状態になる訳であって、底部側面は当て具を使わない外面からの叩きで丸くするか、カキ目等で丸くするかの方法となる。内面からの当て具差し込みがあった場合は頸部切り取り後に当て具をさし入れて叩かなければならず、その場合は頸部径と当て具の大きさ、そして頸部からの差し込みによる一方向当て具の動きに制限される。そのような場合でないものは、閉塞前に成形台からはずして底部叩き出しをする必要がある。底部叩き出し後にロクロ成形台に固定し、ロクロ絞り込みを行い円盤閉塞すればよいわけである。ただし、この部分の円盤閉塞において、叩いて絞り込み、円盤閉塞してもよい訳で、その場合の痕跡は閉塞側面に叩き絞り込みの見られる事例となる。つまり、叩き絞り痕跡をもつことだけでは両面閉塞技法の根拠とはなり得ない訳である。

ただ、意外に、片面閉塞技法で叩き絞りの確実にある事例は少ないのが実際であり、叩き絞り痕があれば、かなりの高い確率で両面閉塞技法と言える訳である。両面閉塞技法出現以後の片面閉塞横瓶の底部側面叩き出しは外面からのみのものが主流となっている。片面閉塞の場合、底部側面叩き出しを当て具入れて行う方法では、成形台からはずしてから再度円盤閉塞する工程を経なければならない。これに対し、両面閉塞技法は、胴部積み上げ成形の延長で、ロクロ挽き絞り後の円盤閉塞又は叩き絞り後の円盤閉塞が可能な訳で、もう片側も工程として叩き絞り円盤閉塞で風船状態にすることができる。つまり、手順として片面閉塞技法よりも工程がひとつ少ない訳である。これが、両面閉塞技法出現後、大型横瓶を除いては、急速に両面閉塞技法が広い地域に普及した要因ではなかったかと考える。この時期以後、片面閉塞技法では外面からの叩きによる丸底化による方法が一般化することも、工程としての簡略化を指向する現れであろう。

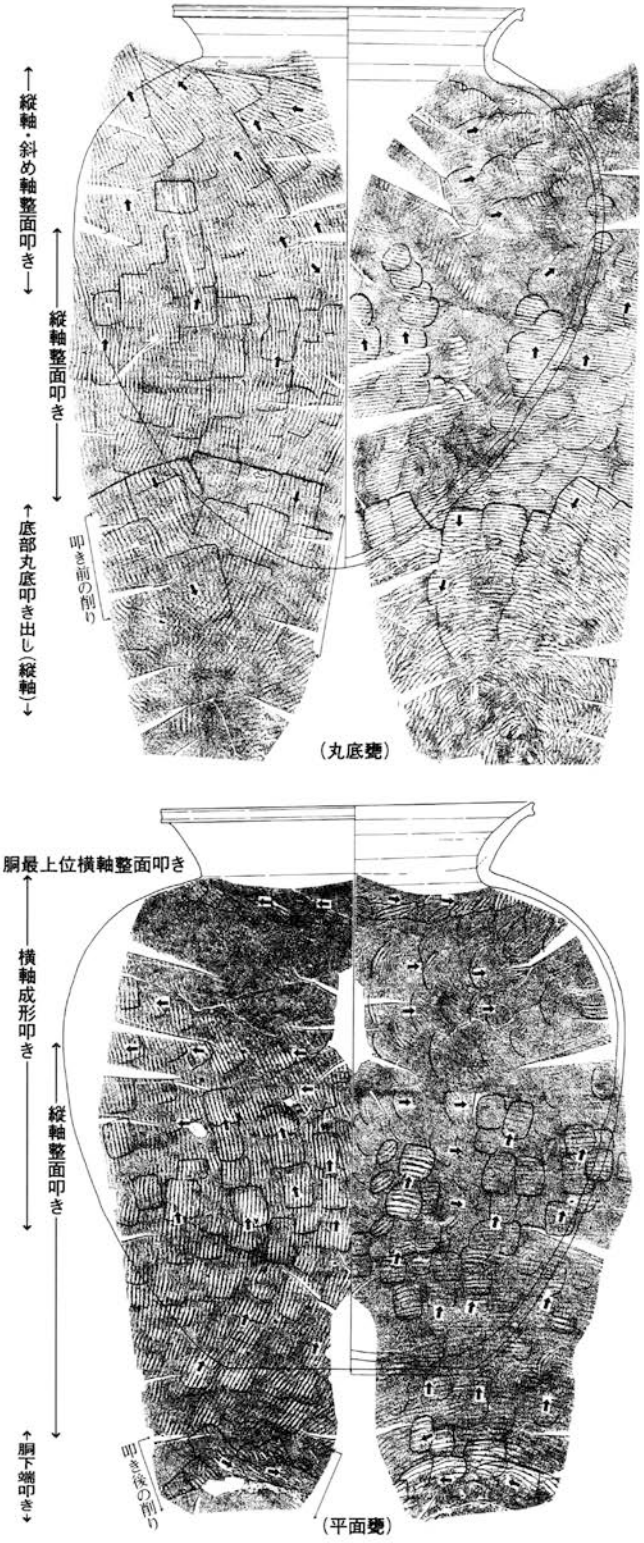
第4項　短頸なで肩甕の成形痕跡と成形方法の復元

当窯跡からは多くの甕が出土しており、成形痕跡、成形方法復元おいて良好な資料を提示している。その一部については、拙稿で既に資料報告しており（望月2000）、甕の成形痕跡及びそこから求められる成形方法復元についても私見を提示してある（望月2001）。よって、本稿では当窯跡の甕資料全体を扱わず、特に、9世紀後葉の短頸を呈するなで肩甕についてのみ取り上げる。なお、他にも重要な資料はあるのだが、紙面の都合で、本稿で扱うことはできない。写真のみ提示するので、本文中報告とあわせ、参照していただきたい。

さて、須恵器甕は須恵器生産開始当初から生産の主要な部分を占めていたもので、法量には大・中・小が存在する。5～6世紀代、大・中・小ともに、長頸を呈する口頸部をもち、短頸の口頸部を呈するものは把手を付すタイプにほぼ限られていたと言える。それが、6世紀後葉から7世紀前半にかけて、中甕が短頸化してゆき、中・小甕は胴部成形の延長で口頸部を一体成形する短頸口頸部に転換する。大甕は、それまでと同様の別作り接合の長頸口頸部を呈するが、別作りであるものの、次第に口頸部は短くなって行く。このような胴部一体作りの短頸口頸部を呈する中・小甕と別作りの長頸口頸部を接合する大甕との作り分けは、8世紀末まで貫徹されるが、9世紀のなで肩甕出現によって崩壊してくる。8世紀末から9世紀前葉の資料が乏しいため、転換の様相ははっきりとしないが、中頃（D区3号窯）には短頸を呈するなで肩甕にほぼ統一される。いずれも胴部一体作りの短頸口頸部をもち、口縁部が短く外反して口縁端部を上下につまみ出す、外縁面形成の特徴的な口縁部形態を呈す。8世紀代の甕よりも肩の張り出しが弱く、頸部の絞り込みも弱い特徴をもつ。法量は明瞭な小甕が確認できなくなり、中小容量と位置付けできる砲弾型胴底部をもつ長胴のものが出現してくる。大甕も確実に減少し、全体的に小型化する。大甕は従来通りの丸底に叩き出す形状と予想しているが、中甕では丸底に加え、平底、平底風の底部形態が加わり、成形方法が変化している。第286・287図に上記3形態の中甕を図示した。以下に胴部から底

部にかけての叩き痕跡について解説する。

《丸底を呈する甕》　丸底甕の胴部から底部にかけては３種類の叩きが確認できる。底部から胴部下位の丸底に叩き出す工程の縦軸叩き出し、胴部中位の縦軸の叩き、胴部中位から最上位にかけての縦軸から斜め軸へ螺旋状となる叩きで、叩きの前後関係を見ると螺旋状叩き→縦軸叩き→底部叩き出しの順になる。甕の成形は成形台上で底部円盤に順次粘土紐積み＋成形叩きをしながら頸部へと積み上げてゆく方法が基本であり、これによってほぼ概形を作り出す（１次成形）。その際、口頸部まで成形が行われたか、定かでないが、口頸部外面に胴部叩きの施された際の叩き具の当たった傷が残されているものがあり（D区３号窯686、写真⑤左上）、器面に残される叩き痕跡が施される段階では口頸部成形は完了していたものと言える。さて、胴部に残される叩き痕跡であるが、１次成形叩きの痕跡ではなく、２次的に器面に施される整形的な叩きと考えている。１次成形叩きは粘土紐積みとともに行われるため、横軸叩きを基本としており、このような縦軸ないしは螺旋状に叩きが施されるものに関しては整形的な目的で施されたものと理解している。その後、胴部中位以下のみ再度下から上への縦軸整面叩きが施されるが、全面を叩く訳ではなく、放射状に間隔があく。内面当て具は螺旋状叩きが芯もち材使用の彫り浅い平行線文、縦軸叩きが線幅の狭い木目のない平行線文が使われ、意識的に当て具を使い分けている。その後、成形台からはずして、底部叩き出しに入る訳であるが、当資料では底部叩き出し前に外面胴部下端付近のみヘラ削りされている。削り後に叩きが施されるているため、削りによる砂粒の動きは見えないが、削り範囲に粘土縞（粘土調合不足による縞模様）が浮き出ており、１次成形時に覆っていた粘土表面が削り取られていたことを物語る（写真⑤左中下）。削りは底部叩き出しの際に叩き易くするために、底部境の余分な粘土を削り取ったものだろう。削り後、縦軸の底部叩き出しが施され、底部を尖底状の丸底に仕上げる。この内面当て具も他の部位の当て具と異なり、木製柾目を残すやや線幅の太い平行線文が使われる。叩く部位により当て具が異なるのは、当て具自体の形状や持ち手部分の形状の違いによるものと理解されるが、底部叩き出しは９世紀以降、平行線文当て具にほぼ統一されており、縦軸に叩く行為と平行線当て具とが何らかの関連性を持つ可能性がある（柿田2001）。

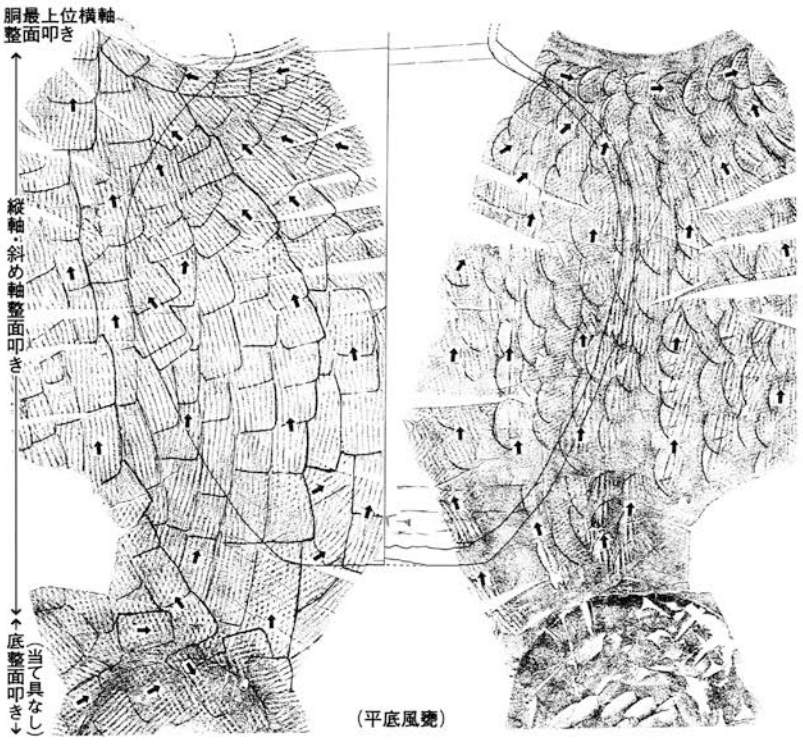


第286図　短頸と呈すなで肩甕の胴～底部叩き痕跡１（S=1/6）

《平底を呈する甕》　底部平底を呈す甕は南加賀窯跡群では確認例が少なく、ほとんどが後述する平底風のものである。平底である点を除くと、上述した丸底甕に器形が類似しており、胴部中位以下の縦軸叩きが施される点

でも同様である。叩きは、底部から胴部下端部分の横軸叩き、胴部中位以下の縦軸叩き、胴部中位から上位の横軸叩き、胴部最上位横軸叩きがあり、叩きの重複関係から胴部上半横軸叩き→胴部最上位横軸叩き・胴部下半縦軸叩き→胴部下端横軸叩きの順と判断できる。１次成形は丸底甕同様の方法であったと理解しているが、胴部上半に残された横軸叩きはこの時の叩き痕跡である可能性を持つ。その後の２次成形叩きに伴う可能性もあるが、口頸部成形までの工程の中で施される叩きであったと理解している。その後、胴部最上位の整形と頸部屈曲を整えるため、胴部最上位のみ横軸の整面叩きが施される。胴部叩きの当て具と最上位叩きの当て具は同じ木製無文当て具の年輪の浮き出たものであり、同一工具が使われていた可能性が高い。横軸で叩きを施す点から共通する形態を持つ工具が使用されたのであろう。最上位叩き後ないしはほぼ同時期工程として、胴部中位以下の縦軸叩きが施される。叩きの施される部位や下から上へ叩きが施される点、やや間隔のあく放射状である点など丸底甕の縦軸整面叩きと共通する特徴を持ち、内面に平行線文当て具が使われる点でも同様である。このような縦軸叩きの効果については、胴部の変形を目的としない最終的な整形を意図する叩きと考え、縦軸整面叩きと性格づけた（望月2001）。この叩きは間に隙間持たず、間隔密に、下位から最上位まで全面施されるものが一般的で、当事例は例外的である。ただ、叩きの意図は同様であったと予想しており、より形を変える意図は薄かったであろう。縦軸という点から叩き目が乱れた部分を直す意味で装飾的に施された可能性も十分に考えておく必要性はある。縦軸整面叩き後、成形台からはずして、胴部下端のはみ出し部分を叩いて形を整える。叩きは下端部分のみであり、横に１回施される程度である（写真⑥左上）。縦軸整面叩きの当て具が木目のある平行線文であったのに対し、下端叩きはやや線幅の広い木目のない平行線文当て具が使われており、胴部下端のみ意識的に工具を変えている。底面の叩きは施さず、胴部下端叩き後、下端から底面にかけてヘラ削りが施される。

《平底風を呈する甕》　上述した底部に叩きを施さない平底甕に対し、胴部下端から底面にかけて叩きを施すが、丸く叩き出ししないのが平底風である。底部境がやや丸い形状をなすもので、この部分での削りは確認できない。内面からの当て具を伴わない外面からのみの叩きであり、比較的叩き具の食い込みは浅い（245図85）。特に底面は軽くならす程度に弱く叩いたものだろう。平底甕同様に成形台からはずした後、底部境の角のはみ出し部分を叩き潰したものと考える。さて、底部叩きは最終工程であるが、胴部にはそれ以前の工程で施された叩きが残されている。胴部全体に残る縦軸（一部斜め）叩きと胴部最上位に残る横軸叩きは、いずれも整面叩きと考えているもので、内面当て具と外面叩きを照合して観察すると、縦軸叩きは２回施されているのがわかる。最初の叩きは胴部下位にのみ残るやや斜め軸に見える部分で、その叩きには内面の当て具痕が残っていない。なで消された可能性もあるが、粘土紐積み痕を残しており、当て具を伴わない縦軸叩きの可能性もある。さて、この最初の縦軸叩き以前に、平底甕に見られたような先行する横軸の成形叩きが施された可能性については、粘土紐痕の遺存を考えると、考え難い。筆者は以前、縦軸整面叩きを論じた際、先行する横軸叩きの存在を主張したが（望月2001）、当期の大型双耳瓶の成形方法でも横軸成形叩きを伴わない縦軸整面叩きだ



第287図　短頸と呈すなで肩甕の胴～底部叩き痕跡２（S=1/6）

けのものがあり（第283図8）、9世紀後葉の砲弾型を呈す中小甕に関しては、横軸成形叩きの存否を再考する必要性を感じている（写真⑤右中）。大型で胴部径大きなものに関しては、横軸叩きを伴う1次成形叩きが必要だが、小型で双耳瓶などと法量や胴部の張りに大きな違いのない長胴砲弾型を呈するものに関しては、粘土紐積み成形だけで十分に口頸部まで積み上げ可能であったものと言える。このような器形の甕全てにおいて横軸成形叩きを否定するものではないが、そうでないものも定量存在しただろう。2回目の縦軸整面叩きは芯持ち材の変形平行線文（斜格子状写真⑤右下）を当て具に使用するもので、胴部下端からやや上がった箇所から胴部最上位まで施される。叩きは間隔密に施され、最上位部分のみ横軸の叩きとなる。縦軸と同じ当て具を使用しており、縦軸叩きの延長で最後に頸部境を叩いて整形したものと考えている。

以上、3タイプの中甕について述べたが、胴部器面に残る叩き痕跡の大半は縦軸を基本とするもので、これが短頸口頸部をもつなで肩甕の特徴である。前にも触れた砲弾型の中小甕に関しても、叩き方向が確認できるものはいずれも縦軸整面叩きであり、成形に伴う横軸叩きは確認できていない。胴部1次成形時に叩きを伴わない紐積み成形のみのものが定量存在する可能性がある。その場合、粘土紐積み上げ成形で底部から口頸部まで成形し、その後縦軸叩きを施すことになる。叩きによる液状化現象を考えると、かなり乾燥した段階で施されたものであり、胴部の張り出しなど変形を意図して叩けば形が大きく歪むものと予想する。平行線文当て具の使用頻度が高い点で底部叩き出しと共通しており、縦へ延ばす意識があった可能性を持つ。縦軸叩きが器面を調整する効果をもっていたかどうかは定かでないが、叩くことによって歪みが生じる危険性は十分にあったであろう。整面叩きを提唱したものの、その効果には筆者自身疑問が残る。縦に叩きが並ぶという装飾的な要素も考えておく必要性はあろう。なお、大甕については、全形を知る資料が乏しく、5号土坑のものが南加賀窯での唯一の資料である。胴部下位の形状から丸底を呈すものと予想されるが、胴部下位には底部叩き出しに伴う痕跡を確認できない。底部境の内面隆起部分にも底部叩き出し痕はなく、叩き出し後に縦軸整面叩きが施されていると言える。底部も含め、胴部に残る叩きは全て縦軸から斜め軸を基本とする所謂縦軸整面叩きであり、同一の叩き具が使われている。内面は刷毛工具やナデにより、当て具が確認しづらくなっており、全て同一とは言い切れないが、同一工具を使っていた可能性がある。ただ、胴部中位から上位で彫りの浅い同心円文当て具が確認でき、当て具を変えながら、分割して縦軸の叩きを行っていた可能性もある。縦軸叩き以前の当て具痕とも考えられ、明確な答えは出しにくいが、胴部全面にかけて刷毛が見られることを考えれば、縦軸整面叩きを分割して施すことは想定しにくい。口頸部まで成形が完了した後の縦軸叩きとするのが妥当だろう。当資料も縦軸整面叩きの効果を考えるうえで重要な資料と言える。

引用参考文献

尾野善裕　2001　「東海地方における須恵器製作技法の転換とその背景」『古代の土器研究会第6回シンポウジウム　古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6－（須恵器の製作技法とその転換）』古代の土器研究会

柿田祐司　2001　「須恵器甕の叩き目から」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

北野博司　2001A　「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

北野博司　2001B　「須恵器成形技法研究の現状と課題」『古代の土器研究会第6回シンポウジウム　古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6－（須恵器の製作技法とその転換）』古代の土器研究会

笹沢正史　2001　「須恵器瓶類の口頸部接合痕跡」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

北陸古代土器研究会　2001　『須恵器貯蔵具を考えるⅡ－つぼとかめのつくり方－（北陸古代土器研究）第9号』

向井裕知　2001　「壷・瓶類の湿台痕跡」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

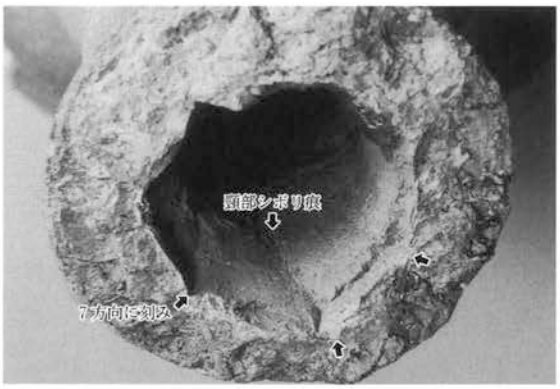
望月精司　1999　「林タカヤマ窯の須恵器貯蔵具製作痕跡－7世紀前半の須恵器貯蔵具製作技術復元予察－」『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会

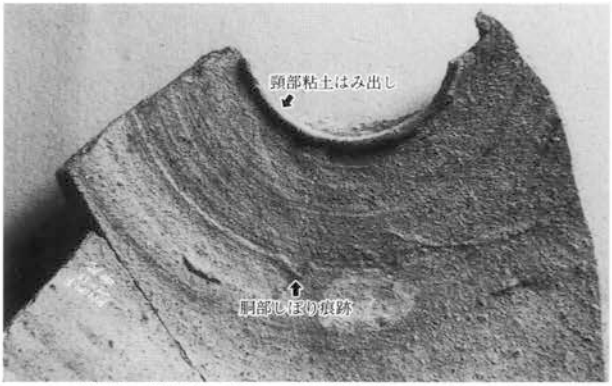
望月精司　2000　「須恵器甕の製作痕跡」『シンポジウム　古代の須恵器貯蔵具Ⅱ－貯蔵具の製作技法を復元する－』北陸古代土器研究会

望月精司　2001　「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

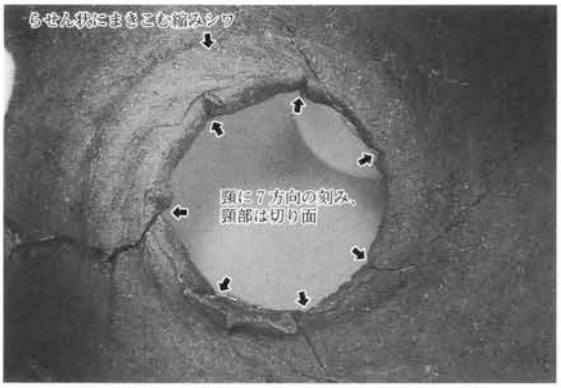
森内秀造　2001　「須恵器貯蔵具に残る製作痕跡」『北陸古代土器研究』第9号　北陸古代土器研究会

胴部Ａ類痕跡の瓶Ａ、Ⅳ2古資料、頸粘土巻き上げ（281図－２）

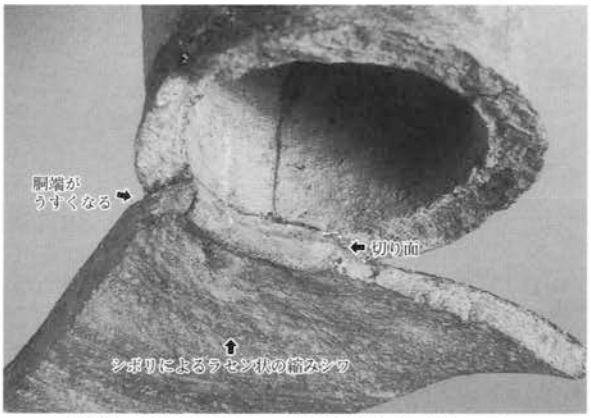




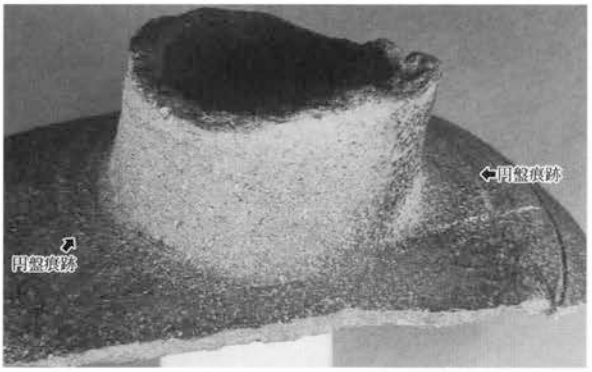
胴部Ｂ類痕跡の瓶Ａ、Ⅳ2期資料（281図－４）



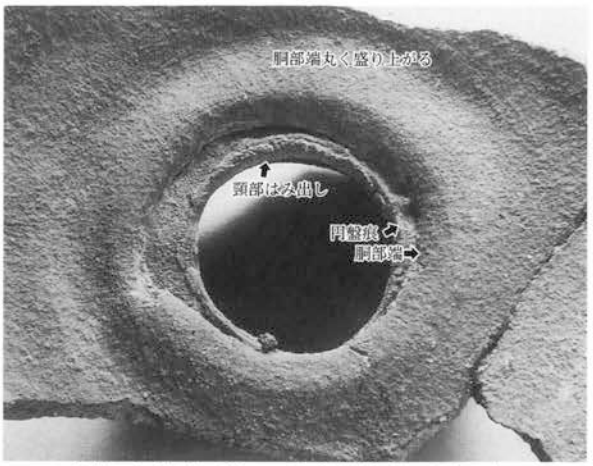
胴部Ｂ類痕跡の瓶Ａ、Ⅳ1期資料（281図－３）
〈頸部の内側に７方向の刻目あり〉



胴部Ｃ類痕跡の瓶Ａ、Ⅴ2期資料（281図－５）

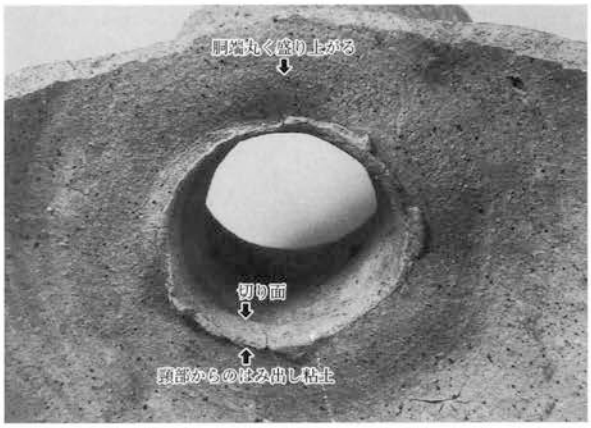


胴部Ｄ類痕跡の瓶Ａ、Ⅳ2期資料（281図－６）

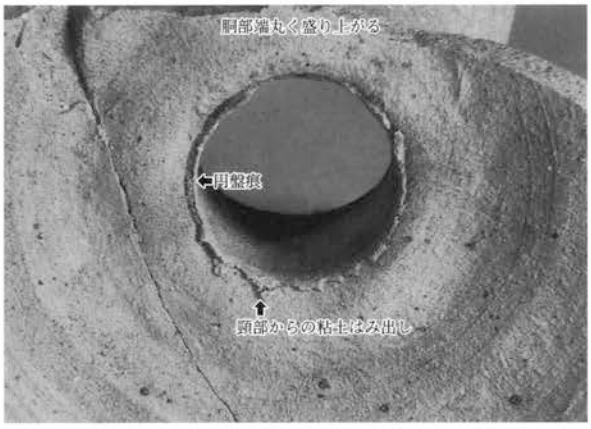


胴部Ａ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅵ2期資料（281図－９）
〈胴部端は丸く盛り上がり、外面には円盤重なり痕〉

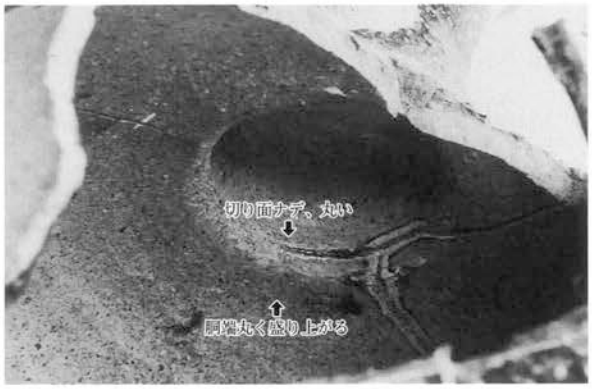
写真①　長頸瓶の成形痕跡１



胴部Ａ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅴ2～Ⅵ1期資料（281図－７）

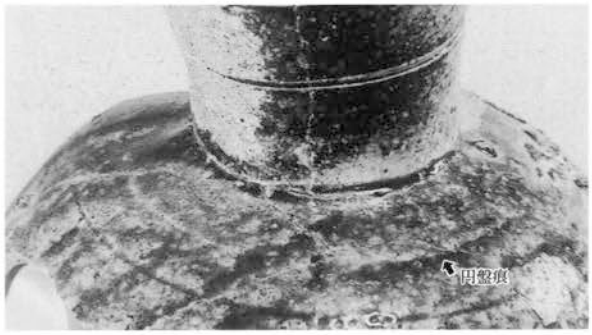


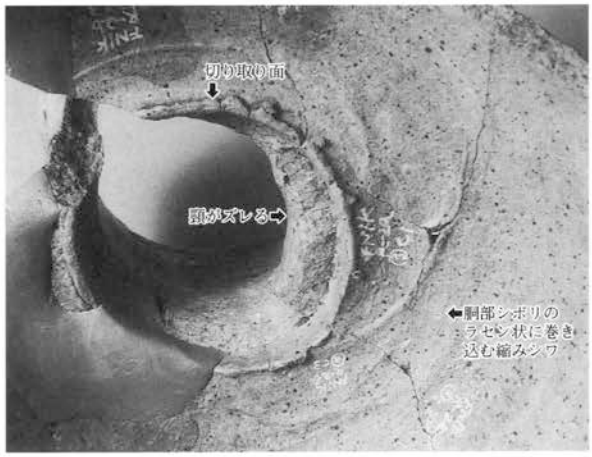
胴部Ａ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅴ2～Ⅵ1期資料（281図－８）



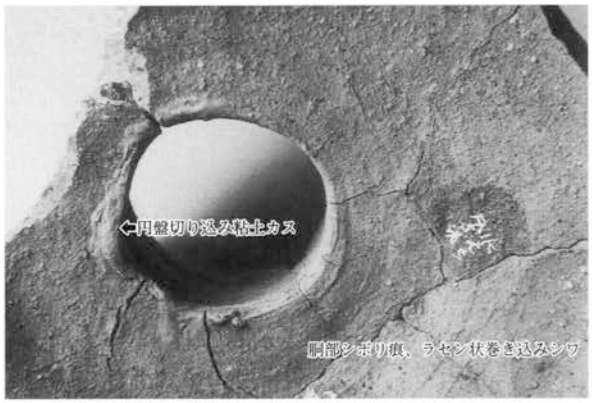
胴部Ａ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅴ2～Ⅵ1期資料（281図－10）

胴部Ｂ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅴ2～Ⅵ1期資料（281図－11）





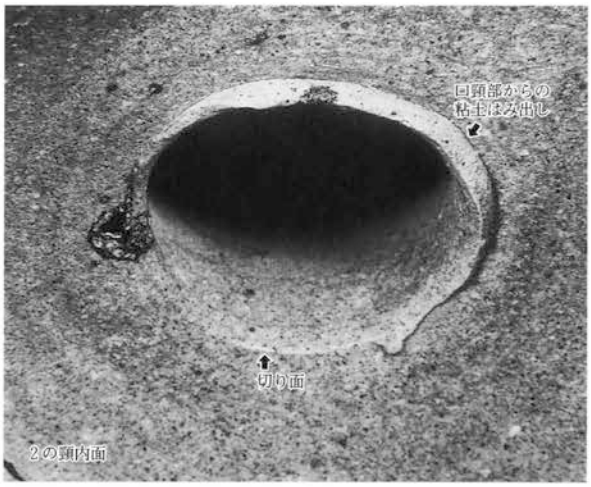
胴部Ｂ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅴ2～Ⅵ1期資料（281図－12）
〈胴部切り取り径と接合する口頸部がズレる〉

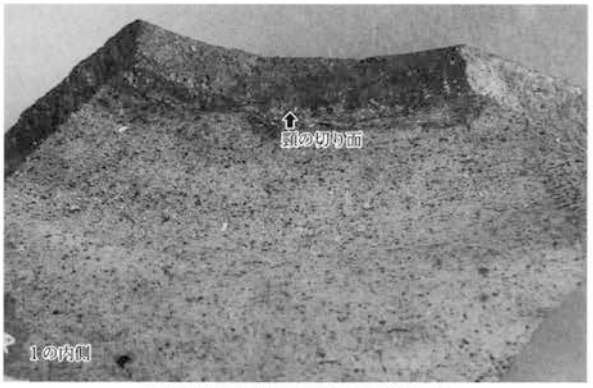


胴部Ｂ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅴ2～Ⅵ1期資料（37図－643）

胴部Ｃ類痕跡の瓶Ｂ、Ⅵ2期資料（281図－13）

写真②　長頸瓶の成形痕跡２





B類頸部痕跡双耳瓶1の切り面

D類頸部痕跡双耳瓶2の頸部と切り屑片

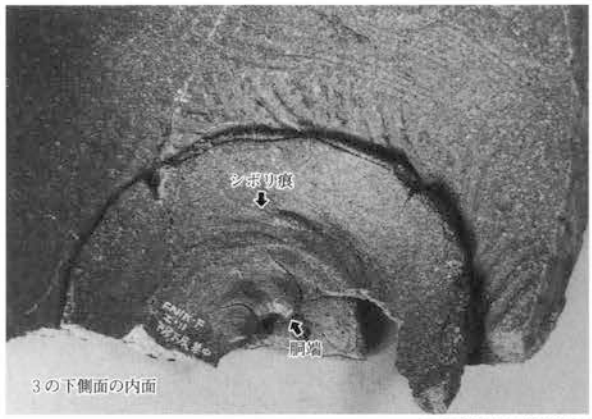
E類頸部痕跡双耳瓶4の胴シボリ痕

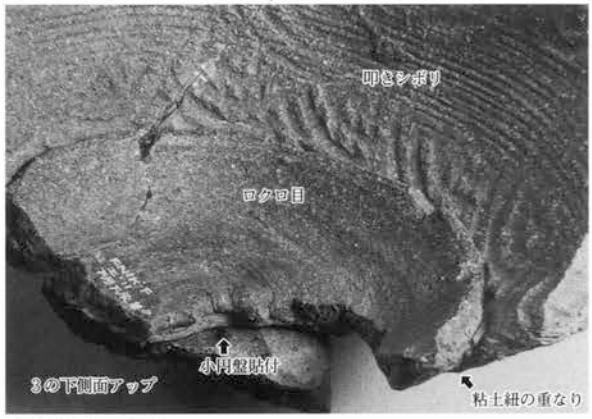
F類頸部痕跡双耳瓶5の粘土継ぎ目

F類頸部痕跡双耳瓶6の胴端と粘土継ぎ目

写真③　瓶D（双耳瓶）の胴部端と口頸部成形痕跡

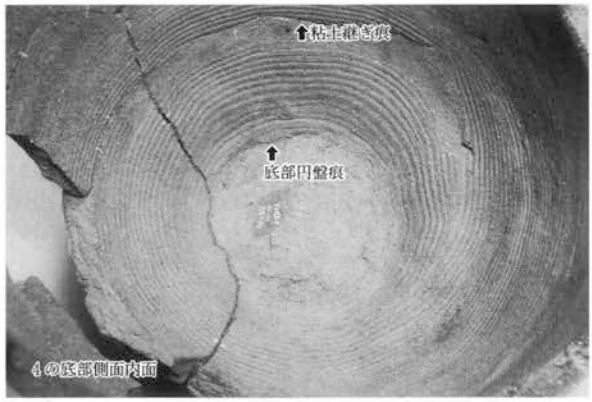
両面閉塞型横瓶２の内面叩き





両面閉塞型横瓶３の下側面シボリ痕跡

両面閉塞型横瓶１の下側面



片面閉塞型横瓶４の底部側面

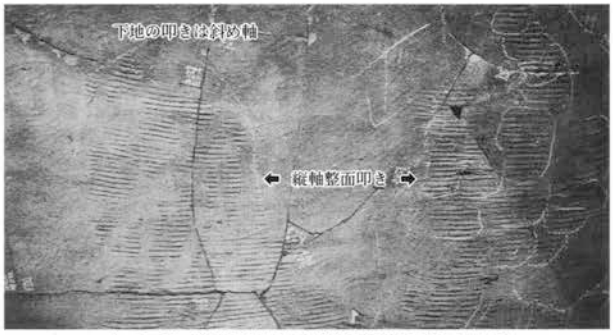
上側面の大型円盤閉塞６

上側面の小型円盤閉塞８のシボリ痕

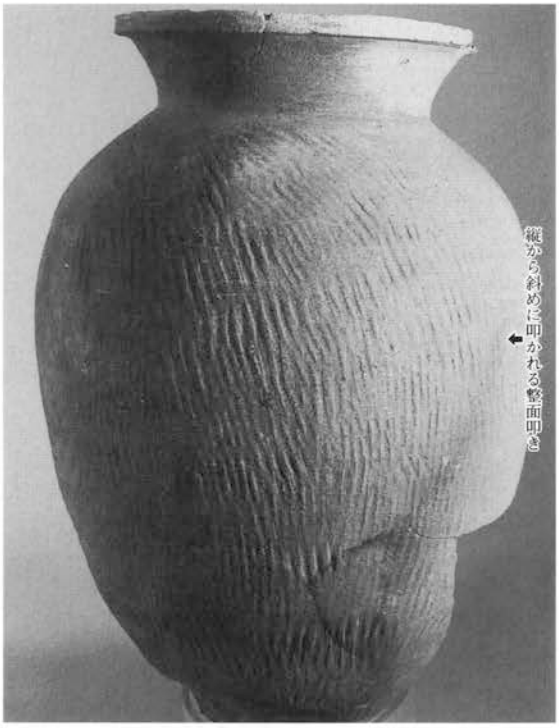
写真④　横瓶の胴部閉塞痕跡

胴叩きの際に叩き具が口頸部にあたった痕跡（D区３窯灰）

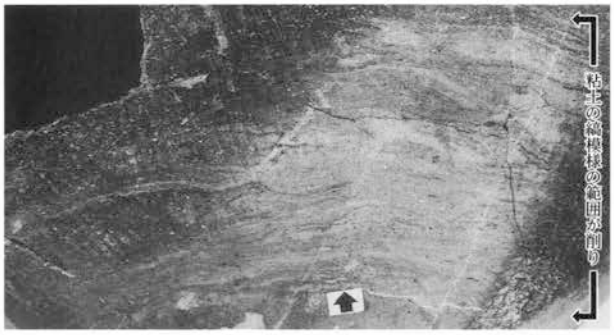
なで肩丸底甕の胴部外面の叩き痕（叩きの重なり）



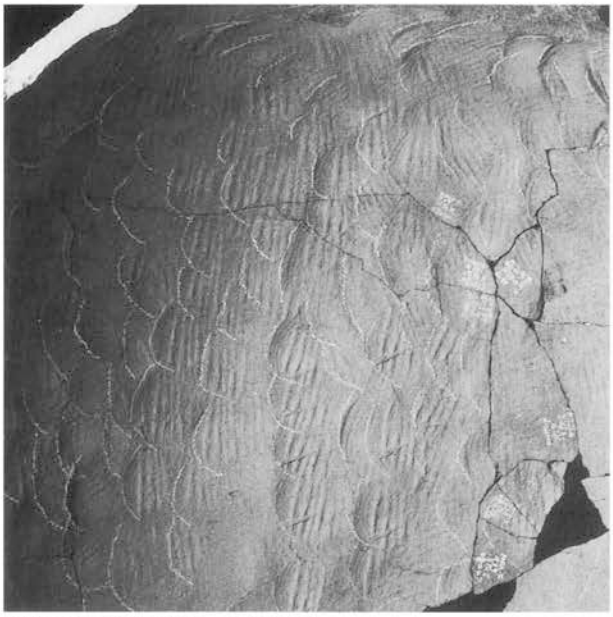
なで肩丸底甕の胴内面縦軸整面の当て具痕



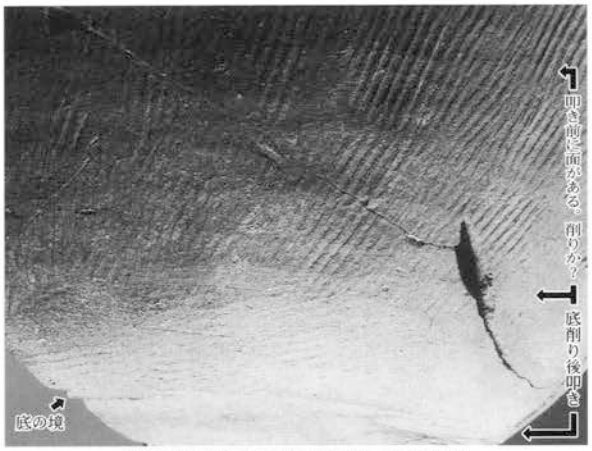
なで肩丸底中小甕に見える縦軸整面叩き（F区8号土坑、250図5）



なで肩丸底甕胴部下位の削り痕跡（粘土縞範囲）


なで肩丸底風甕胴部の縦軸整面叩き（左は外面、右は内面）（第287図）

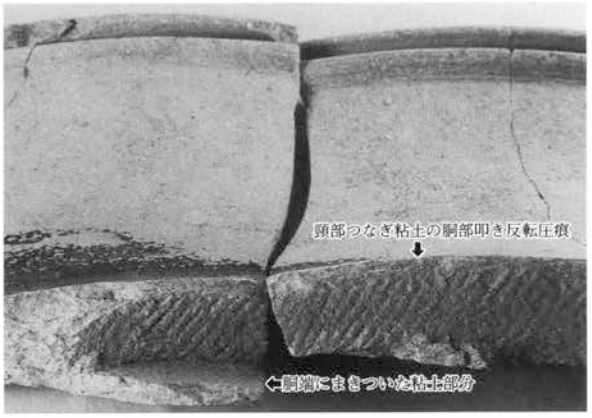
写真⑤　甕の成形痕跡１

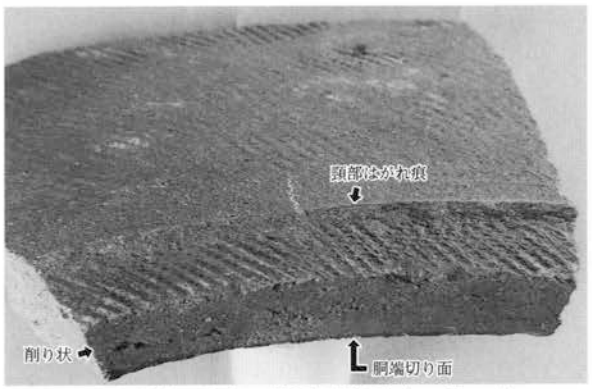


平底中甕の底部削り痕跡と叩き痕跡

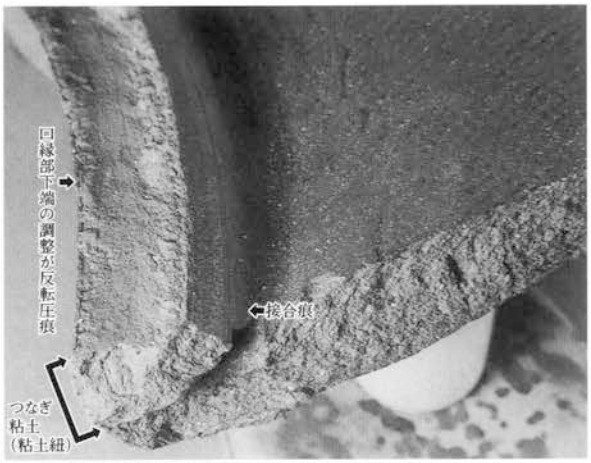
8 世紀中頃大甕の別造り口頸部成形痕跡（65図241）
（外面に叩き痕とつなぎ粘土のナデ痕、内面に当て痕（D区4窯灰））

丸底甕底部の粘土板補強（１号炭窯灰、270図8）





8 世紀後葉の大甕口頸部成形痕跡（122図-243）
（胴部境ではがれたもの。口頸部側反転圧痕、F区下灰）



上の大甕と同一個体の異なる場所ではがれたもの
（口縁部境ではがれたもの。口縁部側に下端面調整）
（122図-243）

写真⑥　甕の成形痕跡２

第３節　二ツ梨一貫山窯跡Ｆ地区で使用された窯の燃料材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二ツ梨一貫山窯跡は、潟理積平野である加賀平野を見おろす台地上に位置する。この台地は、紺野（1993）により、本地域に三面分布する海岸段丘の高位面に比定されている。今回発掘調査が行われたＦ地区では、８世紀～９世紀の土師焼成坑・須恵窯・炭窯が検出されている。窯の中には、燃料材などと考えられる炭化材が認められるものもある。

本報告では、各窯内から出土した炭化材の樹種同定および窯内部に堆積した土壌試料の植物珪酸体分析を行い、燃料材として利用された植物に関する資料を得る。

１．炭化材の樹種

（１）試料

試料は、６基の窯から出土した炭化材である。炭化材は、各窯別に一括採取されたものであり、室内で接合の有無などを確認しながら、合計94点を選択した。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

（２）方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（３）結果

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は、針葉樹１種類（スギ）、広葉樹11種類（ハンノキ属ヤシャブシ亜属・クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・モクレン属・ナツツバキ属・カエデ属・タラノキ）に同定された。

解剖学的特徴などを以下に記す。

・　スギ（*Cryptomeria japonica*(L.f.)D. Don）　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・　ハンノキ属ヤシャブシ亜属（*Alnus subgen. Alanaster*）　カバノキ科

散孔材で、道管は単独もしくは２～６個が放射方向に複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、１～30細胞高。柔組織は短接線状～散在状。

・　クマシデ属イヌシデ節（*Carpinus subgen. Euarpinus*）　カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に２～４（時に10以上）個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、１～３細胞幅、１～40細胞高のものと集合放射組織とがある。

・　コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・　コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

表1　炭化材の樹種同定結果

遺構・出土位置など	時　　期	点　数	樹種(　)内は点数
8号土師焼成坑下層炭化材	8C 末頃	15	スギ（15）
28号土師焼成坑下層炭化材	8C 中頃	16	スギ（10）
			クリ（6）
ウ-3・1号炭窯灰原	8C 2/4	9	モクレン属（3）
			ナツツバキ属（3）
			クマシデ属イヌシデ節（3）
2号炭窯床直	9C 後葉以降	18	スギ（4）
			ハンノキ属ヤシャブシ亜属（1）
			クマシデ属イヌシデ節（5）
			コナラ属コナラ亜属コナラ節（3）
			モクレン属（4）
			タラノキ（1）
3号炭窯下層	9C 後葉以降	16	クマシデ属イヌシデ節（3）
			モクレン属（3）
			コナラ属コナラ亜属コナラ節（4）
			コナラ属コナラ亜属クヌギ節（5）
			スギ（1）
12号須恵窯灰原・ウ-2下炭	8C 後葉	20	クマシデ属イヌシデ節（12）
			コナラ属コナラ亜属コナラ節（2）
			ケヤキ（2）
			モクレン属（2）
			カエデ属（2）

・　クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・　ケヤキ（*Zelkova serrata*(Thunb.) Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～30細胞高、結晶細胞が認められる。

・　モクレン属（*Magnolia*）　モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・　ナツツバキ属（*Stewartia*）　ツバキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

・　カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および２～３個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～４細胞幅、１～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる２種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・　タラノキ（*Aralia elata*(Miq.) Seemann）　ウコギ科タラノキ属

環孔材で、孔圏部は４～５列、孔圏外小道管は、２～３列が接線状に紋様を描きながら長く連なる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～６細胞幅、５～60細胞高で鞘細胞が認められる。

２．植物珪酸体分析

（１）試料

試料は、10基の土師焼成坑から採取された焼土および灰試料である。各試料の詳細は、分析結果と共に表２に記した。

（２）方法

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となるが、組織片の状態で残留する場合もある。組織片の出現は、その母植物の葉や茎などがその場所に存在したことを示すものであり、燃料材や住居構築材を検討する際に有効な情報を提供する（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。今回も、組織片の産状に着目し、遺構内埋土に植物体が取り込まれているか否か検討する。

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250kHz、１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト、比重2.4）の順に物理・科学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で前面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらの珪酸体を含む組織片を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその個数を一覧表と植物珪酸体組成図で示す。

（３）結果

結果を表２，図１に示す。各試料からは、組織片や単体の植物珪酸体が良好に検出される。いずれの試料からも、稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列および機動細胞列が数多く認められる。この中では、イネ属穎珪酸体と短細胞列の産出が目立つが、特にイネ属穎珪酸体の検出個数が多い。

単体の植物珪酸体でもイネ属の産出が目立ち、タケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が認められ、ヨシ属、シバ属などがわずかに見られる。また、栽培種か否かの判別はつかないが、オオムギ族も６号土師器焼成坑（A１区下層）、９号土師器焼成坑、８号土師器焼成坑でわずかに認められる。

３．考察

炭化材には、合計11種類が認められた。各遺構別に見ると、８号土師器焼成坑がスギ１種類である他は、全て複数の種類で構成される（表３）。イヌシデ節・モクレン属等は、比較的多くの遺構で確認されているが、全体的に各遺構毎に種類構成は異なっている。富山県立山町越中上末窯では、８世紀末～10世紀末中頃の須恵器窯から出土した炭化材の樹種同定が行われている（林、1989）。そこでは、時代が新しくなるにつれてスギから広葉樹へという変化が認められている。しかし、今回の結果では、時期によって種類構成が変化するような傾向は認められない。

今回調査を行った遺構は、土師器焼成坑（8号、28号）・須恵器窯（12号）・木炭窯（１号～３号）に分けられる。窯の用途別に種類構成を見ると、２基の土師器焼成坑ではスギを主とし、他にクリが認められる。一方、須恵器窯では、イヌシデ節を中心に５種類の広葉樹が認められ、土師器焼成坑と須恵器窯で燃料材の用材が異なっていた様子がうかがえる。

表2 土師器焼成坑における植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	6号焼成坑 A2下層	6号焼成坑 A1下層	27号焼成坑 下層灰	7号焼成坑 焼土	9号焼成坑 下層焼土	10号焼成坑 下層焼土	14号焼成坑 下層焼土	23号焼成坑 下層焼土	23号焼成坑 貼り床焼土	8号焼成坑 下層焼土
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	124	119	135	98	164	148	90	230	142	146
キビ族	−	−	1	−	1	−	−	2	2	2
タケ亜科	69	82	39	84	118	57	127	50	38	75
ヨシ属	−	−	2	−	1	−	3	5	1	2
ウシクサ族コブナグサ属	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ウシクサ族ススキ属	−	2	4	1	10	2	5	10	6	4
イチゴツナギ亜科オオムギ族	−	1	−	−	1	−	−	−	−	1
イチゴツナギ亜科	5	6	2	3	29	5	5	12	1	20
不明キビ型	7	18	17	11	40	15	18	32	24	40
不明ヒゲシバ型	1	1	−	−	2	−	1	1	−	−
不明ダンチク型	3	2	5	3	9	9	8	5	−	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	183	185	178	105	90	78	63	98	86	50
タケ亜科	33	28	14	27	12	16	44	23	17	25
ヨシ属	1	−	1	−	1	−	3	−	−	1
ウシクサ族	4	3	3	−	1	2	−	2	−	6
シバ属	−	1	2	−	4	−	−	−	1	−
不明	18	12	16	5	19	22	19	13	11	18
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	211	231	205	200	375	237	257	347	214	294
イネ科葉身機動細胞珪酸体	239	179	214	137	127	118	129	136	115	100
総計	450	410	419	337	502	355	386	483	329	394
組織片										
イネ属穎珪酸体	179	63	294	348	261	192	169	418	170	65
イネ属短細胞列	182	86	135	115	98	90	72	126	118	51
イネ属機動細胞列	11	7	33	6	7	6	5	11	3	2
不明キビ型短細胞列	2	1	−	−	4	−	1	−	1	−
不明機動細胞列	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−

土師器焼成坑に認められたスギは、いわゆる軟炭に分類される。また、クリの生木は丈夫であるが、木炭にすると立ち消えする軟炭になる（岸本・杉浦、1980）。一方、須恵器窯に認められた種類は、基本的には硬炭に分類される種類が多い。このことから、土師器焼成坑の燃料材には軟炭となる種類が、須恵器窯の燃料材には硬炭となる種類がそれぞれ使用された可能性がある。

土師器が摂氏800℃前後の酸化焔で焼成されるのに対し、須恵器は摂氏1100℃以上の還元焔で焼成される（玉井・小金井、1984）。酸化焔で高温を得るためには、軟らかく燃えやすい種類の方が適している。一方、還元焔の場合は、硬く持続性のある種類の方が適しているといえる。土師器焼成坑と須恵器窯で燃料材の種類構成が異なる背景には、このような土師器と須恵器の焼成方法の違いとそれによる適材の違いが挙げられる。しかし、大

阪府陶邑窯址群の調査例では、燃料材がアカガシ亜属を中心とした組成から、ニヨウマツ類を中心とした組成に変化することが確認されている（西田、1976、1980）。また、この変化は、同じ場所で長期間にわたり須恵器の焼成が行われた結果、木材の伐採が進んで周辺植生が二次林に変化したためと考えられている。この結果からは、須恵器焼成の燃料材として軟炭も利用され、周辺で入手できる木材を利用していた可能性が示唆される。そのため、今回の種類構成の違いが、焼成目的を考慮した結果か否かは即断できない。

表３　遺構別樹種構成

遺構名・時期 ＼ 樹種		スギ	ヤシャブシ亜属	イヌシデ節	クヌギ節	コナラ節	クリ	ケヤキ	モクレン属	ナツツバキ属	カエデ属	タラノキ	合計
ウ－3・1号炭窯灰原	8C　2／4			3					3	3			9
28号土師器焼成坑下層炭化材	8C中頃	10					6						16
12号須恵窯灰原・ウ－2下灰	8C後葉			12		2		2	2		2		20
8号土師器焼成坑下層炭化材	8C末	15											15
2号炭窯床直	9C後葉以降	4	1	5		3			4			1	18
3号炭窯下層	9C後葉以降	1		3	5	4			3				16
合　計		30	1	23	5	9	6	2	12	3	2	1	94

炭窯の樹種構成は、土師器焼成坑と須恵器窯のいずれとも種類構成が若干異なっており、焼成された木炭がいずれの用途に利用されたのかは定かではない。しかし、いずれも硬炭となる種類を中心としていることから、硬炭の焼成が行われ、２号および３号窯で出土したスギは、焼成のための燃料材として利用された可能性もある。その場合、硬炭は須恵器を焼成するために準備された可能性がある。これは、木炭が生木よりも還元等の反応性が高く（岸本、1984）、須恵器の焼成には生木より適していることとも一致する。一方、土師器については、覆い焼きで生木や藁を燃料材として利用し、焼成の過程で生木が炭化するとの指摘もある（久保田、1989）。今回検出された炭窯がいずれも硬炭となる種類を中心としていることを考慮すれば、本遺跡でも土師器の焼成に生木が利用された可能性がある。しかし、現時点では類例が少なく断定はできない。

一方、植物珪酸体分析では、組織片の産状から燃料材にイネ属の植物体（稲籾殻、稲藁）が利用されたことがうかがえる。小松市平面梯川遺跡で行われた分析調査では、弥生時代後期には低地部で稲作が行われていた可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1995）。このことを考慮すれば、８世紀～９世紀においても潟埋積平野などの低地で稲作が行われており、稲藁は比較的容易に入手できたと考えられる。また、稲藁は火の回りは早いが、高温は得られない。久保田（1989）の報告を考慮すれば、薪に火を付けるための火付け材等として利用された可能性がある。

今後さらに調査事例を蓄積し、本地域における燃料材の利用状況を復原したい。

〈引用文献〉

林 昭三（1989）越中上末窯出土炭の樹種．「越中上末窯」．p.209-214．富山大学人文学部考古学研究室．

紺野義夫編（1993）石川県地質誌．321ｐ．石川県・北陸地質研究所．

岸本定吉（1984）木炭の博物誌．260ｐ．．総合科学出版．

岸本定吉・杉浦銀治（1980）日曜炭やき師入門．250p．．総合科学出版．

近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究．25．p.31-64．

久保田正寿（1989）土器の焼成１－土師器の焼成実験－．134p．

西田正規（1976）和泉陶邑と木炭分析．大阪府文化財調査報告書第28輯「陶邑Ⅰ －本文編－」．p.178-187,大阪府教育委員会

西田正規（1980）須恵器生産の燃料について．大阪府文化財調査報告書第30輯「陶邑Ⅲ －本文編－」．財団法人大阪府文化財センター．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（１）．慶應義塾湘南藤沢校地埋蔵文化財調査室編「慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡 第１巻 総論」．p.347－370．慶應義塾．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1995）分析調査の結果．「石川県小松市 平面梯川遺跡Ⅰ 梯川改修工事関係埋蔵文化財調査報告書１」．p.91-112．社団法人石川県埋蔵文化財保存協会．

玉井時雄・小金井 靖（1984）土師器・須恵器の知識．163p．．東京美術．

（付記）

当資料分析の考察について、考古学的知見を踏まえた形で、調査担当者からの私見を述べておきたい。

まず、土師器焼成坑から検出された植物珪酸体であるが、圧倒的に稲科植物、特に稲の籾殻や稲藁がほとんどを占める。稲藁のみならず、稲の籾殻がかなりの量で含まれていることは注目される。稲藁は覆い燃料として使われたものと予想されるが、籾殻で覆ったとは考えがたい。稲に付いていたものだけではないであろうから、床に敷いたりしていたのであろう。また、覆い燃料として稲藁を選択して使っていたことも注目される。代用できるような草燃料もあったであろうが、稲藁を意識的に使用したことは、単に稲作が活発だったことを示すだけでは無かろう。燃焼効率や保温効果など、覆い燃料として優れた利点があったからと考えている。

次に、焼成遺構から検出された炭化材の材質についてであるが、８世紀代の木炭窯出土のものは硬い木炭となるものが多く、それは同時期の須恵器窯灰原でも同様と言える。いわゆる広葉樹の雑木であり、周辺原生林を採取したものと考えられる。これが、土師器焼成坑になると、時期的に大きな違いがないにもかかわらず、ほとんどが杉である。材を選択使用した可能性がないとは言い難いが、周辺植生が二次林となったために、杉材を使用せざるおえなかったと考えたい。ただ、強い熱量を必要としなかったために、杉材が使われた可能性もあろう。なお、９世紀後葉以降の木炭窯でも、少ない量ではあるが、杉が出土している。硬い材が主体であるのは変わりないのであるが、この時期には材質を選択できるほど木材が豊富ではなかった状況が伺われる。

当窯跡は７世紀の須恵器生産以降、８世紀前半に砂鉄製錬と須恵器生産が同時期に存在し、後半から９世紀には須恵器生産と土師器生産が、そして、10世紀にはこれに加え、再び砂鉄製錬が始まるのである。燃料材確保に追われる状況であったはずであり、周辺樹木を刈り尽くしたというのが実態だったのではなかろうか。

（望月精司）

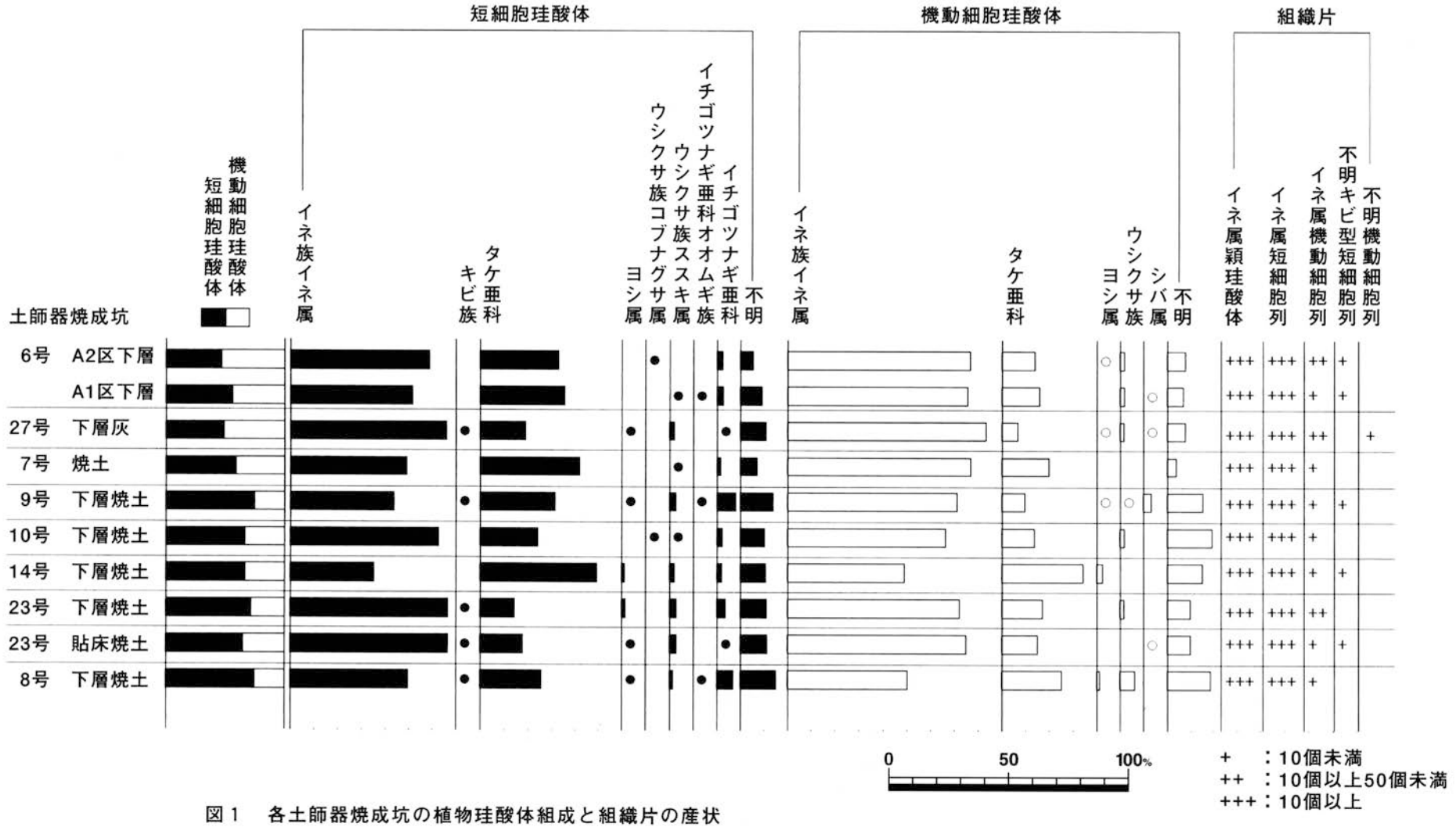
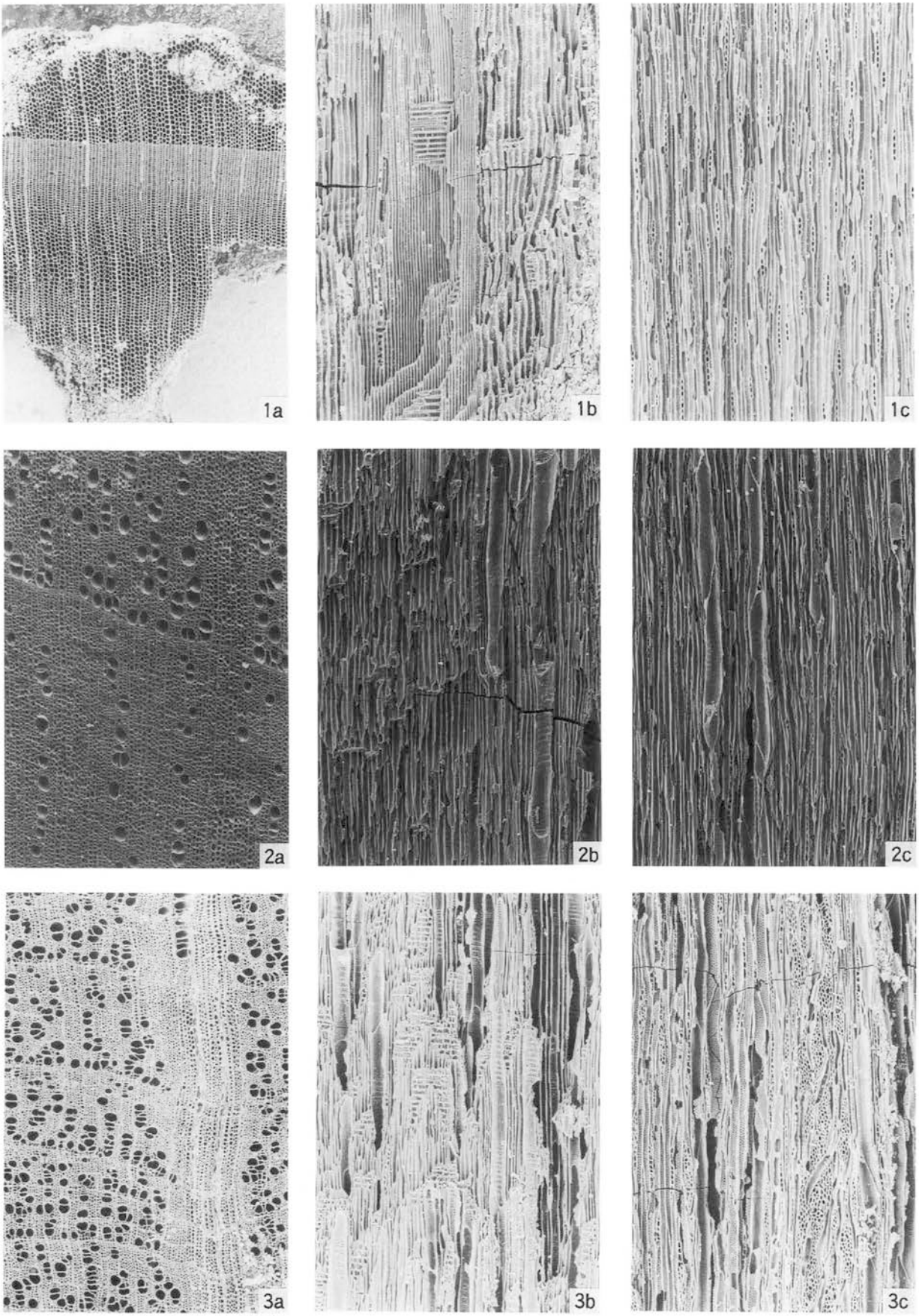


図１　各土師器焼成坑の植物珪酸体組成と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

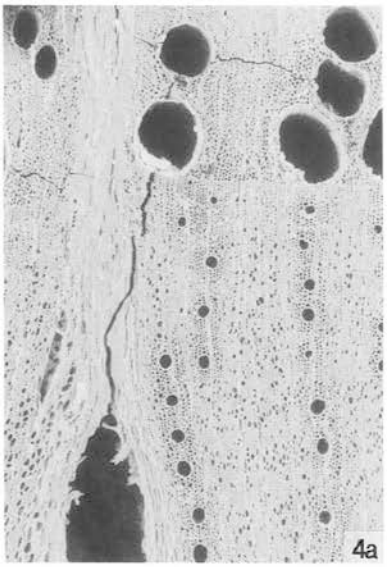
図版1　炭化材（1）

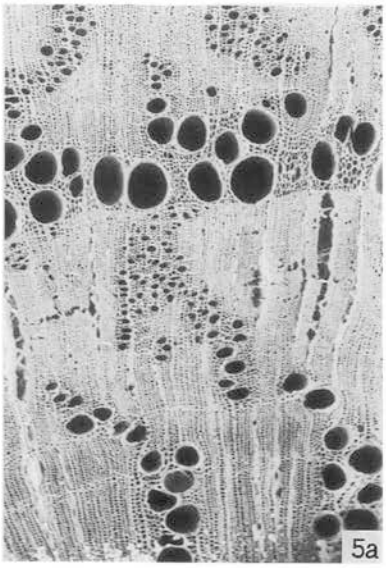


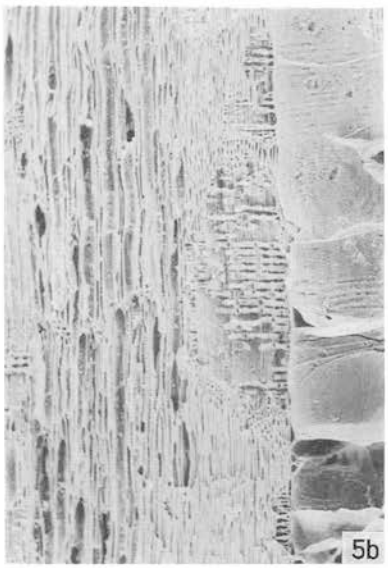
1．スギ（H8号土師窯下層炭化材）
2．ハンノキ属ヤシャブシ亜属（2号炭窯床直）
3．クマシデ属イヌシデ節（12号須恵窯灰原・ウ-2下灰）
　a：木口，b：柾目，c：板目

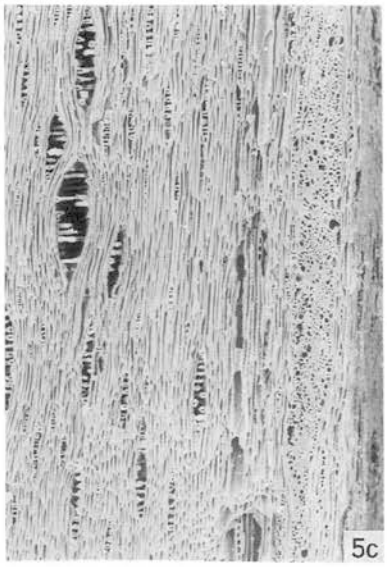
200 μm：a
200 μm：b，c

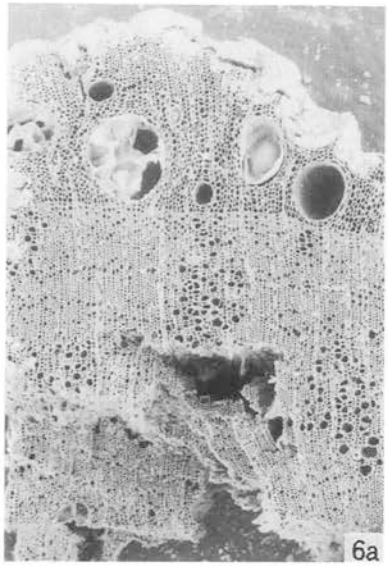
図版2　炭化材（2）

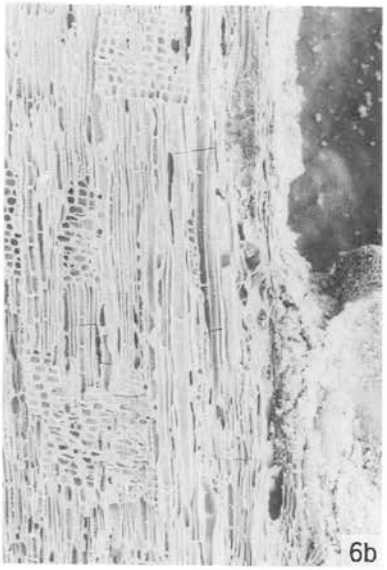


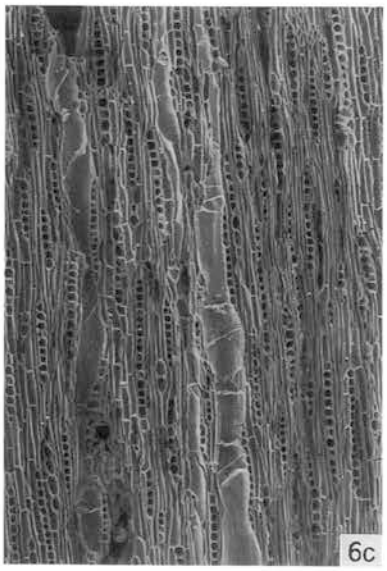








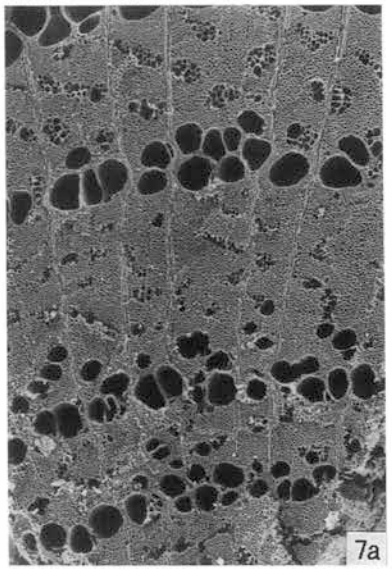


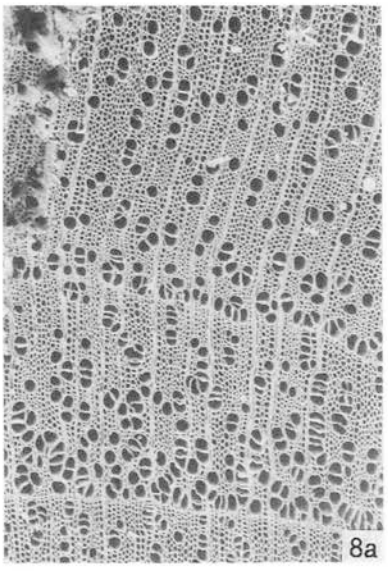


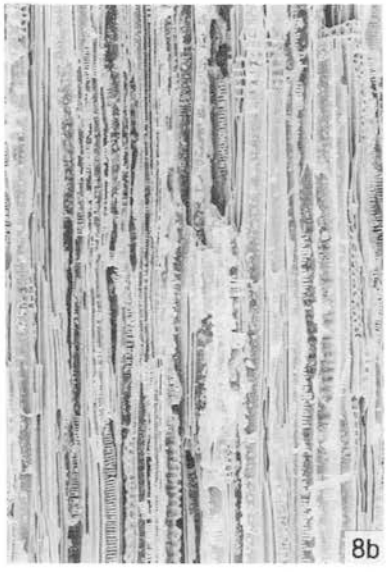
4．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（3号炭窯下層）
5．コナラ属コナラ亜属コナラ節（12号須恵窯灰原・ウ-2下灰）
6．クリ（H28号土師窯下層炭化材）
　a：木口，b：柾目，c：板目

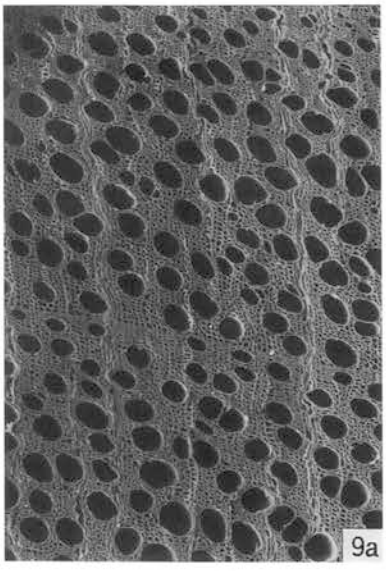
200μm：a
200μm：b，c

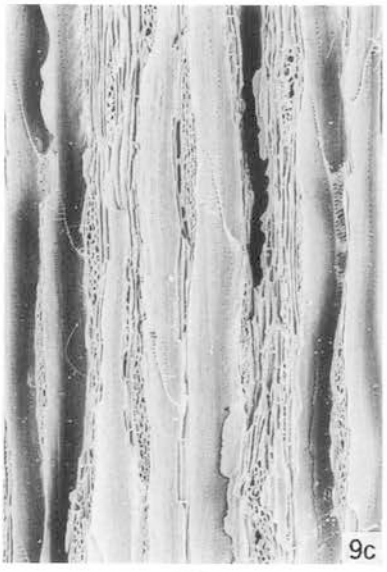
図版3　炭化材（3）







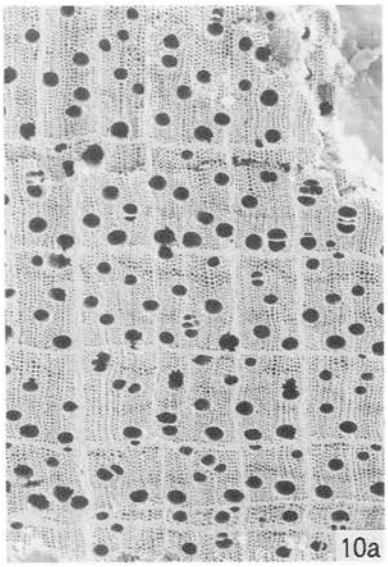


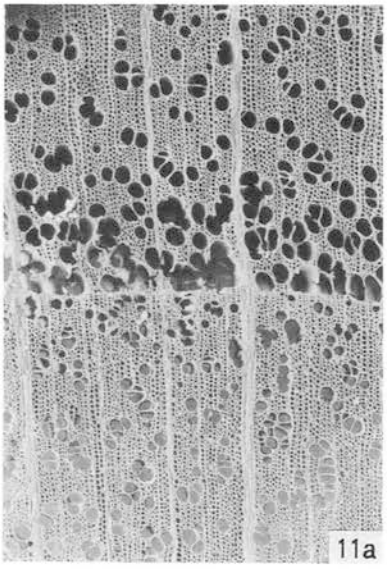


7．ケヤキ（12号須恵窯灰原・ウ-2下灰）
8．モクレン属（2号炭窯床直）
9．ナツツバキ（ウ-3・1号炭窯灰原）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

図版4　炭化材（4）

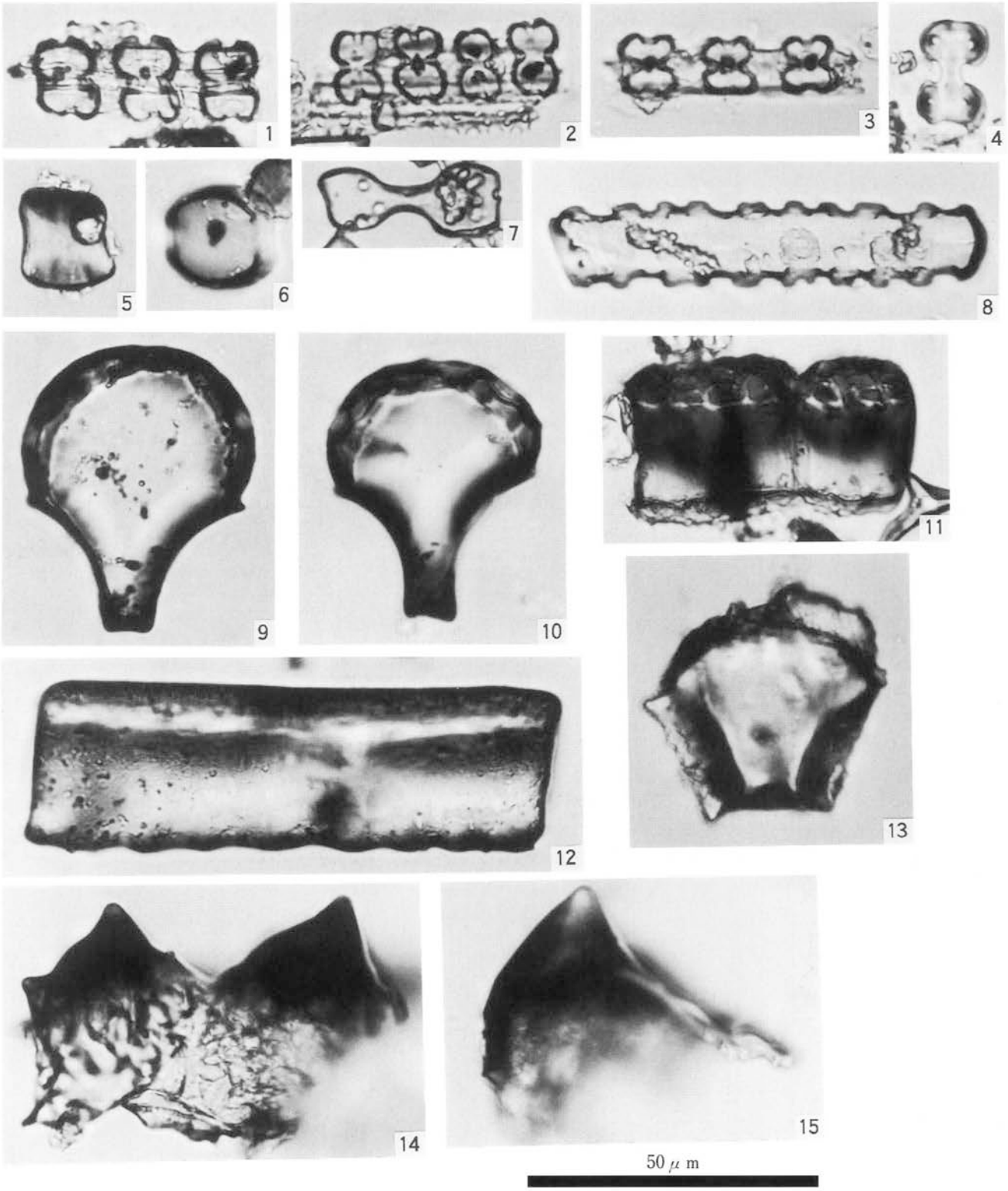




10．カエデ属（12号須恵窯灰原・ウ-2下灰）
11．タラノキ（12号須恵窯灰原・ウ-2下灰）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

図版5　植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(H6号土師窯；A2区下層)
2. イネ属短細胞列(H7号土師窯；焼土)
3. イネ属短細胞列(H8号土師窯；下層焼土)
4. キビ族短細胞珪酸体(H23号土師窯；下層焼土)
5. タケ亜科短細胞珪酸体(H6号土師窯；A1区下層)
6. ヨシ属短細胞珪酸体(H23号土師窯；下層焼土)
7. ススキ属短細胞珪酸体(H9号土師窯；下層焼土)
8. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(H8号土師窯；下層焼土)
9. イネ属機動細胞珪酸体(H7号土師窯；焼土)
10. イネ属機動細胞珪酸体(H23号土師窯；貼り床)
11. イネ属機動細胞列(H9号土師窯；下層焼土)
12. ウシクサ族機動細胞珪酸体(H6号土師窯；A1区下層)
13. タケ亜科機動細胞珪酸体(H6号土師窯；A2区下層)
14. イネ属穎珪酸体(H7号土師窯；焼土)
15. イネ属穎珪酸体(H8号土師窯；下層焼土)

二ツ梨一貫山窯跡

－日本自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　日　　平成14年３月31日

編集・発行者　　小松市教育委員会
文化課　埋蔵文化財調査室
〒923-0801　石川県小松市園町ホ62番地
（TEL）0761-24-8132

印　　刷　　㈲源田美術印刷

（Ｆ地区10・11・12号土師器焼成坑発掘調査風景）

（※表紙の写真はＦ地区25号土師器焼成坑２次床面遺物出土状況全景写真）